（千葉大学学位申請論文）

日本現代詩運動における「荒地」派の比較文学的研究

1997年9月

千葉大学大学院社会文化科学研究科

日本研究専攻　国際比較論講座

高橋　伸一

目次

序論 1

第１章　「荒地」派詩人の出現を準備した状況

第１節　西欧における新興詩運動の精神 4

第２節　明治末期における日本の詩意識と大正期における前衛詩運動 29

第３節　日本におけるモダニズム詩運動
－詩誌「詩と詩論」以降の総合的モダニズム詩運動を中心に－ 71

第４節　「荒地」派詩人の戦前の活動　－鮎川信夫の場合－ 97

第２章　「荒地」派詩人の戦争責任論とモダニズム詩批判

第１節　文学における戦争責任論 154

第２節　「荒地」派詩人のモダニズム詩批判 180

第３節　『死の灰詩集』論争と鮎川信夫 202

第３章　「荒地」派詩人の詩的言語観の構築

第１節　「Ｘへの献辞」の読解 214

第２節　「荒地」派詩人の詩的世界の形成と「荒地」の場の意味 238

第３節　「荒地」派詩人の詩意識を支えた西欧の文学者たち
－T.S. エリオット、フランツ・カフカ、T.E. ヒューム－ 255

第４章　鮎川信夫の詩的精神と詩的世界の形成

第１節　鮎川信夫の＜読み＞の行為
－「＜書くこととしての読み＞の行為」について－ 304

第２節　鮎川信夫の戦後の詩のことば 318

結論 352

資料 359

参考書目 380

序論

第二次大戦後の日本現代詩運動の旗手のひとりとなった鮎川信夫（1920-86年）を中心として形成された詩人群、「荒地」派詩人（北村太郎、田村隆一、鮎川信夫、三好豊一郎、黒田三郎、木原孝一、中桐雅夫、加島祥造）は、詩誌「荒地」（全６集：1947年9月－1948年6月）と年刊アンソロジー『荒地詩集』（全８冊：1951年－1958年）を主要な発表の場として、戦後の詩作活動と批評活動を展開した。日本の現代詩の領域における「荒地」派詩人によって行われたそうした一連の活動の中で特に意義深いのは、詩人の戦争責任論を基軸にして行ったモダニズム詩批判であろう。この議論は、「荒地」派詩人よりも前の世代に属する詩人たちの戦前・戦中・戦後における詩的行為の批判を通して、日本の文学領域における近現代詩に潜在してきた負の側面を浮き彫りにする視座だけではなく、詩とはわれわれ人間にとって何であるのか、という詩の行為と人間の関係についての本質的な問題を扱える視点を持ったものであった。こうした視座に基づいて戦後「荒地」派詩人が詩作行為と批評行為を行っていく背景には、戦前におけるモダニズム詩に傾倒した詩作行為と戦中における彼ら自身の戦争体験が根強く存在していると言うことができるであろう。

本論文では、「荒地」派詩人による現代詩運動において理論的支柱であると同時にリーダー的役割を果たすことになる鮎川信夫を中心に、日本現代詩における「荒地」派詩人による詩的活動の意義を比較文学的に明らかにしていくことを目的としている。

第１章では「「荒地」派詩人の出現を準備した状況」と題して、戦前の日本の詩の状況を分析するとともに、若き日の「荒地」派詩人たちがその詩的状況の中で、どのように自らの詩的行為を為していったのかという問題を検討していきたい。

第２章「「荒地」派詩人の戦争責任論とモダニズム詩批判」においては、戦後日本現代詩の領域において、「荒地」派詩人が独自の立場で行った批判活動やその展開の実態を実証的に明らかにしながら、「荒地」派詩人が戦後を生きる詩人たちに

投げかけた問題についての検討を試みる。

第３章「「荒地」派詩人の詩的言語観の構築」では、「荒地」派運動のマニフェストとも捉えることができる「Xへの献辞」（1951年版『荒地詩集』）を分析することによって、彼らの詩的言語観について明らかにし、それが如何なる詩的実践から導き出されてのかという問題を、「荒地」派詩人の詩作品を具体的に検討することによって考察する。また、「荒地」派詩人が詩的言語観を構築するに当たり、その根拠として求めていったと考えられる西欧の第一次大戦後の詩人および文学者の詩意識や思想を、どのように主体的に戦後の日本の詩的風土の中で血肉化していったのかという問題も検討する。

最後に、第４章においては、「鮎川信夫の詩的精神と詩的世界の形成」と題して、鮎川信夫の＜詩を読む行為＞と＜詩を書く行為＞の特徴を詩学的に検討し、具体的に鮎川の詩作品を読むことを通じて、日本現代詩の領域における彼の詩的行為の意義を浮き彫りにする。

また、鮎川信夫の詩作品を読む際に用いた資料 II「コンコーダンス－鮎川信夫全詩」を別冊として提出する。

第１章

「荒地」派詩人の出現を準備した状況

第１章第１節
西欧における新興詩運動の精神

「荒地」派詩人の出現に先立つ大正後期から昭和初期における日本の詩の領域は、第一次世界大戦（1914-18年）前後に西欧で興った前衛的な芸術諸運動や文学的傾向と直接間接の連鎖関係を結んだ日本における前衛詩運動、或いはモダニズム詩運動によって、その重要な役割が担われたと言うことができる。

20世紀初頭の西欧では、1909年2月20日にフランスの日刊紙 *Le Figoro* に、F.T.マリネッティが「未来派創立宣言」を発表したことに始まるイタリア未来派など、様々な思想に基づいた詩意識が興った。例えば、セザンヌ、ピカソ、ブラックなどの画家たちが準備した実践に基づいて、G.アポリネールが、1911年、ブリュッセルにおいて講演し、さらには1913年に『立体派』（*Les Peintres Cubistes*）を刊行することによって広く知られることになった立体派。T.E.ヒュームが主宰したサロンを中心に基盤が構築され、後にエズラ・パウンド が1913年3月号 *Poetry* 誌に最初の綱領を発表して誕生したイマジズム。第一次大戦中、スイスの中立都市チューリッヒを舞台に展開されたダダイスム。さらには、表現派、シュールレアリスム、新即物主義、主知的傾向の文学など、新しい詩精神と詩意識が次々に興った。そして、日本における「詩」もまた、ほぼ同時代的にそれらの前衛詩運動や文学的傾向の理念と方法を取り入れながら展開していくことになる。

本章本節に於いては、続く本章第２節、第３節でなされる西欧の前衛詩運動や文学的傾向の指導理念が如何に日本に移入され、それらが「荒地」派詩人の出現に先立つ日本の文学的風土においてどのように機能したのかという問題を念頭に置きながら、20世紀前半の西欧における詩の展開の諸側面を、第二次大戦後の日本現代詩における「荒地」派運動のアンチテーゼと考えることができるイタリア未来派を中心に、第一次大戦中のダダイスム、第一次大戦後の主知的傾向の文学までの視野を

含めて、考察してみたい。

イタリアにおいて1909年に興った未来派は、20世紀初頭の西欧で展開された様々な前衛詩運動の起点とも言うべき性質を携えた運動である。特に、未来派が前世紀における詩精神を、ラディカルに破壊し、新しい詩意識を求めていった背景には、例えば、テクノロジーやメディアの急速な発展、科学者たちによってもたらされた科学的進歩といった20世紀的な風土に於いて、人間を取り巻く環境の変化と共に、人間の生活、感性そのものも変化していったことが挙げられる。こうした現代的な状況において、詩の「ことば」に対する欲求も、以前のようにひとつの慣習的な詩意識や伝統的な詩的言語観に満足を見出せなくなっていったことは容易に想像がつくであろう。このように、未来派は前世代の詩意識をラディカルに破壊し、伝統を否定し、過去のものを拒絶していくことになるのであるが、それでは一体彼らは何を詩の「ことば」に求めていったのであろうか。こうした問いは、大正後期から本格的に近代化の始まった日本の風土に於いて、1921（大正10）年12月、未来派の詩精神に基づいた『日本未来派宣言運動　東京＝平戸廉吉』を起点として形成されると考えられている、日本のモダニズム詩を考える上でも重要な問いであろう。さらに、それは、戦前においてはモダニズム詩運動に心酔したものの、戦後、その運動に対して批判的な態度をとるだけでなく、イタリア未来派が「未来」を求めた態度とは全く逆に「過去」を求めていく態度を表明した、戦後の「荒地」派詩人の詩的言語観を考える上でも重要な示唆を与えてくれるものであると思われる。

それでは、まず、発動国であるイタリアにおける未来派の詩精神そのものがどのようなものであったかについて、詳細に検証することから始めたい。

（１）イタリア未来派

1908年後半から1909年初めにマリネッティによってその基盤が築かれたと考え

られているイタリア未来派運動は[1]、1909年2月20日に、その当時ミラノに住んでいた「イタリアの、そしてフランスの若き詩人」[2]であると同時に、ミラノを拠点にした詩誌「ポエジーア」(*Poesia*, 1905-09) の編集主幹としてジャーナリストの才能とリライターとしての資質を発揮しはじめていた、フィリッポ＝トンマーゾ・マリネッティ(Filippo Tommaso Marinetti, 1876-1944)の署名入りのフランス語の文面が、フランスの日刊紙「フィガロ」(*Le Figaro*) の第一面に掲載されたことに端を発している。

「未来主義」を意味する　'Le　Futurisme'　という見出しから始まり、'F.T. Marinetti'　という署名で締めくくられているその文章は、６列組みで構成される「フィガロ」紙第一面のトップ記事として、第１列目から第３列目の中頃にまで及んでいる。その記事自体の構成は、「未来主義」の立場・方針・規範などを列挙した「未来派宣言」('Manifeste du Futurisme')を中心に、その前文と後文、そして見出し「未来主義」のすぐ後に付けられた「フィガロ」紙側の解説の部分、という大きく分けて４つの部分から成っている。「フィガロ」紙側の説明を除いた文面、すなわち、１１項目の綱領から構成される「未来派宣言」とその前文と後文を含めた文章が、一般的には、「未来派創立宣言」と呼ばれているものである。[3]

この「未来派創立宣言」は、美術史家キャロライン・ティズタル(Caroline Tisdall) とアンジェロ・ボッツォーラ (Angelo Bozzolla) の言葉を借りれば、イタ

1　千葉宣一は、その論文「詩論の発展と流派の展開－昭和期－」（中島健蔵他編『日本近代詩』、比較文学講座 II　東京、清水弘文堂、1971年、34-92頁）において、次のように述べている。
「未来派（フトウリズモ）の文学的語源を追跡するならば、1908年10月11日まで遡行しなければならぬ。その日、マリネッティは同志と新しく開始する文学運動の呼称を考えていた。当時を回想して彼は云う。＜Dinamismo という言葉と Futurismo という言葉の前で、一瞬、私はためらった。しかし我々の唇が声高く未来派という言葉を発した時、私のイタリー人の血が一層高鳴ったのである＞と。」（39頁）

2「フィガロ」紙が記事の冒頭でマリネッティを「イタリアの、そしてフランスの若き詩人」として紹介している。

3「未来派創立宣言」と「未来派宣言」(Manifeste du Futurisme) の区別は、1992年、セゾン美術館で催された未来派展のカタログである、エンリコ・クリスポルティ、井関正昭　構成・監修『未来派1909-1944』（東京、東京新聞、1992年）における区別に従った（335頁）。

リア芸術における「あらゆる分野の大胆な新人の忠誠心をひき起こ」し、その後、マリネッティを中心に「未来派」と呼ばれる様々な芸術領域にまたがった芸術家グループを1910年代のイタリアに形成する契機になったものである。[4]

それでは、ここで、「未来派創立宣言」の中核をなす「未来派宣言」の１１の綱領を解読しながら、未来派が詩をどのように考え、詩に何を求めたのかという未来派独自の詩の認識と未来派の運動自体について考えてみたい。

マリネッティによる「未来派宣言」についてまず第一に確認しておかなければならないことは、それが「文学」の領域、特に「詩」の分野におけるマリネッティの新しい理念あるいは詩意識のマニフェストとしての性格をもつ文書であるという点である。そのことは、第１条における動詞 'chanter' （「謳う」）が象徴的に示している。

1. Nous voulons chanter l'amour du danger, l'habitude de l'énergie et de la témérité.（下線は筆者）[5]

1.　われわれは、危険への愛、エネルギーの習性、無謀なるものの習性を詩で謳いたい。

第１条だけでなく第５条、第１１条においても繰り返し用いられている動詞 'chanter' は、詩人の「詩を書く」という行為を、その最終的行為である「書いた詩を韻律に合わせて歌う」という動作、つまり「謳う」という動作によって、転義的

4　キャロライン・ティズタル、アンジェロ・ボッツォーラ、松田嘉子訳『未来派-FUTURISM-』（東京、PARCO出版、1992年）、11頁。

5　E.T. Marinetti, 'Le Futurisme', *LE FIGARO* (1909.2.20), p.1.　本論考に於いて、マリネッティの「未来派創立宣言」は、エンリコ・クリスポルティ、井関正昭『未来派1909-1944』（60頁）に写真掲載されている同紙面と、Giovanni Lista, *Marinetti* (Paris: Éditions Seghers, 1976) に転載されている 'Manifeste du Futurisme' (pp.176-79) をあわせて参照した。以下、マリネッティの「未来派創立宣言」からの引用は、この二書による。

に言い表した語であり、実質的には詩人の「詩を書く」という行為に関わっている。また、第３条の'magnifier'（「賛美する」）や'exalter'（「賞揚する」）、あるいは第９条の 'glorifier'（「ほめたたえる」）という動詞も、'chanter' と同様に「詩を書くこと」の転義的な表現と考えてよいであろう。そして、「詩で謳いたい」あるいは「詩で書きたい」とマリネッティが考えている詩的表現の対象すなわち題材が、それらの動詞の目的補語によって明らかにされることを踏まえると、「未来派宣言」の第１条、第３条、第５条、第９条、第１１条、つまりそのほぼ半分が、「詩の中で何を書くのか」という問いを前提にした、詩の「表現内容」あるいは「表現対象」への言及ということになる。

このように詩の表現内容への言及を中心にした「未来派宣言」の中で、マリネッティは、自らの「美」の観念に基づいて、彼自身が「美しい」と考えるところのものを詩の中で書かれるべき内容として定めようとする。個人が感じる美であれ、一般的に承認されている美であれ、「美」という基準を用いて、詩の要素を決定しようするマリネッティの立場は、この「未来派宣言」の中で要所要所に使用されている 'belle'（「美しい」）、'beauté'（「美」）という用語から明らかである。具体的に言えば、第４条で 'beauté' が２回と 'belle' が１回使われているほかに、第７条では 'beauté' が、第９条では 'belles' がそれぞれ１回ずつ使われている。マリネッティの詩意識に深く関わっているそうした「美意識」を最も端的に表しているのは、「未来派宣言」における第４条の部分である。

> 4. Nous déclarons que la splendeur du monde s'est enrichie d'une beauté nouvelle: la beauté de la vitesse. Une automobile de course avec son coffre orné de gros tuyaux, tels des serpents à l'haleine explosive...une automobile rugissante, qui a l'air de courir sur de la mitraille, est plus belle que la *Victoire de Samothrace.*

４．われわれは、世界の光栄は一つの新しい美によって豊かになると明言しよう。それは速度の美である。炸裂する呼気を出す蛇のような太いパイプ管に装飾された胴体を持つ、疾走する自動車……散弾の上を走っているように見える唸りを上げている自動車は、「サモトラケの勝利の女神」よりも美しい。

第４条で言明されている「美」は、「速度の美」('la beauté de la vitesse') である。マリネッティは、その「速度の美」を「一つの新しい美」('une beauté nouvelle') として認め、その「美」を体現しているものとして「疾走する自動車」('une automobile de course') を挙げている。さらに、「疾走する自動車」を、それ以前からずっと信じられてきた美、すなわち、一つの旧い美の象徴のとしての「サモトラケの勝利の女神」像と対比させる。そして、「疾走する自動車」は「サモトラケの勝利の女神」「よりも美しい」('plus belle que') と判断することによって、マリネッティは、「疾走する自動車」を詩の内容とすべきことを主張する。こうした美の基準によって、マリネッティは、「速度の美」を体現する機械類、例えば、「未来派宣言」第１１条における「蒸気機関車」('locomotives') や「飛行機」('aéroplanes')を賛美し、それを詩の内容にすべきことを主張する。

このように「美」という基準が「静」から「動」へと変化し、そのことによって、「詩」の内容も変わるべきだとするマリネッティの発想の背景には、テクノロジーと科学の進歩によって人間を取り囲む環境の急激な変転によって、人間の感性そのものも変化したという認識があると思われる。特に、当時イタリアの最も工業化が進んだ都市の一つであったミラノを拠点として文学活動を展開していたマリネッティは、自己を含めそこに住む人間の内部で起きている感性の変化を鋭く感得したのであろう。そして、環境が変わり、人間の感性も変化したのであるから、詩も変化すべきであるという見解が、マリネッティの詩に対する認識の基盤を形成しているように思われる。こうしたマリネッティの立場は、「未来派宣言」第１１条

において、詩の表現対象とされる「海軍工廠」('les arsenaux')、「鉄道の駅」('les gares')、「工場」('les usines')、「大型客船」('les paquebots') などの「現代的な大都会」('les capitales modernes') に存在する建物や機械についても同様に言えることであろう。

ここで問わなければならないのは、「疾走する自動車」の美が、「サモトラケの勝利の女神」の美よりも「美しい」とマリネッティが判断する根拠そのものであると思われる。「速度の美」を主張するマリネッティは、「サモトラケの勝利の女神」を、「速度」を体現する「疾走する自動車」の対極に定めている。つまり、「サモトラケの勝利の女神」が「速度」を決して有することのない彫像であるという点に、マリネッティの判断の一つの根拠が存在するのである。さらに、そこには、「新しい美」を「旧い美」よりも、「現代的なもの」あるいは「同時代的なもの」を、「過去のもの」よりも重視するというマリネッティの強烈な意識、換言すれば、いわゆる「モダンなもの」への絶対的な信望が存在していると言うことができるかもしれない。

マリネッティは、こうした「現代的なもの」、別な言い方をすれば、「モダンなもの」を賞揚する一方で、旧態依然として「現代的なもの」の美を認めず「過去のもの」の美の基準に依拠しながら詩的行為を展開している詩的環境を打破しようとする。そして、マリネッティは、「現代的なもの」を主張する未来派と、一方で伝統的なものに自己の詩的行為の根拠を置く詩人たちとの文学的な対立において、未来派の本質とも言える「攻撃性」の観念を巧みに使用することによって、「過去」に基づく規範的な詩を凌駕していこうとするのである。

未来派の「攻撃性」の観念そのものは、「現在」から「未来」へ向かう時間の流れをあたかも一つの方向に突き進んでいく「矢」のようなイメージとして捉えることによって、導き出されたものであると思われる。つまり、未来派の「未来」とは、「過去」→「現在」→「未来」という「時間」のベクトルにおける、「現在」から「未来」へのあくなき志向性であると同時に、その志向性そのものが「攻撃

性」として、あるいは「力」として、変化し得る概念なのである。このような観点に立った場合、未来派の理念に潜在している「攻撃性」は、「時間」に対するマリネッティの考えと深く関わっていると言うことができるであろう。

このように「時間」の観念と深く結びついた未来派の「攻撃性」は、当然、「未来派宣言」における未来派独自の詩の認識の中に導入されるのであるが、芸術運動体としての未来派の活動自体にも認められる特質であるかもしれない。未来派の運動は、「最初は作家、詩人たちのみが、そして翌年には造形芸術家たちが加わるという、連鎖的にいくつかの集団を形成する運動の形」[6]をとって、急速にイタリアの若い諸芸術家たちを吸収し運動母体を拡大していった。文学を初めとして、絵画、彫刻、音楽、演劇、建築などの領域にまで及ぶことになる未来派は、そこで、当時「規範的」であると考えられていた芸術の慣習に、未来派自身の「非規範的」な新しい理念を対峙させ、伝統的な慣習や過去の約束事を未来派独自の方法で凌駕し、次の時代の、換言すれば、来るべき「未来」の芸術領域において、旧体制からそのイニシアティヴを獲得していくことになる。[7]　未来派による運動が、「文化革命」あるいは「芸術革命」をイタリアにもたらしたと言われるのは、未来派が芸術の諸領域におけるイニシアティヴを急激な速度で従来の支配層から奪取し、その領域内のシステムを変革したという意味においてであるが[8]、そうした文学傾向の変化、あるいは、比較文学者であり翻訳学者であるアンドレ・ルフェベール（Andr

---

6　エンリコ・クリスポルティ「イタリア未来派を知るために」、『未来派1909-1944』、11-45（14）頁。

7　ロシア・フォルマリストのユーリー・トゥイニャーノフは、その論文「文学的事象」（トマシェフスキー、トゥイニャーノフ他、水野忠夫編、水野忠夫他訳『ロシア・フォルマリズム文学論集２』（東京、せりか書房、1982年、71-103頁）や「文学の進化」（前掲書、104-130頁）で、「文学の体系」や「体系の進化」について議論しているが、文学史上における未来派の出現の意味を理解するには、こうした体系的な視点が必要であるように思える。「トィニャーノフは、文学上のどの時代にも、あい対立する文学的流派－規範的と非規範的－が共存しているという、シクロフスキーの考えを肝に銘じていた。文学の体系は、ラングのような平衡と調和のとれた構造ではなくて、もともと平衡を欠き、それぞれ現状維持と現状打破をめざす対立的傾向によってひき割かれている。このような体系は、過去を内蔵すると同時に、未来を指向している。過去は文学事実であったもののうちに内蔵され、未来は、この自動化された過去を否定し、いままさに文学事実となりつつある構成のうちにある。」（P.スタイナー、山中桂一訳『ロシア・フォルマリズム－ひとつのメタ詩学－』東京、勁草書房、1986年、110頁）

8　井関正昭はその著書『イタリアの近代美術』（東京、小沢書店、1989年）で「イタリアの若い世代に対し、自国の息づまって沈滞した因習に反抗して立ち上がるように仕向けるのが未来派の第一の目的だったのである。つまり、芸術的な傑作を生み出すよりも、大きな文化革命をめざしたのである」（27頁）と説明している。

é Lefevere)の用語で言うならば、急激な「文学システム」('the literary system')[9]の変換には、イタリア未来派が、前述したような未来派独自の「時間」の観念から引き出した「攻撃性」そのものを芸術運動体の中に取り入れ、前時代の「文学システム」を破壊し、新しい「文学システム」を早急に構築していった側面が存在する。つまり、一つの芸術運動体である未来派が、急激に前時代を含めた過去全体の文学傾向を変革していこうと試みる背景には、「攻撃性」、その基盤として存在する未来派が提示した「時間」の観念、さらにはその「時間」の観念を受け入れる社会的な状況、例えば、テクノロジーが急速に進歩した20世紀初頭の状況などが存在しているということができるであろう。

このように「時間」の観念と深く結びついていると思われる未来派の「攻撃性」は、未来派運動そのものにも看取できるのであるが、それでは次にこの未来派の本質であると思われる「攻撃性」が、「未来派宣言」の中でどのように捉えられ、未来派の詩の認識の中に導入されるのかという問題を、「未来派宣言」を中心に検討していこう。未来派の「攻撃性」は、まず「未来派宣言」の第３条に見られるように、詩で謳うべき「人間」そのものの中に導入されることになる。

> 3. La littérature ayant jusqu'ici magnifié l'immobilité pensive, l'extase et le sommeil, nous voulons exalter le mouvement agressif, l'insomnie fiévreuse, le pas gymnastique, le saut périlleux, la gifle et le coup de poing.

> 3.　文学は、今まで、物思いに耽った不動の状態、うっとりとした忘我の状態、眠りの状態を賛美してきたが、われわれは、攻撃的な動き、熱を帯びて眠れない状態、駆け足、宙返り、平手打ち、拳骨を詩で称揚したい。

---

9 André Lefevere, *Translation, Rewriting, & the Manipulation of Literary Fame* (London: Routledge, 1992), pp.26-40.

この第３条でマリネッティは、従来の「文学」が頻繁に扱ってきた「人間」のイメージに対比するかたちで、未来派が好んで賞賛する「人間」のイメージを明らかにしている。マリネッティによれば、既存の「文学」は、人間の「物思いに耽った不動の状態」（' l'immobilité pensive'）、人間の「うっとりとした忘我の状態」（'l'extase'）、人間の「眠りの状態」（'le sommeil'）というイメージを賛美し、詩に謳ってきたことになる。こうした人間の静的なイメージを賞賛してきた「文学」としてマリネッティが想定しているのは、おそらく、19世紀末のヨーロッパ社会の頽廃的な風土で育った世紀末文学であろうと思われる。

マリネッティはこのように前時代的な「文学」を通して、「過去」に存在した「文学」全体、神話的な世界を描き出した文学を含めたすべての「文学」を合理化し、さらには単純化する一方で、未来派が求め、詩のなかで賛美する人間のイメージは、「攻撃的な動き」（'le mouvement agressif'）をしている人間、「熱を帯びて眠れない状態」('l'insomnie fiévreuse') にある人間、「駆け足」 ('le pas gymnastique') している人間、「宙返り」（'le saut périlleux'）をしている人間、「平手打ち」（'la gifle'）をしている人間、「拳骨」（'le coup de poing'）をしている人間など、「危険への愛、エネルギーの習性、無謀なるものの習性」（第１条）を体現している人間であるという見解を提示する。

かくして、「時間」の観念を巧みに利用して導き出した「攻撃性」を「人間」の中に導き入れることによって、マリネッティが承認したもう一つの別な新しい美は、「闘争の美」であった。この「闘争の美」そのものについては、第７条においてマリネッティによって次のように言及される。

> 7. Il n'y a plus de beauté que dans la lutte. Pas de chef-d'œuvre sans un caractère agressif. La poésie doit être un assaut violent contre les forces inconnues, pour les sommer de se coucher devant l'homme.

7. もはや闘争の中にしか美は存在しない。攻撃的な性質を持たない傑作は存在しない。詩は、未だ知られていない力を人間の前に平伏せさせるための、未知の力に対する粗暴な攻撃でなければならない。

「攻撃性」を体現した人間主体に一種の「美」を認めるマリネッティが、攻撃的な人間のイメージを詩的表現の対象として要求するのは、彼の美の論理からすれば当然であるが、しかし、マリネッティはそれだけに止まってはいない。つまり、マリネッティは、「詩」そのものに、そして「ことば」を紡ぎ出す詩人そのものにも「攻撃性」を導き入れていくことになる。「攻撃性」を体現している詩人のみが、詩の「傑作」('chef-d'œuvre')を書くことができると考えるマリネッティは、かくして、「攻撃的な」詩人が「攻撃的な」内容を「攻撃的な」形式によって表現した作品を「攻撃的な」作品とみなし、それを「傑作」と捉えるのである。

以上のことから、マリネッティは、「詩」の主要な３つの構成要素である、「内容」、「形式」、「主体」のそれぞれに「攻撃性」というものを求めていることは明らかであろう。そして、「攻撃性」を備えた詩的主体である詩人が、「内容」と「形式」の「攻撃性」を詩的実践で統合することによって、詩の「傑作」が生まれると考えていたのである。詩の「形式」に対する「攻撃性」に関しては、具体的にはこの「未来派宣言」の中では言及されずに、「自由語」（'parole in libertà'）というマリネッティによって創出される概念まで待たなければならないのであるが、その意図は十分にこの「未来派宣言」においても読みとることができる。

かくして、「未来派宣言」の綱領のなかで最も重要であると思われる第２条の宣言へと通じることになる。

2. Les éléments essentiels de notre poésie seront le courage, l'audace et la révolte.

2.　我々の詩の本質的要素は、勇気、大胆、反抗となるであろう。

マリネッティは、ここで「詩の本質的な要素」として、「勇気」('courage')、「大胆」('audace')、「反抗」('révolte')という「攻撃性」を詩の主体である詩人に要求している。このように詩の本質を詩人の「攻撃性」と規定した点において、未来派の前衛芸術運動（アヴァンギャルド）の始祖たるゆえんがあるように思われるのであるが、しかし、そのことは逆に考えれば、未来派自身がその後に後戻りできないように、自己を規定をしてしまったと言えるのではないであろうか。

「アヴァンギャルド」(avant-garde)という用語は、本来、「本隊の先頭に立って進軍する部隊 (partie d'une armée qui marche en avant du gros des troupes)」(*Le Robert*) というフランスの軍隊用語から転化した言葉である。そして、「軍隊」という観点から厳密に考えれば、「アヴァンギャルド」は後方の「本隊」との関わりにおいて規定される性格をもつものである。それを具体的に考えてみるならば、「軍隊」における「前衛」は、もし、「本隊」が「退却」あるいは「壊滅」した場合、「前衛」の意義もまた同時に変化するか、あるいは消滅するように、「本隊」に大きく依拠した存在なのである。

しかし、マリネッティが考えた「攻撃性」を備えた「前衛部隊」('des sentinelles avancées') とは、そうした「本隊」によって左右されることのない、あるいはそれによっては規定されない、「前衛」としての「前衛」なのである。それ故に、未来派は「本隊」とは無縁なところで自らが「前衛」たることを示すために、自己を「前衛」として規定しなければならなかったのである。そして、そのようにして未来派によって規定された「前衛」とは、常に「戦い」あるいは「闘争」の中に身をおいているという条件で成り立つアヴァンギャルドなのである。いつ現れるともしれない敵軍に神経を尖らせながら、「危険なもの」を嗜好する、あるい

は敢えて「敵」というものを積極的に探し出す攻撃的な人間のイメージは、常に何か危険なものを追い求めている「野獣」のイメージと重ねられて、「未来派創立宣言」の前文では、次のように語られる。

Un immense orgueil gonflait nos poitrines, à nous sentir debout tous seuls, comme des phares ou comme des sentinelles avancées, face à l'armée des étoiles ennemies, qui campent dans leurs bivouacs célestes.

[.....]

– Le flair, criai-je, le flair suffit aux fauves! ...

Et nous chassions, tels de jeunes lions, la Mort au pelage noir tacheté de croix pâles, qui courait devant nous dans le vaste ciel mauve, palpable et vivant.

天上の露営地で野営する星の敵軍に対峙した前衛部隊のように、あるいは燈台のように、われわれだけが目覚めているのだということを感じながら、一つの大きな誇りがわれわれの胸を膨らませていた。

[……]

「嗅覚だ、野獣たちには嗅覚だけで十分だ！」と私は叫んだ。

それから、われわれは、あたかも若き獅子のように、触知でき生きて動いている薄紫の広大な天空に存在するわれわれの目の前を駆け抜けていった、青白い十字架の染みをつけた黒い毛並みの「死」を、駆り立てて行った。

以上考察してきたことから、未来派の詩の認識は、詩の主体を含めた詩のあらゆる要素に、「攻撃性」を導入することによって成り立つ詩であることが明らかであるが、そこには、「ことば」を紡ぎ出す詩人を「前衛としての前衛」あるいは「前

衛のための前衛」として捉える考え方、つまり「本隊」という「ボディ」を考慮に入れない「前衛」という彼ら独自の自己規定が存在している。こうした「ボディ」を考えない未来派の「詩」の思考の根底には、前述したような未来派が捉えた「時間」の観念、つまり、「過去」→「現在」→「未来」という「時間」の構図の中で、「現在」から「未来」に向かうあくなき志向性と、「現在」を支えている「ボディ」であるところの「過去」の観念に対する嫌悪、「過去」を「現在」から引き離したいという願望、あるいは、「過去」を消去したいという強い欲求が強固なものとして存在している。そうした「過去のもの」に対する絶対的とも言える嫌悪は、「未来派宣言」第１０条において最も激烈な内容となって表れている。

10. Nous voulons démolir les musées, les bibliothèques, combattre le moralisme, le féminisme et toutes les lâchetés opportunistes et utilitaires.

10.　われわれは、美術館と図書館を破壊し、道徳主義と男女同権主義と、あらゆる日和見主義的で功利主義的な臆病さと闘いたい。

「現在」における「過去」の象徴でもある「美術館」と「図書館」を「破壊し」たいという願望、あるいは、「過去」に存在した非「攻撃的な」思想である「道徳主義と男女同権主義と、あらゆる日和見主義的で功利主義的な臆病さ」と闘いたいという希求には、未来派「詩人」が自己の本質を「攻撃性」にあると規定してしまったことから起こる、一種の昂揚が存在する一方で、「未来」そのものを逆に失ってしまったのではないかと思われるような思想的な混迷がある。

このように考えてみると、未来派は、「時間」の観念において、「過去」というものを完全に消去することによって、「現在」から「未来」へ向かう「時」のベクトルを、「攻撃性」として「現在」に導き入れようとするが、こうした未来派の「時間」の観念は、「現在」を生きている詩人の詩の行為の「ボディ」そのものを

失っていく結果を導いたと言うことができる。つまり、未来派は、「過去」を切り離すことによって、なぜ何十世紀という「過去」において詩人たちが「ことば」を紡ぎ出して詩を書いてきたのかという、詩の実践の持っている人間的な行為の意味を完全に喪失することになる。そうした詩の行為の本来有している人間的な意義を見出せない故に、彼らは、自らの詩の行為を「宣言」として先に提示することによって詩の行為を規定し、その規定に基づいて詩的営為を行うことになるのである。未来派についてよく言及されることに、彼らが「宣言」や「理論」を先に提示して詩の実践を行った最初の理論先行型の詩人たちであるという肯定的な見解があるが、しかし、それは、「ことば」とそれを紡ぎ出す詩人の本来有している密接な関係から考えた場合、最も否定的な意味においてのみ成り立つ見解であろう。というのも、未来派は「宣言」や「理論」を先に提示することなくしては、詩の行為の意義を見出せないからである。その点において、未来派以降の前衛詩運動にみられる「ことば」と詩の主体との密接な関係の崩壊は、「過去」を完全に放念しながら、様々な理論主導型の詩の行為を生み出していくことになるのである。

この理論主導型の詩の行為、換言すれば、実践よりも理論が先行する詩の行為は、「芸術運動」という観点から考えた場合、エンリコ・クリスポルティ（Enrico Crispolti）が提示した「組織された運動」としての芸術運動に結びついてくるものである。エンリコ・クリスポルティは、その論文「イタリア未来派を知るために」の中で、20世紀には様々な「芸術運動」が存在したことを認め、それらの芸術運動は本質的に二つに分けることが可能であると述べている。その一つは「組織された運動」としての芸術運動であり、もう一つは「形成された運動」としての芸術運動である。

クリスポルティの言葉で説明するならば、前者の運動とは、「一人のカリスマ的『リーダー』を中心として結合したもので、その活動は、運動を特徴づける文化政策的な戦略という、明確な文化的大儀名分にしたがって展開する」運動である。一方で、後者の運動とは、「制作の場で事実上形成されてゆく運動」である。そし

て、クリスポルティは、イタリア未来派の運動を、マリネッティが「リーダー」として中心的な役割を果たした「組織された運動」として、また同様に、シュールレアリスムを、アンドレ・ブルトン（André Breton, 1896-1966）が「リーダー」となる「組織された運動」として認識している。[10]

「芸術運動」そのものは、何も20世紀特有の現象ではなく、それ以前にも存在していたが、イタリア未来派運動のようにその運動の最初から、創作活動の理由付けとなるはっきりとした根拠を「宣言」という形で表明し出発した芸術運動は、それ以前の新興芸術運動にはなかったと考えてよいであろう。例えば、未来派自身その影響を認めている印象派にしろ、あるいは未来派がその理念や活動の実態を結果的にはヨーロッパに広めることになった立体派にしろ、それらの絵画芸術運動は、クリスポルティの類型で言えば、制作の場で事実上形成されていった運動に属する実践先行型の運動であった。また、1886年9月18日の「フィガロ」紙にジャン・モレアス（Jean Moréas, 1856-1910）の「象徴主義宣言」（*Manifeste du symbolisme*）が発表されることで、全世界にその存在が広がった象徴主義も、その「宣言」以前にすでに存在していたマラルメ（Stéphane Malarmé, 1842-98）、ヴェルレーヌ（Paul-Marie Verlaine, 1844-96）、ランボー（Arthur Rimbaud, 1854-91）などの詩的実践や詩作品を根拠に活動が拡大していったのであり、運動の最初から自己規定がなされたわけではなかった。これらの19世紀後半に起こった芸術運動は、サロンやアトリエなどの実践あるいは制作の場で事実上形成されていった運動なのである。

一方で未来派の運動は、その起点において特定の明確な目標や理念が先に提示され、その「大儀名分」に賛同する者たちが結集し、その後に「宣言」や「理念」に従った形で作品を制作するといった、「理論」が「実践」よりも先行する形態の運

10　エンリコ・クリスポルティ　「イタリア未来派を知るために」、『未来派1909-1944』、14-16頁。

動であった。ここに、その後のヨーロッパにおける前衛詩運動や、それと連鎖関係を結んだ日本におけるモダニズム詩運動に継続される、「理論」や「方法」を強調した態度を読みとることができるのではないかと思われる。しかし、ここで注意しなければならないことは、こうした理論主導型の芸術運動の展開において顕著にみられる詩の「理論」そのものへの積極的な志向が、裏を返せば、詩の「実践」そのものの意義を全く失ったところから生じる反作用であるということであり、それ自体、詩人の危機的な状況を示しているということである。

このように考えてみると、先に引用して言及した「未来派宣言」の第１０条において、未来派が「美術館と図書館を破壊し、道徳主義と男女同権主義と、あらゆる日和見主義的で功利主義的な臆病さと闘いたい」と言明する背景には、なぜ人間が「美術品」をつくり出したのか、あるいはなぜ「書物」をつくり出したのか、という根本的な人間の芸術的「実践」の持っている意義、または、なぜ、人間が「道徳主義」や「男女同権主義」という思想を生みだしたのか、あるいはなぜ人間が「功利主義的な臆病さ」を身につけてしまったのか、という人間の思索的「実践」に対する反省を、「過去」を切り離すことによって完全に喪失してしまったことが挙げられるのではないかと思われる。

「過去」を拒絶し、人類の歩んできた歴史を白紙状態にすることによって、さらには、自己の歩んできた生の歴史を空白にすることによって、「過去」において存在した「ことば」と「人間」との密接な関係、例えば、実存的な危機に直面した人間の救いに「ことば」が繋がるといった可能性を秘めた関係などを忘れ去り、「現在」から「未来」へのあくなき志向性から生じる「攻撃性」を、詩の「ことば」を紡ぎ出す「詩人」の空白になった内面に導き入れた未来派の時間論に基づく詩の認識は、最終的には、「未来派宣言」第９条において言及される「世界を健康にする唯一の方法」としての「戦争」を「詩」の「ことば」で賛美するという考えに至って、「ことば」と「人間」の奥深い関係を完全に破壊し、「ことば」そのものを「人間」を殺傷するための「武器」に変えたと言えるであろう。

9. Nous voulons glorifier la guerre, ---seule hygiène du monde, ---le militarisme, le patriotisme, le geste destructeur des anarchistes, les belles Idées qui tuent et le mépris de la femme.

9. われわれは、世界を健康にする唯一の方法である戦争、軍国主義、愛国主義、無政府主義者たちの破壊的行為、人殺しの気高い「観念」、そして女性蔑視を詩で賛美したい。

この第９条は、「未来派宣言」の中でも最も攻撃的であり、反道徳的に思われる部分である。当然、ここに言明されている内容をそのまま未来派の現実を生きる思想と直結して考えることはできない。しかし、ここで注意しなければならないことは、「過去」というものを完全に拒絶することによって得た未来派の「攻撃性」が、盲目的に、無制限に、「未来派宣言」の中で飛躍しているという点である。具体的に言えば、それは、第３条の「駆け足」で示される「攻撃的な動き」から、第９条における「世界を健康にする唯一の方法である戦争」という「人殺しの」行為にまで、「攻撃性」が加速度的に飛躍しているということである。

このように考えると、ここには、「過去」や「伝統」というものを無視することによって、「現在」から「未来」へと向かう時間軸の中で、「モダンなもの」だけを追い求めた２０世紀初頭にヨーロッパの地に生きた人間たちに潜在する、人間が所有する能力への過信と、その能力そのものの乱用が存在するように思われる。かくして、「過去」を消去することによって、「過去」からの束縛を解かれたと思った人間たちは、あたかも自己自身を制御する装置を失った機械のように、自らの行動の規範を失い、第一次大戦へとその能力を拡大し乱用していったのではないであろうか。

（２）ダダイスム

サラエボ事件を発端に、1914年7月のオーストリア＝ハンガリー帝国のセルビアに対する宣戦布告から始まった第一次大戦は、ヨーロッパの周辺諸国だけでなく、アメリカ、日本、中国なども引き込みながら国際戦争に発展し、1918年11月のドイツの降伏までの約４年４カ月の間、ヨーロッパは「死」が支配するところの殺戮と破壊の土地に化した。

このような第一次大戦中においても様々な詩意識が存在したが、その中でも特に注目すべきは、トリスタン・ツァラ（Tristan Tzara, 1896-1963）が推進者となり、立体派や未来派の画家や詩人たちも加わって展開されたダダイスムの詩意識であろう。

第一次大戦の戦火から逃れるためにルーマニアの首都ブカレストからスイスの中立都市チューリッヒにやってきたツァラは、ダダの最初の宣言文である「アンチピリン氏の宣言」（'Manifeste de Monsieur Antipyrine'）を含む処女詩集『アンチピリン氏の最初の天上の冒険』(*La Première aventure céleste de M. Antipyrine*)を、1916年7月に、世に送り出すことによってダダの運動を始めた。その宣言文「アンチピリン氏の宣言」の冒頭は、次のような文章で始まっている。

> DADA est notre intensité: qui érige les baïonnettes sans conséquence la tête sumatrale du bébé allemand; Dada est la vie sans pantoufles ni parallèles; qui est contre et pour l'unité et décidément contre le futur ; [11]

ダダは我々の力強さである。銃剣を立てるダダは独逸の赤ん坊のスマトラ頭で

11 Tristan Tzara, 'Manifeste de Monsieur Antipyrine', *Œuvres complètes*, tome I (1912-1924) (Paris: Flammarion, 1953), pp.357.

ある。ダダは靴も平行塹壕もない生だ。ダダは統一に反対であると同時に賛成でもあり、未来にははっきり反対する。

上の引用箇所にある「銃剣」('les baïonnette')、「独逸」('allemand')、「平行塹壕」('parallèles') などの詩語の並列には、第一次大戦へ自己が参入させられることに対するダダの反発を読みとることができるかもしれないが、この部分で重要なことは、基本的には未来派と同様に一切の「過去」を否定し伝統的美学を拒絶する精神を有していたツァラが、「ダダ」は「未来にははっきりと反対する」という立場を表明していることであろう。

こうした「未来」そのものを否定するダダの見解は、未来派がその時間に関する独自の認識において否定した「過去」をそのまま否定し続け、さらには「未来」をも否定することによって、「現在」という「時」だけを「時間」として認識することに他ならない。そして、その「現在」という時代そのものは、第一次大戦という状態にあった。こうしたツァラが抱いた時間の観念は、「過去のもの」も、「未来」への志向性を有した「モダンなもの」も求めない態度、つまり、両方を否定することを志向する態度と「現在」における絶望的な状態とが結びつくことによって、上記の引用にあるような「反対であると同時に賛成でもある」('contre et pour') の言葉が示しているような虚無的・狂躁的な態度へと転換されていく。そして、そうした態度に結びついたダダの現実を生きる態度は、過去において存在した詩的行為の意義そのものをも否定し、詩を一種のことば遊びとして認識する詩観にまで、人間的な意味が剥奪されるのである。その詩の認識は「アンチピリン氏の宣言」の中では次のように語られている。

L'art était un jeu noisette, les enfants assemblaient les mots qui ont une sonnerie à la fin, puis ils pleuraient et criaient la strophe, et lui mettaient

les bottines des poupées et la strophe devint reine pour mourir un peu et la reine devint baleine, les enfants couraient à perdre haleine. [12]

芸術は、かつては、はしばみの実を拾う遊びだった。子供たちは、ことばを集めた。最後に音の鳴ることばを。それから、子供たちは（ことばとともに）すすり泣いた。子供たちは、詩節だと叫んだ。詩節に人形の長靴を履かせた。すると詩節は少しの間死ぬために女王（レーヌ）になり、鯨（バレーヌ）になり、子供たちは息（アレーヌ）をきらせて走った。

ここには、「ことば」('les mots')を自己の「内面」から紡ぎ出す詩作行為が、あたかも自己とは関係のない「外部」に落ちている「はしばみの実を拾う遊び」('un jeu noisette')ように、「最後に音の鳴ることば」、つまり、脚韻の同じことばを集めて「詩節」を作る行為として、戯画的に描き出されている。このような詩の「ことば」('les mots') に対する見解には、詩の「ことば」が、「人間」の「内面」には既に存在せず、人間の思考する意味や感情を伝達する機能をも失ったとする詩意識と、ただ単に人間とは疎遠な空間に「はしばみの実」のような「モノ」として詩の「ことば」が孤立して存在しているという詩の「ことば」に対する意識がある。詩の「ことば」が本来有している人間と「ことば」との密接な関係の断絶は、「ことば」そのものの孤立化を意味していると同時に、後にツァラが「弱き恋と苦き恋についてのダダ宣言」（'Dada Manifeste sur l'amour faible et l'amour amer', 1920）で語る、「もはやことばを信じてはいけないのだろうか？　いつからことばは、その源になる器官（である精神）が思考し望むことの反対を意味するようになったのか？／大きな秘密はこうである。／思想は口のなかでかたちづくられる」('Faut-

12　前掲書、pp. 358.

il ne plus croire aux mots ? Depuis quand expriment-ils le contraire de ce que l'organe qui les émet, pense et veut ? / Le grand secret est là: La pensée se fait dans la bouche.')[13] といった、人間主体と「ことば」との乖離に起因する「ことば」そのものへの不信を準備したと言うことができるかもしれない。

（３）主知的傾向の文学

前の部分で、第一次大戦中に多くの革命家や反戦家が亡命したチューリッヒで興ったダダイスムの詩意識を検討してきたが、第一次大戦中に興った詩の意識として、ダダイスムの詩意識とは、全く別な意味で重要なものは、実際に戦場に赴き、そこでの人間の行為の悲惨と生の絶望を経験した イギリスの文学者 T.E.ヒューム (Thomas Ernest Hulme, 1883-1917) が提示した、「詩」を含めた「芸術」一般に対する認識であろう。

第一次大戦を実際に経験することによって構築されたヒュームの言語観および芸術観は、精神的荒廃の様相を呈する第一次大戦後のヨーロッパの土壌に生きることになる文学者T.S.エリオット(Thomas Stearns Eliot, 1888-1965) に大きな影響を与えるだけではなく、それは、第二次大戦後の日本の精神的荒廃において生きる「荒地」派詩人たちが、彼ら自身の詩的言語観を構築する際にヒュームの著作を主体的に読むことによって、彼ら自身の詩的言語観の中心に据えていったものでもある。こうした「荒地」派詩人とも密接に関わってくるヒュームの言語観については、「「荒地」派詩人の詩意識を支えた西欧の文学者たち」と題する本論文第３章第３節で詳細に検討を試みるので、ここでは簡単にその核心となる思想について触れておきたい。

---

13 Tristan Tzara, 'Dada Manifeste sur l'amour faible et l'amour amer', *Œuvres complètes*, tome I, pp.379.

1914年7月に第一次大戦がヨーロッパで勃発すると、ヒュームは直ちに一平卒として入隊、同年12月には、ベルギーのフランダース、さらにはフランスの戦線に赴くことになるが、1915年4月に、彼は肩に貫通重傷を受け、本国のイギリスに送還されることになる。以後、1916年3月に英国海軍砲兵隊に士官として入隊するまで、ロンドンに滞在する。再入隊後、ヒュームはベルギー戦線に出動し、1917年9月にベルギーの戦線で戦死することになる。そのロンドンでの滞在の間に、ヒュームは、後にハーバート・リード (Herbert Read, 1893-1968) によってまとめられ、T.E. ヒュームの著作 *Speclations* (1924)に含められる 論文 'Humanism and the Religious Attitude' (「ヒューマニズムと宗教的態度」) の原稿を、 'A Notebook by T.E.H.' (「T.E.H.のノートブック」) という題で、当時ヒュームの論文の中心的な発表の場であった雑誌 *The New Age* に発表している。

この論文で重要なことは、ヒュームが、自らの視線をヨーロッパの「過去」に向け、第一次大戦からルネサンス、さらにはルネサンスから古代へと遡行することによって、ルネサンス以降の「哲学」的思索の本質には、「原罪説」('the dogma of Original Sin') を理解できないことの不能性[14]と、「生はすべての価値の根源であると同時に尺度であり、そして人間は根本的に善なるものである、という信念」('the belief that life is the source and measure of all values, and that man is fundamentally good') [15]が存在することを指摘している点、さらにはルネサンス以降の「ヒューマニズム」の在り方に対して否定的な見解をしてしている点である。

こうしたヒュームの「ヒューマニズム」批判は、第一次大戦を引き起こしてし

14　T.E. Hulme, *Speculations: Essays on Humanism and the Philosophy of Art*, 2nd ed., ed. Herbert Read (London: Routledge & Kegan Paul), p.13.

15　前掲書、p.47.

まったヨーロッパ文明に対する痛烈な批判であると同時に、「過去」に眼を向け、「過去」に存在した普遍的な価値、例えば、「原罪」の観念などを復活させることによって、あるいは、原始の時代における人間の生と深く結びついた「芸術」および「ことば」の機能を復権させることによって、それは、第一次大戦以降にヨーロッパに生きていた人間たちの実存的危機や精神的救いの問題、さらにはその後の生のヴィジョンの獲得へと通じていく可能性を持ったものであった。

しかし、T.E.ヒュームが提示したところの、人間そのものの「生の**悲劇的な**意味」('the *tragic* significance of life') の認識や「宗教的態度」('the religious attitude') など[16]といった、特にルネサンス以前の人間に存在した普遍的な認識や普遍的な価値への希求の態度は復活されることはなく、その代わりに、第一次大戦中さらには戦後の精神的混乱の中で復活してきたのは、「ヨーロッパ」('Europe') が「過去」において生み出してきた無数の思想であった。

第一次大戦という混乱における更なる精神的な混乱、換言すれば、如何なる普遍的な価値も秩序をも見出せない戦中・戦後のヨーロッパそのものに対して、ポール・ヴァレリイ(Paul Valéry, 1871-1945) は、「精神の危機」('LA CRISE DE L'ESPRIT', 1919)の中で「われわれの精神的なヨーロッパのこの無秩序は何から作られたのか」('de quoi était fait ce désordre de notre Europe mentale?')と問い、「すべての教養ある精神における、全く異質な観念どおしの共存と全く相反した原理どおしの共存からである」('- De la libre coexistence dans tous les esprits cultivés des idées les plus dissemblables, des principes de vie et de connaissance les plus opposés.') という近代ヨーロッパの価値の多様性を答えとして挙げ、ヨーロッパにおける秩序無き精神の危機を告発した。[17]　一方で、T.S.エリオットは、第一

16　前掲書、 p.34.

17　Paul Valéry, *Œuvres complètes*, tome I (Paris: Flammarion,1957), pp.991-92.

次大戦後の精神的不毛性と救いなき精神の問題を、詩作品『荒地』(*The Waste Land*, 1922) で提示するとともに、「伝統と個人的才能」('Tradition and the Individual Talent', 1919) などの評論において、伝統と宗教的価値の復権を唱えていくことになる。こうした伝統の復権と秩序の回復を知性を通じて行おうとしたヴァレリイやエリオットにみられる、いわゆる主知的な文学傾向は、ヨーロッパの「過去」への志向性を有し、秩序へのあくなき願いを詩の「ことば」へ結びつけた点において、「過去」を白紙状態にして「モダンなもの」を求め続け、「攻撃性」を詩の「ことば」に導入したイタリア未来派の傾向とは全く異なった文学傾向であると言うことができる。

以上、「荒地」派詩人に先立つ大正後期から昭和初期における日本の詩の領域で、その重要な役割が担われる第一次大戦前後にヨーロッパで興った前衛的な芸術諸運動と文学的傾向における詩の理念について、イタリア未来派を中心に、ダダイスム、T.E.ヒュームからヴァレリイ、エリオットへ続いていく第一次大戦以後の文学動向を対象にして検討してきた。次の本章第２節では、そうした第一次大戦前後のヨーロッパの詩意識が、どのように日本の土壌に移され、どのような展開していったのかという問題を、明治末期から大正後期にかけて為されたイタリア未来派の詩意識の移入を中心に、検討していきたい。そして、第２節を踏まえた上で、本章第３節では、「荒地」派詩人たちが第二次大戦前、戦後にわたり直接関わることになる詩誌「詩と詩論」を中心にした昭和初期のモダニズム詩運動について考察を試みていきたい。

第１章第２節

明治末期における日本の詩意識と大正期における前衛詩運動

日本のモダニズム詩は、平戸廉吉が、イタリア未来派の理念と方法を詩的主体の「個人」の「信条」として取り入れ、それに基づいて書いた『日本未来派宣言運動東京＝平戸廉吉』（1921年）を起点として始まる。その後、日本モダニズム詩の領域は、西欧で確立された、あるいは同時的に展開されている様々な詩の理念と方法を詩人が自由に取り入れ詩的実践を行うことによって、目まぐるしい展開の様相を呈することになる。しかし、こうした詩人「個人」が信望する理念に基づいて自由な詩的行為を為すに至るまでには、日本の詩の領域は、そうした「個人」の「思想」の自由とそれに基づく表現の自由を、それらを抑制している日本の詩的風土を変革することによって、確立しておく必要があった。つまり、前節で検討してきたイタリア未来派、ダダイスム、第一次大戦後のイギリスやフランスで顕著になった主知的な文学傾向、さらには、議論には及ばなかったが、立体派、イマジズム、表現派、シュールレアリスム、新即物主義など、ヨーロッパの詩的風土で詩的主体の「個人」の思想に基づいた様々な詩意識は、たとえメディアの発達とテクノロジーの進歩によって同時的にその情報が日本に移入されても、すぐには日本に根付くことはなく、その前段階として、詩人が「個人」の「信条」に基づいて自由に詩的行為が行える日本の詩的風土の確立が必要であったのである。

この点に関して、第一次大戦前後のヨーロッパにおいて展開され、後に日本に紹介・移入される詩意識の中で、イタリア未来派の日本の詩的風土への移入の軌跡は、日本モダニズム詩の基盤が構築されていく過程を明らかにするものであると思われる。このような視座から、本章本節では、第１章第３節において議論することになる「荒地」派詩人の活動に戦前戦後と直接関わってくることになる日本のモダニズム詩運動の考察の準備段階として、明治末期から大正後期の日本モダニズム詩の起点に至るまでの日本の詩領域の詩意識の展開を、イタリア未来派の受容とこの

期間に日本の詩が直面していた問題を明らかにしながら、検討していきたい。

(1)

1909（明治42）年5月、文芸雑誌「スバル」（明治42年1月－大正2年12月）第5号の「むく鳥通信」において、イタリア未来派を日本に初めての紹介したのは森鴎外であった。掲載された。森鴎外は、F.T.マリネッティを簡略に紹介した後で、「未来派創立宣言」における「未来派宣言」の部分に相当する訳文「未来主義の宣言十一箇條」を提示し、その後に簡単な感想を付け加えている。[1]　この号の「むく鳥通信」は、２８項目の海外における文化・社会・風俗の動向に関する様々な記事から構成されており、その最後のものとして、上記のイタリア未来派に関しての通信が載っている。この通信文を書くに当たって、森鴎外がどのような原資料を用いたのかという点については、まだ明らかになっていないが、文面に散見できる「未来主義 (Futurismo)」、「攻撃的 (Aggressivo)」、「道徳主義 (Moralismo)」、「女性主義 (Femininismo)」など、訳語に付加された補足語がイタリア語である点から考えると、殊に「未来主義の宣言十一箇條」については、イタリア語で書かれた文面を使用したと考えてよいであろう。ちなみに、小堀桂一郎は、『森鴎外－文業解題（創作篇）』における第5章「評論・随筆」の「『むく鳥通信』」の項目において、森鴎外が「むく鳥通信」を書くに当たって使用した可能性のある原資料として、*Berliner Tageblatt*（新聞）、*Kölnische Zeitung*（新聞）、*Das litterarische Echo*（文芸雑誌）などを挙げている。[2]

1　無名氏「雑録　むく鳥通信」、『スバル』第５号（1909年５月）、99-104頁。紙上では、この通信は、「無名氏」で発表されているものの、この「むく鳥通信」を担当したのは、実際には森鴎外であった。また、未来派の紹介は、「むく鳥通信」の中の、102-04頁にわたって掲載されている。

2　小堀桂一郎『森鴎外－文業解題（創作篇）－』（東京、岩波書店、1982年）、392頁。

マリネッティの「未来派創立宣言」が、「フィガロ」紙に掲載されたのは1909年2月20日、その直後それは、マリネッティが主宰する詩誌「ポエジーア」の1909年２月号、３月号にイタリア語版となって掲載された。そして、イタリア未来派の「未来派宣言」は、最初に発表された1909年2月20日から約70日後の、5月1日には、森鴎外を通じて日本の読書家たちに知られることになった。

「未来派宣言」のような芸術運動の理念や方法は、それが幅広く伝達される前には、通常、他者によって、例えば、その当時権威的な存在である批評家や文学者によって、その重要性が認められるといった経緯が必要となる場合がほとんどである。しかし、イタリア未来派の場合には、こうした経緯よりも先に、その情報だけが世界的な規模で拡散し、極東の日本においてもこれだけの速さで伝えられた。こうした背景には、「未来派宣言」を発信する側のマリネッティの戦略、すなわち、「メディア」を通じて世界的規模で情報を発信することへの先鋭な意識や、文学的事象をイタリア一国内の文壇という狭い枠組みから解き放ち、大衆へと、全世界へと、その視野を拡げていく「攻撃的な」意志などがあったと思われる。さらには、それを受信する側の森鴎外の才能、言い換えれば、海外へ対する強い好奇心や、「どんな記事をもそのあるべき脈絡に於て正確に捉えることができた、彼の深い学殖と透徹した読解力」[3]などがあったことも確かであろう。つまり、受信する側と発信する側の両方の要因が上手く作用したということである。

このような森鴎外の「未来派宣言」の記事の翻訳紹介を起点として、以後、様々な経路を通じて、イタリア未来派だけでなく、第一次大戦前後のヨーロッパに興った前衛詩運動の指導理念に基づく詩意識が、日本に続々と移入され、1921年12月の平戸廉吉によるパンフレット『日本未来派宣言運動　東京＝平戸廉吉』に至るまでに、日本モダニズム詩の基盤が形成されていくことになる。1909年5月から1921年12月までと定めることができる日本モダニズム詩が成立するための準備期間の中

3　前掲書、394頁。

で、特に重要だと思われるのは、その最初期に当たるイタリア未来派の移入の期間であろう。その中でも前述した森鴎外による「未来派宣言」の翻訳紹介（1909年5月）から、イタリア未来派に言及したものとして鴎外に継いで次に早い文献とされている高村光太郎の評論「未来派の絶叫」が発表される1912年3月までの約３年の空白期間は、その後のイタリア未来派の移入だけではなく、大正期において続々と移入されてくるヨーロッパ出自の詩意識を日本の詩的土壌に根づかせるために必要な作業が、特にその後イタリア未来派に興味を示すことになる日本の詩人たちを中心に為された重要な期間として捉えることができる。

それでは次に、日本モダニズム詩の成立に深く関わっていると思われるそうした作業について、イタリア未来派の移入の最初期の状況を明らかにしながら、検討していきたい。

（２）

日本におけるイタリア未来派の移入に関わる研究は、文学の領域だけに限らず美術の領域においても、現在まで様々な視点から為されてきた。その中でも、詩の領域を中心とし、実証的な観点から為された研究として、千葉宣一の論考「詩論の発展と流派の展開－昭和期－」[4]や「アヴァンギャルド詩運動と大正詩の崩壊－未来派の詩的動態を中心に－」[5]などが挙げられる。千葉宣一は、その論考「詩論の発展と流派の展開－昭和期－」の中で、未来派の導入に積極的な関心を抱いたのが、「何等かの意味で、鴎外と指導と信徒の関係にあった」人物たちであったということを指摘している。[6]　そして、千葉のこの指摘を踏まえて、特に、森鴎外がイタ

4　千葉宣一「詩論の発展と流派の展開－昭和期－」、『日本近代詩』、33-92頁。

5　千葉宣一「アヴァンギャルド詩運動と大正詩の崩壊－未来派の詩的動態を中心に－」、村野四郎他編『講座・日本現代詩史』第２巻、大正期（東京、右文書院、1973年）、307-56頁。

6　前掲書、316頁。

リア未来派の翻訳紹介を行った明治42年の時点で、この情報に直接間接的に影響を受けたと思われる詩人の中で考えねばならないのは、やはり文芸雑誌「スバル」の執筆に携わっていた者たちであろう。ちなみに、森鴎外のイタリア未来派の翻訳紹介が掲載された「スバル」第５号の目次を見てみると、そこには森林太郎（森鴎外）の名前の他に、「パンの会」の中心メンバーであった木下杢太郎、吉井勇、北原白秋、翌43年1月の「スバル」（第２巻第１号）に掲載される評論「一年間の回顧」の執筆者であり、公表されなかったが「明治四十三年八月稿」の記載を持つ評論「時代閉塞の現状」の著者でもあった詩人石川啄木、大正元年11月29日付けの「東京朝日新聞」に、「未来派の詩」と題する、日本で最初のマリネッティの詩の部分訳（「戦争」と題する詩の一連）を含む評論を発表した与謝野寛、大正10年11月の文芸誌「明星」にマリネッティの「未来派舞踏の宣傳」（'Manifesto della danza futurista'）の翻訳を発表する平野萬里などの名前が見られる。この他に、1909年7月にパリから帰国し、その後、文芸雑誌「スバル」に深く関わることになる高村光太郎を加えた若手の詩人たちは、直接的あるいは間接的に、意識的あるいは無意識的に、イタリア未来派や、1912年3月に高村光太郎が評論「未来派の絶叫」の中で言及することになる、その中心思想としての「精力主義」[7]に接近した者たちであったと考えてよいであろう。

後にイタリア未来派に直接関心を持つ者を含んだ、こうした若き詩人たちが、当時どのような詩意識に基づいて詩的言語を紡ぎ出していたのかという点は、興味深いところである。そのことを探る手がかりは、イタリア未来派に関しての森鴎外の通信文の最後、つまり、訳文「未来主義の宣言十一箇條」の後に付された、次のような簡単な鴎外自身の感想に求めることができるかもしれない。

7　高村光太郎「未来派の絶叫」、『高村光太郎全集』第8巻、増補版（東京、筑摩書房、1995年）、3-6（4）頁。

こいつを赤インクの大字で印刷した、幅一米長さ三米の広告が Milano の辻々に張り出されたのである。スバルの連中なんぞは大人(おとな)しいものだね。はゝゝゝ。[8]（下線は筆者）

「スバル」は、明治42年1月に創刊され、大正2年12月まで続いた文芸雑誌である。それは、文芸誌「明星」（第一次：明治33年4月－明治41年11月）が100号をもって廃刊した後、それ以前に「明星」から離れていった者たちと「明星」に残って活動していた者たちが、改めて結集する場となった。その創刊号の扉のページには、「スバル」の立場が次のような言葉で書かれている。

我々は決して一定の主義若くは簡単な動機の下に相集つた訳ではない、が何かその趣味、その思想、またその境遇に於て相通ずる所があつたのに違ひない。であるから吾々は相互に深く干渉し、若くは統一を強ふるが如きことはしない。

思ふに文学、芸術を一個の真面目な人間生活の一部と見做し、各盡し得る限りの力を致してこの需用を充たさうとする点に於て少くとも我々は一致するだらうと思ふ。

人間は各異つた思想を有ち、またそれは常に変化するものであるから、我々はここに、我々の文学、芸術は真を、美を、若くは文学、芸術自身を対境とするやふな宣言を敢てせぬ。併し芸術的活動に説明し難き一種の愛着を持つてゐるといふことは各認める所だ。

夜半仰いて空を見ると、天心より少し南に、しとやかに輝いてゐる星の一群がある、昴宿といはれるものである。取つて我々の草子に命じたのは何も特に理由のあつた訳ではなかつたが、名づけて見ると先例や種々の比喩などがつい

8　森鴎外「むく鳥通信」、104頁。

て来て困る。比喩などはどうでもよい、単に一個の符牒として置きたい。

第一号の初めにこれだけのことを書いて置く。[9]

「我々は決して一定の主義若くは簡単な動機の下に相集つた訳ではない」という記述から、この文芸雑誌「スバル」が何らかの文学の理念と方法を持った流派として出発したのではないことは明白である。こうした「一定の主義」に対する否定的な見解の裏には、当時の文学領域で支配的であった自然主義文学の理念とは異なった立場で「詩を書く」行為を行おうとする「スバル」の詩的営為に対する意図が看取できる。さらに、「思ふに文学、芸術を一個の真面目な人間生活の一部と見做し、各盡し得る限りの力を致してこの需用を充たさうとする点に於て少くとも我々は一致するだらう」、あるいは「人間は各異つた思想を有ち、またそれは常に変化するものである」という言明からは、「スバル」のメンバーが当初、「人間生活」つまり「生」の充実を文学や芸術などの「芸術的活動」の中に求めようとしていたことと、「個人」の自由な「思想」に基づいた詩的営為を目指していたことが窺える。しかし、このような「スバル」のメンバーの希求したことが可能になるには、高村光太郎の言葉を借りて言えば、「其の背後に欧羅巴がある」[10]思想であろうと、主体的に獲得された思想であろうと、「個人」の「思想」そのものを自由に表出できる場と、その「思想」に基づいた詩的行為を自由に提示できる場が前提として必要になってくる。

こうした整った思想的・文学的風土があることを前提にして考えた場合、創造本意の「生」の立場、換言すれば、新しいものを創り出すことに「生」の充足を覚える立場に依拠する「書くこと」の主体は、「各異つた思想」や「常に変化する」個々の理念に基づいて詩的行為を行うことによって、初めて、詩の「ことば」と詩的主体の密接な関係を築き上げ、詩の「ことば」の可能性を追求していくことがで

9　『スバル』第１号（1967年1月）。

10　高村光太郎「純一な芸術が欲しい」、吉本隆明・北川太一編『高村光太郎選集』第1巻、増訂版（東京、春秋社、1981年）、254-59（255）頁。

きる。さらには、「個人」の「思想」の自由な表出とその「思想」に基づいた自由な詩的営為に対する明確な意識は、詩人のそうした詩的行為を抑制するもの、例えば、「スバル」のメンバーとっては、「相互に深く干渉し、若くは統一を強ふるが如き」「一定の主義」のようなものを、詩人自身に自覚させ、それに対する反抗を通じて、自由な詩的行為を抑制しているものからの解放を願うことになる。この点に関して、「スバル」創刊号の扉のページに掲げられた理念に基づく自由な詩的行為は、「あらゆる羈絆を脱して自己の飛躍跳躍」[11]に基づいて行われたイタリア未来派の詩的行為と類縁関係にある、ということができるかもしれない。

しかし、森鴎外が、先に引用したイタリア未来派の翻訳紹介の最後で、「未来派宣言」を「赤インクの大字で印刷した、幅一米長さ三米の広告」によって「Milano の辻々に張り出」したイタリア未来派の行為と比較して、「スバル」の当時のメンバーを「スバルの連中なんぞは大人しいものだね。はゝゝゝ」と揶揄していることからもわかるように、「スバル」そのものの活動は、あたかも自己の自由な詩的行為を阻まれたような「大人しい」表現活動であった。イタリア未来派の詩的行為と根本的には類似した立場の自由な詩的行為を求めていたにもかかわらず、「スバル」の若手の詩人たちがかくも「大人しく」あり続けたのは、「個人」の自由な「思想」に基づく表現活動を抑制しているもの、別な言い方をすれば、「スバル」のメンバーが創刊当時に認識していた「相互に深く干渉し、若くは統一を強ふるが如き」「一定の主義」以外の抑制要因の存在を認識していなかったことにある。後に、「スバル」のメンバーたちは、彼ら自身が希求する自由な詩的行為を抑制しているものが、権威を有した文学的規範だけではなく、日本の風土に存在していた封建的遺制、国家、伝統、家族制度なども抑制要因であることに気づくのであるが、そこに至るまでの過程において、見えない「敵」によって自由な詩的行為を抑制され、自己の内面に生じた鬱屈した内的な力は、「パンの会」などの耽美主義的でデカダン的な傾向へと解消せざるを得なかったのではないであろうか。

11　高村光太郎「未来派の絶叫」、『高村光太郎全集』第8巻、4頁。

「パンの会」とは、明治40年5月に創刊された美術文芸雑誌「方寸」（明治44年7月廃刊）の同人、石井柏亭、森田恒友、山本鼎らの青年洋画家と、「方寸」に詩を寄稿していた木下杢太郎、北原白秋などが中心となり、美術と文学の交流を目的として、発足した文芸運動であった。41年12月パンの会は、第１回の談話会を隅田川右岸両国橋に近い矢ノ倉河岸の西欧料理第１やまとで催した。第１回のパンの会は、「方寸」の石井柏亭、山本鼎、森田恒友、詩人は杢太郎、白秋のほか吉井勇、石川啄木だけであった。同年11月に詩人たちが属した新詩社の「明星」が100号で廃刊し、翌42年1月から「スバル」が創刊されると、パンの会も実質的に「スバル」を中心とした若い詩人たちの文芸運動となっていき、42年から翌43年にかけて最も盛況をきわめた。パリから帰国後、のちに「パンの会」に参加することになる高村光太郎は、「パンの会」について次のような感想を残している。

> 青春の爆発といふものは見さかひの無いものだ。若さといふものの一致だけでどんな違つた人達をも融合せしめる。パンの会当時の思出はなつかしい。いつでも微笑を以て思ひ出す。本質のまるで別な人間達が集まつて、よくも語りよくも飲んだものだ。自己の青春で何もかも自分のものにしてしまつてゐたのだ。銘々が自己の内から迸る強烈な光で互に照らし合つてゐたのだ。いつ思ひ出しても滑稽なほど無邪気な、燃えさかる性善物語ばかりだ。あの頃、万事遅蒔な私は外国から帰つて来て、はじめて本当の青春の無鉄砲が内に目ざめた。其が時代的に或る契合点を持つてゐた。前からあつたパンの会に引きずり込まれたのは自然の事であつた。細かい事は大抵忘れた。又忘れてもいいのだ。通り抜けて来た事は私にとつて一つの本能の陶冶になつた。其が貴い。[12]

上の高村光太郎の「パンの会」についての回想にある、「青春の爆発」、「自己の

12　高村光太郎「パンの会の頃」、吉本隆明・北川太一編『高村光太郎選集』第３巻、増訂版（東京、春秋社、1981年）、143-44（143）頁。

内から迸る強烈な光」、「青春の無鉄砲さ」などといった表現から、「個人」の思想に基づいて行う自由な詩的営為を抑圧されたことから生じる若い芸術家たちの「自己」の行き場のない内的な力が、この会で如何に発散されていたのかが理解できるであろう。自己の内的な力の「爆発」、別な言葉で言えば、抑圧から生じる「精力」の「爆発」は、高村光太郎が指摘するように、確かに「見さかひの無いもの」だったかもしれない。しかし、こうした「爆発」や内的な力の発散通じて、本来その力を向けるべき「攻撃」対象の存在を、つまり、自由な詩的行為を抑圧し続けている「敵」を見出し認識したことは確かであろう。それは、木下杢太郎の言葉で言えば「因循な封建時代の遺風」[13]な日本的な「過去」であったかもしれないし、あるいは、当時支配的であった表現主体に対する自然主義的な見解であったかもしれない。さらには、政治的な、社会的な閉塞状況であったかもしれない。それは様々な側面からくる抑圧であった。こうした状況から、森鴎外の言葉で言えば、「大人しい」「スバルの連中」の一人である石川啄木が、まずは、彼らの自由な詩的行為を抑制していた自然主義文学の理念にその内的で「攻撃的」な力を向けたのは、明治43年1月1日発行の「スバル」（第２巻、第１号）に発表した評論「一年間の回顧」の中であった。

この評論「一年間の回顧」の中で、石川啄木は、前年明治42年の文壇の状況を論じるという視座のもとで、その議論の中心を自然主義文学の理念の検討に置いている。

> 自然主義は文学を解放した。少くとも、しようとした。これは近数年間に於ける日本文学上の一大事実である。此事実が、明治文学史の頁を以前と以後に画然として区別するものである事に就いては、後世の史家も必らず吾人と意見を共にすべきものである。ー私は、一時々々の現象を過信し、誇張する不聡明な批評家に与しないと同時に、自己の干与しなかつたあらゆる運動と事件とを

13　木下杢太郎の「パンの会」の回想に関しての言及は、堀江信男『高村光太郎』、福田清人・堀江信男編、人と作品10（東京、清水書院、1966年）、127頁、に引用されているものを参照した。

成るべく実価以下にのみ評価せんとする卑怯な人達にも同じない。

一度解放された文学の主潮は、然し乍ら色々の理由から、まだ行くべき処まで行かずに、途中で停滞し、弛緩しようとする傾向を作つた。如何なる事件、如何なる運動にあつても、時々斯ういふ事に出会す事は免れないものである。而してそれは明治四十二年前半期に於ける我が文壇の概勢であつた。「色々の理由」のうちには、我々は大体に於て、自然主義者それ自身の主張に自己及び自己の文学を全然解放するだけの力の無かつた事（換言すればそれだけの力を得る程までに深い反省を積んでゐなかつた事）と、外部に有力なる刺戟者のゐなかつた事とを数へる事が出来る。今から考へて見て、丁度一年以前、自然主義は今や確実に文壇を占領したと呼号して明治四十二年を迎へた一批評家の言には、一は喜ぶべき、一は悲しむべき両様の意味があつたやうに思はれる。[14]

石川啄木は、明治42年の文壇を反省的に見た上の文章の中で、「自然主義」が「文学を解放した」点については、「近数年間に於ける日本文学上の一大事実」であると認めながらも、その「解放された文学」が、「自己及び自己の文学」を「全然解放する」に至っていないという否定的な見解を示している。石川啄木のこの見解を整理してみると、次のようになるであろう。

まず、自然主義は「個人」に基づく表現を可能にした、別な言い方をすれば、日本文学に近代個人主義を樹立したという点で、画期的な出来事であった。それらは、表現の対象を自己の問題に据える作品を創り出していった。そうした自然主義的な展開の一つの結果として、田山花袋の小説『蒲団』（明治40年9月）などが存在する。田山花袋はその小説で、自己の内面と現実をありのままに諦観し、自己の経験に忠実であることを一つの規準とするような表現規準というものを生み出した。こうした「個人」への強い関心は、それまでの文学には存在しなかった点であり、この点について石川啄木も認めている。しかし、問題は、こうした「個人」を

14　石川啄木「一年間の回顧」、『石川啄木全集』第４巻、評論・感想（東京、筑摩書房、1980年）、236-40頁（236-37）頁。

中心とする文学が、その描出の方法と対象に重点が置かれたために、その表現行為そのものに対する見解は、「個人」の「思想」の自由とその「思想」に基づいた表現の自由という発想にまで高められることはなかったという点である。それ故に、「個人」がその自由を阻まれた形での「内面の葛藤」のみを静観的に観察し、それを描き出す傾向を創り出した。つまり、対象が自己であろうとも、他者であろうとも、それを忠実に描き出すことに一つの価値規準がもうけられたのである。そこには、当然、自己を解放する、といった発想も、その解放された自己に基づく表現といった考えも、存在していない。自然主義がこうした自己の解放に向かわずに、抑圧された自己でも、それを忠実に描き出すことに重きを置いた背景には、決定論的な、あるいは運命論的な自己に対する考え方が存在している。自己が決定論的にすでに決定されているといった立場からは、ひとつの自己の在り方が運命的に何も変えられないものとして、認識される。そうした自己は、当然、如何に悲劇的な状況でも、それを受け入れるといった態度と結びついてくる。石川啄木が、この評論を書いた背景には、そうした自己を現実のままの姿で眺めようとする自然主義的な立場を否定する見解が存在しているのである。

こうした「自己」というものを静観的な視点からではなく、新しい「思想」で充たすことによって自己の拡充を願い、それを表現に結びつけて行こうとする若い詩人たちは、決定論的あるいは運命論的な「生」の強制、「個人」の「思想」の排斥、それに基づいた表現行為の抑圧といった現実の文学的閉塞状況と、自己の表現の理想との間にある落差から、その内発的な「力」を鬱屈させていたのであるが、その「精力」が「個人」を取り巻く外側、つまり閉塞的な状況そのものに向けられたもう一つの重要な論文として、石川啄木が明治43年8月に書いた評論「時代閉塞の現状」を挙げることができる。

石川啄木の評論「時代閉塞の現状」は、明治43年8月22日と23日の両日に「東京朝日新聞」に発表された若き哲学者魚住折蘆の論文「自己主張の思想としての自然

主義」[15]を受けて書かれたものである。石川啄木の生前にそれが発表されることはなく、公になったのは、土岐善麿による『啄木遺稿』（東雲堂書店、大正2年5月）においてである。石川啄木が「時代閉塞の現状」を書く契機となった「自己主張の思想としての自然主義」の中で、魚住折蘆が論じているのは、「自然主義と自己主張との関係」である。

近代思想には、それがどんな思想であっても、大なり小なり、「自己拡充の精神」が含まれている。自己を拡張しその内容を充実させようとする能動的な心の働きを有する近代的自我を主張する場合、そこで当然問題になるのは、そうした自我の拡充を抑圧しようとする存在との対立である。この自己拡充を阻止しようとする存在あるいは力に対して、自我は、「自己拡充の精神」の「消極的形式」、つまり、受動的な作用として現れる「反抗的精神」を含有していると魚住は指摘する。[16]　魚住は、こうした「自己拡充の精神」と「反抗的精神」といった二つの要素を合わせ持つ「自我」の考えに基づきながら、その自己を主張し表現する場合の問題を、決定論的な自己に対する考え方に基づいて客観的にありのままに諦観し描写するといった従来の自然主義的な方法に対置しながら論じている。「自己拡充の精神」に基づいて自己主張の仕方が直接的に為されているといった視点は、表現の主観的な要素を重視した立場につながる。「反抗的精神」に基づいて自己主張が為される場合、それは自我を抑圧する存在を措定し、それへの反抗あるいは挑戦といった形になる。こうした二つの自己主張は、当然、個人を中心に据える自然主義の表現の問題になるのである。しかし、魚住は、当時の日本の自然主義の中に、これらのどちらにも属さない「不徹底な自然主義」の立場を読みとる。[17]　そして、そうした曖昧さが、「或時には自暴的な意気地のない泣言や愚痴を云つて居るかと

15　魚住折蘆　「自己主張の思想としての自然主義」、川副国基他注釈『日本近代文学大系』第57巻、近代評論集　（東京、角川書店、1972年）、436-39頁。本論考において、魚住の論文は、同書に転載されたものを参照した。

16　前掲書、436-37頁。

17　前掲書、438頁。

思へば、或時には其愚痴な意志薄弱な自己を威丈高に主張する」[18]といった表現行為や、「現実的、自暴的、退廃的、憂鬱的、悲観的のみの傾向」[19]に通じてくる。こうした表現状況に対して、魚住は、自我の「反抗的精神」に基づいた表現を自覚させることによって、自然主義の従来とは異なった道筋を提示した。それは、当時、「個」を抑圧している存在そのものについて何も意識せずに、鬱屈した状態で表現活動を行っていた青年の詩人たちの「叫び声」を代弁するような意味を持っていたと思われる。

「自己拡充の念に燃えて居る青年に取つて最大なる重荷は之等のオーソリテイである。殊に吾等日本人に取つてはも一つ家族と云ふオーソリテイが二千年来の国家の歴史の権威と結合して個人の独立と発展とを妨害してゐる」[20]と、魚住は、表現主体を抑圧するものとしての存在を明らかにすることによって、それらから解放され、自我の自由な状態で表現することの可能性、つまり、「個人」の自由な思想に基づく自由な表現行為の可能性を示している。そして、その主体的な表現への願望は、次のような言葉で論文の最後に語られている。

> [……] 自分は現実的、自暴的、廃頽的、憂鬱的、悲観的のみの傾向に対するよりは、之れ等に反抗的主義的の熱意を混じた傾向により多くの同情を有つて居る。前者と云へども近代的憂鬱に対する同感の情から、幾分興味を有たぬ事はないが、そんな先の見えぬ暗黒な思想は自分の堪へ難い処である。之れに反して自己主張の精神の燃えて居る処には、よしや其れが乱雑であつても、混沌であつても此処には創世記的の俤が忍ばれて、新しき世界新しき生命が何処かに動いて居る様に思はれる。之れ自分が現時の諸芸術殊に小説に対して生命の色濃さ、作家の強烈な主観の主張の現れた者に同情の注目を注いで居る次第である。

18　前掲書、437頁。

19　前掲書、439頁。

20　前掲書、437頁。

［……］婬靡な歌や絶望的な疲労を描いた小説を生み出した社会は結構な社会でないに違ひない。けれども此の歌此小説によつて自己拡充の結果を発表し、或は反発的にオーソリテイに戦ひを挑んで居る青年の血気は自分の深く頼母しとする処である。[21]

魚住の論文「自己主張の思想としての自然主義」は、あくまでも自然主義との関わりにおいて、それを批判的に論じたという点で、自然主義の領域を出ないものであるが、しかし、そこで自然主義を批判的に論じている視座は、当時、「個人」の自由な思想に基づいた自由な表現行為を憧れながらも、「反抗」という方途と、それを抑制している「敵」という概念を知らないが故に、「オーソリテイ」によって押さえつけられたまま、自暴的廃頽的に自己表現を行っていた「スバル」などの若き詩人たちに、詩的表現における自由の獲得の方途を与えたのであった。次の石川啄木の「時代閉塞の現状」における文章は、「理想を失ひ、方向を失ひ、出口を失つた状態に於て、長い間鬱積して来た其自身の力」[22]が、その進むべき路を見出し、その結果、大きな流れとなって噴出した自我の「叫び」ともとれるような文章である。

斯くの如き時代閉塞の現状に於て、我々の中最も急進的な人達が、如何なる方面に其「自己」を主張してゐるかは既に読者の知る如くである。実に彼等は、抑えても抑えても抑えきれぬ自己其者の圧迫に堪へかねて、彼等の入れられて居る箱の最も板の薄い処、若くは空隙（現代社会組織の欠陥）に向つて全く盲目的に突進してゐる。今日の小説や詩や歌の殆どすべてが女郎買、淫売買、乃至野合、姦通の記録であるのは決して偶然ではない。しかも我々の父兄にはこれを攻撃する権利はないのである。何故なれば、すべて此等は国法によ

21　前掲書、439頁。

22　石川啄木「時代閉塞の現状（強権、純粋自然主義の最後及び明日の考察）」、『石川啄木全集』第４巻、評論・感想、262-71（267-68）頁。

つて公認、若くは半ば公認されてゐる処ではないか。

さうして又我々の一部は、「未来」を奪はれたる現状に対して、不思議なる方法によつて其敬意と服従とを表してゐる。元禄時代に対する回顧がそれである。見よ、彼等の亡国的感情が、其祖先が一度遭遇した時代閉塞の状態に対する同感と思慕とによつて、如何に遺憾なく其美しさを発揮してゐるかを。

斯くて今や我々青年は、此自滅の状態から脱出する為に、遂に其「敵」の存在を意識しなければならぬ時期に到達してゐるのである。それは我々の希望や乃至其他の理由によるのではない、実に必至である。我々は一斉に起つて先づ此時代閉塞の現状に宣戦しなければならぬ。自然主義を捨て、盲目的反抗と元禄の回顧とを罷めて全精神を明日の考察ー我々自身の時代に対する組織的考察に傾注しなければならぬのである。[23]

上の石川啄木の「『敵』の存在を意識しなければならぬ時期に到達してゐるのである」という認識は、逆に考えるならば、その時まで「『敵』の存在」を意識しなかったことを示している。「『敵』の存在」を措定しない自我には、自我の「抑圧」であるとか、抑圧からの「解放」であるとかの概念は存在しなく、抑えつけられた自我の内的な力は、「箱の最も板の薄い処、若くは空隙に向つて全く盲目的に突進」する。「『敵』の存在」を措定しない自我に基づく詩的行為の場合には、「書くこと」の主体は、「個人」の思想に基づいて「詩を書く」行為を行おうとしてみても、何かによって抑圧され、知らず知らずのうちに、「個人」の信条から外れ、別なゆがめられた信条に基づいて「詩を書く」ことになる。ここで重要なことは、「個人」の思想から外れ、別のゆがめられた信条に移行する時に、それが表現主体に対してかけられる抑制から起こるということを知ることであり、それを知り、その外圧に反抗することによって、詩人自身の「個人」の思想に基づいた自由な詩的行為が獲得されるということを知ることであろう。

こうして、「書くこと」の自由、つまり、「個人」の思想に基づく自由な表現行

23　前掲書、269頁。

為を獲得する方法を認識した若き詩人たちは、以後様々な自らの詩的行為を抑圧していた「敵」に対して宣戦を挑んでいったのであった。「社会」を「敵」と見なした詩人もいれば、「国家」を「敵」と見なした詩人もいる。また、高村光太郎のように「伝統」や「過去」を「敵」と見なした詩人もいる。それぞれの詩人の「敵」は、それぞれ異なっており、詩的行為の自己の生きている環境と思想的な立場に関わっているのである。

これまで考察してきたように、明治末期の詩意識は、文芸雑誌「スバル」に関わった若手の詩人たちが、自らの「詩を書く」行為を抑制している存在を「敵」として認識することによって、「個人」の思想に基づく詩的行為の自由を獲得していく方途を見出した点に一つの特徴があった。石川啄木は「強権」を、高村光太郎は「伝統」を「敵」として意識することによって、その「敵」について熟考し、反抗的精神でそれに立ち向かうことによって、自己の「信条」に基づく詩的行為の基盤を獲得し、それに基づく詩的行為を自覚した。そして、こうした「個人」が信望する「思想」や「理念」に基づく自由な詩的行為への自覚は、後に、様々な経路を通じて日本に伝えられる第一次大戦前後に興った前衛詩運動の詩の理念や思想を、「個人」の詩の理念として取り入れ、詩的行為を行っていく日本モダニズム詩には欠かすことのできない基盤であったと言うことができるかもしれない。

このように「個人」の「理念」に基づいた詩的行為を自覚した若き詩人たちは、森鴎外のイタリア未来派の翻訳紹介以降途絶えていたヨーロッパの詩意識、特にイタリア未来派の詩の理念を徐々に「個人」の思想や理念として取り入れ始め、以後本格的な西欧の詩意識の移入が始まっていくことになるのである。

（３）

森鴎外の「未来派宣言」の翻訳紹介以降、未来派の導入に積極的な関心を抱いたのが、高村光太郎、与謝野寛、木下杢太郎、平野万里、有島生馬、沢木梢、木村荘

八など、「何等かの意味で、鴎外と指導と信徒の関係にあった」[24]人物たちと文芸雑誌「スバル」に関わっていた若き詩人たちであることは、前述した通りであるが、その中でも最も早い段階でイタリア未来派に関心を寄せたのは、高村光太郎（1883-1956）であった。

伊藤信吉は、「高村光太郎の回想」の中で、高村光太郎とイタリア未来派に関連する次のような回想を記している。

> これを私は中野のアトリエを訪問した折にきいたのだが、森鴎外の「未来派宣言」の翻訳が出て間もないころ、高村さんはマリネッティにあてて、未来派芸術についてくわしく知りたいという意味の手紙を出したという。すると「向こうでは未来主義の宣伝の機会とおもつたらしく、パンフレットやそのほかの未来主義の趣旨をかいた印刷物をたくさん送つてよこした」という。私はこういう話をきいた。また「未来派の『未来』は、ヴェルハーランの詩集『触手ある都会』におさめた作品『未来の方へ』からとつたのだ」と、そんな話もきいた。[25]

上の伊藤信吉の回想と高村光太郎に関する史的事実から考えた場合、高村光太郎は、1909年7月にパリから日本に帰国した頃、イタリア未来派の存在を知り、「マリネッティにあてて、未来派芸術についてくわしく知りたいという意味の手紙を出」すほど、イタリア未来派について大きな興味を持ったということになろう。

イタリア未来派に対するこうした強い関心から、さまざまな未来派に関する情報を以後得ていったと推測できる高村光太郎が、イタリア未来派の精神や中心思想、あるいは未来派の理念や方法について、簡単な評論形式で発表する機会をもったのは、1912（明治45）年3月であり、文芸雑誌「スバル」の「むく鳥通信」に森鴎外

24　千葉宣一「アヴァンギャルド詩運動と大正詩の崩壊－未来派の詩的動態を中心に－」、316頁。

25　伊藤信吉　「高村光太郎の回想」、『高村光太郎－その詩と生涯－』、角川文庫（東京、角川書店、1964年）、5-56（37）頁。

の未来派の紹介が掲載されてから、約３年後のことであった。

明治45年3月5日付けの「読売新聞」に掲載され、同年4月1日に雑誌「現代の美術」に転載された、高村光太郎の「未来派の絶叫」は、伊藤信吉が指摘するように森鴎外の「未来派宣言」の翻訳紹介に次いではやい時期の、イタリア未来派に関する紹介と評論に数えられるものである。[26]

高村光太郎がその文面において、「私は今此の運動に就て私自身の意見を述べようとするのではない。唯一部の拉典文芸界に梢烈しい騒擾を捲起してゐる此派の主張の要点を話してみようと思ふまでである」[27]と、その意図を述べているとおり、この評論はイタリア未来派の解説を中心に構成されているが、その背後に高村光太郎自身の未来派に対する理解や態度、さらには彼自身の関心を窺うことも可能であろう。

「未来派」といふのは、覇気に満ちた年の若い伊太利の詩人、画家、音楽家の一群によつて成つてゐる芸術的団体であつて、彼等は此の主義の下に、数千年来積み重ねられて来た民族歴史の壓迫を脱し、あまり光栄のあり過ぎた自国の過去芸術から振り離れようとするのである。彼等は過去を葬れと絶叫して立つた。彼等は歴史を侮蔑し過去を嫌忌する。彼等は現代を謳歌し未来を愛撫する。古代の遺跡と伝統的芸術とにのみよつて生命あるが如く萬人に思はれてゐる伊太利から、突如として此絶叫の声を聞くに至つて多少の感慨が無いわけにはゆかぬ。雑誌「ポエジア」の主幹であつたミラノの詩人マリネツチ氏が初めて「未来派」の名の下に其主義を発表したのは、千九百九年二月の「フヒガロ」誌上であつた。誇張した詭弁や気違じみた怒号に満ちた此の一論文は素より巴里文芸家の冷笑を買ふに過ぎなかつた。けれども氏は此の冷笑を更に熱罵した。そして第二第三と其意見を発表したのみならず、或は自国に、或は巴里

26　前掲書、36頁。

27　高村光太郎「未来派の絶叫」、『高村光太郎全集』第8巻、3頁。

に、或は倫敦に、自ら出懸けて主義宣伝の演説をやり、又其以前から盛んに氏を始め同人の創作を発表してゐるうち、遂に氏の小説「マフアルカ」の裁判沙汰となり、戯曲「ル　ロア　ボムバンス」の評判が高くなつたりして今日に至つた。そして巴里の文芸界に兎に角も波瀾を起させてゐる。[28]

上の引用から、この時点において、高村光太郎がイタリア未来派についてかなり正確で詳細な情報を得ていたことは容易に理解できるであろう。イタリア未来派が、詩人、画家、音楽家などの総合的な芸術的集団であるという点や、未来派の反過去主義、そこから必然的に起こる態度としての「現代」と「未来」の賛美、未来派の中心的存在であるマリネッティによる著作などの個人的な情報、1909年2月の「未来派創立宣言」とその反響、さらには、未来派のヨーロッパ全体を視野に入れた戦略や波瀾に満ちた動向など、かなり詳しく記述されている。

このようなイタリア未来派についての、一見、客観的な事実の記述の中に、高村光太郎自身の主観的な意見を求めるとすれば、「古代の遺跡と伝統的芸術とにのみよつて生命あるが如く萬人に思はれてゐる伊太利から、突如として此絶叫の声を聞くに至つて多少の感慨が無いわけにはゆかぬ。」（下線は筆者）の部分であろう。ここでは、明らかに、高村光太郎は、イタリア未来派の「声」を、具体的には、未来派の諸宣言書に書き込まれた、イタリアの若き芸術家の理念を、「数千年来積み重ねられて来た民族歴史」、「光栄のあり過ぎた自国の過去芸術」、あるいは「古代の遺跡と伝統的芸術」によって、「壓迫」され続けながら現在を生きなければならない若き芸術的主体の、それらに対する「絶叫」として、または、それらからの解放を願う「絶叫」として認識している。そして、高村光太郎は、そうした未来派の「声」を自分自身の内面の「声」と重ね合わせることによって、別な言い方をすれば、「日本」独自の「過去」に縛られ、苦悶している高村光太郎の表現主体の「叫び」と重ね合わせることによって、心を動かしているように思われる。つま

28　前掲書、3-4頁。

り、高村光太郎が未来派の「絶叫の声」に感じた一種の共感とも言える感情の根源には、前のところで考察したように、表現主体が「個人」の理念に基づいて、自由な表現活動が行えないことからくる苦悶、特に、高村光太郎の場合には、「彫刻家」の立場から生じる葛藤が存在しているように思われる。

木彫の道に専念していた父、高村光雲のもとに育った高村光太郎は、少年の頃から彫刻刀を握り、明治30年には、東京美術学校予科に入学、翌31年には本科彫刻科に進み、彫刻家としての才能を開花させていった。その後、俳句、短歌、詩、翻訳、戯曲など文学にも大きな関心を寄せつつ、明治39年にはニューヨークに渡り、以後、ロンドン、パリ、イタリアなどのヨーロッパでの近代生活を経験し、明治42年6月に日本に帰国した。しかし、高村光太郎が、帰国した日本の地に見たものは、旧い体質の日本独特の生活世界であり、人間を「壓迫」する社会の仕組みであった。欧米において「個人」を中心にする主体的な創作活動を自覚した高村光太郎にとって、日本の表現そのものの在り方について疑問を持ったことは確かであろう。

こうした高村光太郎の生の軌跡と、先に言及した石川啄木の評論「一年間の回顧」や「時代閉塞の現状」などが書かれた当時の日本の芸術的状況を踏まえた上で、先の未来派の「絶叫の声」に寄せた光太郎の共感を読みとるならば、「多少の感懐」という高村光太郎の言葉には、「個人」そのものに基づいて自由に表現活動ができない日本の芸術的土壌、特に、「彫刻家」として自由に「彫刻刀」を使えない光太郎の苦悩があると考えてよいであろう。そして、芸術主体としての「個人」を自覚し自由な芸術行為を希求していた高村光太郎は、未来派の理念と方法の本質である「攻撃性」を兼ね備えた中心思想「精力主義」の中に、芸術表現の自由を抑制している日本の芸術的風土を、変革させることができる理念を読み取ったのではないかと思われる。

評論「未来派の絶叫」の先に引用した部分に続く文章で、高村光太郎は、イタリア未来派の精神や中心思想の言及へと議論を進めている。

氏の多くの論文に就いて一々述べてゐる事は出来ないが、其中心思想は精力主義である。あらゆる羈絆を脱して自己の飛躍跳梁を欲するのである。「未来派は独創と個人性との賛稱或は高揚に外ならない」と言つていゐる。実に飛躍（ルボン）は其の合言葉である。多彩、多音、流動は其の趣味の基本である。膽大、強行、率直は其の用意である。氏は或人の問に答へて「議論、喇叭、鐵拳！」と叫んでゐる。此等に反するものは皆其の嫌忌する所となる。消極、追懐、暗涙、卑怯、怠慢、単調、固着は氏の最も唾棄する所である。氏のめざす所は「増人（ロンムミユルチプリニ）」である。其の為めには女人を侮蔑する。月夜の情調を殺滅する。所謂「好趣味（ボングウ）」に反抗する。「美術的」に背を向ける。そして汽鑵車に狂喜し、飛行器を讃美する。氏は美術館を水浸しにし、図書館を灰燼にせよと罵り、烟突を歓迎し、自動車の瓦斯の臭気に無限の喜悦を覚える。動力、電氣力に傾倒する。そして戦闘は世に唯一の廓清剤であると言つてゐる。現に彼等はトリポリ征服の為めに盡す所が多かつた相であるし、又ゼルマン民族に対する敵対は彼等にとつて絶大の快事である相である。過去の否定は又他国人への反抗となり、彼等をして不思議な愛国家たらしめるのである。[29]

この引用の最初で、高村光太郎は、イタリア未来派の「中心思想は精力主義である」と明言している。詩人マリネッティの思想あるいは精神へすぐに切り込んでいくこうした態度には、高村光太郎の未来派に対して持っている一つの、或いは唯一といってもよい、関心があらわれているように思える。その関心とは、イタリア未来派、特にマリネッティが、一体どんな自己の純粋な立場に立って、別な言い方をすれば、一体どんな「個」の思想や「個人性」に基づいて芸術活動を行っているの

29　前掲書、4-5頁。

かといった、芸術家あるいは詩人の「主体性」への関心である。そして高村光太郎は、この主体性の観点から、未来派の中心思想である「精力主義」を読み取ったと考えてよいであろう。

高村光太郎の創造主体の「主体性」への関心は、この評論「未来派の絶叫」とほぼ同じ時期の、明治45年3月の文芸雑誌「新潮」に掲載された「純一な芸術が欲しい」と題する談話筆記からも窺うことができる。

高村光太郎は、その談話筆記「純一な芸術が欲しい」の中で、「文壇と言ふよりも寧ろ作品を見ると、此の予め計られた作品が多い。即ち、作者が一人になつて居ない。其の背後に欧羅巴がある。狭く言へば、露西亜があり、仏蘭西があり、独逸があり、英国がある。作者が何うしても一人になれないで、其の背後にいろいろなものが動いて居る。作品の上から言へば、さうして出来たものは決して純正なる芸術品とは言はれない」という立場から、「自分等にも病ひがあるから能く分るが、一日も早く日本人の個人が建設したい。影響を受けるのは仕方がないが、無意識の間に外国を顧慮して居ては仕方ない」（下線は筆者）[30]ことを強調し、当時の文壇に横行している「嘘の芸術」を批判し、「本統の人間」の「シンセリティ」に基づいた「作品」の創造を主張している。[31]

このように、「個人」の自由な思想に基づく自由な表現行為の自覚だけではなく、その「詩人」が自己の詩的活動の根拠にする思想や理念そのものも自己によって確立されなければならないとする、先鋭な詩的行為の主体性に対する意識を持っていた高村光太郎は、「未来派宣言」に顕著に表れているような詩で謳うべき表象の新奇性、例えば、自動車、機関車、飛行機、大工場、兵器工場などといった近代文明の所産を詩の中で取り上げることの斬新さや、さらには、それを表現するための方法としての「自由詩」（'le parole in libertà'）[32]など、未来派の「詩」の表現

30　高村光太郎「純一な芸術が欲しい」、『高村光太郎選集』第1巻、255頁。

31　前掲書、254-59頁。

32　この時点においてマリネッティは、本国のイタリアにおいても、まだ「自由語」という未来派の詩的方法に関わる概念を規定してはいなかった。

内容と表現方法に対して眼を奪われることはなかった。というのも、そうした未来派の「詩」に対する認識は、未来派、特にマリネッティの「個人」の思想に拠ったものであり、高村光太郎自身の「個人性」や「独創」に基づいたものではなかったからである。

しかし、それにもかかわらず、高村光太郎が、詩人マリネッティやイタリア未来派に関心をもったのは、彼らを突き動かし彼らの行為を芸術的活動ならしめている中心思想に惹かれたからであろう。つまり、高村光太郎は、イタリア未来派の中心思想「精力主義」のなかに、光太郎の言葉で言えば、「其の人から絞り出された」何かを、「其の人に取つて絶対的のもの」である何かを、「其の人間の底を叩いた芸術」の根拠になりうるものを見出し、そこに自らが考えていた理念と類似したものを感得したと考えられる。[33]

「いまーここ」を生きる芸術家は、過去の芸術家あるいは芸術作品に抑圧されることは確かである。画家や彫刻家は、過去の作品が収集された「美術館」や、アカデミズムと権威と伝統によって規定される「『美術的』」規範に抑圧される。詩人は、過去の詩によって、過去の書籍が収集された「図書館」によって、圧迫される。このような過去芸術の規制や抑圧の下に、詩人あるいは画家は、「消極、追懐、暗涙、卑怯、怠慢、単調、固着」といった非主体性を身につけ、マリネッティの表現を借りれば、「遺体が不気味に混在している」「美術館、図書館、アカデミー」に毎日足を運ぶ。[34]　また、高村光太郎の言葉で言えば、そうした詩人たちは、「幾枚も幾枚もの仮面を懐ろに入れて、［……］其の仮面を一枚づつ取り出しては被つて見せ」るような「計られた」作品を創り出す。[35]　高村光太郎は、「未来派宣言」の背後に存在する「あらゆる羈絆」に束縛されているイタリア未来派の芸術的行為を、「個人」に基づく芸術行為そのものが自覚されずに、詩人「個人」としての理念も、それに基づいた詩的行為も、抑制されていた当時の日本の芸術的

33　高村光太郎「純一な芸術が欲しい」、『高村光太郎選集』第１巻、258頁。

34　F.T. マリネッティ「未来派創立宣言」、前文。

35　高村光太郎「純一な芸術が欲しい」、『高村光太郎選集』第１巻、258頁。

行為の現実に照らし合わせて、日本における芸術家の「個人」に基づく芸術的行為の確立と、日本の土壌に存在する旧い芸術行為の体質の変革を同時に行うことによって、新しい芸術的行為の基盤を獲得しようとしたと考えることができる。そして、高村光太郎は、特に、旧い日本の芸術的体質を変革するための「攻撃性」の根拠をマリネッティの「精力主義」に看取している思われる。

ところが、高村光太郎が関心を寄せる「精力主義」に潜んだ「攻撃性」は、当然、人間主体の芸術的行為を含めたあらゆる行為と結びついた場合、暴力的な行為となって現れ得る。そうした行為が、芸術の領域内で行われた場合、それは、芸術的体質の変革や、過去の規範の破壊、アカデミズムと権威に対する激しい批判などとなって体現されるが、一旦それが、社会的な政治的なレベルと結びつくと、アナーキスティックな行動となって現れることになる。イタリア未来派の場合、この後者の点に関する行動も含めて、「精力主義」的であったことは明らかである。高村光太郎が、この「精力主義」が社会や政治に結びついたイタリア未来派の側面に対してどのような見解を抱いていたのかということについては、先に引用した文面からは、はっきりとは窺うことはできない。しかし、芸術の領域におけるイタリア未来派の過激な行動を支えている「精力主義」が、「戦闘は世に唯一の廓清剤である」という理念やトルコ戦争（1911年9月－1912年10月）などへの実際の「攻撃的な」活動に結びついていく可能性があることを、あるいは愛国主義やそれに相反するように思われるアナーキズムの理念などに結びついていく可能性があることを、高村光太郎は認めていたと思われる。

評論「未来派の絶叫」からの先の引用部分は、以上説明してきたように、未来派の中心的な思想に関して説明している箇所であるが、ここで重要なのは、高村光太郎がイタリア未来派の本質である「精力主義」に関しては大きく惹かれているものの、その理念が有している「攻撃性」を人間主体のあらゆる行為に適応させた未来派の具体的な諸活動については批判的な見解を持っていた、ということであろう。

次の引用では、そうした「精力主義」の負の側面が現れている未来派の活動に対して、高村光太郎は批判的にイタリア未来派を説明している。

彼等は斯くて、追慕の詩人、過去に対する熱情家、豊麗なセンチメンタリストであるダヌンチヨに反抗する。月夜情調の情人、象徴派詩人とも手を切るに至る。ポオ、ボオドレエル、マラルメ、　ルレエヌ等は今日彼等の憎悪する所である。フオガツアロに至つては問題にならぬと言つてゐる。ニイツチエの如きも其希臘趣味によつて彼等に嫌はれてゐる。そして彼等はゾラ、ホイツトマン、アダム、ミルボオ、カアン、　ルハアレンを喜ぶ。　ニスの市民に寄せた彼等の宣言書は最も明らかに彼等の言はうとする所を言つてゐる。考えてみると　ニス程彼等と反対な趣味に立つてゐる所はないに違ひない。「未来派」画家連の主張については機会があつたら又述べる。唯凡ゆる伝統に反抗する一手段として、彼等は今後十年間決して裸体画を画かぬといふ不思議な盟約を結んでゐる事だけでも、如何に其の気違じみてゐるかが解るだろう。其作画は素より多彩で、餘色主義（コンプレマンタリスム）である。此派の音楽も亦多音で、従来にない諧調と対音とで成つてゐる。彼等は旋律とは諧調の合成と見なければならぬと言つてゐる。自由詩と同様に其の節奏も亦自由節奏（リズム　リイブル）である。[36]

ここで、高村光太郎は、「精力主義」を中心思想とする未来派詩人の行為に表れる「趣味」と方法、そして未来派画家の具体的な方法意識について説明している。特に、未来派画家の方法に対し、高村光太郎は「唯凡ゆる伝統に反抗する一手段として、彼等は今後十年間決して裸体画を画かぬ」という約束事を例に挙げ、それを「気違いじみてゐる」と形容するほどの否定的な感情を抱いている。しかし、こうした高村の批判的な見解は、今まで説明してきたような未来派の中心思想である「精力主義」そのものに起因するものではなく、芸術の理論として先に提示し、その後に実践を行うといった未来派の芸術行為の発想から来ている。こうした批判的

36　高村光太郎「未来派の絶叫」、『高村光太郎全集』第８巻、5頁。

な見解の背景には、あくまでも芸術の実践の中で自己の芸術の理念を獲得・確立していこうとする主体的な芸術的行為あるいは詩的行為への光太郎の強固な信念が存在しているように思える。そして、この信念は当然、「主義」と名の付く芸術運動に対する大きな不信の感情を高村光太郎に抱かせるものである。この点に関して、高村光太郎は、談話筆記「純一な芸術が欲しい」の中で、次のように述べている。

> 其の点から主義などは悪い。平面描写なども非常に悪い言葉だ。そんな風なものを拵へて、それに当て嵌めて製作して行くなどは、芸術家として間違つたことだ。ネオロマンチシズムなどでも、それ自身が自然とさう言ふ風になつたのなら好いけれども、計られてなつたのでは厭だ。[37]

こうした見解を持っていた高村光太郎が、未来派画家の「今後十年間決して裸体画を画かぬ」といった「盟約」の中に、「計られた」ものを、芸術家の「嘘」の部分を見出したのは当然であろう。もっと広く考えれば、「未来派宣言」や「未来派画家宣言」などから明らかになるような、先に規定された「理論」に基づいた「実践」を特徴とする未来派の芸術活動とそこから生まれる作品に対して、一種の限界を感じ取っていたのではないかと思われる。しかし、それにもかかわらず、未来派の活動の根源になっている「精力主義」に対しては、高村光太郎は関心を惹かれ続けるのである。そのことは、評論「未来派の絶叫」の最後に付け加えられた、イタリア未来派に対する次のような言葉から読みとることが可能であろう。

> 以上は彼等の宣言の要点であるが、此があの羅馬やフイレンツエを有つてゐる伊太利から起つた絶叫としてみると、私は不思議な面白い意味を、其浅薄の難を免れない過激な言語の間からも聴取しないではゐられなかつた。[38]

37　高村光太郎「純一な芸術が欲しい」、『高村光太郎選集』第１巻、257頁。

38　高村光太郎「未来派の絶叫」、『高村光太郎全集』第８巻、５頁。

ここで明らかになることは、未来派の主張の中には、前の部分で指摘したような「気違じみてゐる」ものが存在しながらも、一方では、そこに聞くべき「絶叫」があると高村光太郎が考えていることである。この聞くべき「絶叫」とは、前述した当時の日本の芸術的風土に深く関わる「絶叫」であり、換言すれば、「個人」に基づいた自由な芸術的行為が確立されずにいる日本の芸術家たちの「絶叫」と考えてよいであろう。

以上、高村光太郎のイタリア未来派に関する評論「未来派の絶叫」を具体的に分析してきたわけであるが、高村光太郎の未来派に関する認識の特徴をここで整理しておくならば、次の２つの点に要約できるであろう。まず注目すべき第一点目は、高村光太郎が、「未来派の絶叫」を、当時まだ「個人」の思想や理念に基づいた自由な表現活動が不確立の状態であった日本の芸術的・詩的風土に生きていた創作主体の悲鳴、換言するならば、そこで創作活動を行わざるを得なかった芸術家や詩人たちの「絶叫」と、重ね合わせて聞いているという点である。　特に、詩人「個人」の自由な「理念」に基づく自由な詩的行為という視座が含まれるこの視点は、後にヨーロッパの前衛詩運動の様々な「理念」を自己の「理念」として取り入れ自由な詩的活動を行う日本モダニズム詩に必要な視点であることは確かである。

第二点目は、そうした自由な表現活動を前提にして、さらには、詩人「個人」と「思想」との主体的な関係に対する先鋭な意識から、「理念」そのものを非主体的に受け入れて行う未来派詩人や芸術家たちの芸術的行為に対して、批判的な見解を示した点である。非主体的に理念を受け入れ、詩的行為を行うことを批判する視点は、自由に理念そのものを自己の中に取り入れるという前提を含んでいる点において、日本モダニズム詩自身の問題となってくることは確かであるが、そうした詩人「個人」の「思想」と詩的主体との主体的な関係は、その後、議論が必要であったにもかかわらず、議論されることはなく、その詩人の主体性の問題が本格的に議論されるのは、第二次大戦後の「荒地」派詩人によるモダニズム詩批判まで待たなければならなかった。

（４）

大正期に入ると、明治末期の「時代閉塞」の状況の中で明確に自覚された「個人」の「思想」や「理念」に基づく詩的行為は、自由主義的な昂揚と個人主義的な雰囲気の中で、確固たるものとして確立し、以後、日本の詩領域における詩意識は多彩で豊富な展開と分化を示すことになる。支配的な文学の理念、暗く重くのしかかる社会制度や政治体制など、今まで詩人の「個人」に基づく詩的行為を抑制していたものが変革を促され、大正期の詩人たちは、個人の「信条」に基づいて詩的行為を行えるようになっていった。そして、そうした解放された雰囲気の中で、第一次大戦（大正3年－7年）前後の西欧の前衛芸術運動の諸理念を自己の詩的理念として詩人「個人」の中に取り入れ、それに基づく詩的行為や創造行為に生の充足を覚える若手の詩人や新進の芸術家たちが登場することになる。後に、大正後期の日本の前衛芸術運動や日本モダニズム詩の黎明期に中心的役割を果たす者たちである。こうした詩人「個人」の自由な詩的行為が確立された新しい詩的・芸術的風土の中で、イタリア未来派を含め様々な西欧の前衛詩運動の諸理念に関する紹介や移入は加速度的に速まっていったと言うことができるかもしれない。ここでは、日本モダニズム詩の発生に至るまでの西欧の詩意識の移入を、今までと同様にイタリア未来派を中心に検討していくことにする。

最初に、イタリア未来派などの西欧の新しい芸術動向を積極的に受け入れ、それを自らの「信条」として創造行為に結びつけようとしたのは、日本の新進の洋画家たちであった。明治４０年前後には、画家のヨーロッパ留学が盛んになり始めるが、当然、それに伴って、日本の画家たちの西洋への関心は深まることになる。その当時の状況を、特に未来派移入の観点を中心に茂田真理子は、次のように説明している。

「新しいもの」を求める新進画家たちが訪れたのは、印象派のフランスであっ

た。すでに一つの流派として価値を認められた印象派も、日本の洋画家たちにとっては未だ新鮮なものであり、イタリアとは違ってフランスを訪れた彼らの目は、印象派のもたらした「新しいもの」に対して開かれていた。そこで初めて未来派受容のきっかけが生まれたということができる。一九一二年のパリにおける未来派展である。印象派理解の途上にあった日本の芸術家たちが即座に未来派を十全に把握できたとは考えにくいが、しかしその「新しさ」は明白であり、奇妙な運動だとしても、とにかく自国に伝えるべきものとして認知されたのである。このときから未来派への論及が見られるようになる。[39]

この茂田真理子の言及から、大正期に入って新しく開けた日本の芸術的展望のなかで、如何に、印象派や未来派などの西欧の芸術の理念や方法を芸術家たちが希求したのかは容易に理解できるであろう。

ここで重要な事柄は、日本における詩的・芸術的土壌の変化によって、こうした「新しいもの」への希求が高まり、最終的には、日本の芸術家たちの創造行為に対する一つの態度を形成していったという点である。その態度は、何も、画家などの芸術家に限らず、日本の詩人たちにも窺うことができる態度であると同時に、それは、昭和期の前衛詩人やモダニズム詩人にも引き継がれていく態度であると思われる。

その態度とは、西欧から伝えられたり、あるいは直接西欧から持ち込まれた詩や芸術の「理念」と「方法」を非主体的に「個人」の中に取り入れ、特に「方法」をより重視し、それを理論化することによって、それらを自らの創作の根拠とし、それに基づいて創造行為を行うといった創作態度であった。このことは、以後ますます活発になる西欧の前衛芸術運動に対する熱狂的とも言える理論的関心によって示されるものである。

しかし、西欧出自の詩の理念と方法に基づくこうした創造行為には、先に言及し

39　茂田真理子『タルホ／未来派』（東京、河出書房新社、1997年）、51-52頁。

た高村光太郎が提示した詩人の「主体性」の観点から見れば、当然、その「新しいもの」としての理念や方法を芸術主体の個々の「純粋な」信念と照らし合わせ、批判的に「新しいもの」を取り入れるといった主体的な苦闘が必要になってくるはずである。つまり、そうした創造行為は、印象主義にせよ未来派にせよ、それが自己の創造行為に対する「純粋な」信念とどのように関わり、どういった意味を持つのかという反省的な思考を要求するものである。というのも、こうした主体的な反省なくしては、創作主体の内面は、その活動の根拠を西欧から取り入れた理念や方法だけにしか頼らなくなるのであり、自己の「純粋な」信条は空白化し、詩的主体と詩の「ことば」との密接な主体的な関係が希薄化していくことになるからである。それ故に、西欧の新しい詩意識を「個人」の「理念」として取り入れ、それに基づいて詩人が行う詩的営為は、その詩精神に対する主体的で批判的な検討を要するのである。

ところが、「新しいもの」をより速く取り入れ、それに基づいて創造的行為を行うといった「同時性」の概念や「現在的なもの」を「過去のもの」よりも重視するといった立場に後押しされた場合、そうした主体的な、批判的な行為は、時間のかかるものとして省略されることは明らかである。そして、それは、「新しいもの」が、日本の文学や芸術における創造行為に如何に結びつくのかといった、実験的精神を擁護し、そのための理論的構築を目指すことになる。当然のことながら、その理論は西欧のすでに出来上がった「前衛的」作品から教訓を得ようとする。これら「前衛」作品のひとつひとつが、「未来主義とは何か」あるいは「立体派とは何か」という問いに対する具体的なひとつの答えとして受けとめられる。このようにして、西欧の実作品と方法を重視した態度が生まれるわけである。新しい日本の詩的・芸術的風土の中で、こうした西欧出自の芸術の理論と方法に対する態度を形成しながら、大正期には、本格的なイタリア未来派の移入が行われていくのである。

イタリア未来派の日本における移入の中でも、絵画の領域における活動は、西欧前衛芸術運動の日本への熱狂的な移入を促していった。例えば、日本における最初の本格的なイタリア未来派の紹介を行った新興美術団体フュウザン会のメンバーで

あった木村荘八の著作、『芸術之革命』（大正3年）と『未来派及立体派の芸術』（大正4年）。大正6年前後に東郷青児や神原泰などが東京美術学校中心の官展・アカデミズム主流の絵画状況に挑戦して、二科展に出品した未来派的絵画の作品群。[40] あるいは、後に大正12年にブルリュークとの共著『未来派とは？答える』を出版することになる木下秀一郎や、普門暁などを中心とした未来派美術協会が銀座の玉木楼上で主宰した「第１回未来派展覧会」（大正9年9月16-25日）。さらには、大正9年10月にドイツ、フランスを経て日本に亡命してきたブルリューク、バリモフ、フェアラなどのロシア未来派の絵画作品500点あまりを展示した展覧会「ロシア未来派展」など、大正期はまさに日本の絵画の領域における「未来派」との関わりが強く意識された時期であった。こうした大正期の絵画の領域で起こった「流れ」を支えていたものとして、二つの大きな日本側の要因が考えられる。その一つは、東郷青児やブルリュークに象徴されるように、実際に西欧の「未来派」に接触を持ったということである。そして、さらに大きな要因の一つは、多くの実作品の紹介が理論や宣言とともに日本へ紹介されたという点であろう。こうした二つの要因に支えられながら、理論先行型の実践が大正期には盛んに行われるようになっていったと思われる。

大正期の前衛詩運動に関わっていく詩人たちも、やはり同様の理論的熱狂によって、その理論を摂取し、それに基づき詩的行為を行っていくという傾向がみられる。前衛詩における神原泰の詩なども、そのような詩作行為によるものの一例である。

神原泰（1898-）は、日本の大正期の芸術領域において、若き詩人としてかつ新鋭の画家として、第一次大戦前後に西欧で展開されていた前衛芸術運動、特に未来

40　この作品群には、具体的には、東郷青児：「バラソルさせる女」（大正５年第３回二科賞を受賞）、「狂ほしき自我の跳躍」、「静けき街の律動」、「石井漠のおどり」（以上３作品は大正６年第４回二科展に出品）「拒絶されたる観念」（大正７年二科展に発表）、神原泰：「麗はしき市街、おゝ複雑よ、いらだちよ」（大正６年第４回二科展に入選）、「工場に於ける或る労働者の心理」、「自我の分裂」（以上２作品は大正７年二科展に発表）が含まれている。

派や立体派の理念や方法に、いち早く自己の表現の可能性を見出し、自らの理論的活動においてそれらの統一的整理を行い、自己の立論を自らの創造行為の根拠としていった。中央大学商科卒業後、アテネ・フランセでフランス語を学び、さらに東京外国語学校専科でイタリア語を学んだ神原は、大正4（1915）4月の美術誌「美術新報」に掲載された有島生馬によるU.ボッチョーニ（Umberto　Boccioni）の翻訳である「印象派から未来派へ」[41]を通して、イタリア未来派の存在を知った。そして、A. グレーズとJ. メッチンガの共著 *Du Cubisme* (1912) やG. アポリネール (Guillaume Apollinaire）の *Les Peintres Cubistes* (1913) から、西欧前衛芸術の思想と方法をめぐって鮮烈な衝撃を受け、以後、自らの理論的な活動を通じて、それらの思想と方法を認識しようと試みた。この理論活動を通じて自らが構築した立論に基づいて創作した詩作品や絵画作品を、神原は、大正6（1917）年頃から、積極的に発表するようになる。ちなみに、大正6年といえば、神原は１９歳の青年であった。

このように神原自身が獲得した理論に基づいて創り出した最初の詩は、大正6年8月の文芸誌「新潮」に発表された詩作品「疲労」である。この詩の特徴は、神原自らがその詩作品「疲労」を「後期立体詩」として提示している点にある。「疲労」という詩のタイトルの下に、括弧付きで記された「後期立体詩」という補足事項に、本題である「疲労」以上の意味を読みとることができるかもしれない。「後期立体詩」、「未来派的詩」など、「・・・主義的詩」とか「・・・主義詩」といった自己の詩的行為の理論的な基盤を明らかにするような補足事項を詩の主題に付加して、自己の詩作品を提示する仕方は、後に神原泰が構築した詩的行為の理論的基盤に直接的な影響を受けることになる平戸廉吉にも見られるものである。そして、このような詩作品の提示の仕方には、実は、詩作品を発表する詩人たちの詩作品そのものと詩的行為に関わる本質的な性格が反映されている。

41　U.ボッチョーニの1914年の著作 *Pittura sculurafuturiste, Dinamismo plastico*（『未来派絵画、彫刻論・造形的力動主義』）の中の一節の翻訳。

神原泰が詩作品「疲労」を「後期立体詩」として提示したことは、単純に考えれば、その詩の主体が、自己の理論化した「後期立体」派の立論に基づいて詩作品を創造したことを告白しているということである。しかし、こうした告白は、逆に考えれば、詩の主体が紡ぎだしたことばが、それだけでは詩として自立せず、ことば以外の何か別な根拠がなくては詩にならない、ということを意味している。つまり、それは、詩人の紡ぎだしたことばや作品そのものの脆弱性を示すだけでなく、詩の主体の詩的行為そのものの根拠の脆弱さをも同時に暗示しているのである。そして、こうした詩の脆弱性の背景には、自己の純粋なことばを紡ぎ出すという一見単純だが最も本質的な詩的行為に対する認識、あるいは詩の実践が本来有している人間的な意味の認識が欠如しているのである。それでは具体的に、神原泰が「後期立体詩」と補足事項を付けた詩作品「疲労」をみてみよう。

むらさき
赤、黄、藍、緑
煙突、車、ピストン
凡ての動くもの、走るもの、止まる所のもの
感情の尖点よ、知識の尖点よ、而し、欲望の尖点よ
△
我疲れぬ
いたましき神経の逼迫に
意志と官能との類ひなき争闘に
歩み、疲れ
かつ歩む
△
あるものは須臾なる生を賢しげなる享楽に
あるものは己れ自らの燃焼に
あるものは大いなる本能のために

－歩み、あへぎ、疲れ、歩む。42

「疲労」というこの詩のタイトルとは対照的に、この詩の中で謳われ、賞揚されているのは、「疲れぬ」「我」であり、「歩み」続ける自己の姿である。ある人間は「須臾なる生を賢しげなる享楽」のために、ある人間は「己れ自らの燃焼」のために、さらにある人間は「大いなる本能」のために、自らの生を生き、その中で苦悶し、疲労するが、それでもその生を止めずに生き続け、前進する。そうした人間の「生」に対する一種の讃美がこの詩の根底にはあることはすぐに読みとれることである。そして、あらゆるものの「尖点」を求めて前進する「生」の力動的で能動的な側面を、神原は、「生」の消極面である「疲労」をテーマにすることによって浮き彫りにしようとする。こうした「生」の力動性を神原は、「むらさき／赤、黄、藍、緑」といった原色の混濁や、平仮名と漢字の混交によって表現する。さらには、そうした力動性を体現している「人間」のアナロジーを、機能性や完全性を体現している「機械」ではなく力動性を体現している「機械」、すなわち、もくもくと煙を上げる「煙突」や速いスピードで走る「自動車」、その内部で活発に動いている機関である「ピストン」の中に求める。

この詩を「後期立体詩」と評して提示している限り、当然、この詩には、神原の「後期立体」に対する理論が根拠として存在している。しかし、この詩に、そうした理論的基盤以外の何か別な根拠を求めるとしたならば、それは、人間の「生」が有している能動性や力動性への詩人神原自身の目覚めであり、その目覚めによって引き起こされた能動的で創造的な精神の昂揚であろう。日常生活における現実的な状況に束縛されることによって、人間たちは、「あへぎ」ながら徐々に主体性を奪い去られ、「疲れ」果てている。しかし、人間は、そうした状態から先に一歩、前進できる力をもっているのだ、といった人間の根本にある能動性への自覚は、当時、創造という行為には目覚めてはいたものの、まだ確固たる創造に対する自己の

42　神原泰「疲労」。神原泰の詩作品に関しては、古俣裕介『＜前衛詩＞の時代－日本の1920年代－』（東京、創成社、1992年）に掲載されているものを参照した。14頁。

信念を確立できずにいたと思われる１９歳の神原に、自己の中に存在する能動的な創造力に対する自覚を生じさせたと思われる。そして、この能動的な創造力に対する自覚が、実は、神原をイタリア未来派などの理念や方法を対象とした積極的な理論的活動へ向かわせたものなのである。つまり、イタリア未来派に接した若き詩人神原が、自己の感性によって最初に賦活させたのは、詩の主体に内在する能動的な創造力なのであり、神原の詩作品「疲労」には、彼の理論的活動を支えていたこのような実存的な基盤が、神原の言う所の「後期立体」という理論的基盤の他に存在している。そうした自己の実存的な基礎にこの詩が成り立っている限り、この詩は、確かに、「後期立体」という理論的基盤を強調してはいるが、神原自身の思想と詩的ことばとが結びついている。しかし、この「疲労」において確認されているこうした理論的基盤以外の、実存的な詩の根拠は、それ以後に続く詩作品では消えていくのである。

赤、黒、黄、藍、緑
自動車、カフェー、パラソル
色、光、リズム、雑音－此等凡てエゴイストの華美よ
流動し合一し旋転す今－真昼
　　△
偉大なる騒音！
太陽は空間を越えてひた走るリズムの象徴
眼に映ゆるものは皆融け
わめきわななく
－狂はまほしき悶よ
　　△
赤よ、黄よ、されば褐色よ
鋭角よ、鋭角よ、されば真昼よー　[43]

43　神原泰「真昼の市街」、前掲書、16頁。

詩作品「疲労」が発表された翌月、大正6年9月に文芸誌「ワルト」に掲載された「真昼の市街」と題するこの詩の中で、神原は、詩作品「疲労」で確認した主体に内在する力動的な創造力を遺憾なく発揮するために、自己を「エゴイスト」と名乗り、自己の理論的活動で獲得した世界観や詩的方法に合わせるように、客体としての「真昼の市街」を構造化している。詩作品「疲労」の中で自己と世界との同時的開示であった詩人神原の「ことば」は、詩作品「真昼の市街」では明らかに変質し、神原自身の理論的基盤を提示するための口実になっている。しかし、このように変質した「ことば」で詩作品を創作することが詩の主体に全く意義を与えないわけではない。作品を意欲的に創造したいという詩の主体の願望に、こうしたことばが結びついたとき、それは世界を自己の世界観によって書き直すといった一種の全能感的な満足というものを詩人に与えるであろう。

絵画の領域において創作行為の基盤として受け入れられた未来派などの新興芸術の精神は、画家兼詩人でもある神原泰によって、大正後期には詩の領域へと拡げられていったのであるが、未来派の信条や詩法が純粋に詩の領域の問題として考えられるようになったのは、神原泰の影響を受けた平戸廉吉以降であるように思われる。詩人、平戸廉吉は、1921（大正10）年の暮れ、日比谷公園の街頭で「日本未来派宣言運動　東京＝平戸廉吉　MOUVEMENT FUTURISTE JAPONAIS Par R-HYRATO」と題したパンフレットをまいた。まさに未来派の提唱するパフォーマンス的な要素を多分に含んだ平戸廉吉の行為は、詩の領域における未来派の最初の本格的反映であったという点において、重要視されているものであり、日本における現代詩あるいはモダニズム詩の起点として認識されているものでもある。

「日本未来派宣言運動　東京＝平戸廉吉」において自らを「マリネツテイに負ふ所多き者」と平戸廉吉自身が言明するとおり、このパンフレットは、マリネッティの主張、特に1913年の「無線想像力と自由な状態のことば」（'Distruzione della sintassi– Immaginazione senza fili– Parole in libertà'）をなぞったかたちでの詩

の実現を目指したものであった。[44]　この宣言に対応させて、平戸廉吉は、『日本詩集1922版』[45]に「一九二一年に於ける我新詩運動の四種の展開」を発表した。この作品は、以下のような「主義」を提示した４つの項目の下に、それぞれいくつかのその主義の提唱する方法に基づいて書かれた詩作品が並んでいるという構成になっている。

（Ⅰ）時間的未来派の詩

（Ⅱ）空間的立体詩

（Ⅲ）第四側面の詩

(FUTURISME+CUBISME=DADAISME=EXPRESSIONISME)

（IV）後期表現派又はアナロジズムの詩

(IMAGISME+EXPRESSIONISME=ANALOGISME

＝寫象と内象の完全なる同一主義　[46]

平戸廉吉がこの作品の詩作行為によって求めたことは、西欧の様々な芸術運動、具体的には、未来派、立体派、ダダイズム、イマジズム、後期表現派、などを把握し、その理論の実験的な実践として、或いは、それらを組み合わせることによって自ら打ち立てた「同一主義」という理論にあわせた実践として、詩を書くことであったと思われる。このような構成や、詩作行為には、神原泰の影響が明らかに見て取れるが、より重要なことは、ここで平戸廉吉が、西欧の芸術の「主義」を並列

44　平戸廉吉の「日本未来派宣言運動　東京＝平戸廉吉　MOUVEMENT FUTURISTE JAPONAIS Par R-HYRATO」については、日本近代文学館刊、名著復刻全集編集委員会編、名著復刻『詩歌文学館』：平戸廉吉『平戸廉吉詩集』、平戸廉吉詩集刊行会版（東京、ほるぷ、1981年）の巻頭に掲載されているパンフレット縮図を参照した。

45　『日本詩集』（全8冊）は、日本詩人会の編集によって、大正7（1918）年から大正14（1925）年、年刊アンソロジーとして、新潮社から出版された詩集である。

46　平戸廉吉『平戸廉吉詩集』、104-18頁。

させていることの意味である。通常、「主義」という言葉を口にするとき、その主体における主たる思想的立場を表明するものであろう。しかしながら、様々な主義を掲げ、それに沿ったいくつかの実験的作品を並べた「一九二一年に於ける我新詩運動の四種の展開」における「主義」は、全く、平戸廉吉自身の詩を書く主体の生きる立場、つまり、思想と関連していないものなのである。要するに、それは、平戸廉吉の主体の中に様々な「主義」が同時存在することが可能な理念であったのである。このことが意味しているのは、「主義」というものが、人間の生きる主体とは全く関係のないものとして、方法論的な立場にすぎないものとして捉えられているということである。このことを逆に考えるならば、この詩に現れている詩の「ことば」は、詩の主体である詩人の内面から発するものである以前に、方法論的な理論に捕らわれたものであるといえるであろう。

（５）

さて、これまで、日本の明治末期、大正期におけるイタリア未来派の日本への移入状況を具体的に考察しながら、日本の詩意識の変遷を辿ってきたのであるが、その中で、日本におけるモダニズム詩運動と戦後の「荒地」派によるモダニズム詩批判を考えるに当たり重要になってくると思われる点をここに要約すると、次のようになるであろう。

1909（明治42）年5月に発表された森鴎外の「未来派宣言」の記事の翻訳紹介を起点として、以後、様々な経路を通じて、イタリア未来派だけでなく、第一次大戦前後のヨーロッパに興った前衛詩運動の指導理念に基づく詩意識が、日本に徐々に移入され、1921（大正10）年12月の平戸廉吉によるパンフレット『日本未来派宣言運動　東京＝平戸廉吉』に至るまでに、日本モダニズム詩の基盤が形成されていった。1909年5月から1921年12月までと定めることができる日本モダニズム詩

が成立するための準備期間の中で、特に重要だと思われるのは、その最初期に当たるイタリア未来派の移入の期間であった。森鴎外による「未来派宣言」の翻訳紹介（1909年5月）から、イタリア未来派に言及したものとして鴎外に継いで次に早い文献とされている高村光太郎の評論「未来派の絶叫」が発表される1912年3月までの約３年の空白期間は、その後のイタリア未来派の移入だけではなく、大正期において続々と移入されてくるヨーロッパ出自の詩意識を日本の詩的土壌に根づかせるために必要な作業が、特にその後イタリア未来派に興味を示すことになる日本の詩人たちを中心に為された重要な期間であった。

この期間に行われたことは、特に文芸雑誌「スバル」に関わった若手の詩人たちが、自らの「詩を書く」行為を抑制している存在と「敵」と見なし、それらに反抗することによって、「個人」の「思想」や「理念」に基づく自由な詩的行為を自覚しそれを獲得しようとしたことであった。こうした「個人」が信望する「思想」や「理念」に基づく自由な詩的行為への自覚は、後に、様々な経路を通じて日本に伝えられる第一次大戦前後に興った前衛詩運動の詩の理念や思想を、「個人」の詩の理念として取り入れ、詩的行為を行っていく日本モダニズム詩には欠かすことのできない基盤であった。

このように「個人」の「理念」に基づいた詩的行為を自覚した若き詩人たちは、森鴎外のイタリア未来派の翻訳紹介以降途絶えていたヨーロッパの詩意識、特にイタリア未来派の詩の理念を徐々に「個人」の思想や理念として取り入れ始め、以後徐々に本格的な西欧の詩意識の移入が始まっていくことになるのである。

その中でも特に重要な位相として捉えられるのは、高村光太郎のイタリア未来派に対する認識である。高村光太郎の未来派に関する認識の特徴は、まず、光太郎が、「未来派の絶叫」を、当時まだ「個人」の思想や理念に基づいた自由な表現活動が未確立の状態であった日本の芸術的・詩的風土に生きていた創作主体の悲鳴、換言するならば、そこで創作活動を行わざるを得なかった芸術家や詩人たちの「絶叫」と、重ね合わせて聞いているという点にあった。高村光太郎の未来派に関する認識のもう一つの特徴は、自由な表現活動を前提にして、さらには、詩人「個人」

と「思想」との主体的な関係に対する先鋭な意識から、「理念」そのものを非主体的に受け入れて行う未来派詩人や芸術家たちの芸術的行為に対して、批判的な見解を示した点にあった。この後者の視点は、詩人「個人」の自由な「理念」に基づく自由な詩的行為、すなわち後の日本モダニズム詩の基盤になるものを前提にしている点で、日本モダニズム詩自身の問題として考えられなければならないものであるが、そうした詩人「個人」の「思想」と詩的主体との主体的な関係は、その後、議論が必要であったにもかかわらず、議論されることはなく、その詩人の主体性の問題が本格的に議論されるのは、第二次大戦後の「荒地」派詩人によるモダニズム詩批判まで待たなければならいことは留意しておく必要がある。

大正期に入ると、明治末期の「時代閉塞」の状況の中で明確に自覚された「個人」の「思想」や「理念」に基づく詩的行為は、自由主義的な昂揚と個人主義的な雰囲気の中で、確固たるものとして確立し、以後、日本の詩領域における詩意識は多彩で豊富な展開と分化を示すことになった。支配的な文学の理念、暗く重くのしかかる社会制度や政治体制など、今まで詩人の「個人」に基づく詩的行為を抑制していたものが変革を促され、大正期の詩人たちは、個人の「信条」に基づいて詩的行為を行えるようになっていった。そして、そうした解放された雰囲気の中で、第一次大戦（大正3年－7年）前後の西欧の前衛芸術運動の諸理念を自己の詩的理念として詩人「個人」の中に取り入れ、それに基づく詩的行為や創造行為に生の充足を覚える若手の詩人や新進の芸術家たちが登場することになる。後に、大正後期の日本の前衛芸術運動や日本モダニズム詩の黎明期に中心的役割を果たす者たちである。こうした詩人「個人」の自由な詩的行為が確立された新しい詩的・芸術的風土の中で、イタリア未来派を含め様々な西欧の前衛詩運動の諸理念に関する紹介や移入は加速度的に速まっていったと言うことができるかもしれない。しかし、ここで重要な事柄は、日本における詩的・芸術的土壌の変化によって、こうした「新しいもの」への希求が高まり、最終的には、日本の芸術家たちの創造行為に対する一つの態度を形成していったという点である。

その態度とは、西欧から伝えられたり、あるいは直接西欧から持ち込まれた詩や

芸術の「理念」と「方法」を非主体的に「個人」の中に取り入れ、特に「方法」をより重視し、それを理論化することによって、それらを自らの創作の根拠とし、それに基づいて創造行為を行うといった創作態度であった。このことは、以後ますます活発になる西欧の前衛芸術運動に対する熱狂的とも言える理論的関心によって示されるものである。

こうした態度は、「荒地」派詩人たちが戦前において積極的に参加することになる、昭和初頭の詩誌「詩と詩論」に始まる総合的なモダニズム詩運動以降にも顕著に表れてくるものである。次の節では戦前において「荒地」派詩人自身も傾倒することになるそうした日本のモダニズム詩運動について考察してみたい。

第１章第３節

日本におけるモダニズム詩運動

－詩誌「詩と詩論」以降の総合的モダニズム詩運動を中心に－

これまで、20世紀初頭の西欧における新興詩運動の理念と方法が、どのように日本の文学的風土に移入されたのかという問題を念頭に入れながら、明治末期から大正後期の日本モダニズム詩の起点に至るまでの日本の詩領域の詩意識の展開を、イタリア未来派の日本への移入の過程とこの期間に日本の詩が直面した問題を明らかにしながら考察してきた。この第３節においては、「荒地」派詩人の戦前の詩的活動に直接関わってくる、昭和初期の日本におけるモダニズム詩運動について、その大きな流れを形づくった詩誌「詩と詩論」の運動を中心にして、その流れの底流に存在する詩の認識と詩的行為に対する態度を考察していきたい。この節における考察は、本論文の第２章第２節で議論することになる、戦争責任論を基軸として戦後「荒地」派詩人によってなされるモダニズム詩批判の問題を検討する上で、不可欠な部分である。なぜ「荒地」派詩人が戦争責任論を通じて日本のモダニズム詩を痛烈に批判しなければならなかったのかという問題は、この節における戦前のモダニズム詩運動の考察と本章第４節における戦前の「荒地」派詩人の活動についての考察を踏まえることによって、より確かに検討できると思われる。

（１）

20世紀初頭に興ったヨーロッパの様々な詩の理念や方法に基づく日本モダニズム詩運動は、大正10年12月の「日本未来派宣言運動　東京＝平戸廉吉」を起点として始まるとされている。日本モダニズム詩の動きにおいては、ヨーロッパの第一次大戦前後に起こった未来派、ダダ、シュールレアリスムなどの前衛詩運動や、第一

次大戦後、特にイギリスやフランスで顕著になった主知的な傾向を有する文学の理念と方法が、詩人「個人」の詩の信条として自由に摂取され、それに基づく詩人の詩的営為を通じて、日本の詩的土壌に取り込まれ、以後多種多様に分化し分裂を繰り返していくことになる。つまり、西欧出自の様々な詩意識は、主に商業主義の支配下にない同人雑誌という自由な詩的行為の「場」での文学的・言語的実験を通して自由に育成され、日本の詩領域にそれらが総総と出現するわけである。

「荒地」派詩人という存在と彼らによって戦後為されたモダニズム詩批判という観点を踏まえて、昭和初期における日本のモダニズム詩を分析する場合には、特に、季刊詩雑誌「詩と詩論」を源泉とした総合的モダニズム詩運動の流れに注目すべきであろう。というのも、「荒地」派詩人は、その初期の詩的活動において、「詩と詩論」の流れに則するモダニズム詩運動と密接に関わっていたからである。

季刊詩雑誌「詩と詩論」は、昭和3（1928）年9月に、その「第１冊」が厚生閣書店から発行されて以来、当時の代表的な詩誌のひとつとなっていくと同時に、昭和期におけるモダニズム詩運動のひとつの起点をなしていくことになる。「詩と詩論」という雑誌名は、昭和6年12月に発行された「第１４冊」を最後に「文学」と改題されるが、「詩と詩論」の中核をなすモダニズム詩運動の精神は、「詩と詩論」が改題された雑誌「文学」（昭和7年3月－8年12月、全６冊）、「詩と詩論」以降の大きなモダニズム詩の流れとなった詩誌「詩法」（昭和9年8月－10年9月、全１３冊）、そして太平洋戦争勃発直後まで続いた詩誌「新領土」（昭和12年5月－17年1月、全５６冊）に継承され、昭和期におけるモダニズム詩運動の底流を流れるものとなっていくのである。

青年期における初期の詩的活動の場を求めた、若き日の「荒地」派詩人たちも、この戦前のモダニズム詩運動の流れと無縁ではなかった。昭和13（1938）年に鮎川信夫が、昭和15年、田村隆一が、そして翌16年、中桐雅夫、三好豊一郎が「新領土」に参加するほか、この「詩と詩論」からの流れの支流とも捉えることができ

る詩誌「LUNA」を、中桐雅夫が昭和12（1937）年12月に創刊した。この「LUNA」と昭和13年6月にそれを改題して刊行された詩誌「LE　BAL」は、鮎川信夫、森川義信、北村太郎、田村隆一などが次々に参加することにより、戦前の「荒地」派詩人たちを結集する場となっていった。さらには鮎川信夫、森川義信が早稲田大学の仲間と昭和15（1940）年、第一次、詩誌「荒地」[1]を創刊するなど、戦前における「荒地」派の空間がモダニズム詩運動の周辺に構成されていくのである。[2]

このように、戦前における「詩と詩論」からのモダニズム詩運動の流れに関わったかたちで、「荒地」派詩人たちは出会い、交流を深めていくことになるのだが、それでは何が戦後において「荒地」派詩人をモダニズム詩批判という立場をとるに至らせたのであろうかという問いを念頭に置きながら、ここでは「詩と詩論」の運動を中心に日本モダニズム詩運動の特徴を検討してみたい。

まずは、「詩と詩論」の成立に先立つ日本に於ける詩的状況について簡単に触れておこう。原崎孝は、大正末期から昭和初頭の日本における詩の動向を、大正期の「詩壇」を暗示する「詩話会」とその機関誌である「日本詩人」、社会主義・共産主義的な立場に立ち労働者の階級闘争と関わるプロレタリア文学、そして、ヨーロッパの同時代的な文学傾向に関心を寄せていた新鋭詩人たちによる小雑誌、という三つの要素によって象徴されるものであると捉えている。[3]　「詩と詩論」の創刊に当たり、その同人として名を連ねることになる詩人たちはいづれも、原崎の分類する三番目の要素に属する詩人たち、つまり、新しい文芸思潮を切り開こうとす

1　第一次「荒地」とは、戦前の1939年、臨戦状況下において、早稲田大学在学中の鮎川信夫と森川義信が中心となって発刊した雑誌である。その同人には、鮎川、森川の他に二宮桂景、桑原英夫、藤川清、冬村克彦、竹内幹郎、山野淑雄、白石豊、小池助男、三輪孝仁などがいた。この第一次「荒地」に対して、本論考で対象となっている1947年9月に創刊された詩誌「荒地」は、正確には第二次「荒地」となる。以下、特に指定のない場合、後者の「荒地」を指す。

2　このような戦前におけるモダニズム詩運動の流れは、資料Ⅰ－1「「荒地」派詩人に関わる日本モダニズム詩の動き」として付しておく。

3　原崎孝「『詩と詩論』及び『文学』の成立と展開覚書」、吟遊編集部編『詩と詩論－現代詩の出発－』（東京、冬至書房新社、1980年）、83-131（83）頁。

る気運の中で大正14年前後に全盛となる小雑誌に依拠した若き才能たちであった。「詩と詩論」創刊号に記載された同人は、安西冬衛、飯島正、上田敏雄、神原泰、北川冬彦、近藤東、瀧口武士、竹中郁、外山卯三郎、春山行夫、三好達治という、当時２０歳代後半の１１名である。その中で、例えば、安西冬衛、北川冬彦、瀧口武士、三好達治は、大正期の日本の詩領域において一つの主流をなしていた民衆詩の持つことばの冗漫性や平面性に対し、イメージを強調することによってより密度の高い凝縮したことばを「短詩」という表現形式に求め、短詩運動の実践の場として、当時日本の植民地であった満州大連で発行された詩誌「亞」（大正13年11月－昭和2年9月、全３５冊）に、同人として参加している。小説、詩、評論、戯曲、映画、絵画など様々な分野の自由な表現の場となった、三高出身者が中心となり創刊された文芸同人雑誌「青空」（大正14年1月－昭和2年6月、通巻２８号）には、広く内外の映画事情に通じていた飯島正、それに北川冬彦、三好達治が参加している。また、日本における最初の超現実主義運動の機関誌「薔薇・魔術・学説」（昭和2年2月－3年2月：全４冊）には上田敏雄が同人として加わっている。その他、前時代の詩人たちによって主宰された雑誌、例えば、詩雑誌「日本詩人」（大正10年10月－15年11月、通巻５９冊）には春山行夫が、詩、音楽雑誌「詩と音楽」（大正11年9月－12年9月、通巻１３冊、北原白秋、山田耕筰主幹）には竹中郁、近藤東、春山行夫が新人として作品を発表する傍ら、春山、近藤は詩雑誌「謝肉祭」（大正15年2－7月、全４冊）、竹中は詩雑誌「羅針」（第１次：大正13年12月－15年3月、全１３冊、第２次：昭和9年2月－11年2月、全１１冊）といった同人雑誌において編集発行人、或いは同人として中心的役割を果たし、そこに自らの文学活動の拠点を置いていた。このように創刊当時の「詩と詩論」の同人たちは、それぞれが信望を寄せていたヨーロッパの新しい詩意識とそれを日本の詩的風土に根付かせるための小雑誌に基づいて、離散して活動していたのである。

こうした背景の中、季刊詩雑誌「詩と詩論」は、混沌とした詩的風土の中から脱

しようとした新鋭詩人たちの集まりの場となっていく。つまり、西欧の同時代的な詩の流派に関心を寄せ、信望を寄せる流派を同じくする仲間たちと小雑誌を拠点に活動してきた新鋭詩人たちが、ある意味でその壁を取り払い、「詩と詩論」というひとつの場に結集していくのである。

創刊に至るこのような背景からも明らかになると思われる、「詩と詩論」の運動とそれ以前のモダニズム詩の動向との根本的な相違点は、「詩と詩論」においては、モダニズム詩の諸流派が一つの場に総一的に共存しているという点であろう。換言すれば、昭和3年9月の詩誌「詩と詩論」創刊以前、特に大正末期から昭和初年にかけて、第一次大戦前後のヨーロッパの新しい文学或いは芸術の理論や形式を受容し、それを文学的実験を通して、日本の詩的風土の上で取り込もうと試みていた諸流派が、詩誌「詩と詩論」という一つの場に集まったという点である。

創刊時の同人たちがそれぞれに異なった詩意識を持つ詩人たちの集まりであることは前記した通りであるが、同人制から寄稿制に移行した「第５冊」（1929年9月）以降、プロレタリア系以外の多種多様な詩論や詩作品を掲載することによって、この特徴はより明白なものになっていく。こうした特徴は、1900年以降に西欧諸国で展開した詩的傾向の紹介、あるいはそれらの傾向をもつ詩論や詩作品の翻訳に限定し、「詩と詩論」の誌上でそれらがどのように為されていったかを見るだけでも明らかになると思われる。

未来派

S.3.9	神原泰	「未来派の自由語を論ず」（『詩と詩論』第１冊）	マリネッティ	未来派の「自由語」についての考察。
S.3.12	神原泰	「未来派の自由語を論ず」（『詩と詩論』第２冊）	マリネッティ	未来派の「自由語」の発展についての考察。
S.4.3	神原泰	「未来派の自由語を論ず」（『詩と詩論』第３冊）	マリネッティ	未来派の「自由語」の発展についての考察。
S.4.6	神原泰	「未来派の自由語を論ず」（『詩と詩論』第４冊）	マリネッティ	マリネッティの「未来派宣言」の翻訳。

キュビズム

S.3.9	北川冬彦	「マックス・ジャコブの散文詩論」（『詩と詩論』第１冊）	ジャコブ	散文詩集「骰子筒」序文の翻訳。ジャコブのこの著書の序文は北川の新散文詩運動の理論的背景になるもの。
S.4.6	佐藤朔	「ギイヨム・アポリネル」（『詩と詩論』第４冊）	アポリネル	紹介。
	北川冬彦	「マックス・ジャコブ」（『詩と詩論』第４冊）	ジャコブ	紹介。

表現主義

S.4.3	笹沢美明	「アウグスト・シュトランム詩抄」（『詩と詩論』第３冊）	アウグスト・シュトランム	翻訳。
S.4.6	大野俊一	「現代の独逸文学」（『詩と詩論』第４冊）	フェリックス・ベルトオ	ドイツ表現主義紹介。
	阪本越郎	「ワルテル・ハーゼンクレフエル」（『詩と詩論』第４冊）	ワルテル・ハーゼンクレフエル	紹介。
	笹沢美明	「フランツ・ウエルフエル」（『詩と詩論』第４冊）	フランツ・ウエルフエル	紹介。
	藤田暉	「コットフリイト・ベン」（『詩と詩論』第４冊）	コットフリイト・ベン	紹介。
	阪本越郎	「ラインハルト・ヨハネス・ゾルゲ」（『詩と詩論』第４冊）	ラインハルト・ヨハネス・ゾルゲ	紹介。
	笹沢美明	「アウグスト・シユトランム」（『詩と詩論』第４冊）	アウグスト・シュトランム	紹介。
	笹沢美明	「ゲオルグ・トラアクル」（『詩と詩論』第４冊）	ゲオルグ・トラアクル	紹介。

象徴主義

S.4.9	吉村鉄太郎	「ヴァリエテについて」（『詩と詩論』第５冊、ヴァレリー特集号）	ヴァレリー	紹介。
	渡辺一夫	「ポオル・ヴァレリィ」（『詩と詩論』第５冊）	A. ヂィド	翻訳。
S.5.3	秦一郎	「テスト氏との一夕」（『詩と詩論』第７冊、ヴァレリー特集）	ヴァレリー	翻訳。
	中島健蔵	「一詩人の覚書」（『詩と詩論』第７冊）	ヴァレリー	翻訳。
S.6.1	秦一郎	「純粋詩論」（『詩と詩論』第１０冊）	ヴァレリー	翻訳。

シュールレアリスム

S.3.9	J.N　（西脇順三郎）	「超自然学派」（『詩と詩論』第１冊）	ブルトン ボオドレエル	立論。
S.4.6	北川冬彦	「超現実主義宣言書　」（『詩と詩論』第４冊）	ブルトン	翻訳、紹介。
S.4.9	北川冬彦	「超現実主義宣言書　」（『詩と詩論』第５冊）	ブルトン	翻訳。
S.5.3	原研吉	「超現実主義第２宣言」（『詩と詩論』第７冊）	ブルトン	翻訳。

ノイエ・ザハリヒカイト

S.5.6	笹沢美明	「ノイエ・ザハリヒカイト文学」（『詩と詩論』第８冊）		ノイエ・ザハリヒカイトの紹介。
	大野俊一	「若き独逸文学」（『詩と詩論』第８冊）	シャルル・レーベル	翻訳。
S.6.12	笹沢美明	「ヨーアヒム・リンゲルナツッツ詩抄」（『詩と詩論』第１４冊）	リンゲルナッツ	訳詩。

主知的傾向の文学（イギリス）

S.3.12	中村喜久夫	「完全なる批評家」（『詩と詩論』第２冊）	エリオット	翻訳。
S.4.6	春山行夫	「Ｔ・Ｓ・エリオット」（『詩と詩論』第４冊）	エリオット	紹介。
S.4.9	伊藤整	「純粋詩」（『詩と詩論』第５冊）	ハーバード・リイド	翻訳。
S.5.6	北村常夫	「伝統と個人的才能」（『詩と詩論』第８冊）	エリオット	翻訳。

上の表は、「詩と詩論」の誌上で為された、様々な西欧における詩意識の紹介と翻訳のうちのいくつかを挙げたものにすぎないが、このような表からも「詩と詩論」が詩の領域における諸流派を結集するひとつの場として成立していたという実態は、容易に理解できるであろう。前時代的な詩的状況に対抗し、新しい詩意識を求めるという一見共通の方向性を持ちながら、イギリス、フランス、ドイツ、イタリアといった様々な西欧諸国の詩の理念と方法に刺激を受けた日本モダニズム詩諸派

が一つの場に集約されたわけである。千葉宣一の言葉を借りれば、「共和国的」[4]であると言えるこのような様相は、個々の詩人たちがそれぞれの理念に基づいた詩論や詩作を展開していく自由を有しているという点に於いて、さらには、権威的・統一的な信条が認められないという点に於いて、「アナーキー」な様相であると言えるかもしれない。「詩と詩論」の誕生と共に始まった集約的、或いは総合的とも言えるモダニズム詩運動は、明治・大正期におけるヨーロッパの詩精神の導入と展開より、速度的にも、量的にも凌駕するものであった。そして、詩誌「詩と詩論」の、肯定的に捉えれば、精力的で華やかな、否定的に言えば、渾然とした展開に、当時自己の詩的世界を拡充しようと願っていた「荒地」派詩人たちも戦前の時点では魅惑され、後に、特にシュールレアリスムへ傾倒し、モダニズム詩の洗礼を受けることになるのである。

（２）

以上のような詩誌「詩と詩論」についての考察を踏まえた上で提起される問題は、このような複数の詩的傾向の共存が、「詩と詩論」という一つの場で、どのようにして可能になったのかという点であろう。というのも、第１冊の後記に記されているとおり、ひとつの「結束的権威機関」[5]というよりも、むしろ一つの理念や方法にとらわれない、それぞれの同人あるいは寄稿者の自由な信条を集約する場として成立する詩誌「詩と詩論」には、必ずしも詩的価値や詩意識を共有できるモダニズム詩の流派だけが集まるのではなく、それらの違いから反目する流派も同時存在することになるからである。その一例を挙げるならば、「詩と詩論」には、本論文第１章第１節で検討した二つの詩の理念、つまり、マリネッティの「未来派創立

4　千葉宣一「詩論の発展と流派の展開－昭和期－」、中島健蔵他編『日本近代詩』、36頁。

5　「後記」、「詩と詩論」第１冊（1928年）、213-14（213）頁。本論考において、詩誌「詩と詩論」は、柴崎芳夫刊行、春山行夫監修、中島善彌纂集『詩と詩論・文学』近代詩誌復刻叢刊、全20巻（東京、教育出版センター、1979年）を参照した。

宣言」が象徴する「未来派」の詩精神と、それとは全く相反した詩精神を有するイギリスのT.S.エリオット（T.S.Eliot, 1888-1965）やフランスのヴァレリイ（Paul Valéry, 1871-1945）に象徴される主知的な文学傾向の信条が同時存在しているのである。第一次大戦前後にイタリアで展開した未来派は、科学的進歩への絶対的な信頼と「現在」から「未来」へのあくなき希求から「攻撃性」を身につけ、「速度と美」と「闘争の美」を賞揚し、従来の芸術的・社会的規範、伝統、権威などすべて「過去」のものを徹底的に破壊することを主張した。その一方で、主知的な文学傾向には、第一次大戦を引き起こしてしまったヨーロッパ文明そのものに対する痛烈な自己批判的精神があり、戦後の社会の不安と混乱と無秩序の中で、「過去」において存在した絶対的価値や伝統や権威、あるいは知性を重視することによって秩序の回復を目指そうとしたのである。こうした詩精神の内質の対立は、いろいろな組み合わせで考えられるが、この点に関して、「詩と詩論」における複数の詩的傾向の共存を可能たらしめたものとして、２つの大きな要因があるように思われる。

その第一の要因は、「詩と詩論」の運動に参加した詩人たちの多くが意識的にせよ無意識的にせよ共有することになる、「詩を書く」行為における詩の理論や方法を重視する態度にあると思われる。別な言い方をすれば、それは、その詩誌の題にもなっている「詩」と「詩論」に関して、「詩」そのものよりも「詩論」の優位を、「実践」そのものよりも「理論」の優位を承認する立場である。ヨーロッパから伝えられたり、あるいは直接ヨーロッパから持ち込まれた詩の「理念」と「方法」を非主体的に、かつ、自由に「個人」の中に取り入れ、特に「方法」をより重視し自己の内部で理論化することによって自らの創作の根拠とし、そしてその基盤に基づいて詩的営為を行うといった創作態度は、何も詩誌「詩と詩論」の運動に限って見られる傾向ではなく、本論文第１章第２節ですでに言及したように、日本モダニズム詩の黎明期から存在した態度であった。しかし、ここで重要なことは、その態度を引き継いだ形になった詩誌「詩と詩論」においては、そのような創作態度が理論的に正当化されたということである。そして、その理論的な正当化によって、詩誌「詩と詩論」という詩的行為の「場」全体が理論中心の詩的創作態度を必

然的に意識的にとるようになったこと、さらには、詩誌「詩と詩論」が当時の日本の詩領域に与える影響の大きさから日本の詩領域全体に、理論や方法中心の詩の認識が確固たるものとして打ち立てられていったということである。

「詩と詩論」の運動の初期の段階で、この立場を独自の詩論や評論を通して、全面的に主張し体系的に理論化していったのは、「詩と詩論」創刊時からの同人であり、その第５冊以降、編集人として「詩と詩論」の場を形成していく中心的存在であった春山行夫である。

当時の日本の詩的状況について、後年、春山行夫が回想して語った次のようなことばには、春山自身の「詩を書く」行為に対する理論重視の見解がはっきりと残って表れている。

> 『詩と詩論』があらわれるまえ、「詩」と「詩論」とは別物とみられていて、「理論では詩は書けない」という先入観は絶対的な真実だとおもわれていた。事実、他人の詩について、「お前さんは、お前さんの理論どおりの詩を書いてみたまえ」というと、彼らはグウの音も出せなかった。ところが、まったく新しい理論をかかげ、その理論どおりの詩を書く詩人たちがあらわれたのだから、同時代の詩人たちはびっくり仰天した。これが『詩と詩論』が日本の詩の認識に与えた根本的な革命で、それから日本のモダーニズムの歴史がはじまったとみてよい。[6]

上の引用から明らかになることは、「まったく新しい理論をかかげ、その理論どおりに詩を書く」という詩人の行動様式を、春山行夫が「日本の詩の認識に与えた根本的な革命」として考えていること、そして、その行動様式を自覚することから「日本のモダーニズムの歴史」が始まったと考えている点である。春山行夫がこうした「詩の認識」を後年になって上のように提示する背景には、客観的・科学的に「詩」と「詩の行為」を対象として捉えることによって、理論中心の「詩の行為」

6　春山行夫「ポエジー論の出発」、吟遊編集部編『詩と詩論－現代詩の出発－』、5-13（5-6）頁。

を説明し、それを「現代」に於ける「詩の行為」の在るべき創作態度として理論化及び正当化していったという、過去における精力的な理論活動への信望が存在している。

客観的に、あるいは科学的に「詩を書く」行為を捉えるとは、それは＜詩を書く行為＞という対象、さらには＜詩＞という対象を事前に発見し、設定しておくことに他ならず、そこには、「詩」の本質そのものを問題にする「詩の行為とは何か」という問いや「詩とは何か」という問い、あるいは詩の「ことば」とそれを紡ぎ出す詩人との関係そのものを問題にした「われわれにとって詩とは何か」、「なぜ詩を書くのか」といった問いは、全く侵入してくる余地は存在しない。＜詩＞はすでに眼前に実体として存在するものでなければならず、＜詩を書く行為＞も実際に観察できるものでなければならない。実際には、昭和初期の段階において、＜詩＞という名辞の付いたテクストは多数存在していた。プロレタリア詩、民衆詩、象徴詩など、様々な種類の＜詩＞は、産出されたテクストのレベルで存在していた。このような実体としての＜詩＞の存在は、それを生み出すことになる＜詩を書く＞という詩人の行為自体も実体化させるものである。このような視座に基づいて、春山行夫が試みたことは、そうした実体的に存在すると見える＜詩を書く行為＞を、その行為自体を支えている詩人という「主体」を完全に忘却して、科学的に捉えることであり、その行為の基本的構造を一切の主観的な解釈を排して客観的に認識することであった。かくして、春山行夫は、＜詩を書く行為＞を整合的に分節化し構造化することによって、「詩の行為」を説明し、理論中心の「詩の行為」を「現代」における「詩を書く行為」の正統として位置づけていくのである。

春山行夫は、実体として存在する＜詩を書く行為＞から二つのパターンを読み取ることになる。＜詩を書く行為＞の第一のパターンは、春山自身の言葉で言えば、「本能的」「無意識的」に詩を書くという行為であり、いわゆる実践が先行する詩を書く行為である。＜詩を書く行為＞の第二のパターンとして春山が見出したのは、象徴主義であれ、マルクス主義であれ、何らかの詩についての理念や方法に基づいて詩を書くという行為である。春山は、こうした二つの＜詩を書く行為＞のパ

ターンを次のような言葉で説明している。

しかし、我々が今日書いてゐる詩、或ひは文学的に詩と呼ばれてゐるところのものは、単なる感情の素朴な表現である童謡や、本能的、無意識的な小鳥の歌ではない。

では、これらの童謡や小鳥の歌と、我々の今日書いてゐる詩との間の相違はなんであるかといふと、今日の詩人といふ定義の中には、詩人といふものには、天成の素質以外に、いま一つ別個の努力が必要となつて来てゐるといふことである。即ち、童謡や小鳥の歌のやうな、無意識的意識に、**全然性質の異る要素であるところの、意識的な意識を附加する努力**が必要となつて来てゐる。この意識的意識を必要とする努力が、具体的な用語によつて示されると、それは、**歴史的努力**であり、主知的活動であり、価値の自覚である。[7]

春山は、この二つの＜詩を書く行為＞のパターンを、「今日」という言葉によって象徴されるような「時間」の概念を導入することによって、第一のパターンから第二のパターンへと進化していくものであるという見解を提示している。さらに春山は、＜詩を書く行為＞の第二のパターンである、「意識的意識」を要する努力、つまり理論的努力に基づく詩的行為の中に、二つの異なった「次元」を見出すことになる。その一つは、春山の用語で言うならば、「ポエーム（いわゆる詩）」という次元、つまり「詩を作り出すという次元」であり、もう一つは「ポエジー（詩的志向）」という「詩についての理論を作り出す次元」である。

詩を書くには詩の理論を知らねばならない。それは当然の原則で、それの第一歩は詩を書くことは、ポエーム（いわゆる詩）とポエジー（詩的思考）という二つの次元から成りたっていることを認識することにある。『詩と詩論』が日本ではじめて明確にしたのはポエジー論への主知で、この時代の詩人ほど自

7　春山行夫　『詩の研究』（東京、厚生閣書店、1931年）、1-2頁。

分の書く詩を主知しようとして、各人がそれぞれのポエジーを追求した時代はなかった。[8]

このような「ポエジー（詩的思考）」に対する認識から、春山行夫はさらに、「ポエジー」を追求するかしないかによって、つまり、詩人が詩の行為の基礎にするその理論の性質によって、理論中心の＜詩を書く行為＞の第二のパターンを分化させる。

あくまでも詩人が、例えば、象徴主義というような芸術理念と方法を、自己自身の主観性に基づいて解釈し、それに立脚して詩的行為を行う場合、象徴主義という理論の持っている理論的可能性は失われていくことになる。さらに、「象徴主義とは‥‥である」というような断定的で主観的な認識と言説が、詩の領域において権威的な詩人に結びついたとき、その詩の認識は多くの詩人を追随させながら詩の領域における支配的な傾向を生み出し、一方で、「象徴主義」という理論そのものは固化していくことになる。しかし、そうした理論そのものが、より潜在性と発展性を含んだものであることを様々な広範囲な読書経験から自覚していた春山は、理論それ自体を主観から解放することを目指し、それを詩の理論が進化していく必然的な過程と考えるのである。春山は斯くして、理論という対象を立体的に、或いは多角的に捉える見解を打ち出すのである。つまり、それは、詩人の主観というものを廃して科学的に理論を分析するという方向に結びつくだけではなく、新しい理論の発見へと通じていくものである。そして、このように理論中心に詩の行為を対象的に捉えた場合、詩は詩人の理論の実現形態となって行くわけである。

このことを別な角度からもう少し明確に説明すると次のようになるであろう。春山はその著書『詩の研究』の中で、詩人が詩を書くことを、次のように農夫が花を咲かせることのアレゴリーで考えている。

続いて私は作品をつくることが、できるまでの過程について次のようなア

8　春山行夫　「ポエジー論の出発」、吟遊編集部編『詩と詩論－現代詩の出発－』、6頁。

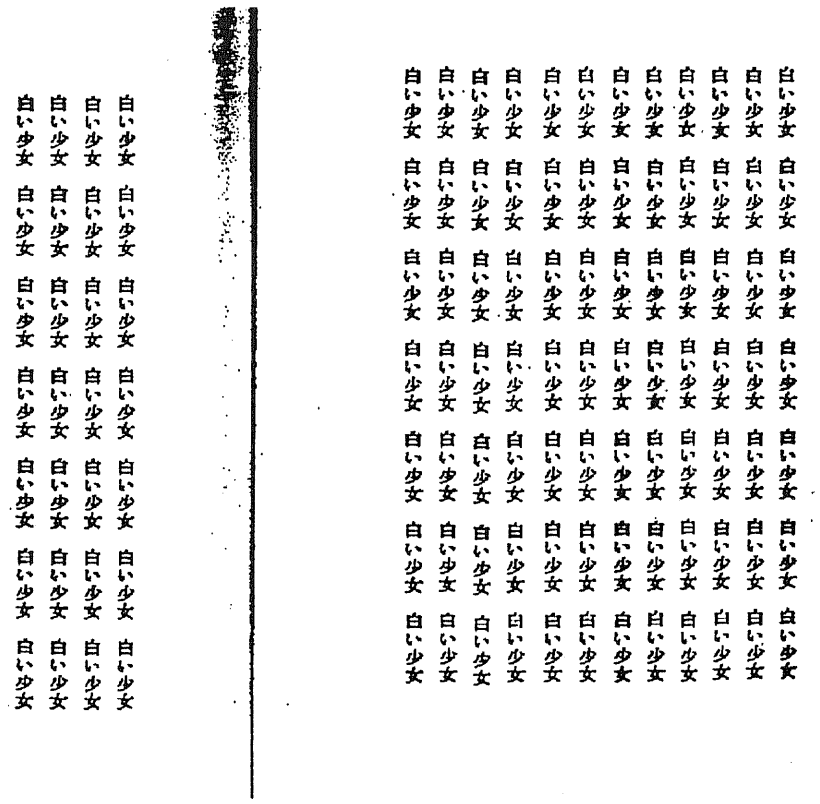
レゴリイを提出する。我々は芸術に於てはある一つの意志が直接作品とはならないといふことを、芸術の根底に考へておく必要がある。卑近な寓話であるが、農夫が**花を咲かせよう**といふ意志は、それ自身で花を**咲かせる**といふことはできない。花を咲かせようといふ意志は直接的に花が咲くといふことに何等の関係がない。唯、花が咲くといふ結果を得るために、農夫は花を咲かせる**手段**を考へねばならない。農夫は手段を考へないでいかに花を咲かせようと意志しても、それは何等花が咲くことに反響しない。しかし、ここに考ふべきことは、若しその花が完全に咲く可能性があるとしたら、農業的方法の正確性は、的確に奏功の度を深めるであらう。ここに花を咲かせるといふことと、花が咲くといふ事実との間には、独立した別個の関係、或る方法が確立せられねばならぬことを知る。非常に優れた花は一個の自然生植物として見れば、偶然であり、奇蹟であり、驚異であることもあり得る。これを昔流に美といふ言葉で呼んでもよい。しかし、若しそれがなにびとかの手によつて職業的に人為的に咲かされたものであるとしたら、その花の偶然、奇蹟、驚異は、的確に**計算**されてしまつてゐるのである。即ち農業の方法論がその偶然、奇蹟、驚異の神秘を破つたのである。

自然に咲いた花も人為的に咲かせた花も、それを咲いたものとして観る時、その花それ等自身は何等異つたものではないであらう。しかしながら、ここに農夫又は園芸家があるとしたら、彼等は目的として花を咲かせるものである以上、花が咲くといふことは、当然花を咲かせることの結果として考へられねばならない。[9]

「花」が自発的に咲くように、「詩」も詩人から自発的に生まれるが、このような段階を更に次の段階に発展させるために、「農夫」は、「花」をより美しく咲かせようと「農業的な方法」を得て、その「方法」に基づいて「花を咲かせよう」とする。同じように詩も、詩人がより美しい詩を作り出すためには、詩についての様々

9　春山行夫『詩の研究』、175-76頁。

な知識と方法を得ることが要求される。ここにおいて、「花を咲かせる」ということは、「花が咲く」ということを前提にした知的作業が重視されるように、「詩を書く」ということが、「詩を書く」ということを前提にした詩の知的作業へと変換されていく。以後、「詩を書く」という場は、理論を「主知的」に分析し、その可能性を見出すことによって、詩の理論が試される実験の場となるだけではなく、詩そのものは理論の口実になっていくのである。このような立場から書かれた詩の典型は、「詩と詩論」第４冊に掲載された春山行夫の詩作品「白い少女」[10]であろう。



10　春山行夫「植物の断面－方法の可能とその適用について－」、「詩と詩論」第４冊（1929年6月）、100-05（102-03）頁。

春山行夫のこの詩は、言語の「文字性」を重視した、春山が定義するところの「フォルマリズム」の理論によって詩的行為を行った結果できた作品である。春山はこうした詩の理論の持つ可能性を「ポエジイ」という言葉で表すが、この「ポエジイ」そのものが、今まで述べてきたように詩、或いは詩の行為を対象化してそこに主観というものを排除するという一種の理論的な可能性を追求するための符丁になるわけである。

以上見てきたような春山行夫によって主張される詩の認識が、詩誌「詩と詩論」の場に浸透していった場合、そこは、未来派、シュールレアリスム、表現派、象徴主義、といった西欧出自の理論が有する理論的可能性を開拓する場となるのは明らかである。主観性や思想性というものを一切排除し、理論を「主知的」に組み合わせたり、分析したりすることによって、新しい理論を生みだし、その新しい理論を実現したものとして「詩」を提示する。こうした詩の理論の可能性へのあくなき願望とそれを追求する態度は、詩誌「詩と詩論」という場に、詩の方法論を重視する態度と、様々な詩的動向の理念と方法の共存そのものを正当化するような重要な役割を果すことになったのではないかと推測できる。

> 『詩と詩論』では、それがどんな題材であろうと、あるいは観念であろうと、「なんらかの法則によって分解され、ついでなんらかの体系によって再構成された」思考作用→発想の転換による作品であることに新しいポエジーの実体を認めた。西脇順三郎、吉田一穂、上田敏雄、瀧口修造、堀辰雄、竹中郁、安西冬衛、北川冬彦、北園克衛、春山行夫、近藤東、渡辺修三、阪本越郎、左川ちか、江間章子、その他この雑誌で活動した詩人ならびにその系統の多くの詩人は、それぞれオリジナルの思考（ポエジー論）で対象を分解し、再編成する詩人だった点ではまったく同一で、単一の観念やムードやポーズの詩人の集団運動ではない。[11]

11　春山行夫「ポエジー論の出発」、吟遊編集部編『詩と詩論－現代詩の出発』、9頁。

春山の上の発言をもって「詩と詩論」の運動が有していた一つの特徴を即断するのは危険であり、それぞれの個々の詩人の位相を充分に検討することは当然必要なことであると思われるが、しかし、少なくともこうした「詩と詩論」の詩運動に対する見解を自信をもって後年に提示できるほど、春山が「詩と詩論」さらにはそれ以降のモダニズム詩運動で大きな存在であったこと、また、その存在の大きさ故に、春山の詩の認識がモダニズム詩運動に浸透していったのではないかということは想像できることである。

そして、こうした春山の日本モダニズム詩運動に与えた影響の大きさは、春山行夫の独自の理論的活動だけからくるものではなく、澤正宏が論考「詩史の断層－近代から現代へ－」の中で次のように説明する、春山行夫の「編集者」としての立場、換言すれば、「リライター」としての立場から来るように思われる。

> 『詩と詩論』全冊をみると、巻頭の欄には必ず詩論ないしそれに準じた論文（エッセイ）がおかれ、その後の欄に詩作品がおかれている。さらにその後には研究、随筆、国内の同時代の詩の批評、海外の文学動向の紹介、書評、特集などといった、大枠でいえば、批評と紹介の欄が続いている。もちろん、各欄は主に欧米の新しい詩やその動向を紹介するための翻訳を含んでいる。こうした詩誌の組み方にみられる春山行夫の編集の姿勢からうかがえることは、現代の詩においては詩論が主であり、作品はその実践の成果であるとする、詩に対する彼の考え方である。[12]

詩誌「詩と詩論」創刊時からの同人であった春山行夫は、その第５冊以降および雑誌「文学」において編集人として、そして、詩誌「詩法」、詩誌「新領土」では編集同人として、つまり、比較文学者であると同時に翻訳学者であるアンドレ・ルフェベール（André Lefevere）の用語で言うならば、その時代の詩学的傾向を創り

12　澤正宏「詩史の断層－近代から現代へ－」、澤正宏・和田博文編『都市モダニズムの奔流－「詩と詩論」のレスプリ・ヌーボー－』（東京、翰林書房、1996年）、6-19（10）頁。

出すことができる「リライター（rewriter）」[13]として、昭和初期のモダニズム詩運動の中核的な役割を果たした存在であったのである。

このような観点を踏まえた上で、もう一度詩誌「詩と詩論」の場における特徴、すなわち、一種のアナーキーな様相を呈する様々な詩の理念と方法の共存と、「詩と詩論」における詩論の重視を考えてみると、そうした特徴の背景には、春山行夫自身の詩の認識と、それを詩誌「詩と詩論」において前面に出しその場の傾向をつくり出すことができるリライターとしての働きがあったように思われるのである。

（3）

「詩と詩論」における複数の詩的理念と方法の共存を可能たらしめたものとしての第2の要因は、当時の日本の文学領域に於ける二つの勢力、即ち、プロレタリア詩壇と前世代の詩壇に対して団結して反逆するという「詩と詩論」の同人たちの意図の中に求めることができる。当時の詩の領域に於いて、プロレタリア詩は、確固たる地位を持つものであり、前時代の詩壇もまた、混乱し、停滞していたとはいえ、彼らにある種の権威を持ってのしかかるものであった。そのような状況の中で、それらに反逆しようとする新鋭詩人たちが集結の場を求めるのも当然のことであるかもしれない。

詩誌「詩と詩論」の同人たちは、まず、プロレタリア詩に対し、詩の「政治闘争

13　ルフェベールの「リライター（rewriter）」あるいは「リライティング（rewriting）」の概念は、その著書 *Translation, Rewriting & the Manipulation of Literary Fame* の中で、次のように説明されている。'The same basic process of rewriting is at work in translation, historiography, anthologization, criticism and editing.'「同じようなリライティングの基本的なプロセスは、翻訳、史料編修、アンソロジー編纂、批評、編集においても機能している。」(p.9)　'Whether they produce translation, literary histories or their more compact spin-offs, reference works, anthologies, criticism, or editions, rewriters adapt, manipulate the originals they work with to some extent, usually to make them fit in with the dominant, or one of the dominant ideological and poetological currents of their time.'「翻訳、文学史あるいはより簡潔な入門書、アンソロジー、批評、版のどれかを製作するとき、リライターは、彼らが扱う原作をある程度脚色し、操作し、常に原作をその時代の支配的なイデオロギー的・詩学的傾向の、支配的なものに、あるいは、その一つに適合させようとする。」(p.8)

の器具」からの「分離、独立」を主張する。[14]　このような態度は、確かに、詩の芸「術」性あるいは「方法」を第一義とし、詩の、或いは詩を書くという行動の革新と詩の理論的追求を賞揚した「詩と詩論」の詩人たちと、詩を政治と強く結びつけようとしていたプロレタリア詩側の根本的な立場の違いから起こるものである。

マルクス・レーニン主義に基づき、労働者階級の現状の革命を目的とし、政治という現実と強固に結びつくことによってその基盤を形成するプロレタリア詩の詩観は、「詩と詩論」の同人たちの持つ詩観とは相容れないものであったであろう。しかし、詩誌「詩と詩論」の側のプロレタリア詩に対する批判を見ると、彼らの批判の対象が、マルクス主義そのものではない。[15]　「詩と詩論」、特に春山行夫のプロレタリア詩批判の根底にある意識には、詩を階級闘争の道具として用いるプロレタリア詩への反抗と同時に、プロレタリア詩人が自己の内面をその単一の理念と方法によってのみ満たし、それ以外の理論を受け入れないという態度に対する批判も存在していたように思われる。プロレタリア詩人は、詩を書くという行為を一種の現実を生きる彼らの「思想」と結びつけ、その結びつきの中に詩の可能性を見いだしていくのに対し、「詩と詩論」に於ける見解は、あくまでも理論そのものの中に、換言すれば、理論を生きる主体とは分離させ、その理論の中でのみ可能性を追求していくということに主眼を置くのである。それ故に、「詩と詩論」の立場にとっては、プロレタリア詩も、民衆詩も、或いは彼らの眼には閉塞的に見えた「象徴主義詩」も同じレベルで批判の対象として捉えられるのである。

もう一つの詩誌「詩と詩論」の同人がその創刊時に於いてとった立場は、「旧詩

14　澤正宏「詩史の断層－近代から現代へ－」、澤正宏・和田博文編『都市モダニズムの奔流－「詩と詩論」のレスプリ・ヌーボー－』、９頁。澤によると、「詩と詩論」の上のような主張は、第１冊に付けられた「『詩と詩論』創刊について」というパンフレットに記されたものである。復刻版には、このパンフレットは付されていなかったため、同書を参照した。

15　春山行夫は、「詩と詩論」第１冊に掲載した論考「日本近代象徴主義の終焉－萩原朔太郎・佐藤一英両氏の象徴主義詩を検討す－」（66-84頁）における「バーテルス式分布表」（78頁）の中で、プロレタリア詩を「文学以下」と位置づけたが、それに対し二、三の反論があり、「詩と詩論」第２冊（1948年2月）の批評「ポエジイとは何であるか－高速度詩論　その一－」（223-51頁）の「註」において、プロレタリア詩は「一たびポエジイによつて批判するときは、各々私があの論文に挙げたバーテルス式分類表に充分はいる席が設けてある。従つて、文学としてのプロレタリア詩はそれが書かれてゐるポエジイによつて、Egoに於てはダダイスムなりCubiに於ては、分離派なりに属すべきものであることは、云ふまでもないと思ふ。このことは、日本のプロレタリア詩人がその拠りどころとしてゐるロシアの詩壇に於ても正しいと思ふ。」（226頁）と述べている。

壇とその無詩学的独裁」を批判するというものであった。[16]　このような立場には、当時の日本の詩の領域に於いてイニシアティブを発揮し、日本の詩をある方向に導こうとしていた、「詩と詩論」の同人よりも前の世代に属する詩人たちに対する反逆精神と、当時の混沌とした停滞状況にあった詩の状況からの脱出を希求する態度が窺える。「旧詩壇」を「無詩学的」であり、「独裁」的であると認識することによって、詩誌「詩と詩論」は逆に「詩学」を充実させることによって、「詩学的」であろうとするのであり、その詩についての様々な理論とそれに基づいた実践としての詩作品を、開放的に掲載することによって、その第１冊後記に於いて見られるように、「権威機関」であることを否定する。つまり、権威的、或いは独裁的な場を拒絶し、理論的根拠に基づく結集的な場として成立していくことになる。

このような「旧詩壇」を「無詩学的」であると批判し攻撃する背景には、当時を含めた、前時代的な過去に於いて存在した詩の行為と詩作品をラディカルに一括し、裁断する視点が含まれているが、その視点は過去の詩の行為と詩作品を実体として、且つ対象として客観的に把握するという一つの態度に結びついているだけではなく、その客観的に認識されたものが現代に於いては必ず発展的な傾向に移るという詩の行為の進化、或いは詩作品そのものの進化への限りない信望によって支えられているのである。そして、詩誌「詩と詩論」の運動体が有したこのようなラディカルな側面は、本論第１章第１節の未来派に言及した部分で説明したように、「現在」から「未来」へのあくなき志向性そのものを「攻撃性」として、あるいは「力」として取り入れ、前時代の「文学システム」を破壊し、新しい「文学システム」を早急に構築しようとしたこととして説明ができるように思われる。

ところが、この「進化」に対する考え方そのもの、あるいは「現在」から「未来」へのあくなき志向性そのものを「攻撃性」として、あるいは「力」として、取り入れようとする傾向そのものは、日本に於いて「詩」という表現形式が成立した当初から存在していたということは留意しておく必要があるかもしれない。

進化論的思想は、既に日本の明治期において、生物学、社会学、経済学といった

16　「後記」、「詩と詩論」第１冊、213頁。

広い領域に多大な影響を与えるものとして受け入れられていた。特に、全自然が進化していると説くダーウィンの立場に影響を受け、社会、倫理の世界にも進化論を適応したハーバート・スペンサー（Herbert Spencer 1820－1903）の見解は、当時の日本の知識階級に絶大な影響力を持つものであった。そして、このような思想的傾向は、文学領域にも一つの波紋を投げかけることになる。外山正一（1848－1900）、矢田部良吉（1851－1899）、井上哲次郎（1855－1944）という、スペンサーなどの進化論思想の洗礼を受けた社会学、理学、植物学、哲学などを修めた三人によって、1882年7月、『新体詩抄』が出版された。

此書ニ載スル所ハ、詩ニアラス、歌ニアラス、而シテ之ヲ詩ト云フハ、泰西ノ『ポエトリー』ト云ウ語即チ歌ト詩トヲ総称スルノ名ニ当ツルノミ、古ヨリイハユル詩ニアラザルナリ[17]

『新体詩抄』の「凡例」の中の上のような部分に記されているように、ここにおいて日本の伝統的な和歌や俳句さらには漢詩などの領域に、ヨーロッパの「ポエトリー」という概念に基礎を置く「詩」という表現形式が、「古」の詩的表現を一切切り離し、「未来」の日本の詩的表現として自覚されたのである。

進化論に影響をうけた上記三名の学者による「新体詩」という概念自体、進化論的な思想を背景にして構成されたことは、外山正一のロングフェローの翻訳の後ろに付けられた文面における次のような言葉から明らかであろう。

明治ノ歌ハ、明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラズ、日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラズ、是レ新体ノ詩ヲ作ル所以ナリ[18]

17　外山正一他編　「凡例」、『新體詩抄』（東京、丸屋善七、1882年）、凡例１頁。

18　前掲書、15頁。

「古歌」、「明治」、「新体」というそれぞれの言葉を支えている、「過去」、「現在」、「未来」に対する時間の意識の裏側には、さらには、「古歌」が当然のごとく否定され、「新体ノ詩」が当然のごとく正当化されている背景には、進化論的思想とそこからくる「攻撃性」が潜んでいるように思われる。

日本における「詩」の表現形式の起点とも言うべき「新体詩」の成立自体が、その背景として進化の概念を含んだものであったという事実は、詩誌「詩と詩論」が有することになる詩の認識を暗示するものがある。理論を中心に詩の可能性を探究する主知的な活動を中核として第一段階に置き、その実践としての詩を書く行為をその第２段階と見なすという詩の理論と実践の関係を「詩の行為」の変革あるいは「進化」とみる視点、理論のより「新しい」探究のために一つの理論に固執する立場を否定し、より多くの理論を統合し、より「新しい」理論を作り出し、その実践としてより「新しい」詩を作り出すという発想そのものは、表現形式である「詩」の成立から現代詩に至るまでの詩の動きの底流を長い間ながれ続けてきたものと深い関係にあると言えるであろう。

結論的に言えば、「詩と詩論」の同人たち、特に春山行夫が根底に持っていた詩的行為に対する態度とは、新しい理論を作り出すという主知的な行為と、詩を作り出すという行為を分離し、前者を強調することによって、詩の行為の変革と進化を唱えていく態度であったと言うことができるであろう。そして、その新しい理論を作り出すために多くの理論が必要であったのである。このように考えてみると、「詩と詩論」の場に於いて、様々なヨーロッパの詩精神が共存したという意味も理解できる。つまり、「詩と詩論」はあくまでもヨーロッパ出自の同時代に於ける、新しい詩の理念を理論あるいは方法として取り入れようとしたのであり、その理論を探究することによってより新しい理論を求めようとしたのである。このような「詩と詩論」の意識は、確かに多くの理論を、換言すれば、同時代に於いて世界的に存在する理論を共存させる場を提供し、詩の「方法」の領域を開拓したという点に於いて、一つの意義が認められるかもしれない。しかしここで問題となるのが、その場に於いて、理論の根底に存在する、或いは、理論に先立って存在すべき詩的

実践というものが「詩と詩論」に於いては軽視されたという点である。ここに理論そのものに対する偏った考え方の負の側面を認めざるをえないのではないであろうか。

つまり、このような態度は、理論というものが生まれてくる背景そのものを捉えることができない。未来派であれ、シュールレアリスムであれ、そうした詩の理念や方法が生まれてくる背景には、必ずその理論が生起する風土や歴史に生きた詩人たちの思想や感情、さらには詩的実践が根付いている。そうした詩人たちの生に基づく、理論に先立つ経験や詩的経験は、理論そのものだけに注目する意識では切り捨てられてしまうのである。そして、理論の根底にあるはずの詩人の詩の「ことば」の実践は、理論を対象としてしか捉えることのない意識では忘れ去られていくだけでなく、そうした詩意識のもとでは、本来あるべき「ことば」とその主体である詩人との密接な関係も忘れていくことになるのである。

このことを逆に考えれば、風土や歴史、あるいは生や経験という詩の根本的要素と理論を切り離してしまうことが、「詩と詩論」に於ける諸流派の共存を可能にした一因であったとも言えるかもしれない。このような態度は、「詩と詩論」の同人たちが、如何に詩を書くのかという方法論的な問いに執心し、詩とは何か、或いは詩人とは何か、という詩の根本的な認識、さらには、なぜ詩人が詩を書くのか、われわれにとって詩とは何か、という詩の「ことば」とそれを紡ぎ出す主体との関係に関わる問いを立てなかったという事実からも明らかである。なぜ「私」は未来派なのか、なぜ「私」はシュールレアリスムなのか、という詩的行為の主体性に関わる問題は全く排除され、非主体的なままに西欧の詩意識が受け入れられ、理論から詩へと移る詩の行為だけに焦点が当てられたのである。そして、結局は日本のモダニズム詩人たちは、あらゆる種類の詩の理念や方法を自由に受け入れることができる詩人の内面を作り出すのであり、それは愛国主義・軍国主義という理念をも後には容易に受け入れる基盤を作ったと言うことができるであろう。

ところで、鮎川信夫をはじめとする「荒地」派詩人が戦前に於いて、以上述べてきたような進化論的な思想が根本に流れ続けているモダニズム詩の先端で育ったと

いうこと、つまり、詩誌「詩と詩論」をその起点とし、これまで考察してきたような詩意識を継承していく、雑誌「文学」、詩誌「詩法」、詩誌「新領土」というモダニズム詩運動の流れに関わって彼らの初期の詩的活動を進めていったということは、戦後に於ける彼らの詩的活動、特にモダニズム詩批判を考える上で重要なことである。

なぜ「荒地」派詩人はモダニズム批判を行ったのであろうかという問いは、「荒地」派詩人たちが、戦中、或いは戦後に於いて、戦争という現実の中で生きるということの困難さを通して自覚した詩の認識に関わっている。それは、モダニズム詩あるいは日本の詩そのものが如何に詩の「ことば」そのものと詩人の思想性や生きるということをバラバラなものにしたてきたかという詩人の主体性に関わる先鋭な意識に拠るものと考えてよいかもしれない。そして、こうした戦争体験による詩観の変化は、「荒地」派詩人の日本近現代詩史を見通すための根本的な視座そのものをも変えていったと思われる。

> 僕は嘗て日夏耿之介氏著『明治大正詩史』上下二巻を読み終ったとき、実に奇妙な印象を受けた覚えがある。『浪漫派』だとか『後期頽唐派』とか『象徴主義』といふ流派の移り変りがめまぐるしく説明してあるのだが、最も重要な何かが抜けてゐるのである。僕はわが国の詩の不具性を、この書物ほどみごとに表はしてゐる例を知らない。では何が抜けてゐるのか。それは思想だ、といふことはたやすい。だが、『思想だ』と云った瞬間に、沈黙する人は極めて少い。そして無益無用の注釈をだらだらと述べて安心するだけだ。さうした悪習の伝統が目に見えずに続き、戦争によって根本的な欠陥を暴露してしまったのかもしれない。[19]

「荒地」派詩人によるモダニズム詩批判の発端になった北村太郎の「空白はあっ

19　北村太郎「空白はあったか」、「孤独への誘い」、「純粋詩」（1947年3月）。吉本隆明編『現代詩論体系』第1巻に再録（東京、思潮社、1980年）、26-32（26-27）頁。

たか」における上の言表には、戦後の「荒地」派詩人の日本近現代詩史を見通すための根本的な視座が明確に存在していると言えるであろう。

上の記述で言及されている日夏耿之介の『明治大正詩史』は、明治、大正における近代詩の動向を探った、現在でも日本の近代詩史を考える上では欠かせない基本的な書物である。『明治大正詩史』は、最初、上巻が昭和4年1月に、下巻が同年11月に新潮社から出版され、昭和11年8月には普及版（新潮社）が刊行された。さらに、三巻からなる改訂増補版（巻ノ上昭和23年12月、巻ノ中昭和24年5月、巻ノ下昭和24年11月）が東京創元社から刊行された。北村太郎が読んだと思われるのは、昭和4年刊行の『明治大正詩史』か、あるいは昭和11年の普及版のどちらかであろう。筆者の手元にあるのは改訂増補版の第四版（昭和46年発行）であるが、その「巻ノ上」にある、「昭和三年十一月七日」の記載をもつ「明治大正詩史序」には、次のようなことが書かれている。

> 明治大正新詩発達の回顧は、一面稀世の大詩家の存せざりしが故の寂寥感とともに、二千五百年間の文学史上かつて存せざりし新感情新詩趣の鮮らしき形式に於ける誕生とその踏舞とを目のあたりにする事により、預言的なる日本民族の芸術の処女地の開拓が、全く新らしき文学価を近き将来に於てもたらし来るであろう豫嗜を味ははしめる。[20]

ここで日夏耿之介は「日本民族の芸術の処女地の開拓が、全く新らしき文学価を近き将来に於いてもたらし来るであろう」という展望のもとに、「草創前期」、「草創後期」、「浪漫前期」、「浪漫後期」、「頽唐初期」、「象徴前期」、「大正混沌詩壇」、「大正摂政時代」など、様々に「色分け」された時期に隆盛衰微する種々の詩の展開を、光栄ある「踏舞」として認識している。そして一方でそうした

20　日夏耿之助『明治大正詩史』第1巻、第4版（東京、東京創元社、1971年）、1頁。

視点と対照的なのが、その「踏舞」に対して「最も重要な何かが欠けてゐる」と感じ、さらにはその「不具性」を見ている、北村太郎の先の発言に象徴されるような、戦後の「荒地」派詩人の視点であろう。こうした日本の「詩」の伝統が一体何を意味しているのかという問題は、当然、「詩」がいわゆる進化していく過程において問われなければならないものであったが、それが問われたのは第二次大戦後の「荒地」派詩人によるモダニズム詩批判においてであった。この点に関して本論文第２章第２節で議論する「荒地」派詩人による戦争責任論を基軸にしたモダニズム詩批判は、日本の「詩」が歩んできた歴史全体に対する批判的な視野も含まれていると言うことができるであろう。

第１章第４節

「荒地」派詩人の戦前の活動　－鮎川信夫の場合－

本章本節では、第１章の第２節および第３節で明らかになったと思われる日本の第二次大戦前における詩的風土の中で、「荒地」派詩人がどのように、彼らの戦後における詩的創造の本質、即ち、自らの実存的な基盤に基づいて詩的言語を紡ぎ出すといった創造行為に通じる基盤を築き上げていったのかという問題を、戦後「荒地」派詩人による運動の理論的支柱になるだけではなく、指導的役割も果たすことになる鮎川信夫を中心にして、戦前における「荒地」派詩人たちの活動の実態を明らかにしながら考察してみたい。「荒地」派詩人の戦後の主体的な詩的行為は、戦後の彼ら自身によるモダニズム詩批判や戦争責任論の展開を経てより確固たるものとして深められるものであるが、こうした戦後の批判的活動の根拠となった日本のモダニズム詩に対する懐疑や批判的な視点は、第二次大戦前に既に彼らの詩的精神の中に、明確にではないにしろ、その萌芽は存在していたと思われる。自分自身のことばで現代という時代に生きる自己のために詩を創造したい、という詩に対する主体的なひとつの願望があったからこそ、「荒地」派詩人は、「自己」の為にではなく「国家」のために自己のことばを変質させ歪曲させて、それを紡ぎだすという詩的行為に対して拒絶感を抱いたのであり、こうした戦中における日本の詩人たちの詩的行為の中に、詩的主体の実存的基盤の脆弱さを読みとり、戦後、彼らはモダニズム詩に対して完全に決別していく態度を提示するのである。しかし、この主体的な詩的行為を明確に意識させたのは、皮肉にも、「戦争」という彼らを取り巻く閉塞的な状況であった。自我の拡充を目指し、創造行為への、詩を作ることへのあくなき願いを持った若き日の「荒地」派詩人たちは、どのように戦争という外的な抑圧下において、自己自身の詩的行為を省察することによって、主体的な詩のことばを捉えていったのであろうか。それは、「荒地」派詩人にとっては、戦前において彼らが獲得したモダニズム詩的な「ことば」を完全に失っていく過程であったと言うことができるかもしれない。

（１）

鮎川信夫（本名：上村隆一）は、大正9（1920）年8月23日、父、上村藤若、母、幸子、ともに福井県大野郡出身の両親の長男として、東京・小石川・高田豊川町に生まれた。[1]

大正9年といえば、ドイツ、フランスを経て日本に亡命してきたロシア未来派の詩人でもあり画家でもあったブルリューク(David Burliuk, 1882-1962)を招いて、「ロシア未来派展覧会」が日本で開催された年である。千葉宣一の言葉を借りれば、「ロシア未来派展」における「五〇〇余点に及ぶタブローの、原色と黒のダイナミックに交錯した異様な色調の戦慄美は、新時代の芸術を待望し、未来派を始めとするヨーロッパのアヴァンギャルディスムへの幻想と期待を、従来、断片的な文献・情報を通して抱いてきた若い世代に、カフェイン的衝撃を与え」たのであるが[2]、これ以後、未来派、ダダイズム、シュルレアリスム、表現主義など一般にモダニズムと称されている芸術運動の理念と方法が、近代化が進む「東京」を中心に移植され育てられて行くことになる。神原泰が、大正10（1921）年１月に開催される「神原泰第１回個人展覧会」のために、「第１回神原泰宣言書」を執筆したのも、大正9年である。「画家よ去れ画論家よ去れ！　芸術は絶対に自由なり。詩もなし、絵画もなし、音楽もなし、有るものは唯一つの創造のみ。芸術は絶対に自由なり。其の様式の自由も亦絶対なり、神経も理知も感覚も音も香も色彩も光も欲望も運動も圧力も－更らに総てのものゝ最後として真実の生命そのものも、一物として、芸術の内容たり得ざるは無く、如何なる素材も、如何なる様式も、創造の途に

1　本論文における鮎川信夫の史実に関しては、牟礼慶子『鮎川信夫－路上のたましい－』（東京、思潮社、1992年）、特にその巻末に付された「鮎川信夫年譜（1920～1986）」を参考にした。

2　千葉宣一「アヴァンギャルド詩運動と大正詩の崩壊－未来派の詩的動態を中心に－」、327頁。

無用なるものなし」という内容を第１条に掲げた「第１回神原泰宣言書」は、「ロシア未来派展覧会」の影響から書かれたものであった。[3]　このように若い世代の詩人たちがヨーロッパの前衛運動に自己を没入させていったのに対して、前世代の既成詩人たちが中心となる、大正詩壇の公器的存在になった詩雑誌「日本詩人」（大正10年10月-15年11月）が創刊されたのは、その翌年の大正10年であった。さらに、日本のプロレタリア文学時代の始まりと一般的には考えられている雑誌「種蒔く人」（第一次：大正10年2月－4月、再刊：大正10年10月－12年8月）が東京で創刊されたのも、鮎川信夫が生まれた翌年の大正10年であった。このように鮎川信夫が生まれた大正9年は、その後、「東京」を中心に展開される詩のことばの騒乱の時代の幕開けを予感させる時であったのである。そして、こうした様々な詩人の意図や西欧出自の思想に基づいた詩のことばが飛び交うことになる東京に、関東大震災が起こったのは、大正12（1923）年9月であり、その時、鮎川は３歳であった。

東京の大半を壊滅状況に陥らせた関東大震災の起こった大正12（1923）年は、「荒地」派詩人にとって一つの大きな意味を持った年であると言うことができる。戦後の「荒地」派詩人の主要なメンバーのひとりになる田村隆一が、「荒地」派詩人の若い時代のことについて実証的に回想を交えながら語った貴重な著書『若い荒地』は、その「一九二三年」と題する章から始まっている。

> 一九二三年（大正十二年）の三月のある朝、ぼくは東京の大塚に生まれた。その半年後、関東大震災によって、東京の旧市内の大半は壊滅する。一九二三年の詩的状況はどうか？　その前年の二二年、ムッソリーニがファシスト内閣をつくった年に、Ｔ・Ｓ・エリオットの詩集『荒地』が刊行され、ライナー・マリア・リルケをはじめて日本に紹介した森鴎外が死去。二三年、ヨーロッパ

3　古俣裕介『＜前衛詩＞の時代－日本の1920年代－』、21頁、に引用されている「第１回神原泰宣言書」を参照した。

の放浪生活からかえってきた金子光晴が『こがね蟲』を、高橋新吉が『ダダイスト新吉の詩』を刊行。草野心平、中華民国広州の嶺南大学に留学中。岡本潤、川崎長太郎、壺井繁治、萩原恭次郎が詩誌『赤と黒』を創刊。村野四郎は、慶応大学の経済学部の学生であり、西脇順三郎はオックスフォード大学で中世紀英文学を専攻していた。北園克衛は、この年から詩・絵画・演劇の前衛運動に加わる。鮎川信夫は東京小石川で三才、北村太郎は浅草で一才、木原孝一は本所で一才、三好豊一郎は八王子で三才、中桐雅夫は神戸で四才、黒田三郎は鹿児島で五才、ぼくは０才。吉本隆明は母の胎内にあった。[4]

鮎川信夫が誕生した大正9年に予感された日本における新しい詩の「ことば」の種子が、三年後の関東大震災の起こる大正12年には、徐々に成長しつつあったことは、上記の田村隆一の文章から明らかであろう。そして、まだ幼少ではあったとしても、関東大震災がもたらした荒廃の地であると同時に、新しい詩の「ことば」の地でもあった「東京」を中心に、あるいはそこから広がる「日本」という土壌に、後に「荒地」派を形成する主要なメンバーが、すでにこのとき、「小さな生命」をはぐくんでいたということは重要なことであると思われる。

鮎川信夫の父親は、早稲田大学英文科と日本大学政経科を苦学して卒業後、大正13年、14年頃から、「向上の友」、「村を護れ」などの青少年向けの修養機関雑誌の編集発行の仕事を自宅で行っていて、そのこともあって、鮎川が文章を書き始めたのはとても早い時期であった。

私がものを書きはじめたのは、小学校六年生の頃からである。詩は書いたことがなく、もっぱら子供を主人公にした短かいストーリー風の作文を書いていた。たまたまその一つが父に発見され、当時父が編集発行していや駅売りの旬刊誌『ほがらか』という薄っぺらい四六倍判の雑誌に掲載されたことがある。

4　田村隆一　『若い荒地』（東京、思潮社、1968年）、9頁。

藤原隆一という筆名で、妹の章子の挿絵がつけられていた。5

良きにしろ悪しきにしろ、「ものを書く」という行為ための外的環境が整っていた鮎川信夫は、その後も、しばしば改題を繰り返す父親の雑誌の編集を手伝いながら、原稿を書かされていたようである。このような少年時代における家業の雑誌編集の手伝いを通して、鮎川信夫は、すでに、「書く」という行為の主体にかけられる外圧と、その外圧を生み出している時代的な閉塞を、少年期独特の好奇心旺盛な眼で目撃し、自らの膚で感じていた。

当時でも検閲はきびしいもので、注意されたり削除されたりすることがよくあった。まだ中学生だった私にとって、時々警官が配達してくる「記事差止」の通知書をのぞくのは、スリリングなたのしみの一つで、この世の裏側で何が起っているかを空想する手がかりを与えてくれた。6

「書くこと」に対してこのように早熟であった鮎川が、「投書雑誌などで他人の詩を読み、こういうものならおれにも書けそうだ、ぐらいの気持ちで」、＜詩を読むこと＞と＜詩を書くこと＞に興味を覚えたのは、「中学の一、二年の頃」である。7　鮎川信夫が詩の「ことば」に赴いた背景には、これから始まる激動の時代の暗い跫音を象徴する２・２６事件に「異常な関心」を抱かざるを得なかった環

5　鮎川信夫「最初期詩篇についての感想」、　『鮎川信夫』、新選・現代詩文庫　101（東京、思潮社、1977年）、100-44（101-02）頁。

6　鮎川信夫「小自伝」、『鮎川信夫著作集』第８巻、近作（東京、思潮社、1976年）、295-297（296）頁。

7　鮎川信夫「現代詩との出合い」、『鮎川信夫著作集』第２巻、詩論　（東京、思潮社、1973年）、337-51（337）頁。

境[8]、「青少年向きの修養雑誌」を出し、「自由思想を嫌っていた」父の「骨肉とか郷土とかに根ざした」農本主義的な思想の下での家庭生活[9]、さらには、教室の中に「大和魂」が介在してくる学校生活など、鮎川信夫を取り巻く当時の現実があったように思われる。何処に行っても自己が徐々に抑圧されてくる状況の中で、鮎川信夫は、そこなら安全だというふうに、詩の「ことば」に赴いていったのではないであろうか。仲間の少年達との「隠れんぼ」遊びで、「ほとんど天才的な霊感によって、この上もない隠れ場所」[10]を発見したように、鮎川信夫は、「詩」を自己の隠れ場所とし、そこに「感性的な解放」[11]としての「人にかくれた少年のひそかな遊び」[12]を求めようとしたのではないであろうか。

その「人にかくれた少年のひそかな遊び」の中で、鮎川信夫が出会ったのは、生田春月と萩原朔太郎であった。

> それから、一、二年は、無我夢中だったといってよい。でたらめに読み、でたらめに書いていた。手あたり次第、有名人に感心し、少しずつその真似をしてよろこんでいた。人にかくれた少年のひそかな遊びにすぎなかったが、むろん、詩ばかり読んでいたわけではない。小説もずいぶん読んだ。しかし、小説は、いくら面白くても、ただそれだけで、持続的な感銘を受けるというようなことはなく、たいてい読み捨てで終わった。

8　鮎川信夫「小自伝」、『鮎川信夫著作集』第８巻、296頁。「小学校五、六年頃住んでいた大久保百人町の家は、建坪が百五十坪もある大きな家であったから、二階んお部屋全部を人に借していた。二・二六事件の山口一太郎がその一つを事務所として使用しており、いわゆる青年将校が集まっては高級な酒を飲み、気焔を上げたりしていた。そんな関係から、二・二六事件が起ったとき、私は中学二年であったが、この事件に異常な関心を抱いた。」

9　鮎川信夫「凌霜の人」、『鮎川信夫著作集』第８巻、176-79（177-78）頁。また、鮎川の権力や外圧に対する嫌悪は、父の影響が大きいと思われる。「外面的には温和な人格者だったが、dictator の完全な見本のような人物であった。／私の考え方感じ方は、少年の頃からほとんどこの父に抵抗するようなかたちで育っていった。それゆえ、大学の予科に入る頃にはファッシズムに対する嫌悪などは、ほとんど生理的なもの、といっていいほどになっていた。その意味では、父の影響は絶大であった。」鮎川信夫「「戦中手記」後記」、『鮎川信夫著作集』第７巻、戦中作品（東京、思潮社、1974年）、293-306（304）頁。

10　鮎川信夫「隠れ場所」、『鮎川信夫著作集』第８巻、60-62（60）頁。

11　鮎川信夫「最初期詩篇についての感想」、『鮎川信夫』、104頁。

12　鮎川信夫「現代詩との出合い」、『鮎川信夫著作集』第２巻、337頁。

そうした私の少年時代のとりとめのない耽美的乱読癖にとどめをさしたのは萩原朔太郎であった。橙色した新潮文庫の薄い一冊が、当時の私の心に惹き起した驚愕は、たとえようもないほどだった。私はたちまち、朔太郎の詩句に特有な病的感覚の魅力のとりこになってしまった。三日に一つぐらいのわりあいで朔太郎ばりの詩を書き、朔太郎のような詩人になりたいと念願した。[13]

この引用は、エッセイ「現代詩との出合い」の中で、自己の詩的経歴の最初期について鮎川が回想している部分である。萩原朔太郎から受けた詩的影響については、他のエッセイの中でも鮎川自身によって言及されている。1963年に書かれた評論「朔太郎考」には、「萩原朔太郎の影響を受けたのは、十三、四の頃だったと思う」[14]とある。評論「西脇順三郎」の中でも、西脇の詩の「ことば」に衝撃を受ける前に、「中学二年で萩原朔太郎の詩集を手にし、衝撃を受けた」[15]と語っている。このことから、鮎川信夫が中学２年の頃に、萩原朔太郎の詩に対して大きな関心を持っていたことは明らかであろう。また、評論「西脇順三郎」には、「中学１年の頃、私は生田春月の詩が好きで、もっぱら春月ばかり読んで、その感傷性におぼれていた」[16]という記述から、「耽美的乱読」をしながらも、鮎川はある種の詩への嗜好をもって、中学１年の頃から、詩を読んだり書いたりしていたと推測することができるであろう。

「詩に興味を覚えるきっかけを作ったのが朔太郎だったと言っても、私の場合、過言ではない」[17]と強調する鮎川は、評論「現代詩との出合い」では、朔太郎の詩集『月に吠える』の中にある詩作品「地面の底に病気の顔」の全詩行をひきなが

13　前掲書、337頁。

14　鮎川信夫「朔太郎考」、『鮎川信夫著作集』第４巻、詩人論（東京、思潮社、1974年）、72-77（72）頁。

15　鮎川信夫「西脇順三郎」、『鮎川信夫著作集』第4巻、詩人論、82-86（82）頁。

16　前掲書、82頁。

17　鮎川信夫「朔太郎考」、『鮎川信夫著作集』第４巻、72頁。

ら、「どうしてこのような詩が、少年の心を捉えてはなさのかったのかわからない」[18]と言っているが、エッセイ「朔太郎考」では、朔太郎の鮎川自身に与えた衝撃について、鮎川が村野四郎の言葉を借りて分析している箇所がある。

> 昨年、『無限』12号で萩原朔太郎の特集をした。その中の座談会「萩原朔太郎の世界」で村野四郎が「今も病理学的という話がでたけれども、やはり子供心にも、人体解剖図など見せられると、非常にショックを受けるでしょう。ああいうものからくる、あばかれた人間の秘密といったものに近いショックをまず受けたな」と語っているが、私の場合の衝撃もそれに近かったような気がする。[19]

鮎川信夫は、萩原朔太郎の詩集『月に吠える』の中で、特に当時、彼に新鮮であった詩として「地面の底の病気の顔」、「竹」（二篇）、「蛙の死」、「春夜」、「猫」、「くさった蛤」、「愛憐」、「恋を恋する人」の９篇の諸詩を挙げている。その中でも、上の引用にあるような「衝撃」は、次のような詩句に見られる、生命あるものが本来隠している部分、それ故にグロテスクでエロティックな部分が暴かれたことに対する一種の反応であると考えられる。

> 地下には竹の根が生え、
> 根がしだいにほそらみ、
> 根の先より繊毛が生え、
> かすかにけぶる繊毛が生え、
> かすかにふるえ。　　（「竹」より）[20]

この蛤は非常に憔悴れてゐるのである。

18　鮎川信夫「現代詩との出合い」、『鮎川信夫著作集』第２巻、338頁。

19　鮎川信夫「朔太郎考」、『鮎川信夫著作集』第４巻、72頁。

20　萩原朔太郎、三好達治選『萩原朔太郎詩集』改版（東京、岩波書店、1981年）、80-81（80）頁。

みればぐにやぐにやした内蔵がくさりかかつて居るらしい、
それゆゑ哀しげな晩かたになると、
青ざめた海岸に坐つてゐて、
ちら、ちら、ちら、ちらとくさつた息をするのですよ。
（「くさつた蛤」より）[21]

生命、人間、あるいは人生に対して、「漠然たる畏怖の念とともに好奇心をあわせ持ち」[22]、その内部や内面、あるいは隠れた部分を知りたいという少年の欲求とは対照的に、外圧に悩まなければならない少年の一時期には、確かに、朔太郎の詩は独特の魅力があるかもしれない。そして、それは、人間の性に対する欲望へ結びついたときには、少年の官能を目覚めさせることになるのかもしれない。

ここにはつりがね草がくびをふり、
あそこではりんどうの手がしなしなと動いてゐる、
ああわたしはしつかりとお前の乳房を抱きしめる、
お前はお前で力いつぱいに私のからだを押へつける。
さうしてこの人気のない野原の中で、
わたしたちは蛇のやうなあそびをしよう、
ああ私は私できりきりとお前を可愛がつてやり、
おまへの美しい皮膚の上に青い草の葉の汁をぬりつけてやる。
（「愛憐」より）[23]

わたしはくちびるにべにをぬつて、
あたらしい白樺の幹に接吻した、
よしんば私が美男であらうとも、
わたしの胸にはごむまりのやうな乳房がない、
わたしの皮膚からはきめのこまかい粉おしろいのにほひがしない、

21　前掲書、134-34（135）頁。

22　鮎川信夫「朔太郎考」、『鮎川信夫著作集』第４巻、74頁。

23　萩原朔太郎『萩原朔太郎詩集』、140-41（41）頁。斜体字の部分は、参照した原文においては傍点が付されている。

わたしはしなびきつた薄命男だ、
ああ、なんといふいぢらしい男だ、
けふのかぐはしい初夏の野原で、
きらきらする木立の中で、
手には空色の手ぶくろをすつぽりとはめてみた、
腰にはこるせつとのやうなものをはめてみた。
襟には襟おしろいのやうなものをぬりつけた、
かうしてひつそりとしなをつくりながら、
わたしは娘たちのするやうに、
こころもちくびをかしげて、
あたらしい白樺の幹に接吻した、
くちびるにばらいろのべにをぬつて、
まつしろの高い樹木につがりついた。　　（「恋を恋する人」）[24]

「この世」の裏側で何が起こっているのか、生命の隠れた部分がどうなっているのか、そして、人間の内側がどうなっているのか、といった問いを常に持ちながら、世界を拡大していこうとする少年鮎川は、後にその眼を自己と、「感性的な解放」のための「詩」そのものの世界に向けることになる。詩の世界の内側が一体どうなっているのか、といった関心をもって詩を読む鮎川の眼は、当然、一つの詩的世界にとどまってはいない。かくして、萩原朔太郎の詩句から受けた影響は、「比較的短期間のうちに」、鮎川信夫の心の中から消え去ってしまうのである。[25]　というのも、鮎川は西脇順三郎の詩に接して、「それまでに知っていた詩の世界とは、全く別種の詩の世界にふれるオドロキを味わっ」てしまうからである。[26]

西脇順三郎の詩の世界は、鮎川にとって、「じめじめした朔太郎の日本的な抒情の世界とはちがって、明るく透明な、異国的感覚にあふれた抒情の世界」であっ

24　前掲書、142-43頁。斜体字の部分は、参照した原文においては傍点が付されている。

25　鮎川信夫「朔太郎考」、『鮎川信夫著作集』第４巻、72頁。

26　鮎川信夫「西脇順三郎」、『鮎川信夫著作集』第４巻、82頁。

た。[27]

天気

（覆（くつがへ）された宝石）のような朝
何人か戸口にて誰かとさゝやく
それは神の誕生の日。[28]

西脇の詩集『Ambarvalia』の「ギリシア的抒情詩」という総題を有した冒頭の詩作品「天気」を読み、「どんな朝ともちがったまぶしい朝、見なれぬ神をむかえたオドロキ」と「啓示を受けたような」感じを受け取った少年鮎川が、西脇順三郎の詩句に触れたのは、中学３年の頃であった。[29]　世界を拡充しようと試みていた鮎川信夫が、西脇の詩の世界に、「日本」という土壌に縛られた日本的感性からなる詩とは違った、「明るい、エキゾティックな感覚の詩の美しさ」を見出し、それに魅惑されたのは当然であったかもしれない。[30]　というのも、鮎川が目指していた「感性的な解放」は、自己の周りにある日本的なものからの解放をも意味していたからである。あらゆる日本的なものから解放されたいという希求は、西脇の詩の世界に存在する「異国」的なものへの憧れへと転じていく。それは空間的に「日本」から脱し「異国」にありたいという願望に繋がる。鮎川が西脇の詩に惹かれたのは、それだけではなかった。西脇の詩の世界にある詩的世界の純粋性、「薄暗いところから、いきなり日光の戸外につれだされたようなとまどい」を感じさせる「明るく透明な、異国的感覚にあふれた抒情」性は[31]、暗く閉ざされ抑圧された現実か

27　鮎川信夫「現代詩との出合い」、『鮎川信夫著作集』第２巻、339頁。

28　西脇順三郎『西脇順三郎』、現代詩文庫1016（東京、思潮社、1979）、10頁。

29　鮎川信夫「西脇順三郎」、『鮎川信夫著作集』第４巻、82-83頁。

30　前掲書、82頁。

31　鮎川信夫「現代詩との出合い」、『鮎川信夫著作集』第２巻、339頁。

ら鮎川の感性を上昇させることによって解放させるのに、あまりにも魅惑的であったのである。つまり、鮎川は、西脇順三郎の詩を読むことによって、自らの感性を空間的に横の軸で解放する方途、即ち、「日本」から「異国」へと解放する方途と、空間的に縦の軸でそれを解放する方法、つまり、「現実」から「超現実」へと解放する方法を見つけだしたのであり、その「感性的な解放」に結びついた詩的世界というものを求めるようになるのである。そして、ここにモダニスト鮎川信夫の出発点があると言うことができるかもしれない。

> いろいろ説明する間もないくらい、とつぜん、私は眼を転じてしまったのである。季刊『詩と詩論』の第何冊目であったか、それは忘れたが、とにかく古本屋で一冊見つけて買ってきた。詩も評論も、難しくてよく分からなかったが、私は萩原朔太郎をやめて、たちまちこちらに転向してしまったのである。以来、私は本質的にはモダニストである、—と自分では思っている。
>
> なぜ、モダニストになったか—これも答えにくい。気がついたときは、生田春月から萩原朔太郎までの影響をはらい落して、モダニストになっていたのである。[32]

鮎川がはじめて西脇順三郎の詩を読んだ中学３年の頃、彼は、詩誌「詩と詩論」を通じて、T.S.エリオットの名前を知った頃である。西脇について言えば、鮎川は、西脇の名前も T.S.エリオットの名前と同様に「詩と詩論」を通して知ったのではないかと推測できる。そして、ここで重要な事柄は、鮎川が西脇の詩との出会いをきっかけにして、その関心の中心を、「日本」から「異国」である「西欧」へ、「東京」から「ロンドン」あるいは「パリ」へ、横の軸に沿って移行させるだけではなく、縦の軸に沿って、「現実」から「超現実」の世界へ移行させていることである。かくして、若きモダニスト詩人鮎川信夫の詩的活動は、詩の習作時代から、

32　前掲書、339頁。

投稿詩時代へと移るのである。

（２）

鮎川信夫が自らが書いた詩を、初めて文芸誌に投稿したのは、昭和12（1937）年、鮎川信夫１７歳の時であった。早稲田中学４年修了後、同年４月に、鮎川信夫は、早稲田大学文学部予科である早稲田第一高等学院に進学したばかりであったが、自分が創作した詩作品を文芸誌の投稿欄に送ったり、戦前に於いて若き「荒地」派詩人たちが結集し彼らの詩作品の主要な発表の場になった同人誌「LUNA」のメンバーに加わるなど、戦前の鮎川信夫の詩的活動は、この年の９月頃から本格的なものになっていく。鮎川信夫が初めて自らの詩を投稿したのは、大正14年10月に若い女性向け雑誌「令女界」の姉妹誌として宝文館から発行され、その後、文壇における新しい潮流からの新人を執筆人として迎えたり、読者からの作品の懸賞募集をし、無名の人の投稿作品を掲載することによって、文学の領域に新風を送った文芸誌「若草」の読者文芸欄にであった。鮎川が投稿した「寒帯」と題された詩作品は、その後、大正後期の詩壇において公器的存在としての役割を果たした「詩話会」の機関誌である詩雑誌「日本詩人」を萩原朔太郎とともに編集し、さらには詩雑誌「詩之家」（大正14年7月－昭和7年1月）を主宰し新人育成に大きく貢献した詩人佐藤惣之助によって、「佳作」に選ばれ、文芸雑誌「若草」９月号に掲載された。

寒帯

鋲靴をはいて
駈けてゆく
雲の上を。

月を支える
白い標識棒は
倒れた。
風は氷河に、吹き荒さんだ。

あおく、つめたく……

青い魚が跳ねると
沼の静けさが、かへつてきた

―やがて北極の合唱が、
雲にのり、風にのつて。[33]

この詩で表現されている世界は、「寒帯」というテーマからわかるように、人間の気配が全くしない、地球の極点である「北極」に広がる世界である。それを鮎川は、自らが生きている世界の上方に位置すると考えることによって、その世界を獲得している。この詩作品は、当時の鮎川の詩的世界の風景を知る上で重要な作品である。それは、「雲の上」にあるという点で、非現実的であると同時に、観念的な世界であるが、それに「寒帯」という具体的な形象を与えることによって、その詩的世界は、「青」を基調にした、静寂と冷たさによって秩序づけられた、一種の「氷」の純粋性を保ち得ている。このように若き詩人鮎川が、北極点に広がる「寒帯」や「雲の上」の世界など、自分が生きている現実から遠く離れた世界に鮎川自身の詩的世界を結びつけ、それを詩のことばで形作っていく背景には、自己を現実から解放し、そうした世界に自己を投影させようとする鮎川の願いが存在している。牟礼慶子の言葉を借りれば、この詩には、「年齢が加わるにつれて、だんだんに厳しくなってくる世間の掟や、父君の叱責などから解き放たれて、遠い自由な世

33　鮎川信夫『鮎川信夫全集』第１巻、全詩集（東京、思潮社、1989年）、534-535頁。本論文において、鮎川信夫の詩作品については、全て同書のものを参照、引用した。

界へ飛翔しようとする」少年鮎川自身の願望が存在しているのである。[34] こうした自己を取り巻く現実には、当然、同年7月7日に起こった蘆溝橋事件から中国侵略の第二段階へ突入していたという日本の現実も含まれていると考えられる。様々な側面から鮎川の存在にずしりとのしかかってくる現実から逃れたいという願望から、現実とは異なった世界を求めていった所に、それ以後、「異国」といった当時の日本とは違った現実を有していた世界、具体的には、「ヨーロッパ」に興味を覚えていくことになる内的欲求の源泉や、あるいは、自己の詩的世界を他の詩人の詩的世界を知ることによって拡大していこうとする創造的な活力の源があるように思われる。

少年鮎川による現実からの脱出は、夕暮れあるいは夜に行われる。昼間の太陽の強い陽射しに照らされた現実の世界が、夕闇によって徐々にその痕跡を消しにかかるとき、鮎川は、もう一つの世界を強烈に希求する。夕暮れや「月」の青白い寂光は、昼間の学校生活や家庭生活などによって束縛・抑圧されていた鮎川の自己を解放し、解放された自己は、その弱光にあたかも沿うように、その「白い標識棒」を伝って上昇していく。そして、その「白い標識棒」が「倒れた」ことによって、解放された自己は、もう一つの別な世界の中にいる。「月を支へる／白い標識棒は／倒れた。」という詩の一節は、明らかに、現実の世界と鮎川の詩的世界との関係が絶たれことを意味する。かくして、鮎川は、自己の詩の世界を、現実との関わりを一切もたない「非現実」な詩の空間を手に入れるのである。そうした現実的な汚れや醜さを一切持たない、クリスタルのような世界のなかで、この詩にはことばとして現れていない「私」が「鋲靴をはいて」、「雲の上を」「駈けてゆく」のである。

ところで、この詩作品「寒帯」は、鮎川信夫が、初めて「鮎川信夫」という筆名を「創作」し、それを使って発表した作品であるという点でも重要な意味をもった作品である。先にも述べたとおり、鮎川信夫は、「出版業」という家業に携わって

34　牟礼慶子『鮎川信夫－路上のたましい－』、35-36頁。

いたために、「たくさんの筆名を用いて書く習慣を早くから身につけていた」。[35] 小学校６年生の頃に書いた「子供を主人公にした短いストリー風の作文」が鮎川の父に発見され、当時、それが鮎川の父親が編集発行していた旬刊誌「ほがらか」に掲載される際に付けられた、「藤原隆一」という筆名を始めとして、昭和10年か11年の頃、小説「小部落の子供たち」という作品を鮎川の父が編集発行する予約制の雑誌「村を護れ」に掲載する際に用いた「武村隆太郎」など、鮎川信夫は、その他にも筆名を「四つか五つ使っていろいろな原稿を」書いていた。[36] そうした沢山の筆名を用いて書くという習慣を身につけてしまっていた自分自身に対して、鮎川は「うんざりし」、「鮎川信夫という筆名を創作することによって」、１７歳の鮎川は自分なりに「自分の転生」を試みたのであった。[37] 「父の庇護の下に」作品を発表する形式に面白味を感じることが出来ず、さらには、父親の雑誌そのものを「泥臭くて好きになれなかった」鮎川は、「作品を発表する喜びというものを感じたことがなかった」と語っている。[38] ところが、書く行為に対してこのような冷めた態度で接していた鮎川は、自分の詩が初めて文芸雑誌「若草」に掲載された時、全く別の感情を経験するのである。

> それ［詩「寒帯」］が佐藤惣之助に拾われて、佳作欄に組み込まれているのを見たときのオドロキは、今も異様に新鮮である。僥倖をねがって、もしかしたらという気持ちがないわけではなかったけれど、実際に初めて活字化された自分の詩を見たときの感激は、予想をはるかに上まわるものであり、その後、再び味わうことのできない種類のものであったといっていい。気弱な少年であった私は、母に打ち明けただけで人には告げなかったが、毎日そわそわと落

35　鮎川信夫「最初期詩篇についての感想」、『鮎川信夫』、105頁。

36　前掲書、102頁。

37　前掲書、105頁。

38　前掲書、102頁。

着かなくなり、欣喜雀躍というより狼狽というのに近い状態であったと思う。[39]

「自分の作品を活字化することには割合に早くから馴れていた」鮎川が、これほどまでにも大きな感激を、「寒帯」が掲載されたのを見て、味わったのは、そこに「自分の誕生」[40]を見たからであった。それまでの鮎川の「書くこと」の行為は、積極的に自分自身の信条に基づいて自由に主体的に「書く」という行為よりも、むしろ書かされていたと言ったほうが適切であった。自分の好きなれない雑誌に、多くの筆名を用いて様々な文面を書くという行為は、確かに、文章を書く修練にはなったかもしれない。しかし、そうした半強制的な書くことの行為に対して、または、本当の自分ではない自分が書いた作品に対して、鮎川信夫は、何か欺瞞的なものを感じていたに違いない。様々な筆名を用いて書く行為を行ってきた鮎川が、本当の自分に基づいて書く行為を行うには、新しく自己を創造する他はない。さらには、自己のことばを自己のことばとして紡ぎ出すには、詩的言語しかない。このような考えが、少年鮎川が、詩人「鮎川信夫」を誕生させた理由であるように思われるのである。

そうだとすれば、作［「寒帯」］の出来、不出来は大して問題ではない。筆名以上のものを創作していないからである。

鮎は、私にとって幼少期から馴染み深い川魚であった。郷里の石徹白村から福井の方に下りれば、見事な天然鮎の遡上が見られる九頭竜川があり、岐阜の方に降れば、鵜飼で知られる長良川があった。「信」の字は、五常の五番目で、自分にいちばんぴったりの感じがした。あとは画数とかバランスを考えて作った名前である。[41]

39　前掲書、100頁。

40　前掲書、101頁。

41　前掲書、105頁。

このように「鮎川信夫」の筆名との関わりで、詩作品「寒帯」をもう一度みてみると、そこには、あたかも清流のような純粋透明で冷たい詩的世界と、そこに住む「ことば」としての「鮎」とが、詩人の「信」で支えられている構造を読みとることができるかもしれない。

かくして詩人「鮎川信夫」の誕生を文芸雑誌「若草」の読者投稿欄に詩作品「寒帯」が掲載された事実のなかに確認した鮎川は、以後１７歳の１０カ月の間、雑誌「若草」に自らの詩作品を投稿し、選者によって「黄昏（星座に灯りが点り……）」（昭和12年11月号）、「靴」（昭和13年1月号）、「船」（昭和13年3月号）、「霜咲く日」（昭和13年5月号）、「シャボン玉」（昭和13年6月号）が選ばれ、雑誌に掲載された。[42]

詩作品「寒帯」に顕著に現れている非現実的な世界とそれへの飛翔は、それに続いて雑誌「若草」に掲載された鮎川の詩作品でも何度も扱われるテーマになっている。

靴

暮れ残る空に　白蝋色の塔が聳え

一日は甃石の向ふに沈み　町は静かな谷間の中

影が鞠のやうにはずみ　それに合はせて靴が鳴る

やがて子供達は黄色い冠をかぶつた
―お月様の心づくしでありました

42　文芸雑誌「若草」に掲載された1938年以降の詩作品、「靴」、「船」、「霜咲く日」、「シャボン玉」の４篇に関しては、筆名が「伊原隆夫」が用いられているが、そのことについて鮎川は次のように説明している。「昭和12年の秋には、私は中桐雅夫も呼びかけに応じて、当時神戸で刊行されていた同人誌『LUNA』に加入した。それと同時に投書を止めればよさそうなものだが、まだ色気があって、何となく鮎川名を用いることは他の同人に憚りがあるような気がしたので、伊原隆夫の筆名を用いることにした。伊原は私の遠縁の姓の一つである。」（鮎川信夫「最初期の詩篇についての感想」、『鮎川信夫』101頁。）

靴から鳩の翼が生え―
風船のやうに天へ上っていつた

それゆゑ天使達の靴音が
あんなに遠い空から聞えて来るのです　43

船

小鳥たちの森の巣にかへり
お日さまが鐘桜に沈みかゝると
夕焼の空を花で飾つた船がとほる

子供たちは船に揺られて
―小さな白い天使で
鳩のやうに眼を丸くする

船は逃げてゆくお日さまを追ひかけ
白い帆にとうめいな夢をのせ
青い風車をくるくる廻してゆく

―それは天国行きの船です
―子供だけ乗ることが出来ます

杳い地上の寺院の屋根から
おうい　おふい
とり残された子供たちは双手を挙げて
赤い雲の波にあはと消えゆく
花で飾つた船に呼びかけてゐる　44

43　鮎川信夫『鮎川信夫全集』第１巻、539頁。

44　前掲書、543-44頁。斜体字の部分は、参照した原文においては傍点が付されている。

詩作品「靴」は、文芸誌「若草」の昭和13年1月号に掲載された作品であり、牟礼慶子の指摘によると、この詩「靴」は、「若草」誌上で「入選」より更に上位の「推薦」になり、投稿欄ではなく本文に組み込まれ、「影絵によって現はした暮れ方から夜への心象のファンテジイ―然も、必然性も失ってはゐない。」という堀口大学の選評がついていた。[45]　また、詩作品「船」は、文芸誌「若草」の昭和13年3月号に掲載された作品である。

夕暮れや日没は、鮎川の現実から逃れて別な世界へ行くという願望を引き起こす。夕暮れを背景にしながら、少年鮎川は、他の少年たちとともに「鳩の翼」をもった「靴」を履くことによって、あるいは「子供だけが乗ることが出来」る「天国行きの船」に乗ることによって、現世からの脱出を試みる。そして、その脱出が「子供たち」の特権にすることによって、鮎川は大人に対する一つの反抗を試みている。現実の日常の生活の中で、子供達の心を束縛していくのは大人たちである。そうした大人に対して、「いつも漠然たる恐怖感を抱いていた」鮎川が、こうした主として子供を中心とした詩を書くのは、鮎川自身が子供だったからである。しかし、ここで言う「子供」とは、普通の意味の子供ではない。それは、自らが子供であるということを自覚している子供であり、子供が大人、特に両親や教師などから様々な規範を押しつけられ、教育されるといった受動的な存在であるということを自覚している子供なのである。そして、そうした自覚に基づいて、「子供」を抑圧する存在を見極め、「子供」の自由を追求する姿勢は、後の大人になった詩人鮎川が、「詩人」としての自己を抑圧する存在を見出し、自己の詩を書くことの自由を追求する姿勢へと発展していくものなのである。

（３）

45　牟礼慶子『鮎川信夫－路上のたましい－』、42頁。

第二次大戦以前における鮎川信夫の詩的活動は、一般的には、詩作品「寒帯」が文芸誌「若草」に掲載された昭和12（1937）年9月から、鮎川が昭和17（1942）年10月に日本陸軍に入営するまでの約５年間と限定することができる。この期間に、鮎川信夫は、計63篇の詩作品を発表している。こうした鮎川の戦前の一連の詩作品の中で、詩人鮎川の詩に対する創作態度あるいは詩意識がある時期から大きく変わっていく変わりめが二つあるように思われる。その一つめの変化を象徴する詩作品は、「10.20.38」という具体的な日付を含む詩、すなわち、昭和13（1938）年10月20日、すなわち、日中戦争の戦火が中国大陸においてますます拡大し日本軍が広東を占領するその前日に、鮎川が書き上げた詩「室内」であり、もう一つは、昭和16（1941）年3月に詩誌「新領土」に発表された詩「囲繞地」である。そして、この２つの大きな変化によって、鮎川信夫の戦前における詩的活動は、３つの時期に分けることが可能である。つまり、第１期は、詩「寒帯」から詩作品「室内」までの時期、第２期は、詩「室内」から詩「囲繞地」までの時期、そして第３期は詩「囲繞地」から鮎川が日本陸軍に入営するまでの時期である。

昭和12年秋から昭和13年夏までの第１期に於ける詩人鮎川の詩的活動の特徴の一つは、昭和12年9月の詩作品「寒帯」から同年11月の文芸誌「若草」に詩「黄昏」が掲載されるまでの約２カ月の間に「少なくとも二十篇の詩」を創作した、という鮎川自身のことばが示すように[46]、旺盛な創作意欲に基づいた詩人鮎川の詩的行為にある。「詩を書く」行為に対するこうした積極的な姿勢の背景には、詩人「鮎川信夫」の誕生とともに鮎川が感得した、詩的言語による自己解放と詩的言語による自己世界の開示といった鮎川自身の生を根拠づける、「ことば」による生の中心的な経験が存在していることは明らかであるが、それと同様に重要な外的背景がもうひとつ存在している。それは当時の現実そのものが、その束縛から容易に逃れられる程度の抑圧力をもったものでしかなかったという点である。確かに昭和12

46　鮎川信夫「最初期詩篇についての感想」、『鮎川信夫』105頁。

年の秋の時点において、日本は日中戦争に突入していたが、当時まだ高校に進学したばかりの少年鮎川にその現実が重苦しくのしかかってくるということはなかったのである。斯くして、詩を「書くこと」に目覚めた鮎川の詩的主体が、精神的な活力に基づき、鮎川自身の内部の拡充を願い、新しい詩の世界や理念や方法を求めて様々な詩人の詩の「ことば」に自由に接しようと試みていったのは当然のことであった。そして、この願望が、第二次大戦後に「荒地」派を形成することになる、若き詩人たちとの出会いへと結びつき、さらには、戦後、鮎川自身が痛烈に批判することになる、鮎川よりも前世代の詩人たちの接触へと通じていくことになる。

昭和12年秋から昭和13年夏にかけて活字になった詩作品は、以下に挙げるように、２５詩篇存在する。

番号	年月	詩タイトル	掲載雑誌	その他
01	S.12.09.	「寒帯」	文芸誌「若草」	投稿詩
02	S.12.11.	「黄昏（星座に灯が点り……）」	文芸誌「若草」	投稿詩
03	S.12.11.	「黄昏（青柄のシャベルで……）」	詩誌「LUNA」	
04	S.12.12	「夕暮」	文芸誌「若草」	投稿詩
05	S.12.12	「凍眠」	詩誌「LUNA」	
06	S.13.01	「靴」	文芸誌「若草」	投稿詩
07	S.13.01	「扉の中」	詩誌「LUNA」	
08	S.13.02	「逃亡」	文芸誌「蝋人形」	投稿詩
09	S.13.02	「蝋燭の中－夜に」	詩誌「LUNA」	
10	S.13.02	「漂泊者の哀歌」	文芸誌「文芸汎論」	新鋭作家特集号に
11	S.13.03	「船」	文芸誌「若草」	投稿詩
12	S.13.03	「遊園地区」	詩誌「新領土」	
13	S.13.03	「花－亜細亜の一部」	詩誌「LUNA」	
14	S.13.04	「頌－亜細亜の一部」	詩誌「LUNA」	「LUNA」のこの号に「新領土参加についての覚書」を発表
15	S.13.05	「霜咲く日」	文芸誌「若草」	投稿詩
16	S.13.05	「河－亜細亜の一部」	詩誌「新領土」	
17	S.13.06	「シャボン玉」	文芸誌「若草」	投稿詩

18	S.13.06	「樹」	詩誌「LE BAL」	
19	S.13.06	「少年のスピード」	詩誌「LE BAL」	
20	S.13.07	「ギリシアの日傘」	詩誌「LE BAL」	
21	S.13.07	「春の頌歌」	文芸誌「文芸汎論」	
22	S.13.08	「夏の Souvenir （ネムの木の下で……)」	詩誌「LE BAL」	
23	S.13.09	「楽器の世界」	詩誌「LE BAL」	
24	S.13.09	「夏の Souvenir （ボダイジュの下に机が……)」	詩誌「新領土」	
25	S.13.09	「田園の祭礼（ユリの花の下で……）」	詩誌「新領土」	

鮎川の戦前の詩的活動の第１期の前半において、文芸誌「若草」を中心に９篇の投稿詩が発表されている。もちろん、鮎川がこの９篇だけではなく、それ以上の詩作品を投稿していたことは容易に想像することができることであるが、そうした自己の詩作品を新人の詩人を育成する意図を持った雑誌に投稿し続けることによって、鮎川信夫は、若き詩人としての立場を日本の詩の領域の中で徐々に確立していったものと思われる。そのことは、昭和13年2月の文芸誌「文芸汎論」（昭和6年9月－19年2月）に鮎川の詩が寄稿という形で発表されたことによって象徴的に示されている。

「文芸汎論」は、編集者を岩佐東一郎と城左門にし、ジャーナリズムを強く意識した雑誌であり、この雑誌には鮎川信夫の他にも、後の「荒地」派詩人に数えられる木原孝一、中桐雅夫、三好豊一郎なども寄稿している。

牟礼慶子の指摘によると、昭和13年2月発行の「文芸汎論」は「新鋭作家特輯号」として、４篇の小説と１５篇の詩が載せてあり、その中の詩人の一人として、鮎川信夫の「漂泊者の哀歌」が発表された。翌月の同誌3月号の詩壇時評欄において、詩「漂泊者の哀歌」が取り上げられ、評者の木下常太郎によって「キーツ風な素直さとでも言ふか、ドン・キホーテのやうではない蒼白な騎士でも出てくれば、さながら中世紀を夢みたキーツのロマンティックな夢そのものになる」と評され

た。[47]　この詩は、当時、若き詩人鮎川がことばによって開示した上昇的な世界、別の言葉で言えば、現実からの避難場所的な世界を前提にしている点で、前記の鮎川の詩作品「寒帯」や「船」などと共通した基盤を持った詩である。ただ、それらと異なる点は、詩「漂泊者の哀歌」では、夢の世界であるとも言うことが可能なその上昇的な世界に到達できない「漂泊者」の「悲しみ」が謳われているということである。

時間は、「漂泊者」を非現実な世界、詩的世界へと誘い込む時である「黄昏」になる。

額に雪が積もり
悲壮な音楽は絶え
樹々の細い梢からは鳥は去つた

明日の雲が地平線に
波とひろがるとき
その純白なシーツの中から
囀がきこえてくる　　（「漂泊者の哀歌」より）[48]

心が現実の緊張した生から解放され、楽園的な世界へと向かう「黄昏」時に、「漂泊者」は、現実の「尖塔」に上る。「だが」しかし、いくら「聳えたつ尖塔」に昇ったからと言って、上昇的な世界に到達することができるわけではない。そこに行くには、「眼をつぶる」ことが必要なのである。しかし、「漂泊者」は、現実的に空間的に上昇しようと試みる。こうした現実的な観点からの夢の世界への接近は、当然失敗するわけであり、そこに「漂泊者」の悲しみが謳われるのである。他の者たちの「悲しみ」が現実から解き放たれ、黄昏を背景にして、夢の世界へと「歌声」とともに「キラキラ」と上昇していくとき、「漂泊者」の「悲しみ」は現

47　牟礼慶子『鮎川信夫－路上のたましい－』、46頁。

48　鮎川信夫『鮎川信夫全集』第１巻、541-42（541）頁。

実に留まっていることしかできない。そうした「漂泊者」から、夢の在処である「世界」は、「むなしい」存在に変貌し、遠く隔たっていく。そして、ただ一人残された地上の「漂泊者」は、その上昇的な世界を象徴する色である「淡青」の「旗」を、地上の「さびれた城門」でむなしく翻すだけなのである。

この詩は確かにその頃に書かれた「船」などの作品に通じるものがある。それは現実界からの脱出であるという点においてである。「子供たち」が容易に夢の世界へ行けるのに、取り残される者に対する悲哀を語る点に、現実界にとらわれる人間、特に「大人」に対する意識というものを感じることができる。しかし、このように現実脱出の人間劇をテーマとする鮎川のこのような詩は、後にすぐに別な側面を見せていくのである。次の鮎川の昭和13（1938）年2月14日の日記の文面は、そのことを裏付けている。

2月14日

「文芸汎論」三月号が発売された。

詩壇時評－木下常太郎氏－の中の新人についてといふ項、僕の二月号に掲載された「漂泊者の哀歌」の批評。キーツ風な素直な表現であり、佳作である。と評された。親切な批評であり有難いけれど、も早や僕の詩がここから更に変化してしまった現在、少しくすぐったいものであった。[49]

詩への関心を深めつつあった鮎川は、現実脱出というひとつの詩的なテーマには止まっていられなかったのであろう。「も早や僕の詩がここから更に変化してしまった」という鮎川自身のことばによって暗示される詩の新しい傾向は、「黄昏」よりも「夜」により強く惹きつけられていくこの時期の詩的傾向から窺うことができる。それは、現実を完全に捨象したところに成り立つ上昇的な世界の端整な構築、別な言葉で言えば、鮎川自身の楽園そのものの構築と、それに相応しい詩的言語の

49　鮎川信夫「日記Ⅰ　1938～1939」、『鮎川信夫著作集』第７巻、戦中作品、308-58（310）頁。

獲得という、詩の純化の方向であった。そして、鮎川が詩を純化させていく際に大きく役立ったのは、同年代の詩人たちの詩の場である詩誌「LUNA」と当時の主要なモダニズム系の詩誌であった「新領土」への参加であった。特に詩誌「新領土」への参加は、この後の部分の最後で言及するつもりであるフランスの詩人ポール・ヴァレリイの詩の純化した世界へ鮎川をうながしたように思える。

（４）

戦後の「荒地」派詩人が戦前に於いて結集することになる詩誌「LUNA」（昭和12年5月－13年4月、全13冊）に鮎川信夫が参加し、その同人になったのは昭和12年の9月である。そして、その詩誌「LUNA」に鮎川の詩「黄昏（青柄のシャベル……）」が初めて掲載されたのは、同年11月である。

詩雑誌「LUNA」は、昭和12年春に、当時神戸在住の、神戸高商在学中の中桐雅夫によって創刊された、全国の若い詩人を同人とした投書詩誌である。その詩誌「LUNA」に参加することになった経緯について、鮎川は評論「中桐雅夫」の中で次のような回想を残している。

> 三十数年も前のことだから、記憶はあまりたしかではないが、「見本誌を送れ」と申込むと、ガリ版の四角い詩誌を、三、四冊送ってきて、七輯から活版にするから汝も加盟せよといった主旨の手紙が添えてあった。衣更着信、芦塚孝四、山川章（森川義信）などが、すでに同人に入っていた。一九三九年の夏の終りの頃のことである。[50]

50　鮎川信夫「中桐雅夫」、『鮎川信夫著作集』第４巻、詩人論、91-97（91）頁。ここでは「一九三九年」とあるが、これは「一九三七年」の間違いであろう。

「LUNA」クラブと当時称していた詩誌「LUNA」の同人たちは、「若い投書家の集まりであり、地域的な集団ではなく、全国的な組織を目ざすもの」であった。[51]「同人誌といえば、地域別の集まりであったり、学校関係の集まりであったり、あるいは投書家の単なる寄せあつめであったりするのが多かった中で、彼［中桐雅夫］が、それらを越える野心と気概を以て『LUNA』を発行、編集していたことはたしかである」[52]と鮎川が説明する中桐雅夫は、若き詩人として、鮎川の前記の詩作品「寒帯」が発表される以前に、すでに文芸誌「若草」などの投稿誌欄に登場していただけでなく、そうした投稿詩欄に「自分の雑誌のメンバーを見つけておいた」[53]のであった。

鮎川信夫が、詩誌「LUNA」（７輯）に初めて発表した詩作品「黄昏」は次のような詩である。

黄昏

青柄のシャベルで
雲の涯をほじくり
珊瑚を撒き散らし

駈けてゆく風である

ぶんぶんと翅虫は
青い靄を裂く
と……
高い梢の向うの響は
地球の悲鳴

51　前掲書、91-92頁。

52　前掲書、92頁。

53　衣更着信「最初に会った詩人－「LUNA」の最後の会合－」、吉本隆明他『さよなら鮎川信夫』、現代詩読本　特装版（東京、思潮社、1986年）、269-71（269）頁。

その木霊でもあろうか

白い頸の猫は
星達のさざめきの蔭から
月の窓を窺ってゐる

影が凍りついてゆく
黒い花

淵に散る　54

この「黄昏」が詩誌「LUNA」に発表された同月の雑誌「若草」に、同じ詩のタイトルを持つ詩作品「黄昏（星座に灯が点り……）」が掲載されていることからわかるように、当時の詩人鮎川は、「黄昏」の魅惑的な美にとらわれ、それを詩のことばとして表現している。「前世代の詩人たちを一人も含ま」[55]ない同世代の詩人たちだけの詩誌、別な言い方をすれば、自己を束縛する狭い現実から何らかの形で解き放たれたいと願い、世界を拡大していこうとする少年たちだけの詩誌、そこに発表する詩作品に、現実からの束縛に逃れたいといった願望など記す必要などなかったのであろう。この詩には、直接、「黄昏」によって解放された若き詩人鮎川の感性が捉えた少年の世界の光景が、現実を描写する際に用いられることばとは異なったことばで、描写されている。そして、現実ではない世界を非日常的なことばで描写するといった鮎川の詩意識は、モダニズム系の詩誌「新領土」とシュールレアリスムへの接近を促すことになるのである。

鮎川が詩誌「LUNA」に参加してから数カ月すると、東京在住の同人である山川章（森川義信）などとの交流が始まるが、こうした詩を中心にして集まった同世代の仲間との交流の中で、鮎川信夫は、詩に対する理解を深めていっただけでなく、

54　鮎川信夫『鮎川信夫全集』第１巻、422-23頁。

55　田村隆一『若い荒地』、26頁。

さらにそれを深めようと前世代の詩人たちが中心となっていた、詩誌「詩と詩論」以降の日本のモダニズム詩の主流を形成していた詩誌「新領土」に参加することになる。鮎川は、丁度その頃、「2月6日」の日記に「新領土の上田氏より葉書を受取る。新領土の会費を払ふ。」と記している。[56]

詩誌「新領土」（全５６冊）は、昭和12年5月、上田保を編集人、春山行夫、村野四郎、近藤東を編集同人として創刊され、太平洋戦争勃発直後の昭和17年1月に終刊した詩雑誌である。「詩と詩論」、「詩法」の後継誌として刊行された「新領土」は、上に挙げたような同人の面々から推測できるように、モダニズム的な傾向を強く持ったものであり、それは同時に、編集人である上田保が編集方針として明らかに提示しているように、同時代の海外の詩の動向についても、積極的に翻訳紹介していった詩誌であった。特に、「新領土」という詩誌名からわかるように、イギリスの詞華集『新領土』(New Country, 1933) に拠ったマイケル・ロバーツ (Michael Roberts, 1902-48)、W.H.オーデン (Wystan Hugh Auden, 1907-73)、C.D.ルイス（Cecil Day Lewis, 1904-72）、S.スペンダー（Sir Stephen Harold Spender, 1909-）などの第一次大戦後のイギリスの詩人や、フランスで主知的傾向の文学傾向を創り出していたポール・ヴァレリイなどの詩や評論を、積極的に翻訳紹介していった。そして、春山行夫の「この雑誌は同人雑誌でも商業雑誌でも、そのどちらでもない。前者の純粋性と、後者の積極性とをもったものである」[57]という第一号後記にみられる言葉の通り、「新領土」は同人誌にとどまらない商業誌的な側面を持ち、「新領土」への幅広い会員を迎え入れるなど、後に「荒地」派に関わる鮎川信夫、田村隆一、中桐雅夫といった若い詩人たちが参加する場でもあった。

56　鮎川信夫「日記Ⅰ　1938～1939」、『鮎川信夫著作集』第７巻、308頁。

57　「新領土」第１巻、第１号（1937年５月）、78頁。ここで実際に参照したものは、「新領土」復刻委員会編、春山行夫監修『新領土』復刻版（東京、教育企画出版、1990年）である。以下、本論文における「新領土」の参照は、すべてこの復刻版による。

詩誌「新領土」に初めて掲載された鮎川信夫の詩「遊園地区」は、３部構成からなる作品である。その第１部と第２部を見てみよう。

１
岸辺では演奏会が開かれる
蝶々は光る河を渡る
タンポポの花粉をつけて
青い帽子の微風が通り
羊が雲を食べにくる
赤い屋根の学校は
風下に建てられてある
明るいシャボンの中から転がり出た
鈴を振るかすかな音よ

古い楽器は花樹の下で
独楽を廻せば
新型飛行機がとんでくる

２
白いちぶさの傾斜地をかけ上れ
木笛を吹けよ
ヴェニュスの胸は穹より広い

吹かれてゐる赤い煙突は
リボンの花火をあげて
桜並木の向ふ側で燃えてゐる
掌ほどのサファイアがある

驢馬は駈ける
白い翼が生える
霞の中にとびこむと葩が散る
羽が散る

おや　天使が泣いてゐる　　（「遊園地区」より）58

「遊園地区」という主題から分かるとおり、この詩で鮎川信夫は、自己の内部の世界あるいは自己の詩的世界を、外界の「遊園地」という少年にとって特別の意味を持った空間に関係づけて、超自然的想像世界の風景を描き出している。その描き出し方は、第１部と第２部とでは全く異なっている。第１部における「タンポポ」、「羊」、「シャボン」、「鈴」、「古い楽器」、「独楽」などといったことばは、それぞれ個々に見ていった場合には、別々の情緒を誘起することばであるが、それが一連の詩句の中に置かれることによって、外部の危険から完全に保護された、明るくて暖かい温室の中で感じるような一種の安堵感を誘起している。しかし、鮎川は、第２部では、第１部の手法とは明らかに違った技法で、その心象風景を描き出している。「白いちぶさ」、「木笛」、「ヴェニユス」、「驢馬」、「白い翼」、「天使」などの神話的なことばは、第２連の「サファイア」という宝石に媒介されることによって、それは彫刻のような「硬さ」をもったことばになる。さらには、そうした彫刻に囲まれた世界そのものは、想像力を喚起する詩的世界そのものになっている。

このように第１部と第２部では同じ心象風景を描き出しながらも、違った「パターン」でそれを描き出している点に、当時の鮎川の詩的関心をうかがうことができる。自己の感得する魅惑的な美の光景を、いかに明るく、いかに純粋に描き出すのか、そして、それを一つのパターンではなく、新しいパターンを発見しながら描き出すのか。こうした鮎川信夫の詩的関心は、三好豊一郎が鮎川の詩作品「夏のSouvenir」と「ギリシャの日傘」を対象にして評した箇所で明らかにした、「モダニズムのいうエスプリ・ヌウボウ」の魅惑や、田村隆一が鮎川信夫の詩作品「楽器の世界」を引用しながら暗示的に示そうとした「「ル・バル的」モダニズム」59に

58　鮎川信夫『鮎川信夫全集』第１巻、429-31（429-30）頁。

59　田村隆一『若い荒地』、32-34頁。

結びつくいてくるものであろう。

「夏の Souvenir」と「ギリシャの日傘」などを読むと、屈託のない少年の詩作のよろこびが、のびのびとした感性の展開のなかに感じられる。モダニズムのいうエスプリ・ヌウボウとは、元来こういう屈託のない感性の展開の上に成り立つ性質のもので、そこにわれわれを魅惑するものがあったのである。[60]

三好を含めた戦前の「荒地」派詩人が「魅惑」された鮎川の作品「ギリシャの日傘」（1938年7月）とは、次のような詩であった。

ギリシャの日傘

1
柔かいシルクの風に
葡萄の葉をとはしてしまった
若いアポロは日傘にかくれ
その美しい扉の文字は
秘密の世界に鍵をかける
放心した花弁のやうに
雲のアルバムにはさまれた
白い蝶よ
海では雷が鳴ってゐる
山では望遠鏡が廻転する
キュウピットの矢よりも疾い
ぎんの驟雨の中で
一たまりもなく仮死におち
日傘は貝殻をまねてゐる

2
青い舌を垂らした植物の蔭から

60　三好豊一郎「『橋上の人』解説」、鮎川信夫『鮎川信夫著作集』第10巻、研究（東京、思潮社、1976年）、144-46（144）頁。

いきなり水が噴き出した
パルテノンは丘にある
ミルクの雲をかきまぜると
その中に沢山の兵士たちの顔があた
知識の樹はアクロポリスを覆ひ
ガラスの響をたてる楕円形の葉たち
大理石の肉体は磨かれよう
スコオルの通過した海の窓から
おおきらめく太陽よと
象牙の足がでる　61

ところで、この時期のこうした鮎川の詩的世界を支えていた詩人として、ポール・ヴァレリイが挙げられるのではないかと思われる。特に上の「ギリシャの日傘」でにみられる鮎川の「貝殻」や「大理石」などの詩語あるいは、「泉」や「鏡」のイメージは、ヴァレリイ特有の詩語とイメージであり、その他にも詩語「貝殻」が、詩作品「室内」（1938年11月）や「田園の祭礼」（1938年12月）など、この時期に集中して詩語「貝殻」が３回も紙面に刻まれていることは、そのことを裏付けてくれるものと思われる。

樹の影を掠めたのは
昨年の唄であらうかもう見えない
貝殻の匂のする帽子は
鏡のなかで眠ってゐる　　（「室内」より）62

レモン色の朝焼だ
太陽は水晶に分解される
白いレグホンたちよ
星にとびちる音をふんで

61　鮎川信夫『鮎川信夫全集』第1巻、444-45頁。

62　前掲書、450-51頁。

貝殻の道をかけなさい

キウリ畑でサイレンが鳴り
大埋石の林の都会から
体操着のまま遁走した
君らの機械にアブラがささされた　（「田園の祭礼」より）[63]

以上考察してきたように鮎川の戦前の詩的活動の第１期に相当する時期は、鮎川自身のことばで言うならば、「新しい仲間を得て、きわめて短期間ではあったが、最も屈託なく詩を書いた時期」であった。[64]　そして、幸運にも、「まだこの頃は、自由主義末期の文化が残照として社会の一部に残存していて、十代の青年が勝手気侭な空想をたのしむくらいの余地は残されていた」のであった。[65]　このような「余地」がこの時期の鮎川に詩の「ことば」を純化させるだけの時間を与え、ヴァレリイのような純粋な詩的世界へと憧れさせたのではないであろうか。しかし、その後、徐々に深刻な様相を呈してきた戦争の脅威は、詩人鮎川の詩的主体に次第に大きくのしかかってくることになり、鮎川の詩的世界の純粋さも失われることになるのである。

（５）

昭和13（1938）年10月20日、前年7月7日蘆溝橋に起こった一発の銃声から始まった日中戦争の戦火が、大陸においてますます拡大し日本軍が広東を占領する前日であるこの日に、鮎川信夫は詩「室内」を書き上げた。この時、既に日本国内で

63　前掲書、452-53頁。

64　鮎川信夫「詩的自伝として－立風選書『鮎川信夫自撰詩集』」、『鮎川信夫著作集』第８巻、近作、281-90（284）頁。

65　前掲書、284頁。

は、中国との戦局が拡大するなかで、「国防目的達成」のために国内の経済活動や国民生活を統制する国家総動員法が公布され（昭和13年4月1日）ていた。「国家総動員トハ、戦時（戦時ニ準ズベキ場合モ含ム）ニ際シ、国防目的達成ノタメ、国ノ全力ヲ最モ有効ニ発揮セシムル様、人的及ビ物的資源ヲ運用スルヲイウ」という国家総動員法の第１条に象徴されるように、戦争遂行の名のもとに国民生活は耐乏を強いる「ぜいたくは敵だ」の「代用品時代」は始まっていた。さらには、街頭には、提灯行列の波にわく武運を祈る千人針を請う姿があふれかえっていたのである。

ここで鮎川信夫の戦前中期の詩的出発を記している詩作品「室内」を見る前に、それを書く少し前の状況を日記を中心にして振り返っておきたいと思う。

前記した昭和13（1938）年2月6日から始まる「日記　Ⅰ　1938～1939」には、1938年に書かれたものだけを限定して言うと、徐々に深刻になる鮎川信夫を囲繞する現実を、鮎川が正面から書き留めた部分はほとんどないと言ってよい。日記に書かれていることは、当時の鮎川がかなりのスピードで読書していた書物についての鮎川自身の覚書や感想、詩誌「LUNA」や「LE BAL」や詩誌「新領土」に掲載された他の詩人たちの詩作品の批評、さらには学校の試験のこと、「LUNA」クラブや「新領土」の会合、観賞した映画の批評などが中心に書かれている。日記に記されているこのような鮎川信夫の生活は、当時の日本が直面していた現実とかけ離れたものであったかもしれない。しかし、文学や詩を中心に形成されている日記の中にも、その時点で中国大陸や日本で起こっている現実の裏側に存在する真実というものを、冷静に見極めようとする鮎川の視線を感じる部分がある。2月20日から始まり、12月31日の「明日からー。僕も二十歳になる。」で終わる1938年の日記において、そうした視線が現れているのは次のような部分である。

2月13日

帰り新宿ニュース劇場へ行き、ポパイの無銭飲食なる漫画を見る。窮屈な社会ニュースは嫌ひだ。そらぞらしさが目立って見えるからだ。戦争ニュースなど、果してあんなものを面白がって真実として受取るものがあるだろうか。真実を穿った、*新らしい角度*をもったものでなければ、その価値を批判するに価しない。[66]

まず「2月13日」の日記の中に、鮎川は新宿の「ニュース劇場」へ行ったことを記している。日中戦争の勃発でニュース映画の人気が急上昇し、各地にニュース映画館が登場したが、その中の一つである「新宿ニュース劇場」で鮎川は「ポパイの無銭飲食なる漫画」と戦争ニュースを見たのであろう。そしてその戦争ニュースに対して、「果たしてあんなものを面白がって真実として受け取るものがあるのだろうか。真実を穿った、新らしい角度をもったものでなければ、その価値を批判するに価しない。」と戦争ニュースに対して批評することを放棄している。当時、映画館で見たものに関しては、その批評、或いは感想を日記に書き記していた鮎川にとっては、戦争ニュースそのものがそうした批判する価値を持っていなかったのであろう。このような2月13日の日記の一節に見られる戦争ニュースに対する考え方の背景には、国家が戦争ニュースとして国民に知らせている事実を、真実から遠いものとして鮎川自身が受け取っているということがある。そしてこうした戦争ニュースに対する疑念が、実は中国大陸と日本で進行しつつあった「戦争」の真実を鋭く見抜き、次のような詩「頌－「亜細亜」の一部」の一節に結びついていったのではないかと思われる。

［……］やがて新しい靴の
群は　雲に乗って押しよせ　黄色く汚れた地図の上を
蹂躙するだらう

66　鮎川信夫「日記　I　1938～1939」、『鮎川信夫著作集』第７巻、309頁。引用の斜体字の部分は、参照した原文では傍点が付されている。

“新ラシイ靴ハ　押シヨセ　蹂躙スル”　ソレハ

金魚みたいにじっとして　水のつまったガラス鉢の中
レコオド音楽にクチあいて　緑の藻を夕べてゐる
ぼくらにもまたきみたちにも　　（「頌－「亜細亜」の一部」より）[67]

鮎川信夫は、昭和13年3月から5月にかけて「「亜細亜」の一部」と言う副題を付した一連の詩作品、「花－「亜細亜」の一部」、「河－「亜細亜」の一部」、「頌－「亜細亜」の一部」を詩誌「LUNA」と詩誌「新領土」に発表している。この副題に注目した北村太郎は、主に鮎川信夫の戦中詩について論じたエッセイ「けむれる一個の霧」の中で、「アジア全体の『悲劇』の一部として中国を見ている鮎川少年の視点の広さ」に驚いている。[68]　上に引用した詩句は、確かに、「中国を題材にしたもの」ではあるが、それが「ぼくらにもまたきみたちにも」「“新ラシイ靴ハ　押シヨセ　蹂躙スル”」と読むことで、戦争という暴力的な現実が鮎川を含めた日本人にやがて訪れるという予感を表現している。さらにそれは、「金魚みたいにじっとして　水のつまったガラス鉢の中／レコオド音楽にクチあいて　緑の藻を夕べてゐる」人間存在にも暴力が及ぶということを認識している点で、決して侵略的な日本の動向だけを見ているのではなく、その後の日本を含めたアジア全体の大きな悲劇を予感させるものである。

しかし、中国大陸で起こっている出来事に対して、その裏側にある真実を読みとろうとする鋭い視点がありながらも、実際には、鮎川信夫はまだ「新しい靴」によって「蹂躙」されてはいない日本の現実に身をおいていたのである。こうした日本の当時の現実は、鮎川自身が「窮屈」に感じるものであったが、それはまだ、鮎川の存在を危機に陥らせるものではなかった。こうした危機感の不在は次に挙げる

67　鮎川信夫『鮎川信夫全集』第１巻、436-37頁。斜体字の部分は、参照した原文においては傍点が付されている。

68　北村太郎「けむれる一個の霧－主に戦中の詩について－」、鮎川信夫『鮎川信夫著作集』第７巻、戦中作品、376-391（379）頁。

日記の文面から読みとることができるであろう。

2月24日

今、日記の天候の項を書かうとして外を見たら、ウーウーウーとサイレンが鳴った。防空演習である。今でもまだなり続けてゐる。

相変らずの好天気だ。いつまで続くことやら。[69]

9月24日

昨日、午後４時半頃家へ帰って来た。野営中は、教練をしてゐる時以外は、すべて愉快であった。[70]

11月29日

防空演習が漸く終って二日目である。お芝居染みた防火演習が町の其処此処で演ぜられた。笑ふべき錯誤を見出し、当局なるものは収拾がつかない程、今度の防空演習でボロを出してしまった。[71]

「防空演習」、「野営」という当時の鮎川を取り巻く戦争という危機を想定した現実は、鮎川の目には喜劇的に映っている。しかし、こうした喜劇的な現実の中に忍び込んでくる次のような「緊張」を伴った現実は、鮎川自身の精神を徐々に束縛していったと思われる。

8月5日

69　鮎川信夫「日記Ⅰ　1938～1939」、『鮎川信夫著作集』第７巻、312頁。

70　前掲書、341頁。

71　前掲書、352-53頁。

灯火管制でネオン、及び少数の街頭が消された。ロシヤの飛行機が飛んでくるかも知れないとのこと。気象通報で気圧の放送はしなくなったさうである。案外今年中にロシヤとの戦争が開始されるかもしれない。

街路にも何となく緊張が感ぜられる。[72]

こうした「緊張」や束縛に捕らわれた自己に基づいて、鮎川信夫の紡ぎ出す言葉が結晶化してくるのは、昭和13（1938）年10月20日に書かれ、11月に詩誌「LE BAL」に発表された詩作品「室内」から昭和15（1940）年9月、詩誌「新領土」に掲載された「形相」に至るまでの鮎川の戦前中期の作品を中心としてであると思われる。

この時期の鮎川の詩作品における一つの特徴として、「室内」というイメージが頻出しているのは、興味深い点である。「室内」という語を詩のタイトルに含む作品として、1938年の「室内」とあわせて、「夢みる室内」（1938年2月）、「室内」（1939年11月）の３篇を挙げることができるだけでなく、その他にも「椅子」をタイトルに含む一連の詩作品[73]、及び「形相」という同題の４篇の詩作品[74]にも「室内」のイメージが明らかに描き出されている。鮎川の全詩作に「室内」という詩語が８回用いられているうちの６つ[75]までもが、この時期に集中的に現れることからも、戦前中期における鮎川の詩的世界が「室内」というひとつの空間のイメージと強く結びついているものであったと考えることができるであろう。

72　前掲書、333頁。

73　具体的には「椅子（影をゆらせて……）」（1939年8月）、「黄昏の椅子」（1939年12月）、「十二月の椅子」（1939年12月）、「椅子（ドアはなかば……）」（1941年4月）、「雨をまつ椅子」（1940年5月）である。

74　特に、４篇中の３篇「形相（一本の茎は清浄な水を欲する……）」（1940年4月）、「形相（ドアの外では……）」（1940年8月）、「形相（髪は散る……）」（1940年9月）は、「室内」のイメージが明らかに見られる詩作品である。

75　この時期に、「室内」という詩語が詩中で用いられている詩作品は、次のようなものである。「室内（窓は明るい……）」（1938年11月）、「夢みる室内」（1939年2月）、「唄」（1939年3月）、「非望の自転」（1939年4月）、「椅子（影をゆらせて…）」、「十二月の椅子」。

このような「室内」という形象への偏向は、戦前初期の詩作品で展開された詩人鮎川の超現実的な詩的世界に「壁」をもうけ、現実界から隔離する方向と結びついているように思われる。このことは、詩「寒帯」などで描出された雲の上の広い世界、現実から遠く離れた場所に措定された逃避の場所としての世界は、現実への関心が引き金となって、地上近くに引き落とされたということを意味していると捉えることもできよう。

こうした「室内」の成立に前後する鮎川を囲繞する外部世界と内部世界の変化は、「室内」とそれ以前の詩との比較において見られる詩人鮎川の詩意識の変化を大きく決定づけるものであると言えるであろう。例えば、この詩の完成する前日、10月19日の鮎川の日記には、「最早夢をオートマティックに記述することでは到底詩の深い部分に触れることができない」という表現が見られる。[76]　この見解は、同年7月29日の日記に記したシュールレアリスムの手法に対する鮎川の以前の見解と大きく異なっている。鮎川の7月29日の日記には、「これらニヒリズムを突破して力強き建設期へと進むのがシュルレアリスムであり、そしてその手法を完全に活用し得るものは、文学に於いては、外にないことを思ふ」という丹波哲夫のエッセイ「シュル・レアリスムの周囲に」の中の言葉を通して、シュールレアリスムという鮎川にとって詩的世界を拡充するための手法に対する信頼が表明されている。[77]　更にこのような信頼は、8月16日の日記に見られる「僕の最近の詩篇、「夏のSouvenir」（三篇）は好評だらう。自分の詩篇の中では最も技術的なものである。」という自己の技術的な詩に対する満足となって表れている。[78]

鮎川信夫のこうした詩的変化を、詩作品「室内」に結びつける詩人として、戦後「荒地」派詩人の一人となる北村太郎がいる。「一九三八年の秋ごろから鮎川信夫

76　鮎川信夫「日記Ⅰ　1938～1939」、『鮎川信夫著作集』第７巻、346頁。

77　前掲書、332頁。

78　前掲書、336頁。

の詩は変わった」と述べる北村太郎は、次のように鮎川の詩の変化を説明する。

> このあたりまでの詩［「夏のSouvenir」「楽器の世界」など］は、どちらかといえば明るく、三好豊一郎のことばを借りれば、「屈託のない少年の詩作のよろこび」が歴然としている。しかし、時代の動きを冷徹な眼で見つめ、多彩な交友関係のなかで人のこころの複雑な軌跡をながめながら、鮎川信夫は自己の内側に深く沈むようになっていく。それはおそらく一九三八年（昭和十三年）秋である。同年十一月に「明るい水で」で始まるほうの「室内」が発表されていて、それ以後、かなり急速に沈鬱な作風に変わっていく。目をみはらせる変わりようといってもいい。このころ、彼の身の上に、なにか重大なことが起こったのであろうか。[79]

「彼の身の上に、なにか重大なことが起こったのであろうか」という問いかけに対して、北村太郎は「室内」以後の鮎川と森川義信との「短い期間の全人的交際」を挙げている。[80]　しかし、鮎川のこの時期の詩的変貌について、鮎川自身の西欧文学作品の読みという観点から考えると、戦前初期の鮎川の詩作品にみられたようなヴァレリイの影響が残りながらも、それ以上に、この頃鮎川が T. S. エリオット『荒地』（*The Waste Land*）を読むことによって「現代は荒地である」という現代意識を感得した経験が大きな影響を与えているのではないかと思われる。この鮎川及び他の「荒地」派詩人たちと T. S. エリオット『荒地』との関連については、具体的に第３章第３節で扱うので、ここでは北村が指摘する鮎川と他の「荒地」派詩人たちとの関わりという観点から、この時の鮎川の詩的変化を考えていきたい。

79　北村太郎「けむれる一個の霧－主に戦中の詩について－」、鮎川信夫『鮎川信夫著作集』第７巻、380-81頁。

80　前掲書、386頁。

（６）

鮎川信夫の友人との交流がどのようなものであったかについては、鮎川の個人的な記録を基にそれを再構成していくことによって推測することが可能であろう。しかし、別の仲間の視点から、若いときの当時の交流がどのようであったのかを知る上で、田村隆一の『若い荒地』の次のような一節は、重要な手がかりを与えてくれる。この一節は、田村が『ル・バル』２１集の合評会で、作品の相互批評が眼目になっていた「ルナ・クラブのパーティ」について描写したものである。

十数名による合評会も、スムーズに進行していった。メタファがどうの、イメジがどうのといった具合に、おたがいに軽口をたたきながら、喋っていた。わが松村文雄君（北村太郎）は、女性の詩人とばかりささやきあっていた。秀才の松村君は、女性の詩人には人気があり、いつも細いのどに繃帯をまいている北山鳩子さんなどという可憐な詩人とたえず一緒に笑っていた。すぐその横で、明治学院の制服を着た衣更着信が、松村君の詩の真似をして、「ファーファーファーファン」などというアクビをしたりした。津田英学塾で、関西のブルジョア娘の谷恵子君は、森川と鮎川のあとを追いまわしていたっけ。と、テーブルの一隅から、いままで、まるで蛤のごとく黙りこんでいた色の浅黒い青年［三好豊一郎］がスクッと立ち上った。「ぼくは田村君のような詩には、我慢ができない」横目で女性詩人の顔ばかり見ていたぼくは、あわてて、その青年の方を見た。見れば、八王子から来たという田舎のアンちゃんではないか。「田村君のようなヘナチョコモダニズムは毒にも薬にもならないと思うんです。言葉の遊戯そのものだ。これをもし詩と呼び得るならば、一夜にして、何百何千行たりといえども書いてお目にかけます。まるで口からでまかせではないか。オートマチスムがきいてあきれるよ。ぼくはこういう詩を心から軽蔑するんだ。まるで「人生」というものがない。感情の深い洞察力も喚起力も、ま

るっきり見あたらないではないですか。この田村君は、いったいどんな気持ちで詩を書いているのでしょう。言葉の遊戯なら遊戯らしく、もっとスマートにやってもらいたい。モダニズムのもっとも悪しき一面を、田村君の詩は露呈しています。ぼくは人間の魂の感じられないような詩を断呼として排するものであります。」[81]

このような田村隆一の回想から、当時の「LUNA」の仲間同士の会合で、歯にもの着せずに、他の者の詩を批評することが行われていたことは知ることができる。こうした真剣な批評が、自己の技法だけに留まってしまいがちな詩的傾向や詩的世界を拡充するのに如何に役立ったかは、当の本人たちでなければわからないことかもしれない。しかし、こうした詩に対する情熱は、権威的な存在を措定せずに自己を開示していく点において、田村だけでなく鮎川にも大きく役にたったにちがいないのである。特に当時、技法に走りがちであった田村を、「八王子の青年の口からとび出した「人生」だとか、「魂」という言葉は、まったく異様な響きをもってぼくの耳をおそった。これまでに、「人生」とか「魂」とかいう、浪花節語りか人生派の詩人の口からでもなければきかれなおできた言葉がモダニズムの詩と関係があるとは、ぼくは夢にも思ってもみなかったのである」[82]と、三好が言わしめ開示させたように、鮎川の詩的世界を開示させた存在がいたのである。田村は、「鮎川や中桐は、ぼくよりも三才か四才上だったが、その当時の年令のひらきは、現在想像するよりもはるかに距ったものである。いわば、中学生と大学生のちがいなのだから、まともにあつかってくれという方が無理というものだ。」[83]と語っているが、そうした鮎川にも実は、田村を開示させた存在がいたように、大きく影響を与えた森川義信という存在がいたのである。

81　田村隆一『若い荒地』、54-55頁。

82　前掲書、55頁。

83　前掲書、56頁。

鮎川信夫が森川義信と初めてあったのは、1937年の晩秋である。突然受け取った葉書によって、同じ詩の雑誌「LUNA」に所属していることを知り、森川の下宿を訪ねたことから、鮎川信夫と森川の交際は始まる。その後、二人の若き詩人は、お互いの家を行き来しながら、自分が作った詩作品を交換したり、批評したりすることを行うことになる。

当時、森川は早稲田の第二学院の学生であり、戸塚のグラウンド坂上近くにあった下宿に住んでいた。早稲田の第一学院に通っていた鮎川は、森川と「詩を書く仲間のとりとめのない噂話」などをしながら、早稲田や新宿を中心に遊んだりしていた。[84]　そうしたことが、翌年1938年の日記には、よく記されている。そして、早稲田を中心にした第一次「荒地」の仲間の顔が鮎川を中心にそろってくるのである。

ところで鮎川が森川から受けた影響とは一体どのようなものであったのであろうか。それを考える手がかりになるのは、鮎川が森川について述べた次のような文章に存在していると思われる。

> 衝動を芸術に具体化するうえにおいて、太古の洞窟に動物の絵をはじめて描いた原始人と同じような手を持っていたということが、彼［森川義信］の不幸であり、栄光であった。
>
> １９３９年１０月『荒地』第四輯に載せる「勾配」一篇を懐中にして、彼はまっすぐ私の家へやってきた。さすがにその顔はいつもより輝やいてみえた。
>
> わずか十八行の短詩だが、さっと一読しただけで、私は、目がくらむような思いがした。何度も繰り返して読んだが、感動の波は高まるばかりであった。すでに「衢にて」で予告されていたとはいえ、「勾配」は、その独創性と普遍性において、はるかに卓越した作品であったからである。
>
> 愛とは、心の傾斜にほかならぬと誰が言ったのか。その斜面に立っているの

84　鮎川信夫「森川義信 II 」、『鮎川信夫著作集』第４巻、詩人論、53-56（53）頁。

は、自然を、人を、愛することにおいて過剰でありすぎた青年の姿であった。現実の傾斜、時代の傾斜は、遥かな地平とはげしく交叉し、青春の苦闘は空しく悲運のうちに終りを告げようとしていた。それでもなお、彼は、自然を、人を愛することをやめないのである。これは「しっかり掴んでいるその根は何か？」という「荒地」的な問いに対する彼の見事な回答であった。

私にとって、それは同時代の詩人の作品に心から動かされたという点で、ほとんどはじめての経験だった。「うまいな」とか、「なかなかやるじゃないか」といった程度の感想を仲間の詩に対して抱くことはあったが、それによって自己の内部の隠れた部分を大きく揺すられるというようなことはなかった。それだけに「勾配」が、私に与えた影響は、私自身が思っているよりも大きなものがあったかもしれない。[85]

この文章は、1939年当時のことを言及している点で、直接には、鮎川の1938年の詩的変化に関わり無いようにも思えるが、しかし、上のような1939年における鮎川の森川とその詩作品に対する尊敬の念とも言うべき感情は、すでに1937年に森川に出会った頃から、徐々に育まれていったものであり、出会い以降の森川との交友関係は、鮎川の詩的活動にも影響を与えるものであったと言うことができるかもしれない。上の引用部分において、注目すべき点は、鮎川が森川とその詩作品から、鮎川自身とは全く違った詩に対する態度、あるいは芸術に対する態度を読みとっていることである。当時、「感性的な解放」という目的や技法を中心に詩を書いていた鮎川に対し、森川は「太古の洞窟に動物の絵をはじめて描いた原始人」のように、その芸術行為の最も根源にある人間存在の「衝動」から、詩を書いていたのである。それは、何故人間は詩を書くのかという問いを前提にした詩的行為であった。そして、このような森川の詩に対する態度や、人間がなぜ詩を書くのかという詩的行為に対する問いそのものが、鮎川にとっては、「自己の内部の隠れた部

85　前掲書、55-56頁。

分を大きく揺すられる」ほど驚異的なものであったのである。

鮎川の1938年10月20日に書かれた詩作品「室内」に見られる大きな変化には、前述したような詩誌「LUNA」の仲間たちとの詩を中心にした交流と、後に議論するT.S.エリオット『荒地』の読みが関わっていると思われるのであるが、特に、森川義信との親交厚い信頼関係に満ちた絆は、鮎川の当時の技術中心的で現実逃避的な詩の世界に、人間が生きるということに対して正面から立ち向かう態度とその態度において詩を書くことの意義を教えたように思われるのである。かくして、このような背景の基に創られた鮎川の詩作品「室内」が誕生するわけである。それでは、このような背景を踏まえながら、1938年に書かれた詩作品「室内」そのものの作品解釈を試みてみたい。

室内

窓は海の明るい水で
室内を青く洗つてゐる
花は眼のある動物を見ない
傾いた机は風を聴くことがない
錆びたピンで留められ
海図の脈のどこかに消えてしまった
やさしい茎よ
透明なる緑よ
誰も小さな宝石筐と
舶来煙草のことを知らない
石の床に新聞が配達されてゐたことも
樹の影を掠めたのは
昨日の唄であろうかもう見えない
貝殻の匂いのする帽子は
鏡のなかで眠ってゐる
眠ってゐないのは時計であり
十二時を打っても

椅子は空虚なままに
死んだものは壁の中に
白い砂漠の上に住んでゐる　86

まず、この「室内」をそれ以前の鮎川の詩と比べた場合、最初に気付くことがらは、初期の開放的な世界がひとつの閉鎖された空間、つまり「室内」というものに置き換わっていることである。しかしこうした鮎川の詩的世界の輪郭の変化にもかかわらず、その主調となる冷たく青いイメージは残されている。

最初の詩句「海の明るい水で／室内を青く洗ってゐる」は、ユイスマンス（Joris-Karl Huysmans, 1848-1907）の小説『さかしま』（*A Rebours*, 1984）にでてくる、デ・デッサントのあの水槽を部屋中に置き巡らせた部屋を想起させるものがある。こうした部屋は、一種の人工楽園的な様相を呈するものである。

このような内部空間は、論理的に成立するためには壁、窓、ドアといった外部と内部を峻別する境界が必要である。密室的内部空間における特質は、その閉塞性、つまり、境界の硬直性にあるということができるであろう。その点で、最も閉鎖的な室内とは、四方が壁によって囲まれた、外部のものを全く取り入れようとしない空間であろう。というのも、窓やドアといった境界は、外部との交流を目的としたものであり、それは本質的に内部の閉鎖性を薄めていく方向に機能が働くからである。このような密室のイメージの特質である境界の硬直性、言い換えれば内部空間を保護しようとする本能は、詩作品「室内」において、外部世界を全く見通せない「窓」と、外部の空気をも浸透させないような「壁」、そして、冷たい「石の床」という言葉によって表されている。唯一、外部世界との交流を可能にし、室内にいる存在の外部への視線を成立させるはずの「窓」は、羊水のような明るい「海」の青い水を映し出している。

ところで、この室内を満たしている「青」は、鮎川信夫が戦前の初期詩作品にお

86　鮎川信夫『鮎川信夫全集』第１巻、450-51頁。

いても、最も好んで用いた色調である。それは、「世紀末芸術の基本的な色調」[87]であり、現実と乖離した幻想的な空間を創出するにはうってつけの色合いである。しかし、鮎川の「青」は、基本的には詩作品「寒帯」において定着している氷の透明さと純粋さに結びついたものであり、それは、現実から遠い世界への純粋なる希求を象徴している。そうした遠いはずの鮎川の詩的世界が、「室内」というより現実に近い形象に引き戻されている点において、この詩はそれ以前の鮎川の現実に対する認識とは異なったものが反映されている。そして当然のことながら、このような詩的世界の措定は外部世界の干渉を受けざるを得ないのである。

外部世界から鮎川の「室内」に侵入してくるものは、生であると同時に死でもある。もはや室内に詩的空間を定めた鮎川には、「天使」や「雲」などの詩語を書き記すことはできない。そこに登場する言葉は、室内にある「花」、「机」、「錆びたピン」、「海図」、「帽子」、「新聞」など、日常的な身近にあるものである。こうした鮎川の詩的世界にある「モノ」たちは、静的な状態で描写されている。「モノ」がもった内的なエネルギーは、すべてその機能や形態を忘却、あるいは破壊することによって剥奪されている。その「室内」にある「モノ」は、あたかも外部を完全に遮断することによって引き起こされた空気の不可浸透性によって息ができないような状態にある。このことは、この「室内」にいる主体自身にもいえることなのである。確かにこの詩のなかでは、「私」という主体は全く姿を現さないが、それは、現さないのではなく現れないと言った方がよいかもしれない。

また、このような「室内」の内部における「モノ」の消極性は、外部から侵入してくる「死」への浸透に因るものだと考えることもできるであろう。

「花は眼のある動物を見ない／傾いた机は風を聴くことがない」という二行は、室内にある「花」と「傾いた机」の存在を脅かし死に至らしめる外部からの侵入者、即ち、「眼のある動物」や「風」を、境界としての「壁」が防いでいること、つまり、外部の死の拒絶と読むことができるであろう。一方で、「錆びたピンで留

87　Saong-in　Yoon「白秋の初期詩集におけるデカダン的特質」、「比較文学」第30巻（1987年）、65-84（76）頁。

められ／海図の脈のどこかに消えてしまった」あるいは「誰も小さな宝石筐と／舶来煙草のことを知らない／石の床に新聞が配達されてゐたことも」という詩句は、「室内」にある事物から生がはぎ取られていることを意味している。死を忘れるということは、死すべき運命を背負った事物のその生の意味を忘れることに他ならず、そこで「室内」にある事物から生きることの意味を奪い去るという意義が生じてくる。ここに挙げた「海図」「宝石筐」「舶来煙草」「新聞」といった事物からは、ことごとくそうした生の意味が剥奪されているのはそのためである。「海図」からは「脈」だけが抜き取られ、それを「壁」に押し込めることによって、「海図」は死とは無縁なフォルムだけになる。また、外部世界では、それぞれ意味をもつ「宝石筐」と「舶来煙草」もその意味の記憶を忘れ去ることによって、「室内」ではただの事物、そこに在るだけの事物に変貌を遂げている。さらに、外部世界を縮小した「新聞」については、それが「室内」に届けられていることさえ忘れられている。こうした生の意味を忘れることあるいはその意味を「壁」に押し込めることによって、鮎川は内部に存在している事物が有している「死」を拒絶しているように思われる。

「見ないこと」、「聴かないこと」、「知らないこと」、「消えること」といった外部世界では、否定的な行為が室内という内部世界では、肯定的な行為に変化していることは、興味深いことである。そうした内部世界においては、「眠る」という外部ではもっとも受動的な行為が最も能動的な行為になるのである。鮎川は、この眠りの行為で内部の死の完全な拒絶を試みるのである。そして、事物の生の意味の完全な喪失の果てに、鮎川は地上に縛られた自らの肉体をも忘れることができるはずであった。

ところが、この眠った室内に唯一不気味に目覚めている「モノ」がある。それは「時計」である。この「時計」に関して、詩作品「室内」を書いた鮎川の立場から問えば、なぜ鮎川は「時計」からその生活的な意味をはぎ取らなかったか、ということになるであろう。そのことについてもし解釈するならば、それは鮎川の外部世界に対する執着、あるいは肉体に対する精神の執着ということが言えるであろう

か。

結論的に言えば、鮎川が言葉によって築き上げた言葉の要塞は、この「時計」をもって崩壊していくことは確かであると思える。それはあたかも、大きな鎌をもった「死」を「室内」に入れてしまったことから当然起こることであった。

「死」は、眠っている内部を起こし、その後に生を自覚させ、さらにその後に死へと導いていく。死の観念の覚醒、「室内」における死の存在は、もろくも鮎川の詩的世界を崩壊させていくのである。死の観念は、以後、外部世界の内部世界への侵入という形をとって、進行していく。あれほど、外部の侵入を拒絶していた「窓」は、「室内」以後に書かれた詩作品「椅子」や「形相」では、外部世界を映し出すものになっていくのである。

鮎川信夫は、詩「室内」を発表した後に、いくつかの他の詩のなかで彼の詩の「部屋」を描き出している。鮎川のその詩の「部屋」の様相に変化が現れてくるのは、「カタストロフ」という彼の詩作品からである。詩「カタストロフ」は、1939年5月の詩誌「新領土」に掲載された作品である。

カタストロフ

磨かれてゐる白い骨の柱に
毛髪のやうに血が垂れて
音もなく日ぐれがきたといふ
公園をまがってゆく縞のズボンたちを
青い葉が溶かしてしまふと
実体のない窓窓に雨が降り
不幸に支へられた白い肉体は
トンネルの中で流れださない
街灯は光をナイフのやうに操って
沈黙した化石に傷をつける
再び実体のない建築の翳は
きこえない見えない世界で
巨大な鳥になって夜の空に墜落し

または黒いオルガンのやうに
軟弱な地を擡げ夢幻の中から
恐怖の白い歯を投げる
風の運んでくるその言葉が見えない
怖るべき悲しむべき速度の中に
あなたの耳はちぎれそうな断崖で
澄んだ褐色の眼を出はいりする憎悪の炎よ
あのやうに退屈な都会の一日が
華麗なあなたの指輪とともに
暗い水底に沈んだ　88

戦前初期に書かれた鮎川の詩作品とは対照的に、「日ぐれ」は現実世界から逃れて別世界へ行こうとする鮎川の願望を刺激しない。というのもこの時点では、その願望自体鮎川のこころから消失してしまっているからである。さらには、「雲の上」に描いた鮎川の詩の王国は崩壊し始めていたからである。その王国は、詩作品「カタストロフ」では「巨大な鳥」に変貌し、「夜の空」に墜落していく。現実により近い詩の「部屋」にいる鮎川にとって、かつての黄金郷は「きこえない見えない世界」でしかない。詩作品「室内」の中で徹底的に拒絶された外部としての現実は、鮎川の詩の「部屋」の「実体のない窓窓」を通して映し出されている。そして、その内部にいる詩作品ではまだ不在になっている「私」は、その窓を通して、夕暮れの「退屈な都会」の光景を目撃するのである。

鮎川の詩の「部屋」と現実の世界の間には、もうほとんど距離はない。その「部屋」にいるはずの「私」が徐々に姿を現してくるように、「部屋」と「現実」を隔てている「壁」、「窓」から外部としての現実が忍び込んでくる。鮎川の詩的な「部屋」の内部の変化は、彼の詩作品「椅子」においてはっきりと認めることができる。

椅子

88　鮎川信夫『鮎川信夫全集』第１巻、464-65頁。

影をゆらせて
グラスが立ちあがった
空虚な鏡のなかを
手袋をはめた右手のみが動き
ねぢによって組み立てられてゐる空間に
たくさんの吸殻が落ちてきた
一本の毛髪もふくめて
すべての家具が老いてゆき
室内からは
荒廃した街の窓だけが眺められ
そちらの方から寒さが吹きつけてくる
不図ねぢが軋り
グラスの底に夜が光った
ただ一滴の水は
耳の螺旋を辷りおちた
わたしの鼓膜はへんである
局囲の跫音をきかない
弾かれた言葉の行方を覚る
体温から去ってゆくひびきたち響たち
椅子は書籍の上に乗ってゐる
わたしは黒いパイプを握り
じぶんをくべていった
わづかな煙はグラスの中へ降りてゆく
死から遠ざかるために　89

風は、無慈悲にも鮎川の詩の「部屋」に「冷たさ」と「荒廃した街」が発する「死」を運んでくる。鮎川の詩の「部屋」はもう以前のようなものではない。「冷たさ」と「死」は、密かにやすやすと壁や窓やドアの隙間から忍び込んでくる。そのために、「一本の毛髪」を含めた「すべての家具」がだんだんと老いてゆき、そして、「ねぢ」によって組み立てられた「空間」、すなわち、鮎川の詩的世界が揺

89　前掲書、474-75頁。

るがされる。唯一、「わづかな煙はグラスの中へ降りてゆく／死から遠ざかるために」。言うまでもなく、そういった詩の「部屋」にいる「わたし」は死に捉えられている。このように彼の詩作品「椅子」に表れている「部屋」の描写は、やがてすぐにやってくるであろうその「部屋」の倒壊、そして現実そのものにさらされる「わたし」の姿を暗示するものである。

1940年8月の詩誌「LE　BAL」に発表された詩作品「形相」では、現実世界が荒廃すればするほど、鮎川の詩の「部屋」の修復は望みのないものになっていく。

形相

ドアの外では
しづかな炎のむれが
物のかたちを壊してゆく
地下をながれる水の音は
ほんのわずかに震へる根を支へてゐる
そしてドアの内には
秘密の抽斗がある
じぶんを掠めるために
肉体よりも柔軟に
けものや鳥よりもすばやい身仕度で
夜はおそらくどこからでも忍びよる
わづかなドアの隙間から
誰かが
灰いろの遠い空をながめてゐた
まだ光がどこまでもゆきわたり
無限といふものが少しづつ暗くなりかけてゐた
眠ったふりをしてゐると
風だけがやってきて
黙つて髪を梳けづってゐる
すべてをみつめる生きものの眼が
ランプよりも巨大な思い出の下で

また何と小さなことであらう　90

詩作品「形相」は、現実世界の崩壊の描写から始まる。詩の「部屋」にいる「わたし」が窓から眺めているのは、「死にとりつかれた現実」である。しかしそうした危機に直面した現実にも、かすかな生命の予感が感じられる。この描写は、「春の痛々しいほどのイメージ」を描き出しているところのあの　T.S.　エリオットが、『荒地』の冒頭で展開した春の描写を想起させるものである。「April is a cruest mouth, breeding / Lilacs out of the dead land, mixing / Memory and desire, stirring / Dull roots with spring rain.」ここには、鮎川信夫が上田保訳の「死者たちの埋葬」から感得した『荒地』のイメージと、エリオットの現代意識がはっきりと表現されていると言うことができるかもしれない。ここで注目すべきことは、鮎川信夫の詩の「部屋」の「ドア」がかすかに開いているということである。それを開けたのは、その中にいる「わたし」であろう。死は「夜」に姿を変え、「おそらくどこからでも忍びよる」。死は、「風」とともにやってきて「わたし」の「黙つて髪を梳けづつてゐる」。自らの部屋の中にいる「じぶん」は、数年前には存在した詩の王国と「無限というもの」が存在していた、今となっては「灰いろ」に目に映る、「遠い空」を眺めている。しかしながら、詩人にとって、それらは古きよき日の「巨大な思ひ出」にすぎないのである。

ところで、鮎川信夫がこの詩を発表した1940年8月といえば、第二次世界大戦は、もうすでにヨーロッパで起こっていた。日本も、その時既に戦時体制に入っていた。レストランや劇場の営業時間、車の使用、レジャーを目的とした小旅行、などには、制限が加えられる「国民生活新体制要項」が、同月に公布されている。品質のいい煙草の喫煙も禁止され、雑誌や新聞などは縮小され、統合されていた。さらに、「贅沢は敵だ」という立て看板が東京の至る所に現れたのもちょうどその頃である。戦争熱は、徐々に日本の中で高まりつつあった。重要なことは、鮎川信夫

90　前掲書、497-98頁。

が、本論第３章第３節で考察することになる「荒地」のイメージを通して、現実を冷静に見つめていたということである。このような視線を現実に向け続けるという態度は、鮎川の詩そのものを変革させうるのに十分な要因であった。

田村隆一は、『若い荒地』の中で、この1940年8月に発表された鮎川の詩「形相」を引用しながら、次のようなことを述べている。

> もうこの作品になると、日本モダニズムのまるで精神分裂症のような症状や、相手の分からない敵を追いまわしているようなサタイアやイローニイの影はすっかり没してしまっている。鮎川の詩的世界の原型が、いまやその顔をあらわしてきたのである。[91]

田村によってここで「鮎川の詩的世界の原型」と呼ばれているものは、確かに鮎川のモダニズム的な技法への別れ、そして、鮎川を取り巻く現実の状況の悪化と結びつくものであるが、こうした「原型」を生起せしめた要因として更に考えるならば、ここには、自分自身の本当の詩の「ことば」によって、自らの生を脅かす現実世界に対して対抗していこうといった鮎川の新しい詩の課題を見ることができる。そうした「ことば」と自己との新しい関係に目覚め始めた鮎川は、急速に現実の状況が悪化していく昭和16（1941）年2月に発行された詩誌「新領土」に、「アンケート・今日のモダニズム」に対する回答として、鮎川信夫の最初のモダニズム批判と考えられるような文章「更になにものかへの深まりを」を発表した。

> いままでモダニズムは、さまざまな部面に於いて、あまりに外面的であり過ぎたやうである。主知的といふよりも、むしろ理智的であり、人間の内面性を無視して外部的知覚の世界に、ある固さと冷たさを求めてきた。
>
> 個人的な世界を捨てて、一般社会との広範な接触によつて、現代の時代的特

91　田村隆一『若い荒地』、57頁。

質を把握しようとした積極的な態度のうちにも、さういふ内面性が全く欠けてゐたのは、主知的な態度とは言へず、ただ新しい素材とか思考の方法とかと周囲の環境や外部から入つてくる心理的抵抗のうちから、ろくに消化もせずに掴み出してきたのであつたが、それは自分たちの生活の中にまで侵入してくるだけの根強いものではなかつた。単純な言葉で云へばモダニズムにはある反省が欠けてゐた。

モダニズムは現実と現実の摩擦点に我々れを連れてゆき、なによりもよく現代の意義について自覚を促し、「我々」のエネルギイを指導していつたことは事実であるが、「我」の方をすつかり閑却してしまつたことも事実であつた。[92]

上の文章における「単純な言葉で云へばモダニズムにはある反省が欠けてゐた。」と鮎川が語る背景には、「現実」に生きる「我」を中心とした「ことば」への希求が存在すると思われるが、この鮎川の「我」そのものは、以後、戦争という現実によって、どこかに消えてしまう運命にあった。モダニズムの詩にもある種の限界を感じることによって、さらには「我」をも見失うことによって、「ことば」そのものを奪われた鮎川は、「詩人」としてではなく、一個の人間として、戦場に赴くことになる。

鮎川信夫が青山の近衛歩兵第四連隊に入営したのは、昭和17（1942）年10月、鮎川22歳の時であった。

92　鮎川信夫「更になにものかへの深まりを」、「新領土」第７巻、第45号（1941年2月）。「新領土」復刻委員会編の『新領土』復刻版では、第８巻（149頁）に収められている。

第2章

「荒地」派詩人の戦争責任論とモダニズム詩批判

第２章第１節
文学における戦争責任論

戦後の「荒地」派詩人のリーダー的役割を果たすことになる鮎川信夫は、第１章第４節において考察してきたように、戦前における自らの詩的活動の初期の段階において、日本の詩領域で展開されていたモダニズム詩に傾倒し、現実に抑圧されて生きる自己の精神を上昇的な超現実の世界に結びつけ、詩の「ことば」を紡ぎ出していた。しかし、満州事変、日中戦争、太平洋戦争へと悪化する日本の危機的状況の中で、自己の生そのものを見つめ、T.S.エリオットやポール・ヴァレリイ、フランツ・カフカといった第一次大戦後のヨーロッパの精神の危機を象徴する文学作品を主体的に読むことによって、日本のモダニズム詩に欠けているものを自覚し、徐々にモダニズム詩そのものに懐疑を覚えることになる。こうした懐疑は戦争を経ることによってより強められ、敗戦後の日本の時空に立った「荒地」派詩人は、自らの詩的言語観を再構築していくと同時に、モダニズム詩という戦前に自己が関わった詩の運動を自己批判し、モダニズム詩そのものの理念を否定する立場を表明する。

本章の目的は、戦後、「荒地」派詩人によって行われたモダニズム詩批判の意義を検討することにある。そして、本節においては、その「荒地」派詩人のモダニズム詩批判において議論の基軸となった、文学者及び詩人の戦争責任追及の論議を検討していきたい。

文学者及び詩人の戦争責任追及の論議は、敗戦後まもなく連合国指令本部が主体になって行なわれた政治領域における戦争責任と連動する形で展開されるのであるが、その議論の根底には、戦争体験、戦争そのものに対する受け取り方、戦後の出発に対する見解など、戦争という時代を生きなければならなかった日本の文学者及び詩人の生そのものが存在している。ここではまず、「荒地」派詩人の戦争に関わった生そのものがどういうものだったのか、ということを考察することから考察

を始めたい。

（１）

1931（昭和6）年9月の柳条湖事件を発端として始まった満州事変を第一段階とし、その後、1937（昭和12）年7月の盧溝橋事件で第二段階の日中戦争に発展し、1941（昭和16）年12月には最終段階である太平洋戦争へと突入する、一連のいわゆる十五年戦争は、1945（昭和20）年8月15日の太平洋戦争の終戦とともに、その終結を迎えた。その終結の時、大正時代の後半にこの世に生を受けた「荒地」派詩人たちは、２０代半ばの青年であった。つまり、「荒地」派詩人は、それまで生きてきた二十数年間という彼らの生の歴史と全生活の大半を、換言するならば、彼らにとっての「少年時代」と「青年時代」という、「人生」における「春」と「夏」という輝かしい「季節」を、戦争という現実と何らかの関わりを持ちながら過ごしてきた、と言うことができる。無論、戦火が中国大陸でのみ拡大していった満州事変や日中戦争は、少年であった「荒地」派詩人の生活や精神に直接的な影響を与えたとは言えないかもしれない。しかしながら、教室という教育の現場に徐々に侵入してきた軍国主義、「国防目的達成」のために国内の国民生活を統制する「国家総動員法」の公布（1938年）、防塞訓練や野営における訓練など、若き「荒地」派詩人を取り巻く現実は、彼らにとっては空々しく非現実に思われる一面を持ちながらも、一方で、実際に自らがその戦争という現実に徐々に巻き込まれていくという不安感と緊張感を、若き「荒地」派詩人の内面に引き起こさずにはおかなかったのである。自らを「lost　generation」であるという自覚に立つ中桐雅夫は、自らの青少年期における戦争に関わる一連の事件を「ただ漠然と感じていただけ」であったと当時を回想するが、同時にその「漠然たる感じ」が、青少年期にお

いては重要な意味を持つものであったことをも認めている。[1]　つまり、「荒地」派詩人たちは、自らの自己を認識する期間において、戦争という特殊の状況のうちに生きたのである。

そうした戦争という現実との関わりの中で、「荒地」派自身の人生に対して、別な言葉で言えば、彼らの生きるということに対して、最も大きな影響を与えたのは、第二次世界大戦に際し、ひとりの兵卒あるいは軍の技師として、戦地に赴き戦争を経験したということであろう。1940年、陸軍技師として日中戦争の戦火にさらされた中国に木原孝一が赴いたのを始まりに、1941年には森川義信、翌年42年には鮎川信夫が入営し、1943年には学徒出陣により田村隆一、北村太郎が入営している。

さらには、戦争という現実を通して「荒地」派詩人が彼らの共通の友を失ったということも、彼らの生に切実に訴える事実のひとつであろう。特に、鮎川信夫が親愛なる友として、また、詩的影響を与え合う詩才に恵まれた仲間として、友好関係を結んでいた森川義信が、1942年、ビルマにて戦病死した事実は、その後の鮎川信夫の生だけではなく「荒地」派詩人全体の生に、決定的な影響を与えることになるのである。

「荒地」派詩人たちは、それぞれ、戦争に直面することによって、戦争における友人の死や膨大な数の人間の死に直面することによって、頭の中を死でいっぱいにして戦後の日本の「地」に立つことになった。戦後直後の「荒地」派詩人の状況を理解するには、木原孝一と原崎孝共編の「荒地年表」の1945年（昭和20年）の項目にある「八月十五日現在のメンバーの位置」と称された記述を見れば、多くの言葉を要することはないであろう。

1　中桐雅夫　「lost generation の告白」、「荒地」第１巻、第２号（1947年10月）、1-13（5）頁。本論考において、詩誌「荒地」は、実際には、瀬沼茂樹編『荒地』復刻版（東京、日本近代文学館、1981年）を参照した。

八月十五日現在のメンバーの位置

田村隆一、滋賀海軍航空隊噴進砲中隊小隊長

北村太郎、海軍大和田通信隊に所属

鮎川信夫、陸軍病院を退院、福井の郷里にて静養中

木原孝一、陸軍病院を退院、横浜にて静養中

中桐雅夫、読売新聞記者

黒田三郎、ジャワ島パルスアンス市で、ただ一人の日本人として敗戦を迎う

三好豊一郎、肺疾患のために自宅療養中　2

戦前において同じ詩誌に集まった詩の仲間たちは、それぞれ違った場所で、それぞれ違った境遇で敗戦を迎えることになった。上の記載の持つ意味を理解するには、この記載とそれ以前の戦前における「荒地・動向」の記載を比較すればよいかもしれない。1938年（昭和13年）には、「田村隆一、北村太郎、府立三商の同級生として相互に詩を書いていることを知る／鮎川信夫、森川義信、「LUNA」に参加。東京ルナ・クラブをつくる」とある。1939年（昭和14年）には、「北村太郎、田村隆一、「LE BAL」に参加／黒田三郎、鹿児島より上京。定住する／木原孝一、関西に旅行、中桐雅夫と会う」とある。さらには1940年（昭和15年）には、「鮎川信夫、田村隆一、「新領土」に参加／鮎川信夫、早大の仲間と「荒地」を創刊。エリオットの『荒地』を訳す」とある。3　こうした戦前についての記載は、「荒地」派詩人同志の出会いと、詩との出会いを客観的ではあるが、伝えるものである。戦前の記載と上に引用した記載を比較して分かることは、戦争がいかに「荒地」派詩人たちを引き離し、彼ら自身が孤立した状況で生きることを余儀なくさせたかということであり、さらには、戦争がいかに「荒地」派詩人にとって最も

2　木原孝一・原崎孝編「荒地年表」、小田久郎編『荒地－戦後詩の原点－』「現代詩手帳」一月臨時増刊号（東京、思潮社、1972年）、204-13（206）頁。

3　前掲書、204-05頁。

重要であった詩や友を剥奪し、自由を奪うことによって彼ら自身の生を疲弊させたのかということである。上記に引用した記載から感じられる寂寥感は、「荒地」派詩人が戦争によって詩を失い、仲間とも別れた結果、もはや一人の人間としてではなく、生きることの主体性を喪失した一個の人間としてしか生き得ないという事実から来るように思われる。

戦後、「荒地」派詩人が陥った、自らの人生に意義を見出すことができないような絶望的で虚無的な精神状況は、1945年の11月12日、三好豊一郎が鮎川信夫に宛てた手紙の次のような部分に、明確に表れている。

> 十二月に入ったら僕も田舎にゆかうと思ってゐる。心から休息を欲してゐる。都会は雑然としてゐる。今僕は自分を取りもどしてゐない。自分に沈潜する為に静謐が僕にはぜひ必要なのだ。
>
> 昨日牛込附近を少しばかり歩いた。荒廃のさなかに残った家も色あせて疲れてゐる。生色がない、埃の色と同様だ。疲労の気色は廃墟よりも残った家の方が強い。丁度生き残った我々のやうに。戦は終った。然しそれは戦闘が終ったといふ意味しかない。経済的貧困の国は今後いかなる方法でか、それを打ち破らうと願ふだろう、国民の精力は決して経済的弱点を克服出来るものではない。我々は戦争に於て恐ろしく疲れた。そして敗れた。この事は軍閥云々の問題よりも一層何か我々に示すものがありはしないか。軍閥の政治、軍事上の失敗は勿論の事だけれど、経済的貧困は平和、戦争を問はず一国を左右するだらう。[4]

上の引用箇所より前の部分では、戦後における「荒地」派詩人の運動の「水先案内人の役割」を果たすことになる田村隆一、さらには、疋田寛吉、竹内幹郎、堀越秀夫などの詩仲間と三好が会って、戦後における「荒地」の創刊のことについて話し

4　鮎川信夫「「戦中手記」後記」、『鮎川信夫著作集』第7巻、299頁。

合ったことが記されている。この三好の手紙の中には敗戦直後における「荒地」派詩人の気持ちが率直に表現されていると述懐する鮎川信夫の指摘を踏まえると[5]、三好豊一郎に限らず「荒地」派詩人たちは、一方で、彼らの戦後の詩的活動の新しい場を何らかのかたちで再構築していきたい、あるいは、再建していかなければならないという意志の下でその計画を相互に論じながらも、その内面に於いては、戦争という強制された状況で主体的な生を奪われた彼らの精神が、戦後３カ月を経た時点でも癒されてはいないという自覚を持って、戦後の混沌とした日本の現実に生きていたということが理解できるであろう。敗戦から３カ月、実質的な「戦闘」は一応の終結を見たものの、現実に対する危機意識そのものから解放されることはなかった三好の眼は、焦土と化した戦後の地の「廃墟」によりも、むしろ「残った家」、つまり、生き残ったものにその「疲労の気色」を強く感じとる。経済的貧窮の時期、換言すれば、食糧の確保までもがおぼつかない時代にあって、彼らの生きるということの最も根本的な基礎が危険にさらされていることから不安を感じるだけでなく、その「経済的弱点」を克服できない日本に、三好は、「軍閥」や「画一主義的圧制」の再来を読み取ってしまうのであった。

> 軍閥は一応絶滅した形をとってゐる。然し根が絶対にたたれるものではない。軍閥に非ずとしても、吾々は今後のいかなる画一主義的圧制の芽を警戒せねばならぬ。それらは徐々に勢力を得、それらしい気配が一般に現れる頃にはどうにも動きのとれない状態に吾々を見出すことになる。恐るべきだ。経済、経済、せんじつめれば物だ。この渦中で吾々は精神を守らねばならない、十九世紀を通過して未だ余燼を保ってゐる、かすかな火を。[6]

戦争によって抑圧され、戦後に於いてもなお不安に苛まれ続ける彼らの精神は、行き着くところを知らないままにより衰弱していく。そして、三好とって、あるいは

5　前掲書、300頁。

6　前掲書、299-300頁。

「荒地」派詩人たちにとって、敗戦直後という渦中に於いて最も早急に必要であったことは、疲弊した精神を守り、それを癒し自己を取り戻していくこと、即ち、戦後の彼らの生を主体的に生きるための自己の信条や価値を手探りで何とか見出していくことだったのは言うまでもないであろう。

戦後、「荒地」派詩人が陥った、自らの人生に意義を見出すことができないような絶望的で虚無的な精神状況は、「荒地」派詩人に限られたものではなく、多くの人間が共有していたものに違いない。しかしながら、終戦という解放的な雰囲気と実際的な日本の再建のなかで、このような戦争体験からくる虚無感は、徐々に前面に打ち出されないもの、あるいは将来に向かっての復興という目的の下に、覆い隠されるもの、北村太郎の言葉でいえば、「故意に薄めて感じとる」ようなものになっていった。[7]　人々は、敗戦後、外部から与えられた新しいヴィジョンや価値観、具体的に言えば、民主主義の理念などを受け入れ、来るべき未来に向かって世界を再構築し始めた。

敗戦後の状況下に於いて、当時２０代半ばの「荒地」派詩人たちが戦争によってもたらされた精神的疲弊を癒し、自己を回復し、戦後の生きるヴィジョンを獲得していこうとしていたのに対し、先に引用した三好豊一郎の言葉で表現するならば、「雑然としてゐる」「都会」では、敗戦後間もない時期から、軍閥の解体を中心に日本の政治や社会の構造的変革と思想及び価値体系の転換が、日本主体ではなく、その外側である連合国司令本部（GHQ）の指導の下に進められていた。そして、後に「荒地」派詩人がモダニズム詩の批判活動を行う際にその議論の軸にした戦争責任論の論議が、連合国指令本部による価値体系の変換の過程で、徐々に日本の社会に、日本の文学領域に立ち現れてくることになる。

（２）

では、まず、1946年以降展開されることになる日本の文学領域における戦争責

7　北村太郎「残酷の時代」、「荒地」第２巻、第１号（1948年1月）、55-63（55）頁。

任追及の開始と性質に関わってくると思われる連合国司令本部が中心となって行った変革事項を挙げると次のようになる。

1945年　（昭和20年）

8月28日　連合軍先遣部隊、厚木飛行場に陸着。連合国司令本部（GHQ）を横浜に設置（9月15日、東京日比谷に移る）。

8月30日　連合国最高司令官（SCAP）マッカーサー元師、厚木に到着。

9月9日　マッカーサー、日本管理方針を正式表明。「占領軍の第一目的は自由主義の助長奨励」。

9月11日　GHQ、東条英機元首相３９人の戦争犯罪人に逮捕命令。

9月22日　アメリカ政府、「降伏後における米国の初期対日方針」の正文発表。

9月29日　覚書「新聞映画通信に対する一切の制限法を撤廃の件」。言論弾圧の法規が無効となる。

10月4日　GHQ、政治的・宗教的・民権の自由に対する制限撤廃の覚書（政治犯釈放、思想警察廃止、統制法規廃止など）。

10月13日　国防保安法、言論・出版・集会・結社等臨時取締法の廃止。

10月15日　治安維持法、思想犯保護観察法など廃止。

10月30日　GHQ、教職員の調査、資格決定に関する覚書を発令。軍国主義者、超国家主義者の追放など。

12月8日　共産党など主催の「戦争犯罪人追及人民大会」開催。天皇を含む千人以上の戦犯名簿の発表。

12月17日　日本で最初の戦争犯罪人裁判。B、C級を対象に横浜地裁で開廷。

1946年　（昭和21年）

1月4日　GHQ、軍国主義者の公職追放指令、超国家主義の２７団体の解散指令。

5月3日　極東国際軍事裁判開廷。東条英機ら、A級戦犯容疑者２８名を召喚、起訴状の一部朗読。

敗戦から１３日目にして連合国司令本部が日本に設置されて以降、多方面にわたる変革は、民主主義をその基盤に据えた連合国司令本部によるものであり、それが日

本の新内閣や組織による主体的な改革へと展開していくことは、特にその初期の段階に於いてはほとんどなかった。日本の民主化政策という基本的方針の一端として行われた、軍国主義の排除を目的とした戦争犯罪人の追及、軍国主義者・超国家主義者の公職追放などの上に挙げたような処置もまた、「降伏後における米国の初期対日方針」に於いて明確に示されている連合国司令本部による変革、つまり、日本の外部の「デモクラシー」という思想に基づいた変革であった。このような外側からの日本の戦後処理や変革の中で、評論家奥野健男が説明するように、日本の主要な論調は奇妙な変化を起こすことになるのである。

> 大多数の日本人が精神的虚脱の中でその日暮らしに懸命になっている間に、占領軍の命令、指導のもとに、百八十度の価値転換ともいうべき作業が急速に進められていました。戦争犯罪人の逮捕、治安維持法廃止、共産党員などの政治犯釈放、日本社会党、共産党、労働組合の結成等々がやつぎばやに行なわれました。昭和二十年の八月十五日から年末までの四カ月半の変化ぐらいめまぐるしいものはありません。この期間の新聞を今日読み返すと、よくもこんな短期間に論調が変えられるものだとあきれるほどです（昨日とまったく反対のことを平気で書き、しゃべることのできる新聞や放送のハレンチぶりがこの時ほどきわまったことはありません）。日本の主要な論調は、この四カ月半の間に皇国主義、軍国主義から民主主義、平和主義、そして共産主義礼讃へと完全に変わったのです。学校では昨日まで軍国主義や神州不滅、撃ちてしやまんを教えていた同じ教師が、突然平和主義とデモクラシーを教えはじめます。[8]

このような論調の変化と連動するように日本人の意識も変わっていった。戦争犯罪人の追及という連合国側の態度に、日本の国民が注目し、関心を抱いたのも、その意識の変化を示すものの一つである。1945年11月10日の発表によると、国民から

8　奥野健男　『日本文学史－近代から現代へ－』第17版、中公新書212　（東京、中央公論社、1981年）、181頁。

連合国司令部に宛てられた投書の中で、戦争犯罪人の処罰を要請するものが最も多かったということである。[9]　また、当時の内務省の調査でも戦争犯罪人の追及に対する国民の態度は、賛成及び黙認が大多数を占めていた。[10]

敗戦によってもたらされた肉体的・精神的疲弊や、戦後の物質的貧困などの状況に窮していた国民が、危機的状況をもたらした責任者を追及しその処罰を望むという背景には何らかの感情があることは確かである。さらに、そのような態度の根底には、一種の被害者的意識が存在したということも否定できないであろう。しかしながら、こうした日本人の意識の急変には、徐々に「民主主義」というものを、敗戦国という立場に於いて無批判的に受け入れた態度があるように思われる。敗戦後、それ以前の価値体系が崩壊したことによって、自らの生を根拠づけるものを見失った日本人は、「民主主義」という一つの価値に生きるヴィジョンを求めたのかもしれない。

変革当初には全面的に連合国指令本部が主導した戦争責任追及という問題は、日本人の意識の変容とともに、日本の内部から提起される問題、つまり日本人が主導する問題へと広がっていった。そのひとつの現れは、1945年12月8日に開催された「戦争犯罪人追及人民大会」であった。同年10月に合法政党として再建された日本共産党が主導したこの大会に於いて、天皇を含む千人以上の日本人が戦争犯罪人として発表された。このような日本の内部からの戦争責任追及の展開は、当然、同年9月における言論弾圧の法規の無効、10月における連合国司令本部による言論の自由の保障、あるいは、戦時下において弾圧されていた政治犯・思想犯の釈放など、一連のGHQ主導による日本の構造的変革と深く関わっているが、その最初期の特徴は、戦時中日本において弾圧されていた者が、被害者の立場から、戦争責任追及の声を挙げているという点であろう。このような日本共産党を中心とした日本の内

9　横田喜三郎「戦争犯罪と国際法の革命」、日高六郎編『戦後思想の出発』戦後日本思想体系１　第２版（東京、筑摩書房、1968年）、171-83（171）頁。

10　粟屋憲太郎編『資料日本現代史』第２巻「敗戦直後の政治と社会①」（東京、大月書店、1980年）、334-64頁。

部からの戦後日本を変革しようとする一つの声が、文学の領域に浸透していくまでには、さほどの時間を要することもなく、またその浸透は当然ともいうべきものだった。共産党の打ち立てた「民主主義革命」という態度に同調するかたちで、共産主義系の新日本文学会が結成されたのは、同年12月31日のことであった。新日本文学会は、文学の民主化という目的をその運動基盤に置き、連合国司令本部が日本民主化政策の一端として為した戦争犯罪人の追及、国家主義者の公職追放といった処置を念頭に入れながら、文学領域における戦争責任追及を進めていくのである。この点について、その先駆けとしての1946年1月1日創刊の文学新聞「文芸時評」紙上に於ける「文学検閲」の連載もまた注目すべき動向であろう。それでは次に、後に「荒地」派詩人もモダニズム詩批判を行う際に議論することになる文学領域に於ける戦争責任論を、その初期における動向から検討してみたい。

（３）

文学者の戦争責任、あるいは詩人の戦争責任という場合、その「戦争責任」という言葉は、第二次大戦中に「戦争犯罪」を犯した当事者や軍事指導者たちが問われる法的な戦争責任とは区別する必要があるであろう。後者の戦争責任とは、戦争犯罪に直接関わった者が負わなければならない法的な制裁であり、その戦争犯罪は第二次大戦の場合には、A級戦犯、B級戦犯、C級戦犯と三つに分けられた。A級戦犯とは「平和に対する罪」を犯す犯罪であり、「侵略戦争もしくは国際法・条約・協約などに違反する戦争を、計画・準備・実行、またはそれらの共同計画、謀議に参加した者」が対象とされた。B級戦犯とは、従来の戦争犯罪であり、「国際条約で定められた戦闘法規を犯す行為」をした者、具体的には「降伏者の殺傷、無防備都市の攻撃」などを行った者が対象とされた。最後にC級戦犯は、「人道に対する罪」を犯した犯罪であり、「一般人民に対して行われた大量殺人、奴隷化、政治

上・人種上・宗教上の迫害など」を行った当事者や指導者が、C級戦犯の対象者になった。

このような戦時中における人間の行為を「戦争犯罪」という違法行為あるいは罪状基準に照らし合わせて問いただされる戦争責任とは違って、文学者や詩人の「戦争責任」は、戦争中における彼らの行為を、ある明確な規定や規範に照合させた結果生じるような性格のものではない。こうした基準の不在や「戦争責任」という概念に対する不明確さが、文学者あるいは詩人の戦争責任の問題に独特の性質を与えてきたことは確かである。その特殊性は、この「問題は重要でありながら、展開すべき糸口がなかなか複雑であり、難しくもあり、ゆき悩んでいる」と、戦後１１年経過した後にこの問題に関わっていた文学者である吉本隆明が述べたこの言葉が象徴的に示している。[11]　しかし、こうした特殊な性質を持ちながらも、文学者や詩人の戦争責任を問うという場合、そこには、文筆および言論によって日本国民を戦争に駆り立てた者を対象としてその責任が問われるという考え方が、この論議が起こった1945年末頃から現在まで根強く存在している感がある。換言するならば、それは、1941年12月8日に勃発した侵略戦争という側面を持つ「武力による国家間の闘争」を文化人の立場で批判することなく支援し鼓舞し協力した文学者あるいは詩人の行為を、戦後連合国司令本部（GHQ）によって普及された民主主義的な社会的規範、つまり、軍国主義的・国家主義的な人間の行為を「悪」とする考えを前提として、その道徳的・社会的な責任が問われなければならないとする考え方である。

「戦争犯罪」という明確な規定に基づいて問われる責任が「法的な」戦争責任であるとすれば、軍国主義的国家主義的な行為を人間の逸脱した行為とする考えに基づいて問われる戦争責任は、戦後民主主義の立場における「道徳的な」戦争責任であると言うことができるであろう。しかし、この道徳的な戦争責任は、戦争によっ

11　吉本隆明「文学者の戦争責任」、『吉本隆明全著作集』第１３巻（東京、勁草書房、1969年）、416-24（416）頁。

て生活を破壊された各国の人々、特にアジアの人々に対して負う責任というよりも、むしろ、戦争に巻き込まれたという認識を戦後持つようになった日本の「大衆」に対して負わされる責任であるという意味合いが強い。この点については、しっかりと認識しておく必要があると思われる。そして、まさに、この民主主義的な規範を前提として、戦争中の文化人の戦争に協力した行為を裁くという観点から、文学者および詩人の戦争責任の問題が、日本の文学領域内の問題として提起され展開されたことは周知の通りであろう。

こうした「法的な戦争責任」と「道徳的な戦争責任」の問題は、次の段階において、それを誰が追及し裁くのか、という、追及し裁く側の問題に関わってくるものと思われる。「法的な戦争責任」の場合には、A級、B級、C級戦犯すべてが連合国側から追及され、A級戦犯に関しては東京国際軍事裁判で裁かれ、B級、C級戦犯に関しては、連合国各国の軍事裁判で裁かれた。つまり、「連合国」という外部が日本という内部の戦争責任を追及しそれを裁く構図のもとで、法的な戦争責任の問題は取り扱われた。一方で、その展開の最初期においては、文学者および詩人の戦争責任の問題は、そうした法的な戦争責任追及と同様に、GHQという外側から為された「軍国主義指導者の公職追放」と、それが言論界への拡大適用される形で行われた文学者および詩人の戦争責任追及に大きな影響を受けたことは注意すべき事柄である。

文学者および詩人が対象となるGHQ による戦争責任の追及は、1946（昭和21）年1月4日、GHQが軍国主義指導者を公職より追放する指令を発した際の、「望ましからぬ人物の公職より罷免排除に関する覚書」の中で表明されたものが、約２年の年月にわたり徐々にその対象とする範囲を広げていく過程に於いて為されていくことになる。GHQの軍国主義指導者の公職追放令は、日本を非軍事国家にし民主化を推進するという連合国の基本的な対日方針の非軍事化の部分を具体化したものであり、その点に関して、武装解除や戦争犯罪人の処罰と並んで、最も重要な政策

の一つとされた。1945（昭和20）年10月30日には、すでに軍国主義・超国家主義者の教職からの追放が指令されており、翌年1月4日の指令は、その適用範囲を大幅に拡大したものである。「望ましからぬ人物の公職より罷免排除に関する覚書」に付された「附属表　罷免又は排除されるべき者の一覧」の最終項目に当たるG項「その他の軍国主義者・極端な国家主義者」には、自らの言論に対して責任を負わねばならないもの、つまり戦時中の言論に関わる公職追放の対象者は、「日本の侵略計画に積極的役割を演じ或は文筆、言論その他によって好戦的国家主義並に侵略の積極的代表者たることを示したもの」と規定されている。このG項に関し、同年3月10日、日本政府は正式に文筆家、芸術家、新聞関係者などへの適用を規定し、公職追放を公表したが、このことは文学界を含む文化人に対する国家主義者の公職追放の方針を明らかにしたというだけでなく、文化の諸領域に於いて徐々に進みつつあった自主的追放の気運を活発化するものとなった。同年11月21日には、言論界に対する公職追放の範囲は拡張され、翌1947年1月4日には、勅令自体の全面改正によりその適用範囲はより拡大されていくことになる。そして、1948年3月22日、23日の両日にわたって、それぞれ270名、61名が仮措定されたことで、GHQ主導による文学者および詩人の戦争責任追及は、一応の終結を見ることになる。

このような一連のGHQによる文学者の戦争責任追及は、GHQ側が「文筆、言論その他によって、好戦的国家主義並びに侵略の積極的代表的たることを示した者」という規定をもって行ったものであるが、それはあくまでも軍国主義指導者としての文学者を公職から追放するという政治的意図に基づいたものであった。つまり、それは政治的領域における意図が文学領域内で作用した結果であり、純粋に文学の本質に関わる問題として扱われたものではなかった。しかしそれでも、このGHQによる文学者の戦争責任追及の規定とその方法意識は、当時進行しつつあった日本の文学領域という内部から行われる戦争責任追及の方途に対して、大きく影響を及

ぼしたものと考えられる。

日本の文学領域という内部から、戦争の推進や協力に関わった者の責任を追及し弾劾するという場合、まず第一に誰が日本の文学者および詩人の戦争責任を追及する側に立つのか、ということが問題になるが、その点で最初にその立場に立ち、戦時中の文学者あるいは詩人の行為に対して戦争責任の追及を行ったのは、戦後すぐに民主主義の理念を、決して批判的とは言えない態度で、自己の中に取り入れ、自らを民主主義的文学者と名乗った文学者たちであった。特に、1945（昭和20）年12月に結成された文学運動組織「新日本文学会」（機関誌「新日本文学」）に属する文学者や文学新聞「文学時標」（昭和21年1月－12月）に拠る、荒正人、小田切秀雄、佐々木基一などの文学者たちは、戦後日本の民主主義文学運動の先駆的な役割を果たす一方で、日本の文学領域における文学者あるいは詩人の戦争責任を積極的に追及した文学者たちであった。

新日本文学会は、昭和20年12月30日に東京神田の教育会館で開かれた「創立大会」において結成された文学運動組織であるが、その組織の結成の理由とその文学運動の活動方針は、「昭和二十年十一月十五日」という日付の記載された「新日本文学会創立の趣意」と題するパンフレットの中で、次のような言葉によって説明されている。

> 十数年に亘つて日本帝国の侵略的戦争を指導して来たわが国の軍国主義者たちは、その反動的・反文化的支配を強化するためにすべての進歩的文学者に暴圧を加へ、わが日本文学の民主主義的伝統を根底より破壊し去らうとした。わが作家達はその自主的活動の自由は奪はれ、わが国の文学は最も重大な危機に直面するに至つた。
>
> 然るにこれらの軍・官・財閥は、連合国軍の攻撃の前に敗退し、こゝに自由な文学のためのいはば外的社会的条件が与へられた。今こそ日本の文学者は、わが人民大衆の生活的現実・文化的欲求の真実の表現者として、日本文学の中

に存在し続けて来た民主主義的伝統の上に立ち過去の日本文学の遺産の価値高きものを継承し先進民主主義諸国の文学より学びつゝ、真に民主的、真に芸術的な文学を創造し、日本文学の高き正しき発展のため結合してその全力を傾けねばならぬ。

こゝに我々は新日本文学会の創立を発起し、日本のすべての進歩的文学者がこの偉大な事業に協力することを切望するものである。[12]

文学の領域において、どのように戦後の「日本文学」を出発するのか、という問題は、当然大問題であった。この点に関して戦後の日本文学を出発させるに当たって大きな役割を果たしたのは、文芸雑誌・詩誌を中心にした出版活動と文学的・文化的組織の活動であった。1945年10月6日の勅令で出版事業・同施行規則が廃止され、出版活動の自由が認められると、続々と「世界」（創刊・岩波書店）、「展望」（創刊・筑摩書房）、「人間」（創刊・鎌倉文庫）、「新生」（創刊・新生社）などの新雑誌が創刊され、「中央公論」（復刊・中央公論社）、「改造」（復刊・改造社）などの休刊中の雑誌も復刊された。また、1925（大正14）年4月に制定されてから約２０年間にわたって思想、言論の自由を統制してきた治安維持法が1945年10月12日に廃止されると、自由主義思想や民主主義思想などに基づいた今まで弾圧されてきた組織的な文化・文学活動も様々な領域で可能になった。このような従来の社会制度が、戦後、急激に変革されていくという外的状況と、敗戦によってあらゆる既存の価値観が崩れ落ちた混沌とした内的状況のなかで、文学者は新しい文学の理念について、詩人は新しい詩の方向性について、それぞれ雑誌を媒介にして、あるいは文学的運動組織に拠りながら積極的な提言をなしていった。そのなかで有力な指針の一つとして当時考えられたのは、上に引用した文章から明らかになるような、新日本文学会によって示された「民主主義的文学」を創造し普及

12　新日本文学会「新日本文学会創立の趣意」、「新日本文学」、創刊準備号（1946年1月）、12-13頁。

していくというヴィジョンであった。[13]

新日本文学会が、「民主主義的文学」を創造し普及することを、戦後の日本文学の出発の時点で最も重要なことであると見なした背景には、前時代に存在した文学が「民主主義的文学」に「発展」すべきものであるとする進歩的な文学観、換言すれば、進化論的文学観が存在するだけでなく[14]、第二次大戦に対する文学的な認識が存在している。つまり、戦前の日本文学に「民主主義的伝統」を認めることによって、さらには1945年8月15日に終結する「日本帝国の侵略的戦争」がその伝統を根底から破壊したと考えることによって、日本文学の民主主義的な「発展」が戦争によって妨げられたという認識である。このような日本文学に対する史観を持った新日本文学会は、文学の「発展」を妨げた者として、「日本帝国の侵略的戦争を指導して来たわが国の軍国主義者」たる文学者、換言すれば、反動的な文学者に対して闘う態度を明らかにするのである。そして、この態度の延長線上に、第二次大戦を推進し協力した文学者に対する戦争責任を追及するという新日本文学会の立場を確立するわけである。

かくして、新日本文学会は、敗戦後の日本社会の新たな状況により、「民主主義革命」の実現をめざす文学、すなわち、「民主主義的文学」を戦後の文学の理念として措定し、その実現を図る組織として出発するのであるが、この運動は、政治、経済などの諸領域にわたる日本再編のヴィジョンに呼応し、戦後はじめて文学の新しい信条を掲げるものであったが故に、多くの文学者たちが参加した。[15]　その中心となったのは、戦後においては「民主主義文学」に対する次のような認識を抱

13　岩上順一記「新日本文学会創立大会の報告」（「新日本文学」第１巻、第１号、1946年3月、62-65頁）には、「新日本文学会」の理念が「宣言」と題して掲げられている。「われわれは今日、日本における民主主義的文学運動組織のために集まった。われわれは、日本における民主主義的文学の創造とその普及、人民大衆の創造的・文学的エネルギーの昂揚とその結集とを自己の任務として自覚し、この任務達成のための基本組織とその活動方針を決定した。われわれはこの方針の具体化、この具体化におけるわれわれの献身を以て日本の全人民に答へ、同時に全世界の人民、特に中国および朝鮮の人民に答へようとするものである。」（63頁）

14　本文に引用した「新日本文学会創立の趣意」の「日本文学の高き正しき発展」（下線は筆者）という言葉には、「民主主義的文学」がさらに別な「文学」に発展するという考えが読みとれる。

15　「新日本文学会創立大会の報告」には、「なほ日本文学の民主主義的発展に従来貢献した作家として、志賀直哉、廣津和郎、野上弥生子、正宗白鳥、上司小剣、室生犀星、谷崎精二、宇野浩二、豊島與志雄を賛助会員とすることに承諾を得て決定した」（62頁）という内容が記されている。

き、戦前においてはプロレタリア文学運動を展開していた文学者たちであった。

大正時代に入つて、民主主義実現のための闘争が昂揚して来た。しかし、反動勢力の抑圧のために、その徹底的な闘争がたゞプロレタリアによつてのみ代表されるといふ形で展開された。当時の民主主義文学活動がプロレタリア文学活動と称される所以である。今日外からの革命に応じて、人民大衆から一切の人間的権利への欲求が全国におこつてゐる。かゝる人民大衆の民主主義的要求を文学の面においてとりあげ、その達成のために文学的創造を通じて闘争する。これが、民主主義文学の課題である。[16]

上の引用文から明らかになるように、「文学的創造」と政治的「闘争」の強い結びつきを根底的な主張に据える新日本文学会は、この組織の発起人たる資格のある者を「帝国主義戦争に協力せず、これに抵抗した文学者のみ」であるとし、秋田雨雀、江口渙、蔵原惟人、窪川鶴次郎、壺井繁治、徳永直、中野重治、藤森成吉、宮本百合子の旧プロレタリア系文学者である９人が発起人になった。

このような背景で発足した新日本文学会は、その創立大会で、文学者及び文学の問題として「文学者の戦争責任」を追及していかなければならないという次のような中野重治の提案を異議なく採決することによって、文学者の戦争責任追及の活動を活発に開始することになる。

今回の侵略戦争において日本の文学者は偽瞞され強制され協力したものもある。又積極的にこれを支持し協力したものもある。これに対して民主主義文学者は、自己批判の問題としてとりあげなければならない。いかなる文学者が、いかなる場面において、いかなる作品をもつて、侵略闘争を支持しそれに協力する役割を果したか。又文学と文学者の活動を組織的暴力的に破壊しようとした文学者や文学団体はどんなものがあるか。これを文学者及び文学の問題とし

16　窪川鶴次郎「三、綱領規約について」、「新日本文学会創立大会の報告」、64頁。

て、どこまでも自己批判的に追及しなければならない。[17]

文学者あるいは詩人の戦争責任の追及が、新日本文学会のメンバーによって初めて公然と個人の名前を挙げて行われたのは、1946年3月29日に開かれた新日本文学会東京支部創立集会においてであったが、実際にはこれよりも早く、1946年1月創刊の文学新聞「文学時標」誌上において、日本の文学者あるいは詩人の戦争責任の追及が民主主義的文学者によってすでに行われていた。当時、新日本文学会の中央委員をも勤めることになった小田切秀雄の言葉によれば、文学新聞「文学時標」とは、「敗戦の年の秋、平野謙、本多秋五、埴谷雄高、山室静、荒正人、佐々木基一、わたし［小田切秀雄］という七名の同人で雑誌『近代文学』創刊準備を進めていたときに、いわばそれの小型の別働隊として、同人中の左派だった荒、佐々木、わたしという三名が創刊した」[18]文学新聞である。新日本文学会と同様に、「文学時標」もまた戦後の文学に於ける民主主義的文学の実現をその目的としている。このことは、1946年1月1日発行の「文学時標」創刊号の巻頭に掲げられ、激情的な文体で書かれている「発刊のことば」の結びからも明らかであろう。

一部少数の者の手より文学を奪い還し、これを人民の手に解放すること－これこそ、文学領域における民主主義革命の最終の目標である。

『文学時標』はこれをめざして、力を蓋してたたかふであらう。

石もまた叫べ！[19]

「文学時標」は、「文学領域における民主主義革命」をその理念とし、文学の「人

17　中野重治「八、文学者の戦争責任追及」、「新日本文学会創立大会の報告」、65頁。

18　小田切秀雄「四〇年前の情熱－『文学時標』の多少の存在理由に関連して－」、「復刻版『文学時標』回想・解説・総目次・索引」、１頁、小田切秀雄他解説『文学時標』復刻版（東京、不二出版、1986年）。

19　「発刊のことば」、「文学時標」創刊号（1946年1月1日）、『文学時標』復刻版、１頁。なお、この「発刊のことば」には、荒正人、小田切秀雄、佐々木基一の３名の署名が入れられている。

民への解放」をその目的として創刊されたのであるが、その目的への第一の段階として戦争責任追及に力を注いでいくことになる。前記した「発刊のことば」において、文学領域における戦争責任追及の意義と戦争責任を追及されねばならない文学者についての３人の編集人たちの明確な立場は、次のように表明されている。

だが、かれらファシストたちと陰に陽に力をあはせた作家、評論家がゐたことを忘れることはできない。その最大なるものは、『聖戦』文学の製造者とその支持者である。かれらは銀三十枚とキリストを換えたユダのごとく、卑小な野心、些かの生活の資をえんとして、文学の純潔を娼婦のやうに自らの手で泥土に委ねたのであつた。言うなかれ！指導者にあやまられていゐたのだと、或は、官憲の圧迫のため舞文曲筆を敢へてしたのだと。

［……］

あゝ、文学の大空白時代よ！

『聖戦』文学者共はこれを恥としないのか。かれらは、パンをもとめる読者に石をあたへたのだ。そして、『聖戦』が『醜戦』となつた今日になつても、かれらには、己れの師を売ったことを後悔して、縊死せるユダの心情すら湧かないのだ。かれらは新しい自由の文学に便乗を試みんとあがいてゐるのだ。

石もまた叫ぶ！

われらはかれを監視しよう。聖なる藝苑を彼等から守らう。それはわれらにあたへられた文学的使命である。

『文学時標』は、純粋なる文学の名において、かれら厚顔無恥な、文学の冒涜者たる戦争責任者を最後の一人にいたるまで、追及し、弾刻し、読者とともにその文学上の生命を葬らんとするものである。このことは、文学領域において、民主主義を確立するための第一歩である。これなくして、一切の文学再建は砂上の楼閣であらう。[20]

20　前掲書、１頁。

ここにおいて、「文学時標」は、戦時下において野心のため、生活のため、たとえそれが国家に強制されたものであったにせよ軍国主義に筆を染めた文学者を文学領域における戦争責任者として捉える態度を明確に示すと同時に、「純粋なる文学の名において、かれら厚顔無恥な、文学の冒涜者たる戦争責任者を最後の一人にいたるまで、追及し、弾劾し、読者とともにその文学上の生命を葬らんとする」ことを、「文学領域において民主主義を確立するための第一歩」であると主張するのである。このような立場から「文学時標」の執筆者たちは、その創刊号から設けられた「文学検察」という欄で、日本文学における戦争責任者の名を挙げ、責任を追及する文章を掲載した。[21]　この「文学検察」欄で戦争責任が追及された文学者は以下の通りである。

連載番号（掲載号・発行年月日）	被追及者	追及者
「文学検察（一）」 （創刊号、1946年1月1日）	高村光太郎	小田切秀雄
	火野葦平	荒正人
「文学検察（二）」 （第２号、1946年1月15日）	中河與一	大井廣介
	吉川英治	小原元
「文学検察（三）」 （第３号、1946年2月15日）	芳賀　檀	佐々木基一
	亀井勝一郎	笹原冬雄
「文学検察（四）」 （第５号、1946年3月15日）	山本有三	平野謙
	保田與重郎	杉浦明平
	杉山平助	荒正人
「文学検察（五）」 （第６号、1946年4月1日）	斎藤茂吉	小田切秀雄
	横光利一	加藤周一
	石川達三	小原元

21　「文学時標」創刊号の「文学検察」の欄には、この欄を「文学時標」に設ける意図を明らかにした次のような無記名の文章が載っている。「侵略権力の婢女となつて全人民を戦争に駆り立ることに奉仕し、以て文学の世界を荒涼たる廃墟たらしめた者は誰か？　人民の魂たるべき文学者にして、かへつて人民を抑圧者に売渡す卑陋を敢てしたのは誰か？　我等は糾弾する、徹底的に糾弾する。我等はここに文学検閲欄を設けて、今後長期間に亙り、文学における戦争責任者の追求を行ふ。追求は飽くところなく続行されるであろう。それは文学者だけではなく、文学者を使嗾し脅迫し、拘束した団体、機関、雑誌等に迄及ぶであらう。我等は文学及文学愛好者大衆の支持後援の熾んならんことを望む。」（『文学時標』復刻版、3頁。）

「文学検察（６）」 (第７号、1946年4月15日)	島木健作	大井廣介
	佐藤春夫	佐々木基一
	岡崎義恵	和井英一
「文学検察（７）」 (第８号、1946年5月15日)	林房雄	松本正雄
	武者小路実篤	長光太
	菊池寛	小原元
「文学検察（８）」 (第９号、1946年6月1日)	森山啓	大井廣介
	浅野晃	座間三郎
「文学検察（９）」 (第１０号、1946年8月1日)	藤沢桓夫	小田切秀雄
	中野好夫	小原元
	蓮田善明	加藤正忠
	青野季吉	荒正人
「文学検察（１０）」 (第１１号、1946年9月10日)	久米正雄	那珂孝平
	岩田豊雄	毛利昇
	斎藤瀏	渡邊順三
	丹羽文雄	中川隆永
	監田良平	ミヤマ・コオ
「文学検察（１１）」 (第１２号、1946年10月10日)	逗子八郎	須東郁
	谷川徹三	仁禮志作
	清閑寺健	関英雄
	舟橋聖一	美山昴
	久松潜一	加藤正忠
「文学検察（終）」 (第１３号、1946年11月10日)	和辻哲郎	森宏一
	岸田國志	長光太
	上田廣	荒正人
	岩倉政治	中川隆永
	神保光太郎	毛利昇
	富安風生	鳥山碌二郎

このように創刊号から終刊号に相当する第１３号に至るまでの間に、「文学検察」の欄で戦争責任が追及された文学者は、４０名に及んでいるが、文学新聞「文学時標」に於ける、日本の文学領域の内部からの文学者戦争責任追及と1946年3月29日の新日本文学会による戦争責任追及によって、日本の文学領域に於ける内部からの戦争責任追及の気運はより一層高まっていったと思われる。

新日本文学会の機関誌「新日本文学」に発表された、1946年3月29日に公然と行われた文学者の戦争責任追及に関して述べた、小田切秀雄によるその要旨「文学における戦争責任の追求」には、日本の文学領域において内部から為された最初期の戦争責任追及が展開されている。[22] この要旨の中で重要な部分は、「文学における戦争責任とは、他の何かであるよりも先ず吾吾自身の問題だ」として、その問題が「自己批判」という方法によってしか為され得ないことを明らかにしている点である。[23] 「吾々は戦争中の吾々がどうであったかをみづから追求し検討し批判する」という「自己批判」は、文学者や詩人が戦時中に身につけた「書く行為」の退廃、すなわち非主体的な言語的創造行為の問題を対象化し、主体性を戦後に回復することによって「書く行為」の回復を行うという純粋に文学的な課題を取り扱える方法である。しかし、「文学における戦争責任の追求」では、こうした「自己批判」の必要性が指摘されているにもかかわらず、追及する側の自己批判は、「一部の者の重大且つ直接的な責任がごまかされてしまふ」という理由から、忘れ去られ、その大部分は戦争に協力的であった他の文学者や詩人の戦争責任を追及するという他者の批判になっている。

> だから、文学における戦争責任とは、他の何かであるよりも先づ吾吾自身の問題だ。吾々自身の自己批判といふことからこの問題は始まる。自由の世界でごまかしは利かぬ。吾々は戦争中の吾々がどうであつたのかをみづから追求し検討し批判する。そのことによつて、この十年間の日本文学のおそるべき堕落・頽廃に対して吾々自身の責任を明かにして行きたいと思ふ。
>
> だが、吾々はかの「一億艘懺悔」を行はうとする者ではない。それはバカげたことだ。周知のやうに、そこでは誰にも責任があるといふことによつて一部

22　小田切秀雄「文学における戦争責任の追及」、「新日本文学」第１巻、第３号（1946年6月）、64-65頁。

23　すでにこの「自己批判」という言葉は、先に引用した中野重治の1945年12月30日の「文学者の戦争責任追及」（「新日本文学会創立大会の報告」、「新日本文学」第１巻、第１号、65頁）という提案において用いられている。

の者の重大且つ直接的な責任がごまかされてしまふ。日本文学の堕落のその直接の責任者・堕落への指導者はゐなかつたか。人民の魂たるべき文学者にしてかへつて侵略権力のメガフォンと化して人民を戦争に駆り立て、欺瞞と迎合とによつて支配者の恥しげもない婢女となつた者、特にその戦闘に立つた者はなかつたか。[24]

ここにみられる新日本文学会側の戦争責任を追及する方法意識の中核には、明らかに戦争責任を追及する側の自己と追及される側の自己との間に明確な区分を設けていることがわかる。そしてその追及する側の自己を追及される側の自己よりも優位なものとしてみなすのは、新日本文学会がその発足において強調した「帝国主義戦争に協力せず、これに抵抗した文学者」という自意識があるからである。そこから「協力」に対するアンチテーゼである「抵抗」という概念を引き出すことによって、新日本文学会は日本の文学者あるいは詩人の戦争責任を追及し裁く立場を主張し得たものと思われる。

小田切秀雄は「第一回発表」と称して、「文学における戦争責任者」２５名の名前を挙げ、「指名することで彼等の責任を追求する」と断言している[25]。

ここで取り上げたのは主要な責任者のみであって、他は次の機会に取上げる。これは第一回発表である。ここでは特に文学及び文学者の反動的組織化に直接の責任を有する者、また組織上さうでなくとも従来のその人物の文壇的な地位の重さの故にその人物が侵略讃美のメガフォンと化して恥じなかったことが広汎な文学者及び人民に深刻にして強力な影響を及ぼした者、この二種類の文学者に重点を置いて取上げた。

吾々は、このやうに指名することで彼等の責任を追求する。そして文学者が

24　小田切秀雄「文学における戦争責任の追及」、「新日本文学」第１巻、第３号、64頁。

25　「文学における戦争責任の追求」の中で、戦争責任を指名することで追求されたのは、菊池寛、久米正雄、中村武羅夫、高村光太郎、野口米次郎、西條八十、斎藤瀏、斎藤茂吉、岩田豊雄（獅子文六）、火野葦平、横光利一、河上徹太郎、小林秀雄、亀井勝一郎、保田與重郎、林房雄、浅野晃、中河與一、尾崎士郎、佐藤春夫、武者小路実篤、戸川貞雄、吉川英治、藤田徳太郎、山田孝雄、以上の２５名であった。

実に公職以外の何ものでもないということ、文学は私事を取扱ふといふまさにそのことにおいて公の事に深く触れて行くものであって、いはば公職そのものであること、従ってこれらの責任者は文学の世界からの公職罷免該当者であることを吾々は主張する。吾々は彼等が退くまでその責任の追求をやめぬであろう。[26]

この文面から窺いしれることは、GHQが政治的意図を持って為した軍国主義指導者（後には文学者を含めることになる）の公職追放あるいは戦争責任追及の構造が、そのまま文学領域の問題として書き換えられていることである。GHQ側が行った戦争責任追及とは、それ自体戦争犯罪者の糾弾に目的があったとしても、いかにスムーズに戦後日本の政治システムの構造変換を促すかといった目的があったはずである。それゆえに、非軍事化を目的とした規定を設定し、それに該当する文学者を含めた軍国主義指導者を「公職から追放する」こと、つまり、政治領域から追放することそれ自体が重要なことであった。この点について、新日本文学会の戦争責任追及も、ある意味においては、戦後に於ける日本の文学システムの構造変換を狙ったものであると考えられる。「文学」そのものを「公職」とすることによって、「文学の世界」、すなわち文学領域から「追放する」という構図を作りあげた新日本文学会は、自らが設定した規定に照らし合わせて戦争責任が問われる文学者らをそこから追放しようと試みた。問題は、そうした規定が「戦争協力」という概念から作られているということであり、さらにはそれを支えるものとして「戦争抵抗」という概念があったことである。つまり、新日本文学会の論理を押し進めて考えれば、戦争に協力した者は戦後の新しい文学領域から排除されるべきであり、戦後の文学領域を新しく統制するのは戦争に抵抗した文学者のみであるとする、戦後文学のイニシアティヴの問題に直結してくる。

しかし、こうした性質をもつ新日本文学会の戦争責任追及は、新日本文学会が戦

26　小田切秀雄「文学における戦争責任の追求」、『新日本文学』第１巻、第３号、65頁。

争責任追及の根拠とした戦時中の自らの行動が明るみに出され、戦争反対者あるいは抵抗者を僭称せんとする彼らの欺瞞が、他の文学者たちによって明らかにされるにつれ、その追及力そのものが失速していくことになる。[27]

27　詩人の戦争責任を追及する側の欺瞞が明らかにされた新日本文学会のメンバーとしては、壺井繁治と岡本潤が挙げられる。壺井は「文藝春秋」に載せた「高村光太郎」論で、岡本は「コスモス」に掲載した「戦時と戦後の詩と詩人について」の中で、それぞれ詩人の戦争責任について追及している。しかし、その後、壺井繁治も岡本潤も、アンソロジー『辻詩集』に、次のような戦争詩、愛国詩を掲載していることが明らかにされた。
「お前を古道具屋の片隅で初めて見つけた時錆だらけだった。俺は暇ある毎に、お前を磨いた。磨くにつれて、俺の愛情はお前の肌に浸み透って行った。お前はどんなに親しい友達よりも、俺の親しい友達となった。お前は至って頑固で、無口であるが、真赤な炭火で尻を温められると唄を歌ひ出す。ああ、その唄を聞きながら、厳しい冬の夜を過したこと幾歳だらう。だが時代は更に厳しさを加へて来た。俺の茶の間にも戦争の騒音が聞えて来た。お前もいつまでも俺の茶の間で唄を歌ってゐられないし、俺もいつまでもお茶の唄を楽しんではゐられない。さあ、わが愛する南部鉄瓶よ。さやうなら行け！　あの真赤に燃ゆる熔鉱炉の中へ！　そして新しく熔かされ叩き直されて、われらの軍艦のため、不壊の鋼鉄板となれ！　お前の肌に落下する無数の敵弾を悉くはじき返せ！」（壺井繁治「鉄瓶に寄せる歌」）
「世界地図を見つめてゐると／黒潮はわが胸に高鳴り／大洋は眼前にひろがり／わが少年の日の夢が蘇つてくる／われ海に生き海に死なんと／海軍兵学校を志願し／近視の宣告で空しくやぶれ去つた／わが少年の日の夢が一／万里　波涛を蹴り／わが鋼の艦は行く。／夜を日につぎ／われら民族の血と運命を賭けて／海の闘ひは陸の闘ひにつづく。／わが少年の日の夢が／新しい世紀を創る、刻々の／壮烈な現実となつてかへつてきた。一」（岡本潤「世界地図を見つめてゐると」）

第２章第２節
「荒地」派詩人のモダニズム詩批判

（１）

前節で考察してきたように、日本の文学領域の内部における文学者の戦争責任の議論は、戦後、「民主主義」の理念をいち早く取り入れ、そこに文学的行為の基盤を見出すことによって戦後の新しい文学の創造的出発を遂げようと試みた、文学運動組織「新日本文学会」や文学新聞「文学時標」に拠った文学者たちに代表される、いわゆる「民主主義文学者」によって着手された。しかし、文学における戦争責任の問題が、民主主義の理念を前提とした「戦争責任」に対する見解や、GHQによって為された戦争責任追及を念頭に入れたその追及の方法とは違った視点から新しい展開を見せたのは、敗戦によって既存のあらゆる価値が崩壊し混沌とした思想と言論の状況の中で、自己の戦後の生のヴィジョンや詩の信条を非主体的に「民主主義」の理念に求めずに、自らの手でそれを確立しようとしていた「荒地」派詩人によってである、ということは注目に値するであろう。

「荒地」派詩人の「戦争責任」についての議論が新日本文学会などの議論と大きく異なっている点の一つとして、それが展開された時期を挙げることができる。新日本文学会による文学者および詩人の戦争責任追及が、GHQによる1946年1月4日の「軍国主義指導者の公職追放指令」を契機に、1946年3月の新日本文学会東京支部創立大会でその提案が可決されることによって活発化していったとするならば、「荒地」派詩人による戦争責任論が展開され始めたのは、1947年3月頃であり、新日本文学会による戦争責任追及の始まりとは一年以上の差がある。そして、1945年8月の敗戦から考えた場合、「荒地」派詩人が戦争責任論に着手するまでには、約１年７カ月の月日が流れている。「荒地」派詩人にとっての敗戦から1947年3月までのこの期間は、彼らの「戦争責任」についての見解やその議論の展開を検討す

る上で大きな鍵になることは確かである。

「荒地」派詩人たちが詩人の戦争責任論について積極的に考えるようになった事の始まりは、「荒地」派詩人よりも前の世代に属する詩人たち、特に、第１章第３節で考察した戦前において彼らに大きな影響を与えたモダニズム詩人たちが、戦時中に「国民詩」あるいは「愛国詩」を書いた、詩人としての行為を不問にしたまま、第二次大戦後、戦後新しく価値づけられた民主主義詩人として出発したこと、または戦前の詩観の延長線上に立ってモダニズム詩人として復活してきたことに対する「荒地」派詩人自身の不信に発している。

戦時中の詩人の状況については、詩人の戦争責任を追及するという立場から批判的に論じられたものとして櫻本富雄、今村冬三などの諸研究や、近代詩の中に潜在していた脆弱な主体性を愛国詩、国民詩、戦争詩を書くという戦中の日本の詩人の行為に読みとり、その期間の詩人の行為の事実を資料として提出することを意図した阿部猛などの先行研究が存在するが、そうした諸氏の研究のそれぞれの視座は別にして、それらの研究は当時の日本の詩人たちが如何に国家が掲げた大東亜共栄圏建設といった目的や国策を肯定し、それに協力すべく総動員されていたかという状況を知る上で大いに有益である。

例えば、阿部猛は『近代詩の敗北－詩人の戦争責任－』の中で、「国民詩集」「愛国詩集」「戦争詩集」の一部として、『詩歌翼賛』、『大東亜戦争決戦詩集』、『大東亜戦争愛国詩歌集』、『国民詩（第一輯）』、『愛国詩集』、『大詔奉戴』、『海軍献納愛国詩選』、『軍神につづけ』、『国民詩（第二輯）』、『国民詩選』、『御楯われら』、『いくさのには』、『日本詩集』、『辻詩集』など１４のアンソロジーを挙げているが[1]、これらのアンソロジーに参加した詩人の名前を見ただけでも、如何に多くの詩人が戦時中に愛国詩あるいは国民詩を書いていたか驚かされるのである。もちろんこのような愛国詩や国民詩を書いた詩人の姿勢には、それぞれ事情の異なる背景が隠されているかもしれない。戦争に対して肯定的であり、それをそのまま詩に書いた詩人もいれば、逆に戦争に対しては否定的であ

1　阿部猛『近代詩の敗北－詩人の戦争責任－』（東京、大原新生社、1980年）、21-23頁。

りながら心ならずも国家目的や国策に協力して愛国詩を書いた詩人もいるであろし、詩人はそれぞれの異なった心理状況で愛国詩あるいは国民詩を書いていたはずである。しかし、侵略戦争に協力すること自体を社会的規範からの逸脱であるとする民主主義的な論理から見た場合、愛国詩や国民詩を書いた行為も逸脱行為として問いただされることになる。

ところで、当時二十代であった「荒地」派詩人が問題にしたのは、彼らよりも上の世代の詩人たちが戦時中に愛国詩や国民詩を書いたという行為に主眼を置いたものではなかった。確かに、「荒地」派詩人による戦争責任論の初期の段階では、詩人の戦争協力という行為自体を追及し批判する意識が、そこに全くなかったとは言い切れないかもしれないが、しかし、「荒地」派詩人がより重要な問題として捉えていくことになるのは、別の点であったと思われる。「荒地」派詩人の戦争責任論に対する態度は、この議論が展開し始められてから約７年経過した後に鮎川信夫が書いた評論「われわれの心にとって詩とは何であるか」（初出、　荒地同人編『詩と詩論』第二集、1954年7月）の中の次のような言葉によって象徴される方向へと進んでいくことになる。

> 戦時中発行された『辻詩集』というアンソロジー一冊を調べてみてごらんなさい。いちいち名前をあげるまでもなく、当時活躍していたほとんどの詩人が、その立場のいかんにかかわりなく、これに参加しております。断わっておきますが、ぼくはいまそのことをあげつらって、それらの詩人を戦争協力のゆえに、非難しようとしているのではありません。この問題に対するぼくの結論は、そんなこととは全く別のところにあります。[2]

つまり、新日本文学会が、戦争に協力すること自体を逸脱行為として考え、終始その観点から戦争責任追及を行っていった一方で、「荒地」派詩人は、それとは異

2　鮎川信夫「われわれの心にとって詩とは何であるか」、『鮎川信夫著作集』第２巻、詩論I、142-84（157-58）頁。

なった姿勢で戦争責任論を展開していくのである。それでは、一体「荒地」派詩人は、何を問題にしたのであろうか。

それを簡潔に言うならば、「荒地」派詩人が問題にしたことは、前世代の詩人たちが愛国詩や国民詩を書いた戦時期、すなわち、彼らの「過去」を、戦後どのように引き受け、どのように清算したか、あるいは決着をつけたか、ということであり、さらには、戦後という「現在」に立った時点で、どうのように詩的行為の理念を獲得して戦後の詩的出発を遂げたか、ということになるであろう。

「荒地」派詩人が詩人の戦争責任の問題を展開し始めたのは、敗戦後約１年７カ月後のことであった。この期間に、日本は政治、経済、教育などの様々な領域において、戦後の新しい体制が、新しい未来像から照射を受けながら確立されていった。文学の領域に於いても、どのように戦後の文学を出発するかという問題は、敗戦直後から文学者にとっての大きな課題となっていた。言論・出版の自由が認められ、様々な文芸雑誌や詩誌が戦後文学の方向性を模索する中、その有力な指針の一つとなったのは、前節でも述べた新日本文学会が提出した「民主主義文学」という方向であった。民主主義の理念とその普及という方針は、戦後、日本の諸領域での再建活動において受け入れられたものであると同時に、徐々に大衆が好意的に受け入れていったものでもあった。新日本文学会は、その理念を文学の領域に持ち込み、その新しい文学の信条を基盤に文学的出発を遂げようとしたのである。民主主義の理念をいち早く取り入れ、いち早く文学的出発を遂げた新日本文学会には、多くの文学者が参加した。新日本文学会という文学運動組織を離れてみても、それと類似した理念を取り入れ、戦後における詩の出発を試みた詩人たちも数多く存在した。もちろんこうした「民主主義文学」というテーゼによらず、他の信条、例えば戦前と変わらぬ信条をもって戦後を出発した詩人もいた。しかし、どのような立場を取るにしても、ここで問題になるのは、戦後における詩人の「詩の行為」の基盤ともなるそうした信条が主体的に獲得されたかどうか、ということであり、またそれが戦時期の自己の痛烈な「自己批判」を経て得られたものであるかどうか、ということである。「荒地」派詩人が戦争責任論を展開する背景には、戦争体験という

自己の生きてきた「過去」をどのように詩人が扱うかという問題意識と、戦後、自らの詩的行為の理念をどのように獲得するかという問題意識が存在している。そして、そうした「荒地」派詩人の問題意識を支えているものは、彼らが戦争を体験することによって得た、詩人は自己の純粋な信条に基づいて主体的に詩の「ことば」を紡ぎださなければならない、という詩人の主体性に関わる先鋭な詩の認識であった。

（２）

「荒地」派詩人の戦争責任論展開の発端となったのは、北村太郎が詩雑誌「純粋詩」1947年3月号に「空白はあったか」（第一章）を含む詩壇時評「孤独への誘い」を掲載したことにあった。北村が「空白はあったか」で問題にしたことは、戦前において「荒地」派詩人に大きな影響を及ぼした、彼らよりも前の世代のモダニズム詩人たちが、自らが国民詩や愛国詩を書いた戦争時代を「空白」の時代として処理することによって、国民詩や愛国詩を書いた行為を含めたすべての戦時期における過去の経験を一掃し白紙状態にもどそうとしたこと、そして、そのことによって戦後も戦前と同じヴィジョンや詩意識を回復して詩の出発を遂げたということであった。つまり、彼ら「国民詩人・愛国詩人」たちが、戦後平然として、モダニズム詩人として復活してきたことそれ自体に問いを投げかけたのであった。

そうしたモダニズム詩や戦前における詩意識の「復活」は、田村隆一、北村太郎、鮎川信夫、黒田三郎、中桐雅夫、木原孝一など、即ち、戦後、「荒地」派を形成することになる詩人たちにとって、彼らの詩作品や批評作品の戦後最初の発表の場になった詩雑誌「純粋詩」（1946年3月－1948年8月）の存在が、象徴的に示している。詩雑誌「純粋詩」は、詩誌「日本詩壇」（1933年12月－1944年4月）の同人だった福田律郎と小野連司に秋谷豊が加わって、敗戦の翌年に創刊された詩雑誌である。創刊時においてその詩雑誌が目指したものは、「象徴詩の移植と克服」

という戦前における日本近代詩が掲げていたテーマのひとつ、「純粋詩」という詩概念の検証にあった。

「荒地」派詩人より前の世代の詩人がモダニスト詩人として戦後出発したことを対象にした批判であると同時に、戦後の詩的言語の主体に対する問題意識を含む、北村太郎の「空白はあったか」は、パスカル（Blaise Pascal, 1623-62）の『パンセ』（*Pensées*）第139章から引いた「われわれの不幸の殆んどすべては、われわれが自分の部屋に留まってゐることが出来ないのに因る」という言葉に続き、次のような「時間」の観念と詩人の「個」を対象とした文章で始まる。

> ある人間が生まれてから最後の呼吸が絶えるまでには、まぎれもなくその人間は、いはば主体的に存在してゐる。奇妙な時間の流れから外れて極めて孤独に、完全な意味に於てこの上もなく全的な孤独のうちに、彼は存在してゐる。どうにもならない自意識が、あらゆる哲学的、観念的解釈を拒絶して、おそらくは人類の消滅するまで、無限の可能性を創りだす個の倉庫として存在する。あらゆる不明確性も、すべての思想体系も、換言すれば人間に属する最高の美徳から最下劣の悪徳に至るまで、精神の全運動がそこから生まれ、そこに死ぬ。そしてさうゆう精神の唯一の特徴は持続性というふことだ。僕は持続性といふものを考へれば考へるほど、時間という観念が不必要に、そして有害でさへあるやうに思われる。[3]

ここで北村が強調しているのは、「個の倉庫」として存在する精神の「持続性」である。そして「持続性」と「主体」の不可分離性である。このようなことを冒頭で北村が述べる背景には、戦後、「時間」の観念を巧みに利用して、戦時期という「過去」を「空白」にしたり、あるいは大戦以前の「過去」を完全に放念して新しい時代の到来そのものを容易に受け入れたりした、詩人の「過去」の扱い方に対す

3　北村太郎「孤独への誘い」、吉本隆明編『現代詩論体系』第1巻、26-27頁。

る批判的な見解が存在する。そうした前世代の詩人たちの戦後の出発を1945年8月15日から約１年７カ月の間見てきた「荒地」派詩人は、「自己を欺いたり、他人の眼を眩ますときに限って、時間をまるで最強の味方のやうに引っぱり出す」[4]ことによって戦争時代を切り捨てようとするこの詩人たちに対して、「持続性」という観念をつきつけようとしているのである。

北村は、さらに、この評論において、詩雑誌「現代詩」（1946年2月－1950年6月）の1947年1月号に掲載された「現代詩の系譜と其の展望」と題する座談会（北川冬彦、笹澤美明、近藤東、安彦敦雄、浅井十三郎、杉浦伊作）の会話から、３つの部分を抜き出し、その言葉の中に、北村たち２０代の詩人が不信感、憂鬱感、ないしは絶望感を抱かざるを得ない欺瞞的な態度、つまり、「時間といふ観念」を用いて「詭弁を正当化する」態度を具体的に示そうとする。北村が引き合いに出した座談会の言葉は、次のような箇所であった。

（1）

北川　新しく出てくる詩人のためにどうしても啓蒙が必要と思ふんだ。それは僕らの義務だと思ふ。広い意味の戦争時代、ここ十数年というものまつたくブランクだからね。

近藤　悪時代が書かせるんだね。

北川　それにしても、今は、一等啓蒙を必要とする時代なんだ。自己啓蒙の意味もあるんだよ。

（2）

杉浦　［……］今までに約十年間のブランクが出来てしまつた。つまり戦争中は日本の詩が芸術的高貴（香気）よりは愛国主義的精神に傾いて詩が本質を失ひかけてゐました、［……］。

4　前掲書、27頁。

（３）

安彦　私ども二十代の青年は全く無知です。詩について何にもしらない。詩とはどんなものかと人にきかれたなら答えに窮するものが多いと思ひます。

笹沢　さうだろうなぁ丁度十年以上も詩が空白になつてしまつたんだから。これは我々の責任だ　5

詩雑誌「現代詩」は、昭和10年前後に日本の詩の領域において確固とした立場を築いた詩人たちによって、戦後における詩の復興と正統性の樹立を目的に戦後いち早く刊行されたものである。この座談会に出席している詩人は、２０代の安彦敦雄を除けば、全て３０代後半から４０代にかけての詩人であり、北川、笹澤、近藤は昭和初期に創刊され、戦前における大きなモダニズム詩の流れを作り出した詩誌「詩と詩論」に参加している。これら６人の詩人による座談会では、「現代詩の社会性と批評について」、「詩とその社会的影響」、「現代詩の難解性について」、「現実と詩の問題」、「新散文詩運動の再検討」、「抒情詩の解剖」、「自由詩の行分けについて」、「新即物詩」、「国語と雅語の再検討」、「国語問題」の１０項目についてそれぞれの意見が語られている。その座談会から北村太郎が抜き出した３つの引用には、すべて「空白」ないしは「ブランク」という用語が用いられている。このような用語を使用する背景に、「戦争が宿命的な、そして象徴的な［……］終りをつげて以来、十指に余る人々が戦争時代をブランクと呼び、現代の若い世代をあだかも当然配給されるべきチョコレイトを配給されなかった幼児たちのやうに憐れんだり、ないしは軽蔑したりする風潮」を読みとり、前世代の詩人たちが再び「若い世代」の詩人たちを「啓蒙」し、統制していこうという欺瞞的な気運や、「彼らが実際に空白ないしブランクな時間の存在というものを信んじてゐる」という事実、言い換えれば、「『悪時代』とか詩の空白時代とかまたは思想の

5　北川冬彦他「現代詩の系譜と其の展望」、「現代詩」第２巻、第１号（1947年1月）、6-34頁。（１）15頁、（２）18頁、（３）24頁。

ブランク時代などといふふざけた言葉を信じてゐる」事実を見抜くわけである。[6]

北村太郎を含む「荒地」派詩人たちは、このように前世代の詩人たちの戦後の態度や信念に対して反発を感じるわけであるが、その背景には、当時三十代、四十代の詩人によって全く簡単に「空白」あるいは「ブランク」の時代として片付けられてしまった戦争時代を、前世代の詩人たちとは別の受け取り方で認識していたという事実が存在するのである。

> 僕は二十代の詩人諸君にお訊ねしたい。君たちは昭和六年ごろは小学生だった。十二年ごろは中学生だった。そして十六年ごろは大学生だった。その時に大戦争が起った。君たちは戦場に行った。そして二十年の夏に還って来た。その十数年のあひだに、君の詩は、君の存在は、君の精神はブランクだったか。空白はあったか。おそらく若い詩人だった諸君には空白などといふ馬鹿げた観念は薬にしたくもなかったにちがひない。そんな甘ったれた空白などといふものが、もしあったと信じる詩人がゐるとすれば既にその人は詩人失格だ。空白なんてものはどこにもありはしない。僕たちが、僕が、君が、そして個人個人が息も絶えずに存在してゐる限り絶対にない。[7]

この文章のすぐ後で、北村は「『悪時代』のあひだ、孤独への誘ひに身を任せず、徒らに愛国詩、辻詩のアンソロジイに名前を連ねた先輩詩人が数多く存在したという事実を僕らは忘れまい」と、前世代の詩人たちが愛国詩あるいは国民詩を書いた戦時中の行為について触れている。しかし、それは新日本文学会的な「抵抗」を根拠に詩人の戦犯性を追求する視点から発せられているものではなく、北村たち２０代の世代が、彼らの２０数年という人生において最も重要な時期を戦争によって犠牲にし、戦争という状況下で思想的幻滅の中を生きざるを得なかったという「ロスト・ジェネレーション」としての世代意識と、先輩の者たちの次のような言葉を聞

6　北村太郎「孤独への誘い」、『現代詩論体系』第１巻、28-30頁。

7　前掲書、29頁。

きながら戦場に行ったという経験から、表出されたもののように思われる。

> ［……］青年が自分の分を完全に盡し、全体のために奉仕したといふことにおいて名誉を與へるやうにしなければならない。即ち青年その個人や学校のことではなく、全体の中にある個人として、青年の名誉が考へられなければならないと思ふ。
>
> かうなつて、はじめて青年は本当に生きることが出来るのだと思ふ。［……］今日青年が奮起したのは、青年の日々の生活がそのまま國家の存亡に連なることを自覚的にみとめるようになつたからである。青年学徒が自己の中に新しい生活を発見した、概念ではなく肉体を通してそれを認知したといふこと、これは何といつても今度の戦争のおかげである。[8]

上の引用を含む「青年の名誉について」は、昭和17年5月に雑誌「若草」に掲載され、同年11月に発行された『詩について』に収められたものである。この著者は、第二次世界大戦の最中に生きる青年たちを「國の明日を確保するために選ばれた世代のものたち」と捉え、青年学徒の名誉を上のように述べるのである。戦時下に於いて、青年に、あるいは青年である北村をはじめとする「荒地」派詩人たちに期待されたことは、国という「全体の中にある個人」として存在することであり、「全体のために奉仕」することを自らの生きる糧として受け入れることであった。「戦争のおかげ」で、青年は自己の新しい価値を認識し「本当に生きる」ことができるのであり、このような生き方をする青年が、「奉仕」のために戦場へ向かう姿に、上の著者は揚々と激励を述べている。このような戦時下に於ける軍国主義的風潮からの青年への要求は、ある者にとっては名誉心を駆り立てるものであったかもしれないし、ある者にとっては、何らかの折り合いを付けて受け入れることのできるものであったかもしれない。しかしながら、少なくとも北村にとって、或いは「荒

8　阪本越郎「青年の名誉について」、『詩について』第２版（東京、大澤築地書店、1943年）、12-17（16）頁。

地」派詩人にとって、このような要求は苦痛と幻滅と犠牲という意識に於いてしか捉えることのできないものであったと思われる。中桐雅夫の言葉で言えば、青年ゆえに「積極的にそれを打破しようとするほど意識がたかくなつてゐなかつた」ため、そして「「非国民」の烙印を捺されること」を恐れたために、「暗黙の拒否」という当時の彼らにとって精一杯の抵抗を抱きながらも受け入れざるを得ないものだったのである。[9]

しかし、先に引用した北村の文章には、戦争の犠牲になったというだけの自覚だけでは説明できない感情が表出している。そうした感情を支えているのは、三十代、四十代の詩人によってあまりにも簡単に片付けられてしまいながら、「二十代の詩人にとって重大だと思はれる事」、別な言葉で言えば、「彼らが空白だ、ブランクだ、という時代に僕らはまさにこの肉体を持って生きてきたのであり、そのあひだには、三十代、四十代の人の全く想像できぬ未知の個の倉庫が、徐々にそして確実に充たされてきた」という実感である。つまり、少年期から青年期にかけての十数年間を戦争のなかで全存在を賭けて過ごしてきたという自覚がこうした文体を支えているのである。

これまで生きてきた人生の半分以上を「ブランク」の一語によって否定されてしまえば、彼ら自身の「今」の存在を支えるものもなくなってしまう。そうした彼らの存在そのものを訴えかける切実な抗議がこうした感情的な文体となって表れているのであろう。戦争時代に「極めて孤独に、完全な意味に於てこの上もなく全的な孤独のうちに」単独者として存在し、「個の倉庫」としての精神や「内なる世界」を、戦時下の重く閉ざされた現実に対して主体的に苦悶しながら、形成し保持してきた二十代の詩人にとって、「ブランクといふ気が軽くなるやうな名称を与へる時期」はなかったのである。

「荒地」派詩人は、戦前においては十代の詩人として、「LUNA」などの同世代の詩誌を拠点に活動する一方で、前世代の詩人たちを中核とする詩誌「新領土」や

9　中桐雅夫　「lost generation の告白」、「荒地」第１巻、第２号、8頁。

「ＶＯＵ」に同人として参加することによって、積極的にヨーロッパ諸国の詩の理念と方法が移入されたコスモポリタニズム的な詩的風土に接触した。戦中には、その前世代の詩人たちが戦前の信条を放棄し民族主義の理念を受け入れ、総動員で国策に協力する為に愛国詩や国民詩を書いたのを目撃した。さらには戦後にはそうした前世代の詩人たちが戦争期をブランクとして捨象し、戦前と戦後を短絡的に結びつけることによって、戦前の詩の理念を回復しようとしたり、あるいは1945年8月15日以前の過去を全くなきがごとくに新しい民主主義という信条を受け入れ「未来」に向かって出発しはじめるのも目の当たりにした。このような状況を直視してきた「荒地」派詩人が、前世代の詩人たちと彼ら自身との間に、決定的な断層を読みとったのは確かである。

この北村太郎によって引かれた「二十代の詩人」と「三十、四十代の詩人」との間の断層の線は、北村太郎の「空白はあったか」を受けて詩雑誌「純粋詩」1947年5月号に掲載された鮎川信夫の評論「青春の暗転」においてより明確な太とぶとした線となって表れてくる。

> 我々の世代が形成されるやうになった過程ならびに要素を説明すると次のやうになる。
>
> 戦争時代、―所謂既成作家、学者、詩人等によってブランクと綽名されてゐる時期に我々は青春の体験を賭けてきた。既成詩人が戦争時代をブランクと呼ぶのはたしかに正しい。という意味は歴史が小学校の歴史の壁に貼られてあった年表のやうに、自分の体のなかではっきりと違った色分けが出来るものならばである。もし戦争時代がブランクであるならば、我々は戦争前に中絶した仕事を、戦争が終わった今日再び継続してゆくことが出来る筈である。三十代、四十代の人にはそれが出来るのだろう。ある既成詩人は、読書のなかった戦争時代が終った今日の無詩学状態を一歩後退とみて、自分達が戦争前に全部出尽くしてしまったと、昔の自分たちの仕事に愚かしく満悦して云うだろう［……］

しかし我々は背中にさういう声を聞きながら、まるで違った方向へ進まうとしてゐるのだ。我々にはブランクという気が軽くなるやうな名称を与える時期はなかったといふことが、やはり決定的な素因となるであろう。戦争中、我々の精神は幾多の試煉と知識の体験とによって重くなり、戦争が終わった今日、一方の秤がブランクになった時、我々と彼等を比較する秤は無残にも毀れてしまったのである。我々にとって空白は過去のどこにもありはしない。何故ならば、我々は青春を戦争といふ暗黒のうちに強いられると共に、それを青春と呼ぶにふさわしく生きることを学びとってきたからである。[10]

ここで鮎川信夫は、北村太郎がエッセイ「空白はあったか」で意味づけた内容を冷静に論理的に説明している。そして、北村によって引かれた世代間の断絶の線を固持することによって、二十代の詩人の世代を「我々の世代」として、三十代世代以降の前世代と対立させ明確化している。さらには、「我々の世代」にとっては、「空白」と呼ばれている時期が「青春」であることを強調することによって、戦後の「現在」に立っている「荒地」派詩人はその暗い時代なくしては存在できないという二十代世代の立場を明らかにしている。

このような北村太郎や鮎川信夫が提示した戦争時代という「過去」へ固執する態度は、当時文学領域において展開していた詩人の戦犯性を問うた戦争責任追及の、その追及する立場の者の態度と、内容的には全く異なるけれども、「過去」にこだわるという点については同じであるが故に、多くの反「荒地」派の感情を他の詩人たちに生んだことは確かである。しかしながら、この両者の立場には根本的な違いが存在する。それは、一方が他者としての文学者あるいは詩人の「過去」を問題にしたのに対して、「荒地」派詩人が固執したのはあくまでも彼ら自身の「過去」だったからである。こうした自らの経験にブランクという期間をもうけることなくそれを直視するという態度は、「自己批判」を通して回復した自己に基づき、戦中

10　鮎川信夫「青春の暗転」、『現代詩手帳』1月臨時増刊号「荒地－戦後詩の原点－」（1972年1月）に再録、219-23（219）頁。

に喪失した自己の回復に関わるだけでなく、本論第３章第１節で議論する、全存在を言語にかけることによって成立するとする「荒地」派詩人の詩的言語観にも通じてくるものである。

それでは次に、どのように自らの「過去」を扱うことによって「荒地」派詩人が戦後の詩的出発をとげたのか、ということを具体的に考察することによって、鮎川信夫が言った前世代の詩人とは「まるで違った方向」とは如何なる方向なのかという問題と、それを方向付けた根拠である彼らにとっての「青春」あるいは「過去」とは如何なるものであったのか、という問題を考えてみたい。

（３）

前世代の詩人たちと自らの世代との間に大きな断絶があることを認識した「荒地」派詩人たちは、彼ら自身の活動の拠点となる詩誌「荒地」を1947年9月に創刊した。この詩誌「荒地」は、田村隆一の要請に応じて集まった、戦前の詩誌「LUNA」や「VOU」に参加した二十代の詩人たち、鮎川信夫、中桐雅夫、堀越秀夫、疋田寛吉、三好豊一郎、北村太郎、木原孝一などが中心となって創出されたものである。その創刊第一号に掲載されているのは、西村孝次のT.S.　エリオットの『荒地』に関する評論「荒地へ－T.S.　エリオットにおける詩と批評－」（1－11頁）、森川義信の詩作品「勾配」（12－13頁）、三好豊一郎の二篇の詩作品「囚人」（14－15頁）と「夜の沖から」（16－17頁）、斉藤正直の評論「心境小説における詩的性格について」（18－22頁）、最後に鮎川信夫の評論「暗い構図－囚人に関するノオトI－」（23－32頁）である。全体が32頁の薄い小冊子程度の創刊号であるが、それでも巻頭には「荒地」派詩人に思想的にも詩的にも大きな影響を与え続けた T.S. エリオット『荒地』についての西村孝次の評論が掲げられ、森田義信と三好豊一郎の詩作品を題材とした鮎川信夫の評論「暗い構図」を巻末に掲載

するなど緻密に構成が考えられている。

この創刊号で注目すべきは、森田の詩「勾配」と三好の二篇の詩「囚人」と「夜の沖から」であろう。これらの三篇の詩は、鮎川の評論「暗い構図」の中で明らかになるように、すべて戦時中に書かれた詩作品である。森川の「囚人」は1939年の詩誌「荒地」（第一次）に発表された作品であり、三好の「囚人」は「勾配」に６年遅れて、戦争が終末に近づいていた「1945年、小さなパンフレットのやうな雑誌」に掲載されたものであり、そして「夜の沖から」は「囚人」の原型として戦中に書かれた。このような戦時中に書かれた詩作品を詩誌「荒地」創刊号へ掲載するという行為には、北村太郎が「空白はあったか」で激しい文体で訴え、鮎川信夫が冷徹かつ論理的に主張した、「過去」としての戦争時代を「空白」としてやり過ごすことが出来ないという彼ら自身の意志が明確に表れている。北村太郎の言葉を借りれば、「未知の倉庫」に「充たされた」戦争時代の青春を、その創刊号に刻むことから出発した「荒地」派詩人の戦後の出発は、すでに民主主義文学という新しい未来像を獲得し、それに向かって出発していた民主主義詩人や戦中を「空白」にすることによって再び戦前のモダニズム詩の延長線上で西欧文学の詩意識を方法や理論を中心に接種し始めていたモダニズム詩人たちと比べると、それはあまりにも「暗い出発」であったと言うことができる。

非望のきはみ
非望のいのち
はげしく一つのものに向かつて
誰がこの階段をおりていつたか
時空をこえて屹立する地平をのぞんで
そこに立てば
かきむしるやうに悲風はつんざき
季節はすでに終りであった　　（「勾配」より）[11]

11　森川義信「勾配」、「荒地」第１巻、第１号（1947年9月）、12-13頁。

孤独におびえて狂奔する歯
とびあがつてはすべり落ちる絶望の声
そのたびに私はベッドから少しづつずり落ちる

私の眼は壁にうがたれた双ッの穴
夢は机の上で燐光のやうに凍つている　　（「囚人」より）[12]

1939年に森川が「すでに終りであった」と記した「季節」が、1947年9月の詩誌「荒地」創刊号に再び刻み込まれているということが意味するのは、「荒地」派詩人にとっては、戦後二年たってもまだ「季節」が終末であり、「非望のきはみ」の「季節」であるということである。一方では、戦後、新しい時代の到来を強弁し、それとともに訪れた理念や信条を非主体的に受け入れ、詩的営為を行っている詩人が存在するのに対して、三好の「囚人」の中の「私」の「眼」は、「壁にうがたれた双ッの穴」であり、如何なる「夢」も「望み」も見ることはできない。この二つの詩に表現されている詩的世界の暗さは、「荒地」派詩人の現実に対する認識を象徴しているだけではない。それは、戦後、詩的出発を遂げようとしているが、如何なる「ヴィジョン」も見い出し得ないという戦後の詩的営為の苦悶が生み出す「暗さ」をも暗示しているように思われる。

このような「暗さ」は、根源的には、「荒地」派詩人が戦争時代という「過去」を自己から切り放すことができないことから来るものである。また、それは「荒地」派詩人が戦後選択した詩的行為の「方向」をも意味している。つまり、その「暗さ」の中で、自ら自身の手によって主体的に詩の理念を切り開いていくことを選択したのである。このような「荒地」派詩人の選択と労力は、『荒地詩集』[13]ぐらいになると彼ら自身の詩的言語観として表出し、それが日本の戦後詩そのものの重要な問題、つまり詩の思想性の問題や、ことばとそれを紡ぎ出す者の主体的な関係の問題として「荒地」派詩人の中で深められていったことは注目すべきであろ

12　三好豊一郎「囚人」、「荒地」第１巻、第１号、14-15頁。

13　詩誌「荒地」（第二次「荒地」）は1947年12月の第６号をもって終刊する。以後それは、年刊アンソロジー「荒地詩集」（1951-58）という形式になって、存続することになる。

う。

このように考えてみると、戦争とそれに否応なく関わらざるを得なかった宿命への「荒地」派詩人の思いの強さを感じないわけにはいかない。さらには、「荒地」派詩人が、T.S. エリオットの『荒地』に表現されている第一次大戦後の西欧の現代意識や、「過去」に対する先鋭な意識から構築されたエリオットの「伝統」や「時間」の観念の理解を深める上で、如何にそうした存在論的な条件が大きな役割を果たしたか、ということを感じざるを得ないのである。

この節では最後に、そうした戦争に対する思いの強さが、どのように戦後の出発において結実したのかということを、鮎川信夫の場合に即して少し加えておきたい。

鮎川信夫の戦後の詩的出発を考える上で欠かすことのできない詩作品として、初出が「純粋詩」1947年2月号の「死んだ男」と題する詩作品がある。その詩の始まりと終わりは次のようになっている。

たとえば霧や
あらゆる階段の跫音のなかから、
遺言執行人が、ぼんやりと姿を現す。
―これがすべての始まりである。　　（第１連）

「さよなら、太陽も海も信ずるに足りない」
Mよ、地下に眠るMよ、
きみの胸の傷口は今でもまだ痛むか。　　（第５連より）[14]

この詩の題にもなっている「死んだ男」は、文字どおりに考えれば、「過去」においては生きていたが「現在」には存在しない男である。このような「死んだ男」が、「現在」に生きている人間に意味を持たせるのは、その人間が過去においてその「死んだ男」と関わりがあるからであり、もし全く知らない人間が死んだ場合に

14　鮎川信夫『鮎川信夫全集』第１巻、16-17頁。

は、一生物体としての死としてしか我々は認識しない。この点に関して、この「死んだ男」は、客観的な形象になっているが、その背景には鮎川個人が関わった人間の固有名詞が存在することを無視するわけにはいかない。その点から考えると、この詩で「M」とイニシャライズされているのは、鮎川と親交の深かった森川義信であると思われる。

森川義信については、「荒地」創刊号に掲載された詩「勾配」について述べた所ですでに言及したが、実は森川は、詩誌「荒地」が創刊される以前に、正確には1942年8月にビルマで病死している。鮎川信夫よりも二歳年上である森川と鮎川は互いに尊敬し合い、影響を与え合う最も親しい詩人仲間であった。そして「僕のことを思ひ出すことがあったら『魔の山』の最後の一頁を読んでくれたまへ。私の未来は起きてゐても倒れてゐても暗いのだ」[15]と仏印へ赴く前、鮎川に「遺言」代わりに最後の手紙として遺していった森川を想起して鮎川は、この詩を書き初めているわけである。

ここで重要なのは、鮎川の詩を書くという行為が、過去に生きて現在死んでいる友人を契機しているということであり、そこには過去を起点としてしか詩を書くことができない当時の鮎川の存在論的条件が示されている。こうした詩人の詩的営為に対する切実な緊迫は、「遺言執行人」という形象によって象徴的に表現されている。「遺言執行人」とは、過去に生きた人間の「遺言」にとらわれた人間であり、過去に忠実になろうとする人間である。そうした「遺言執行人」には、常に後ろ、つまり過去を見なければならないという宿命があると同時に、その過去を現在に引きずることでしか現在を生きられないという現実がある。このような形象には、詩的営為に関わる何の信条や理念を持たずに、そして予言者として、その未来そのものを得られないで、戦後に於ける詩的行為の「始まり」を刻み込まなければならなかった詩人の像が重なってくる。

このように鮎川信夫の場合には、「死んだ男」という形象を中心に構成される

15　鮎川信夫「戦中手記－荒地の蘇生・Ｔへの手紙、その他」、『鮎川信夫著作集』第７巻、226-82（260）頁。

「過去」を出発点として、戦後の詩的出発を遂げた。三好豊一郎の場合には、戦時中の自我の体験を中心に出発した。そして「荒地」派詩人全体としては、戦争に犠牲になった友人であり詩人の森川義信の「勾配」を、詩誌「荒地」創刊号に「我々の暗い青春の最も記念的作品」として掲載することによって、戦後の出発を試みようとしたのである。こうした戦争時代という「過去」あるいは「青春」を中心に、戦後という「現在」を出発した「荒地」派詩人が、次に問題にしなければならなかったのは、どのようにして「荒地」派詩人自身の詩的信条を獲得するか、ということであることは言うまでもないであろう。そうした「荒地」派詩人自身の詩の理念の獲得は、民主主義詩人やモダニズム詩人が容易に、かつ非主体的に戦後になって詩的理念を受け入れたその態度そのものを批判的に乗り越えるという形で、つまり、「荒地」派詩人自身の手で詩の信条を獲得するという形で展開されていった。

（４）

「荒地」派詩人が戦後の出発に当たって、如何に「過去」というものにこだわりつづけ、堅固に保持し続けようとしたかについては、上述のごとくである。「荒地」派詩人が詩の新しい理念を自らの手によって構築し、自らの戦後のヴィジョンを獲得するには、「過去」を含み込んだ「現在」、すなわち戦後の「現代」についての認識をしっかり確立しておく必要があった。この点で、その「現代」を、「荒地」派詩人が自らの生のヴィジョンを獲得するために唯一の拠り所としていた「ことば」という側面から最初に分析し、その問題点を明らかにしたのは鮎川信夫であった。

鮎川は、詩誌「荒地」創刊号に掲載された評論「暗い構図」の中で、次のような黒田三郎の戦後の言葉に関する状況認識を引用しながら、「現在の日本の混沌とした言論の底には、まだ言葉への不信の感情が流れている」とする戦後の言語状況認識論を展開している。「言葉に対する信用が強ひられ、不信用がタブウ化されたあと、プロパガンダの虚偽が判明したならば、言葉そのもの迄、はなはだしい、不信

用を蒙るのが常である。にも拘らず、プロパガンダの時代は、更に、過去の心理上の習慣を是が非でも利用せんとつとめる。不換紙幣の濫発が、更に不換紙幣の濫発をあふるやうに」とか、「民主主義日本のために氾濫している言葉は、通貨が、新しい生産の再開を俟つてはじめて、落着くところに落着くやうに、今では、行方の知れない下落状態にある。むしろ、食ふために隣人同志でやりとりされる、限られた二、三の言葉の外は、全く味も素気もない二、三の実利的な言葉の外は、単に、思惑と投機の道具である」という「通貨」を比喩に用いた「言葉」に関する黒田三郎の意見を引き合いに出しながら、鮎川信夫は、「古い時代の秩序が崩壊し解体しても、まだ新しい秩序が安定に到らない間は、言葉はどうしても思惑と投機の道具として使はれるに過ぎない」と結論づけている。[16]

こうした戦後の「ことば」に関する状況が「荒地」派詩人にとって大きな問題として措定されるのは、それが「荒地」派詩人自身の戦後の詩的創造と生のヴィジョンの獲得に直接関わってくるからである。たとえ「荒地」派詩人たちの「ことば」が「荒地」派というグループの中では「信用」を保ち得たとしても、それがいったん社会的なコンテクストの中に置かれることによってその「信用」が「下落」する結果となるならば、第３章第３節で説明することになる「荒地」派詩人の詩的行為の意図、すなわち、詩の「ことば」を通じて自己の戦後の生に意義を与える、読者と書き手の「共同的な世界」の構築そのものが危ぶまれるからである。この点で、「荒地」派詩人は、「言葉」が「思惑と投機の道具として使はれてに過ぎない」という戦後の言語状況で、その底流に流れる「言葉への不信の感情」を如何に自らの手で払拭するのか、という先鋭な問題意識を持ったと思われる。当然この問題は、「荒地」派詩人だけの問題ではなく、日本の詩人あるいは文学者全体の「ことば」の問題として考えられなければならない根本的な問題であったことは確かである。しかし、こうした「詩や文学そのものの存在理由」に関わる問いは、既に戦後の詩的信条を獲得していた民主主義詩人やモダニズム詩人には問う必要のないもので

16　鮎川信夫「暗い構図－囚人に関するノオトI－」、「荒地」第１巻、第１号（1947年９月）、23-32（24-25）頁。

あった。

「我々はどのような希望を詩に対して抱き得るか」、「詩とは何か」などという問いは、例えば鮎川信夫にあっては、1951年版『荒地詩集』に掲載された詩論「詩とは何か」にまとめられるが、こうした思考が戦後の「荒地」派詩人の活動の原動力になっていたことは確かであろう。

戦後の日本における「ことば」の信用を如何に回復するのか、という問いに対して「荒地」派詩人が打ち出した考えは、詩人自らが戦争によって空洞化してしまった「主体」を回復しなければならないというものであった。既述したように、「荒地」派詩人よりも前の世代の詩人たちのほとんどは、戦争に総動員され、国策や戦争そのものを肯定する国民詩や愛国詩を戦時中に書いていたが、その前世代の詩人たちが戦後になると今度は民主主義詩人、平和詩人、あるいはモダニズム詩人として活動を始めた。このような前世代の詩人たちの戦時中と戦後の態度から、現実に対する抵抗力や思想性の欠如だけではなく、「ことば」に対する欺瞞と「ことば」そのものの信用を「下落」させている原因を読みとったのであった。そして、戦後、詩的言語を創出していく点で、さらには、自らの詩的言語観を確立していく上で、どうしても戦争によって空洞化された主体を自己批判することによって回復することなくしては、詩的言語は紡ぎ出せないであろう、さらには、「ことば」自身の信用の回復もなされないであろう、というのが「荒地」派詩人の認識であった。

このような視座から、「荒地」派詩人は、詩人自らによる戦時中における自己を存在論的に批判することの必要性を主張するのである。

以上考察してきたように、「荒地」派詩人は、第二次大戦後、「詩の行為」の主体性の回復と詩的言語の社会的機能の回復という同時に二つの課題に直面した。「荒地」派詩人は、この課題に対して、戦争によって空白化された主体を自己批判し主体性を回復することによって、そして、「ことば」に回復された詩人の主体の全存在をかけることによって、つまり、「ことば」と「主体」の同時回復によってこの問題を解決しようと試みた。このような戦争責任論を基軸とする詩的営為の主体性論と詩的言語状況論の背景には、戦争時代という「過去」と戦争体験そのもの

を手放さずに保持し続けたということ、そして詩的信条や戦後の生のヴィジョンを、決して外部からではなく、自己の中から導きだそうとする主体的な態度ををを取り続けたこと、この二つのことが中核にあったように思われる。そして「荒地」派詩人はここで深めていった詩の思想性を、その後、「内的自由の問題」や「悩める魂の問題」へと広げることによって、本論第３章第１節で議論することになる、彼らの詩の信条であるところの、詩の「ことば」によって「形而上学的な価値」が導きだされる世界を見い出すことになるのである。

第２章第３節
『死の灰詩集』論争と鮎川信夫

前節に於いて、「荒地」派詩人によって為された戦争責任論を視座に入れたモダニズム詩批判を考察してきたわけであるが、そこで「荒地」派詩人がその議論を展開する発端となったのは、「荒地」派詩人が、戦後、目撃した前世代の詩人たちの非主体的な詩の行為であり、そして、その批判の根拠になったものは、「荒地」派詩人が戦後の混沌とした思想状況の中で、時間をかけて戦争体験というものを血肉化し、詩的理念を獲得しようとしていた戦後の詩的経験があった。かくして、戦後の詩的行為の基盤を、戦前の詩的信条や戦後の民主主義という理念に拠ることなく、その後、自らの詩的行為の根拠を見出した「荒地」派詩人は、その詩的信条を基にしながら、「詩を書く」という行為を行っていくことになる。そのような「荒地」派詩人たちの戦後の詩的活動の中で、戦争責任論やモダニズム批判と同様に、「荒地」派詩人、特に鮎川信夫が詩人の主体性という観点を踏まえた上で関わっていくのが、1954年10月に出版された『死の灰詩集』をめぐる日本の詩の領域における論争であった。

本章本節では、鮎川信夫が主に関わった『死の灰詩集』論争の考察を通じて、「荒地」派詩人が、戦後一貫して問い続けてきた、日本における詩の主体性の問題を明らかにしたい。

『死の灰詩集』刊行の直接的な契機となったのは、当時の日本を騒がせ、人々の大きな関心をひいた一つの事件、すなわち「第五福竜丸事件」であった。1954年3月、南太平洋ビキニ環礁でアメリカによって行われた水爆実験により、設定危険地域をはるかに超えた広範囲に放射性下降物、いわゆる「死の灰」が撒き散らされ、近隣の島々の住民だけでなく、周辺海域を操業していた日本の漁獲船第五福竜丸の

乗組員が「死の灰」を浴び、被爆者として原子病との闘病生活を余儀なくされた。このような社会的事件を背景に、現代詩人会は、原水爆の問題は全人類の存在の危機につながるものであり、原爆・水爆を経験した国の詩人としてそれらに抗議することが彼らの社会的な責任・義務であると捉え、『死の灰詩集』の編纂を行っていくことになる。[1]　『死の灰詩集』の「序」に於ける、「水爆実験の禁止はもとより、人類の不幸と滅亡をまねく一切の原水爆放棄と戦争絶滅を念願する殉教者として、叡智を以て暴力に立ち向かい、人類史上にせめて存在意義を確立することこそ、詩精神に生きるものの義務である」[2]という現代詩人会の言葉からも明らかになるように、『死の灰詩集』は、原水爆使用禁止、ひいては戦争反対を詩的活動によって、国内外に訴えるべく編集されるのである。そして、現代詩人会の原水爆問題に詩人としての社会的な立場から抗議しようという呼びかけに、日本中から約８００篇もの詩作品が寄せられ、そのうちの１２１篇が最終的に『死の灰詩集』に掲載された。

このような人道的な立場に立った『死の灰詩集』の見解や目的自体が、論争の対象となったのではないことは言うまでもないであろう。『死の灰詩集』をめぐる論争の対象となったのは、詩人の社会的責任、あるいは詩と社会的主題の関わりという問題、また、それぞれの詩人たちがひとつの社会的主題をどのように主体的に自らの詩作行為に反映させていったかという問題などであった。すでに、1954年12月、つまり『死の灰詩集』が刊行されて２カ月を経た時点で、その詩集に含まれる詩作品の中で、作品として優れたものが少ないということが、例えば、詩誌「詩学」の「書評」において指摘されている。[3]　この「書評」の著者は、『死の灰詩

1　現代詩人会は、1949年、北川冬彦、村野四郎、草野心平、などを中心に４１名の詩人によって結成され、1950年に発足した戦後最初の詩人団体である。国内外における詩的活動の実践を目的とし、『死の灰詩集』（東京、宝文館、1954年）もまたその活動の一端として、安藤一郎、伊藤信吉、村野諦、大江満雄、岡本潤、上林猷夫、北川冬彦、木下常太郎、草野心平、蔵原伸二郎、壺井繁治、深尾須磨子、藤原定、村野四郎、の１４名を編集委員に出版された。

2　現代詩人会編　『死の灰詩集』、２頁。

3　鶴岡冬一「書評－現代詩人会編　「死の灰詩集」」、「詩学」第９巻、第１２号（1954年12月）、84－85頁。

集』刊行の目的には声援を惜しまぬと述べる一方で、この詩集に収められた詩作品のうち、詩の美を受け取ることができるのはほんの一部の作品に限られ、一般読者の観賞にも耐えぬものさえあると指摘している。そして、所収作品の芸術的価値が低い傾向にあることの一つの理由として、特定の主題を与えられた詩人がそれにがんじがらめになってしまっており、同時に、3月の事件以後、6月の作品締め切り、10月の刊行と、時間的にも主題を消化しきることができていないことを挙げている。つまり、かなりはやい段階で、日本国内に於いても、『死の灰詩集』に対する作品の芸術性という問題に関する批判的な見方、及び、ひとつの与えられた主題が詩人の内側から発するものとなっていないという指摘が存在していたということができよう。

このような『死の灰詩集』に対する批判が、詩人、あるいは詩の本質とより強く結びつけられたかたちで、ひとつの論争へと発展していったのは、British Councilから刊行の月刊雑誌*Britain To-day* の1954年12月号に掲載されたエッセイ 'War, Peace and Poetry' において、S. スペンダー (Stephen Spender) が『死の灰詩集』について言及したことを契機としてであった。スペンダーは、一時、社会主義的立場を取り、政治的・社会的問題を、自らの詩作の主題として積極的に取り上げたものの、このエッセイを書いた時点ではすでに、社会主義の矛盾を認め、人道主義的・倫理的立場をその著作において打ち出していたイギリスの詩人である。日本の詩の領域においては、第1章第4節で言及したように、戦前におけるモダニズム詩系詩誌「新領土」などで積極的に翻訳、紹介され、日本の現代詩人によく知られる存在であった。スペンダーに『死の灰詩集』を紹介したのは、現代詩人会の一員であり、『死の灰詩集』の編集委員の一人でもあった安藤一郎である。1954年9月にベルギーに於いて開催された第2回国際詩学会議に参加した安藤一郎は、当時の日本の詩についての講演の最後に、『死の灰詩集』について言及し、その趣旨と数篇の英訳した詩作品を紹介した。海外の詩人、或いは文化人たちへ彼らの主張を訴えることは、『死の灰詩集』刊行の一つの目的でもあり、この時点で英訳されたの

は、堀口大学、近藤東、阪本越郎による３篇の詩作品である。[4]　その帰路、安藤は、イギリスでスペンダーをはじめ何人かの詩人に会ったときにも『死の灰詩集』の趣旨を伝えるとともに、英訳された詩を提示している。しかしながら、スペンダーの'War, Peace and Poetry'における『死の灰詩集』への言及は、必ずしもその編集に携わった日本の詩人たちを満足させるものではなかった。スペンダーのエッセイは、1955年4月号の詩誌「詩学」と詩誌「現代詩」、および詩誌「現代詩研究」において次々に訳載され、これを中心として『死の灰詩集』論争が巻き起こることになる。

スペンダーは、このエッセイの中で、「私は水爆の被害者に関心をよせて起ちあがった、八百人の日本の詩人たちに強い感銘をうけた」と述べ、彼が眼にした英訳された詩を「なかなか迫力があって心を打つものがあった」と評価しながらも、社会的テーマと詩の芸術性の問題に触れながら、西欧の詩人たちが、「彼等自身の内部の精神を探って、どうすれば真実で、しかも詩的に作品を書きうるかを自問し、物事に深い注意を払い、確信のつくまでは決して発言しないことも喜びたいのである」と述べるのである。[5]　スペンダーは、自らの視点を『死の灰詩集』に偏らせることなく、より一般的な詩の問題に目を向けながら、社会的テーマを扱った詩が芸術ではなく宣伝の一形式となってしまう可能性を多分に含んでいることを危惧するとともに、「もし社会問題を作品中に復活させるべきであるとしたならば、ともかく私的で、個人的の経験に根をおろしていなければならない」と主張する。[6]

このようなスペンダーの『死の灰詩集』についての言及とエッセイの論旨に対して、幾人かの日本の詩人たちによる反論が発表された。詩誌「現代詩」の1955年4

4　英訳されたのは、堀口大学の「死の水曜日」、近藤東の「かの文明国」、阪本越郎の「死の灰の雨」の３篇である。それぞれの英訳は、'Ash Wednesday'（福田陸太郎訳）、'That Civilized Nation'（市瀬竹士訳）、'Rain of Death'（市瀬竹士訳）と題され、『死の灰詩集』の巻末に掲載されている。

5　S. スペンダー、木村真訳、安藤一郎補修　「戦争と平和と詩」、「現代詩」（1955年4月）、39-41頁。本論文に於けるスペンダーのエッセイの邦訳は、「現代詩」に掲載されたものをとったが、同時に「詩学」第10巻、第4号（1955年4月）、18-21頁に掲載された堀越秀夫訳による「戦争・平和・詩」も参照した。

6　前掲書、41頁。

月号では、「死の灰詩集の反響」と題し、安藤一郎の「スペンダーについて」という紹介文の後、スペンダーのこのエッセイを「戦争と平和と詩」として訳載すると同時に、深尾須磨子、村野四郎、北川冬彦、という『死の灰詩集』の編集委員でもあった三名の詩人たちによるこのエッセイについての感想と意見を掲載している。こうした意見の中で特にその著者たちが強調しているのは、社会問題を詩作品中に復活させるとしたならば、ともかく「私的で、個人的の経験」に根をおろしていなければならないというスペンダーの主張に対して、『死の灰詩集』の詩は、個人的経験に根ざしているということ、そして、そうした個人的経験が日本人すべてに共通した社会的経験であることを主張することによって、社会的問題と詩との接近を正当化させている点である。

日本の詩人達の『死の灰詩集』は、正直にいって一夜漬けである。沈着、冷静、確信を練る余裕のなかったのも事実、要するに大火の渦中に在って自ら火の子を払いながら、なおかつ延焼を防ごうとするものの、絶体絶命の「助けて！」であり「警戒！」である。それを期せずして人類の声として叫び、期せずして人類のすべてにとどけたかったのである。宣伝的距離どころか、放射能は私共の頭上に降っていたのだ。それが悪魔をも動かす芸術と一つに結ばれる困難を克服するまでには、私共はなお幾多の反省と、苦悩と忍耐とを重ねなければならないであろう。しかも私共は、広島、長崎、福竜丸の不幸と災害を、自らの生命と生活をおびやかすせっぱ詰った私的な、個人的な経験として以外には考えられないのである。それが原子科学者の断定する、逃れようもない原水爆の谷間日本の住民のどうしようもない考え方である。（深尾須磨子「『戦争と平和と詩』を読んで」より）[7]

ところで、私が『死の灰詩集』編纂者の一人となったのは、これをスペンダーが見ているような社会的問題、政治問題としてとりあげたのではない。結

7　深尾須磨子「『戦争と平和と詩』をよんで」、「現代詩」（1955年4月）、42-43（43）頁。

果としてはそういうことになるも知れないが動機は、流行問題としてではなく、個人の切実な死活問題から発した行動である。［……］われわれは、少なくとも私は、日本の漁夫たちの水爆実験被害に対して傍観的に日本人として水爆実験に抗議したのではない。われわれは、私は直接に頭から毒の雨をふりかけられ、死の恐怖にかられたことへの怒りの表白であったのである。そして、あの水爆実験が私ばかりではなく、私の子、子孫、われわれ日本人、ひいては世界人類の生命を脅かすものであるから、怒りは大きく、抗議は強烈で根ぶかいのである。［……］

従来、ひっ込み思案で社会的問題に無関心であった日本の現代詩人たちも、この水爆実験に対しては立ち上らないではいられなかったのである。ただ、あの『死の灰詩集』に収められた作品のすべてが芸術性をかち得ているかどうかは問題であるけれど、それを流行の平和問題として日本の現代詩人たちが取り上げたのではないことだけは断言出来るのである。身にふりかかった災いを振り払おうとする声として発せられ、それがわれわれ日本の民衆の想いを代表するという方向をそれらの詩は持ったことはあらそわれない。スペンダーが望んでいる個人的の経験に根をおろした、個人と社会とが一致する方向の詩的表現であったのである。（北川冬彦「スペンダーの考えは傍観的でわれわれの真実に触れていない」より）[8]

上記に引用した二つの文章には、「死の灰」事件を詩人の私的な、個人的な経験として認識し、さらにはそれを「日本の住民」あるいは「日本人」全体に身にふりかかった社会的体験とみなすことによって、「日本の民衆の想いを代表する」声として、詩人が詩的言語を紡ぎ出すことの必要性が説かれている。

また、『死の灰詩集』編集委員のひとりである伊藤信吉は、昭和30（1955）年5

8　北川冬彦「スペンダーの考えは傍観的でわれわれの真実に触れていない」、「現代詩」（1955年4月）、44-45頁。なお、引用はしなかったが、村野四郎のスペンダーのエッセイに対する意見は、「詩人の政治的意識の問題」と題され、同じく「現代詩」（43-44頁）に掲載されている。

月8日、9日の二日にわたり「東京新聞」紙面に「詩における社会性と芸術性－スペンダーの論旨－」、「詩における社会性と芸術性－主題の成熟の方法－」を掲載し、次のように「個人的体験」と「社会的体験」を合理化することによって、スペンダーの「戦争と平和と詩」の論旨に対して反論するのである。

「もし社会問題を作品中に復活させるべきであるとしたならば、ともかく私的で、個人的の体験に根をおろしていなければならない。」というスペンダーの言葉は、一面では正しく一面ではまちがつている。

個人的体験とはなんだろう。それはかならずしも個々の詩人が、自分の身で経験した事実ということではない。現代人としてたくさんの人々に共通するところの、そういう普遍的な事象を、それぞれの詩人が自分の経験として消化しそれを個性的な詩的主題として成熟させることではないのか。

このときその詩人が現代人としての時代感覚を所有しているならば、その主題は必然的に内面から外面にむかつて呼吸をし、必然的に社会的体験と個人的体験をむすびあわせ、そこに現代詩にとつての主題を成熟させる。[9]

以上具体的にみてきたように、スペンダーのエッセイの一節は『死の灰詩集』を編纂した詩人たちに対して大きな波紋となって広がり、様々な反論や批判が書かれたりしたのであるが、こうした日本の詩人の態度に対して、鮎川信夫は、上記の伊藤信吉のエッセイを受けるかたちで、反論のエッセイ「『死の灰詩集』の本質－古臭い社会的意識－」と「『死の灰詩集』の本質－想起させる異常性－」を、同年5月5月15日と16日の両日にわたって「東京新聞」紙上に発表した。そこで、スペンダーの著作を通し、彼の詩意識にも精通していたと思われる鮎川は、「社会的主題の復活があるとすれば、とにかくそれは私的な個人の意見に根ざしたものでなけれ

9　伊藤信吉「詩における社会性と芸術性－主題の成熟の方式－」、「東京新聞」（1955年5月9日）、8面。

ばならない」というスペンダーの見解を、「現代の詩人の態度について、ごく常識的で穏健な、当たりさわりのない」内容であると弁護した上で、『死の灰詩集』に表れた詩人の社会的意識を分析し、その分析の中で、その意識は戦時中における愛国詩、戦争賛美詩をあつめた『辻詩集』『現代愛国詩選』などを貫通している詩意識と、根本的にはほとんどかわらないと結論づけている。[10]　鮎川信夫のこの発言をめぐって、いわゆる『死の灰詩集』論争が実質的に始まるわけであるが、ここで鮎川が何を問題にしたのかということを明らかにしておこう。

まず、ここで鮎川が『死の灰詩集』に対して批判する背景には、その詩的行為には全くと言っていいほど詩人の主体性が欠けているという認識があった。詩人というものが、自己の経験に根ざしたことばを主体的に紡ぎ出さなければならないことは、前節で考察したように戦争責任論を基軸とした「荒地」派詩人のモダニズム詩批判の根幹であると同時に、「荒地」派詩人が戦争体験によって得た先鋭な詩の認識であった。鮎川は、この『死の灰詩集』に詩を寄せた詩人たちの詩意識や詩的行為の中に、戦時中において見受けられた日本の詩人の詩的行為と同じ構造、つまり、自己の内部や経験を空白にして、何らかの信念を非主体的に受け入れ、ことばを紡ぎ出すという行為を看取したのであった。確かに、一方は戦争賛美、一方は平和主義という違いはあるが、それは、個人的な体験を自らの生きるための思想になるまで深く突き詰めることなく、一つの信念に盲目的に従ってことばを紡ぎ出すといった点に於いては同質であるというのが鮎川の考え方であった。このような考えを持つ鮎川が『死の灰詩集』に対して反駁する要素は、先に引用した伊藤信吉のエッセイの中にも存在していた。

伊藤は、前記のエッセイの中で、「個人的体験とはなんだろう」という問いを立て、それは「かならずしも個々の詩人が、自分の身で経験した事実ということ」ではなく、「現代人としてたくさんの人々に共通するところの、そういう普遍的な事象を、それぞれの詩人が自分の経験として消化しそれを個性的な詩的主題として成

10　鮎川信夫「『死の灰詩集』の本質－古臭い社会的意識－」、「東京新聞」（1955年5月15日）、8面。

熟させること」であると説明している。しかし、詩人の個人的体験とは、あくまでも詩人個人の経験でなければならず、本来、詩人はそれを深化させ、その奥深い基盤に基づいてことばを紡ぎ出すはずである。そうした詩人のことばの源泉ともなるべき個人的体験を、現代人の共通する体験、いわゆる「社会的体験」に置き換えることによって、個人的体験そのものに熟考を加えずに、状況に同一化しようとする詩人の態度に、詩人の「死の灰」事件そのものに対する思想的苦闘の欠如と個人的体験をいとも簡単に「空白」にさせてしまう傾向を、鮎川の言葉を借りて言うならば、「これらの詩人たちにとって、肝心なことは自我と社会との関係を断ち切らないことであり、その分裂を回避するためには、いつでも喜んで自我の方を犠牲にする」[11]傾向を、鮎川は読みとったと思われる。

ところで、八百人の現代詩人を動員して成ったという『死の灰詩集』が、このような結果になってしまったことには、見逃すことのできない幾つかの重要な問題が含まれていると思う。一例として、ここではこうした詩人の社会的正義感とか、宗教的、道徳的判断とか、その他何らかの価値体系によって動かされていると信じているかもしれないが、実際にこれらの詩人をある種の社会詩的方向に駆り立てる動機は別にあるかもしれないのである。社会的正義感とか、宗教的道徳的判断とかが、しばしば偽装にすぎない場合があるからである。意地わるく推測すれば戦争讃美詩も書いたが平和宣伝詩も書くといった詩人の意識のなかには、そんなに確実な価値体系がやどっているとは思われないし、要するに風向き次第というのが本音ではないだろうか。

戦前、「バスに乗りおくれる」といったような言葉がはやったことがあるけれども、何処へつっ走るかも知らずにバスに乗りこもうとする真理は、現代の詩人にもあるようである。その根本には、おそらく社会から分離してしまうことに対する個人的恐怖心があるのだろうと思う。そこには、個人の無意味さの

11　鮎川信夫「『死の灰詩集』をいかにうけとるか－詩人の社会的態度と現代文明－」、『鮎川信夫著作集』第５巻、文学論　芸術論（東京、思潮社、1974年）、104-14（111）頁。このエッセイは、1955年7月に雑誌「短歌」に掲載された。

感情があって、どれだけ意識的に払いのけようとしても、意識の奥底では何らかの外的権威に従わないかぎり、その無力感から逃れることができないような不安に悩まされているのであろう。[12]

ここで鮎川は『死の灰詩集』を書いた詩人の意識を戦前の日本人の意識と比較して論及しているが、こうした鮎川の立論の根拠になっているのは、「政治的、社会的現象を背景にして、ある思想的な指導原理に基づき、民衆の感情をひとつの方向に導くというようなものを、僕はいついかなる場所にあっても好まない。僕にとって、こういう一時代の傾向は、思想の問題というよりも、むしろ感情の問題として取扱った方がよい。僕の感情は、そうした大勢に逆らうことによって生きている」[13]と鮎川が説明する彼自身の生き方に関わっているということは重要なことであると思われる。こうした完全に個人主義的な考えに立った鮎川にとっては、自らの生きることを中心に、それを社会的関心へと押し広げていくといった詩と社会との関係、つまり、スペンダーが「もし社会問題を作品中に復活させるべきであるとしたならば、ともかく私的で、個人的の経験に根をおろしていなければならない」と発言する意味と、その個人的な経験に根付いたことばが詩作品として紡ぎ出されるまでの時間の必要性、換言すれば、スペンダーが「彼ら自身の内部の精神を探って、どうすれば真実で、しかも詩的に作品を書きうるかを自問し、物事に深い注意を払い、確信のつくまでは発言しない」といった一見消極的とも見える詩人の態度の意味が、明白なほど分かっていたと思われる。

以上、『死の灰詩集』論争について考察してきたわけであるが、鮎川がこの論争に対する基盤は、明らかに戦争責任論を基軸として行ったモダニズム詩批判の根拠と同質のものである。つまり、詩人の主体性と詩人の個人的な体験という詩を書く行為の最も根源的なものに対する認識である。それは鮎川の言葉で言えば、「詩の

12　前掲書、110-11頁。

13　鮎川信夫「詩人への報告」、『鮎川信夫著作集』第５巻、文学論　芸術論、85-98（89-90）頁。

ボディ」[14]についての認識ということが出来るかもしれないが、詩の行為あるいは詩の実践の本来持っている全体性についてのこうした考えに基づいて、日本の詩の領域に欠けている要素を批判し、さらには、自らが、その認識に立って詩を書く行為を行ったという点に、鮎川信夫を含めた戦後の「荒地」派詩人が戦後詩に果たした大きな役割があるように思われる。

14　鮎川信夫「われわれの心にとって詩とは何であるか」、『鮎川信夫著作集』第２巻、164頁。

第3章

「荒地」派詩人の詩的言語観の構築

第３章第１節

「Xへの献辞」の解読

戦争体験によって「荒地」に生きる自己のための詩の必要性を自覚した「荒地」派詩人たちは、第二次大戦後の混沌とした言論状況の中で、詩人が如何にして主体的な「詩の行為」を回復するか、という詩人の主体性に関わる問題意識と、「ことば」そのものの信用を如何にして回復するかという問題意識を持ち、「荒地」派詩人が戦前に信望していたモダニズム詩批判を行った。「荒地」派詩人が戦後抱いた問題意識は、詩誌「荒地」での彼ら自身の全存在をかけた詩のことばを紡ぎだすという行為を通して、また、モダニズム詩批判という議論の場を通して徐々に深められいったと考えられる。そうした問題意識が、彼ら自身の詩的言語観として、明白な形となって理念化されたのは、「荒地」派運動のマニフェストと一般にはみなされている「Xへの献辞」においてであった。「Xへの献辞」は、「荒地」派詩人の何人かの主張が鮎川信夫によってまとめられ、無署名で『荒地詩集』の第１集である1951年版の冒頭に掲載されたものである。本節に於いては、この「Xへの献辞」が「荒地」派詩人たちに共通した主張であると捉え、この主張を詳細に読み解く過程に於いて、彼らの「現代は荒地である」という現代意識や詩に対する態度などを明らかにしながら、戦後の「荒地」派詩人の詩的活動を支える基盤となったと思われる詩的言語観の本質に迫ってみたい。

（１）1951年版『荒地詩集』

戦後の「荒地」派詩人の活動は、1947年9月から1948年6月まで続いた第二次詩誌「荒地」（第１号－第６号）を足がかりに、年刊アンソロジーとして1951年か

ら58年にかけて発行された『荒地詩集』（全8冊）において本格的なものとなっていった。1951年7月、早川書房から発行された『荒地詩集』第一集のメンバーは、北村太郎、三好豊一郎、鮎川信夫、木原孝一、黒田三郎、田村隆一、中桐雅夫、加島祥造といった現代詩史においていわゆる「荒地」派詩人と考えられているメンバーの他に、戦前の詩誌「LUNA」や「LE BAL」に同人として参加し、強烈な詩的影響を「荒地」派詩人に与えながら残念なことにも1942年8月にビルマにて戦病死した森川義信、さらには疋田寛吉、堀越秀夫、栗山脩、高橋宗近の詩人を加え、13人であった。[1]

戦前の詩誌「LE BAL」や戦後の詩誌「荒地」から「荒地」派詩人のひとりとして活動し、『荒地詩集』にもその第一集から参加している木原孝一は、「「荒地」の仲間がはつきりと共通した主張を通じてまとまつたのは、一九五〇年だつたと云つてよいだろう。」[2]と述べている。戦前から詩的交友関係を結んでいた「荒地」派詩人たちが、戦後、詩誌「荒地」の詩的活動を通して、彼ら自身の詩的行為の共通した基盤を以前よりも強く感得し合い、それをはっきりとした共通の詩的意識として認識したのは、『荒地詩集』の発行に際してであった。そうした彼らの詩に対する「共通した主張」は、1951年版『荒地詩集』（第一集）の冒頭に、「Xへの献辞」と題して、掲載されることになる。　このように『荒地詩集』は、その内部、つまり「荒地」派詩人たち自身にとって、ひとつのグループとしての認識が、より本格的なものとして、よりはっきりとしたものとして、表明される場であったのである。

「荒地」派詩人において鮮明に意識された彼ら自身の詩的根拠が反映されている

1　8冊の『荒地詩集』と荒地同人編の『詩と詩論』の2冊が刊行された間に、次のような詩人が参加した。
衣更着信、伊藤尚志、佐藤木実、鈴木喜緑、高野喜久雄、中江俊夫、野田理一、堀田善衛、牟礼慶子、　吉本隆明、谷川俊太郎、石原吉郎、城侑、内海泰、尾花仙朔、関保義。

2　木原孝一　「「荒地」グループの総決算　その主張」、『現代詩手帖』一月臨時増刊号「荒地　戦後詩の原点」（1972年1月）、278-280（278）頁。

『荒地詩集』は、同時に、当時の日本の詩壇における影響という面においても、より本格的、決定的な影響を与えるものとして位置づけられていった。当時の日本の詩の領域において『荒地詩集』が如何に大きな影響を与え、そこで如何に重要な位置を占めたのかということについては、その1951年版の表紙カバーに印刷された、それまでの「荒地」派詩人の動向に注目してきた諸氏の言葉から、あるいは数篇の当時の書評などから推測できるものであろう。例えば、詩人村野四郎は「恐らく二十世紀後半の真に新しい現代詩は、この戦慄の書から始まるだろう」と述べ、『荒地詩集』を新しい現代詩の始まりであると捉えている。[3] また、文学者・批評家である吉田精一は、次のような書評を書いている。

> 戦後の詩の代表的な運動は何か、また代表的な詩集は何かと云えば、その第一のものとして、少なくとも一つとして、この『荒地詩集』を推さない人は、詩を語る人の中にいないだろうと思う。（中略）ここに集る人たちは、現代の詩人中、もっとも切実な現実感を詩によって歌おうとする。それは現代の最も切実な問題を正視し、それから逃げずに、深く突っ込んで考えようとする態度を意味する。『荒地』の人々はこの点において思想的ならんとし、殊に観念的、或いは形而上的であろうとする。しかも足は決して大地と現実から離れていないのである。[4]

上の引用文における、吉田精一による『荒地詩集』に対してなされた当時の書評は、「荒地」派詩人の詩的活動の本質を十二分に伝えていると思われるが、このような「荒地」派詩人に対する幾つかの書評に共通して見られることは、『荒地詩集』が戦後の詩の運動における重要なアンソロジーの代表的なものであるという認

---

3 本論考において、『荒地詩集』は、荒地同人会編『荒地詩集』復刻版（東京、国土社、1976-78年）を参照した。ここで言及した1951年版『荒地詩集』のカバーに印刷された文章については、この国土社による1954年版『荒地詩集』復刻版に付されたパンフレットに掲載されている。

4 吉田精一による上の文章は、1954年版『荒地詩集』復刻版のパンフレットを参照した。同パンフレットによると、これは『新潟日報』に掲載された書評である。

識と、その中に集結する「荒地」派詩人たちの新しい詩の方向、あるいは彼らによる戦後の詩の新しい出発が、当時の日本の現代詩の領域に示唆と影響をあたえるものであるという認識である。

こうした『荒地詩集』の詩壇における大きな反響は、その発行部数と売れ行きからも推測できるかもしれない。その1951年版『荒地詩集』の出版数は、三千部という当時の詩集にしては驚異的なものであったが、それも7月の出版後、年内にはほぼ売り切れた。このことは、『荒地詩集』が、当時の日本の詩の領域において大きな影響力をもつものとなると同時に、「荒地」派詩人たちの詩意識や業績を幅広く世に問う詩集となったことを明らかに示していると思われる。

（2）「Xへの献辞」

戦後の「荒地」派詩人の詩に対する「共通した主張」は、前記したように、1951年版『荒地詩集』の巻頭に掲載された「Xへの献辞」という文面で明らかにされるが、その文章の冒頭は、次のように「親愛なるX‥‥。」という読者への呼びかけで始まる。

親愛なるX‥‥。

あまり人目につかぬ僕達の仕事を、好意をもつて見守つてくれる君は、今迄どのような詩によつても、こころから満足したり、感動したりしたことがなかつたであろう。そして君はほんの偶然から、僕達の詩を読んでみることになつたのかも知れない。しかしたまたま僕達の詩が、君の眼にふれる機会を持ち、君の精神のながい遍歴の過程に於て、たとえ一時とはいえ時を借りたということは、単に偶然ではないように思われる。僕達と同じように、現代を荒地と考

えている君は、君自身の悩みを持つているだろう。そして、その悩みに迎合するどんな言葉の甘美な表現よりも、自己の現実の悩みの方が遥かに未来を孕んでいることに気づいている筈である。[5]

まずこの冒頭の部分で明らかになることは、「Xへの献辞」の書き手であると同時に語り手でもある一人称の「僕」を含めた複数、すなわち「僕達」という言葉によって指示される「荒地」派詩人が、彼らと同類の精神をもった、まだ彼らが見知らない者、すなわち「X」に対して、語りかけようとしている意図である。「あまり人目につかぬ僕達の仕事を、好意をもつて見守つてくれる君」、「僕達と同じように、現代を荒地と考えている君」という言葉で想定される「X」は、「荒地」派詩人の戦後の詩的活動を親愛感をもって見つめていてくれたという点で、さらには、その親愛感は、「X」が「荒地」派詩人と同様に「現代は荒地である」と考えていることから生じる点で、「荒地」派詩人にとってはまさに「親愛なるX」なのである。そうした同類の精神に向かって語りかける「Xへの献辞」の上の引用部分に、次のような「荒地」派詩人のヴォイスの主調を聴くことができる。

戦後を生きる「僕達」が、現代を生きることに対して深い「悩み」をもっているように、「X」も「君」自身の生きることの「悩み」を持っているはずだ。その「悩み」や不安は容易に解消されるものではなかったであろう。「君」の精神は、そうした実存的な不安を「君」自身の存在から何とか取り除くために、救いを求めて様々な領域の世界を「遍歴」してきたはずだ。しかし、いくら救いを求めても「君」は「君」自身の深い「悩み」から解放されることはなかった。「君」は、自らの「悩み」を慰めてくれることばを求めて、「詩」の世界に入っても行ったであろう。しかし、「君」の「悩み」を迎えてそれに合うように紡ぎ出された「言葉の甘美な表現」でも、「君」自身の「現実の悩み」は解消することはできなかったの

---

5 「Xへの献辞」、1951年版『荒地詩集』、2-9（2）頁。

であろう。そうした経験から「君」は現代を、人間の生にとって、不安と悩みが解消されることのない「荒地」の時代であると感じているのである。

このように「荒地」派詩人と本質を同じくする「悩み」に囚われている「X」を「荒地」派詩人は想定し、「X」に対して次のような積極的に働きかけることばを記すのである。

> 親愛なるX‥‥。それだからこそ僕達は、特に君に向つて話しかけたいと希望し、僕等が共通に抱いてゐる荒地の観念について深く知つて貰いたいと、熱烈に願うのである。[6]

「荒地」派詩人も「X」も、現代という時代に存在し、そこで生きるということに対して容易に解消されない不安感や危機感を抱いて生きているという点では、同種の人間存在である。そして、その実存的な悩みを精神的努力によって解消しようとしているが、容易にそれが解消されないでいることが「現代は荒地である」といった観念を抱かせる結果になっている点において、「荒地」派詩人も「X」も、同種の精神的存在なのである。こうした同じ性質の悩みを抱き、同じ性質の精神的努力を行っている「からこそ」、「荒地」派詩人は、「特に」「X」に「向つて話しかけたい」と希望するのであり、「荒地」派詩人が「共通に抱いてゐる荒地の観念について深く知つて貰いたい」と、熱望するのである。こうした「荒地」派詩人の願望には、同じ現代の不安の問題に直面していた「荒地」派詩人たちが、ひとつの場に集まり、共同して現代の「荒地」に立ち向かおうとする努力を読者である「X」に開示していこうとするメッセージと、「Xの献辞」の後半の部分で明らかになるように、同じ精神を抱いた者たちの精神的共同体を形成していこうとするメッセージが含まれていると考えられる。かくして、現代における人間の生の不安や悩みに

---

6 前掲書、3頁。

対して、その根本的要因が「現代」そのものにあると考え、それを「荒地」のイメージと結びつけることによって、「荒地」に立ち向かおうと試みていた「荒地」派詩人は、「荒地」そのものの観念を、読者であると同時に彼らと同じ悩める精神を有していた「X」に説明することから、ひとつの共同体を形成しようとするのである。

（3）「荒地」の観念

「荒地」派詩人が、「現代は荒地である」と認識するに至った過程に於いて、彼らの青少年期の経験、つまり、当時の日本を取りまく戦争という現実といかに関わったかという経験は、重要な位置を占めていると思われる。このことは、黒田三郎が、「荒地」派詩人を「戦争の中に育ち戦争に其の血と青春を費やした世代」[7]に属する者たちであると捉えていることからも明らかであろう。自己の生が常に死の危機にさらされる戦争において、こうした自己認識を有していた「荒地」派詩人たちが、戦後の日本の「地」で感じたものは、生きることに対する不安感であり、危機感であった。戦争時代という過去にまざまざと死に直面した「荒地」派詩人は、来るべき未来にも戦争の幻影を見てしまい、現在における自らの生に対する不安感や危機感から解放されることはなかった。

このような戦後の実存的危機あるいは不安の中で、「荒地」派詩人たちは、戦前、T.S.エリオットの『荒地』を読むことによって観念として彼らの中にあった「現代は荒地である」という第一次大戦後のヨーロッパにおける現代意識を、自己の戦争経験を通して血肉化し、そこに救いの糸口を求めて再考し始めるのである。「荒地」派詩人が、エリオットの『荒地』という詩の題をそのままその詩誌や詩集

7　黒田三郎　「The Waste Land」、「荒地」第1巻、第3号（1947年11月）、48頁。この黒田三郎による「The Waste Land」は、この詩誌の編集後記として捉えることのできるものであり、詩誌「荒地」の他の数冊にも、黒田による同題の編集後記が掲載されている。

の題として用いたことに関して、黒田三郎は次のように述べている。

> 此の際改めて「荒地」について一言すれば「荒地」はT.S. エリオットの The Waste Land からとつた。エリオットの詩集の名前をそのまま我々の雑誌の名前にしたといふことは、しかし必しも詩人エリオットの伝統を継承するといふ意味に限られない。
>
> 「荒地」は、我々が我々自身を認識する年齢に達した時、既に我々は現代の荒地にゐた、という程の意味である。[8]

つまり、「荒地」派詩人の抱く「荒地」の概念は、エリオットの概念をその背後に持ちながらも、彼らにとっての、あるいは、第二次世界大戦後の日本に於いての独自のコノテーションを含意するものであり、同時にこの現代意識から生まれる彼らの詩的意識もまた、戦後日本という彼らの生きる風土に立った「荒地」派詩人の独自性を示す思想であったということができるのではないだろうか。

「Xへの献辞」においては、「荒地の観念」は次のように説明されている。

> 現代は荒地である。そして僕達は、それが単に現在的なものの徴候によつてのみ、充分に測定され得るものとは思つてはいない。現代社会の不安の諸相と、現代人の知的危機の意識は、その発端を、過去という記憶と資料の援けをかりなければならない世界に有している。科学の進歩に追随し、或は経済学に対する課題的要求が強まれば強まるほど、僕等の生活は惨めなものとなり、現代の空はますます暗澹としてくるのである。人間が機械に隷属し、個人が集団の中に解消せしめられる時代、そして人類の破滅の淵に追い落す戦争恐怖の時代、ーかかる時代に空を仰ぐ者は、人類の文化に対して、自分がある精神的不

8 黒田三郎 「The Waste Land」、「荒地」第1巻、第3号、48頁。

安の血を受継いでいることを感じとるに違いない。[9]

「Xへの献辞」を掲載した『荒地詩集』が世に出たのは、終戦から約6年の月日を経た1951年であった。この期間に「荒地」派詩人たちは、個々の詩的活動や詩誌「荒地」（第二次）の活動を通して、「荒地」の観念を、上のように、彼らの共通の主張として分かち合うようになっていたのである。その第一文においては、「現代は荒地である」という「荒地」派詩人たちの共通の主張の根本にあるとも言える前提が明示されている。

「荒地」あるいは「荒れ地」とは、日本語の定義によれば、「耕作していない、または耕作に適しない土地」、「天災にあい、耕作不能になった田畑」（『広辞苑』）ということである。つまり、植物という生を育てるために人間が手を入れていない土地、あるいは、生そのものが育たない土地であると言い換えることができる。それと同時に、「荒地」派詩人たちが「現代」を「荒地」に喩えるとき、そこには、T.S.エリオットの *The Waste Land* からの概念の借用があるのだが、語義的には、英語の 'waste land' は、日本語の意味と同じような意味を持ち合わせた語である。英語の 'waste land' には、'Land in its natural, uncultivated state' あるいは 'Land (esp. that which is surrounded by developed land) not used or unfit for cultivation or building and allowed to run wild' (OED) の意味がある。エリオットの「荒地」の概念については本章第3節において、考察していくことにして、ここでは日本語と英語の語義から考えられる「荒地」のイメージについて確認しておくことに留めたい。「荒地」という語のもつイメージは、生命を生み出さない不毛の土地であり、人間が手を入れていない土地ということになるであろう。そして、人間が手を入れていないということから、それは、秩序の存在しない土地であると言うことができるかもしれない。

---

9 「Xへの献辞」、3頁。

「荒地」派詩人にとって、「現代社会の不安」と「現代人の知的危機」は、現代において人間の生を育ませない点において、「現代」を「荒地」化たらしめている大きな要因である。それ故に、「荒地」派詩人にとって、こうした不安や危機の本質を理解することがまずは性急な問題になる。「現代社会の不安の諸相と、現代人の知的危機の意識」の起こりを現代にではなく過去に見ている「荒地」派詩人にとって、それらは「単に現代的なものの徴候によつてのみ」推し量れるものではない。それらは「記憶と資料」によって示唆される過去との関わりにおいて考察されなければならないのである。

一方で、現代を荒地たらしめている「現代社会の不安」や「現代人の知的危機」の問題を、その本質を理解せずに、早急に現代的なものの立場から解決を試みようとする傾向が存在する。「科学」や「経済学」に対する課題的要求の強化は、そのことを証明するものであるが、しかし、現代の不安や危機の問題に対するそうした解決が、本質的な解決になっているかどうかは問われなければならないことである。「荒地」派詩人にとっては、このような解決は本質的な解決ではなかった。それ故に、彼らの眼には、そうした解決が、「僕等の生活」を「惨めなもの」にし、「現代の空」を「ますます暗澹」たるものにさせていると映ったのである。このような「荒地」派詩人の視線の背後には、現代の進歩的思想あるいは文明に対する批判的態度があるだけでなく、如何なる現代の危機も現代的なものでは解消できないという、一見、悲観的ともみれる立場が存在しているのである。

引用の最後の一文においては、「荒地」である現代は、「人間が機械に隷属し、個人が集団の中に解消せしめられる時代、そして人類の破壊の淵に追い落とす戦争恐怖の時代」と言い換えられている。現代の機械文明の悪弊を批判し、個人と集団との不安定な関係や、人類の生を根本的に揺るがす戦争の恐怖を指摘しているこの部分には、「荒地」派詩人たちは、彼らが実際に生きている日本の戦後という短い期間に限定することなく、より幅の広いもの、あるいは、より大きなスパンで、現代を見つめようとしている態度だけではなく、大岡信が評論「「俗」ということ－戦後詩概観－」の中で「荒地」派詩人の理論的指導者であった鮎川信夫の文章を対

象にして批判的に指摘した、「パセティックで予言的な悲調」や「パセティックな断言」的な言い方が存在していることは確かである。[10] しかし、こうした「パセティックな断言」が、「荒地」派詩人自身の経験そのものに、特に彼らの戦争体験そのものに結びついているということを忘れては、これらの言葉の重みを見失うことになるかも知れない。つまり、彼らの実際に体験した戦争において、人間の生が、戦場における銃、戦車、戦闘機、さらには核兵器などの諸機械によってはかなく、簡単に奪われたという事実と、個としての人間が国家という全体に如何に簡単に取り込まれ、力によって圧しひしがれたかという事実を考えることは欠かすことのできないことなのであろう。そして、「精神的不安の血を受け継いでいること」という運命論的な断言にしても、それは戦争体験に基づいた、つまり戦争という逃れられない現実を運命づけられた彼ら自身の自己認識の形であると捉えることが可能ではないだろうか。

以上考察してきたように、「荒地」派詩人は、彼ら自身の戦争経験に基づいて、「現代は荒地である」という現代意識を血肉化していった。しかし、「現代は荒地である」という「現代」に対する悲観的かつ絶望的な観念自体、「荒地」派詩人の生の意義の発見に直接関わってくるものではない。つまり「現代は荒地である」という観念は、「荒地」派詩人自身の生に対する不安と危機をさらに深化させるものであるにすぎないのである。それが、彼らの生の意義と彼らの未来の獲得に結びつくためには、絶望を自覚することによって絶望から脱するように、「荒地」を自覚することによって「荒地」から脱するといった一つの形而上学的な飛躍が必要であったと思われる。

（４）「荒地」と救いの問題

10　大岡信「「俗」ということ－戦後詩概観－」、『荒地－戦後詩の原点－』「現代詩手帳」一月臨時増刊号、176-85（176）頁。

さてこれまで、戦争体験を通して、どのように「荒地」派詩人たちが「現代は荒地である」という現代意識を血肉化し、共通な主張としてそれを共有するに至ったのか、そして彼らがどのように「荒地の観念」を捉えているか、ということについて考察してきた。次に考察しなければならない点は、そうした現代における絶望的な状況を意識することが、「荒地」派詩人にとって、どのような意味を持つのかという点である。

この点について「Xの献辞」では次のように書かれている。

> そして彼が、さらにこの二十世紀の半ばに立つ人間の運命について深く考えるならば、そこに人類の遺産と罪の伝承を認めることによつて、荒地に生きているという暗い経験世界の終末的な幻滅感から一條の光線を摘みとることだろう。亡びの可能性は、一種の救いに他ならぬ。なぜならばそれは遂にこの生に何らかの意義を与えるからである。破滅からの脱出、亡びへの抗議は、僕達にとつて自己の運命に対する反逆的意志であり、生存証明でもある。僕達や君に未来があるとしたら、現在の生に絶望していないことによつてである。罪の実在を認識することは、絶望を精神の起点に於て回心せしめる動機となる。一條の光線は、暗黒にむかう時、いよいよその光を増す。僕等が共通して抱いている絶望の本質は、光を求める虚空の手ではないか。[11]

「荒地」派詩人にとって、「現代は荒地である」と自覚することは、彼らの生きるということの意義が失れ、彼らの未来が奪われるといった、絶望にとらわれることではない。「現代は荒地である」と自覚することは、むしろ、「破滅からの脱出」への第一歩なのである。「現代」における実存的不安や危機の発端を過去に見る「荒地」派詩人にとって、「現代」が過去から引き継いできた「人類の遺産」、つまり、文明や科学などが現代にもたらした「功」の部分だけではなく、人類の過

11　「Xへの献辞」、3-4頁。

ち、換言すれば、人間の力の過信と乱用の結果、その悪弊としてとらえられる「罪」の部分を認識することは、「荒地に生きているという暗い経験世界の終末的な幻滅感」から「一條の光線」を見ることにつながるのである。「荒地」派詩人にとって、「罪の実在を認識すること」が「絶望を精神の起点に於て回心せしめる動機」となるのである。

それでは一体、その「光」はどこから差し込んでくるのであろうか。科学や現代技術の進歩などの現代的なものに何ら「荒地」的現在を復興する要因を認めない「荒地」派詩人にとって、それらのものは「光」の根源とはなり得ない。絶望的状況に満たされた「荒地」にある現実的なものに何らその状況を回復させる要素はないのである。以上のような「荒地」そのものを回復するものが、科学的なものにも、人間の現実的なものにも存在しない場合、そこに初めてその「光源」として立ち上がるのが、形而上学的、倫理的価値の世界であることは容易に理解できるであろう。つまり、「荒地」派詩人が「一條の光線」と言及するとき、それは形而上学的、倫理的な世界から発してくる「光」なのである。しかし、そうした形而上学的、倫理的な世界が破綻している日本の「現代」にあっては、そこから照射される「光」をつかむこと自体、困難なわざなのである。

現代は「荒地」の時代であることを自覚し、自らの存在がその生を容赦なく亡びへと向かわせる「荒地」に生きていることを自覚する者は、自らが「荒地」から脱出しようとすること、そして自らがその「荒地」で亡びるという運命に対して抗議することによって、生きようとする。これが、「荒地」に生きていることを自覚する「荒地」派詩人にとって、彼ら自身が生きているという事実の証しになる。しかし、「荒地」派詩人が言う「破滅からの脱出」、換言すれば、「荒地」からの脱出とは、一体どういうことなのであろうか。というのも、自らが「荒地」の時代に生きるということについて、「荒地」的現実に対して抗議する炎がどんなに強く「荒地」派詩人の内部で燃え上がろうとも、「荒地」派詩人にとっては、「荒地」に生きるということ以外の現実の生き方が考えられないからである。このような前提に立った場合、「荒地」派詩人の言う「絶望からの脱出」あるいは「荒地」からの脱

出とは、彼らが生きている現実的な状況、すなわち、「荒地」的現実に拘束されながら、その状況の制約そのものから自由となっていくことであると、説明することができるであろう。そして、このように考えた時、「荒地」派詩人の「現代は荒地である」という現代意識と、彼らのそうした現実そのものからの自由とが、如何に関わっているのかという問題を考えねばならなくなるであろう。そのことについては「Xへの献辞」では、次のように書かれている。

> 平安を知らぬこと、問いを発すること、注意力の器官である耳を鋭敏に働かせること、そして自らの生の認識を深めるために、忍耐強く知的探究を続けてゆくこと、ーこれらの切実な精神の努力によつて、僕等は現代の荒地に立向つてゆかなければならない。精神は本質的に未来を指向する遍歴の子である。それは在るものから、在るべきものを構想し、未知のものへの冒険に駆り立てる非妥協的な警告者である。ヒューマニズムの無秩序と混乱と、唯物的な近代の世界観の厚顔無恥により、宗教的倫理的な絶対価値が忘れ去られ、伝統の喪失と権威の崩壊によつて、現代は言葉への不信の時代となつている。かかる時代にあつて、遍歴の子であり非妥協的な警告者である精神は、何処へ僕等を連れてゆこうとするのだろうか。[12]

ここで、「荒地」という現実に拘束されながらその状況から自由になっていくこととかかわりがあるのは、「精神」であるという「荒地」派詩人の考えを読みとることができる。「平安を知らぬこと、問いを発すること、注意力の器官である耳を鋭敏に働かせること」、そして「忍耐強く知的探究を続けていくこと」など、こうした「切実な精神の努力」によって、「荒地」派詩人は、自らの存在が「荒地」という現実に拘束されながらも、彼ら自身の精神的存在が現実界とは別な未知の世界に行くことができると考えている。というのも、人間の精神は、肉体とは異なり、

12　前掲書、4頁。

「在るもの」から「在るべきもの」を構想する想像力を持つと同時に、肉体のように現実に拘束されることもなく、現実以外のより広い世界を遍歴することができるからである。こうしたより広い世界を知り得る精神的存在は、人間存在そのものを「未知のものへの冒険に駆り立てる」だけでなく、現実に拘束された現実存在に対して、いましめを告げる警告者的存在にもなるのである。この点において、「荒地」派詩人は、精神が遍歴する世界を詩のことばとして紡ぎ出し、「荒地」に生きる人間に提示しようとするのである。その紡ぎ出されたことばは、高められた精神の場合には、そこから一つの生きるための希望が照射されるような世界を開示することばとなって、「荒地」に生きる人間の前に提示されるであろうし、また、「荒地の暗澹たる風土」に拘束され不安の習性に捉えられている精神の場合には、「荒地」に生きる自己の存在を鏡のように映しだし開示させることばとなって、立ち現れることになる。つまり、そうしたことばは、絶望的な状況に存在する自己あるいは自己を取り巻く不安の諸相や危機そのものを眼にみえるものにすることによって、自己を確認する場であるだけではなく、現実の危機そのものを確認する場にもなるわけである。そして「荒地」にある自己と危機そのものを認識することが、絶望からの救いの可能性へと通じ、遍歴する精神を通しての詩のことばは倫理的世界を開示していくのである。

（５）「荒地」派詩人の詩的言語観

「荒地」派詩人は、彼らの主張するところの「荒地」の時代に生きている。そのような時代にあって、自らの生への絶望にとらわれ続けることなく生きるために、彼らは彼らのことばを用いるのである。それは一種の言葉に対する信仰のようなものである。「荒地」派詩人は、自らの存在する「荒地」を、そして「荒地」に存在する自己を、ことばによって対象化し自覚することによって、「荒地」からの精神的脱出を試みるのである。「精神」とは、「在るもの」から「在るべきもの」を構

想し、肉体に拘束されることなくより広い世界を遍歴し、現実存在に対して警告者となり得る。かくして「荒地」派詩人たちは、精神の遍歴する世界をもことばによって開示しようとする。このことを荒地詩人の詩的言語観を中心に考えるならば、彼らは、現実的なものであろうと、自己のものであろうと、形而上学的なものであろうと、世界というものを、自己の純粋なことばによって、換言すれば、「自己の全存在の投影」をことばに集中することによって開示しようとする行為を詩の機能に求めたと言えるであろう。

> しかし僕達が詩を書くということ、－もはやここには、文化の問題、社会の問題などは、第二義的な意味しかもつていない。一人のペンを持つた人間が、言葉のかぎりない変化と反覆、出発と復帰のうちに、回転し生起する精神の波動を見詰めつつ、自己の存在を確認し、自己の生を高めるために如何に神を得ようと努めたのか、という奥深い隠れた事実を曝くことだけが、注目に値するすべてなのである。[13]

上の引用の部分にある「一人のペンを持つた人間が、言葉のかぎりない変化と反覆、出発と復帰のうちに、回転し生起する精神の波動を見詰めつつ、自己の存在を確認し、自己の生を高めるために如何に神を得ようと努めたのか」という言葉は、「荒地」派詩人の「言葉」と「精神」に結びついた「詩を書く」という行為をよく説明している部分である。「現実との摩擦から烈しい試煉のまえに立たざるを得ない」精神の同じ動きの繰り返しや新しく生じる動きとを見詰めつつ、それをことばに固定させていく。自由に動きまわる精神を書き記す言葉は、限りない変化と反覆を繰り返しながら、「一人のペンを持つた人間」の前に現れ、その言葉の上に、詩人は「死の論理によつて屡々切断される生の不安定な表象のうちに彷徨う」「自己の存在」を見出し確認する。その時、「一人のペンを持つた人間」の「高き自由を

13　前掲書、4-5頁。

欲する」精神は、「不均衡と破壊と敵意」から離れ、「調和と創造と憐憫の世界」に到達しようとするが、そうした「詩を書く」ことの背後にある「奥深い隠れた事実」すなわち、「荒地」に生きる人間の精神の軌跡を曝くことが、「荒地」派詩人が「詩を書くこと」に寄せている唯一の関心なのである。

自己の全存在の投影をことばに固定し、そのことばの上に自己を見出し、より高い世界の開示へと向かう、「荒地」派詩人の「詩を書く」という行為は、ただ単に文化の問題や、社会の問題に還元できるような行為ではない。それは「荒地」派詩人にとって、彼ら自身の生きるということを根底から強く支える行為なのである。「荒地」派詩人は「どうして僕等の生活のすべてが絶えまのない詩作過程ではないのか。」と言う。このように詩を書くという行為と生きるという行為を不可分に結びついたものと考える「荒地」派詩人にとって、「言葉に対する深い信頼と愛」は、「暗黙の掟」であったのである。

しかし、現代は「言葉への不信の時代」になっていた。「荒地」派詩人の言葉で言えば、「ヒューマニズムの無秩序と混乱と、唯物的な近代の世界観の厚顔無恥により、宗教的倫理的な絶対価値が忘れ去られ、伝統の喪失と権威の崩壊によつて」、現代は、ことばそのものを確かなものと信じて受け取ることができない時代になっていたのである。そのような言葉の不信の状況を「荒地」派詩人は「Xの献辞」において次のように摘発する。

> 僕等の苦しみに満ちた現実では、言葉と肉体は全く別々に歩いている。自由とパンを同時に獲得しようとする時、行為は汚され、精神は傷つく、これが人間の現実である。多数の労働的人間から、一介の美的生活者に至るまで、躓く石は同じである。言葉は肉体と食い違い、肉体は言葉を置き去りにする。[14]

そして、「言葉と肉体の出会う場所である詩の世界」に於いても、「言葉」は卑し

14　前掲書、8頁。

められてきたと言うことができる。

> 詩を宗教や道徳の代用価値に下落せしめたり、音楽的麻酔と混同したり、或いは単なる知的遊戯に貶しめたりすることによつて、果たして何の得るところがあつたであろうか。政治への追従や便乗や、或は社会への自嘲的反逆によつて、過去のおびただしい詩篇が今では全く無意味なものとなり、われわれによつてそれらは卑しい所業として省みられるだけもものとなつているのである。[15]

「荒地」に生きる人間の暗い経験世界からの精神的脱出と救いを、自己の全存在を言葉に投影し紡ぎだすという行為によって、そしてその紡ぎだされた言葉からなる詩によって、求めていく「荒地」派詩人にとって、言葉そのものに対する不信を問題意識として持たなければならなかったことは当然であるが、さらに彼らは、その言葉によって構成される詩そのものに対する認識の違いを問題にしなければならなかった。近代に入ってからの人間性の過大な信頼と強調によって詩人の個性は拡大し、それは様々な詩の認識を生み出してきた。詩を「宗教や道徳の代用価値」として認める考え方、詩を言葉の音楽性のみと結びつけた考え方、さらには詩の方法的な側面のみに光を当て、知的遊戯の道具にするといった考え方などは、詩人が一つの純粋な詩の考え方に満足できないという考え方に起因している。そうした詩意識の追求は、確かに詩の可能性を追求するという点では多くの成果を上げてきたわけであるが、しかし詩をあまりにも対象的に捉えすぎた故に、最も近くに存在する詩人そのものと言葉そのものとの純粋な関係というものを見失ってしまったのである。道具と化した詩は、容易に政治のための言葉へと転用されることになったり、或いは社会への社会的規範を打ち破るための道具となるにまで至った。こうした様々な詩的価値が混沌と乱立する現代に於いて、過去のおびただしい数の詩篇は、

15　前掲書、5-6頁。

全く無意味なものと化していく。過去の時代に於いて、詩の本質として麗々しく語られた多くのことも、詩の進化の思想に於いては一つの過去の遺物としてしか扱われることはない。さらには、こうした状況が重なり合って、近代の詩、或いは現代の詩は人々から見捨てられる地位にまで落ちたのである。

「荒地」派詩人たちが詩に対して要求することは、たった一つのことである。それは、言葉を紡ぎだす詩人そのものが言葉に対する「深い信頼と愛」を回復することである。自ら発した言葉に無責任な態度をとるような詩人像、或いは、言葉そのものを自らの傲慢な欲求によって道具と貶めるような詩人像は「荒地」派詩人が最も嫌うものである。詩人の全存在を言葉にかけること、そしてその言葉を紡ぎだすこと、それが「荒地」派詩人が抱く最も重要な詩人像なのである。「荒地」派詩人の「詩を書く」という行為は、自らの全存在をかける故に、詩人の現実に深く関わってくるものであり、現実に関わっているからこそ、あるいは、生きることに深く関わっているが故に、詩人の紡ぎ出すことばは、その荘厳な重みを表すことができる。そして、そうした行為によって得られた詩そのものは、自己の生きることの大きな証しとして、後の詩人の生をいつまでも問い続けることになるのである。

（６）「荒地」の場と「一つの無名にして共同なる社会」について

現代を「荒地」という絶望的な状況と自覚する人間には、それに反逆し抗議することによって、自らの生を孤独に忍耐強く生きる生き方しか存在しない。そして、孤独であるという点において、「荒地」派詩人たちは、彼らが「荒地」に生きるという運命を共有しているのである。自己の全存在の投影を集中し固定させることばからなる「荒地」派詩人の詩は、別な言い方をすれば、彼らが全存在をかけて紡ぎ出すことばによって形成される詩は、まずは、「荒地」の上を暗く亡霊のようにさまよう「荒地」派詩人の精神の動きを鏡のように写し出す。そして、詩人はそのことばの上に自己の存在を確認し、「遍歴の子であり非妥協的な警告者である」精神

に導かれたより高い世界を求めて努力する。「荒地」派詩人は、そこに詩を書いていくことの二つの岐路を認めている。まず一つの道は、「荒地」派詩人が「低い世界」すなわち「荒地」という現実世界の上をさまよう精神の動きのみを言葉にしていくという道である。「荒地」派詩人にとってこの道は、容易な道である。もう一つの道は、精神を「高い倫理の世界」まで高めてそこで言葉をむすぶということであり、前者よりもより困難な道である。「荒地」派詩人はこれら二つの詩を書くことの道を、「背中合わせになつている一つの行為の表裏」のようなものとして考えているが、別な見方をすると、一人のペンを持った人間が、精神が低い世界をさまよっている段階でペンを置くのか、あるいは、精神を高め、倫理の世界に到達させた段階でペンを置くのか、ということに関わっているように思われる。当然「荒地」派詩人の詩を書くことの行為の理想は、後者の道であるが、こうした「荒地」派詩人の理想的な詩作過程から創作された詩を読者が読むとき、「荒地」派詩人の詩の言葉を通して、或いは、詩人の経験を通して、読者は「荒地」をさまよう自己の存在を自覚するだけではなく、そのことばによって開示された「より高い倫理の世界」へ読者の精神は導かれるのである。斯くして読者の精神と「荒地」派詩人の精神は、その高い倫理の世界で出会うことになるのである。「荒地」派詩人は、「荒地」派詩人たちだけでなく、「現代は荒地である」と自覚している「親愛なるX」と総称される読者を含めて、より精神的に高められた世界を詩を通じて形成しようとしたのである。そして、「荒地」派詩人の詩に対するそうした願望は、「Xへの献辞」では、次のように語られるのである。

> 親愛なるX‥‥。詩について考えることは、とりも直さず僕達の精神と君の精神とを結びつける架橋工作である。たつた一人の君に語りかけるために、僕達が力を併せて荒地を形成している意味を理解してくれたならば、僕達各個人が如何に分裂し、模索の方向を異にし、未明の混沌とした内乱状態にあろうとも、なお一つの無名にして共同なる社会に於て、離れ難く結び合つていること

も、より一層理解してくれるだろう。[16]

上の引用の中の「荒地」派詩人の言葉、「詩について考えることは、とりも直さず僕達の精神と君の精神とを結びつける架橋工作である」は、彼らの詩を書くということの意図を的確に説明するものである。全存在をかけて詩人が創る詩そのものは、必ずしも何らかの希望を「君」である「X」に与えるものではない。それは、暗い現実に耐えながら、生きている人間の口から漏れるうめきのようなものであるかもしれないし、「未明の混沌とした」「荒地」派詩人たちの精神的混乱を反映しているものであるかもしれない。「荒地」という現実に於いて、個々に孤立して忍耐強く生きている詩人たちの言葉が、それぞれ異なった様相を呈してくるのは当然である。しかし、このような異なった様相の詩を読むこと、つまり自分の詩だけではなく、他の人間が全存在をかけて紡ぎ出したことばを読むことによって、詩人を含めた詩を読む者は、自らの経験とその詩を書いた者の経験を重層化させつつ、「一つの無名にして共同なる社会」に於いて結びつくことになる。「荒地」派詩人たちが、詩誌「荒地」や『荒地詩集』という詩の場に彼らの詩を集め、「力を併せて荒地を形成している意味」はそこにある。つまり、暗い経験世界に於いて孤立し忍耐強く生きている「荒地」派詩人たちは、詩を書くという行為とその詩を通して、彼らの共同の世界で結びつこうとするのである。その共同的な世界とは、彼らの精神を吸収する「一つの中心」すなわち希望の光源が存在する世界なのである。「荒地」派詩人たちは、こうした形而上学的な世界を詩で開示することによって、「現代は荒地である」と考えている「親愛なるX」の精神との架橋を試みるのであり、調和と創造と憐愍の世界での精神的共同体を形成しようとするのである。

それでは、「荒地」派詩人が志向する「一つの無名にして共同なる社会」自体、どのようなものなのであろうか。精神的共同体である「一つの無名にして共同なる社会」という概念の背景には、彼らの、特に鮎川信夫の西洋思想の読みが存在する

16　前掲書、6-7頁。

ように思われる。鮎川信夫は、「Xへの献辞」が発表される４年前の1947年、詩誌「荒地」第１巻第１号に掲載された「暗い構図－囚人に関するノオト　」の中で、古代エジプトやビザンチン的な芸術に対して、「「無名にして共同なもの」」という表現を引いている。[17]　ここで鮎川は、人間性と直接的な関係を持たない科学などの認識手段が発展したことにより、近代の芸術が、文明以前に見られるような幾何学的、抽象的な形への希求に移行していることを論じている。この考えは、本論文第３章第３節で具体的に検討されるところの、T.E. ヒュームの読みから生じたと思われるが、それでは、「荒地」派詩人が、「Xへの献辞」においてこのような概念を含む「一つの共同にして無名なる社会」という表現を彼らの精神的共同体を示すものとして用いた背景には、どのような発想が存在していたのであろうか。黒田三郎は、詩誌『荒地』第１巻第３号の編集後記において、この点に関して次のような手がかりになる言葉を述べている。

> 伝統の詩人エリオットが、第一次大戦後、詩集「荒地」を出すに当たって、イギリスの伝統の上に立つてゐたのにひきかえ、我々は何物をも持つてゐないのである。東洋の異教徒として、我々は何もかも同時に始めなければならない運命の下にある。[18]

T.S.エリオットが、第一次大戦後のイギリスに「荒地」を認識したように、「荒地」派詩人たちは、「荒地」であると彼らの認識する終戦後の日本の時空に立った。しかしながら、エリオットが、ヨーロッパの伝統、キリスト教という宗教の上に立ち、秩序の回復をその救いとして求めるのに対し、「荒地」派詩人にとっての日本の戦後には、あるいは戦後に限らず彼らの認識するところの日本の風土には、

17　鮎川信夫「暗い構図－囚人に関するノオトＩ－」、31頁。

18　黒田三郎「The Waste Land」、「荒地」第１巻、第３号、48頁。

彼らを存在の危機から救う基盤となる得る、伝統・宗教が存在しなかったのである。つまり、「荒地」派詩人たちは、エリオットとは異なり、何もないところから精神的な救いを求めていかなければならなかったのである。このように何の基盤をも持たない状況から、救いの世界を求めていくとき、「荒地」派詩人がその原型として思い描いた手段が、文明以前、つまり原始の時代において宗教を持たない人間が神的な世界を希求した方法であったのではないかと思われる。伝統、あるいは宗教などの基盤を持たない原始の時代に於いて、人間は、生きているものの存在を含めたすべての現実界の対象に畏怖の念を抱き、常に自らの生存が危機にさらされているという恐れを抱きながら生きていた。人間の文明が徐々に発達するのに伴い、人間の危機は、一種の文化あるいは芸術という形で表明されることによって、解消される方向へ向かうことになる。原始の時代に生きた人間は、彼らの畏怖からの救いを求めるために、抽象的、幾何学的なより確固たる形を創造することによって、何らかの秩序を見いだそうとしたのである。

このような観点から、戦後の「荒地」派詩人の立場を考えると、そこには何らかの共通点を認めることができるように思われる。「荒地」派詩人が生きる戦後の日本には、彼ら自らの存在の危機を解消する基盤となり得るものは何もなかった。「荒地」派詩人にとって、倫理的な世界も宗教的な価値の基盤もそこには認められなかったのである。彼ら自身の存在への危機感は、文明以前の人間の畏怖の念と重ね合わせて考えることができる。つまり、「荒地」派詩人は、原始の時代の人々がそうであったように、何らかの確固としたものや秩序を求めていくのである。原始の時代に於いては、その希求は、抽象的、幾何学的芸術となって昇華されていった一方で、「荒地」派詩人たちは、彼らの全存在をかけた信頼のおけることばによって、確固としたものを創造し救いを見いだそうとしたのである。ことばが昇華された時点で、芸術そのもの、詩のことばそのものは、「荒地」派詩人にとっての一つの救いを提示することになる。

このように考えると「荒地」派詩人の「一つの無名にして共同なる世界」とは、宗教的価値の基盤をもたない日本の風土における救いの世界、つまり、宗教的な価

値の権威というものが生まれる以前の秩序の存在する価値の世界であると言えるであろう。そして、「荒地」派詩人は、「荒地」である現実の世界に、しっかりと足をつけ、現実を鋭く自覚する態度を決して忘れない一方で、ことばの信頼を回復し、彼らの全存在をかける詩のことばによって、高い世界における価値と秩序を求めようと、あるいは、形成していこうと熱望したのである。

第３章第２節
「荒地」派詩人の詩的世界の形成と「荒地」の場の意味

前節では、戦後、「荒地」派詩人が共有した主張が集約されている、1951年版『荒地詩集』に所収された「Xへの献辞」を解読することによって、「荒地」派詩人の詩についての認識を詩的言語観や「荒地」の理念などを中心に考察してきた。こうした彼らの詩についての理論は、純理論的な活動から生み出されたものではなく、その理論以前に存在する「詩を書く」という個々の詩人の具体的な実践から密接に導かれたものである。この点に関して、「荒地」派詩人の理論の一つの特徴があるわけであるが、本章本節では、「荒地」派詩人が、戦後、提出した詩の認識の根拠にある詩的実践について、彼らによって戦中に書かれた詩作品と戦後に書かれた詩作品を具体的に考察し、さらにはそれらの関係を明らかにしながら、「荒地」派詩人が目指した詩的世界とは如何なるものであったのか、という問題を検討していきたい。

（１）

「戦争の中に育ち戦争に其の血と青春を費した世代」[1]である「荒地」派詩人が、1945年8月15日の敗戦を迎えたのは、前節で説明したように、２０代半ばであったが、「Xへの献辞」（1951）に「荒地」派詩人の共通の認識として提示された「現代は荒地である」という現代意識、あるいは、「戦後感覚」は、鮎川信夫が説明するように、「単に第二次大戦後に根ざすだけのもの」[2]ではない。それは

1　黒田三郎「The Waste Land」、「荒地」第１巻、第３号、48頁。

2　鮎川信夫「現代詩とは何か」、『鮎川信夫著作集』第２巻、詩論　、53-127（65）頁。

「第一次大戦後絶えず分裂と破壊を繰返してきた世界史の、幻滅的な尖端である現代意識」に根づいており、その意識の上に「荒地」派詩人の精神は成長してきたのである。このことは、「荒地」派詩人が「戦前に於てすでに戦後的であった」ということを意味している。[3]　換言すれば、T.S.エリオットの『荒地』（1922）などの「第一次大戦後のヨーロッパ文学の影響」を戦前において受けていた「荒地」派詩人たちは、彼ら自身を認識する年齢に達した時、「我々は現代の荒地にゐた」[4]という認識をもったということである。

「現代は荒地である」という現代意識を戦前に持った「荒地」派詩人たちが、戦中においてどのような詩を書いていたのかということを考察することは、彼ら自身の戦争中の精神の状況を探る上で重要であるだけでなく、戦後の「Xへの献辞」で集約される詩の認識のより深い理解へと通じてくるものであると思われる。

「戦前において戦後的であった」、すなわち、戦前においてすでに「荒地」に生きているということを自覚していた「荒地」派詩人の精神状況が、如何に当時の日本の精神状況とかけ離れたものであったかということについては、鮎川信夫が1941年10月17日に日記に記した次のような文面が象徴的に示している。

10月17日

今日こそ街から帰ってN.Tの滅亡を予言することが出来る。この悲しむべき事実の予兆を一体誰が考えてゐるだろうか。私の数年前からの危惧が漸く明瞭りした形となって次第にこれから現れてくるであろう。[5]

上の内容を鮎川信夫が日記に記した時、すでに日本は、「戦争に対するどんなちっ

3　前掲書、65頁。

4　黒田三郎「The Waste Land」、「荒地」第１巻、第３号、48頁。

5　鮎川信夫「日記 II　1941」、『鮎川信夫著作集』第７巻、359-72（370）頁。

ぱけな懐疑でも、当局どころか、隣人にも洩せないような時」[6]になっていたと考えることができる。こうした状況で、鮎川は、「N.T」というイニシャアルを用いて「日本帝国」の滅亡を上のように予言しているわけであるが、重要なことは、鮎川がこのように予言する背景には、当時すでに鮎川が「現代は荒地である」という「内的基礎」を保持していたという事実であろう。当然、この日記における鮎川の日本帝国の滅亡の予言は、1941年10月17日の前後に起こった日本での動き、つまり、この日の前日である10月16日に起こった日米戦回避をはかった第３次近衛文麿内閣の総辞職という事実と、この日の翌日である10月18日に起こった日米開戦を主張する東条英機内閣の成立という「外部の動き」にも深く関わっていると思われるが、こうした「外部の動きの必然性」以上に、「現代は荒地である」という「内的基礎」の上に、鮎川信夫は、この予言を打ち据えているように思える。[7]そして、こうした10月17日の時点で鮎川信夫が予言した日本帝国の滅亡の予兆は、それから２カ月も経たないうちに、大きな事実となって現れてきたのであった。日本海軍の機動部隊がハワイの米太平洋艦隊に加えた真珠湾攻撃によって太平洋戦争が開戦した1941年12月8日、鮎川信夫が日記に記した内容は、「日、英米の戦闘開始せらる。」という一文からなる事実のみであった。

このように「現代は荒地である」という現代意識を、決して「強い」という形容できる程しっかりとした意識ではなかったにせよ、「内的基礎」として戦前に個人個人のレベルで「荒地」派詩人たちが獲得していたという事実は、彼らの精神が、太平洋戦争勃発当時の日本に起こった精神的な熱狂と昂揚とは遠く隔たったものであったということを説明してくれるかもしれない。日本人の多くが、「天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ践メル大日本帝国天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス／朕茲ニ米国及英国ニ対シテ戦ヲ宣ス」と始まる宣戦の大詔を感激をもって聴き、真珠湾

6　鮎川信夫「われわれの心にとって詩とは何であるか」、『鮎川信夫著作集』第２巻、160頁。

7　前掲書、160頁。

の奇襲とプリンス・オブ・ウェールズの撃沈を手を拍って喜んでいた時に、「荒地」派詩人は、恐ろしく醒めた精神状態で、戦争という決定的な時期に直面した当時の状況を見つめていたのである。「荒地」派詩人のこうした醒めきった精神が、士気昂揚の歌や軍歌を謳い上げる精神とも、国家目的や国策を肯定しそれに協力するような戦争詩や愛国詩を書く精神とも、それを読んで感動する精神とも、如何にかけ離れたものであったのかは、想像するに難くない。そして、この頃すでに若き詩人として詩を書いていた「荒地」派詩人たちは、太平洋戦争の勃発によって、よりはっきりとした形になって次第に現れてきた「滅亡」からくる死の予感や実存的不安、容赦なく「荒地」派詩人たちをも戦争に巻き込こもうとする戦争への時代的な熱狂が引き起こす、彼ら自身の自我の解体とその苦悶を、詩的言語として紡ぎ出さざるを得なかったように思われる。この頃、鮎川信夫が書いていたのは、次のような詩であった。

神々

匍ふもの　考えるもの
また烈しく運動するもの
神々よ　あなたの姿勢は万別なれど、
帰するところ一にして　祈りは慧き慣習の光明なり。

鳥瞰すれば山河
仰げば星晨の静かな明け暮れ
食もなく衣服もなく、
高い処に住む神々よ。
御身は知ってゐる、世の輝かしい変貌を、
新しい種子が新しい土地に播かれつつあることを。
御身は教える、肉の裔なるものたちに、
「美しき実を結ぶ悪しき樹はなし。」

戦いは何処よりか
熱い太陽を背負ふ　神々よ

あなたの渇望が、
大いなる真昼の泉にいそぐからだ。
耐へねば……、
あなたの齢にとってただの一瞬を。[8]

詩「神々」は、太平洋戦争勃発から約半年後の1942年5月に、詩誌「詩集」（5月号）に掲載された詩作品である。そして、この５カ月後の同年10月に鮎川は入営しスマトラに派遣されることになる。この詩のなかで特に目を引くのは、「耐へねば……」という言葉をつぶやく、自らの生きるということを肯定している意識である。そこには、「現代は荒地である」という終末論的現代意識と戦争という事実を通して自覚した絶望に、何とか立ち向かい、その絶望のなかでさえも、あるいは、自己の死というものを前提にしても、生きるということを放棄しない強い意志が感じられる。さらに、そこには、鮎川信夫の「逼迫したもろもろの情況へ挑んでみせた最後の抵抗」も読みとることができる。[9]「マス・コミはもちろん、文学、芸術の世界まで、目に見えない速度でナショナリズムが奥深く浸透していく」情況で、「国家にも、社会にも、家庭にも、また日本の詩にも、希望を託すべきもの」を見いだせなかった鮎川が、絶望的状況に挑み、絶望のなかで生きるべき方法を求めて一本のペンをとる。「軍隊に入ってしまったらどうなるかわからないという気持で」「時間がたつのが不安でたまらなかった」鮎川の精神は、絶望のなかでどのように生きるべきかという方途や絶望のなかの生に意義を与える価値を求めて、暗い現実の束縛から解放され「神々」が住む「高い処」に上昇する。[10]　しかし、鮎川の精神が「神々」の世界に上昇するのは、絶対的な価値をそうした世界に求めるからではなく、また、そこに精神を避難させるためでもない。「聖書とニイチェをからみ合わせた」この詩の中で展開される「神々」の世界で鮎川の精神が必要とした

8　鮎川信夫『鮎川信夫全集』第１巻、525-26頁。

9　鮎川信夫「詩的自伝として」、『鮎川信夫著作集』第８巻、284頁。

10　前掲書、284-85頁。

のは、そこに存在する絶対的な宗教的価値でもなく避難所でもなく、絶望のなかの生を客観的に見ることができ、そこで何らかの生の方途や意義を見出すことができる「高さ」そのものなのである。そして、鮎川の精神がその「高さ」において見出したものは、「戦い」は「神々」の「齢にとってはただの一瞬」であるという形而上学的な事実であった。戦争は人間に苦痛を与える。多くの人間にとっては、それが長く続くことは耐えられないことである。しかし、その「戦い」は、「神々」の「齢にとってはただの一瞬」のことなのだと逆に考えてみるとき、鮎川が「耐へねば……」という表現にかけた実存の重みは、「死を予感した世代」に確かな反応を示したと思われる。というのも、戦争が「一瞬」のことであるというこうした形而上学的事実は、戦争状態における実存、言い換えれば、絶望のなかに生きる人間に、「耐える」という生き方を提示し、「荒地」に生きる精神に救いを与えているからである。こうした一篇の詩あるいは詩的世界を通して、「荒地」に生きることを自覚する詩人と読者が結びつく構造は、次に検討する森川義信の詩においても存在している。

（２）

鮎川信夫と同様に、絶望のなかの生を自覚し、それを止揚することによって、倫理的な価値の世界を開示した詩人に森川義信がいるが、彼は、1939年の時点で、次のような詩をすでに書いていた。

勾配

非望のきはみ
非望のいのち
はげしく一つのものに向つて
誰がこの階段をおりていつたか

時空をこえて屹立する地平をのぞんで
そこに立てば
かきむしるやうに悲風はつんざき
季節はすでに終りであつた
たかだかと欲望の精神に
はたして時は
噴水や花を象眼し
光彩の地平をもちあげたか
清純なものばかりを打ちくだいて
なにゆゑにここまで来たのか
だがみよ
きびしく勾配に根をささへ
ふとした流れの凹みから雑草のかげから
いくつもの道ははじまつてゐるのだ　11

森川義信の詩「勾配」は、1939年の詩誌「荒地」（第一次）に掲載されたものであるが、それは戦後の「荒地」派詩人の活動の出発となった第二次「荒地」の第一号にも、荒地詩人の活動を世に問うことになる1951年版『荒地詩集』にも掲載されていることからわかるように、「荒地」派詩人にとっては「記念的作品」であった。鮎川信夫が言うように、「荒地」派詩人は、「戦争の血と硝煙の匂いのなかで」死んだ森川のこの作品とともに「成長してきた」のである。12

この森川の詩が「荒地」派詩人にとって「記念的作品」であるのは、この作品が、「荒地」派詩人あるいは「荒地」に生きる同世代の者たちにとって、彼らの「青春」が如何なるものであるのかを提示している点にある。黒田三郎は、自ら自身を認識する年齢に達した時「我々は現代の荒地にゐた」という認識を持った、ということを述べているが、それはつまり、彼らが自己というものを自覚した時に、すでに「非望のきわみ」のなかで生きる「非望のいのち」しか選択できない状況に

11　黒田三郎「勾配」、「荒地」第１巻、第１号、12-13頁。

12　鮎川信夫「暗い構図－囚人に関するノオトⅠ－」、「荒地」第１巻、第１号、26頁。

あったということを意味している。ここに、戦争という絶望的な状況の中で最初の自己認識を経験しなければならなかった「荒地」派詩人たちの世代の苦悩がある。しかし、詩「勾配」の詩人、森川義信は、そうした現実に対して否定したり逃避したりせずに、絶望のなかの生を自覚し、それを生きることによってその強制された現実に対して反抗しようとする。そうした反抗が、森川の詩では、「生に関する幻想」[13]を生み出す結果になっている。その幻想とは、「生」が「荒地」という「死」の地に立っているのは、「生」が「死」へと通じる「勾配」、すなわち「階段」を降りてきたからなのだ、という幻想であり、それは森川自身の内面の論理でもある。そして、詩人森川がこの幻想に基づきながら発した問い「誰がこの階段をおりていつたのか」に対して、それは「我々」の現在の「いのち」であると考えてみるとき、森川がこの詩の最後の表現「だがみよ／きびしく勾配に根をささへ／ふとした流れの凹から雑草のかげから／いくつもの道ははじまつてゐるのだ」にかけた実存の重み、つまり、絶望のなかに生きる者のかすかな希望は、「荒地」派詩人たちの世代に「光」を投げかけていると言えるであろう。

（３）

今まで考察してきた２篇の詩、鮎川の「神々」と森川の「勾配」は、前者は太平洋戦争前期に、後者は日中戦争末期に書かれたものである。この２篇は、「荒地」派詩人の詩的方法をもっとも分かりやすく説明するものであると思われるが、次に、太平洋戦争中期から末期に書かれた戦中作品として、三好豊一郎の詩「囚人」を考察しておきたい。三好のこの詩作品は、すでに第２章第２節において、その一部を扱ったものであるが、もう一度ここで、「荒地」派詩人の詩的世界の構築という観点から、その全体を見てみることにする。

13　前掲書、27頁。

囚人

真夜中　眼ざめると誰もゐない－
犬は驚いて吠えはじめる　不意に
すべての睡眠の高さに躍びあがらうと
すべての耳はベッドのなかにある
ベットは雲の中にある

孤独におびえて狂奔する歯
とびあがつてはすべり落ちる絶望の声
そのたびに私はベッドから少しづつずり落ちる

私の眼は壁にうがたれた双ッの穴
夢は机の上で燐光のやうに凍つてゐる
天には赤く燃える星
地には悲しげに吠える犬
（どこからか　かすかに還つてくる木霊）
私はその秘密を知つてゐる
私の心臓の牢屋にも閉ぢ込められた一匹の犬が吠えてゐる
不眠の蒼ざめた vie の犬が　[14]

この三好豊一郎の詩作品「囚人」が、鮎川信夫の詩「神々」や森川義信の詩「勾配」との比較した場合、きわだっているのは、絶望のなかに生きることを自覚した人間の生命の危機を、まさに現実そのものが怖くて目覚めて起きていることさえできないというレベルで、現実そのものの恐怖の側から、自らの詩のことばに定着しているという点であろう。牢獄に囚われ、死刑が確定した「囚人」のように、「私」は、戦時下という絶望的な状況に閉塞され、絶望のなかに生きることを自覚している。このような実存が、現実を忘れ、精神の平安を見出すことができるのは、眠りの時だけなのである。というのも、絶望のなかに生きる人間の覚醒状態では、その現実空間そのものが、その人間に恐怖を常に与え続けるからである。言い

14　三好豊一郎「囚人」、「荒地」第１巻、第１号、14-15頁。

換えるならば、覚醒している時には、常に死の観念から逃れられないからである。しかしながら、詩作品「囚人」の「私の心臓の牢屋」では、眠ることによって絶望的な現実から逃れることのできない「不眠の蒼ざめたvieの犬」が、常に孤独と絶望に吠え続けている。こうした実存的不安の状況下にある精神のために、人間は、従来、秩序や永続的で恒久的なものを創造することによって、精神の避難場所を作り出してきたわけであるが、現代の「荒地」には、そうした秩序も恒久的な価値も存在しないのである。人間は絶望のなかでも生きることができる。しかし、それでは、魂の救いのない状態で人間が生きる生とは一体どんな生なのかと、逆に問い返してみるとき、そこで三好は、「真夜中」に目覚め、そこに「誰もゐない」と不安になり、眠りの中に再び戻ろうとして吠える「犬」の「生」と、ただ単に恐怖と苦痛のみが与えられ、魂の救済されない自己の「生」とは同じではないのかという内的な論理を発見するのである。そして、この内的論理をさらに押し進めて、魂というものを中心に考えたとき、三好の眼には、自己の魂が、救済されることもなく、絶望から解放されることなく、「心臓の牢獄」に閉じこめられ、絶望と孤独にさいなまれている「vieの犬」として見えたのではないであろうか。

以上、若き「荒地」派詩人によって戦争期に書かれた３篇の詩作品、鮎川信夫の「神々」、森川義信の「勾配」、三好豊一郎の「囚人」を対象に、彼らの詩的世界を考察してきた。これらの考察を通してまずもって明らかになるのは、その詩的世界の「暗さ」である。この詩的世界の「暗さ」、あるいは、「詩の暗さ」は、戦後の「荒地」派詩人の詩にも顕著に見られる要素であるが、こうした「暗さ」が一体何を意味しているのかという問題は、十分に検討されなければならないものであろう。というのも、その問題は、「荒地」派詩人の「詩を書く」という行為に対する考え方を始め、「生きる」ということに対する態度やことばに対する見解を、別な言い方で言えば、1951年版『荒地詩集』に掲載された「荒地」派詩人の共通の主張「Xへの献辞」の核にあるものを考える契機になるからである。

鮎川信夫は、エッセイ「現代詩とは何か」の中で、「荒地」派詩人の詩作品につ

いて多くの人から指摘されてきた「暗さ」について、次のようなことばを書き記している。

僕達が書いてきた詩の暗さについては、十年も前から、いろいろな人に指摘されつづけてきた。だが、僕たちは誰から何と言われようと、自分達の詩を決定している要素、それがたとえば暗さというような言葉で安直に言われるものであっても、黙って受け入れてきた。

一篇の詩が明るいとか暗いとか言われるのは、多くの場合、単に表面的なムードについて言っているのであって、別に大した問題ではないように思われる。詩の価値の評価に当っては、そんなことはとるに足らないことだ。

しかし、ながい期間、僕たちの詩が暗いと一般に言われてきたことは、それだけでは済まされないものがあるような気がする。[15]

上の文章の中で鮎川信夫は、「荒地」派詩人たちが、彼らの詩に対して指摘され続けてきた「暗さ」を「黙って受け入れてきた」ことを明らかにしているが、そうした甘受の背景には、「暗さ」ということばによって意味されるものを、表面的にではなく、その深層まで辿った場合、そこに「自分達の詩を決定している要素」に達するという確信があるからである。「荒地」派詩人にとって、主体的なことばによって現実の「暗さ」を開示していくことこそが、その「暗さ」から「一条の光」を求める唯一の方途であると同時に、彼ら自身の「存在証明」でもあったのである。

（４）

今まで考察してきた三人の「荒地」派詩人、鮎川信夫、森川義信、三好豊一郎に

15　鮎川信夫「現代詩とは何か」、『鮎川信夫著作集』第２巻、64頁。

よって戦中に書かれた詩作品の中には、その詩作品の読みの行為を通じて、戦後、他の「荒地」派詩人たちによって為される、彼ら自身の自己や世界観の開示を促す中心的なイメージや詩句が存在している。仲間の詩人によって紡ぎ出されたことばの中に存在するそうした中心的なもの、別の言い方をすれば、詩的主体が自らの経験に基づいて紡ぎだした仲間の詩人の詩の核を、他の「荒地」派詩人が個々の詩的行為を行う時に、それを共通のものとして引継ぎ、別の詩を創作していったという点に、戦後の「荒地」派の詩的行為のひとつの特徴があると言える。そして、このことは、「荒地」派詩人が「Xへの献辞」で明示するところの、「荒地」派詩人全てが、詩的行為を通じ共同して「荒地」的現在に立ち向かう態度をよく示している。こうした仲間の詩を通じて、そして自分の詩のことばを紡ぎ出すことによって、「荒地」派詩人は、彼らが存在する「荒地」において生きていくことの問題を読者へ、「荒地」派詩人の言葉で言うならば、「親愛なるX」へと詩の絆を拡大していくのである。例えば、次に示す詩句から始まる北村太郎の詩「微光」（詩誌「荒地」第５号）には、三好豊一郎が詩「囚人」の中で開示した、彼ら自身の戦前、戦中、戦後と生きてきた「生」が犬の「生」ではないか、という問いを含んだ意識を受け継ぎ、すでに彼らが生まれたときには「季節はすでに終りであつた」という詩句に存在する森川義信の現代を「荒地」とみる意識を再び確認することによって、それでは一体その「犬」の「生」の「一生」がどんなものなのか、ということをさらに詩のなかで追及していく詩人北村太郎の姿勢が見られる。

冬の落日を斜めにあびながら、
犬はねむつてゐる、
石段にながく前肢をのばし、
その上に老いた顎をのせて。

残酷時代、
おもたい銀の首輪と、
おもたい鎖とが暗い一生の始めに、

きらきらと耀いたのです。　　（「微光」より）16

この詩作品において、犬の「一生」は「一年」というサイクルに喩えられる。第一連において描かれた「老いた」犬は、自らの生の「イマアジュの連続」を、第二連における生を受けた「一月」から、死の訪れを暗示する「十二月」までという「一年」のサイクルの中で回想するのである。「二月」以降は次のように続いていく。

二月がおとづれ、
　三月がやつてくる。
（ストオヴに投げこまれ、
赤あかと音をたてて燃えあがる石炭。
しづかに、
主人は歴史の書物をめくり、
屋根をこすつてゆく木枯らしに火照つた顔をあげる－）
四月、
　そして五月。
つねに眼を地上にむけて、
尿の匂ひを追跡しながら街の隅々まではしり廻るのだつた。
六月、
　そして七月。
わたくしは卑屈な藝當をいくつも覚えました、
一片の焼肉がほしいばかりに。
さわやかな秋の水道。
コップにくんだ水がわたくしの牙に霧をかけて獣性をやわらげる。
十一月、
　そして十二月。　　（「微光」より）17

こうして「犬」の「記憶」を通して語られる一年が、彼ら自身の生きる一年と同じだとしても、また、その一年が何度も繰り返される「犬」の「一生」が、人間の一

16　北村太郎「微光」、「荒地」第２巻、第１号、2-4（2-3）頁。

17　前掲書、3-4頁。

生と同質のものであろうと、「残酷時代」に生きる「犬」は、果たして「一生の終り」を自覚しているのであろうか。このような問いをこの詩の最後に北村は含ませることによって、「残酷時代」に生きる人間の「微光」を、「一生の終り」すなわち「死」を自覚することから、見出そうとしている。それは、別の言い方をすれば、三好が「囚人」の中で定着させた＜「犬」の「生」＝人間の「生」＞という論理を、死の自覚によって、乗り越えて行こうする立場であり、「おとろえた鼻は／ぼんやりと一生の終りを嗅ぎつけてゐるのだろうか」[18]と問い、そして、「我々」は「一生の終り」を嗅ぎつけることができるのだ、という答えを準備することによって、「微」かな人間の生きる「光」を導き出していこうとする立場であると言うことができるかもしれない。

さらに、三好豊一郎が自己と世界を開示した詩作品「囚人」における「囚人」というイメージは、次の中桐雅夫の詩「夜の歌」では、「誰にでも笑顔をむけ」るという非主体的な生そのものの在り方を「罪」とし、その「罪」を「死刑」に値するものだと見なすことによって、「死刑囚」ということばに受け継がれていく。

夜の歌

わたしはいつも微笑んでゐます。
まるで怒ることを忘れてしまつたやうに、
それがわたしの宿命ででもあるかのやうに、
わたしは誰にでも笑顔をむけ、
さうして、実は、
わたしは、毎夜、自分の神を売つてゐるのです。

はちきれさうなわたしの肉体、
ゆたかなわたしのくろ髪、
わたしはいつも暖かく、
いつも満ち足り、
いつもいい匂ひをしてゐます。

18　前掲書、4頁。

けれど、暗いガアドの下に佇つて、
煙草を口に咥へると、
わたしの罪は、
太陽のごとく真実になつてくるのです。
わたしは、毎夜、死刑を宣告されてゐるのです。
死刑囚の美貌が何になるでせう、
また、死刑囚がいくら罪を重ねても、
それは、無限に一を加へるやうなものではありませんか。
わたしは唇をすぼめて、
男の顔に煙を吹きかけてやります。
ゴトゴトと不愉快な音をたてて、
貨物列車がわたしの頭の中を横切ります。
それは、わたしだけのことでせうか。

ああ、わたしはむしやうに怒りたい。
死刑囚にも怒る権利があるといふことを、
せめて、わたし自身に知らせておきたい。[19]

このように中桐雅夫は三好豊一郎の詩「囚人」から「囚人」というイメージを、北村太郎は、「犬」の「生」を、ここでは具体的に言及しなかったが、木原孝一は、詩作品「喪はれた階段」[20]の中で、森川義信の詩作品「勾配」から「階段」のイメージを、それぞれ引き継ぎながら、「荒地」派詩人は、戦後日本の「荒地」的現実に生きるための意義の発見という、「X への献辞」において彼らが希求するところに措定した「一つの中心」に向かって、詩作活動を続けていくことになる。

このような「一つの中心」に向かってのアプローチは、一つの視点から為されるのではなく、様々な角度から為されていく。その主要なものの一つが、戦争によって失われた自己の主体性をどのように回復するのか、という視点である。これは、当然、「荒地」派詩人の詩を書くという行為に直接むすびついてくる問題である

19　中桐雅夫「夜の歌」、「荒地」第２巻、第１号、42-44頁。引用の斜体字の部分は、参照した原文では傍点が付されている。

20　木原孝一「喪はれた階段」、「荒地」第２巻、第１号、48-50頁。

が、彼らは戦後においても主体性を回復できないでいる自己の存在自体を、ことばに反映させ詩の中に定着させることによって、自己確認し、そこから次の一歩を「一つの中心」に向かって踏み出そうとする。

戦後に生きる人間存在の主体性に関わる視点は、先に言及した中桐雅夫の詩「夜の歌」の「わたしはいつも微笑んでゐます。／まるで怒ることを忘れてしまつたやうに、」、「ああ、わたしはむしやうに怒りたい。／死刑囚にも怒る権利があるといふことを、／せめて、わたし自身に知らせておきたい。」という詩句にも認めることができる。この視点を、戦中あるいは戦後の生そのものをリアルに写し出す手法で描き出すことによって追及することによって、戦後の日本における人間の主体性を問うことに成功しているのは、黒田三郎である。

たとへ女殺しの罪を犯そうとも
僕は僕であり僕は遂に僕であるのであろうか
ふたつと無い気に入りの美しい衣装をまとつた喜びと悲しみのなかで
イエスと言ひノオと言ふことが忘れられて既に久しい
（「歳月」より）[21]

体験
たれかが何とか言つてくれねばならなかつた
さうすれば僕は
そんな馬鹿なことがあるものか
といやでも言ふことが出来る
其の時ひとは黙して語らなかつた
ニヤニヤ笑ひながら尻込する術を失つた
ひとびとの顔が
硝子に映つてゐるのを僕は見た
白い雲が硝子に映つてゐるのを僕は見た

すべては僕の予想通りに展開する

21　黒田三郎「歳月」、「荒地」第１巻、第２号、20-21頁。

僕はどうして無茶苦茶に僕を冒涜することを
選ばねばならなかつたか
そして既にすべては終つたことを示してゐた
ひとびとは顔を見合せ
下司に笑つてゐるのもゐる　1

黒田三郎の詩作品「歳月」と「体験」は、詩誌「荒地」第１巻第２号に、「時代の囚人」という総題のもとに掲載された小品である。2　詩作品「歳月」では、戦時下の強制された「時代」に身につけてしまった自己の行為の頽廃、すなわち、「イエスと言ひノオと言ふこと」ができない非主体的な自己を、戦争が終了した戦後においても克服できないでいる自己意識を、「僕は僕である」が「僕は遂に僕ではない」という苦い自己確認のもとに、詩のことばとして紡ぎ出している。ここには、当然、「僕は僕でなければならない」という詩人の主体性に関わる強烈な倫理的な声が存在するわけである。しかし、それにもかかわらず、非主体的な「ひとびと」の状況においては「僕は僕であり」えていないことに対する苛立ちと憤りが、詩作品「体験」では、自虐的に、「僕はどうして無茶苦茶に僕を冒涜することを／選ばねばならなかつたか」という言葉になって歌われているのである。

ここで注目すべきことは、やはり、「ことば」自体が自己を客観的に写し出す「鏡」のような働きを持っているということであり、そうした自己認識を経て自己批判の方途を詩の中に見出し、「荒地」の場を通じて戦後の主体性を獲得していくという点に、たとえ「荒地」派詩人のそれぞれの個々の位相の違いはあるにせよ、戦後の「荒地」派のひとつの意義が認められるのではないであろうか。

1　黒田三郎「体験」、「荒地」第１巻、第２号、23-24頁。

2　「時代の囚人」は、上に引用した、「歳月」と「体験」の他に「自由」と題する作品が加わった、三つの小品からなるものである。

第３章第３節

「荒地」派詩人の詩意識を支えた西欧の文学者たち

－T.S. エリオット、フランツ・カフカ、T.E. ヒューム－

第二次大戦前の日本の文学的風土においては、ヨーロッパの第一次大戦前後の詩の理念と方法が同時的に存在した状況であったことは、第１章第３節で検証してきたことである。具体的に言えば、科学的進歩への絶対的な信頼と「現在」から「未来」へのあくなき希求から「攻撃性」を身につけ、「速度の美」と「闘争の美」を賞揚し、従来の芸術的・社会的規範、伝統、権威など「過去」のすべてのものを徹底的に破壊することを主張した、イタリア未来派に象徴されるアバンギャルド的な詩精神が一方にあった。別の一方には、第一次大戦を引き起こしたヨーロッパ文明そのものに対する痛烈な自己批判精神をもとに、戦後社会の不安と混乱と無秩序の中で、「過去」において存在した絶対的価値や伝統や権威、あるいは知性を重視することによって、秩序の回復を目指し、大戦後のヨーロッパの在り方を模索した、イギリスの T.S. エリオットやフランスのヴァレリーに象徴される主知的な文学傾向が同時に存在していた。こうした日本における第二次大戦前の雑然とした知的風土の中で、既に戦前に於いて、ヨーロッパの第一次大戦前後の詩意識や詩的価値観に接触していた「荒地」派詩人たちは、戦後、彼らの詩的言語観を再構築するに当たって、様々な角度からそれらの文学作品を主体的に読むことを通じて、それらの理念をその詩的基盤にしていったと言うことができる。そうした西欧の文学者たちの中で最も重要であると思われるのは、第一次世代を　T.E.　ヒューム（Thomas Ernest Hulme, 1883-1917）とし、第二世代を T.S. エリオット(Thomas Stearns Eliot, 1888-1965)、ハーバート・リード（Sir Herbert Edward Read, 1893-1968）、マイケル・ロバーツ（Michael Roberts, 1902-48）とし、第三世代を W.H. オーデン（Wystan Hugh Auden, 1907-73）、C.D. ルイス（Cecil Day Lewis,

1904-72）、S. スペンダー（Sir Stephen Harold Spender, 1909-）とする、ロンドン「荒地」派詩人と呼び得る詩人あるいは批評家たちから得た詩意識や詩的価値観である。

この節では、戦後の「荒地」派詩人の詩的活動、あるいは、彼らの詩的言語観を支えたと思われるこうした第一次世界大戦前後のヨーロッパの文学者たちの中から、T.S. エリオット、フランツ・カフカ、T.E. ヒュームに焦点をあてながら、如何なる第一次大戦後のヨーロッパに根付いた理念や思想を彼らが主体的に引き継ぎ、自らの詩的根拠にしていったのかということを考察していきたい。

（１）T.S. エリオット

「荒地」派詩人は、第二次大戦後、1947年9月から1948年6月の間に刊行された詩雑誌「荒地」（第二次、全８冊）や、1951年から1958年まで続いた年刊アンソロジー『荒地詩集』（全８冊）など、いわゆる「荒地」派の場を通じて、戦後の詩的行為の基盤、換言すれば、詩に関する共同の理念を構築し、それを基礎にした詩的活動を積極的に日本の詩領域に提示していった。その理念は、1951年版『荒地詩集』の巻頭に掲載された文章「Xへの献辞」に集約されるものであるが、その理念の根底には、次のような文面からはっきりと理解できるような、「荒地」派詩人たちが戦後共通して抱くことになる「現代」に対する明確な意識が存在している。

> 現代は荒地である。［……］現代社会の不安の諸相と、現代人の知的危機の意識は、その発端を、過去という記憶と資料の援けをかりなければならない世界に有している。科学の進歩に追随し、或は経済学に対する課題的欲求が強まれば強まるほど、僕等の生活は惨めなものとなり、現代の空はますます暗澹と

してくるのである。人間が機械に隷属し、個人が集団の中に解消せしめられる時代、そして人類を破滅の淵に追い落す戦争恐怖の時代、－かかる時代に空を仰ぐ者は、人類の文化に対して、自分がある精神的不安の血を受継いでいることを感じとるに相違ない。[1]

「荒地」派のマニフェストとも考えられている、「Xへの献辞」における上記の文章には、「荒地」派詩人が第一次大戦後のヨーロッパ文学、特にT.S.エリオットの詩作品 *The Waste Land* （1922）などを読むことによって感得した、「現代は荒地である」という「現代意識」が彼ら自身の確固たる「ことば」として刻まれているだけではなく、「荒地」派詩人の実際の眼から見た「現代」の「荒地」的様相も分析的に記述されている。「現代」の「荒地」的様相についての認識や、あるいは「現代」を「荒地」たらしめている要因についての考察は、「荒地」派詩人によって、戦後、深められ、後に自らの詩的行為の根拠に結びつけられていくものである。このような戦後における「荒地」派詩人の「現代意識」の深化には、その前段階としてすでに臨戦状況下において、「現代は荒地である」という現代意識を自己の生と関わらせながら真剣に考えようとしていたということ、換言すれば、T.S.エリオットの詩作品や批評作品の根底にあるとも言える一つの認識を「荒地」派詩人が主体的に受け入れ、内面化しようと試みていた事実と、戦後、その認識を血肉化させる原動力となった戦争体験の二つの大きな要因が存在すると思われる。ここでは、まず戦争という暗い跫音が徐々に大きく響き始めた頃の「荒地」派詩人たちのT.S.エリオットとの接触を明らかにしながら、彼らがエリオットの作品の中に潜在する現代意識や思想を、如何に彼らの「詩を書く」という行為に収束されていく一つの思想に変換しようとしていたのかという実態を明らかにしてみたい。

鮎川信夫は、戦前におけるT.S.エリオットの作品との最初の出会いについて、

1　「Xへの献辞」、1951年版『荒地詩集』、3頁。

「エリオットを想う」と題する短いエッセイの中で、「T.S.エリオットは、最初どのようなかたちで、私の心の中に入ってきたのであろう？と考えてみても、それがどうも判然としない。文学者として偉大な存在だというような強烈な印象をもって、私の心の中にとび込んできたのではないことは、たしかである。」と証言している。[2]　この証言は、その後、どのようにして鮎川や他の「荒地」派詩人たちの心の中でT.S.エリオットの存在が「偉大な存在」として像を為していくのか、という彼ら自身の内面に関わる問いを含んでいる。

「自分が10代でT.S.エリオットを読んだということをまれな幸福だった」とエリオットを偲んで述懐する鮎川信夫がエリオットの初期の作品について知ったのは、「当時、外国の新文学の紹介に熱心だった「詩と詩論」（春山行夫編集）の紹介を通じて」であった。[3]　鮎川のことばによれば、彼が中学２年（１４歳）の終わり頃、即ち1934年末から1935年初めにかけて、大久保駅付近にある古本屋で詩誌「詩と詩論」をまとめて何冊か買い、それを通じてエリオットの存在を知ったということである。ちなみに、鮎川がここで触れている詩誌「詩と詩論」（1928年9月－1931年12月）には、詩人および批評家としてのT.S.エリオットの紹介、並びにエリオットの作品の翻訳紹介、それを通じての英米文学者による立論などの文章がいくつか掲載されているが、鮎川の発言から推して、以下の文章の中の数点には目を通したことと思われる。

第２冊（1928年12月5日発行）
①T.S.Eliot、中村喜久夫訳「完全なる批評家」（翻訳）、70－82頁。
第４冊（1929年6月20日発行）
②春山行夫「T.S.エリオット」（詩人紹介）、263頁。

2　鮎川信夫「T.S. エリオットを想う」、「英語青年」第111巻、第5号（1965年1月）、51頁。

3　前掲書、51頁。

第６冊（1929年12月10日発行）

③上田保「T.S.エリオットについて」（エリオットに関するエッセイ）、27－32頁。

第８冊（1930年6月16日発行）

④T.S.エリオット、北村常夫訳「伝統と個人的才能」（翻訳）、78－89頁。

第９冊（1930年9月15日発行）

⑤T.S.エリオット、秦一郎訳「ポオル・ヴァレリイの方法に関する短かい叙説」（仏訳からの重訳）、50－56頁。

第１２冊（1931年6月16日発行）

⑥R.オルデイングトン、亀山勝訳「T.S.エリオットの詩」（翻訳）、138－148頁。

第１３冊（1931年9月17日発行）

⑦原一郎「T.S.エリオット批判」（立論）、217－226頁。

⑧ラモン・フエルナンデス、太田咲太郎訳「T.S.エリオットのクラシシスム」（翻訳）、227－233頁。

第１４冊（1931年12月17日発行）

⑨荒川竜彦「T.S.エリオットの主知的批評論－その基準と意義への一瞥－」（立論）、50－60頁。

⑩ティ・エス・エリオット、北村常夫訳「形而上学的詩人達」（翻訳）、89－101頁。

鮎川信夫に限らず他の「荒地」派詩人たちも、戦前、「詩と詩論」に於ける上記のようなエリオットの作品の翻訳やエリオットに関する立論を通してエリオットと出会い、徐々に関心を深めていったと考えてよいであろう。そして、戦後において、「荒地」派詩人たちは自らの詩的行為の基盤を形成するために、エリオットの詩精神を積極的に反映させていくわけである。鮎川を始めとする「荒地」派詩人によるエリオットの認識や受容について言及する前に、まずここで、戦前の日本の文学領域に於いてどのように T.S. エリオットが受容されたのかという点を検証する

ことは、後の議論に役に立つと思われる。

「詩と詩論」というひとつの詩雑誌に於いて、上のようなエリオットの作品の翻訳や立論などの主要論文以外にも、ほぼ毎冊のように T.S. エリオットの名前が紙面に現れているという事実からも、1920年代から30年代にかけて、急速にエリオットが日本の詩の領域において注目される存在となっていったことは、想像に難くないであろう。日本にエリオットがどのような経路で伝えられ、どう受容され、いかなる影響を与えたかという観点から、1920年代に限定しながら実証的に考察した論文として、武田勝彦著『比較文学の試み』所収の論考「一九二〇年代の T.S. エリオットの受容」を挙げることができる。[4] この論文によれば、T.S.エリオットの名前が日本で活字化されて広く英米文学研究者の目に触れることになった最初の文献は、1922（大正11）年3月15日発行の「英語青年」（第46巻、第12号）に掲載された杉田未来の詩壇時評「米國現代詩壇とその論評」である。これに続くものとして、1924年4月発行の「英語青年」（第51巻、第1号）に掲載された福田麟太郎による「現英文壇の批評家」、また、エリオットの詩作品「荒地」の紹介が初めて為された文献として、翌年の1925（大正14）年3月の「The Muse（ザ・ミューズ）」（第1巻・第6号）におけるエリオットの人と作品についての紹介（無署名）を挙げている。実際には、杉田未来、福原麟太郎によるエリオットへの言及は、エリオットの存在を中心にした紹介ではないという点において、実質的に日本に於ける最初のエリオット及び詩作品「荒地」の紹介は、「The Muse」における文献によるものであると考えてよいであろう。[5] この「The Muse」では、「LITERARY

4　武田勝彦「一九二〇年代の T.S. エリオットの受容」、『比較文学の試み』（東京、創林社、1983年）、197-233頁。

5　杉田未来の時評は Conrad Aiken を紹介する文脈で、福田麟太郎のものは批評家 A. Clutton-Brock を紹介する文脈において、T.S. Eliot について言及している。
杉田未来「 Conrad Aiken (1889-) は米國の若い詩人の一人である。1914年に第一詩集 "Earth Triumphant" を公にして以来、最近に "Punch, the Immortal Liar" まで合せて七巻の詩集を出してゐる。彼の作品は初期に於て John Masefield の、後ちに T.S. Eliot の感化の跡が見えると評されたが、 "Punch"

GLEANINGS」と題する欄において、エリオットは次のように言及されている。

> ◎ T.S.Eliot は Harvard 出身の American poet で今は英國に住まつてゐる。彼の名聲を高めた長扁の詩 *The Waste Land* (1922) は初め *The Dial* 誌上に発表され、記者も当時それを読んだことを思出す。この詩の表題も題材も　Miss Jessie L. Weston の *From Ritual to Romance* から取つたものだ。彼はまた新進の critic として英文壇に独特の地位を占めてゐる。
>
> ◎ 論集に *The Sacred Wood* (1920) がある。先年 J. Middleton Murry を向ふに廻はして classicism 対 romanticism の論戦を張り、好敵手を自分の雑誌に招じて論理を悉させるだけの襟度を示した。彼が主宰する *The Criterion* は英國の純文学雑誌の中で最も高踏的なものの一つであらう。今度発行所が変り *The New Criterion* と改めた。[6]

日本の文学の領域に、「American poet」として、また「新進の critic」として上のように紹介されたエリオットは、前述した詩誌「詩と詩論」をはじめとする詩雑誌あるいは英文学研究の雑誌において取り上げられ、急速に日本の文学の領域に浸透し始めることになる。

さて、ここで注目すべき点は、日本の戦前のエリオットの受容において重点が置かれたのが、エリオットの「詩人」としての側面ではなく、むしろ「批評家」とし

に於て詩人は獨自の境地と手法を確立したといふ。」（「英語青年」第46巻、第12号、376頁。）
福田麟太郎「然しその境涯に入つてもまだ J.M. Robertson や T.S. Eliot を向に廻して、盛んに Hamlet 論の取りやりをし、一昨1922年には、*Shakespeare's Hamlet* の一書をまで公にして、飽くまでも己の判断と鑑賞の態度とを主張しようとする　controversy　の熱心に至つては、……」（「英語青年」第51巻、第1号、3頁。）

6　無署名「LITERARY GLEANINGS」、「The MUSE」第1巻、第6号（1925年3月）、242頁。

ての側面であったという点であるように思われる。[7]　このエリオット受容の傾向は、当時の詩の領域でのモダニズム詩運動における詩論の重視という立場との関連性から説明できるかもしれない。しかしながら、より重要であると思われる要因は、戦前からエリオットに接し、戦後エリオット研究者として活躍することになる英文学者深瀬基寛の次のような言葉から推測できるのではないだろうか。

> 難解を以て有名な The Waste Land と稱する一篇の詩によつて一躍大詩人の列に加へられ、現在では専ら批評家として目覚ましい活躍を続け、各方面の有識者の尊敬を一身に集めてゐるかの観がある。The Waste Land は欧州戦後の懐疑思想の代表的な表現と言はれたり、Jules Laforgue の詩風と比較されたり、兎に角喧しい作品であるが、残念乍らこの詩について筆を執る資格も勇気も自分は持ち合せない。しかし、批評家としての Eliot の一面はさほど理解に困難ではない。[8]

上の引用は、1930年の「英語青年」に掲載された深瀬基寛のエリオットに関する論考の一節であるが、上の言葉から、当時の日本の文学の領域において、エリオットの詩、特に『荒地』は、その難解さが強調されていたということが推測できるであろう。つまり、『荒地』を読むためには『荒地』の背後にある西欧の文学、あるいは西欧の歴史に関する深い知識が必要であるという認識が欧米の文学領域で存在していることを、強く意識していたのではないかと思われる。欧米で確立された『荒地』に対する評価を念頭におくこのような態度は、逆に考えると、当時エリオットの『荒地』が、日本の研究者などによってどのように読まれていたのかとい

7　戦前の日本におけるT.S. エリオットの受容の一側面を示すことを目的に作成したのが、巻末に付した資料I－2である。この資料から、例えば、戦前において出版されたエリオットの翻訳書及び定期刊行物に掲載されたエリオットの著作の翻訳の約３分の２以上がエリオットによる批評作品であることが明らかである。また、エリオットに関する立論にしても、その批評作品に言及したものがほとんどであると言えるであろう。

8　深瀬基寛「英國現代文学－T.S. Eliot－」、「英語青年」第64巻、第2号（1930年10月）、13-14（13）頁。

うことも暗示していると言えよう。

この点に関して、前述した武田勝彦の論考でとりわけ興味深い部分は、エリオットが日本において多くの知識人に愛読されるようになった経緯を、井上思外雄によって翻訳紹介された、詩人としても批評家としても著名なエドワード・シャンクス(Edward Shanks: 1892-1935) の「現代英詩概観」を引用しながら、説明している部分である。まずはその引用部分を見てみよう。

> 批評家は近代詩は近代意識と自己の住んでゐる世界とをもつと完全に、もつと豊かにあらはさなければならないといふ事を主張するが、それ等批評家は一層確かな地点に立つてゐるものである。そしてかういふ批評家のうちで最も有能な人はT.S.Eliot氏であるが、彼れはさういふ主張に応じようとする詩人のうち最も恐るべき人である。彼れの最も ambitious な作は、'The Waste Land ' であるが、非常な知的な快楽を此の詩は與へるのである。それは一つは彼れの思想を辿る事から生ずる快楽であり、一つは彼れの詩に於ける無数の引用詩句を探す事から生ずる快楽である。彼れの詩の crossword puzzle は実に Latin poets の該博な知識なしには分らないのである。更に注意すべき事は此の詩が幻滅の典型的な気持ちを表はしてゐる事である。近代意識は此の世界を荒野であると見た。かくして幻滅は詩情の源となつた。然し、その源は渇れてゐるので、そこから生れて来るものも萎びてゐて、熱を欠いてゐる。また、注意すべきは、幻滅が感情の源となつてゐるのであるから、生れて来るものも sentimentality 丈のものとなる事もあるといふ事である。[9]

T.S.エリオットを批評家としても詩人としても高く評価し、エリオットの詩作品

9　エドワード・シャンクス、井上思外雄訳「現代英詩概観」、「英文学研究」第６巻、第１号、133-42（139-40）頁。本文中の引用は「英文学研究」から取り、武田が中略している部分も付加した。武田が引用している部分は、原文では、*The Quarterly Review* 誌（1926年1月）の150頁の部分に当たる。

The Waste Land を「知的な快楽(an intellectual pleasure)」と「幻滅の典型的な気持ち(a typical mood of disillusionment)」という二つの観点からシャンクスが論じているこの部分に関して、武田はエリオットが日本で多くの知識人に愛読されるようになった背景に、「彼の思想を辿る事」と「無数の引用詩句を探す事」が、英文学者である西脇順三郎や深瀬基寛によって確かめられていったことがあると指摘している。このことは、戦前におけるエリオットの『荒地』の読みが、シャンクスが「更に注意すべき」と強調する「世界を荒野であると見た」ところの、エリオットの「近代意識 (the modern consciousness)」の側から、つまり「幻滅の典型的な気持」の観点から、『荒地』が読まれるというよりもむしろ、知的な認識、シャンクスの言葉で言えば、「知的な快楽」の側から始まったということを示唆していると言うことができるかもしれない。

一方、山川学而は、『エリオット入門』に収められた論考「評価と影響＜日本の場合＞」の中で、日本では戦前に於いてエリオットはほとんど読まれていおらず、エリオットがかなり広く読まれ研究されるようになったのは戦後のことであると指摘している。[10]　これまで見てきたように、1920年代から、戦前の日本に於いても「詩と詩論」を始めとするいくつかの文芸雑誌の中でエリオットの紹介がなされ、1938年には上田保による『荒地』の第一部に当たる'The Burial of the Dead'（「死者の埋葬」）の翻訳が当時の詩の流れをつくり出していた詩誌「新領土」（8月号）に発表されているという事実から考えると[11]、既に戦前に於いて、エリオットは日本の文学や詩の領域に浸透し始めていたと言えるであろう。しかしながら、「知的な」側面からのみではなく、シャンクスが注目すべき点として挙げるようなエリオットの「近代意識」を実際に感得しながら、その作品が日本に於いて読まれるようになったのは、戦後になってからであるといってよいのかも知れない。

10　山川学而「評価と影響＜日本の場合＞」、荒正人・小野協一編『エリオット入門』（東京、南雲堂、1961年）、280-88（280-81）頁。

11　T.S. エリオット、上田保訳「荒地」、「新領土」第３巻、第16号（1938年8月）、272-73頁。

ちなみに山川学而は、戦後エリオットが日本に於いてより広く読まれ、熱心に研究されるに至った一要因として、日本の戦後に於ける混乱期の「絶望的」な雰囲気がエリオットの詩のもつ「荒地」的な雰囲気になじんだことによるものだということを挙げている。[12]

以上のような戦前におけるエリオットの日本における受容の実態を踏まえた上で、日本の文学領域に於けるエリオットの受容の流れの特徴を要約すれば、それは、戦前に於いてはエリオットの作品は、その「知的な」側面が強調されながら受け入れられたが、戦後、自らが戦争や戦後の混乱を経験することによって、エリオットの「現代意識」も同時に強調されながら読まれるようになっていったと言うことができるのではないかと思われる。

それでは、戦前に於いて、すでにエリオットと出会った「荒地」派詩人もまた、同様なエリオットの読みを行っていったのであろうか。結論からいえば、「荒地」派詩人たちのエリオットの認識は、前述のような大きな一つの流れとは異なった側面を有しているように思われる。そして、そうした異なった仕方でエリオットの作品を読んだ点において、言葉の芸術性や形式を第一義とし、知的な側面を強調した日本のモダニズム詩人たちの詩を読む行為とは根本的に異なった「荒地」派詩人、特に鮎川信夫の詩を読むという行為が浮き彫りになってくるのであり、それと同時に、「荒地」派詩人の詩を読むという行為の特殊性が問題になってくるように思われる。彼らの読みの問題については、第４章で具体的に鮎川信夫を例に挙げて論じるが、このような前提を念頭に於きながら、ここでは次に、「荒地」派詩人たちが、戦前に於いてどのようにエリオットを受け入れていったかということを考察していきたい。

日本の文学領域に於けるこのような T.S.エリオットの移入の状況の中で、鮎川信夫はエリオットの存在を知るわけであるが、当時まだ少年であった鮎川が季刊詩誌

12　山川学而「評価と影響＜日本の場合＞」、280-81頁。

「詩と詩論」に掲載されている評論に対して、「難しくてよく分からなかった」[13]と思うのは当然であった。[14]　このことは、鮎川がエリオットに興味を覚えた原因は、エリオットの批評作品の翻訳や他の文学者によるエリオットに関する立論などを読むことにあったのではなく、他の要因があったことを示唆するものである。この点に関して、鮎川の戦前の最初期におけるエリオットの理解は、確かに「詩と詩論」を通じてエリオットの存在を知るが、それは鮎川の心の中に興味を覚えさせるほど大きな印象を鮎川にもたらさなかったと言うことができる。

それではどのようにしてエリオットの存在は、鮎川の心の中で重く存在感のある「偉大な存在」に変貌していったのであろうか。そして、エリオットの存在がどのように、鮎川の存在自身に大きな影響を与えるようになったのであろうか。この点を考える上で、次のような鮎川の言葉は大きな手がかりになるであろう。

> エリオットは、およそ詩人が与えうる最大の影響ともいうべきものを、私に与えた詩人である。特にその詩が好きで熱中したとか、彼の思想に深く共鳴したとか、というのではない。また、詩でも散文でもエリオットを読むことは私にとって大きな楽しみだったが、だからといって他の人以上に、エリオットを理解していた、というつもりもない。ただ、近代文明全体にたいする強烈なヴィジョンを、そのネガティヴなイメジを通して受けとったのであった。
>
> それは、知的な認識とは言えない。しかし、感性的なものであるだけに、深く心の土壌にしみ込んでしまったように思われる。詩が一種の（感性的な）認識の具として、近代文明全体に対抗してゆけるという、漠然たる信念を抱くに至ったのは、エリオットの詩を読んだことからである。[15]

13　鮎川信夫「現代詩との出合い」、『鮎川信夫著作集』第２巻、339頁。

14　しかしそれでも、少年から青年になったばかりの鮎川や他の「荒地」派詩人たちが、日本のモダニズム運動の推移や第一次世界大戦後のヨーロッパの文学と芸術の動向についての知識を得るために、「詩と詩論」の存在は、当時、絶大なものであったと思われる。鮎川だけでなく、田村隆一も「本郷や早稲田の古本屋を歩きまわり、『詩と詩論』『文学』を買いあさった」（田村隆一「ぼくの中の『詩と詩論』」、吟遊編集部編『詩と詩論－現代詩の出発－』　東京、冬至書房新社、1980年、23-24頁）という証言を残している。

15　鮎川信夫「現代詩との出合い」、『鮎川信夫著作集』第２巻、345頁。

鮎川信夫がT.S.エリオットに傾倒し始めるのは、1938年の夏頃のことであり、鮎川がエリオットの存在を知ってから約3年の月日が流れていた。その間に、鮎川は日本のモダニズム運動の推移や第一次大戦後のヨーロッパの文学や芸術の動向についての知識を得る一方で、同世代詩人たちが中心となる詩誌「LUNA」やその改題である詩誌「LE BAL」のメンバーとなり、若きモダニスト詩人として詩的活動を行うようになる。さらには、鮎川よりも上の世代のモダニスト詩人たちの場であった詩誌「新領土」の同人として加わっていくようにもなる。その頃どちらかと言えば、「ダダイスムとかブルトンやアラゴン、エリュアールなどのシュールレアリスムの運動」のほうに興味を抱いていた鮎川が、「J.ジョイス、エリオット、ハックスレー、ウインダム・ルイスなどのイギリスの新文学」のほうに関心を移していくのは、T.S.エリオットの『荒地』との出会いの後のことである。[16] そして、まさにエリオットの『荒地』を読むというこの経験から、鮎川信夫は、「近代文明全体にたいする強烈なヴィジョンを、そのネガティヴなイメジを通して受け」り、「詩が一種の（感性的な）認識の具として、近代文明全体に対抗してゆけるという、漠然たる信念を抱く」に至たり、鮎川の眼に「文明の頽廃に真向うから挑む真剣な詩人の姿が、ようやく偉大な存在として映るようになってきた」[17]と思われる。

鮎川信夫が、T.S.エリオットの『荒地』を初めて読んだのは、詩誌「新領土」1938年8月号に掲載された上田保訳の『荒地』第1部にあたる「死者の埋葬」の部分であり、その時の感想を鮎川は次のように書き記している。

> はじめて上田氏の訳で『荒地』をよんだとき、私は、そこに何かわれわれの詩とはちがうものがあるのに気づいたことを、今でもはっきり記憶している。当

16　鮎川信夫「エリオットを想う」、「英語青年」第111巻、第5号、51頁。

17　前掲書、51頁。

時の四季派の詩、モダニストの詩、その他の詩などとはまるでちがった、暗くて、皮肉で、思索的なあるものが直観的に感得されたのである。そこには、詩にたいする私の渇の一端をいやす、何ものかがあったのである。誤訳がありはしないかとか、日本語としてどうだろうかとか、そういった疑問は何一つ起こりはしなかった。いわば、誤訳があろうが、日本語としてどうだろうが、私にとって、それは詩として充分意味があったというわけである。今なら、もちろん事情はちがっていたであろうが、その時、中野重治とか三好達治の詩がまるでつまらなくみえたとしても、たぶん私の責任ではあるまい。詩は、出会いによって語るより仕方のないものだ。[18]

こうした衝撃的な『荒地』との出会いがもとで、それまで「強烈な印象」を与えていなかったエリオットの存在が、鮎川の心のなかに徐々に侵入していくことになる。鮎川は、上田保訳によるエリオットの『荒地』の「死者の埋葬」を読むことによって、近代文明に対する否定的なヴィジョン、ひいては「現代は荒地である」という現代意識を、感性的に、直観的に感得した。この鮎川のエリオットの読みは、感性的であるが故に詩人の精神に衝撃的な経験として刻まれ、鮎川の詩的世界にも変化をもたらす一つの契機となったと考えられる。第１章第４節において述べたように、1938年8月の鮎川のエリオットの『荒地』との出会いは、詩作品「室内」が書かれる３カ月前のことであった。「室内」を中心としたこの時期における鮎川の詩的世界の非現実から現実への下降の背景には、前述した臨戦時下における日本の状況と、森川義信との交流があったとともに、T.S. エリオットの『荒地』との詩的出会いがあったと考えられるのではないであろうか。

鮎川信夫の他にも、戦後、鮎川信夫とともに「荒地」派詩人になる田村隆一は、同じ上田保による『荒地』を最初に読んだ時の感想を『エリオット詩集』（彌生書房）における「解説」の中で、次のように述懐している。

18　鮎川信夫「翻訳詩の問題」、『鮎川信夫著作集』第５巻、文学論　芸術論、156-70（168）頁。

ぼくがはじめてT.S.エリオットの詩に、「生硬」な日本語でせっしたのは、戦前のモダニズムの詩の機関誌『新領土』（昭和十三年八月号）であった。いまから、ざっと三十年まえのことで、ぼくはまだ中学生にすぎなかったが、上田保氏による本邦初訳の『荒地』の第一楽章にあたる『死者の埋葬』は、じつに超経験的な（グロテスクといってもいいような）、詩的感動をぼくにあたえてくれたものである。[19]

このように上田保によって翻訳された『荒地』が、戦後日本社会に戦後詩の成立を告げる「荒地」派に大きな影響を及ぼしていたことは注目に値する。[20] というのも、当時まだ十代で英語もままならなかった彼らが、戦後日本に起こる熱心な「荒地」熱に先んじて、しかも翻訳された『荒地』を通じて、それにもっとも敏感に反応できたということは、鮎川が、戦後、「翻訳詩の問題」で論じている「詩の理解」あるいは「詩を読むこと」という「荒地」派詩人の詩の行為の基本的特徴に大きく関わってくるばかりではなく、そこには当時の「荒地」派詩人の書いていたモダニズム的な詩的行為そのものに対する懐疑の萌芽が存在するからである。

ところで、ここで考えておかなければならないことは、鮎川がエリオットの『荒地』を読むことによって感じた「暗くて、皮肉で、思索的なあるもの」、あるいは、田村が言うところの「超経験的な（グロテスクといってもいいような）、詩的感動」とは、一体どのようなものであるかという点であろう。つまり、エリオットによって『荒地』に描き出された「荒地」とはどのようなものであり、そのイメージを鮎川たちがどのように認識していったのかという問題である。これらの点を、鮎川と田村のエリオットの詩との出会いとなったと同時に、彼らの精神に強烈

19　田村隆一「解説」、田村隆一編『エリオット詩集』、世界の詩43（東京、彌生書房、1967）、160-71（160）頁。

20　戦前において「荒地」派詩人に大きな詩的影響を与えたと思われる詩誌「新領土」に掲載された上田保訳の「死者の埋葬」を、資料Ⅰ－3として添付しておく。

な詩的経験として残ることになる、エリオットの『荒地』の第１部「死者の埋葬」に焦点を当てて考察していきたい。

「死者の埋葬」は、エリオットが現代という自らの生きる世界に対して抱いた意識を形象化した「荒地」の様相の描写と、その「荒地」という現実において起こる５つのエピソードから構成されている。次に引用するのはその冒頭の部分（１－７行目）であるが、ここでは、黙示的なヴォイスによって、現代の「大地」(land) を「荒地」たらしめている要因の一つである不毛の観念が、「大地」と直接むすびついている生命、すなわち、植物の生との関わりで象徴的に描き出されている。

April is the cruellest month, breeding
Lilacs out of the dead land, mixing
Memory and desire, stirring
Dull roots with spring rain.
Winters kept us warm, covering
Earth in forgetful snow, feeding
A little life with dried tubers. [21]

四月はいちばん酷(むご)い月、不毛の地から
リラを花咲かせ、追憶と
欲情をつきまぜて、春雨で
無感覚な根をふるい立たせる。
冬はぼくらを温かくしてくれた、忘却の雪で
地上を覆い、乾いた球根で
あわれな生命(いのち)を養いながら。[22]

---

21 Thomas Stearns Eliot, 'The Waste Land', *The Complete Poems and Plays of T.S. Eliot* (London: Faber and Faber, 1969), pp.61-80 (61).

22 T.S. エリオット、鮎川信夫訳　「荒地」、『鮎川信夫全集』第１巻、568-93（568）頁。以後、本節に於ける T.S. エリオットの『荒地』の邦訳は、鮎川信夫をはじめとする「荒地」派詩人たちの『荒地』の読みを考察するという本論考の意図から、鮎川の翻訳によるものを提示することにする。

本来「四月」は、「大地」(land) から草木などの生命あるものを生み出させる月であり、「四月」なしには、「母なる大地」から「子供」は生まれない。この点で、「四月」は、新しい生命の誕生を象徴する月なのであるが、しかしながら、「荒地」においては、「四月」は「いちばん酷い月」になる。というのも、それは「不毛の地」、すなわち「死んだ大地」(the dead land) から新しい生命、それも「リラ」(lilacs)　に象徴されるような「頽廃」と「疲弊」にとらわれた生命を誕生させ、それを育むからである。ここには、「死んだ母」から新しい生命を生じさせるという「四月」の残酷さのイメージが、「冬」から「春」へという復活の観念のもとで描き出されている。

上に引用した冒頭部に続き、「死者の埋葬」において５つのエピソードが展開されるわけであるが、第一のエピソードは、「マリー」というドイツ人の婦人が、子どもの頃の山の生活を回想しながら、このエピソードの中における主人公に語りかける設定になっている。子どもの頃、つまり、過去に於いて、冬の恐れを克服することが可能であったのに対し、現代の「荒地」に生きる「マリー」にとって、冬の恐れはもはや克服しうるものでははく、冬には南に逃れていくのである。このエピソードの背景には、「荒地」的現実から逃れていく逃避的な生が存在している。

続く１９行目からの部分では、エリオットの「荒地」のイメージが旧約聖書に準えられながら具体的に描写されている。この部分の最初（１９－２０行目）で、'What are the roots that clutch, what branches grow / Out of this stony rubbish?'（「しがみついているのはどんな根か、こんな荒蕪の地に／どんな枝がのびるのか？」）という二つの問いが「人の子」に対して投げかけられる。しかしながら、生まれたときにすでに世界が「荒地」であり、生気のない不毛の世界しか知ることがない「人の子」は、生命についての客観的な問いと、さらには自らの存在についての省察を要する問いの、両方の問いの答えを「告げること」も、「推測すること」もできない。ここには、「荒地」の時代に自らの生を受けた存在が、自らが

「荒地」に生きているという自覚を持たないことによって、虚無的な生を生きざるを得ない「荒地」的な生の様相が示されている。そして、現代の「荒地」においてそうした精神的死を強いられている存在に対して、黙示的なヴォイスは、'fear in a handful of dust'（３０行目、「一握りの塵のもつ恐怖」）、つまり、「死」を提示することによって、生というものの自覚と「荒地」に生きる者の救済を促そうとするのである。

「荒地」とそこに存在するものの荒涼たる生の描写は、突然のワーグナー（Richard Wagner, 1813-83）の楽劇*Tristan und Isold*（『トリスタンとイゾルデ』）第一幕の水夫の歌の引用によって遮られ、第３のエピソードへと展開していく。トリスタンとイゾルデの悲恋同様、生の育たぬ不毛の地である「荒地」において、「生きているのか／死んでいるのか、なんにもわからなかった」「ぼく」と「ヒヤシンス娘」の恋愛も決して成就することはなく、不毛に終わらざるを得ない。「ソソストリス夫人」がタロットカードで占いをする次のエピソードに於いても、「荒地」に生きる存在である「あなた」に対して占われる「カード」を通じて、「荒地」に生きる存在の不安の諸相が象徴的に描き出されることになる。そして、エリオット自らがその注で明らかにしているように、ボードレール（Charles Baudelaire, 1821-67）の『悪の花』（*Les Fleurs du Mal*）、ダンテ（Dante Alighieri, 1265-1321）『神曲』（*La Divina Commedia*）の「地獄編」（'Inferno'）、ウェブスター（John Webster, ?1580-1625）の『白魔』（*The White Devil*）を典拠にした「死者の埋葬」の結びに当たる６０行目からの最後のエピソードの部分は、次のように始められる。

Unreal city,
Under the brown fog of a winter dawn,
A crowd flowed over London Bridge, so many,

I had not thought death had undone so many.
Sighs, short and infrequent, were exhaled,
And each man fixed his eyes before his heet.
Flowed up the hill and down King William Street,
To where Saint Mary Woolnoth kept the hours
With a dead sound on the final stroke of nine. 23

幻の都市、
冬の夜明けの鳶いろの霧の下、
たくさんの群衆がロンドン橋（ブリッジ）のうえを流れていた、
死がこれほど多くの人を滅ぼしていたとは思ってもいなかった。
ときたま短い溜息をもらし、
めいめい足さきを見詰めていた。
丘の流れを上り、キング・ウィリアム街を下ると、
聖マリア・ウルノス寺院の鐘が九時の最後の一打ちを
無気力にひびき終えたところだった。24

ここに於いてエリオットは、「幻の都市」であるロンドンを描写し、現代の「荒地」たるイメージを明瞭に打ち出すのである。そして、「死者の埋葬」の最後の一行、'You! Hypocrite lecteur! -Mon semblable, -mon frere!' （「きみ！偽善家の読者！－わが同類、－わが兄弟よ！」）に於いて、読者もまた精神的な死を迎えながらも生きながらえている「荒地」に住む一員であることを呼びかけるのである。

以上のようにエリオットの「死者の埋葬」に描き出される「荒地」イメージは、重層的構造になっているのであるが、ここで重要なことは、エリオットがこの『荒地』の第一部「死者の埋葬」を通じて、現代における世界は荒地的な世界であるという彼の世界観を読者に開示していることであろう。そして、そのエリオットの世界観あるいは現代意識を、自己の世界観の開示として読むことができるかどうか、

23　Thomas Stearns Eliot, 'The Waste Land', p.62.

24　T.S. エリオット、鮎川信夫訳「荒地」、『鮎川信夫全集』第１巻、571-72頁。

いう彼の世界観を読者に開示していることであろう。そして、そのエリオットの世界観あるいは現代意識を、自己の世界観の開示として読むことができるかどうか、このことに、「死者の埋葬」を読むことのひとつの意義が潜んでいるように思えるのである。

それでは、エリオットの『荒地』に描かれる「荒地」のイメージを通じて鮎川信夫は、何を感得したのであろうか。それは、エリオットによって思索され、詩的言語によって開示された世界観、別な言葉で言えば、現代意識であると思われる。そして、それを田村隆一のように「グロテスクな経験」と言うのは、その世界観が彼ら「荒地」派詩人にとって思いもよらなかった世界観だったからであり、また同様に、今まで隠されていたものが暴き出された感がそこにあったからであろう。

鮎川は、「地獄の発見」と題する論考に於いて、エリオットの現代の「荒地」のイメージをダンテの「地獄編」における「地獄」のイメージと比較しながら論じているが、エリオットの「死者の埋葬」における、'Unreal city' にはじまるエリオットの目に映った「荒地」であるロンドンのイメージを、次のように解釈している。

> 希望を持たないたくさんの人々が、鳶いろの霧のしたを歩いている。テムズ河にかけられたロンドン橋をこれらの人々が渡ってゆく時、群衆はひとつの流れとなる。「たまたま短かい溜息をもらし、めいめい足さきを見詰める」という共通したポーズをとることによって、彼等は一人一人の個人ではない、いわば群衆という大きな集合体にとけこむ。「ロンドン・ブリッジ」は、この分散的な群衆というイメジを絞って、ひとつの流れにしているわけである。群衆は希望を持たないことによって死に憑れている。しかも彼等は、生きながらにして死せる存在であることを意識しようとはしない。
>
> [……]
>
> キング・ウィリアム街を降っていく群衆に向かって鳴る聖マリア・ウルノス寺院の九時の鐘を、「最後の死の時をひびかせた」と書いたエリオットは、ここで極めて簡潔的確な表現によって群衆と寺院と、「死」と「時」とを一つの

場所に巧みに結びつけ、深い情緒を含んだ高度の象徴的効果を挙げている。[25]

まさに絶望を象徴するようなポーズを一様にとった人々の流れは、それぞれの個々を消滅させた集合体でしかなく、その集合体は、絶望のゆえに「死」にとりつかれている。そして、エリオットによるロンドンの描写の中に描き出される「荒地」のイメージを上のように読みとる鮎川は、そこは「絶望による群衆の大量虐殺」がなされている「現代の地獄」であると解釈するのである。鮎川にとって、ここで重要になってくるのが、自らを「生きながらにして死せる存在」として意識することであり、「現代」を「荒地」であると自覚することであった。

> 『荒地』に現れるこのロンドンのイメジはわれわれに、ダンテの表現を借りれば、正に現代に於ける「悲しみの都」という印象を与える。絶望による群衆の大量虐殺が、現代の地獄でなくて何であろうか。
>
> 天国を知らず、地獄にのみ生きる人間は、みずからの住う処を地獄として意識しない。ダンテのいう「悲しみの都」とは、悲しみを意識しない都であり、「永遠の悩み」とは、永遠に意識されない悩みであり、「亡びの民」とは滅亡を意識しない民である。[26]

エリオットの「荒地」のイメージをダンテの「地獄」と重ねながら検討している鮎川の言及には、「Xへの献辞」においての「荒地」派詩人たちの態度同様、「現代は荒地である」という現代に対する自覚を強調する鮎川の態度が窺われる。鮎川にとって、絶望を意識すること、換言すれば、「現代は荒地である」と自覚することが、絶望からの解放、「荒地」からの脱出を可能にする第一歩となるのである。同時に、鮎川は、「現代は荒地である」という現代意識が、そこに生きる絶望に捕ら

25　鮎川信夫「地獄の発見」、『鮎川信夫著作集』第５巻、文学論　芸術論、28-36（30）頁。

26　前掲書、30-31頁。

われた集合体の一員であり続ける限りは、自覚できないということに気づいていた。エリオットが、過去において、「死がこれほど多くの人を滅ぼしていたとは思ってもいなかった」（『荒地』６３行目）のは、エリオット自身が、「亡びの流れの一員であって、滅亡を意識しなかったから」であり、群衆を捉えている「死」をエリオットが今でも気づかずにいたとしたら、『荒地』という作品は生まれなかったと鮎川は指摘する。つまり、絶望にとらわれた集合体としてではなく、個人として現実を直視することが、「現代は荒地である」と自覚することにつながり、ひいては、その「荒地」からの脱出へとつながっていくのである。鮎川をはじめとする「荒地」派詩人たちもまた、「Xへの献辞」において明らかにされているとおり、自己を回復すること、換言すれば、主体を回復することによって、自らの存在する現代に「荒地」を自覚したということができるであろう。そしてこのことは、「荒地」派詩人たちの戦後の詩意識にみられる主体性あるいは実存の独立性という問題とも関わるものなのである。

（２）フランツ・カフカ

さて、戦前において、『荒地』を、鮎川の言葉で言えば、「ジカに受けとる」[27]ことによって、エリオットの現代意識を感得した「荒地」派詩人は、自らの戦争体験を通して、戦後の日本の地で「荒地」をより強く意識し、自らが「荒地」に生きる者であることを自覚したのであるが、こうした認識は、当然、「現代」を地獄として捉えた文学者への接近を可能にさせたと思われる。戦後、「荒地」派詩人が接近するそうした文学者の一人として、「現代」における人間存在の危機と精神の救いのない状況を実存的な立場から痛烈に描いた小説家、フランツ・カフカ（

27　鮎川信夫「翻訳詩の問題」、『鮎川信夫著作集』第５巻、166－67頁。　鮎川は、この評論の中で、翻訳詩の問題を論じながら、本論文第４章第１節で扱う問題である、＜読む＞行為の自分自身の見解を提示し、詩を「ジカ」に受け取ることの必要性を論じている。この鮎川の詩を＜ジカ＞に受けとるといった、＜読むこと＞に対する見解は、「荒地」派詩人全体の読みの行為を説明するものであると思われる。

Franz　Kafka,　1883-1924）の存在がある。エリオット、カフカ、そしてT.E.ヒュームは、「荒地」派詩人、特に鮎川信夫の眼には、思想的源泉を同じくする文学者として映っていたことは、鮎川のエッセイ「カフカの世界」の中の次のような一節から明らかであると思われる。

> T.E.　ヒュームが、ヒューマニズムを批判した『スペキュレーション』の中で＜原罪＞を説き、中世的思想を暗示していたのも、T.S. エリオットが、近代文明をプロテスタンティズムの堕落の結果と見ていたことの理由も、今では一層はっきりと首肯される。カフカの文化否定は、彼の敗残人生の素晴らしく鮮明な幻影によってより明瞭で決定的である。[28]

第一次大戦前後のヨーロッパに、人間存在と精神と文化の危機を読みとった上記の文学者たちの思想を、「より明瞭で決定的」なものとして鮎川の精神に響かせたのが、作家自らの生の体験をその作品に「幻影」として描き出すことによって「現代」の「荒地」を開示したカフカであった。

1947（昭和22）年12月発行の詩誌「荒地」第１巻第４号には、フランツ・カフカの『審判』についての特集がくまれており、そこには鮎川信夫の「『掟』と罪」と三好豊一郎の「フランツ・カフカに於ける人間の運命」の二つの論文が掲載されている。また鮎川は、詩誌「純粋詩」1947（昭和22）年9月号に「カフカの世界」と題する論文を掲載するなど、この時期に書かれた鮎川の評論には、カフカに言及したものがいくつか認められる。このような鮎川の評論から推測して、鮎川の場合には、1947年までには、『皇帝の使者』、『万里の長城造営に際して』、『兄弟殺し』、『変身』、『審判』などのカフカの作品を読んでいたと考えることができ

28　鮎川信夫「カフカの世界」、『鮎川信夫著作集』第６巻、文明論　海外詩人論（東京、思潮社、1975年）、320-34（333）頁。

る。[29] その中でも、少なくとも『審判』については、論文「カフカの世界」の中の鮎川自身の言葉から、戦前に読んでいることがわかる。また、荒地出版社刊行の『カフカの世界』に収められた論考において、三好豊一郎と北村太郎は、彼らのカフカとの初期の関わりについて、次のように回想している。

> 小説『審判』が本野亨一さんによって初めて邦訳されたとき、私は異様な興奮を覚えながら一挙に読み終えた。突然、漏斗状の渦巻が起こって、加速度的に渦の中心にひきこまれてゆく思いがした。きわめて狭い読書経験にすぎぬからかもしれぬが、娯楽的読み物でない純粋な文学作品でありながら、これほどスリルとサスペンスと思考作用への刺激と文学的興奮を私に与えた小説は、それまで読んだことがなかった。第二次大戦の始まる一、二年前の話である。（三好豊一郎）[30]

> 『変身』を初めて読んだのは、一九四七年（昭和二十二年）、フランス語訳によってであった。それは雑誌 nrf に出ていたので、『変身』のほか、『田舎医者』の諸短篇（スケッチと呼ぶほうが適当かも知れない）も、そのとき、初めて、同じ雑誌で読んだ。それら数冊の nrf は大学の研究室にあった。何年何月号だか、憶えていない。そのころ、神田の古本屋で、偶然『田舎医者』のドイツ語原本を見つけた。随分大きな活字で組んであって、詩集みたいな感じだった。わたくしは、ドイツ語がほとんどできない。辞引をひきながらでも、半分ぐらいしかわからない。で、この珍本は、黒田三郎に進呈してしまった。ことし、黒田に会ったら、まだ持っているよ、といっていた。
>
> 「変身について」という、三十枚ばかりの文章を書いたのは、一九四七年八

29　鮎川信夫の評論で言及される作家、作品を手がかりとして、鮎川信夫の西欧の作家の読みの傾向を示す目的で作成した表を、資料I－４として巻末に付した。

30　三好豊一郎「『流刑地にて』」、辻瑆編『カフカの世界』（東京、荒地出版社、1971年）、205-21（206）頁。

月十日であった。「純粋詩」という同人雑誌にのせてもらった。（北村太郎）[31]

このような記述からも、フランツ・カフカは、「荒地」派詩人である鮎川信夫、三好豊一郎、北村太郎の三人、あるいは、北村からカフカの本をもらった黒田をも含めると４人、が共通に接近していったヨーロッパの作家の一人として数えることができると考えられるが、ここでまず初めに注目すべき点は、彼らがカフカに興味を抱きだした時期であると思われる。

日本におけるカフカの受容を辿った研究として、有村隆広の「日本におけるカフカ受容」を挙げることができる。有村によると、日本における初めてのカフカ論は、ドイツ文学者の岡村弘によって、１９３２（昭和７）年に発表されたものであり、戦前におけるカフカ論は、この岡村によるものだけであると指摘している。戦後のカフカ論として、有村は、１９４６年の花田清輝によるものと、１９４８年の山下肇及び本野亨一によるものを最初期のものとして挙げるている。また、有村は、カフカとの関係が指摘される日本の小説家として、戦前に於ける中島敦、戦後直後では、花田清輝、島尾敏雄、安部公房などを挙げると同時に、カフカが一般の読者に読まれるようになったのは、新潮社から『カフカ全集』が出版されたのを契機とした、１９５３年頃であると指摘する。有村の研究とその論文が収められている『カフカと現代日本文学』の巻末に付されたカフカ受容の年表を参考にして、『カフカ全集』出版までの日本におけるカフカ受容の中心的なものをここにまとめると次のようになる。

1932年　岡村弘　「フランツ・カフカ」（『独逸文学研究』第１号、東京帝国大学）

1933年　羽白幸雄訳　『隣り村』他５編

31　北村太郎「『変身』」、前掲書、193-204（194）頁。

1940年　本野亨一訳　『審判』

1942年　中島敦　『山月記』　＜カフカの『変身』との関わり＞

1946年　花田清輝訳　『橋』、『バケツ乗り』（『真善美』掲載）

1947年　山下肇　「実在のロマネスク」（『思想』1月号掲載）

本野亨一　「不安と脱出－フランツ・カフカ論」（『世界文学』2月号掲載）

島尾敏雄　『夢の中での日常』　＜カフカの夢の技法＞

1950年　花田清輝訳　『カフカ小品集』（「世紀の会」刊行）

1951年　安部公房　『壁－S.　カルマ氏の犯罪』　＜『審判』の作品構造との酷似＞

1953年　アルベール・カミュ、矢内原伊作訳　「フランツ・カフカの小品に於ける希望と不条理」（『シジフォスの神話』）

山下肇　『カフカの世界』（早川書房）

新潮社版　『カフカ全集』（　『城』、　『審判・アメリカ』、『変身・流刑地にて・支邦の長城・観察』）

このような日本におけるカフカ受容の動向の中で、「荒地」派詩人のカフカへの傾倒を考えてみると、詩人あるいは作家だけではなく、研究者のカフカ受容の中でも、かなり早いものであると言えるのではないであろうか。三好豊一郎の場合には、すでに「第二次大戦の始まる一、二年前」、つまりは、1940年前後には、そして、鮎川についても戦前において『審判』を読んでいる。また、この二人に北村を加えた三人が、敗戦直後の1947年には、詩誌「荒地」及び詩誌「純粋詩」にカフカについての論考を発表している。特に、鮎川の二つのカフカ論は、鮎川が戦前から接触していた第一次世界大戦後のヨーロッパの精神的危機や罪状意識あるいは文明批判という観点を踏まえている点で、本格的な研究論文としてのカフカ受容を

示すものであろう。一方で、三好豊一郎は、詩人として主体的にカフカを受容し、自らの作品の中でそれを結実させていったということができるかも知れない。戦前において『審判』に接したときの状況を、「突然、漏斗状の渦巻が起こって、加速度的に渦の中心にひきこまれてゆく思いがした」と回想する三好は、カフカの描き出す世界が三好にもたらした「文学的陶酔」について、次のように述べている。

> 詩のみならず小説にあっても、良質の文学は独得の陶酔をもたらすものらしい。それは麻酔的に意識をねむらせる陶酔ではなく、意識を目ざめさせる陶酔、覚醒的快楽が与える一種の知的陶酔ともいうべきものである。[32]

カフカの描き出す第一次大戦前後のヨーロッパの精神的危機に、自らの意識を目覚めさせる「陶酔」を経験した三好は、その経験を自らの詩的行為の根拠へともつなげていったのではないであろうか。前節で考察した戦争中期から後期にかけて書かれたとされる三好の詩作品「囚人」を考えてみると、絶望を自覚しながらもその絶望をもたらす現実から逃れることのできない「囚人」というイメージは、逮捕されるヨオゼフ・Ｋのイメージと、「睡眠」あるいは「めざめる」というイメージは、睡眠から目覚めたヨオゼフ・Ｋが突然逮捕された「ある朝」のイメージと、そして、自らの内面に存在する怯えた「犬」は「犬のように」死んでいったヨオゼフと対比して捉え得るのである。

以上のように、日本におけるカフカの受容と比較してみても、かなり早い段階でカフカに本格的に接していった「荒地」派詩人の態度には、エリオットを「ジカ」に読んだ態度と同様なものがあると思われるのだが、同時に、カフカという小説家が、「荒地」派詩人たちの興味を引きつける大きな存在であったということができるであろう。[33]

32　三好豊一郎「『流刑地にて』」、前掲書、206頁。

33　鮎川信夫「翻訳詩の問題」、『鮎川信夫著作集』第５巻、166－67頁。

それでは次に、「荒地」派詩人がカフカのいかなる点に興味を示したのかということを、主にカフカの小説『審判』と鮎川の論文を手がかりにしながら考えていきたい。「荒地」派詩人のカフカに対する態度は、鮎川信夫の論文「カフカの世界」の冒頭の次のような部分から推測することができる。

ひとつの暗黒の時代、或いは社会の中で、極めて孤立した人間の一人としてカフカを見ることが出来る。事実、彼はあらゆる意味できわだって孤立していた。彼の文学のなまなましさは、彼の孤立のなまなましさであった。しかしながら、カフカの孤立は、自己の世界に対してのみ意味を持つといった偏狭なものではない。孤立することによって、却って普遍的になっているのは、彼が宗教的作家であったからである。先天的にして種族的である人間の不幸も、彼にあっては高い罪の意識にまで強められている。彼の作品が、直接には神を扱っていないからと言って、彼の作品を問題にしていく上に神を除外することは出来ない。彼がその文学的生涯の終りに於て、自己の作品を焼却するようにといったことは、彼の諸多の作品が神に触れていないことに対する不満からであったというふうにも解されているが、そのことは逆に彼の作品と神との関連を我々に強いる機縁となるものである。それだけ神を問題にした作家の作品が、神の問題に全然触れてこない筈はない。「自然のままなる具体的で力強い人生の高潮、退潮をそのまま感じながらも、同時に人生を虚無・夢としておぼろげに眺める」というラウレンチベルクの傾斜面に腰を下ろしたカフカの感慨には、彼の作品を最も端的に説明するものがある。しかし、彼がその生涯に於て、我々の前に提示した問題が其処にとどまっていたかどうか、それは我々自身の問題である。私は数少ないと言われる彼の作品についても、その殆んどは読んでいないし、僅かに戦争前に読んだ長編『審判』と五つか六つの短編、それに他の二、三の作品の梗概を知るに過ぎない。それだけの知識では、彼の世界を解明するのに勿論充分である筈はないのであるが、しかし私は不足であるとも思わない。何故ならば、私は貧弱な私の読書範囲の中ですら屡々現れると

ころの、ひとつの観念の＜反復＞しか問題にしようと思わないからである。私はラウレンチベルクの傾斜面に腰を下ろしているカフカを、『審判』の中のヨオゼフ・K のように追いつめることによって、自分自身を追いつめてみたいという誘惑に駆られる。[34]

鮎川信夫は上の引用文の中で、「ひとつの暗黒の時代、或いは社会の中で、極めて孤立した人間の一人」として、カフカを認識している。このような作品そのものからはいるのではなく、作家の実存的な生の側面から作品世界にアプローチするという仕方は、「荒地」派特有のものであると思われる。つまり、「荒地」派詩人にとってまず問題になるのは、作家や詩人が現実世界に於いていかなる経験をしたのか、そしてその経験からその作家独自のいかなる世界を開示していったのかということに関心があるわけであり、文学作品そのものの世界を孤立して考えると言うことはしなかったのである。先の章の「X への献辞」の考察に於いて明らかになったように、彼らにとって言葉とは、その言葉を紡ぎだすものの主体に大きく関わっているものであり、言葉が現実の作家の生といかなる関わりも持たないような作品世界にはなんら興味を示さないのである。

かくして、鮎川信夫と三好豊一郎が、カフカの作品『審判』に興味を持つのは、その作品がカフカの現実の経験に基づいて彼が開示しようとした世界であるということが前提になっていると思われる。そしてその開示された世界を読むことによって、「荒地」派詩人がそこに普遍的な世界を感じることから、彼らとカフカとの実存的なつながりがでてくることになる。

前に引用した部分で、鮎川信夫はカフカの孤立について述べているが、その作家カフカの孤立についてまず考察してみたい。フランツ・カフカは、「荒地」派詩人の言葉で言えば、「荒地」の時代に自らの生を生きなければならなかった作家である。第一次大戦という極限状況に於ける人間の絶望を経験し、さらに、第二次世界

34　鮎川信夫「カフカの世界」、『鮎川信夫著作集』第６巻、文明論　海外詩人論（東京、思潮社、1975年）、320-34（320-21）頁。

大戦の幻影が現実を圧迫しだした時代を生きた作家である。このような不安な時代に自己を集団というものに解消させずに、孤立の立場を保持したカフカの生の態度は、正に生きるということに対する不安そのものであったはずである。初期の作品から、人間を抑圧する理不尽な力に対して抵抗し、自由というものを求めてきたカフカであるが、その自由をカフカは現実から逃避した形の自らのやすらぎの場所としての作品世界へ言葉を向けることはなかった。カフカにとっては、そうした非現実な世界へ自由の問題を結びつけることよりも、より大きな問題として現実世界に於ける自由の問題、別な言葉で言えば、自己というものを外側から抑圧してくる力と自己の内側で求める自由との問題解決を彼は自らの作品の中で試みていたように思われる。この点に於いて、カフカにとって一番重要なことであるのは、カフカが生きる現実そのものであった思われる。しかし、このような現実に捕らわれれば捕らわれるほど、当時の現実はカフカの生になんらのやすらぎを与えるものではなかった。鮎川信夫は、カフカのそうした現実への眼差しについて次のように述べている。

> カフカが個体としての事物、人間を眺める時の眼は、異様に鋭敏であり、緻密であり、如何なる実存主義的リアリズムの筆法よりも現実的である。人生を虚無・夢としておぼろげに眺めるという彼の眼が、どんなリアリストの眼よりも的確に、自然のままなる具体的で力強い人生の高潮、退潮をそのままに把握しているのに、我々は驚かされる。[35]

現実を現実のまま見つめる眼が、そのままその現実の上に虚無と夢としての世界を見てしまう、このような点に、カフカの作品世界の独自性が現れていると鮎川は指摘している。決して視線を形而上学的なものに向けずに、現実のみを見つめる眼は、現実の中にいかなる秩序をも構築することはできない。カフカが『審判』の中で示したものは、そうした現実の中で生きる人間の絶望的な実存であり、永遠であ

35　前掲書、325頁。

るものから見放され、屈辱だけが生き残っていく人生なのである。カフカは、現実の中に様々に人間の生きる不安を探し出す。あるいは、逆に言えば、カフカの存在はそうした不安によって常に脅かされている。もしカフカのそうした不安が社会機構などの現実的な変革によって解消され得るものであるならば、あるいは、カフカが現実に感じた脅威が宗教的世界の価値によって取り去られるものであるのならば、カフカは自己の作品世界を不合理で虚無的な世界として提示することはなかったであろう。カフカの眼に映る不合理と矛盾に満ちた現実は、もとをただせば神と絶縁した世界のうちに人間が生きなければならないという「荒地」の時代に生きる人間の宿命から来るものである。人間が絶対的価値の存在しない世界に生きるとき、人間は現実の諸問題を人間自身の相対的な価値によって解決しようとする。しかし、そうした相対的な個々の価値が人間によって真実であると叫ばれ、その真実のもとにヒステリックな行動が伴うときには、人間の現実世界というものが不合理と矛盾に満ちてくるのは当然なことである。さらに、時間の制約のもとに生きる死の確定された人間にとって、絶対的価値の不在は人間世界の悲惨をより大きなものにしていく。そこにはなんら救いの問題を解決できる要因は存在していないのである。

カフカの『審判』におけるテーマは、現実に於ける絶対的な価値が不在することによって生じる人間世界の苦痛の様相である。相対的な価値が無秩序に存在する世界にあっては、人は他人を裁くことはできないはずである。いかなる審判の根拠をも人間は見出すことができないのである。しかしそのように審判に不確定な要素があろうとも、人間が告発されることは常に行われているのである。

『審判』の最初の部分は、主人公である銀行員ヨウゼフ・K が、ある朝、身に覚えのないことで告発され、彼が突然逮捕される場面からはじまる。ヨウゼフ・K にとって、逮捕そのものが不可解きわまりないことである。この最初の告発の場面でまず考えなければならないのは、このような不当逮捕が当然のこととして成り立ち得る根拠そのものであろう。つまり、ヨウゼフ・K が逮捕されるということは、あ

る掟に反したことにより罪を負ったからである。しかし、そのような掟が、現実世界にひとつではなく数多く存在したならばどうであろうか。カフカにとっての現実とはそうした掟がいくらでもある世界なのである。それ故に、ヨウゼフ・K は、自らの知らない掟を犯したことにより逮捕されるわけである。見知らぬ掟によって捕らわれたヨウゼフ・K は、なんとかして自己の無罪を、自分自身がなんら逮捕される根拠のないことを証明しようとする。しかし、ヨウゼフ・Kのそうした努力にも関わらず、彼は起訴され、裁判所の審問を受けることになる。審議が場末のアパートの一室で行われたり、とヨウゼフ・Kにとっては全く腑に落ちないことばかりが続く。弁護士を頼むが、その弁護士もいっこうに自分についての疑いをはらしはしない。こうしたヨウゼフ・Kにとっては全く理解不可能な審判の過程は、どうしておこるのであろうか。それは、前記したように、現実世界に於いて様々な相対的掟があることからおこるのである。ヨウゼフ・Kの知らない掟の周りには、ヨウゼフ・Kの知らない審判の制度があり、ヨウゼフ・Kの知らない罪が存在する。ある掟に於いては、全く罪にならぬことが別の掟では重罪となり、裁判所で裁かれる。このような状況の中で、ヨウゼフ・Kは捕らわれたのであるが、彼は人間の名に於いて、反抗を示そうとする。しかし結局のところは、最後には、ヨウゼフ・Kは死刑判決を下され、ナイフで刺されて死んでいくのである。

「荒地」派詩人が、カフカの『審判』に見たものは、現実に捕らわれた、現実から逃れられぬ強制に捕らわれた作家が、最後に試みようとしたカフカの生きることの苦痛である。「どうしてもそこから脱出することができぬような強迫観念に脅かされていたカフカにとって、現実というものはそこから脱出するような外部的なものではなく、カフカ自身の内部の癒されることのない大きな傷口」になっていたのである。[36]カフカが「荒地」派詩人に訴えたのは、カフカという存在と彼の小説

36　前掲書、329頁。

『審判』が、絶対的価値の存在しない世界、換言すれば「荒地」に生きる人間の悲惨を自らの運命として背負った姿を開示しているという点であると同時に、カフカの言葉が開示した世界、あるいは言葉自体が彼の生と強く結びついたものであるという点なのである。

（３）

第二次大戦後、現実には様々な改革への叫び声が上げられ、人々は戦中のような過酷な現実から逃れ得るものと楽観的に考えていた。戦後の開放的雰囲気の中、人々は自由を回復したものと信じ、再び現実を新しい世界として認識していくようになるのであるが、現実そのものの中にカフカと同様に絶対的な価値の不在を読みとる「荒地」派詩人にとって、現実というものは人間によって容易に改革され得るものではなく、容易にそこから逃避できるものでもなかった。彼らの耳には、新しく建てられる建物の音が、新しく建てられる牢獄の音に聞こえていたのである。カフカによって示された現実は、「荒地」派詩人に彼らの直面している現実のその暗さにさらに暗黒を注ぎ込むものであったが、その暗黒にある絶望を意識にすることによって、つまり、「現代は荒地である」と認識することによって、次に「荒地」派詩人たちが直面することになるのは、いかにその「荒地」に向かい合っていくかという、救いの問題と光の問題であった。個人を全体的なものの中に解消することによって、実存の不安を取り除くという傾向は、日本の社会には特徴的なことであるといえるかもしれないが、そうした中で「荒地」派詩人は、実存の孤立性を強調することによって、つまり主体を回復することによって、その実存が絶望状況にあることを認識し、孤立した自己の観点から、救いの問題を考えていくのである。

しかしながら、エリオットやカフカは、「荒地」派詩人に救いの問題を解決する方途を開示する存在ではなかった。このことに対する「荒地」派詩人たちの自覚を最も明らかに示しているのは、詩誌「荒地」の後記に書かれた次のような黒田三郎

の言葉であろう。

> 此の際改めて「荒地」について一言すれば「荒地」は T.S.Eliot の The Waste Land からとつた。エリオットの詩集の名前をそのまま我々の雑誌の名前にしたといふことは、しかし必ずしも詩人エリオットの伝統を継承するといふ意味に限られない。
>
> 「荒地」は、我々が我々自身を認識する年齢に達した時、既に我々は荒地にゐた、といふ程の意味である。「荒地」の主体を為す者は、年長の者で二十八、九歳、若い方は二十二、三歳である。即ち、戦争の中に育ち戦争に其の血と青春を費した世代である。そして、伝統の詩人エリオットが、第一次大戦後、詩集「荒地」を出すに当つて、イギリスの伝統の上に立つてゐたのにひきかえ、我々は何物をも持つてゐないのである。東洋の異教徒として、我々は何もかも同時に始めなければならない運命の下にある。[37]

ここに書かれた黒田三郎の言葉は、「荒地」派詩人の日本に於ける立場を明確に示している。つまり、「現代は荒地である」という認識の基に、荒地に相対する世界に、エリオットが伝統やカトリシズムを措定したのに対して、「荒地」派詩人は、「荒地」に対抗するものとして何物をも持っていなかったのである。ここにエリオットやカフカなどといった西欧の文学者たちの世界観を、自らの日本の風土における立場と思想を直視しながら、主体的に受容していった「荒地」派詩人の態度を窺うことができるのではないであろうか。そして、エリオットから現代意識を受け入れ、「個人」として現代に生きることの重要さを読みとった「荒地」派詩人は、次の段階において、自らの意識する「荒地」からの救いを求めて何らかの根拠を見出していこうとするのである。この時点において、彼らが向かっていったのが、T.E. ヒュームであるように思われる。

37　黒田三郎「The Waste Land」、「荒地」第１巻、第３号、48頁。

（４）T.E. ヒューム

戦後、「荒地」派詩人の中で、最初に　T.E.　ヒュームの著作に興味を示したのは、「荒地」の理念化に際して多くの詩論を戦後発表することになる鮎川信夫と、戦前から詩の人生的な意味や魂の問題を考えてきた三好豊一郎である。この二人は、第二次大戦後の数年間、互いに詩的関心を共有していたらしく、T.E. ヒュームやフランツ・カフカなどに関する諸論文を同じ雑誌の同じ号に掲載するということを行っている。T.E. ヒュームに関しての鮎川の論文、「『燼灰』のなかから」は、詩誌「純粋詩」の昭和22（1947）年11月号に発表された。同号には、三好豊一郎の T.E. ヒュームについての論考も掲載されている。三好豊一郎が「戦前すでに長谷川鉱平訳で"Speculations" が『ヒューマニズムと芸術哲学』と題して翻訳出版されて、私もそれを読んでいたからである。」[38]と述べているように、鮎川も翻訳作品を通して、　T.E. ヒュームの思想に触れたと思われる。ちなみに、三好が戦前に於いて読んだと思われるのは、戦時中、埴谷雄高と平野謙らとともに雑誌「構想」を発行し、哲学者谷川徹三にその才能を認められ、ヒューマニスティクな思考の哲学論、文芸評論を執筆することになる長谷川鉱平が、昭和11年10月に芝書店から刊行した翻訳書『芸術とヒューマニズム』であると思われる。その『芸術とヒューマニズム』は、終戦後、昭和28年に『ヒューマニズムと芸術哲学』として宝文館から再版され、昭和42年には、全面的に改訳した翻訳版が『ヒュマニズムと芸術の哲

38　三好豊一郎「編集ノート」、鮎川信夫『鮎川信夫著作集』第５巻、文学論　芸術論、399-405（399）頁。

学』として法政大学出版局から出版されている。[39]

「T.E. ヒュームの精神」という副題の付いた鮎川信夫の「『燼灰』のなかから」の最初の部分で、鮎川はこの論文を書いた意図を次のように明らかにしている。

> ある憂鬱なこころによって、人間の存在のもろさと、不安定な基盤をむき出しにしてみせた『燼灰』を彼に書かせた動機は何であったろうか。実のところ、この動機をさぐる以外には、今更彼の古い断片をひっかき廻す興味はない。第一次大戦で若くして戦没したヒュームへの共感を語ることが、第二次大戦に生きのこったぼくにとって何らかの意味を持ち得るとすれば、この動機を説明することにつきるのである。[40]

上の引用文から、鮎川がこの論文を書いた意図には、 T.E. ヒュームの思想のみならずヒュームへ共感する態度があることがわかる。そうした『燼灰』をヒュームに書かせた動機を探ることによって、鮎川は、ヒュームへの共感を語ろうとしている。鮎川信夫が T.E. ヒュームの作品に惹きつけられた動機を探るためには、やはりまず、 T.E. ヒュームの生きた時代とヒュームが直面した問題について明らかにしておく必要があるであろう。

T.E. ヒュームは、1883年9月、イングランドの中部、ノース・スタッフォードシャーに生まれた。幼少の時代から学業は優秀で、1902年にはケンブリッジ大学のセント・ジョーンズ・カレッジに入学している。大学に入るとヒュームは哲学を学びたかったが、家族のものの反対を受け、徐々に大学生活を放棄しだすことになる。1904年には、悪友と共に不名誉な事件を起こし、大学生活２年にして放校処

39　本論文で参照したT.E.ヒュームの邦訳は、昭和42年出版のものである。
T.E. ヒューム、長谷川鑛平訳『ヒュマニズムと芸術の哲学』（東京、法政大学出版局、1967年）。

40　鮎川信夫「『燼灰』のなかから－T.E. ヒュームの精神－」、『鮎川信夫著作集』第５巻、文学論芸術論、10-27（10-11）頁。

分にされる。しかしその後も哲学の勉強は続ける。このころのヒュームの特質として注目したいのは、彼の debunker 的特質である。[41] 'debunk' とは、「でたらめ、たわごと」（bunk）を剥ぐという意味から、「名士・制度・慣習などの正体を暴露する」、「仮面を剥ぐ」、「学説などの虚偽を暴く」などの意味を持つ言葉である。つまり、このころからヒュームには人間の裏側や思想の背景にあるものを直視するといった特質があった。この特質は、彼の人間生活において負の面で働くことのほうが多かったが、自らの哲学的思想を構築するためには、重要な役割を担ったと思われる。

T.E. ヒュームの著作 *Speclations* は、1924年にハーバート・リード（Herbert Read）がヒュームの夥しい数の遺稿をもとに編集し、'Essays on Humanism and the Philosophy of Art'（「ヒューマニズムと芸術哲学に関するエッセイ」）という副題を付けて出版したものである。ヒュームの生存中に公刊された彼の業績を整理して置くならば、1913年におけるベルグソン（Henri Bergson, 1859-1941）の *Introduction à la Métaphysigue*（『形而上学序論』）の翻訳、1916年のソレル（Georges Sorel, 1847-1922）の *Réflexions sur la violence*（『暴力論』）の翻訳のみである。しかし、この二冊の翻訳書の他に、1915年、エズラ・パウンド（Ezra Pound, 1885-1972）の *Ripostes*（『弁駁』）の付録として *The Complete Poetical Warks of T.E. Hulme*（『T.E. ヒュームの全詩作』）の表題のもとに、ヒュームの5篇の詩作品が掲載されている。また、新聞雑誌類にも数多くの種類の論文を寄稿していた。そうした寄稿論文や夥しい数のノートを整理し、ハーバート・リードは、6編の論文を再構成した。その6編の論文とは、'Humanism and the Religious Attitude'（「ヒューマニズムと宗教的態度」）、'Modern Art and

41　T.E. ヒュームの経歴については、T.E. ヒューム、野口啓祐編注『Humanism and the Religious Attitude－ヒューマニズム－』（東京、北星堂書店、1963年）の巻末に付された年表を参照した。

Its Philosophy'（「現代芸術とその哲学」）、'Romanticism and Classicism'（「ロマン主義と古典主義」）、'Bergson's Theory of Art'（「ベルグソンの芸術論」）、'The Philosophy of Intensive Manifolds'（「内包的に多様なるものの哲学」）、'Cinders: A New Weltanschauung'（「燼灰－新しき世界－」）である。*Speclations* には、その主要な6論文の他に、付論としてソレルの『暴力論』に言及した 'Reflections on Violence'（「暴力論」）、'Plan for a Work on Modern Theories of Art'（「近代芸術理論に関する一書のプラン」）、'The Complete Poetical Works of T.E.Hulme'（「T.E. ヒュームの全詩作」）の三つのものが付されている。このような著作の中で、鮎川信夫が最も関心を寄せたのは、「ヒューマニズムと宗教的態度」と「燼灰」の二つの主要論文であると考えられる。

鮎川の評論「『燼灰』なかから」のタイトルにも含まれる「燼灰」は、「新しき世界観のスケッチ」という副題が付された、ヒュームの世界観が断片的に書き記されたもので、鮎川はその世界観に対する共感をその評論の中でしばしば言及する前者の論文「ヒューマニズムと宗教的態度」の方からアプローチし、ヒュームの共感をこの評論の中で語ろうとしているので、ここでは、ヒュームの論文「ヒューマニズムと宗教的態度」に焦点を絞り言及していきたい。

「ヒューマニズムと宗教的態度」は、第一次大戦中にヒュームによって書かれた論文である。1914年7月に第一次大戦がヨーロッパで勃発すると、ヒュームは直ちに一平卒として入隊、同年12月には、ベルギーのフランダース、さらにはフランスの戦線に赴くことになるが、1915年4月に、彼は肩に貫通重傷を受け、本国のイギリスに送還されることになる。以後、1916年3月に英国海軍砲兵隊に士官として入隊するまで、ロンドンに滞在する。再入隊後、ヒュームはベルギー戦線に出動し、1917年9月にベルギーの戦線で戦死することになる。そのロンドンでの滞在の間に、ヒュームは、論文「ヒューマニズムと芸術的態度」にまとめられる原稿を 'A

Notebook by T.E.H.'（「T.E.H.のノートブック」）という題で、ヒュームの論文の中心的な発表の場となった雑誌 *The New Age* に発表している。ヒュームの論文としては比較的長いこの論文は、自らが第一次大戦という戦火を経験した後に書かれた論文として、第二次大戦を経た鮎川の精神に何らかの共鳴するものがあったのではないかと推測できる。

論文「ヒュマニズムと宗教的態度」は、次のような7つの部分から構成されている。

① 'A Method'（「一つの方法」）

② 'A Critique of Satisfaction'（「満足の批判」）

③ 'False Categories'（「疑似カテゴリー」）

④ 'History'（「歴史」）

⑤ 'Neo-Realism'（「新実在論」）

⑥ 'A Programme'（「一つの草案」）

⑦ 'The Religious Attitude'（「宗教的態度」）

その最初の部分である「一つの方法」は、ヒューム自身の哲学的な思索の方法と彼の思想の根本原理を説明している箇所であり、ヒュームの思想を考える上で最も重要な部分であると思われる。

ここでまずヒュームは、19世紀の主要な思索的業績のひとつとして「連続の原理」（'the principle of continuity'）を念入りに作り上げ、それを一般的に、広範囲にわたって応用したことを挙げ、それを打破することが当時の最も差し迫った要請であると考えている。[42] この「連続の原理」を、ヒュームは、「実在」（'reality'）に関わる自らのモデルを提示することによって、19世紀の思潮の底流に存在した

42　T.E. Hulme, 'Humanism and the Religious Attitude', *Speculations: Essays on Humanism and the Philosophy of Art*, 2nd ed., ed. Herbert Read (London: Routledge & Kegan Paul, 1936), pp.1-71 (p.3).

「連続の原理」を説明しようとする。このヒュームのモデルに対しては、鮎川も関心を示していたらしく、彼はヒュームの言葉を援用しながら、論文「『燼灰』のなかから」において、次のように解説している。

> ヒュームは実在の領域を分類して、（一）数学的・物理的科学が対象とする無機的世界、（二）生物学・心理学及び歴史によってとりあつかわれる有機的生命の世界、（三）倫理的・宗教的価値の世界、にわけて考えた。そして、このうち（一）と（三）は絶対的性格を持つものであり、それに反して（二）の生命の領域は、元来相対的なものであって、これをとりあつかう科学も生物学とか心理学、歴史学などのように、相対的な性格をもつものであるとした。[43]

ヒュームの３つの実在の領域は[44]、上記の引用文で鮎川によって解説されている通りなのであるが、さらにこれを分かりやすくするためにヒュームは、幾何学的な性格をその３つの領域に与えている。つまり、ヒュームは、それらの３つの領域を、同一平面上に２つの同心円を描くことによって区画される３つの区域に当てはめる。その一番外側の領域を「数学的・物理学的科学が対象とする無機的世界」('the inorganic world, of mathematical and physical science' ）とし、中間の領域を「生物学・心理学及び歴史によって取り扱われる有機的世界」（'the organic world, dealt with by biology, psychology and history' ）、ならびに、一番中心の区域を「宗教的・倫理的価値の世界」（ 'the world of ethical and religious values'）としている。[45]　実在を三つに分けるというヒュームの考え方に関して、秩序を３つに分けたパスカルの考え方の導入が一般的に指摘されるところであるが、その３つの

43　鮎川信夫「『燼灰』のなかから－T.E. ヒュームの精神－」、『鮎川信夫著作集』第５巻、14頁。

44　「３つの実在の領域」については、'Humanism and the Religious Attitude', *Speculations*, p.5 において説明されている。

45　前掲書、p.5-6.

秩序の内容そのものはパスカルとは異なったものである。[46]

ヒュームはこの３つの世界を、絶対的に交流不可能な世界として認識している。つまり、モデルの同心円の円そのものが大きな「亀裂」（'chasm'）を為しており、そこを連続させるような架け橋はないものと考えている。[47]　このようなヒュームの世界観に照らし合わせるならば、19世紀における哲学の動向は、それらの絶対的な区分にあたかも橋が架けられると思い抱いた点に特徴がある。ヒュームが19世紀において特徴的であると見た「連続の原理」とは、そのように三つの領域を交流可能だとすることによって、各々の諸領域にある性格を混同することにあった。それを具体的に言えば、人間の領域、つまり第２の領域に物理学や数学の厳密さなど第３の領域の特質を取り込むことによって生じる唯物論的、機械論的人間観、あるいは、神の世界（第３の領域）を人間のもと（第２の領域）に引き下ろしたロマン主義的な人間観など、19世紀における特に人間に対する考え方は、人間の領域（第２の領域）を中心にしたその内側（第３の領域）と外側の世界（第１の領域）の混同にあるといってよい。

しかし、ヒュームはこのような混同に対して大きな拒絶を示す。というのも、人間は神でもなければ、機械でもないからである。そうした人間に対する厳密な眼は、人間の世界そのものを冷静に見る視線から来るものであると思われる。

一方、ヒュームは、19世紀中庸における「連続の原理」に基づいた思想に対しては反駁するが、19世紀末に興ったベルグソンやニーチェ（Friedrich　Nietzsche, 1844-1900）やディルタイ（Wilhelm Dilthey, 1883-1911）などのに顕著に見られる思想的動向に対しては少しそれとは異なった見解をもっている。人間というものを微視的に、解剖学的に解体して、外側から捉えようとする唯物論的方法（第１の

46　パスカルは、『パンセ』の第460章と第793章で「三つの秩序」のことについて言及している。前田陽一責任編集『パスカル』、中公バックス　世界の名著29　（東京、中央公論社、1978年）、248-49頁（第460章）、395-96頁（第793章）。

47　T.E. Hulme, 'Humanism and the Religious Attitude', *Speculations*, p.6.

領域における方法）に対する反駁として、人間の内部を直観的に感得し、生の本質を捉えようとした「生の哲学」の運動について、ヒュームは物理学の領域と人間の領域の間にある「絶対的な裂け目」（'an *absolute* division'）、すなわちそこにある「非連続」（'discontinuity'）を認めたと考えている。[48] それは、ヒュームにとっては、19世紀中庸に陥った混沌とした思索状況から大きく外へ出る一歩であると見えたのだが、しかしその「生の哲学」もまだ人間の領域と神の領域の間の絶対的な裂け目を認識していないとヒュームは考える。[49] ここで興味深いのは、ヒュームがその「生の哲学」がなぜ「第二の絶対的な裂け目」すなわち、第３の領域と第２の領域にある亀裂を認めなかったのかということを論じている部分である。

So far so good. But the same movement that recognises the existence of the first absolute chasm (between the physical and the vital), proceeds to ignore the second, that between biology and the ethical, religious values. Having made this immense step away from materialism, it believes itself adequately equipped for a statement of all the *ideal* values. It does not distinguish different levels of the non-material. All that is non-material, must it thinks be *vital*. The momentum of its escape from mechanism carries it on to the attempt to restate the whole of religion in terms of vitalism. This is ridiculous. Biology is not theology, nor can God be defined in terms of "life" or "progress." Modernism entirely misunderstands the nature of religion. But the last twenty years have produced masses of writing on this basis, and in as far as thought to-day is not materialistic, it tends to be exclusively of this kind.

It is easy to understand why the absolute division between the inorganic

48　前掲書、p.7.

49　前掲書、p.7.

and the organic is so much more easily recognised than the second division. For the first falls easily into line with humanism, while the second breaks the whole Renaissance tradition.[50]

これまではそれでよかった。しかし、第１の絶対的な裂け目を認めたはずのこの同じ運動［１９世紀末に興った運動］が、その先に議論を進めるに当たって、第２の絶対的な裂け目、つまり、生物学と倫理的・宗教的価値との間にある裂け目を無視してしまったのである。この運動は、唯物論から離れる大きな一歩を踏み出したが、しかしながら、それ故に、自らが、あらゆる「観念的な」価値について記述するだけの準備が十分あるものと思い込んでしまったのである。それは、非物質的なものに、異なったレベルのあることを区別しようとはしない。それは、非物質的なものはすべて「生命的なもの」でなければならないと考える。機械論から逃れ出た弾みが、それを、生気論の用語で宗教全体と言い換えようとする試みへと導くのである。しかし、これはばかげている。生物学は神学ではないし、神は「生命」または「進歩」という用語で定義できるものではないのである。この点においてモダニズムは宗教の本質を誤解しているのである。しかし、最近の２０年間には、この基盤に基づいて多くの著作が書かれてきた。そして、今日の思想は、唯物論的でない限りは、もっぱらこの種のものとなる傾向があるのである。

なぜ無機的なものと有機的なものとの絶対的な区別が、第２の区別に比べてずっと容易に認められるかを理解することは簡単である。というのは、第１の区別はヒューマニズムとは容易に一致するのに対して、第２の区別は、ルネサンスの全伝統を破壊することになるからである。

19世紀に興った思想的動向は、無機質的なものと生命的なものとの間に、はっきり

50　前掲書、 pp.7-8.

とした区分を設けたにもかかわらず、宗教的なものを宗教的なものとしてのみ認めず、生命的なものとして言い換えようとする。このような混同がおこる背景に、ヒュームはルネサンス以降の人間中心的なヒューマニズムの立場を看取するのである。

周知のように、ルネサンスは中世の教会からの解放だけではなく、人間そのものの能力に対する解放であった。ルネサンス以前は、神の世界と生命の世界は完全に分離していた。そこには人間が越えられない裂け目があり、人間は神の領域へは決していくことが不可能であった。しかし、ルネサンスは人間の能力を全面にだすことによって、その絶対的な裂け目を連続しているものとして考え始めた。この「第２の裂け目」を連続したものであると考えた点に、ルネサンスの一つの成果があるのであるが、しかし、それは逆に人間の能力に対する過信とその能力の乱用に結びついていくことになる。このように考えると、ヒュームの言う第２の裂け目、つまり、生命の世界と神の世界との間にある断絶を認めることは、ルネサンス以前への考え方に逆戻りすることになり、そうした逆戻りに対して、19世紀末の思想的運動は反発を示したのであった。

それに対しヒュームは、ハーバート・リードが言うように、ルネサンス前の哲学の復興を唱えたのであった。[51]　つまり、ヒュームは物質世界と人間世界の分離を認めた19世紀末の「生の哲学」の延長線上に立って、生命の領域と神の領域との分離をさらに認めることによって、三つの領域を絶対的に分離したものとして認識しようとしたのである。何故ヒュームが19世紀において連続していた絶対の世界を、生命の世界とはバラバラなものとして認識しようとしたのかということについては、当時のヨーロッパの状況を考えてみれば理解できるかもしれない。

人間を肯定的に見ることから始まった人間中心的な考え方は、文明を発達させ、科学の進歩を促し、新しい世界をつくり出してきた。戦争の恐怖、機械の発達、階

51　前掲書、Herbert Read, 'Introduction', p. xiv.

級の不平等、集団の圧力など、現代社会を圧迫している要因は、もとはといえば、人間の能力の乱用を許すこと、さらには神の完全性を人格の中にもってくるということから生じてきている。問題は、そうした現代の諸々の悪を人間自身が解決できないでいるという状況が続いているということであり、そしてそれが戦争という巨大な装置によって、さらにその諸悪を悪化させることしかできないということである。このような背景において、ヒュームは人間そのものについての見解を訂正しようとする。近代の不安と危機の意識から生じたヒュームの思想は、第一次大戦を通しての経験から得たものであろう。そして、そうした危機の中からヒュームは人間そのものの脆弱さを自覚することによって、別な言い方をすれば、畏怖の念をもつことによって今まで人間の世界の中で消失していった絶対的な倫理的価値を現出しようとしたのである。

鮎川信夫は、ヒュームの思想の最も根本的な思想として、ルネサンス以降のヒューマニズムに対する不信の態度を挙げ、その態度の背後にヒュームの文明批判的な見解を読みとっている。

> ヒュームの思想の最も根本的な特質は、ルネサンス以降のヒューマニズムに対する不信の態度にある。彼は『ヒューマニズムと宗教的態度』のなかで、西欧ヒューマニズムの伝統が崩壊しつつあることを告げているが、彼によればルネサンス以降の世界観は、うわべはいかに多様に見えても、底を割ってみれば同じヒューマニズムの原理に帰着するものである。こうしたヒュームの仮定は、いかにも大雑把な印象を与えるかも知れないが、ヒューマニズムに対する外からの批判として、ひとつの真実を含んでいることは見逃せない。いわば、内からの批判によってはどうしても解決し得ないヒューマニズムの矛盾を外から衝くことによって、近代文明批判にひとつの視野を開こうとするものである。[52]

52　鮎川信夫「『燼灰』のなかから－T.E. ヒュームの精神－」、『鮎川信夫著作集』第５巻、35頁。

第一次大戦と第二次大戦という20世紀における最大の大戦をそれぞれ経験した二人が、人間に対して肯定的な見方をすることができないのは当然であるかもしれない。人間自らが造り上げた近代文明の矛盾を解決する能力を持たずに、ある種の戦いによって強引にその解決を引き延ばすやり方には何の人間の希望も見られない。さらには、科学を発達させた結果、ついには原子爆弾を作るに至った人間の能力に対して、人間能力の乱用を読みとるのは容易に理解できる。こうした人間の状況を目の当たりにしながら、鮎川はヒュームが唱えたルネサンス以降のヒューマニズムの根底にある人間中心的な態度に対する不信に共感したものと思われる。ここで重要なことは、鮎川のこの共感は、ヒュームがモデルによって示した生命の世界が物質的世界とも神の世界とも完全に分離された混沌とした世界である、という考えへの共感でもあるということである。そして、それが第二次大戦後、すでに獲得していた「現代は荒地である」という「荒地」派詩人の現代意識と交差した場合、「荒地」派詩人にとって、人間が生きている現代とは、科学にも頼ることの出来ない、人間の能力にも期待をもてない暗澹とした世界になることは明らかである。当然、こうした状況で考えられるのは、例えば、ヒュームを読むことによって、「荒地」を認識し絶対的な宗教的価値をカトリシズムや伝統の回復に求めていったT.S.エリオットの方向が見いだせるが、「荒地」派詩人が自ら認めている通り、宗教的基盤も伝統も何もない戦後の日本にとっていかなる方途で、彼らは自らを救う絶対的な価値を見出したらよいのであろうか。この点を考える上で、次のヒュームの文章で説明されている「宗教的態度」についての考えは大きな示唆を与えてくれると思われる。

The effect of this necessary *preparation* is to force the mind back on the centre, by the closing of all the roads *on* the plane. No "meaning" can be given to the existing world, such as philosophers are accustomed to give in their last chapters. To each conclusion one asks, "In what way is that *satisfying*?" The mind is forced back along every line in the plane, back on

the centre. What is the result ? To continue the rather comic metaphor, we may say the result is that which follows the snake eating its own tail, an *infinite* straight line *perpendicular* to the plane.

In other words, you get the religious attitude; where things are separated which ought to be separated, and Perfection is not illegitimately introduced on the plane of human things.

It is the closing of all the roads, this realisation of the *tragic* significance of life, which makes it legitimate to call all other attitudes shallow. Such a realisation has formed the basis of all the great religions, and is most conveniently remembered by the symbol of the *wheel*. This symbol of the futility of existence is absolutely lost to the modern world, nor can it be recovered without great difficulty.[53]

この必要不可欠な「準備」の効用は、平面の「上に」あるすべての進路を閉ざすことによって、精神を無理にも中心に押し戻すことにある。現存する世界には、哲学者たちがその最終章においていつも与えているような「意味」は、いかなるものでも与えることはできないのである。それぞれの結論に、「どの点において、それは満足を与えているのか」と問う。精神は、平面にあるすべての路線に沿って中心に押し戻される。その結果、どうなるか。むしろ滑稽なメタファーで説明を続けるならば、その結果は、自らの尾を噛む蛇のメタファーに続くところのもの、すなわち、その平面に「垂直な」「無限の」直線ということになると言えよう。

換言すれば、宗教的態度に達するのである。そこでは、別々にあるべき事柄は、別々に存在するのであり、「完全性」は、人間的事柄の平面には間違っても導き入れられることはない。

すべての路線を閉ざすこと、生の「悲劇的な」意味を理解することこそが、

53 T.E. Hulme, 'Humanism and the Religious Attitude', *Speculations*, p.34.

他のあらゆる態度を浅薄なものと呼ぶことを正当化させるのである。このような認識があらゆる偉大な宗教の基盤を形成してきたものであり、それは、「車輪」という象徴によって、最も便宜的に記憶されているものである。存在の空虚さを示すこのシンボルは、現代世界では完全に失われている。それを回復することは、容易なことではできない。

ここでヒュームが説明していることは、何らかの権威的な宗教でなくても、絶対的な価値を求めることが出来る方途であると思われる。それは宗教が生まれる前の人間の態度であると言うことができる。そして、その態度には、「生の悲劇的意味」を体得することによってはじめて達することができるとヒュームは説明している。このことを「荒地」派詩人に当てはめて考えると、彼らが「荒地」に生きていることの悲劇的意義を自覚することによって、彼らには、ひとつの道が開かれると考えられる。そして、その開かれた道の果てに、詩によって、あるいは芸術によって結びつけられる絶対的な価値の存在する詩的世界というものを想定したのではないであろうか。このように考えると、「Xへの献辞」で言及されている「無名にして共同なる世界」とは、まさに「一つの中心」から「飛躍によって」「必然的に到達する世界」であると考えることができるであろう。[54]

54　「Xへの献辞」、1951年版『荒地詩集』、2-9頁。

第４章

鮎川信夫の詩的精神と詩的世界の形成

第４章第１節

鮎川信夫の＜読み＞の行為

－「＜書くこととしての読み＞の行為」について－

第３章第３節では、「荒地」派詩人が西欧文学作品を読むことによって享受した最初の思想を、如何に彼らの「詩を書く」行為と結びついた一つの思想に変換していったのかという問題、別の言い方をすれば、「荒地」派詩人がどのようにして日本の詩的風土の中で外部としてのヨーロッパを主体的に取り入れ、その文学的及び詩的価値、さらには詩意識や現代意識を内面化し、自らの書く行為の基盤を形成していったのかという問題を、特に「荒地」派詩人たちが戦前および戦後に熱心に読んだ西欧の文学者、T.S. エリオット、T.E. ヒューム、フランツ・カフカなどの著作を中心に検討してきたが、「『荒地』派詩人による詩的行為の全体性の回復」と題する第４章では、そうした「荒地」派詩人の西欧文学作品を読むという行為の根底にある詩の行為の全体性についての問題を、具体的に鮎川信夫の詩の認識、特に「詩を読むこと」についての認識を中心にしながら考察する。

戦後における「荒地」派詩人の詩的活動の根底には、彼らが第二次大戦という戦争体験を通じて自らのものにしていった、詩人は自己の純粋な信条に基づいて主体的に詩の「ことば」を紡ぎ出さなければならない、という詩人の主体性に関わる先鋭な詩の認識が確固たるものとして存在していた。第２章第２節で議論したモダニズム詩批判にしても、第２章第３節で扱った『死の灰詩集』論争においても、そこで「荒地」派詩人が批判したのは、詩人が自己の本当の信条や思想を軽視し、あるいは空白化させて、自己の外側に存在する外部の理念を非主体的に自己の内部に取り入れ、それに基づいて詩的行為を行うということであった。「荒地」派詩人が獲得した、自らの生の純粋な信条を中心に詩の「ことば」を紡ぎ出していこうとする

＜詩を書く＞行為に対する認識は、第３章第３節で考察した「荒地」派詩人の＜詩を読む＞行為にも関わってくるものであった。「荒地」派詩人によってなされた、T.S.エリオット、T.E.ヒューム、フランツ・カフカなどの「ことば」を自己の純粋な信条で主体的に受け取り、その「ことば」にかけられた解釈を重視せずに「ことば」そのものに接するという＜読みの行為＞は、その「ことば」を通して、それを創出した作者の思想へと近づきながら、その「ことば」とそれを受け取る読者との主体的な関係を基盤とする行為であると言うことができる。そして、第一次大戦後のヨーロッパの文学作品をこのように主体的に読むことによって「荒地」派詩人が受け取ったものを、彼らは自己の中で内面化し、血肉化し、第３章第１節で検討したような彼等自身の詩的言語観を構築した。さらには、自己の詩の理念であるその言語観に基づいて戦後の詩作行為を行い、自らの詩の「ことば」を紡ぎ出すことになった。このように現在を生きている「自己」を中心に形成される、＜読みの行為＞から＜書く行為＞へとつながっていく「ことば」にかかわる行為の連関は、「荒地」派詩人の詩的活動の特徴を示すものであると言うことができる。

「荒地」派詩人の詩的活動が具体的に示している詩の行為の有する全体性は、客観的に詩を認識する立場とも、解釈学的に詩を認識する立場とも異なるものであり、それは、1970年代以降に、詩学の学問領域において提出されてきた問題意識、特にフランスの詩学の第一人者であるアンリ・メショニック(Henri Meschonnic: 1932-)の提示した視座によって明確に捉えることができると思われる。

鮎川信夫の西欧文学作品を読むという「読みの行為」は、フランスにおける詩学アンリ・メショニックのことばを用いて説明するならば、「ひとつのテクストを既存の諸範疇に還元するような読みの行為」（'la lecture qui ramène un texte à des catégories préexistantes'）、すなわち「文学としての読み（読むこと＝文学）」（'la *lecture-littérature*'）ではなく、それは「対象とするテクストのなかで、かつ

それによって、不連続に存在する最初の思想を書くことの働きから得られる統一性をもったひとつの思想に変換することをめざす読みの行為」（'la lecture qui vise à transformer dans et par les textes la pensée d'entrée discontinue en une pensée de l'unité prise au fonctionnement de l'écriture'）である、「書くこととしての読み（読むこと＝書くこと）」（'la *lecture-écriture*'）というメショニックの概念に相当する「読み」の行為であると考えることができる。[1]　このような観点から考えると、鮎川の読みの行為は、詩を書くという鮎川の具体的な行為に連続していく読みの行為であり、それ故に、鮎川の読みの行為は彼の詩を書くという行為から切り離して考えることはできない性格を持っているということになる。こうした鮎川の読みの行為は、詩あるいは詩の行為の全体性の観点を含んでいる側面に於いて、「荒地」派詩人に対する評価として広く論じられているところの詩の「意味の回復」という論点に通じるものであると言えよう。

戦前からのモダニズム詩運動の隆盛に重要な役割を担った春山行夫は、その著作『詩の研究』の中で、「意味のない詩を書くことによつてポエジイの純粋は実験される。詩に意味を見ること、それは詩に文学をみることにすぎない。」[2]、或いは「ポエジイは方法の発明であり、文学はその応用である」[3]と述べるが、この言葉の中に象徴されているモダニスム詩人が考える詩の在り方に対して、「荒地」派詩人たちは、詩の全体性を捉えることのできる視座を獲得することによって、「意味の回復」を試みたと思われる。詩のことばの意味の回復は、詩のことばが自らの生や経験と深く結びついたものであるという認識に基づいて、「荒地」派詩人によって為されるのであるが、こうした自己の生や経験を中心に詩を認識しようとする態度は、詩を読むという行為や詩を書くという行為など、詩の行為の持っている全体

1　Henri Meschonnic, *Pour la poétique* (Paris: Gallimard, 1970), pp.176-77.

2　春山行夫『詩の研究』、現代の芸術と批評叢書20　（東京、厚生閣書店、1931）、199頁。

3　前掲書、160頁。

性を、詩を書く主体である詩人を中心にして回復することが可能な視座を含んでいる。

ここでは、鮎川の読みの行為が詩を書くという行為に結びつく「書くこととしての読み」であり、このような特徴をもつ読みの行為が詩の全体性の回復につながっていくものであるということを、アンリ・メショニックの主要な詩学の概念を用いながら鮎川自身の詩論を通して論証していきたい。

まずは、この節の理論的基盤となるアンリ・メショニックについて簡単に触れておこう。ユダヤ系フランス人であるアンリ・メショニックは、フランスにおいて1960年代から活躍し始めた文学研究家であると同時に、1972年刊行の *Dedicaces proverbes- poemes*（『献辞・ことわざ』）と題する詩集以来、数冊の詩集を出版している詩人でもある。文学研究家としてのメショニックの研究領域は、聖書学、記号学、詩学など、広範な範囲に及んでおり、精力的な執筆活動を続けている。日本に於いては、メショニックの名前は、1960年代からその領域の研究者などには知られていたようであるが、彼の著書がより広く読まれるようになったのは、1970年にフランスで出版されたメショニックの著作 *Pour la Poetique* が『詩学批判－詩の認識のために』[4]と題して、日本で1982年に翻訳出版されたことによると言ってよいであろう。この *Pour la Poetique* は、メショニックの詩学者としての地位を確立すると同時に、彼のその後の、詩あるいは人間の言語行為の認識に関する一連の論考にとっても重要な位置を占める著作であると言える。メショニックが詩の理論的著作を書いた背景には、従来の詩に対する考え方、特に当時盛んであった構造主義的な詩学へのメショニック自身の反駁と憤りが存在している。メショニックは、 *Pour la Poetique* において、構造主義的な詩学を代表する著書であるジャン・コーエン（J. Cohen）の *Structure du langage poétique*（『詩的言語の構

4　アンリ・メショニック、竹中信夫訳『詩学批判－詩の認識のために－』（東京、未来社、1982年）。なお、本論文において、特にメショニックの経歴については、同書を参照した。

造』）をしばしば引きながら、構造主義的な詩学とそのような詩学のもたらす危機的状況を論じ、それら既存の詩の認識に逆らい、或いはそれを乗り越えるかたちで自らの独自の理論を提示していくのである。ここで簡単にメショニックが自らの独自の理論を提示した時代における西欧の詩の認識動向について触れておく必要があるであろう。

文学研究という分野は、1920年以降ようやくひとつの学問として自立し始めたことは周知の通りである。人間の様々な側面を対象とした諸学問、例えば、人間の心理を対象とした心理学、人間の社会を対象とした社会学、人間の生物としての機能を追求した生物学、などの人間を対象とした諸学問は、20世紀初頭の物理・化学の分野の進展に影響され、出現した学問領域である。文学における研究も同様に出現したといっても過言ではない。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、心理学や社会学においてその学問の対象というものが限定され、科学的に分析されていったのに対し、文学研究の領域においては、相変わらず印象批評や実証主義批評、社会学批評など、文学作品を文学以外の要素に還元する単なる素材として扱う方法論が支配的であった。1920年代になって、ようやくそうした文学の混沌とした研究状態に対して、ロシアの若い研究家たち、すなわち、シクロフスキー（Vladimir Sklovskij, 1893-1984）、ヤコブソン（Roman Jakobson, 1896-1982）を始めとするロシアフォルマリストたちが異議を唱え、文学の学問としての自律性を主張した。彼らは、まず文学研究の明確なる対象をテクストに限定し、テクストを創造する主体、テクストを解釈する主体など、あらゆるコンテクストを切り離した上で、芸術テクストは研究されるべきであるとした。「異化」（'ostranenie'）や「詩的言語」（'langage poétique'）などの概念を生み出しながら、「文学の内的な法則」、「自立した文学の科学」を樹立することを目的、課題とし、主に詩や散文の形式面の分析に力を注ぎ、数々の優れた業績を上げ、その後、1950年代に始まる構造主義運動にも大きな影響を与え

た。

文学者が文学というテクストを対象にし、それを客観的に微視的に分析していくという研究方法は、確かに科学的であると言うことができる。しかし、その科学性は、作家の現実と経験からテクストを完全に切り離すことによって、確立される。こうした傾向は、確かに19世紀に起こった実証科学的なテクスト分析の反駁から起こったのであり、さらにその客観性というものは19世紀末の印象批評がもたらした、テクスト解釈の主観性に反駁する点で、前時代的な文学傾向を乗り越えようとしたものであった。文学が学問として自立するためには、確かにその対象を限定しなければならない。その限定によって、多くのことが解明されたことも確かである。しかしそれは、作家が創りだした結果物のみを対象とするという点で、作家の創作行為に焦点を絞ろうとする詩学の領域を考慮に入れていない。文学研究が定義する「詩」とは、テクストから客観的に抽象されうる諸側面であり、その諸側面が作家の書く行為に影響を与えていた時点では、文学と詩学の接点はあり得た。しかし文学がさらに抽象化を行い、「詩」というものを厳密に定義し始め、テクストから得られた客観性が書く行為を行う主体に強制的な束縛を与えることになってくると、詩学は文学から離れて行かざるを得なかった。このような傾向は1960年代に起こった構造主義詩学に現れた傾向である。そこでは、詩は理論家の「詩」に適合しないものは詩ではないとされる。そこで詩人は理論的束縛を受けることになる。

メショニックは、この状況に対して、書く側の自由というものを大きく主張したのであり、文学の行き過ぎた客観的傾向を批判することによって、詩を書くことに含まれる人間そのものの行為を捉ええる理論的基盤を提出しようとしたのであった。このような考えは、メショニックの理論の提示の仕方に特徴的に現れている。メショニックは理論を自らの実践とは決して切り離さない。メショニックにとって理論とは書くことの行為の理論化であり、その理論が他の書く者を束縛するということはない。そして、メショニックはこの立場から実践のもつ全体性をとらえる理論的枠組みを想定しようとした。

その中心的な理論のひとつは「システム」（'le système'）である。[5] システムという用語は社会学が当時用いだした概念であり、文学の領域でも、既にロシアフォルマリストのトゥィニャーノフ（Juriji Tynjanov）が用いていた用語でもある。この言葉が狙うものは全体性であり、個々別々になっている諸要素を結びつけることである。メショニックはこのシステムという概念を書くという行為に結びつける。システムに結びつけられた書くことは、「生きるということ」そして「読むということ」に結びつけられることになる。書くという行為は、ただ、単なる創造行為ではなく、そうした人間の諸行為と不可分離なものとしてたち現れることになる。こうして捉えられた、生と結びつけられた書くことは、書くことの書法の一実践ではない。それは詩人の生や思想と深く結びついたものなのであり、容易に一般化できるものではない。

かくして、読むことは文学という権威への還元であるか、生に結びついた書くこととしての読みであるかの、どちらかになるのである。得てして、作家の読みが文学の読みと混同された場合、作家は本当にその作品を理解していたのかという疑念が、文学者の側から提示されることがある。例えば、原書を理解できないものにどうして外国作品を理解できるのかといったことがいわれることがあるが、そのような見解は、書くこととしての読みと文学としての読みを混同していることから起こるものである。詩人が他の詩人の作品を読むのは、そこにひとつの正しい読みを求めるからではなく、そこに展開される自己とは違った世界、あるいは世界観というものを求めて、より大きく自己を開示し、その自己に基づいて創作していくという「ことば」を通じて意味を生み出していく行為に結びつくのである。以上のようなメショニックの主要概念から導かれる観点から、鮎川信夫という詩人の読みの行為を分析する場合、鮎川の読みと彼の詩がいかに関わっているかということを分析するのが可能になる。そしてそうした鮎川の読みの分析は、彼がいかに他の詩人の作品を読むことによって、新しい自己に目覚め、それを思想化し、自己のことばに結

5　メショニックの概念 'le système' は、*Pour la poétique* の pp.32-42で説明されている。

びつけていったのかという過程を分析するに他ならないのである。

特に、鮎川の場合には、そうした読みの行為を認識していた感がある。それは、鮎川の次のような一節からうかがうことができる。

> ただ、その頃から一貫して変わらないと思われるのは、私の詩の読み方である。と言っても、別に人と変った読み方をしているというわけではない。多くの人が、私と同じような読み方をしているに違いないのだが、それは、詩を*読まない*という読み方である。
>
> その人の人格にふれるには、何もその人の話を聞かなくてもよい、という場合がある。目を見、声を聞いただけでその人がよくわかるという場合がある。そのように詩の言葉に接するのである。その詩がいいかわるいか、好きかきらいかは、読むまでもなく決ってしまうものである。たいていの人は、読んでからきめようとするが、それはしばしば見当ちがいである。
>
> 詩の場合、解釈は悪だという考え方が、本能的に、私にはある。しかし、こうは言っても、一篇の詩の中にかくされた奥深い意味が、長い期間のうちに少しずつわかってくる楽しみを否むものではない。知ることと、愛することは一つである。解釈が、知ることを促進するかぎり、それに反対はしないが、何でも解釈しないと承知しないという風潮は、詩にとって不幸なことである。解釈はかえって、現代詩はわからない、などとえらそうに宣言する現代の野蛮人を増加させる結果にしかならない。[6]

鮎川が自らの「詩の読み方」として、上の引用の中で提示している「詩を*読まない*という読み方」という考え方は、一見するとラディカルで神秘主義的な認識のように思われるが、ここで注意しなければならないのは、こうした鮎川の考えの背景に

6　鮎川信夫「現代詩との出合い」、『鮎川信夫著作集』第２巻、343-44頁。引用部の斜体部分は、原文では傍点が付されている。

は、詩を読むことを通じてあるいは「ことば」を通じて、自己と世界を開示し創出していく詩の主体に対する考え方と、詩を読むことはその主体に与える影響効果を内包しているような一つの人間的行為、別な言い方をすれば、主体の生きることと密接に関わった行為であるとする考え方が存在しているということであろう。そして、詩について詩の行為の持っている全体性を重視するという立場から、鮎川は、その全体性をバラバラにして詩を読む行為、別な言葉で言えば、詩を読む主体に何等の影響も与えない読みの行為に対して、批判的な見解を示すわけである。こうした詩の行為を切り離して考えようとする傾向に対して、鮎川は別の箇所で次のような言葉を述べている。

> われわれは詩を、一詩そのものを、単独に切り離して論じることが出来るだろうか。それは勿論不可能である。しかるに詩そのものを、それだけ切り離すことが出来るかのように、詩を他から孤立した一概念、或いは絶対化した一形式として取り扱おうとする傾向が、いまだに根強く存在している。そして詩論の中で語られる詩の法則は、たいてい詩の実作のあとからうまれ、経済学者や歴史家のつくった社会則のように、決してわれわれの前にではなく、常にわれわれの後ろから現れるものである。こうして定められた詩の法則は、しばしば一般に詩が不変の概念であるかのような錯覚を与えてしまう。
>
> そして詩の固定化した概念が、まるで一つの権威のごとく語られる時、それは確かに、かつて歴史的意味を持ったという意味では権威に違いないが、「未来は特にある点に於て過去と異なる、つまり人々はそれを待つことも出来るし、それを変えることも出来る」と思っている現代に生きる詩人の想像と希求の精神に、必ずしも一致しないことが多いのである。われわれにとって論理の美は大して問題ではない。われわれがその理論を承認しようと否定しようと自分の好きなように振舞う自由はいつもどこかに残されている。[7]

7　鮎川信夫「現代詩とは何か」、『鮎川信夫著作集』第２巻、53-54頁。

上の引用の中で鮎川は、詩だけを単独に他から切り離すことによって詩の認識の対象を限定し、詩を科学的に取り扱おうとする一般的傾向について言及している。こうした傾向に基づく詩の認識の方法は、詩人の主体性を忘却ないしは破棄し、詩人の創出した詩の実作のみを客体化することによって、そこから一般的な概念や詩の法則を導き出そうとする。そして、そのように導き出された詩の法則が「まるで一つの権威のごとく語られる」とき、その概念には一般性・普遍性が付与され、以後、詩を書くことはその詩の法則に適応するように行われることが要求される。鮎川は、そうした概念に付与される普遍性に対して、それは「錯覚」であると述べるが、このような科学的な詩の認識が陥りがちな誘惑を鮎川が指摘するのは、そうした認識が詩を書く行為に先行してしまう場合、本来理論に先行すべきはずの詩を書くという行為、或いは実践が有している全体性やその主体に対する意義が失われてしまうことに対する危惧が、鮎川の見解の中にあるからだと思われる。このような科学的な詩の認識の仕方に対して、鮎川信夫は、詩を書く行為の主体に残された「自由」の立場から反論を試みている。

詩を、例えば、その主体や社会などから切り離して、詩の全体性や詩の行為の全体性をバラバラにして、それだけで認識しようとする方法は、上述してきた科学的な詩の認識に限らず、他の詩の認識の傾向にもみることができる。その一つとして、詩人の20世紀的な自我の要求、即ち、詩人のそれぞれ異なった意図と密接に関わっている、詩の芸術性のみを対象にするような詩の認識が挙げられる。

西欧の20世紀の詩は、ニーチェ、ディルタイ、ベルグソンなどの生の哲学と歩み始めたというひとつの側面をもっている。生の哲学そのものは、19世紀中葉の唯物論的な客観性を批判し、人間というものを生命力の観点から捉えようとした点で、詩人の中にある創造力を刺激し、創造することの行為そのものを弁護し、促進する立場にあった。前時代によって、あるいは権威によって固定化された詩の概念は、創作すること自体に躍動感を覚える若者たちの手によって破壊され、アバンギャル

ドの芸術運動が、若者たちによって始動された。イタリア未来派、ドイツの表現派、フランスのダダやシュールレアリスムなどの詩意識の背景にあるものは、前時代的な詩意識を破壊することによって自らの新しい詩意識を打ち立てる点に、詩人たちの書くことの一つの意義があった。時代は既に、一つの固定した因果律によって詩人の心を捕らえることはできなくなっていた。つまり、絶対的な権威が滅び、様々な情報がとびかう現代において、詩人たちはひとつの詩に留まっていることはできない。そして、より新しいものを求めて、詩人たちは書くことを行うことになる。

こうした新しいものの追求と新しい詩を旺盛に創り出すことの願望が、実践よりも理論を重視した態度を生みだしたことは言うまでもないであろう。新しい詩を創り出すために、まずは宣言が、あるいは理論が考え出され、それに基づいて詩作品を創っていく。以後、詩作品は理論の口実となっていく。ヨーロッパの20年代から30年代にかけての詩の動向が積極的に移入されたと考えることができる日本の詩の動向にも、そうした新しい詩の立場が生まれてきた。日本におけるモダニズム詩はその顕著な表れである。そしてそのモダニズム詩の主要な機関誌となった「詩と詩論」においては、実験的な詩作品と実験のもとになる理論がそのほとんどの紙面を覆ったのである。「詩」と「実験」という言葉が結びついていることが明らかに示しているように、そこでは詩の理論が中心になる。実験は、実験のために理論については考えるが、詩のことばそのものについては考えない。そして実験は同じ理論の繰り返しである詩の行為に何の価値も認めない。その実験の日本におけるリーダー的存在であった春山行夫は、美しい花を咲かせるために新しい理論が必要なように、美しい詩を創るためには新しい理論が必要だと言う。しかしここで言う美しい詩とは一体何なのであろうか。こうした懐疑が、鮎川や他の「荒地」派詩人たちを空虚な美的価値の世界から引き離し、ことばそのものが根付いている詩人の生に注目させることになったと思われる。

人間の生命力への讃美という背景を持った芸術至上主義的な詩意識は、結局のと

ころ、詩の理論的な側面の強調で終結する。このように、詩を客観的な世界に基づかせようという試みも、そして、詩を人間を中心とした生命の世界に基づかせようとした試みも、両方に言えることは、それらが共に「ことば」を紡ぎ出す行為とその紡ぎ出された「ことば」を読む行為に対するひとつの大きな認識、メショニックの言葉で言えば、それらが「術ではなく、連続する実践を連続する思想へと広げていく言語行為」（'non un art, mais un langage qui tende une pratique du continu vers une pensée du continu'）[8]であるという認識を欠いているということであろう。

現代における「荒地」において、自らの生の意義をどのように見つけだしていくのかという課題を鮎川はもった。鮎川はそれを、詩を書くという行為に結びつけ、新たなる自己の生を根拠づける意味を見出していったのである。そして、鮎川信夫は、こうした自己の生の意義を渇望しつつ、日本の現代詩の混乱している状況の中で、詩的主体と生きることが結びついた書くこと、その書くことと結びついた読むこと、つまり詩人の生を中心にした一連の連関、システムを、戦後の実存的な昂揚の中で確固たるものとして獲得していったと思われる。

> 「詩と詩論」以後の日本の近代詩の展開を黙殺したのも、現代詩の無意味な混乱、ーむしろ混乱そのものが放置されている詩壇の無自覚性に愛想をつかしたからであろう。そのような現代詩の世界という特定の場所では、ほとんどすべての作品が、奇妙な歪曲像を描き、多種多様な形態と精神の残骸が、塵埃集積所のようにごろごろしている。そしていわゆる流派別による主義主張が、いくつも悪臭を放ってその存在を不当に強調しているのである。
>
> これらはいずれも詩そのものを、それだけ切り離して考えるところから生ずる悪い習慣の結果であり、われわれを詩に駆り立てる詩ではない現実の生活の実感を忘れているからである。現代意識をまるで持ち合わせない詩人が、現代

8　Henri Meschonnic, *Pour la poétique*, p.7.

詩を書いているということ自体が甚だしいノンセンスだと言わねばならない。[9]

鮎川が上の引用で述べる「詩そのものを、それだけ切り離して考えるところから生ずる悪い習慣」は、詩を書くことを詩を書くこととしてしか認識しない、さらには、詩を読むことを詩を読むこととしてしか認識しないという立場から生じるものであろう。こうしたバラバラの詩の行為を、鮎川は「現実の生活」、つまり、自らの生きるということを中心に置くことによって結びつけようとする。そして、現実に結びついた詩は、詩人の生きる思想に結びつくわけであり、その思想によっては、詩人は今まで捕らわれていた物質の世界や生命の世界から解き放たれた世界、形而上学的な世界や絶対的な世界などに近づくことができるのである。

かくして、鮎川のいくつかの言述から、戦後鮎川がどのように詩について考えていたのかということが明らかであろう。それは、メショニックが1970年代に回復しようとした「詩の全体性」であり、その全体性によって詩の忘れられてきた主体性を回復することであった。

次に問題になるのは、鮎川が詩の書くことと読むことの中心であると見なした「現実の生活」がどのようであったかということであろう。1990年代に生きる我々にとって、我々の現実の生活があるように、第二次大戦後の鮎川が生きた時代には個別な現実が存在する。つまり、書くことは、以後そのような個別の現実に基づいて特殊な様相というものを呈してくることになる。そして、我々は鮎川の生きた現実から、彼の詩の行為の個別相を見ることができると思われる。第一次大戦と第二次大戦に挟まれた時期に生を受けた鮎川にとって、戦争の脅威は第二次大戦後も残っていた。いかに日本の現実が復興されようとも、その立て直されていく現実に打ち込まれる金槌の音が、破壊の音として響いてきたとしてもおかしくはない。何も生あるものが育たない不毛の地であると現代を認識した鮎川にとって、生きると言うことは滅びると言うことであり、楽観的な未来像を描くことはできなかっ

9　鮎川信夫「現代詩とは何か」、『鮎川信夫著作集』第２巻、56-57頁。

た。しかし、そうした絶望というものは、別な世界を押し開く契機となることも確かであろう。鮎川信夫は、「現代は荒地である」という。そしてその「荒地」に生きるからこそ、死に捕らわれた地に生きるからこそ、人間は人間の自らの限界を自覚し、畏怖の念を感じ、形而上学的な世界へ飛び立とうとすることになる。

鮎川信夫は、自らをとりまく現実を「荒地」として愛することによって、詩人を救う永続的価値を見出そうとした。「荒地」への愛とは文明に対する愛ではなく、復興に対する愛でもない。それは、戦争によって全てが破壊されるものの危機と、荒廃と不信に陥っている世界に対する愛である。当然、こうした鮎川の「荒地」への愛は暗すぎるとして、第二次大戦後の日本において批判の対象となったことも納得はできる。しかし一方で、鮎川は、永続的価値をその「荒地」への愛から導き出したということは、日本の現代詩における輝かしい功績であると思われる。キリスト教がアポカリスプを措定し、宗教的価値を求めるように、鮎川は、絶望と詩を結びつけたのである。かくして、鮎川の詩の行為をこのような意図のもとに理解し、鮎川の詩の全体性を検討してゆく視座が生まれるのではないだろうか。

第４章第２節
鮎川信夫の戦後の詩のことば

第４章第１節では、鮎川信夫の詩を書くということが、鮎川の読みと結びついている行為であること、そして、鮎川の詩的行為が、彼自身の現実における生を中心に結びついた全体的な構造であることを明らかにしてきた。このような鮎川における詩の行為の特徴は、別の見方をすれば、その根拠であるところの全存在を賭けて言葉を紡ぎ出さなければならないという彼の詩的言語観が変わらない限り、鮎川を取り囲む日本の現実の変化と鮎川自身の新しい経験の積み重ねによって、鮎川が紡ぎ出す詩的世界が彼の生とともに変貌して行くということを意味するものである。

第二次大戦後、鮎川が直面した日本の現実というものは、確かに、鮎川だけでなく「荒地」派詩人全体にとっても、「荒地」的様相に満ちた現実であった。さらには、まだ色濃く彼らの内部に存在する戦争中の体験と戦後直後に生きるということを詩を書くことに結びつけていこうとした「荒地」派詩人にとって、その詩的世界というものは、暗く重いものにならざるを得なかった。しかし、一方で日本の現実は、社会構造のいわゆる民主主義的変換によって大きく変わり、現実そのものが、「荒地」的でなくなっていく様相も確かに存在した。そしてそうした以前と異なる現実に生きる詩的主体である詩人の経験の質も徐々に変化していくと考えると、彼らの生の中心に結びつけられた詩の「ことば」によって描き出される詩的世界そのものも、変わっていくはずである。

また、詩人の詩的世界は、詩人たちを取りまく外的なものの変化に関係しているだけではなく、詩人自身が、詩的活動を続ける過程で、新しい詩的経験を積み重ねていくことによっても、変化していくものであると思われる。

以上のような観点を踏まえながら、この章では、特に鮎川信夫の詩作品を検討することにより、その詩的世界がどのような変貌を遂げているのか具体的にみていきたい。その際、日本の現実そのものの変化、さらには、鮎川信夫の内部における経験の質の変化や詩的経験の積み重ねというものを考慮に入れながら考えていきた

い。

（１）

鮎川信夫は、1971年12月に出版された立風選書『鮎川信夫自撰詩集』の巻末に付けたエッセイ「詩的自伝として」の中で、その詩集が出版されるまでの詩的経験を５つの時期、すなわち、1937－1945年を第１期、1946－1951年を第２期、1952－1958年を第３期、1959－1965年を第４期、1966－1970年を第５期と分類しながら、それぞれの時期における詩作品の傾向を自ら分析している。[1] 第１期の鮎川信夫の詩作品については、第１章第４節及び第３章第２節において既に考察したので、ここでは、第２期、第３期からのものを中心に扱いながら、経験や生の変化に伴った鮎川の詩的世界とその変遷を考えていきたい。

鮎川信夫は、「詩的自伝として」の中で、反省的に第２期の自己の詩的経験について、次のように分析している。

> この時期の作品は数はすくないが、その後の私の詩作を決定したという意味で大事であり、内容もわりあいに充実しているとおもう。
>
> 戦前、戦中の作品とくらべて、いちじるしく違ってきた点は、経験的なものの占めるウエイトが重くなってきたことであろう。観念として浮遊していた思想が、経験によって験されて、少しずつ現実に沈殿し、心理的に複雑な陰翳をもちはじめたといえるかもしれない。
>
> しかし、これらの作品の場合、経験的なものがストレートに表現されているといえる部分はごくわずかで、一篇一篇は、あくまでも仮構されたヴィジョン

1　鮎川信夫「詩的自伝として－立風選書『鮎川信夫自撰詩集』－」、『鮎川信夫著作集』第８巻、281-90頁。

として形成されている。「死んだ男」も「繋船ホテルの朝の歌」もそうである。もし、これらの詩で、私が経験的な真実をストレートに伝えようとしたら、その経験は死ぬほかなかったであろう。[2]

上記の引用の中で、鮎川信夫は、戦前、戦中と異なるこの時期の自己の詩の特徴として、「経験的なものの占めるウエイトが重くなってきたこと」を挙げている。詩作品や詩的行為において経験を重視する鮎川のこのような態度は、詩を書き始めた頃、すなわち戦前の段階でのモダニズム的方法に重きをおいていた態度が鮎川の内面で徐々に変容し、この時期に至ってモダニズム詩とは全く異なった態度を確立したことを示していると思われる。鮎川が分類する第２期は、1946年の敗戦直後から1951年の『荒地詩集』第１集が出版されるまで、つまり、詩誌「荒地」（第２次）の活動を通して「荒地詩集」出版の構想が練られた時期に相当する。1951年版『荒地詩集』に掲載された「Xへの献辞」もまたこの時期に草案されたものであると考えると、鮎川のその後の詩的活動において「詩作を決定」したものが、「Xへの献辞」にも表れている自己の生や経験を重視した詩的言語観であったと言うことができるであろう。

自らの経験を源泉とする鮎川の詩の「ことば」を理解するには、当然、その経験が、一体どのようなものであったかを考えてみる必要があるが、ここではその問題を検討すると同時に、鮎川が自らの経験をどのように表現したのかという問題も考察しておきたい。

鮎川は、先の引用文の中で、「これらの作品の場合、経験的なものがストレートに表現されているといえる部分はごくわずかで、一篇一篇は、あくまでも仮構されたヴィジョンとして形成されている」と述べている。つまり鮎川は、自己の経験を内的な告白として直接に表現するのではなく、現実における経験を仮構した詩のこ

2　前掲書、281-90頁。

とばの中で表現したと思われる。このことは、鮎川が自らの経験を自己の経験としてのみではなく、それをその詩作品を読むことによって共有できる経験、すなわち、T.S.エリオットの用語で言えば、「客観的相関物」（objective correlative）にまで普遍化しているということを意味していると思われる。[3] 鮎川の世代、或いは、鮎川の思想に共感する人間、つまり「親愛なるX」という読者に向けて、自己の経験を読者が共通して持ち得るように普遍化していく鮎川の態度には、「Xへの献辞」で述べられた、詩作品という「詩」の場を通して詩を書く者と詩を読む者とが結びついていく「一つの無名にして共同なる社会」を形成していこうという意図が強く感じられる。こうした経験の普遍化は、第２章第２節のモダニズム詩批判の考察で扱った、詩作品「死んだ男」における「M」というイニシャライズが象徴的に物語るものであるが、こうした個人の経験を客観的なものにしていく作業は、1947年7月の「純粋詩」１７号に掲載された詩作品「アメリカ」の冒頭の一節からも窺うことができる。

それは一九四二年の秋であった
「御機嫌よう！
僕らはもう会うこともないだろう
生きているにしても　倒れているにしても
僕らの行手は暗いのだ」
そして銃を担ったおたがいの姿を嘲りながら
ひとりずつ夜の街から消えていった
胸に造花の老人たちが
死地に赴く僕たちに
惜しみない賛辞の言葉をおくった
予感はあらしをおびていた

---

3 T.S. Eliot, 'Hamlet', *Selected Prose of T.S. Eliot*, ed. By Frank Kermode (London: Faber and Faber, 1975), pp.45-49 (p.48).

あらしは冷気をふくんでいた
冷気は死の滴り……
死の滴りは生命の小さな灯をひとつずつ消してゆく
Mよ　君は暗い約束に従い
重たい軍靴と薬品の匂いを残し
この世から姿を消してしまったのだ
死ぬことからとりのこされた僕たちのうえに
君のなやましい顔の痕跡をとどめて
なぜ灰と炎が君を滅ぼす一切であったのか？　4

鮎川の全詩作品の中で、「M」という言葉が出てくるのは、この「アメリカ」の他、詩作品「日の暮」、「死んだ男」の３篇である。それらがすべて鮎川信夫の区分する第２期に書かれた作品であることを考慮に入れるならば、鮎川は、この第２期に「M」という詩語の源泉になっている、鮎川にとって固有な意味をもつ「死んだ男」との経験を普遍化しようとしていると言うことができるであろう。

この作品の底流には、鮎川にとっての固有な「M」、即ち、「森川義信」との戦前における経験が存在している。そのことは、戦地に赴く際に、森川が鮎川に宛てて書いた最後の手紙の文面「僕のことを思い出すことがあったら『魔の山』の最後の一頁を読んでくれたまへ。私の未来は起きてゐても倒れてゐても暗いのだ」において言及されている、トーマス・マン（ Thomas Mann,　1875-1955 ）の『魔の山』（*Der Zauberberg*）の最後の一頁にある言葉を鮎川が引用して、詩のことばと

4　鮎川信夫『鮎川信夫全集』第１巻、27-36（27-28）頁。

して定着させていることからも理解できるであろう。[5] こうした鮎川が個人的に所有した森川との戦前における経験は、上に引用した詩句の「そして銃を担ったおたがいの姿を嘲りながら／ひとりずつ夜の街から消えていった／胸に造花の老人たちが／死地に赴く僕たちに／惜しみない賛辞の言葉をおくった」という、鮎川と同じ世代が共通して所有した経験へと、協和音を奏でながら連続していくのである。

その和音は、過去における経験と現在における経験との間にも存在する。つまり、上記に引用した戦前・戦中という過去の経験に基づいた詩句が、次のような戦後の鮎川たちの世代の現在の経験とも響きあうことになる。

死んだ男のために
一九四七年の一情景を描き出そう
僕は毎晩のように酒場のテーブルを挟んで
賢い三人の友に会うのである
手をあげると　人形のように歩き出し
手を下ろすと　人形のように動かなくなる
彼等が剥製の人間であるかどうか
それを垂直に判断するには
Mよ　僕たちに君の高さが必要なのだろうか？　[6]

上の詩句には、精神を空白にさせたまま戦場から帰ってきた青年たちが、「剥製の人間」というイメージで描かれている。戦争中、主体性を完全に喪失させた青年は、ある者は死に、ある者は偶然にも生き残って再び戦後の日本の地に立った。戦

5　私の手元にあるトーマス・マンの『魔の山』（トーマス・マン、高橋義孝訳『トーマス・マン　』新潮世界文庫34、東京、新潮社、1971年、5-776頁）の最後の段落は、次のような言葉が記されている。「さようなら－君が現実に生きているにせよ、あるいは単なる物語の主人公として止まるにせよ、これでお別れだ。君の今後は決して明るくはない。君が巻きこまれた邪悪な舞踏は、まだ何年もその罪深い踊りを踊り続けるだろう。君がそこから無事で帰ることはあまり期待すまい。正直なところ、その疑問は疑問としてあまり気にしないことにしているのだ。君が味わった肉体と精神の冒険は、君の単純さを高め、君が肉体においてはおそらくこれほど生き永らえるべきではなかったろうに、君はなお精神の世界において生き延びさせてくれたのだ。君は「鬼ごっこ」によって、死と肉体の放縦との中から、予感に充ちて愛の夢が生れてくる瞬間を経験した。この世界を覆う死の饗宴の中から、そういうものの中からも、いつかは愛が生れ出てくるであろうか？」（776頁）。

6　鮎川信夫『鮎川信夫全集』第１巻、29-30頁。

前において、共通の体験を持った「死んだ男」のために、鮎川は生き残った者たちの状態を伝えるのであるが、その一方で、鮎川は戦後の自己を確認できない不安を「Mよ　僕たちに君の高さが必要なのであろうか」という詩句で「M」に問いかけるのである。

ところで、この詩作品「アメリカ」の中には、「手をあげると　人形のように歩き出し／手を下ろすと　人形のように動かなくなる」という中身が空っぽな人間たちがその中にどのような内容を詰め込み戦後を出発するのか、という問いが本質的に存在する。この点に関して、鮎川は、彼の目に映る戦後を代表する3つの青年像、つまり「大学生」、「みずからの魂をすて去った詩人」、そして「独身者」という象徴を用いてこの問いを考えようとしている。

「みずからの魂をすて去った詩人」は、にわかじこみの戦後たち現れた思想を携えて、「出てゆこう　とざされた部屋の中から／幕がおりた舞台裏から……」と叫びながら、そして「大学生」は、次のような言葉を発し、それぞれの新しい目的地を目指して共に出発しようとする。

「君たちはまさか忘れたわけではあるまい
第二流の民族　集団　人物は
単により高尚な国民　結社　人間の材料にすぎないと
ベテルスブルグの青年が僕たちに告げたことを……
おお　いまこそイギリスに住もう
ウインストンがいなくなったから
いまこそそこに疑いの余地があるから
銀行が国民のものになるだろうから
おお　いまこそ君の虚栄をひきずり下せ！
ひきずり下せ！
君は君自身の汚れた手で
首を吊っている母親の足をひっぱれ！
おお　いまこそ偉大な人間と大きな河は

平然としてまがった道をゆく時だ！」 7

この二人とは対照的に、「独身者」は、孤独と絶望によって死にとりつかれ、「不潔な女のベットの方へ進んでいく」のである。「僕」は出発できないで、「ひとり残される」。戦争によって、「剥製」となった人間に求められるのは、その中身である。しかしその中身を満たすことのできない人間にとって、別な言い方をすれば、戦後すぐに立ち上がった価値観や思想を自らのものとして内面化し得ない者にとっては、「独身者」のように絶望にとりつかれ自らの存在を否定してしまうか、その中身をどうにかして自らつくり出すか、二つの道しかない。ここに、戦後の絶望を自覚することによって、その絶望からの脱出を求めながらも、中身を満たしきれずに、出発しようにも出発できない、「僕」によって象徴される詩人鮎川の戦後の苦悩があると思われる。この詩は、このような意味において、戦後の生きることに対して方向性を見失った者の心を「僕」という普遍化された象徴によって代弁していると言えよう。

しかし、鮎川は、この詩の中で、新しき目標を「アメリカ」ということばによって象徴させることによって、「僕」にとっての精神的な救いを提示する。これは実際のアメリカというわけではなく、ひとつの新天地を象徴するものとしての「アメリカ」である。つまり、「コロンブス」が求めたような、「ジェファーソン」が独立を勝ち取ったような新しい土地としての「アメリカ」なのである。鮎川はここで、道を見失った自己を、「アメリカ」へと向かわせるが、まだその「われわれのアメリカ」は「発見」されていないという。ここにおいても、戦後をいかに出発すべきかという問いに、今だ答えを見いだせない人間の苦悩がひとつのイメージとして定着させられているが、「アメリカ」という希望が提示されている点において、戦後の道を見失った者たちの心には、大きな反応を呼び起こしたのではないであろうか。

7　前掲書、30-31頁。

憐れむべき君たちの影にすぎぬ僕は
きちんとチョッキをつけ上衣を着て
テーブルに凭れて新しい黄金時代を夢みている
いつの日か　僕らの交す眼ざしや
なにげない挨拶のうちから生まれる未知の国民のことを……
胸にかがやく太陽の紋章を示しながら
宮殿や政府の階段をとびこえ
おどりたつ群集をおしのけ
僕らの家の戸口を大きな拳で敲く朝のことを……
ああ　いつの日からか
熱烈に夢みている　8

そして、そうしたヴィジョンへの熱烈なる希求は、詩作品「アメリカ」の結びの節にあたる上の詩句では、光のイメージを基調にした「黄金」、「太陽」、「かがやく」などの詩語で純粋に語られるのである。

詩作品「アメリカ」における主要なテーマである戦後における生きることの出発は、詩作品「繋船ホテルの朝の歌」では、新しき新天地へ旅立つその直接の場所である「港」、「波止場」やその旅の手段である「船」などのイメージによって、より鮮明に意識されることになる。詩作品「繋船ホテルの朝の歌」は、「悲しみの街」に象徴された絶望から遠ざかろうとする男と女の姿が、その出発を直接想起させる「船」や「港」「波止場」といったモチーフとともに描き出されている。

この作品の中にあらわれる「船」というモチーフは、第１章第４節で説明した鮎川の戦前における初期の作品にも見られるものであるが、それは戦前においては、次の詩句から明らかなように、現実から超現実的な世界へ飛翔するための、あるいは逃避するための道具仕掛けとして用いられていた。

船は逃げていくお日さまを追ひかけ
白い帆にとうめいな夢をのせ
青い風車をくるくる廻してゆく

8　前掲書、35-36頁。

―それは天国行きの船です
―子供だけ乗ることが出来ます　　（「船」より）[9]

それが、戦場から鮎川が離れ日本へ帰還するという私的な経験を源泉とする「船」は、「戦場」という「荒地」から「日本」という別な「荒地」へ橋渡しする役割を担う「船」として、さらには、「病院船」という「死」にとらわれた「船」として、次のような詩のことばで鮎川によって描き出されることになる。

病院船はとても重かったり、軽かったりして、
人間の遠い未知の故郷へ
彼方へと走っていた。
「この病院船の磁針がきみらを導いてくれる」と船長は言う、
だが何処へ？　ヨオロッパでもアジアでもない
幻影のなかの島嶼……
厚いガラスの窓からは
まるく小さな海と空が見えるばかりだった。　（「病院船室」より）[10]

このように鮎川信夫の詩作品において、「船」というモチーフは、一つの世界から別の世界に鮎川の精神を橋渡しすることと関わっているのであるが、詩作品「繋船ホテルの朝の歌」では、そうした別の世界に向けて旅立つための「船」のイメージを基調にした、「おれ」と「おまえ」の一つのドラマが展開される。

ひどく降りはじめた雨のなかを
おまえはただ遠くへ行こうとしていた
死のガードをもとめて
悲しみの街から遠ざかろうとしていた
おまえの濡れた肩を抱きしめたとき

9　鮎川信夫『鮎川信夫全集』第１巻、543頁。引用句の斜体部分は、参照した文献では傍点が付されている。

10　前掲書、18-21（18）頁。

なまぐさい夜風の街が
おれには港のように思えたのだ
船室の灯のひとつひとつを
可憐な魂のノスタルジアにともして
巨大な黒い影が波止場にうずくまっている
おれはずぶ濡れの悔恨をすてて
とおい航海に出よう
背負い袋のようにおまえをひっかついで
航海に出ようとおもった
電線のかすかな唸りが
海を飛んでゆく耳鳴りのようにおもえた　11

「おまえ」は、「悲しみの街」から遠ざかることを、絶望から逃れることをひたすら願っている。そんな女性の肩を抱きしめながら、「おれ」は、夜の暗闇に覆われた「悲しみの街」の「なまぐさい夜風」や「電線のかすかな唸り」に、絶望に支配された街からの出発に直接結びつく「港」や「海」の光景を思い浮かべる。「ずぶぬれの悔恨」を捨て去り、「波止場」に「巨大な黒い影」を落とし停泊している「船」に乗って「おまえ」と共にかすかな希望を求めた旅立ちをしようという思いに駆られるのである。ここに描かれるこうした「遠い航海」への思いの背景には、おそらく、戦後の出発に悩む鮎川自身の個人的な経験が存在している。自らを取り巻く現実に対し絶望を見る鮎川の、そこから何とか逃れたいという希求や、日本的な土壌のものを捨て何らかの別の信念を受け入れることへの誘惑に駆られる苦悶が窺われるのである。

この詩の中で象徴的に語られるこのような「出発」は、そこでは、結局はなされないことになる。

おれたちの夜明けには
疾走する鋼鉄の船が
青い海のなかに二人の運命をうかべているはずであった

11　前掲書、42-45（42-43）頁。

ところがおれたちは
何処へも行きはしなかった
安ホテルの窓から
おれは明けがたの街にむかって唾をはいた
疲れた重たい瞼が
灰色の壁のように垂れてきて
おれとおまえのはかない希望と夢を
ガラスの花瓶に閉じこめてしまったのだ　12

ここには、結局は「何処へも行きはしなかった」という言葉が示すように、主人公の「おれ」も相手の女性の「おまえ」もどちらとも航海に出ることなく、「はかない希望と夢」を「ガラスの花瓶」の中に閉じこめる。積極的に航海に出れない背景には、二人とも何処に行くのかその目的地を見出していないということが存在するのであるが、それ以上に、絶望にとらわれた現実とは、彼らに重くのしかかるものであり、それを押しのけることも、逃れることも、改善していくことも、人間が容易に達成できることではないのである。その「場」、すなわち、「荒地」に存在し続けなければならないことに対する不安、あるいはそれに対して、そこから逃れて別な目的を持った場所に行きたいという願望の葛藤がここでは痛いほどに感じられる。そして、こうした目的を見いだせない、あるいは戦後の生きることのヴィジョンを見いだせない苦痛は、次のような言葉になって、あらわれてくるのである。

おれたちはおれたちの神を
おれたちのベッドのなかで締め殺してしまったのだろうか
おまえはおれの責任について
おれはおまえの責任について考えている
おれは慢性胃腸病患者のだらしないネクタイをしめ
おまえは禿鷹風に化粧した小さな顔を
猫背のうえに乗せて
朝の食卓につく

12　前掲書、43頁。

ひびわれた卵のなかの
なかば熟しかけた未来にむかって
おまえは愚劣な謎をふくんだ微笑を浮べてみせる
おれは憎悪のフォークを突き刺し
ブルジョア的な姦通事件の
あぶらぎった一皿を平げたような顔をする[13]

「おれたちはおれたちの神を／おれたちのベッドのなかで締め殺してしまったのだろうか」という疑問には、戦後、日本の風土に如何なる思想的基礎も見いだせず、何のヴィジョンも持つことが出来ないことに対する苦悩があらわれている。確かに、アメリカから移入された「民主主義」というヴィジョン、詩作品「アメリカ」の中で「大学生」が語る共産主義のヴィジョンなど、戦後の日本には、様々なものが移入されてきた。新興宗教も盛んになった。しかし、こうした全てを自らの生きることの拠り所にできない「おれ」は、「おれたちの神」を殺してしまったのかという問いを発しているわけである。こうした「おれ」の「おれ」に対する自己認識が強く打ち出されるこの詩作品は、詩の「ことば」を通じて自己認識を行なおうとした鮎川の詩的態度を窺えるのであり、この特徴は、後に検討する詩作品「橋上の人」で、一つの頂点に達すると言ってよいであろう。このような鮎川の作品は、「荒地」派詩人の詩的行為にも共通することばの効果を、すなわち、生きている自己を映し出す「鏡」の機能を最大限に生かした作品であると言えよう。

窓の風景は
額縁のなかに嵌めこまれている
ああ　おれは雨と街路と夜がほしい
夜にならなければ
この倦怠の街の全景を
うまく抱擁することができないのだ
西と東の二つの大戦のあいだに生れて
恋にも革命にも失敗し

13　前掲書、44頁。

急転直下堕落していったあの
イデオロジストの顰め面を窓からつきだしてみる
街は死んでいる
さわやかな朝の風が
頸輪ずれしたおれの咽喉につめたい剃刀をあてる
おれには掘割のそばに立っている人影が
胸をえぐられ
永遠に吠えることのない狼に見えてくる　14

朝によって暗闇を奪われ、街をとらえている絶望と死が露呈する。「さわやかな風」も「おれ」にとっては、残酷なものでしかないのである。そのような状況にありながら、「おれ」は、なおも自らを見つめ続けるのである。「西と東の二つの大戦のあいだに生れて／恋にも革命にも失敗し／急転直下堕落していったあの／イデオロジストの顰め面」、あるいは「頸輪ずれしたおれ」という、「荒地」派詩人が共有していた「犬」というイメージを通しての自己の認識は、痛ましささえ感じさせるものであるが、こうした自己を認識するためのことばという鏡を持っていたからこそ、自己について冷静に、自己の真実を見いだせるのであろう。そして、そこには、何のヴィジョンも今だ探し得なくとも、「頸輪」で繋がれた現実である「倦怠の街」に生きることを、あるいは生きながらえることを選択した詩人の姿が写し出されているように思われる。

現実にとどまる詩人鮎川の目に映る「倦怠の街」は、次の作品「白痴」において最もよく表現されている。これは鮎川の見た戦後の「東京」の状態と言うことができるかもしれない。すこし長くなるが全文を引用してみよう。

白痴

ひとびとが足をとめている空地には
瓦礫のうえに材木が組立てられ

14　前掲書、44-45頁。

鎚の音がこだまし
新しい建物がたちかけています
やがてキャバレー何とか
洋品店何々になるのでしょう
私はぼんやりと空を眺めます
ビルの四階には午後三時から灯がともり
踊っている男女の影がアスファルトに落ちてきます

私は裏街を好みます
そこにはジャズがほそぼそとながれ
むかし酒場で知りあった女が
あまり感心しない生活をしています
無意味な時代がしずかに腐敗しています
ある冬の晴れた日に
私はゆっくり煙草をふかしながら
そこを通ってゆきました
私の立派な人生には
いつもそんな汚い路地があって
破れた天井の青空が
いつもいくらか明るいようです

日が暮れかかると
劇場は真黒な人を吐き出します
ふるえる電線の街の
灰いろの建物のしたを孤独な靴音が
もみあうおびただしい影をぬってゆきます
その孤独のこだまのなかには淋しさの本質がちょっぴりあります
十字路には警官が立っていて
これがほんとうの東京の街路ですが
この街のどこもかしこも
光りの痕跡が小さくなってゆくようです
つかれているのは私ばかりではありません
指輪や装身具の飾ってあるショーウィンドをのぞいて
うつくしく欠伸をしている女がいます
その横顔をぬすみ見ている紳士がいます

春のころ代議士候補が
サラリーマンや労働者を相手に
よく政府の悪口を言っていた広場には
サーカスの看板がこがらしに吹かれています
街路樹の枯枝に
小鳥がとまっていることも見のがせません
サーカスのむすめの写真をながめながら
私はかるい舌うちをしました
もちろん誰にも聞えるきづかいはありません
どうやら私は今年も結婚しそこねたようです

これから私は何をしたらよいのでしょうか？
ひとびとのうしろに行列をして夕刊を買い
今日の出来事を
昨日のように読みすてましょうか？
そしてニュースが私を読みすてたら
喫茶店でコーヒーをのみ
それからあとの計画は
一杯のコーヒーをまえにして考えようと思うのです
一人の若いウェイトレスが
たまたま可愛いい瞳をしていたからといって
少しばかり恥をかくようなことがなければよいのです　15

「ひとびとが足をとめている空地には／瓦礫のうえに材木が組立てられ／鎚の音がこだまし／新しい建物がたちかけています」という戦後の荒廃の地に「新しい建物」が建築されていく描写から始まるこの作品は、戦後の鮎川自身の現実を見る眼がよく表現されている。その「鎚の音」をどのように鮎川が聞いたのは定かではないが、おそらく鮎川には、その音がすでに何かを破壊している音として聞こえたはずである。何かの「新しさ」が現れてもそこを「無意味」としか解釈しようとしない「私」には、そこに建てられている「新しさ」の意味が理解できないからであ

15　前掲書、51-54頁。

る。そしてそうした戦後の建てられていく「新しい建物」の意味もわからず、自らの生きるヴィジョンも獲得できない「私」に残された生とは、「これから私は何をしたらよいのでしょうか」という問いを常に自己に向かって問い続け、「ゆっくり煙草をふかしながら」「東京」の「裏町」を「通ってゆく」生活であり、「ひとびとのうしろに行列をして夕刊を買い／今日の出来事を／昨日のように読みすて」る生活なのである。しかし、ここで注意しなければならないことは、この詩作品において戦後どうすることも出来ない状態に囚われているのは何も「私」だけではなく、「私」の取り巻く日本の現実の中に、そうした倦怠や時代の無意味性に囚われた人間を鮎川は、「指輪や装身具の飾ってあるショーウィンドをのぞいて」いる「うつくしく欠伸をしている女」であるとか、「その横顔をぬすみ見ている紳士」という言葉で表現しているということである。この「欠伸をしている女」とその「紳士」は、現代人の心のなかに遍在しているある心の状況を、効果的に戯画化していると言うことができるかもしれない。こうした戦後の精神的空白に陥った人間の生の在り方の小ささは、この詩の最後に語られる６詩行に皮肉的に描き出される。その生とは、「一杯のコーヒーをまえにして」考えられる人生であり、「一人の若いウェイトレスが／たまたま可愛いい瞳をしていたらかといって／少しばかり恥をかくようなことがなければよい」人生なのである。[16]

以上、鮎川がエッセイ「詩的自伝について」で分けた自己の詩的活動の第２期について、「アメリカ」、「繋船ホテルの朝の歌」、「白痴」の３篇を検討してきたわけであるが、このようなこの時期を代表すると考えられる鮎川の詩作品は、詩作品「橋上の人」においてひとつの頂点に達すると思われる。

鮎川の詩作品の中には、「橋上の人」と題する詩作品が二つ存在する。そのひとつめは、戦争に出兵する際に鮎川が遺書代わりに三好豊一郎に託していった作品であり、もう一つは、出兵中からそれを書き直し、さらに戦後それを改稿して発表したものである。前者は、第１期の鮎川の詩的行為のけじめとして書かれたものであ

16　鮎川の詩作品「白痴」には、T.S.エリオットが現代人の人生の小ささを開示した『J・アルフレッド・プルフロックの恋歌』の詩の「ことば」が響いていると思われる。

るという点で、その時期の全体的な視野を引き継いでいるものである。そして、戦後に発表されたものは、鮎川が戦争という経験を経て手を加えた作品であり、鮎川自身のそれまで生きてきた「過去」、戦後の「荒地」の地に生きている「現在」、そしてそれからの鮎川の生のヴィジョンである「未来」という彼自身の全体的な生のスパンから書かれたものであるという点で、鮎川の詩作品の中でも重要な位置を占めるものとして挙げることが出来る作品である。ここでは、第２期に書かれた後者の「橋上の人」を、そこに描き出される詩人の内的ドラマを中心に考えてみたい。

「橋上の人」は、２２９行からなる長篇の詩であり、８つの部分から構成されている。その第Ｉ部は、次のように「幻の都市」、すなわち「荒地」であるところの現実とそこに立つ「橋上の人」の描写から始まる。

Ｉ
彼方の岸をのぞみながら
澄みきった空の橋上の人よ、
汗と油の溝渠のうえに、
よごれた幻の都市が聳えている。
重たい不安と倦怠と
石でかためた屋根の街の
はるか、地下を潜りぬける運河の流れ、
見よ、澱んだ「時」をかきわけ、
櫂で虚空を打ちながら、
下へ、下へと漕ぎさってゆく舳の方位を。

橋上の人よ、あなたは
秘密にみちた部屋や
親しい者のまなざしや
書籍や窓やペンをすてて、
いくつもの通路をぬけ、
いくつもの町をすぎ、
いつか遠く橋のうえにやってきた。

いま、あなたは嘔気をこらえ、
水晶　花　貝殻が、世界の空に
炸裂する真昼の花火を夢みている。　17

「橋上の人」を取り囲む混沌とした荒廃した現実の世界が、不気味な調子で「汗と油の溝渠」、「よごれた幻の都市が聳えている」、「重たい不安と倦怠」、「石でかためた屋根の街」、「はるか、地下を潜りぬける運河の流れ」などのことばで描き出される。その現実を橋上で直視する「橋上の人」は、「現在」の地に足をとどめる存在でありながら、「運河」を下流へと漕がれて進む「船」に乗り、「過去」から「現在」、「未来」へという「時」の流れを進む存在でもある。

「船」が「時」の流れを「下へ下へ」と下降していく情景には、「時」の経過とともに変化した鮎川自身の自我の軌跡と詩的世界の変遷をみることも可能ではないだろうか。つまり、上方の世界から地上の世界へ詩人鮎川の自我が下降してくる動きと、初期の段階においてモダニズム詩に感化された結果、人工的な超現実界へ定着させた鮎川の詩的世界が現実の世界へと下降してくる動きが重層的に表現されているのである。特に、「橋上の人、あなたは／秘密にみちた部屋や／親しい者のまなざしや／書籍や窓やペンをすてて」という部分には、鮎川の戦前における詩的態度の放棄を見ることが可能である。そうした態度を捨てるということは、戦前に描いていたモダニズム詩的な超現実的な詩的世界の放棄、換言すれば、人工的世界を出て、現実に目を向ける鮎川の態度を意味する。そして、それは、「現在」、「橋上の人」が、過去における鮎川の詩の中心的な詩語になった「水晶」、「花」、「貝殻」が存在している超現実的な詩的世界を「空に」「夢みている」という構図からも明らかである。過去の詩的世界と過去の詩的行為を省みるという立場にある「橋上の人」は、戦後、地上に降りてきた「詩人」の反映であると考えてよいであろう。このように、過去と現在との関わりが、上方と下降というイメージに結びつけられることによって、ここでは、「現在」、「橋上の人」が存在する場、すなわ

17　前掲書、59-72（59-60）頁。

ち、「荒地」の場が明らかになるのである。そして、「過去」の逃避的な世界から「現在」の「荒地」的現実に戻ってきた「橋上の人」が聞くことばとは、「おお、これからどうしよう……」という三つの声だった。この現実に生きる人間の三つの声は、詩作品「橋上の人」の第Ⅱ部で次のように語られる。

Ⅱ
おお時よ、なぜ流れるのか
なぜ止まらないのか
うらぶれた安カフェーで、
酔いどれ水夫が歌っていた。
おお、これからどうしよう……
酒と女におさらばして、
さあゆこう、船着場へ―
未来と希望があるだけさ。

ああ時よ、なぜ流れるのか
なぜ止まらないのか
さんざめく裏街のどん底で、
狂える女が歌っていた。
ああ、これからどうしよう……
空の財布の身を投げに、
さあゆきましょう、船着場へ……
未来も愛もありやしない。

おお時よ、なぜ流れるのか
なぜ止まらないのか
空気の悪いアパートの一室で、
青白いサラリーマンが歌っていた。
おお、これからどうしよう……
子供をつれて一日だけの安息に、
行ってみようか、船着場へ―

未来と信仰はちがうもの。[18]

「過去」から「現在」に、上方の世界から「荒地」の世界に辿り着いた「橋上の人」は、「酔いどれ水夫」と「狂える女」と「青白いサラリーマン」が「おお時よ、なぜ流れるのか／なぜ止まらないのか」という歌声を、現実の最も孤独な場所である「うらぶれた安カフェー」、「さんざめく裏街のどん底」、「空気の悪いアパートの一室」から聞くのである。その声は、一様に「おお、これからどうしよう……」という現実に生きる不安を持ち、それぞれの現実から離れて、別々な「未来」を求めて、別な世界への出発点である「船着場へ」「さあ、ゆこう」と叫ぶ。しかし、それらの三人の声の主は、そうした彼等の「未来」に対して、どこかすでに幻滅したところがあり、それぞれは、その出発することに対して全存在をかけないことによって、その「荒地」的現実に再び引き込まれていく。

こうした現実に戻ってきた「橋上の人」に関して、第 Ⅲ 部では、それが詩人の精神的存在であることがはっきりと明かされる。

橋上の人よ
あなたは冒険をもとめる旅人だった。
一九四〇年の秋から一九五〇年の秋まで、
あなたの跫音と、あなたの足跡は、
いたるところに行きつき、いたるところを過ぎていった。
橋上の人よ
どうしてあなたは帰ってきたのか
出発の時よりも貧しくなって、
風に吹かれ、浪にうたれる漂泊の旅から、
どうしてあなたは戻ってきたのか。

橋上の人よ
まるで通りがかりの人のように
あなたは灰色の街のなかに帰ってきた。

18　前掲書、60-61頁。

新しい追憶の血が、
あなたの眼となり、あなたの表情となる「現在」に。
橋上の人よ
さりげなく煙草をくわえて
あなたは破壊された風景のなかに帰ってきた。
新しい希望の血が、
あなたの足を停め、あなたに待つことを命ずる「現在」に。
橋上の人よ　19

「一九四〇年の秋から一九五〇年の秋まで」、自己を空白にせねばならなかった詩人の自我が、戦後戻ってきたことをこの部分から読みとることができよう。戦争時、全てが強制される現実において、自己をいうものを失って生きていたということは、別な観点からみれば、「橋上の人」、すなわち、詩人の自我のみを自己から解放して、「漂泊の旅」をさせていたということになる。その自我を戦後とりもどすことを、鮎川は自我が自己にかえってきたというイメージで表現しているわけである。自我を取り戻すことによって詩のことばを取り戻した詩人は、そこに微かな「新しい希望」を抱きながら、「荒地」的「現在」にとどまろうとするのである。

以上のように、詩作品「橋上の人」の前半の部分は、戦後、「ことば」によって現実と自己を反映させ、それを詩的世界に描き出すことによって、「荒地」という現実だけではなく、「荒地」に生きる自己をも認識し、自我を取り戻して、詩的行為の主体性を回復していく「詩人」のドラマが描かれていると読むことができる。そして、自我を取り戻した「詩人」鮎川が、次の第　部から向かっていくのは、「荒地」的「現在」の生に「詩のことば」そのものが救いと生きるための意義を与えていく倫理的な世界であると言えるかもしれない。

第IV部では、「荒地」に生きることを自覚する「橋上の人」だけが見聞きでき、知ることのできる「荒地」の不気味な光景が展開される一方で、そこに生きる「橋上の人」自身に生きるヴィジョンや救いを与えるような「ことば」が発せられる。

19　前掲書、62-63頁。

誰も知らない。
未来の道は過去につづき
過去は涯しなく未来のなかにあることを－
あなたは知った。　20

「現在」にとどまる「橋上の人」のみが知ることのできる上のような「ことば」は、T.S. エリオットの『四つの四重奏』（*Four Quartets*）からの引喩であると考えられるが21、ここには、鮎川の「現在」という「時」の捉え方が、明瞭に表現されていると思われる。鮎川がその詩のことばを通して開示しようとした「現在」とは、全ての「時」から切り離され、それだけで成立しているものではなく、「過去」とともに、「未来」の中に存在するものなのである。そして、それ故に「未来」もまた「過去」へと続いていくのである。こうした「ことば」を記した鮎川の意図を考える上で、この詩作品と連続して書かれたとされるエッセイ「現代詩とは何か」の中の、次のようなエリオットの詩句を引用した文章は参考になるであろう。

しかしすべての時が現在ではない限りに於て、われわれは＜時を贖う＞ことが出来る。「未来は過去の中に含まれる」という言葉の中には、われわれが歴史と共に滅びることのない永続的価値をすでに見出していることを暗示している。人間の救いは、サルトルの実存的ヒューマニズムの如く、必ずしも常に前方にのみ投げ出されてゆくことにはないのである。22

鮎川は、その詩作品「橋上の人」でエリオットのことばをひびかせながら、「過去

20　前掲書、65頁。

21　T.S. Eliot, 'Four Quartets', *The Complete Poems and Plays*, pp.170-98.　'Four Quartets'の1-5行目の引喩である。（p.171）

22　鮎川信夫「現代詩とは何か」、『鮎川信夫著作集』第2巻、94頁。

は涯しなく未来のなか」にあり、「未来」は「過去」に続くと捉えることによって、「現在」の「荒地」に生きる人間に、「過去」において存在した「永続的価値」と「人間の救い」は、すでに「未来」に存在しているということを開示するのである。つまり、「過去」において、滅びることのない価値を見ることができるのならば、「過去」へと続く「未来」にもすでに価値と救いは存在していることを鮎川自身の詩のことばを通じて示しているのである。

同様な鮎川の意図から、第Ⅴ部では、「現在」という絶望にとらわれた「幻の土地」にも、「過去」においては「清い泉」に象徴される生命や愛の源泉の存在する「地」であったことを告げる声を「橋上の人」は聞くのである。

ひとつの心の空洞から
ひとつの波のたわむれから
滑らかなやさしい囁きがきこえてくる
「かつて泉があった
眠りからうまれたばかりの水は
活力と滋味を湛え
野に池をつくり　地上に溢れ
渚をふちどり　虚無を涵し
乾けるもの　固く凝れるものを溶かした」
「かつて泉があった
跼みこめ　くちづけよ
浄らかな水に映る理想の伴侶に
父母や妹　またあなたの至上の友たちに」　[23]

そして、第Ⅵ部では、「橋上の人」、つまり詩人の「自我」自体が「詩人」の生に希望の光を投げかける存在であることに気付くのである。そこで重要なことは、「詩人」が自我を回復することによって、詩のことばを回復したということであり、その「ことば」自体が、生きるということに希望と光を与える存在になり得る

23　鮎川信夫『鮎川信夫全集』第１巻、66-67頁。

ということであろう。

孤独な橋上の人よ、
どうしていままで忘れていたのか、
あなた自身が見すてられた天上の星であることを……
此処と彼処、それもちいさな距離にすぎぬことを……　24

戦後、自己の存在する現実を直視し、それを詩的世界に描き出すことによって、自我を取り戻し、詩的行為の主体性を回復していった鮎川は、「過去」と「現在」は「未来」においてひとつとなり、「未来」は「過去」に続くという形而上学的な認識を得ることによって、混沌とした絶望にとらわれた「現在」に生きる自らの存在自体に希望を見出そうとしたのである。

以上見てきたように、鮎川の第２期は、戦後の出発に当たって、その目的、あるいはこれから生きていくことに対するヴィジョンのあくなき追求の時期であると言ってよいだろう。自己を失い、倦怠の生活を余儀なくされているときに、鮎川は、最後に考察した「橋上の人」を自己の内部に回復することによって、つまり、自己の自我というのもに忠実になることによって、生きることを決心するのである。鮎川にとっての自我の回復とは、例えば、「民主主義」などが提示する生のヴィジョンや価値を受け入れることによって獲得されるものでは決してなく、詩人の全存在をかけた詩の言葉を通して、自己と対話し、自己を認識することによって生まれ得るものである点において、自己とのあくなき対決を要求されるものなのである。そして、その自我というものを「橋上の人」というイメージを用いることによって、戦後、自己を失っていた人に対して、自我の存在の大きさと、それがこれからの生きることの水先案内人になることを、そして「人間の救い」の問題にまで通じていくことを、詩作品「橋上の人」は読者に開示していると思われる。以上、第２期においての鮎川信夫の詩作品を読んできたのであるが、それらは、簡単に要

24　前掲書、68頁。

約するならば、詩作品「橋上の人」によって帰着する詩人鮎川の自己の主体性と「詩のことば」の回復にあると言うことができるであろう。

それでは次に、このように自己を回復し、倫理的世界へと向かい始めた詩人鮎川が、第３期においてはどのような詩を書いていったのかということを検討してみたい。

（２）

鮎川信夫は、エッセイ「詩的自伝として」のなかで、自らの詩的活動の第３期として、1952年から1958年の時期を挙げている。これは、「荒地」派詩人の活動から考えると、『荒地詩集』の第２冊目である1952年版『荒地詩集』から、その終刊（第８冊目）の1958年版『荒地詩集』が出版されるまでの時期ということで、「荒地」派詩人が年刊アンソロジーを中心にその活動を展開した時期であると同時に、「荒地の運動」が「比較的順調だった時期」[25]に相当する。一方、この時期の日本の社会的状況は、鮎川自身の言葉で言えば、「朝鮮戦争を境として、日本は経済的復興のきざしをみせはじめ、さまざまな不安の孕みながらも、社会はようやく相対的安定の時期」[26]に入った時であった。このような鮎川信夫を取り巻く現実の変化と同じように、この期間における鮎川が創作する詩的世界も変化していくのであるが、鮎川信夫の詩的世界の変化は、「不安」から「安定」へと向かう外的な状況の変化に拠るというよりもむしろ、第２期における詩的行為あるいは詩的経験によって、鮎川の内面が変わり、その結果、彼の詩意識が大きく変わったことに拠るものであると思われる。

第３期における鮎川の詩的世界は、終戦直後の第２期においてみられたような絶

25　鮎川信夫「詩的自伝として」、『鮎川信夫著作集』第２巻、287頁。

26　前掲書、287頁。

望、不安、倦怠などの「暗さ」を前面に押し出していく世界とは異なった世界になっている。次のような鮎川自身の発言は、そのことを裏付けてくれるであろう。

> この時期の私は、比較的多数の詩を書いた。詩を書き始めた頃の気分が、いくらかよみがえってきたようで、もっと細い詩を書きたいとか、もっと軽い詩を書きたいとか、今までの詩の重苦しさから逃れたいという気分が出てきた。[27]

第３期における詩的心境の変化を上の引用文のように鮎川は語っているが、こうした詩的態度の変化は、前述した通り、敗戦直後の実存的な不安が日本社会の復興とともに稀薄化したことに直接かかわっているというよりも、むしろ、第２期において鮎川が、敗戦直後から、自らの生きることの不安と自己の戦争体験の問題に正面から取り組み、それを戦後の生のための思想へと変換し、詩的行為の基盤にしたという詩的経験に奥深くかかわっているように思われる。

戦争によって自己を見失い、絶望と不安にとらわれることによって生きる方向を見い出せずにいた敗戦直後の鮎川にとって、最も早急に必要とされたことは、自分自身を取り戻すことであった。自らが、戦後、生きていくためのこうした要請に対して、詩人鮎川は、自己の全存在をかけて詩の言葉を紡ぎ出すことによって、「荒地」に生きる自己を認識し、主体性を回復するのである。こうした第２期における鮎川の詩的経験を経た次の段階として、鮎川の第３期がある。

この第３期の鮎川の詩作品には、第２期で回復した「自我」を中心に、自己や戦争体験などの詩的対象をより客観的に見つめる鮎川の視線から導き出された、倫理的な詩的世界が展開されている。1957年10月発行の詩誌「詩学」に掲載された「ある記念写真から」と題する詩には、第２期を経ることによって獲得した鮎川の「内面の声」が、「詩人」という客観的なイメージを通して、自らの生に対して警

27　前掲書、287頁。

告を発する倫理的な声となって表れている。

ありきたりの記念写真のスタイルで　三列にならび
みんな同じポーズで　いっせいに眼を
こちらに向けていても　なにも見ているわけではない
これがみんな詩人だといったら　たいてい驚く
誰一人笑っていないが　ユーモアに欠けているためではない
「笑うなかれ」　悲しい内部の声である　28

詩作品「ある記念写真から」は、「三列にならび／みんな同じポーズで　いっせいに眼を」同じ方に向けて映っている「五十七人」の「詩人」たちの「記念写真」の描写から始まる。その「記念写真」に映った「詩人」たちは「誰一人笑っていない」。というのも、「詩人」たちの「内部」には「笑うなかれ」という「悲しい内部の声」が響いているからである。ここで鮎川は、「詩人」の内面に響く「内部の声」の存在を提示するのであるが、そうした声は、この詩の最後の二つの連でも次のように語られる。

なにごとも断定するには　むずかしい世界となった
詩人はもちろん屈してはならない　その外貌がどうであれ
かれはじぶんを憐んではならない　その罪がいかに深くとも
かれは自分を罰してはならない　屠殺者や皮肉屋の包囲のなかで
かれは屠所にひかれる小羊であってはならない　たとえその皮を剥がれても
血を流してはならない　その肉を引裂かれても

詩人の本質は変らない　それは目にみえない奥にあって
すべての生きもののうちで　最も強くてしなやかな骨だ
それは苦痛と恐怖がからみ合う　ながいながい鎖で
おそらくその果は　「未来」とふかく交っているのだろう
対岸は霧がふかくて見えないが　残る一つの疑問には
ただちに答えられるだろう　かれの経験の彼方から第四の声で

28　鮎川信夫『鮎川信夫全集』第１巻、193-196（193）頁。

……重要なことはまだひとつも起ってはいない……と　29

「詩人」は「もちろん屈してはならない」。「詩人」は「その外貌がどうであれ」「じぶんを憐んではならない」。「詩人」は「その罪がいかに深くとも」「自分を罰してはならない」。「詩人」は「屠殺者や皮肉屋の包囲のなかで」「屠所にひかれる小羊であってはならない」。「詩人」は「たとえその皮を剥がれても」、「その肉を引裂かれても」「血を流してはならない」。こうした「詩人」の内部で戒律のように響く倫理的な声は、「詩人」を鮎川自身と重ね合わせた場合には、鮎川の内部で響く自我の声として聴くことが可能であろうし、また、それは鮎川が希求する詩人像から照射される先鋭な自己批判の意識として考えることができる。ここで重要なことは、そうした詩人像を具体的に形作り、「詩人の本質」を明らかにしようとする「内部の声」が、この詩の最後で語られる「詩人」の「経験の彼方から」やってきて「……重要なことはまだひとつも起ってはいない……」と語る「第四の声」と密接な関係を持っているということであろう。「詩人」の「内部の声」とも異なり、「詩人」の生に警告を与える「第四の声」とは一体誰の声なのであろうか。それは、結論的に言えば、戦争によって死んでいった者たちの声と考えることができる。

鮎川信夫の戦後の詩的出発を記している詩作品「死んだ男」は、第２章第３節で説明したように、詩人鮎川が「死んだ男」の「遺言執行人」となることを表明した作品であった。つまり、それは、「死んだ男」の「遺言」を引き受け「死んだ男」の声を聴き続けることを、戦後の自らの詩的行為のひとつの課題として保持していく意志を明らかにした作品であった。こうした詩的課題は、鮎川の詩的活動の第２期・第３期を通して為されるのであるが、詩作品「ある記念写真から」では、死者たちの声が、「第四の声」として、鮎川自身の自己や思想に警告を与える存在にまで内面化され、「第四の声」と自我の声とが協和しながら一つの倫理的な詩的世界が展開されている。このような第３期における鮎川の戦争経験の深化の過程につい

29　前掲書、195-96頁。

て、鮎川自身は次のように語っている。

> それからこの時期に、戦争を題材とした詩をいくつか書いた。これは「病院船室」という詩を書いたときから、いつか果そうと心にきめていた約束であった。「神の兵士」が書けたことで、ある程度この連作に自信をもつことができた。この詩は、書こうとしていたことと書いた結果が大きく違ってしまったという意味で、私にとっては啓示を受けたような作品であり、このような詩は「死んだ男」のほかにはなかったので、書上げたときはしばらく呆然としてしまったという記憶がある。
>
> 「兵士の歌」は、戦争体験からひき出した私の個人的倫理のうたであり、これに対して「喪心のうた」は、声なき死者からの返歌である。[30]

上の引用文のなかの「いつか果そうと心にきめていた約束であった」ということばに、鮎川自身の戦争体験に対する真剣な眼差しと、戦争で死んでいった者たちの気持ちを思いやる優しい意識を読みとることができる。こうした意識は、戦争で死んでいった仲間たちの死の意味をとことん突き詰めることによって、「偶然に」生き残った者たちが引き受け、そこから「生」の意義を見出さなければならないとする、鮎川の生のヴィジョンに対する基本的な姿勢へと繋がってくるように思える。

一九四四年五月のある夜……
ぼくはひとりの兵士の死に立会った
かれは木の吊床に身を横たえて
高熱に苦しみながら
なかなか死のうとしなかった
青白い記憶の炎につつまれて
母や妹や恋人のためにとめどなく涙を流しつづけた
かれとぼくの間には

30　鮎川信夫「詩的自伝として」、『鮎川信夫著作集』第２巻、288頁。

もう超えることのできない境があり
ゆれる昼夜燈の暗い光りのかげに
死がやってきてじっと蹲っているのが見えた

戦争を呪いながら
かれは死んでいった
東支邦海の夜を走る病院船の一室で
あらゆる神の報酬を拒み
かれは永遠に死んでいった　31

1953年7月に発表された詩作品「神の兵士」は、「一九四四年五月のある夜」に「東支邦海」を航行する「病院船」で、「ぼく」が立ち会った「ひとりの兵士の死」をテーマにした作品である。「高熱に苦しみながら」「なかなか死のう」とはせずに、「青白い記憶の炎につつまれて／母や妹や恋人のためにとめどなく涙を流しつづけ」る「兵士」の隣に、「死」がやってきて「じっと蹲っている」イメージは、死んだ後も「死」から逃れられないその後の「兵士」の宿命を不気味に暗示している。しかし、たとえ、こうした「兵士」であれ、「聖なる言葉」を信じ「神の報酬」を受けさえすれば、「いくたびか死に／いくたびか生きかえってきた」「多くの兵士」のように「神の兵士」になることによって、「復活」することができる。この詩のタイトルでもある「神の兵士」とはそうした意味で、キリスト教的な「復活」を信じて再び生き返ることの可能な「兵士」のことである。ところが、ここで「ぼく」が出会った「兵士」は、そうした一切の「神の報酬」を拒んだ。それを拒むことによって、「死」とともに歩み出さねばならず、永遠に死に続けなければならないにもかかわらず、この「兵士」は「神の報酬」を拒んだ。ここには宗教的な救いなしに「戦争を呪う」ことしかできずに死なざるを得なかった不幸な「兵士」の姿があるが、ここで、なぜ、この「兵士」が「神の報酬」を拒んだのかということを考えることによって、鮎川は、あくまでも「戦争」という人間の行為に殉

31　鮎川信夫『鮎川信夫全集』第１巻、119-21（120）頁。

じて「神」から見放された存在として死んでいった姿に、永遠に生き返ってはならないという、「銃口」を他人に向けた「人間」の悲劇性を受け取り、それを生き残ってしまった自己の、戦後生きるための思想にまで高めていったように思われるのである。

さらに詩作品「兵士の歌」では、「死」に永遠にとらわれて続けている「兵士たち」の幻影を次のように鮎川は表現している。

穫りいれがすむと
世界はなんと曠野に似てくることか
あちらから昇り　むこうに沈む
無力な太陽のことばで　ぼくにはわかるのだ
こんなふうにおわるのはなにも世界だけではない
死はいそがぬけれども
いまはきみたちの肉と骨がどこまでもすきとおってゆく季節だ
空中の帝国からやってきて
重たい刑罰の砲車をおしながら
血の河をわたっていった兵士たちよ　32

「穫りいれ」がすんだ「世界」に、「死」が「生」を刈りとっていった「曠野」を幻視する鮎川は、そこで「死」とともにいる「空中の帝国からやってきて／重たい刑罰の砲車をおしながら／血の河をわたっていった兵士たち」の姿を目撃する。「兵士たち」は、戦いの終わりを知らずに死んだことによって自らの「任務」が終わったことを知らずにいる。そして、知らないがゆえに「死霊」となって「曠野」の上をさまよっている。こうした「兵士たち」に向かって鮎川は、次のような言葉を投げかけるのである。

かわいたとび色の風のなかで
からっぽの水筒に口をあてて

32　前掲書、180-83（180）頁。

消えたいのちの水をのんでいる兵士たちよ
きみたちは　もう頑強な村を焼きはらったり
奥地や海岸で　抵抗する住民をうちころす必要はない
死の穫りいれがおわり　きみたちの任務はおわったから
きみたちは　きみたちの大いなる真昼をかきけせ！
死霊となってさまよう兵士たちよ　33

こうした死んだ「兵士たち」に対するメッセージは、この詩の終結部では、死んでしまった「兵士たち」とともに「曠野」を進み続けるという、次のような詩句にみられる鮎川の強い意志となって表れているのである。

この曠野のはてるまで
……どこまでもぼくは行こう
ぼくの行手ですべての国境がとざされ
弾倉をからにした心のなかまで
きびしい寒さがしみとおり
吐く息のひとつひとつが凍りついても
おお　しかし　どこまでもぼくは行こう　34

こうした「兵士たち」と共にいるという姿勢は、鮎川の戦後の詩的世界の重層性を説明するものであろう。それは、戦後の復興と共に戦争の記憶が消失していった日本人の内面的動向とは相反することである。ここに、鮎川の経験を基にそれを思想化し、詩的根拠にする詩的行為の特異性があるのであるが、鮎川はそうした思想的苦悶を通して、戦後の自己批判の観点と『死の灰詩集』論争にみられるような視点を獲得していったと思われるのである。

以上考察してきたように、鮎川の第３期は、第２期における詩作品「橋上の人」に表れている詩人の自我の回復と詩のことばの主体性の回復を通して、戦後の日本という「現在」の地に生きる詩人鮎川が、戦争という「過去」の体験を血肉化し、

33　前掲書、181-82頁。

34　前掲書、183頁。

詩のことばに定着させることによって、その後の鮎川が生きていく「未来」のヴィジョン、すなわち倫理的価値の世界を確固たるものとして獲得した時期であると言えるであろう。その世界とは、まさに「詩人」としての自我と戦争で死んでいった死者たちが共存する場であると同時に、それらの「声」が「荒地」に生きる鮎川自身に秩序と生の意義を与える詩的世界なのである。

結論

「荒地」派詩人の詩作品あるいは批評作品が有している「ことば」の重みは、戦後を生きる彼らの切実なひとつの願望と、彼らの「ことば」に対する絶対的な信頼からきている。第二次大戦後の精神的にも物質的にも荒廃した日本の地で、鮎川信夫を中心として形成された同世代の詩人たち、すなわち、「荒地」派詩人たちは、第一次大戦後の疲弊したヨーロッパの地において書かれたT.S.エリオットの詩作品*The Waste Land*から名前をとった詩誌「荒地」（第二次）に、彼ら自身の全存在をかけた「ことば」を刻むことから戦後の詩作活動と批評活動を始めた。日本現代詩の領域における「荒地」派詩人によって行われたそうした一連の詩的活動の中で特に意義深いのは、詩人の戦争責任論を基軸にして行ったモダニズム詩批判であろう。この議論は、「荒地」派詩人よりも前の世代に属する詩人たちの詩的行為の批判という「荒地」派詩人にとってアクチュアルな側面を持つだけでなく、批判する側の「荒地」派詩人自身も、戦前におけるモダニズム詩に傾倒した詩的行為あるいは戦争中における自己の行為に対する反省、即ち、戦前・戦中の自己批判を要求される点で、同時代の同じ空気を吸って生きてきた人間の批判することの難しさをわれわれに示している。

しかし、戦後の混沌とした思想的・詩的状況の中で、こうした困難を敢えて引き受けた「荒地」派詩人には、日本の文学領域において「詩」という表現形式が初めて自覚された『新体詩抄』の上梓（1882年7月）から、第二次大戦が終結する1945年8月15日までの近現代詩史上に存在する如何なる詩人とも違った「詩に対する思い」があったことは確かである。それは、変化と発展を前提にする進化論的な考えに結びついた詩への希求でもなく、民衆のための詩、革命のための詩、主義のための詩、戦争のための詩、平和のための詩、理論のための詩、詩のための詩などといった、自己とは違う何か他のものを目的とした詩に対する思いではない。「荒地」派詩人の詩に対する思いとは、彼らの「生きている」という事実と生きている

彼らを取りまいている現実に不可分に結びついた詩への熱望であり、別な言葉で言えば、「生きている」からこそ必要になる自己自身のための詩への希求であった。

戦後、日本現代詩の領域において「荒地」派詩人がこのような実存的な立場で詩作活動や批評活動を展開する背景には、「荒地」派詩人の戦争体験が確固たるものとして存在している。自己を認識する年齢に達したとき、すでに戦争の暗い跫音が大きく響いていた現実、即ち「荒地」的現実に生きていることを自覚した「荒地」派詩人たちは、戦前においてひとつの小さな詩誌「LUNA」やその改題である詩誌「LE BAL」を媒介にそれぞれが知り合うことになる。ところが、そうした彼らの詩的青春も戦争によっていとも簡単に破壊され、「単独者」として戦場に続々と駆り出されていった。詩的仲間であった森川義信の戦死の報の享受、今後自分はどうなるのであろうかという不安を抱きながらの入営、軍隊という集団への自己の解消によって引き起こされる内部の空白化、そして自己を空白にしても銃を握りその冷たい引き金に指をかけた時その銃口を他者に本当に向けられるかどうかという自己の奥底で感じる苦悶など、戦争という強制された現実での「荒地」派詩人の「生」は、まさに「死」にとりつかれたものだった。そして、戦争によって精神を疲弊させた「荒地」派詩人は、中身の空っぽな自己の頭を「死」でいっぱいにして、空っぽな耳の奥に戦場や「病院船」で死んでいった者たちの肉声を刻印して、偶然にも生き残って日本の「荒地」に帰って来ることになる。

戦争から偶然にも生き残って日本の地に再び立つ「荒地」派詩人が、戦後直後最も必要としたものは、自己の精神を癒すための「静謐」と戦争によって失ってしまった自己を回復するための「時間」であった。こうした静謐と自己を回復するための時間は、何も「荒地」派詩人だけに必要であったのではなく、当時の日本人すべてに必要なものであった。しかし、連合国司令本部（GHQ）主導によって行われた日本再編の作業を通じて、多くの日本人は、敗戦によって過去に信じていた信念や価値観が崩壊し自己が空白になると、次にその中身を埋めるために、GHQの提示する民主主義という理念を非主体的に獲得しそれを自己の信条として信望し始

めることになる。このような戦後の大勢の精神状況のなかで「荒地」派詩人は、戦後を生きるための自己の信条やヴィジョンを主体的に獲得することを行っていこうとする。

戦後における思想的基盤の構築に際し、「荒地」派詩人がそうした態度を打ち出すのは、戦前・戦中と彼らがそれまで生きてきた全人生において、生きるための信条や価値観が自己の外側から、北村太郎の言葉を借りれば、「チョコレイト」があたかも「幼児」に与えられるように「配給」されてきたことに対して強い不信と懐疑を覚えていたからである。強制された思想や信念を信じて、日本の青年たちは「国のために」闘い、多くの者がその信念を信じたまま死んでいったこと、さらには、入営の際にあるいは死に臨んだ際に死を運命づけられた者の自己の本当のことばである肉声を聞いたことは、「荒地」派詩人が戦後を生きていく上で決して忘れられない記憶として自己の内奥に刻印されたのである。例えば、鮎川信夫に関して言えば、鮎川にとって「入営する前に最も尊敬する詩人にして　荒地　の友」であった森川義信が仏印へ赴く前に鮎川に最後の手紙として書き送ったことば、「僕のことを思ひ出すことがあったら『魔の山』の最後の一頁を読んでくれたまへ。私の未来は起きてゐても倒れてゐても暗いのだ」という言葉や、森川がビルマで戦死した報を受け取った後で彼の出生地の役場から届いた「一貫して変らぬ好誼を感謝します。この気持は死後となっても変らないだらうと思ひます」という遺言、さらには、鮎川が傷痍兵として乗船していた「病院船」の中でひとりのこれから死んでいく兵士が「戦争を呪いながら」「母や妹や恋人のためにとめどなく涙を流しつづけ」ながら語った自己の本当の肉声は、戦後を生きる鮎川の耳に響き続けていったのである。

こうした戦争体験は、戦前において第一次大戦後のヨーロッパの文学、特にT.S.エリオットの『荒地』を主体的に＜読むという行為＞を通じて直観的に感得した世界観、すなわち、「現代」は「死」にとりつかれた「荒地」の時代であるという現代意識を、彼らの内部において確固たるものにしただけでなく、「荒地」派詩人の戦後の思想的立場を明確に形作っていったと思われる。

このように「荒地」派詩人は、戦後、自己の生きるための信条や価値観を独力で見出そうとするのであるが、ここで彼らにとって大きな問題であったのは、その思想を構築するための基盤が日本では脆弱であったという点である。この点に関して、「荒地」派詩人は、「ことば」というものを唯一の拠り所として、自らの生が根づいている「荒地」において、自己の生きるための戦後のヴィジョンを求め出すのである。「荒地」派詩人のこの考えは、第二次大戦後の日本の混沌とした言論状況で、彼らが如何にして主体的な「詩の行為」を回復するか、という彼ら自身の戦後の詩的課題と結びついてくる。それは、思想と行為の乖離によって生きることを余儀なくされた詩人たちが戦時中に陥った内部の「空洞化」を、戦後、自己の純粋な信条を見出してそれに基づいて詩の実践を行うことによって回復しなければならない、という詩的営為に対する「荒地」派詩人の先鋭な意識からくる、詩人の主体性に関わる問題であった。詩人の主体性に関わるこの問題を一方の軸に措えながら、もう一方の軸で「荒地」派詩人は、「ことば」そのものの信用を如何にして回復するか、という問題も同様に検討することになる。それは、鮎川信夫や黒田三郎の言葉を借りれば、「ことば」が「思惑と投機の道具」に使われているにすぎない戦後の言論状況のなかで、その底流に流れる「言葉への不信の感情」を、どのように本来最も自己のことばに「信」を置くべき詩人が払拭するのか、という問題と重なってものであった。この二つの問題をひとつの視座から検討する契機を与えたのが、戦後、日本の文学領域で展開されていた文学者および詩人の戦争責任論である。

この議論の中で「荒地」派詩人が問題にしたことは、戦前において「荒地」派詩人に大きな影響を及ぼした、彼らよりも前の世代のモダニズム詩人たちが、自らの国民詩や愛国詩を書いた戦争時代を「空白」の時代として処理することによって、戦後も戦前と同じヴィジョンを抱いて戦後の詩の出発を遂げたということであった。「荒地」派詩人は、戦前においては十代の若き詩人として、詩誌「LUNA」などの同世代の詩誌を拠点に活動する一方で、前世代の詩人たちを中核とする当時のモダニズム詩運動の主流をなしていた詩誌「新領土」や「VOU」に同人として参

加することによって、20世紀初めの約30年間に展開されたヨーロッパの前衛詩やモダニズム詩、具体的に言えば、イタリアの未来派、フランスのダダやシュールレアリスム、イギリスの主知的傾向の文学などのコスモポリタニズム的風土に積極的に接触した。戦中には、その前世代の詩人たちが戦前の詩的主義や信条を放棄し民族主義的な転向を行い、総動員で国策に協力するために愛国詩や国民詩を書いた行為を目撃した。さらには、戦後にはそうした前世代の詩人たちが戦争期をブランクとして捨象し、戦前と戦後を短絡的に結びつけようとしたり、あるいは1945年8月15日以前の過去を全く存在しないかのごとくに戦後新しく価値付けられた民主主義文学という信念に基づいて詩を書き始めるのを目の当たりにした。こうした戦前・戦中・戦後の体験を通して、「荒地」派詩人は、日本のモダニズム詩自体の脆弱な主体性を読みとり、そしてその根底にある日本のモダニズム詩の「方法」と「理論」に対する偏重や、詩を「ことば」の主体から切り離して対象的に扱う傾向を看取し、後にその克服を目指すことによって、詩的行為の最も基層にあるべき純粋な詩的行為を主張し、モダニズム詩においてみられた思想や主体性の欠如を戦後の現代詩の領域において告発していくことになる。

「荒地」派詩人は、こうした日本の詩領域全般に関わる詩の本質的な問題を戦後活発に議論し検討する一方で、彼ら自身の詩的言語観を構築していった。「荒地」派詩人の詩的言語観は1951年版『荒地詩集』の冒頭に掲載された「Xへの献辞」に集約されると考えることができる。そこで「荒地」派詩人がまず明らかにしたのは、「詩」の「ことば」が日本の戦後という「荒地」に生きる詩人そのものを映し出す「鏡」としての機能であった。詩人が全存在を「一本のペン」にかけて「ことば」を紡ぎ出す。そうした行為によって記された「ことば」は、「荒地」に生きている自己を確認する場になる。そして、詩人は自己確認の後に、さらにペンで「ことば」を書き記し続けるうちに、自己の精神が、「荒地」に生きている者たちに生の意義を与える「秩序」の世界、すなわち「一つの中心」を希求していることを知ることになる、と「荒地」派詩人は主張する。このような考えは、精神をより「高

い」世界に結びつけ、「ことば」でもってその「調和と創造と憐愍の世界」を詩人が開示するという「荒地」派詩人の詩的行為の意図に深く関わってくる。しかし、ここで注意しなければならないことは、「荒地」派詩人が求めた秩序の世界とは、「宗教」のようにすでに確立された伝統的な絶対的世界でも、彼らに確約された世界でもないということであり、それは詩人が「ことば」を紡ぎ出すことによって初めて現出する、「一本のペン」にかけられた形而上学的な価値の世界であるということであろう。それ故に、「荒地」派詩人は、「詩」という場を通じて、個人一人ではなく共同することによって、「荒地」に生きる彼らの生に「光」を照射する世界を開拓していこうとするのである。そして、その共同作業を「荒地」に生きている読者「X」へと、さらには、すでに戦争によって死んでいった者たちの「ことば」へと拡げることによって、「荒地」派詩人は、「一つの無名にして共同なる社会」を形成しようとしたのであった。

こうした「荒地」派詩人による詩的言語観の構築には、第一次大戦後のヨーロッパ文学の彼ら自身の＜読みの行為＞、特に、鮎川信夫による主体的な＜読みの行為＞が大きく影響している。鮎川信夫の主体的な読みの行為の特徴は、T.S.エリオットの作品からフランツ・カフカの作品へ、さらにはその後にT.E.ヒュームの作品へと移行していった点にある。別な言い方をすれば、それは、「現代は荒地である」という現代意識の感得から、「荒地」での絶望の経験へ、さらには「荒地」からの脱出の方途の発見へという鮎川自身の内的な発展の過程であったと言うことができるかもしれない。そして、この鮎川の読みの特徴を、特に、T.S.エリオットとT.E.ヒュームを生んだイギリスの文学的土壌との比較において考えてみると、鮎川の読みは、T.E.ヒュームの作品からT.S.エリオットへの作品へつながっていったイギリスの20世紀前半の文学的動向とは全く逆の過程を辿ったと言うことができるであろう。こうしたことの要因の一つは、「伝統の詩人エリオットが、第一次大戦後、詩集「荒地」を出すに当つて、イギリスの伝統の上に立つてゐたのにひきか

え、我々は何物をも持つてゐないのである」という黒田三郎の言葉から明らかになるように、戦後直後の日本の伝統と思想の欠如に大きく拠るものであると思われる。

以上のことを踏まえた上で、本論文の結論を述べるならば、「荒地」派詩人は、日本の第二次大戦後の精神的荒廃および既存の価値や伝統の崩壊といった思想的状況の中で、自らの「生きるということ」の中心に詩の「ことば」を位置付けることによって、それまで日本の詩の領域で失われていた詩的行為の主体性と全体性を回復し、そして、そうした詩的行為に基づいて紡ぎだした「ことば」によって、自らの生きるための基盤となる価値や信条を導き出せる「ことば」と人間と密接な関係を日本の詩の領域に提示してみせたのである。つまり、換言すれば、「荒地」派詩人は、「詩」の「ことば」を自己とは異なる何か他のものを目的とする詩意識から解放し、人間が生きていく上で必要なものとして考えたのであり、その点において、彼らは「ことば」が本来有している人間的な行為の可能性を日本の詩の領域で開拓し、その認識を提示していったということになるであろう。

資料 I

1　「荒地」派詩人に関わるモダニズム詩の系譜

2　日本における第二次世界大戦以前（1941年以前）の
T.S. エリオットの受容

3　T.S. エリオット、上田保訳　「荒地」
（『新領土』復刻版　第3巻、第16号、272-73頁）

4　鮎川による西欧の文学作品の読み
①年代順
②作家別
③読みの傾向

資料Ⅰ－1　「荒地」派詩人に関わるモダニズム詩の系譜

S.3.9　「詩と詩論」創刊
編集、発行人：第1冊～第4冊、岡本正一（編集兼発行人）
第5冊～第14冊、春山行夫（編集）、岡本正一（発行）
創刊時の同人：春山行夫、安西冬衛、上田敏雄、近藤東、滝口武士、竹中郁、
外山卯三郎、三好達治、北川冬彦、飯島正、神原泰
（最後の3名は、第7冊S.5.3かぎりで左傾、脱退。）
第5冊S.4.9以降：堀辰雄、横光利一、吉田一穂、北園克衛、Ｊ・Ｎ（西脇順三郎）、
富士原清一、菱山修三、上田保、滝口修造、山中散生、阪本越郎、
丸山薫、逸見猶吉、長江道太郎、左川ちか、岩本修蔵、乾直恵、笹沢美明、
村野四郎、中野嘉一、沢木隆子、竹中久七、江間章子、岡崎清一郎、尾形亀之助、
黄瀛、稲垣足穂、など。
欧米新文学の理論、作品の紹介のために登場した若手の外国文学者たち：
（英）阿部知二、伊藤整、安藤一郎、中野好夫、織田正信、木下常太郎、など。
（仏）佐藤朔、渡辺一夫、中島健蔵、淀野隆三、佐藤正彰、辻野久憲、神西清、など
（独）大野俊一、笹沢美明、など。

S.6.12　「詩と詩論」終刊

S.7.3　「文学」と改題（季刊）
編集：春山行夫
主な執筆者：竹中郁、安西冬衛、近藤東、北園克衛、滝口修造、西脇順三郎、阿部知二、
伊藤整、永松定、西川正身、中野好夫、神西清、笹沢美明、岩崎良三、秦一郎、
阿比留信、堀辰雄、稲垣足穂、など。

S.8.6　「文学」終刊

S.9.8　「詩法」…「VOU」の純理的に対し、もっと広いスケールをもった。
編集同人：春山行夫、近藤東、安西冬衛、竹中郁、村野四郎、阪本越郎
エッセイ：西脇順三郎、伊藤整、北園克衛、阿部知二、木下常太郎、中野嘉一、
中河与一、江口渙、田村泰次郎、井上友一、など。
主としてイギリス30年代詩人と詩壇の紹介：北村常夫、安藤一郎、岩崎良三、
加納秀夫、成田成寿、上田保、永田助太郎、など。
詩：黄瀛、饒正太郎、加藤一、永田助太郎、川村欽吾、城尚衛、曾根崎保太郎、
菊岛常二、宮田栂夫、城小碓、楠田一郎、山村酉之助、渡辺修三、野田宇太郎、
滝口武士、岡崎清一郎、丸山豊、など。
「MADAME BLANCHE」系：酒井正平、小林善雄、西崎晋、左川ちか、江間章子、
上田修、伊東昌子

S.9.12　「20世紀」…「詩法」に参加した若い世代は、
「詩法」のみに飽きたらず、
自由な場を求めた。
酒井正平、佐藤義美、加藤真一郎、川村欽
伊藤昌子、円野正、饒正太郎、永田助太郎
小林善雄、桑原圭介、楠田一郎、西崎晋、
今田久、奈切哲夫、上田修、など。

S.10.9　「詩法」終刊

S.11.1　「20世紀」終刊

S.6　「白紙」創刊　北園克衛

S.7.5　「MADAME BLANCHE」と改題
編集人：北園克衛、岩本修蔵
主な執筆者：西脇順三郎、近藤東、山中散生、円野正、西崎晋、左川ちか、桑原圭介、
塩原てるよ、川村欽吾、加藤真一郎、上田修、田中克己、伊東昌子、
小林善雄、酒井正平、など。

「MADAME BLANCHE」系

S.9.8　「MADAME BLANCHE」終刊

S.10.7　「VOU」創刊　…純理的　→　S.15.10　「VOU」休刊、「新技術」と改題
「MADAME BLANCHE」から残ったメンバー10人：北園克衛、岩本修蔵、円野正、
西条成子、上野三郎、八十島稔、中村千尾、村山太一、仙留雄、三木偵
S.11参加：木原孝一、黒田三郎

木原孝一、黒田三郎

下線部は戦後における「荒地」派詩人

S.12.5　「LUNA」創刊
編集発行：中桐雅夫
主要同人：鮎川信夫、衣更着信、島尾瓢平（敏雄）、
牧野虚太郎、森川義信、など。

S.13.4　「LUNA」終刊

S.13.6　「LE BAL」と改題
S.14に参加：北村太郎、田村隆一

S.14　第一次「荒地」
鮎川信夫、森川義信、二宮佳景、桑原英夫、
藤川清、冬村克彦、竹内幹郎、山野淑雄、
白石豊、小池助男、三輪孝仁、など。

S.15　「LE BAL」は「詩集」と改題

第二次「荒地」へ

S.12.5　「新領土」創刊…「詩法」「20世紀」の若い世代が中心。
編集同人：上田保、春山行夫、村野四郎、近藤東
S.15発表同人名簿：鮎川信夫、芦塚孝四、池田時雄、伊藤正斎、今田久、上田保、
上田修、江間章子、小川富五郎（背山鶏一）、大島博光、岡田芳彦、菊岛恒二、
桑原圭介、小林善雄、近藤東、酒井正平、佐々木幸男（佐々木万晋）、志村辰夫、
曾根崎保太郎、田村隆一、東郷克郎、永田助太郎、奈切哲夫、服部仲六、春山行夫、
広田義夫、村野四郎
他執筆者：楠田一郎、東潤、西崎晋、饒正太郎、左川ちか、滝口修造、西脇順三郎、
など。
S.16初頭に参加：中桐雅夫、三好豊一郎

S.16.4　「新領土」終刊

資料　I－2　日本における第二次大戦以前（1941年以前）のT.S.エリオット受容

※この資料作成に当たっては、以下の文献を参照した。

小野寺健「エリオット文献書誌」、　平井正穂他訳『エリオット選集』別巻（東京、彌生書房、1968年）、巻末1－152頁。

小野寺健「T.S.エリオットの文献」、荒正人・小野協一編『エリオット入門』（東京、南雲堂、1961年）、巻末24－40頁。

加島祥造「エリオット文献抄」、深瀬基寛編『エリオット研究』現代英米作家研究叢書（東京、英宝社、1955年）、371－421頁。

武田勝彦「一九二〇年代におけるT.S.エリオット文献」、『比較文学の試み』（東京、創林社、1983年）、213－17頁。

服部純一「日本におけるT.S.エリオット文献」

平井正穂他「書誌」、平井正穂編『エリオット』20世紀英米文学案内18、第8版（東京、研究社、1985年）、巻末7－34頁。

A　エリオットの著作の邦訳、注解

A－1　単行本

(1) 北村常夫訳『完全な批評家』研究社、1931年。'The Perfect Critic' の翻訳。

(2) 北村常夫訳『エリオット文学論』金星堂、1932年。

'Tradition and the Individual Talent'
'The Fanction of Criticism'
'A Brief Treatise on the Criticism of Poetry'
'The Metaphysucal Poets'
'Dante'
'Hamlet'
'Imperfect Critics'
'Arnold and Pater'
'Introduction' to Selected Poems of Ezra Pound

'"Rhetoric" and Poetic Drama'
'The Humanism of Irving Babbitt'
'John Dryden'
'Baudelaire'
'Ben Jonson'
'Poetry and Propaganda'　以上の翻訳。

(3) 矢野禾積注解『Essays by T.S. Eliot』Kenkyusha Modern English Classics、研究社、1935年。

'A Brief Treatise on the Criticism of Poetry'
'The Fanction of Criticism'
'Experiment in Criticism'
'Poetry and Criticism'
'Reflections on Vers Libre'
'The Borderline of Prose'
'Prose and Verse'
'A Dialogue on Dramatic Poetry'
'Four Elizabethan Dramatists'
'Shakespeare and the Stoicism of Seneca'
'John Ford'
'The Metaphysucal Poets'
'John Dryden'
'Johnson's "London" and "The Vanity of Human Wishes"'
'Arnold and Pater'
'Ezra Pound'　以上の注解。

(4) 矢本貞幹訳『文芸批評論』岩波文庫、1939年。

'The Perfect Critic'
'Tradition and the Individual Talent'
'The Fanction of Criticism'
'Experiment in Criticism'
'The Metaphysucal Poets'
'Baudelaire'　以上の翻訳。

(5) 北村常夫注解『The Waste Land and Other Poems』研究社、1940年。

A－2　定期刊行物

(1) 中村喜久夫訳「完全なる批評家」、「詩と詩論」第2冊、1928年12月。

'The Perfect Critic' の翻訳。

(2) 深瀬基寛訳「Experiment in Criticism」、「The Muse」第10巻、第3号、1930年6月。

(3) 北村常夫訳「伝統と個人的才能」、「詩と詩論」第8冊、1930年6月。'Tradition and the Individual Talent'の翻訳。

(4) 戸松春三訳「前奏」、「社会及国家」、1930年。'Preludes'の翻訳。

(5) 秦一郎訳「ポオル・ヴァレリイの方法に関する短かい叙説」、「詩と詩論」第9冊、1930年9月。　ヂオルヂェット・カミーユの仏訳より 'A Brief Introduction to the Method of Paul Valéry' の翻訳。

(6) 一戸務訳「批評に於けるエキスペリメント」、「詩と詩論」別冊、1930年12月。'Experiment in Criticism'の翻訳。

(7) 橋詰光晴訳「ブレイク論」、「ブレイクとホイットマン」、1931年11月。'Blake' の翻訳。

(8) 北村常夫訳「形而上学的詩人達」、「詩と詩論」第14冊、1931年12月。'The Metaphysucal Poets'の翻訳。

(9) 荒川龍彦訳「ユリシイズ批評」、「文学」第2冊、1932年6月。'Ulysses, Order and Myth' の翻訳。

(10) 竹友藻風訳註「A Song for Simeon」、「英語の研究と教授」、1932年10月。

(11) 北村常夫訳「ダンテ」（序言、1・地獄篇）、「文学」第4冊、1932年12月。「ダンテ」（2・浄火篇と天堂篇）、「文学」第6冊、1933年6月。'Dante'の翻訳。

(12) 佐藤清訳注「テイ・エス・エリオットの詩評釈」、「英語青年」第69巻、第1－2、5－8号、1933年4－7月。

(13) 中野好夫訳「ボードレール」、「文学」第6冊1933年6月。'Baudelaire'の翻訳。

(14) 北村常夫「シェークスピア論上」、「新修シェークスピア全集発行所特別付録沙翁復興」第5号、1934年2月。「シェークスピア論下」同上、第7号、1934年4月。

(15) 近藤悦訳「うつろの人々」、「英文学風景」、1934年6月。'The Hollow Men' の翻訳。

(16) 小西邦太郎訳「ジョンスンの『ロンドン』及び『人間欲望の虚栄』に対する序文」、「制作」II、1934年6月。'Johnson's "London" and "The Vanity of Human Wishes"'の翻訳。

(17) 山路太郎訳「教会とは何を意味するか」、「英文学風景」、1935年3月。'What does the Church stand for?' の翻訳。

(18) 辻茂雄訳　「ブレイク」、「Oberon」、1935年3月。

(19) 海老池俊治訳「比斯的里」、「Oberon」第13号、1936年3月。

(20) 竹友藻風訳「Eyes that last I saw in tears (T.S. Eliot)」、「ポエチカ」第20巻、第4号、1936年10月。

(21) 上田保訳「政治と知識階級」、「新領土」第1巻、第4号、1937年8月。*Criterion* より。

(22) 阿比留信訳「アナバアスについて」、「三田文学」、1938年1月。'Anabasa' の翻訳。

(23) 岡橋祐訳「ポオル・ヴァレリイの方法」、「新領土」第2巻、第11号、1938年3月。

(24) 児玉実用訳「宗教と文学」、「新領土」第3巻、第14号、1938年6月。'Religion and Literature' の翻訳。

(25) 上田保訳「荒地、I死者の埋葬」、「新領土」第3巻、第16号、1938年8月。*The Waste Land*, Chapter I: The Burial of the Dead の翻訳。

(26) 大澤衛・安藤一郎訳「パスカルの『感想録』」、「新領土」第4巻、第19号、1938年11月。'The "Pensees" of Pascal' の翻訳。

(27) 土方辰三訳注「荒地」、「Oberon」第2巻第3－4号、第3巻第1号、1938－39年。

(28) 上田保訳「風の夜の狂詩」、「新領土」第4巻、第22号、1939年2月。'Rhapsody on a Windy Night' の翻訳。

(29) 中野好夫訳注「T.S. Eliot: Last Words」、「英語青年」第81巻、第2－6号、1939年4－6月。「クライテリオン」廃刊の辞 ('Last Words')

(30) 訳者未詳「ヨーロッパ精神の危機」、「セルパン」第100号、1939年5月。「クライテリオン」廃刊の辞よりの抄訳。

(31) 上田保「荒地、II将棋遊び」、「新領土」第5巻、第26号、1939年6月。

The Waste Land, ChapterII: A Game of Chess の翻訳。

(32) 福原麟太郎訳註「Religion and Literature」、「英語青年」第82巻、第5－11号、1940年。

(33) 訳者未詳「チャーチルとウエルズ」、「セルパン」第113号、1940年6月。

(34) 本田易平訳「キリスト教社会の観念」、「ユニコン」、1940年7月。'The Idea of a Christian Society' の翻訳。

B　参考文献

B－1　全巻がエリオットに関する単行本

(1) 荒川龍彦『T.S. エリオット』不二出版社、1933年。

(2) 深瀬基寛『T.S. エリオット』英米文学評伝叢書、研究社、1937年。

(3) 佐藤清『T.S. エリオット詩研究』研究社、1937年。

B－2　一部がエリオットの関する単行本

(1) 西脇順三郎『超現実主義詩論』厚生閣、1929年。

(2) 福岡益雄編「付現代詩人人名辞典」、『詩語辞典』金星堂1930年。

(3) 町野静雄『今日のイギリス文学』金星堂、1932年。

(4) 井上思外雄「エリオットの「荒地」」、『英語英文学講座』研究社、1933年。

(5) 佐藤清「T.S. エリオット」、『世界文学講座2』岩波書店、1933年。

(6) 西脇順三郎『ヨーロッパ文学』第一書房、1933年。

(7) 西脇順三郎『輪のある世界』第一書房、1933年。

(8) 春山行夫『ジョイス中心の文学運動』第一書房、1933年。

(9) 春山行夫「T.S. エリオット」、『二十世紀英文学の新運動』第一書房、1933年。
(10) 深瀬基寛「現代文学の諸傾向」、『世界文学講座2』岩波書店、1933年。
(11) 西脇順三郎『現代英吉利文学』第一書房、1934年。
(12) 春山行夫『文学評論』厚生閣、1934年。
(13) 土居光知『英文学の感覚』岩波書店、1935年。
(14) 成田成寿『英吉利現代批評文学』研究社、1936年。
(15) 吉江　松『世界文芸大辞典』第2、7巻、中央公論社、1936年。
(16) 深瀬基寛『現代英文学の課題』教養文庫、弘文堂、1939年。
(17) 荒川龍彦『現代英国の文学思想』理想社、1940年。
(18) 春山行夫『新しき詩論』第一書房、1940年。
(19) 成田成寿『文芸思潮史』英友叢書8、興文社、1941年。

B－3　定期刊行物

「Albion」

(1) 無署名「T.S. Eliot の劇詩及び劇詩人論」、第1巻、第1号、1933年7月。
(2) 森六郎「Couch-Spender-Eliot」、第4巻、第5号、1937年3月。
(3) 大浦幸男「T.S. Eliot の詩論－芸術活動の性質について」、第5巻、第4号、1938年1月。
(4) 深瀬基寛「エリオットの詩語の特質と訳語の問題」、第6巻、第1号、1938年7月。
(5) 府川功「T.S. Eliot の伝統主義の素描」、第7巻、第3号、1940年5月。

「英語研究」

(6) 西崎一郎「English Poems に就て」、第20巻、第3号、1927年6月。
(7) Edmund Blunden 「Literary England」、第21巻、第11号、1929年2月。

(8) 滄浪子「批評家の寿命」、第22巻、第4号、1929年7月。

(9) Edmund Blunden「Literary England」、第22巻、第8号、1929年11月。

(10) Edmund Blunden「Literary England」、第22巻、第9号、1929年12月。

(11) 原一郎「T.S. Eliotの文芸思想」、第23巻、第1号、1930年4月。

(12) 原一郎「T.S. Eliotの古典主義」、第24巻、第4号、1931年6月。

(13) 朱門桐「T.S. Eliotの比喩」、第24巻、第5号、1931年8月。

(14) 朱門桐「T.S. Eliot: On Donne」、第25巻、第5号、1932年8月。

(15) 北村常夫「T.S. EliotのBuilding up the Chrisitan World」、第25巻、第6号、1932年9月。

(16) 朱門桐「T.S. Eliotと普通の読者」、第25巻、第11号、1933年2月。

(17) 矢野禾積「T.S. Eliot書誌」、第26巻、第3－10号、1933年。

(18) 佐藤清「T.S. Eliotの批評論」、第26巻、第8号、1933年11月。

(19) 北村常夫「『荒地』と其後の新詩人」、第26巻、第12号、1934年3月。

(20) Theodore Spencer「The Poetry of T.S. Eliot」(The Atlantic Monthly, Jan., 1931)、第27巻、第3号、1934年6月。

「英語青年」

(21) 杉田未来「米国現代詩壇とその論評」、第46巻、第12号、1922年3月。

(22) 福原麟太郎「現英文壇の批評家」、第51巻、第1号、1924年4月。

(23) E.N.「英国新刊」、第54巻、第10号、1926年2月。

(24) 無署名「第2回英文学並行講座」、第57巻、第12号、1927年9月。

(25) 斎藤勇「現代英国詩壇一瞥(1)」、第58巻、第1号、1927年10月。

(26) 斎藤勇「現代英国詩壇一瞥(6)」、第58巻、第6号、1927年12月。

(27) 大塚学人「文壇消息」、第60巻、第5号、1928年12月。

(28) 矢野峰人「Partial Portraits」、第60巻、第12号、1929年3月。

(29) 無署名「書誌」、第61巻、第9号、1929年8月。

(30) 深瀬基寛「T.S. エリオット」、第64巻、第2号、1930年10月。

(31) Y.T.「T.S. エリオットの新研究書」、第65巻、第8号、1931年7月。

(32) 荒川龍彦「T.S. Eliotとその批評的立場」、第69巻、第5号、1933年7月。

(33) 荒川龍彦「詩と詩論」、第70巻、第12号、1934年3月。

(34) S.N.「T.S. Eliot の Babbitt 論」、第70巻、第12号、1934年3月。

(35) 工藤好美「T.S. Eliot 論」、第71巻5－6号、1934年6月。

(36) 荒川龍彦「伝統と異端（下）」、第72巻、第8号、1935年1月。

(37) 斎藤勇「T.S. Eliot の近業」、第74巻、第1号、1935年10月。

(38) オベロン同人「現代英詩座談会」、第74巻、第12号、1936年3月。

(39) 矢野峰人「T.S. Eliot 略伝」、第75巻第4号、1936年5月。

(40) R.A. Scott-James、福原麟太郎訳注「エリオット氏と「基準」誌」、第81巻、第1号、1939年4月。

(41) 成田成寿「T.S. Eliot, Virginia Woolf の新著」、第82巻、第9号、1940年2月。

(42) 成田成寿「T.S. Eliot の新詩」、第84巻、第8号、1941年1月。

(43) 荒川龍彦「T.S. Eliot と現代」、第85巻、第3号、1941年5月。

(44) 西脇順三郎「T.S. Eliot 氏をめぐりて」、第85巻、第4、5、7、8、10－12号、1941年、5－9月。

「英文学研究」

(45) Edward Shanks、井上思外雄訳「現代英詩概観　Edward Shanks: 'The "New" Poetry, 1911-1925' (*The Quarterly Review*, Jan, 1926)」、第6巻、第1号、1926年4月。

(46) Arundell del Re.「批評紹介－The Library Table」、第8巻、第3号、1928年4月。

(47) 無署名「書目」、第9巻、第2号、1929年4月。

(48) A.P. Rossiter「The Poetry of T.S. Eliot」、第9巻、第3号、1929年7月。

(49) 深瀬基寛「APHOROSM」、第9巻、第3号、1929年7月。

(50) 馬場睦夫「反動思想的思想家としての T.S. Eliot」、第11巻、第2号、1931年4月。

(51) 寺本喜一「ティ・エス・エリオット研究」、第11巻、第4号、1931年10月。

(52) 荒川龍彦「T.S. Eliot の Arnold と Pater の解釈」、第13巻、第2号、1933

年5月。

(53) 志賀勝「理智と信念－T.S. Eliot の方向」、第14巻、第1号、1934年。

(54) T.K.「T.S. Eliot: *The Use of Poetry and the Use of Criticism*」、第14巻、第3号、1934年。

(55) T.K.「T.S. Eliot: *After Strange Gods*」、第14巻、第3号、1934年。

(56) 原一郎「詩と信と－Richards 対 Eliot」、第15巻、第2号、1935年5月。

(57) 大竹勝「T.S. Eliot: The Lyrical Prophet of Chaos」、第16巻、第4号、1936年11月。

(58) T.K.「Eliot 研究書＜批評紹介＞」、第18巻、第1号、1938年。

(59) T.S.「T.S. Eliot: The Family Reunion」、第19巻、第2号、1939年5月。

(60) 矢本貞幹「文芸批評家としてのT.S. Eliot」、第19巻、第3号、1939年8月。

(61) 矢本貞幹「文化批評家としてのT.S. Eliot」、第20巻、第1号、1940年1月。

(62) 野上豊一郎「T.S. Eliot の"The Family Reunion"」、第20巻、第2号、1940年4月。

(63) 児玉実用「Matthew Arnold とT.S. Eliot」、第20巻、第3号、1940年7月。

「英文学風景」

(64) 荒川龍彦「ロレンスとエリオット」、1934年5月。

(65) 山路太郎「感性の人　T.S. Eliot」、1934年8月。

(66) 山本盛枝「T.S. エリオットの岩」、1934年10月。

(67) 諸星拳三郎「批評家としての T.S. Eliot」、1936年3月。

「Oberon」

(68) 島村明「T.S. Eliot、その「知性」に就いて」、1933年6月。

(69) 中橋太郎「T.S. Eliot のBen Johnson 論」、第5号、1934年5月。

(70) 無署名「T.S. エリオットと「荒地」」、第2巻、第4号、1939年4月、第3巻、第1号、1939年6月。

(71) 加納秀夫「エリオット「荒地」他3篇」、1941年9月。

「海竜」

(72) 北村常夫「T.S. Eliot の研究書目」、1933年6月。

(73) 竜口直太郎「T.S. Eliot の見た Hardy」、第9号、1936年10月。

「季刊文学」

(74) 北村常夫「エリオットのダンテ論」、第4号、1932年12月。

(75) 西脇順三郎「エリオット論」、第4号、1932年12月。

(76) 中野好夫「エリオットと加特力」、第4号、1932年12月。

(77) 岩崎良三「ヒュマニズム」、第4号、1932年12月。

(78) 佐藤朔「カトリック文学論」、第4号、1932年12月。

「研究社月報」

(79) 白鴎散史「T.S. Eliot の『荒廃地』の荒廃」、1953年3月。

(80) 白汀漁郎「エリオットとバビット」、1937年2月。

「作品」

(81) 無署名「T.S. Eliot の批評原則」、第42号、1933年10月。

(82) 春山行夫「エリオットの狐狩り」、第49号、1934年5月。

「The Muse」

(83) 無署名「Literary Gleanings」、第1巻、第6号、1925年3月。
(84) 無署名「New Publications」、第4巻、第5号、1927年8月。
(85) 無署名「New Publications」、第5巻、第6号、1928年3月。
(86) 深瀬基寛「A Professor Protests」、第6巻、第1号、1928年4月。
(87) 深瀬基寛「Matthew Arnoldと現代の批評的精神」(I)、第7巻、第1号、(II)、第7巻、第2号、(III)、第7巻、第3号、(IV)、第7巻、第4号、1928年10月－1929年1月。

「詩神」

(88) 滝口修造「英国詩壇の傾向に就いて」、第5巻、第9号、1929年9月。
(89) 伊藤整「モダニズムとT.S.エリオット」1931年3月。

「詩と詩論」

(90) 春山行夫「T.S.エリオット」、第4冊、1929年6月。
(91) 上田保「T.S.エリオットのついて」、第6冊、1929年12月。
(92) 西脇順三郎「二十世紀英国文学評論（総論）」別冊：現代英文学評論、1930年12月。
(93) オロディングトン、亀山勝訳「T.S.エリオットの詩」、第12冊、1931年6月。
(94) ラモン・フェルナンデス、太田咲太郎訳「T.S.エリオットのクラシシスム」、第13冊、1931年。
(95) 原一郎「T.S.エリオット批評」、第13冊、1931年9月。
(96) 荒川龍彦「T.S.エリオットの主知的批評論」第14冊、1931年12月。

「新領土」

(97) 春山行夫「詩論 (3) 」、第2巻、第9号、1938年1月。

(98) 岡橋祐「T.S. エリオット」、第2巻、第9号、1938年1月。

(99) 春山行夫「詩論 (5) 」、第2巻、第11号、1938年3月。

(100) 春山行夫「詩論 (6) 」、第2巻、第12号、1938年4月。

(101) ウインダム・ルイス、加納秀夫訳「エリオット論」、第3巻、第18号、1938年8月。

(102) S. スペンダー、守木清訳「エリオット論」、第3巻、第18号、1938年8月。

「世界文学評論」

(103) 安藤一郎「エリオットのボードレール論」、第1巻、第3号、1930年11月。

(104) 堀大司「エリオットの批評に於けるエクスペリメント」、第1巻、第3号、1930年11月。

「文学」

(105) 荒川龍彦「エリオットの『パスカルのパンセ』に寄す」、第1冊、1932年3月。

(106) 西脇順三郎「T.S. エリオット」、第4冊、1932年12月。

(107) 中野好夫「T.S. エリオットと英国加特力主義」、第4冊、1932年12月。

(108) ゴオドン・ジョージ、町野静雄訳「T.S. エリオット」、第4冊、1932年12月。

(109) 葛畑達夫「T.S. エリオット」、第4冊、1932年12月。

「三田文学」

(110) 西脇順三郎「プロファヌス」、復活号第1巻、第1号、1926年4月。

(111) 西脇順三郎「超自然主義」、第3巻、第2号、1928年2月。
(112) 西脇順三郎「英吉利二十世紀文学の発達」、第3巻、第9号、1928年9月。
(113) 上田保「エッフェル塔上の蜃気楼－物質を化粧する薔薇」、第4巻、第8号、1929年8月。

その他

(114) 無署名「海外文壇新声」、「文学創作講座」、1929年。
(115) 北村常夫「現代イギリス詩壇の展望」、「詩と現実」第2号、1930年9月。
(116) リチャヅ、瀬沼茂樹訳「T.S. Eliot の詩」、「今日の詩」、1931年6月。
(117) 荒川龍彦「T.S. エリオットの主知的批評論」、「文芸思潮」、1931年9月。
(118) ルネ・ウラル、秋田滋訳「新英文学の展望」、「新聞学研究」、1932年5月。
(119) 志賀勝　「エリオットの純粋文学論」、「読売新聞」、1932年9月3、6－7日。
(120) 堀大司「Hamlet と T.S. Eliot」、「新英米文学」第2巻、第4－5号、1933年8－9月。
(121) 春山行夫「エリオットの一家言」、「行動」、1934年3月。
(122) 石川欣一「エリオットの「ロック」」、「東京日日新聞」、1934年7月10日。
(123) 三浦金石「T.S. エリオットの「荒廃の地」」、「試品」、1934年11月。
(124) 織田正信「エリオットとロレンス」、「文芸」、1935年11月。
(125) 小川鈞「T.S. Eliot の戯曲－*Murder in the Cathedral*」、「英語の研究と教授」第40巻、第10号、1936年1月。
(126) 加藤朝鳥「現代詩人 T.S. エリオット」、「反響」、1936年10月。
(127) 大内修二郎「T.S. エリオットの古典的批評」、「英文学評論」第1巻、第7号、1937年11月。

荒　地

T・S・エリオット

1　死者の埋葬

四月は最も残酷な月である、
死地からライラックを育て、
記憶と欲望とを混合し、
鈍重な根茎を春雨で刺激する。
冬は我々を暖かくしてくれた、
地球を忘却の雪で覆つ、
小さい生命を乾いた球根で養ひながら。
夏は驟雨をともなつて
スタルンベルガア湖の上にやつて来て
我々を驚かした。
我々は柱廊に雨をよけ、
日が照りだすと、ホーフガルテンを散歩した。
そして珈琲を飲み、一時間ばかり談笑した。
わたしロシア人ではありませんわ、リタウエン生れの生粋のドイツ人なの。
小さいときには従兄の
大公様の邸にゐましたの、
従兄は私を橇にのせました。
私はこはかつたのです。マリイ、マリイしつかり摑まつてら、と彼は云ひました。
そして一緒に滑りました。
山の中では、誰でも自由に感じますわ。
わたし夜はよく眠ります、そして冬は南へ行きます。

しがみついてゐるこの根はなにか、
この石地から伸び出てゐる枝はなにか。人間の子よ、
君には云ふことも、推測することもできない。君はただ
打ちこわされた総像の一個しか知つてゐないのだから。太陽は烈々と照り、
枯木は蔭を落さず、蟋蟀はなぐさめを與へず、
乾きつた石は水の響きをたてない。ただ
赤い岩の下に蔭があるばかり。
ここの赤い岩の蔭に来給へ、
そしたら、君のうしろで大股に歩く例の君の影とも、
君に曾はうと立ち上る夕方の君の影とも、
そのちどらとも違つたある物を君に示さう。
一握りの塵のもつ恐怖を君に示さう。

さわやかに風は吹く
故郷の方へ
わがアイルランドのをとめよ
いまいづこにゐるや。

「あなたは一年前はじめて私にヒアシンスをくださいました。
「そして私はヒヤシンス娘と呼ばれました。」

——だが、我々がヒアシンスの花園から遅く帰つてきたとき、
お前の胸はいつぱいで、お前の髪はぬれ、
僕は
云ふ言葉も知らず、目は眩んだ。生死もわからず、
光りの中心、静寂に見入つて
僕は言葉もでなかつた。
海は荒れ、物憂もなし。

ソソストリス夫人は有名な千里眼で
悪性の風邪をひいてゐたが、しかし
一組の占ひカルタを持つたヨーロッパいちの
賢い女として知られてゐる。彼女が云つた、
これがあなたのカルタ、溺死したフェニキアの水夫です。
（彼の眼は真珠となつたのです、こらんなさい。）
ここに岩の魔人ベラドンナ、変遷の女がゐます。
ここに三本の杖を持つてゐる男が、そして
ここに車輪があります。
ここに片目の商人がゐます。この白いカルタは
彼が背負つて行くものを示してゐるのですが、
私には見ることが禁じられてゐます。私には
絞刑になつた男が見えません。水死を恐れなさい。
輪をつくつてぐるぐると廻つてゐる人々の
群が見えます。
ではこれまで。エクイトン夫人にお伺ひでしたら、
天国は私が持つて行くとお傳へください。
密閉は注意深くいたさねばなりませんから。

貧民のない都市。
冬の夜明けの茶色の霧の下を、
多くの群衆がロンドン橋の上を流れた。
死がこんなに数多くの人々を滅ぼしてゐたとは今まで思ひもつかなかつた。
短い、時折りの嘆息が投げられ、
めいめい足先を見詰めた。
流れを描いて丘を登り、キング・ウィリアム街をくだつた、そこで
聖マリヤ・ウルノス寺院が
九時の最後の死の時を打つた。
私はそこで知人を見つけ、「スタットンし
と叫んでよびとめた。
「君とはミレイでひとつ船に乗り合はせたね。
「去年君が庭に植えたあの死骸は
「芽を吹いたか。今年は花が咲くだらう。
「それとも突然の霜で花壇が荒されたかね。
「犬をよせつけないやうにし給へ、あいつは人間の味方だから。
「でないと、あいつは爪で掘り返してしまうからね。
「誠君！　偽善の読者よ！　我が同胞よ！
我が兄弟よ！」

上田　保　譯

資料Ⅰ－4　鮎川による西欧の文学作品の読み　①年代順

(年)	(月)	作品タイトル	作家名
1938	1	『作家論』	テーヌ
1938	1	『天才論』	ロンブロオゾオ
1938	1	『アルマンス』	スタンダール
1938	2	『カンデード』	ヴォルテール
1938	3	『狭き門』	ジイド、アンドレ
1938	3	『阿片』	コクトー
1938	3	『ドルヂェル伯の舞踏会』	ラディゲ、レイモン
1938	3	『ソヴィエト旅行記』	ジイド、アンドレ
1938	4	「文学と実生活」	モンテルラン、アンリ
1938	4	「詩は滅亡するか」	シュナイダー、イシドール
1938	7	「現代教育と古典」	エリオット、T.S.
1938	7	『現代フランスの思想的対立』	ブルトン、アンドレ
1938	8	『肉体の悪魔』	ラディゲ、レイモン
1938	8	『肉体の悪魔』	ラディゲ、レイモン
1938	8	『芸術と精神分析』	フロイト
1938	8	『パリの憂鬱』	ボードレール
1938	8	『精神分析』	フロイト
1938	8	『わが青春記』	コクトー
1938	8	『芸術と精神分析』	フロイト
1938	9	『建築と絵画』	ラスキン
1938	9	『春の目覚め』	ベデキント
1938	9	『夢と哲学』	ベルグソン
1938	9	『オルフェ』	コクトー
1938	9	『白紙』	コクトー
1938	9	『放蝶』	アラゴン、ルイ
1938	9	『若き日の芸術家の肖像』	ジョイス、ジェームズ
1938	9	『エリオット論』	ルイス、ウインダム
1938	9	『心理学概論』	リーグ、ブレブス
1938	9	『阿片溺愛者の告白』	ド・クインシー、トーマス
1938	11	『山師トマ』	コクトー
1938	11	『雄鶏とアルルカン』	コクトー
1938	11	『方法序説』	デカルト
1938	11	『自然論』	エマスン
1938	12	『夢と人生』	ネルヴァル
1939	1	『スワンの方』	プルースト
1939	7	『ユリシーズ』	ジョイス、ジェームズ
1940	3	『素晴らしき新世界』	ハックスレイ、オルダス
1940	3	『形而上学』	アリストテレス
1940	3	「誠実な人間の抗議」	ジイド、アンドレ
1941	8	『ダランベールの夢』	ヂドロ
1941	8	「痛恨について」	モンテーニュ
1941	9	『贋金つくり』	ジイド、アンドレ
1941	9	『失われた時を求めて』	プルースト
1941	9	『居酒屋』	ゾラ
1941	9	『未成年』	ドストエフスキー
1941	9	『ユリシーズ』	ジョイス、ジェームズ
1941	9	『ドン・キホーテ』	セルバンテス
1941	9	『がざに盲ひて』	セルバンテス
1941	9	『戦争と平和』	トルストイ
1941	9	『父と子』	ツルゲーネフ
1941	9	『トリビュラ・ボノメ』	リラダン
1941	9	『体位点』	ハックスレイ、オルダス
1941	9	『パリュウド』	ジイド、アンドレ
1941	9	『プロメテ』	ジイド、アンドレ
1941	9	『未成年』	ドストエフスキー
1941	9	『魔の山』	マン、トーマス
1941	9	『パルムの僧院』	スタンダール
1941	9	『赤と黒』	スタンダール
1941	9	『二重の誤解』	メリメ
1941	9	『ヴェニスに死す』	マン、トーマス
1941	9	『ラミエル』	スタンダール
1941	9	『ドン・キホーテ』	セルバンテス
1941	9	『ドミニック』	フロマンタン
1941	9	『ボヴァリー夫人』	フロベール
1941	12	『恋愛論』	スタンダール
1942		『一漫遊者の覚書』	スタンダール
1942		『恋愛論』	スタンダール
1942		『カラマーゾフの兄弟』	ドストエフスキー
1942		『赤と黒』	スタンダール
1942		『アンリ・ブリュラールの生涯』	スタンダール
1942		『パルムの僧院』	スタンダール
1942		『エゴティスムの記』	スタンダール
1942	2	『ナルシス断章』	ヴァレリイ、ポール
1942	2	『海辺の墓地』	ヴァレリイ、ポール
1942	2	『殺子の一挿』	マラルメ
1942	2	『魅惑』	ヴァレリイ、ポール
1947	7	「現代文学の危機と青年」	バンダ、ジュリアン
1947	7	『ユリシーズ』	ジョイス、ジェームズ
1947	7	『贋金つくり』	ジイド、アンドレ
1947	7	『魔の山』	マン、トーマス
1947	7	『アナレクタ』	ヴァレリイ、ポール
1947	7	「精神の危機」	ヴァレリイ、ポール
1947	9	『哲学的断片』	キルケゴール
1947	9	『兄弟殺し』	カフカ、フランツ
1947	9	『審判』	カフカ、フランツ
1947	9	『万里の長城造営に際して』	カフカ、フランツ
1947	9	『スペキュレーション』	ヒューム、T.E.
1947	9	『皇帝の使者』	カフカ、フランツ
1947	9	『カラマーゾフの兄弟』	ドストエフスキー
1947	11	『悪の華』	ボードレール
1947	11	『異神を追いて』	エリオット、T.S.
1947	11	『彼方』	ユイスマンス
1947	11	『ヒューマニズムと宗教的態度』	ヒューム、T.E.
1947	11	『燼灰』	ヒューム、T.E.
1947	11	「地獄篇」	ダンテ
1947	11	『パリの憂鬱』	ボードレール
1947	11	『近代の精神』	ロバーツ、マイケル
1947	11	『荒地』	エリオット、T.S.
1947	11	「ダンテ論」	エリオット、T.S.
1947	11	「ボードレール論」	エリオット、T.S.
1947	11	『意味への逃脱』	ウォーコップ
1947	11	『パンセ』	パスカル
1947	11	『<パンセ>の一句をめぐって』	ヴァレリイ、ポール
1947	11	『試練に立つ文明』	トインビー
1947	11	『豚飼いの帯』	ウォーコップ
1947	11	『汝の欲するところをなせ』	ハックスレイ、オルダス
1947	11	『永遠の哲学』	ハックスレイ、オルダス
1947	11	『倫理学』	ミル、J.S.
1947	11	『パンセ』	パスカル
1948	5	『荒地』	エリオット、T.S.
1948	12	『荒地』	エリオット、T.S.
1951	7	『現代詩について』	マックリーシュ、アーチボル
1951	7	『詩の効用と批評の効用』	エリオット、T.S.
1951	7	『四つの四重奏』	エリオット、T.S.
1951	7	『荒地』	エリオット、T.S.
1951	7	『詩への希望』	ルイス、C.D.
1951	7	『荒地』	エリオット、T.S.
1951	7	『海辺の墓地』	ヴァレリイ、ポール
1951	7	『兄弟殺し』	カフカ、フランツ
1951	7	『不安の年』	オーデン、W.H.
1951	7	『シュールレアリスムとは何か』	ブルトン、アンドレ
1951	7	「詩篇」（『旧約聖書』）	
1951	7	「T.E.ヒューム」	ロバーツ、マイケル
1952	8	『荒地』	エリオット、T.S.
1953	1	『神曲』	ダンテ
1953	1	『精神の危機』	ヴァレリイ、ポール
1953	1	『ヴァリエテ』	ヴァレリイ、ポール
1953	1	『詩の効用と批評の効用』	エリオット、T.S.
1953	1	『荒地』	エリオット、T.S.
1953	1	『四つの四重奏』	エリオット、T.S.
1955	4	「ブレイク論」	エリオット、T.S.
1955	4	『意味の意味』	オグデン、リチャーズ
1955	4	「J.アルフレッド・プルフロックの恋	エリオット、T.S.
1955	4	『詩の効用と批評の効用』	エリオット、T.S.
1955	4	『詩を読む若き人たちのために』	ルイス、C.D.
1955	4	「バービ・ヤール」	エフトシェンコ
1955	4	『破壊的要素』	スペンダー、スティーヴン
1955	4	「秋風へのオード」	シェリー
1955	4	「婚約」	スコヴェル、E.J.

1955	5	「戦争と平和の詩」	スペンダー、スティーヴン
1955	6	『芸術の意味』	リード、ハーバート
1956	9	『イエイツ伝』	エルマン、リチャード
1956	9	『破壊的要素』	スペンダー、スティーヴン
1956	9	『創造的要素』	スペンダー、スティーヴン
1957	9	『寺院の殺人』	エリオット、T.S.
1957	9	『プルフロックとその他の観察』	エリオット、T.S.
1957	9	『シジフォスの神話』	カミュ、アルベール
1957	9	「J.アルフレッド・プルフロックの恋	エリオット、T.S.
1957	9	『うつろな人々』	エリオット、T.S.
1957	9	『聖灰水曜日』	エリオット、T.S.
1957	9	『悪の華』	ボードレール
1957	9	『荒地』	エリオット、T.S.
1957	9	『荒地』	エリオット、T.S.
1957	9	『悪の華』	ボードレール
1957	9	「天国篇」（『神曲』）	ダンテ
1957	9	「地獄篇」（『神曲』）	ダンテ
1957	9	『四つの四重奏』	エリオット、T.S.
1957	9	「地獄篇」（『神曲』）	ダンテ
1958		『荒地』	エリオット、T.S.
1958	8	「戦争と平和の詩」	スペンダー、スティーヴン
1958	8	『ルバイヤット』	フィツジェラルド
1958	8	「再建の広島」	スペンダー、スティーヴン
1958	8	『荒地』	エリオット、T.S.
1958	12	『パンのみに生くるにあらず』	ドウジンツェフ
1958	12	『ジバゴ』	パステルナーク
1958	12	『四つの四重奏』	エリオット、T.S.
1958	12	'The Glass of Water'	スティーヴンズ、ウォレス
1958	12	『想像的な会話』	ランダー、ウォルター・サベ
1958	12	「詩」（エンカウンター５６）	ウェイン、ジョン
1959	2	『告白』	アウグスティヌス
1959	2	『方法序説』	デカルト
1959	2	『ソクラテスの追憶』	クセノフォン
1961	2	『わが闘争』	ヒトラー
1961	4	『我が闘争』	ヒトラー
1961	4	『賢者ゲーテ』	エリオット、T.S.
1961	4	『ギリシア古瓶によせるオード』	キーツ、ジョン
1964	5	『祭祀よりロマンスへ』	ウェストン、J.L.
1964	5	『金枝篇』	フレーザー、ジェームズ
1965	5	『ユリシーズ』	ジョイス、J.
1965	5	「妻に捧げる」	エリオット、T.S.
1965	5	『荒地』	エリオット、T.S.
1965	9	『ソフト・マシーン』	バロウズ、ウイリアム
1965	9	『回復不能麻薬中毒者の告白』	バロウズ、ウイリアム
1965	9	『路上にて』	ケルーアック
1965	9	『わが麻薬中毒記、最初の日日』	バロウズ、ウイリアム
1965	9	『ノーヴァ・特報』	バロウズ、ウイリアム
1965	9	『ゴー』	ホルムス
1965	9	『裸のランチ』	バロウズ、ウイリアム
1965	9	『死者の指は語る』	バロウズ、ウイリアム
1968	1	『バーチザン・レヴュー』（雑誌）	
1968	1	「マチウ書」（『聖書』）	
1968	4	「資産の内部」	リルケ
1968	4	『ニーベルンゲンの歌』	
1968	4	「鉛のこだま」	ホプキンズ、ジョラード・マ
1968	4	「バービ・ヤール」	エフトシェンコ
1968	4	『オデュッセイ』	ホメロス
1968	4	「美術学校」	ブレヴェール、ジャック
1968	4	『白金の嶺』	アルマン
1968	4	『西欧の没落』	シュペングラー
1968	4	『ローランの歌』	
1968	6	『アッシャー家の崩壊』	ポー
1968	6	「大鴉」	ポー
1968	6	『悪の華』	ボードレール
1968	6	『パリの憂鬱』	ボードレール
1968	6	『群衆の人』	ポー
1968	7	『ロリータ』	ナボコフ
1968	7	『攻撃論』	ロレンツ、コンラッド
1968	7	『ティファニーで朝食を』	カポーティ、トルーマン
1968	7	『オセロ』	シェイクスピア
1968	7	『冷血』	カポーティ、トルーマン
1968	7	『裁きは始まる』	テルツ、アブラム
1968	7	『人口の原理に関する研究』	マルサス
1968	7	『人口論』	マルサス
1968	9	『罪と罰』	ドストエフスキー
1968	9	『未成年』	ドストエフスキー
1968	9	『悪霊』	ドストエフスキー
1968	9	『地下室の手記』	ドストエフスキー
1968	9	『虐げられた人々』	ドストエフスキー
1968	9	『白痴』	ドストエフスキー
1968	9	『カラマーゾフの兄弟』	ドストエフスキー
1969	4	「キャントウズ」	パウンド、エズラ
1969	4	『荒地』	エリオット、T.S.
1969	4	「ヒュー・セルウィン・モーバリー」	パウンド、エズラ
1969	5	『帝国主義論』	レーニン
1969	5	「ヴェトナムに対する作家の態度」	グレイブズ、ロバート
1969	8	『カラマーゾフの兄弟』	ドストエフスキー
1969	12	『エンジンが唸る時』	モス、スターリング
1969	12	『素晴らしき新世界』	ハックスレー、オルダス
1969	12	『１９８４年』	オウエル、ジョージ
1970	6	「秋風へのオード」	シェリー
1970	6	「原子時代における人間の土着性」	ハイデガー
1970	6	「ギリシャ古瓶のオード」	キーツ
1970	7	『裸のランチ』	バロウズ、ウイリアム
1970	7	『ジャンキー』	バロウズ、ウイリアム
1970	7	『滅滅者』	バロウズ、ウイリアム
1970	9	「見よ、異邦人！」	オーデン、W.H.
1970	9	「亡命者のブルース」	オーデン、W.H.
1970	9	『狩猟で暮らした僕らの先祖』	オーデン、W.H.
1970	9	「スペイン１９３７年」	オーデン、W.H.
1970	9	「１９３９年９月１日」	オーデン、W.H.
1970	9	"Another Time"	オーデン、W.H.
1970	9	*Collected Shorter Poems 1927-1957*	オーデン、W.H.
1970	9	「ロシア紀行」	ミラー、アーサー
1970	12	『春の奔流』	ヘミングウェイ
1970	12	『武器よさらば』	ヘミングウェイ
1970	12	『老人と海』	ヘミングウェイ
1970	12	『敗れざる者』	ヘミングウェイ
1972	2	『ル・ジャポン』	デラシュス、ジャン・フラン
1972	3	『心の知恵』	ミラー、ヘンリー
1972	3	『わが生涯の日々』	ミラー、ヘンリー
1972	11	『魔の山』	マン、トーマス
1972	11	『パルムの僧院』	スタンダール
1972	11	『哲学の貧困』	マルクス
1973	2	『恐怖の谷』	ドイル
1973	2	『シャーロック・ホームズの事件簿』	ドイル
1973	2	『四つの署名』	ドイル
1973	2	『緋色の研究』	ドイル
1973	2	『ホワイト・カンパニー』	ドイル
1973	2	『ホームズの最後の挨拶』	ドイル
1973	2	『シャーロック・ホームズの功績』	コナンドイル、エイド・リア
1973	2	『白衣の女』	コリンズ、ウィルキー
1973	2	『月長石』	コリンズ、ウィルキー
1973	2	『モルグ街の殺人』	ポー、エドガー・アラン
1973	2	『荒涼館』	ディケンズ、チャールズ
1973	2	『バーナビー・ラッジ』	ディケンズ、チャールズ
1973	2	『シャーロック・ホームズの帰還』	ドイル
1973	2	『盗まれた手紙』	ポー、エドガー・アラン
1973	2	『ルコック探偵』	ガボリオ、エミール
1973	2	『追いつめられて』	クイーン、エラリー
1973	2	『ドイル伝』	カー、ディクスン
1973	2	『二輪車の謎』	ヒューム、ファーガス
1973	2	『マリー・ロージェの謎』	ポー、エドガー・アラン
1973	2	『まだらのひも』	ドイル
1973	2	『シャーロック・ホームズの回想』	ドイル
1973	2	『バスカビル家の犬』	ドイル
1973	2	『シャーロック・ホームズの冒険』	ドイル
1973	2	『赤毛クラブ』	ドイル
1973	2	『唇の捩れた男』	ドイル
1973	2	『ボヘミア王家の醜聞』	ドイル

②作家別

(年)	(月)	作品タイトル	作家名
1951	7	「詩篇」（『旧約聖書』）	
1968	1	『バーチザン・レヴュー』（雑誌）	
1968	1	「マチウ書」（『聖書』）	
1968	4	『ローランの歌』	
1968	4	『ニーベルンゲンの歌』	
1959	2	『告白』	アウグスティヌス
1938	9	『放蕩』	アラゴン、ルイ
1940	3	『形而上学』	アリストテレス
1968	4	『白金の嶺』	アルマン
1942	2	『魅惑』	ヴァレリイ、ポール
1942	2	『ナルシス断章』	ヴァレリイ、ポール
1942	2	『海辺の墓地』	ヴァレリイ、ポール
1947	7	『アナレクタ』	ヴァレリイ、ポール
1947	7	「精神の危機」	ヴァレリイ、ポール
1947	11	『<パンセ>の一句をめぐって』	ヴァレリイ、ポール
1951	7	『海辺の墓地』	ヴァレリイ、ポール
1953	1	『ヴァリエテ』	ヴァレリイ、ポール
1953	1	『精神の危機』	ヴァレリイ、ポール
1958	12	「詩」（エンカウンター６６）	ウェイン、ジョン
1964	5	『祭祀よりロマンスへ』	ウェストン、J.L.
1947	11	『豚飼いの帯』	ウォーコップ
1947	11	『意味への逸脱』	ウォーコップ
1938	2	『カンデード』	ヴォルテール
1955	4	「バービ・ヤール」	エフトシェンコ
1968	4	「バービ・ヤール」	エフトシェンコ
1938	11	『自然論』	エマスン
1938	7	「現代教育と古典」	エリオット、T.S.
1947	11	「ボードレール論」	エリオット、T.S.
1947	11	「ダンテ論」	エリオット、T.S.
1947	11	『荒地』	エリオット、T.S.
1947	11	『異神を追いて』	エリオット、T.S.
1948	12	『荒地』	エリオット、T.S.
1951	7	『荒地』	エリオット、T.S.
1951	7	『四つの四重奏』	エリオット、T.S.
1951	7	『詩の効用と批評の効用』	エリオット、T.S.
1951	7	『荒地』	エリオット、T.S.
1953	1	『詩の効用と批評の効用』	エリオット、T.S.
1953	1	『四つの四重奏』	エリオット、T.S.
1953	1	『荒地』	エリオット、T.S.
1955	4	『詩の効用と批評の効用』	エリオット、T.S.
1955	4	「ブレイク論」	エリオット、T.S.
1957	9	『聖灰水曜日』	エリオット、T.S.
1957	9	『うつろな人々』	エリオット、T.S.
1957	9	「J.アルフレッド・プルフロックの恋	エリオット、T.S.
1957	9	『プルフロックとその他の観察』	エリオット、T.S.
1957	9	『荒地』	エリオット、T.S.
1957	9	『荒地』	エリオット、T.S.
1957	9	『四つの四重奏』	エリオット、T.S.
1957	9	『寺院の殺人』	エリオット、T.S.
1958		『荒地』	エリオット、T.S.
1958	8	『荒地』	エリオット、T.S.
1958	12	『四つの四重奏』	エリオット、T.S.
1961	4	『賢者ゲーテ』	エリオット、T.S.
1965	5	「妻に捧げる」	エリオット、T.S.
1965	5	『荒地』	エリオット、T.S.
1969	4	『荒地』	エリオット、T.S.
1948	5	『荒地』	エリオット、T.S.
1952	8	『荒地』	エリオット、T.S.
1955	4	「J.アルフレッド・プルフロックの恋	エリオット、T.S.
1956	9	『イエイツ伝』	エルマン、リチャード
1951	7	『不安の年』	オーデン、W.H.
1970	9	*Collected Shorter Poems 1927-1957*	オーデン、W.H.
1970	9	『狩猟で暮らした僕らの先祖』	オーデン、W.H.
1970	9	「亡命者のブルース」	オーデン、W.H.
1970	9	「見よ、異邦人！」	オーデン、W.H.
1970	9	"Another Time"	オーデン、W.H.
1970	9	「１９３９年９月１日」	オーデン、W.H.
1970	9	「スペイン１９３７年」	オーデン、W.H.
1969	12	『１９８４年』	オウエル、ジョージ
1955	4	『意味の意味』	オグデン、リチャーズ
1973	2	『ドイル伝』	カー、ディクスン
1947	9	『皇帝の使者』	カフカ、フランツ
1947	9	『万里の長城造営に際して』	カフカ、フランツ
1947	9	『兄弟殺し』	カフカ、フランツ
1947	9	『審判』	カフカ、フランツ
1951	7	『兄弟殺し』	カフカ、フランツ
1968	7	『ティファニーで朝食を』	カポーティ、トルーマン
1968	7	『冷血』	カポーティ、トルーマン
1973	2	『ルコック探偵』	ガボリオ、エミール
1957	9	『シジフォスの神話』	カミュ、アルベール
1970	6	「ギリシャ古瓶のオード」	キーツ
1961	4	『ギリシア古瓶によせるオード』	キーツ、ジョン
1947	9	『哲学的断片』	キルケゴール
1973	2	『追いつめられて』	クイーン、エラリー
1959	2	『ソクラテスの追憶』	クセノフォン
1969	5	「ヴェトナムに対する作家の態度」	グレイブズ、ロバート
1965	9	『路上にて』	ケルーアック
1938	3	『阿片』	コクトー
1938	8	『わが青春記』	コクトー
1938	9	『白紙』	コクトー
1938	9	『オルフェ』	コクトー
1938	11	『雄鶏とアルルカン』	コクトー
1938	11	『山師トマ』	コクトー
1973	2	『シャーロック・ホームズの功績』	コナンドイル、エイド・リア
1973	2	『白衣の女』	コリンズ、ウィルキー
1973	2	『月長石』	コリンズ、ウィルキー
1938	3	『狭き門』	ジイド、アンドレ
1938	3	『ソヴィエト旅行記』	ジイド、アンドレ
1940	3	「誠実な人間の抗議」	ジイド、アンドレ
1941	9	『プロメテ』	ジイド、アンドレ
1941	9	『バリュウド』	ジイド、アンドレ
1941	9	『贋金つくり』	ジイド、アンドレ
1947	7	『贋金つくり』	ジイド、アンドレ
1968	7	『オセロ』	シェイクスピア
1955	4	「秋風へのオード」	シェリー
1970	6	「秋風へのオード」	シェリー
1938	4	「詩は滅亡するか」	シュナイダー、イシドール
1968	4	『西欧の没落』	シュペングラー
1965	5	『ユリシーズ』	ジョイス、J.
1938	9	『若き日の芸術家の肖像』	ジョイス、ジェームズ
1939	7	『ユリシーズ』	ジョイス、ジェームズ
1941	9	『ユリシーズ』	ジョイス、ジェームズ
1947	7	『ユリシーズ』	ジョイス、ジェームズ
1955	4	「婚約」	スコヴェル、E.J.
1938	1	『アルマンス』	スタンダール
1941	9	『ラミエル』	スタンダール
1941	9	『パルムの僧院』	スタンダール
1941	9	『赤と黒』	スタンダール
1941	12	『恋愛論』	スタンダール
1942		『アンリ・ブリュラールの生涯』	スタンダール
1942		『パルムの僧院』	スタンダール
1942		『一漫遊者の覚書』	スタンダール
1942		『恋愛論』	スタンダール
1942		『エゴティスムの記』	スタンダール
1942		『赤と黒』	スタンダール
1972	11	『パルムの僧院』	スタンダール
1958	12	The Glass of Water'	スティーヴンズ、ウォレス
1955	4	『破壊的要素』	スペンダー、スティーヴン
1955	5	「戦争と平和の詩」	スペンダー、スティーヴン
1956	9	『創造的要素』	スペンダー、スティーヴン
1956	9	『破壊的要素』	スペンダー、スティーヴン
1958	8	「再建の広島」	スペンダー、スティーヴン
1958	8	「戦争と平和の詩」	スペンダー、スティーヴン
1941	9	『ドン・キホーテ』	セルバンテス
1941	9	『がざに盲ひて』	セルバンテス
1941	9	『ドン・キホーテ』	セルバンテス
1941	9	『居酒屋』	ゾラ
1947	11	「地獄篇」	ダンテ
1953	1	『神曲』	ダンテ

1957	9	「地獄篇」（『神曲』）	ダンテ
1957	9	「地獄篇」（『神曲』）	ダンテ
1957	9	「天国篇」（『神曲』）	ダンテ
1941	8	『ダランベールの夢』	ディドロ
1941	9	『父と子』	ツルゲーネフ
1938	1	『作家論』	テーヌ
1973	2	『バーナビー・ラッジ』	ディケンズ、チャールズ
1973	2	『荒涼館』	ディケンズ、チャールズ
1938	11	『方法序説』	デカルト
1959	2	『方法序説』	デカルト
1972	2	『ル・ジャポン』	デラシュス、ジャン・フラン
1968	7	『裁きは始まる』	テルツ、アブラム
1938	9	『阿片溺愛者の告白』	ド・クインシー、トーマス
1973	2	『四つの署名』	ドイル
1973	2	『シャーロック・ホームズの事件簿』	ドイル
1973	2	『恐怖の谷』	ドイル
1973	2	『ホームズの最後の挨拶』	ドイル
1973	2	『ホワイト・カンパニー』	ドイル
1973	2	『緋色の研究』	ドイル
1973	2	『シャーロック・ホームズの帰還』	ドイル
1973	2	『シャーロック・ホームズの冒険』	ドイル
1973	2	『バスカビル家の犬』	ドイル
1973	2	『シャーロック・ホームズの回想』	ドイル
1973	2	『ボヘミア王家の醜聞』	ドイル
1973	2	『唇の捩れた男』	ドイル
1973	2	『赤毛クラブ』	ドイル
1973	2	『まだらのひも』	ドイル
1947	11	『試練に立つ文明』	トインビー
1958	12	『パンのみに生くるにあらず』	ドウジンツェフ
1941	9	『未成年』	ドストエフスキー
1941	9	『未成年』	ドストエフスキー
1942		『カラマーゾフの兄弟』	ドストエフスキー
1947	9	『カラマーゾフの兄弟』	ドストエフスキー
1968	9	『虐げられた人々』	ドストエフスキー
1968	9	『白痴』	ドストエフスキー
1968	9	『カラマーゾフの兄弟』	ドストエフスキー
1968	9	『地下室の手記』	ドストエフスキー
1968	9	『罪と罰』	ドストエフスキー
1968	9	『未成年』	ドストエフスキー
1968	9	『悪霊』	ドストエフスキー
1969	8	『カラマーゾフの兄弟』	ドストエフスキー
1941	9	『戦争と平和』	トルストイ
1968	7	『ロリータ』	ナボコフ
1938	12	『夢と人生』	ネルヴァル
1970	6	「原子時代における人間の土着性」	ハイデガー
1969	4	「ヒュー・セルウィン・モーバリー」	バウンド、エズラ
1969	4	「キャントウズ」	バウンド、エズラ
1947	11	『パンセ』	パスカル
1947	11	『パンセ』	パスカル
1958	12	『ジバゴ』	パステルナーク
1969	12	『素晴らしき新世界』	ハックスレー、オルダス
1940	3	『素晴らしき新世界』	ハックスレイ、オルダス
1941	9	『体位点』	ハックスレイ、オルダス
1947	11	『汝の欲するところをなせ』	ハックスレイ、オルダス
1947	11	『永遠の哲学』	ハックスレイ、オルダス
1965	9	『わが麻薬中毒記、最初の日日』	バロウズ、ウイリアム
1965	9	『ソフト・マシーン』	バロウズ、ウイリアム
1965	9	『回復不能麻薬中毒者の告白』	バロウズ、ウイリアム
1965	9	『裸のランチ』	バロウズ、ウイリアム
1965	9	『死者の指は語る』	バロウズ、ウイリアム
1965	9	『ノーヴァ・特報』	バロウズ、ウイリアム
1970	7	『殲滅者』	バロウズ、ウイリアム
1970	7	『裸のランチ』	バロウズ、ウイリアム
1970	7	『ジャンキー』	バロウズ、ウイリアム
1947	7	「現代文学の危機と青年」	バンダ、ジュリアン
1961	2	『わが闘争』	ヒトラー
1961	4	『我が闘争』	ヒトラー
1947	9	『スペキュレーション』	ヒューム、T.E.
1947	11	『ヒューマニズムと宗教的態度』	ヒューム、T.E.
1947	11	『煙灰』	ヒューム、T.E.
1973	2	『二輪車の謎』	ヒューム、ファーガス
1958	8	『ルバイヤット』	フィツジェラルド
1939	1	『スワンの方』	プルースト
1941	9	『失われた時を求めて』	プルースト
1938	7	『現代フランスの思想的対立』	ブルトン、アンドレ
1951	7	『シュールレアリスムとは何か』	ブルトン、アンドレ
1964	5	『金枝篇』	フレーザー、ジェームズ
1968	4	「美術学校」	ブレヴェール、ジャック
1938	8	『芸術と精神分析』	フロイト
1938	8	『精神分析』	フロイト
1938	8	『芸術と精神分析』	フロイト
1941	9	『ボヴァリー夫人』	フロベール
1941	9	『ドミニック』	フロマンタン
1938	9	『春の目覚め』	ベデキント
1970	12	『老人と海』	ヘミングウェイ
1970	12	『敗れざる者』	ヘミングウェイ
1970	12	『春の奔流』	ヘミングウェイ
1970	12	『武器よさらば』	ヘミングウェイ
1938	9	『夢と哲学』	ベルグソン
1968	6	『アッシャー家の崩壊』	ポー
1968	6	「大鴉」	ポー
1968	6	『群衆の人』	ポー
1973	2	『マリー・ロージェの謎』	ポー、エドガー・アラン
1973	2	『モルグ街の殺人』	ポー、エドガー・アラン
1973	2	『盗まれた手紙』	ポー、エドガー・アラン
1938	8	『パリの憂鬱』	ボードレール
1947	11	『パリの憂鬱』	ボードレール
1947	11	『悪の華』	ボードレール
1957	9	『悪の華』	ボードレール
1957	9	『悪の華』	ボードレール
1968	6	『悪の華』	ボードレール
1968	6	『パリの憂鬱』	ボードレール
1968	4	「鉛のこだま」	ホプキンズ、ジョラード・マ
1968	4	『オデュッセイ』	ホメロス
1965	9	『ゴー』	ホルムス
1951	7	『現代詩について』	マックリーシュ、アーチボル
1942	2	『骰子の一擲』	マラルメ
1972	11	『哲学の貧困』	マルクス
1968	7	『人口の原理に関する研究』	マルサス
1968	7	『人口論』	マルサス
1941	9	『ヴェニスに死す』	マン、トーマス
1941	9	『魔の山』	マン、トーマス
1947	7	『魔の山』	マン、トーマス
1972	11	『魔の山』	マン、トーマス
1970	9	「ロシア紀行」	ミラー、アーサー
1972	3	『わが生涯の日々』	ミラー、ヘンリー
1972	3	『心の知恵』	ミラー、ヘンリー
1947	11	『倫理学』	ミル、J.S.
1941	9	『二重の誤解』	メリメ
1969	12	『エンジンが吠る時』	モス、スターリング
1941	8	「痛恨について」	モンテーニュ
1938	4	「文学と実生活」	モンテルラン、アンリ
1947	11	『彼方』	ユイスマンス
1938	9	『建築と絵画』	ラスキン
1938	3	『ドルヂェル伯の舞踏会』	ラディゲ、レイモン
1938	8	『肉体の悪魔』	ラディゲ、レイモン
1938	8	『肉体の悪魔』	ラディゲ、レイモン
1958	12	『想像的な会話』	ランダー、ウォルター・サベ
1938	9	『心理学概論』	リーグ、ブレブス
1955	6	『芸術の意味』	リード、ハーバート
1941	9	『トリビュラ・ボノメ』	リラダン
1968	4	「薔薇の内部」	リルケ
1955	4	『詩を読む若き人たちのために』	ルイス、C.D.
1951	7	『詩への希望』	ルイス、C.D.
1938	9	『エリオット論』	ルイス、ウインダム
1969	5	『帝国主義論』	レーニン
1947	11	『近代の精神』	ロバーツ、マイケル
1951	7	「T.E.ヒューム」	ロバーツ、マイケル
1968	7	『攻撃論』	ロレンツ、コンラッド
1938	1	『天才論』	ロンブロオゾオ

【時代背景】

ベトナム和平協定調印
ベトナム戦争激化
ベトナム北爆開始
日米安保条約調印
原水爆禁止世界大会
（アメリカ）ビキニで水爆実験
（東京裁判）開廷
極東国際軍事裁判
太平洋戦争終結
太平洋戦争勃発
国家総体制の強化
第二次大戦勃発
日本軍広東占領
国家総動員法公布
日中戦争勃発

【詩川信夫・関連事項】

12・「伝説の人」（ヘミングウェイ論）
10・「一九三〇年代の射程」（オーデン論）
7・「ウイリアム・バロウズの「殲滅者」」
9・「ウイリアム・バロウズ」（バロウズ論）
4・「戦争責任論の去就」
12・「荒地詩集1958」、この年をもって「荒地詩集」終刊。
10・「T・アルフレッド・アルウロックの悲歌」（エリオット論）
11・「文学者の戦争責任」（戦争責任論）
9・「「死の灰詩集」戦争の背景」（戦争責任論）
5・「「死の灰詩集」の本質」（戦争責任論）
7・「われわれの心にとって詩とは何であるか」（戦争責任論）
6・「地獄の発見」（ダンテ・ボードレール・エリオット論）
3・「ボードレール論」
8・「xへの献辞」「現代詩とは何か」
以後は「荒地詩集」（年刊）へ。（1951-58）
6・第二次「荒地」、第六号をもって終刊。
9・第二次「荒地」創刊
（戦争責任論・ヴァレリイ論・カフカ論・T・E・ヒューム論）
6・肺結核により日本へ帰還
10・入隊
（スタンダール論・ヴァレリイ論）卒論「T・S・エリオット」
10・「スタンダール第一章伝記について」（スタンダール論）
5・エリオット「雷の言ったこと」（「荒地」第一部）を翻訳で読む。
3・第一次「荒地」（文芸同人誌）創刊
8・エリオット「死者の埋葬」（「荒地」第五部）を共訳。
2・詩誌「新領土」参加

スタンダール
コクトー
ラディゲ
ジイド
エリオット
フロイト
ボードレール
ジョイス
ハックスレイ
マン
ドストエフスキー
ヴァレリイ
T・E・ヒューム
カフカ
ロバーツ
ダンテ
C・D・ルイス
オーデン
スペンダー
バロウズ
ボー
ヘミングウェイ
ドイル

参考書目

鮎川信夫の主な著作

鮎川信夫　「『死の灰詩集』の本質－古臭い社会的意識－」　「東京新聞」（1955年5月15日）、8面。

鮎川信夫　「『死の灰詩集』の本質－想起させる異常性－」　「東京新聞」（1955年5月16日）、8面。

鮎川信夫　「T.S. エリオットを想う」　「英語青年」第111巻、第５号（1965年1月）、51頁。

鮎川信夫　『鮎川信夫詩集』　現代詩文庫9　東京、思潮社、1968年。

鮎川信夫　『鮎川信夫著作集』全10巻　東京、思潮社、1973－76年。

鮎川信夫　『宿恋行』　東京、思潮社、1978年。

鮎川信夫・吉本隆明　『思想と幻想』　東京、思潮社、1981年。

鮎川信夫・吉本隆明　『詩の読解』　東京、思潮社、1981年。

鮎川信夫　『失われた街』　東京、思潮社、1982年。

鮎川信夫　『鮎川信夫』　現代の詩人2　東京、中央公論社、1984年。

鮎川信夫・吉本隆明　『全否定の原理と倫理』　東京、思潮社、1985年。

鮎川信夫　『難路行』　東京、思潮社、1987年。

鮎川信夫　『鮎川信夫全集』第1巻、全詩集　東京、思潮社、1989年。

鮎川信夫　『鮎川信夫』　新選・現代詩文庫101　東京、思潮社、1997年。

『鮎川信夫著作集』（第10巻、研究）には、約50の鮎川信夫に関する立論及び詩作品の解説が収められている。これらのものに関しては、ひとつひとつを下に挙げることを省略した。

*

阿部猛　『近代詩の敗北－詩人の戦争責任－』　東京、大原新生社、1980年。

有村隆広　「日本におけるカフカの受容」　有村隆広・八木浩編　『カフカと現代日本文学』所収　東京、同学社、1985年、1－26頁。

荒地同人会編　『荒地詩集』新装復刻版　全８冊　東京、国土社、1976－78年。

粟屋憲太郎　『資料日本現代史』第２巻　「戦後直後の政治と社会①」　東京、大月書店、1980年。

池谷敏忠　「日本における *The Waste Land* の受容－菊村到氏の「事件の成立」を中心に－」　「金城学院大学論集」第6号（1975年）、63－77頁。

池谷敏忠　「T.S. エリオットと「荒地」派－鮎川信夫の詩を中心に－」　「金城学院大学論集」第124号（1987年）、25－42頁。

石川啄木　『石川啄木全集』第４巻、評論・感想　東京、筑摩書房、1980年。

井関正昭　『イタリアの近代美術』　東京、小沢書店、1989年。

伊藤信吉　「詩における社会性と芸術性－スペンダーの論旨－」　「東京新聞」（1955年5月8日）、８面。

伊藤信吉　「詩における社会性と芸術性－主題の成熟の方法－」　「東京新聞」（1955年5月9日）、８面。

伊藤信吉　『高村光太郎－その詩と生涯－』　角川文庫　東京、角川書店、1964年。

今村冬三　『幻影解「大東亜戦争」』　東京、葦書房、1989年。

岩上順一記　「新日本文学会創立大会の報告」　「新日本文学」第１巻、第１号（1946年3月）、62－65頁。

巖谷國士編　『ダダ・シュルレアリスム』　「ユリイカ」臨時増刊　第13巻、第6号（1980年5月）。

ヴァレリー、ポール　佐藤正彰他訳『ヴァレリー全集』第11巻、文明批評　東京、筑摩書房、1967年。

ヴァレリー、ポール　平井啓之他訳　『ヴァレリー　若いパルク　魅惑／コクトー　平調曲』　世界名詩集17　東京、平凡社、1967年。

ヴァレリー、ポール　佐藤正彰・寺田透訳　『私の見るところ』　筑摩叢書60　東京、筑摩書房、1966年。

魚住折蘆　「自己主張の思想としての自然主義」　川副国基注釈『日本近代文学大系』第57巻　近代評論集Ⅰに再録　東京、角川書店、1972年。

海野弘・小倉正史　『現代美術－アール・ヌーヴォーからポストモダンまで－』　東京、新曜社、1988年。

エリオット、T.S.　鮎川信夫訳　『詩の効用と批評の効果』　第３版　東京、荒地出版社、1958年。

エリオット、T.S.　上田保他訳、田村隆一編　『エリオット詩集』　世界の詩43　東京、彌生書房、1967年。

エリオット、T.S. 他　西脇順三郎他訳　『エリオット　荒地／オーデン　見よ、旅人よ！／スペンダー　詩集』　世界名詩集4　東京、平凡社、1968年。

大岡信　『蕩児の家系－日本現代詩の歩み』　東京、思潮社、1975年。

大岡信　『現代詩人論』　東京、角川出版、1978年。

大久保典夫他編　臼井吉見監修　『戦争文学論争』上巻　第５版　東京、番町書房、1977年。

奥野健男　『日本文学史－近代から現代へ－』第17版　中公新書212　東京、中央公論社、1981年。

小田久郎編　『荒地－戦後史の原点－』「現代詩手帳」一月臨時増刊号　東京、思潮社、1972年。

小田切進　『日本近代文学の展開－近代から現代へ－』　読売選書32　東京、読売新聞社、1974年。

小田切秀雄他解説　『文学時標』復刻版　東京、不二出版、1986年。

小田切秀雄　「文学における戦争責任の追及」　「新日本文学」第１巻、第３号（1946年６月）、64－65頁。

鹿島茂　『新聞王ジダルダン』　東京、筑摩書房、1997年。

カフカ、フランツ　原田義人・辻瑆訳　『カフカ』筑摩世界文学大系65、『審判』、『城』他掲載　東京、筑摩書房、1972年。

木田元他編　『コンサイス20世紀思想事典』　東京、三省堂、1989年。

北川透　『詩と思想の自立』　東京、思潮社、1970年。

北川透　『像の不安－仮構詩論序説－』　東京、青土社、1972年。

北川透　『荒地論－戦後詩の生成と変容－』　東京、思潮社、1983年。

北川冬彦他　「現代詩の系譜と其の展望」　「現代詩」第２巻、第１号（1947年1月）、6－34頁。

北川冬彦　「スペンダーの考えは傍観的でわれわれの真実に触れていない」　「現

代詩」（1955年4月）、44－45頁。

北村太郎　「孤独への誘い」　「純粋詩」（1947年3月）所収　吉本隆明編『現代詩論体系』第1巻に再録　東京、思潮社、1980年、26－32頁。

木原孝一　『日本の詩の流れ』　第2版　東京、ほるぷ出版、1983年。

吟遊編集部編　『詩と詩論－現代詩の出発－』　東京、冬至書房新社、1980年。

クリスポルティ、エンリコ・井関正昭　構成・監修　『未来派1909－1944』　東京、東京新聞、1922年。

現代詩人会編　『死の灰詩集』　東京、宝文館、1954年。

講談社編　『廃墟からの出発－昭和20年-21年』　『昭和二万日の全記録』第7巻　東京、講談社、1988年。

小堀桂一郎　『森鴎外－文業解題（創作篇）－』　東京、岩波書店、1982年。

古俣裕介　『＜前衛詩＞の時代－日本の1920年代－』　東京、創成社、1992年。

Saong-in Yoon　「白秋の初期詩集におけるデカダン的要素」　「比較文学」第30巻（1987年）、65-84頁。

阪本越郎　『詩について』第2版　東京、大澤築地書店、1943年。

櫻本富雄　『空白と責任－戦時下の詩人たち－』　東京、未来社、1983年。

櫻本富雄　『日本文学報国会－大東亜戦争下の文学者たち－』　東京、青木書店、1995年。

澤正宏・和田博文編　『都市モダニズムの奔流－「詩と詩論」のレスプリヌーボー』　東京、翰林書房、1996年。

茂田真理子　『タルホ／未来派』　東京、河出書房新社、1997年。

柴崎芳夫刊行、春山行夫監修、中島善彌纂集　『詩と詩論・文学』全20巻　近代詩誌復刻叢刊　東京、教育出版センター、1979年。

渋沢孝輔　『極の誘い』　東京、晶文社、1973年。

嶋岡晨　『ポエジーの挑戦－昭和詩論史ノート－』　東京、白地社、1996年。

シャンクス、エドワード　井上思外雄訳　「現代英詩概観」　「英文学研究」第6巻、第1号（1926年4月）、133－142頁。

新日本文学会　「新日本文学会創立の趣意」　「新日本文学」創刊準備号（1946年1月）、12－13頁。

「新領土」復刻委員会編　『新領土』復刻版　全8巻　春山行夫監修　東京、教育

企画出版、1990年。

杉田未来　「米國現代詩壇とその論評」　「英語青年」第46巻、第12号、376頁。

スタイナー、ピーター　山中桂一訳　『ロシア・フォルマリズムーひとつのメタ詩学』　東京、勁草書房、1986年。

スペンダー、スティーブン　木村真訳、安藤一郎補修　「戦争と平和と詩」　「現代詩」（1955年4月）、39－41頁。

スペンダー、スティーブン　堀越秀夫訳　「戦争・平和・詩」　「詩学」第10巻、第４号（1955年4月）、18－21頁。

瀬沼茂樹　『近代日本文学のなりたちー自我の問題ー』　アテネ新書　東京、弘文堂書房、1971年。

瀬沼茂樹編　『荒地』復刻版　東京、日本近代文学館、1981年。

芹沢俊介　『鮎川信夫』　深淵叢書　東京、国土社、1975年。

芹沢俊介　『戦後詩人論』　東京、たざわ書房、1980年。

高村光太郎　吉本隆明・北川太一編　『高村光太郎選集』第１巻、第３巻　増訂版　東京、春秋社、1981年。

高村光太郎　『高村光太郎全集』第８巻　増補版　東京、筑摩書房、1995年。

田口哲也　「鮎川信夫にとっての T.S. エリオットー鮎川信夫とエリオットー」　「大阪工業大学紀要」人文社会篇　第33巻、第1号（1988年）、119－129頁。

武田勝彦　『比較文学の試み』　東京、創林社、1983年。

田中清太郎　「T.S. エリオットと『荒地詩集』」　「学習院大学文学部研究年報」第25号（1928）、79－101頁。

谷口茂　『フランツ・カフカ論ーユーデントゥームとの関係を中心にー』　東京、明星大学出版部、1983年。

田村隆一　『田村隆一詩集』　現代詩文庫1　東京、思潮社、1968年。

田村隆一　『若い荒地』　東京、思潮社、1968年。

淡野安太郎　『ベルグソン』　新装版　東京、勁草書房、1996年。

千葉宣一　「詩論の発展と流派の展開ー昭和期ー」　中島健蔵他編『日本近代詩』比較文学講座 II、所収　東京、清水弘文堂、1971年、34－92頁。

千葉宣一　「アヴァンギャルド詩運動と大正詩の崩壊ー未来派の詩的動態を中心にー」　村野四郎他編『講座・日本現代詩』　第２巻、大正期、所収　東京、右文書院、1973年、307-56頁。

千葉宣一　「戦後の　ことば　と荒地－鮎川信夫の場合」　「国文学　解釈と鑑賞」第41巻、第15号（1976年12月）、26－34頁。

ツァラ、トリスタン　小海永二・鈴村和成訳　『七つのダダ宣言とその周辺』　セリ・クレアシォンI　東京、土曜美術社、1988年。

塚原史　『言葉のアヴァンギャルドーダダと未来派の二〇世紀』　講談社現代新書1214　東京、講談社、1994年。

辻瑆編　『カフカの世界』　東京、荒地出版社、1971年。

坪内祐三　「文学者の発する声」　「RONZA」第１巻、第５号（1995年8月）、48－53頁。

鶴岡冬一　「書評－現代詩人会編「死の灰詩集」」　「詩学」第９巻、第１２号（1954年12月）、84－85頁。

ティズタル、キャロライン　アンジェロ・ボッツォーラ　松田嘉子訳　『未来派－FTURISM－』　東京、PARCO 出版、1992年。

デ・ブルリュック・木下秀　千葉宣一解説『未来派とは？答える』　長谷川泉監修、近代文藝評論叢書15　東京、日本図書センター、1990年。

トゥイニャーノフ、ユーリー・ニコラエヴィチ　ポリス・ヴィクトロヴィチ・トマシェフスキー他　水野忠夫他訳　『ロシア・フォルマリズム文学論集2』　水野忠夫編　東京、せりか書房、1982年。

外山正一他訳著　『新體詩抄』初編　1882年　　名著復刻全集編集委員会編　『新體詩抄』初編　丸屋善七版　　特選名著復刻全集近代文学館　東京、ほるぷ、1975年。

中野嘉一　『前衛詩運動史の研究－モダニズム詩の系譜－』　東京、大原新生社、1975年。

中野嘉一　『モダニズム詩の時代』　東京、宝文館出版、1986年。

西脇順三郎　『西脇順三郎』　現代詩文庫1016　東京、思潮社、1979年。

ニーチェ、フリードリヒ　吉澤傳三郎訳　『ツァラトゥストラ』　ニーチェ全集普及版　第9巻　東京、理想社、1979年。

萩原朔太郎　『萩原朔太郎詩集』　三好達治選　改版　東京、岩波書店、1981年。

パスカル、ブレーズ　前田陽一編『パスカル』　中公バックス　世界の名著29　東京、中央公論社、1978年。

服部昭郎　「鮎川信夫における T.S. Eliot について－比較文学におけるひとつの課題意識として－」　「ノートルダム女子大学研究紀要」第８号（1978）、77－

89頁。

春山行夫　『詩の研究』　現代の芸術と批評叢書20　東京、厚生閣書店、1931年。

春山行夫　『春山行夫詩集』　東京、吟遊社、1990年。

原子朗編　『近代詩現代詩必携』　別冊国文学35　東京、学燈社、1988年。

樋口良澄編　「現代詩手帳」第29巻、第10号（1986年10月）　「特集　日本モダニズムの再検討」。

日夏耿之介　『明治大正詩史』全３巻　第４版（東京、東京創元社、1971年。

ヒューム、T.E.　野口啓祐編注　『Humanism and the Religious Attitude－ヒューマニズム－』　東京、北星堂書店、1963年。

ヒューム、T.E.　長谷川鑛平訳　『ヒュマニズムと芸術の哲学』　東京、法政大学出版局、1967年。

平井正穂編　『エリオット』　20世紀英米文学案内18　東京、研究社、1967年。

平戸廉吉　『平戸廉吉詩集』　平戸廉吉詩集刊行会版　　名著復刻『詩歌文学館』　日本近代文学館刊　名著復刻全集編集委員会編　東京、ほるぷ出版、1981年。

深尾須磨子　「『戦争と平和と詩』をよんで」　「現代詩」（1955年4月）、42－43頁。

深瀬基寛編　『エリオット研究』　現代英米作家研究叢書　東京、英宝社、1955年。

福田和成　「「戦争協力」は罪なのか」　『RONZA』第１巻、第５号（1995年8月）、41－47頁。

ブルトン、A.　森本和夫訳　『シュールレアリスム宣言集』　東京、現代思潮社、1975年。

文藝春秋編　『戦後50年日本人の発言』上巻　東京、文藝春秋、1995年。

分銅惇作・吉田凞生　『現代詩物語』　東京、有斐閣、1978年。

堀江信男　『高村光太郎』　人と作品10　東京、清水書院、1966年。

本田秋五　『物語戦後文学史』　第７版　東京、思潮社、1975年。

前田妙子　『戦後詩の形象』　研究叢書67　東京、和泉書院、2989年。

マン、トーマス　高橋義孝訳　『トーマス・マン II』　新潮世界文学34　東京、新潮社、1971年。

三好豊一郎　『三好豊一郎詩集』　現代詩文庫37　東京、思潮社、1970年。

村野四郎　「詩人の政治的意識の問題」　「現代詩」（1955年4月）、43－44頁。

牟礼慶子　『鮎川信夫－路上のたましい－』　東京、思潮社、1992年。

メショニック、アンリ　竹内信夫訳『詩学批判－詩の認識のために－』　東京、未来社、1982年。

森鴎外　「雑録むく鳥通信」　『スバル』第５号（1909年5月）、99-104頁。

山川学而　「評価と影響＜日本の場合＞」　荒正人・小野協一編『エリオット入門』所収　東京、南雲堂、1961年。280－88頁。

山田登世子　『メディア都市パリ』　東京、青土社、1991年。

山本捨三　『現代詩の史的展望』　東京、桜楓社、1971年。

山本光久編　「現代詩手帳」第23巻、第4号（1980年4月）　「特集　黒田三郎と「荒地」の現在」。

横田喜三郎　「戦争犯罪と国際法の革命」　日高六郎編『戦後思想の出発』戦後日本思想体系1　第２版、所収　東京、筑摩書房、1968年、171－83頁。

吉本隆明　『吉本隆明全著作集』第13巻　東京、勁草書房、1969年。

吉本隆明　『戦後詩史論』　東京、大和書房、1978年。

吉本隆明編　『現代詩論体系』全６巻　新装版　東京、思潮社、1980年。

吉本隆明　『鮎川信夫論』　東京、思潮社、1982年。

吉本隆明他　『さよなら鮎川信夫』　現代詩読本　特装版　東京、思潮社、1986年。

*

Baudelaire, Charles. *Les Fleurs du Mal*, ed. Antoine Adam. Paris: Garnier Frères, 1961.

Bradbury, Malcolm and James McFarlane. *Modernism 1890-1930*. London: Penguin Books, 1991.

Eliot, Thomas Stearns. *On Poetry and Poets*. London: Faber and Faber, 1956.

Eliot, Thomas Stearns. *The Complete Poems and Plays of T.S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1969.

Eliot, Thomas Stearns. *Selected Prose of T.S. Eliot*, ed. Frank Kermode. London: Faber and Faber, 1975.

Faulkner, Peter. *A Modernist Reader: Modernism in England 1910-1930*. London: B.T. Batsford, 1986.

Hulme, Thomas Ernest. *Speculations: Essays on Humanism and the Philosophy of Art*, 2nd ed., ed. Herbert Read. London: Routledge & Kegan Paul, 1936.

Joll, James. *Europe Since 1870: An International History*. London: Penguin Books, 1990.

Lefevere, André. *Translation, Rewriting, & the Manipulation of Literary Fame*. London: Routledge, 1992.

Lista, Giovanni. *Marinetti*. Paris: Seghers, 1976.

Martin, Marianne W. *Futurist Art and Theory: 1909-1915*. Oxford: Clarendon Press, 1968.

Meschonnic, Henri. *Pour la poétique*. Paris: Gallimard, 1970.

Steiner, Peter. *Russian Formalism: A Metapoetics*. London: Cornell University Press, 1984.

Tisdall, Caroline and Angelo Bozzolla. *Futurism*. London: Thames and Hudson, 1977.

Tzara, Tristan. *Œuvres complètes*, tome I (1912-1924). Paris: Flammarion, 1953.

Valéry, Paul. *Œuvres complètes*, tome I. Paris: Flammarion, 1957.

（千葉大学学位申請論文）
日本現代詩運動における「荒地」派の比較文学的研究

資料 II　コンコーダンス－鮎川信夫全詩－

※　資料作成に当たっては、『鮎川信夫全集』第１巻、全詩集（思潮社、1989年）に収められている詩作品を対象とした。但し、拾遺詩篇、及び、翻訳詩は除いた。
※　本コンコーダンスは、詩作品番号、詩行番号、詩句の順に配列されている。

II－1

目次：詩作品番号表 ..... i － vi

コンコーダンス　あーこほ ..... 1－365

詩作品番号

番号	詩作品タイトル	
001	黄昏	
002	凍眠	
003	扉の中	
004	蝋燭の中―夜に	
005	遊園地区	
006	花－「亜細亜」の一部	
007	河－「亜細亜」の一部	
008	頌－「亜細亜」の一部	
009	樹	
010	少年のスピイド	
011	春の頌歌	
012	ギリシャの日傘	
013	夏の Souvenir	
014	楽器の世界	
015	室内	（窓は明るい海の水で）
016	田園の祭礼	
017	のどかな樹のある沙漠	
018	夢見る室内	
019	夢の使用時間	
020	名刺	
021	唄	
022	白い像	
023	カタストロフ	
024	睡眠	
025	非望の自転	
026	魅入られた街	
027	椅子	（影をゆらせて）
028	雑音の形態	
029	室内	（時空の瓶の底に）
030	黄昏の椅子	
031	十二月の椅子	
032	椅子	（ドアはなかば開いたまま）

番号	詩作品タイトル	
033	形相	（一本の茎は清浄な水を欲する）
034	雨をまつ椅子	
035	雨の歌	
036	形相	（おそらくは実らぬであらう樹木）
037	形相	（ドアの外では）
038	陰翳	
039	泉の変貌（明日は恋なき者に恋あれ　明日は恋ある者にも恋あれ　詩人）	
040	形相	（髪は散る）
041	囲繞地	
042	神（こころ）	（庭は荒れて　影もなく）
043	神（こころ）	（石で葺かれた屋根をでて）
044	神々	
045	雨に作られし家	
046	橋上の人	（高い欄干に肘をつき）
047	耐えがたい二重	
048	トルソについて	
049	日の暮	
050	死んだ男	
051	病院船室	
052	姉さんごめんよ	
053	落葉	
054	アメリカ	
055	繋船ホテルの朝の歌	
056	風景	
057	１９４８年	
058	白痴	
059	秋のオード	
060	行人	
061	橋上の人	（彼方の岸をのぞみながら）
062	あなたの死を超えて	
063	淋しき二重	
064	裏町にて	
065	夜と沈黙について	
066	あけてください、どうか	

番号	詩作品タイトル
067	「なぜ？」について
068	鴎　または夏の手紙
069	天国の話
070	夜の終り
071	今日のなかの昨日と明日
072	競馬場にて
073	海上の墓
074	サイゴンにて
075	遥かなるブイ
076	なぜぼくの手が
077	神の兵士
078	出港
079	消えゆく水平線
080	水平線について
081	港外
082	波と雲と少女のオード
083	夕陽
084	木枯の町にて
085	ある男の風景
086	夏過ぎて
087	可愛いいペニィ
088	小さいマリの歌
089	冬物語
090	紫壇
091	この街に生れて
092	この涙は苦い
093	深いふかい眠り
094	シンデンの海
095	父の死
096	「バルセロナ」
097	Le Cirque
098	明るいキャフェーの椅子
099	逃げるボールを追って
100	もしも　明日があるなら

番号	詩作品タイトル
101	兵士の歌
102	喪心のうた
103	イシュメエル　「白鯨」より
104	秋思
105	最も暗い月、三月
106	ある記念写真から
107	さざなみは海を渡っても
108	夏を送る即興詩
109	落葉樹の思考
110	もう風を孕むこともない
111	路上のたましい
112	戦友
113	世界は誰のものか
114	ある冬のはじめに
115	別離のうた
116	吐く息の
117	苦しさにたえかねて
118	呪婚歌
119	川岸にて
120	春の感触
121	夏への挨拶
122	冷たい雨
123	新年に
124	異聞
125	生き残った者のためのエピタフ
126	アポロ１１号に贈る詞
127	途上　　（「路上のたましい」改題）
128	新聞横丁
129	顔のない夢
130	首の桶
131	帰心
132	閉ざすうた
133	愛なき者の走法
134	催涙広場

番号	詩作品タイトル
135	詩法
136	My United Red Army
137	生証人
138	どくろの目に
139	宿恋行
140	地平線が消えた
141	同行者
142	Solzhenitsyn
143	醜のヴィジョン
144	女尊の祟り
145	暗い夜への信号
146	寝ていた男
147	死について
148	消息
149	波間の郷愁
150	私信
151	Who I Am
152	こんな夜には
153	撃刀の歌
154	帰館
155	理想の良人
156	愛
157	秋の祈り
158	詩がきみを
159	夢ちがい
160	必敗者
161	いまが苦しいなら
162	僊術
163	跳躍へのレッスン
164	ミューズに
165	父
166	ひょっとすると
167	廃屋にて
168	水のうた

番号	詩作品タイトル	
169	形相	（繃帯にふれたあとの）
170	ある朝の散歩で	
171	幸福論	
172	冬のファントム	
173	独白（一九七九年十二月某夜）	
174	黒田三郎	
175	病床の友へ	
176	風	
177	影	
178	切願	
179	室内楽	
180	青い手紙－「形相異聞」	
181	嵐が来る－Nカントリー・クラブの休憩室で	
182	老年について	
183	駅前通りを抜けて	
184	家族のフロンティア	
185	ジョン・レノンの死に	
186	時間論	
187	殉教	
188	私信－桑原英夫に	
189	000年	
190	山を想う	
191	夕日のつぶやき	
192	海の変化	
193	風景論	

あ

ああ
011　017　ああ　ぼくたちは幸福である
017　023　ああまるで天国でございますと
017　039　ああ助けてくれお助け下さい
036　018　ああ愛する花とともにゐたいな
039　102　ああ呪はれてもよい
039　135　ああ幻か
053　055　ああ世界が暗くなってゆきます
054　167　ああ　いつの日からか
055　052　ああ　おれは雨と街路と夜がほしい
061　029　ああ時よ、なぜ流れるのか
061　033　ああ、これからどうしよう……
064　012　――ああ、あのことね。
070　014　ああ、それだけのことなのだ。
070　037　ああ、ぼくの頭のなかには
077　032　（ああ人間性よ……
078　017　ああ　夜昼のさかいなく
083　020　ああ　虚心の鏡に映る
094　022　ああ　太陽は全身にものうく
100　027　ああ　それが何の「はじめ」かわからぬうちに
167　065　ああ　丘のうえの廃屋よ
186　002　ああ

あい　（「愛」）
156　037　わが日本語の「愛」は

あい　（愛）
021　022　とほく離れて文字を愛して
024　003　る　血液を噴き上げている白い管は輝やける噴水の愛撫をう
029　015　やはり変らぬわたしたちの愛よ
032　012　わたしを愛撫するのはむかしの夢であらう
036　014　あれらの花花はなるべく愛する
036　018　ああ愛する花とともにゐたいな
036　026　それらは花花ほど愛らしくない
039　033　愛も
039　039　もっと小さな愛を
039　094　愛の生誕の日を
041　034　いとしい藻　あの愛着の汐よ
041　087　愛嬌ある仕科（しぐさ）で柔かい羽に堅い嘴をこすりつける
041　109　あなたを愛する者はない
041　147　あなたを愛する者はない

047 015 自己愛が底深く凍りついてしまっていることを……
048 016 内部からのひかりをひそかに愛撫している
052 008 愛と死の隠れんぼはやっぱり楽しいものだろうか
052 010 あなたが男を誘惑するはずだった可愛いい頬の黒子のことを
052 013 情慾に飢えたわたしの魂をやさしく愛撫する
052 017 あなたの可愛いい頬の黒子のことを
053 011 可愛いい格子のスカートをはいています
058 055 たまたま可愛いい瞳をしていたからといって
061 036 未来も愛もありやしない。
061 156 あなたは愛を持たなかった、
062 032 愛していても愛しきれるものではないし
064 028 ――愛のない窓には未来がない。
065 028 燃える屋根の下に、愛は
068 036 (……愛しています
068 037 愛しています……)
070 005 鋭い愛の杭にかけて
070 018 あなたがいくら黒髪を愛撫しても、
070 041 愛もなければ、憐みもない。
071 030 自然を愛するあまり
084 025 うんと愛をあたえてやるわ」
085 009 はっきりした愛情もあれば
085 024 女たちの血のなかから愛の喜びをしぼりだそう
087 004 「ペニィやペニィ　可愛いいペニィ」
087 005 けれど　きみの愛犬ペニィは
087 017 「ペニィやペニィ　可愛いいペニィ」
088 007 ぼくの持っていない愛情を思い出させる
088 074 どこまでもつづく愛の歌で
101 011 むかしの愛も　あたらしい日附の憎しみも
104 010 愛と憎しみに撃たれた裸身のほそさに
112 017 祖国の栄光と同胞の愛を信じて地平線になだれていった
112 033 安全への愛　怠惰への退却
115 001 愛を求め
117 009 失ったものへの愛のほかに
128 043 愛や敵意が目標にうまくとどいたためしがあるかい？
129 004 隣人を愛して
133 005 わが心の愛する者をたずねしが
133 010 愛する者を欲しないためか？
133 018 なんじの心の愛する者を知れりと
136 015 残酷さこそ　愛なのに
137 008 意地汚なく愛撫を重ね
141 008 愛以外の何かだったわ。抱きあって、苦痛でよじれる縄梯子にすがって、宙ぶらりんで
145 030 愛がなくともにんげんは生きられる
148 016 愛は身をほそらせ、日々の仕事は疲れをつのらせる。

151　038　愛を求めてさまよい
156　002　愛という言葉は
156　005　愛しているなんて
156　008　愛していますと
156　011　愛しているなどと口走っていたら
156　021　愛は形式的だ
156　025　愛という言葉は身につかぬのである
156　029　愛という言葉は
156　037　わが日本語の「愛」は
167　067　愛しきものよ　さらば
176　015　愛するとは
183　022　よちよち歩きする可愛いい女の子に
184　023　愛しあうことができる
184　025　結び目に愛がないからで
185　016　愛する者から引裂かれて……
185　023　だが、愛する時間を奪われた
186　063　愛

あい　藍
007　006　古風な鐘は藍をにじませて鳴る　曇る　動かない土絵具のカンヴ
018　003　霧は伽藍を沈めてしまった

あいか　（哀歌）
065　031　暴風の夜を飛んでいった。哀歌をうたいながら

あいきょうある　（愛嬌ある）
041　087　愛嬌ある仕科（しぐさ）で柔かい羽に堅い嘴をこすりつける

あいけん　（愛犬）
087　005　けれど　きみの愛犬ペニィは

あいさつ
166　018　あいさつしたのがなぜ悪い？

あいさつ　（挨拶）
054　161　なにげない挨拶のうちから生れる未知の国民のことを……
128　008　別れの挨拶は簡単だった
178　009　あれが最後の挨拶になったと
180　050　「どこかで会って、さりげなく挨拶を交したような、奇妙な余韻をひいていくところ」それは私にしてもそうでし
188　031　何の挨拶もしなかったのではないだろうか。

あいして　（愛して）
021　022　とほく離れて文字を愛して

062　032　愛していても愛しきれるものではないし
068　036　（……愛しています
068　037　愛しています……）
129　004　隣人を愛して
156　005　愛しているなんて
156　008　愛していますと
156　011　愛しているなどと口走っていたら

あいず　合図
028　033　ねぢれた鎖のやうな数輛の列車の合図が響き
142　104　おそらくぼくたちは　はっきり　否！　と合図するだけでよいだろう
169　019　満天の星からの合図に

あいずする　合図する
142　104　おそらくぼくたちは　はっきり　否！　と合図するだけでよいだろう

あいする　（愛する）
036　014　あれらの花花はなるべく愛する
036　018　ああ愛する花とともにゐたいな
041　109　あなたを愛する者はない
041　147　あなたを愛する者はない
071　030　自然を愛するあまり
133　005　わが心の愛する者をたずねしが
133　010　愛する者を欲しないためか？
133　018　なんじの心の愛する者を知れりと
176　015　愛するとは
185　016　愛する者から引裂かれて……
185　023　だが、愛する時間を奪われた

あいそ　（哀訴）
028　009　哀訴の蒸気を吸殻とともに皿の上に拾てる三重の硝子の向ふの鐵格子の中の

あいだ
053　023　永いあいだ眠っていたお姉さん！
055　034　ほてった肉体のあいだの
055　056　西と東の二つの大戦のあいだに生れて
062　049　枯草のあいだの四月の若芽のように萌えています
088　015　わけへだてのないぼくたちのあいだに
101　027　ながいあいだこの曠野を夢みてきた　それは
112　012　鍵穴や本のあいだにしこたま隠しこんでる狐め
157　007　星と星とのあいだには
165　023　父とは半生のつきあいだったが
167　035　まばたきとまばたきのあいだにも

186　069　空間と空間のあいだに時間が挟まる

あいだ　間
007　008　多孔質の雲の間からトンボの眼のやうに碧く　アスピリンを積ん
010　020　手をあげた少年の五指の間から
011　009　どうかすると沢山人間が動いてゐる
019　010　花と大理石の間で
027　005　ねぢによって組み立てられてゐる空間に
033　009　盲目はドアの隙間から入ってくる
036　011　みずみずしい樹木と花花の間で
037　012　わづかなドアの隙間から
039　061　永遠よりみじかい時間のうちに
039　100　木と木の間の寒い廊下に佇んで
039　110　死の谷間が深いやうに
039　125　むしろあなたの占めてゐる空間に
041　096　そして時間が徒らに過ぎていった
046　007　澱んだ鈍い時間をかきわけ
048　032　地平線がのせている人間の重たい故郷
049　005　重たい悲しみに塗りこめられた人間の影がある。
049　012　私たちの間には　ひろい荒涼たる眺めが、
051　002　人間の遠い未知の故郷へ
051　030　人間はチューブのようなものであったらよい
054　054　彼等が剥製の人間であるかどうか
054　061　単により高尚な国民　結社　人間の材料にすぎないと
054　071　おお　いまこそ偉大な人間と大きな河は
054　148　暗い存在が抽象そのものに凍ろうとする時間のはずれから
055　035　空虚なメランコリイの谷間にふりつづいている
065　009　沈黙が占めている空間に反響した。
077　023　かれとぼくの間には
077　032　（ああ人間性よ……
084　032　どこまでもつづく青い灯の谷間にも
090　009　人間が自然に手をつける方法は……
090　018　人間の仕事は
095　007　どうして人間がすこしも苦しまずに死ねようか？
106　012　永遠プラス五分間を　「早く早く」とせき立てている
112　037　口真似のうまいおまえの仲間は
113　039　最高に人間的だった同志スターリン
121　001　人間くさい
124　004　仲間も涙も校歌も国家も売り足りないが
124　028　（短評：空間はどの部分も遅れている？）
126　014　そんなに遠くまで人間の言葉をとどけにいく
126　020　人間の精神の問題かもしれないから。
128　018　人間が住んでねえんだ　昔から

133 003 人間蛾は街の燈火に誘われる
142 033 支配に自信なく　人間の良心を
142 108 一個の弱い人間の信念をも挫くことができないとわかれば
142 116 信念を持つ人間の精神が世界最強の力には通じないとか
142 120 　これ以上は一歩も進ませないそ　と宣言する不屈な人間の精神のみがー
145 005 芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右
145 033 倚れるものもない空間にそれは倚れていた」
145 035 壁のない空間にそれは倚れていた
148 012 新宿の同じ酒場の常連で、同じ雑誌の仲間だったが、
148 028 とり返しのつかぬ時間が過ぎていたのである。
150 017 しかし、友人たちは仲間のだれかれをあてこすっているのだと思いこみ、
150 027 何かが間違っていると感ぜざるをえなかった。
150 028 二十人ほどいた仲間のうちで、現在、
150 030 これは、私だけが「虚構の個性」をつらぬき、偽善の間道をくぐりぬけて、
151 002 これは間違いない
151 005 軍歴は傷痍期間を入れて約二年半ほど
151 044 ずいぶん手間暇のかかる男になっている
153 013 この瞬間へと高まった時の頂きから
154 008 苔むす岩間に白い滝を忘れてきた
158 020 自然にたいして有罪でない人間はいない
160 001 忘れられていく人間の過程が
160 022 （公衆の面前では　場違いな人間というのと同じだ）
160 023 それで時間つなぎに詩を聞かせてくれとせがまれ　聴衆のもとめに応じて
160 058 遺体は屍体置場に二日間放置されたままであった
165 013 ぼくたちの間にはどんな逆転もありえないのだから
166 004 失われたものと現在あるものの中間で
167 054 人間のあぶらが
172 008 どれだけ時間がかかるのか
173 014 そこでは人間の血がまだ新鮮なのだ
174 011 この三十年間、ぼくはきみに一度も電話などしたことがない、ちょっぴり心が痛み、それはなぜかと考え出すと、疑
184 012 日本人妻の間にできた子供である
185 022 いずれ世間は納得する
185 023 だが、愛する時間を奪われた
186 029 みんな若かったと了解した瞬間、未来に到着していたことがわかった
186 031 過去と現在の空間がぴたりと重なり、その輪郭がずれてぼやけていく
186 032 （時間の正体を見たんだ）
186 033 一種の時間差攻撃ですね？
186 053 どんな空間のなかにあっても、
186 066 空間が空間であるうちは物の集合にすぎないから
186 069 空間と空間のあいだに時間が挟まる
186 072 時間は偉大な造物主だからね
186 075 時間のさまざまな変形態にすぎぬ）
186 076 万物は時間の塊りで

186　080　誰かが寄賭してくれたナポレオンの一壜もいずれ劣らぬ時間の傑作だった
186　083　思索も夢も時間の戯れで
186　087　時間を忘れてぼんやりするのだった
187　030　なおかすかに雲間にあった
188　034　その間、昔の仲間が、三人死んでいる。
192　014　薄暮と昧爽とをとりちがえていた迂闊さに、狼狽するも間なく、巨大な生きものの胎内にのみこまれるように、
192　017　よくよく見れば、そこから一米間隔くらいで、白い明りが点々とつづいているのだ。迷う者のために設けられた救急

あいだから　間から
007　008　多孔質の雲の間からトンボの眼のやうに碧く　アスピリンを積ん
010　020　手をあげた少年の五指の間から
033　009　盲目はドアの隙間から入ってくる
037　012　わづかなドアの隙間から

あいだで　間で
019　010　花と大理石の間で
036　011　みずみずしい樹木と花花の間で
054　054　彼等が剥製の人間であるかどうか
166　004　失われたものと現在あるものの中間で
186　066　空間が空間であるうちは物の集合にすぎないから

あいちゃくの　（愛着の）
041　034　いとしい藻　あの愛着の汐よ

あいつら
039　121　だがわたしはあいつらを許さない

あいて
008　017　レコオド音楽にクチあいて　緑の藻を夕べてゐる
014　010　みんなポカンと口をあいてゐると
066　025　二階の窓があいて

あいて　相手
058　037　サラリーマンや労働者を相手に
112　039　さびしい酒場の女たちを相手に
181　011　十八の小娘を相手に
186　047　理解されないと思うのは傲慢、相手に対する侮辱です！

アイディア
106　018　アイディアもなければ　構成も弱い

あいてゐる
014　010　みんなポカンと口をあいてゐると

あいぶ　（愛撫）
024　003　る　血液を噴き上げている白い管は輝やける噴水の愛撫をう
032　012　わたしを愛撫するのはむかしの夢であらう
048　016　内部からのひかりをひそかに愛撫している
052　013　情慾に飢えたわたしの魂をやさしく愛撫する
070　018　あなたがいくら黒髪を愛撫しても、
137　008　意地汚なく愛撫を重ね

あいぶして　（愛撫して）
048　016　内部からのひかりをひそかに愛撫している
070　018　あなたがいくら黒髪を愛撫しても、

あいぶしている　（愛撫している）
048　016　内部からのひかりをひそかに愛撫している

あいぶする　（愛撫する）
032　012　わたしを愛撫するのはむかしの夢であらう
052　013　情慾に飢えたわたしの魂をやさしく愛撫する

あいまい
164　012　あいまいで　ずるい
164　013　あいまいなのは
164　014　ぼくらの関係があいまいだからだ

あいましょう　会いましょう
054　113　「また明日会いましょう　もしも明日があるのなら」
128　057　桜の咲く頃　また会いましょう

あいらしく　（愛らしく）
036　026　それらは花花ほど愛らしくない

アイル
146　049　きっとここから出してあげますよ（アイル　ゲッ　チュー・アウト・オブ・ジス）」
184　011　アイルランドとスペインの混血の男と

アイルランド
184　011　アイルランドとスペインの混血の男と

あう　会う
050　023　立会う者もなかった
054　003　僕らはもう会うこともないだろう
054　051　賢い三人の友に会うのである

077　003　神の復活に出会うよりもたやすい
100　079　ぼくたちが出会う場所は
112　013　過去でしか会うことのないおれたちだ　何の秘密もあるものか
180　021　これから会うことはないが

アウト
146　049　きっとここから出してあげますよ（アイル　ゲッ　チュー・アウト・オブ・ジス）」

あえぎ　喘ぎ
191　007　虫獣の喘ぎ

あお　青
001　001　青柄のシャベルで
001　006　青い靄を裂く
003　010　海の景色はこんなに暗い青でせうか
004　001　ガラスの中の青い花
005　004　青い帽子の微風が通り
006　003　爆発したセロイドの匂が　室内を明るくした　青い
007　013　阿片の軽艇（ボート）は霧の中へ青い泡を残して去るべく一人の少女を誘拐
010　005　日の匂を発散させる少年は青い麦の芽である
010　008　青い麦の芽の匂が向日葵のあたりにのこる
011　012　青い花とまちがへたりする
012　015　青い舌を垂らした植物の蔭から
013　003　青いけむりの蛇が枝を登り
014　024　樹の海に青いぎんの雨が降ったよ
015　002　室内を青く洗ってゐる
017　024　青いアタマが音をあげた
017　027　青いアタマは蒼くなり
018　010　青い芽が伸びる
021　002　青い樹の下は
021　014　青いブヌウマチックのように
023　005　青い葉が溶かしてしまふと
024　002　脳髄は青く透明である　ざわめきの聞こえる孔には栓をつめ
025　014　青い雨のやうに燕のやうに
025　028　脳髄は毒のやうに青くなる
028　042　青い森林の地区に
029　009　窓は開かれて北方に青く
033　017　青い皿のあたりに葉脈を
039　129　ひややかな青い噴水も
041　027　青い霧が立ち罩め
041　037　青春よ　もう再び戻ってきてはいけない
042　013　脱ぎすてた分身が青く光る
045　002　さっと青い畳のうへに来た

045　019　畳よりも青い顎の　若い主はしばし呆ける
046　025　この橋も海中に漂ひ去って　躍りたつ青い形象となり
046　054　群青に支へられ　眼を彼岸へ投げながら
050　011　Mよ、昨日のひややかな青空が
052　019　あなたの未来の指輪が青い光をあつめ
054　062　ペテルスブルグの青年が僕たちに告げたことを……
054　151　ちぎれた青空のように飛んだ一枚のハンカチーフ
055　019　青い海のなかに二人の運命をうかべているはずであった
056　022　風景はいっそう青ざめてくるのみである
057　006　青空の下で
057　007　パスカルの読み方を教えた青年が戦死し
058　020　破れた天井の青空が
061　040　青白いサラリーマンが歌っていた。
061　144　あなたの青銅の額には、濡れた藻の髪が垂れ、
061　164　そして濡れた藻と青銅の額の上に、
068　010　青洟色の海
069　004　青白い少女が
070　056　なんという青白い顔をしているのか
070　060　誰だ！　青白い霧の顔で
072　017　青、赤、黄、白の運命の使者たち
074　015　かぎりなく澄んだ青空であった
076　019　きみの青白い身体はみるみるうちに
077　021　青白い記憶の炎につつまれて
079　005　青空の無のなかに溺れようとしている
083　019　より高い青空の深みへ落ちてゆく
083　021　いちばん深い青空よ
084　010　そこには青い灯のバアがありますから
084　032　どこまでもつづく青い灯の谷間にも
086　003　青く遠い空
093　023　孤独な青年の体臭に
098　016　うす青いけむりがゆっくり立ちのぼる
098　027　青空にくっきり聳えて輝いていた五つの尖塔
100　068　青空もろとも
108　010　青くなっている海
147　005　生きることに困難を覚えていた青年時代だったら
149　002　青い蒙古斑が忘れられない
153　001　青い塩水からうまれた生きものの
167　011　明るい青空が海のようにひろがっている
181　030　さっと顔色を青くする
188　053　あの頃は若く、青い顔で咳をしていたが、
189　030　色は青いが新鮮でない野菜

あおい　青い

001　006　青い靄を裂く
004　001　ガラスの中の青い花
005　004　青い帽子の微風が通り
006　003　爆発したセロイドの匂が　室内を明るくした　青い
007　013　阿片の軽艇（ボート）は霧の中へ青い泡を残して去るべく一人の少女を誘拐
010　005　日の匂を発散させる少年は青い麦の芽である
010　008　青い麦の芽の匂が向日葵のあたりにのこる
011　012　青い花とまちがへたりする
012　015　青い舌を垂らした植物の蔭から
013　003　青いけむりの蛇が枝を登り
014　024　樹の海に青いぎんの雨が降ったよ
017　024　青いアタマが音をあげた
017　027　青いアタマは蒼くなり
018　010　青い芽が伸びる
021　002　青い樹の下は
021　014　青いブヌウマチックのように
023　005　青い葉が溶かしてしまふと
025　014　青い雨のやうに燕のやうに
028　042　青い森林の地区に
033　017　青い皿のあたりに葉脈を
039　129　ひややかな青い噴水も
041　027　青い霧が立ち罩め
045　002　さっと青い畳のうへに来た
045　019　畳よりも青い顎の　若い主はしばし呆ける
046　025　この橋も海中に漂ひ去って　躍りたつ青い形象となり
052　019　あなたの未来の指輪が青い光をあつめ
055　019　青い海のなかに二人の運命をうかべているはずであった
084　010　そこには青い灯のバアがありますから
084　032　どこまでもつづく青い灯の谷間にも
098　016　うす青いけむりがゆっくり立ちのぼる
149　002　青い蒙古斑が忘れられない
153　001　青い塩水からうまれた生きものの
188　053　あの頃は若く、青い顔で咳をしていたが、
189　030　色は青いが新鮮でない野菜

あおい　蒼い
011　011　蒼い干枯びた心臓を支へて

あおいでいる　仰いでゐる
046　015　あなたはとほい橋の上で　白昼の花火を仰いでゐる

あおぎ
073　018　不幸な兵士は空をあおぎ

182　016　暮れゆく空をあおぎ

あおぐ
171　018　太陽をかくす一片の雲をあおぐ

あおく　青く
015　002　室内を青く洗ってゐる
024　002　脳髄は青く透明である　ざわめきの聞こえる孔には栓をつめ
025　028　脳髄は毒のやうに青くなる
029　009　窓は開かれて北方に青く
042　013　脱ぎすてた分身が青く光る
086　003　青く遠い空
108　010　青くなっている海
181　030　さっと顔色を青くする

あおく　蒼く
017　027　青いアタマは蒼くなり

あおげ　仰げ
044　006　仰げば星辰の静かな明け暮れ

あおざめた
060　019　悲しみにあおざめた額のうえに
089　006　あおざめた河明りを見おろしている人たちといっしょに

あおざめた　蒼ざめた
025　057　蒼ざめた肉体は
041　075　追憶の蒼ざめた紙片は
046　045　内部を刻む時計の音に　蒼ざめた河のこの沈黙はつきまとひ
061　143　蒼ざめた橋上の人よ、
065　026　荒涼とした心に、蒼ざめた花嫁をあたえ

あおざめて　青ざめて
056　022　風景はいっそう青ざめてくるのみである

あおじろい　青白い
061　040　青白いサラリーマンが歌っていた。
069　004　青白い少女が
070　056　なんという青白い顔をしているのか
070　060　誰だ！　青白い霧の顔で
076　019　きみの青白い身体はみるみるうちに
077　021　青白い記憶の炎につつまれて

あおぞら　青空
050　011　Mよ、昨日のひややかな青空が
054　151　ちぎれた青空のように飛んだ一枚のハンカチーフ
057　006　青空の下で
058　020　破れた天井の青空が
074　015　かぎりなく澄んだ青空であった
079　005　青空の無のなかに溺れようとしている
083　019　より高い青空の深みへ落ちてゆく
083　021　いちばん深い青空よ
098　027　青空にくっきり聳えて輝いていた五つの尖塔
100　068　青空もろとも
167　011　明るい青空が海のようにひろがっている

あおむけに
067　006　あおむけによこたわっていた

あおられた
167　004　あおられたドアの開閉音にあわせて

あか　赤
005　006　赤い屋根の学校は
005　016　吹かれてゐる赤い煙突は
006　013　それから赤い排日ポスターを
007　012　空いちめん赤い花が咲く
010　009　その新しい設計こそ白い帽子と赤いジャケットの
017　003　赤い蝋燭が点されて
017　021　仏陀たちの鼻は赤くなる
053　010　わたしは赤いセーターを着て
054　124　絵画は燃えるような赤でなければならぬ
059　014　ちいさな赤い唇とは
062　004　落ちた夕日の赤い血が
065　045　何もなかった。絲杉をはなれた赤い月は
072　017　青、赤、黄、白の運命の使者たち
072　036　赤帽が白帽をひきはなした
072　048　白帽が赤帽をひきはなした
081　013　何千年の闇をつらぬいて真赤な雲の火柱がたち
089　002　赤々とストーヴが燃えている部屋の
093　020　そのようにかれの赤い血も
107　009　故国の空は赤かった
121　010　赤い魚も釣ってみたい
124　034　赤い霧がにじり寄ってくる
125　020　恐怖で赤く熟れた月が廂に出ている
144　002　赤い林道に入っていく

153　012　真赤にそまった海が見え
189　026　空の海が真赤に煮えたぎっているのを

あかあかと
057　023　夕日があかあかと上衣の肩をそめ

あかあかと　赤々と
089　002　赤々とストーヴが燃えている部屋の

あかい　紅い
019　003　掌は紅い薔薇の花を

あかい　赤い
005　006　赤い屋根の学校は
005　016　吹かれてゐる赤い煙突は
006　013　それから赤い排日ポスターを
007　012　空いちめん赤い花が咲く
010　009　その新しい設計こそ白い帽子と赤いジャケットの
017　003　赤い蝋燭が点されて
053　010　わたしは赤いセーターを着て
059　014　ちいさな赤い唇とは
062　004　落ちた夕日の赤い血が
065　045　何もなかった。絲杉をはなれた赤い月は
093　020　そのようにかれの赤い血も
121　010　赤い魚も釣ってみたい
124　034　赤い霧がにじり寄ってくる
144　002　赤い林道に入っていく

あかかった　赤かった
107　009　故国の空は赤かった

あかく　赤く
017　021　仏陀たちの鼻は赤くなる
125　020　恐怖で赤く熟れた月が廂に出ている

あかし
168　013　生きることの永続性のあかしか

あかそう　明かそう
096　012　この夢の果で一夜を明かそう

あかつき
010　022　あかつき　がひらけはじめる

あかぼう　赤帽
072　036　赤帽が白帽をひきはなした
072　048　白帽が赤帽をひきはなした

あかり
063　006　ーーあかりを消して」あなたは言った
063　021　ーーあかりをつけて」あなたは言った
064　022　ーーさあ、あかりを消せ！
066　039　眠れない部屋のあかりがひとつ
177　011　月あかりに見上げる

あかり　明り
025　021　室内には薄明りのランタンが
045　018　とおい稲妻の明りをたよりに髭をそった
056　021　ときに河明りが彼の額を照らしだし
089　006　あおざめた河明りを見おろしている人たちといっしょに
180　044　月明りの下で
192　016　震えている足許に眼をおとすと、白い四角の標識に、明りが仄かにともっていて、
192　017　よくよく見れば、そこから一米間隔くらいで、白い明りが点々とつづいているのだ。迷う者のために設けられた救急
192　023　七十米と行かぬうちに、白い明りの標識は消え、そこから先は真っ暗である。

あかるい
066　023　あかるい月がたずねていった。
074　022　あかるい微風のなかに

あかるい　明るい
005　008　明るいシャボンの中から転がり出た
015　001　窓は明るい海の水で
020　001　明るいガラス管の中で
025　035　縞になった明るい光線を歩む
053　005　明るいひとびとの笑顔も
058　021　いつもいくらか明るいようです
059　003　明るい海岸のボートへ連れさっていった
068　025　明るい笑いの渦をのこし
082　004　この明るい窓枠のなかから
084　017　アナウンサーの明るい声はこたえる
095　017　明るい無人の電車が
106　029　むやみに明るい星空があり　意味なく敏感な宇宙があり
125　015　歩哨はいつも広場の明るい日ざしのなかを
146　003　明るい観光ビルのなかに入っていきました
167　011　明るい青空が海のようにひろがっている

あかるく　明るく
006　003　爆発したセロイドの匂が　室内を明るくした　青い
028　064　空壜の堆積する地所を揺るがしながら明るく笑う
065　008　明るく笑っていた。その冷たい、声のない笑いは
090　019　けっして明るくならない
098　020　その白い手のように明るく清潔にみえる
131　002　空をいくらか明るくした
183　006　ことのほか色鮮やかで明るく

あかるさ　明るさ
127　003　世界の明るさに耐えた。
174　023　「死後の世界」の明るさを先取りして

あかるんだ　明るんだ
170　006　明るんだ窓に光を失った電燈を消し

あき　秋
048　020　春　夏　秋はまたたくまに過ぎてゆく
050　018　いつも季節は秋だった、昨日も今日も、
054　001　それは一九四二年の秋であった
059　019　秋風がたつ頃になると
060　012　世界の秋は深くなってゆくように思われる
061　057　一九四〇年の秋から一九五〇年の秋まで、
091　007　秋のつめたい空気をひきさく
109　012　そうして、秋風に身ぶるいして
110　009　秋はますます深くなるばかりだ
116　007　よりそって　晩秋の路上に
132　008　その秋はきた
132　009　年々の秋をとざす一つの秋
143　019　この秋の暮には
150　001　二十才になった年の秋に
157　006　秋は深くなりました

あきかぜ　秋風
059　019　秋風がたつ頃になると
109　012　そうして、秋風に身ぶるいして

あきち　空地
058　001　ひとびとが足をとめている空地には

あきらか　明らか
113　018　してよいことわるいこと　規律は明らかだった
142　084　彼の与える教訓は自ら明らかであろう」

142　085　自ら明らかなことにも　悲しいかな　認めようとしない者があり

あきらめ
122　010　あきらめきった人生の
180　054　魔風に挑戦するのはあきらめよう
186　046　ぼくを理解しようなんて、あきらめたほうがいいよ
189　006　あきらめが肝腎さ

あきらめ　諦め
062　058　生きることを諦めるには
070　057　おまえはなにもかも諦めたようにみせかけて、
070　058　なにひとつ諦めてやしないだろう
106　032　正直な諦めを抱いて　立去るべきではないだろう

あきらめきった
122　010　あきらめきった人生の

あきらめた
186　046　ぼくを理解しようなんて、あきらめたほうがいいよ

あきらめる　諦める
062　058　生きることを諦めるには

あきれ　呆れ
174　004　「病気がこんなにこたえるとは、思ってもいませんでした。春からノイローゼ状態で我ながら呆れかえっていま

あく
002　003　黒い穴があく
062　011　そして闇はあくまで深いから
062　026　そして闇はあくまで深いから
152　018　あくまで一人の殺し屋の
176　023　誘惑の手はあくまで白く
188　029　精神は、あくまで健康、

あくじ　（悪事）
129　009　なさざる悪事はひとつもない

あくしゅ　（握手）
112　005　おれを見るな　さあ握手

あくしゅう　（悪臭）
061　080　悪臭と汚辱のなかから

あくま　（悪魔）
039　096　悪魔よ教へてくれ
075　004　いかなる悪魔も
075　012　悪魔の手におちるかもしれない
125　008　悪魔のオーケストラの練習がうるさい
152　002　悪魔が出てくる
152　036　なんと無邪気な悪魔のやつめ！
172　026　こっそり悪魔に奉仕することだ
173　016　神と悪魔は一身同体
179　018　悪魔の夜がくる前に

あくむ　（悪夢）
059　007　わたしにはながい悪夢の日がつづいた

アクロポリス
012　020　知識の樹はアクロポリスを覆ひ

あけがた　明けがた
055　023　おれは明けがたの街にむかって唾をはいた

あげくに
163　003　迷路をさまよったあげくに

あけくれ　明け暮れ
044　006　仰げば星辰の静かな明け暮れ
144　017　わけよしの性術に明け暮れて
190　009　その斫のとどく範囲の明け暮れ

あけくれて　明け暮れて
144　017　わけよしの性術に明け暮れて

あげた
010　020　手をあげた少年の五指の間から
014　009　セロが憤慨して足をあげた
017　024　青いアタマが音をあげた
148　026　そして、ふと顔をあげたとき、
183　020　明日の強気節をどう謳いあげたらいいか？

あけて
066　004　（あけてください、どうか）
066　014　（あけてください、どうか）
066　024　（あけてください、どうか）
066　034　（あけてください、どうか）

066　037　あけてください、どうか！

あげて
005　017　リボンの花火をあげて
025　017　焔をあげて生ひ繁り
045　006　音もなく空を走る稲妻を見あげてゐる
070　029　形のない魂の叫びまでしめあげてしまう。
072　038　あとは砂煙りをあげて一団となって疾走している
075　002　小さな波をうちあげて
081　021　血と泥と鉄のしぶきをはねあげて
088　059　おまえを高く抱きあげて
089　024　やさしい人は　ふと顔をあげて
146　032　けたたましく悲鳴をあげて叫びました
152　030　美しい炎をあげて燃えあがり

あげる
046　026　自然の声をあげる日がくるだらうか
054　052　手をあげると　人形のように歩き出し
062　029　わたしの手から鉛筆をとりあげるように
080　020　きみはきみの失われた両手を高くあげる……）
142　073　十二年の刑期をつとめあげるために監獄に戻っていったのである
149　001　しぶきをあげる人魚姫の

アゴ
145　001　「至上のトーモロコシの毛がアゴにもある長髪の若者が

あご　顎
045　019　畳よりも青い顎の　若い主はしばし呆ける

あこがれ　憧れ
111　004　憧れにも恐怖にも　母にも恋人にも
147　002　若くて死に憧れていた母が一緒に死のうと言えば
188　084　日本の重文とされている民家への憧れが、

あこがれて　憧れて
147　002　若くて死に憧れていた母が一緒に死のうと言えば

あさ　朝
008　001　朝の Battle-field
016　001　レモン色の朝焼だ
025　056　爽やかな朝に墓場の鍵が配られたとき
026　036　明朝の新聞紙がぬれてゐた
038　015　木木の下のみ朝がきます

054　166　僕らの家の戸口を大きな拳で敲く朝のことを……
055　043　朝の食卓につく
055　061　さわやかな朝の風が
078　001　しずかな朝であった
078　004　美しい朝であった
112　019　おまえは今朝も蛇口のまえで
128　093　朝の夕暮れ
133　027　野末の朝露
148　043　朝の光りがまぶしい、
160　056　その日は夜どおし起きており　朝の四時にゴミを捨てに廊下へ出て
166　019　という？先生の発言を今朝の新聞で読んでから
170　012　さびしい男の朝の独白）
170　015　朝日に反射し
177　032　バスは朝まで来ない
190　013　時には朝早く釣竿を持ち
193　021　いまし朝雲を東によせて

あさい　浅い
030　033　実ったあとの浅い眠りは疲れである
073　010　浅い湾口には

あさぐも　朝雲
193　021　いまし朝雲を東によせて

あざけり　嘲けり
054　006　そして銃を担ったおたがいの姿を嘲けりながら

あさせ　浅瀬
061　119　淫売婦には浅瀬ほどにも見えなかったりするのだ

あさって
112　024　ちいさな賃金を得なけりゃならない　あすもあさっても
128　075　あさってがくるまで

あさつゆ　朝露
133　027　野末の朝露

あさましい
070　009　あさましい祈りのことばを口にし、
112　036　あさましい利害関係のなかでたたかいながら
143　018　みじめであさましい生きた心よ……

あさましく

165　007　わたくしにはあさましく映っていて

あさましさ
143　012　岩床につくばうあさましさを思う……

あさやけ　朝焼
016　001　レモン色の朝焼だ

アザラシ
171　008　一にアザラシ、二にムイシキン公爵
171　011　草原に追いやられて殺されるアザラシの

あさる
068　026　恋をあさる若者の血汐のなかにも
104　003　たくましい狩人たちも　恋をあさる猟場から

あし　（葦）
025　020　わづかにさわぐ葦の触手を見る
028　013　昔からの葦の巣があり個人が住んでゐるが
038　022　葦がそよぐ
094　006　ぽきぽき葦は折れて水垢のうく岸辺

あし　足
012　025　象牙の足がでる
014　009　セロが憤慨して足をあげた
025　011　その手その足は毛のやうに
030　025　濛朧とした足にゆすられながら
033　018　具足は視界の外ではない
046　005　はるか足下を潜りぬける黒い水の流れ
046　029　あなたの生をめぐる足跡の消えゆくを確め
046　032　忘却の階段に足をかけ
049　013　黒い足のように縮まっている　君の黒い足のようにー
050　026　きみはただ重たい靴のなかに足をつっこんで静かに横たわったのだ。
050　027　「さよなら、太陽も海も信ずるに足りない」
053　054　淋しいわたしの足跡は落葉に埋って見えません
054　070　首を吊っている母親の足をひっぱれ！
057　019　力が判断と緊張をしっかりと両足にむすびつける
058　001　ひとびとが足をとめている空地には
061　051　砂浜につづく足跡のように
061　058　あなたの跫音と、あなたの足跡は、
061　074　あなたの足を停め、あなたに待つことを命ずる「現在」に。
061　077　溺死人の行列が手足を藻でしばられて、
061　150　同じ霧の階段に足をかけ

061　199　わたしにはまだ罪が足りないのですか、
063　018　ぼくは片足にスリッパをひっかけて
072　014　あのスマートで強靱な足に注目しよう
072　072　千万の人々を容れるに足りるものだ
086　010　崩れゆく砂の足跡
088　026　椅子のうえで寒さにふるえているぼくの手足を
089　038　吹きつのる北風に足を早めます
093　017　かれの手足がはなれ罪もまたはなれてゆく
103　007　さまよう素足をもち
106　017　人生を説明するのに　どうしたって何かが足りないようだ
112　029　眼や耳や手足をなくした不幸な犠牲者に何をしてやったか
124　004　仲間も涙も校歌も国家も売り足りないが
142　088　いじけた打算がある　わざわざ危険な対立に足をふみこんで
148　040　戦死者の手足がぐるりと輪になり、
150　012　自己韜晦の癖を或程度まで満足させてくれる。
151　008　貯金は定期普通預金合わせて七百万に足りない
151　022　罰を受けつづけることに満足を覚えるマゾヒストなんだおまえは
154　004　卑怯な足跡
154　019　いましも刑罰の足台が置かれ
158　034　北條や足利の美しい光景をすくってみせたときだろう
164　009　足で地面をばたばた踏んで
167　007　足もとのストーヴに火をつけると
171　016　人は幸福であり満足だとはいかないものか、
172　006　風の足である
180　025　ら……。貴方に判らなかろうと、もう少し付け足すと、昨年は形相の意味も知らなかったということ。私は「メ
183　023　すこし足の不自由な老人がほほえみかける
186　048　理解されるに足る自分があるとは思っていないよ
192　006　それにしても、と影をもたぬ寂寥が、くびをかしげる。人に会わぬ。風はそよとも吹かず、自分の足音さえきこえな
192　016　震えている足許に眼をおとすと、白い四角の標識に、明りが仄かにともっていて、

あじ　味
028　049　しかしこれらは何も意味しない意味はない
032　007　気味悪くキーキーいふ音に
039　083　美しい火災の意味を知るだらう
041　114　ただ一脚の椅子があるだけ　気味悪くキーキーいふ音に
047　008　頭上で屋根を剥ぐ不気味な爪の音……
053　034　それに何の意味があったでしょう
058　014　無意味な時代がしずかに腐敗しています
061　128　活力と滋味を湛え
065　041　その不気味な、悩ましい笑いは
085　008　消えやすいアリバイ探しの興味である
090　025　気味わるい沈黙を深めるために……
092　005　ぬすんだ本の味は

093　010　かかる読書法は良い趣味以外のなにものでもない
106　029　むやみに明るい星空があり　意味なく敏感な宇宙があり
107　014　失うことの意味がわかるのは
128　044　神なければ　すべては趣味の問題だ！
141　007　へえ、それでキスの味は？
142　011　その意味と深さを失い
142　051　しかし　それが何を意味するのかね
150　041　今にしておもえば、真実を衝いた薄気味わるい言葉である。
150　070　いささか不感症気味であるが、
152　007　無意味ないたずらにも
156　028　無償を意味する
158　002　きみのいう断念の意味を
158　036　断念の意味は果されたのだ
166　016　自由の意味をもてあましている
180　025　ら……。貴方に判らなかろうと、もう少し付け足すと、昨年は形相の意味も知らなかったということ。私は「メ
184　016　その意味が大好きだと言い
186　023　往きも復りも気味が悪かったよ
186　081　それらを賞味しながら

アジア
051　005　だが何処へ？　ヨオロッパでもアジアでもない
103　024　陸封されたアジアの辺境でもない
166　023　巧妙に管理されてアジア病に冒されていく

あしあと　足跡
046　029　あなたの生をめぐる足跡の消えゆくを確め
053　054　淋しいわたしの足跡は落葉に埋って見えません
061　051　砂浜につづく足跡のように
061　058　あなたの跫音と、あなたの足跡は、
086　010　崩れゆく砂の足跡
154　004　卑怯な足跡

アジア病
166　023　巧妙に管理されてアジア病に冒されていく

あしおと　跫音
004　010　太陽の跫音が近づいてくる
027　017　局囲の跫音をきかない
035　019　跫音は
038　012　虚ろな跫音が
050　002　あらゆる階段の跫音のなかから、
061　046　街角をまがる跫音のように
061　058　あなたの跫音と、あなたの足跡は、

100　049　あらゆる階段の跫音のなかから
146　044　誰かの跫音がします

あしかが　足利
158　034　北條や足利の美しい光景をすくってみせたときだろう

あしき　（悪しき）
044　012　「美しき実を結ぶ悪しき樹はなし。」
134　003　悪しき社会において

あしだい　足台
154　019　いましも刑罰の足台が置かれ

あしもと　足もと
167　007　足もとのストーヴに火をつけると

あしもと　足下
046　005　はるか足下を潜りぬける黒い水の流れ

あしをかけ　足をかけ
046　032　忘却の階段に足をかけ
061　150　同じ霧の階段に足をかけ

あす
112　024　ちいさな賃金を得なけりゃならない　あすもあさっても

あす　明日
035　023　おそらく明日訪れてくるだらう
039　103　明日はすでに暮れてゐるだらう
041　033　優しい眼鏡や柔かい手袋の明日の方まで湿してゐる
041　053　また明日　お会いしませう　もしも明日があるのなら
052　030　明日の夕陽を背にしてどうしたらよいのだろう
054　113　「また明日会いましょう　もしも明日があるのなら」
056　019　明日もなければ今日もない
064　004　ーー明日は明日、と街灯が答えた。
064　029　ーー明日は明日、と通行人が呟いた、
071　005　今日のなかの明日
071　016　昨日も明日もない
071　039　明日から昨日へ
071　044　今日のなかの昨日と明日
080　015　おお　明日をあたえよ
087　023　明日は　おそらく北風が吹く
100　005　また明日　お会いしましよう　もしも明日があるなら

100　029　もしも　明日があったら
100　037　だが　明日はなかった！
100　052　また明日　お会いしましょう
100　056　もしも　明日があるなら……
100　074　ぼくの明日は
123　004　明日も欲しがるだけ
128　055　明日の見出しができた
142　106　一つの　否！　は　明日には無数の　否！　になるだろう
160　046　今夜のかれの幸運は明日にはきみのものだろう
167　074　昨日よりよき明日は来ないのだから
179　029　明日には深い霧の底に沈み
183　020　明日の強気節をどう謳いあげたらいいか？

あずけている
054　084　すべて記憶に鍵をあずけている人々よ

あずけにいく　預けにいく
178　007　どこにもない場所に預けにいく

アスパラガス
009　012　アスパラガスはヒルネをするが

アスピリン
007　008　多孔質の雲の間からトンボの眼のやうに碧く　アスピリンを積ん

アスファルト
021　023　アスファルトで新しく誕生し
041　091　息はたえ　冷たいアスファルトの上に落ち
058　009　踊っている男女の影がアスファルトに落ちてきます
127　016　アスファルトの縁に

あせ　汗
009　007　あなたは汗をながす
061　003　汗と油の溝渠のうえに、
129　018　汗をかかない肌と
140　021　コカコーラの汗をうかべ
143　006　冷たい汗をかく……
162　023　かれの死が均合うのは一桶の汗か

あせた　褪せた
061　147　あなたの褪せた追憶の頬に、かすかに血のいろが浮ぶ。

あせて

106　015　バラ色の頬はあせても　不幸な五十七人がそろって

あせる
071　011　どうして一日の休みにとりかえそうとあせるのか

あたえ
054　137　護衛つきキングと慰めをあたえるクインの価値とが
057　018　櫂はぼくに全身をあたえ
065　026　荒涼とした心に、蒼ざめた花嫁をあたえ
080　015　おお　明日をあたえよ
084　025　うんと愛をあたえてやるわ」

あたえた　与へた
041　063　お入りなさい　私が許可を与へたから

あたえて
084　025　うんと愛をあたえてやるわ」

あたえる　与える
054　107　ちらりと最後のながしめを与える
141　011　与えるものがとっくになくなって、
142　084　彼の与える教訓は自ら明らかであろう」

あたたかい
018　011　あたたかい風は
048　030　白くあたたかい海
064　002　町はあたたかい吐息の下にあった。
064　031　町はあたたかい吐息の下にあった、
067　009　あたたかい街をもつだろう
081　003　あたたかい霧のなかにあった
088　027　あたたかい南国の陽ざしのように融かしてくれるから
113　020　あたたかい下着を送ればどうなるか
120　003　あたたかい風に
123　006　こころはあたたかい

あたたかい　暖い
089　008　「あなたの暖い心のなかにいますよ」
175　011　冬にしては暖い雨の音が

あたたかく　暖かく
188　075　一雨ごとに暖かくなるという、三月の雨が

あたたかさ

143　002　暗黒のあたたかさに包まれて

あたためたい
181　038　ぼくの血を少しあたためたい

アタマ
017　005　丸いアタマの仏陀たちが
017　024　青いアタマが音をあげた
017　027　青いアタマは蒼くなり
017　042　アタマのすべっこい仏陀が叫び

あたま　頭
010　004　白い帽子は頭のアリカを教へるとともに日の匂を発散させる
014　003　頭の大きな楽器が目覚めたらしい
014　029　頭髪を伸ばしてゐるのを知らんかね
025　027　あなたの頭髪の中に鶯が卵を生む
028　003　緑の影はいつもガラス管によりそってゐた純粋な頭の鈍い速度について
036　025　頭髪に巣をかける喧燥な小鳥たち
047　008　頭上で屋根を剥ぐ不気味な爪の音……
054　111　古い夜の匂いがする頭に帽子をのせると
054　138　頭のなかでごちゃまぜに縺れる
055　028　折れた埠頭のさきは
061　090　おまえのからっぽの頭には
062　023　思い乱れたわたしの頭髪にさし込まれ
070　037　ああ、ぼくの頭のなかには
071　021　ぼくの頭髪をひっぱることがある
074　001　埠頭に人かげはなく
085　018　奇怪な造語で喋る連中の頭を踏みつけよう
088　005　ぼくの頭の木のうえに駈けのぼったりする
093　016　もうろうとしたストイックな頭から
095　018　ゴーゴーゴーとぼくの頭上を通過していった
101　051　頭上で枯れ枝がうごき　つめたい空気にふれるたびに
112　042　胡麻的な頭と頭をくっつけて寝ているなつかしいきょうだいたち
142　026　わたしやわたしの家族の頭から　髪の毛一すじ落ちやしないとは
152　022　折れまがった用済みの黒い頭と
152　023　まだ綺麗な白い頭とが仲よくならんでいて
159　002　ひとり頭を垂れていると……
166　015　ますます下手になる詩に頭をひねったりしながら
173　029　頭蓋骨を射ちぬかれて死ぬ一人の男
183　003　歳末商戦たけなわの店頭を
184　026　いま地球は恐怖で頭をかかえているのに。
187　025　ふかぶかと頭をさげた
188　022　頭の禿げかかったひとりの老人が、

188　082　いまさらのように、頭をかかえています。

あたらしい
065　015　そこに、あたらしい岩山が出現するまで
078　006　あたらしい友と肩をくみ
080　017　あたらしい血汐であらい　この苦しみの胸が
101　011　むかしの愛も　あたらしい日附の憎しみも
102　004　あたらしい屍体の雨をふらすから
115　003　あたらしい世界をたずね

あたらしい　新しい
010　009　その新しい設計こそ白い帽子と赤いジャケットの
010　016　新しい射手よ　一本の樹のみを監視するのは賢明ではない
044　010　新らしい種子が新しい土地に播かれつつあることを。
054　159　テーブルに凭れて新しい黄金時代を夢みている
058　004　新しい建物がたちかけています
061　068　新しい追憶の血が、
061　073　新しい希望の血が、
074　021　声なくして新しい死者と語りあった
123　001　新しい年がくるといっても
142　061　　ソビエトにおける新しい精神病　反対！　を叫んで
142　093　家を夢みているだけでは　古い家も新しい家も守れはしない
160　016　闇をつらぬく稲妻と烈しい豪雨の中から新しい発見のように甦ってきた
182　026　老いのうちにも新しい命の水が

あたらしい　新ラシイ
008　015　　新ラシイ靴ハ　押シヨセ　蹂躙スル　　ソレハ

あたらしい　新らしい
004　007　僕は新らしい贅沢な船の設計について
008　012　すてて　砂漠へ逃げてしまった　やがて新らしい靴の
028　025　新らしい印刷術とパルプにより
044　010　新らしい種子が新しい土地に播かれつつあることを。

あたらしく　新しく
021　023　アスファルトで新しく誕生し
041　112　それは又新しく湿気を呼んだ
184　008　新しく家を建てると養子を迎え

あたり
007　002　あたり　見知らぬ老婆が咳をするのはわれらにかかわりのないこ
010　008　青い麦の芽の匂が向日葵のあたりにのこる
030　005　そこらあたりの壁には花もない

033　017　青い皿のあたりに葉脈を
036　004　透明な耳のあたりを吹く
036　009　悲しみは額のあたりの翳ではない
039　076　焼けてしまった昔のあたりを散歩する
040　021　あたりが軋りはじめ
042　002　夜はひそかに　窓のあたりの気配にまぎれ
054　130　だがあたりには誰もいない
061　190　貴方がいらっしゃるあたりは、
120　012　あたりがもりあがってくる
144　006　醜国の快感はここらあたり
179　006　あたりは薄暗くなりかけていたが
180　024　貴方に「女の子の心理」が判んなくたってあたりまえなんです。貴方は心理学やってんのじやないのでしょうか
181　026　みるみるうちにあたりが暗くなって
185　005　一瞬、あたりが真白になった
192　004　夜明け前の微光があたりをくまなく覆っていて、どこへ行こうとしているのか、
192　013　途方もない迷路に入ってしまったと気づくと、あたりが急に暗くなってきて、

あたりに
010　008　青い麦の芽の匂が向日葵のあたりにのこる
033　017　青い皿のあたりに葉脈を
054　130　だがあたりには誰もいない

あたる
041　083　そこにあたる影や光　樹々から流れる緑の匂ひ
189　033　カチャリと皿にあたる小さな音が

あちこち
073　007　あちこちに重油がながれ
101　043　きみたちのいない暗い空のあちこちから

あちこちに
073　007　あちこちに重油がながれ

あちら
039　006　あちらこちらの窪地から
101　003　あちらから昇り　むこうに沈む

あつい　厚い
051　007　厚いガラスの窓からは
097　013　空気を蹴り厚い無の壁をこえて、
143　001　厚い雪に埋れた根のように

あつい　暑い

013　021　暑いでせうから

あつい　熱い
018　015　熱い麦の管は
025　036　重たくなった頸に熱い風が
044　014　熱い太陽を背負ふ　神々よ
046　027　熱い額の　橋上の人よ
051　015　海が熱い体温のなかで燃えたぎっている、
070　027　おまえの熱い血の管は
094　014　背をやく熱い塩のシートに転がされ

あっかして　（悪化して）
142　016　帝政時代よりソビエト体制下で四倍も悪化している

あつぎ　厚着
145　029　夢の厚着で肥りすぎた詩人には真偽はどちらでもよく　魂はもうとっくに死んでいた
172　018　魂に厚着をさせて

あつく　厚く
061　097　厚くまくれた歯のない唇をひらき
125　021　密室のドアはどれほど厚くても充分とはいえない
174　019　ぼくは黒を持ち確実を三隅を占拠したが、中央の白が厚く、ずるずると敗けてしまい

あつくて　厚くて
125　021　密室のドアはどれほど厚くても充分とはいえない

あつくなる　暑くなる
013　002　パイプの腹が暑くなる

あっさり
137　004　あっさり未来を売りわたした

あった
002　007　（夢であったらうか）
005　032　人々は仮死の状態であった
010　002　それは口笛のためのスピイドであった
025　007　それらが船舶の歴史の中にあった時代には
025　025　かつて居睡するセルバンであった
028　004　浴槽の中で思考したのは誰であったか
039　049　あなたの果てしない翳のなかであったのか
039　079　かつて地上に祭があったといふ
050　008　手紙の封筒を裏返すようなことがあった。
050　010　ーー死にそこなってみれば、たしかにそのとおりであった。

051 030 人間はチューブのようなものであったらよい
053 034 それに何の意味があったでしょう
054 001 それは一九四ニ年の秋であった
054 020 なぜ灰と炎が君を滅ぼす一切であったのか？
054 046 ぼんやり立っていたことがあったか
055 019 青い海のなかに二人の運命をうかべているはずであった
055 031 厭な匂いの薬のように澱んでいるばかりであった
056 010 抱きあった若い男女になって
057 002 1886 と書いてあった　その年から
057 011 1850 と書いてあった　その年から
057 012 ぼくはエトランゼであったし
057 026 ぼくは笑ったことがあった
057 028 泣いたこともあったかもしれない
058 012 むかし酒場で知りあった女が
061 126 「かつて泉があった
061 132 「かつて泉があった
061 141 かつて清い泉があったことを……
061 142 そのようにまた沐浴もあったことを……
063 030 ぼくたちが生れるずっとまえからそこにあった微笑を！
064 002 町はあたたかい吐息の下にあった。
064 007 カーテンの蔭で影と影とが抱きあった、
064 008 暗い過去と冷たい記憶がふれあった。
064 031 町はあたたかい吐息の下にあった、
065 002 町があった。孤独な
065 006 ゆれる燈火と死魚の影があるばかりであった。
065 011 あった。寒さにふるえながら
065 018 空虚であった。白い翼をつけた女が
065 020 中にあった。「何を考えているのか
065 056 沈黙があった
066 030 ワイシャツの袖をまくった腕であった。
068 027 やるせない女と海の思出があった
069 007 天国というところがあったんだって
069 008 そこにはまぶしいところがあったんだって
069 010 きらりと光るひとつぶの星があった
069 017 とてもきれいなお花畠があったんだって
069 039 ふたりの少女は翼の影をよせあった
074 015 かぎりなく澄んだ青空であった
074 021 声なくして新しい死者と語りあった
078 001 しずかな朝であった
078 004 美しい朝であった
081 003 あたたかい霧のなかにあった
082 008 あらしの名残りがあった
083 023 とおくて近いこんな夕陽が沈みつつあったのか

092 015 あいすまぬことであった
095 020 死にはデリケートな思いやりがあった
100 029 もしも　明日があったら
100 051 これがすべての始まりであった！
100 059 それは　ぼくの希望の「おわり」にふさわしい多彩な夏であった
113 033 喜んで処刑される者もたくさんあった
126 002 侵略的な人類の手のとどくところにあったら
127 017 タンポポのように咲いたこともあったか。
128 079 影と向いあった
131 005 手と膝をついて歩くこともあった
141 013 黙って向きあったきみとぼくとで、
145 009 そこにもあったトーモロコシの毛のそよぐ丘陵をエンジェルがうまれるのに充分な広さ
148 010 また会おうと約束して別れたきりであった。
148 035 どのようにして戦後の社会をたたかいぬいてきたかを語りあったが、
150 003 「彼は臆病なドン・ファンであった。
150 006 六人の意見が一致してゐる時は、六人とも彼に騙されてゐる時であった。
150 018 自分のことではないかと猜疑したりする者もあった。
150 035 敗戦後の苦しい生活のたたかいに敗れて倒れた者もあった。
150 050 きみが「歯応えというか、取柄があった」という伊藤茂二の場合を挙げることができよう。
158 014 ついに深く考えずじまいであった
158 040 死はやすらかな眠りであったろう
160 058 遺体は屍体置場に二日間放置されたままであった
162 015 恍惚の所業であったかもしれない
164 005 あるか　あったか知らないけれど
165 029 カンフルの注射を三、四度射っただけであった
166 009 かれには軍隊の経験があった
167 042 手の奇蹟を信じたことがあった
167 045 光りのむきを変えると思ったこともあった
168 003 水平への憧憬があった
168 006 やるせない女人への郷愁があった
168 009 虹の国を描くこともあったとおもう
168 012 変幻するおまえの姿に出あったから
173 022 かつてきみの横顔には自伝らしきものがあった
173 026 今では街中でも綺麗な娘に出あったりすると
174 006 早く頑迷固陋にかえりたい。あと三カ月で六十才」と書いてあった。
174 009 きみは意外に元気な様子で近況を語ってくれ、心暖まる十五分か二十分であった。
174 012 問の霧は深くなるばかりであった。
174 029 きっとあったにちがいない、と。
176 020 あらゆる母がそうであったように
186 043 新幹線が開通して以来、機会はいくらでもあったよ
186 044 （どの車輛にでも乗っている可能性があった）
187 030 なおかすかに雲間にあった
188 002 こんな文面があったのを憶えているだろうか。

188　020　ファン・ゴッホ展があった時の画帳が、手もとにあって、
188　048　正義の社会学であったり、深遠な歴史学であったりもするのだから、
193　008　深く息をすることもあったが
193　012　半世紀は車窓の景色であった

あっち
128　084　あっちの星
189　009　あっちへ行ってくれ！」

あつっぽい　熱っぽい
051　035　出口を求める熱っぽい瞳で

あつまって　集って
102　002　みんな日暮の桟橋に集ってくれ

あつまり　集まり
106　007　いくら厳粛な集まりでも　これはひどく殺風景だ

あつまり　集り
150　019　ようするに小心な若輩の似た者同士の集りで、

あつめて　集めて
031　022　机の下から灰や骨などを集めて

あつりょく　（圧力）
167　064　脅かすような慰めるような圧力を加えてくる

あてて　当てて
014　005　手を当てて耳のネジを検査してゐるのを

あてもない
062　044　あてもないわたしの道は

あてもなく
061　187　あてもなく街をさまよいながら、
066　003　黒犬があてもなくさまよっていった。
100　018　あてもなくこの街で生きねばならぬ……

あてる
055　062　頸輪ずれしたおれの咽喉につめたい剃刀をあてる
139　006　どうしてもその主の姿を尋ねあてることができない

あどけない

088　006　あどけないおまえの声は　いつもぼくに
088　042　あどけないマリの夢よ

あとずさり
110　011　あとずさりする水平線にむかって

あとで
014　022　口の悪い家畜どもが逃げていったあとで
051　022　あとでこっそり眼を覚ますことだ、
160　032　ちょっとしたいざこざのあとで

あな　穴
002　003　黒い穴があく
034　005　鍵穴の中で
051　032　あの鍵穴はまばたきしない眼……
051　036　こっちを見凝めている鍵穴を必死に覗きかえす
051　039　小さな鍵穴。
052　004　いまでは墓穴にかくれ
061　121　ちぎれたボタンの穴にだって
112　012　鍵穴や本のあいだにしこたま隠しこんでる狐め
160　068　「蛇の穴」と称して大学にもぐりこみ　教鞭をとったこともあるが
164　024　……共通の穴である深い井戸にむかって

アナウンサー
084　017　アナウンサーの明るい声はこたえる
185　003　アナウンサーの声は平静で

あなた
009　007　あなたは汗をながす
023　019　あなたの耳はちぎれそうな断崖で
023　022　華麗なあなたの指輪とともに
025　027　あなたの頭髪の中に鶯が卵を生む
039　018　あなたは何処に立ってゐるのか
039　029　あなたは
039　040　あなたの微笑はほとんど残酷にちかい
039　049　あなたの果てしない翳のなかであったのか
039　073　あなたの澄んだ声がする
039　080　あなたも
039　086　あなたはあなたの扉のなかに隠れる
039　108　あなたの砂漠は油の匂がする
039　122　あなたの暗い内側で
039　125　むしろあなたの占めてゐる空間に
039　141　あなたのからだから迸る水で

040 026 美しいあなたの皮膚や
041 001 あなたは遠く行かうとした
041 007 あなたは悪く夢を見た
041 010 社交術があなたを涸れさせたり育てたりしないうちに
041 012 だがあなたの素直さは
041 018 あなたはたしかに夜をもつてゐる
041 024 なるほどあなたの剥製の体内から聞える
041 029 そしてあなたは広い眺めの外へはみ出てゐる
041 031 あなたの街灯の滲む光が
041 049 あなたは冷たい石段を降り
041 052 うなだれて　あなたを待つてゐるバスに乗った
041 054 あなたは誰かに向つてさう言った
041 056 あなたは走つてゆくだらう
041 058 別のあなたが
041 060 別のあなたの藻のことを考へながら
041 061 あなたはバスに揺られ　やがて街から去つてしまふだらう
041 064 あなたは何故黙つてゐる　お坐りなさい
041 065 あなたの利益は　あなたのどの釦に隠してありますか
041 066 あなたは何故黙つてゐる
041 068 あなたの体が氷のやうだからだ
041 071 あなたは壁を眺めて怖れの表情を隠さうとしてゐますね
041 074 あなたは孤独の中からも追ひたてられさうになる
041 076 あなたをどこかへ連れてゆかうとする
041 078 あなたのではない鏡のなかへ消えてゆく
041 079 坐席があなたを動けなくした
041 081 あなたはじぶんの鳥を育てた
041 086 いつもあなたの臓腑をつつくとき
041 093 そしてあなたはその小さな骸を
041 098 あなたは独り目覚めてゐた
041 100 あなたの部屋にはシガアの煙がたなびいて
041 104 あなたの計算表　あなたの慈善帳
041 108 あなたの巨大な手から降つてきた
041 109 あなたを愛する者はない
041 110 あなたには人の背中しか見えぬ
041 113 あなたが倒れる場所といへば
041 117 あなたの影だけが残される
041 121 それがあなたの樹木だった
041 123 もはやあなたを導くものはない
041 130 あなたの意志はそれほど強く　それほど果敢ない
041 131 あなたは街の雑閙のなかをとほり
041 138 あなたの指はまだ感覚を失ってはゐない
041 143 あなたは信ずる
041 147 あなたを愛する者はない

041 148 あなたには人の背中しか見えぬ
041 149 知識があなたを盲ひにした
041 150 街の雑音はあなたの耳を不注意にした
041 151 だがあなたは僅かに口を利くことが出来る筈だ
043 009 あなたの影とともに駛ってゐる
043 019 あなたはその深淵に身をなげる
042 003 あなたの淋しさは
042 017 ひろい頬ゑみをうかべてあなたはたつ
044 003 神々よ　あなたの姿勢は万別なれど、
044 015 あなたの渇望が、
044 018 あなたの齢にとってただの一瞬を。
046 006 あなたはまことに感じてゐるのか
046 010 あなたはみづからの心象を鳥瞰するため
046 015 あなたはとほい橋の上で　白昼の花火を仰いでゐる
046 028 あなたはけむれる一個の霧となり
046 029 あなたの生をめぐる足跡の消えゆくを確め
046 030 あなたは日の暮れ　何を考へる
046 038 日没の空にあなたはわななきつつ身を横たへ
046 047 また午後の廊下の如くあなたの躰を影にするだらう
046 049 あなた自身が小さな一つの部屋であることを
046 055 あなたはやはり寒いのか
052 007 あなたはむろん黙っているけれど
052 009 あなたの育たなかった乳房や
052 010 あなたが男を誘惑するはずだった可愛いい頬の黒子のことを
052 012 影になったあなたの子供らしい微笑が
052 015 あなたは本当に暗い地下にひとりで住んでいるのですか
052 016 あなたの乳房や
052 017 あなたの可愛いい頬の黒子のことを
052 019 あなたの未来の指輪が青い光をあつめ
052 020 あなたの未来の時計の振子がうごくのをまえにして
052 023 あなたはどうして人生にさよならを告げたのか
053 048 あなたにはよくおわかりでしよう
053 065 あなたのお顔も　だんだん忘れてゆきそうです
061 011 橋上の人よ、あなたは
061 018 いま、あなたは嘔気をこらえ、
061 047 あなたはうしろをふりかえらなかった、
061 049 あなたの心にうかんだ道のすべてだった。
061 052 あなたはうしろをふりかえらなかった、
061 054 あなたの宙にうかんだ道のすべてだった。
061 056 あなたは冒険をもとめる旅人だった。
061 058 あなたの跫音と、あなたの足跡は、
061 061 どうしてあなたは帰ってきたのか
061 064 どうしてあなたは戻ってきたのか。

061 067 あなたは灰色の街のなかに帰ってきた。
061 069 あなたの眼となり、あなたの表情となる「現在」に。
061 072 あなたは破壊された風景のなかに帰ってきた。
061 074 あなたの足を停め、あなたに待つことを命ずる「現在」に。
061 079 あなたは見た。
061 095 あなたは聞いた。
061 108 あなたは知った。
061 109 あなたがあなた自身であるためには
061 135 父母や妹　またあなたの至上の友たちに」
061 139 あなたは疑うだろうか？
061 144 あなたの青銅の額には、濡れた藻の髪が垂れ、
061 147 あなたの褪せた追憶の頬に、かすかに血のいろが浮ぶ。
061 154 あなた自身が見すてられた天上の星であることを……
061 156 あなたは愛を持たなかった、
061 157 あなたは真理を持たなかった、
061 158 あなたは持たざる一切のものを求めて、
061 209 あなたの内にも、
061 210 あなたの外にも夜がきた。
061 213 あなたの内にも、
061 214 あなたの外にも灯がともる。
061 225 あなたの内にも、あなたの外にも灯がともり、
062 014 わたしとあなたを距てるこの世のどんな約束も
062 018 あなたはかすかにしめった灰の匂いを覆いかける
062 022 あなたのほそい指が
062 030 あなたは悪戯な瞳と微笑で逃げてゆけばよい
062 035 あなたとわたしは
062 041 あなたはそっと見ていますね
062 051 あなたはじっと耳を澄ましていますね
062 055 あなたは黙ってうなずいているのですね
062 063 あなたはつぶらな瞳を閉じていますね
063 004 あなたの身体のように重たく
063 006 ーーあかりを消して」あなたは言った
063 007 ぼくはあなたの口を押えようとする
063 009 かかえきれぬあなたの身体が
063 013 あなたは固く睫毛をとじて死んだふりをしている
063 015 あなたはひそかに呟いている
063 017 あなたのいない夢のなかで
063 021 ーーあかりをつけて」あなたは言った
063 026 ぼくがあなたを信じないように
063 027 あなたはぼくを信じようとしない
064 005 ーーあなた、帰ってきたの？
064 014 ーーそう、あなたは誰なの？
066 019 あなた、そこにいるの？

070 001 恐ろしいひと、あなたは
070 004 恐ろしいひと、あなたは
070 008 恐ろしいひと、あなたは
070 015 やさしいひと、あなたは
070 018 あなたがいくら黒髪を愛撫しても、
070 021 あなたの指は何もつかまえることができない。
070 051 あなたの五本の指はどんな兇器よりも残忍で、
089 004 「あなた　どこにいるの？」と問うたら
089 008 「あなたの暖い心のなかにいますよ」
089 020 「あなたどこにいるの？」
089 039 「あなた　どこにいるの？」
095 022 スムースなスムースなあなたの死顔を。
097 003 あなたは生命も飛翔も見ないだろう。
097 007 あなたは暗い鉄格子の中に、永遠に繋がれるだろう。
097 011 もしあなたが、それを見たいと思ったら、
122 003 あなたが去って
122 012 あなたの涙をわたしが泣く
137 016 「あなたは誰？」と
142 020 考えてみる人はほとんどいない……」とあなたは語った
142 021 あなたは何処にいても
142 022 あなた自身であることをやめないから
142 030 あなたを黙らせることはできない
142 031 あなたは知っている
142 037 あなたのメッセージは
142 043 自己の経験をまっすぐ語るあなたの言葉は
142 123 あなたは見たままを語り　予言者として
146 007 あなたにはぐれてしまったのです
146 017 横顔があなたにそっくりでしたので
146 038 「あなたはどこ？」とたずねても
146 059 あなたが傍でおやすみになっていらっしゃる
160 027 「それはあなたの詩ですか？」
161 004 あなたは
161 005 あなたを殺すものでも
161 010 あなたも赦されはしないだろう
161 014 あなたを赦すことはあなたにはできない
161 021 あなたを殺しにくるものがあれば
164 003 わたしの涙をあなたが泣く
164 011 人の心を盗むあなたの言葉は
164 028 「あなたの涙をわたしが泣く」と
165 012 あなたはやがて分ってしまう何かであり
165 014 あなたは早く死ねばよい
171 010 あなたなんて大きらい！」
186 045 へんな人ですね、あなたは？

186　049　そういえばそれがあなたの口癖でしたね、気障な！
186　052　どうもがいたって、あなたはあなたですよ！

あなた　貴方
061　169　貴方がいなくなってから、
061　173　貴方に叛いたわたしは、
061　182　貴方がわたしに下さったものはこれだけですか。
061　186　貴方の深い慈悲と知慧とを理解できません。
061　190　貴方がいらっしゃるあたりは、
061　200　わたしの悲惨は貴方の栄光なのですか。
180　024　貴方に「女の子の心理」が判んなくたってあたりまえなんです。貴方は心理学やってんのじやないのでしょうか
180　025　ら……。貴方に判らなかろうと、もう少し付け足すと、昨年は形相の意味も知らなかったということ。私は「メ
180　026　ッセージとよみました」と書いた筈、それは私だからそうよめてしまう、というのがどうでもいいことで、貴方

あなたの
023　019　あなたの耳はちぎれそうな断崖で
023　022　華麗なあなたの指輪とともに
025　027　あなたの頭髪の中に鶯が卵を生む
039　040　あなたの微笑はほとんど残酷にちかい
039　049　あなたの果てしない翳のなかであったのか
039　073　あなたの澄んだ声がする
039　086　あなたはあなたの扉のなかに隠れる
039　108　あなたの砂漠は油の匂がする
039　122　あなたの暗い内側で
039　125　むしろあなたの占めてゐる空間に
039　141　あなたのからだから迸る水で
040　026　美しいあなたの皮膚や
041　012　だがあなたの素直さは
041　024　なるほどあなたの剥製の体内から聞える
041　031　あなたの街灯の滲む光が
041　060　別のあなたの藻のことを考へながら
041　065　あなたの利益は　あなたのどの釦に隠してありますか
041　068　あなたの体が氷のやうだからだ
041　078　あなたのではない鏡のなかへ消えてゆく
041　086　いつもあなたの臓腑をつつくとき
041　100　あなたの部屋にはシガアの煙がたなびいて
041　104　あなたの計算表　あなたの慈善帳
041　108　あなたの巨大な手から降ってきた
041　117　あなたの影だけが残される
041　121　それがあなたの樹木だった
041　130　あなたの意志はそれほど強く　それほど果敢ない
041　138　あなたの指はまだ感覚を失ってはゐない
041　150　街の雑音はあなたの耳を不注意にした

043 009 あなたの影とともに駛ってゐる
042 003 あなたの淋しさは
044 003 神々よ　あなたの姿勢は万別なれど、
044 015 あなたの渇望が、
044 018 あなたの齢にとってただの一瞬を。
046 029 あなたの生をめぐる足跡の消えゆくを確め
046 047 また午後の廊下の如くあなたの躰を影にするだらう
052 009 あなたの育たなかった乳房や
052 012 影になったあなたの子供らしい微笑が
052 016 あなたの乳房や
052 017 あなたの可愛いい頬の黒子のことを
052 019 あなたの未来の指輪が青い光をあつめ
052 020 あなたの未来の時計の振子がうごくのをまえにして
053 065 あなたのお顔も　だんだん忘れてゆきそうです
061 049 あなたの心にうかんだ道のすべてだった。
061 054 あなたの宙にうかんだ道のすべてだった。
061 058 あなたの跫音と、あなたの足跡は、
061 069 あなたの眼となり、あなたの表情となる「現在」に。
061 074 あなたの足を停め、あなたに待つことを命ずる「現在」に。
061 135 父母や妹　またあなたの至上の友たちに」
061 144 あなたの青銅の額には、濡れた藻の髪が垂れ、
061 147 あなたの褪せた追憶の頬に、かすかに血のいろが浮ぶ。
061 209 あなたの内にも、
061 210 あなたの外にも夜がきた。
061 213 あなたの内にも、
061 214 あなたの外にも灯がともる。
061 225 あなたの内にも、あなたの外にも灯がともり、
062 022 あなたのほそい指が
063 004 あなたの身体のように重たく
063 007 ぼくはあなたの口を押えようとする
063 009 かかえきれぬあなたの身体が
063 017 あなたのいない夢のなかで
070 021 あなたの指は何もつかまえることができない。
070 051 あなたの五本の指はどんな兇器よりも残忍で、
089 008 「あなたの暖い心のなかにいますよ」
095 022 スムースなスムースなあなたの死顔を。
122 012 あなたの涙をわたしが泣く
142 037 あなたのメッセージは
142 043 自己の経験をまっすぐ語るあなたの言葉は
160 027 「それはあなたの詩ですか？」
164 011 人の心を盗むあなたの言葉は
164 028 「あなたの涙をわたしが泣く」と
186 049 そういえばそれがあなたの口癖でしたね、気障な！

あなた自身
046　049　あなた自身が小さな一つの部屋であることを
061　109　あなたがあなた自身であるためには
061　154　あなた自身が見すてられた天上の星であることを……
142　022　あなた自身であることをやめないから

あなどり
180　003　女子とあなどり

あね　姉
052　003　うつくしかった姉さん！
052　006　ほそい咽喉に流しこんでいる姉さん！
052　014　純潔だった姉さん！
052　021　姉さん！
052　026　姉さん！
053　013　姉さんのかたみの水晶の腕輪がわたしの冷たい手錠で
053　022　いつのまにかわたしはお姉さんのお墓の前に立っています
053　023　永いあいだ眠っていたお姉さん！
053　024　いつものようにわたしはお姉さんさようならを告げることが出来ません
053　042　お姉さん　何処にいるの
053　047　死んでしまったお姉さん！
053　059　美しく繊細で　やさしかったお姉さん！
053　062　お墓のなかでお目覚めになっているお姉さん！
062　009　いまでも空中をさまよっている姉さん！
062　013　いちばん美しい使いである姉さん！
062　027　姉さん！
062　034　姉さん！

あばいて
085　022　かれらの恥辱の隠れ家をあばいてしまおう

あばかれた
054　083　見よ　あばかれた社交術の快楽と有頂天とを

あばよ
013　026　あばよ
112　050　あばよ

アパート
061　039　空気の悪いアパートの一室で、
142　035　孤立した家族の住むアパートの一室で
174　018　（きみが美しい奥さんと結婚して、みんなに羨まれながら、西荻窪のアパートに住んでいたときのことだ）

あびせて
165　010　刺すような視線をあびせて

あびて　浴びて
091　015　きみの欲望は夕陽を浴びてビルディングの林に落ちてゆく

あひれ　溢れ
018　014　音楽が室内に溢れてくる
019　001　靴の溢れる廊下では
021　029　溢れてくる影のどこかで
061　129　野に池をつくり　地上に溢れ

アブラ
016　009　君らの機械にアブラがささされた

あぶら
055　049　あぶらぎった一皿を平げたような顔をする
167　054　人間のあぶらが

あぶら　油
003　011　油絵の裏に隠れてゆく黄ろい月
039　108　あなたの砂漠は油の匂がする
061　003　汗と油の溝渠のうえに、
073　004　一隻の油槽船が
073　007　あちこちに重油がながれ

あぶらえ　油絵
003　011　油絵の裏に隠れてゆく黄ろい月

あぶらぎった
055　049　あぶらぎった一皿を平げたような顔をする

アフリカ
094　024　遠く近くハイネズの原に打ちよせるのはアフリカを白くする波だ

あふれ
031　017　そっとあふれてゐるものだけがやさしかったと
100　061　ペイヴメントには水玉模様の少女があふれ
171　012　無邪気な目には悲しみがあふれていたから
182　027　滾滾とあふれている
183　005　くだもの屋にあふれている蜜柑が

あふれて
031　017　そっとあふれてゐるものだけがやさしかったと
171　012　無邪気な目には悲しみがあふれていたから
182　027　滾滾とあふれている
183　005　くだもの屋にあふれている蜜柑が

あふれて　溢れて
018　014　音楽が室内に溢れてくる
021　029　溢れてくる影のどこかで

あふれてくる　溢れてくる
018　014　音楽が室内に溢れてくる
021　029　溢れてくる影のどこかで

あふれてゐる
031　017　そっとあふれてゐるものだけがやさしかったと

あふれる　溢れる
019　001　靴の溢れる廊下では

アヘロン
040　018　アヘロンの岸にさまよう亡霊のごとく

アヘン
005　033　アヘンの煙が立のぼる

アポロ
012　003　若いアポロは日傘にかくれ

あまい　甘い
088　060　どんな恋人たちよりも甘いキスをしよう
187　027　甘い香りのように地に融けていく

あまおと　雨音
122　008　ひとしきり烈しくなった雨音をきく
146　061　屋根を叩く雨音がひとしきり強くなって

あまがさ　雨傘
031　015　雨傘やブラシなど日用品が置いてある
087　021　雨傘がいたみ長靴が駄目になる

あまかった　甘かった
092　006　盗んだ梨より甘かったと……

092　012　あの罪は甘かったが

あまがっぱ　雨合羽
181　032　雨合羽の人よ

あまくみては　甘くみては
180　017　だからといってお年寄りの心理を甘くみてはいけませんよ

あまって
113　035　自己の愚かさに思いあまって
180　045　思慮にあまって立ちつくすこともあるだろう

アマルリク
142　101　ブコフスキーやアマルリクが直面した状況にくらべたら

あまれ　編まれ
028　015　工場の透明な模様の中に編まれ

あみもの　編物
089　025　編物をしていた手から毛絲の玉を落しました

あめ　雨
012　012　ぎんの驟雨の中で
014　024　樹の海に青いぎんの雨が降ったよ
017　034　雨の中を盗み去られたことには
023　006　実体のない窓窓に雨が降り
025　014　青い雨のやうに燕のやうに
031　015　雨傘やブラシなど日用品が置いてある
034　001　雨は
034　019　突如　豪雨が襲ってくる
038　027　散ってきた雨は
039　059　さうだ雨の降る日に
040　011　白い雨がとほってゆく
045　001　雨の顔が
045　005　主（あるじ）は　ふと雨の顔になり
045　016　雨の日のたちゐふるまひ
045　021　ふりそそぐ雨のみだれも手にとるやうだ
053　056　降りつづく落葉の雨のなかから
054　131　空虚な額縁のなかで白い雨が乾いている
054　156　光はひとつの原子に　強烈な夏の驟雨にかわってゆく
055　001　ひどく降りはじめた雨のなかを
055　032　だが昨日の雨は
055　052　ああ　おれは雨と街路と夜がほしい

057　027　雨のキールン港では
084　008　雨がふってる窓のそとに
084　036　いつまでも雨がふってる路地をゆけば
087　021　雨傘がいたみ長靴が駄目になる
097　004　しかし雨を描いた動かない斜線は、
097　005　サン・ペエル街七十一番地に、永遠に雨を降らせるだろう。
101　045　四月の雨をまつ土にふかく射ちこまれている
102　004　あたらしい屍体の雨をふらすから
109　013　落葉の雨を降らせている。
122　004　最初の冷たい雨がきた
122　008　ひとしきり烈しくなった雨音をきく
125　005　六月の雨はしきりにふり　音楽はとめどもなく
144　004　なまめかしい徽雨に濡れている
146　061　屋根を叩く雨音がひとしきり強くなって
160　016　闇をつらぬく稲妻と烈しい豪雨の中から新しい発見のように甦ってきた
171　017　わずかに雨露をしのぐ庇の下から
175　010　雨が降っている
175　011　冬にしては暖い雨の音が
175　013　同じ雨の音を聞きながら
181　032　雨合羽の人よ
188　075　一雨ごとに暖かくなるという、三月の雨が

あめいろ　（飴色）
028　022　そのとけやすい肢體を眠らせる飴色の午後の

アメリカ
054　126　「アメリカ……」
054　133　「アメリカ……」と壁がこたえている
054　139　「アメリカ……」
054　142　反コロンブスはアメリカを発見せず
054　144　われわれのアメリカはまだ発見されていないと
103　015　金づかいの荒いアメリカ人とはわけがちがう
142　077　アメリカの一部の戦争捕虜たちは
150　077　まさか、「荒地」が今頃になってアメリカから送られてくるとは。
160　064　アメリカのオーデンといわれたが
160　071　アメリカ社会における成功の蔭にある失敗のさまざまな痕跡が
184　002　ドイツ系のアメリカ人で
184　004　フランス系アメリカ人と横須賀で結婚し
188　066　子供の自殺は、アメリカでも、

アメリカ社会
160　071　アメリカ社会における成功の蔭にある失敗のさまざまな痕跡が

アメリカ人
103　015　金づかいの荒いアメリカ人とはわけがちがう
184　002　ドイツ系のアメリカ人で
184　004　フランス系アメリカ人と横須賀で結婚し

あやうい　危い
085　027　他人の危い綱渡りを見ながら

あやうく　危く
166　005　危く均衡を保ってきたが

あやかしとも
192　021　あやかしとも気づかず、仄かな白い光の点線に導かれ、

あやしき
133　019　耳うちするあやしき男から

あやつって　操って
023　009　街灯は光をナイフのやうに操って

あやつる
088　049　大きいフライパンをあやつる小さいマリは

あやまち
113　017　すこしのあやまちも容赦なく
113　030　不運にもあやまちをおかした者は
121　003　あやまちはあやまちとして

あやまって
034　015　あやまってランプを落し

あゆみ　歩み
005　036　ジャケツを着て歩み去る
046　031　背中を行き来する千の歩みも
050　021　黒い鉛の道を歩みつづけてきたのだった。
127　002　ふと歩みを止め

あゆみさる　歩み去る
005　036　ジャケツを着て歩み去る

あゆむ
034　008　眠りの蔭をあゆむ
193　004　一歩一歩あゆむほかはない

あゆむ　歩む
025　035　縞になった明るい光線を歩む
086　009　生命は歩む影
088　069　おまえと歩むこの道は
160　074　ところで　日本の社会の日蔭を歩む

あらい
080　017　あたらしい血汐であらい　この苦しみの胸が

あらい　荒い
041　005　意志は荒い山肌の斜面からむけてくるのか
103　015　金づかいの荒いアメリカ人とはわけがちがう
168　004　荒い山肌にかこまれて

あらいさる　洗い去る
086　008　海岸から男たちの影を洗い去るであろう

あらし
054　011　予感はあらしをおびていた
054　012　あらしは冷気をふくんでいた
082　008　あらしの名残りがあった

あらし　嵐
041　070　嵐の音が聞え　ドアが軋る
041　145　またぢきに　嵐と雪で家々を覆ふ冬が来て
068　021　それから水着の女達が
072　044　嵐のなかの、狂気のなかの
112　045　嵐は数えることをしないが
113　004　（嵐のごとき拍手）
113　006　拍手と嵐のごとき拍手しか
113　009　拍手から嵐のごとき拍手へと
148　039　十時をすぎると蒲団が敷かれた。
181　028　嵐が来そうだった

あらそって　争って
134　012　ついさっきまで二つの力が争っていた

あらっている　洗ってゐる
015　002　室内を青く洗ってゐる

アラビア
096　016　アラビアの砂色ということになるのかな

096　017　ごらん　対岸にアラビアの火が見えるよ

アラブ
127　004　アラブの町の
128　041　十年戦えればアラブが勝つがね　え？

あらゆる
028　014　あらゆるタイプという葡萄の木の影は
035　009　あらゆる憎しみはふり落される
050　002　あらゆる階段の跫音のなかから、
054　136　あらゆるエイスの価値と
061　111　「あらゆる行為から
071　045　あらゆる時は
077　030　あらゆる神の報酬を拒み
078　002　あらゆる鎖がひとりでにきれ
078　003　あらゆる船が港から出てゆきそうな
100　049　あらゆる階段の跫音のなかから
176　020　あらゆる母がそうであったように

あらわす
071　029　くっきりと影をあらわす山である

あらわす　現わす
047　018　朧ろに姿を現わすこの髭だらけの死者は誰だろう

あらわれ　現れ
007　009　た飛行機のプロペラが現れた
039　050　暗い空の下に現れては
073　025　見張りのボートが現れ
193　018　同じ風景は二度と現れない

あらわれた　現れた
007　009　た飛行機のプロペラが現れた

あらわれて　現れて
039　050　暗い空の下に現れては

あらわれない　現れない
193　018　同じ風景は二度と現れない

あらわれる
054　095　夕焼のなかからあらわれる鳥の囀り
054　112　決然たる拒絶者の愁い顔があらわれる

079　026　記憶のはてにあらわれる
082　010　消えてはあらわれる幻影の

あり　在り
107　013　在りし日を嘆くでない
141　014　在りえたかもしれないすべてのものよ。
150　037　「本質的に我々が誇り得るものは生理以外に在り得ない、
150　048　生理以外に在り得ないとは、ずいぶん淋しい話である。
171　015　われら此処に在りとかんがえるだけで
190　010　在りのままに生き

ありあまる
101　049　ありあまる孤独を
182　025　ありあまる年があり

ありえた　在りえた
141　014　在りえたかもしれないすべてのものよ。

ありえない　在り得ない
150　037　「本質的に我々が誇り得るものは生理以外に在り得ない、
150　048　生理以外に在り得ないとは、ずいぶん淋しい話である。

アリカ
010　004　白い帽子は頭のアリカを教へるとともに日の匂を発散させる

ありがたい　有難い
151　037　有難いことにどんな女にもむだがなかったから

ありきたりの
106　001　ありきたりの記念写真のスタイルで　三列にならび

ありし　在りし
107　013　在りし日を嘆くでない

ありったけの
137　012　ありったけの力をこめて

ありなし
119　002　ありなしの残照の

ありのままに　在りのままに
190　010　在りのままに生き

アリバイ
085　008　消えやすいアリバイ探しの興味である

ありもしない　有りもしない
145　014　有りもしない幸福の歌がいつものように響いていた

ある
001　004　駈けてゆく風である
004　002　机の上は　すでに白い雪である
005　007　風下に建てられてある
005　019　掌ほどのサファイヤがある
005　025　虹のあるウイットな会話は
005　031　扉がある　扉が
006　015　ヨーロッパは　黄昏　である
007　003　とであるか
007　005　岸に住んでゐる蟾蜍である
008　004　もある　向日葵のごとく旗は燃え　荒地に咲きそめた
008　008　罌粟の花がサカリである　真珠の月もかくれてゐやう
010　005　日の匂を発散させる少年は青い麦の芽である
010　010　不愉快な天候の有機的関連の結果である
011　013　立派なきみらの服装であるが
011　017　ああ　ぼくたちは幸福である
012　017　パルテノンは丘にある
014　023　花のある音楽につれて
015　003　花は眼のある動物を見ない
017　013　いいとこもあるねとうなり
022　006　やさしい茎と卵は永遠である
024　002　脳髄は青く透明である　ざわめきの聞こえる孔には栓をつめ
025　047　樹には吊された肉体がある
025　059　梯子を登るのである（未完）
026　001　たくさんの硝子がはめてある
026　021　快い日影もある
026　034　わたしの手の中にある
027　016　わたしの鼓膜はへんである
028　011　液體のやうに垂れてきたのは疲れた舌である
028　032　すべての叫喚が悶える胃腸である
028　039　信仰や箸や石鹸や喜ろこびや散策があるやうに
028　040　すべてが平和であるようにとか云ふ必要もない
028　046　技師の懐中にある正確な地形図は
028　048　小鳥や草の声とは無関係である
028　068　そこにある雑音はまがりくねって
028　072　すべてが歴史の容器の中にあるとは限らない
030　003　そこにある闇のひろがり

030 022 そこに憩ひがあり噴水がある
030 033 実ったあとの浅い眠りは疲れである
031 015 雨傘やブラシなど日用品が置いてある
032 006 ただ一脚の椅子があるだけ
033 021 おまへをとりまく五つのドアである
036 017 噴水と石像のある静かな白昼よ
037 007 秘密の抽斗がある
039 134 夜にはもっと尊い何かがある
041 002 海よ　そして人気のない墓場がある
041 003 地の果よ　そして濁らない泉がある
041 039 考へあるもののやうに　また無意識のごとく
041 053 また明日　お会いしませう　もしも明日があるのなら
041 087 愛嬌ある仕科（しぐさ）で柔かい羽に堅い嘴をこすりつける
041 114 ただ一脚の椅子があるだけ　気味悪くキーキーいふ音に
044 010 新らしい種子が新しい土地に播かれつつあることを。
045 005 主（あるじ）は　ふと雨の顔になり
045 014 主（あるじ）は　ひそかに想ふ
046 019 この滑らかな洞よりも　さらに低い営みがあるだらうか
046 036 果して肉体だけは癒る用意があるかのやうに
046 049 あなた自身が小さな一つの部屋であることを
048 037 「地平線はどこにある
048 038 彼女の位置はどこにある
048 039 難破船はどこにある
048 040 彼女の憂愁はどこにある」
049 005 重たい悲しみに塗りこめられた人間の影がある。
050 004 ーーこれがすべての始まりである。
051 011 運命がある顔に達したとでも言うかのように、
053 051 始めがあって終りがあるのではなく
053 052 なんでも終末があって発端があるのでしょう
054 051 賢い三人の友に会うのである
054 054 彼等が剥製の人間であるかどうか
054 058 大学生は低い声と思いやりのある眼ざしで話しはじめる
054 059 「君たちはまさか忘れたわけではあるまい
054 065 いまこそそこに疑いの余地があるから
054 101 あるいはまた亡霊たちを飲みほして
054 113 「また明日会いましょう　もしも明日があるのなら」
056 003 そして彼の背中のように淋しい風景がそこにある
056 008 昨日のように空は濁った河のうえにある
056 014 かすかに聞えぬわけでもないのである
056 020 それだけの運命である
056 022 風景はいっそう青ざめてくるのみである
057 005 とおいシンガポールの街を歩いたこともある
057 010 ぼくらに一枚の絵皿を見せたことがある

057 015 ある日　ボートを水にうかべ
057 021 彼岸はいつも死の国のように静かである
057 030 ぼくはぼくである一切のものを否定するのだ
058 015 ある冬の晴れた日に
058 033 指輪や装身具の飾ってあるショーウィンドをのぞいて
060 006 なぜか一服の煙草もひどくうまいのである
060 008 荒れた道がつづいているのみである
061 028 未来と希望があるだけさ。
061 107 過去は涯しなく未来のなかにあることをーー
061 109 あなたがあなた自身であるためには
061 114 いつも個人的なわけがあるのだ
061 122 いつも個人的なわけがあるのだ」
061 154 あなた自身が見すてられた天上の星であることを……
062 013 いちばん美しい使いである姉さん！
062 019 「もし身体にも魂にも属さない掟があるなら
064 009 人生に別離なんかあるものかと、
065 006 ゆれる燈火と死魚の影があるばかりであった。
065 013 終りがあるのだろうか？　影深い谷が
065 051 終りがあるのだろうか？　永遠の眠りが
069 006 あるところに
069 012 かれもまた　あるところに
069 015 あるところに
069 029 動かない顔がある
069 032 動かないベッドがある
070 036 いったいどこにあるのだろう。
070 038 ぐるぐるまわる食卓があるだけなのだ、
070 040 汚れた皿拭き布があるだけなのだ、
071 013 わからないひとつの運命である
071 019 きみはふと立ちどまることがある
071 021 ぼくの頭髪をひっぱることがある
071 029 くっきりと影をあらわす山である
072 026 三十六とおり結論があるだけなのに
072 041 合理的な法則があるとは信じられない
074 013 三色旗をつけた巨船のうえにあるものは
074 018 生あるものの皮膚の下を
076 008 さらに多くの涙があるのに
077 009 不思議な報酬があるかぎりはーー）
077 016 一九四四年五月のある夜……
085 004 天の一角にせばめられた都会の空である
085 008 消えやすいアリバイ探しの興味である
085 010 はっきりした冷酷さもある
088 036 ここには海があるの
088 038 ここには犬がつないであるの

090 024 わたしが生れるずっと前からそこにある
093 012 神学は迷路である
093 013 かれにとってはとっくに抜け道がわかっている迷路である
094 003 とある松林をぬけて海へでる
094 011 解読できぬ暗号のように近くて遠くあるもの
096 010 とあるバーのドアを押して入ったと思いたまえ
096 018 あの瞑想の闇のコアには生きている砂漠があるんだ
097 001 一つの生命が、あるいは一羽の鳥の飛翔が、
097 008 不幸であるという意識を持たなかったら、
100 002 人影にまじって　新聞紙のうえをあるいてゆく
100 005 また明日　お会いしましよう　もしも明日があるなら
100 010 消えてゆくのである
100 047 それから五年たってである
100 056 もしも　明日があるなら……
103 006 かれにはいいところがある
103 009 イシュメエルにはいいところがある
105 003 だが、みどりはまだ固い幹のなかにある。
106 006 「笑うなかれ」　悲しい内部の声である
106 023 そこに集中し隆起して　あるフイジカルな高貴さの象徴となり
106 025 だがいけないのは口である　ぶちこわしである
108 015 存在はすべてある終りに向って動く
112 013 過去でしか会うことのないおれたちだ　何の秘密もあるものか
118 013 あるいは繃帯をした
124 029 残る一人であるぼくは
125 024 幸福である　証拠はない
128 043 愛や敵意が目標にうまくとどいたためしがあるかい？
128 050 戦略である」
130 008 唇は笑っているようでもある
133 001 歌のはじめには開かれた理由がある
137 015 ある日　女は狂った目をして言った
140 015 なくてあるがごとく
142 017 （四つの窓のうち三つが閉じられたままである）
142 022 あなた自身であることをやめないから
142 040 世界のすみずみにまでとどけられるのである
142 046 悪い夢からさめた人のように首をふるのである
142 055 ぼくたちに救いはあるだろうか？
142 070 そして　国外での健康回復と安楽な生活の可能性があるにもかかわらず
142 073 十二年の刑期をつとめあげるために監獄に戻っていったのである
142 079 もちろん　信念より自分の生命が大切だと考えたからである
142 081 生命より貴重だと感じていたのである
142 088 いじけた打算がある　わざわざ危険な対立に足をふみこんで
142 098 世界中にその網の目をひろげているのである
142 109 自信はぐらつく　巨大であればあるほど

142 113 歴史を作る者をたえず脅かしつづけてきた基本的なイメージである
142 124 全世界に警告を発したのである
145 001 「至上のトーモロコシの毛がアゴにもある長髪の若者が
145 023 「写真店の窓には曝された肖像の記念写真が　夢こそすべてであると知った時　もう肉体
145 032 「あるところに壁が倚れていた
148 014 おたがいに無縁の暮らしをしてきたのである。
148 028 とり返しのつかぬ時間が過ぎていたのである。
148 054 正午は安全な時刻である、
150 024 自分の書いたものがまるでつまらなかったことである。
150 041 今にしておもえば、真実を衝いた薄気味わるい言葉である。
150 048 生理以外に在り得ないとは、ずいぶん淋しい話である。
150 053 編集者である私が警視庁から呼び出しを受けた。
150 057 彼は特徴のあるうるんだ眼をしばたたきながら聞いていたが、
150 064 彼の才能は枯渇を強いられたのである。
150 067 どうしようもない怠惰か、安易な現状肯定である。
150 070 いささか不感症気味であるが、
151 017 まるで大きなおけらである
151 030 おもちゃにすることもできるのである
151 033 記憶にあるものだけで百六十人
155 001 前にあるものは
155 004 昨日の風景である
155 013 前にあるからで
155 023 前にあるものを
155 036 である家族だけだから
155 038 ある日
155 042 ちゃんと計算しているのである
156 025 愛という言葉は身につかぬのである
159 006 びっくりするほど若くあでやかである
160 009 そんな今年の冬も終りに近い　ある日の真夜中
160 021 つい「詩人」であると真実を告げる
160 036 ほかに自己証明の道がなかったのである
160 068 「蛇の穴」と称して大学にもぐりこみ　教鞭をとったこともあるが
160 071 アメリカ社会における成功の蔭にある失敗のさまざまな痕跡が
160 073 ニューヨーク市の屍体置場までつづくのである
161 011 それがこの世の習慣である
161 015 それが掟である
161 019 ほとんど無尽蔵である
162 017 かれ自身の最後の王国であるから
162 020 きわめて不確実なことだけである
164 004 そんなことってあるかしら？
164 005 あるか　あったか知らないけれど
164 024 ……共通の穴である深い井戸にむかって
165 008 面をそむけさせたのである

165 015 これ以上、理不尽な感情があるだろうか
165 022 これ以上、合理的な感情があるだろうか
165 035 わたくしの顔が映るのである
166 004 失われたものと現在あるものの中間で
166 008 しんどい作業である
167 027 もう一人の彼である
167 040 かすかにおののくのである
172 006 風の足である
172 012 霜枯れた顔ばかりである
172 024 「人であることをやめ
173 010 もう終ろうとしている世界がある
174 026 いまでも下手な碁打ちであるぼくは考える
177 016 待ち伏せするけはいがある
177 025 かえるところがある
180 013 恐れ入りましたとでもいうほかはなさそうである
180 030 どこかで勝手に出あうものである
180 042 たずねるものが見つからないときもあるだろう
180 045 思慮にあまって立ちつくすこともあるだろう
180 049 それがせめてもの礼儀である
180 051 たね。しかしそれはそうそうあるものじゃない。違うものの方が圧倒的に多いー。では、さよならK.I.
180 052 とびきり冷たい夏の訪れである
184 001 すごい金髪美人である彼女は
184 012 日本人妻の間にできた子供である
186 015 以前に広島に行ったことがあるとか？
186 035 そんな錯覚もあるんですかね？
186 048 理解されるに足る自分があるとは思っていないよ
186 050 自分が自分であることの不安
186 066 空間が空間であるうちは物の集合にすぎないから
186 082 死を含む共同体であるみんなの声に耳を傾けていると
188 010 その歯は抜きましたが、他の歯に窩が無数にあるとか、
188 030 べつに、心配することはあるまいと思って、
188 038 私の癇疾、であるのかもしれない。
188 042 人生の下り坂にかかったときからである。
188 044 不定愁訴の繰り言のように、あることないことに、蘊蓄を傾け、
188 051 人はただ歳をとるだけだが、時代は、変ったようである。
188 059 「セックスに関する講座は、尋常科からあるのですが、
188 064 このことを取りあつかった切抜きがあるはずなので、
189 021 それがわかるのは十年たってからである
189 039 たしかに見覚えのあるフォークが
190 002 自然の風景の始めであり終りである
190 012 現代でも可能であるのかどうか
192 023 七十米と行かぬうちに、白い明りの標識は消え、そこから先は真っ暗である。

あるいて
100　002　人影にまじって　新聞紙のうえをあるいてゆく

あるいてきた　歩いてきた
053　017　わたしの歩いてきた道は

あるいてゆく　歩いてゆく
041　051　新聞紙の上を歩いてゆく　固い心をもち

あるき　歩き
054　052　手をあげると　人形のように歩き出し
061　212　生ける死者たちが空中を歩きまわる夜がきた。
071　018　街を歩きながら
099　005　一人の妹は乳母車につかまって歩き
100　033　かろやかな鼻唄のリズムで歩きもしたろう
146　052　迷路を歩きはじめました
163　001　見えがくれに歩きながら
166　022　ごった返す店内を物色して歩きながら
183　022　よちよち歩きする可愛いい女の子に

あるきだし　歩き出し
054　052　手をあげると　人形のように歩き出し

あるきまわる　歩きまわる
061　212　生ける死者たちが空中を歩きまわる夜がきた。

あるく　歩く
106　036　不吉な羽ばたきをして　地面を歩く黒い鳥の男たちもいる
108　022　歩く鴎
126　012　月のうえをふわふわ歩く宇宙の子供を見ようとして
128　060　トットと歩く
131　005　手と膝をついて歩くこともあった
151　016　背中をこごめて人中を歩く姿といったら

アルコール
093　024　ニコチンとアルコールのまじったいい匂いがする
160　070　アルコールと麻薬に蝕まれた生活で

あるじ　主（あるじ）
014　026　おお主よと叫んだかは考えてみたらいい
021　010　賢明な若い主君は
028　023　鳩とともにおお救世主の銅像の髭にもついて
045　005　主（あるじ）は　ふと雨の顔になり

045　014　主（あるじ）は　ひそかに想ふ
045　019　畳よりも青い顎の　若い主はしばし呆ける
085　021　理想主義者や清貧家を蹴とばし
091　014　きみの季節は飼主のない猟犬のように飢えている
101　053　歌う者のいない咽喉と　主権者のいない胸との
128　049　「民主主義はイデオロギーではなく
139　006　どうしてもその主の姿を尋ねあてることができない
142　097　非合理に機能する官僚的権威主義を全面的こはびこらせながら
152　008　造物主の息がかかっていて
159　004　細くすきとおる声をかけてきた主は
167　022　肉の悲しみを知りつくした主は
186　072　時間は偉大な造物主だからね

あるていど　（或程度）
150　012　自己韜晦の癖を或程度まで満足させてくれる。

アルバム
012　007　雲のアルバムにはさまれた

ある日
057　015　ある日　ボートを水にうかべ
137　015　ある日　女は狂った目をして言った
155　038　ある日
160　009　そんな今年の冬も終りに近い　ある日の真夜中

あれくるう　荒れ狂う
173　012　荒れ狂う国家の群集の影が

あれた　荒れた
045　007　荒れた庭に　花樹はむなしく崩れかかり
060　008　荒れた道がつづいているのみである
069　024　都会の荒れた皮膚をひきさいていった
167　025　荒れた裏庭に出て

あれち　（「荒地」）
150　077　まさか、「荒地」が今頃になってアメリカから送られてくるとは。
188　078　もうすぐ、「荒地」の最も残酷な月。

あれち　荒地
007　010　喞筒は空に向って泥を吐く　草の無い荒地ではとかく悪い感冒が
008　004　もある　向日葵のごとく旗は燃え　荒地に咲きそめた
150　077　まさか、「荒地」が今頃になってアメリカから送られてくるとは。
188　078　もうすぐ、「荒地」の最も残酷な月。

あれて　荒れて
042　001　庭は荒れて　影もなく
042　015　庭は荒れて　もの影もなし
108　018　再び荒れてくる海を見つめている

あわ　泡
007　013　阿片の軽艇（ボート）は霧の中へ青い泡を残して去るべく一人の少女を誘拐
039　010　緑の泡の方へ近づいてゆく
078　007　緑泡立つ椰子林が
080　012　消えてしまう泡が唯一の言葉だから
143　024　吹く泡や
152　009　こまかい泡のかたまりが

アワ・ハウス
184　017　わたしたちの家（アワ・ハウス）というべきところを

あわい
167　034　ざわめく樹樹のあわい

あわい　淡い
068　017　淡い希望もまた　始めは

あわく　淡く
061　161　霧は濃く、影は淡く、

あわせて
063　028　ふと血の気のうせた顔を見あわせて
088　078　よく舌のまわらぬおまえの節廻しにあわせて
167　004　あおられたドアの開閉音にあわせて
177　028　どう歩幅をあわせても

あわせて　合わせて
151　008　貯金は定期普通預金合わせて七百万に足りない

あわただしく
108　014　人はあわただしく自分の影から離れる

あわだつ　泡立つ
078　007　緑泡立つ椰子林が

あわれっぽく　（哀れっぽく）
134　014　通行人が哀れっぽく声をかけてきた

あわれな
140　010　舞台裏で物思いに沈むあわれな役者

あわれな　（哀れな）
039　016　哀れなことにちがいないと思ふ

あわれみ　憐み
063　020　（ぼくは憐みのこころをもっているか？）
070　041　愛もなければ、憐みもない。

あわれむべき　憐むべき
054　157　憐むべき君たちの影にすぎぬ僕は

あわれんで　憐んで
106　039　かれはじぶんを憐んではならない　その罪がいかに深くとも

あゝ
002　004　（落葉は降りしきる　あゝ淋しい曲を聞いた）

あんうん　（暗雲）
103　023　暗雲垂れこめるヨーロッパでもなければ

あんがい
150　058　あんがい平然としてニヤニヤ笑っていた。
186　007　あんがい近いでしょ？

あんごう　（暗号）
094　011　解読できぬ暗号のように近くて遠くあるもの
097　009　毛深いじゅうたんの暗号のなかで、

あんこく　（暗黒）
039　106　暗黒のなかで
043　017　ほどよい暗黒と
063　003　かかえきれぬ暗黒が
143　002　暗黒のあたたかさに包まれて

あんじ　（暗示）
073　019　翳りゆく運命の暗示をもとめて

あんしゅつ　（案出する）
028　071　宣伝ビラの形式を案出するのであらうか

あんしん　（安心）
036　008　なんぢら安心しろ
146　062　やっと安心しましたわ。

あんぜん　（安全）
101　024　安全装置をはずした引金は　ぼくひとりのものであり
112　033　安全への愛　怠惰への退却
148　054　正午は安全な時刻である、
183　015　安全に養われているその家族たちだ

あんぜんそうち　（安全装置）
101　024　安全装置をはずした引金は　ぼくひとりのものであり

あんぜんな　（安全な）
148　054　正午は安全な時刻である、

あんぜんに　（安全に）
183　015　安全に養われているその家族たちだ

あんそく　（安息）
061　042　子供をつれて一日だけの安息に、

アンソロジー
160　066　かれの名は雑誌やアンソロジーでさえめったに見かけなくなる

アンテナ
128　002　神経のアンテナを　さか立てて
128　087　アンテナにひっかかっている

あんてん　（暗天）
133　026　暗天の星にみちびかれて

あんみん　（安眠）
125　023　地獄のヴィジョンのうえで安眠できる老人は
173　044　これでやっと安眠できる

あんみんできる　（安眠できる）
125　023　地獄のヴィジョンのうえで安眠できる老人は
173　044　これでやっと安眠できる

あんやく　（暗躍）
124　007　地名のない地図をたよりにスパイが暗躍

あんらくな　（安楽な）
142　070　そして　国外での健康回復と安楽な生活の可能性があるにもかかわらず

アーク灯
056　009　アーク灯のかげで多くの骸骨が

い　胃
014　011　うすい陽の光が胃の腑へさしこんでくる
028　032　すべての叫喚が悶える胃腸である
054　029　Mよ　都会の胃袋をさまよいながら君が呟いていたことを……
055　040　おれは慢性胃腸病患者のだらしないネクタイをしめ

いい
013　005　ゐなくったっていいですよと
014　026　おお主よと叫んだかは考えてみたらいい
017　013　いいとこもあるねとうなり
031　021　破壊の力を防がうとするぞ嗤ふがいい
031　023　小さな火を焚くがいい
038　016　あれでいいのですね
039　046　遠い街へ走り去るがいい
039　069　鎖で縛られてゐるのはいいことだ
052　010　あなたが男を誘惑するはずだった可愛いい頬の黒子のことを
052　017　あなたの可愛いい頬の黒子のことを
053　011　可愛いい格子のスカートをはいています
054　087　「もういい　一言も語るな
058　055　たまたま可愛いい瞳をしていたからといって
066　009　かわいい顔をかくすと
072　023　血統を信ずるのもいいし、人気に支配されるのも結構だ
072　060　われわれの生存競争もすべてフェア・プレーだったらいいのにと
080　013　きみはもう何も言わぬがいい
084　003　いい音で鳴る弦と弓が
084　009　じっと立っていさえすればいいのですよ
087　004　「ペニィやペニィ　可愛いいペニィ」
087　017　「ペニィやペニィ　可愛いいペニィ」
088　020　話していいこと　いけないこと
088　066　始めからやり直せばいいのだよ
093　024　ニコチンとアルコールのまじったいい匂いがする
098　007　「ここは　ほんとに気持のいい場所ね
102　001　おれが古いいくさの歌をうたったら
102　005　おれが古いいくさの歌をうたったら
102　009　おれが古いいくさの歌をうたったら
103　006　かれにはいいところがある
103　009　イシュメエルにはいいところがある

112　032　すべての秩序が眼の高さにあればいいといった
128　015　いい匂いの黄昏に
130　016　おれはいいが
142　078　反祖国的ないかなる文書に署名してもいいと思っていた
154　012　それをしも邪恋といいつのり
155　028　いいえ、ぼくはもう……と口ごもって
156　031　どうしたらいいかわからなくなる
160　008　どの毒がいいかと話しもした
160　028　「いいえ、そうだといいのですが」
169　012　戻ってこなくてもいいと呟く
179　009　感じのいい人の
180　026　ッセージとよみました」と書いた筈、それは私だからそうよめてしまう、というのがどうでもいいことで、貴方
180　057　どうでもいいけどネ
181　014　いいゲームにはならなかったが
183　007　魚屋の呼声はえらく景気がいいけど
183　012　人ごみをどうすりぬけたらいいか
183　013　どの店で何を買ったらいいのかを
183　020　明日の強気節をどう謳いあげたらいいか？
183　022　よちよち歩きする可愛いい女の子に
186　046　ぼくを理解しようなんて、あきらめたほうがいいよ
187　001　天気はいいが
188　081　これから、どんなヴィジョンを与えたらいいのか、

いいつのり
154　012　それをしも邪恋といいつのり

いいんかい　（委員会）
085　017　総会とか委員会とかの

いう　言う
051　004　「この病院船の磁針がきみらを導いてくれる」と船長は言う、
051　011　運命がある顔に達したとでも言うかのように、
071　032　ひとびとは言う
094　017　かれがきみに死ねと言うなら
123　002　あらたまって言うことはない
150　066　喪わるべくして喪われたと言うのは、
156　003　言うのも聞くのも嫌いだった
186　039　（われながらよく言うよ）
189　002　おめでたい敗者に言う

いえ　家
014　022　口の悪い家畜どもが逃げていったあとで
027　008　すべての家具が老いてゆき

029　016　パイプと共に忘れてゐた家族のため
031　010　煤けた家具の断面だけを見せ
041　145　またぢきに　嵐と雪で家々を覆ふ冬が来て
042　020　また古い家風を弔ふ
048　002　家や樹木のやわらかな影をおとして
054　166　僕らの家の戸口を大きな拳で敲く朝のことを……
057　009　戦争ぎらいのドイツの作家が
062　060　わたしはこの香ばしい微風のなかに家を建て
062　061　ひとりの妻と住み家畜などを飼ってみたくなったのです
066　002　家々の戸口から戸口へ
066　012　家々の戸口から戸口へ
066　022　家々の戸口から戸口へ
066　032　家々の戸口から戸口へ
066　036　どの家々も沈黙の屋根におしつぶされていた、
071　008　どっと家族づれで出かけてゆく人たちをみかける
071　015　家族からはぐれた男の子は
072　024　独断批評家の口ぶりもわるくはないし、皮肉な記者のポーズも捨てがたい
084　018　「いまではどちらのお家庭にも
085　021　理想主義者や清貧家を蹴とばし
085　022　かれらの恥辱の隠れ家をあばいてしまおう
088　013　木々　家々　大地
088　037　これはお家　これはお庭　これは樹
095　011　どの家も寝しずまっていて
097　006　もし無慈悲な画家が牢獄を描くとしたら、
103　017　まがいものの甲冑に身をかためた冒険家でもなければ
111　002　家のない場所へ行ってみたい
113　034　行きづまった一人の作家が
124　004　仲間も涙も校歌も国家も売り足りないが
125　004　縦横家の仮面のうらとおもてに
133　024　永遠に帰るべき家をもたない
142　026　わたしやわたしの家族の頭から　髪の毛一すじ落ちやしないとは
142　035　孤立した家族の住むアパートの一室で
142　056　異端者や地下の作家や哲学者を根絶やしにする
142　093　家を夢みているだけでは　古い家も新しい家も守れはしない
155　036　である家族だけだから
160　061　かれが家を出たとき　母親は「棺桶に入って帰ってこい！」と言ったが
165　020　家族的な反映だったのだろう、と
167　005　家鳴り震動の交響がつづく
167　047　一つの部屋のための家屋が傾くまで
167　053　家が倒れることはない
167　058　家の崩壊はないものと念じてきたのに
167　077　きみたちの家を破壊にみちびくだろう
173　012　荒れ狂う国家の群集の影が

176　018　家霊の暗闇のなかから
177　013　きみの家族が住むきみの家があり
183　011　家路をいそぐ人も買物に出てきた人も
183　015　安全に養われているその家族たちだ
183　028　地震も事故もなくて家へ戻る
184　008　新しく家を建てると養子を迎え
184　013　九カ国語を話したという冒険家の祖父を
184　017　わたしたちの家（アワ・ハウス）というべきところを
184　018　わたしの家（マイ・ハウス）といったりしている
185　007　慰めを与えた哲人風の音楽家の
188　084　日本の重文とされている民家への憧れが、
193　014　家族あわせの円居が

いえいえ　家々
041　145　またぢきに　嵐と雪で家々を覆ふ冬が来て
066　002　家々の戸口から戸口へ
066　012　家々の戸口から戸口へ
066　022　家々の戸口から戸口へ
066　032　家々の戸口から戸口へ
066　036　どの家々も沈黙の屋根におしつぶされていた、
088　013　木々　家々　大地

いえじ　家路
183　011　家路をいそぐ人も買物に出てきた人も

いえなり　家鳴り
167　005　家鳴り震動の交響がつづく

いがい　（意外）
150　023　ちょっとばかり意外だったのは、
174　009　きみは意外に元気な様子で近況を語ってくれ、心暖まる十五分か二十分であった。

いがいに　（以外に）
150　037　「本質的に我々が誇り得るものは生理以外に在り得ない、
150　048　生理以外に在り得ないとは、ずいぶん淋しい話である。
160　052　使うもの以外にきみの物はないのだぞ

いがいに　（意外に）
174　009　きみは意外に元気な様子で近況を語ってくれ、心暖まる十五分か二十分であった。

いかう　行かう
041　001　あなたは遠く行かうとした

いかしてきた　生かしてきた
187　016　　生かしてきたもののゆえに

いかなる
075　004　　いかなる悪魔も
080　022　　いかなる場所にも
080　024　　きみにとって　いかなる「時」も
142　029　　また　いかなる非難中傷の壁、妨害の電波がぐるりをとり巻いても
142　078　　反祖国的ないかなる文書に署名してもいいと思っていた
167　032　　いかなる罪悪も存在しないかのようだが

いがみ合って
146　030　　髪をふり乱していがみ合っていたのです

いかり　怒り
039　101　　わたしははじめて怒りといふものをみた
160　020　　そんな自分に怒りを感じて
191　014　　山は怒りに

いかん
017　026　　いかんよと沙漠から声がしたら

いき
012　016　　いきなり水が噴き出した
066　016　　年老いた母親はいきをころして坐り
094　016　　かれと言いきみと呼びぼくに返る心の遠近法にしたがって
094　021　　ぼくの河口はひといきに岸辺やテントや小舟を吐きだそう
112　042　　胡麻的な頭と頭をくっつけて寝ているなつかしいきょうだいたち
121　009　　おもいきり　太陽をからかってみたい
133　022　　せめていっさんに駈けていきたい
146　003　　明るい観光ビルのなかに入っていきました
146　018　　大急ぎで走っていき
148　024　　すこしずつ前かがみになっていき、
160　072　　かれの肉体に刻まれていき
165　004　　腹式呼吸のいきの音
173　050　　いびきをかいて死んでいきながら
180　004　　いきなりびしゃりと頬を打たれた
181　003　　濃いオゾンのいきがたちこめ
186　086　　思いは千々に乱れて消えていき
187　022　　くり返しの多いきみの歌が

いき　行き
046　031　　背中を行き来する千の歩みも

054　041　君がいるところへ行きつくために
055　021　何処へも行きはしなかった
061　059　いたるところに行きつき、いたるところを過ぎていった。
113　034　行きづまった一人の作家が
115　011　ひたすら求め　たずねて行き
133　009　行きあう顔色の底の底までわかって
159　003　「それじゃ行きますから」と

いき　息

028　062　花花しく棲息する物質の群れが
041　045　とげとげしい息子よ　御身の
041　091　息はたえ　冷たいアスファルトの上に落ち
041　101　眠れる世界に息を吹きこむ
045　009　いつか一つの息ながく絶えぬといふ
046　011　いまはしい壁や　むなしい紙きれにまたたく嘆息をすて
061　042　子供をつれて一日だけの安息に、
064　002　町はあたたかい吐息の下にあった。
064　031　町はあたたかい吐息の下にあった、
066　017　息子は煙草をふかしながら
066　020　かれは溜息のほそいけむりをもらした。
072　058　何百万の人々が、もう一度溜息をつくのだ
093　026　やすらかな寝息とかすかなぬくもりをのこして
095　016　崖下の道で息がきれた
096　003　ジンと溜息でくもった灯りで
101　061　吐く息のひとつひとつが凍りついても
105　010　女たちの涙か、夕べの吐息か。
113　014　なんでも知ってる　靴屋の息子で
116　001　吐く息のひとつひとつが
120　009　やさしい春の息づかいに
128　064　「遠くからのよい消息は
143　014　喘息の譫言におさらばして
148　042　ぼくたちは枕を並べてすやすや寝息を立てていた。
151　003　貧乏人の息子で
152　008　造物主の息がかかっていて
160　057　心臓発作で倒れ　救急車が到着する前に息をひきとったという
167　057　人くさい息が充満しているうちは
178　005　たしかな消息という
179　025　静かに横たわって息をとめよ
183　027　誰でもほっと深い息を吐く
193　008　深く息をすることもあったが
193　016　いつもかわらぬ休息がありますように

いきかえる　生きかえる

077　011　いくたびか生きかえる兵士たちが
077　034　再び生きかえることはないだろう）

いきかっている　往きかっている
183　004　人影がはげしく往きかっている

いききする　行き来する
046　031　背中を行き来する千の歩みも

いきさき　行先
145　022　行先をきめないで出発し到着したときに旅は終っていた

いきた　生きた
095　019　……苦しみぬいて生きた父よ
132　001　不在を予約して生きた
136　014　生きたくないと樹は嘆く
143　018　みじめであさましい生きた心よ……

いきづかい　息づかい
120　009　やさしい春の息づかいに

いきづまった　行きづまった
113　034　行きづまった一人の作家が

いきている　生きている
054　004　生きているにしても　倒れているしても
057　008　それでもぼくらが生きているとは信じられなかった
096　018　あの瞑想の闇のコアには生きている砂漠があるんだ
147　018　生きていることが心苦しくならなかったことで
161　016　生きているというだけで
161　017　ましてながく生きているというのなら
191　008　生きている自然のしるしに

いきている　生きてゐる
041　142　傷つける断片　それは悼ましくも長く生きてゐる
150　014　一匹の魚さへ住んでゐない沼に釣糸を垂らしてゐる影だけが生きてゐる……」

いきなり
012　016　いきなり水が噴き出した
180　004　いきなりぴしゃりと頬を打たれた

いきのびて　生きのびて
052　001　生きのびてきたわたしの心に

105　012　戦争は失敗し、ぼくらの国は生きのびてきた、
106　016　無事に生きのびてきた　この下手な構図は
114　006　じっと机の下にかがんで生きのびてきた
143　016　醜くなって生きのびて
150　031　うまうまと生きのびてきたということか。

いきのびてきた　生きのびてきた
052　001　生きのびてきたわたしの心に
105　012　戦争は失敗し、ぼくらの国は生きのびてきた、
106　016　無事に生きのびてきた　この下手な構図は
114　006　じっと机の下にかがんで生きのびてきた
150　031　うまうまと生きのびてきたということか。

いきもの　生きもの
037　020　すべてをみつめる生きものの眼が
047　004　孤独な生きもののため
062　047　生きものの緑の意志は
106　044　すべての生きもののうちで　最も強くてしなやかな骨だ
153　001　青い塩水からうまれた生きものの
192　014　薄暮と昧爽とをとりちがえていた迂闊さに、狼狽するも間なく、巨大な生きものの胎内にのみこまれるように、

いきよ　生きよ
041　137　この街で生きようとしてはならぬ
061　104　だけどみんな＜生きよ＞と言いはしなかったね」
094　020　きみがぼくに生きよと告げるなら

いきょう　（異郷）
107　008　遠い異郷の果でみる

イギリス
054　063　おお　いまこそイギリスに住もう

いきること　生きること
062　058　生きることを諦めるには
147　004　生きることより死を受入れるほうがずっとたやすかったろう
147　005　生きることに困難を覚えていた青年時代だったら
147　012　生きることに怖れも困難も感じない髪の毛の薄い男になっていた
168　013　生きることの永続性のあかしか
171　020　生きることを学ばなければ。

いきをひきとった　息をひきとった
160　057　心臓発作で倒れ　救急車が到着する前に息をひきとったという

いく　行く
046　042　ほっそりした川のやうに渝らぬ月日を行くことが出来る
115　004　遠く行くひと
140　005　行くところもなければ帰るところもない
180　058　上に行くしかないってことか

いくさ
102　001　おれが古いいくさの歌をうたったら
102　005　おれが古いいくさの歌をうたったら
102　009　おれが古いいくさの歌をうたったら

いくじゅうにも　幾重にも
155　037　幾重にも保険をかけているが

いくじゅうもの　幾重もの
137　013　幾重ものドアを叩いてきた

いくせいき　幾世紀
077　013　幾世紀もの列をつくってつづくのだ
090　001　巨木は幾世紀を生きて

いくせんり　幾千里
139　007　さまよい疲れて歩いた道の幾千里

いくたび
039　136　いくたびか流された血は
077　005　いくたびか死に
077　006　いくたびか生きかえってきた
077　010　いくたびか死に
077　011　いくたびか生きかえる兵士たちが
149　006　いくたび禁制を犯したろう？

いくつかの
021　020　いくつかの樹も枯れ
038　004　いくつかの街と村の屋根をすぎる

いくつもの
040　019　秘密はいくつもの廊下をとほってくる
043　007　いくつもの乾いた言葉にそって
046　046　いくつもの扉のやうに行手をさへぎり
061　015　いくつもの通路をぬけ、
061　016　いくつもの町をすぎ、
133　021　いくつもの街衢と大路を過ぎる

いくどうおん　（異口同音）
112　038　たぶん時代がわるいんだろうと異口同音に歌う

いくねんげつ　幾年月
137　014　空虚なこだまのなかの幾年月

いけ　池
061　129　野に池をつくり　地上に溢れ
120　001　不忍池の公園の
120　005　池水のやわらかなひかり
170　013　池の端に近寄ってみると

いけないもの
145　007　売ってはいけないものを売る深夜の

いけのはた　池の端
170　013　池の端に近寄ってみると

いけん　（意見）
150　006　六人の意見が一致してゐる時は、六人とも彼に騙されてゐる時であった。

いこうする　移行する
026　031　植物の手の蔭へと移行する

いこく　異国
065　046　異国の女のように、町をみすてて

いさぎよかった
133　025　いさぎよかった者の眼のような

いさぎよく
132　010　いさぎよく未来をすて

いざこざ
160　032　ちょっとしたいざこざのあとで

いさら
144　010　いさら波打つまぼろしの暗女の里は遠い

いし　（意志）
041　005　意志は荒い山肌の斜面からむけてくるのか
041　130　あなたの意志はそれほど強く　それほど果敢ない

062　047　生きものの緑の意志は
080　023　きみのかくれた意志をふりおろすことができない

いし　医師
051　010　「黄色さ」医師の事もなげな宣告。

いし　石
011　007　そこから大理石の都会が見え
011　008　電車が宝石の角を過ぎるとストップし
012　022　大理石の肉体は磨かれよう
015　009　誰も小さな宝石筐と
015　011　石の床に新聞が配達されてゐたことも
016　007　大理石の林の都会（まち）から
017　007　宝石を舐めたりして
019　005　白い大理石はやはり冷たい
019　010　花と大理石の間で
023　010　沈黙した化石に傷をつける
026　019　わたしの体を石のやうに氷らせた
026　035　悲しむでもよい暗い甃石の上には
028　039　信仰や箸や石鹸や喜ろこびや散策があるやうに
031　005　目覚めてゐる石や眠ってゐる樹木は
034　003　一個の石を濡らす
034　018　そこへも一個の石が転がり
036　017　噴水と石像のある静かな白昼よ
038　013　大理石のうへを辷ってゆく
039　002　大理石の高さも
039　044　しだいに眼をとじた楕円の石に変ってしまふ
039　144　化石の街の
041　022　石が鳴く　まるで蟋蟀のやうに
041　049　あなたは冷たい石段を降り
043　001　石で葺かれた屋根をでて
046　004　石で作られた涯しない屋根の町の
061　006　石でかためた屋根の街の
062　056　ここでは静止する石ですら
064　024　石の屋根の上には重たい雲が垂れこめていた。
088　044　沈黙に聴きいる石もなければ
089　005　橋のうえで　石の手すりにもたれ
095　005　一時に石の竈で燃やさなければならない
100　001　ぼくは冷えた石段をおり
108　033　なつかしいシジフォスの石が
128　070　石の床に
132　011　河原の石となれ
133　013　剥がされた敷石のした

157　001　石棺のうえに
169　008　化石になるほかはない
173　030　林立する墓石の女
189　035　銀のフォークが石の床に落ちる

いしき　（意識）
028　006　意識の外部と呼ぶ空壜の堆積した世界よりも
028　017　組織が崩れ動乱の意識が流れかけて
041　039　考へあるもののやうに　また無意識のごとく
097　008　不幸であるという意識を持たなかったら、
173　048　意識の大陸はずんずん後退し
186　054　ぼくは無意識のうちに隠れ場所をさがしている
186　065　自意識過剰ですよ！

いじきたなく　（意地汚なく）
137　008　意地汚なく愛撫を重ね

いじけた
142　088　いじけた打算がある　わざわざ危険な対立に足をふみこんで

いしだん　石段
041　049　あなたは冷たい石段を降り
100　001　ぼくは冷えた石段をおり

いしゃ　医者
184　006　タイ生れの中国人の医者と再婚した
188　009　五十何年ぶりに歯医者の厄介になるという始末。

いじゅつ　医術
025　023　それは医術の進歩の伝説のやうに

イシュメエル
103　009　イシュメエルにはいいところがある
103　028　イシュメエルよ

いじょう　（以上）
051　029　これ以上血を流すからには
142　018　それで監獄は　四倍以上も暗く
142　120　　これ以上は一歩も進ませないそ　と宣言する不屈な人間の精神のみがー
148　046　もうこれ以上、滅ることのない戦友の、
165　015　これ以上、理不尽な感情があるだろうか
165　022　これ以上、合理的な感情があるだろうか
176　024　これ以上まぶしい裸にはなれないのだ

いしょう　衣裳
054　080　衣裳と装身具の内側に　化粧のゆきとどいた顔の下に
191　009　だんだら雲の衣裳を

いじわるな　（意地悪な）
004　005　意地悪な眉のながい神が
016　015　意地悪な園丁の鋏を怖れなさい

いす　（椅子）
015　018　椅子は空虚なままに
027　020　椅子は書籍の上に乗ってゐる
029　003　凭れかかる椅子もない
030　019　テエプルと椅子の配置をつくり
031　018　疲れた椅子が囁く
032　006　ただ一脚の椅子があるだけ
032　016　だが椅子のキーキーいふ音に
034　002　乾いた椅子の上の
039　019　ゆれている椅子の影は
040　002　椅子はみづから倒れはじめる
041　097　椅子に凭れて
041　114　ただ一脚の椅子があるだけ　気味悪くキーキーいふ音に
047　006　つかれた椅子の軋る音……
050　006　ぼくらは暗い酒場の椅子のうえで、
050　024　憤激も、悲哀も、不平の柔弱な椅子もなかった。
061　171　空いた椅子がいつまでも帰らぬ人を待っています。
088　003　ぼくの椅子の下に巣をつくったり
088　026　椅子のうえで寒さにふるえているぼくの手足を
089　003　たったひとりの椅子にいて
122　007　ひとり椅子にのこされて
167　024　背中をまるめて椅子に凭れている
186　056　それなのに、みんなが整列して中央に一つだけ空いている椅子
188　023　椅子に腰かけて、前こごみに、
189　036　かれは椅子に坐ったまま

いずこ
132　013　塔の愁い　草の雲いずこ

いずみ　泉
039　030　泉のまへに膝まづく
039　092　泉よ返せ
039　147　香ばしいネクタルの泉となって
041　003　地の果よ　そして濁らない泉がある

044 016 大いなる真昼の泉にいそぐからだ。
061 126 「かつて泉があった
061 132 「かつて泉があった
061 141 かつて清い泉があったことを……
061 206 泉もなければ、流れゆく雲もなかった、
168 005 たちのぼる泉の霊気には

いずれは
126 006 いずれは太陽系の星のどこへでも

いそいそと
162 012 絶句していそいそと傘をすぼめ

いそぐ
044 016 大いなる真昼の泉にいそぐからだ。
062 052 海へいそぐ小川のせせらぎや
089 037 停車場へいそぐ通行人の影にまぎれ
183 011 家路をいそぐ人も買物に出てきた人も

いそぐ 急ぐ
144 014 一散に谷へ急ぐのだ
181 033 急ぐことはない

いたい
088 030 いつまでもおまえに向きあっていたいのだよ
088 061 まあお髭がいたいわと

いたい 遺体
160 058 遺体は屍体置場に二日間放置されたままであった
160 060 最後は叔母のクララが遺体をもらいさげていった

いだいな （偉大な）
054 071 おお いまこそ偉大な人間と大きな河は
186 072 時間は偉大な造物主だからね

いたし 致し
068 003 （二度とお会い致しません）
150 006 六人の意見が一致してゐる時は、六人とも彼に騙されてゐる時であった。

いたずら
065 038 いたずらな月が生んだ魔女は
152 007 無意味ないたずらにも

いたずら　（悪戯）
013　019　悪戯なネムは
062　030　あなたは悪戯な瞳と微笑で逃げてゆけばよい

いたずらな
065　038　いたずらな月が生んだ魔女は

いたずらな　（悪戯な）
013　019　悪戯なネムは
062　030　あなたは悪戯な瞳と微笑で逃げてゆけばよい

いたずらに　徒らに
041　096　そして時間が徒らに過ぎていった

いただき　頂
039　052　高い木の頂まで攀ぢてみたいとひそかに思ふ
054　083　見よ　あばかれた社交術の快楽と有頂天とを
071　034　山の頂きがはっきりと見える
071　035　山の頂きから谷をのぞくひとびとは
083　018　さらに高い頂きから
093　027　かれの魂はエデンの樹の頂きからはてしなく落ちはじめる
153　013　この瞬間へと高まった時の頂きから
181　010　こんな高い山の頂きまで登って
188　057　昭和の御代に死ぬなんて、愚の骨頂。

いただき　頂き
071　034　山の頂きがはっきりと見える
071　035　山の頂きから谷をのぞくひとびとは
083　018　さらに高い頂きから
093　027　かれの魂はエデンの樹の頂きからはてしなく落ちはじめる
153　013　この瞬間へと高まった時の頂きから
181　010　こんな高い山の頂きまで登って

いたましい
078　009　いたましい鴎の眼で見おくっていた
150　008　極めて小さな事柄にもいたましいほどの注意と努力を払ってゐた。

いたみ
087　021　雨傘がいたみ長靴が駄目になる

いたみ　痛み
065　039　笑っていた。「痛みの戸口から入って
080　016　今日は希望　この痛みの傷口を

127　020　こめかみの痛みはつづく
174　011　この三十年間、ぼくはきみに一度も電話などしたことがない、ちょっぴり心が痛み、それはなぜかと考え出すと、疑
188　008　歯も、先日、奥歯が一本、根が痛みはじめたので、

いたむ
131　006　いまでは腰がいたむ

いためた　痛めた
125　007　ニュースと駄弁で耳を痛めた

いたる　至る
039　097　滅びに至る門と
140　018　やがては喪心の天に至る
167　050　至るところに積みながら

いたるところに
061　059　いたるところに行きつき、いたるところを過ぎていった。
133　014　ゾンビーたちはいたるところにいたが
185　011　いたるところに沈黙の空白ができた

いたわって
083　014　わたしの心をいたわってくれるけれど

いたんしゃ　異端者
142　056　異端者や地下の作家や哲学者を根絶やしにする

いち　（位置）
039　128　たとへわたしの位置が崩れ
048　038　彼女の位置はどこにある
148　023　生き残ったぼくらは、生活の位置がきまったときから、

いち　一
006　009　すると白い翼をつけた一羽の
007　013　阿片の軽艇（ボート）は霧の中へ青い泡を残して去るべく一人の少女を誘拐
010　003　有効なスピイドについて考へることを欲する少年は一個の白い帽子をかぶってゐる
010　016　新しい射手よ　一本の樹のみを監視するのは賢明ではない
011　016　純な一輪の白薔薇について
012　013　一たまりもなく仮死におち
017　032　怖かったと仏陀の一人が語ったとき
017　035　一言も觸れなかったかも知れない
020　006　一すじの血が
023　021　あのやうに退屈な都会の一日が
025　038　笑声をたてる一本の蝋マッチ

026 032 残されたただ一個の帽子は
027 007 一本の毛髪もふくめて
027 014 ただ一滴の水は
028 001 一本の花の茎もない空の下に
028 052 一台の列車が到着するであらう
028 055 そこに一個の文明が
028 056 そこに一個の社会が工場が
028 057 そこに一個の希望が絶望が信仰が
029 010 一つの海を風景の中に所有した
030 006 どこからともない一滴の水一滴の音に
031 014 闇の一滴がひそかに舌から辷り落ちた
032 006 ただ一脚の椅子があるだけ
033 001 一本の茎は清浄な水を欲する
033 012 一個の器物と共にすべてが放擲された
034 003 一個の石を濡らす
034 018 そこへも一個の石が転がり
035 006 それは一羽の鳥よりもはやく帰ってくる
035 015 一滴の余剰を待たうとおもった
035 022 一粒の実りは
036 022 一枚の布をうかべて憩ふとき
039 037 わたしは一体何処に立ってゐるのか
039 054 一定の時刻と
039 055 一定の雰囲気のなかでしか
039 131 一瞬のうちに
040 009 たゆみながら一つの扉が支へてゐる
041 006 夢を見なさい　不機嫌な一瞬には
041 090 ドアから出て一つの街角をまがっただけで
041 105 一枚の紙片のなんといふ重さ
041 114 ただ一脚の椅子があるだけ　気味悪くキーキーいふ音に
044 004 帰するところ一にして　祈りは慧き習慣（ならわし）の光明なり。
044 018 あなたの齢にとってただの一瞬を。
045 009 いつか一つの息ながく絶えぬといふ
046 028 あなたはけむれる一個の霧となり
046 049 あなた自身が小さな一つの部屋であることを
046 050 此処と彼処　それも一つの幻影に過ぎぬことを
053 020 時とは一体なんでしょう
053 030 みんな仲よく小鳥のように一つの枝でおやすみなさい
053 049 わたしは一日よりもはかない一年を
053 050 一年よりもむなしい一生を過ごしてきました
054 001 それは一九四ニ年の秋であった
054 020 なぜ灰と炎が君を滅ぼす一切であったのか？
054 037 Mよ　いまは一心に風に堪え　抵抗をみつめて
054 049 一九四七年の一情景を描き出そう

054	087	「もういい　一言も語るな
054	122	影は一つの世界に　肉体に変ってゆく
054	151	ちぎれた青空のように飛んだ一枚のハンカチーフ
055	049	あぶらぎった一皿を平げたような顔をする
056	006	未来の一歩々々のようにこつこつと遠ざかってゆく
057	010	ぼくらに一枚の絵皿を見せたことがある
057	030	ぼくはぼくである一切のものを否定するのだ
057	036	ながかった一世紀が終ろうとしているのに
058	053	一杯のコーヒーをまえにして考えようと思うのです
058	054	一人の若いウェイトレスが
059	009	わたしの机のうえの一枚の写真も
060	006	なぜか一服の煙草もひどくうまいのである
060	009	ときに一人の男が
060	016	しかし黙ってすれちがう一瞬にも
061	039	空気の悪いアパートの一室で、
061	042	子供をつれて一日だけの安息に、
061	057	一九四〇年の秋から一九五〇年の秋まで、
061	084	おまえは一プラスーに
061	089	生が一ぱい詰まっている
061	091	死が一ぱい詰まっている」
061	112	一つのものを選ぼうとするとき
061	158	あなたは持たざる一切のものを求めて、
061	159	持てる一切のものを失った。
061	194	十一月の寒空に、わたしはオーバーもなく、
062	028	一切の望みをすててどこまでも一緒にゆこう
065	012	男は待っていた、一体待つことに
065	036	一千の喇叭がいちどに鳴った。その響きは
065	044	乾いた咳を一つした。彼のイメージのなかには
065	050	待っていた。一体、待つことに
066	038	すると不意に、一枚の戸が音もなくひらき
067	011	一匹の魚をもつだろう
068	005	一羽の鴎が飛んでいた
068	018	一直線をえがく　はてしない水平線にそって
069	001	十一月の凍った夜空に
069	009	十一月の凍った夜空に
069	021	十一月の凍った夜空に
069	037	十一月の凍った夜空に
070	033	一日を一年のように暮しているぼくたちには、
071	011	どうして一日の休みにとりかえそうとあせるのか
071	041	真昼を暗くする一瞬
071	042	その一瞬を
072	020	一枚の馬券を買うために
072	038	あとは砂煙りをあげて一団となって疾走している

072 039 この一瞬の混沌が
072 058 何百万の人々が、もう一度溜息をつくのだ
073 004 一隻の油槽船が
077 016 一九四四年五月のある夜……
077 029 東支那海の夜を走る病院船の一室で
079 012 ゆうに一連合艦隊が沈んでいる
080 012 消えてしまう泡が唯一の言葉だから
085 004 天の一角にせばめられた都会の空である
088 041 ぼくと一緒に住もうというのだ
088 050 ぼくと一緒に暮そうという
088 082 高い梢で一緒に歌っている人たちが
089 022 一瞬　ストーヴの炎が暗くなり
093 015 蛇が隠れたエデンの樹を一心に見つめる
095 005 一時に石の竈で燃やさなければならない
096 012 この夢の果で一夜を明かそう
097 001 一つの生命が、あるいは一羽の鳥の飛翔が、
097 005 サン・ペエル街七十一番地に、永遠に雨を降らせるだろう。
098 009 「寝るまえにもう一杯いかが？
099 003 黄金の毛のむく犬と一緒に
099 005 一人の妹は乳母車につかまって歩き
099 006 もう一人の妹は眠りながら小径を歩いている
099 011 今ではーーー人の妹は三人の子供の
099 012 もう一人の妹は一人の子供の母になった
103 005 一言も語ろうとしない
106 005 誰一人笑っていないが　ユーモアに欠けているためではない
106 010 第一列の中央に　いやな上眼づかいのかれがいて
106 028 懲りずに実験してみるべきだったろう　一歩戸外に出ると女たちの笑いで
106 047 対岸は霧がふかくて見えないが　残る一つの疑問には
107 012 一人の勇士を死なせてから……
109 009 生命の一循環を終えたのだから
112 014 命令一下たちまち整列し　黒い銃剣の林をつらね
112 015 敵にむかい黙々と出撃し　一夜あければ骨となる
112 035 それがおまえの獲得した一切なのか
112 046 運命は一瞬の光でおまえたちを数える
113 010 一直線に吹いていた
113 034 行きづまった一人の作家が
114 002 一瞬
114 004 一粒の種子も残らない
115 010 一千年の別離もさびしくはない
118 008 寝床は一つ
123 011 もう一つの首都を夢みて
124 008 一方が売れば
124 022 指名手配の一人は

124 025 他の一人は　古典的な社会復帰者として
124 029 残る一人であるぼくは
125 022 むずかゆい両脚をとじて一人のベッドで静かに眠れ
128 088 一つ星の大将
128 091 一番電車が出ていった
130 005 一つはおれだが
130 006 もう一つは誰だろう？
130 013 砂利が一粒ずつ光りはじめた
132 009 年々の秋をとざす一つの秋
134 011 一つの場所を占めようとして
138 012 いつかはぐれて一人になった
138 018 ……そんなことは一度もなかった
141 003 天までも一緒に？
141 006 そこも、一つのお部屋だったわ。
142 026 わたしやわたしの家族の頭から　髪の毛一すじ落ちやしないとは
142 035 孤立した家族の住むアパートの一室で
142 062 その著書をフランスで刊行した一九四二年生れのブコフスキーは
142 077 アメリカの一部の戦争捕虜たちは
142 106 一つの　否！　は　明日には無数の　否！　になるだろう
142 108 一個の弱い人間の信念をも挫くことができないとわかれば
142 111 そして　一人の無辜を殺すことが
142 119 非道な暴力に抵抗して　自らの犠牲と死の覚悟で第一線に立ち
142 120 　これ以上は一歩も進ませないそ　と宣言する不屈な人間の精神のみがー
144 014 一散に谷へ急ぐのだ
145 008 レスビアンの女たちの痙攣は不信者の地獄の笑いの一型態で　ブリッジして反った肉体の
145 013 何かを思い止るようにと一人の男が一匹の犬にとめられていた
147 002 若くて死に憧れていた母が一緒に死のうと言えば
147 006 一瞬の激情で死に突入していたかもしれない
148 002 去年の一月の終りに、
148 009 かれとは敗戦直後の闇市の近くの旅館で一度会い、
148 015 一人分の人生を、生きるのは容易な業ではない。
148 020 太陽の冷たい一瞥の下で、
148 030 一の宮海岸の近くの松涛閣に集まったのは、
148 055 岩や空や、波や砂や、花の香りのする一日、
149 013 一体のままでただよいながら
150 006 六人の意見が一致してゐる時は、六人とも彼に騙されてゐる時であった。
150 009 一寸した小さな失敗の傷口からでも、
150 014 一匹の魚さへ住んでゐない沼に釣糸を垂らしてゐる影だけが生きてゐる……」
150 049 文学から離れたことに話をかぎれば、それだけがすべてではない一例として、
150 060 時代の風圧を避けるのにせい一ぱいで、
150 062 一九三九年の春、
150 068 今日、我々は一つの都市、
150 069 一つの国さえたちまち喪われるような世界に住んでいるので、

150 079 こちらも七月一日だというのにストーヴをつけたりしました。
151 020 一向に死ぬ気配を見せないのはどうしたわけか
151 032 一緒に寝た女の数は
151 036 一体一体に入魂の秘術をつくしてきたのだ
151 040 はじめから一人にしておけばよかったのかもしれない
152 003 一人でタバコをすっていると
152 018 あくまで一人の殺し屋の
155 019 それで一日
155 025 それも一日
155 030 一日を上手に処理する
156 006 一ぺんも言ったことはない
156 014 一枚舌では
158 023 残された唯一の道だった
160 012 デルモア・シュワルツが一九三八年に書いた短篇を読んだ
160 039 もう一度一人になるために
160 054 私が知りうるのは　シュワルツが一九六六年に五十三歳で死んだことだ
160 055 妻も子もなかったかれは　タイムズ・スクエアに近い安ホテルの一室に住み
160 079 口誦さむ一篇の詩がなくて！
161 001 一日の業を終えて
162 021 そこで一樽のワインとなら
162 023 かれの死が均合うのは一桶の汗か
162 025 盃一杯の涙だから
163 010 一期は夢だから
164 016 ……ぼくの一生は詩の困難でやや暗い
165 026 父はわたくしの詩の一行も理解しなかった
166 010 一本の煙草を思うままに吸えたら
166 013 いまのきみは一日に六十本の煙草を吸い
166 029 一人の女も知らずに
167 027 もう一人の彼である
167 043 一語のための一行が人の心を変え
167 044 一行のためのささやかな詩が
167 046 それから一つの部屋を守り
167 047 一つの部屋のための家屋が傾くまで
167 060 こらえきれない一雫が光っている
169 006 咽喉につかえた一語は
170 004 なま欠伸一つ
171 003 男と女は一緒にいると
171 008 一にアザラシ、二にムイシキン公爵
171 018 太陽をかくす一片の雲をあおぐ
172 009 まばたき一つで風景が変って
173 003 一日が早く過ぎる
173 016 神と悪魔は一身同体
173 029 頭蓋骨を射ちぬかれて死ぬ一人の男

174 002 一年ちょっと前、
174 011 この三十年間、ぼくはきみに一度も電話などしたことがない、ちょっぴり心が痛み、それはなぜかと考え出すと、疑
174 017 ぼくはきみとたった一ぺん打った碁のことをときどき思い出していた。
174 022 あの一局の碁が語るものは何だったのか
175 008 一生かけて見つけないうちに
175 015 きみとぼくは同じ一枚の画面の中にいる
179 014 その日暮しの一日を
179 030 ナイフの刃には一滴の露が宿る、と。
180 032 一度も出会ったことがない
181 022 一艘の小舟がたゆたっている
181 037 「無が一切となる前に」
183 018 若い証券マンが一人で物思いに耽っている
183 029 平穏無事の今日一日の。
185 005 一瞬、あたりが真白になった
185 013 一対の男女の世界では、甘美な
185 014 幻想と化することを証した一人の男が
186 033 一種の時間差攻撃ですね？
186 056 それなのに、みんなが整列して中央に一つだけ空いている椅子
186 073 一粒の蓮の実を永く隠しておくことだよ
186 080 誰かが寄賭してくれたナポレオンの一壜もいずれ劣らぬ時間の傑作だった
187 008 くずれた堡塁の一角から
188 008 歯も、先日、奥歯が一本、根が痛みはじめたので、
188 012 毎週一度通いつづけています。
188 019 一九五八年に、日本で、
188 035 毎年一人ずつの勘定だから、
188 075 一雨ごとに暖かくなるという、三月の雨が
189 029 塵一つない白い卓布
191 013 もう一度 rise and fall
191 015 海は一つの叫びに変れ
192 003 うつむいて、歩いているところは、一木一草もない、黒い砂地で、
192 010 どこまで行っても、一本の松にも出遭わず、平坦な黒い砂地がつづいているばかりで、
192 017 よくよく見れば、そこから一米間隔くらいで、白い明りが点々とつづいているのだ。迷う者のために設けられた救急
192 024 これが罰か、太陽と海を呪ったことの？　たった一度の空想の罪にしては、酷すぎる報いではないか！
193 004 一歩一歩あゆむほかはない
193 019 私一人の人生でも

いちがつ　一月
061 194 十一月の寒空に、わたしはオーバーもなく、
069 001 十一月の凍った夜空に
069 009 十一月の凍った夜空に
069 021 十一月の凍った夜空に
069 037 十一月の凍った夜空に
148 002 去年の一月の終りに、

いちぐち　入口
028　030　トンネルの入口はトンネルの出口へと
072　005　せまい競馬場の入口に殺到してくる

いちけいたい　一型態
145　008　レスビアンの女たちの痙攣は不信者の地獄の笑いの一型態で　ブリッジして反った肉体の

いちご　一語
167　043　一語のための一行が人の心を変え
169　006　咽喉につかえた一語は

いちじゅんかん　一循環
109　009　生命の一循環を終えたのだから

いちだいの　一台の
028　052　一台の列車が到着するであらう

いちだんとなって　一団となって
072　038　あとは砂煙りをあげて一団となって疾走している

いちど
057　004　いちどは犯罪許可証を懐中にして
065　036　一千の喇叭がいちどに鳴った。その響きは
102　016　もういちどハープの筋をかき鳴らすから
102　022　いちど手をはなしたら
125　011　もういちど血のなかをとおってこい

いちど　一度
072　058　何百万の人々が、もう一度溜息をつくのだ
138　018　……そんなことは一度もなかった
148　009　かれとは敗戦直後の闇市の近くの旅館で一度会い、
160　039　もう一度一人になるために
174　011　この三十年間、ぼくはきみに一度も電話などしたことがない、ちょっぴり心が痛み、それはなぜかと考え出すと、疑
180　032　一度も出会ったことがない
188　012　毎週一度通いつづけています。
191　013　もう一度 rise and fall
192　024　これが罰か、太陽と海を呪ったことの？　たった一度の空想の罪にしては、酷すぎる報いではないか！

いちども　一度も
138　018　……そんなことは一度もなかった
174　011　この三十年間、ぼくはきみに一度も電話などしたことがない、ちょっぴり心が痛み、それはなぜかと考え出すと、疑
180　032　一度も出会ったことがない

いちにち　一日
023　021　あのやうに退屈な都会の一日が
053　049　わたしは一日よりもはかない一年を
061　042　子供をつれて一日だけの安息に、
071　011　どうして一日の休みにとりかえそうとあせるのか
148　055　岩や空や、波や砂や、花の香りのする一日、
150　079　こちらも七月一日だというのにストーヴをつけたりしました。
155　019　それで一日
155　025　それも一日
155　030　一日を上手に処理する
161　001　一日の業を終えて
166　013　いまのきみは一日に六十本の煙草を吸い
173　003　一日が早く過ぎる
179　014　その日暮しの一日を
183　029　平穏無事の今日一日の。

いちねん　一年
053　049　わたしは一日よりもはかない一年を
053　050　一年よりもむなしい一生を過ごしてきました
070　033　一日を一年のように暮しているぼくたちには、
174　002　一年ちょっと前、

いちのみやかいがん　一の宮海岸
148　030　一の宮海岸の近くの松涛閣に集まったのは、

いちば　市場
028　036　暗闇の市場へと運ばれてゆく武器たち
039　003　さんざめく市場の広さもない
124　001　感情の市場で

いちばん

いちばんでんしゃ　一番電車
062　013　いちばん美しい使いである姉さん！
083　021　いちばん深い青空よ
129　011　自然にいちばん近い

いちぶの　一部の
142　077　アメリカの一部の戦争捕虜たちは

いちべつ　一瞥

148　020　太陽の冷たい一瞥の下で、

いちまい　一枚
036　022　一枚の布をうかべて憩ふとき
041　105　一枚の紙片のなんといふ重さ
054　151　ちぎれた青空のように飛んだ一枚のハンカチーフ
057　010　ぼくらに一枚の絵皿を見せたことがある
059　009　わたしの机のうえの一枚の写真も
066　038　すると不意に、一枚の戸が音もなくひらき
072　020　一枚の馬券を買うために
156　014　一枚舌では
175　015　きみとぼくは同じ一枚の画面の中にいる

いちまいじた　一枚舌
156　014　一枚舌では

いちまいの　一枚の
036　022　一枚の布をうかべて憩ふとき
041　105　一枚の紙片のなんといふ重さ
054　151　ちぎれた青空のように飛んだ一枚のハンカチーフ
057　010　ぼくらに一枚の絵皿を見せたことがある
059　009　わたしの机のうえの一枚の写真も
066　038　すると不意に、一枚の戸が音もなくひらき
072　020　一枚の馬券を買うために
175　015　きみとぼくは同じ一枚の画面の中にいる

いちめん
007　012　空いちめん赤い花が咲く

いちや　一夜
096　012　この夢の果で一夜を明かそう
112　015　敵にむかい黙々と出撃し　一夜あければ骨となる

いちょう　胃腸
028　032　すべての叫喚が悶える胃腸である
055　040　おれは慢性胃腸病患者のだらしないネクタイをしめ

いちりん　一輪
011　016　純な一輪の白薔薇について

いちれい　一例
150　049　文学から離れたことに話をかぎれば、それだけがすべてではない一例として、

いちわ　一羽
006　009　すると白い翼をつけた一羽の
035　006　それは一羽の鳥よりもはやく帰ってくる
068　005　一羽の鴎が飛んでいた
097　001　一つの生命が、あるいは一羽の鳥の飛翔が、

いちわの　一羽の
006　009　すると白い翼をつけた一羽の
035　006　それは一羽の鳥よりもはやく帰ってくる
068　005　一羽の鴎が飛んでいた
097　001　一つの生命が、あるいは一羽の鳥の飛翔が、

いつか
019　007　脚はいつか死んでゐる
031　006　いつかのやうに凍りついた道路の上で
039　053　わたしはいつか鳥になるかもしれない
039　116　わたしはいつか虹を見るかもしれない
039　138　いつかはきっと
045　009　いつか一つの息ながく絶えぬといふ
046　023　この泥に塗れた水脈もいつかは
061　017　いつか遠く橋のうえにやってきた。
075　013　いつか何処かで
079　001　船はいつか
087　001　いつから　きみは飼いはじめたのか
087　003　いつからきみは呼びはじめたのか
115　012　またいつか　めぐりあおう
124　031　日没に追いつかれていた
125　006　いつか堤防はきれるのだ
138　012　いつかはぐれて一人になった
158　024　いつかみずからも
162　014　いつかは訪れる忘我の果ての
167　070　いつか終りがくるように
188　001　いつか、きみから受取った手紙に、
190　017　いつかきみが帰るところは

いっきゃく　一脚
032　006　ただ一脚の椅子があるだけ
041　114　ただ一脚の椅子があるだけ　気味悪くキーキーいふ音に

いっきょくの　一局の
174　022　あの一局の碁が語るものは何だったのか

いっこうに　一向に

151　020　一向に死ぬ気配を見せないのはどうしたわけか

いっこの　一個の
010　003　有効なスピイドについて考へることを欲する少年は一個の白い帽子をかぶってゐる
026　032　残されたただ一個の帽子は
028　055　そこに一個の文明が
028　056　そこに一個の社会が工場が
028　057　そこに一個の希望が絶望が信仰が
033　012　一個の器物と共にすべてが放擲された
034　003　一個の石を濡らす
034　018　そこへも一個の石が転がり
046　028　あなたはけむれる一個の霧となり
142　108　一個の弱い人間の信念をも挫くことができないとわかれば

いっさい　一切
054　020　なぜ灰と炎が君を滅ぼす一切であったのか？
057　030　ぼくはぼくである一切のものを否定するのだ
061　158　あなたは持たざる一切のものを求めて、
061　159　持てる一切のものを失った。
062　028　一切の望みをすててどこまでも一緒にゆこう
112　035　それがおまえの獲得した一切なのか
181　037　「無が一切となる前に」

いっしつ　一室
061　039　空気の悪いアパートの一室で、
077　029　東支那海の夜を走る病院船の一室で
142　035　孤立した家族の住むアパートの一室で
160　055　妻も子もなかったかれは　タイムズ・スクエアに近い安ホテルの一室に住み

いっしゅの　一種の
186　033　一種の時間差攻撃ですね？

いっしゅん　一瞬
039　131　一瞬のうちに
041　006　夢を見なさい　不機嫌な一瞬には
044　018　あなたの齢にとってただの一瞬を。
060　016　しかし黙ってすれちがう一瞬にも
071　041　真昼を暗くする一瞬
071　042　その一瞬を
072　039　この一瞬の混沌が
089　022　一瞬　ストーヴの炎が暗くなり
112　046　運命は一瞬の光でおまえたちを数える
114　002　一瞬

147　006　一瞬の激情で死に突入していたかもしれない
185　005　一瞬、あたりが真白になった

いっしょ　一緒
062　028　一切の望みをすててどこまでも一緒にゆこう
088　041　ぼくと一緒に住もうというのだ
088　050　ぼくと一緒に暮そうという
088　082　高い梢で一緒に歌っている人たちが
099　003　黄金の毛のむく犬と一緒に
141　003　天までも一緒に？
147　002　若くて死に憧れていた母が一緒に死のうと言えば
151　032　一緒に寝た女の数は
171　003　男と女は一緒にいると

いっしょう　一生
053　050　一年よりもむなしい一生を過ごしてきました
164　016　……ぼくの一生は詩の困難でやや暗い
175　008　一生かけて見つけないうちに

いっしょに　一緒に
062　028　一切の望みをすててどこまでも一緒にゆこう
088　041　ぼくと一緒に住もうというのだ
088　050　ぼくと一緒に暮そうという
088　082　高い梢で一緒に歌っている人たちが
099　003　黄金の毛のむく犬と一緒に
141　003　天までも一緒に？
147　002　若くて死に憧れていた母が一緒に死のうと言えば
151　032　一緒に寝た女の数は
171　003　男と女は一緒にいると

いっしんどうたい　一身同体
173　016　神と悪魔は一身同体

いっしんに　一心に
054　037　Mよ　いまは一心に風に堪え　抵抗をみつめて
093　015　蛇が隠れたエデンの樹を一心に見つめる

いっせいき　一世紀
057　036　ながかった一世紀が終ろうとしているのに

いっせいに
102　006　みんないっせいに銃剣の襖を立ててくれ
106　002　みんな同じポーズで　いっせいに眼を

146　024　みんなの眼がいっせいに

いっせきの　一隻の
073　004　一隻の油槽船が

いっせんねん　一千年の
115　010　一千年の別離もさびしくはない

いっせんの　一千の
065　036　一千の喇叭がいちどに鳴った。その響きは

いった
006　016　飛行機がそんなビラを散らしていったが
013　014　跨いでいった罐の中から
014　015　けれど燃えないうちに水がはいったよ
014　022　口の悪い家畜どもが逃げていったあとで
027　022　じぶんをくべていった
035　018　はげしくすれ違っていった
039　105　落ちていった星を何と呼ぶのだらう
041　096　そして時間が徒らに過ぎていった
054　007　ひとりずつ夜の街から消えていった
055　058　急転直下堕落していったあの
059　003　明るい海岸のボートへ連れさっていった
059　011　あの美しい少年は何処へいったか
061　059　いたるところに行きつき、いたるところを過ぎていった。
065　031　暴風の夜を飛んでいった。哀歌をうたいながら
065　047　遠く旅立っていった。
066　003　黒犬があてもなくさまよっていった。
066　013　つめたい風が吹いていった。
066　023　あかるい月がたずねていった。
066　033　わたしはどこまでも歩いていった。
069　024　都会の荒れた皮膚をひきさいていった
070　036　いったいどこにあるのだろう。
072　065　十万のひとが残していった大きな寂寥が
073　015　音もなく歩いていった
073　029　三千噸の病める資材をひっぱっていった
074　026　みどりの波をわけてゆっくり遠ざかっていった
077　028　かれは死んでいった
077　031　かれは永遠に死んでいった
081　031　やがて陸にむかってゆるやかに動いていった
082　005　波は永遠の沖へ去っていった
082　012　しずかに無限の空のなかへ消えていった
095　018　ゴーゴーゴーとぼくの頭上を通過していった

099　008　どうして過去の方にころがっていったのか？
100　020　ぼくらの共同社会からきりはなされていった
101　010　血の河をわたっていった兵士たちよ
104　002　夏は飛び去っていった
104　004　枯葉のように散っていった
106　004　これがみんな詩人だといったら　たいてい驚く
112　017　祖国の栄光と同胞の愛を信じて地平線になだれていった
112　023　いやいや働きにいった　ちいさきもののために
112　032　すべての秩序が眼の高さにあればいいといった
113　052　いったい誰のものか
116　010　引き裂かれていった日から
117　003　きみが消えていった空が
126　016　いったいダンテの至聖天とか
128　091　一番電車が出ていった
129　007　雲の上までつき出ていった虚栄
134　010　木の葉のように散っていった若者たち
141　002　高く、高く、高く昇っていったわ。
142　073　十二年の刑期をつとめあげるために監獄に戻っていったのである
148　025　ぼくらの骨は錆びていったのだろう。
150　046　「誇り得るもの」を失ったとさとったとき、彼はこの世から転向していったのだ。
151　016　背中をこごめて人中を歩く姿といったら
155　034　見倦きないものといったら
157　002　そっと自分をおいていった
160　060　最後は叔母のクララが遺体をもらいさげていった
162　013　虹の橋を渡っていったが
165　027　父は黙ってこの世から去っていった
167　008　すぐ熱くなるといった気温で
184　018　わたしの家（マイ・ハウス）といったりしている
186　059　いったい何を怖れているんです？
188　063　死滅の予備知識も与えられて然るべきだ、といった方針のもとに。

いったい　一体
039　037　わたしは一体何処に立ってゐるのか
053　020　時とは一体なんでしょう
065　012　男は待っていた、一体待つことに
065　050　待っていた。一体、待つことに
149　013　一体のままでただよいながら
151　036　一体一体に入魂の秘術をつくしてきたのだ

いったいいったい　一体一体
151　036　一体一体に入魂の秘術をつくしてきたのだ

いっちして　一致して

150　006　六人の意見が一致してゐる時は、六人とも彼に騙されてゐる時であった。

いっちょくせん　一直線
068　018　一直線をえがく　はてしない水平線にそって
113　010　一直線に吹いていた

いっちょくせんに　一直線に
113　010　一直線に吹いていた

いっついの　一対の
185　013　一対の男女の世界では、甘美な

いつつの　五つの
033　021　おまへをとりまく五つのドアである
035　021　風の五つの渦の中へきえてゆく
098　027　青空にくっきり聳えて輝いていた五つの尖塔

いっていの　一定の
039　054　一定の時刻と
039　055　一定の雰囲気のなかでしか

いってき　一滴
027　014　ただ一滴の水は
030　006　どこからともない一滴の水一滴の音に
031　014　闇の一滴がひそかに舌から辷り落ちた
035　015　一滴の余剰を待たうとおもった
179　030　ナイフの刃には一滴の露が宿る、と。

いってきの　一滴の
027　014　ただ一滴の水は
030　006　どこからともない一滴の水一滴の音に
035　015　一滴の余剰を待たうとおもった
179　030　ナイフの刃には一滴の露が宿る、と。

いつでも
026　007　水晶体はいつでも煙を噴いてゐた
038　017　でも音楽だけはいつでもやってゐてほしい　と

いっぱい
053　007　わたしのからだのなかに黄昏がいっぱいつまって
091　016　きみのイメジはいつも眼に砂をいっぱい溜めている
099　007　そこで　力いっぱい投げたボールが
104　006　傷ついた鳥や獣の叫びでいっぱいだった

148　051　若い男女でいっぱいのフラワー・センターに立ちよって、
160　018　観客のいっぱいつまった劇場で　司会役の若い男から

いっぱい　一ぱい
061　089　生が一ぱい詰まっている
061　091　死が一ぱい詰まっている」
150　060　時代の風圧を避けるのにせい一ぱいで、

いっぱい　一杯
058　053　一杯のコーヒーをまえにして考えようと思うのです
098　009　「寝るまえにもう一杯いかが？
162　025　盃一杯の涙だから

いっぱいの　一杯の
058　053　一杯のコーヒーをまえにして考えようと思うのです
162　025　盃一杯の涙だから

いっぴきの　一匹の
067　011　一匹の魚をもつだろう
145　013　何かを思い止るようにと一人の男が一匹の犬にとめられていた
150　014　一匹の魚さへ住んでゐない沼に釣糸を垂らしてゐる影だけが生きてゐる……」

いっぷくの　一服の
060　006　なぜか一服の煙草もひどくうまいのである

いっぺん　一ぺん
156　006　一ぺんも言ったことはない

いっぺんに
186　028　いっぺんに老けこんだ気分でしょう？

いっぺんの　一片の
171　018　太陽をかくす一片の雲をあおぐ

いっぺんの　一篇の
160　079　口誦さむ一篇の詩がなくて！

いっぽ　一歩
056　006　未来の一歩々々のようにこつこつと遠ざかってゆく
106　028　懲りずに実験してみるべきだったろう　一歩戸外に出ると女たちの笑いで
142　120　　これ以上は一歩も進ませないそ　と宣言する不屈な人間の精神のみが一
193　004　一歩一歩あゆむほかはない

いっぽいっぽ　一歩一歩
193　004　一歩一歩あゆむほかはない

いっぽいっぽ　一歩々々
056　006　未来の一歩々々のようにこつこつと遠ざかってゆく

いっぽう　一方
124　008　一方が売れば

いっぽん　一本
010　016　新しい射手よ　一本の樹のみを監視するのは賢明ではない
025　038　笑声をたてる一本の蝋マッチ
027　007　一本の毛髪もふくめて
028　001　一本の花の茎もない空の下に
033　001　一本の茎は清浄な水を欲する
166　010　一本の煙草を思うままに吸えたら
188　008　歯も、先日、奥歯が一本、根が痛みはじめたので、
192　010　どこまで行っても、一本の松にも出遭わず、平坦な黒い砂地がつづいているばかりで、

いっぽんの　一本の
010　016　新しい射手よ　一本の樹のみを監視するのは賢明ではない
025　038　笑声をたてる一本の蝋マッチ
027　007　一本の毛髪もふくめて
028　001　一本の花の茎もない空の下に
033　001　一本の茎は清浄な水を欲する
166　010　一本の煙草を思うままに吸えたら
192　010　どこまで行っても、一本の松にも出遭わず、平坦な黒い砂地がつづいているばかりで、

いつまでも
007　004　煤けた町は古い習慣で壺の沈黙を　それはいつまでも黄色い河の
041　067　いつまでもじっと火を見凝めてゐるのは
046　040　行方の知れぬ風のことばにいつまでも微笑を浮べてゐようとは
050　012　剃刀の刃にいつまでも残っているね。
055　033　いつまでもおれたちのひき裂かれた心と
061　171　空いた椅子がいつまでも帰らぬ人を待っています。
065　016　いつまでも待っているよりしかたがなかった。
066　010　小さな友はいつまでも首をふりつづけた。
069　041　いつまでも
070　016　いつまでも、流れゆく川を
075　010　いつまでもブイが浮んでいるけれど
078　022　いつまでもめぐりつづけているだけなのにーー
080　005　いつまでもこのような水平線をもっているか
080　018　いつまでも折れた帆柱を抱いているかぎりは

084　036　いつまでも雨がふってる路地をゆけば
088　030　いつまでもおまえに向きあっていたいのだよ
100　055　はたせなかった約束を　いつまでも悔む人のように
155　032　いつまでも前にあって
171　019　いつまでも不幸のままで
188　085　いつまでも、きみの心に残っていますように。

いつわりの
101　019　いつわりの歴史をさかのぼって

イデオロギー
128　049　「民主主義はイデオロギーではなく
142　053　義に昏（くら）い者　イデオロギーによろめく者が立去り

イデオロジスト
055　059　イデオロジストの顰め面を窓からつきだしてみる

いでん　遺伝
103　008　ひたすら魂の遺伝を信じた

いど　井戸
164　024　……共通の穴である深い井戸にむかって

いと　糸
018　008　体から糸を垂らして
025　054　不思議な糸車は
106　033　鳥の巣型の髪のカットに　度のつよい眼鏡を糸でつるして
150　014　一匹の魚さへ住んでゐない沼に釣糸を垂らしてゐる影だけが生きてゐる……」

いとう　（伊藤）
150　050　きみが「歯応えというか、取柄があった」という伊藤茂二の場合を挙げることができよう。
150　056　学校へ行ってその旨を伊藤に伝えると、

いとぐるま　糸車
025　054　不思議な糸車は

いとしい
039　068　いとしい樹木も逃げはしない
041　034　いとしい藻　あの愛着の汐よ

いとしき
163　018　いとしきひとよ

いとなみ　営み
046　019　この滑らかな洞よりも　さらに低い営みがあるだらうか

いとも
084　022　いともお上品な天使たちが

いな　否
057　030　ぼくはぼくである一切のものを否定するのだ
073　021　否定の彼方へ
127　019　見たものを否定して生きてきた
142　065　魂を売ることを拒否したという
142　104　おそらくぼくたちは　はっきり　否！　と合図するだけでよいだろう
142　106　一つの　否！　は　明日には無数の　否！　になるだろう
189　022　自己を否定するたびに上昇をつづけて

いなくなった
054　064　ウインストンがいなくなったから
072　067　誰もいなくなったスタンドに立って
108　004　いなくなった人影が
128　080　おれがいなくなったら
140　012　きみがいなくなったって
145　025　スペイン内乱で知ったオーデンもいなくなった
189　018　知合いもまったくいなくなったから
191　005　にんげんはいなくなった

いなほ　稲穂
107　006　風に熟れた稲穂も……

いぬ　犬
003　014　逃げてゆくのは白い犬だ
054　026　黒い犬が橋の上にうずくまっていたのを」
061　102　犬は犬のなかで眠っているね
066　003　黒犬があてもなくさまよっていった。
087　002　いじわるで卑しい犬の子を
087　005　けれど　きみの愛犬ペニィは
088　038　ここには犬がつないであるの
091　014　きみの季節は飼主のない猟犬のように飢えている
099　003　黄金の毛のむく犬と一緒に
145　013　何かを思い止るようにと一人の男が一匹の犬にとめられていた
175　001　きみは犬にむかって
175　006　犬の質問をくりかえした

いねむりする　居睡する

025　025　かつて居睡するセルバンであった

いのち
053　040　わたしのいのちは
053　043　いのちを惜しんで暮すことに悲しみなんかありゃしない
101　036　消えたいのちの水をのんでいる兵士たちよ
114　012　いのちだけはおたすけを」
138　016　いのちを刻む
140　007　いのちを機械に売りとばして
166　011　いのちもいらない初年兵の頃には
168　015　この世を経めぐるいのちの物質よ
178　006　無縁のいのちを

いのち　命
041　084　宿命的な輪のなかで
051　011　運命がある顔に達したとでも言うかのように、
054　014　死の滴りは生命の小さな灯をひとつずつ消してゆく
055　019　青い海のなかに二人の運命をうかべているはずであった
055　057　恋にも革命にも失敗し
056　020　それだけの運命である
061　074　あなたの足を停め、あなたに待つことを命ずる「現在」に。
064　016　人の運命をどうして占うのだろう。
071　013　わからないひとつの運命である
072　017　青、赤、黄、白の運命の使者たち
073　019　翳りゆく運命の暗示をもとめて
078　020　救命具をつけた船のへさきは
084　014　戦争か進歩か壊滅か革命か
086　009　生命は歩む影
088　065　ふたりの運命を
097　001　一つの生命が、あるいは一羽の鳥の飛翔が、
097　003　あなたは生命も飛翔も見ないだろう。
099　013　小さな四つの運命は　四つのボールのように
103　011　帆柱や舵や海図や羅針や救命ブイや銛や……
103　025　それは波と風と運命の手にまかされた
103　030　にんげんの運命をすいこむもの
109　005　生命の奔流は丘をくだり
109　009　生命の一循環を終えたのだから
112　014　命令一下たちまち整列し　黒い銃剣の林をつらね
112　046　運命は一瞬の光でおまえたちを数える
136　020　革命をスパイしている
142　064　ずたずたに責め苛まれながら　若い生命をすり減らしているが
142　079　もちろん　信念より自分の生命が大切だと考えたからである
142　081　生命より貴重だと感じていたのである

145 019 静かに走れと命名された群集の河は昨日のように流れていた
154 011 命の水がほとばしる
162 022 喜んで命と交換しただろうというのだ
167 036 戦争と革命の犠牲者たちの
167 071 やがておそってくる運命は
182 026 老いのうちにも新しい命の水が
186 060 人の運命
190 016 残りすくない瞑想の命を楽しむ
193 009 偽の革命

いのり 祈り
044 004 帰するところ一にして　祈りは慧き習慣（ならわし）の光明なり。
070 009 あさましい祈りのことばを口にし、
077 038 そのうえに低い祈りの声と
082 017 神をもたぬひとつの祈りが
101 012 みんな忘れる祈りのむなしさで
146 023 お祈りを捧げているところでした

いびき
173 050 いびきをかいて死んでいきながら

いびつ
113 051 いびつになった世界の顔　そいつは

いふ
009 003 鉄砲百合が咲いたといふニュウスで
014 012 つまりその隙にといふわけさ
023 003 音もなく日ぐれがきたといふ
028 018 つねに流通する貨幣の翳から起るといふ
032 007 気味悪くキーキーいふ音に
032 016 だが椅子のキーキーいふ音に
037 016 無限といふものが少しづつ暗くなりかけてゐた
038 014 いふまでもなく
039 079 かつて地上に祭があったといふ
039 095 すべてはもはや過ぎ去ってしまったといふ
039 101 わたしははじめて怒りといふものをみた
039 109 誰が道に迷ふといふのか
039 114 そして誰が沈黙したといふのか
041 025 海からやって来たといふ　空を飛ぶ藻に乗ってきた人よ
041 105 一枚の紙片のなんといふ重さ
041 114 ただ一脚の椅子があるだけ　気味悪くキーキーいふ音に
045 009 いつか一つの息ながく絶えぬといふ

いふ　(畏怖)
126　017　パスカルを畏怖させた宇宙の無限の沈黙とかは

いふ　云ふ
013　006　ネムの木は負け惜しみを云ふ
028　040　すべてが平和であるようにとか云ふ必要もない

いふ　言ふ
039　057　みんなわたしの言ふことを信じないか

いぶかる
162　009　生きるのをいぶかる眼に

いふく　衣服
044　007　食なく衣服もなく、

いぶくろ　胃袋
054　029　Mよ　都会の胃袋をさまよいながら君が呟いていたことを……

いま
009　015　いま責任を問はれてゐるのです
017　023　ああまるで天国でございますと
017　025　まるで極楽でございますと云はねば
030　030　いま数々のなかから択りわける
033　003　いまおびただしい影のなかでもがく
046　011　いまはしい壁や　むなしい紙きれにまたたく嘆息をすて
046　048　どうしていままで忘れてゐたのか
052　004　いまでは墓穴にかくれ
052　024　わたしはいまでも眼鏡のつかれをぬぐい
053　011　可愛いい格子のスカートをはいています
053　015　わたしは大切に胸のうえにさげています
053　019　わたしはわたしの影を背負います
053　022　いつのまにかわたしはお姉さんのお墓の前に立っています
053　029　ひそひそと話しあっていた声もとだえてしまいました
053　060　夢を見ながら眠る習慣が　こんなに悲しいものとは思いませんでした
054　037　Mよ　いまは一心に風に堪え　抵抗をみつめて
054　063　おお　いまこそイギリスに住もう
054　065　いまこそそこに疑いの余地があるから
054　067　おお　いまこそ君の虚栄をひきずり下せ！
054　071　おお　いまこそ偉大な人間と大きな河は
054　113　「また明日会いましょう　もしも明日があるのなら」
054　121　いまは自我をみつめ微かなわらいを憶いだす
058　004　新しい建物がたちかけています

058 013 あまり感心しない生活をしています
058 014 無意味な時代がしずかに腐敗しています
058 034 うつくしく欠伸をしている女がいます
058 035 その横顔をぬすみ見ている紳士がいます
058 039 サーカスの看板がこがらしに吹かれています
061 018 いま、あなたは嘔気をこらえ、
061 153 どうしていままで忘れていたのか、
061 171 空いた椅子がいつまでも帰らぬ人を待っています。
061 174 火のない暖炉に向いあっています。
061 179 固いパンを噛っています。
061 191 いつも天使の悪い呼吸で曇っています。
061 196 暗くなってゆく運河を見つめています。
062 009 いまでも空中をさまよっている姉さん！
062 041 あなたはそっと見ていますね
062 049 枯草のあいだの四月の若芽のように萌えています
062 051 あなたはじっと耳を澄ましていますね
062 063 あなたはつぶらな瞳を閉じていますね
068 036 （……愛しています
068 037 愛しています……）
072 003 いま評判のサラブレッド四歳馬を見ようとして
081 019 いまうなる弾丸を
084 018 「いまではどちらのお家庭にも
089 008 「あなたの暖い心のなかにいますよ」
089 010 凍ってゆく水に影をうかべていました
089 023 「ぼくは凍ってゆく水のなかにいますよ」
089 026 「いま死の影が
089 032 黒い河をのぞきこんでいる人がいます
092 010 いまさら
100 054 ぼくはいまでも　その声をきく
101 007 いまはきみたちの肉と骨がどこまでもすきとおってゆく季節だ
102 003 いまはなつかしい硝煙とその匂いのなかに
106 011 外部の世界をうかがい　いまもじっと「時」をこらえ
109 004 いま、別れを告げようとしている。
114 007 いまはただ
117 013 いまは声をかぎりに
124 003 三人の男は　いまはトンズラ
128 057 桜の咲く頃　また会いましょう
131 006 いまでは腰がいたむ
137 005 ゆるしてくださいまし
146 010 マスコットの猫が欠伸をしていました
146 015 ひっそりとつづいています
154 019 いましも刑罰の足台が置かれ
155 003 いま見ている風景は

156 008 愛していますと
156 030 いまでも私を動顛させ
158 039 もはや暁紅をかいまみるまでもなかった
160 075 われわれのコーネリアスは　いまどこにいるのだろう？
164 012 あいまいで　ずるい
164 013 あいまいなのは
164 014 ぼくらの関係があいまいだからだ
166 013 いまのきみは一日に六十本の煙草を吸い
167 038 たったいまも
174 003 「みんな、しぶといなあ、そう思っています」とあって、
174 004 「病気がこんなにこたえるとは、思ってもいませんでした。春からノイローゼ状態で我ながら呆れかえっていま
174 026 いまでも下手な碁打ちであるぼくは考える
182 011 かつての勇者はいまなお勇者だ
184 026 いま地球は恐怖で頭をかかえているのに。
186 034 ひょっとすると廿六年前の卅四歳のぼくが、いまのぼくを見ていたかも……
188 005 白内障の眼を、なるべく休めるようにしていますから、
188 007 思うようにいっていません。
188 012 毎週一度通いつづけています。
188 018 手術をせねばなるまいと、気にかけています。
188 054 いまはエレクトロニクスと老害の時代なのだ。
188 082 いまさらのように、頭をかかえています。
188 085 いつまでも、きみの心に残っていますように。
189 023 いまのかれは雲を見下すような
193 021 いまし朝雲を東によせて

いま　今
003 004 今晩十二時に出帆します
029 014 今はただ表情もなく振返るわたしに
031 019 けれど今になっても芽をふかない
048 011 昨日も今日も　疲れた裸のままでいると
050 018 いつも季節は秋だった、昨日も今日も、
050 029 きみの胸の傷口は今でもまだ痛むか。
054 034 今でも僕は橋の上にたつと
054 098 今なおどこかに隠れているとは信じられぬ
056 007 今日も都会の窓に灯がともり
056 019 明日もなければ今日もない
057 040 今日も
058 045 どうやら私は今年も結婚しそこねたようです
058 048 今日の出来事を
059 010 今ではなつかしい面影のようにうすれてしまった
061 099 「今日も太陽が輝いているね
061 188 わたしは今にも倒れそうになって、
064 003 ――今日は今日、と通行人が呟いた、

064 030 ーー今日は今日、と街灯が答えた。
068 009 今世紀最大の詩人が
068 028 （今年の夏もこれっきり）
071 005 今日のなかの明日
071 026 今日のなかの昨日
071 044 今日のなかの昨日と明日
072 055 これは今週のビッグ・ニューズだ
080 016 今日は希望　この痛みの傷口を
084 024 「今夜あたし　あのギャングに
099 011 今ではーーー人の妹は三人の子供の
100 058 ぼくは今年の夏を知った
112 019 おまえは今朝も蛇口のまえで
123 005 今日は北風が吹いているが
128 020 でっかくなっちまったんだ　今では
142 074 「今日の西側の勇気の基準によれば
142 102 ぼくたちのそれは悠長ともいえる　それだけ今なら
144 009 昨日の淵から出た今日の瀬は早く
145 021 膝の上の猫を大事にしてあげなさいと今日の声は忠告していた
148 006 今年の冬には、
150 041 今にしておもえば、真実を衝いた薄気味わるい言葉である。
150 055 こんな創作を今度載せたら発禁にするぞ、と検閲係から脅かされた。
150 068 今日、我々は一つの都市、
150 077 まさか、「荒地」が今頃になってアメリカから送られてくるとは。
159 007 今生の別れかと心はさわいだが
160 002 いやに透明に見えてきた　今年の冬
160 009 そんな今年の冬も終りに近い　ある日の真夜中
160 046 今夜のかれの幸運は明日にはきみのものだろう
165 021 今ならばわかっている
166 019 という？先生の発言を今朝の新聞で読んでから
167 021 古今の書を読み
169 011 今夜は別々に浮遊し
169 023 今年の小さな波じゃネ
173 026 今では街中でも綺麗な娘に出あったりすると
180 053 今年の波はどうあれ
183 019 今日の出来高と終値を前にして
183 029 平穏無事の今日一日の。
185 018 それが、今日の真実だとすれば
186 020 それで今度の西下の印象は？
186 041 どうしてきみにわかる？　なぜ今までぼくが新幹線に乗らなかったか？
188 027 今では、すっかり忘れてしまった。
188 055 （……今日も打振る日章旗……）

150　077　まさか、「荒地」が今頃になってアメリカから送られてくるとは。

いまし
053　029　ひそひそと話しあっていた声もとだえてしまいました
054　113　「また明日会いましょう　もしも明日があるのなら」
089　010　凍ってゆく水に影をうかべていました
128　057　桜の咲く頃　また会いましょう
137　005　ゆるしてくださいまし
146　010　マスコットの猫が欠伸をしていました
154　019　いましも刑罰の足台が置かれ
193　021　いまし朝雲を東によせて

いまはしい
046　011　いまはしい壁や　むなしい紙きれにまたたく嘆息をすて

いみ　（意味）
028　049　しかしこれらは何も意味しない意味はない
039　083　美しい火災の意味を知るだらう
053　034　それに何の意味があったでしょう
058　014　無意味な時代がしずかに腐敗しています
106　029　むやみに明るい星空があり　意味なく敏感な宇宙があり
107　014　失うことの意味がわかるのは
142　011　その意味と深さを失い
142　051　しかし　それが何を意味するのかね
152　007　無意味ないたずらにも
156　028　無償を意味する
158　002　きみのいう断念の意味を
158　036　断念の意味は果されたのだ
166　016　自由の意味をもてあましている
180　025　ら……。貴方に判らなかろうと、もう少し付け足すと、昨年は形相の意味も知らなかったということ。私は「メ
184　016　その意味が大好きだと言い

いみしない　（意味しない）
028　049　しかしこれらは何も意味しない意味はない

いみなく　（意味なく）
106　029　むやみに明るい星空があり　意味なく敏感な宇宙があり

イメジ
072　010　簡潔なイメジによって
091　009　きみのイメジは
091　016　きみのイメジはいつも眼に砂をいっぱい溜めている
100　073　そして　ぼくと逆のイメジを抱いている

125　017　どんなイメジを選んだところで

イメージ
065　019　さっきから彼のイメージの
065　044　乾いた咳を一つした。彼のイメージのなかには
128　073　おれのイメージに
142　113　歴史を作る者をたえず脅かしつづけてきた基本的なイメージである

いもうと　妹
061　135　父母や妹　またあなたの至上の友たちに」
077　022　母や妹や恋人のためにとめどなく涙を流しつづけた
095　009　妹のところへ電話をかけようとして
099　005　一人の妹は乳母車につかまって歩き
099　006　もう一人の妹は眠りながら小径を歩いている
099　011　今ではーーー人の妹は三人の子供の
099　012　もう一人の妹は一人の子供の母になった
136　006　妹たちを犯し

いもむしいろ　芋虫色
145　005　芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右

いやいや
112　023　いやいや働きにいった　ちいさきもののために

いやしい　卑しい
052　027　飢え渇き卑しい顔をして
059　012　卑しい心に問うてはならぬ
087　002　いじわるで卑しい犬の子を

いやす
125　010　悔恨をいやす運動がほしい

いやだ　嫌だ
006　006　モグラの生活は嫌だね　と

いやな
106　010　第一列の中央に　いやな上眼づかいのかれがいて
182　006　いやな老人になるな

いやな　厭な
055　031　厭な匂いの薬のように澱んでいるばかりであった

いらい　（以来）

186 043 新幹線が開通して以来、機会はいくらでもあったよ

いらなく
125 002 夢はもういらなくなった

いりえ 入江
121 011 波の牙が入江の肌をかむように

いりひ 入日
137 001 入日の色がほんのりと
137 010 入日のさまを覗き見してきたのだ

いる
024 003 る 血液を噴き上げている白い管は輝やける噴水の愛撫をう
030 015 陰花植物とならんで写真にはいる
030 026 零囲気のほとりに佇んでいる白いもの
032 010 それは確かにわたしを支へている
034 014 気体のなかの透明な溝へはいる
036 028 ばんやりしていると嘴と天使の槍で
039 019 ゆれている椅子の影は
039 123 眠りを眠っている人たちを
041 146 孤りぼっちで火を見つめているだらうと
047 001 深夜 唇が煙草を挟んでいる
047 005 耳をすましている中枢に
047 015 自己愛が底深く凍りついてしまっていることを……
048 010 うすく瞼をとじている憂欝
048 011 昨日も今日も 疲れた裸のままでいると
048 014 彼女だけが触れている
048 016 内部からのひかりをひそかに愛撫している
048 018 まだとおくから押えている性！
048 023 壁にかかっている着物からぬけだし
048 032 地平線がのせている人間の重たい故郷
049 013 黒い足のように縮まっている 君の黒い足のようにー
050 012 剃刀の刃にいつまでも残っているね。
051 012 病んでいるのは日本じゃないか。
051 015 海が熱い体温のなかで燃えたぎっている、
051 031 「誰かが覗いている」
051 036 こっちを見凝めている鍵穴を必死に覗きかえす
052 006 ほそい咽喉に流しこんでいる姉さん！
052 007 あなたはむろん黙っているけれど
052 015 あなたは本当に暗い地下にひとりで住んでいるのですか
053 002 まだ悲しいひとつの顔が浮んだり消えたりしているのに
053 008 黄ろい髪飾だけがふわふわと蝶のように宙にさまよっているのです

053 042 お姉さん　何処にいるの
053 062 お墓のなかでお目覚めになっているお姉さん！
054 004 生きているにしても　倒れているしても
054 024 憶えているかしら？
054 028 僕ははっきり憶えている
054 036 「星のきまっている者はふりむかぬ」
054 040 「僕はここにいる　君がいないところから
054 041 君がいるところへ行きつくために
054 042 ここにいる僕はここにいない」と……
054 070 首を吊っている母親の足をひっぱれ！
054 079 未来はとおの昔に済んでしまっている
054 084 すべて記憶に鍵をあずけている人々よ
054 091 僕は知っている
054 098 今なおどこかに隠れているとは信じられぬ
054 131 空虚な額縁のなかで白い雨が乾いている
054 133 「アメリカ……」と壁がこたえている
054 159 テーブルに凭れて新しい黄金時代を夢みている
054 168 熱烈に夢みている
055 010 巨大な黒い影が波止場にうずくまっている
055 019 青い海のなかに二人の運命をうかべているはずであった
055 029 花瓶の腐った水のなかで溶けている
055 031 厭な匂いの薬のように澱んでいるばかりであった
055 035 空虚なメランコリイの谷間にふりつづいている
055 039 おれはおまえの責任について考えている
055 051 額縁のなかに嵌めこまれている
055 060 街は死んでいる
055 063 おれには掘割のそばに立っている人影が
056 002 夕暮のなかで煙草をすっている男がいる
056 011 廃墟のなかを踊り狂っているのが見えないわけではない
056 013 聾の老人が世界に向って何か叫んでいるのが
056 016 じぶんの不幸を悲しんでいるわけではない
056 017 まして夢を見ているわけでもない
056 018 橋にもたれてぼんやり煙草をすっている
057 003 ぼくの悩みは始まっている
057 008 それでもぼくらが生きているとは信じられなかった
057 036 ながかった一世紀が終ろうとしているのに
057 043 大挙して街中でなつかしい歌をうたっている
058 001 ひとびとが足をとめている空地には
058 009 踊っている男女の影がアスファルトに落ちてきます
058 032 つかれているのは私ばかりではありません
058 034 うつくしく欠伸をしている女がいます
058 035 その横顔をぬすみ見ている紳士がいます
058 041 小鳥がとまっていることも見のがせません

059 016 海岸に捨てられたボートを眺めていると
060 005 そんな街はずれに立っていると
060 008 荒れた道がつづいているのみである
060 014 高貴な冷たい戦慄を感じているにちがいない
061 004 よごれた幻の都市が聳えている。
061 020 炸裂する真昼の花火を夢みている。
061 081 無数の小さな抱沫が噴きだしているのを……
061 089 生が一ぱい詰まっている
061 091 死が一ぱい詰まっている」
061 099 「今日も太陽が輝いているね
061 100 電車が走っているね
061 101 煙突が煙を吐いているね
061 102 犬は犬のなかで眠っているね
061 110 どれだけたくさんの罪が心のなかに閉ざされているかを。
061 163 星のきまっている者はふりむこうとしない。
061 166 星のきまっている者の、空にまたたく光のために。
061 181 わたしは病んでいる、
062 003 わたしの魂は病んでいる
062 005 わたしの胸のなかで腐っている
062 009 いまでも空中をさまよっている姉さん！
062 024 わたしはこの世ならぬ冷たい喜びに慄えている
062 039 清い空気のなかで乳の瓶をふっているのを
062 043 この小さな丘の斜面に寝そべっていると
062 046 太陽の光りをあびている
062 055 あなたは黙ってうなずいているのですね
062 057 すこしずつ海のほうへ動いているのですよ
062 064 そして永遠に死んだふりをしているのですね
063 013 あなたは固く睫毛をとじて死んだふりをしている
063 015 あなたはひそかに呟いている
063 020 （ぼくは憐みのこころをもっているか？）
063 023 ぼくは黙って坐っているだけだ
063 025 ぼくが殉難者の澄んだ眸をしているとしたら……
064 011 ーー憶えているかい？
065 009 沈黙が占めている空間に反響した。
065 016 いつまでも待っているよりしかたがなかった。
065 020 中にあった。「何を考えているのか
065 054 彼は待っているよりしかたがなかった。
066 019 あなた、そこにいるの？
068 022 乾いた砂に埋まっているのを
069 028 かれの帰りをまっている女の
069 042 遠くの国をまわっている
070 013 とおい星、ちかい星のひとつひとつにみいっている、
070 022 ぼくたちを閉じこめている格子は

070 024 なまの筋肉で出来ている、
070 033 一日を一年のように暮しているぼくたちには、
070 050 なんという冷たい手をしているの
070 052 どんな蛇よりも猛烈な毒をもっているわ
070 056 なんという青白い顔をしているのか
070 061 血の涙をうかべているのは。
071 012 われわれを待ちうけているものは
072 038 あとは砂煙りをあげて一団となって疾走している
072 066 暮れるにおそい五月の空の下にひろがっている
075 010 いつまでもブイが浮んでいるけれど
076 003 どちらかが死にかけているような
076 017 こうして耐えているぼくのほうが
077 026 死がやってきてじっと蹲っているのが見えた
077 039 やさしい女のひとの手がおかれている
078 022 いつまでもめぐりつづけているだけなのにーー
079 002 黒い海のうえを走っている
079 005 青空の無のなかに溺れようとしている
079 012 ゆうに一連合艦隊が沈んでいる
079 018 永久に待ちこがれている水兵たちから
080 005 いつまでもこのような水平線をもっているか
080 008 とおい悲しみをたぐりよせている
080 018 いつまでも折れた帆柱を抱いているかぎりは
080 025 まっすぐ海の彼方を指しているからーー
081 008 強い硝煙のにおいが立ちこめているので
081 020 生身で受けとめているのは兵士ではない
081 022 黒い神を防衛しているのは
081 027 ぼくらをしっかり抱きしめているのは
083 008 ほそい声で虫がないている
084 016 壁にはりついた影と語っている時代ーー
085 028 いつも刃を上にむけている親切な男だ
085 031 きみが求めているものは善悪でない何ものか
088 009 ぼくが知っているのは　おまえが生れる前のことだ
088 011 なんでもおまえの方がよく知っている
088 016 見えない国境をつくっているか
088 017 みんな知っているとおりだ
088 023 みんな知っているとおりなんだ
088 026 椅子のうえで寒さにふるえているぼくの手足を
088 044 沈黙に聴きいる石もなければ
088 080 みんなじっと耳をすましているのだから
088 082 高い梢で一緒に歌っている人たちが
089 002 赤々とストーヴが燃えている部屋の
089 004 「あなた　どこにいるの？」と問うたら
089 006 あおざめた河明りを見おろしている人たちといっしょに

089 017 人々があつまっている橋や
089 020 「あなたどこにいるの？」
089 032 黒い河をのぞきこんでいる人がいます
089 039 「あなた　どこにいるの？」
090 008 これはもうはっきりしている
091 010 劇場やホテルのロビイに立っている寂しい人影からうまれ
091 011 新聞社の屋上たかく舞っている伝書鳩の
091 014 きみの季節は飼主のない猟犬のように飢えている
091 016 きみのイメジはいつも眼に砂をいっぱい溜めている
093 006 充分な準備がいる
093 013 かれにとってはとっくに抜け道がわかっている迷路である
094 007 ない蹴爪で砂をけって羽搏いているテント
094 010 飛んでいる鳶や網をひく漁夫の唄で
094 013 会ったことのない人たちのことを思いうかべているもの
095 003 さらに多くのものがかかっている
096 013 ミロ君の夜の太陽を見ていると　吐きたくなるね
096 018 あの瞑想の闇のコアには生きている砂漠があるんだ
098 006 まだ眼ばたきしているやつがいる
099 004 太陽が緑の絵具をとかしている芝草のうえを
099 006 もう一人の妹は眠りながら小径を歩いている
099 014 それぞれの庭で規則正しくはずんでいる
100 004 うなだれて　ぼくらを待っているバスに乗った
100 016 都会の時計のために残されているのかしら？
100 042 たえまなく出血している内部の世界で
100 070 精力的な夏は未来の街の方向にひろがっているようにみえた
100 072 きみはとおくからぼくを見まもっている
100 073 そして　ぼくと逆のイメジを抱いている
100 076 昨日の道となっている
100 077 ぼくの空はそのままきみの地上となっている
101 036 消えたいのちの水をのんでいる兵士たちよ
101 045 四月の雨をまつ土にふかく射ちこまれている
101 048 ぼくはぼくの心をつなぎとめている鎖をひきずって
102 013 おれのことを憶えているなら
104 012 夜空はたえまなく星を降らせている
106 003 こちらに向けていても　なにも見ているわけではない
106 005 誰一人笑っていないが　ユーモアに欠けているためではない
106 012 永遠プラス五分間を　「早く早く」とせき立てている
106 020 かれの眼は　スプーンの銀のように輝いている
106 024 詩人としてのかれの　おそろしい飛翔力をあらわしている
106 035 「おれは詩を書いているんだ」　カアカアカアカアカアカアと
106 036 不吉な羽ばたきをして　地面を歩く黒い鳥の男たちもいる
106 046 おそらくその果は　「未来」とふかく交っているのだろう
108 003 揺れている

108 010 青くなっている海
108 012 錨を沈めている船
108 018 再び荒れてくる海を見つめている
109 004 いま、別れを告げようとしている。
109 011 根が考え、幹が感じている。
109 013 落葉の雨を降らせている。
110 003 ヨットは沈黙している
111 006 夕焼空にふと途切れている
112 030 なあ戦友　なぜ黙っている
112 040 水が酒に　欲望がもっとたくさんの浪費にならないとこぼしている
112 042 胡麻的な頭と頭をくっつけて寝ているなつかしいきょうだいたち
112 044 眠りながら腹をこやす王国を夢みているうれしいはらからたち
114 009 やにくさいパイプの煙を吐きかけている
115 009 まだ燃えている彗星の
116 014 ゆれつづけている。
117 004 どこまでもひろがっている
120 002 ベンチにもたれていると
121 008 があそんでいる海原で
121 014 さわいでいる血をしずめるために――
121 015 台所では大根を刻む音がしている
123 005 今日は北風が吹いているが
124 020 （ジャーナリストがテーブルを叩いて怒っている）
124 027 郊外電車の快よい動揺に耐えている
124 028 （短評：空間はどの部分も遅れている？）
125 003 聖者をうらぎった罰があらわれている
125 016 行ったり来たりしているが
125 020 恐怖で赤く熟れた月が廂に出ている
128 087 アンテナにひっかかっている
130 003 河原にほの白く浮んでいる
130 008 唇は笑っているようでもある
133 002 ひとりいることにたえられない
134 002 みんな泣きはらした眼をしている
134 007 変化はすでに起っているが
134 013 広場に立って眼をこすっていると
136 017 春の熱病をやんでいる
136 020 革命をスパイしている
139 005 わたしを呼んでいるにちがいないのだが
140 024 四十七階の痛む背骨がゆれている
141 010 そして、きみはここにいる、ぼくはここにいる、
141 012 すべてが終っている者には、ほかに呼び名はない。
142 003 おおびらに話されなくなっている……
142 007 　同じことがギリシアやスペインやトルコでも起っている……
142 016 帝政時代よりソビエト体制下で四倍も悪化している

142 023 たえず監視され　尾行されている
142 031 あなたは知っている
142 034 ひそかに怖れていることを！
142 049 古い繰り返しのなかにいる
142 050 　ぼくはここにいる　きみはここにいる
142 052 ぼくたちはこれから何をしようとしているのかね
142 064 ずたずたに責め苛まれながら　若い生命をすり減らしているが
142 076 はるかに高い代償を払ってもよいことになっている
142 082 彼がおかれている状況は　西側の同時代人のそれより
142 086 黙って背中を向ける者もいる　それにはそれの
142 093 家を夢みているだけでは　古い家も新しい家も守れはしない
142 098 世界中にその網の目をひろげているのである
144 004 なまめかしい徽雨に濡れている
145 004 はいるとつぶやきながら黒い色の真実やめったに売れないエンジェルの絵を売っていた」
146 023 お祈りを捧げているところでした
146 040 黙ってつづいているだけなのです
146 042 途方に暮れて立っていると
146 051 おどおどしているわたしの手をとって
147 018 生きていることが心苦しくならなかったことで
147 019 多分ぼくはまちがっているのだろう
148 019 感傷的にかかわっている暇はないのだ。
148 041 夢の領土をとり巻いている闇のなかで、
150 015 三人称で戯画的に書いているが、
150 017 しかし、友人たちは仲間のだれかれをあてこすっているのだと思いこみ、
150 021 きみから送られてきたその頃の六冊の雑誌を見ていると、
150 027 何かが間違っていると感ぜざるをえなかった。
150 029 文学の世界にとどまっている者は、私しかいない。
150 036 しかし、そのことに、「私」は、全面的に欺かれているわけにはいかない。
150 069 一つの国さえたちまち喪われるような世界に住んでいるので、
150 078 そちらでは気分的にパッとしない天候がつづいているそうですが、
151 006 現在各種年鑑によれば詩人ということになっている
151 019 自分でもそう思い人にもそう思われているのに
151 029 おまえをおとうさんと呼んでいる娘を裸にし
151 044 ずいぶん手間暇のかかる男になっている
152 003 一人でタバコをすっていると
152 024 醜い現実の姿をさらしている
152 027 透明にそびえることを望んでいる
154 013 待っているのと迷うのと
154 016 うなだれていると
155 003 いま見ている風景は
155 020 知っている顔や
155 037 幾重にも保険をかけているが
155 042 ちゃんと計算しているのである

156 005 愛しているなんて
156 011 愛しているなどと口走っていたら
156 038 完全に処女性を保っている
159 002 ひとり頭を垂れていると……
160 048 賢者たちは言っている
160 075 われわれのコーネリアスは　いまどこにいるのだろう？
161 016 生きているというだけで
161 017 ましてながく生きているというのなら
161 025 残されているのだから
163 005 ぼくらは崖に立っている
163 017 必死に輝きをましている
164 021 そこにいるのか　いないのか？
165 016 自分をこの世に存在させていることで
165 021 今ならばわかっている
166 016 自由の意味をもてあましている
166 025 きみは死にかけているのかもしれない
166 028 きみは死にかけているのかもしれない
166 032 ぼくはもう死んでいるのかもしれない
167 011 明るい青空が海のようにひろがっている
167 015 忍べないほどではないと思っているうちに
167 020 節々をならして身ぶるいしている
167 024 背中をまるめて椅子に凭れている
167 026 強風のなかでクラブを振っているのは
167 052 人が住んでいるかぎり
167 057 人くさい息が充満しているうちは
167 060 こらえきれない一雫が光っている
169 018 わずかに涙の粒がしぶいている
170 026 物を書く空気になじめなくなっている精神の
171 003 男と女は一緒にいると
172 019 起つことも寝ることもできないでいる
173 006 捨てゼリフはきまっている
173 010 もう終ろうとしている世界がある
173 027 キョロキョロと振返って眺めている始末だ
173 041 あとに残っているのは小者ばかりだから
175 005 なぜ睡ってばかりいるのかと
175 010 雨が降っている
175 012 病床のきみの耳にも聞えているに違いない
175 015 きみとぼくは同じ一枚の画面の中にいる
176 003 着ているものを脱ぎ
176 005 開かれている窓辺の
176 032 わけもなく顔をかくしている
177 019 寒さに耐えているものよ
177 029 きみの影は跛をひいている

179 027 たしかに知っていると告げる
180 056 縦にも横にも辷れなくなっている
181 022 一艘の小舟がたゆたっている
182 017 星座の歌に耳を傾けていると
182 027 滾滾とあふれている
183 004 人影がはげしく往きかっている
183 005 くだもの屋にあふれている蜜柑が
183 009 不況が心にのしかかっているからだ
183 014 きちんと心得ている働き人と
183 015 安全に養われているその家族たちだ
183 018 若い証券マンが一人で物思いに耽っている
184 009 現在カリフォルニアに住んでいる
184 014 たいへん誇りにしている彼女は
184 018 わたしの家（マイ・ハウス）といったりしている
184 020 「なるようにしかならない」と言っているが
184 026 いま地球は恐怖で頭をかかえているのに。
185 026 最も深く嘆いている者にとっても。
186 036 「見ていた」か「見ている」かでずいぶんちがうけど……
186 044 （どの車輛にでも乗っている可能性があった）
186 054 ぼくは無意識のうちに隠れ場所をさがしている
186 056 それなのに、みんなが整列して中央に一つだけ空いている椅子
186 059 いったい何を怖れているんです？
186 077 その精髄を秘めている
186 082 死を含む共同体であるみんなの声に耳を傾けていると
188 002 こんな文面があったのを憶えているだろうか。
188 024 両のこぶしで、眼をおさえている光景、
188 025 私の最近の心境をよく伝えているといえましょう」
188 034 その間、昔の仲間が、三人死んでいる。
188 036 いずれ、順番がくるだろうと思いながら暮しているが、
188 060 高校によっては、死についての教育もなされているようです。
188 067 ずいぶん起っているらしいです」と書いていたが、
188 073 四年遅れのこの返信が、四年前のそれと、どう違っているかを、
188 076 ひとしきり烈しくなり、深夜の屋根を叩いている。
188 084 日本の重文とされている民家への憧れが、
189 024 高い場所に住んでいる
189 026 空の海が真赤に煮えたぎっているのを
191 004 心のなかで鳴っているのだ
191 008 生きている自然のしるしに
191 016 眠っているひとを目覚めさせるため。
192 002 どんな現象も起りようがなく、わたくしの影は、孤独とはいえなくなっているから、
192 003 うつむいて、歩いているところは、一木一草もない、黒い砂地で、
192 004 夜明け前の微光があたりをくまなく覆っていて、どこへ行こうとしているのか、
192 008 わたくし、とは誰だったのだろう？　歩行の方向をきめている海の

192 010 どこまで行っても、一本の松にも出遭わず、平坦な黒い砂地がつづいているばかりで、
192 016 震えている足許に眼をおとすと、白い四角の標識に、明りが仄かにともっていて、
192 017 よくよく見れば、そこから一米間隔くらいで、白い明りが点々とつづいているのだ。迷う者のために設けられた救急
193 024 ときわの首都は世界の影を映している

いるい 衣類
029 004 疲れた衣類は脱ぎすてられ
041 126 人々の衣類に附着し
167 049 塵埃のように書籍を衣類を調度類を

いろ
021 005 金いろの羽毛を日に光らせた
026 029 銀いろの鍵を投げると
029 017 樹樹のいろが肖像を作った
037 014 灰いろの遠い空をながめてゐた
051 014 午後四時の黄いろい太陽
058 025 灰いろの建物のしたを孤独な靴音が
061 147 あなたの褪せた追憶の頬に、かすかに血のいろが浮ぶ。
081 001 海の灰いろも
081 002 空の灰いろも
081 025 灰いろの海と
081 026 灰いろの空があって
112 020 緑いろの歯ミガキにすこし血のまじった唾を吐いた

いろ 色
002 014 灰色の鳥をまってゐる
003 010 海の景色はこんなに暗い青でせうか
007 004 煤けた町は古い習慣で壺の沈黙を それはいつまでも黄色い河の
008 011 クビれてむらさき色になると 煙のつまったパイプを
008 013 群は 雲に乗って押しよせ 黄色く汚れた地図の上を
009 008 薔薇色の頬に葉脈が透けてくる
009 010 褐色の皮膚の下に樹液は涸れてゐる
010 011 銀色のパイプで穹を覗いた
016 001 レモン色の朝焼だ
020 002 バラ色の手に名刺が
020 008 バラ色のそれは
023 020 澄んだ褐色の眼を出はいりする憎悪の炎よ
025 024 金色の器の中に
025 042 菫色の手袋は
028 022 そのとけやすい肢體を眠らせる飴色の午後の
030 029 色彩のなかの緑を
030 031 だからみどり色の白さと言ってもよい
039 077 やはり草の色は

039 124 かれらの葡萄色の頬を打て
049 004 色あせた壁の中には
051 009 「この男の顔色は……」
051 010 「黄色さ」医師の事もなげな宣告。
051 026 「そいつは黄色だ　まるであの穢らわしい魂のように」
053 006 みんな灰色の壁にぬりこめられてしまって
054 031 そこにはどんなリズムが　色彩が
055 025 灰色の壁のように垂れてきて
061 067 あなたは灰色の街のなかに帰ってきた。
068 010 青洟色の海
073 009 よく晴れた五色の空を映していた
074 013 三色旗をつけた巨船のうえにあるものは
082 001 六月は水色の噇
084 027 その黒い唇　その褐色の髪
096 005 きみは賢者の砂色の眼で
096 014 ぼくらを昏倒させる原色はなんだろう？
096 015 文明色なら　もう古くなった三十年代流行のセダンの
096 016 アラビアの砂色ということになるのかな
101 034 かわいたとび色の風のなかで
104 001 金色の翼もなければ　風の鬣（たてがみ）もないのに
106 015 バラ色の頬はあせても　不幸な五十七人がそろって
109 006 黄昏の寒い灰色の
111 005 暮れのこる灰色の道が
122 005 なま牡蛎色に濡れた遠景のなかを
127 023 黄ろいタンポポを黄色にしたものが
133 009 行きあう顔色の底の底までわかって
137 001 入日の色がほんのりと
144 005 うらみの色は深い
145 004 はいるとつぶやきながら黒い色の真実やめったに売れないエンジェルの絵を売っていた」
145 005 芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右
145 010 とエンジェルと同じ肌色の奥まで開拓して見せていた
145 011 「忘れはしないという虹色のラヴ　ソングが聞えていた
146 022 金色の聖像におおぜいの人が
152 016 冷たい水色のけむりが立ちのぼる
154 007 悲しみの音色にさそわれ
160 007 恋人と会っては　窓外のすがれた景色に視線をそらして
166 022 ごった返す店内を物色して歩きながら
181 030 さっと顔色を青くする
183 006 ことのほか色鮮やかで明るく
189 030 色は青いが新鮮でない野菜
191 010 あられもなく血の色にそめて
193 012 半世紀は車窓の景色であった

いろあざやか　色鮮やか
183　006　ことのほか色鮮やかで明るく

いろあせた　色あせた
049　004　色あせた壁の中には

いわ　岩
025　008　海は黒く岩壁は白かった
041　038　あの汚れた貝殻　岩に砕ける憎悪の波よ
062　053　岩壁へかえる鴎のなき声が
065　015　そこに、あたらしい岩山が出現するまで
086　005　おのれの姿を砕けた岩のうえにみつけだす
143　012　岩床につくばうあさましさを思う……
148　055　岩や空や、波や砂や、花の香りのする一日、
154　008　苔むす岩間に白い滝を忘れてきた

いわま　岩間
154　008　苔むす岩間に白い滝を忘れてきた

いわやま　岩山
065　015　そこに、あたらしい岩山が出現するまで

いわゆる
142　095　すでに現実に存在していて　いわゆる階級構造とは全く無縁な

いわれのない
079　023　いわれのない恐怖にあって

いんうつな　陰鬱な
024　004　けてゐる　寝床に散らばった怠惰な骨の中から　陰鬱な眼球

いんきな　陰気な
160　025　哲学的な詩をひどく陰気な声で吟誦する

インク
085　025　インクや涙や食塩で錆びたりしない

いんけんな　陰険な
189　001　陰険な勝者は

いんこう　咽喉
041　080　純潔な空気が咽喉を塞ぎ　見えない量に苛まれて
052　006　ほそい咽喉に流しこんでいる姉さん！

055　062　頸輪ずれしたおれの咽喉につめたい剃刀をあてる
074　024　ぼくらの細い咽喉にあてたまま
101　053　歌う者のいない咽喉と　主権者のいない胸との
169　006　咽喉につかえた一語は

いんさつ　印刷
028　025　新らしい印刷術とパルプにより
160　033　印刷の不備でくじに外れた老楽師に　大当りの賞金を全部やってしまう

いんさつじゅつ　印刷術
028　025　新らしい印刷術とパルプにより

いんしょう　印象
186　020　それで今度の西下の印象は？

いんたいした　引退した
147　014　オーバーウェイトで引退したボクサーみたいに

いんばいふ　淫売婦
061　119　淫売婦には浅瀬ほどにも見えなかったりするのだ

ヴァイオリン
014　008　ヴァイオリンがセロの声で歌ったら
084　001　かれはヴァイオリン弾きです
084　006　あの木枯のヴァイオリン弾きは
084　034　それでも　かれはヴァイオリン弾き

ヴァイオリン弾き
084　001　かれはヴァイオリン弾きです
084　006　あの木枯のヴァイオリン弾きは
084　034　それでも　かれはヴァイオリン弾き

ヴィジョン
125　023　地獄のヴィジョンのうえで安眠できる老人は
188　081　これから、どんなヴィジョンを与えたらいいのか、

ウィスキー
057　001　ウィスキーのレッテルには
093　004　本と煙草とウィスキーの瓶をかかえて
093　008　寝床でウィスキーを飲み煙草をふかす

ウイット
005　025　虹のあるウイットな会話は

ヴィヨン
092　014　大ヴィヨンには

ウインストン
054　064　ウインストンがいなくなったから

うえ
050　006　ぼくらは暗い酒場の椅子のうえで、
051　019　寝台のうえに倒れ、死んだ真似をして
053　015　わたしは大切に胸のうえにさげています
054　018　死ぬことからとりのこされた僕たちのうえに
054　023　艀船がじっと水のうえで考えごとをしていたっけ
054　149　テーブルのうえに
055　042　猫背のうえに乗せて
056　008　昨日のように空は濁った河のうえにある
058　002　瓦礫のうえに材木が組立てられ
059　009　わたしの机のうえの一枚の写真も
060　019　悲しみにあおざめた額のうえに
061　003　汗と油の溝渠のうえに、
061　017　いつか遠く橋のうえにやってきた。
065　007　高い絲杉のうえで、月は
067　001　陸橋のうえから
067　005　さっき波のうえをすべっていた魚が
073　014　静かに凪いだ墓地のうえを
074　013　三色旗をつけた巨船のうえにあるものは
077　038　そのうえに低い祈りの声と
079　002　黒い海のうえを走っている
080　010　夕陽の血が波のうえにしたたりおちて
082　009　破風のうえに雲があらわれてまた消えた
083　001　夏草のうえの屋根が
086　001　つめたい鏡のうえを吹く
086　005　おのれの姿を砕けた岩のうえにみつけだす
088　005　ぼくの頭の木のうえに駈けのぼったりする
088　026　椅子のうえで寒さにふるえているぼくの手足を
089　005　橋のうえで　石の手すりにもたれ
093　025　乱れたシーツのうえに
098　017　飲み台のうえのウェイトレスの手は
099　004　太陽が緑の絵具をとかしている芝草のうえを
100　002　人影にまじって　新聞紙のうえをあるいてゆく
125　023　地獄のヴィジョンのうえで安眠できる老人は
126　012　月のうえをふわふわ歩く宇宙の子供を見ようとして
147　008　死と生が秤のうえでゆれながら均合っていた

152 026 箱型のそれを机のうえに立ててごらん
157 001 石棺のうえに
167 065 ああ　丘のうえの廃屋よ
170 001 原稿紙のうえには
170 020 このうえなく新鮮で魅力的だ
179 001 粗末な食卓のうえに
188 046 時には、道徳や、宗教の立派な代理になるうえに、

うえ　上
004 002 机の上は　すでに白い雪である
004 009 時計が霜の花の上で鳴くと
005 013 白いちぶさの傾斜地をかけ上れ
007 016 あ見給へ　昏の河の上を歯を剥いた白馬が乱れるではないか
008 005 ジライ花を観賞するときも　空にはポンポン花火が上
008 013 群は　雲に乗って押しよせ　黄色く汚れた地図の上を
009 001 コンクリイトの屋根の上
013 010 肩の上でペロペロする
013 018 上衣と帽子を失敬する
015 020 白い砂漠の上に住んでゐる
017 004 樹の上では祭典が始められ
017 036 沙漠の唄が樹の上でも流行し
018 005 乾いた砂の上に
019 004 デスクの上に植ゑてみたが
024 001 ふせた耳の上でふと風が鳴る　くずおれた月光の雫に溺れ
024 003 る　血液を噴き上げている白い管は輝やける噴水の愛撫をう
025 002 星の光をめざして噴き上り
026 035 悲しむでもよい暗い甃石の上には
027 020 椅子は書籍の上に乗ってゐる
028 009 哀訴の蒸気を吸殻とともに皿の上に拾てる三重の硝子の向ふの鐵格子の中の
028 016 熱度計の上昇につれて
031 006 いつかのやうに凍りついた道路の上で
033 004 上品な耳のうしろで
033 011 殺気だけが風の如く起ち上り
033 015 小さな宇宙の平面の上に残された
034 002 乾いた椅子の上の
035 003 おまへたちの舌の上へやってくる
036 003 乾燥した粘土の上に風だけの虚しさが
038 006 地上を掠める光と
038 007 多くの影の上で顫へてゐる
039 079 かつて地上に祭があったといふ
040 013 濡れた新聞紙の上に蹲まる
041 019 あの陸橋の上を
041 040 何とはなしに陸橋の上まで打寄せてくる

041 051 新聞紙の上を歩いてゆく　固い心をもち
041 091 息はたえ　冷たいアスファルトの上に落ち
045 010 畳の上に　水平に做って横たはり
046 002 澄みたる空に影をもつ　橋上の人よ
046 009 花火をみてゐる橋上の人よ
046 012 とほく橋の上へやってきた
046 015 あなたはとほい橋の上で　白昼の花火を仰いでゐる
046 016 渇いたこころの橋上の人よ
046 022 夢みる橋上の人よ
046 027 熱い額の　橋上の人よ
046 037 うるんだ瞳の橋上の人よ
046 043 しかし橋上の人よ
046 051 橋上の人よ　美の終局には
046 056 橋上の人よ
047 008 頭上で屋根を剥ぐ不気味な爪の音……
051 016 下降　そして不吉な上昇カーブ
051 029 これ以上血を流すからには
051 034 そしてじりじりと胸の上に倒れかかってくる。
053 039 狂おしく地上にかえってゆく
054 026 黒い犬が橋の上にうずくまっていたのを」
054 034 今でも僕は橋の上にたつと
054 110 詩人は欠伸をかみころして立上る
054 158 きちんとチョッキをつけ上衣を着て
056 012 とおいビルの屋上で
057 023 夕日があかあかと上衣の肩をそめ
061 002 澄みきった空の橋上の人よ、
061 011 橋上の人よ、あなたは
061 045 橋上の人よ
061 050 橋上の人よ
061 055 橋上の人よ
061 060 橋上の人よ
061 065 橋上の人よ
061 070 橋上の人よ
061 075 橋上の人よ
061 129 野に池をつくり　地上に溢れ
061 135 父母や妹　またあなたの至上の友たちに」
061 143 蒼ざめた橋上の人よ、
061 152 孤独な橋上の人よ、
061 154 あなた自身が見すてられた天上の星であることを……
061 160 橋上の人よ、
061 164 そして濡れた藻と青銅の額の上に、
061 195 橋の上に佇みながら、
061 201 橋上の人よ、

061 208 橋上の人よ、
061 218 橋上の人よ、
061 221 運河の上にも灯がついた、
061 222 おびただしい灯の窓が、高架線の上を走ってゆく。
061 229 橋上の人よ。
064 024 石の屋根の上には重たい雲が垂れこめていた。
073 028 メコン河の上流へと
081 015 炎上していた
082 007 くずれた崖の上にも
084 022 いともお上品な天使たちが
084 038 かれにかわって上手にすすり泣くのですよ
085 028 いつも刃を上にむけている親切な男だ
089 030 橋の上には
091 011 新聞社の屋上たかく舞っている伝書鳩の
095 018 ゴーゴーゴーとぼくの頭上を通過していった
100 077 ぼくの空はそのままきみの地上となっている
101 051 頭上で枯れ枝がうごき　つめたい空気にふれるたびに
103 001 どうして地上の掟はやぶれたか
106 010 第一列の中央に　いやな上眼づかいのかれがいて
108 026 馬上の人も白髪となる
116 007 よりそって　晩秋の路上に
126 010 地上の何億という眼は
128 024 「円の切上げより自由化が先」
129 003 地上の物音はきこえない
129 007 雲の上までつき出ていった虚栄
129 016 ひとけのない屋上プールと
140 003 地上には
142 018 それで監獄は　四倍以上も暗く
142 120 　これ以上は一歩も進ませないそ　と宣言する不屈な人間の精神のみがー
145 001 「至上のトーモロコシの毛がアゴにもある長髪の若者が
145 005 芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右
145 021 膝の上の猫を大事にしてあげなさいと今日の声は忠告していた
148 046 もうこれ以上、滅ることのない戦友の、
151 031 世上がたりに打明ければ
152 006 かるく水につけて上から吹く
155 030 一日を上手に処理する
165 011 何度、声にならない叫びを上げたろう
165 015 これ以上、理不尽な感情があるだろうか
165 022 これ以上、合理的な感情があるだろうか
169 009 難破する船上の人のように
170 014 蓮の葉の上に大きな露の玉が乗っていて
170 018 蓮の葉の上をかりの宿として
174 013 お互いの相違点を数え上げるのはたやすいが

176　024　これ以上まぶしい裸にはなれないのだ
177　011　月あかりに見上げる
180　058　上に行くしかないってことか
182　015　ごろりと草の上に横になればよかった
186　027　廿六年前に広島で撮った写真を、懇親会の席上で相良君から見せられてね
189　022　自己を否定するたびに上昇をつづけて

ウェイトレス
058　054　一人の若いウェイトレスが
098　017　飲み台のうえのウェイトレスの手は

うえき　植木
182　007　世話をする植木までひねくれる

うえた　飢えた
052　013　情慾に飢えたわたしの魂をやさしく愛撫する
172　025　血に飢えた孤独を増殖させて

うえて　飢えて
091　014　きみの季節は飼主のない猟犬のように飢えている
169　013　飢えて痩せた魂は

うえで　上で
004　009　時計が霜の花の上で鳴くと
013　010　肩の上でペロペロする
017　004　樹の上では祭典が始められ
017　036　沙漠の唄が樹の上でも流行し
024　001　ふせた耳の上でふと風が鳴る　くずおれた月光の雫に溺れ
031　006　いつかのやうに凍りついた道路の上で
038　007　多くの影の上で顫へてゐる
046　015　あなたはとほい橋の上で　白昼の花火を仰いでゐる
047　008　頭上で屋根を剥ぐ不気味な爪の音……
056　012　とおいビルの屋上で
101　051　頭上で枯れ枝がうごき　つめたい空気にふれるたびに
186　027　廿六年前に広島で撮った写真を、懇親会の席上で相良君から見せられてね

うえて　植ゑて
019　004　デスクの上に植ゑてみたが

うえに　上に
015　020　白い砂漠の上に住んでゐる
018　005　乾いた砂の上に
019　004　デスクの上に植ゑてみたが

026　035　悲しむでもよい暗い甃石の上には
027　020　椅子は書籍の上に乗ってゐる
028　009　哀訴の蒸気を吸殻とともに皿の上に拾てる三重の硝子の向ふの鐵格子の中の
033　015　小さな宇宙の平面の上に残された
036　003　乾燥した粘土の上に風だけの虚しさが
039　079　かつて地上に祭があったといふ
040　013　濡れた新聞紙の上に蹲まる
041　091　息はたえ　冷たいアスファルトの上に落ち
045　010　畳の上に　水平に做って横たはり
051　034　そしてじりじりと胸の上に倒れかかってくる。
053　039　狂おしく地上にかえってゆく
054　026　黒い犬が橋の上にうずくまっていたのを」
054　034　今でも僕は橋の上にたつと
061　129　野に池をつくり　地上に溢れ
061　164　そして濡れた藻と青銅の額の上に、
061　195　橋の上に佇みながら、
061　221　運河の上にも灯がついた、
064　024　石の屋根の上には重たい雲が垂れこめていた。
082　007　くずれた崖の上にも
085　028　いつも刃を上にむけている親切な男だ
089　030　橋の上には
116　007　よりそって　晩秋の路上に
140　003　地上には
145　005　芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右
170　014　蓮の葉の上に大きな露の玉が乗っていて
180　058　上に行くしかないってことか
182　015　ごろりと草の上に横になればよかった

ヴェニス
103　014　ヴェニスとかパリーへ出かける

ヴェニュス
005　015　ヴェニュスの胸は穹より広いヴェニュスの胸は穹より広い

うかがい
106　011　外部の世界をうかがい　いまもじっと「時」をこらえ

うかがっている　窺ってゐる
001　013　月の窓を窺ってゐる

うかつ
158　003　うかつにも

うかつ　迂闊
036　029　迂闊にも醜悪な街の溝の中へ
192　014　薄暮と昧爽とをとりちがえていた迂闊さに、狼狽するも間なく、巨大な生きものの胎内にのみこまれるように、

うかつさ　迂闊さ
192　014　薄暮と昧爽とをとりちがえていた迂闊さに、狼狽するも間なく、巨大な生きものの胎内にのみこまれるように、

うかびあがって　浮びあがって
100　045　すこしずつ浮びあがってきた街のなかへ

うかぶ
052　002　忘れがたい悲しみの面影がうかぶとき

うかべ
036　022　一枚の布をうかべて憩ふとき
042　017　ひろい頬ゑみをうかべてあなたはたつ
055　019　青い海のなかに二人の運命をうかべているはずであった
057　015　ある日　ボートを水にうかべ
063　029　ぼくたちは汚れを知らぬ微笑をうかべる
070　012　悲しみの水面にうかべて、
070　061　血の涙をうかべているのは。
080　003　海は太陽や雲をうかべていた
085　016　銀メッキの光りをうかべた不敵な男だ
089　010　凍ってゆく水に影をうかべていました
094　013　会ったことのない人たちのことを思いうかべているもの
140　021　コカコーラの汗をうかべ

うかべて
036　022　一枚の布をうかべて憩ふとき
042　017　ひろい頬ゑみをうかべてあなたはたつ
055　019　青い海のなかに二人の運命をうかべているはずであった
070　012　悲しみの水面にうかべて、
070　061　血の涙をうかべているのは。
080　003　海は太陽や雲をうかべていた
089　010　凍ってゆく水に影をうかべていました
094　013　会ったことのない人たちのことを思いうかべているもの

うかべて　浮べて
046　040　行方の知れぬ風のことばにいつまでも微笑を浮べてゐようとは
055　046　おまえは愚劣な謎をふくんだ微笑を浮べてみせる
167　010　薄絹を裂いた巻雲を浮べて

うかんだ

061　049　あなたの心にうかんだ道のすべてだった。
061　054　あなたの宙にうかんだ道のすべてだった。
081　006　宙にうかんだ夢魔の城

うかんで
059　021　海岸への道が不思議と宙にうかんでくる

うかんで　浮かんで
021　011　花が浮かんで噴水をかむった

うかんで　浮んで
075　010　いつまでもブイが浮んでいるけれど
079　009　なお何も浮んでこないところ
130　003　河原にほの白く浮んでいる

うかんでいる　浮んでいる
075　010　いつまでもブイが浮んでいるけれど
130　003　河原にほの白く浮んでいる

うきよ　浮世
160　043　みじめな浮世の悲しみを！

うく
094　006　ぼきぼき葦は折れて水垢のうく岸辺
094　022　ああ　太陽は全身にものうく

うけいれ　受け入れ
142　072　卑劣さを代償とした自由を受け入れようとはしないで

うけとった
068　002　気がかりな便りをうけとった

うけとめて　受けとめて
081　020　生身で受けとめているのは兵士ではない

うけとる　受けとる
077　008　永遠に受けとることのない

うごいていない　動いてゐない
030　014　動いてゐない動物たちが

うごいている　動いてゐる
011　009　どうかすると沢山人間が動いてゐる

028　038　当りまへに動いてゐる摂理の

うごかない　動かない
007　006　古風な鐘は藍をにじませて鳴る　曇る　動かない土絵具のカンヴ
040　014　すべての車輛は動かない
069　029　動かない顔がある
069　032　動かないベッドがある
097　004　しかし雨を描いた動かない斜線は、
098　018　さっきからすこしも動かない
190　015　動かない山懐につつまれて

うごかなく　動かなく
054　053　手を下すと　人形のように動かなくなる

うごかぬ　動かぬ
047　014　古風な銀の縁をつけて　いつもこの水が動かぬことを……
100　063　高いビルディングは動かぬ影をつくり
186　058　（動かぬ証拠の記念撮影）

うごき　動き
027　004　手袋をはめた右手のみが動き
031　013　静止してゐたものが動き出したとき
054　108　そしてやがて獣のようになる歯並みの悪い唇の動きが
165　003　ゆっくり食物を咀嚼する口の動き
189　031　皺の手がのろのろ動き

うごきだした　動き出した
031　013　静止してゐたものが動き出したとき

うごく
026　005　動物たちの角がうごく
052　020　あなたの未来の時計の振子がうごくのをまえにして

うごく　動く
025　022　動くこともない顔を彫り
070　025　この動く格子のなかから
108　015　存在はすべてある終りに向って動く

うごけなく　動けなく
041　079　坐席があなたを動けなくした

うさぎ　兎
088　002　おまえは仔兎のように

136　019　草の葉も兎の耳も

うしなった
080　006　戦いによって　両手をうしなったきみは

うしなった　失った
050　014　きみを見失ったのか忘れてしまったよ。
059　017　美しい少年を失った母が
061　159　持てる一切のものを失った。
116　006　未来を失ったぼくの苦しみが
117　009　失ったものへの愛のほかに
150　046　「誇り得るもの」を失ったとさとったとき、彼はこの世から転向していったのだ。
170　006　明るんだ窓に光を失った電燈を消し

うしなって　失って
041　092　小さな影のなかで血の気を失ってしまふだらう
041　138　あなたの指はまだ感覚を失ってはゐない
170　021　（見えないところで自然は豊かさを失っていない

うしなってしまう　失ってしまふ
041　092　小さな影のなかで血の気を失ってしまふだらう

うしなわれた　失われた
080　020　きみはきみの失われた両手を高くあげる……）
102　023　高くのぼってついに失われた空のように
166　004　失われたものと現在あるものの中間で
170　027　失われた均衡を悼んで

うじむし　蛆虫
074　019　いかにして黒い蛆虫が這いずってゆくかを

うしろ
016　014　フラスコのうしろでピカピカする
025　005　松が老いてゆく錨のうしろに
030　017　水平線はまへに地平線はうしろに
033　004　上品な耳のうしろで
058　047　ひとびとのうしろに行列をして夕刊を買い
061　047　あなたはうしろをふりかえらなかった、
061　052　あなたはうしろをふりかえらなかった、
062　040　黒い森のうしろから
062　050　黒い森のうしろにいて
062　062　黒い森のうしろにいて
089　040　うしろ姿の街角から

098 001 カウンターのうしろで
117 006 太陽は高い建物のうしろにかくれ
133 011 おびえた窓枠のかげシャッターのうしろ
146 043 うしろからコツコツと近づいてくる
155 002 うしろへ
155 014 両手でつかんでうしろにやってしまえば
155 024 精力的にうしろへ押しやっていく
159 012 まだまだ幼い母のうしろ姿は襖の蔭に

うしろに
025 005 松が老いてゆく錨のうしろに
030 017 水平線はまへに地平線はうしろに
058 047 ひとびとのうしろに行列をして夕刊を買い
062 050 黒い森のうしろにいて
062 062 黒い森のうしろにいて
117 006 太陽は高い建物のうしろにかくれ
155 014 両手でつかんでうしろにやってしまえば

うず 渦
035 021 風の五つの渦の中へきえてゆく
060 020 たとえば小さな捲毛の渦をみつけるような！
061 151 同じ迷宮の白い渦のなかに消えてゆく。
068 025 明るい笑いの渦をのこし
094 019 この苦渋にみちた河口の渦に閉じることになろう

うすあかり 薄明り
025 021 室内には薄明りのランタンが

うすい
014 011 うすい陽の光が胃の腑へさしこんでくる

うすい 薄い
112 021 薄いネクタイでうやうやしく喉頸をしめ
147 012 生きることに怖れも困難も感じない髪の毛の薄い男になっていた

うすきみわるい 薄気味わるい
150 041 今にしておもえば、真実を衝いた薄気味わるい言葉である。

うすく
048 010 うすく瞼をとじている憂鬱

うすくなった 薄くなった
017 017 と悪い唇が耳の傍で薄くなったので

うずくまっていた
054　026　黒い犬が橋の上にうずくまっていたのを」

うずくまっている
055　010　巨大な黒い影が波止場にうずくまっている

うすぐらい　薄暗い
046　014　もとの薄暗い樹の枝に追ひかへし
061　083　おまえは薄暗い多孔質の宇宙だ

うすぐらく　薄暗く
179　006　あたりは薄暗くなりかけていたが

うすむらさき
181　002　うすむらさきの

うすれた
108　013　うすれた陽のしたで

うすれて
059　010　今ではなつかしい面影のようにうすれてしまった

うすれゆく
048　022　うすれゆく年々の冬のきびしい日の下で……

うすわらい　薄笑い
054　074　詩人は不敵な薄笑いをもらし

うす暗い
014　028　楽器のうす暗い腹の中に沈黙が

うす暗き
043　012　日はゆき　うす暗きとばりの中に

うす青い
098　016　うす青いけむりがゆっくり立ちのぼる

うず潮
103　029　惨劇のおわりにはうず潮がひとつ

うす呆けて
041　077　うす呆けてゐれば　習慣となった苦痛も

うす緑
072　007　うす緑の大地、美しいカーヴを描く競走路をみたまえ

うそ
180　037　ほんとのようなうそになるが
180　051　たね。しかしそれはそうそうあるものじゃない。違うものの方が圧倒的に多いー。では、さよならK.I.

うそ　嘘
135　002　純粋で新鮮な嘘となれ
164　018　嘘つき！　詩人の資格なし！
172　007　ほんとが嘘になるのに

うそつき　嘘つき
164　018　嘘つき！　詩人の資格なし！

うた　唄
015　013　昨年の唄であらうかもう見えない
017　036　沙漠の唄が樹の上でも流行し
094　010　飛んでいる鳶や網をひく漁夫の唄で
100　033　かろやかな鼻唄のリズムで歩きもしたろう
120　018　子守唄のよう
149　003　舟唄のたよりなさ

うた　歌
014　008　ヴァイオリンがセロの声で歌ったら
039　148　炎と心の伝説を歌ひ
041　041　夜どほし歌ってゐるな　寒い眩暈のなかで
041　085　あの鳥は嗄れた声で歌ってゐる
057　043　大挙して街中でなつかしい歌をうたっている
061　024　酔いどれ水夫が歌っていた。
061　032　狂える女が歌っていた。
061　040　青白いサラリーマンが歌っていた。
064　010　やくざなブラス・バンドが歌っていた。
065　031　暴風の夜を飛んでいった。哀歌をうたいながら
068　012　高い岸壁から　歌ったあの
082　016　それから沈黙が歌いはじめるーー
084　004　かれのかわりに歌ってくれるのですよ
088　045　歌わぬ梢
088　074　どこまでもつづく愛の歌で
088　077　さあ歌ってゆこう
088　079　大きな声でうたうぼくたちの歌に
088　082　高い梢で一緒に歌っている人たちが

088　084　さあ歌ってゆこう
101　053　歌う者のいない咽喉と　主権者のいない胸との
102　001　おれが古いいくさの歌をうたったら
102　005　おれが古いいくさの歌をうたったら
102　009　おれが古いいくさの歌をうたったら
104　011　わたしの血汐は　もう歌おうとしない
105　014　悲歌の季節は記憶にあたらしく、
107　007　歌のうたえる心を売り
112　038　たぶん時代がわるいんだろうと異口同音に歌う
119　014　わたしの歌のおわるまで
124　004　仲間も涙も校歌も国家も売り足りないが
124　023　歌舞伎町でスロット・マシーンにしがみつき
133　001　歌のはじめには開かれた理由がある
135　001　生活とか歌にちぢこまってしまわぬ
145　014　有りもしない幸福の歌がいつものように響いていた
182　017　星座の歌に耳を傾けていると
187　022　くり返しの多いきみの歌が

うたい
065　031　暴風の夜を飛んでいった。哀歌をうたいながら
102　011　うたいながら破壊する若い勇士たちが

うたう　歌う
101　053　歌う者のいない咽喉と　主権者のいない胸との
112　038　たぶん時代がわるいんだろうと異口同音に歌う

うたがい　疑い
054　065　いまこそそこに疑いの余地があるから
113　022　疑いはあっても
113　024　答えよりも大きな疑いはなかったから

うたがう　疑う
061　139　あなたは疑うだろうか？

うたった　歌った
014　008　ヴァイオリンがセロの声で歌ったら
068　012　高い岸壁から　歌ったあの

うたっている　歌ってゐる
041　041　夜どほし歌ってゐるな　寒い眩暈のなかで
041　085　あの鳥は嗄れた声で歌ってゐる

うたひ　歌ひ

039　148　炎と心の伝説を歌ひ

うたれてゆく　打たれてゆく
039　091　廃墟の杭は打たれてゆく

うたれる
061　063　風に吹かれ、浪にうたれる漂泊の旅から、

うち
014　007　ジロリジロリ眺めてゐるうちに
014　015　けれど燃えないうちに水がはいったよ
029　007　型も持たぬ生活のうちに
039　061　永遠よりみじかい時間のうちに
039　131　一瞬のうちに
041　010　社交術があなたを涸れさせたり育てたりしないうちに
041　099　むかしの世紀がまだ寝床に就かぬうちは
054　161　なにげない挨拶のうちから生れる未知の国民のことを……
057　035　暗い夜明けのうちに倒れなければならぬ
058　043　私はかるい舌うちをしました
065　021　告げなさい。レエテ河の水を飲まぬうちに
065　022　罪の記憶のうせぬうちに」やがて
068　007　夏のうちに　海岸へゆくことにしよう
068　019　空中に軽い死の飛沫をうちあげ
071　040　風よ吹け　われらの罪の消えぬうちに！
075　002　小さな波をうちあげて
076　019　きみの青白い身体はみるみるうちに
078　012　ながい月日もまたたくうちに過ぎさる
100　027　ああ　それが何の「はじめ」かわからぬうちに
101　038　奥地や海洋で　抵抗する住民をうちころす必要はない
106　044　すべての生きもののうちで　最も強くてしなやかな骨だ
133　019　耳うちするあやしき男から
142　017　（四つの窓のうち三つが閉じられたままである）
150　028　二十人ほどいた仲間のうちで、現在、
160　003　気がつかないうちに　私もまた
167　015　忍べないほどではないと思っているうちに
167　057　人くさい息が充満しているうちは
175　008　一生かけて見つけないうちに
177　018　梢のほそい技をうち鳴して
180　014　生意気も芸のうちで
181　026　みるみるうちにあたりが暗くなって
182　026　老いのうちにも新しい命の水が
186　054　ぼくは無意識のうちに隠れ場所をさがしている
186　066　空間が空間であるうちは物の集合にすぎないから

188 017 眼は、そのうちに、片眼ずつ、
188 065 そのうちにコピーを送りましょう。
192 023 七十米と行かぬうちに、白い明りの標識は消え、そこから先は真っ暗である。

うち 打ち
046 008 櫂で虚を打ちながら 必死に進む舳の方位を
061 009 櫂で虚空を打ちながら、
065 035 感覚の闇を照らした。樹々が小枝を打ちならし
093 019 たえまなく打ちよせる多彩な波にすぎないことがわかり
094 024 遠く近くハイネズの原に打ちよせるのはアフリカを白くする波だ
149 011 波からも打ちよせてくる
174 026 いまでも下手な碁打ちであるぼくは考える

うち 内
006 003 爆発したセロイドの匂が 室内を明るくした 青い
014 031 室内を飛びはじめる
015 002 室内を青く洗ってゐる
018 014 音楽が室内に溢れてくる
018 016 内部から燃え始める
021 025 室内のガラスを濡らす
025 018 燃えあがる世界の窓の内部から
025 021 室内には薄明りのランタンが
027 009 室内からは
028 005 白い事務所の内側の時計の速度は
030 010 内のみの肉に
031 016 室内の凹みから
037 006 そしてドアの内には
039 122 あなたの暗い内側で
041 024 なるほどあなたの剥製の体内から聞える
046 045 内部を刻む時計の音に 蒼ざめた河のこの沈黙はつきまとひ
048 016 内部からのひかりをひそかに愛撫している
051 017 内と外と 高鳴る波の響を聴け！
054 080 衣裳と装身具の内側に 化粧のゆきとどいた顔の下に
061 209 あなたの内にも、
061 213 あなたの内にも、
061 225 あなたの内にも、あなたの外にも灯がともり、
073 026 毛脛を出したフランス人の水先案内は
081 016 ぼくらはすでにこの歴史の内では死んだ者
087 007 そらとぼけた白内障の目をむき
100 042 たえまなく出血している内部の世界で
106 006 「笑うなかれ」 悲しい内部の声である
106 022 さらにいっそう素晴しいのは鼻だろう 内なるオルガンの全神経が
136 012 洞窟の胎内のテロルの夢

145　025　スペイン内乱で知ったオーデンもいなくなった
145　028　オーデンはスペイン内乱に参加しなかったというニュースを聞いた
149　012　内なる人は融けていく
150　039　クラス委員にして落第生の竹内幹郎だった。
166　022　ごった返す店内を物色して歩きながら
180　010　「御手紙の内容、何のことやら判りません」なら「女の子の心理」がどうだってことも関係ないじゃないですか？
183　017　表の灯を消した株屋の店内では
186　024　昔の発車ベルの音が体内のどこかに残っていたんですよ！
188　005　白内障の眼を、なるべく休めるようにしていますから、
192　014　薄暮と昧爽とをとりちがえていた迂闊さに、狼狽するも間なく、巨大な生きものの胎内にのみこまれるように、

うちあげ
068　019　空中に軽い死の飛沫をうちあげ
075　002　小さな波をうちあげて

うちあげて
075　002　小さな波をうちあげて

うちあけれ　打明けれ
151　031　世上がたりに打明ければ

うちがわ　内側
028　005　白い事務所の内側の時計の速度は
039　122　あなたの暗い内側で
054　080　衣裳と装身具の内側に　化粧のゆきとどいた顔の下に

うちころす
101　038　奥地や海洋で　抵抗する住民をうちころす必要はない

うちならし　打ちならし
065　035　感覚の闇を照らした。樹々が小枝を打ちならし

うちなる　内なる
106　022　さらにいっそう素晴しいのは鼻だろう　内なるオルガンの全神経が
149　012　内なる人は融けていく

うちゅう　宇宙
033　015　小さな宇宙の平面の上に残された
061　083　おまえは薄暗い多孔質の宇宙だ
106　029　むやみに明るい星空があり　意味なく敏感な宇宙があり
126　012　月のうえをふわふわ歩く宇宙の子供を見ようとして
126　017　パスカルを畏怖させた宇宙の無限の沈黙とかは
182　018　沈黙は宇宙にこだまし

うちょうてん　有頂天
054　083　見よ　あばかれた社交術の快楽と有頂天とを

うちよせてくる　打寄せてくる
041　040　何とはなしに陸橋の上まで打寄せてくる

うちよせる　打ちよせる
093　019　たえまなく打ちよせる多彩な波にすぎないことがわかり
094　024　遠く近くハイネズの原に打ちよせるのはアフリカを白くする波だ

うっかり
017　045　うっかり舌もだせなかった

うつくしい　美しい
012　004　その美しい扉の文字は
029　013　美しい喚声にとり巻かれてゐた
036　007　白く美しい歯をもたぬから
039　083　美しい火災の意味を知るだらう
040　026　美しいあなたの皮膚や
059　001　見知らぬ美しい少年が
059　011　あの美しい少年は何処へいったか
059　017　美しい少年を失った母が
059　023　おもいみだれた母と美しい少年のボートが
059　028　波にさらわれた母と美しい少年を許せ！
062　013　いちばん美しい使いである姉さん！
068　006　海の光りは　美しい
072　007　うす緑の大地、美しいカーヴを描く競走路をみたまえ
077　033　この美しい兵士は
078　004　美しい朝であった
106　021　かれの指の爪貝は　恋人たちがしゃぶりたがるほど美しい
152　030　美しい炎をあげて燃えあがり
158　025　美しい風景になりたいという
158　034　北條や足利の美しい光景をすくってみせたときだろう
174　018　（きみが美しい奥さんと結婚して、みんなに羨まれながら、西荻窪のアパートに住んでいたときのことだ）
179　021　美しいグラスを手にして

うつくしかった
052　003　うつくしかった姉さん！

うつくしかった　美しかった
017　012　ダリヤよりも美しかったので

うつくしく
058　034　うつくしく欠伸をしている女がいます

うつくしく　美しく
035　014　だれもかれも美しくなって
053　059　美しく繊細で　やさしかったお姉さん！
090　013　巨木の五百年は美しくない

うつくしさ　美しさ
060　017　なんという美しさを見出すことだろう
177　026　その美しさに

うづくまり
035　013　静けさにうづくまり

うつして　映して
073　009　よく晴れた五色の空を映していた
193　024　ときわの首都は世界の影を映している

うつし身
176　030　うつし身への恥じらいに

うつす
085　003　きみの孤独をうつす鏡は

うつす　映す
165　033　世界を映す鏡に

うった　打った
174　017　ぼくはきみとたった一ぺん打った碁のことをときどき思い出していた。

うつって　映って
039　036　憑かれたかたちで映ってゐる
165　007　わたくしにはあさましく映っていて
165　034　何も映っていないときには

うつっている　映ってゐる
039　036　憑かれたかたちで映ってゐる

うって　打って
015　017　十二時を打っても

うって　売って

145　004　はいるとつぶやきながら黒い色の真実やめったに売れないエンジェルの絵を売っていた」
145　007　売ってはいけないものを売る深夜の

うっとり
039　015　考えただけでうっとりするのは
041　036　おびただしい暇潰しのなかでうっとりした
158　019　ぼくははうっとりと

うっとりした
041　036　おびただしい暇潰しのなかでうっとりした

うっとりと
158　019　ぼくははうっとりと

うつむいて
192　003　うつむいて、歩いているところは、一木一草もない、黒い砂地で、

うつむく
140　009　うつむく影

うつる　映る
061　134　浄らかな水に映る理想の伴侶に
083　020　ああ　虚心の鏡に映る
165　035　わたくしの顔が映るのである
180　007　障子に映る薄陽をむけて

うつろな
047　016　大きく見ひらいたうつろな眼の

うつろな　虚ろな
038　012　虚ろな跫音が

うつわ　器
005　010　古い楽器は花樹の下で
006　001　弾痕からシズクが落ちてるが　カレラは銃器を埋めて
014　003　頭の大きな楽器が目覚めたらしい
014　006　物ぐさな楽器たちはねころんで
014　014　二つの楽器が揃って火を呼び始めてね
014　025　貧血がくるとひとつづつ楽器は床に倒れた
014　028　楽器のうす暗い腹の中に沈黙が
025　024　金色の器の中に
028　008　受話器から突然噴き溢れたりする
028　031　すべての阿鼻が犇く武器であり

028 036 暗闇の市場へと運ばれてゆく武器たち
028 067 白い事務所の受話器が
028 072 すべてが歴史の容器の中にあるとは限らない
030 020 銀製の器にたべ物を
033 012 一個の器物と共にすべてが放擲された
039 020 楽器よりももっと柔らかにくねる
040 004 器物の底もひびわれて
054 132 無言で蓄音器のレコードが廻転する
070 051 あなたの五本の指はどんな兇器よりも残忍で、
087 006 じっと食器の底をみつめたまま
090 014 この支那の陶器のまわりの
136 007 凶器をにぎりしめ
136 024 計算器のまばたきをする

うて 打て
039 124 かれらの葡萄色の頬を打て

うで 腕
011 010 おんなの腕はやはらかく
048 003 腕のつけ根からはじまる
053 013 姉さんのかたみの水晶の腕輪がわたしの冷たい手錠で
063 005 ぼくの腕に倒れかかる
065 030 やわらかな髪を腕にまき、彼は
066 030 ワイシャツの袖をまくった腕であった。
165 028 わたくしは病み衰えた父の腕に

うでわ 腕輪
053 013 姉さんのかたみの水晶の腕輪がわたしの冷たい手錠で

うとまれて
160 069 エゴセントリックで報復的だったためか同僚にはうとまれていたらしい

うなずいた
147 003 ぼくは黙ってうなずいたであろう

うなずいて
062 055 あなたは黙ってうなずいているのですね

うなずく
159 008 目顔でさりげなくうなずく

うなだれた
043 015 弱い光でうなだれた神をむかへる

047　011　うなだれた水仙の賢しげな影を卓布に落す
167　059　うなだれた囚人の目尻には

うなだれて
041　052　うなだれて　あなたを待ってゐるバスに乗った
100　004　うなだれて　ぼくらを待っているバスに乗った
154　016　うなだれていると

うなづき　頷き
054　086　独身者はふかく自ら頷きながら

うなり
017　013　いいとこもあるねとうなり

ウニ
121　006　陸のウニはもうごめんだと逃げだそう

うねって
102　018　悔恨の波はどこまでもうねってゆけ

うねり
041　026　橋の下には　レールがうねり
046　033　濁れる水の地下のうねりこ耳を傾けつつ
048　026　やさしいうねりをもって
153　006　うねりくねっていく

うねりくねって
153　006　うねりくねっていく

うねりこ
046　033　濁れる水の地下のうねりこ耳を傾けつつ

うばう　奪ふ
039　041　奪ふものを

うばぐるま　乳母車
099　005　一人の妹は乳母車につかまって歩き

うばわれ　奪われ
156　032　すべてを奪われても文句を言えない
185　023　だが、愛する時間を奪われた

うばわれた　奪われた

185　023　だが、愛する時間を奪われた

うばわれて　奪はれて
039　042　奪はれて

うへ
034　017　水平の皿のうへ
035　008　白い床のうへに
035　027　瞑目した瞼のうへ
038　013　大理石のうへを辷ってゆく
043　010　白く凍った地図のうへを
042　012　ねむれる草のうへに
045　002　さっと青い畳のうへに来た
046　039　黒い水のうへを吹く
062　057　すこしずつ海のほうへ動いているのですよ

うま　馬
005　020　驢馬は駈ける
007　016　あ見給へ　昏の河の上を歯を剥いた白馬が乱れるではないか
072　003　いま評判のサラブレッド四歳馬を見ようとして
072　005　せまい競馬場の入口に殺到してくる
072　012　競馬場のかたちに作りかえてみたまえ
072　015　飛ぶ馬
072　016　跳ねる馬
072　020　一枚の馬券を買うために
072　033　跳ねる馬が
072　034　飛ぶ馬を追いこした
072　043　負け馬に賭けてきたぼくのような男には）
072　046　飛ぶ馬が跳ねる馬を追いこした
072　050　ゆっくりとゴールへ飛びこむ馬をキャッチした
072　053　ーー飛ぶ馬が跳ねる馬を追いこした
072　061　ーー競馬が終ると
072　064　がらんとした競馬場には
108　026　馬上の人も白髪となる
158　009　馬と蹄鉄の関係だ
158　012　蹄鉄が馬を終るとは

うまい
060　006　なぜか一服の煙草もひどくうまいのである
112　037　口真似のうまいおまえの仲間は
158　011　レトリックがうまいなと思っただけで

うまうまと

150　031　うまうまと生きのびてきたということか。

うまずたゆまず
168　014　うまずたゆまず

うまって　埋って
053　054　淋しいわたしの足跡は落葉に埋って見えません

うまって　埋まって
068　022　乾いた砂に埋まっているのを

うまる　埋まる
003　015　雪に埋まる扉

うまれ
057　033　罪によってうまれ
061　127　眠りからうまれたばかりの水は
091　010　劇場やホテルのロビイに立っている寂しい人影からうまれ
091　012　血にぬれた白い翼からうまれてくる
106　013　バンという閃光で　映像がうまれまた消える
133　015　うまれるはずのものがうまれず
145　009　そこにもあったトーモロコシの毛のそよぐ丘陵をエンジェルがうまれるのに充分な広さ
153　001　青い塩水からうまれた生きものの
190　004　父がうまれた村は山中にあり
190　005　母がうまれた町は山にかこまれていて

うまれた　産れた
167　068　泣きながらこの世に産れた人の子にとって

うまれた　生れた
039　070　ここはわたしの生れた土地だ

うまれてきた　生れてきた
010　014　パイプを握って雲の中から生れてきた少年は
088　073　太陽の涙から生れてきたぼくたちの

うまれの　生れの
142　062　その著書をフランスで刊行した一九四二年生れのブコフスキーは
184　006　タイ生れの中国人の医者と再婚した

うみ　海
003　005　海に向って帽子をふって
003　010　海の景色はこんなに暗い青でせうか

012 009 海では雷が鳴ってゐる
012 023 スコオルの通過した海の窓から
014 024 樹の海に青いぎんの雨が降ったよ
015 001 窓は明るい海の水で
015 006 海図の脈のどこかに消えてしまった
021 017 海より深い空を燃やし
025 003 黒いトンネルに海の響をきくところ
025 008 海は黒く岩壁は白かった
029 010 一つの海を風景の中に所有した
032 015 とほく海がひろがってゐるかもしれない
039 063 地の果の午後の海には
041 002 海よ　そして人気のない墓場がある
041 025 海からやって来たといふ　空を飛ぶ藻に乗ってきた人よ
046 024 雷とともに海へ出て　空はつらなる水平線をはしり
046 025 この橋も海中に漂ひ去って　躍りたつ青い形象となり
048 029 山や川　またなによりも海ができる
048 030 白くあたたかい海
048 033 揺れて海へ傾く　深くふかく
050 027 「さよなら、太陽も海も信ずるに足りない」
051 008 まるく小さな海と空が見えるばかりだった。
051 015 海が熱い体温のなかで燃えたぎっている、
051 037 「脱走したい、ーー海よ　母よ」
054 155 海の彼方！
055 012 とおい航海に出よう
055 014 航海に出ようとおもった
055 016 海を飛んでゆく耳鳴りのようにおもえた
055 019 青い海のなかに二人の運命をうかべているはずであった
059 003 明るい海岸のボートへ連れさっていった
059 016 海岸に捨てられたボートを眺めていると
059 021 海岸への道が不思議と宙にうかんでくる
059 022 夕映えの海にただよう
062 042 輝く海をまえにして
062 052 海へいそぐ小川のせせらぎや
062 057 すこしずつ海のほうへ動いているのですよ
062 059 母なる海と太陽の光りが強すぎます
068 006 海の光りは　美しい
068 007 夏のうちに　海岸へゆくことにしよう
068 010 青洟色の海
068 011 睾丸をしめつける海と
068 013 十九歳の男は　海にむかって
068 027 やるせない女と海の思出があった
068 034 見知らぬ海辺の女に
071 006 きみは海を見ようとして

071 038 海から山へ
073 001 その海は
073 005 さびれた海水浴場の岸壁にぶつかって
074 004 東洋の名もない植民地の海にうかび
076 009 ながかった航海の短かさについて
077 012 これからも大陸に　海に
077 029 東支那海の夜を走る病院船の一室で
078 011 こうして海へ出てみると
079 002 黒い海のうえを走っている
079 007 もっとも深い海
079 010 海底には
079 022 海にただよう
080 003 海は太陽や雲をうかべていた
080 025 まっすぐ海の彼方を指しているからーー
081 001 海の灰いろも
081 025 灰いろの海と
081 029 海の下の潮流は
082 003 八月は海辺にのこる白い墓
082 014 海や空にむかって口をひらく
086 002 つめたい海の風
086 008 海岸から男たちの影を洗い去るであろう
086 013 すべての夢を海にすてよう！
088 036 ここには海があるの
094 003 とある松林をぬけて海へでる
094 009 ここからオリーヴの海が見える
094 023 海はこんなに心に重い
101 038 奥地や海洋で　抵抗する住民をうちころす必要はない
102 007 悲しいかな　海のなかに海をつくり
102 019 太陽はさっさと素裸で海へかえる
103 011 帆柱や舵や海図や羅針や救命ブイや銛や……
103 012 海のまぼろしに憑かれたかれは
103 026 海の物語のただなか
104 005 わたしの丘や森や海岸は　すでに
107 010 さざなみは海を渡っても
108 001 海水浴場の
108 010 青くなっている海
108 018 再び荒れてくる海を見つめている
108 031 海はもうイヤ！
112 008 ジョホールの血の海峡　ブキテマの焦げた丘
121 008 があそんでいる海原で
136 030 血の海はたぷたぷと近い
148 030 一の宮海岸の近くの松涛閣に集まったのは、
148 049 日曜日の海はおだやかにぼくたちをむかえた。

153 012 真赤にそまった海が見え
167 011 明るい青空が海のようにひろがっている
167 030 海鳴りさえ聞えてくる
168 002 霧の海にさすらっていく
173 049 深海の底の眠りに就くことができる
176 004 海にむかって
176 016 海を渡ることだと言いたげに
176 029 寂蓼の海がぼうぼうとひろがっていて
181 001 みはるかす相模の海に
186 079 宴席の大きな皿に盛られた海の幸、鯛や鮑の刺身も
189 026 空の海が真赤に煮えたぎっているのを
191 003 海鳴り
191 015 海は一つの叫びに変れ
192 005 遠くかすかな潮騒のひびきにさそわれ、海にむかってひき寄せられていくが、
192 008 わたくし、とは誰だったのだろう？ 歩行の方向をきめている海の
192 011 もしかすると、近づくにしたがって、遠ざかっていく海なのかもしれない。こんなところは、日本中のどこにもあり
192 015 みるみる漆黒につつまれていく、ここは、もともと海底だったところではないか。冷気に身ぶるいし、
192 019 助かった！ まだ死にたくはない。眼は真珠に、骨は珊瑚になったとかいう、五尋の海底の父になるなんてごめんだ
192 024 これが罰か、太陽と海を呪ったことの？ たった一度の空想の罪にしては、酷すぎる報いではないか！

うみ 産み
133 023 われを産みし者の室をすてて

うみなり 海鳴り
167 030 海鳴りさえ聞えてくる
191 003 海鳴り

うみのさち 海の幸
186 079 宴席の大きな皿に盛られた海の幸、鯛や鮑の刺身も

うみべ 海辺
068 034 見知らぬ海辺の女に
082 003 八月は海辺にのこる白い墓

うむ 生む
025 027 あなたの頭髪の中に鶯が卵を生む

うめ 梅
116 012 ほそい梅の小枝は
136 016 狂い咲きの紅梅は

うめき 呻き
039 140 七つの壁が呻きはじめ

061　094　背すじを走る黒い運河の呻きをーー

うめく　呻く
038　026　深みはそのために呻くまで

うめた　埋れた
143　001　厚い雪に埋れた根のように

うめて　埋めて
006　001　弾痕からシズクが落ちてるが　カレラは銃器を埋めて

うやうやしく
112　021　薄いネクタイでうやうやしく喉頸をしめ
167　051　おまえはうやうやしく何を葬ってきたのか

うやまい
160　044　神をうやまい　友達には親切に

うら
052　011　わたしはかぎりなくうらめしく思う
061　023　うらぶれた安カフェーで、
125　003　聖者をうらぎった罰があらわれている
125　004　縦横家の仮面のうらとおもてに
144　005　うらみの色は深い
153　009　うらわかき女の胴を斬れよ

うら　裏
003　011　油絵の裏に隠れてゆく黄ろい月
050　008　手紙の封筒を裏返すようなことがあった。
054　076　幕がおりた舞台裏から……
058　010　私は裏街を好みます
061　031　さんざめく裏街のどん底で、
064　017　じめじめした屋根裏では、
096　009　太陽の町は夜の町　バルセロナの裏町の
140　010　舞台裏で物思いに沈むあわれな役者
155　039　とつぜん妻が裏切り
167　025　荒れた裏庭に出て

うらがえす　裏返す
050　008　手紙の封筒を裏返すようなことがあった。

うらぎった
125　003　聖者をうらぎった罰があらわれている

うらぎり　裏切り
155　039　とつぜん妻が裏切り

ウラジーミル
142　014　ウラジーミル監獄は

ウラジーミル監獄
142　014　ウラジーミル監獄は

うらない　占い
054　134　ひとり占いの賭博者のように

うらなう　占う
064　016　人の運命をどうして占うのだろう。

うらにわ　裏庭
167　025　荒れた裏庭に出て

うらぶれた
061　023　うらぶれた安カフェーで、

うらまち　裏街
058　010　私は裏街を好みます
061　031　さんざめく裏街のどん底で、

うらまち　裏町
096　009　太陽の町は夜の町　バルセロナの裏町の

うらみ
144　005　うらみの色は深い

うらめしく
052　011　わたしはかぎりなくうらめしく思う

うらやまれ　羨まれ
174　018　（きみが美しい奥さんと結婚して、みんなに羨まれながら、西荻窪のアパートに住んでいたときのことだ）

うらやむ　羨む
182　020　若さを羨むことはない

うり　売り
107　007　歌のうたえる心を売り

124　002　さかんに売りまくった
124　004　仲間も涙も校歌も国家も売り足りないが
137　004　あっさり未来を売りわたした
140　007　いのちを機械に売りとばして

うりとばして　売りとばして
140　007　いのちを機械に売りとばして

うりわたした　売りわたした
137　004　あっさり未来を売りわたした

うる　売る
142　065　魂を売ることを拒否したという
145　007　売ってはいけないものを売る深夜の

うるさい
125　008　悪魔のオーケストラの練習がうるさい

うるんだ
046　037　うるんだ瞳の橋上の人よ
150　057　彼は特徴のあるうるんだ眼をしばたたきながら聞いていたが、
181　006　妣の国のうるんだ愁いは

うれい　愁い
043　011　愁いの都の門はとざされ
054　112　決然たる拒絶者の愁い顔があらわれる
132　013　塔の愁い　草の雲いずこ
181　006　妣の国のうるんだ愁いは

うれい　憂ひ
030　008　歓びにもまた憂ひにもなぜか

うれえたり　憂えたり
188　047　公害を憂えたり、伝統の喪われていくのを嘆くのと同様、

うれた　熟れた
107　006　風に熟れた稲穂も……
125　020　恐怖で赤く熟れた月が廂に出ている

うれひ　愁ひ
039　120　静かに愁ひをなぐさめてくれる

うろこ　鱗

144　007　鱗の落ちた蛇神は無性闇に輾転し

うろつく
101　029　未来や過去がうろつくには

うわき　浮気
180　036　浮気をする計画だったといえば

うわごと
081　009　兵士たちはうわごとのように

うわべ
085　011　きみは心よりもデリケートなうわべをもち

うわめづかい　上眼づかい
106　010　第一列の中央に　いやな上眼づかいのかれがいて

うんが　運河
061　007　はるか、地下を潜りぬける運河の流れ、
061　094　背すじを走る黒い運河の呻きを－－
061　145　霧ははげしく運河の下から氾濫してくる。
061　196　暗くなってゆく運河を見つめています。
061　221　運河の上にも灯がついた、
085　001　きみの運河は

うんだ　生んだ
065　038　いたずらな月が生んだ魔女は
081　014　ぼくらを生んだ七つの近代都市が

うんどう　運動
044　002　また烈しく運動するもの
125　010　悔恨をいやす運動がほしい

うんどうする　運動する
044　002　また烈しく運動するもの

うんめい　運命
051　011　運命がある顔に達したとでも言うかのように、
055　019　青い海のなかに二人の運命をうかべているはずであった
056　020　それだけの運命である
064　016　人の運命をどうして占うのだろう。
071　013　わからないひとつの運命である
072　017　青、赤、黄、白の運命の使者たち

073 019 翳りゆく運命の暗示をもとめて
088 065 ふたりの運命を
099 013 小さな四つの運命は　四つのボールのように
103 025 それは波と風と運命の手にまかされた
103 030 にんげんの運命をすいこむもの
112 046 運命は一瞬の光でおまえたちを数える
167 071 やがておそってくる運命は
186 060 人の運命

え　絵
003 011 油絵の裏に隠れてゆく黄ろい月
007 006 古風な鐘は藍をにじませて鳴る　曇る　動かない土絵具のカンヴ
019 011 ガラス絵のやうな夢を
054 124 絵画は燃えるような赤でなければならぬ
057 010 ぼくらに一枚の絵皿を見せたことがある
057 032 レッテルでもなければ　絵皿の風景でもない
099 004 太陽が緑の絵具をとかしている芝草のうえを
145 004 はいるとつぶやきながら黒い色の真実やめったに売れないエンジェルの絵を売っていた」
188 083 きみが好きだという、武者小路の、茄子や南瓜の素朴な絵、

えいえん　永遠
022 006 やさしい茎と卵は永遠である
036 015 永遠を忘れてゐる臍の下で
039 061 永遠よりみじかい時間のうちに
053 057 永遠の星　花　鳥　樹　魚などの
055 065 永遠に吠えることのない狼に見えてくる
062 064 そして永遠に死んだふりをしているのですね
065 032 ひと群れの鶴にまじって、永遠の刑罰を
065 051 終りがあるのだろうか？　永遠の眠りが
077 008 永遠に受けとることのない
077 014 （永遠に受けることのない報酬は
077 031 かれは永遠に死んでいった
082 005 波は永遠の沖へ去っていった
097 005 サン・ペエル街七十一番地に、永遠に雨を降らせるだろう。
097 007 あなたは暗い鉄格子の中に、永遠に繋がれるだろう。
097 014 空しい喝采のなかで、永遠に空中を泳ぎつづけるだろう。
106 012 永遠プラス五分間を　「早く早く」とせき立てている
133 024 永遠に帰るべき家をもたない
159 013 永遠に消えたが……
179 015 永遠の空に浮べる

えいえんに　永遠に
055 065 永遠に吠えることのない狼に見えてくる

062　064　そして永遠に死んだふりをしているのですね
077　008　永遠に受けとることのない
077　014　（永遠に受けることのない報酬は
077　031　かれは永遠に死んでいった
097　005　サン・ペエル街七十一番地に、永遠に雨を降らせるだろう。
097　007　あなたは暗い鉄格子の中に、永遠に繋がれるだろう。
097　014　空しい喝采のなかで、永遠に空中を泳ぎつづけるだろう。
133　024　永遠に帰るべき家をもたない
159　013　永遠に消えたが……

えいきゅうせんそう　永久戦争
118　005　永久戦争

えいこう　栄光
061　200　わたしの悲惨は貴方の栄光なのですか。
061　207　悲惨もなければ、栄光もなかった。
112　017　祖国の栄光と同胞の愛を信じて地平線になだれていった
113　003　スターリンに栄光あれ！
113　047　スターリンに栄光あれ！
157　008　もう栄光の差なんてありません

えいごきょうし　英語教師
146　047　大学で英語教師をしていたと告げるのです

エイス
054　136　あらゆるエイスの価値と

えいぞう　映像
106　013　バンという閃光で　映像がうまれまた消える

えいぞくする　永続する
142　105　巨大なものの力が　個人の信念より永続するという証拠はない

えいぞくせい　永続性
168　013　生きることの永続性のあかしか

えがいた　描いた
097　004　しかし雨を描いた動かない斜線は、
150　052　続いて第二輯に逃亡した娼婦の心理を描いた「滅落」を発表したところで、

えがいて
088　035　それから指で大きな輪をえがいて

えがお　笑顔
053　005　明るいひとびとの笑顔も
086　006　さびしい笑顔をのこして女は去った
146　046　笑顔で立っていて

えがかれ　描かれ
028　028　地図に描かれた曲線の巧みな配置を
054　109　大学生のほそい瞳の奥に描かれてしまう
142　094　オーエルの未来小説に描かれた　党　は

えがかれた　描かれた
028　028　地図に描かれた曲線の巧みな配置を
142　094　オーエルの未来小説に描かれた　党　は

えがかれて　描かれて
054　109　大学生のほそい瞳の奥に描かれてしまう

えがきだそう　描き出そう
054　049　一九四七年の一情景を描き出そう

えがく
068　018　一直線をえがく　はてしない水平線にそって
094　002　見えがくれの執念につけ狙われながら
096　002　太陽をえがく　酒場時代の
096　004　ぼくはバルセロナの夜をえがく
163　001　見えがくれに歩きながら
167　037　死屍累々の谷が見えがくれするので

えがく　描く
072　007　うす緑の大地、美しいカーヴを描く競走路をみたまえ
097　006　もし無慈悲な画家が牢獄を描くとしたら、
168　009　虹の国を描くこともあったとおもう

えき　駅
054　118　そして詩人と大学生は駅でしばらく別れを惜しむだろう
183　001　郊外の小さな駅をおりると
183　026　駅前通りから暗い小道に曲ったところで

えきたい　液体
022　007　裸の胴は液体に近く

えきたい　液體
028　011　液體のやうに垂れてきたのは疲れた舌である

えきまえどおり　駅前通り
183　026　駅前通りから暗い小道に曲ったところで

エクステンション
155　035　自己のエクステンション

えぐられ
055　064　胸をえぐられ

エゴセントリック
160　069　エゴセントリックで報復的だったためか同僚にはうとまれていたらしい

えざら　絵皿
057　010　ぼくらに一枚の絵皿を見せたことがある
057　032　レッテルでもなければ　絵皿の風景でもない

えだ　枝
013　003　青いけむりの蛇が枝を登り
013　004　枝に小鳥はゐない
017　043　駈け出すと枝から逆さに墜落し
039　024　小枝や
043　003　知慧はしろがねの枝にかけらるるや
043　021　知慧はしろがねの枝にかけらるるや
042　011　蛇は力を尽してしろがねの枝をのぼる
042　018　しろがねの枝にかけられたちひさな骸を
046　014　もとの薄暗い樹の枝に追ひかへし
053　030　みんな仲よく小鳥のように一つの枝でおやすみなさい
053　031　わたしは枝からはなれてゆきます
058　040　街路樹の枯枝に
065　035　感覚の闇を照らした。樹々が小枝を打ちならし
089　028　北風がプラタナスのほそい枝を鳴らして
101　051　頭上で枯れ枝がうごき　つめたい空気にふれるたびに
109　002　芽を出し、枝葉をひろげ
116　012　ほそい梅の小枝は

エッセイ
150　002　私は　囲繞地　というエッセイの中で、こんなことを書いた。

エデン
093　015　蛇が隠れたエデンの樹を一心に見つめる
093　027　かれの魂はエデンの樹の頂きからはてしなく落ちはじめる

エトランゼ
057　012　ぼくはエトランゼであったし

えのぐ　絵具
007　006　古風な鐘は藍をにじませて鳴る　曇る　動かない土絵具のカンヴ
099　004　太陽が緑の絵具をとかしている芝草のうえを

エプロン
066　008　汚れたエプロンで

エブロ河
096　008　エブロ河を流れてやってきたにすぎん

えまい
139　001　白い月のえまい淋しく

えもの　獲物
049　003　いつも逆に傾斜した獲物のない地平線しか見えない。

えらばれて
046　035　怒の鎮まりやすい刹那がえらばれて

えらぼう　選ぼう
061　112　一つのものを選ぼうとするとき

エリオット　（T.S.エリオット）
160　030　「現代最高の詩人T.S.エリオットの作です」

えりまき　襟巻
177　020　きみは襟巻をし

える　得る
142　075　拷問から解放され　自由を得るためには
150　037　「本質的に我々が誇り得るものは生理以外に在り得ない、
150　046　「誇り得るもの」を失ったとさとったとき、彼はこの世から転向していったのだ。
150　047　我々が生きのびたことで誇り得るものが、

エレクトロニクス
188　054　いまはエレクトロニクスと老害の時代なのだ。

エロス
014　018　エロスよエロスよと騒いでゐると

えん　円
012　021　ガラスの響をたてる楕円形の葉たち
021　028　円形の窓のない世界から
039　044　しだいに眼をとじた楕円の石に変ってしまふ
128　024　「円の切上げより自由化が先」
193　014　家族あわせの円居が

えんかい　宴会
054　081　人々の笑いと踊りと宴会とのなかに

えんきんほう　遠近法
094　016　かれと言いきみと呼びぼくに返る心の遠近法にしたがって

えんけい　円形
012　021　ガラスの響をたてる楕円形の葉たち
021　028　円形の窓のない世界から

えんけい　遠景
122　005　なま牡蛎色に濡れた遠景のなかを

エンジェル
145　003　何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに
145　004　はいるとつぶやきながら黒い色の真実やめったに売れないエンジェルの絵を売っていた」
145　009　そこにもあったトーモロコシの毛のそよぐ丘陵をエンジェルがうまれるのに充分な広さ
145　010　とエンジェルと同じ肌色の奥まで開拓して見せていた

えんじょうして　炎上して
081　015　炎上していた

エンジン
016　010　雲の島からエンジンが響き
えんずる　演ずる

えんせき　宴席
186　079　宴席の大きな皿に盛られた海の幸、鯛や鮑の刺身も

えんぜつ　演説
128　025　演説ぶったは次期首相の福田赳夫さん

えんそうかい　演奏会
005　001　岸辺では演奏会が開かれる

えんてんか　炎天下
127　021　炎天下……

えんとつ　煙突
005　016　吹かれてゐる赤い煙突は
061　101　煙突が煙を吐いているね
073　011　墓標のように番号をつけた煙突がならび

えんぴつ　鉛筆
062　029　わたしの手から鉛筆をとりあげるように
150　054　鉛筆で何カ所も印をつけられた頁をつきつけられて、

えんぽう　遠方
167　028　どんな遠方も

お　尾
087　015　たまに　尻尾をふるのはよけいなこと
142　023　たえず監視され　尾行されている
187　011　賢い蛇の尾のような
190　006　峰から昇り尾根に沈む日月

おあい　お会い
041　053　また明日　お会いしませう　もしも明日があるのなら
068　003　（二度とお会い致しません）
100　005　また明日　お会いしましよう　もしも明日があるなら
100　052　また明日　お会いしましょう
186　018　そのときお会いになった人たちとは？

おあいしませ　お会いしませ
041　053　また明日　お会いしませう　もしも明日があるのなら

おい　追い
062　031　わたしは昔の少年になってどこまでも追いかけてゆくだろう
072　034　飛ぶ馬を追いこした
072　046　飛ぶ馬が跳ねる馬を追いこした
072　053　ーー飛ぶ馬が跳ねる馬を追いこした
083　015　空を追いつめて　ここまでくると
083　017　高いところへ追いつめられて
124　031　日没に追いつかれていた
158　028　追いもとめなければならない
171　011　草原に追いやられて殺されるアザラシの
190　014　清流をさかのぼって幽谷に魚影を追い

おい　老い
010　017　老いぼれた天体は歯がぬけてゐる
025　005　松が老いてゆく錨のうしろに
027　008　すべての家具が老いてゆき
066　016　年老いた母親はいきをころして坐り
182　021　老いたる者には智慧があり
182　026　老いのうちにも新しい命の水が
188　050　老いの楽しみに数えてよいだろう。

おいかえし　追ひかへし
046　014　もとの薄暗い樹の枝に追ひかへし

おいかけて　追いかけて
062　031　わたしは昔の少年になってどこまでも追いかけてゆくだろう

おいこした　追いこした
072　034　飛ぶ馬を追いこした
072　046　飛ぶ馬が跳ねる馬を追いこした
072　053　ーー飛ぶ馬が跳ねる馬を追いこした

おいしい
098　008　「ビールが冷たくて、とてもおいしいよ

おいしげり　生ひ茂り
026　020　羊歯類が生ひ茂り

おいしげる　生ひ繁り
025　017　焔をあげて生ひ繁り

おいたてられ　追ひたてられ
041　074　あなたは孤独の中からも追ひたてられさうになる

おいつかれて　追いつかれて
124　031　日没に追いつかれていた

おいつめて　追いつめて
083　015　空を追いつめて　ここまでくると

おいて　老いて
025　005　松が老いてゆく錨のうしろに
027　008　すべての家具が老いてゆき

おいてある　置いてある
031　015　雨傘やブラシなど日用品が置いてある

おいでおいでと
139　002　すすきの穂が遠くからおいでおいでと手招く

おいてゆく　老いてゆく
025　005　松が老いてゆく錨のうしろに

おいのり　お祈り
146　023　お祈りを捧げているところでした

おいぼれた　老いぼれた
010　017　老いぼれた天体は歯がぬけてゐる

おいやられて　追いやられて
171　011　草原に追いやられて殺されるアザラシの

おいら
152　019　おいらのメッセージ

おう　王
112　044　眠りながら腹をこやす王国を夢みているうれしいはらからたち
162　017　かれ自身の最後の王国であるから
187　003　壁面の王は
187　029　王城はゆらぐかとみえ

おうこく　王国
112　044　眠りながら腹をこやす王国を夢みているうれしいはらからたち
162　017　かれ自身の最後の王国であるから

おうごん　黄金
050　015　短かかった黄金時代－－
054　159　テーブルに凭れて新しい黄金時代を夢みている
099　003　黄金の毛のむく犬と一緒に
153　014　黄金の太刀は

おうごんじだい　黄金時代
050　015　短かかった黄金時代－－
054　159　テーブルに凭れて新しい黄金時代を夢みている

おうじょう　王城
187　029　王城はゆらぐかとみえ

おうらい　往来
166　017　「礼は往来を尊ぶ」
172　005　かさこそと往来するのは

おえた　終えた
109　009　生命の一循環を終えたのだから
158　044　こんなにも早く終えたことを悲しむ

おお
012　024　おおきらめく太陽よと
014　026　おお主よと叫んだかは考えてみたらいい
028　023　鳩とともにおお救世主の銅像の髭にもついて
054　063　おお　いまこそイギリスに住もう
054　067　おお　いまこそ君の虚栄をひきずり下せ！
054　071　おお　いまこそ偉大な人間と大きな河は
061　021　おお時よ、なぜ流れるのか
061　025　おお、これからどうしよう……
061　037　おお時よ、なぜ流れるのか
061　041　おお、これからどうしよう……
080　015　おお　明日をあたえよ
100　038　おお　訪れたとみるまに
101　016　おお　だから……
101　046　おお　しかし……
101　062　おお　しかし　どこまでもぼくは行こう
101　064　おお　だから　誰もぼくを許そうとするな
108　011　おおきな追憶が港から出てゆくのに
142　003　おおぴらに話されなくなっている……
146　022　金色の聖像におおぜいの人が
164　001　おおきな眼を空洞にして
167　061　錆びた針金の蔦におおわれて
179　011　蔦におおわれた高窓は

おおあたり　大当り
160　017　コーネリアスは宝くじで大当りし
160　033　印刷の不備でくじに外れた老楽師に　大当りの賞金を全部やってしまう

おおいかける　覆いかける
062　018　あなたはかすかにしめった灰の匂いを覆いかける

おおいそぎで　大急ぎで
146　018　大急ぎで走っていき

おおいなる　大いなる
042　007　大いなる弧をめぐり遥かに高い所から
044　016　大いなる真昼の泉にいそぐからだ。
061　140　眼下の大いなる混沌のむかしに
061　184　大いなる父よ、
061　193　大いなる父よ、
061　198　父よ、大いなる父よ、
073　020　大いなる積乱雲のさけ目をみつめた
100　082　大いなる真昼はたちまち翳り
101　040　きみたちは　きみたちの大いなる真昼をかきけせ！

おおかみ　狼
055　065　永遠に吠えることのない狼に見えてくる
101　030　すこしばかり遠いところ　狼の影もないところ
106　031　詩人なら孤狼な口髭とか　大切な象徴の鼻について
192　014　薄暮と昧爽とをとりちがえていた迂闊さに、狼狽するも間なく、巨大な生きものの胎内にのみこまれるように、

おおきすぎる　大きすぎる
062　016　大きすぎる白い屍衣を脱ぎ

おおきな
108　011　おおきな追憶が港から出てゆくのに
164　001　おおきな眼を空洞にして

おおきな　大きな
014　003　頭の大きな楽器が目覚めたらしい
041　120　貧弱な幹に大きな葉をつけてゐた樹木
053　001　わたしの大きな瞳には
054　071　おお　いまこそ偉大な人間と大きな河は
054　166　僕らの家の戸口を大きな拳で敲く朝のことを……
064　001　大きな夕暮の環に灯をともして、
064　032　大きな夕暮の環に灯をともして。
065　014　死せる魂に、大きな裂け目をつくり
072　065　十万のひとが残していった大きな寂蓼が
088　035　それから指で大きな輪をえがいて
088　079　大きな声でうたうぼくたちの歌に
103　031　きみが見た大きな虚無はふかくぼくらをひきつける
113　024　答えよりも大きな疑いはなかったから
141　004　小さな虹をまたぐ大きな虹を見たわ。
151　017　まるで大きなおけらである
170　014　蓮の葉の上に大きな露の玉が乗っていて
183　021　大きな買物袋をさげた母親のあとから
186　079　宴席の大きな皿に盛られた海の幸、鯛や鮑の刺身も

おおくの　多くの
038　007　多くの影の上で顫へてゐる
056　009　アーク灯のかげで多くの骸骨が
074　016　多くの友が死に
074　017　さらに多くの友が死んでゆくとき
076　008　さらに多くの涙があるのに
076　012　言わねばならぬさらに多くのことがあっても
077　004　多くの兵士は
095　002　多くの時と多くの場所と
095　003　さらに多くのものがかかっている
095　004　多くのそれらを
135　003　多くの国人と語って同時に
142　004　西側の新聞や著名人の多くの声明には
185　006　あまりにも多くの人に

おおぜいの
146　022　金色の聖像におおぜいの人が

おおぞら　大空
078　018　ぼくらはむなしく大空に

おおって　覆って
192　004　夜明け前の微光があたりをくまなく覆っていて、どこへ行こうとしているのか、

おおてまち　大手町
128　001　大手町の　矩形の空に

おおひ　覆ひ
012　020　知識の樹はアクロポリスを覆ひ

おおふ　覆ふ
028　041　おびただしい自然を覆ふ霧はやがて見えなくなるところ
041　145　またぢきに　嵐と雪で家々を覆ふ冬が来て

おおわれて
167　061　錆びた針金の蔦におおわれて

おか　丘
012　017　パルテノンは丘にある
028　021　幾何学が白い肉のやうな丘に
046　020　たとえ純粋な緑が　墳墓の丘より呼びかけようと
062　043　この小さな丘の斜面に寝そべっていると

083　011　さあ丘をのぼるとしよう
083　016　これはもう丘とはいえない
104　005　わたしの丘や森や海岸は　すでに
109　005　生命の奔流は丘をくだり
112　008　ジョホールの血の海峡　ブキテマの焦げた丘
129　005　殺された男の丘もみえない
145　009　そこにもあったトーモロコシの毛のそよぐ丘陵をエンジェルがうまれるのに充分な広さ
167　065　ああ　丘のうえの廃屋よ
177　012　てのひらほどの丘に

おかされて　冒されて
166　023　巧妙に管理されてアジア病に冒されていく

おかし　侵し
039　089　古びたドアを侵し
040　024　東方からおまへのからだを侵しはじめる

おかし　犯し
136　006　妹たちを犯し
149　006　いくたび禁制を犯したろう？

おかしくない
167　017　いつ崩れ落ちてもおかしくない

おかした
113　030　不運にもあやまちをおかした者は

おかした　犯した
149　006　いくたび禁制を犯したろう？

おかしな
160　013　コーネリアスという無名の男の　涙が出るほどおかしな物語

おかしはじめる　侵しはじめる
040　024　東方からおまへのからだを侵しはじめる

おかれている
077　039　やさしい女のひとの手がおかれている
142　082　彼がおかれている状況は　西側の同時代人のそれより

おがわ　小川
062　052　海へいそぐ小川のせせらぎや

おき　沖
068　030　とおくの沖を眺めても
073　002　とおい沖まで
082　005　波は永遠の沖へ去っていった
181　004　沖は見えず

おきかえ　置き換え
050　016　活字の置き換えや神様ごっこーー

おきて　掟
062　019　「もし身体にも魂にも属さない掟があるなら
103　001　どうして地上の掟はやぶれたか
161　015　それが掟である

おく　奥
026　006　そのとき銃眼の奥から睨む
054　109　大学生のほそい瞳の奥に描かれてしまう
100　024　沈黙の奥ふかく追放された
101　038　奥地や海洋で　抵抗する住民をうちころす必要はない
106　043　詩人の本質は変らない　それは目にみえない奥にあって
145　010　とエンジェルと同じ肌色の奥まで開拓して見せていた
146　054　だんだん奥へ奥へと入っていくようで
174　018　（きみが美しい奥さんと結婚して、みんなに羨まれながら、西荻窪のアパートに住んでいたときのことだ）
188　008　歯も、先日、奥歯が一本、根が痛みはじめたので、

おくさん　奥さん
174　018　（きみが美しい奥さんと結婚して、みんなに羨まれながら、西荻窪のアパートに住んでいたときのことだ）

おくじょう　屋上
056　012　とおいビルの屋上で
091　011　新聞社の屋上たかく舞っている伝書鳩の
129　016　ひとけのない屋上プールと

おくじょうぷーる　屋上プール
129　016　ひとけのない屋上プールと

おくち　奥地
101　038　奥地や海洋で　抵抗する住民をうちころす必要はない

おくば　奥歯
188　008　歯も、先日、奥歯が一本、根が痛みはじめたので、

おくびょうな　臆病な

142　087　臆病な政治的理由があり　小さな幸福をほんの少し長引かせるための
150　003　「彼は臆病なドン・ファンであった。

おくふかく　奥ふかく
100　024　沈黙の奥ふかく追放された

おくられた
053　014　昔の恋人からおくられた銀のロケットを

おくられた　送られた
148　031　同じ輸送船でスマトラ島に送られた転属組の十三人だった。
150　073　きみから送られた昔の雑誌を手にして、なつかしい面影に出会い、

おくれ
106　034　時代におくれ　人におくれたすべてのものをとり戻すために

おくれて　遅れて
124　028　（短評：空間はどの部分も遅れている？）
147　009　ところが遅れてやってきた壮年時代に入ると

おけ　桶
130　015　せめて桶にでも入れておいてくれよ
136　025　わいせつな歴史の棺桶の
160　061　かれが家を出たとき　母親は「棺桶に入って帰ってこい！」と言ったが
162　023　かれの死が均合うのは一桶の汗か

おけら
151　017　まるで大きなおけらである

おげんきで　お元気で
150　081　ではお元気で。

おこった　怒った
013　012　パイプが怒ったのかね

おこっている　怒ってゐる
017　008　怒ってゐる沙漠に

おこらなかった　起らなかった
041　102　かつて　何処にも起らなかったこと

おこる　起る
028　018　つねに流通する貨幣の翳から起るといふ

おさえ　押え
048　018　まだとおくから押えている性！
063　007　ぼくはあなたの口を押えようとする

おさえて
066　006　女の子がひとり涙をおさえて立っていた、
188　024　両のこぶしで、眼をおさえている光景、

おさえている
188　024　両のこぶしで、眼をおさえている光景、

おさえている　押えている
048　018　まだとおくから押えている性！

おさない　幼い
159　012　まだまだ幼い母のうしろ姿は襖の蔭に
175　007　幼い疑問への答えを

おさらば
061　026　酒と女におさらばして、
143　014　喘息の譫言におさらばして

おし
047　017　おとろえた視力の闇をとおして
053　039　狂おしく地上にかえってゆく
054　165　おどりたつ群集をおしのけ
061　138　水仙や蛇や　もろもろの生ける質を潤おした』
066　036　どの家々も沈黙の屋根におしつぶされていた、
070　045　おまえの胸をおしひらく。
101　009　重たい刑罰の砲車をおしながら
112　047　待ちどおしいぞ　世界の終りが
160　056　その日は夜どおし起きており　朝の四時にゴミを捨てに廊下へ出て

おしあいへしあい　押しあいへしあい
072　062　群集は押しあいへしあい停車場めがけて

おしえた　教えた
057　007　パスカルの読み方を教えた青年が戦死し

おしえて　教へて
039　096　悪魔よ教へてくれ

おしえる　教へる
010　004　白い帽子は頭のアリカを教へるとともに日の匂を発散させる
044　011　御身は教へる、肉の裔（すゑ）なるものたちに、

おしつぶされ
066　036　どの家々も沈黙の屋根におしつぶされていた、

おしつぶされた　押潰された
173　034　押潰されたヒューマニズムの声など役に立たぬ

おして　押して
041　062　ドアを押して
096　010　とあるバーのドアを押して入ったと思いたまえ

おしのけ
054　165　おどりたつ群集をおしのけ

おしひらく
070　045　おまえの胸をおしひらく。

おしまい　お終い
062　045　ここでもうお終いだという気がします

おしまれる　惜しまれる
147　017　惜しまれる死に方をしなかったことで

おしみない　惜しみない
054　010　惜しみない賞讃の言葉をおくった

おしむ　惜しむ
054　118　そして詩人と大学生は駅でしばらく別れを惜しむだろう

おしやって　押しやって
155　024　精力的にうしろへ押しやっていく

おしゃべり　お喋べり
188　041　とめどもなく、そいつとお喋べりを始めるのは、

おしょうこう　お焼香
155　018　お焼香は手早くすます

おじょうひん　お上品
084　022　いともお上品な天使たちが

おじょく　汚辱
061　080　悪臭と汚辱のなかから

おしよせ　押しよせ
008　013　群は　雲に乗って押しよせ　黄色く汚れた地図の上を
071　047　刻々と現在にむかって押しよせる

おしんで　惜しんで
053　043　いのちを惜しんで暮すことに悲しみなんかありゃしない

おせじ　お世辞
013　008　撫でてあげませうかとお世辞を云ひ

おそい　遅い
073　023　遅い希望の船脚であろうか

おそいかかり　襲いかかり
086　007　やがて波が襲いかかり

おそすぎる　遅すぎる
105　005　魚釣りには早すぎ、狩猟には遅すぎる三月。
125　019　祝福はくるが遅すぎるだろう

おそって　襲って
034　019　突如　豪雨が襲ってくる
173　047　すぐ大波のような睡魔が襲ってくるだろう

おそってくる　襲ってくる
034　019　突如　豪雨が襲ってくる
173　047　すぐ大波のような睡魔が襲ってくるだろう

おそらく
035　023　おそらく明日訪れてくるだらう
036　001　おそらくは実らぬであらう樹木
036　002　おそらくは咲かぬであらう花花
036　019　おそらくは咲かぬであらう花花と
036　020　おそらくは実らぬであらう樹木
037　011　夜はおそらくどこからでも忍びよる
086　004　おそらく鴎たちは
087　023　明日は　おそらく北風が吹く
106　046　おそらくその果は　「未来」とふかく交っているのだろう
142　104　おそらくぼくたちは　はっきり　否！　と合図するだけでよいだろう

おそるべき
026　030　おそるべき噴火口は

おそるべき　怖るべき
023　018　怖るべき悲しむべき速度の中に

おそれ　怖れ
016　015　意地悪な園丁の鋏を怖れなさい
041　071　あなたは壁を眺めて怖れの表情を隠さうとしてゐますね
047　013　私は怖れる
142　034　ひそかに怖れていることを！
147　001　生きていくことに怖れを感じていた幼年時代だったら
147　012　生きることに怖れも困難も感じない髪の毛の薄い男になっていた
150　010　自分の血が全部流れ出してしまふのではないかと怖れた。
186　059　いったい何を怖れているんです？

おそれる　怖れる
047　013　私は怖れる

おそろしい
100　069　おそろしい速さで
103　027　おそろしい幻想とレビアタンの住む世界だ
106　024　詩人としてのかれの　おそろしい飛翔力をあらわしている
142　112　どんなにおそろしい報いを受けるかは
153　005　おそろしい刃先にむかい

おそろしき　恐ろしき
048　036　虚空になげあげられた恐ろしき叫喚－－

おそろしく　怖ろしく
059　006　波の音がひどく怖ろしく

オゾン
181　003　濃いオゾンのいきがたちこめ

おたがいに
148　014　おたがいに無縁の暮らしをしてきたのである。

おたがいに　お互に
041　009　お互に耳を澄ませ

おたがいの

054　006　そして銃を担ったおたがいの姿を嘲けりながら

おたがいの　お互の
141　016　ぼくたちはお互の影でさえない。

おたすけ
114　012　いのちだけはおたすけを」

おだぶつ
128　040　じきベトコンもおだぶつ

おだやかに
148　049　日曜日の海はおだやかにぼくたちをむかえた。

おち
012　013　一たまりもなく仮死におち
027　015　耳の螺旋を辷りおちた
039　142　わたしの天は奈落へ崩れおちよう
040　020　風はおちて
070　020　わたしの感覚はぬけおちて、
075　012　悪魔の手におちるかもしれない
080　010　夕陽の血が波のうえにしたたりおちて
101　054　血をはく空洞におちてくる

おち　落ち
006　001　弾痕からシズクが落ちてるが　カレラは銃器を埋めて
026　013　葉脈から雫が落ちてくる
027　006　たくさんの吸殻が落ちてきた
031　014　闇の一滴がひそかに舌から辷り落ちた
039　026　露が落ちてきて
039　105　落ちていった星を何と呼ぶのだらう
041　091　息はたえ　冷たいアスファルトの上に落ち
041　122　葉はぬけ落ち　黒い幹が囲繞地の隅に忘れられた
058　009　踊っている男女の影がアスファルトに落ちてきます
062　004　落ちた夕日の赤い血が
062　006　落ちてゆくわたしの身体を支えてくれるのは
070　030　わからない、どうして此処へ落ちたのか
083　019　より高い青空の深みへ落ちてゆく
091　015　きみの欲望は夕陽を浴びてビルディングの林に落ちてゆく
093　027　かれの魂はエデンの樹の頂きからはてしなく落ちはじめる
108　034　落ちてくる頃。
128　085　こっちの星が落ちていく
134　006　過去は心からぬけ落ち

142　026　わたしやわたしの家族の頭から　髪の毛一すじ落ちやしないとは
144　007　鱗の落ちた蛇神は無性闇に輾転し
167　017　いつ崩れ落ちてもおかしくない
172　002　木の葉のように舞い落ち
189　035　銀のフォークが石の床に落ちる

おちいらず　陥らず
160　077　自殺もせず　狂気にも陥らずに

おちた　落ちた
031　014　闇の一滴がひそかに舌から辷り落ちた
062　004　落ちた夕日の赤い血が
070　030　わからない、どうして此処へ落ちたのか
144　007　鱗の落ちた蛇神は無性闇に輾転し

おちて
040　020　風はおちて
070　020　わたしの感覚はぬけおちて、
080　010　夕陽の血が波のうえにしたたりおちて
101　054　血をはく空洞におちてくる

おちて　墜ちて
082　015　すると小鳥がたそがれの窓に墜ちてくる

おちて　落ちて
006　001　弾痕からシズクが落ちてるが　カレラは銃器を埋めて
026　013　葉脈から雫が落ちてくる
027　006　たくさんの吸殻が落ちてきた
039　026　露が落ちてきて
039　105　落ちていった星を何と呼ぶのだらう
058　009　踊っている男女の影がアスファルトに落ちてきます
062　006　落ちてゆくわたしの身体を支えてくれるのは
083　019　より高い青空の深みへ落ちてゆく
091　015　きみの欲望は夕陽を浴びてビルディングの林に落ちてゆく
108　034　落ちてくる頃。
128　085　こっちの星が落ちていく
167　017　いつ崩れ落ちてもおかしくない

おちていった　落ちていった
039　105　落ちていった星を何と呼ぶのだらう

おちてきて　落ちてきて
039　026　露が落ちてきて

おちてゆく　落ちてゆく
062　006　落ちてゆくわたしの身体を支えてくれるのは
083　019　より高い青空の深みへ落ちてゆく
091　015　きみの欲望は夕陽を浴びてビルディングの林に落ちてゆく

おちてる　落ちてる
006　001　弾痕からシズクが落ちてるが　カレラは銃器を埋めて

おちば　（らくよう）落葉
002　004　（落葉は降りしきる　あゝ淋しい曲を聞いた）
011　006　落葉が散って　冬が残ってゐる
038　001　落葉は
049　008　落葉に吹きまくられてゆく地平線に
050　019　「淋しさの中に落葉がふる」
053　003　暗い空の枯れた林から落葉がすきまなく降ってきます
053　032　わたしは落葉の精なのです
053　053　しかし落葉のなかでふりかえっても
053　054　淋しいわたしの足跡は落葉に埋って見えません
053　056　降りつづく落葉の雨のなかから
053　061　わたしの髪に　わたしの肩に　落葉はしずかにつもります
084　007　散ってゆく落葉の女を尋ねて
084　033　落葉がふりつもってゆきます
109　013　落葉の雨を降らせている。

おちはじめる　落ちはじめる
093　027　かれの魂はエデンの樹の頂きからはてしなく落ちはじめる

おちびと　落人
144　013　浄食の歯ぐきなまなましき落人は

おちゃわん　お茶碗
088　048　これはお茶碗　これはお皿

おちゆく　墜ちゆく
065　034　墜ちゆく星の、最後のまたたきが

おった　追った
021　015　逃げてゆく太陽を追った

おってゆく　追ってゆく
025　010　日暦をめぐり欲望を追ってゆくものよ
099　002　逃げるボールを追ってゆく

おっとり
174　021　おっとりしていて、どこが強いのかわからないような碁風だった。

オデコ
017　022　月がオデコに光り始めたら

おと　音
002　001　氷が音たててはぜる
003　001　カレンダーに音楽が流れ
004　010　太陽の跫音が近づいてくる
005　009　鈴を振るかすかな音よ
008　017　レコオド音楽にクチあいて　緑の藻をタベてゐる
014　023　花のある音楽につれて
016　004　星にとびちる音（ね）をふんで
017　024　青いアタマが音をあげた
018　014　音楽が室内に溢れてくる
019　006　音もなく音なく
023　003　音もなく日ぐれがきたといふ
026　004　風の音に向って
027　017　局囲の跫音をきかない
028　019　文明的なもろもろの雑音の性格により
028　068　そこにある雑音はまがりくねって
030　006　どこからともない一滴の水一滴の音に
031　004　音はドアの中でさへ聞えない
032　007　気味悪くキーキーいふ音に
032　016　だが椅子のキーキーいふ音に
034　004　音を発してそれらは
035　019　跫音は
037　004　地下をながれる水の音は
038　012　虚ろな跫音が
038　017　でも音楽だけはいつでもやってゐてほしい　と
038　023　この管はなんだが眠いやうな音をひびかせる
039　090　床を踏みにじる音によって
039　119　また笛の音を喚び
040　005　水の音も
041　016　音を刻み　立止まり　年を待ってゐるやうに
041　023　水の音が
041　070　嵐の音が聞え　ドアが軋る
041　114　ただ一脚の椅子があるだけ　気味悪くキーキーいふ音に
041　150　街の雑音はあなたの耳を不注意にした
043　013　音もなく　部屋の扉がひらく
045　006　音もなく空を走る稲妻を見あげてゐる

046 045 内部を刻む時計の音に　蒼ざめた河のこの沈黙はつきまとひ
047 006 つかれた椅子の軋る音……
047 007 重たい時計の振子の音……
047 008 頭上で屋根を剥ぐ不気味な爪の音……
048 012 川は音をたてて背中をながれる
048 034 かすかにトルソから涛の音がひびく
049 009 （すぐれた笛の音とすぐれた涙を…）
050 002 あらゆる階段の跫音のなかから、
054 125 音楽はたえまなく狂気を弾奏しなければならぬ
054 132 無言で蓄音器のレコードが廻転する
056 004 重たい誰かの靴音が
058 003 鎚の音がこだまし
058 025 灰いろの建物のしたを孤独な靴音が
059 006 波の音がひどく怖ろしく
061 046 街角をまがる跫音のように
061 058 あなたの跫音と、あなたの足跡は、
066 038 すると不意に、一枚の戸が音もなくひらき
073 015 音もなく歩いていった
081 012 たえまなく爆音がして
084 003 いい音で鳴る弦と弓が
084 019 土人の音楽があります」
091 006 軽いプロペラの翅音をひびかせて
100 049 あらゆる階段の跫音のなかから
107 003 尖塔の鐘の音も若かった
112 038 たぶん時代がわるいんだろうと異口同音に歌う
121 015 台所では大根を刻む音がしている
122 008 ひとしきり烈しくなった雨音をきく
125 005 六月の雨はしきりにふり　音楽はとめどもなく
129 003 地上の物音はきこえない
139 004 どこからか砧を打つ音がかすかに聞えてくる
146 028 自分を閉じこめる音でもありました
146 044 誰かの跫音がします
146 061 屋根を叩く雨音がひとしきり強くなって
154 007 悲しみの音色にさそわれ
159 001 時を刻む音ばかり高くなっていく屋漏で
159 011 かすかに衣ずれの音と麝香のかおりを残して
165 004 腹式呼吸のいきの音
167 004 あおられたドアの開閉音にあわせて
175 011 冬にしては暖い雨の音が
175 013 同じ雨の音を聞きながら
179 012 街の雑音からはるかに遠く
185 007 慰めを与えた哲人風の音楽家の
186 022 音もなく発車し到着しますからね！

186　024　昔の発車ベルの音が体内のどこかに残っていたんですよ！
189　025　無音無重力のガラスの部屋で
189　033　カチャリと皿にあたる小さな音が
192　006　それにしても、と影をもたぬ寂蓼が、くびをかしげる。人に会わぬ。風はそよとも吹かず、自分の足音さえきこえな
192　009　あの音は、幻聴かも？　とぎれとぎれに聴えてくるが、

おとうさん
151　029　おまえをおとうさんと呼んでいる娘を裸にし

おどおどして
146　051　おどおどしているわたしの手をとって

おどかし　脅かし
142　113　歴史を作る者をたえず脅かしつづけてきた基本的なイメージである

おどかす　脅かす
036　023　脅かす影は誰だらう
167　064　脅かすような慰めるような圧力を加えてくる

おとこ　男
040　017　壁の下でマッチをする男のために
041　021　錆びた鉄柵に凭れる小男の悲哀よ
051　009　「この男の顔色は……」
052　010　あなたが男を誘惑するはずだった可愛いい頬の黒子のことを
054　048　死んだ男のために
056　002　夕暮のなかで煙草をすっている男がいる
056　010　抱きあった若い男女になって
058　009　踊っている男女の影がアスファルトに落ちてきます
060　009　ときに一人の男が
060　013　孤独な道を歩いてくる男だけが
060　018　黒い喪服をつけた男の
065　003　部屋住いの男にとって
065　012　男は待っていた、一体待つことに
065　025　わけもなく涙をながす男の
065　043　どの窓も、耳をすましていた。男は
065　048　星も月もない夜、毛布にくるまった男は
068　013　十九歳の男は　海にむかって
068　033　十九歳に別れを告げた男は
071　015　家族からはぐれた男の子は
072　043　負け馬に賭けてきたぼくのような男には）
084　015　ながく髪を刈ったかるい男が
085　012　みかけより真実を飾らぬ男だ
085　016　銀メッキの光りをうかべた不敵な男だ

085 028 いつも刃を上にむけている親切な男だ
086 008 海岸から男たちの影を洗い去るであろう
097 010 あのブロンドの若い男は、動物になる夢を持たなかったろう。
097 012 サアカスでブランコをする男は、
106 036 不吉な羽ばたきをして　地面を歩く黒い鳥の男たちもいる
124 003 三人の男は　いまはトンズラ
127 024 ときに男をさびしくさせる
129 005 殺された男の丘もみえない
130 004 男の首が二つ
131 001 木を伐り倒す男らしく
131 008 男はしきりに木に還りたがった
133 019 耳うちするあやしき男から
140 008 男の世界は終った
145 013 何かを思い止るようにと一人の男が一匹の犬にとめられていた
145 016 固いパンの男がゼリーの女に食べながらストレートに話し合おうと云っていた」
147 012 生きることに怖れも困難も感じない髪の毛の薄い男になっていた
148 051 若い男女でいっぱいのフラワー・センターに立ちよって、
151 001 まず男だ
151 015 なんと魅力のない五十六歳の男だろう
151 044 ずいぶん手間暇のかかる男になっている
160 013 コーネリアスという無名の男の　涙が出るほどおかしな物語
160 018 観客のいっぱいつまった劇場で　司会役の若い男から
170 012 さびしい男の朝の独白）
170 025 わずかに男は苦笑し
171 003 男と女は一緒にいると
171 014 はぐれペンギンの男は思う
173 029 頭蓋骨を射ちぬかれて死ぬ一人の男
177 002 約束のように守る男なら
180 011 「女の子の心理」なんて私だって判んないですよ。私だって「男の子の心理」は判んないですからね。お年寄り
184 011 アイルランドとスペインの混血の男と
185 013 一対の男女の世界では、甘美な
185 014 幻想と化することを証した一人の男が

おとし　落し
010 013 ヒバリが墜落してくる
017 043 駈け出すと枝から逆さに墜落し
023 013 巨大な鳥になって夜の空に墜落し
034 015 あやまってランプを落し
054 077 僕はなんにも見落しはしなかった
055 058 急転直下堕落していったあの
089 025 編物をしていた手から毛絲の玉を落しました

おとしより　お年寄り

180　011　「女の子の心理」なんて私だって判んないですよ。私だって「男の子の心理」は判んないですからね。お年寄り
180　017　だからといってお年寄りの心理を甘くみてはいけませんよ

おとせ　落せ
020　011　皿に落せば貝のひびき

おどっている　踊っている
058　009　踊っている男女の影がアスファルトに落ちてきます

おどっている　踊ってゐる
003　013　窓を開けると雪が踊ってゐる

おとづれ　訪れ
035　023　おそらく明日訪れてくるだらう
100　038　おお　訪れたとみるまに
162　014　いつかは訪れる忘我の果ての
180　052　とびきり冷たい夏の訪れである

おとづれた　訪れた
100　038　おお　訪れたとみるまに

おとづれてくる　訪れてくる
035　023　おそらく明日訪れてくるだらう

おとな　大人
059　026　大人になった幻影の子よ
088　018　それから大人たちの仕事

おとなしい
142　058　ぼくたちはやがて　比較的おとなしい分裂病者として

おとなしく
108　017　おとなしくサンドイッチを食べながら
142　060　精神病棟で比較的おとなしく死ぬだけだろう

おともなく　音もなく
019　006　音もなく音なく
023　003　音もなく日ぐれがきたといふ
043　013　音もなく　部屋の扉がひらく
045　006　音もなく空を走る稲妻を見あげてゐる
066　038　すると不意に、一枚の戸が音もなくひらき
073　015　音もなく歩いていった
186　022　音もなく発車し到着しますからね！

おどらせる
126　015　奇蹟の冒険に胸をおどらせるだろう

おとらぬ　劣らぬ
186　080　誰かが寄賭してくれたナポレオンの一壜もいずれ劣らぬ時間の傑作だった

おどり　踊り
054　081　人々の笑いと踊りと宴会とのなかに
056　011　廃墟のなかを踊り狂っているのが見えないわけではない

おどりくるっている　踊り狂っている
056　011　廃墟のなかを踊り狂っているのが見えないわけではない

おどりたつ
054　165　おどりたつ群集をおしのけ

【問題点あり】おどりたつ　躍りたつ

おとろえ　衰え
165　028　わたくしは病み衰えた父の腕に
188　004　どうも、視力が衰え、

おとろえた
047　017　おとろえた視力の闇をとおして

おとろえた　衰えた
165　028　わたくしは病み衰えた父の腕に

おどろかさな　驚ろかさな
067　015　ぼくをすこしも驚ろかさない

おどろく　驚く
106　004　これがみんな詩人だといったら　たいてい驚く

おなじ　同じ
035　017　同じ廊下で
041　004　やっぱり同じ陽が照り
041　094　あの人たちと同じやうに股いでゆけるだらうか
046　034　同じ木の手摺につかまり　同じ迷宮の方向へ降りてゆく
061　150　同じ霧の階段に足をかけ
061　151　同じ迷宮の白い渦のなかに消えてゆく。

106　002　みんな同じポーズで　いっせいに眼を
142　007　　同じことがギリシアやスペインやトルコでも起っている……
142　009　こうした　同じことだ　という作為的な留保がなされるかぎり
143　005　何度も同じ夢を見て
145　010　とエンジェルと同じ肌色の奥まで開拓して見せていた
146　039　同じようなドアが行手に
148　011　どちらの友も、同じ大学で顔をあわせ、
148　012　新宿の同じ酒場の常連で、同じ雑誌の仲間だったが、
148　031　同じ輸送船でスマトラ島に送られた転属組の十三人だった。
160　022　（公衆の面前では　場違いな人間というのと同じだ）
175　013　同じ雨の音を聞きながら
175　015　きみとぼくは同じ一枚の画面の中にいる
177　027　その恐ろしさにといっても同じだが
188　058　ところで、きみは同じ手紙の後半で、
193　018　同じ風景は二度と現れない
193　020　同じ時は決して戻ってこなかった

おに　鬼
013　013　鬼になる子が

おね　尾根
190　006　峰から昇り尾根に沈む日月

おの　斧
090　004　斧と鋸が

おののき
136　021　恐怖におののきながら

おののく
061　215　生と死の予感におののく魂のように、
061　226　死と生の予感におののく魂のように、
167　040　かすかにおののくのである

おのれ
085　015　おのれについては何も語らぬ
086　005　おのれの姿を砕けた岩のうえにみつけだす
101　014　なにものよりも　おのれ自身に擬する銃口を
161　012　たが　おのれの裁き手は
161　013　おのれではないから
161　018　おのれを赦せぬ理由は
161　023　わずかに赦すおのれを許すことで

おば　叔母
160　060　最後は叔母のクララが遺体をもらいさげていった

おはか　お墓
053　022　いつのまにかわたしはお姉さんのお墓の前に立っています
053　062　お墓のなかでお目覚めになっているお姉さん！

おはなばたけ　お花畠
069　017　とてもきれいなお花畠があったんだって

おはよう
156　018　「おはよう」のかわりに

おび　帯
003　007　杳い寒帯から運ばれたミルクに溺れる頃
017　038　もう繃帯もまにあはない頃になって
026　028　黒い眼帯を外して
108　032　みはるかす何とか連山は紫の帯
118　013　あるいは繃帯をした
144　016　霧の襷か雲の帯
148　052　グロテスクに繁茂する熱帯植物を観賞した。
154　020　錦の帯がするすると垂れてくる
169　001　繃帯にふれたあとの
176　002　繃帯をほどくように

おびえた
133　011　おびえた窓枠のかげシャッターのうしろ

おびただしい
025　040　おびただしい鶯たちが眼をつぶる
026　017　おびただしい植物のまへで立止まると
028　035　おびただしい製品とともに
028　041　おびただしい自然を覆ふ霧はやがて見えなくなるところ
033　003　いまおびただしい影のなかでもがく
038　011　おびただしいドアがあって
041　036　おびただしい暇潰しのなかでうっとりした
058　026　もみあうおびただしい影をぬってゆきます
061　222　おびただしい灯の窓が、高架線の上を走ってゆく。
061　223　おびただしい灯の窓が、高く夜空をのぼってゆく。
073　012　その下におびただしい輸送船が沈んでいた

おびていた
054　011　予感はあらしをおびていた

オブ
146　049　きっとここから出してあげますよ（アイル　ゲッ　チュー・アウト・オブ・ジス）」

おぼえて　覚えて
052　018　どうしてわたしが覚えていなければならないのか
147　005　生きることに困難を覚えていた青年時代だったら

おぼつかない
174　016　再起はおぼつかないという報らせを受けてから、

おぼれ　溺れ
003　007　杳い寒帯から運ばれたミルクに溺れる頃
024　001　ふせた耳の上でふと風が鳴る　くずおれた月光の雫に溺れ
079　005　青空の無のなかに溺れようとしている

おぼれる　溺れる
003　007　杳い寒帯から運ばれたミルクに溺れる頃

おまえ
055　002　おまえはただ遠くへ行こうとしていた
055　005　おまえの濡れた肩を抱きしめたとき
055　013　背負い袋のようにおまえをひっかついで
055　026　おれとおまえのはかない希望と夢を
055　038　おまえはおれの責任について
055　039　おれはおまえの責任について考えている
055　041　おまえは禿鷹風に化粧した小さな顔を
055　046　おまえは愚劣な謎をふくんだ微笑を浮べてみせる
061　082　「おまえはからっぽの個だ
061　083　おまえは薄暗い多孔質の宇宙だ
061　084　おまえは一プラスーに
061　088　おまえの多孔質の体には
061　090　おまえのからっぽの頭には
064　020　ーーおれはおまえをいれる立棺だよ。
065　040　わたしはおまえの血を飲みほした」
070　027　おまえの熱い血の管は
070　045　おまえの胸をおしひらく。
070　057　おまえはなにもかも諦めたようにみせかけて、
088　002　おまえは仔兎のように
088　006　あどけないおまえの声は　いつもぼくに
088　009　ぼくが知っているのは　おまえが生れる前のことだ
088　010　おまえが生れてからのことは
088　011　なんでもおまえの方がよく知っている

088　024　おまえの微笑は
088　030　いつまでもおまえに向きあっていたいのだよ
088　031　おまえは小さな手で
088　039　そうしておまえは自分のまわりに
088　043　おまえの世界には
088　059　おまえを高く抱きあげて
088　062　おまえが言い
088　069　おまえと歩むこの道は
088　078　よく舌のまわらぬおまえの節廻しにあわせて
112　019　おまえは今朝も蛇口のまえで
112　027　おれたちがどんなに大きく敗れ　おまえたちがどんなに小さく勝利したか
112　031　まっすぐこちらを見ながらおまえは何も見ていない
112　035　それがおまえの獲得した一切なのか
112　037　口真似のうまいおまえの仲間は
112　046　運命は一瞬の光でおまえたちを数える
151　021　とことんまで生きる気なんだろうおまえは
151　022　罰を受けつづけることに満足を覚えるマゾヒストなんだおまえは
151　029　おまえをおとうさんと呼んでいる娘を裸にし
151　042　おまえは誰にも似ていない
157　005　おまえは　そのまま詩だ
159　010　「おまえも達者でね」
167　051　おまえはうやうやしく何を葬ってきたのか
168　012　変幻するおまえの姿に出あったから

おまへ
033　021　おまへをとりまく五つのドアである
035　003　おまへたちの舌の上へやってくる
040　024　東方からおまへのからだを侵しはじめる
041　088　おまへは決して遠くへは飛べぬだらう
041　089　おまへの羽は

おまへたち
035　003　おまへたちの舌の上へやってくる

おめでたい
189　002　おめでたい敗者に言う

おもい　思い
037　021　ランプよりも巨大な思い出の下で
053　060　夢を見ながら眠る習慣が　こんなに悲しいものとは思いませんでした
054　058　大学生は低い声と思いやりのある眼ざしで話しはじめる
062　023　思い乱れたわたしの頭髪にさし込まれ
078　010　（その友の名はもう思い出せない）

088　007　ぼくの持っていない愛情を思い出させる
094　013　会ったことのない人たちのことを思いうかべているもの
095　020　死にはデリケートな思いやりがあった
096　010　とあるバーのドアを押して入ったと思いたまえ
099　010　ぼくの記憶は思いがけない不幸のシークェンスで翳ってくる
108　005　物思いにふける
113　035　自己の愚かさに思いあまって
136　001　思い出は虹だから
140　010　舞台裏で物思いに沈むあわれな役者
142　010　われわれに対する思いやりは
143　009　寒風に吹かれるみじめさを思い
145　013　何かを思い止るようにと一人の男が一匹の犬にとめられていた
146　041　「もうここにはいないのかしら？」と思い
150　017　しかし、友人たちは仲間のだれかれをあてこすっているのだと思いこみ、
151　019　自分でもそう思い人にもそう思われているのに
151　043　自分を思い出すのに
154　005　思い思いにさまよう
159　015　しきりに思い返される
160　042　陽気であれ！　思いわずらうなかれ
174　017　ぼくはきみとたった一ぺん打った碁のことをときどき思い出していた。
174　020　会心の笑みをもらすきみを前にして、ひどく口惜しい思いをした。
175　014　別々の思いにふける子供のように
183　018　若い証券マンが一人で物思いに耽っている
186　086　思いは千々に乱れて消えていき
188　036　いずれ、順番がくるだろうと思いながら暮しているが、
192　025　必死の思いで、前方の真っ暗闇を凝視するが、もう何も見えぬ。

おもい　重い
084　029　重い任務をになったレデイたちです
094　023　海はこんなに心に重い
103　020　旧約の秤にかけてもずっしり重い
187　002　ぜいたくな心は重い

おもい　想ひ
041　059　やはり濡れて陸橋に佇んでゐることを想ひ

おもいあまって　思いあまって
113　035　自己の愚かさに思いあまって

おもいがけない　思いがけない
099　010　ぼくの記憶は思いがけない不幸のシークェンスで翳ってくる

おもいだす　憶いだす

054　121　いまは自我をみつめ微かなわらいを憶いだす

おもいだす　思い出す
151　043　自分を思い出すのに

おもいで　思い出
037　021　ランプよりも巨大な思い出の下で
078　010　（その友の名はもう思い出せない）
088　007　ぼくの持っていない愛情を思い出させる
136　001　思い出は虹だから
151　043　自分を思い出すのに
174　017　ぼくはきみとたった一ぺん打った碁のことをときどき思い出していた。

おもいで　想出
025　045　悪い想出よ

おもいみだれた
059　023　おもいみだれた母と美しい少年のボートが

おもいみだれた　思い乱れた
062　023　思い乱れたわたしの頭髪にさし込まれ

おもいやり　思いやり
054　058　大学生は低い声と思いやりのある眼ざしで話しはじめる
095　020　死にはデリケートな思いやりがあった
142　010　われわれに対する思いやりは

おもいわずらう　思いわずらう
160　042　陽気であれ！　思いわずらうなかれ

おもう　思う
052　011　わたしはかぎりなくうらめしく思う
058　053　一杯のコーヒーをまえにして考えようと思うのです
075　014　死のうと思うまえに
110　007　思うことは呪いになる
143　012　岩床につくばうあさましさを思う……
166　010　一本の煙草を思うままに吸えたら
171　014　はぐれペンギンの男は思う
186　047　理解されないと思うのは傲慢、相手に対する侮辱です！
188　007　思うようにいっていません。
188　014　蓄膿症ではないと思うのですが、とにかく鼻が詰り、

おもうまま　思うままに

166　010　一本の煙草を思うままに吸えたら

おもえた
055　016　海を飛んでゆく耳鳴りのようにおもえた

おもえた　思えた
055　007　おれには港のように思えたのだ

おもえて　思えて
059　018　なんだか迷っていそうにも思えてくる

おもかげ
183　024　遠い昔のおもかげを懐しんだり

おもかげ　面影
052　002　忘れがたい悲しみの面影がうかぶとき
059　010　今ではなつかしい面影のようにうすれてしまった
150　073　きみから送られた昔の雑誌を手にして、なつかしい面影に出会い、

おもさ　重さ
041　105　一枚の紙片のなんといふ重さ

おもたい
066　015　おもたいよろい戸をおろして

おもたい　重たい
047　007　重たい時計の振子の音……
048　032　地平線がのせている人間の重たい故郷
049　005　重たい悲しみに塗りこめられた人間の影がある。
050　026　きみはただ重たい靴のなかに足をつっこんで静かに横たわったのだ。
054　016　重たい軍靴と薬品の匂いを残し
055　024　疲れた重たい瞼が
056　004　重たい誰かの靴音が
061　005　重たい不安と倦怠と
064　024　石の屋根の上には重たい雲が垂れこめていた。
101　009　重たい刑罰の砲車をおしながら

おもたくなった　重たくなった
025　036　重たくなった頸に熱い風が

おもちゃ
151　030　おもちゃにすることもできるのである

おもった
035　015　一滴の余剰を待たうとおもった
055　014　航海に出ようとおもった
126　019　よく見ておこう　科学の問題とおもったものが
130　002　夜の底がひびわれたとおもったら

おもて
125　004　縦横家の仮面のうらとおもてに

おもふ　思ふ
039　016　哀れなことにちがいないと思ふ
039　052　高い木の頂まで攀ぢてみたいとひそかに思ふ

おもむく　赴く
054　009　死地に赴く僕たちに

おもんじられる　重んじられる
106　009　悪い空気のなか　鳥類のコンベンションが重んじられる

おや
005　024　おや　天使が泣いてゐる
014　021　おやおや狂気がくるわいと
053　030　みんな仲よく小鳥のように一つの枝でおやすみなさい
093　001　……おやすみ
146　059　あなたが傍でおやすみになっていらっしゃる
152　033　じゃあ　おやすみ
189　012　おやすいご用だ

おやおや
014　021　おやおや狂気がくるわいと

おやすみ
053　030　みんな仲よく小鳥のように一つの枝でおやすみなさい
093　001　……おやすみ
146　059　あなたが傍でおやすみになっていらっしゃる
152　033　じゃあ　おやすみ

おやすみなさい
053　030　みんな仲よく小鳥のように一つの枝でおやすみなさい

おやすみに
146　059　あなたが傍でおやすみになっていらっしゃる

およぎ　泳ぎ
082　002　七月は空を泳ぎまわる魚
097　014　空しい喝采のなかで、永遠に空中を泳ぎつづけるだろう。

およぎまわる　泳ぎまわる
082　002　七月は空を泳ぎまわる魚

およばぬ
174　028　ぼくの考慮のおよばぬところが

おりた
054　076　幕がおりた舞台裏から……

おりてゆく　降りてゆく
027　023　わづかな煙はグラスの中へ降りてゆく
046　034　同じ木の手摺につかまり　同じ迷宮の方向へ降りてゆく

おりまげて　折りまげて
152　014　ちょっと折りまげてこすりつけ

オリーヴ
005　026　オリーヴのガラスのテラスで
094　009　ここからオリーヴの海が見える

オルガン
009　002　黒いオルガンが裂けて
014　017　パイプオルガンも大変不満らしい
023　014　または黒いオルガンのやうに
106　022　さらにいっそう素晴しいのは鼻だろう　内なるオルガンの全神経が

オルケストラ
014　019　自然にオルケストラが編制されたね

おれ
024　001　ふせた耳の上でふと風が鳴る　くずおれた月光の雫に溺れ
036　005　それらの悼ましい怒でおれの日記を汚すな
036　006　だがおれは声高く笑ふために
036　012　おれの睡眠を呼び覚ます
036　024　おれの影はだんだん樹木の影に似てきた
055　007　おれには港のように思えたのだ
055　011　おれはずぶ濡れの悔恨をすてて
055　017　おれたちの夜明けには
055　020　ところがおれたちは

055　023　おれは明けがたの街にむかって唾をはいた
055　026　おれとおまえのはかない希望と夢を
055　033　いつまでもおれたちのひき裂かれた心と
055　036　おれたちはおれたちの神を
055　037　おれたちのベッドのなかで締め殺してしまったのだろうか
055　038　おまえはおれの責任について
055　039　おれはおまえの責任について考えている
055　040　おれは慢性胃腸病患者のだらしないネクタイをしめ
055　047　おれは憎悪のフォークを突き刺し
055　052　ああ　おれは雨と街路と夜がほしい
055　062　頸輪ずれしたおれの咽喉につめたい剃刀をあてる
055　063　おれには掘割のそばに立っている人影が
064　006　ーーおれは運ばれてきたんだよ。
064　020　ーーおれはおまえをいれる立棺だよ。
102　001　おれが古いいくさの歌をうたったら
102　005　おれが古いいくさの歌をうたったら
102　009　おれが古いいくさの歌をうたったら
102　013　おれのことを憶えているなら
102　017　おれに訣れを告げたら
102　021　おれのことは忘れてくれ
106　035　「おれは詩を書いているんだ」　カアカアカアカアカアカアと
112　005　おれを見るな　さあ握手
112　013　過去でしか会うことのないおれたちだ　何の秘密もあるものか
112　027　おれたちがどんなに大きく敗れ　おまえたちがどんなに小さく勝利したか
112　049　おれたちが本当に別れるのはこれがはじめてだが　ユダの接吻はいらない
118　006　おれはもう　うんざり
128　061　おれはもう会わない
128　068　おれの心は
128　073　おれのイメージに
128　080　おれがいなくなったら
128　092　ネクタイしおれる
130　005　一つはおれだが
130　016　おれはいいが

おれた　折れた
055　028　折れた埠頭のさきは
080　018　いつまでも折れた帆柱を抱いているかぎりは

おれたち
055　017　おれたちの夜明けには
055　020　ところがおれたちは
055　033　いつまでもおれたちのひき裂かれた心と
055　036　おれたちはおれたちの神を

055　037　おれたちのベッドのなかで締め殺してしまったのだろうか
112　013　過去でしか会うことのないおれたちだ　何の秘密もあるものか
112　027　おれたちがどんなに大きく敗れ　おまえたちがどんなに小さく勝利したか
112　049　おれたちが本当に別れるのはこれがはじめてだが　ユダの接吻はいらない

おれて　折れて
094　006　ぼきぼき葦は折れて水垢のうく岸辺

おれまがった　折れまがった
152　022　折れまがった用済みの黒い頭と

おれる　折れる
066　027　折れるように飛びおりる姿勢をとった、

オレンジ
095　012　まがりかどにオレンジの外燈がひとつ

おろか　愚か
026　015　わたしは愚かしい知識の墓場を
061　185　わたしはどこまでも愚かですから、
113　035　自己の愚かさに思いあまって
193　010　愚かな戦争

おろかさ　愚かさ
113　035　自己の愚かさに思いあまって

おろかしい　愚かしい
026　015　わたしは愚かしい知識の墓場を

おろかな　愚かな
193　010　愚かな戦争

おろかにも
100　043　おろかにもぼくはながいことそう信じてきたのだ

おろして
066　015　おもたいよろい戸をおろして
089　006　あおざめた河明りを見おろしている人たちといっしょに

おわかれ　お別れ
100　022　お別れの短かい放浪がはじまった
103　013　（友だちとお別れのパーティをして
115　005　お別れの言葉はいらない

おわり
100　013　なじめなくなった季節のおわりに
100　059　それは　ぼくの希望の「おわり」にふさわしい多彩な夏であった
101　039　死の穫りいれがおわり　きみたちの任務はおわったから
103　029　惨劇のおわりにはうず潮がひとつ

おわり　（「おわり」）
100　059　それは　ぼくの希望の「おわり」にふさわしい多彩な夏であった

おわり　終り
053　051　始めがあって終りがあるのではなく
061　202　美の終りには、
062　001　ひとつの年が終り
062　036　始めも終りもない夢のなかを駈けめぐる
065　013　終りがあるのだろうか？　影深い谷が
065　051　終りがあるのだろうか？　永遠の眠りが
079　017　歴史の終りを
108　015　存在はすべてある終りに向って動く
112　047　待ちどおしいぞ　世界の終りが
125　014　この業苦にいつ終りがくるのか
148　002　去年の一月の終りに、
154　003　ふたつとない旅の終りの
160　009　そんな今年の冬も終りに近い　ある日の真夜中
167　070　いつか終りがくるように
173　040　はてさて　七十年代も終りですか
190　002　自然の風景の始めであり終りである

おわりに　終りに
061　202　美の終りには、
108　015　存在はすべてある終りに向って動く
148　002　去年の一月の終りに、
160　009　そんな今年の冬も終りに近い　ある日の真夜中

おわる
101　005　こんなふうにおわるのはなにも世界だけではない
119　014　わたしの歌のおわるまで

おわれた　追われた
104　008　太陽に追われた記憶が戻ってくるだろうか

おんがく　音楽
003　001　カレンダーに音楽が流れ

008　017　レコオド音楽にクチあいて　緑の藻を夕べてゐる
014　023　花のある音楽につれて
018　014　音楽が室内に溢れてくる
038　017　でも音楽だけはいつでもやってゐてほしい　と
054　125　音楽はたえまなく狂気を弾奏しなければならぬ
084　019　土人の音楽があります」
125　005　六月の雨はしきりにふり　音楽はとめどもなく
185　007　慰めを与えた哲人風の音楽家の

おんがくか　音楽家
185　007　慰めを与えた哲人風の音楽家の

おんしつ　温室
148　050　サン・シャインという温室の喫茶店で休憩し、

おんな
011　010　おんなの腕はやはらかく

おんな　女
003　009　盛んに蛹を焚く女のプロフイル
006　010　少女が碧い眼をした人形を抱へて出てきたが
007　013　阿片の軽艇（ボート）は霧の中へ青い泡を残して去るべく一人の少女を誘拐
048　014　彼女だけが触れている
048　038　彼女の位置はどこにある
048　040　彼女の憂愁はどこにある」
054　117　不潔な女のベッドの方へ進んでゆくだろう
056　010　抱きあった若い男女になって
058　009　踊っている男女の影がアスファルトに落ちてきます
058　012　むかし酒場で知りあった女が
058　034　うつくしく欠伸をしている女がいます
061　026　酒と女におさらばして、
061　032　狂える女が歌っていた。
065　018　空虚であった。白い翼をつけた女が
065　038　いたずらな月が生んだ魔女は
065　046　異国の女のように、町をみすてて
066　006　女の子がひとり涙をおさえて立っていた、
066　018　たちのぼる煙りのなかの女をぼんやり眺めていた、
066　026　わかい女のやせた顔がのぞき
068　001　忘れかけた女から
068　021　それから水着の女達が
068　027　やるせない女と海の思出があった
068　034　見知らぬ海辺の女に
069　004　青白い少女が

069 005 もうひとりの少女に話していた
069 011 この少女のように
069 019 少女の記憶は
069 028 かれの帰りをまっている女の
069 039 ふたりの少女は翼の影をよせあった
070 010 水死した処女の乳房をさぐりつづける。
077 039 やさしい女のひとの手がおかれている
082 018 唖の少女になって！
084 007 散ってゆく落葉の女を尋ねて
084 031 女たちの狂った笑いがたかくなり
085 024 女たちの血のなかから愛の喜びをしぼりだそう
086 006 さびしい笑顔をのこして女は去った
100 061 ペイヴメントには水玉模様の少女があふれ
105 010 女たちの涙か、夕べの吐息か。
106 028 懲りずに実験してみるべきだったろう　一歩戸外に出ると女たちの笑いで
112 039 さびしい酒場の女たちを相手に
120 011 処女の乳房のように
121 012 幻影の女とたわむれる
137 015 ある日　女は狂った目をして言った
138 008 大好きな女の
144 010 いさら波打つまぼろしの暗女の里は遠い
145 008 レスビアンの女たちの痙攣は不信者の地獄の笑いの一型態で　ブリッジして反った肉体の
145 016 固いパンの男がゼリーの女に食べながらストレートに話し合おうと云っていた」
146 029 そこでは醜い顔の二人の女が
146 033 「あの女だ！（ザッツ・シー）　早く掴まえて！（ゲット・ハー）」
148 034 ぼくたちは女気なしの部屋で炬燵を囲み、
148 051 若い男女でいっぱいのフラワー・センターに立ちよって、
151 032 一緒に寝た女の数は
151 037 有難いことにどんな女にもむだがなかったから
151 039 幻の女からはどんどん遠ざかってしまった
153 009 うらわかき女の胴を斬れよ
156 004 女たちに
156 007 女たちから
156 038 完全に処女性を保っている
166 029 一人の女も知らずに
168 006 やるせない女人への郷愁があった
171 003 男と女は一緒にいると
171 005 女は狂う寸前の眼つきをして
171 013 それが女の心に焼きついたのだろうと
173 025 女などには目もくれなかった
173 030 林立する墓石の女
176 001 少女は
176 014 少女の頬と肩になぶりかかる

176　017　悲しいかな少女は
176　031　少女はふさふさした垂れ髪で
180　003　女子とあなどり
180　010　「御手紙の内容、何のことやら判りません」なら「女の子の心理」がどうだってことも関係ないじゃないですか？
180　011　「女の子の心理」なんて私だって判んないですよ。私だって「男の子の心理」は判んないですからね。お年寄り
180　024　貴方に「女の子の心理」が判んなくたってあたりまえなんです。貴方は心理学やってんのじやないのでしょうか
183　022　よちよち歩きする可愛いい女の子に
184　001　すごい金髪美人である彼女は
184　014　たいへん誇りにしている彼女は
185　013　一対の男女の世界では、甘美な

おんなたち　女たち
084　031　女たちの狂った笑いがたかくなり
085　024　女たちの血のなかから愛の喜びをしぼりだそう
105　010　女たちの涙か、夕べの吐息か。
106　028　懲りずに実験してみるべきだったろう　一歩戸外に出ると女たちの笑いで
112　039　さびしい酒場の女たちを相手に
145　008　レスビアンの女たちの痙攣は不信者の地獄の笑いの一型態で　ブリッジして反った肉体の
156　004　女たちに
156　007　女たちから

オーエル
142　094　オーエルの未来小説に描かれた　党　は

オーケストラ
125　008　悪魔のオーケストラの練習がうるさい

オーデン
142　048　いずれにしても　ぼくたちの多くは　まだW.H.オーデンの
145　025　スペイン内乱で知ったオーデンもいなくなった
145　028　オーデンはスペイン内乱に参加しなかったというニュースを聞いた
160　064　アメリカのオーデンといわれたが

オーデン　（W.H.オーデン）
142　048　いずれにしても　ぼくたちの多くは　まだW.H.オーデンの
145　025　スペイン内乱で知ったオーデンもいなくなった
145　028　オーデンはスペイン内乱に参加しなかったというニュースを聞いた
160　064　アメリカのオーデンといわれたが

オーバー
061　194　十一月の寒空に、わたしはオーバーもなく、
089　036　オーバーの襟をたてて
105　006　オーバーを着てゆこうか、脱いでゆこうか、

147　014　オーバーウェイトで引退したボクサーみたいに

オーバーウェイト
147　014　オーバーウェイトで引退したボクサーみたいに

か　(虻)
091　008　虻よりはやいガソリンの微風に乗ってゆく

カアカアカアカアカアカア
106　035　「おれは詩を書いているんだ」　カアカアカアカアカアカアと

かい　貝
012　014　日傘は貝殻をまねてゐる
015　014　貝殻の匂のする帽子は
016　005　貝殻の道をかけなさい
020　011　皿に落せば貝のひびき
025　004　水にながれる貝殻がねぢれて
041　038　あの汚れた貝殻　岩に砕ける憎悪の波よ
061　019　水晶　花　貝殻が、世界の空に
106　021　かれの指の爪貝は　恋人たちがしゃぶりたがるほど美しい
176　021　真珠貝の孤独は

かい　飼い
087　001　いつから　きみは飼いはじめたのか

かい　買い
058　047　ひとびとのうしろに行列をして夕刊を買い

かい　櫂
046　008　櫂で虚を打ちながら　必死に進む舳の方位を
057　018　櫂はぼくに全身をあたえ
061　009　櫂で虚空を打ちながら、

かいが　絵画
054　124　絵画は燃えるような赤でなければならぬ

かいがら　貝殻
012　014　日傘は貝殻をまねてゐる
015　014　貝殻の匂のする帽子は
016　005　貝殻の道をかけなさい
025　004　水にながれる貝殻がねぢれて
041　038　あの汚れた貝殻　岩に砕ける憎悪の波よ
061　019　水晶　花　貝殻が、世界の空に

かいがん　海岸
059　003　明るい海岸のボートへ連れさっていった
059　016　海岸に捨てられたボートを眺めていると
059　021　海岸への道が不思議と宙にうかんでくる
068　007　夏のうちに　海岸へゆくことにしよう
086　008　海岸から男たちの影を洗い去るであろう
104　005　わたしの丘や森や海岸は　すでに
148　030　一の宮海岸の近くの松涛閣に集まったのは、

かいきする　回帰する
191　012　回帰する万物よ

かいきな　怪奇な
033　005　怪奇な囁き

かいきゅうこうぞう　階級構造
142　095　すでに現実に存在していて　いわゆる階級構造とは全く無縁な

かいきょう　海峡
112　008　ジョホールの血の海峡　ブキテマの焦げた丘

がいこく　外国
146　005　外国行の切符を買ったのですが
146　045　振りむくと小柄な中年の外国人が
156　024　いかに私が外国かぶれでも
173　011　外国の人質を殺すか殺さぬかで

がいこくいき　外国行
146　005　外国行の切符を買ったのですが

がいこくかぶれ　外国かぶれ
156　024　いかに私が外国かぶれでも

がいこくじん　外国人
146　045　振りむくと小柄な中年の外国人が

がいこつ　骸骨
056　009　アーク灯のかげで多くの骸骨が

かいこてきな　懐古的な
008　006　げられ　叢には懐古的な蛇はゐない

かいこん　悔恨
055　011　おれはずぶ濡れの悔恨をすてて
062　048　悔恨の影をとどめず
102　018　悔恨の波はどこまでもうねってゆけ
125　010　悔恨をいやす運動がほしい

かいしんの　会心の
174　020　会心の笑みをもらすきみを前にして、ひどく口惜しい思いをした。

かいず　海図
015　006　海図の脈のどこかに消えてしまった
103　011　帆柱や舵や海図や羅針や救命ブイや銛や……

かいすいよくじょう　海水浴場
073　005　さびれた海水浴場の岸壁にぶつかって
108　001　海水浴場の

がいそう　外装
152　025　タバコの外装からセロハンをはずして

かいたいする　解体する
173　031　それで近代の伝説は消え　象徴は解体する

かいたくして　開拓して
145　010　とエンジェルと同じ肌色の奥まで開拓して見せていた

かいたり　書いたり
167　012　話したり書いたりすれば素晴らしいライフも

かいだん　階段
025　032　高く登ってゆく階段をとりまくのは
038　009　斜めにのぼる階段と
039　032　水の底にはいつも鏡のやうな階段があって
046　032　忘却の階段に足をかけ
050　002　あらゆる階段の跫音のなかから、
054　164　宮殿や政府の階段をとびこえ
061　150　同じ霧の階段に足をかけ
084　023　天国の階段からおりてきて
100　049　あらゆる階段の跫音のなかから

かいちゅう　懐中
028　046　技師の懐中にある正確な地形図は
036　010　いつも懐中時計は

057　004　いちどは犯罪許可証を懐中にして

かいちゅう　海中
046　025　この橋も海中に漂ひ去って　躍りたつ青い形象となり

かいちゅうどけい　懐中時計
036　010　いつも懐中時計は

かいつうして　開通して
186　043　新幹線が開通して以来、機会はいくらでもあったよ

かいて
173　050　いびきをかいて死んでいきながら

かいてい　海底
079　010　海底には
192　015　みるみる漆黒につつまれていく、ここは、もともと海底だったところではないか。冷気に身ぶるいし、
192　019　助かった！　まだ死にたくはない。眼は真珠に、骨は珊瑚になったとかいう、五尋の海底の父になるなんてごめんだ

かいてんする　廻転する
012　010　山では望遠鏡が廻転する
054　132　無言で蓄音器のレコードが廻転する

かいとう　回答
142　067　ブコフスキーが出した回答は

がいとう　外套
005　030　外套がやってくる

がいとう　外燈
095　012　まがりかどにオレンジの外燈がひとつ

がいとう　街燈
054　116　彼は唾をはく街燈のそばを通りぬけ

かいどくできぬ　解読できぬ
094　011　解読できぬ暗号のように近くて遠くあるもの

かいぬし　飼主
091　014　きみの季節は飼主のない猟犬のように飢えている

がいぶ　外部
028　006　意識の外部と呼ぶ空壜の堆積した世界よりも

106　011　外部の世界をうかがい　いまもじっと「時」をこらえ

かいへいおん　開閉音
167　004　あおられたドアの開閉音にあわせて

かいほう　解放され
142　075　拷問から解放され　自由を得るためには

がいぼう　外貌
106　038　詩人はもちろん屈してはならない　その外貌がどうであれ

かいほうする　解放する
100　041　敗戦がぼくの魂を解放する」

かいまみる
158　039　もはや暁紅をかいまみるまでもなかった

かいめつ　壊滅
084　014　戦争か進歩か壊滅か革命か

かいもの　買物
166　021　いつものように車で二軒分の買物をした
183　011　家路をいそぐ人も買物に出てきた人も
183　021　大きな買物袋をさげた母親のあとから

かいものぶくろ　買物袋
183　021　大きな買物袋をさげた母親のあとから

かいよう　海洋
101　038　奥地や海洋で　抵抗する住民をうちころす必要はない

かいらく　快楽
054　083　見よ　あばかれた社交術の快楽と有頂天とを
125　009　快楽もまっすぐのぼらなくなった
145　017　そんなカップルはどこにでもいて快楽のスプーンで苦痛の目方を計りかねていた
163　009　快楽と苦痛の結果がこれだ

がいろ　街路
055　052　ああ　おれは雨と街路と夜がほしい
058　029　これがほんとうの東京の街路ですが
058　040　街路樹の枯枝に
177　024　きみ自身の街路を行かなければならない

がいろじゅ　街路樹
058　040　街路樹の枯枝に

かいわ　会話
005　025　虹のあるウイットな会話は
028　024　如何なるゼスチュアが会話が取交はされたか

かう　買う
072　020　一枚の馬券を買うために
124　009　他方がそれを買う（ゴムの手袋をはめて）

かうほうした　解放した
074　023　若い魂を解放したカミソリの刃を

カウンター
098　001　カウンターのうしろで

かえし　返し
054　085　鍵は僕が失敬した　そしてもう決して返しはしない」
142　049　古い繰り返しのなかにいる
146　008　すぐ引返しましたが
148　028　とり返しのつかぬ時間が過ぎていたのである。
169　003　みなれぬ笑いを返し
187　022　くり返しの多いきみの歌が
193　017　単調なくり返しのようで

かえず　変えず
184　005　すぐ離婚したが夫の姓は変えずに帰国して

かえせ　返せ
039　092　泉よ返せ

かえってくる　帰ってくる
035　006　それは一羽の鳥よりもはやく帰ってくる

かえってゆく
053　039　狂おしく地上にかえってゆく
093　029　それは血や光りがかえってゆく水平線のない世界だ

かえら
061　047　あなたはうしろをふりかえらなかった、
061　052　あなたはうしろをふりかえらなかった、
077　001　死んだ兵士を生きかえらせることは

102　020　若き日はもうかえらない
180　040　何度でも立ちかえらなければならない

かえらな　帰らな
059　008　母はついに帰らなかった
069　013　帰らなければならない

かえり　帰り
066　040　わたしの帰りを待っていた。
069　028　かれの帰りをまっている女の
111　003　どこへも帰りたくない

かえる
054　039　だが僕は最初の路地で心弱くもふりかえる
062　053　岩壁へかえる鴎のなき声が
072　068　自分ひとりにかえるのは
077　011　いくたびか生きかえる兵士たちが
077　034　再び生きかえることはないだろう）
102　019　太陽はさっさと素裸で海へかえる
148　022　土にかえる目立たない姿勢をしていたが、
177　025　かえるところがある

かえる　帰る
133　024　永遠に帰るべき家をもたない
140　005　行くところもなければ帰るところもない
190　001　帰るところはそこしかない
190　017　いつかきみが帰るところは

かえる　変える
028　047　地の脈を水の流れを変えるほど精密だが
167　045　光りのむきを変えると思ったこともあった

かお　顔
012　019　その中に沢山の兵士たちの顔がゐた
025　022　動くこともない顔を彫り
045　001　雨の顔が
045　005　主（あるじ）は　ふと雨の顔になり
046　018　父や母　また友の顔もゆらめいてゐる
049　001　天井の蜘蛛が私の顔にのりうつったようだ、
050　007　ゆがんだ顔をもてあましたり
051　009　「この男の顔色は……」
051　011　運命がある顔に達したとでも言うかのように、
052　027　飢え渇き卑しい顔をして

053 002 まだ悲しいひとつの顔が浮んだり消えたりしているのに
053 005 明るいひとびとの笑顔も
053 065 あなたのお顔も　だんだん忘れてゆきそうです
054 019 君のなやましい顔の痕跡をとどめて
054 080 衣裳と装身具の内側に　化粧のゆきとどいた顔の下に
054 112 決然たる拒絶者の愁い顔があらわれる
055 041 おまえは禿鷹風に化粧した小さな顔を
055 049 あぶらぎった一皿を平げたような顔をする
056 015 孤独な彼の横顔は
058 035 その横顔をぬすみ見ている紳士がいます
063 028 ふと血の気のうせた顔を見あわせて
066 009 かわいい顔をかくすと
066 026 わかい女のやせた顔がのぞき
069 029 動かない顔がある
070 011 わたしはのけぞらせた顔を
070 049 天井からのぞくのは霧の顔。
070 056 なんという青白い顔をしているのか
070 060 誰だ！　青白い霧の顔で
082 011 恍惚とした顔のように
083 003 さっきまで子供たちが戸口から顔を出していたのに
086 006 さびしい笑顔をのこして女は去った
089 024 やさしい人は　ふと顔をあげて
095 022 スムースなスムースなあなたの死顔を。
113 051 いびつになった世界の顔　そいつは
128 036 幻の顔を
133 009 行きあう顔色の底の底までわかって
146 017 横顔があなたにそっくりでしたので
146 029 そこでは醜い顔の二人の女が
146 046 笑顔で立っていて
148 011 どちらの友も、同じ大学で顔をあわせ、
148 026 そして、ふと顔をあげたとき、
155 020 知っている顔や
155 021 知らない顔をかきわけ
159 008 目顔でさりげなくうなずく
165 035 わたくしの顔が映るのである
165 037 すこし歪んだわたくしの顔が。
166 026 砲撃に耳をすますような顔つきで
172 012 霜枯れた顔ばかりである
173 019 どちらに顔を向けようか
173 022 かつてきみの横顔には自伝らしきものがあった
173 028 顔を赭めることなど全くなくなった
176 032 わけもなく顔をかくしている
177 023 とりちがえようのない顔を運ぶために

181　030　さっと顔色を青くする
188　043　此頃では、人の顔さえ見れば、誰彼となく病気の話で、
188　053　あの頃は若く、青い顔で咳をしていたが、
189　008　きみの顔を見たくない

かおいろ　顔色
051　009　「この男の顔色は……」
133　009　行きあう顔色の底の底までわかって
181　030　さっと顔色を青くする

かおく　家屋
167　047　一つの部屋のための家屋が傾くまで

かおつき　顔つき
166　026　砲撃に耳をすますような顔つきで

かおり
159　011　かすかに衣ずれの音と麝香のかおりを残して

かおり　香り
148　055　岩や空や、波や砂や、花の香りのする一日、
179　008　きつい香りがたちこめており
187　027　甘い香りのように地に融けていく

がか　画家
097　006　もし無慈悲な画家が牢獄を描くとしたら、

かかえきれぬ
063　003　かかえきれぬ暗黒が
063　009　かかえきれぬあなたの身体が

かかえて
093　004　本と煙草とウィスキーの瓶をかかえて
184　026　いま地球は恐怖で頭をかかえているのに。
188　082　いまさらのように、頭をかかえています。

かかえて　抱へて
006　010　少女が碧い眼をした人形を抱へて出てきたが

かがく　科学
054　030　「そこにはどんな科学が　哲学が
072　022　迷信も愉快だし、科学的検討もまんざらではない
126　008　と楽天的な科学者が言った

126　019　よく見ておこう　科学の問題とおもったものが

かがくしゃ　科学者
126　008　と楽天的な科学者が言った

かがくてき　科学的
072　022　迷信も愉快だし、科学的検討もまんざらではない

かかった
050　015　短かかった黄金時代－－
188　022　頭の禿げかかったひとりの老人が、
188　042　人生の下り坂にかかったときからである。

かかっている
048　023　壁にかかっている着物からぬけだし
095　003　さらに多くのものがかかっている
128　087　アンテナにひっかかっている
183　009　不況が心にのしかかっているからだ

かかない
129　018　汗をかかない肌と

かがみ　鏡
012　010　山では望遠鏡が廻転する
015　015　鏡のなかで眠ってゐる
017　014　望遠鏡をぐるぐる廻した
027　003　空虚な鏡のなかを
028　065　笑うものたち虫のやうな検微鏡下の虫たち
039　032　水の底にはいつも鏡のやうな階段があって
041　033　優しい眼鏡や柔かい手袋の明日の方まで湿してゐる
041　078　あなたのではない鏡のなかへ消えてゆく
045　020　古い鏡には
047　012　鏡がひややかに自虐を睨む
052　024　わたしはいまでも眼鏡のつかれをぬぐい
083　020　ああ　虚心の鏡に映る
085　003　きみの孤独をうつす鏡は
086　001　つめたい鏡のうえを吹く
106　033　鳥の巣型の髪のカットに　度のつよい眼鏡を糸でつるして
113　028　きれいにふかれた鏡のように
165　033　世界を映す鏡に
193　007　眼鏡の疲れをぬぐい

かがめて

133　012　背をかがめて小走る群集のなか
189　037　ゆっくりと身をかがめて手をのばす

かがやいていた　輝いていた
098　027　青空にくっきり聳えて輝いていた五つの尖塔

かがやいている　輝いている
061　099　「今日も太陽が輝いているね
106　020　かれの眼は　スプーンの銀のように輝いている

かがやかし
054　129　僕は眼をかがやかし涛のように喋べりかける

かがやかしい　輝かしい
044　009　御身は知ってゐる、世の輝かしい変貌を、

かがやき　輝き
163　017　必死に輝きをましている

かがやく　輝く
026　010　輝くチイズが供へられたという
040　027　輝くチーズを載せた車がとほる
062　042　輝く海をまえにして
093　031　輝く太陽を見た者はいない
176　022　落日に輝くばかりで

かがやける　輝やける
024　003　る　血液を噴き上げている白い管は輝やける噴水の愛撫をう

かかる
003　006　震へてゐる爪に霧がかかる
029　003　凭れかかる椅子もない
030　012　ドアの把手に手がかかる
039　111　月は遥かなる湖にかかる
058　022　日が暮れかかると
061　228　そのひとつひとつが消えかかる、
063　005　ぼくの腕に倒れかかる
093　010　かかる読書法は良い趣味以外のなにものでもない
119　004　ひたいにかかる空は
151　044　ずいぶん手間暇のかかる男になっている
172　008　どれだけ時間がかかるのか
176　014　少女の頬と肩になぶりかかる
189　028　これからひとりで食事にかかるところだ

かかわっている
148　019　感傷的にかかわっている暇はないのだ。

かかわり　関り
039　066　わたしは何の関りもなく立ってゐる

かかわりのない
007　002　あたり　見知らぬ老婆が咳をするのはわれらにかかわりのないこ

かがんで
114　006　じっと机の下にかがんで生きのびてきた

かぎ　鍵
012　005　秘密の世界に鍵をかける
025　056　爽やかな朝に墓場の鍵が配られたとき
026　029　銀いろの鍵を投げると
034　005　鍵穴の中で
051　032　あの鍵穴はまばたきしない眼……
051　036　こっちを見凝めている鍵穴を必死に覗きかえす
051　039　小さな鍵穴。
054　084　すべて記憶に鍵をあずけている人々よ
054　085　鍵は僕が失敬した　そしてもう決して返しはしない」
112　012　鍵穴や本のあいだにしこたま隠しこんでる狐め

かきあげ
068　029　濡れた髪をかきあげながら

かぎあな　鍵穴
034　005　鍵穴の中で
051　032　あの鍵穴はまばたきしない眼……
051　036　こっちを見凝めている鍵穴を必死に覗きかえす
051　039　小さな鍵穴。
112　012　鍵穴や本のあいだにしこたま隠しこんでる狐め

かきたてる
102　015　憎しみをかきたてる火掻棒で

かきつけた　書きつけた
100　014　ぼくは書きつけた

かきまぜる
012　018　ミルクの雲をかきまぜると

かきまわして
188　072　ごみの山をかきまわしていて見つけたものだが、

かぎり
052　011　わたしはかぎりなくうらめしく思う
074　015　かぎりなく澄んだ青空であった
077　009　不思議な報酬があるかぎりはーー)
080　018　いつまでも折れた帆柱を抱いているかぎりは
117　013　いまは声をかぎりに
142　009　こうした　同じことだ　という作為的な留保がなされるかぎり
142　044　いつもかぎりなく透明で　疑問の余地なく真実だから
158　027　許されるかぎりどこまでも
162　018　かれが何を見たかは予断のかぎりではない
167　052　人が住んでいるかぎり
171　004　かぎりなくふしあわせになる。
173　021　耻を知るかぎりにおいて

かぎりなく
052　011　わたしはかぎりなくうらめしく思う
074　015　かぎりなく澄んだ青空であった
142　044　いつもかぎりなく透明で　疑問の余地なく真実だから
171　004　かぎりなくふしあわせになる。

かきわけ
046　007　澱んだ鈍い時間をかきわけ
061　008　見よ、澱んだ「時」をかきわけ、
155　021　知らない顔をかきわけ

かき鳴らす
102　016　もういちどハープの筋をかき鳴らすから

かく
007　010　喞筒は空に向って泥を吐く　草の無い荒地ではとかく悪い感冒が
008　008　罌粟の花がサカリである　真珠の月もかくれてゐやう
011　010　おんなの腕はやはらかく
012　003　若いアポロは日傘にかくれ
025　029　軟らかくまがりくねったのは時計
025　034　影にかくれて白いカラをつけて
035　028　誰かくらい巨大なランプを掲げた
048　033　揺れて海へ傾く　深くふかく
052　004　いまでは墓穴にかくれ
054　086　独身者はふかく自ら頷きながら

058　056　少しばかり恥をかくようなことがなければよいのです
066　009　かわいい顔をかくすと
080　023　きみのかくれた意志をふりおろすことができない
084　031　女たちの狂った笑いがたかくなり
091　011　新聞社の屋上たかく舞っている伝書鳩の
100　024　沈黙の奥ふかく追放された
101　045　四月の雨をまつ土にふかく射ちこまれている
103　031　きみが見た大きな虚無はふかくぼくらをひきつける
106　046　おそらくその果は　「未来」とふかく交っているのだろう
106　047　対岸は霧がふかくて見えないが　残る一つの疑問には
112　041　大木の幹にかくれて
117　006　太陽は高い建物のうしろにかくれ
128　020　でっかくなっちまったんだ　今では
136　008　目かくしされた森の
143　006　冷たい汗をかく……
171　018　太陽をかくす一片の雲をあおぐ
176　032　わけもなく顔をかくしている
188　014　蓄膿症ではないと思うのですが、とにかく鼻が詰り、
188　075　一雨ごとに暖かくなるという、三月の雨が

かぐ　家具
027　008　すべての家具が老いてゆき
031　010　煤けた家具の断面だけを見せ

かく　核
025　043　林檎の核を拾てた
033　014　空虚な核が
188　052　結核と癩から、心臓病と癌へ。

かくう　架空
142　006　　左翼　に対する架空の均衡をつくり出すために

かくご　覚悟
142　119　非道な暴力に抵抗して　自らの犠牲と死の覚悟で第一線に立ち

かくさうとして　隠さうとして
041　071　あなたは壁を眺めて怖れの表情を隠さうとしてゐますね

かくされて　隠されて
150　043　この中に隠されていたことはまちがいないだろう。

かくじつな　確実な
124　014　不確実なニュースのかわりに

124　015　確実な善意を
162　020　きわめて不確実なことだけである

かくじつに　確実に
162　019　確実に言えるのは
167　016　住居は確実に古びてしまった

かくして　隠して
041　065　あなたの利益は　あなたのどの釦に隠してありますか
054　135　眉をひそめて手のなかのカードを隠してしまう
186　073　一粒の蓮の実を永く隠しておくことだよ

かくして　穏して
065　029　その秘密を夜のなかに穏していた。

かくしょ　各所
142　063　各所の精神病棟監獄　普通の監獄・収容所で

かくす　隠す
106　026　その貧しさを隠すために　せめて口髭をたくわえておくべきだった
144　015　みだれた山波を隠すのは

かくだいされる　拡大される
025　048　死の影が拡大される

かくちょうし　拡張し
126　007　地球の生活を拡張しうるにちがい」

かくとくした　獲得した
112　035　それがおまえの獲得した一切なのか

がくふ　楽譜
014　002　侵入してきて楽譜を散らかした
014　020　楽譜が走ってきて整列する
014　030　楽譜はヒラヒラ羽を生やして

がくぶち　額縁
054　131　空虚な額縁のなかで白い雨が乾いている
055　051　額縁のなかに嵌めこまれている

かくめい　革命
055　057　恋にも革命にも失敗し
084　014　戦争か進歩か壊滅か革命か

136　020　革命をスパイしている
167　036　戦争と革命の犠牲者たちの
193　009　偽の革命

がくもん　学問
151　013　学問もなければ専門の知識もない

かくれ
008　008　罌粟の花がサカリである　真珠の月もかくれてゐやう
012　003　若いアポロは日傘にかくれ
025　034　影にかくれて白いカラをつけて
052　004　いまでは墓穴にかくれ
080　023　きみのかくれた意志をふりおろすことができない
112　041　大木の幹にかくれて
117　006　太陽は高い建物のうしろにかくれ

がくれ
094　002　見えがくれの執念につけ狙われながら
163　001　見えがくれに歩きながら
167　037　死屍累々の谷が見えがくれするので

かくれ　隠れ
003　011　油絵の裏に隠れてゆく黄ろい月
039　086　あなたはあなたの扉のなかに隠れる
052　008　愛と死の隠れんぼはやっぱり楽しいものだろうか
054　098　今なおどこかに隠れているとは信じられぬ
085　022　かれらの恥辱の隠れ家をあばいてしまおう
093　015　蛇が隠れたエデンの樹を一心に見つめる
132　002　隠れんぼの人生
142　057　監獄・収容所システムに隠れ場所はない
186　054　ぼくは無意識のうちに隠れ場所をさがしている
186　064　隠れる場所がなくなる

かくれが　隠れ家
085　022　かれらの恥辱の隠れ家をあばいてしまおう

かくれた
080　023　きみのかくれた意志をふりおろすことができない

かくれた　隠れた
093　015　蛇が隠れたエデンの樹を一心に見つめる

かくれて

008　008　罌粟の花がサカリである　真珠の月もかくれてゐやう
025　034　影にかくれて白いカラをつけて
112　041　大木の幹にかくれて

かくれている　隠れている
054　098　今なおどこかに隠れているとは信じられぬ

かくれてゆく　隠れてゆく
003　011　油絵の裏に隠れてゆく黄ろい月

かくれる　隠れる
039　086　あなたはあなたの扉のなかに隠れる
186　064　隠れる場所がなくなる

かくれんぼ　隠れんぼ
052　008　愛と死の隠れんぼはやっぱり楽しいものだろうか
132　002　隠れんぼの人生

かげ
017　011　西の空が良いかげんに焦げて
026　002　とがった建築のかげで
039　071　手がかげる
039　113　波が黒い樹かげに光る
056　009　アーク灯のかげで多くの骸骨が
074　001　埠頭に人かげはなく
077　025　ゆれる昼夜燈の暗い光りのかげに
100　015　どんな物かげの暗い眼が
101　017　ぼくはすこしずつやぶれてゆく天幕のかげで
133　011　おびえた窓枠のかげシャッターのうしろ
183　024　遠い昔のおもかげを懐しんだり

かげ　蔭
001　012　星達のさざめきの蔭から
012　015　青い舌を垂らした植物の蔭から
017　028　葉っぱの蔭に消えてしまった
026　031　植物の手の蔭へと移行する
034　008　眠りの蔭をあゆむ
041　134　どんな物蔭の暗い眼が
047　003　左右に拡げる黒い蔭！　二重のドア！
064　007　カーテンの蔭で影と影とが抱きあった、
108　007　木蔭のテーブル
122　011　カーテンの蔭でわたしは泣く
138　006　草葉の蔭を恋しがって

159　012　まだまだ幼い母のうしろ姿は襖の蔭に
160　071　アメリカ社会における成功の蔭にある失敗のさまざまな痕跡が
160　074　ところで　日本の社会の日蔭を歩む

かげ　影
001　014　影が凍りついてゆく
015　012　樹の影を掠めたのは
018　002　質量の影も見えない
021　029　溢れてくる影のどこかで
025　034　影にかくれて白いカラをつけて
025　048　死の影が拡大される
026　021　快い日影もある
027　001　影をゆらせて
028　003　緑の影はいつもガラス管によりそってゐた純粋な頭の鈍い速度について
028　014　あらゆるタイプという葡萄の木の影は
028　043　測量する技師の手の影に従って
028　059　葡萄の木の影のごときタイプが無数繁茂する
030　002　影だけの影を
030　011　影だけの影を
030　013　あれは植物たちの翳りの影か
030　016　影ならば誰でもよい
030　035　影だけの影を
031　012　水の中に影だけにたたまれて
032　008　樹木の影は怯え
033　003　いまおびただしい影のなかでもがく
035　011　影は消えてゆき
035　024　影に凭れて揺れてゐる
036　023　脅かす影は誰だらう
036　024　おれの影はだんだん樹木の影に似てきた
038　007　多くの影の上で顫へてゐる
039　019　ゆれている椅子の影は
039　065　亡霊たちの影の外に
041　050　人影にまじって　小刻みに人々に倣ひながら
041　083　そこにあたる影や光　樹々から流れる緑の匂ひ
041　092　小さな影のなかで血の気を失ってしまふだらう
041　117　あなたの影だけが残される
043　009　あなたの影とともに駛ってゐる
042　001　庭は荒れて　影もなく
042　015　庭は荒れて　もの影もなし
046　002　澄みたる空に影をもつ　橋上の人よ
046　047　また午後の廊下の如くあなたの躰を影にするだらう
046　050　此処と彼処　それも一つの幻影に過ぎぬことを
047　011　うなだれた水仙の賢しげな影を卓布に落す

048 002 家や樹木のやわらかな影をおとして
048 006 影の茂みから闇のにおいが漂ってきた
049 005 重たい悲しみに塗りこめられた人間の影がある。
049 011 高いところに立って影の眼を開いてみたまえ
050 009 「実際は、影も、形もない？」
050 020 その声は人影へ、そして街へ、
051 006 幻影のなかの島嶼……
051 025 影　終生よりそって離れぬ影
052 002 忘れがたい悲しみの面影がうかぶとき
052 012 影になったあなたの子供らしい微笑が
053 019 わたしはわたしの影を背負います
053 036 わたしのたずねる人影は何処にもありません
053 037 わたしはわたし自身の影からも離れてゆきます
054 122 影は一つの世界に　肉体に変ってゆく
054 157 憐むべき君たちの影にすぎぬ僕は
055 010 巨大な黒い影が波止場にうずくまっている
055 063 おれには掘割のそばに立っている人影が
057 020 鳥はいないし　まして人影はない
057 039 はかない幻影よ
058 009 踊っている男女の影がアスファルトに落ちてきます
058 026 もみあうおびただしい影をぬってゆきます
059 010 今ではなつかしい面影のようにうすれてしまった
059 026 大人になった幻影の子よ
061 053 浪にくずれるむなしい幻影が
061 148 日没の街をゆく人影が、
061 161 霧は濃く、影は淡く、
061 211 生と死の影が重なり、
062 048 悔恨の影をとどめず
064 007 カーテンの蔭で影と影とが抱きあった、
065 006 ゆれる燈火と死魚の影があるばかりであった。
065 013 終りがあるのだろうか？　影深い谷が
066 029 さっと影のカーテンをひいたのは
069 003 人影まばらなプラットフォームで
069 039 ふたりの少女は翼の影をよせあった
071 029 くっきりと影をあらわす山である
082 010 消えてはあらわれる幻影の
083 007 なにもかも光と影のたわむれにすぎない
084 016 壁にはりついた影と語っている時代――
084 035 唖でせむしの影をつれて
085 032 光と影で区分できない何ものかであろう
086 008 海岸から男たちの影を洗い去るであろう
086 009 生命は歩む影
088 022 どのようにぼくたちの大地に暗い影を落すのかも

089 010 凍ってゆく水に影をうかべていました
089 026 「いま死の影が
089 037 停車場へいそぐ通行人の影にまぎれ
091 010 劇場やホテルのロビイに立っている寂しい人影からうまれ
098 028 その影というものだ
100 002 人影にまじって　新聞紙のうえをあるいてゆく
100 063 高いビルディングは動かぬ影をつくり
100 064 つながれた行列の影は鎖のように工場をとりまいていた
101 030 すこしばかり遠いところ　狼の影もないところ
108 004 いなくなった人影が
108 014 人はあわただしく自分の影から離れる
114 001 きょうだいたちの影が
116 008 つかのまの影をおとし
117 007 まがった黒い影をつけたまま
119 006 ひとひらの影をとどめ
121 012 幻影の女とたわむれる
128 079 影と向いあった
129 017 まぶしい食卓のワイングラスの影と
140 009 うつむく影
141 016 ぼくたちはお互の影でさえない。
146 009 切符売場に人影はなく
148 027 背中に淋しい影を宿し、
150 014 一匹の魚さへ住んでゐない沼に釣糸を垂らしてゐる影だけが生きてゐる……」
150 073 きみから送られた昔の雑誌を手にして、なつかしい面影に出会い、
170 011 よりそう影もない
172 016 影ばかりつかまえてきた
173 012 荒れ狂う国家の群集の影が
177 022 みずからの影をひきずって
177 029 きみの影は跛をひいている
183 004 人影がはげしく往きかっている
186 058 （動かぬ証拠の記念撮影）
187 026 きみの影がみるみるちぢんで
190 014 清流をさかのぼって幽谷に魚影を追い
192 002 どんな現象も起りようがなく、わたくしの影は、孤独とはいえなくなっているから、
192 006 それにしても、と影をもたぬ寂蓼が、くびをかしげる。人に会わぬ。風はそよとも吹かず、自分の足音さえきこえな
193 024 ときわの首都は世界の影を映している

がけ　崖

023 019 あなたの耳はちぎれそうな断崖で
060 001 崖がくずれ
082 007 くずれた崖の上にも
095 016 崖下の道で息がきれた
163 005 ぼくらは崖に立っている

163　013　千仞の崖っぷちに立つ

かけ　賭
052　028　生きねばならぬこの賭はわたしの負けだ
054　134　ひとり占いの賭博者のように
072　043　負け馬に賭けてきたぼくのような男には)
186　080　誰かが寄賭してくれたナポレオンの一壜もいずれ劣らぬ時間の傑作だった

かけこみ　駈けこみ
146　019　そのドアに駈けこみましたが

がけした　崖下
095　016　崖下の道で息がきれた

かけだす　駈け出す
017　043　駈け出すと枝から逆さに墜落し

がけっぷち　崖っぷち
163　013　千仞の崖っぷちに立つ

かけて
028　017　組織が崩れ動乱の意識が流れかけて
037　016　無限といふものが少しづつ暗くなりかけてゐた
058　004　新しい建物がたちかけています
062　031　わたしは昔の少年になってどこまでも追いかけてゆくだろう
063　018　ぼくは片足にスリッパをひっかけて
070　005　鋭い愛の杭にかけて
070　057　おまえはなにもかも諦めたようにみせかけて、
071　008　どっと家族づれで出かけてゆく人たちをみかける
076　003　どちらかが死にかけているような
088　071　ぼくたちに語りかけてくるよ
100　021　やくざな渡り鳥のようにレインコートを肩にかけて
103　020　旧約の秤にかけてもずっしり重い
109　001　春から夏にかけて
114　009　やにくさいパイプの煙を吐きかけている
127　006　地球の重みを首にかけて、
134　014　通行人が哀れっぽく声をかけてきた
137　006　けちな動物のプライドにかけて
154　010　すべての年月をかけて
155　037　幾重にも保険をかけているが
159　004　細くすきとおる声をかけてきた主は
160　063　三十年代末から四十年代にかけて活躍し
166　025　きみは死にかけているのかもしれない

166　028　きみは死にかけているのかもしれない
175　008　一生かけて見つけないうちに
179　006　あたりは薄暗くなりかけていたが
180　034　測り知れない現実的形態を網にかけて
188　018　手術をせねばなるまいと、気にかけています。
188　023　椅子に腰かけて、前こごみに、

かけて　駈けて
001　004　駈けてゆく風である
133　022　せめていっさんに駈けていきたい

かけてきた
134　014　通行人が哀れっぽく声をかけてきた
159　004　細くすきとおる声をかけてきた主は

かけてゆく　駈けてゆく
001　004　駈けてゆく風である

かけなさい
016　005　貝殻の道をかけなさい

かけのぼったり　駈けのぼったり
088　005　ぼくの頭の木のうえに駈けのぼったりする

かげぶかい　影深い
065　013　終りがあるのだろうか？　影深い谷が

かけめぐる　駈けめぐる
062　036　始めも終りもない夢のなかを駈けめぐる

かけよう
046　020　たとえ純粋な緑が　墳墓の丘より呼びかけようと
095　009　妹のところへ電話をかけようとして

かけらるる
043　003　知慧はしろがねの枝にかけらるるや
043　021　知慧はしろがねの枝にかけらるるや

かけられ
042　018　しろがねの枝にかけられたちひさな骸を
076　002　ふときみの肩にかけられたのか
076　013　きみの肩にかけられたぼくの手の
187　018　籾殻をとばす篩にかけられて

かけられた
042　018　しろがねの枝にかけられたちひさな骸を
076　002　ふときみの肩にかけられたのか
076　013　きみの肩にかけられたぼくの手の

かけられて
187　018　籾殻をとばす篩にかけられて

かける
012　005　秘密の世界に鍵をかける
036　025　頭髪に巣をかける喧燥な小鳥たち
054　096　まるで僕たちに呼びかけるかのような樹木のそよぎ
054　129　僕は眼をかがやかし涛のように喋べりかける
062　018　あなたはかすかにしめった灰の匂いを覆いかける
071　008　どっと家族づれで出かけてゆく人たちをみかける
103　014　ヴェニスとかパリーへ出かける
183　023　すこし足の不自由な老人がほほえみかける

かげる
039　071　手がかげる

かける　駈ける
005　020　驢馬は駈ける

かげろう　蜻蛉
059　025　蜻蛉のようにも見えてくる

かけ上れ
005　013　白いちぶさの傾斜地をかけ上れ

かこ　過去
054　078　過去はまさに始まらんとし
054　099　過去にも未来にもさよならして
061　106　未来の道は過去につづき
061　107　過去は涯しなく未来のなかにあることをーー
064　008　暗い過去と冷たい記憶がふれあった。
085　005　きみにとって過去はからっぽの空罐だし
099　008　どうして過去の方にころがっていったのか？
101　029　未来や過去がうろつくには
112　013　過去でしか会うことのないおれたちだ　何の秘密もあるものか
116　005　過去をすてたきみの喜びと
134　006　過去は心からぬけ落ち

142　118　過去数世代の経過に照しても
148　017　気晴らしはあっても、過去への橋渡しではない。
186　031　過去と現在の空間がぴたりと重なり、その輪郭がずれてぼやけていく
186　085　過去にも未来にも流れず

かこう　下降
051　016　下降　そして不吉な上昇カーブ

かこう　河口
094　005　さかまく汐をどっとのみこむ河口
094　019　この苦渋にみちた河口の渦に閉じることになろう
094　021　ぼくの河口はひといきに岸辺やテントや小舟を吐きだそう

かこまれ
029　008　憩ひといひ懶惰と呼ばれる雰囲気にかこまれ
148　044　松林にかこまれた枯芝の庭で、
168　004　荒い山肌にかこまれて
190　005　母がうまれた町は山にかこまれていて

かこまれ　（囲まれ）
028　002　地域は張りめぐらされた棘で囲まれ

かこまれた
148　044　松林にかこまれた枯芝の庭で、

かこまれて
168　004　荒い山肌にかこまれて
190　005　母がうまれた町は山にかこまれていて

かこみ　（囲み）
148　034　ぼくたちは女気なしの部屋で炬燵を囲み、

かさ　傘
012　003　若いアポロは日傘にかくれ
012　014　日傘は貝殻をまねてゐる
026　016　蝙蝠傘とともにさ迷ひ
031　015　雨傘やブラシなど日用品が置いてある
087　021　雨傘がいたみ長靴が駄目になる
162　012　絶句していそいそと傘をすぼめ

かさい　火災
039　083　美しい火災の意味を知るだらう

かさこそと
172　005　かさこそと往来するのは

かざってある　飾ってある
058　033　指輪や装身具の飾ってあるショーウィンドをのぞいて

かさなった　重なった
188　028　歳相応の、厄介な病気が、二つか三つ重なったところで、

かさなり　重なり
061　211　生と死の影が重なり、
186　031　過去と現在の空間がぴたりと重なり、その輪郭がずれてぼやけていく

かさね　重ね
137　008　意地汚なく愛撫を重ね
144　008　齢を空しく重ねてきた

かさねて　重ねて
144　008　齢を空しく重ねてきた

かざらぬ　飾らぬ
085　012　みかけより真実を飾らぬ男だ

かざられている　飾られてゐる
024　005　は　記憶に固執する時計には花々が飾られてゐるのだなと見

かざる　飾る
025　031　ヒヤシンスの首を飾る

かし　仮死
005　032　人々は仮死の状態であった
012　013　一たまりもなく仮死におち

かじ　舵
103　011　帆柱や舵や海図や羅針や救命ブイや銛や……
149　004　舵取りはいないのに

かしかり　貸し借り
160　045　隣人とは愉快に貸し借りせよ

かしげる
192　006　それにしても、と影をもたぬ寂寥が、くびをかしげる。人に会わぬ。風はそよとも吹かず、自分の足音さえきこえな

かしこ
028　049　しかしこれらは何も意味しない意味はない
042　010　かしこより辷りでて
058　030　この街のどこもかしこも

かしこい　賢い
054　051　賢い三人の友に会うのである
187　011　賢い蛇の尾のような

かしこげな　賢しげな
047　011　うなだれた水仙の賢しげな影を卓布に落す

かして　化して
018　006　花を孵化して
142　016　帝政時代よりソビエト体制下で四倍も悪化している
143　008　黒い旗印と化して
162　008　貧しさの樹齢そのものと化してから

かじとり　舵取り
149　004　舵取りはいないのに

かずかずの　数々の
030　030　いま数々のなかから択りわける

かすかな
005　009　鈴を振るかすかな音よ
055　015　電線のかすかな唸りが
093　026　やすらかな寝息とかすかなぬくもりをのこして
120　017　かすかな地ひびきが
192　005　遠くかすかな潮騒のひびきにさそわれ、海にむかってひき寄せられていくが、

かすかな　微かな
054　121　いまは自我をみつめ微かなわらいを憶いだす

かすかに
041　032　かすかに震えてゐる　神経的な
048　034　かすかにトルソから涛の音がひびく
056　014　かすかに聞えぬわけでもないのである
061　147　あなたの褪せた追憶の頬に、かすかに血のいろが浮ぶ。
062　018　あなたはかすかにしめった灰の匂いを覆いかける
139　004　どこからか砧を打つ音がかすかに聞えてくる
159　011　かすかに衣ずれの音と麝香のかおりを残して
167　040　かすかにおののくのである

186　084　かすかにふるえる指先の煙草のけむりのように
187　030　なおかすかに雲間にあった

かずしれぬ　数知れぬ
133　028　数知れぬ花が袖にこぼれるところまで。

かすみ
120　023　花のかすみにつつまれて
181　005　ぼうぼうとかすみ

かすめた　掠めた
015　012　樹の影を掠めたのは

かすめられ　掠められ
032　017　わたしの半身はすでに掠められてゐる
041　115　白昼は掠められ

かすめられて　掠められて
032　017　わたしの半身はすでに掠められてゐる

かすめる　掠める
037　008　しぶんを掠めるために
038　006　地上を掠める光と

かする　化する
185　014　幻想と化することを証した一人の男が

かすれた
038　018　誰かかすれた声で囁く

かぜ　風
001　004　駈けてゆく風である
003　008　扉の外をマアチが風と共に過ぎる
005　004　青い帽子の微風が通り
005　007　風下に建てられてある
007　006　古風な鐘は藍をにじませて鳴る　曇る　動かない土絵具のカンヴ
011　005　春の風が吹くと
012　001　柔かいシルクの風に
015　004　傾いた机は風を聴くことがない
015　010　舶来煙草のことを知らない
018　011　あたたかい風は
021　004　螺旋の風は
023　017　風の運んでくるその言葉が見えない

024 001 ふせた耳の上でふと風が鳴る　くずおれた月光の雫に溺れ
025 036 重たくなった頸に熱い風が
026 004 風の音に向って
026 020 羊歯類が生ひ茂り
028 045 そこを通る風の鳥の虫類の笑ひ
029 010 一つの海を風景の中に所有した
029 012 だが風から逃げもせず爪立ちをして
031 001 風にのって
032 002 風はもう吹いてこなかった
033 011 殺気だけが風の如く起ち上り
034 016 風はどこからともなく忍びこむ
035 021 風の五つの渦の中へきえてゆく
036 003 乾燥した粘土の上に風だけの虚しさが
037 018 風だけがやってきて
038 003 風などよりも静かに
039 017 微風はわたしの肩に触れる
039 126 風が吹き
039 146 さかんなる風はたち
040 020 風はおちて
041 136 目的のない風が立つ
043 004 そのしめった風は吹きぬける
042 020 また古い家風を弔ふ
045 012 夜半のけむり無常の風に耐へてきた
046 040 行方の知れぬ風のことばにいつまでも微笑を浮べてゐようとは
046 053 風は吹いてもこなかった
047 014 古風な銀の縁をつけて　いつもこの水が動かぬことを……
049 006 北風は涙を光らせる。
053 035 風にふかれて開いたり閉じたりする窓があっても
054 033 そして風はなんにも答えてくれなかった
054 035 行方の知れぬ風の寒さに身ぶるいするのだ
054 037 Mよ　いまは一心に風に堪え　抵抗をみつめて
055 006 なまぐさい夜風の街が
055 041 おまえは禿鷹風に化粧した小さな顔を
055 050 窓の風景は
055 061 さわやかな朝の風が
056 003 そして彼の背中のように淋しい風景がそこにある
056 022 風景はいっそう青ざめてくるのみである
057 032 レッテルでもなければ　絵皿の風景でもない
059 019 秋風がたつ頃になると
061 048 風にとぎれるはかない幻想が
061 063 風に吹かれ、浪にうたれる漂泊の旅から、
061 072 あなたは破壊された風景のなかに帰ってきた。
062 060 わたしはこの香ばしい微風のなかに家を建て

065 031 暴風の夜を飛んでいった。哀歌をうたいながら
066 013 つめたい風が吹いていった。
069 023 つめたい風の薄刀のナイフは
070 055 骨の手風琴を鳴らすのは。
071 040 風よ吹け　われらの罪の消えぬうちに！
074 022 あかるい微風のなかに
078 014 みたまえ　風のまにまに
082 009 破風のうえに雲があらわれてまた消えた
083 013 また冷たい風が吹いてきて
086 002 つめたい海の風
087 023 明日は　おそらく北風が吹く
089 028 北風がプラタナスのほそい枝を鳴らして
089 033 （そこには　みなれた風景と
089 038 吹きつのる北風に足を早めます
091 008 虻よりはやいガソリンの微風に乗ってゆく
100 017 目的のない風が立つ
101 034 かわいたとび色の風のなかで
103 019 風土とか習慣によって去勢されない
103 025 それは波と風と運命の手にまかされた
104 001 金色の翼もなければ　風の鬣（たてがみ）もないのに
106 007 いくら厳粛な集まりでも　これはひどく殺風景だ
107 006 風に熟れた稲穂も……
108 025 風に吹かれて
109 012 そうして、秋風に身ぶるいして
110 001 もう風を孕むこともない
113 008 風はいつも
113 043 風の方向に
119 010 寒風に吹きさらされる
120 003 あたたかい風に
120 010 風景はふくらむ
123 005 今日は北風が吹いているが
128 029 ひんやり夜風が吹きぬける
129 019 匂いのない風と
132 005 風のように変身する
138 002 なまぐさい風が吹いてくると
143 009 寒風に吹かれるみじめさを思い
144 012 風にみはぐれ恋を忘れ
150 060 時代の風圧を避けるのにせい一ぱいで、
153 008 冷たい鋼の風となり
155 003 いま見ている風景は
155 004 昨日の風景である
157 004 そよとも吹かぬ風のなかで
158 025 美しい風景になりたいという

167 002 風のつよい日だった
167 019 風が新鮮な活力を吹きこむので
167 026 強風のなかでクラブを振っているのは
167 033 風声のま
167 063 風はひとしきり烈しく吹きつけ
167 079 黙って風に手を振って
169 024 来年の風にまた挑戦します。
172 006 風の足である
172 009 まばたき一つで風景が変って
174 021 おっとりしていて、どこが強いのかわからないような碁風だった。
176 010 夕暮の風は
176 025 風はなおも
180 054 魔風に挑戦するのはあきらめよう
181 013 風がめっぽう強く
185 007 慰めを与えた哲人風の音楽家の
187 006 そこまでは静止した風景だった
187 010 風はやさしく運んできた
188 077 風も強くなってきたようだ。
190 002 自然の風景の始めであり終りである
190 011 東洋哲人風の生活が
192 006 それにしても、と影をもたぬ寂蓼が、くびをかしげる。人に会わぬ。風はそよとも吹かず、自分の足音さえきこえな
193 018 同じ風景は二度と現れない

かせき 化石
023 010 沈黙した化石に傷をつける
039 144 化石の街の
169 008 化石になるほかはない

かぞえあげる 数え上げる
174 013 お互いの相違点を数え上げるのはたやすいが

かぞえきれない 数えきれない
169 021 数えきれない失策

かぞえて 数えて
188 050 老いの楽しみに数えてよいだろう。

かぞえる 数える
112 045 嵐は数えることをしないが
112 046 運命は一瞬の光でおまえたちを数える
153 003 原初の日より数えるように

かぞく 家族

029　016　パイプと共に忘れてゐた家族のため
071　008　どっと家族づれで出かけてゆく人たちをみかける
071　015　家族からはぐれた男の子は
142　026　わたしやわたしの家族の頭から　髪の毛一すじ落ちやしないとは
142　035　孤立した家族の住むアパートの一室で
155　036　である家族だけだから
165　020　家族的な反映だったのだろう、と
177　013　きみの家族が住むきみの家があり
183　015　安全に養われているその家族たちだ
193　014　家族あわせの円居が

かぞくてき　家族的
165　020　家族的な反映だったのだろう、と

ガソリン
091　008　虻よりはやいガソリンの微風に乗ってゆく

かた　肩
010　007　やがて純白の雲の中にチョコレエトの肩が見えなくなる
013　010　肩の上でペロペロする
039　017　微風はわたしの肩に触れる
041　030　濡れた肩には
053　061　わたしの髪に　わたしの肩に　落葉はしずかにつもります
055　005　おまえの濡れた肩を抱きしめたとき
057　023　夕日があかあかと上衣の肩をそめ
069　002　かれは肩をすくめて立っていた
076　002　ふときみの肩にかけられたのか
076　013　きみの肩にかけられたぼくの手の
078　006　あたらしい友と肩をくみ
100　021　やくざな渡り鳥のようにレインコートを肩にかけて
106　008　親しくもないのに止り木で肩をよせあい
142　047　それから　肩をおとして伏目になるか　面をそむけて窓の外を見るか
147　016　嬉しくなって「やあ、やあ」と肩を叩いたりする始末だ
163　002　ときには肩をよせあい
176　014　少女の頬と肩になぶりかかる

かたあし　片足
063　018　ぼくは片足にスリッパをひっかけて

かたい
100　003　かたい心をもち　小刻みにひとびとにならいながら

かたい　堅い

030　024　光りは堅い金属のやうに寒々として
031　020　すべての物質たちは堅い殻につつまれて
041　087　愛嬌ある仕科（しぐさ）で柔かい羽に堅い嘴をこすりつける

かたい　固い
041　051　新聞紙の上を歩いてゆく　固い心をもち
061　179　固いパンを噛っています。
101　044　沈黙よりも固い無名の木の実がはじけとび
105　003　だが、みどりはまだ固い幹のなかにある。
145　016　固いパンの男がゼリーの女に食べながらストレートに話し合おうと云っていた」

かたこと　片言
052　022　片言まじりの甘美な言葉で

かたさ　固さ
048　009　固さのない

かたすみ　片隅
061　178　妻も子もなく、この広い都会の片隅で、
083　010　思出の片隅でじっとしていればよいのに
142　045　ぼくたちは世界の片隅でふさぎこみ
145　003　何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに
188　071　きみの手紙は、たまたま、仕事机の片隅の、

かたち
020　009　骨のかたちを残して去り
037　003　物のかたちを壊してゆく
039　036　憑かれたかたちで映ってゐる
072　012　競馬場のかたちに作りかえてみたまえ
138　017　滅びようのないかたちがなつかしい

かたちのない　形のない
070　029　形のない魂の叫びまでしめあげてしまう。

かたづけ　片づけ
170　005　吸殻の山を片づけ

かたった　語った
017　032　怖かったと仏陀の一人が語ったとき
142　020　考えてみる人はほとんどいない……」とあなたは語った

かたって　語って
084　016　壁にはりついた影と語っている時代ーー

135　003　多くの国人と語って同時に
142　036　どれほど声を低めて語っても
174　009　きみは意外に元気な様子で近況を語ってくれ、心暖まる十五分か二十分であった。

かたひざ　片膝
176　008　そっと片膝をおとす

かたまり
148　045　ぼくたちはひとかたまりになって写真を撮った。
152　009　こまかい泡のかたまりが
172　028　もうすぐひとかたまりの無機物になるのだから」

かたまり　塊り
186　076　万物は時間の塊りで

かたみ
053　013　姉さんのかたみの水晶の腕輪がわたしの冷たい手錠で

かたむいた　傾いた
015　004　傾いた机は風を聴くことがない

かたむき
079　003　太陽はかたむき

かたむき　傾き
110　004　傾きながら

かたむく　傾く
048　031　それにむかって傾く地平線
048　033　揺れて海へ傾く　深くふかく
167　047　一つの部屋のための家屋が傾くまで

かたむけ　傾け
046　033　濁れる水の地下のうねりこ耳を傾けつつ
182　017　星座の歌に耳を傾けていると
186　082　死を含む共同体であるみんなの声に耳を傾けていると
188　044　不定愁訴の繰り言のように、あることないことに、蘊蓄を傾け、

かたむける
158　015　酒杯をかたむける

かため　固め
041　111　物質で身を固め　破れたシャツで冷気を防いだ

かため　片眼
188　017　眼は、そのうちに、片眼ずつ、

かためた
061　006　石でかためた屋根の街の
103　017　まがいものの甲冑に身をかためた冒険家でもなければ

かたり　語り
054　141　すべての人々の面前で語りたかった
074　021　声なくして新しい死者と語りあった
088　071　ぼくたちに語りかけてくるよ
142　123　あなたは見たままを語り　予言者として
148　035　どのようにして戦後の社会をたたかいぬいてきたかを語りあったが、

かたる　語る
028　069　何を語るかは考へてみればよい
054　087　「もういい　一言も語るな
142　043　自己の経験をまっすぐ語るあなたの言葉は
174　022　あの一局の碁が語るものは何だったのか

かたわらで　傍で
017　017　と悪い唇が耳の傍で薄くなったので
041　008　新聞を読む　虚しい日暦の傍で
145　015　古い広告ビラの汚れた壁の傍で
146　059　あなたが傍でおやすみになっていらっしゃる

かち　価値
054　136　あらゆるエイスの価値と
054　137　護衛つきキングと慰めをあたえるクインの価値とが

かちく　家畜
014　022　口の悪い家畜どもが逃げていったあとで
062　061　ひとりの妻と住み家畜などを飼ってみたくなったのです

カチャリと
189　033　カチャリと皿にあたる小さな音が

がちょう　画帳
188　020　ファン・ゴッホ展があった時の画帳が、手もとにあって、

かついで
055　013　背負い袋のようにおまえをひっかついで

128　048　ブリタニカをかついで登場

がっき　楽器
005　010　古い楽器は花樹の下で
014　003　頭の大きな楽器が目覚めたらしい
014　006　物ぐさな楽器たちはねころんで
014　014　二つの楽器が揃って火を呼び始めてね
014　025　貧血がくるとひとつづつ楽器は床に倒れた
014　028　楽器のうす暗い腹の中に沈黙が
039　020　楽器よりももっと柔らかにくねる

かつぎだされて　担ぎ出されて
074　007　ゆらゆらとハッチから担ぎ出されてゆく

がっこう　学校
005　006　赤い屋根の学校は
150　056　学校へ行ってその旨を伊藤に伝えると、

かっこう　恰好
041　046　毅然たる恰好は　悲しげな眼ざしは

かっさい　喝采
097　014　空しい喝采のなかで、永遠に空中を泳ぎつづけるだろう。
160　034　このハプニングに聴衆は喝采する

かっさいする　喝采する
160　034　このハプニングに聴衆は喝采する

かつじ　活字
050　016　活字の置き換えや神様ごっこーー
128　004　活字のわれ目から　ひょろりとのびた

かっしょく　褐色
009　010　褐色の皮膚の下に樹液は涸れてゐる
023　020　澄んだ褐色の眼を出はいりする憎悪の炎よ
084　027　その黒い唇　その褐色の髪

かった　刈った
084　015　ながく髪を刈ったかるい男が

かつて
025　025　かつて居睡するセルバンであった
039　079　かつて地上に祭があったといふ

041　102　かつて　何処にも起らなかったこと
061　126　「かつて泉があった
061　132　「かつて泉があった
061　141　かつて清い泉があったことを……
173　022　かつてきみの横顔には自伝らしきものがあった
182　011　かつての勇者はいまなお勇者だ

かって　飼って
062　061　ひとりの妻と住み家畜などを飼ってみたくなったのです

かって　勝手
180　030　どこかで勝手に出あうものである

カッテニシヤガレ
124　019　換言すれば　カッテニシヤガレ

カット
106　033　鳥の巣型の髪のカットに　度のつよい眼鏡を糸でつるして

カップル
145　017　そんなカップルはどこにでもいて快楽のスプーンで苦痛の目方を計りかねていた

かつぼう　渇望
044　015　あなたの渇望が、

かつやくし　活躍し
160　063　三十年代末から四十年代にかけて活躍し

かつりょく　活力
061　128　活力と滋味を湛え
167　019　風が新鮮な活力を吹きこむので

かてい　家庭
084　018　「いまではどちらのお家庭にも

かてい　過程
160　001　忘れられていく人間の過程が

かなしくろうじん　（「悲しむ老人」）
188　021　その中に「悲しむ老人」という作品があります。

かなしげな　悲しげな
041　046　毅然たる恰好は　悲しげな眼ざしは

かなしませる　悲しませる
041　014　かつはまた　あの人たちを悲しませる黄昏を創った

かなしむ　悲しむ
023　018　怖るべき悲しむべき速度の中に
026　035　悲しむでもよい暗い甃石の上には
158　044　こんなにも早く終えたことを悲しむ
188　021　その中に「悲しむ老人」という作品があります。

かなしむべき　悲しむべき
023　018　怖るべき悲しむべき速度の中に

かなた　彼方
051　003　彼方へと走っていた。
054　155　海の彼方！
061　001　彼方の岸をのぞみながら
061　219　彼方の岸に灯がついた、
073　021　否定の彼方へ
080　025　まっすぐ海の彼方を指しているからーー
106　048　ただちに答えられるだろう　かれの経験の彼方から第四の声で
176　027　みはるかす彼方には

カナリヤ
009　005　畸型のカナリヤを大切に育ててゐる

かなわなかった
124　017　礼儀作法にかなわなかったら

かに　蟹
143　010　蟹になっては

かね　鐘
007　006　古風な鐘は藍をにじませて鳴る　曇る　動かない土絵具のカンヴ
107　003　尖塔の鐘の音も若かった

かねづかい　金づかい
103　015　金づかいの荒いアメリカ人とはわけがちがう

かのう　可能
054　032　そこにはどんな可能が　不可能が」
112　034　妥協の無限の可能性をたよりに
142　070　そして　国外での健康回復と安楽な生活の可能性があるにもかかわらず

186　044　（どの車輛にでも乗っている可能性があった）
190　012　現代でも可能であるのかどうか

かのうせい　可能性
112　034　妥協の無限の可能性をたよりに
142　070　そして　国外での健康回復と安楽な生活の可能性があるにもかかわらず
186　044　（どの車輛にでも乗っている可能性があった）

かのじょ　彼女
048　014　彼女だけが触れている
048　038　彼女の位置はどこにある
048　040　彼女の憂愁はどこにある」
184　001　すごい金髪美人である彼女は
184　014　たいへん誇りにしている彼女は

かの人
043　005　伝へよ　かの人に

かびん　花瓶
025　030　花瓶に挿さったみどりの茎は
055　027　ガラスの花瓶に閉じこめてしまったのだ
055　029　花瓶の腐った水のなかで溶けている

かふう　家風
042　020　また古い家風を弔ふ

カフェー
061　023　うらぶれた安カフェーで、

かぶきちょう　歌舞伎町
124　023　歌舞伎町でスロット・マシーンにしがみつき

かぶさって
061　165　夜の環が冷たくかぶさってくる、

かぶってゐる
010　003　有効なスピイドについて考へることを欲する少年は一個の白い帽子をかぶってゐる

かぶや　株屋
183　017　表の灯を消した株屋の店内では

かぶり
087　008　聞きわけのない耳でかぶりをふって

087　018　聞きわけのない耳でかぶりをふって
177　021　きちんと帽子をかぶり

かふん　花粉
005　003　タンポポの花粉をつけて

かべ　壁
015　019　死んだものは壁の中に
025　008　海は黒く岩壁は白かった
030　005　そこらあたりの壁には花もない
032　013　壁が崩れたら
038　025　壁が照らされてしまひ
039　140　七つの壁が呻きはじめ
040　017　壁の下でマッチをする男のために
041　071　あなたは壁を眺めて怖れの表情を隠さうとしてゐますね
046　011　いまはしい壁や　むなしい紙きれにまたたく嘆息をすて
048　023　壁にかかっている着物からぬけだし
049　004　色あせた壁の中には
053　006　みんな灰色の壁にぬりこめられてしまって
054　089　沈黙の壁
054　133　「アメリカ……」と壁がこたえている
055　025　灰色の壁のように垂れてきて
062　053　岩壁へかえる鴎のなき声が
065　005　壁のそとにせまった。食卓には
068　012　高い岸壁から　歌ったあの
070　044　はてしない壁を手さぐりして、
073　005　さびれた海水浴場の岸壁にぶつかって
084　016　壁にはりついた影と語っている時代ーー
093　014　これから壁のむこうに出かけなければならない
097　013　空気を蹴り厚い無の壁をこえて、
098　010　壁づたいにきこえてくる
114　003　真夏のコンクリートの壁にはりついた
142　029　また　いかなる非難中傷の壁、妨害の電波がぐるりをとり巻いても
145　012　孤独な高い壁の前で
145　015　古い広告ビラの汚れた壁の傍で
145　018　孤独の壁をすこしずつ溶解しながら
145　032　「あるところに壁が倚れていた
145　035　壁のない空間にそれは倚れていた
146　013　壁にドアをならべた廊下が
167　062　ぼろぼろになった壁面にまた心理面に
187　003　壁面の王は

かへい　貨幣

028　018　つねに流通する貨幣の翳から起るといふ

かべん　花弁
012　006　放心した花弁のやうに

かほう　火砲
112　010　破壊につぐ破壊のこだま　断末魔の軍港にとどろく火砲のうた

かぼちゃ　南瓜
188　083　きみが好きだという、武者小路の、茄子や南瓜の素朴な絵、

かまえ　構え
188　037　眼よりも、心で計る構えになるのは、

かまはない　構はない
028　029　彩るものは何であっても何でも構はない

かみ　（こころ）神
004　005　意地悪な眉のながい神が
041　032　かすかに震えてゐる　神経的な
041　048　個人を非難しないわけにはゆかない　神々の名において
043　008　神は
043　015　弱い光でうなだれた神をむかへる
043　020　神よ
042　004　やさしき姿に彫まれた神となる
042　014　神よ　御身の言葉のまにまに
044　003　神々よ　あなたの姿勢は万別なれど、
044　008　高い処に住む神々よ。
044　014　熱い太陽を背負ふ　神々よ
050　016　活字の置き換えや神様ごっこ－－
051　020　神様をだます時が来た。
053　021　それはわたしのこころの神秘です
055　036　おれたちはおれたちの神を
062　002　ひとつの年が始まる神秘な夜にくるまって
069　034　神様とおっしゃるひとが住んでいたんだって
077　003　神の復活に出会うよりもたやすい
077　030　あらゆる神の報酬を拒み
079　025　見える神
081　022　黒い神を防衛しているのは
082　017　神をもたぬひとつの祈りが
093　012　神学は迷路である
106　022　さらにいっそう素晴しいのは鼻だろう　内なるオルガンの全神経が
121　004　天気は神さまに　世界は新聞に

126 020 人間の精神の問題かもしれないから。
128 002 神経のアンテナを　さか立てて
128 044 神なければ　すべては趣味の問題だ！
142 060 精神病棟で比較的おとなしく死ぬだけだろう
142 061 　ソビエトにおける新しい精神病　反対！　を叫んで
142 063 各所の精神病棟監獄　普通の監獄・収容所で
142 069 精神病棟監獄から同時に釈放せよ　というものだった
142 116 信念を持つ人間の精神が世界最強の力には通じないとか
142 120 　これ以上は一歩も進ませないそ　と宣言する不屈な人間の精神のみがー
144 007 鱗の落ちた蛇神は無性闇に輾転し
150 044 神を持たず、神の代替物も持たぬとすれば、
160 044 神をうやまい　友達には親切に
160 050 神の賜物を元気よく受けよ
167 014 つまるところ神経の問題だが
170 017 神慮の手で他界から運ばれ
170 026 物を書く空気になじめなくなっている精神の
173 016 神と悪魔は一身同体
180 023 きみはきっと怯えて失神するだろう
188 029 精神は、あくまで健康、
188 039 どのみち、精神にか、肉体にか、

かみ　髪

014 029 頭髪を伸ばしてゐるのを知らんかね
023 002 毛髪のやうに血が垂れて
025 027 あなたの頭髪の中に鶯が卵を生む
027 007 一本の毛髪もふくめて
036 025 頭髪に巣をかける喧燥な小鳥たち
037 019 黙って髪を梳けづってゐる
039 031 ゆるい流れが髪をほぐす
040 001 髪は散る
053 008 黄ろい髪飾だけがふわふわと蝶のように宙にさまよっているのです
053 061 わたしの髪に　わたしの肩に　落葉はしずかにつもります
061 144 あなたの青銅の額には、濡れた藻の髪が垂れ、
062 023 思い乱れたわたしの頭髪にさし込まれ
065 030 やわらかな髪を腕にまき、彼は
068 029 濡れた髪をかきあげながら
070 018 あなたがいくら黒髪を愛撫しても、
071 021 ぼくの頭髪をひっぱることがある
084 015 ながく髪を刈ったかるい男が
084 027 その黒い唇　その褐色の髪
106 033 鳥の巣型の髪のカットに　度のつよい眼鏡を糸でつるして
108 026 馬上の人も白髪となる
108 030 理髪店からの長いながい戻り道

116　011　きみの髪をゆわえた
142　026　わたしやわたしの家族の頭から　髪の毛一すじ落ちやしないとは
145　001　「至上のトーモロコシの毛がアゴにもある長髪の若者が
146　030　髪をふり乱していがみ合っていたのです
147　012　生きることに怖れも困難も感じない髪の毛の薄い男になっていた
176　031　少女はふさふさした垂れ髪で
184　001　すごい金髪美人である彼女は

かみかざり　髪飾
053　008　黄ろい髪飾だけがふわふわと蝶のように宙にさまよっているのです

かみがみ　神々
041　048　個人を非難しないわけにはゆかない　神々の名において
044　003　神々よ　あなたの姿勢は万別なれど、
044　008　高い処に住む神々よ。
044　014　熱い太陽を背負ふ　神々よ

かみきれ　紙きれ
046　011　いまはしい壁や　むなしい紙きれにまたたく嘆息をすて

かみころし
054　110　詩人は欠伸をかみころして立上る
187　005　ひそかに欠伸をかみころし

かみころして
054　110　詩人は欠伸をかみころして立上る

かみさま　神さま
121　004　天気は神さまに　世界は新聞に

かみさま　神様
050　016　活字の置き換えや神様ごっこーー
051　020　神様をだます時が来た。
069　034　神様とおっしゃるひとが住んでいたんだって

カミソリ
074　005　カミソリ自殺をとげた若い軍属の
074　023　若い魂を解放したカミソリの刃を
108　028　首すじをすべるカミソリにも

かみそり　剃刀
050　012　剃刀の刃にいつまでも残っているね。
055　062　頸輪ずれしたおれの咽喉につめたい剃刀をあてる

かみなり　雷
012　009　海では雷が鳴ってゐる
046　024　雷とともに海へ出て　空はつらなる水平線をはしり
070　055　骨の手風琴を鳴らすのは。
148　034　ぼくたちは女気なしの部屋で炬燵を囲み、
160　010　春のさきぶれの雷が遠くで鳴っていたが

かみのけ　髪の毛
142　026　わたしやわたしの家族の頭から　髪の毛一すじ落ちやしないとは
147　012　生きることに怖れも困難も感じない髪の毛の薄い男になっていた

かみました
006　017　フンと丁寧に洟をかみました

かみまっち　紙マッチ
152　013　紙マッチの軸を台紙からちぎらずに
152　021　紙マッチの台紙には

かむ
021　011　花が浮かんで噴水をかむった
121　011　波の牙が入江の肌をかむように

かむった
021　011　花が浮かんで噴水をかむった

カメラ
072　049　高速度カメラが

かめん　仮面
125　004　縦横家の仮面のうらとおもてに

がめん　画面
126　011　もうすぐテレビの画面に吸いよせられるだろう
175　015　きみとぼくは同じ一枚の画面の中にいる

かもしれない
032　015　とほく海がひろがってゐるかもしれない
039　028　それは涙に似てゐたのかもしれない
039　053　わたしはいつか鳥になるかもしれない
039　116　わたしはいつか虹を見るかもしれない
057　028　泣いたこともあったかもしれない
075　012　悪魔の手におちるかもしれない

106　030　尖がった紫の口髭なら　ずっと微妙な震えをもつかもしれない
126　020　人間の精神の問題かもしれないから。
141　014　在りえたかもしれないすべてのものよ。
142　083　ずっと痛烈かもしれないが
142　103　少しの犠牲で将来の破滅を防げるかもしれない）
147　006　一瞬の激情で死に突入していたかもしれない
151　035　ものの数ではないかもしれないが
151　040　はじめから一人にしておけばよかったのかもしれない
160　004　死にたくなっていたのかもしれない
162　015　恍惚の所業であったかもしれない
166　025　きみは死にかけているのかもしれない
166　028　きみは死にかけているのかもしれない
166　032　ぼくはもう死んでいるのかもしれない
188　038　私の癇疾、であるのかもしれない。
192　011　もしかすると、近づくにしたがって、遠ざかっていく海なのかもしれない。こんなところは、日本中のどこにもあり

かもめ　鴎
062　053　岩壁へかえる鴎のなき声が
068　005　一羽の鴎が飛んでいた
068　031　どこにも鴎はみえなかった
078　009　いたましい鴎の眼で見おくっていた
086　004　おそらく鴎たちは
108　021　とまる鴎
108　022　歩く鴎

かやく　火薬
022　002　火薬の匂ひがあらう

かよい　通い
188　012　毎週一度通いつづけています。

かよってゆき　通ってゆき
058　017　そこを通ってゆきました

カラ
025　034　影にかくれて白いカラをつけて

からかって
121　009　おもいきり　太陽をからかってみたい

ガラス
004　001　ガラスの中の青い花
005　026　オリーヴのガラスのテラスで

006 004 ガラスの破片
008 016 金魚みたいにじっとして　水のつまったガラス鉢の中
012 021 ガラスの響をたてる楕円形の葉たち
014 001 ガラス窓から白い手たちが
019 011 ガラス絵のやうな夢を
020 001 明るいガラス管の中で
021 025 室内のガラスを濡らす
028 003 緑の影はいつもガラス管によりそってゐた純粋な頭の鈍い速度について
028 066 ガラス管の吃立する地域の
041 140 窓ガラスに反射する日の光で
051 007 厚いガラスの窓からは
055 027 ガラスの花瓶に閉じこめてしまったのだ
089 029 窓ガラスを叩いてゆきます
167 009 窓ガラスのむこうには
189 025 無音無重力のガラスの部屋で

がらす 硝子
026 001 たくさんの硝子がはめてある
028 009 哀訴の蒸気を吸殻とともに皿の上に拾てる三重の硝子の向ふの鐵格子の中の

ガラス管
020 001 明るいガラス管の中で
028 003 緑の影はいつもガラス管によりそってゐた純粋な頭の鈍い速度について
028 066 ガラス管の吃立する地域の

からだ
035 025 疲れたからだを休めるために
039 141 あなたのからだから迸る水で
040 024 東方からおまへのからだを侵しはじめる
041 068 あなたの体が氷のやうだからだ
044 016 大いなる真昼の泉にいそぐからだ。
053 007 わたしのからだのなかに黄昏がいっぱいつまって
070 006 わたしのからだを水藻のように
149 008 憎いからだをだきしめて
164 014 ぼくらの関係があいまいだからだ
181 009 からだを斜めにし
183 009 不況が心にのしかかっているからだ

からだ 体
010 017 老いぼれた天体は歯がぬけてゐる
012 022 大理石の肉体は磨かれよう
016 008 体操着のまま遁走した
018 008 体から糸を垂らして

022 007 裸の胴は液体に近く
023 006 実体のない窓窓に雨が降り
023 007 不幸に支へられた白い肉体は
023 011 再び実体のない建築の翳は
025 047 樹には吊された肉体がある
025 057 蒼ざめた肉体は
026 007 水晶体はいつでも煙を噴いてゐた
026 014 壊れた船体のやうに
026 019 わたしの体を石のやうに氷らせた
027 019 体温から去ってゆくひびきたち響たち
029 006 それら肉体の輪廓にそって膨まず
030 004 無造作な天体には樹木が茂る
030 027 気体のやうに
034 014 気体のなかの透明な溝へはいる
037 009 肉体よりも柔軟に
039 005 ただ壜のようにつめたい気体がゆれる
039 037 わたしは一体何処に立ってゐるのか
041 024 なるほどあなたの剥製の体内から聞える
041 035 寒さが体を凍らせるまで
041 068 あなたの体が氷のやうだからだ
046 036 果して肉体だけは癒る用意があるかのやうに
048 001 肉体の襞
048 024 軟体の極限をゆく無数の曲線の戯れ
051 015 海が熱い体温のなかで燃えたぎっている、
053 020 時とは一体なんでしょう
054 122 影は一つの世界に　肉体に変ってゆく
054 152 塩の匂いのする僕の体臭
055 034 ほてった肉体のあいだの
061 088 おまえの多孔質の体には
062 006 落ちてゆくわたしの身体を支えてくれるのは
062 019 「もし身体にも魂にも属さない掟があるなら
062 021 魂も身体も不用です」
063 004 あなたの身体のように重たく
063 009 かかえきれぬあなたの身体が
065 012 男は待っていた、一体待つことに
065 037 彼の五体を震わせた。
065 050 待っていた。一体、待つことに
074 006 白布につつまれた屍体が
076 019 きみの青白い身体はみるみるうちに
093 023 孤独な青年の体臭に
100 023 やがて　肉体の要求にさからう魂は
102 004 あたらしい屍体の雨をふらすから
103 018 粗暴な肉体の礼讃者でもないのだ）

112 022 寝床のぬくもりでほてった身体を　詰まった路面電車に積みこんで
120 007 それらが身体のなかを
137 003 悲しい体にぞっこんまいって
140 020 かれは実体のない都市の雲の中に住む
142 016 帝政時代よりソビエト体制下で四倍も悪化している
142 041 ソビエト体制とは
145 008 レスビアンの女たちの痙攣は不信者の地獄の笑いの一型態で　ブリッジして反った肉体の
145 023 「写真店の窓には曝された肖像の記念写真が　夢こそすべてであると知った時　もう肉体
149 013 一体のままでただよいながら
151 011 身長百七十四糎体重七十粁はまあまあだが
151 036 一体一体に入魂の秘術をつくしてきたのだ
160 058 遺体は屍体置場に二日間放置されたままであった
160 059 ニューヨーク・タイムズの記者が屍体置場のリストからかれの名をみつけ出し
160 060 最後は叔母のクララが遺体をもらいさげていった
160 072 かれの肉体に刻まれていき
160 073 ニューヨーク市の屍体置場までつづくのである
163 007 どちらを向くかは身体にきめさせた
167 041 少年期の貧しい体験から
173 016 神と悪魔は一身同体
173 031 それで近代の伝説は消え　象徴は解体する
183 008 街全体がもひとつぱっとしないのは
186 024 昔の発車ベルの音が体内のどこかに残っていたんですよ！
186 032 （時間の正体を見たんだ）
186 082 死を含む共同体であるみんなの声に耳を傾けていると
188 039 どのみち、精神にか、肉体にか、
188 070 身体の故障よりも、よほど、このほうがつらい。

からっぽ
005 028 からっぽの金の籠よ
061 082 「おまえはからっぽの個だ
061 090 おまえのからっぽの頭には
085 005 きみにとって過去はからっぽの空罐だし
101 035 からっぽの水筒に口をあてて
151 012 中身はからっぽ

からっぽの
005 028 からっぽの金の籠よ
061 082 「おまえはからっぽの個だ
061 090 おまえのからっぽの頭には
085 005 きみにとって過去はからっぽの空罐だし
101 035 からっぽの水筒に口をあてて

からにした

101　059　弾倉をからにした心のなかまで

からぶり　空振り
173　004　超スローボールを空振りしたあとのような

からみ合う
106　045　それは苦痛と恐怖がからみ合う　ながいながい鎖で

かられて　駆られて
160　035　感傷に駆られてとはいえ　コーネリアスには

がらん　伽藍
018　003　霧は伽藍を沈めてしまった

がらんとした
061　170　がらんとした心の部屋で、
072　064　がらんとした競馬場には

かり　借り
133　020　ものさびしき火を借り
160　045　隣人とは愉快に貸し借りせよ

かりいれ　穫りいれ
101　001　穫りいれがすむと
101　039　死の穫りいれがおわり　きみたちの任務はおわったから

かりこんだり　刈りこんだり
106　027　高名な美学派の詩人みたいに　口髭をのばしたり刈りこんだりして

かりたてる　駆り立てる
085　007　きみの血を現場へ駆り立てるものは

かりの宿
170　018　蓮の葉の上をかりの宿として

カリフォルニア
184　009　現在カリフォルニアに住んでいる

かるい
058　043　私はかるい舌うちをしました
066　023　あかるい月がたずねていった。
074　022　あかるい微風のなかに
084　015　ながく髪を刈ったかるい男が

かるい　軽い
068　019　空中に軽い死の飛沫をうちあげ
091　006　軽いプロペラの翅音をひびかせて

かるくしよう　軽くしよう
113　032　罪の負担を軽くしようと

かるくする　軽くする
161　024　負担を軽くする余地が

かれ
005　001　岸辺では演奏会が開かれる
005　016　吹かれてゐる赤い煙突は
012　022　大理石の肉体は磨かれよう
023　001　磨かれてゐる白い骨の柱に
027　018　弾かれた言葉の行方を覚る
028　020　かれら塵挨都市の番兵と呼ぶものから
028　028　地図に描かれた曲線の巧みな配置を
029　009　窓は開かれて北方に青く
029　013　美しい喚声にとり巻かれてゐた
035　014　だれもかれも美しくなって
039　036　憑かれたかたちで映ってゐる
039　124　かれらの葡萄色の頬を打て
039　139　苦しみは拓かれて
041　124　木質は腐り　陽に燬かれ　蝋のやうに流れた
043　001　石で葺かれた屋根をでて
044　010　新らしい種子が新しい土地に播かれつつあることを。
045　008　眼のまぼろしに妖しく憑かれた
045　017　思案につかれて
047　006　つかれた椅子の軋る音……
052　024　わたしはいまでも眼鏡のつかれをぬぐい
053　035　風にふかれて開いたり閉じたりする窓があっても
054　083　見よ　あばかれた社交術の快楽と有頂天とを
054　109　大学生のほそい瞳の奥に描かれてしまう
055　033　いつまでもおれたちのひき裂かれた心と
058　032　つかれているのは私ばかりではありません
058　039　サーカスの看板がこがらしに吹かれています
061　063　風に吹かれ、浪にうたれる漂泊の旅から、
066　020　かれは溜息のほそいけむりをもらした。
069　002　かれは肩をすくめて立っていた
069　012　かれもまた　あるところに
069　028　かれの帰りをまっている女の

072 018 結局のところわれわれの期待も、かれらの手綱さばきで
074 010 かれら民衆の悩みだったが
077 018 かれは木の吊床に身を横たえて
077 023 かれとぼくの間には
077 028 かれは死んでいった
077 031 かれは永遠に死んでいった
077 036 かれの崇高な死が
077 039 やさしい女のひとの手がおかれている
079 014 呪われたかれらの天を
084 001 かれはヴァイオリン弾きです
084 004 かれのかわりに歌ってくれるのですよ
084 034 それでも　かれはヴァイオリン弾き
084 038 かれにかわって上手にすすり泣くのですよ
085 022 かれらの恥辱の隠れ家をあばいてしまおう
093 003 かれはベッドにもぐりこむ
093 007 かれにとって眠りもひとつの儀式だから
093 013 かれにとってはとっくに抜け道がわかっている迷路である
093 017 かれの手足がはなれ罪もまたはなれてゆく
093 020 そのようにかれの赤い血も
093 022 かれの眠りは純潔の匂いがする
093 027 かれの魂はエデンの樹の頂きからはてしなく落ちはじめる
094 016 かれと言いきみと呼びぼくに返る心の遠近法にしたがって
094 017 かれがきみに死ねと言うなら
103 006 かれにはいいところがある
103 012 海のまぼろしに憑かれたかれは
103 022 かれの目的地は
106 006 「笑うなかれ」　悲しい内部の声である
106 010 第一列の中央に　いやな上眼づかいのかれがいて
106 019 かれの額は　西洋皿の平面のように広く
106 020 かれの眼は　スプーンの銀のように輝いている
106 021 かれの指の爪貝は　恋人たちがしゃぶりたがるほど美しい
106 024 詩人としてのかれの　おそろしい飛翔力をあらわしている
106 039 かれはじぶんを憐んではならない　その罪がいかに深くとも
106 040 かれは自分を罰してはならない　屠殺者や皮肉屋の包囲のなかで
106 041 かれは屠所にひかれる小羊であってはならない　たとえその皮を剥がれても
106 042 血を流してはならない　その肉を引裂かれても
106 048 ただちに答えられるだろう　かれの経験の彼方から第四の声で
108 025 風に吹かれて
113 028 きれいにふかれた鏡のように
116 010 引き裂かれていった日から
124 031 日没に追いつかれていた
133 001 歌のはじめには開かれた理由がある
133 026 暗天の星にみちびかれて

140 020 かれは実体のない都市の雲の中に住む
142 002 記録されず　書かれず
142 082 彼がおかれている状況は　西側の同時代人のそれより
142 094 オーエルの未来小説に描かれた　党　は
142 108 一個の弱い人間の信念をも挫くことができないとわかれば
143 009 寒風に吹かれるみじめさを思い
148 005 二人の娘を育ててきたと書かれていた。
148 009 かれとは敗戦直後の闇市の近くの旅館で一度会い、
148 039 十時をすぎると蒲団が敷かれた。
150 017 しかし、友人たちは仲間のだれかれをあてこすっているのだと思いこみ、
150 036 しかし、そのことに、「私」は、全面的に欺かれているわけにはいかない。
154 019 いましも刑罰の足台が置かれ
159 017 かれの生涯にはついぞなかったのに！
160 019 「お仕事は？」と訊かれ　ほんとのことを口にしたがらない
160 042 陽気であれ！　思いわずらうなかれ
160 046 今夜のかれの幸運は明日にはきみのものだろう
160 055 妻も子もなかったかれは　タイムズ・スクエアに近い安ホテルの一室に住み
160 059 ニューヨーク・タイムズの記者が屍体置場のリストからかれの名をみつけ出し
160 061 かれが家を出たとき　母親は「棺桶に入って帰ってこい！」と言ったが
160 066 かれの名は雑誌やアンソロジーでさえめったに見かけなくなる
160 072 かれの肉体に刻まれていき
162 016 かれが歩いたのは
162 017 かれ自身の最後の王国であるから
162 018 かれが何を見たかは予断のかぎりではない
162 023 かれの死が均合うのは一桶の汗か
166 002 「かれ」と言ったり
166 009 かれには軍隊の経験があった
166 027 かれが冷たく呟く
173 029 頭蓋骨を射ちぬかれて死ぬ一人の男
176 005 開かれている窓辺の
179 017 それがかれの望みだった
185 016 愛する者から引裂かれて……
189 013 かれはくるりと背をむけて
189 023 いまのかれは雲を見下すような
189 036 かれは椅子に坐ったまま
192 021 あやかしとも気づかず、仄かな白い光の点線に導かれ、

かれ　(「かれ」)
166 002 「かれ」と言ったり

かれ　枯れ
021 020 いくつかの樹も枯れ
041 118 いつのまにか樹木は枯れてゐた

053　003　暗い空の枯れた林から落葉がすきまなく降ってきます
059　020　木や野茨が枯れて
101　051　頭上で枯れ枝がうごき　つめたい空気にふれるたびに
172　012　霜枯れた顔ばかりである

かれ　彼
046　050　此処と彼処　それも一つの幻影に過ぎぬことを
046　054　群青に支へられ　眼を彼岸へ投げながら
048　014　彼女だけが触れている
048　038　彼女の位置はどこにある
048　040　彼女の憂愁はどこにある」
051　003　彼方へと走っていた。
054　054　彼等が剥製の人間であるかどうか
054　116　彼は唾をはく街燈のそばを通りぬけ
054　155　海の彼方！
056　003　そして彼の背中のように淋しい風景がそこにある
056　005　彼の病んだ肋骨のなかを
056　015　孤独な彼の横顔は
056　021　ときに河明りが彼の額を照らしだし
057　021　彼岸はいつも死の国のように静かである
061　001　彼方の岸をのぞみながら
061　155　此処と彼処、それもちいさな距離にすぎぬことを……
061　219　彼方の岸に灯がついた、
065　019　さっきから彼のイメージの
065　030　やわらかな髪を腕にまき、彼は
065　037　彼の五体を震わせた。
065　044　乾いた咳を一つした。彼のイメージのなかには
065　054　彼は待っているよりしかたがなかった。
073　021　否定の彼方へ
080　025　まっすぐ海の彼方を指しているからーー
106　048　ただちに答えられるだろう　かれの経験の彼方から第四の声で
142　082　彼がおかれている状況は　西側の同時代人のそれより
142　084　彼の与える教訓は自ら明らかであろう」
150　003　「彼は臆病なドン・ファンであった。
150　005　六人の友達の彼に対する考え方は夫々まるで違ってゐた。
150　006　六人の意見が一致してゐる時は、六人とも彼に騙されてゐる時であった。
150　007　彼は自分の虚構の個性を破綻なく演ずるために、
150　013　彼の表面は常に波立ってゐるが、彼の底は何時も静かで、
150　042　すくなくとも彼の自殺の真因が、
150　046　「誇り得るもの」を失ったとさとったとき、彼はこの世から転向していったのだ。
150　051　彼は我々の雑誌の創刊号に、玉の井の娼婦と客との交渉を扱った「泥沼」を書き、
150　057　彼は特徴のあるうるんだ眼をしばたたきながら聞いていたが、
150　059　しかし、それから彼は、もう小説を書かなかった。

150　061　我々は彼を励ますことを忘れていたようだ。
150　064　彼の才能は枯渇を強いられたのである。
167　027　もう一人の彼である
176　027　みはるかす彼方には
184　001　すごい金髪美人である彼女は
184　014　たいへん誇りにしている彼女は
188　043　此頃では、人の顔さえ見れば、誰彼となく病気の話で、

かれいな　華麗な
023　022　華麗なあなたの指輪とともに

かれえだ　枯れ枝
101　051　頭上で枯れ枝がうごき　つめたい空気にふれるたびに

がれき　瓦礫
058　002　瓦礫のうえに材木が組立てられ

かれさせ　涸れさせ
038　002　グラスの底を涸れさせて
041　010　社交術があなたを涸れさせたり育てたりしないうちに

かれさせて　涸れさせて
038　002　グラスの底を涸れさせて

かれた　枯れた
053　003　暗い空の枯れた林から落葉がすきまなく降ってきます
172　012　霜枯れた顔ばかりである

かれて　枯れて
041　118　いつのまにか樹木は枯れてゐた
059　020　木や野茨が枯れて

かれている　涸れてゐる
009　010　褐色の皮膚の下に樹液は涸れてゐる

かれてゆき　涸れてゆき
039　043　わたしの骨は涸れてゆき

カレラ
006　001　弾痕からシズクが落ちてるが　カレラは銃器を埋めて

かれら
028　020　かれら塵挨都市の番兵と呼ぶものから

039　124　かれらの葡萄色の頬を打て
072　018　結局のところわれわれの期待も、かれらの手綱さばきで
074　010　かれら民衆の悩みだったが
079　014　呪われたかれらの天を
085　022　かれらの恥辱の隠れ家をあばいてしまおう

かれら　彼等
054　054　彼等が剥製の人間であるかどうか

カレンダー
003　001　カレンダーに音楽が流れ

かれんな　可憐な
055　009　可憐な魂のノスタルジアにともして

かれ自身
162　017　かれ自身の最後の王国であるから

ガレージ
150　075　それにしても、きみがガレージで漬物をつける甕をさがしていたら、

かろやかな
078　016　白くかろやかな翼になりゆくことか
100　033　かろやかな鼻唄のリズムで歩きもしたろう

かわ　河
005　002　蝶々は光る河を渡る
007　004　煤けた町は古い習慣で壺の沈黙を　それはいつまでも黄色い河の
007　016　あ見給へ　昏の河の上を歯を剥いた白馬が乱れるではないか
011　001　河の水は泥のやうに澱んで
044　005　鳥瞰すれば山河
046　045　内部を刻む時計の音に　蒼ざめた河のこの沈黙はつきまとひ
054　021　「僕たちは都市をつらぬく濁った河にそって
054　071　おお　いまこそ偉大な人間と大きな河は
056　008　昨日のように空は濁った河のうえにある
056　021　ときに河明りが彼の額を照らしだし
057　041　河は山をのりこえ
061　007　はるか、地下を潜りぬける運河の流れ、
061　094　背すじを走る黒い運河の呻きを――
061　145　霧ははげしく運河の下から氾濫してくる。
061　196　暗くなってゆく運河を見つめています。
061　221　運河の上にも灯がついた、
065　021　告げなさい。レエテ河の水を飲まぬうちに

065 052 死せる魂をゆり起し、夢に見たレエテの河が
073 003 メコン河の水で濁っていた
073 028 メコン河の上流へと
085 001 きみの運河は
089 006 あおざめた河明りを見おろしている人たちといっしょに
089 032 黒い河をのぞきこんでいる人がいます
094 005 さかまく汐をどっとのみこむ河口
094 019 この苦渋にみちた河口の渦に閉じることになろう
094 021 ぼくの河口はひといきに岸辺やテントや小舟を吐きだそう
096 008 エブロ河を流れてやってきたにすぎん
101 010 血の河をわたっていった兵士たちよ
130 003 河原にほの白く浮んでいる
132 011 河原の石となれ
145 019 静かに走れと命名された群集の河は昨日のように流れていた

かわ 川
046 042 ほっそりした川のやうに渝らぬ月日を行くことが出来る
048 012 川は音をたてて背中をながれる
048 029 山や川 またなによりも海ができる
062 052 海へいそぐ小川のせせらぎや
070 016 いつまでも、流れゆく川を
088 034 これはお山 これは川
117 002 どぶ川のむこうに草がゆれており
119 001 黒い川波に
119 011 よるべき川岸の
119 013 静かに走れ すみだ川
136 028 地底の川はどちらへ？
168 001 川の流れにただよい

かわ 皮
009 010 褐色の皮膚の下に樹液は涸れてゐる
025 058 欲望に乾いた皮膚を脱いで
026 009 かわらぬ皮膚と
028 033 ねぢれた鎖のやうな数輌の列車の合図が響き
040 026 美しいあなたの皮膚や
042 008 予感のやうに皮膚にとどく
048 007 皮膚だけが燃え
054 090 黄ろい皮膚
067 008 皮膚のしたに
069 024 都会の荒れた皮膚をひきさいていった
072 024 独断批評家の口ぶりもわるくはないし、皮肉な記者のポーズも捨てがたい
074 018 生あるものの皮膚の下を
106 040 かれは自分を罰してはならない 屠殺者や皮肉屋の包囲のなかで

106　041　かれは屠所にひかれる小羊であってはならない　たとえその皮を剥がれても
124　026　吊皮につかまる両手をポケットに入れたまま

かわあかり　河明り
056　021　ときに河明りが彼の額を照らしだし
089　006　あおざめた河明りを見おろしている人たちといっしょに

かわいい　可愛いい
052　010　あなたが男を誘惑するはずだった可愛いい頬の黒子のことを
052　017　あなたの可愛いい頬の黒子のことを
053　011　可愛いい格子のスカートをはいています
058　055　たまたま可愛いい瞳をしていたからといって
087　004　「ペニィやペニィ　可愛いいペニィ」
087　017　「ペニィやペニィ　可愛いいペニィ」
183　022　よちよち歩きする可愛いい女の子に

かわいそう　可哀そう
130　017　もう一つが可哀そうだ

かわいそうな　可哀想な
186　055　可哀想な人！

かわいた
101　034　かわいたとび色の風のなかで

かわいた　渇いた
046　016　渇いたこころの橋上の人よ
128　065　渇いた人の飲む

かわいた　乾いた
018　005　乾いた砂の上に
025　058　欲望に乾いた皮膚を脱いで
034　002　乾いた椅子の上の
035　026　乾いたテエブルと
039　145　乾いた洞窟のなかに
043　007　いくつもの乾いた言葉にそって
065　044　乾いた咳を一つした。彼のイメージのなかには
068　022　乾いた砂に埋まっているのを

かわいて　渇いて
128　069　ますます渇いてきた

かわいている　乾いている

054　131　空虚な額縁のなかで白い雨が乾いている

かわき　渇き
052　027　飢え渇き卑しい顔をして
065　049　烈しい渇きに悶えながら

かわく　渇く
168　010　渇くまもなかった

かわく　乾く
142　114　記憶のなかの血はけっして乾くことはない

かわって　変って
039　044　しだいに眼をとじた楕円の石に変ってしまふ
054　122　影は一つの世界に　肉体に変ってゆく
172　009　まばたき一つで風景が変って

かわなみ　川波
119　001　黒い川波に

カワヘビ
094　001　身をくねらして走るカワヘビの

かわら　河原
130　003　河原にほの白く浮んでいる
132　011　河原の石となれ

かわらぬ
026　009　かわらぬ皮膚と
193　016　いつもかわらぬ休息がありますように

かわらぬ　変らぬ
029　015　やはり変らぬわたしたちの愛よ

かわり　変り
128　074　変りはないよ
140　013　この世のすべてに変りはない

かわりに
084　004　かれのかわりに歌ってくれるのですよ
090　010　そこに年輪をよむかわりに
124　014　不確実なニュースのかわりに
156　018　「おはよう」のかわりに

がん　癌
188　052　結核と癩から、心臓病と癌へ。

【問題用語】カンヴァス

がんか　眼下
061　140　眼下の大いなる混沌のむかしに

かんがえ　考え
014　026　おお主よと叫んだかは考えてみたらいい
039　015　考えただけでうっとりするのは
054　023　艀船がじっと水のうえで考えごとをしていたっけ
055　039　おれはおまえの責任について考えている
057　016　自殺したペーペルコルンのことを考えていた
058　053　一杯のコーヒーをまえにして考えようと思うのです
065　020　中にあった。「何を考えているのか
109　011　根が考え、幹が感じている。
142　020　考えてみる人はほとんどいない……」とあなたは語った
142　079　もちろん　信念より自分の生命が大切だと考えたからである
142　117　そんな考えは受入れることはできない
147　013　此頃ではてんで死のことなど考えやしない
150　005　六人の友達の彼に対する考え方は夫々まるで違ってゐた。
158　014　ついに深く考えずじまいであった
174　011　この三十年間、ぼくはきみに一度も電話などしたことがない、ちょっぴり心が痛み、それはなぜかと考え出すと、疑
174　025　きみは何を考えていたのだろう？
174　026　いまでも下手な碁打ちであるぼくは考える
181　018　考えたのはなぜだろうか
189　005　また考えが変る

かんがえかた　考え方
150　005　六人の友達の彼に対する考え方は夫々まるで違ってゐた。

かんがえごと　考えごと
054　023　艀船がじっと水のうえで考えごとをしていたっけ

かんがえた　考えた
039　015　考えただけでうっとりするのは
142　079　もちろん　信念より自分の生命が大切だと考えたからである
181　018　考えたのはなぜだろうか

かんがえて　考えて

014　026　おお主よと叫んだかは考えてみたらいい
055　039　おれはおまえの責任について考えている
057　016　自殺したペーペルコルンのことを考えていた
065　020　中にあった。「何を考えているのか
142　020　考えてみる人はほとんどいない……」とあなたは語った
174　025　きみは何を考えていたのだろう？

かんがえはじめた　考へはじめた
004　008　素敵なプランを考へはじめた

かんがえる
171　015　われら此処に在りとかんがえるだけで

かんがえる　考へる
010　003　有効なスピイドについて考へることを欲する少年は一個の白い帽子をかぶってゐる
044　001　匍ふもの　考へるもの
046　030　あなたは日の暮れ　何を考へる

かんかく　感覚
041　138　あなたの指はまだ感覚を失ってはゐない
065　035　感覚の闇を照らした。樹々が小枝を打ちならし
070　020　わたしの感覚はぬけおちて、

かんかく　間隔
192　017　よくよく見れば、そこから一米間隔くらいで、白い明りが点々とつづいているのだ。迷う者のために設けられた救急

かんがへて　考へて
028　069　何を語るかは考へてみればよい

かんき　歓喜
165　036　子のいない冷たい歓喜に

かんきゃく　観客
160　018　観客のいっぱいつまった劇場で　司会役の若い男から

がんきゅう　眼球
024　004　けてゐる　寝床に散らばった怠惰な骨の中から　陰鬱な眼球

がんきょう　眼鏡
041　033　優しい眼鏡や柔かい手袋の明日の方まで湿してゐる
052　024　わたしはいまでも眼鏡のつかれをぬぐい
106　033　鳥の巣型の髪のカットに　度のつよい眼鏡を糸でつるして
193　007　眼鏡の疲れをぬぐい

がんきょうな　頑強な
101　037　きみたちは　もう頑強な村を焼きはらったり

かんけい　関係
028　048　小鳥や草の声とは無関係である
072　040　みんな数字に関係があり
112　036　あさましい利害関係のなかでたたかいながら
158　009　馬と蹄鉄の関係だ
164　014　ぼくらの関係があいまいだからだ
180　010　「御手紙の内容、何のことやら判りません」なら「女の子の心理」がどうだってことも関係ないじゃないですか？

かんけつな　簡潔な
072　010　簡潔なイメジによって

かんげんすれば　換言すれば
124　019　換言すれば　カッテニシヤガレ

かんこ　歓呼
072　047　怒涛のなかの歓呼、歓呼のなかの怒涛

かんこう　刊行した
142　062　その著書をフランスで刊行した一九四二年生れのブコフスキーは

かんこう　幹候
148　032　同年兵で幹候の試験に合格した組は、

かんこうびる　観光ビル
146　003　明るい観光ビルのなかに入っていきました

かんこうへん　肝硬変
148　008　肝硬変であっけなく急死したという報らせを受けた。

かんごく　監獄
142　014　ウラジーミル監獄は
142　018　それで監獄は　四倍以上も暗く
142　042　監獄・収容所システムにほかならぬ　と
142　057　監獄・収容所システムに隠れ場所はない
142　063　各所の精神病棟監獄　普通の監獄・収容所で
142　069　精神病棟監獄から同時に釈放せよ　というものだった
142　073　十二年の刑期をつとめあげるために監獄に戻っていったのである

かんごく・しゅうようじょ　監獄・収容所

142　042　監獄・収容所システムにほかならぬ　と
142　057　監獄・収容所システムに隠れ場所はない
142　063　各所の精神病棟監獄　普通の監獄・収容所で

かんごく・しゅうようじょ　監獄・収容所システム
142　042　監獄・収容所システムにほかならぬ　と
142　057　監獄・収容所システムに隠れ場所はない

かんじ　感じ
046　006　あなたはまことに感じてゐるのか
060　014　高貴な冷たい戦慄を感じているにちがいない
100　060　はじめて心で見　眼で感じた夏だった
109　011　根が考え、幹が感じている。
142　081　生命より貴重だと感じていたのである
147　001　生きていくことに怖れを感じていた幼年時代だったら
147　012　生きることに怖れも困難も感じない髪の毛の薄い男になっていた
151　028　電話の数字にもふるさとを感じ
158　031　詩を終ったと感じたのは
160　020　そんな自分に怒りを感じて
179　009　感じのいい人の
186　021　タイム・マシーンで旅行した感じだった……
186　025　未来に辷りこむ感じが、あんなだとはね

かんしされ　監視され
142　023　たえず監視され　尾行されている

かんしする　監視する
010　016　新しい射手よ　一本の樹のみを監視するのは賢明ではない

かんじた
008　003　点ける　と焦げたパンの匂がし　空腹をかんじた兵士

かんじた　感じた
100　060　はじめて心で見　眼で感じた夏だった
158　031　詩を終ったと感じたのは

かんじて　感じて
046　006　あなたはまことに感じてゐるのか
060　014　高貴な冷たい戦慄を感じているにちがいない
109　011　根が考え、幹が感じている。
142　081　生命より貴重だと感じていたのである
147　001　生きていくことに怖れを感じていた幼年時代だったら
160　020　そんな自分に怒りを感じて

かんじている　感じてゐる
046　006　あなたはまことに感じてゐるのか

かんじのいい　感じのいい
179　009　感じのいい人の

かんしゃ　感謝
135　007　きらめく感謝を

かんしゅう　観衆
072　027　ーーどよめくスタンド、沸く観衆、拍手、喚声

かんじょう　勘定
188　035　毎年一人ずつの勘定だから、

かんしょう　感傷
148　019　感傷的にかかわっている暇はないのだ。
160　035　感傷に駆られてとはいえ　コーネリアスには

かんじょう　感情
124　001　感情の市場で
155　029　感情を節約し
160　038　たいせつなのは感情の純粋な喜び！
165　015　これ以上、理不尽な感情があるだろうか
165　022　これ以上、合理的な感情があるだろうか

かんしょうした　観賞した
148　052　グロテスクに繁茂する熱帯植物を観賞した。

かんしょうする　観賞する
008　005　ジライ花を観賞するときも　空にはポンポン花火が上

かんしょうてきに　感傷的に
148　019　感傷的にかかわっている暇はないのだ。

かんじんさ　肝腎さ
189　006　あきらめが肝腎さ

かんしんしない　感心しない
058　013　あまり感心しない生活をしています

かんせい　喚声

029　013　美しい喚声にとり巻かれてゐた
072　027　ーーどよめくスタンド、沸く観衆、拍手、喚声

かんせつ　関節
101　023　どの方向にでもまげられる関節をもち

かんぜんに　完全に
156　038　完全に処女性を保っている

かんそうした　乾燥した
036　003　乾燥した粘土の上に風だけの虚しさが

かんそうしてゆく　乾燥してゆく
041　125　乾燥してゆく空気のなかで

かんたい　寒帯
003　007　杳い寒帯から運ばれたミルクに溺れる頃

がんたい　眼帯
026　028　黒い眼帯を外して

かんちがい　間違い
151　002　これは間違いない

かんつう　姦通
055　048　ブルジョア的な姦通事件の

かんつうじけん　姦通事件
055　048　ブルジョア的な姦通事件の

かんどう　間道
150　030　これは、私だけが「虚構の個性」をつらぬき、偽善の間道をくぐりぬけて、

かんぱ　寒波
193　022　大陸からの寒波はきついが

かんばん　看板
058　039　サーカスの看板がこがらしに吹かれています

かんびな　甘美な
052　022　片言まじりの甘美な言葉で
133　017　死の匂い甘美な横丁で
185　013　一対の男女の世界では、甘美な

カンフル
165　029　カンフルの注射を三、四度射っただけであった

がんぺき　岩壁
025　008　海は黒く岩壁は白かった
062　053　岩壁へかえる鴎のなき声が

かんりされて　管理されて
166　023　巧妙に管理されてアジア病に冒されていく

かんりょうてきけんいしゅぎ　官僚的権威主義
142　097　非合理に機能する官僚的権威主義を全面的こはびこらせながら

かんれん　関連
010　010　不愉快な天候の有機的関連の結果である

カーヴ
072　007　うす緑の大地、美しいカーヴを描く競走路をみたまえ
085　002　舗道のカーヴにそってながれる

カーテン
064　007　カーテンの蔭で影と影とが抱きあった、
066　029　さっと影のカーテンをひいたのは
122　011　カーテンの蔭でわたしは泣く
176　012　レース織りのカーテンの布地を
176　026　カーテンをはためかし

カード
054　135　眉をひそめて手のなかのカードを隠してしまう

カーブ
051　016　下降　そして不吉な上昇カーブ

き　黄
003　011　油絵の裏に隠れてゆく黄ろい月
006　015　ヨーロッパは　黄昏　である
007　004　煤けた町は古い習慣で壺の沈黙を　それはいつまでも黄色い河の
008　013　群は　雲に乗って押しよせ　黄色く汚れた地図の上を
010　012　黄ろい煙は発射される

026 012 黄昏の中に香料を撒き
026 025 黄ろいダイヤモンドのやうに光り
041 014 かつはまた　あの人たちを悲しませる黄昏を創った
050 015 短かかった黄金時代ーー
051 010 「黄色さ」医師の事もなげな宣告。
051 014 午後四時の黄いろい太陽
051 026 「そいつは黄色だ　まるであの穢らわしい魂のように」
053 007 わたしのからだのなかに黄昏がいっぱいつまって
053 008 黄ろい髪飾だけがふわふわと蝶のように宙にさまよっているのです
054 090 黄ろい皮膚
054 159 テーブルに凭れて新しい黄金時代を夢みている
057 038 黄ろい指先のシガレットの煙よ
072 017 青、赤、黄、白の運命の使者たち
096 001 ミロはローソクの黄ろい炎で
099 003 黄金の毛のむく犬と一緒に
109 006 黄昏の寒い灰色の
127 023 黄ろいタンポポを黄色にしたものが
128 015 いい匂いの黄昏に
148 033 硫黄島に送られ、全員戦死していたことをはじめて知らされた。
153 014 黄金の太刀は
172 001 紅に黄に燃えさかって

き　気

008 009 ゆえに　陽気な太陽よ
014 021 おやおや狂気がくるわいと
028 009 哀訴の蒸気を吸殻とともに皿の上に拾てる三重の硝子の向ふの鐵格子の中の
029 008 憩ひといひ懶惰と呼ばれる雰囲気にかこまれ
030 026 零囲気のほとりに佇んでいる白いもの
030 027 気体のやうに
032 007 気味悪くキーキーいふ音に
033 011 殺気だけが風の如く起ち上り
034 014 気体のなかの透明な溝へはいる
039 005 ただ壜のようにつめたい気体がゆれる
039 045 狂気ならば
039 055 一定の雰囲気のなかでしか
041 002 海よ　そして人気のない墓場がある
041 080 純潔な空気が咽喉を塞ぎ　見えない量に苛まれて
041 092 小さな影のなかで血の気を失ってしまふだらう
041 111 物質で身を固め　破れたシャツで冷気を防いだ
041 112 それは又新しく湿気を呼んだ
041 114 ただ一脚の椅子があるだけ　気味悪くキーキーいふ音に
041 125 乾燥してゆく空気のなかで
042 002 夜はひそかに　窓のあたりの気配にまぎれ

045 004 にぶい気配が仄暗い光触にただよふ
047 008 頭上で屋根を剥ぐ不気味な爪の音……
047 009 頬骨がつめたい空気のなかで尖ってくる
054 012 あらしは冷気をふくんでいた
054 013 冷気は死の滴り……
054 125 音楽はたえまなく狂気を弾奏しなければならぬ
061 018 いま、あなたは嘔気をこらえ、
061 039 空気の悪いアパートの一室で、
061 096 氷と霜と蒸気と熱湯の地獄の苛責に
062 039 清い空気のなかで乳の瓶をふっているのを
062 045 ここでもうお終いだという気がします
063 028 ふと血の気のうせた顔を見あわせて
065 041 その不気味な、悩ましい笑いは
068 002 気がかりな便りをうけとった
070 047 窓掛をひっぱるのは空気の手、
070 054 誰です？　冷たい空気の手で、
072 002 天気予報が気がかりだった日曜日
072 023 血統を信ずるのもいいし、人気に支配されるのも結構だ
072 044 嵐のなかの、狂気のなかの
088 056 気むずかしい人たちに聞かせてあげよう
090 025 気味わるい沈黙を深めるために……
091 007 秋のつめたい空気をひきさく
097 013 空気を蹴り厚い無の壁をこえて、
098 007 「ここは　ほんとに気持のいい場所ね
101 051 頭上で枯れ枝がうごき　つめたい空気にふれるたびに
106 009 悪い空気のなか　鳥類のコンベンションが重んじられる
113 037 「すこし休暇をとれば　きみの病気もなおるだろう」と
120 020 人生に遅刻したのも気にしないで
121 004 天気は神さまに　世界は新聞に
128 052 天候に気をつけなさい
134 009 気ままな行動で夢みて
142 054 あとに残るのが　無気力な教養人ばかりだとしたら
142 074 「今日の西側の勇気の基準によれば
144 018 気象は覚存にして無漏
148 017 気晴らしはあっても、過去への橋渡しではない。
148 034 ぼくたちは女気なしの部屋で炬燵を囲み、
150 011 ほんの気まぐれから立てた計画に対して忠実になることは、
150 022 記憶の中で見逃していたさまざまな事柄に気づかないわけにはいかない。
150 041 今にしておもえば、真実を衝いた薄気味わるい言葉である。
150 070 いささか不感症気味であるが、
150 078 そちらでは気分的にパッとしない天候がつづいているそうですが、
150 081 ではお元気で。
151 020 一向に死ぬ気配を見せないのはどうしたわけか

151 021 とことんまで生きる気なんだろうおまえは
152 036 なんと無邪気な悪魔のやつめ！
155 015 すぐに気分はすっきりする
159 009 「うむ　元気でな」
160 003 気がつかないうちに　私もまた
160 025 哲学的な詩をひどく陰気な声で吟誦する
160 026 聴衆の気まずい沈黙
160 037 詩人の気前と品位にとっては　小さな犠牲で
160 042 陽気であれ！　思いわずらうなかれ
160 050 神の賜物を元気よく受けよ
160 077 自殺もせず　狂気にも陥らずに
165 005 健康を気づかう父の
166 024 文明の貪慾に吐気を催した
167 008 すぐ熱くなるといった気温で
167 031 こんなに澄みきった空気のなかには
167 078 せめて最後の呼気だけはきれいに
168 005 たちのぼる泉の霊気には
170 026 物を書く空気になじめなくなっている精神の
171 012 無邪気な目には悲しみがあふれていたから
172 004 人気のない街道を
174 004 「病気がこんなにこたえるとは、思ってもいませんでした。春からノイローゼ状態で我ながら呆れかえっていま
174 009 きみは意外に元気な様子で近況を語ってくれ、心暖まる十五分か二十分であった。
180 014 生意気も芸のうちで
180 018 どんなに気強い若者でも
180 036 浮気をする計画だったといえば
182 001 なにもかも気にくわぬ
182 012 病気も退屈も知らず
183 007 魚屋の呼声はえらく景気がいいけど
183 020 明日の強気節をどう謳いあげたらいいか？
186 023 往きも復りも気味が悪かったよ
186 028 いっぺんに老けこんだ気分でしょう？
186 049 そういえばそれがあなたの口癖でしたね、気障な！
187 001 天気はいいが
188 016 呼吸ができなくなるという、面倒な病気です。
188 018 手術をせねばなるまいと、気にかけています。
188 028 歳相応の、厄介な病気が、二つか三つ重なったところで、
188 043 此頃では、人の顔さえ見れば、誰彼となく病気の話で、
192 013 途方もない迷路に入ってしまったと気づくと、あたりが急に暗くなってきて、
192 015 みるみる漆黒につつまれていく、ここは、もともと海底だったところではないか。冷気に身ぶるいし、
192 021 あやかしとも気づかず、仄かな白い光の点線に導かれ、

ぎ 義
085 021 理想主義者や清貧家を蹴とばし

128 045 正義　戦争　性欲　政治
128 049 「民主主義はイデオロギーではなく
136 010 正義と無智の
142 053 義に昏（くら）い者　イデオロギーによろめく者が立去り
142 097 非合理に機能する官僚的権威主義を全面的こはびこらせながら
188 048 正義の社会学であったり、深遠な歴史学であったりもするのだから、

き 樹

005 010 古い楽器は花樹の下で
009 006 樹をたたいて
009 010 褐色の皮膚の下に樹液は涸れてゐる
010 016 新しい射手よ　一本の樹のみを監視するのは賢明ではない
012 020 知識の樹はアクロポリスを覆ひ
014 024 樹の海に青いぎんの雨が降ったよ
015 012 樹の影を掠めたのは
017 001 ひろい沙漠にはのどかな樹が
017 004 樹の上では祭典が始められ
017 016 蛞蝓が樹から昇天するのを待つかね
017 020 樹はゆらゆら揺れてゐた
017 036 沙漠の唄が樹の上でも流行し
017 037 樹はだんだん低くなってきた
017 041 我々の樹を救へ諸君よと
021 002 青い樹の下は
021 020 いくつかの樹も枯れ
025 039 透明な樹液の中で
025 047 樹には吊された肉体がある
026 018 樹液の触手は
029 017 樹樹のいろが肖像を作った
030 004 無造作な天体には樹木が茂る
031 005 目覚めてゐる石や眠ってゐる樹木は
032 008 樹木の影は怯え
036 001 おそらくは実らぬであらう樹木
036 011 みずみずしい樹木と花花の間で
036 013 これらの樹木はあまり好まぬ
036 020 おそらくは実らぬであらう樹木
036 021 これらの樹木の下の水べりに
036 024 おれの影はだんだん樹木の影に似てきた
038 005 樹木たちは
039 068 いとしい樹木も逃げはしない
039 113 波が黒い樹かげに光る
039 130 樹木も濡れてゐる柱廊も
039 149 どんな樹木を育ててゆくのだらう
041 083 そこにあたる影や光　樹々から流れる緑の匂ひ

041 118 いつのまにか樹木は枯れてゐた
041 119 誰のものでもないと思ってゐた樹木
041 120 貧弱な幹に大きな葉をつけてゐた樹木
041 121 それがあなたの樹木だった
041 141 楡の幹には自由な樹液がのぼりはじめた
042 016 樹によりかかり
044 012 「美しき実を結ぶ悪しき樹はなし。」
045 007 荒れた庭に　花樹はむなしく崩れかかり
046 003 啼泣する樹木や
046 014 もとの薄暗い樹の枝に追ひかへし
048 002 家や樹木のやわらかな影をおとして
053 057 永遠の星　花　鳥　樹　魚などの
054 096 まるで僕たちに呼びかけるかのような樹木のそよぎ
058 040 街路樹の枯枝に
065 035 感覚の闇を照らした。樹々が小枝を打ちならし
088 037 これはお家　これはお庭　これは樹
093 015 蛇が隠れたエデンの樹を一心に見つめる
093 027 かれの魂はエデンの樹の頂きからはてしなく落ちはじめる
109 003 花を咲かせた樹木が
117 008 こころの樹もすっかり裸になった
132 004 木から樹へ　魚へ　胡蝶へ
136 014 生きたくないと樹は嘆く
162 008 貧しさの樹齢そのものと化してから
167 034 ざわめく樹樹のあわい
172 020 常緑樹にしたたる日光の蜜が
191 006 樹樹のざわめき

き　木
001 010 その木霊でもあらうか
005 014 木笛を吹けよ
005 018 桜並木の向ふ側で燃えてゐる
011 003 葡萄棚には葡萄の木がない
013 001 ネムの木の下で
013 006 ネムの木は負け惜しみを云ふ
013 025 ネムの木は寒いよ諸君
021 007 木製のパイプ
021 008 木製のベンチ
021 009 木製のポニィの
028 014 あらゆるタイプという葡萄の木の影は
028 044 数本の太い樫の木がゆれる樫の葉のざわめき
028 059 葡萄の木の影のごときタイプが無数繁茂する
030 004 無造作な天体には樹木が茂る
031 005 目覚めてゐる石や眠ってゐる樹木は

032 008 樹木の影は怯え
035 007 樫の木はゆれ
036 001 おそらくは実らぬであらう樹木
036 011 みずみずしい樹木と花花の間で
036 013 これらの樹木はあまり好まぬ
036 020 おそらくは実らぬであらう樹木
036 021 これらの樹木の下の水べりに
036 024 おれの影はだんだん樹木の影に似てきた
038 005 樹木たちは
038 015 木木の下のみ朝がきます
039 011 とねりこの木に凭れ
039 052 高い木の頂まで攀ぢてみたいとひそかに思ふ
039 064 煌めく木片が波に漂ってゐよう
039 068 いとしい樹木も逃げはしない
039 100 木と木の間の寒い廊下に佇んで
039 130 樹木も濡れてゐる柱廊も
039 149 どんな樹木を育ててゆくのだらう
041 118 いつのまにか樹木は枯れてゐた
041 119 誰のものでもないと思ってゐた樹木
041 120 貧弱な幹に大きな葉をつけてゐた樹木
041 121 それがあなたの樹木だった
041 124 木質は腐り　陽に燬かれ　蝋のやうに流れた
046 003 啼泣する樹木や
046 034 同じ木の手摺につかまり　同じ迷宮の方向へ降りてゆく
048 002 家や樹木のやわらかな影をおとして
053 063 木の葉になったわたしには
054 096 まるで僕たちに呼びかけるかのような樹木のそよぎ
058 002 瓦礫のうえに材木が組立てられ
059 020 木や野茨が枯れて
059 024 木の葉のようにも
069 031 粗末な木の
070 023 鉄でもなければ、木でもなく
077 018 かれは木の吊床に身を横たえて
081 018 木の吊床に横たわる者
084 006 あの木枯のヴァイオリン弾きは
084 030 木枯のふく町に
088 005 ぼくの頭の木のうえに駈けのぼったりする
088 013 木々　家々　大地
088 070 とおくまで草木や花のやさしい言葉で
090 001 巨木は幾世紀を生きて
090 013 巨木の五百年は美しくない
098 004 聞えてくるのは木枯の声ばかりだというのに
101 044 沈黙よりも固い無名の木の実がはじけとび

106　008　親しくもないのに止り木で肩をよせあい
108　007　木蔭のテーブル
109　003　花を咲かせた樹木が
112　041　大木の幹にかくれて
128　005　やせっぽちの裸の木
128　006　ユリの木
128　059　ユリの木の並木にそって
128　082　ユリの木の
129　001　木々はとどかず
131　001　木を伐り倒す男らしく
131　008　男はしきりに木に還りたがった
132　004　木から樹へ　魚へ　胡蝶へ
134　010　木の葉のように散っていった若者たち
136　003　枯木に縛る
143　020　どこの荒野の枯木にとまるのか
144　011　木の芽峠を越え
164　006　樫の木が笑う　金木犀が笑う
172　002　木の葉のように舞い落ち
182　007　世話をする植木までひねくれる
192　003　うつむいて、歩いているところは、一木一草もない、黒い砂地で、

きいた　聞いた
002　004　（落葉は降りしきる　あゝ淋しい曲を聞いた）
061　095　あなたは聞いた。
145　028　オーデンはスペイン内乱に参加しなかったというニュースを聞いた

きいている　聞いてゐる
039　013　じぶんの耳で聞いてゐる

きいろ　黄色
007　004　煤けた町は古い習慣で壺の沈黙を　それはいつまでも黄色い河の
008　013　群は　雲に乗って押しよせ　黄色く汚れた地図の上を
051　010　「黄色さ」医師の事もなげな宣告。
051　026　「そいつは黄色だ　まるであの穢らわしい魂のように」
127　023　黄ろいタンポポを黄色にしたものが

きいろい　黄いろい
051　014　午後四時の黄いろい太陽

きいろい　黄ろい
003　011　油絵の裏に隠れてゆく黄ろい月
010　012　黄ろい煙は発射される
026　025　黄ろいダイヤモンドのやうに光り

053　008　黄ろい髪飾だけがふわふわと蝶のように宙にさまよっているのです
054　090　黄ろい皮膚
057　038　黄ろい指先のシガレットの煙よ
096　001　ミロはローソクの黄ろい炎で
127　023　黄ろいタンポポを黄色にしたものが

きいろい　黄色い
007　004　煤けた町は古い習慣で壺の沈黙を　それはいつまでも黄色い河の

きいろく　黄色く
008　013　群は　雲に乗って押しよせ　黄色く汚れた地図の上を

キウリ
016　006　キウリ畑でサイレンが鳴り

きえうせ　消えうせ
051　023　虹彩から光りが消えうせ
054　027　そうだ　君がこの街から消えうせても
054　115　独身者はすばやく扉のそとへ消えうせる
078　008　立ちのぼる水けむりのなかに消えうせるのを
103　003　緑の牧場は消えうせたか

きえうせる　消えうせる
054　115　独身者はすばやく扉のそとへ消えうせる
078　008　立ちのぼる水けむりのなかに消えうせるのを

きえた　消えた
005　037　遊園地区に火が消えた
031　003　自動車などで消えたあとは静かで
053　002　まだ悲しいひとつの顔が浮んだり消えたりしているのに
082　009　破風のうえに雲があらわれてまた消えた
100　067　野原がひとつ消えた
101　036　消えたいのちの水をのんでいる兵士たちよ
128　063　千代田ビルの角で消えたが
146　016　ふと遠くのドアに消えた人の
159　013　永遠に消えたが……
185　015　不意に世界から消えた

きえて　消えて
015　006　海図の脈のどこかに消えてしまった
017　028　葉っぱの蔭に消えてしまった
034　011　午後四時はしぜんに消えてゆく
035　011　影は消えてゆき

036　016　黒の中へ消えてゆく街よ
039　127　小さな炎が消えてしまふことは望ましい
041　078　あなたのではない鏡のなかへ消えてゆく
054　007　ひとりずつ夜の街から消えていった
061　151　同じ迷宮の白い渦のなかに消えてゆく。
069　022　広告燈の灯は消えて
076　015　虚しい文字のように消えてゆく
080　012　消えてしまう泡が唯一の言葉だから
082　010　消えてはあらわれる幻影の
082　012　しずかに無限の空のなかへ消えていった
100　010　消えてゆくのである
105　001　氷はとけ、雪は消えて、
117　003　きみが消えていった空が
186　086　思いは千々に乱れて消えていき

きえていった　消えていった
054　007　ひとりずつ夜の街から消えていった
082　012　しずかに無限の空のなかへ消えていった
117　003　きみが消えていった空が

きえてしまった　消えてしまった
015　006　海図の脈のどこかに消えてしまった
017　028　葉っぱの蔭に消えてしまった

きえてゆき　消えてゆき
035　011　影は消えてゆき

きえてゆく
035　021　風の五つの渦の中へきえてゆく

きえてゆく　消えてゆく
034　011　午後四時はしぜんに消えてゆく
036　016　黒の中へ消えてゆく街よ
041　078　あなたのではない鏡のなかへ消えてゆく
061　151　同じ迷宮の白い渦のなかに消えてゆく。
076　015　虚しい文字のように消えてゆく
100　010　消えてゆくのである

きえゆく　消えゆく
046　029　あなたの生をめぐる足跡の消えゆくを確め

きおく　記憶

021　021　若年の記憶は古くなり
024　005　は　記憶に固執する時計には花々が飾られてゐるのだなと見
030　028　すべての記憶の中からたちのぼる
041　043　記憶の中をとほってくる
054　084　すべて記憶に鍵をあずけている人々よ
062　054　傷ついたわたしたちの記憶をぬぐってゆくのを
064　008　暗い過去と冷たい記憶がふれあった。
065　022　罪の記憶のうせぬうちに」やがて
069　019　少女の記憶は
075　009　記憶のなかの港には
077　021　青白い記憶の炎につつまれて
079　026　記憶のはてにあらわれる
094　015　ぼくの記憶はまだ生れていない
099　010　ぼくの記憶は思いがけない不幸のシークェンスで翳ってくる
100　009　記憶のくらやみにとけるフィルムのように
100　044　切れたフィルムの記憶のそこから
100　075　きみの小さな記憶の孔のなかに吸いこまれ
104　008　太陽に追われた記憶が戻ってくるだろうか
105　014　悲歌の季節は記憶にあたらしく、
117　012　記憶の坂道をくだっていく
127　009　大事故の記憶がよみがえってきた。
128　086　ひからびた記憶の　屑籠のなかへ
139　008　五十年の記憶は闇また闇。
142　114　記憶のなかの血はけっして乾くことはない
150　022　記憶の中で見逃していたさまざまな事柄に気づかないわけにはいかない。
151　033　記憶にあるものだけで百六十人
160　015　二十年も昔に記憶の底に沈んだ詩人が
188　068　そのコピーを読んだ記憶は、全くない。
188　069　記憶の装置が、氷りついてしまったようで、

きおん　気温
167　008　すぐ熱くなるといった気温で

きかい　機会
186　042　機会がなかっただけですよ！
186　043　新幹線が開通して以来、機会はいくらでもあったよ

きかい　機械
016　009　君らの機械にアブラがささされた
016　013　より精巧な機械に見とれるときも
140　007　いのちを機械に売りとばして
145　020　どうかするとにんげんは機械よりも機械だから

きかいな　奇怪な
085　018　奇怪な造語で喋る連中の頭を踏みつけよう

きかがく　幾何学
028　021　幾何学が白い肉のやうな丘に

きがかり　気がかり
068　002　気がかりな便りをうけとった
072　002　天気予報が気がかりだった日曜日

きがかりな　気がかりな
068　002　気がかりな便りをうけとった

ぎがてきに　戯画的に
150　015　三人称で戯画的に書いているが、

きかない
027　017　局囲の跫音をきかない

きかんじゅう　機関銃
008　002　機関銃はマッチを擦って　乾草みたいな白い雲に火を

きぎ　樹樹
029　017　樹樹のいろが肖像を作った
167　034　ざわめく樹樹のあわい
191　006　樹樹のざわめき

きぎ　樹々
041　083　そこにあたる影や光　樹々から流れる緑の匂ひ
065　035　感覚の闇を照らした。樹々が小枝を打ちならし

きぎ　木木
038　015　木木の下のみ朝がきます

ききいる　聴きいる
088　044　沈黙に聴きいる石もなければ

ききほれた
158　021　というきみの議論にききほれたものだ

ききわけのない　聞きわけのない
087　008　聞きわけのない耳でかぶりをふって
087　018　聞きわけのない耳でかぶりをふって

きく　聴く
015　004　傾いた机は風を聴くことがない

きく　利く
041　151　だがあなたは僅かに口を利くことが出来る筈だ

きけ　聴け
051　017　内と外と　高鳴る波の響を聴け！

きげき　喜劇
100　036　ちょっとした喜劇を仕組みもしたろう

きけんな　危険な
142　088　いじけた打算がある　わざわざ危険な対立に足をふみこんで

きげんのわるい　機嫌のわるい
182　002　機嫌のわるい日は

きこえて　聴えて
192　009　あの音は、幻聴かも？　とぎれとぎれに聴えてくるが、

きこえて　聞えて
098　004　聞えてくるのは木枯の声ばかりだというのに
139　004　どこからか砧を打つ音がかすかに聞えてくる
145　011　「忘れはしないという虹色のラヴ　ソングが聞えていた
167　030　海鳴りさえ聞えてくる
175　012　病床のきみの耳にも聞えているに違いない

きこえない
023　012　きこえない見えない世界で
129　003　地上の物音はきこえない
191　001　耳をすませばきこえない

きこえる
022　004　響がきこえる
112　009　きこえるだろ

きこえる　聞こえる
024　002　脳髄は青く透明である　ざわめきの聞こえる孔には栓をつめ

きこくして　帰国して
184　005　すぐ離婚したが夫の姓は変えずに帰国して

きざみ　刻み
041　016　音を刻み　立止まり　年を待ってゐるやうに
041　050　人影にまじって　小刻みに人々に倣ひながら
100　003　かたい心をもち　小刻みにひとびとにならいながら
142　126　魂に刻み目をつけたこの年を！

きざみめ　刻み目
142　126　魂に刻み目をつけたこの年を！

きざむ　刻む
046　045　内部を刻む時計の音に　蒼ざめた河のこの沈黙はつきまとひ
121　015　台所では大根を刻む音がしている
138　016　いのちを刻む
159　001　時を刻む音ばかり高くなっていく屋漏で

きし　岸
005　001　岸辺では演奏会が開かれる
007　005　岸に住んでゐる蟾蜍である
040　018　アヘロンの岸にさまよう亡霊のごとく
046　054　群青に支へられ　眼を彼岸へ投げながら
057　021　彼岸はいつも死の国のように静かである
059　003　明るい海岸のボートへ連れさっていった
059　016　海岸に捨てられたボートを眺めていると
059　021　海岸への道が不思議と宙にうかんでくる
061　001　彼方の岸をのぞみながら
061　219　彼方の岸に灯がついた、
067　003　プラットフォームの岸辺をながめた
068　007　夏のうちに　海岸へゆくことにしよう
068　012　高い岸壁から　歌ったあの
070　002　夜の岸辺のように
073　005　さびれた海水浴場の岸壁にぶつかって
086　008　海岸から男たちの影を洗い去るであろう
086　011　岸辺につかまって死んだ魚の
094　006　ぼきぼき葦は折れて水垢のうく岸辺
094　021　ぼくの河口はひといきに岸辺やテントや小舟を吐きだそう
096　017　ごらん　対岸にアラビアの火が見えるよ
104　005　わたしの丘や森や海岸は　すでに
106　047　対岸は霧がふかくて見えないが　残る一つの疑問には
119　011　よるべき川岸の
124　033　つめたくなったコーヒー・カップの岸辺に
148　030　一の宮海岸の近くの松涛閣に集まったのは、
153　011　ひたすら切岸をのぼりつめると

ぎし　技師
028　043　測量する技師の手の影に従って
028　046　技師の懐中にある正確な地形図は

ぎしき　儀式
093　007　かれにとって眠りもひとつの儀式だから
173　033　厳粛な破壊の儀式が始まったら

ぎじどう　議事堂
193　023　議事堂のまるい空はきれいに澄み

きしべ　岸辺
005　001　岸辺では演奏会が開かれる
067　003　プラットフォームの岸辺をながめた
070　002　夜の岸辺のように
086　011　岸辺につかまって死んだ魚の
094　006　ぼきぼき葦は折れて水垢のうく岸辺
094　021　ぼくの河口はひといきに岸辺やテントや小舟を吐きだそう
124　033　つめたくなったコーヒー・カップの岸辺に

きしゃ　記者
072　024　独断批評家の口ぶりもわるくはないし、皮肉な記者のポーズも捨てがたい
160　059　ニューヨーク・タイムズの記者が屍体置場のリストからかれの名をみつけ出し
184　003　UPの記者をしていた当時

きじゅん　基準
142　074　「今日の西側の勇気の基準によれば

きしょう　気象
144　018　気象は覚存にして無漏

きしり　軋り
027　012　不図ねぢが軋り
040　021　あたりが軋りはじめ

きしる　軋る
041　070　嵐の音が聞え　ドアが軋る
047　006　つかれた椅子の軋る音……

キス
088　058　さあキスしよう
088　060　どんな恋人たちよりも甘いキスをしよう

141　007　へえ、それでキスの味は？

きず　傷
023　010　沈黙した化石に傷をつける
035　012　あとには傷口だけが光ってゐる
040　012　街は傷口を舐めてゐる獣のやうに
041　142　傷つける断片　それは悼ましくも長く生きてゐる
050　029　きみの胸の傷口は今でもまだ痛むか。
062　054　傷ついたわたしたちの記憶をぬぐってゆくのを
080　016　今日は希望　この痛みの傷口を
104　006　傷ついた鳥や獣の叫びでいっぱいだった
142　012　われわれを傷つけさえするのだ……
142　029　また　いかなる非難中傷の壁、妨害の電波がぐるりをとり巻いても
148　019　感傷的にかかわっている暇はないのだ。
150　009　一寸した小さな失敗の傷口からでも、
150　032　虚構なるがゆえに傷つくことがすくなかったからか。
151　005　軍歴は傷痍期間を入れて約二年半ほど
160　035　感傷に駆られてとはいえ　コーネリアスには

きずぐち　傷口
035　012　あとには傷口だけが光ってゐる
040　012　街は傷口を舐めてゐる獣のやうに
050　029　きみの胸の傷口は今でもまだ痛むか。
080　016　今日は希望　この痛みの傷口を
150　009　一寸した小さな失敗の傷口からでも、

きずついた　傷ついた
062　054　傷ついたわたしたちの記憶をぬぐってゆくのを
104　006　傷ついた鳥や獣の叫びでいっぱいだった

きずつく　傷つく
150　032　虚構なるがゆえに傷つくことがすくなかったからか。

きずつけ　傷つけ
041　142　傷つける断片　それは悼ましくも長く生きてゐる
142　012　われわれを傷つけさえするのだ……

きずつける　傷つける
041　142　傷つける断片　それは悼ましくも長く生きてゐる

きずな
103　002　血縁のきずなはたちきれたか

きする　帰する
044　004　帰するところ一にして　祈りは慧き習慣（ならわし）の光明なり。
191　012　回帰する万物よ

ぎする　擬する
101　014　なにものよりも　おのれ自身に擬する銃口を

ぎせい　犠牲
112　029　眼や耳や手足をなくした不幸な犠牲者に何をしてやったか
142　103　少しの犠牲で将来の破滅を防げるかもしれない）
142　119　非道な暴力に抵抗して　自らの犠牲と死の覚悟で第一線に立ち
160　037　詩人の気前と品位にとっては　小さな犠牲で
167　036　戦争と革命の犠牲者たちの
171　001　他者の犠牲を必要としないしあわせは

ぎせいしゃ　犠牲者
112　029　眼や耳や手足をなくした不幸な犠牲者に何をしてやったか
167　036　戦争と革命の犠牲者たちの

きせき　奇蹟
126　015　奇蹟の冒険に胸をおどらせるだろう
167　042　手の奇蹟を信じたことがあった

きせつ　季節
041　069　季節はとっくに過ぎ去ってしまった
050　018　いつも季節は秋だった、昨日も今日も、
091　001　きみの季節は
091　014　きみの季節は飼主のない猟犬のように飢えている
100　013　なじめなくなった季節のおわりに
101　007　いまはきみたちの肉と骨がどこまでもすきとおってゆく季節だ
105　014　悲歌の季節は記憶にあたらしく、
109　007　死の季節がやってくるから
114　005　喪亡の季節
117　011　季節はまっしぐらに

きせられた　着せられた
167　023　袋を着せられたソロフキの囚人みたいに

ぎぜん　偽善
150　030　これは、私だけが「虚構の個性」をつらぬき、偽善の間道をくぐりぬけて、

きそく　規則
099　014　それぞれの庭で規則正しくはずんでいる

きた
006 010 少女が碧い眼をした人形を抱へて出てきたが
010 014 パイプを握って雲の中から生れてきた少年は
017 037 樹はだんだん低くなってきた
023 003 音もなく日ぐれがきたといふ
027 006 たくさんの吸殻が落ちてきた
027 019 体温から去ってゆくひびきたち響たち
028 011 液體のやうに垂れてきたのは疲れた舌である
033 007 寒い廊下をわたってきた
036 024 おれの影はだんだん樹木の影に似てきた
038 027 散ってきた雨は
041 025 海からやって来たといふ　空を飛ぶ藻に乗ってきた人よ
041 108 あなたの巨大な手から降ってきた
045 012 夜半のけむり無常の風に耐へてきた
046 012 とほく橋の上へやってきた
048 006 影の茂みから闇のにおいが漂ってきた
050 021 黒い鉛の道を歩みつづけてきたのだった。
052 001 生きのびてきたわたしの心に
053 017 わたしの歩いてきた道は
060 010 遠くからこちらへ近づいてきたりする
061 017 いつか遠く橋のうえにやってきた。
061 061 どうしてあなたは帰ってきたのか
061 064 どうしてあなたは戻ってきたのか。
061 067 あなたは灰色の街のなかに帰ってきた。
061 072 あなたは破壊された風景のなかに帰ってきた。
061 210 あなたの外にも夜がきた。
061 212 生ける死者たちが空中を歩きまわる夜がきた。
064 005 ーーあなた、帰ってきたの？
064 006 ーーおれは運ばれてきたんだよ。
072 043 負け馬に賭けてきたぼくのような男には）
076 018 むしろ泣きたいくらいだ
077 006 いくたびか生きかえってきた
088 073 太陽の涙から生れてきたぼくたちの
090 021 紫檀の光沢は深まってきた
095 019 ……苦しみぬいて生きた父よ
096 006 ギリシァ　ローマの政治を見てきたが
096 008 エブロ河を流れてやってきたにすぎん
096 013 ミロ君の夜の太陽を見ていると　吐きたくなるね
100 043 おろかにもぼくはながいことそう信じてきたのだ
100 045 すこしずつ浮びあがってきた街のなかへ
101 015 たいせつにしてきたひとりの兵士だ
101 027 ながいあいだこの曠野を夢みてきた　それは

102 015 憎しみをかきたてる火掻棒で
103 004 どこからどうしてやってきたのか
105 012 戦争は失敗し、ぼくらの国は生きのびてきた、
106 001 ありきたりの記念写真のスタイルで　三列にならび
106 016 無事に生きのびてきた　この下手な構図は
109 008 自分自身と世界とに別れを告げるときがきた、
110 005 走りつづけてきた航跡を
114 006 じっと机の下にかがんで生きのびてきた
117 001 ここまできたーー
122 004 最初の冷たい雨がきた
127 009 大事故の記憶がよみがえってきた。
127 019 見たものを否定して生きてきた
128 055 明日の見出しができた
128 069 ますます渇いてきた
132 001 不在を予約して生きた
132 008 その秋はきた
133 022 せめていっさんに駈けていきたい
134 014 通行人が哀れっぽく声をかけてきた
136 014 生きたくないと樹は嘆く
137 010 入日のさまを覗き見してきたのだ
137 013 幾重ものドアを叩いてきた
138 007 早く早くとせきたてる
140 016 欄外の人生を生きてきたのだ
142 113 歴史を作る者をたえず脅かしつづけてきた基本的なイメージである
143 018 みじめであさましい生きた心よ……
144 008 齢を空しく重ねてきた
147 009 ところが遅れてやってきた壮年時代に入ると
147 015 ときたま死の匂いを発散させる若者に出会ったりすると
148 005 二人の娘を育ててきたと書かれていた。
148 014 おたがいに無縁の暮らしをしてきたのである。
148 035 どのようにして戦後の社会をたたかいぬいてきたかを語りあったが、
150 021 きみから送られてきたその頃の六冊の雑誌を見ていると、
150 031 うまうまと生きのびてきたということか。
151 036 一体一体に入魂の秘術をつくしてきたのだ
154 008 苔むす岩間に白い滝を忘れてきた
159 004 細くすきとおる声をかけてきた主は
160 002 いやに透明に見えてきた　今年の冬
160 016 闇をつらぬく稲妻と烈しい豪雨の中から新しい発見のように甦ってきた
162 003 生活の重みに耐えてきたが
166 005 危く均衡を保ってきたが
167 051 おまえはうやうやしく何を葬ってきたのか
167 058 家の崩壊はないものと念じてきたのに
172 016 影ばかりつかまえてきた

176 019 這い出してきたばかりなのだ
183 011 家路をいそぐ人も買物に出てきた人も
184 012 日本人妻の間にできた子供である
185 011 いたるところに沈黙の空白ができた
187 010 風はやさしく運んできた
187 016 生かしてきたもののゆえに
188 040 何かの縁で、とりついてきた病魔と、昵懇になり、
188 077 風も強くなってきたようだ。

きた 北
026 008 食卓は北方に白い布を垂らし
029 009 窓は開かれて北方に青く
035 020 北方のドアを閉ぢて
049 006 北風は涙を光らせる。
087 023 明日は おそらく北風が吹く
089 028 北風がプラタナスのほそい枝を鳴らして
089 038 吹きつのる北風に足を早めます
101 033 ……どうして敗北を信ずることができようか
101 063 勝利を信じないぼくは どうして敗北を信ずることができようか
123 005 今日は北風が吹いているが
158 034 北條や足利の美しい光景をすくってみせたときだろう
173 020 右か左か 南か北か

きた 来た
041 025 海からやって来たといふ 空を飛ぶ藻に乗ってきた人よ
045 002 さっと青い畳のうへに来た
051 020 神様をだます時が来た。
125 016 行ったり来たりしているが

きたい 期待
072 018 結局のところわれわれの期待も、かれらの手綱さばきで

きたい 気体
030 027 気体のやうに
034 014 気体のなかの透明な溝へはいる
039 005 ただ壜のようにつめたい気体がゆれる

きたかぜ 北風
049 006 北風は涙を光らせる。
087 023 明日は おそらく北風が吹く
089 028 北風がプラタナスのほそい枝を鳴らして
089 038 吹きつのる北風に足を早めます
123 005 今日は北風が吹いているが

きたない　汚い
058　019　いつもそんな汚い路地があって

きたない　汚ない
173　046　汚ない三枚の毛布にくるまれば

きちょう　貴重
142　081　生命より貴重だと感じていたのである

きちんと
054　158　きちんとチョッキをつけ上衣を着て
098　019　すべてがきちんとして
177　021　きちんと帽子をかぶり
183　014　きちんと心得ている働き人と

きちんとして
098　019　すべてがきちんとして

きつい
070　028　ぼくのほそい頸にまきついて、
171　013　それが女の心に焼きついたのだろうと
179　008　きつい香りがたちこめており
193　022　大陸からの寒波はきついが

きづかい
058　044　もちろん誰にも聞えるきづかいはありません

きづかう　気づかう
165　005　健康を気づかう父の

きづかない　気づかない
150　022　記憶の中で見逃していたさまざまな事柄に気づかないわけにはいかない。

きっさてん　喫茶店
058　051　喫茶店でコーヒーをのみ
148　050　サン・シャインという温室の喫茶店で休憩し、

キッド
085　020　キッドの短靴のようなもので

きつね　狐
112　012　鍵穴や本のあいだにしこたま隠しこんでる狐め

きっぷ　切符
146　005　外国行の切符を買ったのですが
146　009　切符売場に人影はなく

きっぷうりば　切符売場
146　009　切符売場に人影はなく

きて
013　009　ながい舌が垂れ下ってきて
014　002　侵入してきて楽譜を散らかした
014　020　楽譜が走ってきて整列する
025　041　竪琴の下にきて
037　018　風だけがやってきて
038　024　夜がきて
039　026　露が落ちてきて
041　037　青春よ　もう再び戻ってきてはいけない
041　139　水の中にはもう春がきてゐる
041　142　傷つける断片　それは悼ましくも長く生きてゐる
053　018　夕陽の果に燃えつきて
054　004　生きているにしても　倒れているしても
055　025　灰色の壁のように垂れてきて
057　008　それでもぼくらが生きているとは信じられなかった
061　149　ぼんやり近づいてきて、黙ってすれ違い、
063　002　夕日が燃えつきてしまった
077　026　死がやってきてじっと蹲っているのが見えた
083　013　また冷たい風が吹いてきて
084　023　天国の階段からおりてきて
088　072　どんなに暗い日がやってきても
090　001　巨木は幾世紀を生きて
096　018　あの瞑想の闇のコアには生きている砂漠があるんだ
101　008　空中の帝国からやってきて
102　014　毛深い夢の絨毯に戻ってきてくれ
112　006　生きてるにしちゃ　冷たい手だね
113　015　大元帥のスターリンが生きてたから
127　019　見たものを否定して生きてきた
140　016　欄外の人生を生きてきたのだ
147　001　生きていくことに怖れを感じていた幼年時代だったら
147　007　世をも人をも厭いつつ生きていて
147　010　生きていくことがだんだん心地よくなってきて
147　018　生きていることが心苦しくならなかったことで
148　036　結局、めいめいの職歴と子供を何人作ったかということにつきていた。
150　014　一匹の魚さへ住んでゐない沼に釣糸を垂らしてゐる影だけが生きてゐる……」

160　056　その日は夜どおし起きており　朝の四時にゴミを捨てに廊下へ出て
160　065　　フンボルトの天才　は四十歳で燃えつきてしまい
160　076　制度の春を病むこともなく　不確定性の時代を生きて
161　016　生きているというだけで
161　017　ましてながく生きているというのなら
186　017　（荏原肆夫が生きていてね）
191　008　生きている自然のしるしに
192　013　途方もない迷路に入ってしまったと気づくと、あたりが急に暗くなってきて、

きて　着て
005　036　ジャケツを着て歩み去る
053　010　わたしは赤いセーターを着て
054　158　きちんとチョッキをつけ上衣を着て
105　006　オーバーを着てゆこうか、脱いでゆこうか、
176　003　着ているものを脱ぎ

きている　着ている
176　003　着ているものを脱ぎ

きてゐる
041　139　水の中にはもう春がきてゐる
041　142　傷つける断片　それは悼ましくも長く生きてゐる
150　014　一匹の魚さへ住んでゐない沼に釣糸を垂らしてゐる影だけが生きてゐる……」

きてん　起点
100　031　ぼくはハピーエンドを起点にして

きにくわぬ　気にくわぬ
182　001　なにもかも気にくわぬ

きぬた　砧
139　004　どこからか砧を打つ音がかすかに聞えてくる

きねんさつえい　記念撮影
186　058　（動かぬ証拠の記念撮影）

きねんしゃしん　記念写真
106　001　ありきたりの記念写真のスタイルで　三列にならび
145　023　「写真店の窓には曝された肖像の記念写真が　夢こそすべてであると知った時　もう肉体

きのう　昨日
048　011　昨日も今日も　疲れた裸のままでいると
050　005　遠い昨日……

050　011　Mよ、昨日のひややかな青空が
055　032　だが昨日の雨は
056　008　昨日のように空は濁った河のうえにある
058　049　昨日のように読みすてましょうか？
071　016　昨日も明日もない
071　026　今日のなかの昨日
071　039　明日から昨日へ
071　044　今日のなかの昨日と明日
087　022　昨日も　そんなふうだった
098　026　それは昨日の正午
100　076　昨日の道となっている
123　003　昨日欲しがったものを
144　009　昨日の淵から出た今日の瀬は早く
145　019　静かに走れと命名された群集の河は昨日のように流れていた
155　004　昨日の風景である
167　074　昨日よりよき明日は来ないのだから
187　015　けれども昨日まできみを

きのうする　機能する
142　097　非合理に機能する官僚的権威主義を全面的こはびこらせながら

きのうせた　気のうせた
063　028　ふと血の気のうせた顔を見あわせて

きばらし　気晴らし
148　017　気晴らしはあっても、過去への橋渡しではない。

きびしい
048　022　うすれゆく年々の冬のきびしい日の下で……
101　060　きびしい寒さがしみとおり

きびしさ
112　016　あのきびしさはどこへ行ったか
150　026　年月のきびしさに苦笑するほかはなかったが、

きびす
177　001　きびすを返す時刻を

きふく　起伏
028　027　土の起伏と水の流れと

きふして　寄賭して
186　080　誰かが寄賭してくれたナポレオンの一壜もいずれ劣らぬ時間の傑作だった

きぶつ　器物
033　012　一個の器物と共にすべてが放擲された
040　004　器物の底もひびわれて

きぶん　気分
150　078　そちらでは気分的にパッとしない天候がつづいているそうですが、
155　015　すぐに気分はすっきりする
186　028　いっぺんに老けこんだ気分でしょう？

きぶんてき　気分的
150　078　そちらでは気分的にパッとしない天候がつづいているそうですが、

きぼう　希望
028　057　そこに一個の希望が絶望が信仰が
055　026　おれとおまえのはかない希望と夢を
061　028　未来と希望があるだけさ。
061　073　新しい希望の血が、
064　027　ーー星のない夜には希望がない、
068　017　淡い希望もまた　始めは
073　023　遅い希望の船脚であろうか
080　016　今日は希望　この痛みの傷口を
085　030　絶望も希望も必要でない
100　059　それは　ぼくの希望の「おわり」にふさわしい多彩な夏であった
101　028　絶望も希望も住む場所をもたぬところ
124　013　わずかに自己への希望でしかない日……

きほんてきな　基本的な
142　113　歴史を作る者をたえず脅かしつづけてきた基本的なイメージである

きまえ　気前
160　037　詩人の気前と品位にとっては　小さな犠牲で

きまぐれ　気まぐれ
150　011　ほんの気まぐれから立てた計画に対して忠実になることは、

きまっている
054　036　「星のきまっている者はふりむかぬ」
061　163　星のきまっている者はふりむこうとしない。
061　166　星のきまっている者の、空にまたたく光のために。
173　006　捨てゼリフはきまっている

きままな　気ままな

134　009　気ままな行動で夢みて

ぎまん　欺瞞
057　034　憎悪と欺瞞と屈辱によって生活し

きみ
008　018　ぼくらにもまたきみたちにも
011　013　立派なきみらの服装であるが
050　014　きみを見失ったのか忘れてしまったよ。
050　026　きみはただ重たい靴のなかに足をつっこんで静かに横たわったのだ。
050　029　きみの胸の傷口は今でもまだ痛むか。
051　004　「この病院船の磁針がきみらを導いてくれる」と船長は言う、
071　002　きみは
071　006　きみは海を見ようとして
071　019　きみはふと立ちどまることがある
076　002　ふときみの肩にかけられたのか
076　006　どうしてきみの涙をとめることができよう
076　007　ぼくのものでもきみのものでもない
076　013　きみの肩にかけられたぼくの手の
076　019　きみの青白い身体はみるみるうちに
080　004　きみはきみの心のなかに
080　006　戦いによって　両手をうしなったきみは
080　013　きみはもう何も言わぬがいい
080　020　きみはきみの失われた両手を高くあげる……）
080　021　もう　きみはこの涯しない眺めの
080　023　きみのかくれた意志をふりおろすことができない
080　024　きみにとって　いかなる「時」も
085　001　きみの運河は
085　003　きみの孤独をうつす鏡は
085　005　きみにとって過去はからっぽの空罐だし
085　007　きみの血を現場へ駆り立てるものは
085　011　きみは心よりもデリケートなうわべをもち
085　013　きみは真直な刃のナイフ
085　026　きみはよく切れるナイフ
085　031　きみが求めているものは善悪でない何ものか
087　001　いつから　きみは飼いはじめたのか
087　003　いつからきみは呼びはじめたのか
087　005　けれど　きみの愛犬ペニィは
087　009　きみの悩みは　こうだっけ
087　024　きみにとっても　ペニィにとっても
091　001　きみの季節は
091　005　きみの欲望は
091　009　きみのイメジは

091 014 きみの季節は飼主のない猟犬のように飢えている
091 015 きみの欲望は夕陽を浴びてビルディングの林に落ちてゆく
091 016 きみのイメジはいつも眼に砂をいっぱい溜めている
094 016 かれと言いきみと呼びぼくに返る心の遠近法にしたがって
094 017 かれがきみに死ねと言うなら
094 018 きみの人生はきわめてミステリアスに
094 020 きみがぼくに生きよと告げるなら
096 005 きみは賢者の砂色の眼で
096 011 きみもぼくも疲れた　さびしい旅だった
100 072 きみはとおくからぼくを見まもっている
100 075 きみの小さな記憶の孔のなかに吸いこまれ
100 077 ぼくの空はそのままきみの地上となっている
101 007 いまはきみたちの肉と骨がどこまでもすきとおってゆく季節だ
101 037 きみたちは　もう頑強な村を焼きはらったり
101 039 死の穫りいれがおわり　きみたちの任務はおわったから
101 040 きみたちは　きみたちの大いなる真昼をかきけせ！
101 043 きみたちのいない暗い空のあちこちから
103 031 きみが見た大きな虚無はふかくぼくらをひきつける
113 037 「すこし休暇をとれば　きみの病気もなおるだろう」と
116 003 きみとぼくにしかわからない
116 005 過去をすてたきみの喜びと
116 011 きみの髪をゆわえた
117 003 きみが消えていった空が
128 042 わからんか　きみ
128 081 きみ　どうする？
140 011 きみがいたすべての場所から
140 012 きみがいなくなったって
141 010 そして、きみはここにいる、ぼくはここにいる、
141 013 黙って向きあったきみとぼくとで、
142 050 　ぼくはここにいる　きみはここにいる
150 021 きみから送られてきたその頃の六冊の雑誌を見ていると、
150 050 きみが「歯応えというか、取柄があった」という伊藤茂二の場合を挙げることができよう。
150 073 きみから送られた昔の雑誌を手にして、なつかしい面影に出会い、
150 075 それにしても、きみがガレージで漬物をつける甕をさがしていたら、
152 028 きみの城にそっくりだから
158 002 きみのいう断念の意味を
158 006 たやすいことだときみが言ったとき
158 018 それがきみの作法だった
158 021 というきみの議論にききほれたものだ
158 022 きみにとって詩は
158 030 そしてきみが
158 038 きみにとって
158 041 ぼくはきみに倣って

158 042 「きみが詩を」ではなく
158 043 詩がきみを
160 046 今夜のかれの幸運は明日にはきみのものだろう
160 051 それだけがきみの富だから
160 052 使うもの以外にきみの物はないのだぞ
164 026 きみがすっかり眼をとじるまで
164 031 きみの花柄のパンティを脱がせるためだったら
166 003 「きみ」と呼んだりする習慣があって
166 013 いまのきみは一日に六十本の煙草を吸い
166 020 きみはスーパーマーケットに出かけ
166 025 きみは死にかけているのかもしれない
166 028 きみは死にかけているのかもしれない
167 077 きみたちの家を破壊にみちびくだろう
173 022 かつてきみの横顔には自伝らしきものがあった
174 001 きみからの最後の便りを受けとったのは
174 008 きみと話したくなって電話をすると、
174 009 きみは意外に元気な様子で近況を語ってくれ、心暖まる十五分か二十分であった。
174 010 最後にきみはさりげなく「声を聞かせてくれてありがとう」と言って、電話を切った。
174 011 この三十年間、ぼくはきみに一度も電話などしたことがない、ちょっぴり心が痛み、それはなぜかと考え出すと、疑
174 015 きみが再入院して
174 017 ぼくはきみとたった一ぺん打った碁のことをときどき思い出していた。
174 018 （きみが美しい奥さんと結婚して、みんなに羨まれながら、西荻窪のアパートに住んでいたときのことだ）
174 020 会心の笑みをもらすきみを前にして、ひどく口惜しい思いをした。
174 025 きみは何を考えていたのだろう？
174 027 きみの地合いの計算には
175 001 きみは犬にむかって
175 012 病床のきみの耳にも聞えているに違いない
175 015 きみとぼくは同じ一枚の画面の中にいる
177 003 きみでも
177 004 きみでなくても
177 010 きみはさびしい広場にいた
177 013 きみの家族が住むきみの家があり
177 020 きみは襟巻をし
177 024 きみ自身の街路を行かなければならない
177 029 きみの影は跛をひいている
177 030 きみでもきみでなくてもよかったのだ
180 023 きみはきっと怯えて失神するだろう
186 041 どうしてきみにわかる？　なぜ今までぼくが新幹線に乗らなかったか？
186 051 きみにはわかるまいが
187 015 けれども昨日まできみを
187 017 きみ自身は死ぬだろう
187 022 くり返しの多いきみの歌が
187 026 きみの影がみるみるちぢんで

188 001 いつか、きみから受取った手紙に、
188 026 そういうきみに対して、どんな返信を送ったか、
188 058 ところで、きみは同じ手紙の後半で、
188 071 きみの手紙は、たまたま、仕事机の片隅の、
188 083 きみが好きだという、武者小路の、茄子や南瓜の素朴な絵、
188 085 いつまでも、きみの心に残っていますように。
189 008 きみの顔を見たくない
190 017 いつかきみが帰るところは

きみ （「きみ」）
166 003 「きみ」と呼んだりする習慣があって

きみ 気味
032 007 気味悪くキーキーいふ音に
041 114 ただ一脚の椅子があるだけ 気味悪くキーキーいふ音に
047 008 頭上で屋根を剥ぐ不気味な爪の音……
065 041 その不気味な、悩ましい笑いは
090 025 気味わるい沈黙を深めるために……
150 041 今にしておもえば、真実を衝いた薄気味わるい言葉である。
150 070 いささか不感症気味であるが、
186 023 往きも復りも気味が悪かったよ

きみ 君
013 025 ネムの木は寒いよ諸君
016 009 君らの機械にアブラがささされた
017 041 我々の樹を救へ諸君よと
021 010 賢明な若い主君は
049 013 黒い足のように縮まっている 君の黒い足のようにー
054 015 Mよ 君は暗い約束に従い
054 019 君のなやましい顔の痕跡をとどめて
054 020 なぜ灰と炎が君を滅ぼす一切であったのか？
054 027 そうだ 君がこの街から消えうせても
054 029 Mよ 都会の胃袋をさまよいながら君が呟いていたことを……
054 040 「僕はここにいる 君がいないところから
054 041 君がいるところへ行きつくために
054 045 もしかしたら君の姿が霧の中からぬけだしてこないかと
054 056 Mよ 僕たちに君の高さが必要なのだろうか？
054 059 「君たちはまさか忘れたわけではあるまい
054 067 おお いまこそ君の虚栄をひきずり下せ！
054 069 君は君自身の汚れた手で
054 088 君たちは僕に背中をむける
054 104 君がとくに眠るとき
054 157 憐むべき君たちの影にすぎぬ僕は

096　013　ミロ君の夜の太陽を見ていると　吐きたくなるね
124　016　それが　諸君の旧式な
128　051　わかりましたか諸君
186　027　廿六年前に広島で撮った写真を、懇親会の席上で相良君から見せられてね

きみじしん　君自身
054　069　君は君自身の汚れた手で

きみたち
008　018　ぼくらにもまたきみたちにも
101　007　いまはきみたちの肉と骨がどこまでもすきとおってゆく季節だ
101　037　きみたちは　もう頑強な村を焼きはらったり
101　039　死の穫りいれがおわり　きみたちの任務はおわったから
101　040　きみたちは　きみたちの大いなる真昼をかきけせ！
101　043　きみたちのいない暗い空のあちこちから
167　077　きみたちの家を破壊にみちびくだろう

きみたち　君たち
054　059　「君たちはまさか忘れたわけではあるまい
054　088　君たちは僕に背中をむける
054　157　憐むべき君たちの影にすぎぬ僕は

きみょうな　奇妙な
164　020　奇妙な　ぞめき笑いの中に立ちつくす
180　050　「どこかで会って、さりげなく挨拶を交したような、奇妙な余韻をひいていくところ」それは私にしてもそうでし

きみら
011　013　立派なきみらの服装であるが
051　004　「この病院船の磁針がきみらを導いてくれる」と船長は言う、

きみら　君ら
016　009　君らの機械にアブラがささされた

きみらの
011　013　立派なきみらの服装であるが

きみわるい　気味わるい
090　025　気味わるい沈黙を深めるために……
150　041　今にしておもえば、真実を衝いた薄気味わるい言葉である。

きみわるく　気味悪く
032　007　気味悪くキーキーいふ音に
041　114　ただ一脚の椅子があるだけ　気味悪くキーキーいふ音に

きむずかしい　気むずかしい
088　056　気むずかしい人たちに聞かせてあげよう

きめ
090　011　艶やかなきめにふれてみる
145　022　行先をきめないで出発し到着したときに旅は終っていた
163　007　どちらを向くかは身体にきめさせた
192　008　わたくし、とは誰だったのだろう？　歩行の方向をきめている海の

きめさせた
163　007　どちらを向くかは身体にきめさせた

きめている
192　008　わたくし、とは誰だったのだろう？　歩行の方向をきめている海の

きもちのいい　気持のいい
098　007　「ここは　ほんとに気持のいい場所ね

きもの　着物
048　023　壁にかかっている着物からぬけだし

ぎもん　疑問
106　047　対岸は霧がふかくて見えないが　残る一つの疑問には
142　044　いつもかぎりなく透明で　疑問の余地なく真実だから
175　007　幼い疑問への答えを
180　039　原初の疑問には
181　020　疑問符のように

ぎもんふ　疑問符
181　020　疑問符のように

きゃく　客
150　051　彼は我々の雑誌の創刊号に、玉の井の娼婦と客との交渉を扱った「泥沼」を書き、
160　018　観客のいっぱいつまった劇場で　司会役の若い男から

ぎゃくてん　逆転
165　013　ぼくたちの間にはどんな逆転もありえないのだから

ぎゃくに　逆に
049　003　いつも逆に傾斜した獲物のない地平線しか見えない。

ぎゃくの　逆の

100　073　そして　ぼくと逆のイメジを抱いている

キャッチした
072　050　ゆっくりとゴールへ飛びこむ馬をキャッチした

キャバレー
058　005　やがてキャバレー何とか

ギャング
084　024　「今夜あたし　あのギャングに

きゅうか　休暇
113　037　「すこし休暇をとれば　きみの病気もなおるだろう」と

きゅうかこくご　九カ国語
184　013　九カ国語を話したという冒険家の祖父を

きゅうきゅう　救急
160　057　心臓発作で倒れ　救急車が到着する前に息をひきとったという
192　017　よくよく見れば、そこから一米間隔くらいで、白い明りが点々とつづいているのだ。迷う者のために設けられた救急

きゅうきゅうしゃ　救急車
160　057　心臓発作で倒れ　救急車が到着する前に息をひきとったという

きゅうけいし　休憩し
148　050　サン・シャインという温室の喫茶店で休憩し、

きゅうこうかする　急降下する
145　006　側に地下へ急降下するその劇場があって

きゅうしきな　旧式な
124　016　それが　諸君の旧式な

きゅうしした　急死した
148　008　肝硬変であっけなく急死したという報らせを受けた。

きゅうじつ　休日
125　013　さりながら果しない休日がつづく

きゅうしんりょく　求心力
169　010　求心力は見えなくなり

きゅうせいしゅ　救世主

028　023　鳩とともにおお救世主の銅像の髭にもついて

きゅうそく　休息
193　016　いつもかわらぬ休息がありますように

きゅうでん　宮殿
054　164　宮殿や政府の階段をとびこえ

きゅうてんちょっか　急転直下
055　058　急転直下堕落していったあの

ぎゅうにゅう　牛乳
052　005　ひとりで牛乳を匙ですくって

キュウピット
012　011　キュウピットの矢よりも疾い

きゅうめいぐ　救命具
078　020　救命具をつけた船のへさきは

きゅうめいぶい　救命ブイ
103　011　帆柱や舵や海図や羅針や救命ブイや銛や……

きゅうやく　旧約
103　020　旧約の秤にかけてもずっしり重い

きゅうゆう　旧友
148　007　地方都市で鉄工所を経営していた旧友が、

きゅうりょう　丘陵
145　009　そこにもあったトーモロコシの毛のそよぐ丘陵をエンジェルがうまれるのに充分な広さ

きよい　清い
061　141　かつて清い泉があったことを……
062　039　清い空気のなかで乳の瓶をふっているのを

きょういく　教育
188　060　高校によっては、死についての教育もなされているようです。
188　061　出産に関する教育がほどこされるならば、

きょうき　兇器
070　051　あなたの五本の指はどんな兇器よりも残忍で、

きょうき　凶器
136　007　凶器をにぎりしめ

きょうき　狂喜
162　010　やっと狂喜の雫が宿るようになる

きょうき　狂気
014　021　おやおや狂気がくるわいと
039　045　狂気ならば
054　125　音楽はたえまなく狂気を弾奏しなければならぬ
072　044　嵐のなかの、狂気のなかの
160　077　自殺もせず　狂気にも陥らずに

きょうくん　教訓
142　084　彼の与える教訓は自ら明らかであろう」

きょうざめ　興醒め
150　040　ずいぶん興醒めなくだらないことをいう奴だと思ったが、

ぎょうしする　凝視する
192　025　必死の思いで、前方の真っ暗闇を凝視するが、もう何も見えぬ。

きょうじゅ　教授
061　118　教授にとっての深渕が

きょうしゅう　郷愁
168　006　やるせない女人への郷愁があった

きょうじょう　橋上
046　002　澄みたる空に影をもつ　橋上の人よ
046　009　花火をみてゐる橋上の人よ
046　016　渇いたこころの橋上の人よ
046　022　夢みる橋上の人よ
046　027　熱い額の　橋上の人よ
046　037　うるんだ瞳の橋上の人よ
046　043　しかし橋上の人よ
046　051　橋上の人よ　美の終局には
046　056　橋上の人よ
061　002　澄みきった空の橋上の人よ、
061　011　橋上の人よ、あなたは
061　045　橋上の人よ
061　050　橋上の人よ
061　055　橋上の人よ

061 060 橋上の人よ
061 065 橋上の人よ
061 070 橋上の人よ
061 075 橋上の人よ
061 143 蒼ざめた橋上の人よ、
061 152 孤独な橋上の人よ、
061 160 橋上の人よ、
061 201 橋上の人よ、
061 208 橋上の人よ、
061 218 橋上の人よ、
061 229 橋上の人よ。

きょうじょうのひと 橋上の人
046 002 澄みたる空に影をもつ 橋上の人よ
046 009 花火をみてゐる橋上の人よ
046 016 渇いたこころの橋上の人よ
046 022 夢みる橋上の人よ
046 027 熱い額の 橋上の人よ
046 037 うるんだ瞳の橋上の人よ
046 043 しかし橋上の人よ
046 051 橋上の人よ 美の終局には
046 056 橋上の人よ
061 002 澄みきった空の橋上の人よ、
061 011 橋上の人よ、あなたは
061 045 橋上の人よ
061 050 橋上の人よ
061 055 橋上の人よ
061 060 橋上の人よ
061 065 橋上の人よ
061 070 橋上の人よ
061 075 橋上の人よ
061 143 蒼ざめた橋上の人よ、
061 152 孤独な橋上の人よ、
061 160 橋上の人よ、
061 201 橋上の人よ、
061 208 橋上の人よ、
061 218 橋上の人よ、
061 229 橋上の人よ。

きょうしんしょう 狭心症
143 013 狭心症の呪文と

きょうじんな 強靱な

072　014　あのスマートで強靱な足に注目しよう

きょうせいきょうく　共生共苦
140　017　地べたを這いずる共生共苦の道も

きょうそうする　競走する
010　006　ピカピカ光る自転車は他のピカピカ光る自転車と競走する

きょうそうろ　競走路
072　007　うす緑の大地、美しいカーヴを描く競走路をみたまえ

きょうだい
112　042　胡麻的な頭と頭をくっつけて寝ているなつかしいきょうだいたち
114　001　きょうだいたちの影が

きょうつうてん　共通点
174　014　「子供っぽさ」が抜けないという共通点こそ、最大の障碍だったのだろう。

きょうつうの　共通の
164　022　沈黙は共通の敵だから
164　024　……共通の穴である深い井戸にむかって

きょうどうしゃかい　共同社会
100　020　ぼくらの共同社会からきりはなされていった

きょうどうたい　共同体
186　082　死を含む共同体であるみんなの声に耳を傾けていると

きょうはくじょう　脅迫状
142　028　しかし　どんな脅迫状によっても

きょうふ　恐怖
023　016　恐怖の白い歯を投げる
079　023　いわれのない恐怖にあって
106　045　それは苦痛と恐怖がからみ合う　ながいながい鎖で
111　004　憧れにも恐怖にも　母にも恋人にも
125　020　恐怖で赤く熟れた月が廂に出ている
136　021　恐怖におののきながら
172　015　祖先から相続した恐怖で
180　020　夢のなかで恐怖に出あわないのが本当の年寄りなんです
184　026　いま地球は恐怖で頭をかかえているのに。

きょうふう　強風

167　026　強風のなかでクラブを振っているのは

きょうべん　教鞭
160　068　「蛇の穴」と称して大学にもぐりこみ　教鞭をとったこともあるが

きょうみ　興味
085　008　消えやすいアリバイ探しの興味である

きょうようじん　教養人
142　054　あとに残るのが　無気力な教養人ばかりだとしたら

ぎょうれつ　行列
058　047　ひとびとのうしろに行列をして夕刊を買い
061　077　溺死人の行列が手足を藻でしばられて、
100　064　つながれた行列の影は鎖のように工場をとりまいていた

きょうれつな　強烈な
054　156　光はひとつの原子に　強烈な夏の驟雨にかわってゆく

きょえい　虚栄
054　067　おお　いまこそ君の虚栄をひきずり下せ！
054　082　見よ　憎悪と虚栄のぬけがらを……
129　007　雲の上までつき出ていった虚栄
160　024　歴史というものが　どんなにわれわれの野心や虚栄とくいちがうかという

ぎょえい　魚影
190　014　清流をさかのぼって幽谷に魚影を追い

きょか　許可
041　063　お入りなさい　私が許可を与へたから
057　004　いちどは犯罪許可証を懐中にして

きょく　曲
002　004　（落葉は降りしきる　あゝ淋しい曲を聞いた）
028　028　地図に描かれた曲線の巧みな配置を
041　028　プラットフォームが岬のやうに曲がってくる
048　024　軟体の極限をゆく無数の曲線の戯れ
146　012　どの角を曲ってみても
183　026　駅前通りから暗い小道に曲ったところで

きょくげん　極限
048　024　軟体の極限をゆく無数の曲線の戯れ
148　018　極限状況のナンセンスに、

きょくげんじょうきょう　極限状況
148　018　極限状況のナンセンスに、

きょくせん　曲線
028　028　地図に描かれた曲線の巧みな配置を
048　024　軟体の極限をゆく無数の曲線の戯れ

きょくどに　極度に
142　096　極度に不平等な特殊社会組織の

きょこう　虚構
150　007　彼は自分の虚構の個性を破綻なく演ずるために、
150　030　これは、私だけが「虚構の個性」をつらぬき、偽善の間道をくぐりぬけて、
150　032　虚構なるがゆえに傷つくことがすくなかったからか。

きょしん　虚心
083　020　ああ　虚心の鏡に映る

きょせいされ　去勢され
103　019　風土とか習慣によって去勢されない

きょぜつしゃ　拒絶者
054　112　決然たる拒絶者の愁い顔があらわれる

きょせん　巨船
074　013　三色旗をつけた巨船のうえにあるものは

きょだいな　巨大な
023　013　巨大な鳥になって夜の空に墜落し
035　028　誰かくらい巨大なランプを掲げた
037　021　ランプよりも巨大な思い出の下で
041　108　あなたの巨大な手から降ってきた
055　010　巨大な黒い影が波止場にうずくまっている
123　010　巨大な村
142　105　巨大なものの力が　個人の信念より永続するという証拠はない
142　107　いかに巨大な力であっても
192　014　薄暮と昧爽とをとりちがえていた迂闊さに、狼狽するも間なく、巨大な生きものの胎内にのみこまれるように、

きょねん　去年
148　002　去年の一月の終りに、

きょひした　拒否した

142　065　魂を売ることを拒否したという

ぎょふ　漁夫
094　010　飛んでいる鳶や網をひく漁夫の唄で

きょぼく　巨木
090　001　巨木は幾世紀を生きて
090　013　巨木の五百年は美しくない

きょむ　虚無
061　130　渚をふちどり　虚無を涵し
103　031　きみが見た大きな虚無はふかくぼくらをひきつける
126　013　それが荒涼とした虚無の世界だとしても

きょり　距離
061　155　此処と彼処、それもちいさな距離にすぎぬことを……
167　029　至近の距離にあって
186　013　（距離の旅はしたことがないから

キョロキョロと
173　027　キョロキョロと振返って眺めている始末だ

きらめき
061　103　やがて星がきらめきはじめるね
122　010　あきらめきった人生の

きらめく
012　024　おおきらめく太陽よと
135　007　きらめく感謝を

きらりと
069　010　きらりと光るひとつぶの星があった

きり
054　028　僕ははっきり憶えている
068　028　（今年の夏もこれっきり）
069　036　それっきり言葉は絶えた
071　029　くっきりと影をあらわす山である
071　034　山の頂きがはっきりと見える
085　009　はっきりした愛情もあれば
085　010　はっきりした冷酷さもある
090　008　これはもうはっきりしている
098　012　それっきりとだえてしまった

098　027　青空にくっきり聳えて輝いていた五つの尖塔
100　020　ぼくらの共同社会からきりはなされていった
121　009　おもいきり　太陽をからかってみたい
122　008　ひとしきり烈しくなった雨音をきく
125　005　六月の雨はしきりにふり　音楽はとめどもなく
131　008　男はしきりに木に還りたがった
142　104　おそらくぼくたちは　はっきり　否！　と合図するだけでよいだろう
146　061　屋根を叩く雨音がひとしきり強くなって
148　010　また会おうと約束して別れたきりであった。
155　015　すぐに気分はすっきりする
159　015　しきりに思い返される
167　063　風はひとしきり烈しく吹きつけ
180　052　とびきり冷たい夏の訪れである
188　076　ひとしきり烈しくなり、深夜の屋根を叩いている。

きり　霧
003　006　震へてゐる爪に霧がかかる
007　013　阿片の軽艇（ボート）は霧の中へ青い泡を残して去るべく一人の少女を誘拐
018　003　霧は伽藍を沈めてしまった
028　041　おびただしい自然を覆ふ霧はやがて見えなくなるところ
038　008　午前の霧にぬれながら
041　027　青い霧が立ち罩め
046　028　あなたはけむれる一個の霧となり
050　001　たとえば霧や
054　045　もしかしたら君の姿が霧の中からぬけだしてこないかと
061　145　霧ははげしく運河の下から氾濫してくる。
061　150　同じ霧の階段に足をかけ
061　161　霧は濃く、影は淡く、
070　049　天井からのぞくのは霧の顔。
070　060　誰だ！　青白い霧の顔で
081　003　あたたかい霧のなかにあった
081　011　霧のむこうでは
081　028　遠い未来の祖国の霧
100　048　たとえば霧や
106　047　対岸は霧がふかくて見えないが　残る一つの疑問には
124　034　赤い霧がにじり寄ってくる
144　016　霧の襷か雲の帯
160　040　コーネリアスは濃霧の街を歩いて帰路につく
168　002　霧の海にさすらっていく
174　012　問の霧は深くなるばかりであった。
177　008　いずれにせよ深い霧だった
179　029　明日には深い霧の底に沈み
193　006　煙か霧か

きりあげ　切上げ
128　024　「円の切上げより自由化が先」

ギリシア
096　006　ギリシア　ローマの政治を見てきたが

ギリシア
142　007　同じことがギリシアやスペインやトルコでも起っている……

キリスト
017　040　なむ天にましますキリスト様よ

きりつ　規律
113　018　してよいことわるいこと　規律は明らかだった

きりつめて　切りつめて
151　009　月々の出費は切りつめて約六十万

きりはなされて
100　020　ぼくらの共同社会からきりはなされていった

きれいな
069　017　とてもきれいなお花畠があったんだって

きれいな　綺麗な
152　023　まだ綺麗な白い頭とが仲よくならんでいて
173　026　今では街中でも綺麗な娘に出あったりすると

きれいに
113　028　きれいにふかれた鏡のように
167　078　せめて最後の呼気だけはきれいに
193　023　議事堂のまるい空はきれいに澄み

きれた
095　016　崖下の道で息がきれた
103　002　血縁のきずなはたちきれたか

きれた　切れた
080　009　手ごたえもなく　切れた帆綱から
100　044　切れたフィルムの記憶のそこから

きれて　切れて

111　006　夕焼空にふと途切れている
141　009　躓いていたら、縄が切れて奈落におっこっちゃったのよ……

きれる
062　032　愛していても愛しきれるものではないし
062　033　死んでも死にきれるわけではないのだから
125　006　いつか堤防はきれるのだ

きろ　帰路
160　040　コーネリアスは濃霧の街を歩いて帰路につく

ぎろん　議論
158　021　というきみの議論にききほれたものだ

きわめて
072　032　きわめて純粋で、抽象的だ
094　018　きみの人生はきわめてミステリアスに
162　020　きわめて不確実なことだけである

きわめて　極めて
150　008　極めて小さな事柄にもいたましいほどの注意と努力を払ってゐた。

ぎん
012　012　ぎんの驟雨の中で
014　024　樹の海に青いぎんの雨が降ったよ
096　008　エブロ河を流れてやってきたにすぎん
189　003　ゼロ・サム・ゲームにすぎん

ぎん　銀
010　011　銀色のパイプで穹を覗いた
026　029　銀いろの鍵を投げると
030　020　銀製の器にたべ物を
047　014　古風な銀の縁をつけて　いつもこの水が動かぬことを……
053　014　昔の恋人からおくられた銀のロケットを
054　066　銀行が国民のものになるだろうから
085　016　銀メッキの光りをうかべた不敵な男だ
106　020　かれの眼は　スプーンの銀のように輝いている
140　023　水銀のナミダをたらして
183　016　銀行はシャッターを下していて
189　035　銀のフォークが石の床に落ちる

きんいろ　金いろ
021　005　金いろの羽毛を日に光らせた

きんいろ　銀いろ
026　029　銀いろの鍵を投げると

ぎんいろ　銀色
010　011　銀色のパイプで穹を覗いた

きんぎょ　金魚
008　016　金魚みたいにじっとして　水のつまったガラス鉢の中

きんきょう　近況
174　009　きみは意外に元気な様子で近況を語ってくれ、心暖まる十五分か二十分であった。

キング
054　137　護衛つきキングと慰めをあたえるクインの価値とが

きんこう　均衡
142　006　　左翼　に対する架空の均衡をつくり出すために
166　005　危く均衡を保ってきたが
170　027　失われた均衡を悼んで

ぎんこう　銀行
054　066　銀行が国民のものになるだろうから
183　016　銀行はシャッターを下していて

きんし　近視
142　091　しかし　利己的で　近視眼的で　無防備な文明のなかにいて
151　014　かなりひどい近視で乱視の

きんしがんてき　近視眼的
142　091　しかし　利己的で　近視眼的で　無防備な文明のなかにいて

ぎんしょう　吟誦する
160　025　哲学的な詩をひどく陰気な声で吟誦する

きんしんそうかんしゃ　近親相姦者
151　025　近親相姦者か

きんせい　禁制
149　006　いくたび禁制を犯したろう？
156　036　心の禁制は解けぬまま

ぎんせい　銀製

030　020　銀製の器にたべ物を

きんぞく　金属
030　024　光りは堅い金属のやうに寒々として

きんだいじん　近代人
151　027　近代人のなれの果て

きんだいとし　近代都市
081　014　ぼくらを生んだ七つの近代都市が

きんちょう　緊張
057　019　力が判断と緊張をしっかりと両足にむすびつける

きんにく　筋肉
070　024　なまの筋肉で出来ている、
085　023　毎晩たくましい筋肉をもって

きんぱつ　金髪
184　001　すごい金髪美人である彼女は

きんめっき　銀メッキ
085　016　銀メッキの光りをうかべた不敵な男だ

きんもくせい　金木犀
164　006　樫の木が笑う　金木犀が笑う

キーキー
032　007　気味悪くキーキーいふ音に
032　016　だが椅子のキーキーいふ音に
041　114　ただ一脚の椅子があるだけ　気味悪くキーキーいふ音に

キールン
057　027　雨のキールン港では

キールン港
057　027　雨のキールン港では

くいちがう
160　024　歴史というものが　どんなにわれわれの野心や虚栄とくいちがうかという

くいちらした　喰いちらした
070　039　喰いちらした獣肉の小骨や

くいとめられ
142　115　「残忍な歴史の流れはくいとめられないとか

クイン
054　137　護衛つきキングと慰めをあたえるクインの価値とが

くい違い
180　029　どこかでくい違い

くうかん　空間
027　005　ねぢによって組み立てられてゐる空間に
039　125　むしろあなたの占めてゐる空間に
065　009　沈黙が占めている空間に反響した。
124　028　（短評：空間はどの部分も遅れている？）
145　033　倚れるものもない空間にそれは倚れていた」
145　035　壁のない空間にそれは倚れていた
186　031　過去と現在の空間がぴたりと重なり、その輪郭がずれてぼやけていく
186　053　どんな空間のなかにあっても、
186　066　空間が空間であるうちは物の集合にすぎないから
186　069　空間と空間のあいだに時間が挟まる

くうき　空気
041　080　純潔な空気が咽喉を塞ぎ　見えない量に苛まれて
041　125　乾燥してゆく空気のなかで
047　009　頬骨がつめたい空気のなかで尖ってくる
061　039　空気の悪いアパートの一室で、
062　039　清い空気のなかで乳の瓶をふっているのを
070　047　窓掛をひっぱるのは空気の手、
070　054　誰です？　冷たい空気の手で、
091　007　秋のつめたい空気をひきさく
097　013　空気を蹴り厚い無の壁をこえて、
101　051　頭上で枯れ枝がうごき　つめたい空気にふれるたびに
106　009　悪い空気のなか　鳥類のコンベンションが重んじられる
167　031　こんなに澄みきった空気のなかには
170　026　物を書く空気になじめなくなっている精神の

くうきょな　空虚な
015　018　椅子は空虚なままに
027　003　空虚な鏡のなかを
033　014　空虚な核が
054　131　空虚な額縁のなかで白い雨が乾いている
055　035　空虚なメランコリイの谷間にふりつづいている

137　014　空虚なこだまのなかの幾年月

くうそう　空想
192　024　これが罰か、太陽と海を呪ったことの？　たった一度の空想の罪にしては、酷すぎる報いではないか！

くうちゅう　空中
061　212　生ける死者たちが空中を歩きまわる夜がきた。
062　009　いまでも空中をさまよっている姉さん！
068　019　空中に軽い死の飛沫をうちあげ
097　014　空しい喝采のなかで、永遠に空中を泳ぎつづけるだろう。
101　008　空中の帝国からやってきて

くうどう　空洞
061　123　ひとつの心の空洞から
101　054　血をはく空洞におちてくる
164　001　おおきな眼を空洞にして

くうはく　空白
185　011　いたるところに沈黙の空白ができた
185　024　その空白がどれだけの負担になるかは

くがつ　九月
105　011　九月ポーランド、十月スエズ、ハンガリー、
105　015　九月十月には、まだまだ遠い三月。

くき　茎
015　007　やさしい茎よ
022　006　やさしい茎と卵は永遠である
025　030　花瓶に挿さったみどりの茎は
028　001　一本の花の茎もない空の下に
033　001　一本の茎は清浄な水を欲する

くぐりぬけて
150　030　これは、私だけが「虚構の個性」をつらぬき、偽善の間道をくぐりぬけて、

【問題項目】くこうがわ　向ふ側
005　018　桜並木の向ふ側で燃えてゐる

くさ　草
007　010　喞筒は空に向って泥を吐く　草の無い荒地ではとかく悪い感冒が
008　002　機関銃はマッチを擦って　乾草みたいな白い雲に火を
013　011　草むらで笛のやうに鳴ったのは
015　010　舶来煙草のことを知らない

027　020　椅子は書籍の上に乗ってゐる
028　048　小鳥や草の声とは無関係である
039　014　書籍をなげうって
039　077　やはり草の色は
041　042　虹のやうに　或いは地の草のやうに
041　073　パイプに煙草をつめる
042　012　ねむれる草のうへに
047　001　深夜　唇が煙草を挟んでいる
054　112　決然たる拒絶者の愁い顔があらわれる
056　002　夕暮のなかで煙草をすっている男がいる
056　018　橋にもたれてぼんやり煙草をすっている
058　016　私はゆっくり煙草をふかしながら
060　002　斜面に枯草がそよいでいたりする
060　006　なぜか一服の煙草もひどくうまいのである
061　014　書籍や窓やペンをすてて、
061　071　さりげなく煙草をくわえて
062　049　枯草のあいだの四月の若芽のように萌えています
066　017　息子は煙草をふかしながら
083　001　夏草のうえの屋根が
088　070　とおくまで草木や花のやさしい言葉で
089　031　まだ煙草をすいながら
093　004　本と煙草とウィスキーの瓶をかかえて
093　008　寝床でウィスキーを飲み煙草をふかす
099　004　太陽が緑の絵具をとかしている芝草のうえを
117　002　どぶ川のむこうに草がゆれており
124　030　六十本の煙草を灰にしたところで
132　013　塔の愁い　草の雲いずこ
135　003　多くの国人と語って同時に
136　019　草の葉も兎の耳も
138　006　草葉の蔭を恋しがって
146　045　振りむくと小柄な中年の外国人が
166　010　一本の煙草を思うままに吸えたら
166　013　いまのきみは一日に六十本の煙草を吸い
167　049　塵埃のように書籍を衣類を調度類を
171　011　草原に追いやられて殺されるアザラシの
182　015　ごろりと草の上に横になればよかった
184　006　タイ生れの中国人の医者と再婚した
184　019　若い中国人の夫は口癖のように
186　084　かすかにふるえる指先の煙草のけむりのように
192　003　うつむいて、歩いているところは、一木一草もない、黒い砂地で、

くさい
114　009　やにくさいパイプの煙を吐きかけている

121　001　人間くさい
162　007　松脂くさいにおいを発散し
167　057　人くさい息が充満しているうちは

くさった　腐った
055　029　花瓶の腐った水のなかで溶けている
189　032　腐った肉片を歯のない口に運ぶ

くさって　腐って
062　005　わたしの胸のなかで腐っている
173　008　この世の中　どこまで腐っていくか」

くさっている　腐っている
062　005　わたしの胸のなかで腐っている

くさば　草葉
138　006　草葉の蔭を恋しがって

くさむら　草むら
013　011　草むらで笛のやうに鳴ったのは

くさり　鎖
010　021　地平線の鎖をのりこえて
028　033　ねぢれた鎖のやうな数輌の列車の合図が響き
039　069　鎖で縛られてゐるのはいいことだ
048　021　歴史の鎖につながれた老齢！
078　002　あらゆる鎖がひとりでにきれ
087　013　鎖をじゃらじゃらさせたり
100　064　つながれた行列の影は鎖のように工場をとりまいていた
101　048　ぼくはぼくの心をつなぎとめている鎖をひきずって
106　045　それは苦痛と恐怖がからみ合う　ながいながい鎖で

くさり　腐り
041　124　木質は腐り　陽に燬かれ　蝋のやうに流れた

くじ
160　017　コーネリアスは宝くじで大当りし
160　033　印刷の不備でくじに外れた老楽師に　大当りの賞金を全部やってしまう
173　052　「ねたらくじょうど

くじゅうにみちた　苦渋にみちた
094　019　この苦渋にみちた河口の渦に閉じることになろう

くずおれた
024　001　ふせた耳の上でふと風が鳴る　くずおれた月光の雫に溺れ

くすり　薬
022　002　火薬の匂ひがあらう
054　016　重たい軍靴と薬品の匂いを残し
055　031　厭な匂いの薬のように澱んでいるばかりであった
148　037　みな年相応に老けて、持薬を服用する者もあり、
160　070　アルコールと麻薬に蝕まれた生活で
188　015　鼻孔に、時々、薬をささないと、

くずれ
060　001　崖がくずれ
061　053　浪にくずれるむなしい幻影が
080　007　くずれる砂の甲板をふみしめ
082　007　くずれた崖の上にも
187　008　くずれた堡塁の一角から

くずれ　崩れ
028　017　組織が崩れ動乱の意識が流れかけて
032　013　壁が崩れたら
039　128　たとへわたしの位置が崩れ
039　142　わたしの天は奈落へ崩れおちよう
045　007　荒れた庭に　花樹はむなしく崩れかかり
086　010　崩れゆく砂の足跡
167　017　いつ崩れ落ちてもおかしくない

くずれおち　崩れおち
039　142　わたしの天は奈落へ崩れおちよう

くずれおちて　崩れ落ちて
167　017　いつ崩れ落ちてもおかしくない

くずれゆく　崩れゆく
086　010　崩れゆく砂の足跡

くずれる
061　053　浪にくずれるむなしい幻影が
080　007　くずれる砂の甲板をふみしめ

くせ　癖
150　012　自己韜晦の癖を或程度まで満足させてくれる。
160　006　死亡広告をみる癖がついたし

184　019　若い中国人の夫は口癖のように
186　049　そういえばそれがあなたの口癖でしたね、気障な！

ぐそく　具足
033　018　具足は視界の外ではない

ください　下さい
017　039　ああ助けてくれお助け下さい
061　197　教えて下さい、

くださった　下さった
061　182　貴方がわたしに下さったものはこれだけですか。

くだって
117　012　記憶の坂道をくだっていく

くだってきて　下ってきて
013　009　ながい舌が垂れ下ってきて

くだもの屋
183　005　くだもの屋にあふれている蜜柑が

くだらない
150　040　ずいぶん興醒めなくだらないことをいう奴だと思ったが、

くだり
109　005　生命の奔流は丘をくだり

くだんの
152　015　くだんのタバコに点火すれば

ぐち　愚痴
188　045　愚痴とも、自慢ともつかず、

くち　口
010　002　それは口笛のためのスピイドであった
014　010　みんなポカンと口をあいてゐると
014　022　口の悪い家畜どもが逃げていったあとで
026　030　おそるべき噴火口は
028　030　トンネルの入口はトンネルの出口へと
035　012　あとには傷口だけが光ってゐる
040　012　街は傷口を舐めてゐる獣のやうに
041　151　だがあなたは僅かに口を利くことが出来る筈だ

050 029 きみの胸の傷口は今でもまだ痛むか。
051 018 なまぐさい葡萄酒を口から喀き、
051 035 出口を求める熱っぽい瞳で
054 153 出口のない部屋から
054 166 僕らの家の戸口を大きな拳で敲く朝のことを……
058 038 よく政府の悪口を言っていた広場には
063 007 ぼくはあなたの口を押えようとする
065 024 天使は、夜の戸口から呼びかけた。
065 039 笑っていた。「痛みの戸口から入って
066 002 家々の戸口から戸口へ
066 012 家々の戸口から戸口へ
066 022 家々の戸口から戸口へ
066 032 家々の戸口から戸口へ
066 035 どの戸口にも固く錠がおりていて
070 009 あさましい祈りのことばを口にし、
070 042 ぼくは見えない出口をさがすように、
072 005 せまい競馬場の入口に殺到してくる
072 024 独断批評家の口ぶりもわるくはないし、皮肉な記者のポーズも捨てがたい
072 063 ひろい出口から流れだす
073 010 浅い湾口には
079 016 苦い塩を口にふくみ
080 016 今日は希望　この痛みの傷口を
082 014 海や空にむかって口をひらく
083 003 さっきまで子供たちが戸口から顔を出していたのに
094 005 さかまく汐をどっとのみこむ河口
094 019 この苦渋にみちた河口の渦に閉じることになろう
094 021 ぼくの河口はひといきに岸辺やテントや小舟を吐きだそう
101 014 なにものよりも　おのれ自身に擬する銃口を
101 035 からっぽの水筒に口をあてて
106 025 だがいけないのは口である　ぶちこわしである
106 026 その貧しさを隠すために　せめて口髭をたくわえておくべきだった
106 027 高名な美学派の詩人みたいに　口髭をのばしたり刈りこんだりして
106 030 尖がった紫の口髭なら　ずっと微妙な震えをもつかもしれない
106 031 詩人なら孤狼な口髭とか　大切な象徴の鼻について
112 019 おまえは今朝も蛇口のまえで
112 037 口真似のうまいおまえの仲間は
112 038 たぶん時代がわるいんだろうと異口同音に歌う
144 001 口に熱を持ち
146 037 出口がさっぱりわかりません
147 020 口笛を吹きながらするシャドー・ボクシングが死のレッスン。
149 009 さわさわと口づけをする
150 009 一寸した小さな失敗の傷口からでも、
152 005 シガレットの吸口を

155　028　いいえ、ぼくはもう……と口ごもって
156　011　愛しているなどと口走っていたら
156　035　私は口をつぐむほかはない
160　019　「お仕事は？」と訊かれ　ほんとのことを口にしたがらない
160　041　十四世紀のスコットランドの詩を口誦さみながら
160　079　口誦さむ一篇の詩がなくて！
164　010　黒いミューズは口をとがらせる
165　003　ゆっくり食物を咀嚼する口の動き
174　020　会心の笑みをもらすきみを前にして、ひどく口惜しい思いをした。
184　019　若い中国人の夫は口癖のように
186　049　そういえばそれがあなたの口癖でしたね、気障な！
189　019　誰とも口をきかずに十年を生きればよい
189　032　腐った肉片を歯のない口に運ぶ

クチあいて
008　017　レコオド音楽にクチあいて　緑の藻をタベてゐる

くちぐせ　口癖
184　019　若い中国人の夫は口癖のように
186　049　そういえばそれがあなたの口癖でしたね、気障な！

くちごもって　口ごもって
155　028　いいえ、ぼくはもう……と口ごもって

くちづけ
061　133　踠みこめ　くちづけよ

くちづけ　口づけ
149　009　さわさわと口づけをする

くちにし　口にし
070　009　あさましい祈りのことばを口にし、
160　019　「お仕事は？」と訊かれ　ほんとのことを口にしたがらない

くちばし　嘴
036　028　ばんやりしていると嘴と天使の槍で
041　087　愛嬌ある仕科（しぐさ）で柔かい羽に堅い嘴をこすりつける

くちばしって　口走って
156　011　愛しているなどと口走っていたら

くちひげ　口髭

106　026　その貧しさを隠すために　せめて口髭をたくわえておくべきだった
106　027　高名な美学派の詩人みたいに　口髭をのばしたり刈りこんだりして
106　030　尖がった紫の口髭なら　ずっと微妙な震えをもつかもしれない
106　031　詩人なら孤狼な口髭とか　大切な象徴の鼻について

くちびる　唇
017　017　と悪い唇が耳の傍で薄くなったので
047　001　深夜　唇が煙草を挟んでいる
054　108　そしてやがて獣のようになる歯並みの悪い唇の動きが
059　014　ちいさな赤い唇とは
061　097　厚くまくれた歯のない唇をひらき
084　027　その黒い唇　その褐色の髪
124　032　物いわぬ唇
130　008　唇は笑っているようでもある

くちぶえ　口笛
010　002　それは口笛のためのスピイドであった
147　020　口笛を吹きながらするシャドー・ボクシングが死のレッスン。

くちぶり　口ぶり
072　024　独断批評家の口ぶりもわるくはないし、皮肉な記者のポーズも捨てがたい

くちまね　口真似の
112　037　口真似のうまいおまえの仲間は

くつ　靴
008　012　すてて　砂漠へ逃げてしまった　やがて新らしい靴の
008　015　　新ラシイ靴ハ　押シヨセ　蹂躙スル　　ソレハ
013　007　ぼくは靴下をなげだすと
019　001　靴の溢れる廊下では
026　011　透明な靴下が
028　012　古靴の氾濫する世界に
028　063　古靴の世界を支配し
050　026　きみはただ重たい靴のなかに足をつっこんで静かに横たわったのだ。
054　016　重たい軍靴と薬品の匂いを残し
056　004　重たい誰かの靴音が
058　025　灰いろの建物のしたを孤独な靴音が
085　020　キッドの短靴のようなもので
087　021　雨傘がいたみ長靴が駄目になる
113　014　なんでも知ってる　靴屋の息子で

くつう　苦痛
041　077　うす呆けてゐれば　習慣となった苦痛も

106　045　それは苦痛と恐怖がからみ合う　ながいながい鎖で
141　008　愛以外の何かだったわ。抱きあって、苦痛でよじれる縄梯子にすがって、宙ぶらりんで
145　017　そんなカップルはどこにでもいて快楽のスプーンで苦痛の目方を計りかねていた
163　009　快楽と苦痛の結果がこれだ

くつおと　靴音
056　004　重たい誰かの靴音が
058　025　灰いろの建物のしたを孤独な靴音が

くっきり
071　029　くっきりと影をあらわす山である
098　027　青空にくっきり聳えて輝いていた五つの尖塔

くっきりと
071　029　くっきりと影をあらわす山である

くつした　靴下
013　007　ぼくは靴下をなげだすと
026　011　透明な靴下が

くっして　屈して
106　038　詩人はもちろん屈してはならない　その外貌がどうであれ

くつじょく　屈辱
057　034　憎悪と欺瞞と屈辱によって生活し

ぐっすり
093　005　ぐっすりやすむには

くっつき
041　127　書物にくっつき

くっている　食ってゐる
013　017　ジャムを食ってゐると

グッドバイ
141　015　グッドバイ！

くつや　靴屋
113　014　なんでも知ってる　靴屋の息子で

くに　国
017　023　ああまるで天国でございますと

054	061	単により高尚な国民　結社　人間の材料にすぎないと
054	066	銀行が国民のものになるだろうから
054	161	なにげない挨拶のうちから生れる未知の国民のことを……
057	021	彼岸はいつも死の国のように静かである
062	012	死者の国の
065	046	異国の女のように、町をみすてて
069	007	天国というところがあったんだって
069	042	遠くの国をまわっている
072	001	ーーどんな国際ニューズよりも
072	054	どんな国際ニューズよりも
073	016	平和の国にいたるためには
074	012	ぼくら祖国の苦しみだったろうか
074	014	戦いにやぶれた国の
077	035	どこかとおい国では
081	028	遠い未来の祖国の霧
084	023	天国の階段からおりてきて
088	016	見えない国境をつくっているか
088	027	あたたかい南国の陽ざしのように融かしてくれるから
091	002	さびれた国道につづく町工場の
101	008	空中の帝国からやってきて
101	025	どこかの国境を守るためではない
101	058	ぼくの行手ですべての国境がとざされ
102	012	恋をすて故郷をすて他人の国へゆくのだから
105	012	戦争は失敗し、ぼくらの国は生きのびてきた、
107	009	故国の空は赤かった
112	017	祖国の栄光と同胞の愛を信じて地平線になだれていった
112	044	眠りながら腹をこやす王国を夢みているうれしいはらからたち
113	027	スターリンの国は
123	008	貧しい者の天国にも……
124	004	仲間も涙も校歌も国家も売り足りないが
124	024	国際級の背景的速度に陶酔し
135	003	多くの国人と語って同時に
142	001	「もう長いこと　この国のほんとうの歴史は
142	024	（それゆえ　この国独得の統治方式の利点とさえいえるもので
142	038	殺人的な電流装置で閉された国境をやすやす越え
142	066	国外追放を条件とした釈放の申し渡しに対して
142	070	そして　国外での健康回復と安楽な生活の可能性があるにもかかわらず
142	078	反祖国的ないかなる文書に署名してもいいと思っていた
144	006	醜国の快感はここらあたり
145	002	不信の者の天国に対して
146	005	外国行の切符を買ったのですが
146	045	振りむくと小柄な中年の外国人が
148	004	南国で農業に専念し、妻と離別してから、

150　069　一つの国さえたちまち喪われるような世界に住んでいるので、
156　022　国情のちがい
156　024　いかに私が外国かぶれでも
162　017　かれ自身の最後の王国であるから
168　009　虹の国を描くこともあったとおもう
173　011　外国の人質を殺すか殺さぬかで
173　012　荒れ狂う国家の群集の影が
181　006　妣の国のうるんだ愁いは
184　005　すぐ離婚したが夫の姓は変えずに帰国して
184　006　タイ生れの中国人の医者と再婚した
184　013　九カ国語を話したという冒険家の祖父を
184　019　若い中国人の夫は口癖のように
184　021　人と人は人権や国境を越えて
184　024　国と国となったらそうはいかないー

くぬぎ
107　002　くぬぎ林の夕陽も

くねらして
094　001　身をくねらして走るカワヘビの

くねる
039　020　楽器よりももっと柔らかにくねる

くばられた　配られた
025　056　爽やかな朝に墓場の鍵が配られたとき

くび
130　009　（鶏どものくびを
192　006　それにしても、と影をもたぬ寂蓼が、くびをかしげる。人に会わぬ。風はそよとも吹かず、自分の足音さえきこえな

くび　首
011　014　先づ首に巻いた蛇を外せ
025　031　ヒヤシンスの首を飾る
054　070　首を吊っている母親の足をひっぱれ！
066　010　小さな友はいつまでも首をふりつづけた。
101　031　どの首都からもへだたった　どんな地図にもないところだ
108　028　首すじをすべるカミソリにも
112　011　小首をかしげ　そしらぬふりをするな
123　011　もう一つの首都を夢みて
127　006　地球の重みを首にかけて、
128　007　プーマ首相の
128　025　演説ぶったは次期首相の福田赳夫さん

130　004　男の首が二つ
142　046　悪い夢からさめた人のように首をふるのである
144　003　目の悪い地蔵が首見参にとうよせ
175　002　なぜ首輪をつけたりするのかと
180　008　さらに首をひねりながら
193　024　ときわの首都は世界の影を映している

くびすじ　首すじ
108　028　首すじをすべるカミソリにも

クビれて
008　011　クビれてむらさき色になると　煙のつまったパイプを

くびわ　首輪
175　002　なぜ首輪をつけたりするのかと

くぶん　区分
085　032　光と影で区分できない何ものかであろう

くべていった
027　022　じぶんをくべていった

くぼち　窪地
039　006　あちらこちらの窪地から

くぼみ
176　009　膝のくぼみにこたえるかのように

くぼみ　凹み
031　016　室内の凹みから

くぼんだ
172　021　くぼんだ眼窩に目やにのようにたまる

くまなく
192　004　夜明け前の微光があたりをくまなく覆っていて、どこへ行こうとしているのか、

くみ　組
027　005　ねぢによって組み立てられてゐる空間に
028　017　組織が崩れ動乱の意識が流れかけて
058　002　瓦礫のうえに材木が組立てられ
088　033　たえずぼくの心のなかに組みたてる

100　036　ちょっとした喜劇を仕組みもしたろう
142　096　極度に不平等な特殊社会組織の
148　031　同じ輪送船でスマトラ島に送られた転属組の十三人だった。
148　032　同年兵で幹候の試験に合格した組は、
167　018　老化した脆弱な骨組に

くみたてられ　組み立てられ
027　005　ねぢによって組み立てられてゐる空間に

くみたてられ　組立てられ
058　002　瓦礫のうえに材木が組立てられ

くみたてる　組みたてる
088　033　たえずぼくの心のなかに組みたてる

くも　雲
001　002　雲の涯をほじくり
005　005　羊が雲を食べにくる
007　008　多孔質の雲の間からトンボの眼のやうに碧く　アスピリンを積ん
008　002　機関銃はマッチを擦って　乾草みたいな白い雲に火を
008　013　群は　雲に乗って押しよせ　黄色く汚れた地図の上を
010　007　やがて純白の雲の中にチョコレエトの肩が見えなくなる
010　014　パイプを握って雲の中から生れてきた少年は
012　007　雲のアルバムにはさまれた
012　018　ミルクの雲をかきまぜると
016　010　雲の島からエンジンが響き
017　030　黒い雲が近寄ってくることは
021　026　白い雲の中で眼をつぶり
025　033　ゼンマイのやうに跳ねてゐる雲
026　033　雲につつまれた地球の
031　007　雲の多い日没の空に出遭ふ
061　206　泉もなければ、流れゆく雲もなかった、
064　024　石の屋根の上には重たい雲が垂れこめていた。
073　020　大いなる積乱雲のさけ目をみつめた
080　003　海は太陽や雲をうかべていた
081　013　何千年の闇をつらぬいて真赤な雲の火柱がたち
082　009　破風のうえに雲があらわれてまた消えた
103　023　暗雲垂れこめるヨーロッパでもなければ
114　008　流れゆく雲を眺めて
121　007　羊のような雲
129　007　雲の上までつき出ていった虚栄
132　013　塔の愁い　草の雲いずこ
140　020　かれは実体のない都市の雲の中に住む

144　016　霧の襷か雲の帯
145　026　雲は低く垂れ　グラナダの暗い夜に稲妻が走っていた」
149　010　月の光は雲からも
154　002　雲のはずれの寝床
163　014　雲切れの空にのぞく
167　010　薄絹を裂いた巻雲を浮べて
168　008　はるかな雲に誘われ
171　018　太陽をかくす一片の雲をあおぐ
172　023　雲のささやきに耳をすます
181　021　黒雲が立ち
187　030　なおかすかに雲間にあった
189　023　いまのかれは雲を見下すような
191　009　だんだら雲の衣裳を
193　021　いまし朝雲を東によせて

くも　蜘蛛
049　001　天井の蜘蛛が私の顔にのりうつったようだ、
170　007　蜘蛛の巣を払うような手ぶりをすると

くもぎれ　雲切れ
163　014　雲切れの空にのぞく

くもった
096　003　ジンと溜息でくもった灯りで

くもった　曇った
041　133　曇った空の下を違った扉に向って走ってゆくのを見た

くもっていて
131　007　空はいつもくもっていて

くものす　蜘蛛の巣
170　007　蜘蛛の巣を払うような手ぶりをすると

くもま　雲間
187　030　なおかすかに雲間にあった

くもらせる　曇らせる
105　009　ぼくらのゆくてを曇らせるものは、

くもる　曇る
007　006　古風な鐘は藍をにじませて鳴る　曇る　動かない土絵具のカンヴ

くらい
035　028　誰かくらい巨大なランプを掲げた
076　018　むしろ泣きたいくらいだ
100　026　くらい幽閉がはじまった
192　017　よくよく見れば、そこから一米間隔くらいで、白い明りが点々とつづいているのだ。迷う者のために設けられた救急

くらい　（暗い）
003　010　海の景色はこんなに暗い青でせうか
014　028　楽器のうす暗い腹の中に沈黙が
023　023　暗い水底に沈んだ
026　035　悲しむでもよい暗い甃石の上には
039　050　暗い空の下に現れては
039　122　あなたの暗い内側で
041　134　どんな物蔭の暗い眼が
045　004　にぶい気配が仄暗い光触にただよふ
046　014　もとの薄暗い樹の枝に追ひかへし
050　006　ぼくらは暗い酒場の椅子のうえで、
052　015　あなたは本当に暗い地下にひとりで住んでいるのですか
053　003　暗い空の枯れた林から落葉がすきまなく降ってきます
054　005　僕らの行手は暗いのだ」
054　015　Mよ　君は暗い約束に従い
054　148　暗い存在が抽象そのものに凍ろうとする時間のはずれから
057　035　暗い夜明けのうちに倒れなければならぬ
061　083　おまえは薄暗い多孔質の宇宙だ
064　008　暗い過去と冷たい記憶がふれあった。
077　025　ゆれる昼夜燈の暗い光りのかげに
088　022　どのようにぼくたちの大地に暗い影を落すのかも
088　072　どんなに暗い日がやってきても
095　010　ぼくは暗い路地を走り出た
097　007　あなたは暗い鉄格子の中に、永遠に繋がれるだろう。
100　015　どんな物かげの暗い眼が
101　043　きみたちのいない暗い空のあちこちから
127　018　死よりも暗い「病院」で
145　026　雲は低く垂れ　グラナダの暗い夜に稲妻が走っていた」
145　027　街のまぶたは重く垂れ　東京の暗い夜に信号燈が明滅していた
164　016　……ぼくの一生は詩の困難でやや暗い
183　026　駅前通りから暗い小道に曲ったところで

くらがり　（暗がり）
146　056　暗がりで筍みたいにずんずん伸びていくので

くらく　（暗く）
032　003　庭は暗く

037 016 無限といふものが少しづつ暗くなりかけてゐた
053 055 ああ世界が暗くなってゆきます
061 196 暗くなってゆく運河を見つめています。
065 017 どの窓も、暗く淋しく
069 014 暗くて　さむい
071 041 真昼を暗くする一瞬
089 022 一瞬　ストーヴの炎が暗くなり
105 004 暗くあれ、三月、
122 009 暗くなった部屋の
142 018 それで監獄は　四倍以上も暗く
142 027 なんという暗く悲痛なユーモアだろう）
179 006 あたりは薄暗くなりかけていたが
181 026 みるみるうちにあたりが暗くなって
192 013 途方もない迷路に入ってしまったと気づくと、あたりが急に暗くなってきて、

くらし　暮し
045 011 たしかな暮しを算へてみる
070 033 一日を一年のように暮しているぼくたちには、
167 069 共に暮した年月にも
179 014 その日暮しの一日を
188 036 いずれ、順番がくるだろうと思いながら暮しているが、

くらし　暮らし
148 014 おたがいに無縁の暮らしをしてきたのである。

くらした　暮した
167 069 共に暮した年月にも

くらしている　暮している
070 033 一日を一年のように暮しているぼくたちには、
188 036 いずれ、順番がくるだろうと思いながら暮しているが、

グラス
027 002 グラスが立ちあがった
027 013 グラスの底に夜が光った
027 023 わづかな煙はグラスの中へ降りてゆく
030 007 グラスのまはりを
038 002 グラスの底を涸れさせて
038 028 荒廃したグラスの底をとほるやうに
039 051 グラスの底が晴れたら
042 005 グラスには
054 057 リキュールグラスを舐めながら
054 106 独身者は大学生のリキュールグラスに

128　011　サングラスをかけた殿下に
129　017　まぶしい食卓のワイングラスの影と
179　021　美しいグラスを手にして
179　024　グラスを胸にのせたまま

クラス委員
150　039　クラス委員にして落第生の竹内幹郎だった。

クラッカー
181　036　ナチュラル・チーズとクラッカーがほしい

グラナダ
145　026　雲は低く垂れ　グラナダの暗い夜に稲妻が走っていた」

クラブ
167　026　強風のなかでクラブを振っているのは

くらべ
090　012　この紫檀の肌にくらべたら
142　101　ブコフスキーやアマルリクが直面した状況にくらべたら
150　020　どん栗の背くらべをしていたにすぎなかったが、
151　034　千人斬りとか五千人枕とかにくらべたら

くらべたら
090　012　この紫檀の肌にくらべたら
142　101　ブコフスキーやアマルリクが直面した状況にくらべたら
151　034　千人斬りとか五千人枕とかにくらべたら

くらみ
033　010　眼はくらみ

くらやみ
100　009　記憶のくらやみにとけるフィルムのように

くらやみ　（暗闇）
028　036　暗闇の市場へと運ばれてゆく武器たち
176　018　家霊の暗闇のなかから
192　025　必死の思いで、前方の真っ暗闇を凝視するが、もう何も見えぬ。

クララ
160　060　最後は叔母のクララが遺体をもらいさげていった

くりかえし

110 012 くりかえしくりかえし問うてみるーー
175 003 猫の質問をくりかえした
175 006 犬の質問をくりかえした

くりかえし　繰り返し
142 049 古い繰り返しのなかにいる

くりごと　繰り言
188 044 不定愁訴の繰り言のように、あることないことに、蘊蓄を傾け、

くり返さ
164 027 何度でもくり返さなければならない

くり返し
187 022 くり返しの多いきみの歌が
193 017 単調なくり返しのようで

くる
002 013 啄みにくる
004 010 太陽の跫音が近づいてくる
005 005 羊が雲を食べにくる
005 012 新型飛行機がとんでくる
005 030 外套がやってくる
009 008 薔薇色の頬に葉脈が透けてくる
010 013 ヒバリが墜落してくる
010 018 やがて最後の　たそがれ　がくる
014 011 うすい陽の光が胃の腑へさしこんでくる
014 021 おやおや狂気がくるわいと
014 025 貧血がくるとひとつづつ楽器は床に倒れた
017 030 黒い雲が近寄ってくることは
018 014 音楽が室内に溢れてくる
021 029 溢れてくる影のどこかで
023 017 風の運んでくるその言葉が見えない
025 037 鉛のやうに落下してくる
026 013 葉脈から雫が落ちてくる
027 011 そちらの方から寒さが吹きつけてくる
028 050 ただそこに時代の速度乃至歩調が見えてくるだらう
033 009 盲目はドアの隙間から入ってくる
034 019 突如　豪雨が襲ってくる
035 003 おまへたちの舌の上へやってくる
035 006 それは一羽の鳥よりもはやく帰ってくる
035 023 おそらく明日訪れてくるだらう
039 027 しぜんに頬がぬれてくる

039 088 すべてが凍える夜がくる
040 008 とんでくる抽斗などを
040 019 秘密はいくつもの廊下をとほってくる
041 005 意志は荒い山肌の斜面からむけてくるのか
041 028 プラットフォームが岬のやうに曲がってくる
041 040 何とはなしに陸橋の上まで打寄せてくる
041 043 記憶の中をとほってくる
042 009 すさまじい寒さが吹きつけてくる
046 026 自然の声をあげる日がくるだらうか
047 009 頬骨がつめたい空気のなかで尖ってくる
051 024 ぼんやりとデス・マスクが肉眼に見えてくる。
051 034 そしてじりじりと胸の上に倒れかかってくる。
053 058 不思議な夢がしだいに近よつてくるようです
055 065 永遠に吠えることのない狼に見えてくる
056 022 風景はいっそう青ざめてくるのみである
059 004 母が戻ってくるのを待ちながら
059 018 なんだか迷っていそうにも思えてくる
059 021 海岸への道が不思議と宙にうかんでくる
059 025 蜻蛉のようにも見えてくる
060 013 孤独な道を歩いてくる男だけが
061 125 滑らかなやさしい囁きがきこえてくる
061 145 霧ははげしく運河の下から氾濫してくる。
061 165 夜の環が冷たくかぶさってくる、
062 002 ひとつの年が始まる神秘な夜にくるまって
063 010 重たくぼくの胸にのしかかってくる
065 048 星も月もない夜、毛布にくるまった男は
072 005 せまい競馬場の入口に殺到してくる
081 017 夜あけのくる船窓の下の
082 015 すると小鳥がたそがれの窓に墜ちてくる
083 015 空を追いつめて　ここまでくると
088 071 ぼくたちに語りかけてくるよ
090 007 方三尺五寸の天地をつくるために
091 004 ロースト・ビーフよりも香ばしいその匂いとともにやってくる
091 012 血にぬれた白い翼からうまれてくる
098 004 聞えてくるのは木枯の声ばかりだというのに
098 010 壁づたいにきこえてくる
099 010 ぼくの記憶は思いがけない不幸のシークェンスで翳ってくる
100 046 ぼくが戻ってくるのは
101 002 世界はなんと曠野に似てくることか
101 054 血をはく空洞におちてくる
104 008 太陽に追われた記憶が戻ってくるだろうか
108 018 再び荒れてくる海を見つめている
108 034 落ちてくる頃。

109　007　死の季節がやってくるから
113　053　ーー沈黙が粛清にやってくる
120　012　あたりがもりあがってくる
120　016　修羅のくるまもみえない
123　001　新しい年がくるといっても
124　034　赤い霧がにじり寄ってくる
125　014　この業苦にいつ終りがくるのか
125　019　祝福はくるが遅すぎるだろう
127　022　くるめく十字の
128　056　ぼくはニューギニーからタヒチ島へ行ってくる
128　075　あさってがくるまで
129　013　白紙の本をめくる
135　005　くるしい黙祷を
137　002　ふくらはぎからのどに昇ってくる
137　007　くる日もくる日も
138　002　なまぐさい風が吹いてくると
139　004　どこからか砧を打つ音がかすかに聞えてくる
146　043　うしろからコツコツと近づいてくる
149　011　波からも打ちよせてくる
150　077　まさか、「荒地」が今頃になってアメリカから送られてくるとは。
152　002　悪魔が出てくる
154　020　錦の帯がするすると垂れてくる
161　021　あなたを殺しにくるものがあれば
167　030　海鳴りさえ聞えてくる
167　064　脅かすような慰めるような圧力を加えてくる
167　070　いつか終りがくるように
167　071　やがておそってくる運命は
173　046　汚ない三枚の毛布にくるまれば
173　047　すぐ大波のような睡魔が襲ってくるだろう
179　018　悪魔の夜がくる前に
180　048　決定的な悔いの時がくるまでは
188　036　いずれ、順番がくるだろうと思いながら暮しているが、
189　013　かれはくるりと背をむけて
190　008　精霊の澄んだ答えが返ってくる
192　009　あの音は、幻聴かも？　とぎれとぎれに聴えてくるが、

くる　来る
035　016　来るものと去ってゆくものが
041　151　だがあなたは僅かに口を利くことが出来る筈だ
046　042　ほっそりした川のやうに渝らぬ月日を行くことが出来る

くるいざき　狂い咲き
136　016　狂い咲きの紅梅は

くるえ　狂え
061　032　狂える女が歌っていた。
163　011　狂え狂えといっても

くるえる　狂える
061　032　狂える女が歌っていた。

くるおしく　狂おしく
053　039　狂おしく地上にかえってゆく

ぐるぐる
017　014　望遠鏡をぐるぐる廻した
070　038　ぐるぐるまわる食卓があるだけなのだ、

ぐるぐるまわる
070　038　ぐるぐるまわる食卓があるだけなのだ、

くるしい
135　005　くるしい黙祷を

くるしい　苦しい
150　035　敗戦後の苦しい生活のたたかいに敗れて倒れた者もあった。

くるしみ　苦しみ
039　139　苦しみは拓かれて
074　011　ぼくら兵士の苦しみは
074　012　ぼくら祖国の苦しみだったろうか
075　006　ぼくの苦しみも
077　019　高熱に苦しみながら
080　017　あたらしい血汐であらい　この苦しみの胸が
095　019　……苦しみぬいて生きた父よ
116　006　未来を失ったぼくの苦しみが
167　056　苦しみのベッドに血をにじませる

くるしみぬいて　苦しみぬいて
095　019　……苦しみぬいて生きた父よ

くるしめる　苦しめる
054　097　人を苦しめる過ぎ去った日々が

くるしんで　苦しんで
158　037　苦しんでまで詩を書こうとは思わない

くるった　狂った
084　031　女たちの狂った笑いがたかくなり
137　015　ある日　女は狂った目をして言った

くるま
062　002　ひとつの年が始まる神秘な夜にくるまって
065　048　星も月もない夜、毛布にくるまった男は
120　016　修羅のくるまもみえない
128　075　あさってがくるまで
173　046　汚ない三枚の毛布にくるまれば
180　048　決定的な悔いの時がくるまでは

くるま　車
010　001　自転車に乗ってゐる少年は自転車のスピイドをもつ
010　006　ピカピカ光る自転車は他のピカピカ光る自転車と競走する
010　015　ピカピカ光る自転車に倚りかかってゐる
011　008　電車が宝石の角を過ぎるとストップし
025　054　不思議な糸車は
028　033　ねぢれた鎖のやうな数輌の列車の合図が響き
028　052　一台の列車が到着するであらう
031　003　自動車などで消えたあとは静かで
040　014　すべての車輛は動かない
040　027　輝くチーズを載せた車がとほる
041　132　自動車や電車が
053　027　遠くにきこえた電車のひびきや
061　100　電車が走っているね
069　040　終電車のレールのひびきは
071　007　日曜日の停車場に
071　014　日曜日の停車場で
072　062　群集は押しあいへしあい停車場めがけて
089　015　高架線を走る電車や
089　037　停車場へいそぐ通行人の影にまぎれ
095　017　明るい無人の電車が
099　005　一人の妹は乳母車につかまって歩き
101　009　重たい刑罰の砲車をおしながら
107　005　車輪や道もうたっていた
112　022　寝床のぬくもりでほてった身体を　詰まった路面電車に積みこんで
124　027　郊外電車の快よい動揺に耐えている
128　023　鋼鉄六倍　自動車十五倍
128　091　一番電車が出ていった
145　005　芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右
151　010　これではいつも火の車だ

160　057　心臓発作で倒れ　救急車が到着する前に息をひきとったという
166　021　いつものように車で二軒分の買物をした
186　022　音もなく発車し到着しますからね！
186　024　昔の発車ベルの音が体内のどこかに残っていたんですよ！
186　044　（どの車輛にでも乗っている可能性があった）
193　012　半世紀は車窓の景色であった
193　013　遠ざかる列車のひびきに

くるまった
065　048　星も月もない夜、毛布にくるまった男は

くるめく
127　022　くるめく十字の

くるりと
189　013　かれはくるりと背をむけて

ぐるりと
148　040　戦死者の手足がぐるりと輪になり、

くれ　暮れ
013　023　まごまごしてゐると日が暮れる
039　103　明日はすでに暮れてゐるだらう
044　006　仰げば星辰の静かな明け暮れ
046　030　あなたは日の暮れ　何を考へる
058　022　日が暮れかかると
072　066　暮れるにおそい五月の空の下にひろがっている
079　021　日の暮れ
089　016　暮れてゆくビルの窓や
111　005　暮れのこる灰色の道が
128　093　朝の夕暮れ
144　017　わけよしの性術に明け暮れて
146　042　途方に暮れて立っていると
182　016　暮れゆく空をあおぎ
190　009　その弥のとどく範囲の明け暮れ

ぐれつな　愚劣な
055　046　おまえは愚劣な謎をふくんだ微笑を浮べてみせる

くれて　暮れて
039　103　明日はすでに暮れてゐるだらう
089　016　暮れてゆくビルの窓や
144　017　わけよしの性術に明け暮れて

146　042　途方に暮れて立っていると

くれている　暮れてゐる
039　103　明日はすでに暮れてゐるだらう

くれる
039　120　静かに愁ひをなぐさめてくれる
051　004　「この病院船の磁針がきみらを導いてくれる」と船長は言う、
062　006　落ちてゆくわたしの身体を支えてくれるのは
083　014　わたしの心をいたわってくれるけれど
084　004　かれのかわりに歌ってくれるのですよ
088　027　あたたかい南国の陽ざしのように融かしてくれるから
088　083　心から喜んでくれるから
150　012　自己韜晦の癖を或程度まで満足させてくれる。
182　007　世話をする植木までひねくれる

くれる　暮れる
013　023　まごまごしてゐると日が暮れる
072　066　暮れるにおそい五月の空の下にひろがっている

くろ　黒
001　015　黒い花
002　003　黒い穴があく
009　002　黒いオルガンが裂けて
017　030　黒い雲が近寄ってくることは
022　005　黒いトンネルの中で
023　014　または黒いオルガンのやうに
025　003　黒いトンネルに海の響をきくところ
025　008　海は黒く岩壁は白かった
026　028　黒い眼帯を外して
027　021　わたしは黒いパイプを握り
036　016　黒の中へ消えてゆく街よ
039　106　暗黒のなかで
039　113　波が黒い樹かげに光る
041　122　葉はぬけ落ち　黒い幹が囲繞地の隅に忘れられた
043　017　ほどよい暗黒と
046　005　はるか足下を潜りぬける黒い水の流れ
046　039　黒い水のうへを吹く
047　003　左右に拡げる黒い蔭！　二重のドア！
049　013　黒い足のように縮まっている　君の黒い足のようにー
050　021　黒い鉛の道を歩みつづけてきたのだった。
052　010　あなたが男を誘惑するはずだった可愛いい頬の黒子のことを
052　017　あなたの可愛いい頬の黒子のことを

053 046 墓地のしめった黒い土をみつめながら
054 026 黒い犬が橋の上にうずくまっていたのを」
055 010 巨大な黒い影が波止場にうずくまっている
057 037 悲惨なぼくの黒い帽子と
058 023 劇場は真黒な人を吐き出します
060 018 黒い喪服をつけた男の
061 094 背すじを走る黒い運河の呻きを－－
062 040 黒い森のうしろから
062 050 黒い森のうしろにいて
062 062 黒い森のうしろにいて
063 003 かかえきれぬ暗黒が
063 008 その手の黒さがぼくをぞっとさせる
066 003 黒犬があてもなくさまよっていった。
070 018 あなたがいくら黒髪を愛撫しても、
071 017 真黒な人ごみのなかで泣きさけんでいた
073 006 真黒な火煙を吐きつづけていた
074 019 いかにして黒い蛆虫が這いずってゆくかを
079 002 黒い海のうえを走っている
081 022 黒い神を防衛しているのは
084 027 その黒い唇　その褐色の髪
089 032 黒い河をのぞきこんでいる人がいます
105 002 ぼくらの大地は黒くふくらむ、
106 036 不吉な羽ばたきをして　地面を歩く黒い鳥の男たちもいる
112 014 命令一下たちまち整列し　黒い銃剣の林をつらね
117 007 まがった黒い影をつけたまま
119 001 黒い川波に
143 002 暗黒のあたたかさに包まれて
143 008 黒い旗印と化して
145 004 はいるとつぶやきながら黒い色の真実やめったに売れないエンジェルの絵を売っていた」
152 022 折れまがった用済みの黒い頭と
152 031 十数秒で黒い灰になる
159 005 黒っぽい小紋の和服がよく似合い
164 002 黒いミューズが呟く
164 010 黒いミューズは口をとがらせる
164 017 黒いミューズは猛り狂って叫ぶ
164 025 黒いミューズよ
174 019 ぼくは黒を持ち確実を三隅を占拠したが、中央の白が厚く、ずるずると敗けてしまい
179 002 たべのこしの黒パン少々と
181 021 黒雲が立ち
192 003 うつむいて、歩いているところは、一木一草もない、黒い砂地で、
192 010 どこまで行っても、一本の松にも出遭わず、平坦な黒い砂地がつづいているばかりで、
192 015 みるみる漆黒につつまれていく、ここは、もともと海底だったところではないか。冷気に身ぶるいし、

くろい	黒い	
001	015	黒い花
002	003	黒い穴があく
009	002	黒いオルガンが裂けて
017	030	黒い雲が近寄ってくることは
022	005	黒いトンネルの中で
023	014	または黒いオルガンのやうに
025	003	黒いトンネルに海の響をきくところ
026	028	黒い眼帯を外して
027	021	わたしは黒いパイプを握り
039	113	波が黒い樹かげに光る
041	122	葉はぬけ落ち　黒い幹が囲繞地の隅に忘れられた
046	005	はるか足下を潜りぬける黒い水の流れ
046	039	黒い水のうへを吹く
047	003	左右に拡げる黒い蔭！　二重のドア！
049	013	黒い足のように縮まっている　君の黒い足のようにー
050	021	黒い鉛の道を歩みつづけてきたのだった。
053	046	墓地のしめった黒い土をみつめながら
054	026	黒い犬が橋の上にうずくまっていたのを」
055	010	巨大な黒い影が波止場にうずくまっている
057	037	悲惨なぼくの黒い帽子と
060	018	黒い喪服をつけた男の
061	094	背すじを走る黒い運河の呻きをーー
062	040	黒い森のうしろから
062	050	黒い森のうしろにいて
062	062	黒い森のうしろにいて
074	019	いかにして黒い蛆虫が這いずってゆくかを
079	002	黒い海のうえを走っている
081	022	黒い神を防衛しているのは
084	027	その黒い唇　その褐色の髪
089	032	黒い河をのぞきこんでいる人がいます
106	036	不吉な羽ばたきをして　地面を歩く黒い鳥の男たちもいる
112	014	命令一下たちまち整列し　黒い銃剣の林をつらね
117	007	まがった黒い影をつけたまま
119	001	黒い川波に
143	008	黒い旗印と化して
145	004	はいるとつぶやきながら黒い色の真実やめったに売れないエンジェルの絵を売っていた」
152	022	折れまがった用済みの黒い頭と
152	031	十数秒で黒い灰になる
164	002	黒いミューズが呟く
164	010	黒いミューズは口をとがらせる
164	017	黒いミューズは猛り狂って叫ぶ
164	025	黒いミューズよ

192　003　うつむいて、歩いているところは、一木一草もない、黒い砂地で、
192　010　どこまで行っても、一本の松にも出遭わず、平坦な黒い砂地がつづいているばかりで、

くろく　黒く
025　008　海は黒く岩壁は白かった
105　002　ぼくらの大地は黒くふくらむ、

くろっぽい　黒っぽい
159　005　黒っぽい小紋の和服がよく似合い

グロテスク
148　052　グロテスクに繁茂する熱帯植物を観賞した。

くろぱん　黒パン
179　002　たべのこしの黒パン少々と

クロールプロマジン
142　059　恐ろしいクロールプロマジンやハロペリドールを免除され

くわえて
061　071　さりげなく煙草をくわえて
106　026　その貧しさを隠すために　せめて口髭をたくわえておくべきだった

くわえて　加えて
167　064　脅かすような慰めるような圧力を加えてくる

ぐんかん　軍艦
003　012　軍艦はシーツの皺に沈没する

ぐんこう　軍港
112　010　破壊につぐ破壊のこだま　断末魔の軍港にとどろく火砲のうた

ぐんしゅう　群集
041　020　いつも群集は流れてゆく
054　165　おどりたつ群集をおしのけ
072　062　群集は押しあいへしあい停車場めがけて
085　014　広場の群集を二つに切断しても
123　012　群集は前進する
133　012　背をかがめて小走る群集のなか
134　008　この群集の行方は誰も知らない
145　019　静かに走れと命名された群集の河は昨日のように流れていた
155　005　群集も
173　012　荒れ狂う国家の群集の影が

ぐんじょう　群青
046　054　群青に支へられ　眼を彼岸へ投げながら

ぐんぞく　軍属
074　005　カミソリ自殺をとげた若い軍属の

ぐんたい　軍隊
084　028　それはもうシリアやトリエステの軍隊よりも
101　020　すこしずつ退却してゆく軍隊をもたない
166　009　かれには軍隊の経験があった

くんで　汲んで
006　011　泥まみれの鉄兜に水を汲んで

ぐんれき　軍歴
151　005　軍歴は傷痍期間を入れて約二年半ほど

け　毛
018　004　耳が刷毛のやうに通過する
021　005　金いろの羽毛を日に光らせた
022　001　毛には
023　002　毛髪のやうに血が垂れて
025　011　その手その足は毛のやうに
025　049　不毛の地図には
027　007　一本の毛髪もふくめて
053　045　ながい睫毛のしたに
059　013　淋しい睫毛と
060　020　たとえば小さな捲毛の渦をみつけるような！
063　013　あなたは固く睫毛をとじて死んだふりをしている
065　048　星も月もない夜、毛布にくるまった男は
073　026　毛脛を出したフランス人の水先案内は
089　025　編物をしていた手から毛絲の玉を落しました
097　009　毛深いじゅうたんの暗号のなかで、
099　003　黄金の毛のむく犬と一緒に
102　014　毛深い夢の絨毯に戻ってきてくれ
120　022　スモッグの綿毛と
142　026　わたしやわたしの家族の頭から　髪の毛一すじ落ちやしないとは
145　001　「至上のトーモロコシの毛がアゴにもある長髪の若者が
145　009　そこにもあったトーモロコシの毛のそよぐ丘陵をエンジェルがうまれるのに充分な広さ
147　012　生きることに怖れも困難も感じない髪の毛の薄い男になっていた
173　038　毛沢東も死んだ
173　046　汚ない三枚の毛布にくるまれば

181　023　紅の刷毛は

けい　刑
065　032　ひと群れの鶴にまじって、永遠の刑罰を
101　009　重たい刑罰の砲車をおしながら
113　031　ひざまずいて自己批判し　たりぬときは刑に服した
113　033　喜んで処刑される者もたくさんあった
142　073　十二年の刑期をつとめあげるために監獄に戻っていったのである
154　019　いましも刑罰の足台が置かれ

けいえいして　経営して
148　007　地方都市で鉄工所を経営していた旧友が、

けいか　経過
142　118　過去数世代の経過に照しても

けいがい　形骸
029　005　すべて形骸の句の中に住み

けいかく　計画
058　052　それからあとの計画は
150　011　ほんの気まぐれから立てた計画に対して忠実になることは、
180　036　浮気をする計画だったといえば

けいかん　警官
058　028　十字路には警官が立っていて

けいき　刑期
142　073　十二年の刑期をつとめあげるために監獄に戻っていったのである

けいき　景気
183　007　魚屋の呼声はえらく景気がいいけど

けいけん　経験
089　019　雪のなかでしか経験したことのないすべてのものが……)
106　048　ただちに答えられるだろう　かれの経験の彼方から第四の声で
142　043　自己の経験をまっすぐ語るあなたの言葉は
166　009　かれには軍隊の経験があった

けいさん　計算
041　104　あなたの計算表　あなたの慈善帳
136　024　計算器のまばたきをする
155　042　ちゃんと計算しているのである

174　027　きみの地合いの計算には

けいさんき　計算器
136　024　計算器のまばたきをする

けいさんして　計算して
155　042　ちゃんと計算しているのである

けいさんひょう　計算表
041　104　あなたの計算表　あなたの慈善帳

けいしき　形式
028　071　宣伝ビラの形式を案出するのであらうか
156　021　愛は形式的だ

けいしきてき　形式的
156　021　愛は形式的だ

けいしちょう　警視庁
150　053　編集者である私が警視庁から呼び出しを受けた。

けいしゃした　傾斜した
049　002　傾斜した部屋からは
049　003　いつも逆に傾斜した獲物のない地平線しか見えない。

けいしゃち　傾斜地
005　013　白いちぶさの傾斜地をかけ上れ

けいしょう　形象
046　025　この橋も海中に漂ひ去って　躍りたつ青い形象となり

けいたい　形態
028　026　物質の秩序と形態にそって
180　034　測り知れない現実的形態を網にかけて
186　075　時間のさまざまな変形態にすぎぬ）

けいば　競馬
072　005　せまい競馬場の入口に殺到してくる
072　012　競馬場のかたちに作りかえてみたまえ
072　061　一一競馬が終ると
072　064　がらんとした競馬場には

けいばじょう　競馬場

072　005　せまい競馬場の入口に殺到してくる
072　012　競馬場のかたちに作りかえてみたまえ
072　064　がらんとした競馬場には

けいばつ　刑罰
065　032　ひと群れの鶴にまじって、永遠の刑罰を
101　009　重たい刑罰の砲車をおしながら
154　019　いましも刑罰の足台が置かれ

けいやく　契約
156　034　理不尽な契約を前にして
179　023　そして最後の契約にサインするように

けいれい　敬礼
187　024　何に対する敬礼か

けいれん　痙攣
028　051　鉄道信号機の痙攣とともに
051　028　執拗に手が把手（ハンドル）を求めて痙攣する、
145　008　レスビアンの女たちの痙攣は不信者の地獄の笑いの一型態で　ブリッジして反った肉体の
173　042　世界はやがて筋萎縮性の痙攣を起し

けいれんする　痙攣する
051　028　執拗に手が把手（ハンドル）を求めて痙攣する、

げきじょう　劇場
040　015　すべての劇場は閉ざされてゐる
058　023　劇場は真黒な人を吐き出します
091　010　劇場やホテルのロビイに立っている寂しい人影からうまれ
145　006　側に地下へ急降下するその劇場があって
160　018　観客のいっぱいつまった劇場で　司会役の若い男から

げきじょう　激情
147　006　一瞬の激情で死に突入していたかもしれない

けしき　景色
003　010　海の景色はこんなに暗い青でせうか
160　007　恋人と会っては　窓外のすがれた景色に視線をそらして
193　012　半世紀は車窓の景色であった

けしょう　化粧
054　080　衣裳と装身具の内側に　化粧のゆきとどいた顔の下に
055　041　おまえは禿鷹風に化粧した小さな顔を

けしょうした　化粧した
055　041　おまえは禿鷹風に化粧した小さな顔を

けしん　化身
112　018　あの純粋の化身はどこへ失せたか

げすい　下水
128　019　資本の下水の養分を吸って

けそう　消そう
068　015　姿を消そうとしていた

けたたましく
146　032　けたたましく悲鳴をあげて叫びました

ゲッ
146　033　「あの女だ！（ザッツ・シー）　早く掴まえて！（ゲット・ハー）」
146　049　きっとここから出してあげますよ（アイル　ゲッ　チュー・アウト・オブ・ジス）」

けつえき　血液
024　003　る　血液を噴き上げている白い管は輝やける噴水の愛撫をう
025　001　血液は
025　013　眼もなく耳もなくただ流れる血液は

けつえん　血縁
103　002　血縁のきずなはたちきれたか

けっか　結果
010　010　不愉快な天候の有機的関連の結果である
163　009　快楽と苦痛の結果がこれだ

けっかく　結核
188　052　結核と癩から、心臓病と癌へ。

けっきょく　結局
072　018　結局のところわれわれの期待も、かれらの手綱さばきで
148　036　結局、めいめいの職歴と子供を何人作ったかということにつきていた。

けっこう　結構
072　023　血統を信ずるのもいいし、人気に支配されるのも結構だ

げっこう　月光

024　001　ふせた耳の上でふと風が鳴る　くずおれた月光の雫に溺れ
057　024　世界を冷やす月光がぼくの額を照らすのを……
063　012　窓からさしこむ月光のしたで

けっこん　結婚
058　045　どうやら私は今年も結婚しそこねたようです
174　018　（きみが美しい奥さんと結婚して、みんなに羨まれながら、西荻窪のアパートに住んでいたときのことだ）
184　004　フランス系アメリカ人と横須賀で結婚し

けっこんし　結婚し
058　045　どうやら私は今年も結婚しそこねたようです
174　018　（きみが美しい奥さんと結婚して、みんなに羨まれながら、西荻窪のアパートに住んでいたときのことだ）
184　004　フランス系アメリカ人と横須賀で結婚し

けっこんして　結婚して
174　018　（きみが美しい奥さんと結婚して、みんなに羨まれながら、西荻窪のアパートに住んでいたときのことだ）

けっさく　傑作
186　080　誰かが寄賭してくれたナポレオンの一壜もいずれ劣らぬ時間の傑作だった

けっして
090　019　けっして明るくならない
142　114　記憶のなかの血はけっして乾くことはない
142　125　ぼくたちはけっして忘れないだろう

けっしゃ　結社
054　061　単により高尚な国民　結社　人間の材料にすぎないと

けつぜんたる　決然たる
054　112　決然たる拒絶者の愁い顔があらわれる

ゲット・ハー
146　033　「あの女だ！（ザッツ・シー）　早く掴まえて！（ゲット・ハー）」

けっとう　血統
072　023　血統を信ずるのもいいし、人気に支配されるのも結構だ

けづめ　蹴爪
094　007　ない蹴爪で砂をけって羽搏いているテント

けつろん　結論
072　026　三十六とおり結論があるだけなのに

けとばし　蹴とばし
085　021　理想主義者や清貧家を蹴とばし

けはい
038　017　でも音楽だけはいつでもやってゐてほしい　と
177　016　待ち伏せするけはいがある

けはい　気配
042　002　夜はひそかに　窓のあたりの気配にまぎれ
045　004　にぶい気配が仄暗い光触にただよふ
151　020　一向に死ぬ気配を見せないのはどうしたわけか

けぶかい　毛深い
097　009　毛深いじゅうたんの暗号のなかで、
102　014　毛深い夢の絨毯に戻ってきてくれ

けむった　煙った
007　015　まだ阿片でぼうぼうと煙った眼よ

けむり
013　003　青いけむりの蛇が枝を登り
045　012　夜半のけむり無常の風に耐へてきた
066　020　かれは溜息のほそいけむりをもらした。
078　008　立ちのぼる水けむりのなかに消えうせるのを
098　016　うす青いけむりがゆっくり立ちのぼる
152　016　冷たい水色のけむりが立ちのぼる
186　084　かすかにふるえる指先の煙草のけむりのように

けむり　煙
005　016　吹かれてゐる赤い煙突は
005　033　アヘンの煙が立のぼる
007　015　まだ阿片でぼうぼうと煙った眼よ
008　011　クビれてむらさき色になると　煙のつまったパイプを
010　012　黄ろい煙は発射される
010　019　パイプは緑の煙を噴き飛翔する
015　010　舶来煙草のことを知らない
021　001　ハッカを咥へて澄んだ煙をふかしてゐた
025　019　地平線もなく煙もみえない球を眺め
026　007　水晶体はいつでも煙を噴いてゐた
027　023　わづかな煙はグラスの中へ降りてゆく
030　021　菅には煙を
039　075　パイプの煙にのって
041　073　パイプに煙草をつめる

041 100 あなたの部屋にはシガアの煙がたなびいて
047 001 深夜　唇が煙草を挟んでいる
056 002 夕暮のなかで煙草をすっている男がいる
056 018 橋にもたれてぼんやり煙草をすっている
057 038 黄ろい指先のシガレットの煙よ
058 016 私はゆっくり煙草をふかしながら
060 006 なぜか一服の煙草もひどくうまいのである
061 071 さりげなく煙草をくわえて
061 101 煙突が煙を吐いているね
066 017 息子は煙草をふかしながら
066 018 たちのぼる煙りのなかの女をぼんやり眺めていた、
072 038 あとは砂煙りをあげて一団となって疾走している
073 006 真黒な火煙を吐きつづけていた
073 011 墓標のように番号をつけた煙突がならび
081 008 強い硝煙のにおいが立ちこめているので
089 031 まだ煙草をすいながら
093 004 本と煙草とウィスキーの瓶をかかえて
093 008 寝床でウィスキーを飲み煙草をふかす
102 003 いまはなつかしい硝煙とその匂いのなかに
114 009 やにくさいパイプの煙を吐きかけている
124 030 六十本の煙草を灰にしたところで
128 014 シガーの煙りたなびく
166 010 一本の煙草を思うままに吸えたら
166 013 いまのきみは一日に六十本の煙草を吸い
186 084 かすかにふるえる指先の煙草のけむりのように
187 012 ひとすじの硝煙のにおいを
193 006 煙か霧か

けむれる
046 028 あなたはけむれる一個の霧となり

けもの
037 010 けものや鳥よりもすばやい身仕度で

けもの　獣
039 056 慄へることのない獣たちよ
040 012 街は傷口を舐めてゐる獣のやうに
054 108 そしてやがて獣のようになる歯並みの悪い唇の動きが
070 039 喰いちらした獣肉の小骨や
090 017 鳥獣や花をつくりだすまで
104 006 傷ついた鳥や獣の叫びでいっぱいだった
191 007 虫獣の喘ぎ

ゲラゲラ
013　020　ゲラゲラ笑ひ
017　010　歯でゲラゲラ笑ふと

けり　蹴り
097　013　空気を蹴り厚い無の壁をこえて、

けわしい
100　032　どんなけわしい現実の悪路も

げん　弦
084　003　いい音で鳴る弦と弓が
084　037　この世のものでない弦と弓は
162　002　弦の強さで

げんえい　幻影
046　050　此処と彼処　それも一つの幻影に過ぎぬことを
051　006　幻影のなかの島嶼……
057　039　はかない幻影よ
059　026　大人になった幻影の子よ
061　053　浪にくずれるむなしい幻影が
082　010　消えてはあらわれる幻影の
121　012　幻影の女とたわむれる

けんえつ　検閲
113　016　検閲きびしく
150　055　こんな創作を今度載せたら発禁にするぞ、と検閲係から脅かされた。

けんえつがかり　検閲係
150　055　こんな創作を今度載せたら発禁にするぞ、と検閲係から脅かされた。

けんがく　見学
188　062　その反対に、葬儀屋や墓地などを見学しながら、

げんきな　元気な
174　009　きみは意外に元気な様子で近況を語ってくれ、心暖まる十五分か二十分であった。

【問題項目】けんけいたい　変形態
186　075　時間のさまざまな変形態にすぎぬ)

げんご　言語
128　046　バウワウ言語　デインドン言語　プウプウ言語
142　039　言語の障碍　人種の差別を超えて

けんこう　健康
142　070　そして　国外での健康回復と安楽な生活の可能性があるにもかかわらず
152　034　健康のため
165　005　健康を気づかう父の
188　029　精神は、あくまで健康、

けんこうかいふく　健康回復
142　070　そして　国外での健康回復と安楽な生活の可能性があるにもかかわらず

げんこうし　原稿紙
170　001　原稿紙のうえには

げんざい　現在
061　069　あなたの眼となり、あなたの表情となる「現在」に。
061　074　あなたの足を停め、あなたに待つことを命ずる「現在」に。
071　047　刻々と現在にむかって押しよせる
150　028　二十人ほどいた仲間のうちで、現在、
151　006　現在各種年鑑によれば詩人ということになっている
166　004　失われたものと現在あるものの中間で
184　009　現在カリフォルニアに住んでいる
186　031　過去と現在の空間がぴたりと重なり、その輪郭がずれてぼやけていく

げんざいかくしゅねんかん　現在各種年鑑
151　006　現在各種年鑑によれば詩人ということになっている

けんさしている　検査してゐる
014　005　手を当てて耳のネジを検査してゐるのを

げんし　原始
118　011　原始の眠りのなかで

げんし　原子
054　156　光はひとつの原子に　強烈な夏の驟雨にかわってゆく

げんじつ　現実
100　032　どんなけわしい現実の悪路も
142　095　すでに現実に存在していて　いわゆる階級構造とは全く無縁な
152　024　醜い現実の姿をさらしている
180　034　測り知れない現実的形態を網にかけて

げんじつてきけいたい　現実的形態
180　034　測り知れない現実的形態を網にかけて

げんじつに　現実に
142　095　すでに現実に存在していて　いわゆる階級構造とは全く無縁な

けんじゃ　賢者
096　005　きみは賢者の砂色の眼で
126　004　と悲観的な賢者が言った
160　048　賢者たちは言っている

げんしゅくな　厳粛な
106　007　いくら厳粛な集まりでも　これはひどく殺風景だ
173　033　厳粛な破壊の儀式が始まったら

げんしょ　原初の
153　003　原初の日より数えるように
180　039　原初の疑問には

げんしょう　現象
192　002　どんな現象も起りようがなく、わたくしの影は、孤独とはいえなくなっているから、

げんじょうこうてい　現状肯定
150　067　どうしようもない怠惰か、安易な現状肯定である。

げんしょく　原色
096　014　ぼくらを昏倒させる原色はなんだろう？

けんそうな　喧燥な
036　025　頭髪に巣をかける喧燥な小鳥たち

けんそうの　喧噪の
061　093　この喧噪の大都会の

けんたい　倦怠
055　054　この倦怠の街の全景を
061　005　重たい不安と倦怠と

げんだい　現代
160　030　「現代最高の詩人T.S.エリオットの作です」
180　016　それが現代なんでしょうね
190　012　現代でも可能であるのかどうか

げんだいさいこうの　現代最高の
160　030　「現代最高の詩人T.S.エリオットの作です」

けんちく　建築
023　011　再び実体のない建築の翳は
025　050　白亜の建築が聳え立ち
026　002　とがった建築のかげで

げんちょう　幻聴
192　009　あの音は、幻聴かも？　とぎれとぎれに聴えてくるが、

けんとう　検討
072　022　迷信も愉快だし、科学的検討もまんざらではない

けんとう　見当
150　025　すこしはましかと思っていたその「すこし」が見当らなくて、
173　007　「見当もつかんな

げんば　現場
085　007　きみの血を現場へ駆り立てるものは

けんびきょう　検微鏡
028　065　笑うものたち虫のやうな検微鏡下の虫たち

けんめいではない　賢明ではない
010　016　新しい射手よ　一本の樹のみを監視するのは賢明ではない

けんめいな　賢明な
021　010　賢明な若い主君は

げんめつ　幻滅
185　012　時代への幻滅も

ケーキ
108　008　食べちらしたケーキの皿や

ゲーム
181　014　いいゲームにはならなかったが
189　003　ゼロ・サム・ゲームにすぎん

こ　個
010　003　有効なスピイドについて考へることを欲する少年は一個の白い帽子をかぶってゐる
026　032　残されたただ一個の帽子は
028　013　昔からの葦の巣があり個人が住んでゐるが
028　055　そこに一個の文明が

028　056　そこに一個の社会が工場が
028　057　そこに一個の希望が絶望が信仰が
028　058　そこに多数の生活が個人によって支持される
033　012　一個の器物と共にすべてが放擲された
034　003　一個の石を濡らす
034　018　そこへも一個の石が転がり
041　048　個人を非難しないわけにはゆかない　神々の名において
046　028　あなたはけむれる一個の霧となり
061　082　「おまえはからっぽの個だ
061　114　いつも個人的なわけがあるのだ
061　122　いつも個人的なわけがあるのだ」
142　105　巨大なものの力が　個人の信念より永続するという証拠はない
142　108　一個の弱い人間の信念をも挫くことができないとわかれば
142　122　個人の平和と　世界の平和と　人類そのものの　真の守護者たりうるのだ」と
150　007　彼は自分の虚構の個性を破綻なく演ずるために、
150　030　これは、私だけが「虚構の個性」をつらぬき、偽善の間道をくぐりぬけて、
150　038　又本質的に個性的なるものも」と言ったのは、
150　071　個人にとって、自由は、

こ　弧
042　007　大いなる弧をめぐり遥かに高い所から

ご　碁
174　017　ぼくはきみとたった一ぺん打った碁のことをときどき思い出していた。
174　021　おっとりしていて、どこが強いのかわからないような碁風だった。
174　022　あの一局の碁が語るものは何だったのか
174　026　いまでも下手な碁打ちであるぼくは考える

こ　子
003　005　海に向って帽子をふって
005　004　青い帽子の微風が通り
010　003　有効なスピイドについて考へることを欲する少年は一個の白い帽子をかぶってゐる
010　004　白い帽子は頭のアリカを教へるとともに日の匂を発散させる
010　009　その新しい設計こそ白い帽子と赤いジャケットの
013　013　鬼になる子が
013　018　上衣と帽子を失敬する
015　014　貝殻の匂のする帽子は
015　018　椅子は空虚なままに
017　033　帽子と巴旦杏が
018　013　帽子掛の下で遮断され
021　012　麦藁帽子ほどのプウルをまはり
025　059　梯子を登るのである（未完）
026　001　たくさんの硝子がはめてある

026　023　芽生えのない種子が
026　032　残されたただ一個の帽子は
027　020　椅子は書籍の上に乗ってゐる
028　009　哀訴の蒸気を吸殻とともに皿の上に拾てる三重の硝子の向ふの鐵格子の中の
029　003　凭れかかる椅子もない
030　019　テエプルと椅子の配置をつくり
031　018　疲れた椅子が囁く
032　006　ただ一脚の椅子があるだけ
032　016　だが椅子のキーキーいふ音に
034　002　乾いた椅子の上の
039　019　ゆれている椅子の影は
040　002　椅子はみづから倒れはじめる
041　045　とげとげしい息子よ　御身の
041　097　椅子に凭れて
041　114　ただ一脚の椅子があるだけ　気味悪くキーキーいふ音に
044　010　新らしい種子が新しい土地に播かれつつあることを。
047　006　つかれた椅子の軋る音……
047　007　重たい時計の振子の音……
050　006　ぼくらは暗い酒場の椅子のうえで、
050　024　憤激も、悲哀も、不平の柔弱な椅子もなかった。
052　010　あなたが男を誘惑するはずだった可愛いい頬の黒子のことを
052　012　影になったあなたの子供らしい微笑が
052　017　あなたの可愛いい頬の黒子のことを
052　020　あなたの未来の時計の振子がうごくのをまえにして
053　011　可愛いい格子のスカートをはいています
054　111　古い夜の匂いがする頭に帽子をのせると
054　128　僕はせきこみ調子づく
054　156　光はひとつの原子に　強烈な夏の驟雨にかわってゆく
057　037　悲惨なぼくの黒い帽子と
059　026　大人になった幻影の子よ
061　042　子供をつれて一日だけの安息に、
061　171　空いた椅子がいつまでも帰らぬ人を待っています。
061　178　妻も子もなく、この広い都会の片隅で、
066　006　女の子がひとり涙をおさえて立っていた、
066　017　息子は煙草をふかしながら
070　022　ぼくたちを閉じこめている格子は
070　025　この動く格子のなかから
071　015　家族からはぐれた男の子は
078　007　緑泡立つ椰子林が
083　003　さっきまで子供たちが戸口から顔を出していたのに
087　002　いじわるで卑しい犬の子を
088　003　ぼくの椅子の下に巣をつくったり
088　026　椅子のうえで寒さにふるえているぼくの手足を

089 003 たったひとりの椅子にいて
097 007 あなたは暗い鉄格子の中に、永遠に繋がれるだろう。
099 011 今ではーーー人の妹は三人の子供の
099 012 もう一人の妹は一人の子供の母になった
108 023 立つ波の拍子とともに
113 014 なんでも知ってる　靴屋の息子で
114 004 一粒の種子も残らない
120 018 子守唄のよう
122 007 ひとり椅子にのこされて
126 012 月のうえをふわふわ歩く宇宙の子供を見ようとして
127 015 村の思想の種子がこぼれて、
136 027 そいつらがまた　盲の子をうむ
140 019 忘られた種子のように
141 008 愛以外の何かだったわ。抱きあって、苦痛でよじれる縄梯子にすがって、宙ぶらりんで
148 036 結局、めいめいの職歴と子供を何人作ったかということにつきていた。
151 003 貧乏人の息子で
155 040 子が叛逆して出ていくのを
160 055 妻も子もなかったかれは　タイムズ・スクエアに近い安ホテルの一室に住み
165 019 子なるわたくしの存在が心（しん）から厭わしかったことの
165 036 子のいない冷たい歓喜に
167 024 背中をまるめて椅子に凭れている
167 068 泣きながらこの世に産れた人の子にとって
174 009 きみは意外に元気な様子で近況を語ってくれ、心暖まる十五分か二十分であった。
174 014 「子供っぽさ」が抜けないという共通点こそ、最大の障碍だったのだろう。
175 014 別々の思いにふける子供のように
177 021 きちんと帽子をかぶり
180 003 女子とあなどり
180 007 障子に映る薄陽をむけて
180 010 「御手紙の内容、何のことやら判りません」なら「女の子の心理」がどうだってことも関係ないじゃないですか？
180 011 「女の子の心理」なんて私だって判んないですよ。私だって「男の子の心理」は判んないですからね。お年寄り
180 024 貴方に「女の子の心理」が判んなくたってあたりまえなんです。貴方は心理学やってんのじやないのでしょうか
183 022 よちよち歩きする可愛いい女の子に
184 008 新しく家を建てると養子を迎え
184 010 四歳になったばかりの養子の名はヒロシ
184 012 日本人妻の間にできた子供である
186 056 それなのに、みんなが整列して中央に一つだけ空いている椅子
188 023 椅子に腰かけて、前こごみに、
188 066 子供の自殺は、アメリカでも、
188 083 きみが好きだという、武者小路の、茄子や南瓜の素朴な絵、
189 036 かれは椅子に坐ったまま

コア
096 018 あの瞑想の闇のコアには生きている砂漠があるんだ

こい　濃い
181　003　濃いオゾンのいきがたちこめ

こい　恋
053　014　昔の恋人からおくられた銀のロケットを
055　057　恋にも革命にも失敗し
068　026　恋をあさる若者の血汐のなかにも
077　022　母や妹や恋人のためにとめどなく涙を流しつづけた
084　021　夜と昼とが恋をする……」
088　060　どんな恋人たちよりも甘いキスをしよう
102　012　恋をすて故郷をすて他人の国へゆくのだから
104　003　たくましい狩人たちも　恋をあさる猟場から
106　021　かれの指の爪貝は　恋人たちがしゃぶりたがるほど美しい
108　016　恋人たちがベンチに坐って
111　004　憧れにも恐怖にも　母にも恋人にも
138　006　草葉の蔭を恋しがって
144　012　風にみはぐれ恋を忘れ
153　010　悲恋にとどめを刺し
154　012　それをしも邪恋といいつのり
160　007　恋人と会っては　窓外のすがれた景色に視線をそらして

こいびと　恋人
053　014　昔の恋人からおくられた銀のロケットを
077　022　母や妹や恋人のためにとめどなく涙を流しつづけた
088　060　どんな恋人たちよりも甘いキスをしよう
106　021　かれの指の爪貝は　恋人たちがしゃぶりたがるほど美しい
108　016　恋人たちがベンチに坐って
111　004　憧れにも恐怖にも　母にも恋人にも
160　007　恋人と会っては　窓外のすがれた景色に視線をそらして

コイル
021　024　若年のコイルを閉じてしまったが

こうい　行為
061　111　「あらゆる行為から
143　004　二重行為の詩人は

ごうう　豪雨
034　019　突如　豪雨が襲ってくる
160　016　闇をつらぬく稲妻と烈しい豪雨の中から新しい発見のように甦ってきた

こううん　幸運

150　076　昔の雑誌が見つかったというのは、私にとって幸運でした。
160　046　今夜のかれの幸運は明日にはきみのものだろう

こうえん　公園
021　003　K氏の公園のプウルに近く
023　004　公園をまがってゆく縞のズボンたちを
120　001　不忍池の公園の

こうえん　講演
186　005　徳山まで講演に行ったんですってね？

こうか　校歌
124　004　仲間も涙も校歌も国家も売り足りないが

こうかい　後悔
076　020　どんな後悔よりも細くなってしまったから

こうがい　公害
188　047　公害を憂えたり、伝統の喪われていくのを嘆くのと同様、

こうかい　航海
055　012　とおい航海に出よう
055　014　航海に出ようとおもった
076　009　ながかった航海の短かさについて

こうがい　郊外
057　025　マニラ郊外のドライブウェイを疾走しながら
124　027　郊外電車の快よい動揺に耐えている
183　001　郊外の小さな駅をおりると

こうがいでんしゃ　郊外電車
124　027　郊外電車の快よい動揺に耐えている

ごうかくした　合格した
148　032　同年兵で幹候の試験に合格した組は、

こうかせん　高架線
061　222　おびただしい灯の窓が、高架線の上を走ってゆく。
089　015　高架線を走る電車や

こうかん　交換
162　022　喜んで命と交換しただろうというのだ
165　024　どんな言葉の交換もなかった

こうがん　睾丸
068　011　睾丸をしめつける海と

こうかんした　交換した
162　022　喜んで命と交換しただろうというのだ

こうきさ　高貴さ
106　023　そこに集中し隆起して　あるフイジカルな高貴さの象徴となり

こうきな　高貴な
060　014　高貴な冷たい戦慄を感じているにちがいない

こうきょう　交響
167　005　家鳴り震動の交響がつづく

こうけい　光景
158　034　北條や足利の美しい光景をすくってみせたときだろう
188　024　両のこぶしで、眼をおさえている光景、

こうげき　攻撃
186　033　一種の時間差攻撃ですね？

こうご　交互
167　003　東の窓と南の窓が交互に鳴り

こうこう　高校
188　060　高校によっては、死についての教育もなされているようです。

こうこく　広告
006　014　阿片の広告の下にベタベタ貼った
069　022　広告燈の灯は消えて
145　015　古い広告ビラの汚れた壁の傍で
160　006　死亡広告をみる癖がついたし

こうこくとう　広告燈
069　022　広告燈の灯は消えて

こうこつ　恍惚
082　011　恍惚とした顔のように
162　015　恍惚の所業であったかもしれない

こうざ　講座

188　059　「セックスに関する講座は、尋常科からあるのですが、

こうし　格子
028　009　哀訴の蒸気を吸殻とともに皿の上に拾てる三重の硝子の向ふの鐵格子の中の
053　011　可愛いい格子のスカートをはいています
070　022　ぼくたちを閉じこめている格子は
070　025　この動く格子のなかから
097　007　あなたは暗い鉄格子の中に、永遠に繋がれるだろう。

こうしがって　恋しがって
138　006　草葉の蔭を恋しがって

こうしゅう　公衆
160　022　（公衆の面前では　場違いな人間というのと同じだ）

こうしょう　交渉
150　051　彼は我々の雑誌の創刊号に、玉の井の娼婦と客との交渉を扱った「泥沼」を書き、

こうじょう　工場
028　015　工場の透明な模様の中に編まれ
028　056　そこに一個の社会が工場が
091　002　さびれた国道につづく町工場の
100　064　つながれた行列の影は鎖のように工場をとりまいていた
177　007　工場を出たときは

こうしょうな　高尚な
054　061　単により高尚な国民　結社　人間の材料にすぎないと

こうしん　交信した
178　008　なにげなく交信した

こうず　構図
106　016　無事に生きのびてきた　この下手な構図は

こうせい　構成
106　018　アイディアもなければ　構成も弱い

こうせき　航跡
080　011　立ち去ってゆく航跡には
110　005　走りつづけてきた航跡を

こうせん　光線
025　035　縞になった明るい光線を歩む

186　061　ぼくを媒介にして光線が変ること

こうそういじゅうしゃ　高層居住者
129　010　高層居住者

こうそくど　高速度
072　049　高速度カメラが

こうだいな　広大な
063　022　広大な淋しさのひろがりに

こうたく　光沢
033　008　光沢とともに
090　021　紫檀の光沢は深まってきた

こうてつ　鋼鉄
055　018　疾走する鋼鉄の船が
128　023　鋼鉄六倍　自動車十五倍

こうねつ　高熱
077　019　高熱に苦しみながら

こうはい　荒廃
027　010　荒廃した街の窓だけが眺められ
038　028　荒廃したグラスの底をとほるやうに

こうはいした　荒廃した
027　010　荒廃した街の窓だけが眺められ
038　028　荒廃したグラスの底をとほるやうに

こうばしい　香ばしい
039　147　香ばしいネクタルの泉となって
062　060　わたしはこの香ばしい微風のなかに家を建て
091　004　ロースト・ビーフよりも香ばしいその匂いとともにやってくる

こうはん　後半
188　058　ところで、きみは同じ手紙の後半で、

こうふく　幸福
011　017　ああ　ぼくたちは幸福である
069　038　見えない幸福におびえて
125　024　幸福である　証拠はない
142　087　臆病な政治的理由があり　小さな幸福をほんの少し長引かせるための

142　092　ぼくたちはどこまでその小さな幸福を守れるだろうか？
145　014　有りもしない幸福の歌がいつものように響いていた
171　016　人は幸福であり満足だとはいかないものか、

こうふん　興奮
072　028　ゴールまで二分三十秒の興奮
072　029　二千四百メートルの興奮
072　030　この裸の興奮は

こうほ　侯補
058　036　春のころ代議士侯補が

ごうまん　傲慢
186　047　理解されないと思うのは傲慢、相手に対する侮辱です！

こうみょう　光明
044　004　帰するところ一にして　祈りは慧き習慣（ならわし）の光明なり。

こうみょうな　高名な
106　027　高名な美学派の詩人みたいに　口髭をのばしたり刈りこんだりして

こうみょうに　巧妙に
166　023　巧妙に管理されてアジア病に冒されていく

こうもく　網目
128　083　梢の天の　網目から

こうもり　蝙蝠
007　001　ジャンクの帆が蝙蝠のごとく羽博いて　ランプの虹がひろがる
026　016　蝙蝠傘とともにさ迷ひ

こうもりがさ　蝙蝠傘
026　016　蝙蝠傘とともにさ迷ひ

ごうもん　拷問
142　075　拷問から解放され　自由を得るためには

こうや　荒野
143　020　どこの荒野の枯木にとまるのか

ごうりてきな　合理的な
072　041　合理的な法則があるとは信じられない
165　022　これ以上、合理的な感情があるだろうか

こうりょ　考慮
174　028　ぼくの考慮のおよばぬところが

こうりょう　香料
026　012　黄昏の中に香料を撒き

こうりょうたる　荒涼たる
049　012　私たちの間には　ひろい荒涼たる眺めが、

こうりょうとした　荒涼とした
054　038　歩いてゆこう　荒涼とした世界の果へ……
065　026　荒涼とした心に、蒼ざめた花嫁をあたえ
126　013　それが荒涼とした虚無の世界だとしても

こえ　声
006　007　地面からそんな声がした
014　008　ヴァイオリンがセロの声で歌ったら
014　027　眠れよ眠れと声がしてゐる
017　026　いかんよと沙漠から声がしたら
025　038　笑声をたてる一本の蝋マッチ
025　051　祈のない叫び声と
028　034　地下に住んでゐる声を踏みしめ
028　048　小鳥や草の声とは無関係である
029　013　美しい喚声にとり巻かれてゐた
031　002　誰かしら呟き声が
036　006　だがおれは声高く笑ふために
038　018　誰かかすれた声で囁く
039　073　あなたの澄んだ声がする
039　099　むかしの声もとどかない
040　006　じぶんの声も聞えない
041　085　あの鳥は嗄れた声で歌ってゐる
046　026　自然の声をあげる日がくるだらうか
050　020　その声は人影へ、そして街へ、
053　029　ひそひそと話しあっていた声もとだえてしまいました
054　058　大学生は低い声と思いやりのある眼ざしで話しはじめる
061　098　溺死人が声もなく天にむかって叫ぶのを……
062　053　岩壁へかえる鴎のなき声が
065　008　明るく笑っていた。その冷たい、声のない笑いは
065　023　ひとつの声をかけ、つづいて別の声で
072　027　ーーどよめくスタンド、沸く観衆、拍手、喚声
074　021　声なくして新しい死者と語りあった

077　038　そのうえに低い祈りの声と
082　013　声のない叫びは
083　008　ほそい声で虫がないている
084　017　アナウンサーの明るい声はこたえる
088　006　あどけないおまえの声は　いつもぼくに
088　079　大きな声でうたうぼくたちの歌に
089　041　遠いその声の方へ
098　004　聞えてくるのは木枯の声ばかりだというのに
100　054　ぼくはいまでも　その声をきく
106　006　「笑うなかれ」　悲しい内部の声である
106　048　ただちに答えられるだろう　かれの経験の彼方から第四の声で
117　013　いまは声をかぎりに
130　001　鴉が二声ないて
134　014　通行人が哀れっぽく声をかけてきた
142　004　西側の新聞や著名人の多くの声明には
142　036　どれほど声を低めて語っても
143　023　おぞましきその啼声や
145　021　膝の上の猫を大事にしてあげなさいと今日の声は忠告していた
155　026　なつかしそうな声で
159　004　細くすきとおる声をかけてきた主は
160　025　哲学的な詩をひどく陰気な声で吟誦する
165　011　何度、声にならない叫びを上げたろう
167　033　風声のま
169　014　天使の声をつまらせていた
173　001　声を出したかったとか
173　034　押潰されたヒューマニズムの声など役に立たぬ
174　010　最後にきみはさりげなく「声を聞かせてくれてありがとう」と言って、電話を切った。
183　007　魚屋の呼声はえらく景気がいいけど
185　003　アナウンサーの声は平静で
185　009　声にならない呻となって
186　082　死を含む共同体であるみんなの声に耳を傾けていると
192　026　叫ぶ、が、声にならない。ぴったり浪に包囲されて、

ごえい　護衛
054　137　護衛つきキングと慰めをあたえるクインの価値とが

こえだ　小枝
039　024　小枝や
065　035　感覚の闇を照らした。樹々が小枝を打ちならし
116　012　ほそい梅の小枝は

こえて
010　021　地平線の鎖をのりこえて

035　005　小さな像をこえて
061　125　滑らかなやさしい囁きがきこえてくる
097　013　空気を蹴り厚い無の壁をこえて、
098　010　壁づたいにきこえてくる

こえて　超えて
016　012　陸を超えて飛翔する
142　039　言語の障碍　人種の差別を超えて

こえる　超える
077　024　もう超えることのできない境があり

こおった　凍った
043　010　白く凍った地図のうへを
069　001　十一月の凍った夜空に
069　009　十一月の凍った夜空に
069　021　十一月の凍った夜空に
069　037　十一月の凍った夜空に
098　022　凍った壜のなかの

こおとこ　小男
041　021　錆びた鉄柵に凭れる小男の悲哀よ

こおらせ　氷らせ
026　019　わたしの体を石のやうに氷らせた

こおらせる　凍らせる
041　035　寒さが体を凍らせるまで

こおり　氷
002　001　氷が音たててはぜる
002　011　落日の朱が氷柱をながれ―
026　019　わたしの体を石のやうに氷らせた
041　068　あなたの体が氷のやうだからだ
061　096　氷と霜と蒸気と熱湯の地獄の苛責に
105　001　氷はとけ、雪は消えて、
188　069　記憶の装置が、氷りついてしまったようで、

こおりついた　凍りついた
002　012　凍りついた眼を
031　006　いつかのやうに凍りついた道路の上で

こおりついて　凍りついて

001　014　影が凍りついてゆく
047　015　自己愛が底深く凍りついてしまっていることを……
101　061　吐く息のひとつひとつが凍りついても

こおりついて　氷りついて
188　069　記憶の装置が、氷りついてしまったようで、

こおりついてゆく　凍りついてゆく
001　014　影が凍りついてゆく

こおろう　凍ろう
054　148　暗い存在が抽象そのものに凍ろうとする時間のはずれから

こおろぎ　蟋蟀
041　022　石が鳴く　まるで蟋蟀のやうに

こかげ　木蔭
108　007　木蔭のテーブル

コカコーラ
140　021　コカコーラの汗をうかべ

こかつ　枯渇
150　064　彼の才能は枯渇を強いられたのである。

ごがつ　五月
072　066　暮れるにおそい五月の空の下にひろがっている
077　016　一九四四年五月のある夜……

こがらし
058　039　サーカスの看板がこがらしに吹かれています

こがらな　小柄な
146　045　振りむくと小柄な中年の外国人が

こがれて
079　018　永久に待ちこがれている水兵たちから
138　009　なまめかしい幽霊にこがれて

ごきげんよう　御機嫌よう
054　002　「御機嫌よう！

こぎさって　漕ぎさって

061　010　下へ、下へと漕ぎさってゆく舳の方位を。

こきざみ　小刻み
041　050　人影にまじって　小刻みに人々に做ひながら
100　003　かたい心をもち　小刻みにひとびとにならいながら

こきざみに　小刻みに
041　050　人影にまじって　小刻みに人々に做ひながら
100　003　かたい心をもち　小刻みにひとびとにならいながら

こきゅう　呼吸
061　191　いつも天使の悪い呼吸で曇っています。
089　021　すると少年の冷たい呼吸で
165　004　腹式呼吸のいきの音
188　016　呼吸ができなくなるという、面倒な病気です。

こきょう　故郷
048　032　地平線がのせている人間の重たい故郷
051　002　人間の遠い未知の故郷へ
102　012　恋をすて故郷をすて他人の国へゆくのだから
140　006　戦争もなければ故郷もない
151　024　故郷喪失者か

こきょうそうしつしゃ　故郷喪失者
151　024　故郷喪失者か

こきん　古今
167　021　古今の書を読み

こく　濃く
061　161　霧は濃く、影は淡く、

こくがい　国外
142　066　国外追放を条件とした釈放の申し渡しに対して
142　070　そして　国外での健康回復と安楽な生活の可能性があるにもかかわらず

こくがいついほう　国外追放
142　066　国外追放を条件とした釈放の申し渡しに対して

こくこくと　刻々と
071　047　刻々と現在にむかって押しよせる

こくさい　国際

072　001　ーーどんな国際ニューズよりも
072　054　どんな国際ニューズよりも
124　024　国際級の背景的速度に陶酔し

こくさいきゅう　国際級
124　024　国際級の背景的速度に陶酔し

こくどう　国道
091　002　さびれた国道につづく町工場の

こくび　小首
112　011　小首をかしげ　そしらぬふりをするな

こくみん　国民
054　061　単により高尚な国民　結社　人間の材料にすぎないと
054　066　銀行が国民のものになるだろうから
054　161　なにげない挨拶のうちから生れる未知の国民のことを……

ごくらく　極楽
017　025　まるで極楽でございますと云はねば

こげた　焦げた
008　003　点ける　と焦げたパンの匂がし　空腹をかんじた兵士
112　008　ジョホールの血の海峡　ブキテマの焦げた丘

こげて　焦げて
017　011　西の空が良いかげんに焦げて

こけむす　苔むす
154　008　苔むす岩間に白い滝を忘れてきた

ここ
039　070　ここはわたしの生れた土地だ
046　016　渇いたこころの橋上の人よ
053　021　それはわたしのこころの神秘です
053　028　わたしのこころのお部屋のなかで
054　040　「僕はここにいる　君がいないところから
054　042　ここにいる僕はここにいない」と……
062　045　ここでもうお終いだという気がします
062　056　ここでは静止する石ですら
063　020　　（ぼくは憐みのこころをもっているか？）
064　026　こころとこころは遠くの空へ飛びさった。
079　006　ここは世界で

083　015　空を追いつめて　ここまでくると
088　036　ここには海があるの
088　038　ここには犬がつないであるの
094　009　ここからオリーヴの海が見える
098　007　「ここは　ほんとに気持のいい場所ね
100　030　こころよい追憶にもどってゆく歩行者のように
115　008　ぼくらのこころに
117　001　ここまできたーー
117　008　こころの樹もすっかり裸になった
120　013　ここからは
123　006　こころはあたたかい
141　010　そして、きみはここにいる、ぼくはここにいる、
142　050　　ぼくはここにいる　きみはここにいる
144　006　醜国の快感はここらあたり
145　003　何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに
146　041　「もうここにはいないのかしら？」と思い
146　049　きっとここから出してあげますよ（アイル　ゲッ　チュー・アウト・オブ・ジス）」
192　015　みるみる漆黒につつまれていく、ここは、もともと海底だったところではないか。冷気に身ぶるいし、

ごご　午後
006　005　蜂蜜のやうな午後が溶ける
028　022　そのとけやすい肢體を眠らせる飴色の午後の
034　011　午後四時はしぜんに消えてゆく
039　063　地の果の午後の海には
046　047　また午後の廊下の如くあなたの躰を影にするだらう
051　014　午後四時の黄いろい太陽
058　008　ビルの四階には午後三時から灯がともり

ここ　此処
046　050　此処と彼処　それも一つの幻影に過ぎぬことを
061　155　此処と彼処、それもちいさな距離にすぎぬことを……
070　030　わからない、どうして此処へ落ちたのか
171　015　われら此処に在りとかんがえるだけで

こごえる　凍える
039　088　すべてが凍える夜がくる

ここく　故国
107　009　故国の空は赤かった

ごごさんじ　午後三時
058　008　ビルの四階には午後三時から灯がともり

ここちよく　心地よく
147　010　生きていくことがだんだん心地よくなってきて

こごめて
131　004　背をこごめて街中で生き
151　016　背中をこごめて人中を歩く姿といったら

ここよい　快よい
124　027　郊外電車の快よい動揺に耐えている

ごごよじ　午後四時
034　011　午後四時はしぜんに消えてゆく
051　014　午後四時の黄いろい太陽

こころ
046　016　渇いたこころの橋上の人よ
053　021　それはわたしのこころの神秘です
053　028　わたしのこころのお部屋のなかで
063　020　（ぼくは憐みのこころをもっているか？）
064　026　こころとこころは遠くの空へ飛びさった。
100　030　こころよい追憶にもどってゆく歩行者のように
115　008　ぼくらのこころに
117　008　こころの樹もすっかり裸になった
123　006　こころはあたたかい

こころ　心
011　011　蒼い干枯びた心臓を支へて
012　006　放心した花弁のやうに
036　008　なんぢら安心しろ
039　148　炎と心の伝説を歌ひ
041　051　新聞紙の上を歩いてゆく　固い心をもち
046　010　あなたはみづからの心象を鳥瞰するため
047　002　とざされた部屋に心臓の羽搏きが
052　001　生きのびてきたわたしの心に
054　037　Mよ　いまは一心に風に堪え　抵抗をみつめて
054　039　だが僕は最初の路地で心弱くもふりかえる
055　033　いつまでもおれたちのひき裂かれた心と
058　013　あまり感心しない生活をしています
059　012　卑しい心に問うてはならぬ
061　049　あなたの心にうかんだ道のすべてだった。
061　110　どれだけたくさんの罪が心のなかに閉ざされているかを。
061　117　心を悩ますことはないのだ
061　123　ひとつの心の空洞から

061 170 がらんとした心の部屋で、
065 026 荒涼とした心に、蒼ざめた花嫁をあたえ
069 026 じっと心の闇をのぞきこむ
080 004 きみはきみの心のなかに
083 014 わたしの心をいたわってくれるけれど
083 020 ああ　虚心の鏡に映る
085 011 きみは心よりもデリケートなうわべをもち
088 033 たえずぼくの心のなかに組みたてる
088 083 心から喜んでくれるから
089 008 「あなたの暖い心のなかにいますよ」
089 034 さりげない心の素描がありますが……）
093 015 蛇が隠れたエデンの樹を一心に見つめる
094 016 かれと言いきみと呼びぼくに返る心の遠近法にしたがって
094 023 海はこんなに心に重い
100 003 かたい心をもち　小刻みにひとびとにならいながら
100 060 はじめて心で見　眼で感じた夏だった
101 048 ぼくはぼくの心をつなぎとめている鎖をひきずって
101 059 弾倉をからにした心のなかまで
107 007 歌のうたえる心を売り
121 005 心配事は他人にまかせて
128 068 おれの心は
133 005 わが心の愛する者をたずねしが
133 008 出あおうとしない心のためか？
133 018 なんじの心の愛する者を知れりと
134 006 過去は心からぬけ落ち
140 018 やがては喪心の天に至る
142 033 支配に自信なく　人間の良心を
143 013 狭心症の呪文と
143 018 みじめであさましい生きた心よ……
143 022 死にたき心の
146 048 「ご心配なく（ドント・ウォリー）
146 062 やっと安心しましたわ。
147 010 生きていくことがだんだん心地よくなってきて
147 018 生きていることが心苦しくならなかったことで
150 019 ようするに小心な若輩の似た者同士の集りで、
150 052 続いて第二輯に逃亡した娼婦の心理を描いた「滅落」を発表したところで、
155 041 心のどこかで
156 023 心性のちがいはどうしようもない
156 036 心の禁制は解けぬまま
159 007 今生の別れかと心はさわいだが
160 014 それがなぜ私の心をしめつけたのか？
160 024 歴史というものが　どんなにわれわれの野心や虚栄とくいちがうかという
160 047 心を開け　冒険に

160　057　心臓発作で倒れ　救急車が到着する前に息をひきとったという
164　011　人の心を盗むあなたの言葉は
165　019　子なるわたくしの存在が心（しん）から厭わしかったことの
167　043　一語のための一行が人の心を変え
167　062　ぼろぼろになった壁面にまた心理面に
169　010　求心力は見えなくなり
171　013　それが女の心に焼きついたのだろうと
172　011　心に出没するのは
174　009　きみは意外に元気な様子で近況を語ってくれ、心暖まる十五分か二十分であった。
174　011　この三十年間、ぼくはきみに一度も電話などしたことがない、ちょっぴり心が痛み、それはなぜかと考え出すと、疑
174　020　会心の笑みをもらすきみを前にして、ひどく口惜しい思いをした。
180　010　「御手紙の内容、何のことやら判りません」なら「女の子の心理」がどうだってことも関係ないじゃないですか？
180　011　「女の子の心理」なんて私だって判んないですよ。私だって「男の子の心理」は判んないですからね。お年寄り
180　012　の心理はなおさら、だ。
180　017　だからといってお年寄りの心理を甘くみてはいけませんよ
180　024　貴方に「女の子の心理」が判んなくたってあたりまえなんです。貴方は心理学やってんのじやないのでしょうか
183　009　不況が心にのしかかっているからだ
183　014　きちんと心得ている働き人と
187　002　ぜいたくな心は重い
188　025　私の最近の心境をよく伝えているといえましょう」
188　030　べつに、心配することはあるまいと思って、
188　037　眼よりも、心で計る構えになるのは、
188　052　結核と癩から、心臓病と癌へ。
188　085　いつまでも、きみの心に残っていますように。
191　004　心のなかで鳴っているのだ

こころあたたまる　心暖まる
174　009　きみは意外に元気な様子で近況を語ってくれ、心暖まる十五分か二十分であった。

こころえて　心得て
183　014　きちんと心得ている働き人と

こころぐるしく　心苦しく
147　018　生きていることが心苦しくならなかったことで

こころよい
100　030　こころよい追憶にもどってゆく歩行者のように

こころよい　快い
026　021　快い日影もある

こころよわく　心弱く

054　039　だが僕は最初の路地で心弱くもふりかえる

こじあけられた
054　154　ネクタイピンでこじあけられた窓の向うがわ

こしかけて　腰かけて
188　023　椅子に腰かけて、前こごみに、

こしつする　固執する
024　005　は　記憶に固執する時計には花々が飾られてゐるのだなと見

ごじゅうさんさい　五十三歳
160　054　私が知りうるのは　シュワルツが一九六六年に五十三歳で死んだことだ

ごじゅうしちにん　五十七人
106　015　バラ色の頬はあせても　不幸な五十七人がそろって

ごじゅうなんねん　五十何年
188　009　五十何年ぶりに歯医者の厄介になるという始末。

ごじゅうねん　五十年
139　008　五十年の記憶は闇また闇。

ごじゅうろくさい　五十六歳
151　015　なんと魅力のない五十六歳の男だろう

こしょう　故障
188　070　身体の故障よりも、よほど、このほうがつらい。

ごしょく　五色
073　009　よく晴れた五色の空を映していた

こじん　個人
028　013　昔からの葦の巣があり個人が住んでゐるが
028　058　そこに多数の生活が個人によって支持される
041　048　個人を非難しないわけにはゆかない　神々の名において
061　114　いつも個人的なわけがあるのだ
061　122　いつも個人的なわけがあるのだ」
142　105　巨大なものの力が　個人の信念より永続するという証拠はない
142　122　個人の平和と　世界の平和と　人類そのものの　真の守護者たりうるのだ」と
150　071　個人にとって、自由は、

こじんてきな　個人的な

061　114　いつも個人的なわけがあるのだ
061　122　いつも個人的なわけがあるのだ」

こずえ　梢
001　008　高い梢の向うの響は
088　045　歌わぬ梢
088　082　高い梢で一緒に歌っている人たちが
128　083　梢の天の　網目から
135　008　最も遠い天の梢へ
177　018　梢のほそい技をうち鳴して

こすって
134　013　広場に立って眼をこすっていると
150　017　しかし、友人たちは仲間のだれかれをあてこすっているのだと思いこみ、

こすりつけ
041　087　愛嬌ある仕科（しぐさ）で柔かい羽に堅い嘴をこすりつける
152　014　ちょっと折りまげてこすりつけ

こすりつける
041　087　愛嬌ある仕科（しぐさ）で柔かい羽に堅い嘴をこすりつける

ごすん　五寸
090　007　方三尺五寸の天地をつくるために

こせい　個性
150　007　彼は自分の虚構の個性を破綻なく演ずるために、
150　030　これは、私だけが「虚構の個性」をつらぬき、偽善の間道をくぐりぬけて、
150　038　又本質的に個性的なるものも」と言ったのは、

こせいてき　個性的
150　038　又本質的に個性的なるものも」と言ったのは、

ごぜん　午前
038　008　午前の霧にぬれながら

ごたい　五体
065　037　彼の五体を震わせた。

こたえた　答えた
064　004　――明日は明日、と街灯が答えた。
064　030　――今日は今日、と街灯が答えた。
113　038　やさしく答えたスターリン

こたえて　答えて
054　033　そして風はなんにも答えてくれなかった
112　025　答えられるものなら答えてくれ

こたえている
054　133　「アメリカ……」と壁がこたえている

こだま
058　003　鎚の音がこだまし
058　027　その孤独のこだまのなかには淋しさの本質がちょっぴりあります
071　046　波のように　こだまのように
112　010　破壊につぐ破壊のこだま　断末魔の軍港にとどろく火砲のうた
137　014　空虚なこだまのなかの幾年月
182　018　沈黙は宇宙にこだまし

こだまし
058　003　鎚の音がこだまし
182　018　沈黙は宇宙にこだまし

ごちゃまぜ
054　138　頭のなかでごちゃまぜに縺れる

こちら
039　006　あちらこちらの窪地から
060　010　遠くからこちらへ近づいてきたりする
106　003　こちらに向けていても　なにも見ているわけではない
112　031　まっすぐこちらを見ながらおまえは何も見ていない
146　025　こちらを向いて光りはじめたので
150　079　こちらも七月一日だというのにストーヴをつけたりしました。

こっか　国家
124　004　仲間も涙も校歌も国家も売り足りないが
173　012　荒れ狂う国家の群集の影が

こっきょう　国境
088　016　見えない国境をつくっているか
101　025　どこかの国境を守るためではない
101　058　ぼくの行手ですべての国境がとざされ
142　038　殺人的な電流装置で閉された国境をやすやす越え
184　021　人と人は人権や国境を越えて

ごっこ

050　016　活字の置き換えや神様ごっこーー

コツコツと
146　043　うしろからコツコツと近づいてくる

こっそり
051　022　あとでこっそり眼を覚ますことだ、
172　026　こっそり悪魔に奉仕することだ

ごった返す
166　022　ごった返す店内を物色して歩きながら

こっち
051　036　こっちを見凝めている鍵穴を必死に覗きかえす
128　085　こっちの星が落ちていく
141　009　躓いていたら、縄が切れて奈落におっこっちちゃったのよ……

こっちょう　骨頂
188　057　昭和の御代に死ぬなんて、愚の骨頂。

コップ
152　010　コップに落下しすぐに消え

こてんてきな　古典的な
124　025　他の一人は　古典的な社会復帰者として

ことがら　事柄
150　008　極めて小さな事柄にもいたましいほどの注意と努力を払ってゐた。
150　022　記憶の中で見逃していたさまざまな事柄に気づかないわけにはいかない。

ごとき
028　059　葡萄の木の影のごときタイプが無数繁茂する
113　004　（嵐のごとき拍手）
113　006　拍手と嵐のごとき拍手しか
113　009　拍手から嵐のごとき拍手へと

ごとく
007　001　ジャンクの帆が蝙蝠のごとく羽博いて　ランプの虹がひろがる
008　004　もある　向日葵のごとく旗は燃え　荒地に咲きそめた
040　018　アヘロンの岸にさまよう亡霊のごとく
041　039　考へあるもののやうに　また無意識のごとく
140　014　あってなきがごとく
140　015　なくてあるがごとく

こどく　孤独
025　006　孤独な魚が住み
041　074　あなたは孤独の中からも追ひたてられさうになる
047　004　孤独な生きもののため
054　093　そうだ　これで僕の孤独も充分というものだ
056　015　孤独な彼の横顔は
058　025　灰いろの建物のしたを孤独な靴音が
058　027　その孤独のこだまのなかには淋しさの本質がちょっぴりあります
060　013　孤独な道を歩いてくる男だけが
061　152　孤独な橋上の人よ、
064　015　こんな孤独な都会にいて、
065　002　町があった。孤独な
085　003　きみの孤独をうつす鏡は
093　023　孤独な青年の体臭に
101　049　ありあまる孤独を
119　009　孤独の骨は
145　012　孤独な高い壁の前で
145　018　孤独の壁をすこしずつ溶解しながら
169　020　孤独の帆をたらしたまま
172　025　血に飢えた孤独を増殖させて
176　021　真珠貝の孤独は
192　002　どんな現象も起りようがなく、わたくしの影は、孤独とはいえなくなっているから、

ごとく　如く
026　024　悼ましい毒の如く洩れ
033　011　殺気だけが風の如く起ち上り
045　015　たとへば自らも垂直なる真空の如くありたい
046　047　また午後の廊下の如くあなたの躰を影にするだらう

こどくな　孤独な
025　006　孤独な魚が住み
047　004　孤独な生きもののため
056　015　孤独な彼の横顔は
058　025　灰いろの建物のしたを孤独な靴音が
060　013　孤独な道を歩いてくる男だけが
061　152　孤独な橋上の人よ、
064　015　こんな孤独な都会にいて、
065　002　町があった。孤独な
093　023　孤独な青年の体臭に
145　012　孤独な高い壁の前で

ことし　今年

058　045　どうやら私は今年も結婚しそこねたようです
068　028　（今年の夏もこれっきり）
100　058　ぼくは今年の夏を知った
148　006　今年の冬には、
160　002　いやに透明に見えてきた　今年の冬
160　009　そんな今年の冬も終りに近い　ある日の真夜中
169　023　今年の小さな波じゃネ
180　053　今年の波はどうあれ

ことのほか
148　038　夜はことのほか短かい。
181　007　ことのほかしんみり
182　003　ことのほか躯の工合がよくない
183　006　ことのほか色鮮やかで明るく

ことば
046　040　行方の知れぬ風のことばにいつまでも微笑を浮べてゐようとは
070　009　あさましい祈りのことばを口にし、
101　004　無力な太陽のことばで　ぼくにはわかるのだ

ことば　言葉
023　017　風の運んでくるその言葉が見えない
027　018　弾かれた言葉の行方を覚る
043　007　いくつもの乾いた言葉にそって
042　014　神よ　御身の言葉のまにまに
050　022　埋葬の日は、言葉もなく
052　022　片言まじりの甘美な言葉で
054　010　惜しみない賞讃の言葉をおくった
054　162　そして至高の言葉を携えた使者が
069　036　それっきり言葉は絶えた
077　007　（聖なる言葉や
080　012　消えてしまう泡が唯一の言葉だから
081　010　呪いの言葉を吐きつづけた
088　070　とおくまで草木や花のやさしい言葉で
090　023　言葉を探すのはしばらくやめよう
107　017　ぼくが言葉を失えば
115　005　お別れの言葉はいらない
125　012　弾丸よ　言葉よ　錠剤よ
126　014　そんなに遠くまで人間の言葉をとどけにいく
135　004　言葉なき存在となれ
142　043　自己の経験をまっすぐ語るあなたの言葉は
150　041　今にしておもえば、真実を衝いた薄気味わるい言葉である。
156　002　愛という言葉は

156　020　言葉の純度は低く
156　025　愛という言葉は身につかぬのである
156　029　愛という言葉は
164　011　人の心を盗むあなたの言葉は
165　024　どんな言葉の交換もなかった
165　030　言葉の理解のとどかぬところで
170　002　死んだ言葉がちらばっていて
180　027　の言葉を私はどんな方法でも消せればよかっただけのことー。
180　028　どのみち言葉は
180　038　言葉はめぐりあうものかたずねあうものかという
189　015　言葉はすべて最初から

こども　子供
052　012　影になったあなたの子供らしい微笑が
061　042　子供をつれて一日だけの安息に、
083　003　さっきまで子供たちが戸口から顔を出していたのに
099　011　今ではーーー人の妹は三人の子供の
099　012　もう一人の妹は一人の子供の母になった
126　012　月のうえをふわふわ歩く宇宙の子供を見ようとして
148　036　結局、めいめいの職歴と子供を何人作ったかということにつきていた。
174　014　「子供っぽさ」が抜けないという共通点こそ、最大の障碍だったのだろう。
175　014　別々の思いにふける子供のように
184　012　日本人妻の間にできた子供である
188　066　子供の自殺は、アメリカでも、

こどもっぽさ　子供っぽさ
174　014　「子供っぽさ」が抜けないという共通点こそ、最大の障碍だったのだろう。

こともなげ　事もなげ
051　010　「黄色さ」医師の事もなげな宣告。

ことり　小鳥
005　029　あ　逃げた小鳥が月にゐた
013　004　枝に小鳥はゐない
028　048　小鳥や草の声とは無関係である
036　025　頭髪に巣をかける喧燥な小鳥たち
053　030　みんな仲よく小鳥のように一つの枝でおやすみなさい
058　041　小鳥がとまっていることも見のがせません
082　015　すると小鳥がたそがれの窓に墜ちてくる
107　004　小鳥や空だけでなく

ごねん　五年
100　047　それから五年たってである

148　003　三十五年ぶりにたよりをよこした。

このごろ　此頃
147　013　此頃ではてんで死のことなど考えやしない
188　043　此頃では、人の顔さえ見れば、誰彼となく病気の話で、

このは　木の葉
053　063　木の葉になったわたしには
059　024　木の葉のようにも
134　010　木の葉のように散っていった若者たち
172　002　木の葉のように舞い落ち

このまぬ　好まぬ
036　013　これらの樹木はあまり好まぬ

このみ　木の実
101　044　沈黙よりも固い無名の木の実がはじけとび

この世
054　017　この世から姿を消してしまったのだ
059　015　この世のそとでも離れがたいことを信じよう
062　014　わたしとあなたを距てるこの世のどんな約束も
062　024　わたしはこの世ならぬ冷たい喜びに慄えている
084　037　この世のものでない弦と弓は
140　013　この世のすべてに変りはない
150　046　「誇り得るもの」を失ったとさとったとき、彼はこの世から転向していったのだ。
161　011　それがこの世の習慣である
165　016　自分をこの世に存在させていることで
165　027　父は黙ってこの世から去っていった
167　068　泣きながらこの世に産れた人の子にとって
168　015　この世を経めぐるいのちの物質よ
173　008　この世の中　どこまで腐っていくか」
173　039　なのに　この世はさっぱりよくならない
178　010　この世の外で呟くように
187　021　この世から立去る

こばしる　小走る
133　012　背をかがめて小走る群集のなか

こはびこらせ
142　097　非合理に機能する官僚的権威主義を全面的こはびこらせながら

こばみ　拒み
077　030　あらゆる神の報酬を拒み

こひつじ　小羊
062　038　ただひとり群れをはなれた小羊が
106　041　かれは屠所にひかれる小羊であってはならない　たとえその皮を剥がれても

ごひゃくねん　五百年
090　013　巨木の五百年は美しくない

コピー
188　065　そのうちにコピーを送りましょう。
188　068　そのコピーを読んだ記憶は、全くない。

こぶ　瘤
162　006　背中の瘤が

ごふう　碁風
174　021　おっとりしていて、どこが強いのかわからないような碁風だった。

こふうな　古風な
007　006　古風な鐘は藍をにじませて鳴る　曇る　動かない土絵具のカンヴ
047　014　古風な銀の縁をつけて　いつもこの水が動かぬことを……

こぶね　小舟
074　025　担架をのせた小舟は
094　008　杭につかまり宙にもがく小舟
094　021　ぼくの河口はひといきに岸辺やテントや小舟を吐きだそう
181　022　一艘の小舟がたゆたっている

ごふんかん　五分間
106　012　永遠プラス五分間を　「早く早く」とせき立てている

こぼれて
039　007　噴きこぼれては
127　015　村の思想の種子がこぼれて、

こぼれる
133　028　数知れぬ花が袖にこぼれるところまで。

ごほんの　五本の
070　051　あなたの五本の指はどんな兇器よりも残忍で、

（千葉大学学位申請論文）
日本現代詩運動における「荒地」派の比較文学的研究

資料 II　コンコーダンス－鮎川信夫全詩－

II－2

目次：詩作品番号表 ..... i － vi

コンコーダンス　こまーなこ ..... 366－715

詩作品番号

番号	詩作品タイトル	
001	黄昏	
002	凍眠	
003	扉の中	
004	蝋燭の中―夜に	
005	遊園地区	
006	花－「亜細亜」の一部	
007	河－「亜細亜」の一部	
008	頌－「亜細亜」の一部	
009	樹	
010	少年のスピイド	
011	春の頌歌	
012	ギリシャの日傘	
013	夏の Souvenir	
014	楽器の世界	
015	室内	(窓は明るい海の水で)
016	田園の祭礼	
017	のどかな樹のある沙漠	
018	夢見る室内	
019	夢の使用時間	
020	名刺	
021	唄	
022	白い像	
023	カタストロフ	
024	睡眠	
025	非望の自転	
026	魅入られた街	
027	椅子	(影をゆらせて)
028	雑音の形態	
029	室内	(時空の瓶の底に)
030	黄昏の椅子	
031	十二月の椅子	
032	椅子	(ドアはなかば開いたまま)

番号	詩作品タイトル	
033	形相	（一本の茎は清浄な水を欲する）
034	雨をまつ椅子	
035	雨の歌	
036	形相	（おそらくは実らぬであらう樹木）
037	形相	（ドアの外では）
038	陰翳	
039	泉の変貌（明日は恋なき者に恋あれ　明日は恋ある者にも恋あれ　詩人）	
040	形相	（髪は散る）
041	囲繞地	
042	神（こころ）	（庭は荒れて　影もなく）
043	神（こころ）	（石で葺かれた屋根をでて）
044	神々	
045	雨に作られし家	
046	橋上の人	（高い欄干に肘をつき）
047	耐えがたい二重	
048	トルソについて	
049	日の暮	
050	死んだ男	
051	病院船室	
052	姉さんごめんよ	
053	落葉	
054	アメリカ	
055	繋船ホテルの朝の歌	
056	風景	
057	１９４８年	
058	白痴	
059	秋のオード	
060	行人	
061	橋上の人	（彼方の岸をのぞみながら）
062	あなたの死を超えて	
063	淋しき二重	
064	裏町にて	
065	夜と沈黙について	
066	あけてください、どうか	

番号	詩作品タイトル
067	「なぜ？」について
068	鴎　または夏の手紙
069	天国の話
070	夜の終り
071	今日のなかの昨日と明日
072	競馬場にて
073	海上の墓
074	サイゴンにて
075	遥かなるブイ
076	なぜぼくの手が
077	神の兵士
078	出港
079	消えゆく水平線
080	水平線について
081	港外
082	波と雲と少女のオード
083	夕陽
084	木枯の町にて
085	ある男の風景
086	夏過ぎて
087	可愛いいペニィ
088	小さいマリの歌
089	冬物語
090	紫壇
091	この街に生れて
092	この涙は苦い
093	深いふかい眠り
094	シンデンの海
095	父の死
096	「バルセロナ」
097	Le Cirque
098	明るいキャフェーの椅子
099	逃げるボールを追って
100	もしも　明日があるなら

番号	詩作品タイトル
101	兵士の歌
102	喪心のうた
103	イシュメエル　「白鯨」より
104	秋思
105	最も暗い月、三月
106	ある記念写真から
107	さざなみは海を渡っても
108	夏を送る即興詩
109	落葉樹の思考
110	もう風を孕むこともない
111	路上のたましい
112	戦友
113	世界は誰のものか
114	ある冬のはじめに
115	別離のうた
116	吐く息の
117	苦しさにたえかねて
118	呪婚歌
119	川岸にて
120	春の感触
121	夏への挨拶
122	冷たい雨
123	新年に
124	異聞
125	生き残った者のためのエピタフ
126	アポロ１１号に贈る詞
127	途上　　（「路上のたましい」改題）
128	新聞横丁
129	顔のない夢
130	首の桶
131	帰心
132	閉ざすうた
133	愛なき者の走法
134	催涙広場

番号	詩作品タイトル
135	詩法
136	My United Red Army
137	生証人
138	どくろの目に
139	宿恋行
140	地平線が消えた
141	同行者
142	Solzhenitsyn
143	醜のヴィジョン
144	女尊の崇り
145	暗い夜への信号
146	寝ていた男
147	死について
148	消息
149	波間の郷愁
150	私信
151	Who I Am
152	こんな夜には
153	撃刀の歌
154	帰館
155	理想の良人
156	愛
157	秋の祈り
158	詩がきみを
159	夢ちがい
160	必敗者
161	いまが苦しいなら
162	僊術
163	跳躍へのレッスン
164	ミューズに
165	父
166	ひょっとすると
167	廃屋にて
168	水のうた

番号	詩作品タイトル	
169	形相	（繃帯にふれたあとの）
170	ある朝の散歩で	
171	幸福論	
172	冬のファントム	
173	独白（一九七九年十二月某夜）	
174	黒田三郎	
175	病床の友へ	
176	風	
177	影	
178	切願	
179	室内楽	
180	青い手紙－「形相異聞」	
181	嵐が来る－Nカントリー・クラブの休憩室で	
182	老年について	
183	駅前通りを抜けて	
184	家族のフロンティア	
185	ジョン・レノンの死に	
186	時間論	
187	殉教	
188	私信－桑原英夫に	
189	000年	
190	山を想う	
191	夕日のつぶやき	
192	海の変化	
193	風景論	

こま　独楽
005　011　独楽を廻せば

こまく　鼓膜
027　016　わたしの鼓膜はへんである

ゴミ
160　056　その日は夜どおし起きており　朝の四時にゴミを捨てに廊下へ出て

こみち　小径
099　006　もう一人の妹は眠りながら小径を歩いている

こみち　小道
183　026　駅前通りから暗い小道に曲ったところで

コミュニケーション
164　008　……コミュニケーションの失敗だ

ゴム
124　009　他方がそれを買う（ゴムの手袋をはめて）

こむすめ　小娘
181　011　十八の小娘を相手に

こめかみ
127　020　こめかみの痛みはつづく

ごめんだ
121　006　陸のウニはもうごめんだと逃げだそう
192　019　助かった！　まだ死にたくはない。眼は真珠に、骨は珊瑚になったとかいう、五尋の海底の父になるなんてごめんだ

コメント
185　004　何のコメントもなかったが

ごめんなさい
124　018　ごめんなさい
155　022　ごめんなさいとかそれじゃとか呟きながら

こもりうた　子守唄
120　018　子守唄のよう

こやす

112　044　眠りながら腹をこやす王国を夢みているうれしいはらからたち

こらえ
061　018　いま、あなたは嘔気をこらえ、
106　011　外部の世界をうかがい　いまもじっと「時」をこらえ
167　060　こらえきれない一雫が光っている

こらえきれない
167　060　こらえきれない一雫が光っている

こりずに　懲りずに
106　028　懲りずに実験してみるべきだったろう　一歩戸外に出ると女たちの笑いで

こりつ　孤立
100　025　離反につづいて孤立がはじまった
142　035　孤立した家族の住むアパートの一室で

こりつした　孤立した
142　035　孤立した家族の住むアパートの一室で

ゴルフ
181　017　ふと「もうゴルフはやめよう」と

ころ　頃
003　007　杳い寒帯から運ばれたミルクに溺れる頃
017　038　もう繃帯もまにあはない頃になって
059　019　秋風がたつ頃になると
108　034　落ちてくる頃。
113　005　あの頃はよかった
113　040　あの頃はよかった
128　057　桜の咲く頃　また会いましょう
147　013　此頃ではてんで死のことなど考えやしない
150　021　きみから送られてきたその頃の六冊の雑誌を見ていると、
150　077　まさか、「荒地」が今頃になってアメリカから送られてくるとは。
166　011　いのちもいらない初年兵の頃には
188　043　此頃では、人の顔さえ見れば、誰彼となく病気の話で、
188　053　あの頃は若く、青い顔で咳をしていたが、

ころがされ　転がされ
094　014　背をやく熱い塩のシートに転がされ

ころがす
068　023　太陽の下で　空壜をころがすように

ころがり　転がり
005　008　明るいシャボンの中から転がり出た
034　018　そこへも一個の石が転がり

ころがりでた　転がり出た
005　008　明るいシャボンの中から転がり出た

ころして
054　110　詩人は欠伸をかみころして立上る
066　016　年老いた母親はいきをころして坐り

ころして　殺して
055　037　おれたちのベッドのなかで締め殺してしまったのだろうか
070　053　わたしを殺してどうしようというの。
138　004　何度殺しても

ころしや　殺し屋

ころす　殺す
152　018　あくまで一人の殺し屋の

ごろっぱい　五、六杯
166　014　五、六杯のコーヒーを飲み

ごろりと
182　015　ごろりと草の上に横になればよかった

コロンブス
054　142　反コロンブスはアメリカを発見せず

こわいめ　怖い目
180　019　夢のなかではずいぶん怖い目にあうものだが

こわかった
146　057　なんだかとてもこわかった……

こわかった　怖かった
017　032　怖かったと仏陀の一人が語ったとき

こわしてゆく　壊してゆく
037　003　物のかたちを壊してゆく

こわれた　壊れた
026　014　壊れた船体のやうに

こわれた　毀れた
173　045　スプリングの毀れたベッドに身を投げて

こん　紺
099　001　紺の半ズボンからほそい脛をのばし

コンクリイト
009　001　コンクリイトの屋根の上

コンクリート
114　003　真夏のコンクリートの壁にはりついた
129　006　コンクリートの林から

こんけつ　混血
184　011　アイルランドとスペインの混血の男と

こんこんと　滾滾と
182　027　滾滾とあふれている

こんしゅう　今週
072　055　これは今週のビッグ・ニューズだ

こんじょう　今生
159　007　今生の別れかと心はさわいだが

こんじょう　根性
124　010　相場師の根性は

こんしんかい　懇親会
186　027　廿六年前に広島で撮った写真を、懇親会の席上で相良君から見せられてね

こんせいき　今世紀
068　009　今世紀最大の詩人が

こんせき　痕跡
054　019　君のなやましい顔の痕跡をとどめて
058　031　光りの痕跡が小さくなってゆくようです
160　071　アメリカ社会における成功の蔭にある失敗のさまざまな痕跡が

こんちゅう　昆虫
004　003　炎は昆虫のやうに翅をならす
005　035　昆虫は死んだ

こんど　今度
150　055　こんな創作を今度載せたら発禁にするぞ、と検閲係から脅かされた。
186　020　それで今度の西下の印象は？

こんとん　混沌
061　140　眼下の大いなる混沌のむかしに
072　039　この一瞬の混沌が

こんなん　困難
147　005　生きることに困難を覚えていた青年時代だったら
147　012　生きることに怖れも困難も感じない髪の毛の薄い男になっていた
164　016　……ぼくの一生は詩の困難でやや暗い

こんにち　今日
048　011　昨日も今日も　疲れた裸のままでいると
050　018　いつも季節は秋だった、昨日も今日も、
056　007　今日も都会の窓に灯がともり
056　019　明日もなければ今日もない
057　040　今日も
058　048　今日の出来事を
061　099　「今日も太陽が輝いているね
064　003　ーー今日は今日、と通行人が呟いた、
064　030　ーー今日は今日、と街灯が答えた。
071　005　今日のなかの明日
071　026　今日のなかの昨日
071　044　今日のなかの昨日と明日
080　016　今日は希望　この痛みの傷口を
123　005　今日は北風が吹いているが
142　074　「今日の西側の勇気の基準によれば
144　009　昨日の淵から出た今日の瀬は早く
145　021　膝の上の猫を大事にしてあげなさいと今日の声は忠告していた
150　068　今日、我々は一つの都市、
183　019　今日の出来高と終値を前にして
183　029　平穏無事の今日一日の。
185　018　それが、今日の真実だとすれば
188　055　（……今日も打振る日章旗……）

こんばん　今晩
003　004　今晩十二時に出帆します

コンベンション
106　009　悪い空気のなか　鳥類のコンベンションが重んじられる

こんらんした　混乱した
185　020　どうせ、不均合いで混乱した世界だから

ご無沙汰
188　003　「また、ご無沙汰しました。

ゴーゴーゴー
095　018　ゴーゴーゴーとぼくの頭上を通過していった

コース
072　045　直線コース

コーネリアス
160　013　コーネリアスという無名の男の　涙が出るほどおかしな物語
160　017　コーネリアスは宝くじで大当りし
160　031　ずっこけたコーネリアスは
160　035　感傷に駆られてとはいえ　コーネリアスには
160　040　コーネリアスは濃霧の街を歩いて帰路につく
160　053　それから物語のコーネリアスがどうなったかはわからない
160　075　われわれのコーネリアスは　いまどこにいるのだろう？
160　078　われわれのコーネリアスはどこまで歩いていけるだろう？

コーヒー
058　051　喫茶店でコーヒーをのみ
058　053　一杯のコーヒーをまえにして考えようと思うのです
122　001　コーヒー・カップには
124　033　つめたくなったコーヒー・カップの岸辺に
166　014　五、六杯のコーヒーを飲み
173　005　ちょっとさびしいコーヒーブレーク
179　007　コーヒーとシガーの

コーヒー・カップ
122　001　コーヒー・カップには
124　033　つめたくなったコーヒー・カップの岸辺に

こーひーかっぷ　珈琲カップ
114　010　冷たくなった珈琲カップのさざ波に……

コーヒーブレーク
173　005　ちょっとさびしいコーヒーブレーク

ゴール
072　028　ゴールまで二分三十秒の興奮
072　050　ゆっくりとゴールへ飛びこむ馬をキャッチした

さ　差
142　039　言語の障碍　人種の差別を超えて
157　008　もう栄光の差なんてありません
186　033　一種の時間差攻撃ですね？

さあ
061　027　さあゆこう、船着場へーー
061　035　さあゆきましょう、船着場へ……
064　022　ーーさあ、あかりを消せ！
083　011　さあ丘をのぼるとしよう
088　058　さあキスしよう
088　067　さあゆこう
088　077　さあ歌ってゆこう
088　084　さあ歌ってゆこう
112　005　おれを見るな　さあ握手

サアカス
097　012　サアカスでブランコをする男は、

さいあく　最悪
061　113　最悪のものを選んでしまうことには

ざいあく　罪悪
167　032　いかなる罪悪も存在しないかのようだが

さいき　再起
174　016　再起はおぼつかないという報らせを受けてから、

さいぎ　猜疑
150　018　自分のことではないかと猜疑したりする者もあった。

さいきんごう　最近号
160　011　たまたま手にしたパーチザン・レヴュウ誌の最近号で

さいげつ　歳月

105　013　この歳月をよしとしよう、三月。
153　002　すべての歳月を

さいご　最後
010　018　やがて最後の　たそがれ　がくる
054　107　ちらりと最後のながしめを与える
065　034　墜ちゆく星の、最後のまたたきが
128　089　どうした最後のひと光り
148　047　数を調べる最後の点呼だった。
150　045　最後の拠りどころは生理しかなく、
158　029　断念の最後の対象だった
160　060　最後は叔母のクララが遺体をもらいさげていった
162　017　かれ自身の最後の王国であるから
167　078　せめて最後の呼気だけはきれいに
174　001　きみからの最後の便りを受けとったのは
174　010　最後にきみはさりげなく「声を聞かせてくれてありがとう」と言って、電話を切った。
178　009　あれが最後の挨拶になったと
179　023　そして最後の契約にサインするように
189　017　最後の友を失い
192　022　最後の運をたよりに走り出していたのは、是非もなかったが、

さいこうに　最高に
113　039　最高に人間的だった同志スターリン

さいごの　最後の
010　018　やがて最後の　たそがれ　がくる
054　107　ちらりと最後のながしめを与える
065　034　墜ちゆく星の、最後のまたたきが
128　089　どうした最後のひと光り
148　047　数を調べる最後の点呼だった。
150　045　最後の拠りどころは生理しかなく、
158　029　断念の最後の対象だった
162　017　かれ自身の最後の王国であるから
167　078　せめて最後の呼気だけはきれいに
174　001　きみからの最後の便りを受けとったのは
178　009　あれが最後の挨拶になったと
179　023　そして最後の契約にサインするように
189　017　最後の友を失い
192　022　最後の運をたよりに走り出していたのは、是非もなかったが、

サイゴン
074　008　これがぼくらのサイゴンだった

さいこんした　再婚した
184　006　タイ生れの中国人の医者と再婚した

さいしょの　最初の
054　039　だが僕は最初の路地で心弱くもふりかえる
122　004　最初の冷たい雨がきた

さいた　咲いた
009　003　鉄砲百合が咲いたといふニュウスで
127　017　タンポポのように咲いたこともあったか。

さいた　裂いた
167　010　薄絹を裂いた巻雲を浮べて

さいだいの　最大の
068　009　今世紀最大の詩人が
174　014　「子供っぽさ」が抜けないという共通点こそ、最大の障碍だったのだろう。
185　019　最大のニュースにちがいない

さいている　咲いてゐる
003　002　華の咲いてゐるテーブル

さいてん　祭典
017　004　樹の上では祭典が始められ

さいなん　災難
142　089　災厄を招くことはない　他人の災難に

さいにゅういん　再入院
174　015　きみが再入院して

さいのう　才能
150　064　彼の才能は枯渇を強いられたのである。

さいふ　財布
061　034　空の財布の身を投げに、

さいまつしょうせん　歳末商戦
183　003　歳末商戦たけなわの店頭を

ざいもく　材木
058　002　瓦礫のうえに材木が組立てられ

ざいりょう　材料
054　061　単により高尚な国民　結社　人間の材料にすぎないと

サイレン
016　006　キウリ畑でサイレンが鳴り

サインする
179　023　そして最後の契約にサインするように

さか　坂
117　012　記憶の坂道をくだっていく
145　005　芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右
188　042　人生の下り坂にかかったときからである。

さかい
078　017　ああ　夜昼のさかいなく

さかい　境い
182　013　死の境いを恐れず突進し

さかさ　逆さ
017　043　駈け出すと枝から逆さに墜落し

さかさまに
137　009　天地をさかさまにして

さがし　探し
085　008　消えやすいアリバイ探しの興味である

さがしたい
121　013　プライベートな場所をさがしたい

さがして
150　075　それにしても、きみがガレージで漬物をつける甕をさがしていたら、
186　054　ぼくは無意識のうちに隠れ場所をさがしている

さがす
070　042　ぼくは見えない出口をさがすように、
090　022　鳥や花をさがすように
160　005　忘れてはいけないことを　さがすような眼で

さがす　探す
090　023　言葉を探すのはしばらくやめよう

さかせた　咲かせた
109　003　花を咲かせた樹木が

さかな　魚
002　008　魚のやうに眠る日
008　016　金魚みたいにじっとして　水のつまったガラス鉢の中
025　006　孤独な魚が住み
053　057　永遠の星　花　鳥　樹　魚などの
065　006　ゆれる燈火と死魚の影があるばかりであった。
067　005　さっき波のうえをすべっていた魚が
067　011　一匹の魚をもつだろう
082　002　七月は空を泳ぎまわる魚
086　011　岸辺につかまって死んだ魚の
105　005　魚釣りには早すぎ、狩猟には遅すぎる三月。
121　010　赤い魚も釣ってみたい
132　004　木から樹へ　魚へ　胡蝶へ
149　001　しぶきをあげる人魚姫の
150　014　一匹の魚さへ住んでゐない沼に釣糸を垂らしてゐる影だけが生きてゐる……」
183　007　魚屋の呼声はえらく景気がいいけど
190　014　清流をさかのぼって幽谷に魚影を追い

さかなつり　魚釣り
105　005　魚釣りには早すぎ、狩猟には遅すぎる三月。

さかなや　魚屋
183　007　魚屋の呼声はえらく景気がいいけど

さかぬ　咲かぬ
036　002　おそらくは咲かぬであらう花花
036　019　おそらくは咲かぬであらう花花と

さかのぼって
101　019　いつわりの歴史をさかのぼって
190　014　清流をさかのぼって幽谷に魚影を追い

さかば　酒場
050　006　ぼくらは暗い酒場の椅子のうえで、
054　050　僕は毎晩のように酒場のテーブルを挟んで
058　012　むかし酒場で知りあった女が
096　002　太陽をえがく　酒場時代の
112　039　さびしい酒場の女たちを相手に
128　058　酒場を出た

148　012　新宿の同じ酒場の常連で、同じ雑誌の仲間だったが、
177　031　酒場はもうしまっており

さかばじだい　酒場時代
096　002　太陽をえがく　酒場時代の

さかまく
094　005　さかまく汐をどっとのみこむ河口

さがみ　相模
181　001　みはるかす相模の海に

さかみち　坂道
117　012　記憶の坂道をくだっていく

さからう
100　023　やがて　肉体の要求にさからう魂は

さがらくん　相良君
186　027　廿六年前に広島で撮った写真を、懇親会の席上で相良君から見せられてね

さがらへいはちろう　相良平八郎
186　019　杉本春生、相良平八郎に会ったよ

サカリ
008　008　罌粟の花が*サカリ*である　真珠の月もかくれてゐやう

さかり
183　010　さかりどきの雑踏は無秩序にみえるが

さかんなる
039　146　さかんなる風はたち

さかんに
124　002　さかんに売りまくった

さかんに　盛んに
003　009　盛んに蝋を焚く女のプロフイル

さか立てて
128　002　神経のアンテナを　さか立てて

さき

008　011　クビれてむらさき色になると　煙のつまったパイプを
055　028　折れた埠頭のさきは
078　020　救命具をつけた船のへさきは
112　023　いやいや働きにいった　ちいさきもののために
160　010　春のさきぶれの雷が遠くで鳴っていたが
162　011　おさきにと
181　002　うすむらさきの

さき　先
011　014　先づ首に巻いた蛇を外せ
057　038　黄ろい指先のシガレットの煙よ
073　026　毛脛を出したフランス人の水先案内は
128　024　「円の切上げより自由化が先」
145　022　行先をきめないで出発し到着したときに旅は終っていた
153　005　おそろしい刃先にむかい
166　019　という？先生の発言を今朝の新聞で読んでから
172　015　祖先から相続した恐怖で
174　023　「死後の世界」の明るさを先取りして
186　084　かすかにふるえる指先の煙草のけむりのように
188　008　歯も、先日、奥歯が一本、根が痛みはじめたので、
189　038　指先がフォークになかなか届こうとしない
192　023　七十米と行かぬうちに、白い明りの標識は消え、そこから先は真っ暗である。

さきそめた　咲きそめた
008　004　もある　向日葵のごとく旗は燃え　荒地に咲きそめた

さきどり　先取り
174　023　「死後の世界」の明るさを先取りして

さきぶれ
160　010　春のさきぶれの雷が遠くで鳴っていたが

さぎょう　作業
166　008　しんどい作業である

さく　咲く
007　012　空いちめん赤い花が咲く
128　057　桜の咲く頃　また会いましょう

さく　柵
041　021　錆びた鉄柵に凭れる小男の悲哀よ
072　008　やっと柵にとりついた人波の

さく　裂く
001　006　青い靄を裂く
070　007　みもだえさせ、ずたずたにひき裂く。

さくいてきな　作為的な
142　009　こうした　同じことだ　という作為的な留保がなされるかぎり

さくねん　昨年
015　013　昨年の唄であらうかもう見えない
180　025　ら……。貴方に判らなかろうと、もう少し付け足すと、昨年は形相の意味も知らなかったということ。私は「メ

さくひん　作品
090　016　どんな非人の作品なのか？
188　021　その中に「悲しむ老人」という作品があります。

さくら　桜
005　018　桜並木の向ふ側で燃えてゐる
128　057　桜の咲く頃　また会いましょう

さぐり
065　033　翼のなかにさぐりつづけた。
070　010　水死した処女の乳房をさぐりつづける。
070　044　はてしない壁を手さぐりして、

さぐりつづける
070　010　水死した処女の乳房をさぐりつづける。

さくれつする　炸裂する
061　020　炸裂する真昼の花火を夢みている。

さけ　鮭
057　042　文明のなまぐさい鮭は

さけ　酒
050　006　ぼくらは暗い酒場の椅子のうえで、
051　018　なまぐさい葡萄酒を口から喀き、
054　050　僕は毎晩のように酒場のテーブルを挟んで
054　105　死はいっそう強い酒にすぎぬだろう」
058　012　むかし酒場で知りあった女が
061　026　酒と女におさらばして、
096　002　太陽をえがく　酒場時代の
112　039　さびしい酒場の女たちを相手に
112　040　水が酒に　欲望がもっとたくさんの浪費にならないとこぼしている

128　058　酒場を出た
148　012　新宿の同じ酒場の常連で、同じ雑誌の仲間だったが、
158　015　酒杯をかたむける
177　031　酒場はもうしまっており
181　035　冷えた白ブドー酒と

さげて
053　015　わたしは大切に胸のうえにさげています
160　060　最後は叔母のクララが遺体をもらいさげていった

さけて　裂けて
009　002　黒いオルガンが裂けて

さけび　叫び
017　042　アタマのすべっこい仏陀が叫び
025　051　祈のない叫び声と
070　029　形のない魂の叫びまでしめあげてしまう。
082　013　声のない叫びは
104　006　傷ついた鳥や獣の叫びでいっぱいだった
146　032　けたたましく悲鳴をあげて叫びました
165　011　何度、声にならない叫びを上げたろう
191　015　海は一つの叫びに変れ

さけびごえ　叫び声
025　051　祈のない叫び声と

さけめ　裂け目
065　014　死せる魂に、大きな裂け目をつくり

さける　避ける
150　060　時代の風圧を避けるのにせい一ぱいで、

さけんだ　叫んだ
014　026　おお主よと叫んだかは考えてみたらいい

さけ目
073　020　大いなる積乱雲のさけ目をみつめた

ささえて　支へて
011　011　蒼い干枯びた心臓を支へて
032　010　それは確かにわたしを支へている
037　005　ほんのわずかに震へる根を支へてゐる
040　009　たゆみながら一つの扉が支へてゐる

ささえている　支へてゐる
037　005　ほんのわずかに震へる根を支へてゐる
040　009　たゆみながら一つの扉が支へてゐる

ささえら　支へら
023　007　不幸に支へられた白い肉体は
046　054　群青に支へられ　眼を彼岸へ投げながら

ささげて　捧げて
146　023　お祈りを捧げているところでした

ささげよう　捧げよう
128　012　紅バラを捧げよう

さざなみ
107　010　さざなみは海を渡っても

ささへている　支へている
032　010　それは確かにわたしを支へている

さざめき
001　012　星達のさざめきの蔭から

ささやかな
167　044　一行のためのささやかな詩が

ささやき
084　013　マリリン・モンロウのせつない性のささやきーー
172　023　雲のささやきに耳をすます

さされた
016　009　君らの機械にアブラがさされた

さざ波
114　010　冷たくなった珈琲カップのさざ波に……

さじ　匙
052　005　ひとりで牛乳を匙ですくって

さしこむ
063　012　窓からさしこむ月光のしたで

さしこんでくる
014　011　うすい陽の光が胃の腑へさしこんでくる

さしみ　刺身
186　079　宴席の大きな皿に盛られた海の幸、鯛や鮑の刺身も

さし込まれ
062　023　思い乱れたわたしの頭髪にさし込まれ

さす　刺す
165　010　刺すような視線をあびせて

さすらって
168　002　霧の海にさすらっていく

ざせき　坐席
041　079　坐席があなたを動けなくした

ざせき　座席
035　010　座席から

させつ　左折
145　005　芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右

さそわれ
154　007　悲しみの音色にさそわれ
192　005　遠くかすかな潮騒のひびきにさそわれ、海にむかってひき寄せられていくが、

さそわれ　誘われ
133　003　人間蛾は街の燈火に誘われる
168　008　はるかな雲に誘われ

さそわれる　誘われる
133　003　人間蛾は街の燈火に誘われる

サタン
026　027　サタンの翅を棄て

ざつおん　雑音
028　019　文明的なもろもろの雑音の性格により
028　068　そこにある雑音はまがりくねって
041　150　街の雑音はあなたの耳を不注意にした
179　012　街の雑音からはるかに遠く

さっか　作家
057　009　戦争ぎらいのドイツの作家が
113　034　行きづまった一人の作家が
142　056　異端者や地下の作家や哲学者を根絶やしにする

さっかく　錯覚
186　035　そんな錯覚もあるんですかね？

さっき　殺気
033　011　殺気だけが風の如く起ち上り

ざっし　雑誌
148　012　新宿の同じ酒場の常連で、同じ雑誌の仲間だったが、
150　021　きみから送られてきたその頃の六冊の雑誌を見ていると、
150　051　彼は我々の雑誌の創刊号に、玉の井の娼婦と客との交渉を扱った「泥沼」を書き、
150　073　きみから送られた昔の雑誌を手にして、なつかしい面影に出会い、
150　076　昔の雑誌が見つかったというのは、私にとって幸運でした。
160　066　かれの名は雑誌やアンソロジーでさえめったに見かけなくなる

さつじんてきな　殺人的な
142　038　殺人的な電流装置で閉された国境をやすやす越え

ザッツ・シー
146　033　「あの女だ！（ザッツ・シー）　早く掴まえて！（ゲット・ハー）」

さってゆく　去ってゆく
027　019　体温から去ってゆくひびきたち響たち
035　016　来るものと去ってゆくものが
080　011　立ち去ってゆく航跡には

さっと
045　002　さっと青い畳のうへに来た
066　029　さっと影のカーテンをひいたのは
181　030　さっと顔色を青くする

ざっとう　雑踏
183　010　さかりどきの雑踏は無秩序にみえるが

さっとうして　殺到して
072　005　せまい競馬場の入口に殺到してくる

さっぱり

146　037　出口がさっぱりわかりません
173　039　なのに　この世はさっぱりよくならない

さっぷうけい　殺風景
106　007　いくら厳粛な集まりでも　これはひどく殺風景だ

さと　里
139　007　さまよい疲れて歩いた道の幾千里
144　010　いさら波打つまぼろしの暗女の里は遠い
172　027　箱庭のような故里が

さとった
150　046　「誇り得るもの」を失ったとさとったとき、彼はこの世から転向していったのだ。

さとり　悟り
182　022　日月の長さは悟りだから

さばき
072　018　結局のところわれわれの期待も、かれらの手綱さばきで

さばきて　裁き手
161　012　たが　おのれの裁き手は

さばく　沙漠
017　001　ひろい沙漠にはのどかな樹が
017　008　怒ってゐる沙漠に
017　026　いかんよと沙漠から声がしたら
017　029　沙漠の果から灰が見えなくなり
017　036　沙漠の唄が樹の上でも流行し
017　044　はじめて沙漠が哄笑したので
025　015　沙漠の舌をぬらし

さばく　砂漠
008　012　すてて　砂漠へ逃げてしまった　やがて新らしい靴の
015　020　白い砂漠の上に住んでゐる
039　108　あなたの砂漠は油の匂がする
096　018　あの瞑想の闇のコアには生きている砂漠があるんだ
148　048　それから、少年の日のように月の砂漠へ出発した。

さびしい
086　006　さびしい笑顔をのこして女は去った
096　011　きみもぼくも疲れた　さびしい旅だった
112　039　さびしい酒場の女たちを相手に

170　012　さびしい男の朝の独白）
173　005　ちょっとさびしいコーヒーブレーク
177　010　きみはさびしい広場にいた

さびしい　寂しい
061　176　寂しい父よ、
091　010　劇場やホテルのロビイに立っている寂しい人影からうまれ

さびしく
115　010　一千年の別離もさびしくはない
127　024　ときに男をさびしくさせる

さびた　錆びた
015　005　錆びたピンで留められ
041　021　錆びた鉄柵に凭れる小男の悲哀よ
085　025　インクや涙や食塩で錆びたりしない
167　061　錆びた針金の蔦におおわれて

さびたり　錆びたり
085　025　インクや涙や食塩で錆びたりしない

さびて　錆びて
099　009　……開くこともなく錆びてしまった鉄の門
148　025　ぼくらの骨は錆びていったのだろう。

さびれた
073　005　さびれた海水浴場の岸壁にぶつかって
091　002　さびれた国道につづく町工場の

サファイヤ
005　019　掌ほどのサファイヤがある

さへぎり
046　046　いくつもの扉のやうに行手をさへぎり

さべつ　差別
142　039　言語の障碍　人種の差別を超えて

さほう　作法
124　017　礼儀作法にかなわなかったら
158　018　それがきみの作法だった

さま

012　007　雲のアルバムにはさまれた
040　018　アヘロンの岸にさまよう亡霊のごとく
042　009　すさまじい寒さが吹きつけてくる
053　008　黄ろい髪飾だけがふわふわと蝶のように宙にさまよっているのです
054　029　Mよ　都会の胃袋をさまよいながら君が呟いていたことを……
061　187　あてもなく街をさまよいながら、
062　009　いまでも空中をさまよっている姉さん！
064　023　ふたつの亡霊がさまよう、
066　003　黒犬があてもなくさまよっていった。
070　009　あさましい祈りのことばを口にし、
101　042　死霊となってさまよう兵士たちよ
103　007　さまよう素足をもち
112　036　あさましい利害関係のなかでたたかいながら
121　004　天気は神さまに　世界は新聞に
124　036　無人の巷をさまよう
137　009　天地をさかさまにして
137　010　入日のさまを覗き見してきたのだ
139　007　さまよい疲れて歩いた道の幾千里
143　012　岩床につくばうあさましさを思う……
143　018　みじめであさましい生きた心よ……
149　015　そのさまでよい
150　022　記憶の中で見逃していたさまざまな事柄に気づかないわけにはいかない。
151　038　愛を求めてさまよい
154　005　思い思いにさまよう
160　071　アメリカ社会における成功の蔭にある失敗のさまざまな痕跡が
163　003　迷路をさまよったあげくに
165　007　わたくしにはあさましく映っていて
170　008　ホテルの部屋から戸外へとさまよい出た
186　075　時間のさまざまな変形態にすぎぬ）

さま　様
017　040　なむ天にましますキリスト様よ
028　015　工場の透明な模様の中に編まれ
050　016　活字の置き換えや神様ごっこーー
051　020　神様をだます時が来た。
069　034　神様とおっしゃるひとが住んでいたんだって
100　061　ペイヴメントには水玉模様の少女があふれ
174　009　きみは意外に元気な様子で近況を語ってくれ、心暖まる十五分か二十分であった。
188　047　公害を憂えたり、伝統の喪われていくのを嘆くのと同様、

さまざまな
150　022　記憶の中で見逃していたさまざまな事柄に気づかないわけにはいかない。
160　071　アメリカ社会における成功の蔭にある失敗のさまざまな痕跡が

186　075　時間のさまざまな変形態にすぎぬ)

さます　覚ます
036　012　おれの睡眠を呼び覚ます
051　022　あとでこっそり眼を覚ますことだ、

さまよい
054　029　Mよ　都会の胃袋をさまよいながら君が呟いていたことを……
061　187　あてもなく街をさまよいながら、
139　007　さまよい疲れて歩いた道の幾千里
151　038　愛を求めてさまよい
170　008　ホテルの部屋から戸外へとさまよい出た

さまよう
040　018　アヘロンの岸にさまよう亡霊のごとく
064　023　ふたつの亡霊がさまよう、
101　042　死霊となってさまよう兵士たちよ
103　007　さまよう素足をもち
124　036　無人の巷をさまよう
154　005　思い思いにさまよう

さまよった
163　003　迷路をさまよったあげくに

さまよって
053　008　黄ろい髪飾だけがふわふわと蝶のように宙にさまよっているのです
062　009　いまでも空中をさまよっている姉さん！
066　003　黒犬があてもなくさまよっていった。

さみしい　淋しい
002　004　（落葉は降りしきる　あゝ淋しい曲を聞いた）
039　078　淋しいものに違ひない
052　025　誰もいない淋しい部屋を夢想する
053　054　淋しいわたしの足跡は落葉に埋って見えません
056　003　そして彼の背中のように淋しい風景がそこにある
059　013　淋しい睫毛と
062　007　淋しい飛行の夢だけだ
064　021　ーーとても淋しいわ、
075　001　淋しいブイは
075　016　淋しいブイよ
095　015　誰だって僕のように淋しい夜道を走るだろう
148　027　背中に淋しい影を宿し、
150　048　生理以外に在り得ないとは、ずいぶん淋しい話である。

さみしがっていた　淋しがってゐた
038　030　屋根のみを叩いてはひとり淋しがってゐた

さみしさ　淋しさ
042　003　あなたの淋しさは
050　019　「淋しさの中に落葉がふる」
058　027　その孤独のこだまのなかには淋しさの本質がちょっぴりあります
063　022　広大な淋しさのひろがりに
072　070　この淋しさの波紋
098　013　誰のものでもない淋しさが
101　052　榴散弾のようにふりそそぐ淋しさに耐えてゆこう

さむい
069　014　暗くて　さむい

さむい　寒い
013　025　ネムの木は寒いよ諸君
033　007　寒い廊下をわたってきた
039　100　木と木の間の寒い廊下に佇んで
041　041　夜どほし歌ってゐるな　寒い眩暈のなかで
046　055　あなたはやはり寒いのか
053　025　こんなに寒い墓地なのに
105　007　着るには暖かすぎ、脱ぐにはまだ寒い三月、
109　006　黄昏の寒い灰色の
167　006　春というにはまだ寒いが

さむさ　寒さ
027　011　そちらの方から寒さが吹きつけてくる
041　035　寒さが体を凍らせるまで
042　009　すさまじい寒さが吹きつけてくる
054　035　行方の知れぬ風の寒さに身ぶるいするのだ
061　172　寒さに震えながら、
065　011　あった。寒さにふるえながら
088　026　椅子のうえで寒さにふるえているぼくの手足を
101　060　きびしい寒さがしみとおり
177　019　寒さに耐えているものよ

さむざむ　寒々
030　024　光りは堅い金属のやうに寒々として

サムライ
181　012　サムライの真似をした

さめた
069　027　そこには　さめたスープをまえにして
142　046　悪い夢からさめた人のように首をふるのである

さめた　覚めた
014　003　頭の大きな楽器が目覚めたらしい
020　005　眼が覚めた
041　017　不図　目覚めたときは

さめて
039　120　静かに愁ひをなぐさめてくれる
146　058　眼がさめてみると

さゆうに　左右に
047　003　左右に拡げる黒い蔭！　二重のドア！

さよく　左翼
142　006　　左翼　に対する架空の均衡をつくり出すために

さよなら
025　044　さよならさよなら長い午睡の
025　046　さよなら
050　027　「さよなら、太陽も海も信ずるに足りない」
052　023　あなたはどうして人生にさよならを告げたのか
053　038　大好きな　空にさよならを告げて
054　099　過去にも未来にもさよならして
180　051　たね。しかしそれはそうそうあるものじゃない。違うものの方が圧倒的に多いー。では、さよならK.I.

さら　皿
020　011　皿に落せば貝のひびき
028　009　哀訴の蒸気を吸殻とともに皿の上に拾てる三重の硝子の向ふの鐵格子の中の
033　017　青い皿のあたりに葉脈を
034　017　水平の皿のうへ
055　049　あぶらぎった一皿を平げたような顔をする
057　010　ぼくらに一枚の絵皿を見せたことがある
057　032　レッテルでもなければ　絵皿の風景でもない
070　040　汚れた皿拭き布があるだけなのだ、
088　048　これはお茶碗　これはお皿
098　015　ぼくの灰皿から
106　019　かれの額は　西洋皿の平面のように広く
108　008　食べちらしたケーキの皿や
186　079　宴席の大きな皿に盛られた海の幸、鯛や鮑の刺身も

189　033　カチャリと皿にあたる小さな音が

さらさらと
130　012　さらさらと水がながれ

さらした
101　041　白くさらした骨をふきよせる夕べに

さらして
152　024　醜い現実の姿をさらしている

サラダ
084　026　なま臭いサラダとサージンの匂いを発散する

さらば
061　026　酒と女におさらばして、
112　048　さらばだ　戦友
132　014　八方破れの　吉凶よさらば
143　014　喘息の譫言におさらばして
167　067　愛しきものよ　さらば

サラブレッド
072　003　いま評判のサラブレッド四歳馬を見ようとして

サラリーマン
058　037　サラリーマンや労働者を相手に
061　040　青白いサラリーマンが歌っていた。

さられた　去られた
017　034　雨の中を盗み去られたことには

さらわれた
059　028　波にさらわれた母と美しい少年を許せ！

さり　去り
020　009　骨のかたちを残して去り
108　024　老ヘーゲルは来り去り
119　005　去りゆく時の
142　053　義に昏（くら）い者　イデオロギーによろめく者が立去り
169　017　去りゆく艫の闇では

さりげない
076　005　さりげないぼくの微笑も

089　034　さりげない心の素描がありますが……)

さりげなく
061　071　さりげなく煙草をくわえて
159　008　目顔でさりげなくうなずく
174　010　最後にきみはさりげなく「声を聞かせてくれてありがとう」と言って、電話を切った。
180　050　「どこかで会って、さりげなく挨拶を交したような、奇妙な余韻をひいていくところ」それは私にしてもそうでし

さりゆく　去りゆく
119　005　去りゆく時の
169　017　去りゆく艫の闇では

さる　去る
005　036　ジャケツを着て歩み去る
007　013　阿片の軽艇（ボート）は霧の中へ青い泡を残して去るべく一人の少女を誘拐
039　046　遠い街へ走り去るがいい
073　022　ぼくらを運び去るものは
075　005　あのブイをとり去ることはできない
079　019　ぼくらは黙黙と逃れ去るだろう
086　008　海岸から男たちの影を洗い去るであろう
106　032　正直な諦めを抱いて　立去るべきではないだろう
128　031　旗を立てて去る者
187　021　この世から立去る

さわい
121　014　さわいでいる血をしずめるためにーー
159　007　今生の別れかと心はさわいだが

さわいでいる
121　014　さわいでいる血をしずめるためにーー

さわいでいる　騒いでゐる
014　018　エロスよエロスよと騒いでゐると

さわぐ
025　020　わづかにさわぐ葦の触手を見る

さわさわと
149　009　さわさわと口づけをする

ざわめき
024　002　脳髄は青く透明である　ざわめきの聞こえる孔には栓をつめ
028　044　数本の太い樫の木がゆれる樫の葉のざわめき

032　004　光のざわめきも遠ざかり
191　006　樹樹のざわめき

ざわめく
167　034　ざわめく樹樹のあわい

さわやかな
055　061　さわやかな朝の風が

さわやかな　爽やかな
025　056　爽やかな朝に墓場の鍵が配られたとき

さん
026　001　たくさんの硝子がはめてある
027　006　たくさんの吸殻が落ちてきた
039　003　さんざめく市場の広さもない
052　003　うつくしかった姉さん！
052　006　ほそい咽喉に流しこんでいる姉さん！
052　014　純潔だった姉さん！
052　021　姉さん！
052　026　姉さん！
053　013　姉さんのかたみの水晶の腕輪がわたしの冷たい手錠で
053　022　いつのまにかわたしはお姉さんのお墓の前に立っています
053　023　永いあいだ眠っていたお姉さん！
053　024　いつものようにわたしはお姉さんさようならを告げることが出来ません
053　042　お姉さん　何処にいるの
053　047　死んでしまったお姉さん！
053　059　美しく繊細で　やさしかったお姉さん！
053　062　お墓のなかでお目覚めになっているお姉さん！
061　031　さんざめく裏街のどん底で、
061　110　どれだけたくさんの罪が心のなかに閉ざされているかを。
062　009　いまでも空中をさまよっている姉さん！
062　013　いちばん美しい使いである姉さん！
062　027　姉さん！
062　034　姉さん！
085　029　文明批評はもうたくさん
100　062　たくさんの人がプールにつかっていた
112　040　水が酒に　欲望がもっとたくさんの浪費にならないとこぼしている
113　033　喜んで処刑される者もたくさんあった
128　009　「みなさんが助けてくれなかったら
128　025　演説ぶったは次期首相の福田赳夫さん
133　022　せめていっさんに駈けていきたい
151　029　おまえをおとうさんと呼んでいる娘を裸にし

171　009　……五番目がハニヤさん
174　018　（きみが美しい奥さんと結婚して、みんなに羨まれながら、西荻窪のアパートに住んでいたときのことだ）

サン・シャイン
148　050　サン・シャインという温室の喫茶店で休憩し、

サン・ペエル街
097　005　サン・ペエル街七十一番地に、永遠に雨を降らせるだろう。

さんが　山河
044　005　鳥瞰すれば山河

さんかげつ　三カ月
174　006　早く頑迷固陋にかえりたい。あと三カ月で六十才」と書いてあった。

さんかし　参加し
145　028　オーデンはスペイン内乱に参加しなかったというニュースを聞いた

さんがつ　三月
105　004　暗くあれ、三月、
105　005　魚釣りには早すぎ、狩猟には遅すぎる三月。
105　007　着るには暖かすぎ、脱ぐにはまだ寒い三月、
105　008　街角を静かに走れ、三月。
105　013　この歳月をよしとしよう、三月。
105　015　九月十月には、まだまだ遠い三月。
188　075　一雨ごとに暖かくなるという、三月の雨が

サングラス
128　011　サングラスをかけた殿下に

さんげき　惨劇
103　029　惨劇のおわりにはうず潮がひとつ

さんご　珊瑚
001　003　珊瑚を撒き散らし
192　019　助かった！　まだ死にたくはない。眼は真珠に、骨は珊瑚になったとかいう、五尋の海底の父になるなんてごめんだ

ざんこく　残酷
039　040　あなたの微笑はほとんど残酷にちかい
136　015　残酷さこそ　愛なのに
142　019　もっと残酷だということを
188　078　もうすぐ、「荒地」の最も残酷な月。

ざんこくさ　残酷さ
136　015　残酷さこそ　愛なのに

さんさく　散策
028　039　信仰や箸や石鹸や喜ろこびや散策があるやうに

さんざめく
039　003　さんざめく市場の広さもない
061　031　さんざめく裏街のどん底で、

さんしど　三、四度
165　029　カンフルの注射を三、四度射っただけであった

さんじゃく　三尺
090　007　方三尺五寸の天地をつくるために

さんじゅうごねん　三十五年
148　003　三十五年ぶりにたよりをよこした。

さんじゅうねんかん　三十年間
174　011　この三十年間、ぼくはきみに一度も電話などしたことがない、ちょっぴり心が痛み、それはなぜかと考え出すと、疑

さんじゅうねんだい　三十年代
096　015　文明色なら　もう古くなった三十年代流行のセダンの
160　063　三十年代末から四十年代にかけて活躍し

さんじゅうねんだいまつ　三十年代末
160　063　三十年代末から四十年代にかけて活躍し

さんじゅうねんまえ　三十年前
127　010　三十年前か

さんじゅうの　三重の
028　009　哀訴の蒸気を吸殻とともに皿の上に拾てる三重の硝子の向ふの鐵格子の中の

さんじゅうろくとおり　三十六とおり
072　026　三十六とおり結論があるだけなのに

さんしょくき　三色旗
074　013　三色旗をつけた巨船のうえにあるものは

さんだんかい　三段階
100　034　三段階のすじ書きどおりに

さんちゅう　山中
190　004　父がうまれた村は山中にあり

サンドイッチ
108　017　おとなしくサンドイッチを食べながら

さんにん　三人
054　051　賢い三人の友に会うのである
099　011　今ではーーー人の妹は三人の子供の
124　003　三人の男は　いまはトンズラ
148　031　同じ輸送船でスマトラ島に送られた転属組の十三人だった。
150　015　三人称で戯画的に書いているが、
188　034　その間、昔の仲間が、三人死んでいる。

ざんにん　残忍
070　051　あなたの五本の指はどんな兇器よりも残忍で、
142　115　「残忍な歴史の流れはくいとめられないとか

さんにんしょう　三人称
150　015　三人称で戯画的に書いているが、

ざんにんな　残忍な
142　115　「残忍な歴史の流れはくいとめられないとか

さんにんの　三人の
054　051　賢い三人の友に会うのである
099　011　今ではーーー人の妹は三人の子供の
124　003　三人の男は　いまはトンズラ

さんばし　桟橋
102　002　みんな日暮の桟橋に集ってくれ
102　010　みんな夜明けの桟橋から散ってくれ

さんびゃくねんの　三百年の
072　042　（すくなくとも三百年の伝統に従って

さんぽ　散歩
011　002　ぞろぞろと卵が散歩してゐる
039　076　焼けてしまった昔のあたりを散歩する
054　022　ながいこと散歩したね
063　019　しばらく部屋のなかを散歩する
183　025　のんびり散歩したりする人はいない

さんぽしたり　散歩したり
183　025　のんびり散歩したりする人はいない

さんぽしている　散歩してゐる
011　002　ぞろぞろと卵が散歩してゐる

さんぽする　散歩する
039　076　焼けてしまった昔のあたりを散歩する
063　019　しばらく部屋のなかを散歩する

さんまいの　三枚の
173　046　汚ない三枚の毛布にくるまれば

さんれつ　三列
106　001　ありきたりの記念写真のスタイルで　三列にならび

さ迷ひ
026　016　蝙蝠傘とともにさ迷ひ

サーカス
058　039　サーカスの看板がこがらしに吹かれています
058　042　サーカスのむすめの写真をながめながら

サージン
084　026　なま臭いサラダとサージンの匂いを発散する

し　死
005　032　人々は仮死の状態であった
005　035　昆虫は死んだ
012　013　一たまりもなく仮死におち
015　019　死んだものは壁の中に
019　007　脚はいつか死んでゐる
021　019　夢見つつ死んでしまった
025　048　死の影が拡大される
027　024　死から遠ざかるために
039　060　死者をして死者を葬らしめよ
039　110　死の谷間が深いやうに
046　008　櫂で虚を打ちながら　必死に進む舳の方位を
047　018　朧ろに姿を現わすこの髭だらけの死者は誰だろう
049　010　戦争で死んだMよ
050　010　ーー死にそこなってみれば、たしかにそのとおりであった。
051　019　寝台のうえに倒れ、死んだ真似をして

051 036 こっちを見凝めている鍵穴を必死に覗きかえす
052 008 愛と死の隠れんぼはやっぱり楽しいものだろうか
052 029 死にそこないのわたしは
053 047 死んでしまったお姉さん！
054 009 死地に赴く僕たちに
054 013 冷気は死の滴り……
054 014 死の滴りは生命の小さな灯をひとつずつ消してゆく
054 018 死ぬことからとりのこされた僕たちのうえに
054 048 死んだ男のために
054 105 死はいっそう強い酒にすぎぬだろう」
055 003 死のガードをもとめて
055 060 街は死んでいる
057 007 パスカルの読み方を教えた青年が戦死し
057 021 彼岸はいつも死の国のように静かである
061 077 溺死人の行列が手足を藻でしばられて、
061 087 マイナス二は死でなければならぬ
061 091 死が一ぱい詰まっている」
061 098 溺死人が声もなく天にむかって叫ぶのを……
061 211 生と死の影が重なり、
061 212 生ける死者たちが空中を歩きまわる夜がきた。
061 215 生と死の予感におののく魂のように、
061 217 死者の侵入を防ぐのだ。
061 226 死と生の予感におののく魂のように、
062 008 二十年もむかしに死んで
062 012 死者の国の
062 033 死んでも死にきれるわけではないのだから
062 064 そして永遠に死んだふりをしているのですね
063 013 あなたは固く睫毛をとじて死んだふりをしている
064 018 生（なま）パンでさえ死の匂いがする。
065 006 ゆれる燈火と死魚の影があるばかりであった。
065 014 死せる魂に、大きな裂け目をつくり
065 052 死せる魂をゆり起し、夢に見たレエテの河が
068 019 空中に軽い死の飛沫をうちあげ
070 010 水死した処女の乳房をさぐりつづける。
070 059 ぼくが死んだらどうしようというのか。
071 020 冷たい死の手が
071 037 われわれは自然によって死の深さを直観する
074 016 多くの友が死に
074 017 さらに多くの友が死んでゆくとき
074 021 声なくして新しい死者と語りあった
075 014 死のうと思うまえに
076 003 どちらかが死にかけているような
077 001 死んだ兵士を生きかえらせることは

077 005 いくたびか死に
077 010 いくたびか死に
077 017 ぼくはひとりの兵士の死に立会った
077 020 なかなか死のうとしなかった
077 026 死がやってきてじっと蹲っているのが見えた
077 028 かれは死んでいった
077 031 かれは永遠に死んでいった
077 036 かれの崇高な死が
079 029 死ぬために
081 016 ぼくらはすでにこの歴史の内では死んだ者
086 011 岸辺につかまって死んだ魚の
089 013 けれど死んだ眼をひらいた少年には
089 026 「いま死の影が
091 013 この街に生れてこの街に死ぬ
094 017 かれがきみに死ねと言うなら
095 001 たったひとつの死にも
095 007 どうして人間がすこしも苦しまずに死ねようか？
095 014 こんなふうに父が死ねば
095 020 死にはデリケートな思いやりがあった
095 022 スムースなスムースなあなたの死顔を。
100 035 ぼくらの死から誕生にいたる
100 040 「何百万の死者の霊とともに
101 006 死はいそがぬけれども
101 039 死の穫りいれがおわり　きみたちの任務はおわったから
101 042 死霊となってさまよう兵士たちよ
102 008 魂は死んで二度と生れてこないから
107 012 一人の勇士を死なせてから……
109 007 死の季節がやってくるから
109 010 生れかわるためには、死なねばならないと、
127 007 死にたくなった。
127 018 死よりも暗い「病院」で
128 010 われわれは死ぬほかはない」
128 016 自由の死に
133 017 死の匂い甘美な横丁で
136 013 死にたくないと雪が降り
142 060 精神病棟で比較的おとなしく死ぬだけだろう
142 119 非道な暴力に抵抗して　自らの犠牲と死の覚悟で第一線に立ち
143 015 詩を書くより死んだほうがましだ
143 022 死にたき心の
145 029 夢の厚着で肥りすぎた詩人には真偽はどちらでもよく　魂はもうとっくに死んでいた
147 002 若くて死に憧れていた母が一緒に死のうと言えば
147 004 生きることより死を受入れるほうがずっとたやすかったろう
147 006 一瞬の激情で死に突入していたかもしれない

147 008 死と生が秤のうえでゆれながら均合っていた
147 011 死は単なる事実になり
147 013 此頃ではてんで死のことなど考えやしない
147 015 ときたま死の匂いを発散させる若者に出会ったりすると
147 017 惜しまれる死に方をしなかったことで
147 020 口笛を吹きながらするシャドー・ボクシングが死のレッスン。
148 001 戦争で死んだとおもっていた友が、
148 008 肝硬変であっけなく急死したという報らせを受けた。
148 033 硫黄島に送られ、全員戦死していたことをはじめて知らされた。
148 040 戦死者の手足がぐるりと輪になり、
150 034 半数近くは戦争で死に、
151 020 一向に死ぬ気配を見せないのはどうしたわけか
155 007 人の死も
158 040 死はやすらかな眠りであったろう
160 004 死にたくなっていたのかもしれない
160 006 死亡広告をみる癖がついたし
160 054 私が知りうるのは　シュワルツが一九六六年に五十三歳で死んだことだ
162 023 かれの死が均合うのは一桶の汗か
163 017 必死に輝きをましている
165 014 あなたは早く死ねばよい
166 025 きみは死にかけているのかもしれない
166 028 きみは死にかけているのかもしれない
166 032 ぼくはもう死んでいるのかもしれない
167 037 死屍累々の谷が見えがくれするので
170 002 死んだ言葉がちらばっていて
173 029 頭蓋骨を射ちぬかれて死ぬ一人の男
173 035 だがみよ　ヒットラーは死んだんだ
173 036 ムッソリーニも死んだ
173 037 スターリンも死んだ
173 038 毛沢東も死んだ
173 043 まもなく頓死するだろう
173 050 いびきをかいて死んでいきながら
173 051 死を知らないなんて素敵ではないか
174 007 その後、「死後の世界」を読み
174 023 「死後の世界」の明るさを先取りして
175 009 ぼくたちは別々に死んでしまうのだろう
178 003 欲するように死ぬ
179 020 死よりも贅沢な眠りに就く
182 004 退屈が死ぬより怖いからといって
182 013 死の境いを恐れず突進し
185 001 ジョン・レノンが射たれて死んだ、と
185 008 とつぜんの死は
186 082 死を含む共同体であるみんなの声に耳を傾けていると

187 014 われわれは死なぬ
187 017 きみ自身は死ぬだろう
187 023 まもなく死ぬ
188 034 その間、昔の仲間が、三人死んでいる。
188 057 昭和の御代に死ぬなんて、愚の骨頂。
188 060 高校によっては、死についての教育もなされているようです。
188 063 死滅の予備知識も与えられて然るべきだ、といった方針のもとに。
188 080 誕生と、性交と、死に、
189 027 死人の眼でながめながら
192 019 助かった！　まだ死にたくはない。眼は真珠に、骨は珊瑚になったとかいう、五尋の海底の父になるなんてごめんだ
192 025 必死の思いで、前方の真っ暗闇を凝視するが、もう何も見えぬ。

し　詩
054 074 詩人は不敵な薄笑いをもらし
054 110 詩人は欠伸をかみころして立上る
054 118 そして詩人と大学生は駅でしばらく別れを惜しむだろう
068 009 今世紀最大の詩人が
106 004 これがみんな詩人だといったら　たいてい驚く
106 024 詩人としてのかれの　おそろしい飛翔力をあらわしている
106 027 高名な美学派の詩人みたいに　口髭をのばしたり刈りこんだりして
106 031 詩人なら孤狼な口髭とか　大切な象徴の鼻について
106 035 「おれは詩を書いているんだ」　カアカアカアカアカアカアと
106 038 詩人はもちろん屈してはならない　その外貌がどうであれ
106 043 詩人の本質は変らない　それは目にみえない奥にあって
116 002 詩になるかもしれぬ
116 004 やさしい謎をひめた詩に
143 004 二重行為の詩人は
143 015 詩を書くより死んだほうがましだ
145 029 夢の厚着で肥りすぎた詩人には真偽はどちらでもよく　魂はもうとっくに死んでいた
151 006 現在各種年鑑によれば詩人ということになっている
157 005 おまえは　そのまま詩だ
158 022 きみにとって詩は
158 031 詩を終ったと感じたのは
158 035 ぞっとするような詩を書き終えることで
158 037 苦しんでまで詩を書こうとは思わない
158 042 「きみが詩を」ではなく
158 043 詩がきみを
160 015 二十年も昔に記憶の底に沈んだ詩人が
160 021 つい「詩人」であると真実を告げる
160 023 それで時間つなぎに詩を聞かせてくれとせがまれ　聴衆のもとめに応じて
160 025 哲学的な詩をひどく陰気な声で吟誦する
160 027 「それはあなたの詩ですか？」
160 030 「現代最高の詩人T.S.エリオットの作です」

160　037　詩人の気前と品位にとっては　小さな犠牲で
160　041　十四世紀のスコットランドの詩を口誦さみながら
160　079　口誦さむ一篇の詩がなくて！
164　016　……ぼくの一生は詩の困難でやや暗い
164　018　嘘つき！　詩人の資格なし！
164　032　……詩なんかいつだってすてられるさ
165　026　父はわたくしの詩の一行も理解しなかった
166　015　ますます下手になる詩に頭をひねったりしながら
167　044　一行のためのささやかな詩が
170　023　ぼくの痩せた掌に詩の玉を乗せてくれたら
186　038　ええ　ぼくは詩人ですから

じあい　地合い
174　027　きみの地合いの計算には

しあわせ
171　001　他者の犠牲を必要としないしあわせは
171　004　かぎりなくふしあわせになる。

じいしきかじょう　自意識過剰
186　065　自意識過剰ですよ！

しいたげられし　虐げられし
092　016　「虐げられし

しいられた　強いられた
150　064　彼の才能は枯渇を強いられたのである。

ジェファーソン
054　143　非ジェファーソンは独立宣言に署名しない

しお　塩
044　015　あなたの渇望が、
054　152　塩の匂いのする僕の体臭
079　016　苦い塩を口にふくみ
085　025　インクや涙や食塩で錆びたりしない
094　014　背をやく熱い塩のシートに転がされ
142　075　拷問から解放され　自由を得るためには
153　001　青い塩水からうまれた生きものの

しおさい　潮騒
002　009　ぼうぼうと潮騒は杳く
192　005　遠くかすかな潮騒のひびきにさそわれ、海にむかってひき寄せられていくが、

しおみず　塩水
153　001　青い塩水からうまれた生きものの

しおれる
128　092　ネクタイしおれる

じが　自我
054　121　いまは自我をみつめ微かなわらいを憶いだす

シガア
041　100　あなたの部屋にはシガアの煙がたなびいて

しかい　視界
033　018　具足は視界の外ではない
193　005　視界をさえぎるのは

しかいやく　司会役
160　018　観客のいっぱいつまった劇場で　司会役の若い男から

しかく　資格
164　018　嘘つき！　詩人の資格なし！

しかくぞう　視覚像
101　047　森や田畑やうつくしい町の視覚像はいらない

じがぞう　自画像
150　016　私自身は、かなり正直な自画像のつもりだった。

しかた　仕方
007　014　する《されるのはまあ仕方がないでせう》

しがつ　四月
062　049　枯草のあいだの四月の若芽のように萌えています
101　045　四月の雨をまつ土にふかく射ちこまれている

しがみつき
124　023　歌舞伎町でスロット・マシーンにしがみつき

しかめつら　顰め面
055　059　イデオロジストの顰め面を窓からつきだしてみる

しかれた　敷かれた

148　039　十時をすぎると蒲団が敷かれた。

シガレット
057　038　黄ろい指先のシガレットの煙よ
152　005　シガレットの吸口を

じかん　時間
039　061　永遠よりみじかい時間のうちに
041　096　そして時間が徒らに過ぎていった
046　007　澱んだ鈍い時間をかきわけ
054　148　暗い存在が抽象そのものに凍ろうとする時間のはずれから
145　005　芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右
148　028　とり返しのつかぬ時間が過ぎていたのである。
160　023　それで時間つなぎに詩を聞かせてくれとせがまれ　聴衆のもとめに応じて
172　008　どれだけ時間がかかるのか
185　023　だが、愛する時間を奪われた
186　032　（時間の正体を見たんだ）
186　033　一種の時間差攻撃ですね？
186　069　空間と空間のあいだに時間が挟まる
186　072　時間は偉大な造物主だからね
186　075　時間のさまざまな変形態にすぎぬ）
186　076　万物は時間の塊りで
186　080　誰かが寄賭してくれたナポレオンの一壜もいずれ劣らぬ時間の傑作だった
186　083　思索も夢も時間の戯れで
186　087　時間を忘れてぼんやりするのだった

じかんがいちゅうしゃ　時間外駐車
145　005　芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右

じかんさ　時間差
186　033　一種の時間差攻撃ですね？

じかんつなぎ　時間つなぎ
160　023　それで時間つなぎに詩を聞かせてくれとせがまれ　聴衆のもとめに応じて

シガー
128　014　シガーの煙りたなびく
179　007　コーヒーとシガーの

しきさい　色彩
030　029　色彩のなかの緑を
054　031　そこにはどんなリズムが　色彩が

しきして　指揮して
184　007　そして十四人の大工を自ら指揮して

じきしゅしょう　次期首相
128　025　演説ぶったは次期首相の福田赴夫さん

じぎゃく　自虐
047　012　鏡がひややかに自虐を睨む

しきりに
125　005　六月の雨はしきりにふり　音楽はとめどもなく
131　008　男はしきりに木に還りたがった
159　015　しきりに思い返される

しきん　至近
167　029　至近の距離にあって

じく　軸
152　013　紙マッチの軸を台紙からちぎらずに

じくう　時空
029　001　時空の瓶の底に

しくみ　仕組み
100　036　ちょっとした喜劇を仕組みもしたろう

しげみ　茂み
039　008　根の茂みに水が這ひよる
048　006　影の茂みから闇のにおいが漂ってきた

しげる　茂る
030　004　無造作な天体には樹木が茂る

しけん　試験
148　032　同年兵で幹候の試験に合格した組は、

じけん　事件
055　048　ブルジョア的な姦通事件の

じこ　事故
127　009　大事故の記憶がよみがえってきた。
183　028　地震も事故もなくて家へ戻る

じこ　自己
047　015　自己愛が底深く凍りついてしまっていることを……
113　031　ひざまずいて自己批判し　たりぬときは刑に服した
113　035　自己の愚かさに思いあまって
124　013　わずかに自己への希望でしかない日……
142　043　自己の経験をまっすぐ語るあなたの言葉は
150　012　自己韜晦の癖を或程度まで満足させてくれる。
155　035　自己のエクステンション
160　036　ほかに自己証明の道がなかったのである
189　022　自己を否定するたびに上昇をつづけて

じこあい　自己愛
047　015　自己愛が底深く凍りついてしまっていることを……

しこう　思考
028　004　浴槽の中で思考したのは誰であったか
047　010　不図した思考が

しこう　至高
054　162　そして至高の言葉を携えた使者が

しこうした　思考した
028　004　浴槽の中で思考したのは誰であったか

じこく　時刻
039　054　一定の時刻と
098　014　自分ひとりのものとなる時刻ーー
148　054　正午は安全な時刻である、
177　001　きびすを返す時刻を

じごく　地獄
061　096　氷と霜と蒸気と熱湯の地獄の苛責に
125　023　地獄のヴィジョンのうえで安眠できる老人は
145　008　レスビアンの女たちの痙攣は不信者の地獄の笑いの一型態で　ブリッジして反った肉体の
173　013　地獄の炎のなかで増大していく
188　079　私には、なんと、四十三回目の地獄めぐりです。

じごくめぐり　地獄めぐり
188　079　私には、なんと、四十三回目の地獄めぐりです。

じこしょうめい　自己証明
160　036　ほかに自己証明の道がなかったのである

しこたま
112　012　鍵穴や本のあいだにしこたま隠しこんでる狐め

しごと　仕事
088　018　それから大人たちの仕事
090　018　人間の仕事は
148　016　愛は身をほそらせ、日々の仕事は疲れをつのらせる。
155　010　仕事
160　019　「お仕事は？」と訊かれ　ほんとのことを口にしたがらない
165　009　黙々と机に向って仕事をする父の背中に
188　071　きみの手紙は、たまたま、仕事机の片隅の、

しごとつくえ　仕事机
188　071　きみの手紙は、たまたま、仕事机の片隅の、

しごのせかい　「死後の世界」
174　007　その後、「死後の世界」を読み
174　023　「死後の世界」の明るさを先取りして

しごのせかい　死後の世界
174　007　その後、「死後の世界」を読み
174　023　「死後の世界」の明るさを先取りして

じこひはん　自己批判
113　031　ひざまずいて自己批判し　たりぬときは刑に服した

しざい　資材
073　029　三千噸の病める資材をひっぱっていった

しさく　思索
186　083　思索も夢も時間の戯れで

じさつ　自殺
057　016　自殺したペーペルコルンのことを考えていた
074　005　カミソリ自殺をとげた若い軍属の
113　036　「自殺します」と手紙を書いたら
150　042　すくなくとも彼の自殺の真因が、
160　077　自殺もせず　狂気にも陥らずに
169　004　自殺の二乗を生きるから
188　066　子供の自殺は、アメリカでも、

じさつした　自殺した
057　016　自殺したペーペルコルンのことを考えていた

しじされる　支持される
028　058　そこに多数の生活が個人によって支持される

じじつ　事実
147　011　死は単なる事実になり

シジフォス
108　033　なつかしいシジフォスの石が

しじま
108　006　白いしじまのハンモック

ししゃ　使者
054　162　そして至高の言葉を携えた使者が
072　017　青、赤、黄、白の運命の使者たち

ししゃ　死者
039　060　死者をして死者を葬らしめよ
047　018　朧ろに姿を現わすこの髭だらけの死者は誰だろう
061　212　生ける死者たちが空中を歩きまわる夜がきた。
061　217　死者の侵入を防ぐのだ。
062　012　死者の国の
074　021　声なくして新しい死者と語りあった
100　040　「何百万の死者の霊とともに
148　040　戦死者の手足がぐるりと輪になり、

しじょう　至上
061　135　父母や妹　またあなたの至上の友たちに」
145　001　「至上のトーモロコシの毛がアゴにもある長髪の若者が

しじん　「詩人」
160　021　つい「詩人」であると真実を告げる

しじん　詩人
054　074　詩人は不敵な薄笑いをもらし
054　110　詩人は欠伸をかみころして立上る
054　118　そして詩人と大学生は駅でしばらく別れを惜しむだろう
068　009　今世紀最大の詩人が
106　004　これがみんな詩人だといったら　たいてい驚く
106　024　詩人としてのかれの　おそろしい飛翔力をあらわしている
106　027　高名な美学派の詩人みたいに　口髭をのばしたり刈りこんだりして
106　031　詩人なら孤狼な口髭とか　大切な象徴の鼻について

106　038　詩人はもちろん屈してはならない　その外貌がどうであれ
106　043　詩人の本質は変らない　それは目にみえない奥にあって
143　004　二重行為の詩人は
145　029　夢の厚着で肥りすぎた詩人には真偽はどちらでもよく　魂はもうとっくに死んでいた
151　006　現在各種年鑑によれば詩人ということになっている
160　015　二十年も昔に記憶の底に沈んだ詩人が
160　021　つい「詩人」であると真実を告げる
160　030　「現代最高の詩人T.S.エリオットの作です」
160　037　詩人の気前と品位にとっては　小さな犠牲で
164　018　嘘つき！　詩人の資格なし！
186　038　ええ　ぼくは詩人ですから

じしん　自信
142　033　支配に自信なく　人間の良心を
142　109　自信はぐらつく　巨大であればあるほど

じしん　自身
046　049　あなた自身が小さな一つの部屋であることを
053　037　わたしはわたし自身の影からも離れてゆきます
054　069　君は君自身の汚れた手で
061　109　あなたがあなた自身であるためには
061　154　あなた自身が見すてられた天上の星であることを……
101　014　なにものよりも　おのれ自身に擬する銃口を
109　008　自分自身と世界とに別れを告げるときがきた、
142　022　あなた自身であることをやめないから
150　016　私自身は、かなり正直な自画像のつもりだった。
162　017　かれ自身の最後の王国であるから
177　024　きみ自身の街路を行かなければならない
187　013　信念よりは自身が大事だから
187　017　きみ自身は死ぬだろう

じしん　地震
150　080　地震か何かの前兆かもしれません。
183　028　地震も事故もなくて家へ戻る

ジス
055　059　イデオロジストの顰め面を窓からつきだしてみる
146　049　きっとここから出してあげますよ（アイル　ゲッ　チュー・アウト・オブ・ジス）」

しずか　静か
031　003　自動車などで消えたあとは静かで
036　017　噴水と石像のある静かな白昼よ
038　003　風などよりも静かに

039　120　静かに愁ひをなぐさめてくれる
044　006　仰げば星辰の静かな明け暮れ
050　026　きみはただ重たい靴のなかに足をつっこんで静かに横たわったのだ。
051　021　しずかに　静かにしていて
057　021　彼岸はいつも死の国のように静かである
066　021　ーー夜があまり静かだから
073　014　静かに凪いだ墓地のうえを
105　008　街角を静かに走れ、三月。
119　013　静かに走れ　すみだ川
122　006　船が静かにとおざかっていく
125　022　むずかゆい両脚をとじて一人のベッドで静かに眠れ
145　019　*静かに走れ*と命名された群集の河は昨日のように流れていた
150　013　彼の表面は常に波立ってゐるが、彼の底は何時も静かで、
179　025　静かに横たわって息をとめよ

しずかな
046　017　眠れる波のしずかな照応のなかに
078　001　しずかな朝であった

しずかな　静かな
036　017　噴水と石像のある静かな白昼よ
044　006　仰げば星辰の静かな明け暮れ

しずかに　静かに
038　003　風などよりも静かに
039　120　静かに愁ひをなぐさめてくれる
050　026　きみはただ重たい靴のなかに足をつっこんで静かに横たわったのだ。
051　021　しずかに　静かにしていて
073　014　静かに凪いだ墓地のうえを
105　008　街角を静かに走れ、三月。
119　013　静かに走れ　すみだ川
122　006　船が静かにとおざかっていく
125　022　むずかゆい両脚をとじて一人のベッドで静かに眠れ
145　019　*静かに走れ*と命名された群集の河は昨日のように流れていた
179　025　静かに横たわって息をとめよ

シズク
006　001　弾痕からシズクが落ちてるが　カレラは銃器を埋めて

しずけさ　静けさ
035　013　静けさにうづくまり
065　004　耐えがたい静けさが

しずまり　鎮まり
046　035　怒の鎮まりやすい刹那がえらばれて

しずみ　沈み
039　143　塵や灰の底へ沈み
083　023　とおくて近いこんな夕陽が沈みつつあったのか
138　001　血まみれの夕日が沈み
179　029　明日には深い霧の底に沈み

しずめた　沈めた
006　012　花を沈めた　花を

しずめて　沈めて
018　003　霧は伽藍を沈めてしまった
079　008　富士山を三ツ沈めても
108　012　錨を沈めている船

しずめる
121　014　さわいでいる血をしずめるためにーー

しずんだ　沈んだ
023　023　暗い水底に沈んだ
160　015　二十年も昔に記憶の底に沈んだ詩人が

しずんで　沈んで
048　005　太陽が沈んでしまうと
073　012　その下におびただしい輸送船が沈んでいた
079　012　ゆうに一連合艦隊が沈んでいる
191　011　このまま沈んでよいものか

しせい　姿勢
044　003　神々よ　あなたの姿勢は万別なれど、
066　027　折れるように飛びおりる姿勢をとった、
148　022　土にかえる目立たない姿勢をしていたが、

しせる　死せる
065　014　死せる魂に、大きな裂け目をつくり
065　052　死せる魂をゆり起し、夢に見たレエテの河が

しせん　視線
160　007　恋人と会っては　窓外のすがれた景色に視線をそらして
165　010　刺すような視線をあびせて

しぜん　自然
014　019　自然にオルケストラが編制されたね
028　041　おびただしい自然を覆ふ霧はやがて見えなくなるところ
046　026　自然の声をあげる日がくるだらうか
071　030　自然を愛するあまり
071　031　自然のなかの罠は本当の罠なのだと
071　037　われわれは自然によって死の深さを直観する
088　040　ひとつずつ自然を呼びよせて
090　009　人間が自然に手をつける方法は……
129　011　自然にいちばん近い
158　020　自然にたいして有罪でない人間はいない
170　021　（見えないところで自然は豊かさを失っていない
181　031　自然の仕料をとっくり見たいが
186　071　だってそれが自然でしょ？
190　002　自然の風景の始めであり終りである
191　008　生きている自然のしるしに

しぜんに
034　011　午後四時はしぜんに消えてゆく
039　027　しぜんに頬がぬれてくる

しぜんに　自然に
014　019　自然にオルケストラが編制されたね
071　037　われわれは自然によって死の深さを直観する
090　009　人間が自然に手をつける方法は……
129　011　自然にいちばん近い
158　020　自然にたいして有罪でない人間はいない

しそう　思想
107　011　ぼくの思想はぼくに戻る
127　015　村の思想の種子がこぼれて、

じぞう　地蔵
144　003　目の悪い地蔵が首見参にとうよせ

した
004　006　　ステッキを忘れて　逃亡した
006　003　爆発したセロイドの匂が　室内を明るくした　青い
006　007　地面からそんな声がした
006　010　少女が碧い眼をした人形を抱へて出てきたが
006　017　フンと丁寧に洟をかみました
012　006　放心した花弁のやうに
012　015　青い舌を垂らした植物の蔭から

012　016　いきなり水が噴き出した
012　023　スコオルの通過した海の窓から
014　002　侵入してきて楽譜を散らかした
016　008　体操着のまま遁走した
017　014　望遠鏡をぐるぐる廻した
017　026　いかんよと沙漠から声がしたら
017　044　はじめて沙漠が哄笑したので
020　007　名刺を通過したが
023　010　沈黙した化石に傷をつける
027　010　荒廃した街の窓だけが眺められ
028　004　浴槽の中で思考したのは誰であったか
028　006　意識の外部と呼ぶ空壜の堆積した世界よりも
028　054　わたしたちが所有するすべての宝よ
029　010　一つの海を風景の中に所有した
029　015　やはり変らぬわたしたちの愛よ
030　025　濛朧とした足にゆすられながら
031　013　静止してゐたものが動き出したとき
035　027　瞑目した瞼のうへ
036　003　乾燥した粘土の上に風だけの虚しさが
038　028　荒廃したグラスの底をとほるやうに
039　048　まどろんだりしたのは
039　114　そして誰が沈黙したといふのか
041　001　あなたは遠く行かうとした
041　036　おびただしい暇潰しのなかでうっとりした
041　079　坐席があなたを動けなくした
041　149　知識があなたを盲ひにした
041　150　街の雑音はあなたの耳を不注意にした
046　041　模糊とした深淵のほとりから離れ
046　042　ほっそりした川のやうに渝らぬ月日を行くことが出来る
047　010　不図した思考が
049　002　傾斜した部屋からは
049　003　いつも逆に傾斜した獲物のない地平線しか見えない。
050　007　ゆがんだ顔をもてあましたり
051　011　運命がある顔に達したとでも言うかのように、
051　037　「脱走したい、ーー海よ　母よ」
052　030　明日の夕陽を背にしてどうしたらよいのだろう
053　029　ひそひそと話しあっていた声もとだえてしまいました
053　045　ながい睫毛のしたに
053　050　一年よりもむなしい一生を過ごしてきました
053　060　夢を見ながら眠る習慣が　こんなに悲しいものとは思いませんでした
054　022　ながいこと散歩したね
054　038　歩いてゆこう　荒涼とした世界の果へ……
054　045　もしかしたら君の姿が霧の中からぬけだしてこないかと

054 085 鍵は僕が失敬した　そしてもう決して返しはしない」
055 041 おまえは禿鷹風に化粧した小さな顔を
055 062 頸輪ずれしたおれの咽喉につめたい剃刀をあてる
057 016 自殺したペーペルコルンのことを考えていた
058 017 そこを通ってゆきました
058 025 灰いろの建物のしたを孤独な靴音が
058 043 私はかるい舌うちをしました
058 046 これから私は何をしたらよいのでしょうか？
061 116 洗濯したてのシャツをよごすほどにも
061 131 乾けるもの　固く凝れるものを溶かした」
061 138 水仙や蛇や　もろもろの生ける質を潤おした』
061 170 がらんとした心の部屋で、
062 020 わたしたちの交りには
062 054 傷ついたわたしたちの記憶をぬぐってゆくのを
063 012 窓からさしこむ月光のしたで
063 024 ぼくが暁の星だとしたら
063 025 ぼくが殉難者の澄んだ眸をしているとしたら……
064 017 じめじめした屋根裏では、
065 009 沈黙が占めている空間に反響した。
065 026 荒涼とした心に、蒼ざめた花嫁をあたえ
065 035 感覚の闇を照らした。樹々が小枝を打ちならし
065 040 わたしはおまえの血を飲みほした」
065 044 乾いた咳を一つした。彼のイメージのなかには
066 020 かれは溜息のほそいけむりをもらした。
067 008 皮膚のしたに
070 010 水死した処女の乳房をさぐりつづける。
070 039 喰いちらした獣肉の小骨や
071 027 それは遠ざかるにしたがって
072 034 飛ぶ馬を追いこした
072 036 赤帽が白帽をひきはなした
072 046 飛ぶ馬が跳ねる馬を追いこした
072 048 白帽が赤帽をひきはなした
072 050 ゆっくりとゴールへ飛びこむ馬をキャッチした
072 053 ーー飛ぶ馬が跳ねる馬を追いこした
072 064 がらんとした競馬場には
073 026 毛脛を出したフランス人の水先案内は
074 023 若い魂を解放したカミソリの刃を
077 002 金の縁とりをした本のなかで
077 037 金の縁とりをした本のなかに閉じこめられて
080 010 夕陽の血が波のうえにしたたりおちて
082 011 恍惚とした顔のように
083 009 なんだって始めからやり直したりするのか
085 009 はっきりした愛情もあれば

085　010　はっきりした冷酷さもある
089　010　凍ってゆく水に影をうかべていました
089　014　空を背景にしたすべてのものが見えるのです
089　019　雪のなかでしか経験したことのないすべてのものが……)
089　025　編物をしていた手から毛絲の玉を落しました
090　015　静止した「時」は
093　016　もうろうとしたストイックな頭から
094　016　かれと言いきみと呼びぼくに返る心の遠近法にしたがって
097　002　ぴたりと静止したらどうなるか？
097　006　もし無慈悲な画家が牢獄を描くとしたら、
100　033　かろやかな鼻唄のリズムで歩きもしたろう
100　036　ちょっとした喜劇を仕組みもしたろう
101　024　安全装置をはずした引金は　ぼくひとりのものであり
101　041　白くさらした骨をふきよせる夕べに
101　059　弾倉をからにした心のなかまで
102　022　いちど手をはなしたら
106　017　人生を説明するのに　どうしたって何かが足りないようだ
106　027　高名な美学派の詩人みたいに　口髭をのばしたり刈りこんだりして
108　008　食べちらしたケーキの皿や
108　013　うすれた陽のしたで
112　026　真白な花婿の胸をした戦友よ
112　027　おれたちがどんなに大きく敗れ　おまえたちがどんなに小さく勝利したか
112　029　眼や耳や手足をなくした不幸な犠牲者に何をしてやったか
112　035　それがおまえの獲得した一切なのか
113　029　人民の世界を反映した
113　030　不運にもあやまちをおかした者は
113　031　ひざまずいて自己批判し　たりぬときは刑に服した
118　003　そうよ　あたしたち
118　013　あるいは繃帯をした
120　020　人生に遅刻したのも気にしないで
121　013　プライベートな場所をさがしたい
124　030　六十本の煙草を灰にしたところで
126　013　それが荒涼とした虚無の世界だとしても
127　023　黄ろいタンポポを黄色にしたものが
128　026　大事な「モア・ザン」がぬけました
128　051　わかりましたか諸君
128　089　どうした最後のひと光り
131　002　空をいくらか明るくした
133　013　剥がされた敷石のした
134　002　みんな泣きはらした眼をしている
137　004　あっさり未来を売りわたした
142　009　こうした　同じことだ　という作為的な留保がなされるかぎり
142　035　孤立した家族の住むアパートの一室で

142 054 あとに残るのが　無気力な教養人ばかりだとしたら
142 062 その著書をフランスで刊行した一九四二年生れのブコフスキーは
142 065 魂を売ることを拒否したという
142 066 国外追放を条件とした釈放の申し渡しに対して
142 067 ブコフスキーが出した回答は
142 072 卑劣さを代償とした自由を受け入れようとはしないで
142 090 知らんふりしたところで投獄されはしない
142 099 ぼくたちはこれから何をしたらよいのか？
142 101 ブコフスキーやアマルリクが直面した状況にくらべたら
142 124 全世界に警告を発したのである
145 022 行先をきめないで出発し到着したときに旅は終っていた
146 003 明るい観光ビルのなかに入っていきました
146 008 すぐ引返しましたが
146 010 マスコットの猫が欠伸をしていました
146 017 横顔があなたにそっくりでしたので
146 019 そのドアに駈けこみましたが
146 020 どうしたことでしょう！
146 023 お祈りを捧げているところでした
146 026 びっくりしてドアをパタンと閉めましたが
146 028 自分を閉じこめる音でもありました
146 032 けたたましく悲鳴をあげて叫びました
146 034 わたしは無我夢中で逃げ出しましたが
146 052 迷路を歩きはじめました
146 060 外はひどいどしゃ降りでした
146 062 やっと安心しましたわ。
147 014 オーバーウェイトで引退したボクサーみたいに
148 003 三十五年ぶりにたよりをよこした。
148 008 肝硬変であっけなく急死したという報らせを受けた。
148 032 同年兵で幹候の試験に合格した組は、
148 048 それから、少年の日のように月の砂漠へ出発した。
148 052 グロテスクに繁茂する熱帯植物を観賞した。
149 006 いくたび禁制を犯したろう？
150 009 一寸した小さな失敗の傷口からでも、
150 018 自分のことではないかと猜疑したりする者もあった。
150 052 続いて第二輯に逃亡した娼婦の心理を描いた「滅落」を発表したところで、
150 076 昔の雑誌が見つかったというのは、私にとって幸運でした。
150 079 こちらも七月一日だというのにストーヴをつけたりしました。
151 020 一向に死ぬ気配を見せないのはどうしたわけか
152 004 むしょうにやつと話したくなった
156 031 どうしたらいいかわからなくなる
157 006 秋は深くなりました
160 008 どの毒がいいかと話しもした
160 011 たまたま手にしたパーチザン・レヴュウ誌の最近号で

160 019 「お仕事は？」と訊かれ　ほんとのことを口にしたがらない
160 032 ちょっとしたいざこざのあとで
162 022 喜んで命と交換しただろうというのだ
166 018 あいさつしたのがなぜ悪い？
166 021 いつものように車で二軒分の買物をした
166 024 文明の貪慾に吐気を催した
167 012 話したり書いたりすれば素晴らしいライフも
167 018 老化した脆弱な骨組に
167 022 肉の悲しみを知りつくした主は
167 069 共に暮した年月にも
169 020 孤独の帆をたらしたまま
172 003 ひたむきなものは消滅した
172 015 祖先から相続した恐怖で
172 020 常緑樹にしたたる日光の蜜が
173 001 声を出したかったとか
173 002 身ぶりの練習をしたかったとかで
173 004 超スローボールを空振りしたあとのような
174 004 「病気がこんなにこたえるとは、思ってもいませんでした。春からノイローゼ状態で我ながら呆れかえっていま
174 008 きみと話したくなって電話をすると、
174 011 この三十年間、ぼくはきみに一度も電話などしたことがない、ちょっぴり心が痛み、それはなぜかと考え出すと、疑
174 019 ぼくは黒を持ち確実を三隅を占拠したが、中央の白が厚く、ずるずると敗けてしまい
174 020 会心の笑みをもらすきみを前にして、ひどく口惜しい思いをした。
175 003 猫の質問をくりかえした
175 006 犬の質問をくりかえした
176 031 少女はふさふさした垂れ髪で
178 001 欲する処にしたがい
178 008 なにげなく交信した
180 002 何が飛び出したって驚きはしないが
180 013 恐れ入りましたとでもいうほかはなさそうである
180 026 ッセージとよみました」と書いた筈、それは私だからそうよめてしまう、というのがどうでもいいことで、貴方
180 050 「どこかで会って、さりげなく挨拶を交したような、奇妙な余韻をひいていくところ」それは私にしてもそうでし
181 012 サムライの真似をした
183 017 表の灯を消した株屋の店内では
183 025 のんびり散歩したりする人はいない
184 005 すぐ離婚したが夫の姓は変えずに帰国して
184 006 タイ生れの中国人の医者と再婚した
184 013 九カ国語を話したという冒険家の祖父を
184 017 わたしたちの家（アワ・ハウス）というべきところを
185 014 幻想と化することを証した一人の男が
185 020 どうせ、不均合いで混乱した世界だから
186 003 どうでした？
186 013 （距離の旅はしたことがないから
186 021 タイム・マシーンで旅行した感じだった……

186　029　みんな若かったと了解した瞬間、未来に到着していたことがわかった
186　049　そういえばそれがあなたの口癖でしたね、気障な！
187　006　そこまでは静止した風景だった
188　003　「また、ご無沙汰しました。
188　010　その歯は抜きましたが、他の歯に窩が無数にあるとか、
188　032　（ほんとうに、失礼しました）
192　011　もしかすると、近づくにしたがって、遠ざかっていく海なのかもしれない。こんなところは、日本中のどこにもあり
193　003　到達したところから

した　下
005　007　風下に建てられてある
005　010　古い楽器は花樹の下で
006　014　阿片の広告の下にベタベタ貼った
009　010　褐色の皮膚の下に樹液は涸れてゐる
013　001　ネムの木の下で
013　007　ぼくは靴下をなげだすと
013　009　ながい舌が垂れ下ってきて
014　013　団扇みたいなシュロの葉の下で
017　039　ああ助けてくれお助け下さい
018　013　帽子掛の下で遮断され
019　001　靴の溢れる廊下では
021　002　青い樹の下は
025　037　鉛のやうに落下してくる
025　041　竪琴の下にきて
026　011　透明な靴下が
028　001　一本の花の茎もない空の下に
028　034　地下に住んでゐる声を踏みしめ
028　060　都会の屋根の下よ商店街の商人たち
028　065　笑うものたち虫のやうな検微鏡下の虫たち
031　022　机の下から灰や骨などを集めて
033　007　寒い廊下をわたってきた
035　017　同じ廊下で
036　015　永遠を忘れてゐる臍の下で
036　021　これらの樹木の下の水べりに
037　004　地下をながれる水の音は
037　021　ランプよりも巨大な思い出の下で
038　010　街を見降ろす廊下には
038　015　木木の下のみ朝がきます
038　021　その下の澄んだ水のほとり
039　050　暗い空の下に現れては
039　100　木と木の間の寒い廊下に佇んで
040　017　壁の下でマッチをする男のために
040　019　秘密はいくつもの廊下をとほってくる

041 026 橋の下には　レールがうねり
041 082 廊下へ出て
041 133 曇った空の下を違った扉に向って走ってゆくのを見た
045 003 部屋から廊下へ
046 005 はるか足下を潜りぬける黒い水の流れ
046 033 濁れる水の地下のうねりこ耳を傾けつつ
046 047 また午後の廊下の如くあなたの躰を影にするだらう
048 022 うすれゆく年々の冬のきびしい日の下で……
050 028 Mよ、地下に眠るMよ、
051 016 下降　そして不吉な上昇カーブ
052 015 あなたは本当に暗い地下にひとりで住んでいるのですか
054 053 手を下すと　人形のように動かなくなる
054 067 おお　いまこそ君の虚栄をひきずり下せ！
054 068 ひきずり下せ！
054 080 衣裳と装身具の内側に　化粧のゆきとどいた顔の下に
055 058 急転直下堕落していったあの
057 006 青空の下で
060 007 真昼の月の下を
061 007 はるか、地下を潜りぬける運河の流れ、
061 010 下へ、下へと漕ぎさってゆく舳の方位を。
061 140 眼下の大いなる混沌のむかしに
061 145 霧ははげしく運河の下から氾濫してくる。
061 182 貴方がわたしに下さったものはこれだけですか。
061 197 教えて下さい、
064 002 町はあたたかい吐息の下にあった。
064 031 町はあたたかい吐息の下にあった、
065 028 燃える屋根の下に、愛は
068 023 太陽の下で　空壜をころがすように
072 066 暮れるにおそい五月の空の下にひろがっている
073 012 その下におびただしい輸送船が沈んでいた
074 018 生あるものの皮膚の下を
081 017 夜あけのくる船窓の下の
081 029 海の下の潮流は
088 003 ぼくの椅子の下に巣をつくったり
089 009 橋の下には　夏の少年が
095 016 崖下の道で息がきれた
098 025 ぼくはまぶしい「無」の下で自分の手をみつめる
106 016 無事に生きのびてきた　この下手な構図は
112 014 命令一下たちまち整列し　黒い銃剣の林をつらね
113 020 あたたかい下着を送ればどうなるか
114 006 じっと机の下にかがんで生きのびてきた
126 005 「月が刻下の目標だが
127 021 炎天下……

128　011　サングラスをかけた殿下に
128　019　資本の下水の養分を吸って
142　016　帝政時代よりソビエト体制下で四倍も悪化している
142　056　異端者や地下の作家や哲学者を根絶やしにする
145　005　芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右
145　006　側に地下へ急降下するその劇場があって
146　013　壁にドアをならべた廊下が
146　036　またまた迷路の廊下にまよいこみ
148　020　太陽の冷たい一瞥の下で、
152　010　コップに落下しすぐに消え
154　018　怨み泣きする梁の下
160　056　その日は夜どおし起きており　朝の四時にゴミを捨てに廊下へ出て
166　015　ますます下手になる詩に頭をひねったりしながら
171　017　わずかに雨露をしのぐ庇の下から
174　026　いまでも下手な碁打ちであるぼくは考える
180　044　月明りの下で
183　016　銀行はシャッターを下していて
186　020　それで今度の西下の印象は？
188　042　人生の下り坂にかかったときからである。
189　023　いまのかれは雲を見下すような

した　舌
003　003　竜舌蘭を食べてゐる紳士は
012　015　青い舌を垂らした植物の蔭から
013　009　ながい舌が垂れ下ってきて
017　045　うっかり舌もだせなかった
025　015　沙漠の舌をぬらし
028　011　液體のやうに垂れてきたのは疲れた舌である
031　014　闇の一滴がひそかに舌から辷り落ちた
035　003　おまへたちの舌の上へやってくる
058　043　私はかるい舌うちをしました
088　078　よく舌のまわらぬおまえの節廻しにあわせて
156　013　二枚舌に
156　014　一枚舌では

しだ　羊歯
026　020　羊歯類が生ひ茂り

じだい　時代
025　007　それらが船舶の歴史の中にあった時代には
028　050　ただそこに時代の速度乃至歩調が見えてくるだらう
050　015　短かかった黄金時代－－
054　159　テーブルに凭れて新しい黄金時代を夢みている

058　014　無意味な時代がしずかに腐敗しています
084　016　壁にはりついた影と語っている時代－－
096　002　太陽をえがく　酒場時代の
100　028　たちまち去った警告の時代よ
100　039　すばやく過ぎ去った予言の時代よ
106　034　時代におくれ　人におくれたすべてのものをとり戻すために
112　038　たぶん時代がわるいんだろうと異口同音に歌う
128　090　われらの時代に目覚めはない？
142　016　帝政時代よりソビエト体制下で四倍も悪化している
142　082　彼がおかれている状況は　西側の同時代人のそれより
147　001　生きていくことに怖れを感じていた幼年時代だったら
147　005　生きることに困難を覚えていた青年時代だったら
147　009　ところが遅れてやってきた壮年時代に入ると
150　060　時代の風圧を避けるのにせい一ぱいで、
160　076　制度の春を病むこともなく　不確定性の時代を生きて
166　006　三つの時代を同時に生き
185　012　時代への幻滅も
188　051　人はただ歳をとるだけだが、時代は、変ったようである。
188　054　いまはエレクトロニクスと老害の時代なのだ。

したいに
039　044　したいに眼をとじた楕円の石に変ってしまふ
053　058　不思議な夢がしだいに近よつてくるようです

したうち　舌うち
058　043　私はかるい舌うちをしました

したがい　従い
054　015　Mよ　君は暗い約束に従い

したぎ　下着
113　020　あたたかい下着を送ればどうなるか

したしい　親しい
061　013　親しい者のまなざしや

したたり　滴り
054　013　冷気は死の滴り……
054　014　死の滴りは生命の小さな灯をひとつずつ消してゆく

したたりおちて
080　010　夕陽の血が波のうえにしたたりおちて

したたる
172　020　常緑樹にしたたる日光の蜜が

したで　下で
005　010　古い楽器は花樹の下で
013　001　ネムの木の下で
014　013　団扇みたいなシュロの葉の下で
018　013　帽子掛の下で遮断され
019　001　靴の溢れる廊下では
035　017　同じ廊下で
036　015　永遠を忘れてゐる臍の下で
037　021　ランプよりも巨大な思い出の下で
040　017　壁の下でマッチをする男のために
048　022　うすれゆく年々の冬のきびしい日の下で……
057　006　青空の下で
068　023　太陽の下で　空壜をころがすように
098　025　ぼくはまぶしい「無」の下で自分の手をみつめる
142　016　帝政時代よりソビエト体制下で四倍も悪化している
148　020　太陽の冷たい一瞥の下で、
180　044　月明りの下で

したに　下に
005　007　風下に建てられてある
006　014　阿片の広告の下にベタベタ貼った
009　010　褐色の皮膚の下に樹液は涸れてゐる
025　041　竪琴の下にきて
028　001　一本の花の茎もない空の下に
028　034　地下に住んでゐる声を踏みしめ
038　010　街を見降ろす廊下には
039　050　暗い空の下に現れては
039　100　木と木の間の寒い廊下に佇んで
041　026　橋の下には　レールがうねり
050　028　Mよ、地下に眠るMよ、
052　015　あなたは本当に暗い地下にひとりで住んでいるのですか
054　080　衣裳と装身具の内側に　化粧のゆきとどいた顔の下に
064　002　町はあたたかい吐息の下にあった。
064　031　町はあたたかい吐息の下にあった、
065　028　燃える屋根の下に、愛は
072　066　暮れるにおそい五月の空の下にひろがっている
073　012　その下におびただしい輸送船が沈んでいた
088　003　ぼくの椅子の下に巣をつくったり
089　009　橋の下には　夏の少年が
114　006　じっと机の下にかがんで生きのびてきた

128　011　サングラスをかけた殿下に
146　036　またまた迷路の廊下にまよいこみ

したは　下は
021　002　青い樹の下は

しち　死地
054　009　死地に赴く僕たちに

しちがつ　七月
082　002　七月は空を泳ぎまわる魚
150　079　こちらも七月一日だというのにストーヴをつけたりしました。

しちがつついたち　七月一日
150　079　こちらも七月一日だというのにストーヴをつけたりしました。

しつ　質
007　008　多孔質の雲の間からトンボの眼のやうに碧く　アスピリンを積ん
018　002　質量の影も見えない
028　026　物質の秩序と形態にそって
028　062　花花しく棲息する物質の群れが
028　070　花花しい物質たちの流れ乱舞の外から
031　020　すべての物質たちは堅い殻につつまれて
041　111　物質で身を固め　破れたシャツで冷気を防いだ
041　124　木質は腐り　陽に燬かれ　蝋のやうに流れた
058　027　その孤独のこだまのなかには淋しさの本質がちょっぴりあります
061　083　おまえは薄暗い多孔質の宇宙だ
061　088　おまえの多孔質の体には
061　138　水仙や蛇や　もろもろの生ける質を潤おした』
077　015　無限の質だ！）
106　043　詩人の本質は変らない　それは目にみえない奥にあって
150　037　「本質的に我々が誇り得るものは生理以外に在り得ない、
150　038　又本質的に個性的なるものも」と言ったのは、
168　015　この世を経めぐるいのちの物質よ
173　011　外国の人質を殺すか殺さぬかで
175　003　猫の質問をくりかえした
175　006　犬の質問をくりかえした

しづかな
037　002　しづかな炎のむれが

しづかに
025　012　しづかに靡いてゐるところ

しっけ　湿気
041　112　それは又新しく湿気を呼んだ

しっけいした　失敬した
054　085　鍵は僕が失敬した　そしてもう決して返しはしない」

しっけいする　失敬する
013　018　上衣と帽子を失敬する

じっけんして　実験して
106　028　懲りずに実験してみるべきだったろう　一歩戸外に出ると女たちの笑いで

しっこく　漆黒
192　015　みるみる漆黒につつまれていく、ここは、もともと海底だったところではないか。冷気に身ぶるいし、

しっさく　失策
169　021　数えきれない失策

しっしょうする　失笑する
160　029　聴衆が失笑する

しっしんする　失神する
180　023　きみはきっと怯えて失神するだろう

しっそうし　疾走し
057　025　マニラ郊外のドライブウェイを疾走しながら
072　038　あとは砂煙りをあげて一団となって疾走している

しっそうして　疾走して
072　038　あとは砂煙りをあげて一団となって疾走している

しっそうする　疾走する
055　018　疾走する鋼鉄の船が

じったい　実体
023　006　実体のない窓窓に雨が降り
023　011　再び実体のない建築の翳は
140　020　かれは実体のない都市の雲の中に住む

しって　知って
044　009　御身は知ってゐる、世の輝かしい変貌を、
053　009　わたしはわたしの行方を知っていない

054　091　僕は知っている
057　022　ぼくは知っていた
088　009　ぼくが知っているのは　おまえが生れる前のことだ
088　011　なんでもおまえの方がよく知っている
088　017　みんな知っているとおりだ
088　023　みんな知っているとおりなんだ
113　014　なんでも知ってる　靴屋の息子で
113　041　なんでも知ってるスターリンがいて
142　031　あなたは知っている
155　020　知っている顔や
179　027　たしかに知っていると告げる

しっている　知ってゐる
044　009　御身は知ってゐる、世の輝かしい変貌を、

じっと
008　016　金魚みたいにじっとして　水のつまったガラス鉢の中
041　067　いつまでもじっと火を見凝めてゐるのは
054　023　艀船がじっと水のうえで考えごとをしていたっけ
062　051　あなたはじっと耳を澄ましていますね
069　026　じっと心の闇をのぞきこむ
077　026　死がやってきてじっと蹲っているのが見えた
083　010　思出の片隅でじっとしていればよいのに
084　009　じっと立っていさえすればいいのですよ
087　006　じっと食器の底をみつめたまま
088　080　みんなじっと耳をすましているのだから
106　011　外部の世界をうかがい　いまもじっと「時」をこらえ
114　006　じっと机の下にかがんで生きのびてきた

しっと　嫉妬
041　129　やがて嫉妬の火で燃え尽さうとする

じっとして
008　016　金魚みたいにじっとして　水のつまったガラス鉢の中
083　010　思出の片隅でじっとしていればよいのに

しつない　室内
006　003　爆発したセロイドの匂が　室内を明るくした　青い
014　031　室内を飛びはじめる
015　002　室内を青く洗ってゐる
018　014　音楽が室内に溢れてくる
021　025　室内のガラスを濡らす
025　021　室内には薄明りのランタンが

027　009　室内からは
031　016　室内の凹みから

しっぱい　失敗
055　057　恋にも革命にも失敗し
105　012　戦争は失敗し、ぼくらの国は生きのびてきた、
150　009　一寸した小さな失敗の傷口からでも、
160　071　アメリカ社会における成功の蔭にある失敗のさまざまな痕跡が
164　008　……コミュニケーションの失敗だ
180　041　めぐりあうことに失敗し

しっぱいし　失敗し
055　057　恋にも革命にも失敗し
105　012　戦争は失敗し、ぼくらの国は生きのびてきた、
180　041　めぐりあうことに失敗し

しっぽ　尻尾
087　015　たまに　尻尾をふるのはよけいなこと

しつもん　質問
175　003　猫の質問をくりかえした
175　006　犬の質問をくりかえした

しつように　執拗に
051　028　執拗に手が把手（ハンドル）を求めて痙攣する、

しつりょう　質量
018　002　質量の影も見えない

じでん　自伝
173　022　かつてきみの横顔には自伝らしきものがあった

じてんしゃ　自転車
010　001　自転車に乗ってゐる少年は自転車のスピイドをもつ
010　006　ピカピカ光る自転車は他のピカピカ光る自転車と競走する
010　015　ピカピカ光る自転車に倚りかかってゐる

じどうしゃ　自動車
031　003　自動車などで消えたあとは静かで
041　132　自動車や電車が
128　023　鋼鉄六倍　自動車十五倍

しな　支那

077　029　東支那海の夜を走る病院船の一室で
090　014　この支那の陶器のまわりの

しなせて　死なせて
107　012　一人の勇士を死なせてから……

しなやか
032　011　しなやかな鞭のやうに
085　019　軽くてしなやかで堅牢な
106　044　すべての生きもののうちで　最も強くてしなやかな骨だ
162　001　背すじはしなやかに
182　009　しなやかな背骨がなくとも

しなやかな
032　011　しなやかな鞭のやうに
106　044　すべての生きもののうちで　最も強くてしなやかな骨だ
182　009　しなやかな背骨がなくとも

しなやかに
162　001　背すじはしなやかに

じならしする　地ならしする
166　007　矛盾の道を地ならしするのは

しにきれる　死にきれる
062　033　死んでも死にきれるわけではないのだから

しにそこない　死にそこない
052　029　死にそこないのわたしは

シネマスコープ
103　016　シネマスコープに登場するユリシイズのように

しのぐ
171　017　わずかに雨露をしのぐ庇の下から

しのくに　死の国
057　021　彼岸はいつも死の国のように静かである

しのびこむ　忍びこむ
034　016　風はどこからともなく忍びこむ

しのびよる　忍びよる

037　011　夜はおそらくどこからでも忍びよる

しのべない　忍べない
167　015　忍べないほどではないと思っているうちに

しのんで　偲んで
148　053　スマトラ島を偲んでぼくたちは談笑し、賑かに昼食をとった。

しはい　支配
028　063　古靴の世界を支配し
072　023　血統を信ずるのもいいし、人気に支配されるのも結構だ
142　033　支配に自信なく　人間の良心を

しはいされる　支配される
072　023　血統を信ずるのもいいし、人気に支配されるのも結構だ

しはいし　支配し
028　063　古靴の世界を支配し

しばくさ　芝草
099　004　太陽が緑の絵具をとかしている芝草のうえを

しばし
045　019　畳よりも青い顎の　若い主はしばし呆ける

しばたたき
150　057　彼は特徴のあるうるんだ眼をしばたたきながら聞いていたが、

しばらく
039　074　しばらくは
054　118　そして詩人と大学生は駅でしばらく別れを惜しむだろう
063　019　しばらく部屋のなかを散歩する
090　023　言葉を探すのはしばらくやめよう
112　001　やあ　しばらく
170　028　しばらく其場に立ちつくしていた
188　056　しばらく、沈思し、低く呟く、

しはらった　支払った
112　028　敵からどんな施しを受け　どんな賠償を支払ったか

しばられて
061　077　溺死人の行列が手足を藻でしばられて、

しばられている　縛られてゐる
039　069　鎖で縛られてゐるのはいいことだ

しばる　縛る
136　003　枯木に縛る

じひ　慈悲
061　186　貴方の深い慈悲と知慧とを理解できません。
097　006　もし無慈悲な画家が牢獄を描くとしたら、
104　009　無慈悲な月の光が　照し出す

じびき　字引
188　013　鼻は鼻で、これまた、字引をみると、癆症とかで、

じひびき　地ひびき
120　017　かすかな地ひびきが

しぶいて
169　018　わずかに涙の粒がしぶいている

しぶき
081　021　血と泥と鉄のしぶきをはねあげて
149　001　しぶきをあげる人魚姫の

しぶとさ
149　005　欲望のしぶとさで

しぶん
037　008　しぶんを掠めるために

じぶん　自分
072　068　自分ひとりにかえるのは
088　039　そうしておまえは自分のまわりに
098　014　自分ひとりのものとなる時刻ーー
098　025　ぼくはまぶしい「無」の下で自分の手をみつめる
106　040　かれは自分を罰してはならない　屠殺者や皮肉屋の包囲のなかで
108　014　人はあわただしく自分の影から離れる
109　008　自分自身と世界とに別れを告げるときがきた、
142　068　　自分の著作中に登場し　そのために投獄されたすべての人々を
142　079　もちろん　信念より自分の生命が大切だと考えたからである
146　028　自分を閉じこめる音でもありました
150　007　彼は自分の虚構の個性を破綻なく演ずるために、
150　010　自分の血が全部流れ出してしまふのではないかと怖れた。

150　018　自分のことではないかと猜疑したりする者もあった。
150　024　自分の書いたものがまるでつまらなかったことである。
151　019　自分でもそう思い人にもそう思われているのに
151　043　自分を思い出すのに
157　002　そっと自分をおいていった
160　020　そんな自分に怒りを感じて
165　016　自分をこの世に存在させていることで
166　001　自分のことを
173　024　自分は進歩しうると信じて
186　048　理解されるに足る自分があるとは思っていないよ
186　050　自分が自分であることの不安
192　006　それにしても、と影をもたぬ寂蓼が、くびをかしげる。人に会わぬ。風はそよとも吹かず、自分の足音さえきこえな

じぶんじしん　自分自身
109　008　自分自身と世界とに別れを告げるときがきた、

じぶんに
039　085　そしてじぶんに倒れかかり

じべた　地べた
140　017　地べたを這いずる共生共苦の道も

シベリア
113　019　シベリアの囚人に

しへん　紙片
041　075　追憶の蒼ざめた紙片は
041　105　一枚の紙片のなんといふ重さ

しぼうこうこく　死亡広告
160　006　死亡広告をみる癖がついたし

しぼりだそう
085　024　女たちの血のなかから愛の喜びをしぼりだそう

しほん　資本
128　019　資本の下水の養分を吸って

しま　縞
023　004　公園をまがってゆく縞のズボンたちを
025　035　縞になった明るい光線を歩む

しま　島

016　010　雲の島からエンジンが響き
051　006　幻影のなかの島嶼……
078　019　ひとつの島をさがしもとめていたのだ
079　027　みどりの島
094　012　行ったことのない島や港や都市に
128　056　ぼくはニューギニーからタヒチ島へ行ってくる
129　012　人工の島で
148　031　同じ輸送船でスマトラ島に送られた転属組の十三人だった。
148　033　硫黄島に送られ、全員戦死していたことをはじめて知らされた。
148　053　スマトラ島を偲んでぼくたちは談笑し、賑かに昼食をとった。
186　015　以前に広島に行ったことがあるとか？
186　027　廿六年前に広島で撮った写真を、懇親会の席上で相良君から見せられてね

しまつ　始末
147　016　嬉しくなって「やあ、やあ」と肩を叩いたりする始末だ
173　027　キョロキョロと振返って眺めている始末だ
188　009　五十何年ぶりに歯医者の厄介になるという始末。

じまん　自慢
188　045　愚痴とも、自慢ともつかず、

しみ
013　006　ネムの木は負け惜しみを云ふ
035　009　あらゆる憎しみはふり落される
036　009　悲しみは額のあたりの翳ではない
039　139　苦しみは拓かれて
049　005　重たい悲しみに塗りこめられた人間の影がある。
052　002　忘れがたい悲しみの面影がうかぶとき
053　043　いのちを惜しんで暮すことに悲しみなんかありゃしない
054　010　惜しみない賞讃の言葉をおくった
055　004　悲しみの街から遠ざかろうとしていた
060　019　悲しみにあおざめた額のうえに
070　012　悲しみの水面にうかべて、
074　011　ぼくら兵士の苦しみは
074　012　ぼくら祖国の苦しみだったろうか
075　006　ぼくの苦しみも
075　007　ぼくの悲しみも
077　019　高熱に苦しみながら
080　008　とおい悲しみをたぐりよせている
080　017　あたらしい血汐であらい　この苦しみの胸が
088　047　消えさる喜び　永くとどまる悲しみというものがない
089　018　（その喜びと悲しみを
095　019　……苦しみぬいて生きた父よ

101　011　むかしの愛も　あたらしい日附の憎しみも
101　055　にんげんの悲しみによごれた夕陽をすてにゆこう
101　060　きびしい寒さがしみとおり
102　015　憎しみをかきたてる火掻棒で
104　010　愛と憎しみに撃たれた裸身のほそさに
116　006　未来を失ったぼくの苦しみが
138　015　憎しみ燃やして
154　007　悲しみの音色にさそわれ
160　043　みじめな浮世の悲しみを！
167　022　肉の悲しみを知りつくした主は
167　056　苦しみのベッドに血をにじませる
171　012　無邪気な目には悲しみがあふれていたから
179　005　太陽の誘惑のしみがついていて
188　050　老いの楽しみに数えてよいだろう。

しみとおり
101　060　きびしい寒さがしみとおり

じむしょ　事務所
028　005　白い事務所の内側の時計の速度は
028　067　白い事務所の受話器が

しめ
026　022　しめった土地には
028　034　地下に住んでゐる声を踏みしめ
039　060　死者をして死者を葬らしめよ
039　084　秘密の抽斗をしめ
043　004　そのしめった風は吹きぬける
053　046　墓地のしめった黒い土をみつめながら
054　097　人を苦しめる過ぎ去った日々が
054　107　ちらりと最後のながしめを与える
055　005　おまえの濡れた肩を抱きしめたとき
055　040　おれは慢性胃腸病患者のだらしないネクタイをしめ
062　018　あなたはかすかにしめった灰の匂いを覆いかける
068　011　睾丸をしめつける海と
070　029　形のない魂の叫びまでしめあげてしまう。
080　007　くずれる砂の甲板をふみしめ
081　027　ぼくらをしっかり抱きしめているのは
112　021　薄いネクタイでうやうやしく喉頸をしめ
120　006　しめった土のにおい
136　007　凶器をにぎりしめ
149　008　憎いからだをだきしめて
160　014　それがなぜ私の心をしめつけたのか？

177　015　手をにぎりしめて

しめ　占め
039　125　むしろあなたの占めてゐる空間に
065　009　沈黙が占めている空間に反響した。
134　011　一つの場所を占めようとして

しめあげて
070　029　形のない魂の叫びまでしめあげてしまう。

しめいてはい　指名手配
124　022　指名手配の一人は

しめころして　締め殺して
055　037　おれたちのベッドのなかで締め殺してしまったのだろうか

しめし　示し
054　163　胸にかがやく太陽の紋章を示しながら

じめじめした
064　017　じめじめした屋根裏では、

しめつ　死滅
188　063　死滅の予備知識も与えられて然るべきだ、といった方針のもとに。

しめつけた
160　014　それがなぜ私の心をしめつけたのか？

しめつける
068　011　睾丸をしめつける海と

しめった
026　022　しめった土地には
043　004　そのしめった風は吹きぬける
053　046　墓地のしめった黒い土をみつめながら
062　018　あなたはかすかにしめった灰の匂いを覆いかける
120　006　しめった土のにおい

しめている　占めている
065　009　沈黙が占めている空間に反響した。

しめている　占めてゐる
039　125　むしろあなたの占めてゐる空間に

じめん　地面
006　007　地面からそんな声がした
106　036　不吉な羽ばたきをして　地面を歩く黒い鳥の男たちもいる
145　003　何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに
164　009　足で地面をばたばた踏んで

しも　霜
004　009　時計が霜の花の上で鳴くと
061　096　氷と霜と蒸気と熱湯の地獄の苛責に
172　012　霜枯れた顔ばかりである

しもがれた　霜枯れた
172　012　霜枯れた顔ばかりである

しゃかい　社会
028　056　そこに一個の社会が工場が
100　020　ぼくらの共同社会からきりはなされていった
124　025　他の一人は　古典的な社会復帰者として
134　003　悪しき社会において
142　096　極度に不平等な特殊社会組織の
148　035　どのようにして戦後の社会をたたかいぬいてきたかを語りあったが、
160　071　アメリカ社会における成功の蔭にある失敗のさまざまな痕跡が
160　074　ところで　日本の社会の日蔭を歩む
188　048　正義の社会学であったり、深遠な歴史学であったりもするのだから、

しゃかいがく　社会学
188　048　正義の社会学であったり、深遠な歴史学であったりもするのだから、

しゃかいふっきしゃ　社会復帰者
124　025　他の一人は　古典的な社会復帰者として

じゃぐち　蛇口
112　019　おまえは今朝も蛇口のまえで

じゃくねん　若年
021　006　若年の日日に
021　021　若年の記憶は古くなり
021　024　若年のコイルを閉じてしまったが

じゃくはい　若輩
150　019　ようするに小心な若輩の似た者同士の集りで、

しゃくほう　釈放
142　066　国外追放を条件とした釈放の申し渡しに対して
142　069　精神病棟監獄から同時に釈放せよ　というものだった

しゃくほうせよ　釈放せよ
142　069　精神病棟監獄から同時に釈放せよ　というものだった

ジャケツ
005　036　ジャケツを着て歩み去る

ジャケット
010　009　その新しい設計こそ白い帽子と赤いジャケットの

じゃこう　麝香
159　011　かすかに衣ずれの音と麝香のかおりを残して

しゃこうじゅつ　社交術
041　010　社交術があなたを涸れさせたり育てたりしないうちに
054　083　見よ　あばかれた社交術の快楽と有頂天とを

しゃしん　写真
030　015　陰花植物とならんで写真にはいる
058　042　サーカスのむすめの写真をながめながら
059　009　わたしの机のうえの一枚の写真も
106　001　ありきたりの記念写真のスタイルで　三列にならび
145　023　「写真店の窓には曝された肖像の記念写真が　夢こそすべてであると知った時　もう肉体
148　045　ぼくたちはひとかたまりになって写真を撮った。
186　027　廿六年前に広島で撮った写真を、懇親会の席上で相良君から見せられてね

しゃしんてん　写真店
145　023　「写真店の窓には曝された肖像の記念写真が　夢こそすべてであると知った時　もう肉体

ジャズ
058　011　そこにはジャズがほそぼそとながれ

しゃせん　斜線
097　004　しかし雨を描いた動かない斜線は、

しゃそう　車窓
193　012　半世紀は車窓の景色であった

しゃだんされ　遮断され
018　013　帽子掛の下で遮断され

シャツ
041　111　物質で身を固め　破れたシャツで冷気を防いだ
061　116　洗濯したてのシャツをよごすほどにも
066　030　ワイシャツの袖をまくった腕であった。
121　002　古シャツはぬぎすてよう

シャッター
133　011　おびえた窓枠のかげシャッターのうしろ
183　016　銀行はシャッターを下していて

シャドー・ボクシング
147　020　口笛を吹きながらするシャドー・ボクシングが死のレッスン。

しゃぶり
106　021　かれの指の爪貝は　恋人たちがしゃぶりたがるほど美しい

しゃべら　喋べら
164　023　ぼくは喋べらなければならない
180　047　ひとことも喋べらぬことだ

しゃべらぬ　喋べらぬ
180　047　ひとことも喋べらぬことだ

しゃべりかける　喋べりかける
054　129　僕は眼をかがやかし涛のように喋べりかける

シャベル
001　001　青柄のシャベルで

しゃべる　喋る
085　018　奇怪な造語で喋る連中の頭を踏みつけよう

シャボン
005　008　明るいシャボンの中から転がり出た

ジャム
013　017　ジャムを食ってゐると

しゃめん　斜面
041　005　意志は荒い山肌の斜面からむけてくるのか
060　002　斜面に枯草がそよいでいたりする
062　043　この小さな丘の斜面に寝そべっていると

じゃらじゃら
087　013　鎖をじゃらじゃらさせたり

じゃり　砂利
130　013　砂利が一粒ずつ光りはじめた

しゃりょう　車輛
040　014　すべての車輛は動かない
186　044　（どの車輛にでも乗っている可能性があった）

しゃりん　車輪
107　005　車輪や道もうたっていた

ジャンク
007　001　ジャンクの帆が蝙蝠のごとく羽博いて　ランプの虹がひろがる

シャンデリア
189　034　シャンデリアの天井に大きくひびき

ジャーナリスト
124　020　（ジャーナリストがテーブルを叩いて怒っている）

しゅ　主
014　026　おお主よと叫んだかは考えてみたらいい
021　010　賢明な若い主君は
028　023　鳩とともにおお救世主の銅像の髭にもついて
045　005　主（あるじ）は　ふと雨の顔になり
045　014　主（あるじ）は　ひそかに想ふ
045　019　畳よりも青い顎の　若い主はしばし呆ける
085　021　理想主義者や清貧家を蹴とばし
091　014　きみの季節は飼主のない猟犬のように飢えている
101　053　歌う者のいない咽喉と　主権者のいない胸との
128　049　「民主主義はイデオロギーではなく
139　006　どうしてもその主の姿を尋ねあてることができない
142　097　非合理に機能する官僚的権威主義を全面的こはびこらせながら
152　008　造物主の息がかかっていて
159　004　細くすきとおる声をかけてきた主は
167　022　肉の悲しみを知りつくした主は
186　072　時間は偉大な造物主だからね

じゆう　自由
041　141　楡の幹には自由な樹液がのぼりはじめた

072　021　みんなどうしてこんなに自由にふるまうのか
128　016　自由の死に
128　024　「円の切上げより自由化が先」
142　072　卑劣さを代償とした自由を受け入れようとはしないで
142　075　拷問から解放され　自由を得るためには
150　071　個人にとって、自由は、
166　012　自由とは何かは太陽のように明白だったのに
166　016　自由の意味をもてあましている
183　023　すこし足の不自由な老人がほほえみかける

じゅう　銃
006　001　弾痕からシズクが落ちてるが　カレラは銃器を埋めて
008　002　機関銃はマッチを擦って　乾草みたいな白い雲に火を
026　006　そのとき銃眼の奥から睨む
054　006　そして銃を担ったおたがいの姿を嘲けりながら
101　014　なにものよりも　おのれ自身に擬する銃口を
102　006　みんないっせいに銃剣の襖を立ててくれ
112　014　命令一下たちまち整列し　黒い銃剣の林をつらね

しゅうあくな　醜悪な
036　029　迂闊にも醜悪な街の溝の中へ

しゅうい　周囲
030　032　花の実たちが実る周囲に実る別の花の実たち

じゅういちがつ　十一月
061　194　十一月の寒空に、わたしはオーバーもなく、
069　001　十一月の凍った夜空に
069　009　十一月の凍った夜空に
069　021　十一月の凍った夜空に
069　037　十一月の凍った夜空に

しゅうう　驟雨
012　012　ぎんの驟雨の中で
054　156　光はひとつの原子に　強烈な夏の驟雨にかわってゆく

じゆうか　自由化
128　024　「円の切上げより自由化が先」

しゅうかく　収穫
170　003　眠れぬ夜の収穫は

じゅうがつ　十月

105　011　九月ポーランド、十月スエズ、ハンガリー、
105　015　九月十月には、まだまだ遠い三月。

しゅうかん　習慣
007　004　煤けた町は古い習慣で壺の沈黙を　それはいつまでも黄色い河の
041　077　うす呆けてゐれば　習慣となった苦痛も
044　004　帰するところ一にして　祈りは慧き習慣（ならわし）の光明なり。
053　060　夢を見ながら眠る習慣が　こんなに悲しいものとは思いませんでした
093　009　酩酊は何によらず悪い習慣だが
103　019　風土とか習慣によって去勢されない
152　020　習慣のロボットになるな
156　017　習慣みたいな西洋人は
161　011　それがこの世の習慣である
166　003　「きみ」と呼んだりする習慣があって

じゅうがん　銃眼
026　006　そのとき銃眼の奥から睨む

じゅうき　銃器
006　001　弾痕からシズクが落ちてるが　カレラは銃器を埋めて

じゅうきゅうさい　十九歳
068　013　十九歳の男は　海にむかって
068　033　十九歳に別れを告げた男は

じゅうきょ　住居
167　016　住居は確実に古びてしまった

しゅうきょう　宗教
188　046　時には、道徳や、宗教の立派な代理になるうえに、

しゅうきょく　終局
046　051　橋上の人よ　美の終局には

じゅうけん　銃剣
102　006　みんないっせいに銃剣の襖を立ててくれ
112　014　命令一下たちまち整列し　黒い銃剣の林をつらね

しゅうごう　集合
186　066　空間が空間であるうちは物の集合にすぎないから

じゅうこう　銃口
101　014　なにものよりも　おのれ自身に擬する銃口を

じゅうごばい　十五倍
128　023　鋼鉄六倍　自動車十五倍

じゅうごふん　十五分
174　009　きみは意外に元気な様子で近況を語ってくれ、心暖まる十五分か二十分であった。

じゅうさんにん　十三人
148　031　同じ輸送船でスマトラ島に送られた転属組の十三人だった。

じゅうじ　十字
053　016　これがわたしの小さな十字架です
058　028　十字路には警官が立っていて
078　021　小さな南十字星のまわりを
127　022　くるめく十字の

じゅうじ　十時
148　039　十時をすぎると蒲団が敷かれた。

じゅうじか　十字架
053　016　これがわたしの小さな十字架です

しゅうじん　囚人
113　019　シベリアの囚人に
167　023　袋を着せられたソロフキの囚人みたいに
167　039　ソロフキの囚人の手は
167　059　うなだれた囚人の目尻には

じゅうすうびょう　十数秒
152　031　十数秒で黒い灰になる

しゅうせい　修正
113　050　修正に修正をほどこす整形手術で

しゅうせい　終生
051　025　影　終生よりそって離れぬ影

じゅうたん
097　009　毛深いじゅうたんの暗号のなかで、

しゅうだん　集団
054　060　第二流の民族　集団　人物は

じゅうたん　絨毯
102　014　毛深い夢の絨毯に戻ってきてくれ

しゅうちゅうし　集中し
106　023　そこに集中し隆起して　あるフイジカルな高貴さの象徴となり

しゅうでんしゃ　終電車
069　040　終電車のレールのひびきは

じゆうな　自由な
041　141　楡の幹には自由な樹液がのぼりはじめた
183　023　すこし足の不自由な老人がほほえみかける

じゅうなんに　柔軟に
037　009　肉体よりも柔軟に

じゆうに　自由に
072　021　みんなどうしてこんなに自由にふるまうのか

じゅうにく　獣肉
070　039　喰いちらした獣肉の小骨や

じゅうにじ　十二時
003　004　今晩十二時に出帆します
015　017　十二時を打っても
069　025　十二時十分　針の眼が

じゅうにじじゅっぷん　十二時十分
069　025　十二時十分　針の眼が

じゅうにねんの　十二年の
142　073　十二年の刑期をつとめあげるために監獄に戻っていったのである

しゅうねん　執念
094　002　見えがくれの執念につけ狙われながら

じゅうねん　十年
062　008　二十年もむかしに死んで
092　008　もう二十年たつ
096　015　文明色なら　もう古くなった三十年代流行のセダンの
112　003　二十年か
127　010　三十年前か
128　041　十年戦えればアラブが勝つがね　え？

139　008　五十年の記憶は闇また闇。
160　015　二十年も昔に記憶の底に沈んだ詩人が
160　063　三十年代末から四十年代にかけて活躍し
173　040　はてさて　七十年代も終りですか
174　011　この三十年間、ぼくはきみに一度も電話などしたことがない、ちょっぴり心が痛み、それはなぜかと考え出すと、疑
189　019　誰とも口をきかずに十年を生きればよい
189　020　十年の早さ
189　021　それがわかるのは十年たってからである

じゅうはち　十八
181　011　十八の小娘を相手に

じゅうぶん　充分
041　013　充分に人目を惹き
054　093　そうだ　これで僕の孤独も充分というものだ
093　006　充分な準備がいる
125　021　密室のドアはどれほど厚くても充分とはいえない
145　009　そこにもあったトーモロコシの毛のそよぐ丘陵をエンジェルがうまれるのに充分な広さ

じゅうぶん　重文
188　084　日本の重文とされている民家への憧れが、

じゅうぶんな　充分な
093　006　充分な準備がいる
145　009　そこにもあったトーモロコシの毛のそよぐ丘陵をエンジェルがうまれるのに充分な広さ

じゅうぶんに　充分に
041　013　充分に人目を惹き

しゅうまつ　終末
053　052　なんでも終末があって発端があるのでしょう

じゅうまん　十万
072　004　十万にのぼる人々が
072　065　十万のひとが残していった大きな寂寥が
151　009　月々の出費は切りつめて約六十万

じゅうまんして　充満して
167　057　人くさい息が充満しているうちは

じゅうまんの　十万の
072　065　十万のひとが残していった大きな寂寥が

じゅうゆ　重油
073　007　あちこちに重油がながれ

しゅうようじょしすてむ　収容所システム
142　042　監獄・収容所システムにほかならぬ　と
142　057　監獄・収容所システムに隠れ場所はない

じゅうよにん　十四人
184　007　そして十四人の大工を自ら指揮して

じゅうよんせいき　十四世紀
160　041　十四世紀のスコットランドの詩を口誦さみながら

じゅうりんする　蹂躙する
008　014　蹂躙するだらう

じゅえき　樹液
009　010　褐色の皮膚の下に樹液は涸れてゐる
025　039　透明な樹液の中で
026　018　樹液の触手は
041　141　楡の幹には自由な樹液がのぼりはじめた

じゅえきの　樹液の
025　039　透明な樹液の中で
026　018　樹液の触手は

じゅくしかけた　熟しかけた
055　045　なかば熟しかけた未来にむかって

しゅくせい　粛清
113　053　ーー沈黙が粛清にやってくる

しゅくふく　祝福
054　102　この呪わしい夜を祝福しよう
125　019　祝福はくるが遅すぎるだろう

しゅくふくしよう　祝福しよう
054　102　この呪わしい夜を祝福しよう

しゅくめいてき　宿命的
041　084　宿命的な輪のなかで

しゅけんしゃ　主権者

101　053　歌う者のいない咽喉と　主権者のいない胸との

しゅごしゃ　守護者
142　122　個人の平和と　世界の平和と　人類そのものの　真の守護者たりうるのだ」と

しゅし　種子
026　023　芽生えのない種子が
044　010　新らしい種子が新しい土地に播かれつつあることを。
114　004　一粒の種子も残らない
127　015　村の思想の種子がこぼれて、
140　019　忘られた種子のように

しゅじゅつ　手術
113　050　修正に修正をほどこす整形手術で
188　018　手術をせねばなるまいと、気にかけています。

しゅつげきし　出撃し
112　015　敵にむかい黙々と出撃し　一夜あければ骨となる

しゅっけつしている　出血している
100　042　たえまなく出血している内部の世界で

しゅつげんする　出現する
065　015　そこに、あたらしい岩山が出現するまで

しゅっさん　出産
188　061　出産に関する教育がほどこされるならば、

しゅっぱつ　出発
061　062　出発の時よりも貧しくなって、
115　002　出発するひと
145　022　行先をきめないで出発し到着したときに旅は終っていた
148　048　それから、少年の日のように月の砂漠へ出発した。

しゅっぴ　出費
151　009　月々の出費は切りつめて約六十万

しゅつぼつする　出没する
172　011　心に出没するのは

しゅと　首都
101　031　どの首都からもへだたった　どんな地図にもないところだ
123　011　もう一つの首都を夢みて

193　024　ときわの首都は世界の影を映している

じゅなんしゃ　殉難者
063　025　ぼくが殉難者の澄んだ眸をしているとしたら……

しゅはい　酒杯
158　015　酒杯をかたむける

しゅみ　趣味
093　010　かかる読書法は良い趣味以外のなにものでもない
128　044　神なければ　すべては趣味の問題だ！

じゅもく　樹木
030　004　無造作な天体には樹木が茂る
031　005　目覚めてゐる石や眠ってゐる樹木は
032　008　樹木の影は怯え
036　001　おそらくは実らぬであらう樹木
036　011　みずみずしい樹木と花花の間で
036　013　これらの樹木はあまり好まぬ
036　020　おそらくは実らぬであらう樹木
036　021　これらの樹木の下の水べりに
036　024　おれの影はだんだん樹木の影に似てきた
038　005　樹木たちは
039　068　いとしい樹木も逃げはしない
039　130　樹木も濡れてゐる柱廊も
039　149　どんな樹木を育ててゆくのだらう
041　118　いつのまにか樹木は枯れてゐた
041　119　誰のものでもないと思ってゐた樹木
041　120　貧弱な幹に大きな葉をつけてゐた樹木
041　121　それがあなたの樹木だった
046　003　啼泣する樹木や
048　002　家や樹木のやわらかな影をおとして
054　096　まるで僕たちに呼びかけるかのような樹木のそよぎ
109　003　花を咲かせた樹木が

じゅもん　呪文
143　013　狭心症の呪文と

しゅら　修羅
120　016　修羅のくるまもみえない

しゅりょう　狩猟
105　005　魚釣りには早すぎ、狩猟には遅すぎる三月。

じゅれい　樹齢
162　008　貧しさの樹齢そのものと化してから

シュロ
014　013　団扇みたいなシュロの葉の下で

じゅわき　受話器
028　008　受話器から突然噴き澪れたりする
028　067　白い事務所の受話器が

シュワルツ
160　012　デルモア・シュワルツが一九三八年に書いた短篇を読んだ
160　054　私が知りうるのは　シュワルツが一九六六年に五十三歳で死んだことだ

じゅん　純
010　007　やがて純白の雲の中にチョコレエトの肩が見えなくなる
011　016　純な一輪の白薔薇について
028　003　緑の影はいつもガラス管によりそってゐた純粋な頭の鈍い速度について
041　080　純潔な空気が咽喉を塞ぎ　見えない量に苛まれて
046　020　たとえ純粋な緑が　墳墓の丘より呼びかけようと
052　014　純潔だった姉さん！
061　115　だから純潔を汚すことだって
066　030　ワイシャツの袖をまくった腕であった。
067　014　純粋な「なぜ」は
072　032　きわめて純粋で、抽象的だ
093　022　かれの眠りは純潔の匂いがする
094　001　身をくねらして走るカワヘビの
112　018　あの純粋の化身はどこへ失せたか
113　013　単純でなくちゃならない
113　042　なんでも単純だったから
128　046　バウワウ言語　デインドン言語　プウプウ言語
129　017　まぶしい食卓のワイングラスの影と
135　002　純粋で新鮮な嘘となれ
156　020　言葉の純度は低く
160　012　デルモア・シュワルツが一九三八年に書いた短篇を読んだ
160　038　たいせつなのは感情の純粋な喜び！
160　054　私が知りうるのは　シュワルツが一九六六年に五十三歳で死んだことだ
162　021　そこで一樽のワインとなら
176　007　純白のシーツに

しゅん　筍
146　056　暗がりで筍みたいにずんずん伸びていくので

じゅんけつ　純潔
041　080　純潔な空気が咽喉を塞ぎ　見えない量に苛まれて
052　014　純潔だった姉さん！
061　115　だから純潔を汚すことだって
093　022　かれの眠りは純潔の匂いがする

じゅんけつな　純潔な
041　080　純潔な空気が咽喉を塞ぎ　見えない量に苛まれて

じゅんど　純度
156　020　言葉の純度は低く

じゅんな　純な
011　016　純な一輪の白薔薇について

じゅんぱく　純白
010　007　やがて純白の雲の中にチョコレエトの肩が見えなくなる
176　007　純白のシーツに

じゅんぱくの　純白の
010　007　やがて純白の雲の中にチョコレエトの肩が見えなくなる
176　007　純白のシーツに

じゅんばん　順番
188　036　いずれ、順番がくるだろうと思いながら暮しているが、

じゅんび　準備
093　006　充分な準備がいる
187　019　準備はすべてととのいながら

しょ　書
027　020　椅子は書籍の上に乗ってゐる
039　014　書籍をなげうって
041　127　書物にくっつき
057　002　1886 と書いてあった　その年から
057　011　1850 と書いてあった　その年から
061　014　書籍や窓やペンをすてて、
068　035　手紙を書いた
091　011　新聞社の屋上たかく舞っている伝書鳩の
093　010　かかる読書法は良い趣味以外のなにものでもない
100　014　ぼくは書きつけた
100　034　三段階のすじ書きどおりに

106　035　「おれは詩を書いているんだ」　カアカアカアカアカアカアと
113　036　「自殺します」と手紙を書いたら
142　002　記録されず　書かれず
142　062　その著書をフランスで刊行した一九四二年生れのブコフスキーは
142　078　反祖国的ないかなる文書に署名してもいいと思っていた
143　015　詩を書くより死んだほうがましだ
148　005　二人の娘を育ててきたと書かれていた。
150　002　私は　囲繞地　というエッセイの中で、こんなことを書いた。
150　015　三人称で戯画的に書いているが、
150　024　自分の書いたものがまるでつまらなかったことである。
150　051　彼は我々の雑誌の創刊号に、玉の井の娼婦と客との交渉を扱った「泥沼」を書き、
150　059　しかし、それから彼は、もう小説を書かなかった。
150　074　つい、書かでものことまで書いてしまった。
158　035　ぞっとするような詩を書き終えることで
158　037　苦しんでまで詩を書こうとは思わない
160　012　デルモア・シュワルツが一九三八年に書いた短篇を読んだ
165　025　わたくしは父の書いたものを理解せず
167　012　話したり書いたりすれば素晴らしいライフも
167　021　古今の書を読み
167　049　塵埃のように書籍を衣類を調度類を
167　075　万巻の書は不治の病いとなり
170　009　（なんでも書けるなんてとんでもない
170　010　「何も書けぬ」がほんとうのところだ
170　026　物を書く空気になじめなくなっている精神の
174　006　早く頑迷固陋にかえりたい。あと三カ月で六十才」と書いてあった。
180　026　ッセージとよみました」と書いた筈、それは私だからそうよめてしまう、というのがどうでもいいことで、貴方
180　033　忘れ難い人のために書いた
188　067　ずいぶん起っているらしいです」と書いていたが、

しよう　枝葉
109　002　芽を出し、枝葉をひろげ

しょうえん　硝煙
081　008　強い硝煙のにおいが立ちこめているので
102　003　いまはなつかしい硝煙とその匂いのなかに
187　012　ひとすじの硝煙のにおいを

しょうおう　照応
046　017　眠れる波のしずかな照応のなかに

しょうがい　生涯
071　043　われらはながい生涯をもって測ったりする
159　017　かれの生涯にはついぞなかったのに！

じょうき　蒸気
028　009　哀訴の蒸気を吸殻とともに皿の上に拾てる三重の硝子の向ふの鐵格子の中の
061　096　氷と霜と蒸気と熱湯の地獄の苛責に

じょうきょう　状況
142　082　彼がおかれている状況は　西側の同時代人のそれより
142　101　ブコフスキーやアマルリクが直面した状況にくらべたら
148　018　極限状況のナンセンスに、

しょうきん　賞金
160　033　印刷の不備でくじに外れた老楽師に　大当りの賞金を全部やってしまう

じょうけい　情景
054　049　一九四七年の一情景を描き出そう

しょうげん　証言
142　013　マルチェンコの証言によれば

じょうけん　条件
142　066　国外追放を条件とした釈放の申し渡しに対して

しょうけんまん　証券マン
183　018　若い証券マンが一人で物思いに耽っている

しょうこ　証拠
125　024　幸福である　証拠はない
142　105　巨大なものの力が　個人の信念より永続するという証拠はない
186　058　（動かぬ証拠の記念撮影）

しょうご　正午
098　026　それは昨日の正午
148　054　正午は安全な時刻である、

じょうざい　錠剤
125　012　弾丸よ　言葉よ　錠剤よ

しょうさん　賞讃
054　010　惜しみない賞讃の言葉をおくった

しょうじ　障子
180　007　障子に映る薄陽をむけて

しょうじきな　正直な
106　032　正直な諦めを抱いて　立去るべきではないだろう
150　016　私自身は、かなり正直な自画像のつもりだった。

しょうして　称して
160　068　「蛇の穴」と称して大学にもぐりこみ　教鞭をとったこともあるが

しょうしゃ　勝者
189　001　陰険な勝者は

しょうじょ　少女
006　010　少女が碧い眼をした人形を抱へて出てきたが
007　013　阿片の軽艇（ボート）は霧の中へ青い泡を残して去るべく一人の少女を誘拐
069　004　青白い少女が
069　005　もうひとりの少女に話していた
069　011　この少女のように
069　019　少女の記憶は
069　039　ふたりの少女は翼の影をよせあった
082　018　唖の少女になって！
100　061　ペイヴメントには水玉模様の少女があふれ
176　001　少女は
176　014　少女の頬と肩になぶりかかる
176　017　悲しいかな少女は
176　031　少女はふさふさした垂れ髪で

じょうしょう　上昇
028　016　熱度計の上昇につれて
051　016　下降　そして不吉な上昇カーブ
189　022　自己を否定するたびに上昇をつづけて

しょうしょうと　少々と
179　002　たべのこしの黒パン少々と

しょうしんな　小心な
150　019　ようするに小心な若輩の似た者同士の集りで、

じょうずに　上手に
084　038　かれにかわって上手にすすり泣くのですよ
155　030　一日を上手に処理する

しょうせつ　小説
098　011　読みさしの小説のつづきは
142　094　オーエルの未来小説に描かれた　党　は

150　059　しかし、それから彼は、もう小説を書かなかった。

しょうぞう　肖像
029　017　樹樹のいろが肖像を作った
145　023　「写真店の窓には曝された肖像の記念写真が　夢こそすべてであると知った時　もう肉体

しょうそく　消息
128　064　「遠くからのよい消息は
178　005　たしかな消息という

じょうたい　状態
005　032　人々は仮死の状態であった
174　004　「病気がこんなにこたえるとは、思ってもいませんでした。春からノイローゼ状態で我ながら呆れかえっていま

しょうたい　正体
186　032　（時間の正体を見たんだ）

しょうたいじょう　招待状
148　029　元戦友から招待状がとどいた。

じょうだん　冗談
134　005　冗談はやめてくれよな

しょうちょう　象徴
106　023　そこに集中し隆起して　あるフイジカルな高貴さの象徴となり
106　031　詩人なら孤狼な口髭とか　大切な象徴の鼻について
173　031　それで近代の伝説は消え　象徴は解体する

しょうてんがい　商店街
028　060　都会の屋根の下よ商店街の商人たち

しょうてんして　昇天して
170　019　やがては星に昇天していく光の粒は

しょうてんする　昇天する
017　016　蛞蝓が樹から昇天するのを待つかね
153　015　ゆっくり昇天する

しょうにん　商人
028　060　都会の屋根の下よ商店街の商人たち

しょうねん　少年
009　004　ポケットを膨らませる少年は

010　001　自転車に乗ってゐる少年は自転車のスピイドをもつ
010　003　有効なスピイドについて考へることを欲する少年は一個の白い帽子をかぶってゐる
010　005　日の匂を発散させる少年は青い麦の芽である
010　014　パイプを握って雲の中から生れてきた少年は
010　020　手をあげた少年の五指の間から
059　001　見知らぬ美しい少年が
059　011　あの美しい少年は何処へいったか
059　017　美しい少年を失った母が
059　023　おもいみだれた母と美しい少年のボートが
059　028　波にさらわれた母と美しい少年を許せ！
062　031　わたしは昔の少年になってどこまでも追いかけてゆくだろう
089　009　橋の下には　夏の少年が
089　013　けれど死んだ眼をひらいた少年には
089　021　すると少年の冷たい呼吸で
130　007　美少年に見おぼえはない
148　048　それから、少年の日のように月の砂漠へ出発した。
167　041　少年期の貧しい体験から

しょうねんき　少年期
167　041　少年期の貧しい体験から

じょうひんな　上品な
033　004　上品な耳のうしろで
084　022　いともお上品な天使たちが

しょうふ　娼婦
150　051　彼は我々の雑誌の創刊号に、玉の井の娼婦と客との交渉を扱った「泥沼」を書き、
150　052　続いて第二輯に逃亡した娼婦の心理を描いた「滅落」を発表したところで、
150　063　娼婦の悲惨さを、かなりの密度で正確に捉えたというだけで、

しょうみし　賞味し
186　081　それらを賞味しながら

しょうめつ　消滅
126　003　とっくに消滅していたろう」
167　080　よりよき消滅を迎えようではないか
172　003　ひたむきなものは消滅した

しょうめつして　消滅して
126　003　とっくに消滅していたろう」

じょうよく　情慾
052　013　情慾に飢えたわたしの魂をやさしく愛撫する

しょうらい　将来
142　103　少しの犠牲で将来の破滅を防げるかもしれない）

しょうり　勝利
101　026　勝利を信じないぼくは……
101　063　勝利を信じないぼくは　どうして敗北を信ずることができようか
112　027　おれたちがどんなに大きく敗れ　おまえたちがどんなに小さく勝利したか

しょうりした　勝利した
112　027　おれたちがどんなに大きく敗れ　おまえたちがどんなに小さく勝利したか

じょうりゅう　上流
073　028　メコン河の上流へと

じょうりょくじゅ　常緑樹
172　020　常緑樹にしたたる日光の蜜が

じょうれん　常連
148　012　新宿の同じ酒場の常連で、同じ雑誌の仲間だったが、

しょうわじゅうろくねん　昭和十六年
100　011　それは昭和十六年の冬のことだ

しょぎょう　所業
162　015　恍惚の所業であったかもしれない

しょくえん　食塩
085　025　インクや涙や食塩で錆びたりしない

しょくじ　食事
189　028　これからひとりで食事にかかるところだ

しょくしゅ　触手
025　020　わづかにさわぐ葦の触手を見る
026　018　樹液の触手は

しょくたく　食卓
026　008　食卓は北方に白い布を垂らし
055　043　朝の食卓につく
065　005　壁のそとにせまった。食卓には
070　038　ぐるぐるまわる食卓があるだけなのだ、
129　017　まぶしい食卓のワイングラスの影と

179　001　粗末な食卓のうえに

しょくぶつ　植物
012　015　青い舌を垂らした植物の蔭から
026　017　おびただしい植物のまへで立止まると
026　031　植物の手の蔭へと移行する
030　013　あれは植物たちの翳りの影か
030　015　陰花植物とならんで写真にはいる
120　004　植物のみどり
148　052　グロテスクに繁茂する熱帯植物を観賞した。

しょくみんち　植民地
028　037　それは植民地のためではない
074　004　東洋の名もない植民地の海にうかび

しょくもつ　食物
165　003　ゆっくり食物を咀嚼する口の動き

しょくれき　職歴
148　036　結局、めいめいの職歴と子供を何人作ったかということにつきていた。
151　004　大学を中退し職歴はほとんどなく

しょくん　諸君
013　025　ネムの木は寒いよ諸君
017　041　我々の樹を救へ諸君よと
124　016　それが　諸君の旧式な
128　051　わかりましたか諸君

しょけいされる　処刑される
113　033　喜んで処刑される者もたくさんあった

しょじょ　処女
070　010　水死した処女の乳房をさぐりつづける。
120　011　処女の乳房のように
156　038　完全に処女性を保っている

しょじょせい　処女性
156　038　完全に処女性を保っている

しょせき　書籍
027　020　椅子は書籍の上に乗ってゐる
039　014　書籍をなげうって
061　014　書籍や窓やペンをすてて、

167　049　塵埃のように書籍を衣類を調度類を

しょねんへい　初年兵
166　011　いのちもいらない初年兵の頃には

しょほうせん　処方箋
050　017　「それがぼくたちの古い処方箋だった」と呟いて……

ジョホール
112　008　ジョホールの血の海峡　ブキテマの焦げた丘

しょめいして　署名して
142　078　反祖国的ないかなる文書に署名してもいいと思っていた

しょめいしない　署名しない
054　143　非ジェファーソンは独立宣言に署名しない

しょもつ　書物
041　127　書物にくっつき

しょゆう　所有
028　054　わたしたちが所有するすべての宝よ
029　010　一つの海を風景の中に所有した

しょゆうする　所有する
028　054　わたしたちが所有するすべての宝よ

しょりする　処理する
155　030　一日を上手に処理する

ジョン・レノン
185　001　ジョン・レノンが射たれて死んだ、と

ショーウィンド
058　033　指輪や装身具の飾ってあるショーウィンドをのぞいて

しら　知ら
007　002　あたり　見知らぬ老婆が咳をするのはわれらにかかわりのないこ
014　029　頭髪を伸ばしてゐるのを知らんかね
015　010　舶来煙草のことを知らない
059　001　見知らぬ美しい少年が
061　105　誰も知らない。
063　029　ぼくたちは汚れを知らぬ微笑をうかべる

068　034　見知らぬ海辺の女に
070　046　誰も知らない寝室の
070　048　誰も知らない寝室の
113　021　知らされていた
134　008　この群集の行方は誰も知らない
142　090　知らんふりしたところで投獄されはしない
148　033　硫黄島に送られ、全員戦死していたことをはじめて知らされた。
155　021　知らない顔をかきわけ
164　005　あるか　あったか知らないけれど
166　029　一人の女も知らずに
173　051　死を知らないなんて素敵ではないか
180　025　ら……。貴方に判らなかろうと、もう少し付け足すと、昨年は形相の意味も知らなかったということ。私は「メ
182　012　病気も退屈も知らず

*ジライ*花
008　005　*ジライ*花を観賞するときも　空にはポンポン花火が上

しらされ　知らされ
113　021　知らされていた
148　033　硫黄島に送られ、全員戦死していたことをはじめて知らされた。

しらない　知らない
015　010　舶来煙草のことを知らない
061　105　誰も知らない。
070　046　誰も知らない寝室の
070　048　誰も知らない寝室の
134　008　この群集の行方は誰も知らない
155　021　知らない顔をかきわけ
164　005　あるか　あったか知らないけれど
173　051　死を知らないなんて素敵ではないか

しらべる　調べる
148　047　数を調べる最後の点呼だった。

しらむ　白む
039　112　空が白む

シリア
084　028　それはもうシリアやトリエステの軍隊よりも

しりあい　知合い
189　018　知合いもまったくいなくなったから

しりあった　知りあった
058　012　むかし酒場で知りあった女が

じりじりと
051　034　そしてじりじりと胸の上に倒れかかってくる。

しりつくした　知りつくした
167　022　肉の悲しみを知りつくした主は

しりょ　思慮
180　045　思慮にあまって立ちつくすこともあるだろう

しりょう　死霊
101　042　死霊となってさまよう兵士たちよ

しりょく　視力
047　017　おとろえた視力の闇をとおして
188　004　どうも、視力が衰え、

しる　汁
039　117　葡萄の汁は

しる　知る
039　083　美しい火災の意味を知るだらう
173　021　耻を知るかぎりにおいて

シルク
012　001　柔かいシルクの風に

しるし
191　008　生きている自然のしるしに

しれ　知れ
017　035　一言も觸れなかったかも知れない
036　030　つき落されるかも知れん
039　022　もはやどんな力も持ってゐないことを知れ
041　044　怪しい手紙には翅が生えてゐたのかも知れぬ
046　040　行方の知れぬ風のことばにいつまでも微笑を浮べてゐようとは
054　035　行方の知れぬ風の寒さに身ぶるいするのだ
133　018　なんじの心の愛する者を知れりと
133　028　数知れぬ花が袖にこぼれるところまで。
165　032　測り知れない深さで
180　034　測り知れない現実的形態を網にかけて

しれない　知れない
017　035　一言も觸れなかったかも知れない
165　032　測り知れない深さで
180　034　測り知れない現実的形態を網にかけて

しれぬ　知れぬ
041　044　怪しい手紙には翅が生えてゐたのかも知れぬ
046　040　行方の知れぬ風のことばにいつまでも微笑を浮べてゐようとは
054　035　行方の知れぬ風の寒さに身ぶるいするのだ
133　028　数知れぬ花が袖にこぼれるところまで。

しろ　城
081　006　宙にうかんだ夢魔の城
152　028　きみの城にそっくりだから
187　029　王城はゆらぐかとみえ

しろ　白
001　011　白い頸の猫は
003　014　逃げてゆくのは白い犬だ
004　002　机の上は　すでに白い雪である
004　004　白い蝋燭の中に住まってゐた
005　013　白いちぶさの傾斜地をかけ上れ
005　021　白い翼が生える
006　009　すると白い翼をつけた一羽の
007　016　あ見給へ　昏の河の上を歯を剥いた白馬が乱れるではないか
008　002　機関銃はマッチを擦って　乾草みたいな白い雲に火を
009　013　白い歯で噛むでも
010　003　有効なスピイドについて考へることを欲する少年は一個の白い帽子をかぶってゐる
010　004　白い帽子は頭のアリカを教へるとともに日の匂を発散させる
010　007　やがて純白の雲の中にチョコレエトの肩が見えなくなる
010　009　その新しい設計こそ白い帽子と赤いジャケットの
011　016　純な一輪の白薔薇について
012　008　白い蝶よ
013　015　白い蝶は逃げたが
014　001　ガラス窓から白い手たちが
015　020　白い砂漠の上に住んでゐる
016　003　白いレグホンたちよ
017　009　白い唾を吐きかけ
017　018　眼が白くなって天を睨めたが
019　005　白い大理石はやはり冷たい
020　010　白い灰となり
021　026　白い雲の中で眼をつぶり

023 001 磨かれてゐる白い骨の柱に
023 007 不幸に支へられた白い肉体は
023 016 恐怖の白い歯を投げる
024 003 る　血液を噴き上げている白い管は輝やける噴水の愛撫をう
025 008 海は黒く岩壁は白かった
025 009 白昼ともなれば
025 034 影にかくれて白いカラをつけて
025 050 白亜の建築が聳え立ち
026 008 食卓は北方に白い布を垂らし
028 005 白い事務所の内側の時計の速度は
028 010 白い歯型から
028 021 幾何学が白い肉のやうな丘に
028 067 白い事務所の受話器が
029 011 花花も昔のままに白く
030 026 零囲気のほとりに佇んでいる白いもの
030 031 だからみどり色の白さと言ってもよい
033 002 だが白いものは
035 008 白い床のうへに
036 007 白く美しい歯をもたぬから
036 017 噴水と石像のある静かな白昼よ
039 001 白く聳えたつ
039 104 白い墳墓の方へ
039 112 空が白む
040 011 白い雨がとほってゆく
041 115 白昼は掠められ
043 010 白く凍った地図のうへを
046 015 あなたはとほい橋の上で　白昼の花火を仰いでゐる
048 030 白くあたたかい海
054 127 僕は突如白熱する
054 131 空虚な額縁のなかで白い雨が乾いている
061 040 青白いサラリーマンが歌っていた。
061 151 同じ迷宮の白い渦のなかに消えてゆく。
062 016 大きすぎる白い屍衣を脱ぎ
065 018 空虚であった。白い翼をつけた女が
068 020 手まねきする白い波を見た
069 004 青白い少女が
070 056 なんという青白い顔をしているのか
070 060 誰だ！　青白い霧の顔で
072 017 青、赤、黄、白の運命の使者たち
072 036 赤帽が白帽をひきはなした
072 048 白帽が赤帽をひきはなした
072 056 どうして、こんな明白なことがわからなかったのか
073 013 ぼくらは白衣の亡霊となって

074	006	白布につつまれた屍体が
076	019	きみの青白い身体はみるみるうちに
077	021	青白い記憶の炎につつまれて
078	016	白くかろやかな翼になりゆくことか
082	003	八月は海辺にのこる白い墓
086	012	白い骨
087	007	そらとぼけた白内障の目をむき
091	012	血にぬれた白い翼からうまれてくる
094	024	遠く近くハイネズの原に打ちよせるのはアフリカを白くする波だ
098	020	その白い手のように明るく清潔にみえる
101	041	白くさらした骨をふきよせる夕べに
108	006	白いしじまのハンモック
108	026	馬上の人も白髪となる
112	026	真白な花婿の胸をした戦友よ
128	071	白いテープがうず高く
129	013	白紙の本をめくる
130	003	河原にほの白く浮んでいる
133	028	数知れぬ花が袖にこぼれるところまで。
139	001	白い月のえまい淋しく
152	023	まだ綺麗な白い頭とが仲よくならんでいて
154	008	苔むす岩間に白い滝を忘れてきた
166	012	自由とは何かは太陽のように明白だったのに
170	012	さびしい男の朝の独白）
174	019	ぼくは黒を持ち確実を三隅を占拠したが、中央の白が厚く、ずるずると敗けてしまい
176	007	純白のシーツに
176	023	誘惑の手はあくまで白く
181	035	冷えた白ブドー酒と
185	005	一瞬、あたりが真白になった
185	011	いたるところに沈黙の空白ができた
185	024	その空白がどれだけの負担になるかは
188	005	白内障の眼を、なるべく休めるようにしていますから、
189	029	塵一つない白い卓布
192	016	震えている足許に眼をおとすと、白い四角の標識に、明りが仄かにともっていて、
192	017	よくよく見れば、そこから一米間隔くらいで、白い明りが点々とつづいているのだ。迷う者のために設けられた救急
192	021	あやかしとも気づかず、仄かな白い光の点線に導かれ、
192	023	七十米と行かぬうちに、白い明りの標識は消え、そこから先は真っ暗である。

しろい	白い	
001	011	白い頸の猫は
003	014	逃げてゆくのは白い犬だ
004	002	机の上は　すでに白い雪である
004	004	白い蝋燭の中に住まってゐた
005	013	白いちぶさの傾斜地をかけ上れ

005 021 白い翼が生える
006 009 すると白い翼をつけた一羽の
008 002 機関銃はマッチを擦って　乾草みたいな白い雲に火を
009 013 白い歯で噛むでも
010 003 有効なスピイドについて考へることを欲する少年は一個の白い帽子をかぶってゐる
010 004 白い帽子は頭のアリカを教へるとともに日の匂を発散させる
010 009 その新しい設計こそ白い帽子と赤いジャケットの
012 008 白い蝶よ
013 015 白い蝶は逃げたが
014 001 ガラス窓から白い手たちが
015 020 白い砂漠の上に住んでゐる
016 003 白いレグホンたちよ
017 009 白い唾を吐きかけ
019 005 白い大理石はやはり冷たい
020 010 白い灰となり
021 026 白い雲の中で眼をつぶり
023 001 磨かれてゐる白い骨の柱に
023 007 不幸に支へられた白い肉体は
023 016 恐怖の白い歯を投げる
024 003 る　血液を噴き上げている白い管は輝やける噴水の愛撫をう
025 034 影にかくれて白いカラをつけて
026 008 食卓は北方に白い布を垂らし
028 005 白い事務所の内側の時計の速度は
028 010 白い歯型から
028 021 幾何学が白い肉のやうな丘に
028 067 白い事務所の受話器が
030 026 零囲気のほとりに佇んでいる白いもの
033 002 だが白いものは
035 008 白い床のうへに
039 104 白い墳墓の方へ
040 011 白い雨がとほってゆく
054 131 空虚な額縁のなかで白い雨が乾いている
061 040 青白いサラリーマンが歌っていた。
061 151 同じ迷宮の白い渦のなかに消えてゆく。
062 016 大きすぎる白い屍衣を脱ぎ
065 018 空虚であった。白い翼をつけた女が
068 020 手まねきする白い波を見た
069 004 青白い少女が
070 056 なんという青白い顔をしているのか
070 060 誰だ！　青白い霧の顔で
076 019 きみの青白い身体はみるみるうちに
077 021 青白い記憶の炎につつまれて
082 003 八月は海辺にのこる白い墓

086　012　白い骨
091　012　血にぬれた白い翼からうまれてくる
098　020　その白い手のように明るく清潔にみえる
108　006　白いしじまのハンモック
128　071　白いテープがうず高く
139　001　白い月のえまい淋しく
152　023　まだ綺麗な白い頭とが仲よくならんでいて
154　008　苔むす岩間に白い滝を忘れてきた
189　029　塵一つない白い卓布
192　016　震えている足許に眼をおとすと、白い四角の標識に、明りが仄かにともっていて、
192　017　よくよく見れば、そこから一米間隔くらいで、白い明りが点々とつづいているのだ。迷う者のために設けられた救急
192　021　あやかしとも気づかず、仄かな白い光の点線に導かれ、
192　023　七十米と行かぬうちに、白い明りの標識は消え、そこから先は真っ暗である。

しろいもの　白いもの
030　026　零囲気のほとりに佇んでいる白いもの
033　002　だが白いものは

しろかった　白かった
025　008　海は黒く岩壁は白かった

しろがね
043　003　知慧はしろがねの枝にかけらるるや
043　021　知慧はしろがねの枝にかけらるるや
042　011　蛇は力を尺してしろがねの枝をのぼる
042　018　しろがねの枝にかけられたちひさな骸を

しろく　白く
017　018　眼が白くなって天を睨めたが
029　011　花花も昔のままに白く
036　007　白く美しい歯をもたぬから
039　001　白く聳えたつ
043　010　白く凍った地図のうへを
048　030　白くあたたかい海
078　016　白くかろやかな翼になりゆくことか
094　024　遠く近くハイネズの原に打ちよせるのはアフリカを白くする波だ
101　041　白くさらした骨をふきよせる夕べに
130　003　河原にほの白く浮んでいる
176　023　誘惑の手はあくまで白く

しろくする　白くする
094　024　遠く近くハイネズの原に打ちよせるのはアフリカを白くする波だ

しろさ　白さ
030　031　だからみどり色の白さと言ってもよい

しろじろと
065　053　しろじろと夜明けの光をながすまで

しろばら　白薔薇
011　016　純な一輪の白薔薇について

しろぶどうしゅ　白ブドー酒
181　035　冷えた白ブドー酒と

ジロリジロリ
014　007　ジロリジロリ眺めてゐるうちに

しわ　皺
003　012　軍艦はシーツの皺に沈没する
189　031　皺の手がのろのろ動き

ジン
016　010　雲の島からエンジンが響き
084　026　なま臭いサラダとサージンの匂いを発散する
096　003　ジンと溜息でくもった灯りで
142　059　恐ろしいクロールプロマジンやハロペリドールを免除され
183　002　ジングル・ベルが鳴っていて

しんえんな　深遠な
188　048　正義の社会学であったり、深遠な歴史学であったりもするのだから、

しんかい　深海
173　049　深海の底の眠りに就くことができる

しんがく　神学
093　012　神学は迷路である

しんがた　新型
005　012　新型飛行機がとんでくる

シンガポール
057　005　とおいシンガポールの街を歩いたこともある

しんから　心（しん）から
165　019　子なるわたくしの存在が心（しん）から厭わしかったことの

しんかんせん　新幹線
186　001　新幹線に乗ったのは初めてですって？
186　041　どうしてきみにわかる？　なぜ今までぼくが新幹線に乗らなかったか？
186　043　新幹線が開通して以来、機会はいくらでもあったよ

しんぎ　真偽
145　029　夢の厚着で肥りすぎた詩人には真偽はどちらでもよく　魂はもうとっくに死んでいた

しんきょう　心境
188　025　私の最近の心境をよく伝えているといえましょう」

しんくう　真空
045　015　たとへば自らも垂直なる真空の如くありたい

ジングル・ベル
183　002　ジングル・ベルが鳴っていて

しんけい　神経
041　032　かすかに震えてゐる　神経的な
106　022　さらにいっそう素晴しいのは鼻だろう　内なるオルガンの全神経が
128　002　神経のアンテナを　さか立てて
167　014　つまるところ神経の問題だが

しんけいてきな　神経的な
041　032　かすかに震えてゐる　神経的な

じんけん　人権
184　021　人と人は人権や国境を越えて

しんこう　信仰
028　039　信仰や箸や石鹸や喜ろこびや散策があるやうに
028　057　そこに一個の希望が絶望が信仰が
061　044　未来と信仰はちがうもの。
172　013　信仰　なし

しんこう　進行する
106　014　すべて相対的な時のなかを　いかにゆっくり他の時が進行するか

じんこう　人工
046　013　人工に疲れた鳥を
129　012　人工の島で

しんごうき　信号機
028　051　鉄道信号機の痙攣とともに

しんごうとう　信号燈
145　027　街のまぶたは重く垂れ　東京の暗い夜に信号燈が明滅していた

しんし　紳士
003　003　竜舌蘭を食べてゐる紳士は
058　035　その横顔をぬすみ見ている紳士がいます

しんじた　信じた
031　026　もう何も信じたりしないがよい
103　008　ひたすら魂の遺伝を信じた
167　042　手の奇蹟を信じたことがあった

しんじたり　信じたり
031　026　もう何も信じたりしないがよい

しんしつ　寝室
062　017　そっとわたしの寝室に近より
070　046　誰も知らない寝室の
070　048　誰も知らない寝室の

しんじつ　真実
085　012　みかけより真実を飾らぬ男だ
142　044　いつもかぎりなく透明で　疑問の余地なく真実だから
145　004　はいるとつぶやきながら黒い色の真実やめったに売れないエンジェルの絵を売っていた」
150　041　今にしておもえば、真実を衝いた薄気味わるい言葉である。
160　021　つい「詩人」であると真実を告げる
185　018　それが、今日の真実だとすれば

しんじない　信じない
039　057　みんなわたしの言ふことを信じないか
063　026　ぼくがあなたを信じないように
101　026　勝利を信じないぼくは……
101　063　勝利を信じないぼくは　どうして敗北を信ずることができようか

しんじゅ　真珠
008　008　罌粟の花が*サカリ*である　真珠の月もかくれてゐやう
033　006　そして真珠のやうに辷りながら
176　021　真珠貝の孤独は
192　019　助かった！　*まだ*死にたくはない。眼は真珠に、骨は珊瑚になったとかいう、五尋の海底の父になるなんてごめんだ

しんじゅがい　真珠貝
176　021　真珠貝の孤独は

しんじゅく　新宿
148　012　新宿の同じ酒場の常連で、同じ雑誌の仲間だったが、

しんしょう　心象
046　010　あなたはみづからの心象を鳥瞰するため

じんじょうか　尋常科
188　059　「セックスに関する講座は、尋常科からあるのですが、

しんずる　信ずる
041　143　あなたは信ずる
050　027　「さよなら、太陽も海も信ずるに足りない」
072　023　血統を信ずるのもいいし、人気に支配されるのも結構だ
101　033　……どうして敗北を信ずることができようか
101　063　勝利を信じないぼくは　どうして敗北を信ずることができようか

しんせい　心性
156　023　心性のちがいはどうしようもない

じんせい　人生
052　023　あなたはどうして人生にさよならを告げたのか
058　018　私の立派な人生には
064　009　人生に別離なんかあるものかと、
094　018　きみの人生はきわめてミステリアスに
106　017　人生を説明するのに　どうしたって何かが足りないようだ
120　020　人生に遅刻したのも気にしないで
122　010　あきらめきった人生の
125　018　われらの人生なんてロクなものではない
132　002　隠れんぼの人生
140　016　欄外の人生を生きてきたのだ
148　015　一人分の人生を、生きるのは容易な業ではない。
186　074　（ぼくらの人生だって
188　042　人生の下り坂にかかったときからである。
193　019　私一人の人生でも

しんせつな　親切な
085　028　いつも刃を上にむけている親切な男だ

しんせつに　親切に
160　044　神をうやまい　友達には親切に

しんせん　新鮮
135　002　純粋で新鮮な嘘となれ
167　019　風が新鮮な活力を吹きこむので
169　002　新鮮な沈黙の夜をむかえて
170　020　このうえなく新鮮で魅力的だ
173　014　そこでは人間の血がまだ新鮮なのだ
173　015　征服欲も　怠惰も　まだ新鮮だ
189　030　色は青いが新鮮でない野菜

しんせんな　新鮮な
135　002　純粋で新鮮な嘘となれ
167　019　風が新鮮な活力を吹きこむので
169　002　新鮮な沈黙の夜をむかえて
173　014　そこでは人間の血がまだ新鮮なのだ

しんぞう　心臓
011　011　蒼い干枯びた心臓を支へて
047　002　とざされた部屋に心臓の羽搏きが
160　057　心臓発作で倒れ　救急車が到着する前に息をひきとったという
188　052　結核と癩から、心臓病と癌へ。

しんぞうびょう　心臓病
188　052　結核と癩から、心臓病と癌へ。

しんぞうほっさ　心臓発作
160　057　心臓発作で倒れ　救急車が到着する前に息をひきとったという

しんだ　死んだ
005　035　昆虫は死んだ
015　019　死んだものは壁の中に
049　010　戦争で死んだMよ
051　019　寝台のうえに倒れ、死んだ真似をして
054　048　死んだ男のために
062　064　そして永遠に死んだふりをしているのですね
063　013　あなたは固く睫毛をとじて死んだふりをしている
070　059　ぼくが死んだらどうしようというのか。
077　001　死んだ兵士を生きかえらせることは
081　016　ぼくらはすでにこの歴史の内では死んだ者
086　011　岸辺につかまって死んだ魚の
089　013　けれど死んだ眼をひらいた少年には
143　015　詩を書くより死んだほうがましだ
148　001　戦争で死んだとおもっていた友が、

160　054　私が知りうるのは　シュワルツが一九六六年に五十三歳で死んだことだ
170　002　死んだ言葉がちらばっていて
173　035　だがみよ　ヒットラーは死んだんだ
173　036　ムッソリーニも死んだ
173　037　スターリンも死んだ
173　038　毛沢東も死んだ
185　001　ジョン・レノンが射たれて死んだ、と

しんだい　寝台
043　016　寝台には
048　008　なめらかな蝋は寝台をながれる
051　019　寝台のうえに倒れ、死んだ真似をして

しんたい　身体
062　006　落ちてゆくわたしの身体を支えてくれるのは
062　019　「もし身体にも魂にも属さない掟があるなら
062　021　魂も身体も不用です」
063　004　あなたの身体のように重たく
063　009　かかえきれぬあなたの身体が
076　019　きみの青白い身体はみるみるうちに
112　022　寝床のぬくもりでほてった身体を　詰まった路面電車に積みこんで
120　007　それらが身体のなかを
163　007　どちらを向くかは身体にきめさせた
188　070　身体の故障よりも、よほど、このほうがつらい。

しんちょう　身長
151　011　身長百七十四糎体重七十粁はまあまあだが

しんで　死んで
019　007　脚はいつか死んでゐる
021　019　夢見つつ死んでしまった
053　047　死んでしまったお姉さん！
055　060　街は死んでいる
062　008　二十年もむかしに死んで
062　033　死んでも死にきれるわけではないのだから
074　017　さらに多くの友が死んでゆくとき
077　028　かれは死んでいった
077　031　かれは永遠に死んでいった
102　008　魂は死んで二度と生れてこないから
145　029　夢の厚着で肥りすぎた詩人には真偽はどちらでもよく　魂はもうとっくに死んでいた
166　032　ぼくはもう死んでいるのかもしれない
173　050　いびきをかいて死んでいきながら
175　009　ぼくたちは別々に死んでしまうのだろう

188　034　その間、昔の仲間が、三人死んでいる。

しんでいる　死んでいる
055　060　街は死んでいる
166　032　ぼくはもう死んでいるのかもしれない
188　034　その間、昔の仲間が、三人死んでいる。

しんどい
166　008　しんどい作業である

しんどう　震動
167　005　家鳴り震動の交響がつづく

しんにゅう　侵入
014　002　侵入してきて楽譜を散らかした
061　217　死者の侵入を防ぐのだ。

しんにゅうして　侵入して
014　002　侵入してきて楽譜を散らかした

しんねん　信念
142　079　もちろん　信念より自分の生命が大切だと考えたからである
142　080　ところが　ブコフスキーは信念のほうが
142　105　巨大なものの力が　個人の信念より永続するという証拠はない
142　108　一個の弱い人間の信念をも挫くことができないとわかれば
142　116　信念を持つ人間の精神が世界最強の力には通じないとか
187　013　信念よりは自身が大事だから

しんぱいごと　心配事
121　005　心配事は他人にまかせて

しんぱいする　心配する
188　030　べつに、心配することはあるまいと思って、

しんぴ　神秘
053　021　それはわたしのこころの神秘です
062　002　ひとつの年が始まる神秘な夜にくるまって

じんぶつ　人物
054　060　第二流の民族　集団　人物は

しんぶん　新聞
015　011　石の床に新聞が配達されてゐたことも

026　036　明朝の新聞紙がぬれてゐた
040　013　濡れた新聞紙の上に蹲まる
041　008　新聞を読む　虚しい日暦の傍で
041　051　新聞紙の上を歩いてゆく　固い心をもち
091　011　新聞社の屋上たかく舞っている伝書鳩の
100　002　人影にまじって　新聞紙のうえをあるいてゆく
121　004　天気は神さまに　世界は新聞に
142　004　西側の新聞や著名人の多くの声明には
166　019　という？先生の発言を今朝の新聞で読んでから

シンブン・アレー　（「シンブン・アレー」）
128　033　「シンブン・アレー」

しんぶんし　新聞紙
026　036　明朝の新聞紙がぬれてゐた
040　013　濡れた新聞紙の上に蹲まる
041　051　新聞紙の上を歩いてゆく　固い心をもち
100　002　人影にまじって　新聞紙のうえをあるいてゆく

しんぶんしゃ　新聞社
091　011　新聞社の屋上たかく舞っている伝書鳩の

しんぽ　進歩
025　023　それは医術の進歩の伝説のやうに
084　014　戦争か進歩か壊滅か革命か
173　023　世界は進歩しない　が
173　024　自分は進歩しうると信じて

しんぽし　進歩し
173　023　世界は進歩しない　が
173　024　自分は進歩しうると信じて

しんみり
181　007　ことのほかしんみり

じんみん　人民
113　001　人民万才！
113　029　人民の世界を反映した
113　045　人民万才！

しんや　深夜
047　001　深夜　唇が煙草を挟んでいる
063　011　世界の深夜ーー

145　007　売ってはいけないものを売る深夜の
188　076　ひとしきり烈しくなり、深夜の屋根を叩いている。

しんやの　深夜の
145　007　売ってはいけないものを売る深夜の
188　076　ひとしきり烈しくなり、深夜の屋根を叩いている。

しんり　心理
150　052　続いて第二輯に逃亡した娼婦の心理を描いた「滅落」を発表したところで、
167　062　ぼろぼろになった壁面にまた心理面に
180　010　「御手紙の内容、何のことやら判りません」なら「女の子の心理」がどうだってことも関係ないじゃないですか？
180　011　「女の子の心理」なんて私だって判んないですよ。私だって「男の子の心理」は判んないですからね。お年寄り
180　012　の心理はなおさら、だ。
180　017　だからといってお年寄りの心理を甘くみてはいけませんよ
180　024　貴方に「女の子の心理」が判んなくたってあたりまえなんです。貴方は心理学やってんのじやないのでしょうか

しんり　真理
061　157　あなたは真理を持たなかった、

しんりめん　心理面
167　062　ぼろぼろになった壁面にまた心理面に

しんりゃくてきな　侵略的な
126　002　侵略的な人類の手のとどくところにあったら

しんりん　森林
028　042　青い森林の地区に

じんるい　人類
054　140　もっと荘重に　もっと全人類のために
126　002　侵略的な人類の手のとどくところにあったら
142　122　個人の平和と　世界の平和と　人類そのものの　真の守護者たりうるのだ」と

シークェンス
099　010　ぼくの記憶は思いがけない不幸のシークェンスで翳ってくる

シーツ
003　012　軍艦はシーツの皺に沈没する
093　025　乱れたシーツのうえに
129　014　シーツのような空と
176　007　純白のシーツに

シート

094　014　背をやく熱い塩のシートに転がされ

す　巣
028　013　昔からの葦の巣があり個人が住んでゐるが
036　025　頭髪に巣をかける喧燥な小鳥たち
088　003　ぼくの椅子の下に巣をつくったり
106　033　鳥の巣型の髪のカットに　度のつよい眼鏡を糸でつるして
170　007　蜘蛛の巣を払うような手ぶりをすると

すあし　素足
103　007　さまよう素足をもち

すいがら　吸殻
027　006　たくさんの吸殻が落ちてきた
028　009　哀訴の蒸気を吸殻とともに皿の上に拾てる三重の硝子の向ふの鐵格子の中の
040　007　吸殻や
041　107　やがて　おびだしい吸殻が
170　005　吸殻の山を片づけ

すいぎん　水銀
140　023　水銀のナミダをたらして

すいくち　吸口
152　005　シガレットの吸口を

すいこまれ　吸いこまれ
100　075　きみの小さな記憶の孔のなかに吸いこまれ

すいこむ
103　030　にんげんの運命をすいこむもの

すいし　水死
070　010　水死した処女の乳房をさぐりつづける。

すいしょう　水晶
016　002　太陽は水晶に分解される
026　007　水晶体はいつでも煙を噴いてゐた
053　013　姉さんのかたみの水晶の腕輪がわたしの冷たい手錠で
061　019　水晶　花　貝殻が、世界の空に

すいしょうたい　水晶体
026　007　水晶体はいつでも煙を噴いてゐた

すいすぎ　吸いすぎ
152　035　吸いすぎには注意しましょう

すいせい　彗星
115　009　まだ燃えている彗星の

すいせん　水仙
047　011　うなだれた水仙の賢しげな影を卓布に落す
061　138　水仙や蛇や　もろもろの生ける質を潤おした』

すいちょくなる　垂直なる
045　015　たとへば自らも垂直なる真空の如くありたい

すいちょくに　垂直に
054　055　それを垂直に判断するには

すいちょくを　垂直を
045　013　燻んだ柱の垂直を叩いて

スイッチ
179　019　ドリームランドのスイッチを切り

すいてい　水底
023　023　暗い水底に沈んだ

すいとう　水筒
101　035　からっぽの水筒に口をあてて

すいふ　水夫
061　024　酔いどれ水夫が歌っていた。

ずいぶん
150　040　ずいぶん興醒めなくだらないことをいう奴だと思ったが、
150　048　生理以外に在り得ないとは、ずいぶん淋しい話である。
151　018　ずいぶんながく生きすぎた罰だ
151　044　ずいぶん手間暇のかかる男になっている
170　024　ずいぶん助かるだろうに）
180　019　夢のなかではずいぶん怖い目にあうものだが
186　036　「見ていた」か「見ている」かでずいぶんちがうけど……
188　067　ずいぶん起っているらしいです」と書いていたが、

すいへい　水兵
079　011　何万という水兵と

079　018　永久に待ちこがれている水兵たちから

すいへい　水平
030　017　水平線はまへに地平線はうしろに
034　017　水平の皿のうへ
045　010　畳の上に　水平に做って横たはり
046　024　雷とともに海へ出て　空はつらなる水平線をはしり
068　018　一直線をえがく　はてしない水平線にそって
079　004　とおくの水平線は
079　030　ぼくらは水平線をこえねばならない
080　002　まっすぐ水平線をのばしながら
080　005　いつまでもこのような水平線をもっているか
080　019　（見えない水平線にむかって
093　029　それは血や光りがかえってゆく水平線のない世界だ
101　050　この地平から水平線にむけてひっぱってゆこう
110　011　あとずさりする水平線にむかって
168　003　水平への憧憬があった

すいま　睡魔
173　047　すぐ大波のような睡魔が襲ってくるだろう

すいみゃく　水脈
046　023　この泥に塗れた水脈もいつかは

すいみん　睡眠
036　012　おれの睡眠を呼び覚ます

すうこうな　崇高な
077　036　かれの崇高な死が

すうじ　数字
072　031　数字のように増減し
072　040　みんな数字に関係があり
151　028　電話の数字にもふるさとを感じ

ずうずうしい　図々しい
013　022　などと図々しい

すうせだい　数世代
142　118　過去数世代の経過に照しても

すうほんの　数本の
028　044　数本の太い樫の木がゆれる樫の葉のざわめき

すうりょう　数輌
028　033　ねぢれた鎖のやうな数輌の列車の合図が響き

すえ　吸え
166　010　一本の煙草を思うままに吸えたら

すえ　裔（すゑ）
044　011　御身は教へる、肉の裔（すゑ）なるものたちに、

スエズ
105　011　九月ポーランド、十月スエズ、ハンガリー、

ずがいこつ　頭蓋骨
173　029　頭蓋骨を射ちぬかれて死ぬ一人の男

すがた　姿
042　004　やさしき姿に彫まれた神となる
044　003　神々よ　あなたの姿勢は万別なれど、
047　018　朧ろに姿を現わすこの髭だらけの死者は誰だろう
050　003　遺言執行人が、ぼんやりと姿を現す。
054　006　そして銃を担ったおたがいの姿を嘲けりながら
054　017　この世から姿を消してしまったのだ
054　045　もしかしたら君の姿が霧の中からぬけだしてこないかと
066　027　折れるように飛びおりる姿勢をとった、
068　015　姿を消そうとしていた
086　005　おのれの姿を砕けた岩のうえにみつけだす
089　040　うしろ姿の街角から
100　050　ぼんやりと姿を現すひとりの遺言執行人として……
139　006　どうしてもその主の姿を尋ねあてることができない
148　022　土にかえる目立たない姿勢をしていたが、
151　016　背中をこごめて人中を歩く姿といったら
152　024　醜い現実の姿をさらしている
159　012　まだまだ幼い母のうしろ姿は襖の蔭に
168　012　変幻するおまえの姿に出あったから

スカート
053　011　可愛いい格子のスカートをはいています

すぎ
038　004　いくつかの街と村の屋根をすぎる
054　061　単により高尚な国民　結社　人間の材料にすぎないと
054　105　死はいっそう強い酒にすぎぬだろう」

054　157　憐むべき君たちの影にすぎぬ僕は
061　016　いくつもの町をすぎ、
061　155　此処と彼処、それもちいさな距離にすぎぬことを……
062　016　大きすぎる白い屍衣を脱ぎ
062　059　母なる海と太陽の光りが強すぎます
083　007　なにもかも光と影のたわむれにすぎない
083　012　この夏さえすぎれば
085　006　未来は蒸されぬ腸詰にすぎない
093　019　たえまなく打ちよせる多彩な波にすぎないことがわかり
093　021　やがて遠ざかってゆく波にすぎないことがわかる
096　008　エブロ河を流れてやってきたにすぎん
105　005　魚釣りには早すぎ、狩猟には遅すぎる三月。
105　007　着るには暖かすぎ、脱ぐにはまだ寒い三月、
125　019　祝福はくるが遅すぎるだろう
128　027　「ソー・コールド」が多すぎます
145　029　夢の厚着で肥りすぎた詩人には真偽はどちらでもよく　魂はもうとっくに死んでいた
148　039　十時をすぎると蒲団が敷かれた。
150　020　どん栗の背くらべをしていたにすぎなかったが、
151　018　ずいぶんながく生きすぎた罰だ
152　035　吸いすぎには注意しましょう
167　001　啓蟄をすぎたばかりの
186　066　空間が空間であるうちは物の集合にすぎないから
186　075　時間のさまざまな変形態にすぎぬ）
189　003　ゼロ・サム・ゲームにすぎん
192　024　これが罰か、太陽と海を呪ったことの？　たった一度の空想の罪にしては、酷すぎる報いではないか！

すき　鋤
118　004　鋤と畝との

すぎさった　過ぎ去った
054　097　人を苦しめる過ぎ去った日々が
100　039　すばやく過ぎ去った予言の時代よ

すぎさって　過ぎ去って
039　095　すべてはもはや過ぎ去ってしまったといふ
041　069　季節はとっくに過ぎ去ってしまった

すぎさる　過ぎさる
060　015　すべては過ぎさる
078　012　ながい月日もまたたくうちに過ぎさる

すぎていった　過ぎていった
041　096　そして時間が徒らに過ぎていった

061　059　いたるところに行きつき、いたるところを過ぎていった。

すぎてゆく　過ぎてゆく
048　020　春　夏　秋はまたたくまに過ぎてゆく

すきとおって
101　007　いまはきみたちの肉と骨がどこまでもすきとおってゆく季節だ

すきとおる
159　004　細くすきとおる声をかけてきた主は

すぎぬ　過ぎぬ
046　050　此処と彼処　それも一つの幻影に過ぎぬことを

すきま　隙間
033　009　盲目はドアの隙間から入ってくる
037　012　わづかなドアの隙間から

すきまなく
053　003　暗い空の枯れた林から落葉がすきまなく降ってきます

すぎる
038　004　いくつかの街と村の屋根をすぎる
062　016　大きすぎる白い屍衣を脱ぎ
105　005　魚釣りには早すぎ、狩猟には遅すぎる三月。
125　019　祝福はくるが遅すぎるだろう
148　039　十時をすぎると蒲団が敷かれた。
192　024　これが罰か、太陽と海を呪ったことの？　たった一度の空想の罪にしては、酷すぎる報いではないか！

すぎる　過ぎる
003　008　扉の外をマアチが風と共に過ぎる
011　008　電車が宝石の角を過ぎるとストップし
133　021　いくつもの街衢と大路を過ぎる
173　003　一日が早く過ぎる

すくい　救い
142　055　ぼくたちに救いはあるだろうか？

すくって
052　005　ひとりで牛乳を匙ですくって
158　034　北條や足利の美しい光景をすくってみせたときだろう

すくめて

069　002　かれは肩をすくめて立っていた

スクリーン
072　057　スクリーンを眺めて

すぐれた
049　009　（すぐれた笛の音とすぐれた涙を…）

すけた　透けた
149　007　すずしのように透けた

すけてくる　透けてくる
009　008　薔薇色の頬に葉脈が透けてくる

スコオル
012　023　スコオルの通過した海の窓から

すこしずつ
062　057　すこしずつ海のほうへ動いているのですよ
100　045　すこしずつ浮びあがってきた街のなかへ
101　017　ぼくはすこしずつやぶれてゆく天幕のかげで
101　020　すこしずつ退却してゆく軍隊をもたない
145　018　孤独の壁をすこしずつ溶解しながら
148　024　すこしずつ前かがみになっていき、

すこしづつ　少しづつ
037　016　無限といふものが少しづつ暗くなりかけてゐた

すごしてきました　過ごしてきました
053　050　一年よりもむなしい一生を過ごしてきました

スコットランド
160　041　十四世紀のスコットランドの詩を口誦さみながら

すさまじい
042　009　すさまじい寒さが吹きつけてくる

ずじょう　頭上
047　008　頭上で屋根を剥ぐ不気味な爪の音……
095　018　ゴーゴーゴーとぼくの頭上を通過していった
101　051　頭上で枯れ枝がうごき　つめたい空気にふれるたびに

すじ書き

100　034　三段階のすじ書きどおりに

すず　鈴
005　009　鈴を振るかすかな音よ

すすき
139　002　すすきの穂が遠くからおいでおいでと手招く

すすけた　煤けた
007　004　煤けた町は古い習慣で壺の沈黙を　それはいつまでも黄色い河の
031　010　煤けた家具の断面だけを見せ

すずし
149　007　すずしのように透けた

すすむ　進む
046　008　櫂で虚を打ちながら　必死に進む舳の方位を

すすり泣く
084　038　かれにかわって上手にすすり泣くのですよ

すすんでゆく　進んでゆく
054　117　不潔な女のベッドの方へ進んでゆくだろう

ずたずたに
070　007　みもだえさせ、ずたずたにひき裂く。
142　064　ずたずたに責め苛まれながら　若い生命をすり減らしているが

スタンド
072　006　高いスタンドに立って
072　027　ーーどよめくスタンド、沸く観衆、拍手、喚声
072　067　誰もいなくなったスタンドに立って

スターリン
113　003　スターリンに栄光あれ！
113　015　大元帥のスターリンが生きてたから
113　027　スターリンの国は
113　038　やさしく答えたスターリン
113　039　最高に人間的だった同志スターリン
113　041　なんでも知ってるスターリンがいて
113　047　スターリンに栄光あれ！
173　037　スターリンも死んだ

すっかり
064　013　ーーすっかり忘れたんだな？
083　002　すっかり見えなくなった
117　008　こころの樹もすっかり裸になった
164　026　きみがすっかり眼をとじるまで
188　027　今では、すっかり忘れてしまった。

すっきりする
155　015　すぐに気分はすっきりする

ずっこけた
160　031　ずっこけたコーネリアスは

ずっしり
103　020　旧約の秤にかけてもずっしり重い

すって　吸って
128　019　資本の下水の養分を吸って

すって　擦って
008　002　機関銃はマッチを擦って　乾草みたいな白い雲に火を

すっている
056　002　夕暮のなかで煙草をすっている男がいる
056　018　橋にもたれてぼんやり煙草をすっている
134　013　広場に立って眼をこすっていると
150　017　しかし、友人たちは仲間のだれかれをあてこすっているのだと思いこみ、
152　003　一人でタバコをすっていると

すっぱい　酸っぱい
094　004　酸っぱい水を吐きだそうとし

すて
008　012　すてて　砂漠へ逃げてしまった　やがて新らしい靴の
029　004　疲れた衣類は脱ぎすてられ
042　013　脱ぎすてた分身が青く光る
046　011　いまはしい壁や　むなしい紙きれにまたたく嘆息をすて
054　073　みずから魂をすて去った
055　011　おれはずぶ濡れの悔恨をすてて
058　049　昨日のように読みすてましょうか？
058　050　そしてニュースが私を読みすてたら
061　014　書籍や窓やペンをすてて、
061　154　あなた自身が見すてられた天上の星であることを……

062　028　一切の望みをすててどこまでも一緒にゆこう
065　046　異国の女のように、町をみすてて
086　013　すべての夢を海にすてよう！
101　055　にんげんの悲しみによごれた夕陽をすてにゆこう
102　012　恋をすて故郷をすて他人の国へゆくのだから
116　005　過去をすてたきみの喜びと
121　002　古シャツはぬぎすてよう
132　010　いさぎよく未来をすて
133　023　われを産みし者の室をすてて
164　032　……詩なんかいつだってすてられるさ

すて　捨て
059　016　海岸に捨てられたボートを眺めていると
062　015　みんな捨ててしまうのですか
072　024　独断批評家の口ぶりもわるくはないし、皮肉な記者のポーズも捨てがたい
160　056　その日は夜どおし起きており　朝の四時にゴミを捨てに廊下へ出て
173　006　捨てゼリフはきまっている

すてがたい　捨てがたい
072　024　独断批評家の口ぶりもわるくはないし、皮肉な記者のポーズも捨てがたい

すてき　素敵
004　008　素敵なプランを考へはじめた
173　051　死を知らないなんて素敵ではないか

すてきな　素敵な
004　008　素敵なプランを考へはじめた

すてた　拾てた
025　043　林檎の核を拾てた

ステッキ
004　006　ステッキを忘れて　逃亡した

すてて
008　012　すてて　砂漠へ逃げてしまった　やがて新らしい靴の
055　011　おれはずぶ濡れの悔恨をすてて
061　014　書籍や窓やペンをすてて、
062　028　一切の望みをすててどこまでも一緒にゆこう
065　046　異国の女のように、町をみすてて
133　023　われを産みし者の室をすてて

すてて　棄て

026　027　サタンの翅を棄て

すてて　捨てて
062　015　みんな捨ててしまうのですか

すてに
101　055　にんげんの悲しみによごれた夕陽をすてにゆこう

すでに
004　002　机の上は　すでに白い雪である
032　017　わたしの半身はすでに掠められてゐる
039　103　明日はすでに暮れてゐるだらう
081　016　ぼくらはすでにこの歴史の内では死んだ者
104　005　わたしの丘や森や海岸は　すでに
134　007　変化はすでに起っているが
142　095　すでに現実に存在していて　いわゆる階級構造とは全く無縁な

すてられた　捨てられた
059　016　海岸に捨てられたボートを眺めていると

すてる　捨てる
028　009　哀訴の蒸気を吸殻とともに皿の上に拾てる三重の硝子の向ふの鐵格子の中の

ストイックな
093　016　もうろうとしたストイックな頭から

ストップ
011　008　電車が宝石の角を過ぎるとストップし

ストレート
145　016　固いパンの男がゼリーの女に食べながらストレートに話し合おうと云っていた」

ストーヴ
089　002　赤々とストーヴが燃えている部屋の
089　022　一瞬　ストーヴの炎が暗くなり
150　079　こちらも七月一日だというのにストーヴをつけたりしました。
167　007　足もとのストーヴに火をつけると

すな　砂
008　012　すてて　砂漠へ逃げてしまった　やがて新らしい靴の
015　020　白い砂漠の上に住んでゐる
018　005　乾いた砂の上に
039　108　あなたの砂漠は油の匂がする

061　051　砂浜につづく足跡のように
068　022　乾いた砂に埋まっているのを
072　009　すばらしく透明な砂埃の空をみたまえ
072　038　あとは砂煙りをあげて一団となって疾走している
080　007　くずれる砂の甲板をふみしめ
086　010　崩れゆく砂の足跡
091　016　きみのイメジはいつも眼に砂をいっぱい溜めている
094　007　ない蹴爪で砂をけって羽搏いているテント
096　005　きみは賢者の砂色の眼で
096　016　アラビアの砂色ということになるのかな
096　018　あの瞑想の闇のコアには生きている砂漠があるんだ
130　013　砂利が一粒ずつ光りはじめた
143　021　どこの浜辺の砂を掘るのか
148　048　それから、少年の日のように月の砂漠へ出発した。
148　055　岩や空や、波や砂や、花の香りのする一日、
192　003　うつむいて、歩いているところは、一木一草もない、黒い砂地で、
192　010　どこまで行っても、一本の松にも出遭わず、平坦な黒い砂地がつづいているばかりで、

すなお　素直
041　012　だがあなたの素直さは

すなおさ　素直さ
041　012　だがあなたの素直さは

すなけむり　砂煙り
072　038　あとは砂煙りをあげて一団となって疾走している

すなち　砂地
192　003　うつむいて、歩いているところは、一木一草もない、黒い砂地で、
192　010　どこまで行っても、一本の松にも出遭わず、平坦な黒い砂地がつづいているばかりで、

すなはま　砂浜
061　051　砂浜につづく足跡のように

すなぼこり　砂埃
072　009　すばらしく透明な砂埃の空をみたまえ

すぬんだ　盗んだ
092　006　盗んだ梨より甘かったと……

スパイ
124　007　地名のない地図をたよりにスパイが暗躍
136　020　革命をスパイしている

142　032　スパイし　盗聴する者が

スパイし
136　020　革命をスパイしている
142　032　スパイし　盗聴する者が

スパイしている
136　020　革命をスパイしている

すばしこく
088　004　栗鼠のようにすばしこく

すばやい
037　010　けものや鳥よりもすばやい身仕度で

すばらしい　素晴しい
106　022　さらにいっそう素晴しいのは鼻だろう　内なるオルガンの全神経が

すばらしい　素晴らしい
167　012　話したり書いたりすれば素晴らしいライフも

スピイド
010　001　自転車に乗ってゐる少年は自転車のスピイドをもつ
010　002　それは口笛のためのスピイドであった
010　003　有効なスピイドについて考へることを欲する少年は一個の白い帽子をかぶってゐる

スプリング
173　045　スプリングの毀れたベッドに身を投げて

ずぶ濡れ
055　011　おれはずぶ濡れの悔恨をすてて

スプーン
106　020　かれの眼は　スプーンの銀のように輝いている
145　017　そんなカップルはどこにでもいて快楽のスプーンで苦痛の目方を計りかねていた

すべ
017　042　アタマのすべっこい仏陀が叫び
027　008　すべての家具が老いてゆき
028　031　すべての阿鼻が犇く武器であり
028　032　すべての叫喚が悶える胃腸である
028　040　すべてが平和であるようにとか云ふ必要もない
028　054　わたしたちが所有するすべての宝よ

028 072 すべてが歴史の容器の中にあるとは限らない
029 005 すべて形骸の匂の中に住み
030 018 すべては灰の降るなかで
030 028 すべての記憶の中からたちのぼる
031 020 すべての物質たちは堅い殻につつまれて
033 012 一個の器物と共にすべてが放擲された
037 020 すべてをみつめる生きものの眼が
039 088 すべてが凍える夜がくる
039 095 すべてはもはや過ぎ去ってしまったといふ
040 014 すべての車輛は動かない
040 015 すべての劇場は閉ざされてゐる
050 004 ーーこれがすべての始まりである。
054 084 すべて記憶に鍵をあずけている人々よ
054 141 すべての人々の面前で語りたかった
060 015 すべては過ぎさる
061 049 あなたの心にうかんだ道のすべてだった。
061 054 あなたの宙にうかんだ道のすべてだった。
067 005 さっき波のうえをすべっていた魚が
072 037 (……すべて予想どおり……)
072 052 すべては予想どおり展開する……)
072 060 われわれの生存競争もすべてフェア・プレーだったらいいのにと
086 013 すべての夢を海にすてよう！
089 014 空を背景にしたすべてのものが見えるのです
089 019 雪のなかでしか経験したことのないすべてのものが……)
098 019 すべてがきちんとして
100 051 これがすべての始まりであった！
101 058 ぼくの行手ですべての国境がとざされ
106 014 すべて相対的な時のなかを　いかにゆっくり他の時が進行するか
106 034 時代におくれ　人におくれたすべてのものをとり戻すために
106 044 すべての生きもののうちで　最も強くてしなやかな骨だ
108 015 存在はすべてある終りに向って動く
108 028 首すじをすべるカミソリにも
112 032 すべての秩序が眼の高さにあればいいといった
117 014 泣くすべもなく
128 044 神なければ　すべては趣味の問題だ！
140 011 きみがいたすべての場所から
140 013 この世のすべてに変りはない
141 012 すべてが終っている者には、ほかに呼び名はない。
141 014 在りえたかもしれないすべてのものよ。
142 068 　自分の著作中に登場し　そのために投獄されたすべての人々を
145 023 「写真店の窓には曝された肖像の記念写真が　夢こそすべてであると知った時　もう肉体
150 049 文学から離れたことに話をかぎれば、それだけがすべてではない一例として、
152 032 すべてがこんなふうだったらわるくはないぞ

153 002 すべての歳月を
154 010 すべての年月をかけて
156 032 すべてを奪われても文句を言えない
156 033 すべてを与えられても文句を言えない
169 005 隠されたすべてを見せても
173 017 「生物はすべて
182 023 すべてを年のせいにするな
187 019 準備はすべてととのいながら
189 015 言葉はすべて最初から

スペイン
142 007 同じことがギリシアやスペインやトルコでも起っている……
145 025 スペイン内乱で知ったオーデンもいなくなった
145 028 オーデンはスペイン内乱に参加しなかったというニュースを聞いた
184 011 アイルランドとスペインの混血の男と

スペイン内乱
145 025 スペイン内乱で知ったオーデンもいなくなった
145 028 オーデンはスペイン内乱に参加しなかったというニュースを聞いた

すべっこい
017 042 アタマのすべっこい仏陀が叫び

すべって　滑って
034 013 虚空を滑って

すべっていた
067 005 さっき波のうえをすべっていた魚が

すべて
027 008 すべての家具が老いてゆき
028 031 すべての阿鼻が犇く武器であり
028 032 すべての叫喚が悶える胃腸である
028 040 すべてが平和であるようにとか云ふ必要もない
028 054 わたしたちが所有するすべての宝よ
028 072 すべてが歴史の容器の中にあるとは限らない
029 005 すべて形骸の句の中に住み
030 018 すべては灰の降るなかで
030 028 すべての記憶の中からたちのぼる
031 020 すべての物質たちは堅い殻につつまれて
033 012 一個の器物と共にすべてが放擲された
037 020 すべてをみつめる生きものの眼が
039 088 すべてが凍える夜がくる

039 095 すべてはもはや過ぎ去ってしまったといふ
040 014 すべての車輛は動かない
040 015 すべての劇場は閉ざされてゐる
050 004 ――これがすべての始まりである。
054 084 すべて記憶に鍵をあずけている人々よ
054 141 すべての人々の面前で語りたかった
060 015 すべては過ぎさる
061 049 あなたの心にうかんだ道のすべてだった。
061 054 あなたの宙にうかんだ道のすべてだった。
072 037 (……すべて予想どおり……)
072 052 すべては予想どおり展開する……)
072 060 われわれの生存競争もすべてフェア・プレーだったらいいのにと
086 013 すべての夢を海にすてよう！
089 014 空を背景にしたすべてのものが見えるのです
089 019 雪のなかでしか経験したことのないすべてのものが……)
098 019 すべてがきちんとして
100 051 これがすべての始まりであった！
101 058 ぼくの行手ですべての国境がとざされ
106 014 すべて相対的な時のなかを　いかにゆっくり他の時が進行するか
106 034 時代におくれ　人におくれたすべてのものをとり戻すために
106 044 すべての生きもののうちで　最も強くてしなやかな骨だ
108 015 存在はすべてある終りに向って動く
112 032 すべての秩序が眼の高さにあればいいといった
128 044 神なければ　すべては趣味の問題だ！
140 011 きみがいたすべての場所から
140 013 この世のすべてに変りはない
141 012 すべてが終っている者には、ほかに呼び名はない。
141 014 在りえたかもしれないすべてのものよ。
142 068 　自分の著作中に登場し　そのために投獄されたすべての人々を
145 023 「写真店の窓には曝された肖像の記念写真が　夢こそすべてであると知った時　もう肉体
150 049 文学から離れたことに話をかぎれば、それだけがすべてではない一例として、
152 032 すべてがこんなふうだったらわるくはないぞ
153 002 すべての歳月を
154 010 すべての年月をかけて
156 032 すべてを奪われても文句を言えない
156 033 すべてを与えられても文句を言えない
169 005 隠されたすべてを見せても
173 017 「生物はすべて
182 023 すべてを年のせいにするな
187 019 準備はすべてととのいながら
189 015 言葉はすべて最初から

すべての

027　008　すべての家具が老いてゆき
028　031　すべての阿鼻が犇く武器であり
028　032　すべての叫喚が悶える胃腸である
028　054　わたしたちが所有するすべての宝よ
030　028　すべての記憶の中からたちのぼる
031　020　すべての物質たちは堅い殻につつまれて
040　014　すべての車輛は動かない
040　015　すべての劇場は閉ざされてゐる
050　004　ーーこれがすべての始まりである。
054　141　すべての人々の面前で語りたかった
086　013　すべての夢を海にすてよう！
089　014　空を背景にしたすべてのものが見えるのです
089　019　雪のなかでしか経験したことのないすべてのものが……）
100　051　これがすべての始まりであった！
101　058　ぼくの行手ですべての国境がとざされ
106　034　時代におくれ　人におくれたすべてのものをとり戻すために
106　044　すべての生きもののうちで　最も強くてしなやかな骨だ
112　032　すべての秩序が眼の高さにあればいいといった
140　011　きみがいたすべての場所から
141　014　在りえたかもしれないすべてのものよ。
142　068　　自分の著作中に登場し　そのために投獄されたすべての人々を
153　002　すべての歳月を
154　010　すべての年月をかけて

すぼめ
162　012　絶句していそいそと傘をすぼめ

ズボン
023　004　公園をまがってゆく縞のズボンたちを
099　001　紺の半ズボンからほそい脛をのばし

すまい　住い
065　003　部屋住いの男にとって

すまして
047　005　耳をすましている中枢に
065　043　どの窓も、耳をすましていた。男は
088　080　みんなじっと耳をすましているのだから

すまして　澄まして
062　051　あなたはじっと耳を澄ましていますね

すましている

047　005　耳をすましている中枢に
088　080　みんなじっと耳をすましているのだから

すます
110　009　秋はますます深くなるばかりだ
128　069　ますます渇いてきた
155　018　お焼香は手早くすます
166　015　ますます下手になる詩に頭をひねったりしながら
166　026　砲撃に耳をすますような顔つきで
172　023　雲のささやきに耳をすます

すませ　澄ませ
041　009　お互に耳を澄ませ

すまっていた　住まってゐた
004　004　白い蝋燭の中に住まってゐた

スマトラ島
148　031　同じ輸送船でスマトラ島に送られた転属組の十三人だった。
148　053　スマトラ島を偲んでぼくたちは談笑し、賑かに昼食をとった。

スマート
072　014　あのスマートで強靱な足に注目しよう

すみ　隅
041　122　葉はぬけ落ち　黒い幹が囲繞地の隅に忘れられた
061　178　妻も子もなく、この広い都会の片隅で、
083　010　思出の片隅でじっとしていればよいのに
142　045　ぼくたちは世界の片隅でふさぎこみ
145　003　何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに
174　019　ぼくは黒を持ち確実を三隅を占拠したが、中央の白が厚く、ずるずると敗けてしまい
188　071　きみの手紙は、たまたま、仕事机の片隅の、

すみ　住み
025　006　孤独な魚が住み
029　005　すべて形骸の句の中に住み
062　061　ひとりの妻と住み家畜などを飼ってみたくなったのです
160　055　妻も子もなかったかれは　タイムズ・スクエアに近い安ホテルの一室に住み

すみ　澄み
046　002　澄みたる空に影をもつ　橋上の人よ
061　002　澄みきった空の橋上の人よ、
167　031　こんなに澄みきった空気のなかには

193　023　議事堂のまるい空はきれいに澄み

すみきった　澄みきった
061　002　澄みきった空の橋上の人よ、
167　031　こんなに澄みきった空気のなかには

すみずみに
142　040　世界のすみずみにまでとどけられるのである

すみだ川
119　013　静かに走れ　すみだ川

すみれいろ　菫色
025　042　菫色の手袋は

すみわたる　澄みたる
046　002　澄みたる空に影をもつ　橋上の人よ

スムース
095　022　スムースなスムースなあなたの死顔を。

スモッグ
120　022　スモッグの綿毛と
140　022　スモッグの咳をし

すやすや
018　009　すやすや眠ってゐる球に
148　042　ぼくたちは枕を並べてすやすや寝息を立てていた。

すらす　暮す
053　043　いのちを惜しんで暮すことに悲しみなんかありゃしない

スリッパ
063　018　ぼくは片足にスリッパをひっかけて

すりぬけた
183　012　人ごみをどうすりぬけたらいいか

すり減らして
142　064　ずたずたに責め苛まれながら　若い生命をすり減らしているが

ずるい
164　012　あいまいで　ずるい

164　015　ずるい世渡りをするつもりはないが

するすると
154　020　錦の帯がするすると垂れてくる

ずるずると
174　019　ぼくは黒を持ち確実を三隅を占拠したが、中央の白が厚く、ずるずると敗けてしまい

すると
006　009　すると白い翼をつけた一羽の
008　005　ジライ花を観賞するときも　空にはポンポン花火が上
011　009　どうかすると沢山人間が動いてゐる
014　016　するとピッコロが不服を唱へた
034　012　すると光たちは
044　004　帰するところ一にして　祈りは慧き習慣（ならわし）の光明なり。
048　028　すると地球の表面に都市ができる
061　086　ープラスーが生とすると
061　112　一つのものを選ぼうとするとき
066　038　すると不意に、一枚の戸が音もなくひらき
082　015　すると小鳥がたそがれの窓に墜ちてくる
089　021　すると少年の冷たい呼吸で
142　105　巨大なものの力が　個人の信念より永続するという証拠はない
145　020　どうかするとにんげんは機械よりも機械だから
147　015　ときたま死の匂いを発散させる若者に出会ったりすると
154　020　錦の帯がするすると垂れてくる
166　031　ひょっとすると
170　007　蜘蛛の巣を払うような手ぶりをすると
173　026　今では街中でも綺麗な娘に出あったりすると
174　008　きみと話したくなって電話をすると、
176　015　愛するとは
186　034　ひょっとすると廿六年前の卅四歳のぼくが、いまのぼくを見ていたかも……
192　011　もしかすると、近づくにしたがって、遠ざかっていく海なのかもしれない。こんなところは、日本中のどこにもあり

するどい　鋭い
049　007　鋭い笛のようなものが胸の底でめざめる、
070　005　鋭い愛の杭にかけて

すれちがう
060　016　しかし黙ってすれちがう一瞬にも

ずれて
186　031　過去と現在の空間がぴたりと重なり、その輪郭がずれてぼやけていく

すれ違い
061　149　ぼんやり近づいてきて、黙ってすれ違い、

すれ違って
035　018　はげしくすれ違っていった

スロット・マシーン
124　023　歌舞伎町でスロット・マシーンにしがみつき

スローボール
173　004　超スローボールを空振りしたあとのような

すわって　坐って
063　023　ぼくは黙って坐っているだけだ
108　016　恋人たちがベンチに坐って
172　022　廃屋の窓辺に坐って

すわり　坐り
041　064　あなたは何故黙ってゐる　お坐りなさい
066　016　年老いた母親はいきをころして坐り

ずんずん
146　056　暗がりで筍みたいにずんずん伸びていくので
173　048　意識の大陸はずんずん後退し

すんぜん　寸前
171　005　女は狂う寸前の眼つきをして

すんだ　澄んだ
021　001　ハッカを咥へて澄んだ煙をふかしてゐた
023　020　澄んだ褐色の眼を出はいりする憎悪の炎よ
038　021　その下の澄んだ水のほとり
039　073　あなたの澄んだ声がする
063　025　ぼくが殉難者の澄んだ眸をしているとしたら……
074　015　かぎりなく澄んだ青空であった
152　017　澄んだほほえみを忘れちゃいけない
190　008　精霊の澄んだ答えが返ってくる

すんで　済んで
054　079　未来はとおの昔に済んでしまっている

すんでいる　住んでゐる
007　005　岸に住んでゐる蟾蜍である

015　020　白い砂漠の上に住んでゐる
028　013　昔からの葦の巣があり個人が住んでゐるが
028　034　地下に住んでゐる声を踏みしめ

スーパーマーケット
166　020　きみはスーパーマーケットに出かけ

スープ
069　027　そこには　さめたスープをまえにして

せ　瀬
061　119　淫売婦には浅瀬ほどにも見えなかったりするのだ
144　009　昨日の淵から出た今日の瀬は早く

せ　背
034　009　罪の匂ひのするドアの背後では
041　110　あなたには人の背中しか見えぬ
041　148　あなたには人の背中しか見えぬ
044　014　熱い太陽を背負ふ　神々よ
046　031　背中を行き来する千の歩みも
048　012　川は音をたてて背中をながれる
052　030　明日の夕陽を背にしてどうしたらよいのだろう
053　019　わたしはわたしの影を背負います
054　088　君たちは僕に背中をむける
054　092　その平たい背中には背骨がないということを……
055　013　背負い袋のようにおまえをひっかついで
055　042　猫背のうえに乗せて
056　003　そして彼の背中のように淋しい風景がそこにある
061　094　背すじを走る黒い運河の呻きを――
071　028　ぼくの背後の空に
083　005　わたしの背後で
088　021　太陽に背をむけたそれらのものが
089　014　空を背景にしたすべてのものが見えるのです
094　014　背をやく熱い塩のシートに転がされ
100　066　ぼくの背後で
124　024　国際級の背景的速度に陶酔し
131　004　背をこごめて街中で生き
133　012　背をかがめて小走る群集のなか
140　024　四十七階の痛む背骨がゆれている
142　086　黙って背中を向ける者もいる　それにはそれの
146　055　その人の背丈も
148　027　背中に淋しい影を宿し、
150　020　どん栗の背くらべをしていたにすぎなかったが、

151 016 背中をこごめて人中を歩く姿といったら
153 004 波の背は立ち
162 001 背すじはしなやかに
162 006 背中の瘤が
165 009 黙々と机に向って仕事をする父の背中に
167 024 背中をまるめて椅子に凭れている
180 046 その人の背中に向って
182 009 しなやかな背骨がなくとも
189 013 かれはくるりと背をむけて

せい
102 006 みんないっせいに銃剣の襖を立ててくれ
106 002 みんな同じポーズで　いっせいに眼を
146 024 みんなの眼がいっせいに
150 060 時代の風圧を避けるのにせい一ぱいで、
162 024 せいぜい
182 023 すべてを年のせいにするな

せい　姓
184 005 すぐ離婚したが夫の姓は変えずに帰国して

せい　性
028 019 文明的なもろもろの雑音の性格により
041 116 馴らされた惰性で
048 018 まだとおくから押えている性！
055 040 おれは慢性胃腸病患者のだらしないネクタイをしめ
077 032 （ああ人間性よ……
084 013 マリリン・モンロウのせつない性のささやきーー
112 034 妥協の無限の可能性をたよりに
124 010 相場師の根性は
128 045 正義　戦争　性欲　政治
142 070 そして　国外での健康回復と安楽な生活の可能性があるにもかかわらず
144 007 鱗の落ちた蛇神は無性闇に輾転し
144 017 わけよしの性術に明け暮れて
150 007 彼は自分の虚構の個性を破綻なく演ずるために、
150 030 これは、私だけが「虚構の個性」をつらぬき、偽善の間道をくぐりぬけて、
150 038 又本質的に個性的なるものも」と言ったのは、
151 041 悲しい父性よ
156 023 心性のちがいはどうしようもない
156 038 完全に処女性を保っている
160 076 制度の春を病むこともなく　不確定性の時代を生きて
167 055 柱に梁に天井に床に耐性を与え
168 013 生きることの永続性のあかしか

173 042 世界はやがて筋萎縮性の痙攣を起し
186 044 （どの車輛にでも乗っている可能性があった）
188 080 誕生と、性交と、死に、

せい 生

005 021 白い翼が生える
006 006 モグラの生活は嫌だね　と
010 014 パイプを握って雲の中から生れてきた少年は
014 030 楽譜はヒラヒラ羽を生やして
021 023 アスファルトで新しく誕生し
025 017 焔をあげて生ひ繁り
025 027 あなたの頭髪の中に鶯が卵を生む
026 020 羊歯類が生ひ茂り
026 023 芽生えのない種子が
028 058 そこに多数の生活が個人によって支持される
029 007 型も持たぬ生活のうちに
037 020 すべてをみつめる生きものの眼が
039 070 ここはわたしの生れた土地だ
039 094 愛の生誕の日を
041 044 怪しい手紙には翅が生えてゐたのかも知れぬ
041 137 この街で生きようとしてはならぬ
041 142 傷つける断片　それは悼ましくも長く生きてゐる
046 029 あなたの生をめぐる足跡の消えゆくを確め
047 004 孤独な生きもののため
051 025 影　終生よりそって離れぬ影
052 001 生きのびてきたわたしの心に
052 023 あなたはどうして人生にさよならを告げたのか
052 028 生きねばならぬこの賭はわたしの負けだ
053 050 一年よりもむなしい一生を過ごしてきました
054 004 生きているにしても　倒れているしても
054 014 死の滴りは生命の小さな灯をひとつずつ消してゆく
054 058 大学生は低い声と思いやりのある眼ざしで話しはじめる
054 106 独身者は大学生のリキュールグラスに
054 109 大学生のほそい瞳の奥に描かれてしまう
054 118 そして詩人と大学生は駅でしばらく別れを惜しむだろう
054 161 なにげない挨拶のうちから生れる未知の国民のことを……
055 056 西と東の二つの大戦のあいだに生れて
057 008 それでもぼくらが生きているとは信じられなかった
057 034 憎悪と欺瞞と屈辱によって生活し
058 013 あまり感心しない生活をしています
058 018 私の立派な人生には
061 086 ープラスーが生とすると
061 089 生が一ぱい詰まっている

061 104 だけどみんな＜生きよ＞と言いはしなかったね」
061 138 水仙や蛇や　もろもろの生ける質を潤おした』
061 211 生と死の影が重なり、
061 212 生ける死者たちが空中を歩きまわる夜がきた。
061 215 生と死の予感におののく魂のように、
061 226 死と生の予感におののく魂のように、
062 047 生きものの緑の意志は
062 058 生きることを諦めるには
063 030 ぼくたちが生れるずっとまえからそこにあった微笑を！
064 009 人生に別離なんかあるものかと、
064 018 生（なま）パンでさえ死の匂いがする。
064 019 ーー生きましょうよ、ねえ、
065 038 いたずらな月が生んだ魔女は
071 043 われらはながい生涯をもって測ったりする
072 060 われわれの生存競争もすべてフェア・プレーだったらいいのにと
074 018 生あるものの皮膚の下を
077 001 死んだ兵士を生きかえらせることは
077 006 いくたびか生きかえってきた
077 011 いくたびか生きかえる兵士たちが
077 034 再び生きかえることはないだろう）
079 028 生きるためより
081 014 ぼくらを生んだ七つの近代都市が
081 020 生身で受けとめているのは兵士ではない
086 009 生命は歩む影
088 009 ぼくが知っているのは　おまえが生れる前のことだ
088 010 おまえが生れてからのことは
088 019 きままなぼくの生活
088 073 太陽の涙から生れてきたぼくたちの
090 001 巨木は幾世紀を生きて
090 024 わたしが生れるずっと前からそこにある
091 013 この街に生れてこの街に死ぬ
094 015 ぼくの記憶はまだ生れていない
094 018 きみの人生はきわめてミステリアスに
094 020 きみがぼくに生きよと告げるなら
095 019 ……苦しみぬいて生きた父よ
096 018 あの瞑想の闇のコアには生きている砂漠があるんだ
097 001 一つの生命が、あるいは一羽の鳥の飛翔が、
097 003 あなたは生命も飛翔も見ないだろう。
100 018 あてもなくこの街で生きねばならぬ……
100 035 ぼくらの死から誕生にいたる
102 008 魂は死んで二度と生れてこないから
105 012 戦争は失敗し、ぼくらの国は生きのびてきた、
106 016 無事に生きのびてきた　この下手な構図は

106 017 人生を説明するのに　どうしたって何かが足りないようだ
106 044 すべての生きもののうちで　最も強くてしなやかな骨だ
108 019 これから生れて
109 005 生命の奔流は丘をくだり
109 009 生命の一循環を終えたのだから
109 010 生れかわるためには、死なねばならないと、
110 013 生きねばならぬ生活は
112 006 生きてるにしちゃ　冷たい手だね
113 015 大元帥のスターリンが生きてたから
114 006 じっと机の下にかがんで生きのびてきた
118 012 約束される誕生
120 020 人生に遅刻したのも気にしないで
122 010 あきらめきった人生の
125 018 われらの人生なんてロクなものではない
126 007 地球の生活を拡張しうるにちがい」
127 012 生れる前か
127 019 見たものを否定して生きてきた
131 004 背をこごめて街中で生き
132 001 不在を予約して生きた
132 002 隠れんぼの人生
135 001 生活とか歌にちぢこまってしまわぬ
136 014 生きたくないと樹は嘆く
138 005 すぐに生きかえり
140 016 欄外の人生を生きてきたのだ
140 017 地べたを這いずる共生共苦の道も
142 062 その著書をフランスで刊行した一九四二年生れのブコフスキーは
142 064 ずたずたに責め苛まれながら　若い生命をすり減らしているが
142 070 そして　国外での健康回復と安楽な生活の可能性があるにもかかわらず
142 079 もちろん　信念より自分の生命が大切だと考えたからである
142 081 生命より貴重だと感じていたのである
143 016 醜くなって生きのびて
143 018 みじめであさましい生きた心よ……
145 030 愛がなくともにんげんは生きられる
145 031 しかし　水がなくては生きられない
147 001 生きていくことに怖れを感じていた幼年時代だったら
147 004 生きることより死を受入れるほうがずっとたやすかったろう
147 005 生きることに困難を覚えていた青年時代だったら
147 007 世をも人をも厭いつつ生きていて
147 008 死と生が秤のうえでゆれながら均合っていた
147 010 生きていくことがだんだん心地よくなってきて
147 012 生きることに怖れも困難も感じない髪の毛の薄い男になっていた
147 018 生きていることが心苦しくならなかったことで
148 013 戦後の生活では、

148 015 一人分の人生を、生きるのは容易な業ではない。
148 023 生き残ったぼくらは、生活の位置がきまったときから、
150 014 一匹の魚さへ住んでゐない沼に釣糸を垂らしてゐる影だけが生きてゐる……」
150 031 うまうまと生きのびてきたということか。
150 035 敗戦後の苦しい生活のたたかいに敗れて倒れた者もあった。
150 037 「本質的に我々が誇り得るものは生理以外に在り得ない、
150 039 クラス委員にして落第生の竹内幹郎だった。
150 045 最後の拠りどころは生理しかなく、
150 047 我々が生きのびたことで誇り得るものが、
150 048 生理以外に在り得ないとは、ずいぶん淋しい話である。
151 018 ずいぶんながく生きすぎた罰だ
151 021 とことんまで生きる気なんだろうおまえは
153 001 青い塩水からうまれた生きものの
158 005 生きるのを断念するのは
159 007 今生の別れかと心はさわいだが
159 017 かれの生涯にはついぞなかったのに！
160 070 アルコールと麻薬に蝕まれた生活で
160 076 制度の春を病むこともなく　不確定性の時代を生きて
161 016 生きているというだけで
161 017 ましてながく生きているというのなら
162 003 生活の重みに耐えてきたが
162 009 生きるのをいぶかる眼に
164 016 ……ぼくの一生は詩の困難でやや暗い
165 023 父とは半生のつきあいだったが
166 006 三つの時代を同時に生き
166 019 という？先生の発言を今朝の新聞で読んでから
167 013 実際に生きるのは厄介で
168 013 生きることの永続性のあかしか
169 004 自殺の二乗を生きるから
171 020 生きることを学ばなければ。
173 017 「生物はすべて
175 008 一生かけて見つけないうちに
180 014 生意気も芸のうちで
184 006 タイ生れの中国人の医者と再婚した
186 017 （荏原肆夫が生きていてね）
186 019 杉本春生、相良平八郎に会ったよ
186 074 （ぼくらの人生だって
187 016 生かしてきたもののゆえに
188 042 人生の下り坂にかかったときからである。
188 080 誕生と、性交と、死に、
189 019 誰とも口をきかずに十年を生きればよい
190 010 在りのままに生き
190 011 東洋哲人風の生活が

191　008　生きている自然のしるしに
192　014　薄暮と昧爽とをとりちがえていた迂闊さに、狼狽するも間なく、巨大な生きものの胎内にのみこまれるように、
193　019　私一人の人生でも

せい　精
016　013　より精巧な機械に見とれるときも
028　047　地の脈を水の流れを変えるほど精密だが
053　032　わたしは落葉の精なのです
100　070　精力的な夏は未来の街の方向にひろがっているようにみえた
126　020　人間の精神の問題かもしれないから。
142　060　精神病棟で比較的おとなしく死ぬだけだろう
142　061　　ソビエトにおける新しい精神病　反対！　を叫んで
142　063　各所の精神病棟監獄　普通の監獄・収容所で
142　069　精神病棟監獄から同時に釈放せよ　というものだった
142　116　信念を持つ人間の精神が世界最強の力には通じないとか
142　120　　これ以上は一歩も進ませないそ　と宣言する不屈な人間の精神のみがー
155　024　精力的にうしろへ押しやっていく
170　026　物を書く空気になじめなくなっている精神の
186　077　その精髄を秘めている
188　029　精神は、あくまで健康、
188　039　どのみち、精神にか、肉体にか、
190　008　精霊の澄んだ答えが返ってくる

せいかく　性格
028　019　文明的なもろもろの雑音の性格により

せいかくな　正確な
028　046　技師の懐中にある正確な地形図は

せいかくに　正確に
150　063　娼婦の悲惨さを、かなりの密度で正確に捉えたというだけで、

せいかつ　生活
006　006　モグラの生活は嫌だね　と
028　058　そこに多数の生活が個人によって支持される
029　007　型も持たぬ生活のうちに
057　034　憎悪と欺瞞と屈辱によって生活し
058　013　あまり感心しない生活をしています
088　019　きままなぼくの生活
110　013　生きねばならぬ生活は
126　007　地球の生活を拡張しうるにちがい」
135　001　生活とか歌にちぢこまってしまわぬ
142　070　そして　国外での健康回復と安楽な生活の可能性があるにもかかわらず

148　013　戦後の生活では、
148　023　生き残ったぼくらは、生活の位置がきまったときから、
150　035　敗戦後の苦しい生活のたたかいに敗れて倒れた者もあった。
160　070　アルコールと麻薬に蝕まれた生活で
162　003　生活の重みに耐えてきたが
190　011　東洋哲人風の生活が

せいかつし　生活し
057　034　憎悪と欺瞞と屈辱によって生活し

せいき　世紀
041　099　むかしの世紀がまだ寝床に就かぬうちは
057　036　ながかった一世紀が終ろうとしているのに
068　009　今世紀最大の詩人が
077　013　幾世紀もの列をつくってつづくのだ
090　001　巨木は幾世紀を生きて
160　041　十四世紀のスコットランドの詩を口誦さみながら
193　012　半世紀は車窓の景色であった

せいぎ　正義
128　045　正義　戦争　性欲　政治
136　010　正義と無智の
188　048　正義の社会学であったり、深遠な歴史学であったりもするのだから、

せいくらべ　背くらべ
150　020　どん栗の背くらべをしていたにすぎなかったが、

せいけいしゅじゅつ　整形手術
113　050　修正に修正をほどこす整形手術で

せいけつ　清潔
098　020　その白い手のように明るく清潔にみえる

せいこう　性交
188　080　誕生と、性交と、死に、

せいこう　成功
160　071　アメリカ社会における成功の蔭にある失敗のさまざまな痕跡が

せいこうな　精巧な
016　013　より精巧な機械に見とれるときも

せいざ　星座

182　017　星座の歌に耳を傾けていると

せいじ　政治
096　006　ギリシァ　ローマの政治を見てきたが
128　045　正義　戦争　性欲　政治
142　087　臆病な政治的理由があり　小さな幸福をほんの少し長引かせるための

せいしした　静止した
090　015　静止した「時」は
097　002　ぴたりと静止したらどうなるか？
187　006　そこまでは静止した風景だった

せいししていた　静止してゐた
031　013　静止してゐたものが動き出したとき

せいしする　静止する
062　056　ここでは静止する石ですら

せいじてき　政治的
142　087　臆病な政治的理由があり　小さな幸福をほんの少し長引かせるための

せいじゃ　聖者
125　003　聖者をうらぎった罰があらわれている

せいじゅつ　性術
144　017　わけよしの性術に明け暮れて

せいしゅん　青春
041　037　青春よ　もう再び戻ってきてはいけない

せいじょうな　清浄な
033　001　一本の茎は清浄な水を欲する

せいしん　精神
126　020　人間の精神の問題かもしれないから。
142　060　精神病棟で比較的おとなしく死ぬだけだろう
142　061　　ソビエトにおける新しい精神病　反対！　を叫んで
142　063　各所の精神病棟監獄　普通の監獄・収容所で
142　069　精神病棟監獄から同時に釈放せよ　というものだった
142　116　信念を持つ人間の精神が世界最強の力には通じないとか
142　120　　これ以上は一歩も進ませないそ　と宣言する不屈な人間の精神のみがー
170　026　物を書く空気になじめなくなっている精神の
188　029　精神は、あくまで健康、

188　039　どのみち、精神にか、肉体にか、

せいしんびょう　精神病
142　060　精神病棟で比較的おとなしく死ぬだけだろう
142　061　　ソビエトにおける新しい精神病　反対！　を叫んで
142　063　各所の精神病棟監獄　普通の監獄・収容所で
142　069　精神病棟監獄から同時に釈放せよ　というものだった

せいしんびょうとう　精神病棟
142　060　精神病棟で比較的おとなしく死ぬだけだろう
142　063　各所の精神病棟監獄　普通の監獄・収容所で
142　069　精神病棟監獄から同時に釈放せよ　というものだった

せいしんびょうとうかんごく　精神病棟監獄
142　063　各所の精神病棟監獄　普通の監獄・収容所で
142　069　精神病棟監獄から同時に釈放せよ　というものだった

せいずい　精髄
186　077　その精髄を秘めている

せいぜい
162　024　せいぜい

せいぞう　聖像
146　022　金色の聖像におおぜいの人が

せいそくする　棲息する
028　062　花花しく棲息する物質の群れが

せいぞんきょうそう　生存競争
072　060　われわれの生存競争もすべてフェア・プレーだったらいいのにと

ぜいたくな
187　002　ぜいたくな心は重い

ぜいたくな　贅沢な
004　007　僕は新らしい贅沢な船の設計について
179　020　死よりも贅沢な眠りに就く

せいたん　生誕
039　094　愛の生誕の日を

せいど　制度

160　076　制度の春を病むこともなく　不確定性の時代を生きて

せいどう　青銅
061　144　あなたの青銅の額には、濡れた藻の髪が垂れ、
061　164　そして濡れた藻と青銅の額の上に、

せいなる　聖なる
053　012　これがわたしの聖なる苦行衣です
077　007　（聖なる言葉や

せいねん　青年
054　062　ペテルスブルグの青年が僕たちに告げたことを……
057　007　パスカルの読み方を教えた青年が戦死し
093　023　孤独な青年の体臭に
147　005　生きることに困難を覚えていた青年時代だったら

せいねんじだい　青年時代
147　005　生きることに困難を覚えていた青年時代だったら

せいひん　製品
028　035　おびただしい製品とともに

せいひんか　清貧家
085　021　理想主義者や清貧家を蹴とばし

せいふ　政府
054　164　宮殿や政府の階段をとびこえ
058　038　よく政府の悪口を言っていた広場には

せいふくよく　征服欲
173　015　征服欲も　怠惰も　まだ新鮮だ

せいぶつ　生物
173　017　「生物はすべて

せいほう　西方
039　082　西方の窓を照らしだす

せいみつ　精密
028　047　地の脈を水の流れを変えるほど精密だが

せいめい　生命
054　014　死の滴りは生命の小さな灯をひとつずつ消してゆく

086　009　生命は歩む影
097　001　一つの生命が、あるいは一羽の鳥の飛翔が、
097　003　あなたは生命も飛翔も見ないだろう。
109　005　生命の奔流は丘をくだり
109　009　生命の一循環を終えたのだから
142　064　ずたずたに責め苛まれながら　若い生命をすり減らしているが
142　079　もちろん　信念より自分の生命が大切だと考えたからである
142　081　生命より貴重だと感じていたのである

せいめい　声明
142　004　西側の新聞や著名人の多くの声明には

せいようざら　西洋皿
106　019　かれの額は　西洋皿の平面のように広く

せいようじん　西洋人
156　017　習慣みたいな西洋人は

せいよく　性欲
128　045　正義　戦争　性欲　政治

せいり　生理
150　037　「本質的に我々が誇り得るものは生理以外に在り得ない、
150　045　最後の拠りどころは生理しかなく、
150　048　生理以外に在り得ないとは、ずいぶん淋しい話である。

せいりゅう　清流
190　014　清流をさかのぼって幽谷に魚影を追い

せいりょくてきな　精力的な
100　070　精力的な夏は未来の街の方向にひろがっているようにみえた

せいりょくてきに　精力的に
155　024　精力的にうしろへ押しやっていく

せいれい　精霊
190　008　精霊の澄んだ答えが返ってくる

せいれつし　整列し
112　014　命令一下たちまち整列し　黒い銃剣の林をつらね
186　056　それなのに、みんなが整列して中央に一つだけ空いている椅子

せいれつして　整列して

186　056　それなのに、みんなが整列して中央に一つだけ空いている椅子

せいれつする　整列する
014　020　楽譜が走ってきて整列する

せいーぱい
150　060　時代の風圧を避けるのにせいーぱいで、

せおい　背負い
053　019　わたしはわたしの影を背負います
055　013　背負い袋のようにおまえをひっかついで

せおう　背負ふ
044　014　熱い太陽を背負ふ　神々よ

せかい　世界
012　005　秘密の世界に鍵をかける
021　028　円形の窓のない世界から
023　012　きこえない見えない世界で
025　018　燃えあがる世界の窓の内部から
028　006　意識の外部と呼ぶ空壜の堆積した世界よりも
028　012　古靴の氾濫する世界に
028　063　古靴の世界を支配し
031　008　もう花などどんな世界にも垂れはしない
039　009　わたしは象どられた世界から辷りでて
041　101　眠れる世界に息を吹きこむ
053　055　ああ世界が暗くなってゆきます
054　038　歩いてゆこう　荒涼とした世界の果へ……
054　122　影は一つの世界に　肉体に変ってゆく
056　013　聾の老人が世界に向って何か叫んでいるのが
057　024　世界を冷やす月光がぼくの額を照らすのを……
060　012　世界の秋は深くなってゆくように思われる
061　019　水晶　花　貝殻が、世界の空に
063　011　世界の深夜ーー
079　006　ここは世界で
088　043　おまえの世界には
093　029　それは血や光りがかえってゆく水平線のない世界だ
100　042　たえまなく出血している内部の世界で
100　081　ぼくたちが　さらに遠くの世界に眼をやるとき
101　002　世界はなんと曠野に似てくることか
101　005　こんなふうにおわるのはなにも世界だけではない
103　027　おそろしい幻想とレビアタンの住む世界だ
106　011　外部の世界をうかがい　いまもじっと「時」をこらえ

106　037　なにごとも断定するには　むずかしい世界となった
109　008　自分自身と世界とに別れを告げるときがきた、
112　047　待ちどおしいぞ　世界の終りが
113　012　世界は　こう
113　029　人民の世界を反映した
113　051　いびつになった世界の顔　そいつは
115　003　あたらしい世界をたずね
121　004　天気は神さまに　世界は新聞に
123　009　世界のメトロポリス
126　013　それが荒涼とした虚無の世界だとしても
127　003　世界の明るさに耐えた。
140　008　男の世界は終った
142　040　世界のすみずみにまでとどけられるのである
142　045　ぼくたちは世界の片隅でふさぎこみ
142　098　世界中にその網の目をひろげているのである
142　116　信念を持つ人間の精神が世界最強の力には通じないとか
142　122　個人の平和と　世界の平和と　人類そのものの　真の守護者たりうるのだ」と
142　124　全世界に警告を発したのである
150　029　文学の世界にとどまっている者は、私しかいない。
150　069　一つの国さえたちまち喪われるような世界に住んでいるので、
165　033　世界を映す鏡に
173　010　もう終ろうとしている世界がある
173　023　世界は進歩しない　が
173　032　どのみち世界で
173　042　世界はやがて筋萎縮性の痙攣を起し
174　007　その後、「死後の世界」を読み
174　023　「死後の世界」の明るさを先取りして
179　022　ゆっくりと世界を見まわせ
185　010　世界中の人たちに嚥みこまれ
185　013　一対の男女の世界では、甘美な
185　015　不意に世界から消えた
185　020　どうせ、不均合いで混乱した世界だから
193　024　ときわの首都は世界の影を映している

せかいさいきょう　世界最強
142　116　信念を持つ人間の精神が世界最強の力には通じないとか

せがまれ
160　023　それで時間つなぎに詩を聞かせてくれとせがまれ　聴衆のもとめに応じて

せがむ
088　008　膝にのって話をせがむマリよ

せき　咳
007　002　あたり　見知らぬ老婆が咳をするのはわれらにかかわりのないこ
065　044　乾いた咳を一つした。彼のイメージのなかには
140　022　スモッグの咳をし
188　053　あの頃は若く、青い顔で咳をしていたが、

せき　席
035　010　座席から
041　079　坐席があなたを動けなくした
186　027　廿六年前に広島で撮った写真を、懇親会の席上で相良君から見せられてね
186　057　それがぼくの席なのだ
186　079　宴席の大きな皿に盛られた海の幸、鯛や鮑の刺身も

せきこみ
054　128　僕はせきこみ調子づく

せきじょう　席上
186　027　廿六年前に広島で撮った写真を、懇親会の席上で相良君から見せられてね

せきぞう　石像
036　017　噴水と石像のある静かな白昼よ

せきにん　責任
009　015　いま責任を問はれてゐるのです
055　038　おまえはおれの責任について
055　039　おれはおまえの責任について考えている

せきらんうん　積乱雲
073　020　大いなる積乱雲のさけ目をみつめた

せきりょう　寂寥
072　065　十万のひとが残していった大きな寂寥が
176　029　寂寥の海がぼうぼうとひろがっていて
192　006　それにしても、と影をもたぬ寂寥が、くびをかしげる。人に会わぬ。風はそよとも吹かず、自分の足音さえきこえな

せきりょうの　寂寥の
176　029　寂寥の海がぼうぼうとひろがっていて

せきをする　咳をする
007　002　あたり　見知らぬ老婆が咳をするのはわれらにかかわりのないこ

せき立てて
106　012　永遠プラス五分間を　「早く早く」とせき立てている

せけん　世間
185　022　いずれ世間は納得する

せすじ　背すじ
061　094　背すじを走る黒い運河の呻きをーー
162　001　背すじはしなやかに

ゼスチュア
028　024　如何なるゼスチュアが会話が取交はされたか

せせらぎ
062　052　海へいそぐ小川のせせらぎや

せたけ　背丈
146　055　その人の背丈も

セダン
096　015　文明色なら　もう古くなった三十年代流行のセダンの

ぜっく　絶句
162　012　絶句していそいそと傘をすぼめ

セックス
188　059　「セックスに関する講座は、尋常科からあるのですが、

せっけい　設計
004　007　僕は新らしい贅沢な船の設計について
010　009　その新しい設計こそ白い帽子と赤いジャケットの

せっけん　石鹸
028　039　信仰や箸や石鹸や喜ろこびや散策があるやうに

せつだんして　切断して
085　014　広場の群集を二つに切断しても

せつな　刹那
046　035　怒の鎮まりやすい刹那がえらばれて

せつない
084　013　マリリン・モンロウのせつない性のささやきーー

せっぷん　接吻

112　049　おれたちが本当に別れるのはこれがはじめてだが　ユダの接吻はいらない

ぜつぼう　絶望
028　057　そこに一個の希望が絶望が信仰が
085　030　絶望も希望も必要でない
100　019　それから　ぼくの絶望は
101　028　絶望も希望も住む場所をもたぬところ
124　012　他者への絶望が

せつめいする　説明する
106　017　人生を説明するのに　どうしたって何かが足りないようだ

せつやくし　節約し
155　029　感情を節約し

せつり　摂理
028　038　当りまへに動いてゐる摂理の

せなか　背中
041　110　あなたには人の背中しか見えぬ
041　148　あなたには人の背中しか見えぬ
046　031　背中を行き来する千の歩みも
048　012　川は音をたてて背中をながれる
054　088　君たちは僕に背中をむける
054　092　その平たい背中には背骨がないということを……
056　003　そして彼の背中のように淋しい風景がそこにある
142　086　黙って背中を向ける者もいる　それにはそれの
148　027　背中に淋しい影を宿し、
151　016　背中をこごめて人中を歩く姿といったら
162　006　背中の瘤が
165　009　黙々と机に向って仕事をする父の背中に
167　024　背中をまるめて椅子に凭れている
180　046　その人の背中に向って

ゼノン
054　147　酷薄なゼノン！
120　015　ゼノンの矢も

せばめられた
085　004　天の一角にせばめられた都会の空である

ぜひ　是非
192　022　最後の運をたよりに走り出していたのは、是非もなかったが、

セブンスター
152　001　セブンスターの箱をはじくと

せぼね　背骨
054　092　その平たい背中には背骨がないということを……
140　024　四十七階の痛む背骨がゆれている
182　009　しなやかな背骨がなくとも

せまった
065　005　壁のそとにせまった。食卓には

せむし
084　035　唖でせむしの影をつれて

ゼラニウム
039　132　ゼラニウムのやうに燃えはてようと

ゼリフ
173　006　捨てゼリフはきまっている

ゼリー
145　016　固いパンの男がゼリーの女に食べながらストレートに話し合おうと云っていた」

セルパン
025　025　かつて居睡するセルパンであった

セルロイド
002　006　ふるえるセルロイドの掌

セロ
006　003　爆発したセロイドの匂が　室内を明るくした　青い
014　008　ヴァイオリンがセロの声で歌ったら
014　009　セロが憤慨して足をあげた
096　004　ぼくはバルセロナの夜をえがく
096　009　太陽の町は夜の町　バルセロナの裏町の
152　025　タバコの外装からセロハンをはずして

ゼロ・サム・ゲーム
189　003　ゼロ・サム・ゲームにすぎん

セロイド
006　003　爆発したセロイドの匂が　室内を明るくした　青い

セロハン
152　025　タバコの外装からセロハンをはずして

せわ　世話
182　007　世話をする植木までひねくれる

せん　一九五〇年
061　057　一九四〇年の秋から一九五〇年の秋まで、

せん　一九五八年
188　019　一九五八年に、日本で、

せん　一九三九年
150　062　一九三九年の春、

せん　一九三八年
160　012　デルモア・シュワルツが一九三八年に書いた短篇を読んだ

せん　一九四〇年
061　057　一九四〇年の秋から一九五〇年の秋まで、

せん　一九四二年
054　001　それは一九四二年の秋であった

せん　一九四四年
077　016　一九四四年五月のある夜……

せん　一九四七年
054　049　一九四七年の一情景を描き出そう

せん　一九四二年
142　062　その著書をフランスで刊行した一九四二年生れのブコフスキーは

せん　一九六六年
160　054　私が知りうるのは　シュワルツが一九六六年に五十三歳で死んだことだ

せん　栓
024　002　脳髄は青く透明である　ざわめきの聞こえる孔には栓をつめ

ぜん　善
041　104　あなたの計算表　あなたの慈善帳
085　031　きみが求めているものは善悪でない何ものか

124　015　確実な善意を
134　004　いかに善でありうるかだって？
150　030　これは、私だけが「虚構の個性」をつらぬき、偽善の間道をくぐりぬけて、

ぜん　全
054　140　もっと荘重に　もっと全人類のために
055　054　この倦怠の街の全景を
057　018　樫はぼくに全身をあたえ
079　015　全速力で飛びさるであろう
094　022　ああ　太陽は全身にものうく
101　024　安全装置をはずした引金は　ぼくひとりのものであり
106　022　さらにいっそう素晴しいのは鼻だろう　内なるオルガンの全神経が
112　033　安全への愛　怠惰への退却
142　095　すでに現実に存在していて　いわゆる階級構造とは全く無縁な
142　097　非合理に機能する官僚的権威主義を全面的こはびこらせながら
142　100　（なさねばならぬこととなしうることとは全く別だが
142　124　全世界に警告を発したのである
148　033　硫黄島に送られ、全員戦死していたことをはじめて知らされた。
148　054　正午は安全な時刻である、
150　010　自分の血が全部流れ出してしまふのではないかと怖れた。
150　036　しかし、そのことに、「私」は、全面的に欺かれているわけにはいかない。
156　038　完全に処女性を保っている
160　033　印刷の不備でくじに外れた老楽師に　大当りの賞金を全部やってしまう
173　028　顔を赭めることなど全くなくなった
183　008　街全体がもひとつぱっとしないのは
183　015　安全に養われているその家族たちだ
188　068　そのコピーを読んだ記憶は、全くない。

ぜんあく　善悪
085　031　きみが求めているものは善悪でない何ものか

ぜんい　善意
124　015　確実な善意を

ぜんいん　全員
148　033　硫黄島に送られ、全員戦死していたことをはじめて知らされた。

せんきょした　占拠した
174　019　ぼくは黒を持ち確実を三隅を占拠したが、中央の白が厚く、ずるずると敗けてしまい

ぜんけい　全景
055　054　この倦怠の街の全景を

せんげんする　宣言する
142　120　　これ以上は一歩も進ませないそ　と宣言する不屈な人間の精神のみがー

せんご　戦後
148　013　戦後の生活では、
148　035　どのようにして戦後の社会をたたかいぬいてきたかを語りあったが、
150　035　敗戦後の苦しい生活のたたかいに敗れて倒れた者もあった。

せんこう　閃光
106　013　パンという閃光で　映像がうまれまた消える

せんこく　宣告
051　010　「黄色さ」医師の事もなげな宣告。

せんさい　繊細で
053　059　美しく繊細で　やさしかったお姉さん！

せんしし　戦死し
057　007　パスカルの読み方を教えた青年が戦死し
148　033　硫黄島に送られ、全員戦死していたことをはじめて知らされた。

せんしして　戦死して
148　033　硫黄島に送られ、全員戦死していたことをはじめて知らされた。

せんししゃ　戦死者
148　040　戦死者の手足がぐるりと輪になり、

せんしつ　船室
055　008　船室の灯のひとつひとつを

せんじょう　船上
169　009　難破する船上の人のように

ぜんしん　全身
057　018　櫂はぼくに全身をあたえ
094　022　ああ　太陽は全身にものうく

ぜんしんする　前進する
123　012　群集は前進する

せんせい　先生
166　019　という？先生の発言を今朝の新聞で読んでから

ぜんせかい　全世界
142　124　全世界に警告を発したのである

せんそう　戦争
049　010　戦争で死んだMよ
057　009　戦争ぎらいのドイツの作家が
077　027　戦争を呪いながら
084　014　戦争か進歩か壊滅か革命か
092　011　戦争を呪うべきか？
105　012　戦争は失敗し、ぼくらの国は生きのびてきた、
118　005　永久戦争
128　045　正義　戦争　性欲　政治
140　006　戦争もなければ故郷もない
142　077　アメリカの一部の戦争捕虜たちは
148　001　戦争で死んだとおもっていた友が、
150　034　半数近くは戦争で死に、
167　036　戦争と革命の犠牲者たちの
193　010　愚かな戦争

せんそうの　船窓の
081　017　夜あけのくる船窓の下の

せんそうほりょ　戦争捕虜
142　077　アメリカの一部の戦争捕虜たちは

ぜんそくりょくで　全速力で
079　015　全速力で飛びさるであろう

せんたい　船体
026　014　壊れた船体のやうに

せんたくしたて　洗濯したて
061　116　洗濯したてのシャツをよごすほどにも

せんちょう　船長
051　004　「この病院船の磁針がきみらを導いてくれる」と船長は言う、

ぜんちょう　前兆
150　080　地震か何かの前兆かもしれません。

せんでん　宣伝
028　071　宣伝ビラの形式を案出するのであらうか

せんとう　尖塔
098　027　青空にくっきり聳えて輝いていた五つの尖塔
107　003　尖塔の鐘の音も若かった

せんどうしゃ　煽動者
124　037　名づけられぬ欲望の煽動者に幸あれ！

せんにんぎり　千人斬り
151　034　千人斬りとか五千人枕とかにくらべたら

せんぬき　切抜き
188　064　このことを取りあつかった切抜きがあるはずなので、

せんねんし　専念し
148　004　南国で農業に専念し、妻と離別してから、

せんの　千の
046　031　背中を行き来する千の歩みも
065　036　一千の喇叭がいちどに鳴った。その響きは

せんぱく　船舶
025　007　それらが船舶の歴史の中にあった時代には

ぜんぶ　全部
150　010　自分の血が全部流れ出してしまふのではないかと怖れた。
160　033　印刷の不備でくじに外れた老楽師に　大当りの賞金を全部やってしまう

ぜんぽう　前方
192　025　必死の思いで、前方の真っ暗闇を凝視するが、もう何も見えぬ。

ゼンマイ
025　033　ゼンマイのやうに跳ねてゐる雲

ぜんめんてき　全面的
142　097　非合理に機能する官僚的権威主義を全面的こはびこらせながら
150　036　しかし、そのことに、「私」は、全面的に欺かれているわけにはいかない。

ぜんめんてきに　全面的に
150　036　しかし、そのことに、「私」は、全面的に欺かれているわけにはいかない。

せんもん　専門
151　013　学問もなけれは専門の知識もない

せんゆう　戦友
112　026　真白な花婿の胸をした戦友よ
112　030　なあ戦友　なぜ黙っている
112　048　さらばだ　戦友
148　029　元戦友から招待状がとどいた。
148　046　もうこれ以上、滅ることのない戦友の、

せんりつ　戦慄
060　014　高貴な冷たい戦慄を感じているにちがいない

せんりつ　旋律
039　021　けれどなめらかな旋律は

せんりゃく　戦略
128　050　戦略である」

セーター
053　010　わたしは赤いセーターを着て

そいつ
051　026　「そいつは黄色だ　まるであの穢らわしい魂のように」
113　051　いびつになった世界の顔　そいつは
136　027　そいつらがまた　盲の子をうむ
188　041　とめどもなく、そいつとお喋べりを始めるのは、

ぞう　象
012　025　象牙の足がでる
026　026　わたしは額を象嵌せよと願った
031　024　象どられたものから
039　009　わたしは象どられた世界から辷りでて
046　010　あなたはみづからの心象を鳥瞰するため
046　025　この橋も海中に漂ひ去って　躍りたつ青い形象となり
048　025　乳と象牙と林檎とが
054　148　暗い存在が抽象そのものに凍ろうとする時間のはずれから
072　032　きわめて純粋で、抽象的だ
106　023　そこに集中し隆起して　あるフイジカルな高貴さの象徴となり
106　031　詩人なら孤狼な口髭とか　大切な象徴の鼻について
144　018　気象は覚存にして無漏
158　029　断念の最後の対象だった
164　019　ぼくらは闇の物象の
173　031　それで近代の伝説は消え　象徴は解体する
186　020　それで今度の西下の印象は？
192　002　どんな現象も起りようがなく、わたくしの影は、孤独とはいえなくなっているから、

ぞう　像
028　023　鳩とともにおお救世主の銅像の髭にもついて
029　017　樹樹のいろが肖像を作った
035　005　小さな像をこえて
036　017　噴水と石像のある静かな白昼よ
101　047　森や田畑やうつくしい町の視覚像はいらない
106　013　パンという閃光で　映像がうまれまた消える
145　023　「写真店の窓には曝された肖像の記念写真が　夢こそすべてであると知った時　もう肉体
146　022　金色の聖像におおぜいの人が
150　016　私自身は、かなり正直な自画像のつもりだった。
154　009　想像しえない創造の日からの

そういてん　相違点
174　013　お互いの相違点を数え上げるのはたやすいが

ぞうお　憎悪
023　020　澄んだ褐色の眼を出はいりする憎悪の炎よ
041　038　あの汚れた貝殻　岩に砕ける憎悪の波よ
054　082　見よ　憎悪と虚栄のぬけがらを……
055　047　おれは憎悪のフォークを突き刺し
057　034　憎悪と欺瞞と屈辱によって生活し

ぞうか　造花
054　008　胸に造花の老人たちが

そうかい　爽快
083　022　これは爽快だ　わたしにも

そうかい　総会
085　017　総会とか委員会とかの

そうかんごう　創刊号
150　051　彼は我々の雑誌の創刊号に、玉の井の娼婦と客との交渉を扱った「泥沼」を書き、

そうぎや　葬儀屋
188　062　その反対に、葬儀屋や墓地などを見学しながら、

ぞうげ　象牙
012　025　象牙の足がでる
048　025　乳と象牙と林檎とが

そうげん　草原

171　011　草原に追いやられて殺されるアザラシの

ぞうげんし　増減し
072　031　数字のように増減し

ぞうご　造語
085　018　奇怪な造語で喋る連中の頭を踏みつけよう

そうさく　創作
150　055　こんな創作を今度載せたら発禁にするぞ、と検閲係から脅かされた。

そうじ　掃除
128　053　相場も騒動も測量も相続も掃除も葬式も

そうしき　葬式
128　053　相場も騒動も測量も相続も掃除も葬式も

ぞうしょくさせ　増殖させ
172　025　血に飢えた孤独を増殖させて

そうしんぐ　装身具
054　080　衣裳と装身具の内側に　化粧のゆきとどいた顔の下に
058　033　指輪や装身具の飾ってあるショーウィンドをのぞいて

そうぞう　創造
154　009　想像しえない創造の日からの

そうぞうしえない　想像しえない
154　009　想像しえない創造の日からの

そうぞく　相続
128　053　相場も騒動も測量も相続も掃除も葬式も
172　015　祖先から相続した恐怖で

そうぞくした　相続した
172　015　祖先から相続した恐怖で

ぞうだいして　増大して
173　013　地獄の炎のなかで増大していく

そうたいてきな　相対的な
106　014　すべて相対的な時のなかを　いかにゆっくり他の時が進行するか

そうち　装置
101　024　安全装置をはずした引金は　ぼくひとりのものであり
142　038　殺人的な電流装置で閉された国境をやすやす越え
188　069　記憶の装置が、氷りついてしまったようで、

そうちょうに　荘重に
054　140　もっと荘重に　もっと全人類のために

そうどう　騒動
128　053　相場も騒動も測量も相続も掃除も葬式も

そうねんじだい　壮年時代
147　009　ところが遅れてやってきた壮年時代に入ると

そうば　相場
124　010　相場師の根性は
128　053　相場も騒動も測量も相続も掃除も葬式も

そうばし　相場師
124　010　相場師の根性は

ぞうぶつしゅ　造物主
152　008　造物主の息がかかっていて
186　072　時間は偉大な造物主だからね

そうもく　草木
088　070　とおくまで草木や花のやさしい言葉で

そうれつ　葬列
136　005　葬列が見えない

ぞくさない　属さない
062　019　「もし身体にも魂にも属さない掟があるなら

そくど　速度
023　018　怖るべき悲しむべき速度の中に
028　003　緑の影はいつもガラス管によりそってゐた純粋な頭の鈍い速度について
028　005　白い事務所の内側の時計の速度は
028　050　ただそこに時代の速度乃至歩調が見えてくるだらう
072　049　高速度カメラが
124　024　国際級の背景的速度に陶酔し

そくりょう　測量

028 043 測量する技師の手の影に従って
128 053 相場も騒動も測量も相続も掃除も葬式も

そくりょうする 測量する
028 043 測量する技師の手の影に従って

そこ
011 007 そこから大理石の都会が見え
028 045 そこを通る風の鳥の虫類の笑ひ
028 050 ただそこに時代の速度乃至歩調が見えてくるだらう
028 055 そこに一個の文明が
028 056 そこに一個の社会が工場が
028 057 そこに一個の希望が絶望が信仰が
028 058 そこに多数の生活が個人によって支持される
028 068 そこにある雑音はまがりくねって
030 003 そこにある闇のひろがり
030 005 そこらあたりの壁には花もない
030 022 そこに憩ひがあり噴水がある
034 018 そこへも一個の石が転がり
039 035 みんなそこに
041 083 そこにあたる影や光　樹々から流れる緑の匂ひ
050 010 ーー死にそこなってみれば、たしかにそのとおりであった。
052 029 死にそこないのわたしは
054 030 「そこにはどんな科学が　哲学が
054 031 そこにはどんなリズムが　色彩が
054 032 そこにはどんな可能が　不可能が」
054 065 いまこそそこに疑いの余地があるから
056 003 そして彼の背中のように淋しい風景がそこにある
058 011 そこにはジャズがほそぼそとながれ
058 017 そこを通ってゆきました
058 045 どうやら私は今年も結婚しそこねたようです
063 030 ぼくたちが生れるずっとまえからそこにあった微笑を！
065 015 そこに、あたらしい岩山が出現するまで
066 019 あなた、そこにいるの？
069 008 そこにはまぶしいところがあったんだって
069 016 そこには
069 027 そこには　さめたスープをまえにして
069 030 そこには
069 033 そこには
084 010 そこには青い灯のバアがありますから
089 033 （そこには　みなれた風景と
090 010 そこに年輪をよむかわりに
090 024 わたしが生れるずっと前からそこにある

099　007　そこで　力いっぱい投げたボールが
100　044　切れたフィルムの記憶のそこから
106　023　そこに集中し隆起して　あるフイジカルな高貴さの象徴となり
141　006　そこも、一つのお部屋だったわ。
145　009　そこにもあったトーモロコシの毛のそよぐ丘陵をエンジェルがうまれるのに充分な広さ
146　021　そこは秘密の礼拝堂になっていて
146　029　そこでは醜い顔の二人の女が
162　021　そこで一樽のワインとなら
163　019　あそこまでは跳べる
164　021　そこにいるのか　いないのか？
173　014　そこでは人間の血がまだ新鮮なのだ
187　006　そこまでは静止した風景だった
190　001　帰るところはそこしかない
190　018　そこにしかない
192　017　よくよく見れば、そこから一米間隔くらいで、白い明りが点々とつづいているのだ。迷う者のために設けられた救急
192　023　七十米と行かぬうちに、白い明りの標識は消え、そこから先は真っ暗である。

そこ　底
023　023　暗い水底に沈んだ
027　013　グラスの底に夜が光った
029　001　時空の瓶の底に
038　002　グラスの底を涸れさせて
038　028　荒廃したグラスの底をとほるやうに
039　032　水の底にはいつも鏡のやうな階段があって
039　051　グラスの底が晴れたら
039　143　塵や灰の底へ沈み
040　004　器物の底もひびわれて
047　015　自己愛が底深く凍りついてしまっていることを……
049　007　鋭い笛のようなものが胸の底でめざめる、
061　031　さんざめく裏街のどん底で、
071　033　たとえば深い谷底からは
079　010　海底には
087　006　じっと食器の底をみつめたまま
130　002　夜の底がひびわれたとおもったら
133　009　行きあう顔色の底の底までわかって
136　028　地底の川はどちらへ？
150　013　彼の表面は常に波立ってゐるが、彼の底は何時も静かで、
160　015　二十年も昔に記憶の底に沈んだ詩人が
173　049　深海の底の眠りに就くことができる
179　029　明日には深い霧の底に沈み
192　015　みるみる漆黒につつまれていく、ここは、もともと海底だったところではないか。冷気に身ぶるいし、
192　019　助かった！　*まだ*死にたくはない。眼は真珠に、骨は珊瑚になったとかいう、五尋の海底の父になるなんてごめんだ

そこから
011　007　そこから大理石の都会が見え
100　044　切れたフィルムの記憶のそこから
192　017　よくよく見れば、そこから一米間隔くらいで、白い明りが点々とつづいているのだ。迷う者のために設けられた救急
192　023　七十米と行かぬうちに、白い明りの標識は消え、そこから先は真っ暗である。

そこく　祖国
074　012　ぼくら祖国の苦しみだったろうか
081　028　遠い未来の祖国の霧
112　017　祖国の栄光と同胞の愛を信じて地平線になだれていった
142　078　反祖国的ないかなる文書に署名してもいいと思っていた

そこふかく　底深く
047　015　自己愛が底深く凍りついてしまっていることを……

そしき　組織
028　017　組織が崩れ動乱の意識が流れかけて
142　096　極度に不平等な特殊社会組織の

そしゃくする　咀嚼する
165　003　ゆっくり食物を咀嚼する口の動き

そしらぬ
112　011　小首をかしげ　そしらぬふりをするな

そせん　祖先
172　015　祖先から相続した恐怖で

そそぎて　注ぎて
061　137　夜　昼　わが涙のみ注ぎて魂の糧となり

そだたなかった　育たなかった
052　009　あなたの育たなかった乳房や

そだてた　育てた
041　010　社交術があなたを涸れさせたり育てたりしないうちに
041　081　あなたはじぶんの鳥を育てた

そだてたり　育てたり
041　010　社交術があなたを涸れさせたり育てたりしないうちに

そだてて　育てて
009　005　畸型のカナリヤを大切に育ててゐる

039　149　どんな樹木を育ててゆくのだらう
148　005　二人の娘を育ててきたと書かれていた。

そだてている　育ててゐる
009　005　畸型のカナリヤを大切に育ててゐる

そちら
027　011　そちらの方から寒さが吹きつけてくる
150　078　そちらでは気分的にパッとしない天候がつづいているそうですが、

そっくり
146　017　横顔があなたにそっくりでしたので
152　028　きみの城にそっくりだから

そっけなく
068　024　そっけなく　眺めまわしていた

そっこん
137　003　悲しい体にそっこんまいって

そった
045　018　とおい稲妻の明りをたよりに髭をそった

そった　反った
145　008　レスビアンの女たちの痙攣は不信者の地獄の笑いの一型態で　ブリッジして反った肉体の

そって
028　003　緑の影はいつもガラス管によりそってゐた純粋な頭の鈍い速度について
028　026　物質の秩序と形態にそって
029　006　それら肉体の輪廓にそって膨まず
043　007　いくつもの乾いた言葉にそって
051　025　影　終生よりそって離れぬ影
054　021　「僕たちは都市をつらぬく濁った河にそって
068　018　一直線をえがく　はてしない水平線にそって
085　002　舗道のカーヴにそってながれる
116　007　よりそって　晩秋の路上に
128　059　ユリの木の並木にそって
167　071　やがておそってくる運命は

そっと
031　017　そっとあふれてゐるものだけがやさしかったと
062　017　そっとわたしの寝室に近より
062　041　あなたはそっと見ていますね

157 002 そっと自分をおいていった
176 008 そっと片膝をおとす

ぞっと
063 008 その手の黒さがぼくをぞっとさせる
158 035 ぞっとするような詩を書き終えることで

そで 袖
066 030 ワイシャツの袖をまくった腕であった。
133 028 数知れぬ花が袖にこぼれるところまで。

そと
040 010 窓のそとを
053 029 ひそひそと話しあっていた声もとだえてしまいました
054 115 独身者はすばやく扉のそとへ消えうせる
058 011 そこにはジャズがほそぼそとながれ
059 015 この世のそとでも離れがたいことを信じよう
065 005 壁のそとにせまった。食卓には
066 005 開かぬドアのそとに
081 024 むごたらしい歴史のそとに
084 008 雨がふってる窓のそとに
162 012 絶句していそいそと傘をすぼめ
172 005 かさこそと往来するのは

そと 外
003 008 扉の外をマアチが風と共に過ぎる
005 030 外套がやってくる
011 014 先づ首に巻いた蛇を外せ
022 008 不幸の外に流れ出さない
026 028 黒い眼帯を外して
028 006 意識の外部と呼ぶ空壜の堆積した世界よりも
028 070 花花しい物質たちの流れ乱舞の外から
033 018 具足は視界の外ではない
037 001 ドアの外では
039 065 亡霊たちの影の外に
041 029 そしてあなたは広い眺めの外へはみ出てゐる
051 017 内と外と　高鳴る波の響を聴け！
057 025 マニラ郊外のドライブウェイを疾走しながら
061 210 あなたの外にも夜がきた。
061 214 あなたの外にも灯がともる。
061 225 あなたの内にも、あなたの外にも灯がともり、
093 010 かかる読書法は良い趣味以外のなにものでもない
095 012 まがりかどにオレンジの外燈がひとつ

106　011　外部の世界をうかがい　いまもじっと「時」をこらえ
106　028　懲りずに実験してみるべきだったろう　一歩戸外に出ると女たちの笑いで
106　038　詩人はもちろん屈してはならない　その外貌がどうであれ
124　027　郊外電車の快よい動揺に耐えている
140　016　欄外の人生を生きてきたのだ
141　008　愛以外の何かだったわ。抱きあって、苦痛でよじれる縄梯子にすがって、宙ぶらりんで
142　047　それから　肩をおとして伏目になるか　面をそむけて窓の外を見るか
142　066　国外追放を条件とした釈放の申し渡しに対して
142　070　そして　国外での健康回復と安楽な生活の可能性があるにもかかわらず
145　005　芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右
146　005　外国行の切符を買ったのですが
146　045　振りむくと小柄な中年の外国人が
146　060　外はひどいどしゃ降りでした
150　023　ちょっとばかり意外だったのは、
150　037　「本質的に我々が誇り得るものは生理以外に在り得ない、
150　048　生理以外に在り得ないとは、ずいぶん淋しい話である。
152　025　タバコの外装からセロハンをはずして
156　024　いかに私が外国かぶれでも
160　007　恋人と会っては　窓外のすがれた景色に視線をそらして
160　033　印刷の不備でくじに外れた老楽師に　大当りの賞金を全部やってしまう
160　052　使うもの以外にきみの物はないのだぞ
170　008　ホテルの部屋から戸外へとさまよい出た
173　011　外国の人質を殺すか殺さぬかで
174　009　きみは意外に元気な様子で近況を語ってくれ、心暖まる十五分か二十分であった。
178　010　この世の外で呟くように
183　001　郊外の小さな駅をおりると
192　001　もはや、わたくし、と特定する必要はない。わたくしには、わたくし以外の

その旨
150　056　学校へ行ってその旨を伊藤に伝えると、

そびえたち　聳え立ち
025　050　白亜の建築が聳え立ち

そびえたつ　聳えたつ
039　001　白く聳えたつ

そびえて　聳えて
061　004　よごれた幻の都市が聳えている。
098　027　青空にくっきり聳えて輝いていた五つの尖塔

ソビエト体制
142　016　帝政時代よりソビエト体制下で四倍も悪化している

142　041　ソビエト体制とは

ソビエト体制下
142　016　帝政時代よりソビエト体制下で四倍も悪化している

そびえる
152　027　透明にそびえることを望んでいる

そびょう　素描
089　034　さりげない心の素描がありますが……）

そふ　祖父
184　013　九カ国語を話したという冒険家の祖父を

そぼうな　粗暴な
103　018　粗暴な肉体の礼讃者でもないのだ）

そぼくな　素朴な
188　083　きみが好きだという、武者小路の、茄子や南瓜の素朴な絵、

そまった
153　012　真赤にそまった海が見え

そまつな　粗末な
069　031　粗末な木の
179　001　粗末な食卓のうえに

そむけ
142　047　それから　肩をおとして伏目になるか　面をそむけて窓の外を見るか
165　008　面をそむけさせたのである

そむけて
142　047　それから　肩をおとして伏目になるか　面をそむけて窓の外を見るか

そめき
164　020　奇妙な　そめき笑いの中に立ちつくす

そよいで
060　002　斜面に枯草がそよいでいたりする

そよぎ
054　096　まるで僕たちに呼びかけるかのような樹木のそよぎ

そよぐ
038　022　葦がそよぐ
145　009　そこにもあったトーモロコシの毛のそよぐ丘陵をエンジェルがうまれるのに充分な広さ

そよとも
157　004　そよとも吹かぬ風のなかで
192　006　それにしても、と影をもたぬ寂蓼が、くびをかしげる。人に会わぬ。風はそよとも吹かず、自分の足音さえきこえな

そらして
160　007　恋人と会っては　窓外のすがれた景色に視線をそらして

そらして　反らして
143　011　年経た甲羅を陽に反らして

そらとぼけた
087　007　そらとぼけた白内障の目をむき

そらない
125　001　髭をそらない日はない

そらに　空似
180　035　他人の空似で

そらみみ　空耳
139　003　吹きさらしの露の寝ざめの空耳か

それ
002　010　（それは忘れられた日のロマン）
006　013　それから赤い排日ポスターを
007　004　煤けた町は古い習慣で壺の沈黙を　それはいつまでも黄色い河の
010　002　それは口笛のためのスピイドであった
020　008　バラ色のそれは
025　007　それらが船舶の歴史の中にあった時代には
025　023　それは医術の進歩の伝説のやうに
028　037　それは植民地のためではない
029　006　それら肉体の輪廓にそって膨まず
032　010　それは確かにわたしを支へている
034　004　音を発してそれらは
035　006　それは一羽の鳥よりもはやく帰ってくる
036　005　それらの悼ましい怒でおれの日記を汚すな
036　026　それらは花花ほど愛らしくない
039　028　それは涙に似てゐたのかもしれない
041　103　それのみが古くはならぬ

041 112 それは又新しく湿気を呼んだ
041 121 それがあなたの樹木だった
041 130 あなたの意志はそれほど強く　それほど果敢ない
041 142 傷つける断片　それは悼ましくも長く生きてゐる
046 050 此処と彼処　それも一つの幻影に過ぎぬことを
048 031 それにむかって傾く地平線
050 017 「それがぼくたちの古い処方箋だった」と呟いて……
053 021 それはわたしのこころの神秘です
053 034 それに何の意味があったでしょう
053 041 それから何処へゆくのでしょう
054 001 それは一九四二年の秋であった
054 055 それを垂直に判断するには
056 020 それだけの運命である
057 008 それでもぼくらが生きているとは信じられなかった
058 052 それからあとの計画は
060 011 それだけのことで
061 155 此処と彼処、それもちいさな距離にすぎぬことを……
068 021 それから水着の女達が
069 035 さてそれからどうなったか
069 036 それっきり言葉は絶えた
070 014 ああ、それだけのことなのだ。
071 027 それは遠ざかるにしたがって
082 016 それから沈黙が歌いはじめるーー
084 028 それはもうシリアやトリエステの軍隊よりも
084 034 それでも　かれはヴァイオリン弾き
087 016 ペニィの日課はそれだけだが……
087 020 ペニィの日課はそれだけだが……
088 014 それがどんなふうに
088 018 それから大人たちの仕事
088 021 太陽に背をむけたそれらのものが
088 035 それから指で大きな輪をえがいて
089 011 （……それは過ぎた日のことですから
093 029 それは血や光りがかえってゆく水平線のない世界だ
095 004 多くのそれらを
095 006 それらの炎のなかで
097 011 もしあなたが、それを見たいと思ったら、
098 012 それっきりとだえてしまった
098 026 それは昨日の正午
099 014 それぞれの庭で規則正しくはずんでいる
100 011 それは昭和十六年の冬のことだ
100 019 それから　ぼくの絶望は
100 027 ああ　それが何の「はじめ」かわからぬうちに
100 047 それから五年たってである

100 059 それは　ぼくの希望の「おわり」にふさわしい多彩な夏であった
101 027 ながいあいだこの曠野を夢みてきた　それは
103 025 それは波と風と運命の手にまかされた
106 043 詩人の本質は変らない　それは目にみえない奥にあって
106 045 それは苦痛と恐怖がからみ合う　ながいながい鎖で
107 018 誰かがきっとそれを見つける
112 035 それがおまえの獲得した一切なのか
120 007 それらが身体のなかを
124 009 他方がそれを買う（ゴムの手袋をはめて）
124 016 それが　諸君の旧式な
126 013 それが荒涼とした虚無の世界だとしても
131 003 それからは人に会わない
141 005 ほう、それから？
141 007 へえ、それでキスの味は？
142 018 それで監獄は　四倍以上も暗く
142 024 （それゆえ　この国独得の統治方式の利点とさえいえるもので
142 047 それから　肩をおとして伏目になるか　面をそむけて窓の外を見るか
142 051 しかし　それが何を意味するのかね
142 082 彼がおかれている状況は　西側の同時代人のそれより
142 086 黙って背中を向ける者もいる　それにはそれの
142 102 ぼくたちのそれは悠長ともいえる　それだけ今なら
145 033 倚れるものもない空間にそれは倚れていた」
145 035 壁のない空間にそれは倚れていた
146 027 それはまた別のお部屋に
148 048 それから、少年の日のように月の砂漠へ出発した。
150 033 それとも単にめぐりあわせか。
150 049 文学から離れたことに話をかぎれば、それだけがすべてではない一例として、
150 059 しかし、それから彼は、もう小説を書かなかった。
150 075 それにしても、きみがガレージで漬物をつける甕をさがしていたら、
152 026 箱型のそれを机のうえに立ててごらん
154 012 それをしも邪恋といいつのり
155 012 それらがめんどうで厄介なのは
155 019 それで一日
155 022 ごめんなさいとかそれじゃとか呟きながら
155 025 それも一日
156 010 それでよかった
158 018 それがきみの作法だった
159 003 「それじゃ行きますから」と
160 014 それがなぜ私の心をしめつけたのか？
160 023 それで時間つなぎに詩を聞かせてくれとせがまれ　聴衆のもとめに応じて
160 027 「それはあなたの詩ですか？」
160 051 それだけがきみの富だから
160 053 それから物語のコーネリアスがどうなったかはわからない

161 011 それがこの世の習慣である
161 015 それが掟である
167 046 それから一つの部屋を守り
171 013 それが女の心に焼きついたのだろうと
173 031 それで近代の伝説は消え　象徴は解体する
174 011 この三十年間、ぼくはきみに一度も電話などしたことがない、ちょっぴり心が痛み、それはなぜかと考え出すと、疑
179 017 それがかれの望みだった
180 016 それが現代なんでしょうね
180 026 ッセージとよみました」と書いた筈、それは私だからそうよめてしまう、というのがどうでもいいことで、貴方
180 049 それがせめてもの礼儀である
180 050 「どこかで会って、さりげなく挨拶を交したような、奇妙な余韻をひいていくところ」それは私にしてもそうでし
180 051 たね。しかしそれはそうそうあるものじゃない。違うものの方が圧倒的に多い－。では、さよならK.I.
181 016 それなのに
185 018 それが、今日の真実だとすれば
186 020 それで今度の西下の印象は？
186 049 そういえばそれがあなたの口癖でしたね、気障な！
186 056 それなのに、みんなが整列して中央に一つだけ空いている椅子
186 057 それがぼくの席なのだ
186 070 それが怖い
186 071 だってそれが自然でしょ？
186 081 それらを賞味しながら
188 011 それを埋めるために、いつ終るのかも分らず、
188 073 四年遅れのこの返信が、四年前のそれと、どう違っているかを、
189 010 それが仲のよかった友人の
189 021 それがわかるのは十年たってからである
192 006 それにしても、と影をもたぬ寂寥が、くびをかしげる。人に会わぬ。風はそよとも吹かず、自分の足音さえきこえな

それから
006 013 それから赤い排日ポスターを
053 041 それから何処へゆくのでしょう
058 052 それからあとの計画は
068 021 それから水着の女達が
069 035 さてそれからどうなったか
082 016 それから沈黙が歌いはじめる－－
088 018 それから大人たちの仕事
088 035 それから指で大きな輪をえがいて
100 019 それから　ぼくの絶望は
100 047 それから五年たってである
131 003 それからは人に会わない
141 005 ほう、それから？
142 047 それから　肩をおとして伏目になるか　面をそむけて窓の外を見るか
148 048 それから、少年の日のように月の砂漠へ出発した。
150 059 しかし、それから彼は、もう小説を書かなかった。

160　053　それから物語のコーネリアスがどうなったかはわからない
167　046　それから一つの部屋を守り

それっきり
069　036　それっきり言葉は絶えた
098　012　それっきりとだえてしまった

それら
025　007　それらが船舶の歴史の中にあった時代には
029　006　それら肉体の輪廓にそって膨まず
034　004　音を発してそれらは
036　005　それらの悼ましい怒でおれの日記を汚すな
036　026　それらは花花ほど愛らしくない
088　021　太陽に背をむけたそれらのものが
095　004　多くのそれらを
095　006　それらの炎のなかで
120　007　それらが身体のなかを
155　012　それらがめんどうで厄介なのは
186　081　それらを賞味しながら

そろそろと
011　002　そろそろと卵が散歩してゐる

そろって　揃って
014　014　二つの楽器が揃って火を呼び始めてね

ソロフキ
167　023　袋を着せられたソロフキの囚人みたいに
167　039　ソロフキの囚人の手は
167　066　ソロフキの囚われ人よ

ソング
145　011　「忘れはしないという虹色のラヴ　ソングが聞えていた

そんざい　存在
054　146　ゆっくりと存在を閉ざす
054　148　暗い存在が抽象そのものに凍ろうとする時間のはずれから
061　085　マイナス二を加えた存在だ
108　015　存在はすべてある終りに向って動く
113　026　ファウストも存在しなかった
135　004　言葉なき存在となれ
142　095　すでに現実に存在していて　いわゆる階級構造とは全く無縁な
164　030　ぼくらはみだらな存在だ

165　001　父なる存在そのものが
165　016　自分をこの世に存在させていることで
165　019　子なるわたくしの存在が心（しん）から厭わしかったことの
167　032　いかなる罪悪も存在しないかのようだが
173　018　破壊されるためにのみ存在する」

そんざいして　存在して
142　095　すでに現実に存在していて　いわゆる階級構造とは全く無縁な

そんざいしな　存在しな
113　026　ファウストも存在しなかった
167　032　いかなる罪悪も存在しないかのようだが

そんざいする　存在する
173　018　破壊されるためにのみ存在する」

ゾンビー
133　014　ゾンビーたちはいたるところにいたが

ソー・コールド　（「ソー・コールド」）
128　027　「ソー・コールド」が多すぎます

タイ
028　014　あらゆるタイプという葡萄の木の影は
028　059　葡萄の木の影のごときタイプが無数繁茂する
054　154　ネクタイピンでこじあけられた窓の向うがわ
055　040　おれは慢性胃腸病患者のだらしないネクタイをしめ
106　001　ありきたりの記念写真のスタイルで　三列にならび
112　021　薄いネクタイでうやうやしく喉頸をしめ
128　077　テレタイプのように
128　092　ネクタイしおれる
160　055　妻も子もなかったかれは　タイムズ・スクエアに近い安ホテルの一室に住み
160　059　ニューヨーク・タイムズの記者が屍体置場のリストからかれの名をみつけ出し
184　006　タイ生れの中国人の医者と再婚した
186　021　タイム・マシーンで旅行した感じだった……

だい　（おお）大
009　005　畸型のカナリヤを大切に育ててゐる
011　007　そこから大理石の都会が見え
012　022　大理石の肉体は磨かれよう
014　003　頭の大きな楽器が目覚めたらしい
014　017　パイプオルガンも大変不満らしい
016　007　大理石の林の都会（まち）から

019 005 白い大理石はやはり冷たい
019 010 花と大理石の間で
023 013 巨大な鳥になって夜の空に墜落し
025 048 死の影が拡大される
035 028 誰かくらい巨大なランプを掲げた
037 021 ランプよりも巨大な思い出の下で
038 013 大理石のうへを辷ってゆく
039 002 大理石の高さも
041 108 あなたの巨大な手から降ってきた
041 120 貧弱な幹に大きな葉をつけてゐた樹木
042 007 大いなる弧をめぐり遥かに高い所から
044 016 大いなる真昼の泉にいそぐからだ。
047 016 大きく見ひらいたうつろな眼の
053 001 わたしの大きな瞳には
053 015 わたしは大切に胸のうえにさげています
053 038 大好きな　空にさよならを告げて
054 058 大学生は低い声と思いやりのある眼ざしで話しはじめる
054 071 おお　いまこそ偉大な人間と大きな河は
054 106 独身者は大学生のリキュールグラスに
054 109 大学生のほそい瞳の奥に描かれてしまう
054 118 そして詩人と大学生は駅でしばらく別れを惜しむだろう
054 166 僕らの家の戸口を大きな拳で敲く朝のことを……
055 010 巨大な黒い影が波止場にうずくまっている
055 056 西と東の二つの大戦のあいだに生れて
057 043 大挙して街中でなつかしい歌をうたっている
059 025 蜻蛉のようにも見えてくる
059 026 大人になった幻影の子よ
061 093 この喧噪の大都会の
061 140 眼下の大いなる混沌のむかしに
061 184 大いなる父よ、
061 193 大いなる父よ、
061 198 父よ、大いなる父よ、
062 016 大きすぎる白い屍衣を脱ぎ
063 022 広大な淋しさのひろがりに
064 001 大きな夕暮の環に灯をともして、
064 032 大きな夕暮の環に灯をともして。
065 001 どの窓にも、沈黙とおなじ大きさの
065 014 死せる魂に、大きな裂け目をつくり
065 055 どの窓にも、町とおなじ大きさの
068 009 今世紀最大の詩人が
072 007 うす緑の大地、美しいカーヴを描く競走路をみたまえ
072 065 十万のひとが残していった大きな寂寥が
073 020 大いなる積乱雲のさけ目をみつめた

077 012 これからも大陸に　海に
078 018 ぼくらはむなしく大空に
088 013 木々　家々　大地
088 018 それから大人たちの仕事
088 022 どのようにぼくたちの大地に暗い影を落すのかも
088 035 それから指で大きな輪をえがいて
088 049 大きいフライパンをあやつる小さいマリは
088 079 大きな声でうたうぼくたちの歌に
092 014 大ヴィヨンには
100 082 大いなる真昼はたちまち翳り
101 040 きみたちは　きみたちの大いなる真昼をかきけせ！
103 031 きみが見た大きな虚無はふかくぼくらをひきつける
105 002 ぼくらの大地は黒くふくらむ、
106 031 詩人なら孤狼な口髭とか　大切な象徴の鼻について
108 020 勉強するのは大変だなあ
112 027 おれたちがどんなに大きく敗れ　おまえたちがどんなに小さく勝利したか
112 041 大木の幹にかくれて
113 015 大元帥のスターリンが生きてたから
113 024 答えよりも大きな疑いはなかったから
118 002 母なる大地
121 015 台所では大根を刻む音がしている
123 010 巨大な村
127 009 大事故の記憶がよみがえってきた。
128 001 大手町の　矩形の空に
128 026 大事な「モア・ザン」がぬけました
128 047 元副大統領ハンフリー氏は
128 088 一つ星の大将
133 021 いくつもの街衢と大路を過ぎる
138 008 大好きな女の
141 004 小さな虹をまたぐ大きな虹を見たわ。
142 079 もちろん　信念より自分の生命が大切だと考えたからである
142 105 巨大なものの力が　個人の信念より永続するという証拠はない
142 107 いかに巨大な力であっても
142 109 自信はぐらつく　巨大であればあるほど
145 021 膝の上の猫を大事にしてあげなさいと今日の声は忠告していた
146 018 大急ぎで走っていき
146 047 大学で英語教師をしていたと告げるのです
148 011 どちらの友も、同じ大学で顔をあわせ、
151 004 大学を中退し職歴はほとんどなく
151 017 まるで大きなおけらである
160 017 コーネリアスは宝くじで大当りし
160 033 印刷の不備でくじに外れた老楽師に　大当りの賞金を全部やってしまう
160 068 「蛇の穴」と称して大学にもぐりこみ　教鞭をとったこともあるが

170　014　蓮の葉の上に大きな露の玉が乗っていて
171　010　あなたなんて大きらい！」
173　013　地獄の炎のなかで増大していく
173　047　すぐ大波のような睡魔が襲ってくるだろう
173　048　意識の大陸はずんずん後退し
174　014　「子供っぽさ」が抜けないという共通点こそ、最大の障碍だったのだろう。
183　021　大きな買物袋をさげた母親のあとから
184　007　そして十四人の大工を自ら指揮して
184　016　その意味が大好きだと言い
185　019　最大のニュースにちがいない
186　072　時間は偉大な造物主だからね
186　079　宴席の大きな皿に盛られた海の幸、鯛や鮑の刺身も
187　013　信念よりは自身が大事だから
189　034　シャンデリアの天井に大きくひびき
192　014　薄暮と昧爽とをとりちがえていた迂闊さに、狼狽するも間なく、巨大な生きものの胎内にのみこまれるように、
193　022　大陸からの寒波はきついが

たい　鯛
186　079　宴席の大きな皿に盛られた海の幸、鯛や鮑の刺身も

だいいちれつ　第一列
106　010　第一列の中央に　いやな上眼づかいのかれがいて

だいいっせん　第一線
142　119　非道な暴力に抵抗して　自らの犠牲と死の覚悟で第一線に立ち

たいおん　体温
027　019　体温から去ってゆくひびきたち響たち
051　015　海が熱い体温のなかで燃えたぎっている、

だいがく　大学
054　058　大学生は低い声と思いやりのある眼ざしで話しはじめる
054　106　独身者は大学生のリキュールグラスに
054　109　大学生のほそい瞳の奥に描かれてしまう
054　118　そして詩人と大学生は駅でしばらく別れを惜しむだろう
146　047　大学で英語教師をしていたと告げるのです
148　011　どちらの友も、同じ大学で顔をあわせ、
151　004　大学を中退し職歴はほとんどなく
160　068　「蛇の穴」と称して大学にもぐりこみ　教鞭をとったこともあるが

だいがくせい　大学生
054　058　大学生は低い声と思いやりのある眼ざしで話しはじめる
054　106　独身者は大学生のリキュールグラスに

054　109　大学生のほそい瞳の奥に描かれてしまう
054　118　そして詩人と大学生は駅でしばらく別れを惜しむだろう

たいがん　対岸
096　017　ごらん　対岸にアラビアの火が見えるよ
106　047　対岸は霧がふかくて見えないが　残る一つの疑問には

だいぎし　代議士
058　036　春のころ代議士候補が

たいきゃく　退却
101　020　すこしずつ退却してゆく軍隊をもたない
112　033　安全への愛　怠惰への退却

たいきゃくして　退却して
101　020　すこしずつ退却してゆく軍隊をもたない

たいきょして　大挙して
057　043　大挙して街中でなつかしい歌をうたっている

たいくつ　退屈
023　021　あのやうに退屈な都会の一日が
031　009　退屈な街は
182　004　退屈が死ぬより怖いからといって
182　012　病気も退屈も知らず

たいくつな　退屈な
023　021　あのやうに退屈な都会の一日が
031　009　退屈な街は

だいくを　大工を
184　007　そして十四人の大工を自ら指揮して

たいけん　体験
167　041　少年期の貧しい体験から

だいげんすい　大元帥
113　015　大元帥のスターリンが生きてたから

たいこ　太古
025　016　太古からの根をひらき花々は

だいこん　大根

121　015　台所では大根を刻む音がしている

だいし　台紙
152　013　紙マッチの軸を台紙からちぎらずに
152　021　紙マッチの台紙には

だいじ　大事
127　009　大事故の記憶がよみがえってきた。
128　026　大事な「モア・ザン」がぬけました
145　021　膝の上の猫を大事にしてあげなさいと今日の声は忠告していた
187　013　信念よりは自身が大事だから

だいじこ　大事故
127　009　大事故の記憶がよみがえってきた。

たいして　対して
142　066　国外追放を条件とした釈放の申し渡しに対して
145　002　不信の者の天国に対して
150　011　ほんの気まぐれから立てた計画に対して忠実になることは、
188　026　そういうきみに対して、どんな返信を送ったか、

だいじな　大事な
128　026　大事な「モア・ザン」がぬけました

たいしゅう　体臭
054　152　塩の匂いのする僕の体臭
093　023　孤独な青年の体臭に

たいじゅう　体重
151　011　身長百七十四糎体重七十粁はまあまあだが

たいしょう　対象
158　029　断念の最後の対象だった

だいしょう　代償
142　072　卑劣さを代償とした自由を受け入れようとはしないで
142　076　はるかに高い代償を払ってもよいことになっている

たいしょう　大将
128　088　一つ星の大将

だいすき　大好き
053　038　大好きな　空にさよならを告げて

138　008　大好きな女の
184　016　その意味が大好きだと言い

だいすきな　大好きな
053　038　大好きな　空にさよならを告げて
138　008　大好きな女の

たいせきした　堆積した
028　006　意識の外部と呼ぶ空壜の堆積した世界よりも

たいせきする　堆積する
028　064　空壜の堆積する地所を揺るがしながら明るく笑う

たいせつだ　大切だ
142　079　もちろん　信念より自分の生命が大切だと考えたからである

たいせつな
160　038　たいせつなのは感情の純粋な喜び！

たいせつな　大切な
106　031　詩人なら孤狼な口髭とか　大切な象徴の鼻について

たいせつに
101　015　たいせつにしてきたひとりの兵士だ

たいせつに　大切に
009　005　畸型のカナリヤを大切に育ててゐる
053　015　わたしは大切に胸のうえにさげています

たいせん　大戦
055　056　西と東の二つの大戦のあいだに生れて

たいそうぎ　体操着
016　008　体操着のまま遁走した

たいだ　怠惰
024　004　けてゐる　寝床に散らばった怠惰な骨の中から　陰鬱な眼球
112　033　安全への愛　怠惰への退却
150　067　どうしようもない怠惰か、安易な現状肯定である。
173　015　征服欲も　怠惰も　まだ新鮮だ

だいたいぶつ　代替物
150　044　神を持たず、神の代替物も持たぬとすれば、

たいだな　怠惰な
024　004　けてゐる　寝床に散らばった怠惰な骨の中から　陰鬱な眼球

だいち　大地
072　007　うす緑の大地、美しいカーヴを描く競走路をみたまえ
088　013　木々　家々　大地
088　022　どのようにぼくたちの大地に暗い影を落すのかも
105　002　ぼくらの大地は黒くふくらむ、
118　002　母なる大地

たいてい
106　004　これがみんな詩人だといったら　たいてい驚く

だいている　抱いている
080　018　いつまでも折れた帆柱を抱いているかぎりは
100　073　そして　ぼくと逆のイメジを抱いている

だいとかい　大都会
061　093　この喧噪の大都会の

だいどころ　台所
121　015　台所では大根を刻む音がしている

たいない　体内
041　024　なるほどあなたの剥製の体内から聞える
186　024　昔の発車ベルの音が体内のどこかに残っていたんですよ！

だいにしゅう　第二輯
150　052　続いて第二輯に逃亡した娼婦の心理を描いた「滅落」を発表したところで、

だいにりゅう　第二流の
054　060　第二流の民族　集団　人物は

タイプ
028　014　あらゆるタイプという葡萄の木の影は
028　059　葡萄の木の影のごときタイプが無数繁茂する
128　077　テレタイプのように

たいへん　大変
014　017　パイプオルガンも大変不満らしい
108　020　勉強するのは大変だなあ

たいぼく　大木
112　041　大木の幹にかくれて

タイム・マシーン
186　021　タイム・マシーンで旅行した感じだった……

タイムズ・スクエア
160　055　妻も子もなかったかれは　タイムズ・スクエアに近い安ホテルの一室に住み

ダイヤモンド
026　025　黄ろいダイヤモンドのやうに光り
170　016　ダイヤモンドのように輝やいていた

たいよう　太陽
004　010　太陽の跫音が近づいてくる
008　009　ゆえに　陽気な太陽よ
012　024　おおきらめく太陽よと
013　024　僕は太陽のやうに逃げなければならん
016　002　太陽は水晶に分解される
021　015　逃げてゆく太陽を追った
039　093　太陽と
044　014　熱い太陽を背負ふ　神々よ
048　005　太陽が沈んでしまうと
050　027　「さよなら、太陽も海も信ずるに足りない」
051　014　午後四時の黄いろい太陽
054　163　胸にかがやく太陽の紋章を示しながら
061　099　「今日も太陽が輝いているね
062　046　太陽の光りをあびている
062　059　母なる海と太陽の光りが強すぎます
068　023　太陽の下で　空壜をころがすように
079　003　太陽はかたむき
080　003　海は太陽や雲をうかべていた
088　021　太陽に背をむけたそれらのものが
088　073　太陽の涙から生れてきたぼくたちの
093　031　輝く太陽を見た者はいない
094　022　ああ　太陽は全身にものうく
096　002　太陽をえがく　酒場時代の
096　009　太陽の町は夜の町　バルセロナの裏町の
096　013　ミロ君の夜の太陽を見ていると　吐きたくなるね
099　004　太陽が緑の絵具をとかしている芝草のうえを
100　083　太陽は　また沈黙する
101　004　無力な太陽のことばで　ぼくにはわかるのだ
102　019　太陽はさっさと素裸で海へかえる

104　008　太陽に追われた記憶が戻ってくるだろうか
117　006　太陽は高い建物のうしろにかくれ
120　021　太陽は昼寝だ
121　009　おもいきり　太陽をからかってみたい
126　001　「太陽や月や星は
126　006　いずれは太陽系の星のどこへでも
129　015　ものうい太陽と
148　020　太陽の冷たい一瞥の下で、
166　012　自由とは何かは太陽のように明白だったのに
171　018　太陽をかくす一片の雲をあおぐ
179　005　太陽の誘惑のしみがついていて
192　024　これが罰か、太陽と海を呪ったことの？　たった一度の空想の罪にしては、酷すぎる報いではないか！

たいようけい　太陽系
126　006　いずれは太陽系の星のどこへでも

だいよんの　第四の
106　048　ただちに答えられるだろう　かれの経験の彼方から第四の声で

たいらげた　平げた
055　049　あぶらぎった一皿を平げたような顔をする

だいり　代理
188　046　時には、道徳や、宗教の立派な代理になるうえに、

たいりく　大陸
077　012　これからも大陸に　海に
173　048　意識の大陸はずんずん後退し
193　022　大陸からの寒波はきついが

だいりせき　大理石
011　007　そこから大理石の都会が見え
012　022　大理石の肉体は磨かれよう
016　007　大理石の林の都会（まち）から
019　005　白い大理石はやはり冷たい
019　010　花と大理石の間で
038　013　大理石のうへを辷ってゆく
039　002　大理石の高さも

たいりつ　対立
142　088　いじけた打算がある　わざわざ危険な対立に足をふみこんで

たえ

041　091　息はたえ　冷たいアスファルトの上に落ち
054　125　音楽はたえまなく狂気を弾奏しなければならぬ
054　133　「アメリカ……」と壁がこたえている
054　137　護衛つきキングと慰めをあたえるクインの価値とが
057　018　櫂はぼくに全身をあたえ
065　026　荒涼とした心に、蒼ざめた花嫁をあたえ
077　018　かれは木の吊床に身を横たえて
080　009　手ごたえもなく　切れた帆綱から
080　015　おお　明日をあたえよ
081　012　たえまなく爆音がして
084　017　アナウンサーの明るい声はこたえる
084　025　うんと愛をあたえてやるわ」
088　033　たえずぼくの心のなかに組みたてる
093　019　たえまなく打ちよせる多彩な波にすぎないことがわかり
100　042　たえまなく出血している内部の世界で
104　012　夜空はたえまなく星を降らせている
107　007　歌のうたえる心を売り
133　002　ひとりいることにたえられない
142　023　たえず監視され　尾行されている
142　113　歴史を作る者をたえず脅かしつづけてきた基本的なイメージである
174　004　「病気がこんなにこたえるとは、思ってもいませんでした。春からノイローゼ状態で我ながら呆れかえっていま
176　009　膝のくぼみにこたえるかのように
188　049　これはもう、こたえられない、

たえがたい　耐えがたい
065　004　耐えがたい静けさが

たえず
088　033　たえずぼくの心のなかに組みたてる
142　023　たえず監視され　尾行されている
142　113　歴史を作る者をたえず脅かしつづけてきた基本的なイメージである

たえた　絶えた
031　011　ふとなにげなく途絶えたところから
069　036　それっきり言葉は絶えた

たえた　耐えた
127　003　世界の明るさに耐えた。
167　048　ながい幽閉の年月に耐えた

たえて　耐えて
076　017　こうして耐えているぼくのほうが
101　052　榴散弾のようにふりそそぐ淋しさに耐えてゆこう

124　027　郊外電車の快よい動揺に耐えている
162　003　生活の重みに耐えてきたが
177　019　寒さに耐えているものよ

たえてきた　耐へてきた
045　012　夜半のけむり無常の風に耐へてきた

たえぬ　絶えぬ
045　009　いつか一つの息ながく絶えぬといふ

たえね　耐へね
044　017　耐へねば……、

たえまなく
054　125　音楽はたえまなく狂気を弾奏しなければならぬ
081　012　たえまなく爆音がして
093　019　たえまなく打ちよせる多彩な波にすぎないことがわかり
100　042　たえまなく出血している内部の世界で
104　012　夜空はたえまなく星を降らせている

だえん　楕円
012　021　ガラスの響をたてる楕円形の葉たち
039　044　しだいに眼をとじた楕円の石に変ってしまふ

だえんけい　楕円形
012　021　ガラスの響をたてる楕円形の葉たち

たおれ　倒れ
014　025　貧血がくるとひとつづつ楽器は床に倒れた
039　085　そしてじぶんに倒れかかり
040　002　椅子はみづから倒れはじめる
041　113　あなたが倒れる場所といへば
051　019　寝台のうえに倒れ、死んだ真似をして
051　034　そしてじりじりと胸の上に倒れかかってくる。
054　004　生きているにしても　倒れているしても
057　035　暗い夜明けのうちに倒れなければならぬ
061　188　わたしは今にも倒れそうになって、
063　005　ぼくの腕に倒れかかる
150　035　敗戦後の苦しい生活のたたかいに敗れて倒れた者もあった。
160　057　心臓発作で倒れ　救急車が到着する前に息をひきとったという
167　053　家が倒れることはない

たおれかかってくる　倒れかかってくる

051　034　そしてじりじりと胸の上に倒れかかってくる。

たおれかかり　倒れかかり
039　085　そしてじぶんに倒れかかり

たおれかかる　倒れかかる
063　005　ぼくの腕に倒れかかる

たおれそう　倒れそう
061　188　わたしは今にも倒れそうになって、

たおれた　倒れた
014　025　貧血がくるとひとつづつ楽器は床に倒れた
150　035　敗戦後の苦しい生活のたたかいに敗れて倒れた者もあった。

たおれている　倒れている
054　004　生きているにしても　倒れているしても

たおれる　倒れる
041　113　あなたが倒れる場所といへば
167　053　家が倒れることはない

たかい　高い
001　008　高い梢の向うの響は
039　052　高い木の頂まで攀ぢてみたいとひそかに思ふ
042　007　大いなる弧をめぐり遥かに高い所から
044　008　高い処に住む神々よ。
046　001　高い欄干に肘をつき
049　011　高いところに立って影の眼を開いてみたまえ
065　007　高い絲杉のうえで、月は
068　012　高い岸壁から　歌ったあの
072　006　高いスタンドに立って
083　017　高いところへ追いつめられて
083　018　さらに高い頂きから
083　019　より高い青空の深みへ落ちてゆく
088　082　高い梢で一緒に歌っている人たちが
100　063　高いビルディングは動かぬ影をつくり
117　006　太陽は高い建物のうしろにかくれ
142　076　はるかに高い代償を払ってもよいことになっている
145　012　孤独な高い壁の前で
181　010　こんな高い山の頂きまで登って
189　024　高い場所に住んでいる

たかい　他界
170　017　神慮の手で他界から運ばれ

たかく
084　031　女たちの狂った笑いがたかくなり
091　011　新聞社の屋上たかく舞っている伝書鳩の

たかく　高く
025　032　高く登ってゆく階段をとりまくのは
036　006　だがおれは声高く笑ふために
061　223　おびただしい灯の窓が、高く夜空をのぼってゆく。
065　042　高く低く、沈黙の胸をたたいた。
080　020　きみはきみの失われた両手を高くあげる……)
088　059　おまえを高く抱きあげて
102　023　高くのぼってついに失われた空のように
128　071　白いテープがうず高く
141　002　高く、高く、高く昇っていったわ。
159　001　時を刻む音ばかり高くなっていく屋漏で

たかさ　高さ
039　002　大理石の高さも
054　056　Mよ　僕たちに君の高さが必要なのだろうか？
112　032　すべての秩序が眼の高さにあればいいといった

たかなる　高鳴る
051　017　内と外と　高鳴る波の響を聴け！

たかまり
100　012　不安は胸にたかまり

たから　宝
011　008　電車が宝石の角を過ぎるとストップし
015　009　誰も小さな宝石筐と
017　007　宝石を舐めたりして
028　054　わたしたちが所有するすべての宝よ
160　017　コーネリアスは宝くじで大当りし
160　049　喜びなくして何の宝ぞと

たからくじ　宝くじ
160　017　コーネリアスは宝くじで大当りし

たき　滝
154　008　苔むす岩間に白い滝を忘れてきた

だきあげて　抱きあげて
088　059　おまえを高く抱きあげて

だきあった　抱きあった
056　010　抱きあった若い男女になって
064　007　カーテンの蔭で影と影とが抱きあった、

だきあって　抱きあって
141　008　愛以外の何かだったわ。抱きあって、苦痛でよじれる縄梯子にすがって、宙ぶらりんで

だきしめた　抱きしめた
055　005　おまえの濡れた肩を抱きしめたとき

だきしめて
149　008　憎いからだをだきしめて

だきとめて　抱きとめて
070　017　抱きとめておくことはできない。

だきょう　妥協
112　034　妥協の無限の可能性をたよりに

たく　焚く
003　009　盛んに蝋を焚く女のプロフイル
031　023　小さな火を焚くがいい

たぐい　類
026　020　羊歯類が生ひ茂り
028　045　そこを通る風の鳥の虫類の笑ひ
029　004　疲れた衣類は脱ぎすてられ
041　126　人々の衣類に附着し
054　140　もっと荘重に　もっと全人類のために
106　009　悪い空気のなか　鳥類のコンベンションが重んじられる
126　002　侵略的な人類の手のとどくところにあったら
142　122　個人の平和と　世界の平和と　人類そのものの　真の守護者たりうるのだ」と
167　049　塵埃のように書籍を衣類を調度類を

たくさん
026　001　たくさんの硝子がはめてある
027　006　たくさんの吸殻が落ちてきた
061　110　どれだけたくさんの罪が心のなかに閉ざされているかを。
085　029　文明批評はもうたくさん

100　062　たくさんの人がプールにつかっていた
112　040　水が酒に　欲望がもっとたくさんの浪費にならないとこぼしている
113　033　喜んで処刑される者もたくさんあった

たくさん　沢山
011　009　どうかすると沢山人間が動いてゐる
012　019　その中に沢山の兵士たちの顔がゐた

たくさんの
026　001　たくさんの硝子がはめてある
027　006　たくさんの吸殻が落ちてきた
061　110　どれだけたくさんの罪が心のなかに閉ざされているかを。
100　062　たくさんの人がプールにつかっていた
112　040　水が酒に　欲望がもっとたくさんの浪費にならないとこぼしている

たくさんの　沢山の
012　019　その中に沢山の兵士たちの顔がゐた

たくましい
085　023　毎晩たくましい筋肉をもって
104　003　たくましい狩人たちも　恋をあさる猟場から

たくみな　巧みな
028　028　地図に描かれた曲線の巧みな配置を

たぐりよせて
080　008　とおい悲しみをたぐりよせている

たくわえて
106　026　その貧しさを隠すために　せめて口髭をたくわえておくべきだった

だけ
027　010　荒廃した街の窓だけが眺められ
030　002　影だけの影を
030　011　影だけの影を
030　035　影だけの影を
031　010　煤けた家具の断面だけを見せ
031　012　水の中に影だけにたたまれて
031　017　そっとあふれてゐるものだけがやさしかったと
032　006　ただ一脚の椅子があるだけ
033　011　殺気だけが風の如く起ち上り
035　012　あとには傷口だけが光ってゐる
036　003　乾燥した粘土の上に風だけの虚しさが

037 018 風だけがやってきて
038 017 でも音楽だけはいつでもやってゐてほしい　と
039 015 考えただけでうっとりするのは
041 090 ドアから出て一つの街角をまがっただけで
041 114 ただ一脚の椅子があるだけ　気味悪くキーキーいふ音に
041 117 あなたの影だけが残される
046 036 果して肉体だけは癒る用意があるかのやうに
048 007 皮膚だけが燃え
048 014 彼女だけが触れている
053 008 黄ろい髪飾だけがふわふわと蝶のように宙にさまよっているのです
056 020 それだけの運命である
060 011 それだけのことで
060 013 孤独な道を歩いてくる男だけが
061 028 未来と希望があるだけさ。
061 042 子供をつれて一日だけの安息に、
061 104 だけどみんな<生きよ>と言いはしなかったね」
061 110 どれだけたくさんの罪が心のなかに閉ざされているかを。
061 182 貴方がわたしに下さったものはこれだけですか。
062 007 淋しい飛行の夢だけだ
063 023 ぼくは黙って坐っているだけだ
070 014 ああ、それだけのことなのだ。
070 038 ぐるぐるまわる食卓があるだけなのだ、
070 040 汚れた皿拭き布があるだけなのだ、
072 026 三十六とおり結論があるだけなのに
078 022 いつまでもめぐりつづけているだけなのにーー
087 016 ペニィの日課はそれだけだが……
087 020 ペニィの日課はそれだけだが……
101 005 こんなふうにおわるのはなにも世界だけではない
107 004 小鳥や空だけでなく
114 012 いのちだけはおたすけを」
123 004 明日も欲しがるだけ
142 015 光という点についてだけでも
142 060 精神病棟で比較的おとなしく死ぬだけだろう
142 093 家を夢みているだけでは　古い家も新しい家も守れはしない
142 102 ぼくたちのそれは悠長ともいえる　それだけ今なら
142 104 おそらくぼくたちは　はっきり　否！　と合図するだけでよいだろう
142 121 ただこの魂の剛直さだけが
146 040 黙ってつづいているだけなのです
150 014 一匹の魚さへ住んでゐない沼に釣糸を垂らしてゐる影だけが生きてゐる……」
150 030 これは、私だけが「虚構の個性」をつらぬき、偽善の間道をくぐりぬけて、
150 049 文学から離れたことに話をかぎれば、それだけがすべてではない一例として、
150 063 娼婦の悲惨さを、かなりの密度で正確に捉えたというだけで、
151 033 記憶にあるものだけで百六十人

155　036　である家族だけだから
158　011　レトリックがうまいなと思っただけで
160　051　それだけがきみの富だから
161　016　生きているというだけで
162　020　きわめて不確実なことだけである
165　029　カンフルの注射を三、四度射っただけであった
167　078　せめて最後の呼気だけはきれいに
171　015　われら此処に在りとかんがえるだけで
172　008　どれだけ時間がかかるのか
180　027　の言葉を私はどんな方法でも消せればよかっただけのことー。
185　024　その空白がどれだけの負担になるかは
186　042　機会がなかっただけですよ！
186　056　それなのに、みんなが整列して中央に一つだけ空いている椅子
188　051　人はただ歳をとるだけだが、時代は、変ったようである。

たけうちみきろう　竹内幹郎
150　039　クラス委員にして落第生の竹内幹郎だった。

たけなわ
183　003　歳末商戦たけなわの店頭を

たけりくるって　猛り狂って
164　017　黒いミューズは猛り狂って叫ぶ

たさいな　多彩な
093　019　たえまなく打ちよせる多彩な波にすぎないことがわかり
100　059　それは　ぼくの希望の「おわり」にふさわしい多彩な夏であった

ださん　打算
142　088　いじけた打算がある　わざわざ危険な対立に足をふみこんで

たしかな
045　011　たしかな暮しを算へてみる
178　005　たしかな消息という

たしかに
041　011　あの人たちはたしかにさうしてゐる
041　018　あなたはたしかに夜をもってゐる
050　010　ーー死にそこなってみれば、たしかにそのとおりであった。
179　027　たしかに知っていると告げる
189　039　たしかに見覚えのあるフォークが

たしかに　確かに

032　010　それは確かにわたしを支へている

たしかめ　確め
046　029　あなたの生をめぐる足跡の消えゆくを確め

たしゃ　他者
124　012　他者への絶望が
171　001　他者の犠牲を必要としないしあわせは

たすうの　多数の
028　058　そこに多数の生活が個人によって支持される

たすけ　助け
017　039　ああ助けてくれお助け下さい
128　009　「みなさんが助けてくれなかったら

たすけて
066　028　だれも、たすけてくれないの？

たすけて　助けて
017　039　ああ助けてくれお助け下さい
128　009　「みなさんが助けてくれなかったら

たずねあう
180　038　言葉はめぐりあうものかたずねあうものかという

たずねあてる　尋ねあてる
139　006　どうしてもその主の姿を尋ねあてることができない

たずねて
066　023　あかるい月がたずねていった。
115　011　ひたすら求め　たずねて行き
146　038　「あなたはどこ？」とたずねても

たずねて　尋ねて
084　007　散ってゆく落葉の女を尋ねて
133　007　されど尋ねて得ざるは

たずねる
053　036　わたしのたずねる人影は何処にもありません
180　042　たずねるものが見つからないときもあるだろう

だせい　惰性

041　116　馴らされた惰性で

だせなかった
017　045　うっかり舌もだせなかった

たそがれ
010　018　やがて最後の　たそがれ　がくる
021　016　たそがれの道に迷へばパイプで
082　015　すると小鳥がたそがれの窓に墜ちてくる

たそがれ　黄昏
006　015　ヨーロッパは　黄昏　である
026　012　黄昏の中に香料を撒き
041　014　かつはまた　あの人たちを悲しませる黄昏を創った
053　007　わたしのからだのなかに黄昏がいっぱいつまって
109　006　黄昏の寒い灰色の
128　015　いい匂いの黄昏に

ただ
025　013　眼もなく耳もなくただ流れる血液は
025　040　おびただしい鶯たちが眼をつぶる
026　017　おびただしい植物のまへで立止まると
026　032　残されたただ一個の帽子は
027　014　ただ一滴の水は
028　035　おびただしい製品とともに
028　041　おびただしい自然を覆ふ霧はやがて見えなくなるところ
028　050　ただそこに時代の速度乃至歩調が見えてくるだらう
029　014　今はただ表情もなく振返るわたしに
032　006　ただ一脚の椅子があるだけ
033　003　いまおびただしい影のなかでもがく
038　011　おびただしいドアがあって
039　005　ただ壜のようにつめたい気体がゆれる
039　015　考えただけでうっとりするのは
040　016　夜ふけてただひとり
041　036　おびただしい暇潰しのなかでうっとりした
041　090　ドアから出て一つの街角をまがっただけで
041　114　ただ一脚の椅子があるだけ　気味悪くキーキーいふ音に
043　018　ほどよい黎明がただよふ
044　018　あなたの齢にとってただの一瞬を。
045　004　にぶい気配が仄暗い光触にただよふ
049　014　そして落陽はただひとつ。
050　026　きみはただ重たい靴のなかに足をつっこんで静かに横たわったのだ。
055　002　おまえはただ遠くへ行こうとしていた

058　026　もみあうおびただしい影をぬってゆきます
059　022　夕映えの海にただよう
061　222　おびただしい灯の窓が、高架線の上を走ってゆく。
061　223　おびただしい灯の窓が、高く夜空をのぼってゆく。
062　038　ただひとり群れをはなれた小羊が
073　012　その下におびただしい輸送船が沈んでいた
079　022　海にただよう
088　029　ぼくはただ黙って
090　002　どんな天をいただき
103　026　海の物語のただなか
106　048　ただちに答えられるだろう　かれの経験の彼方から第四の声で
108　014　人はあわただしく自分の影から離れる
114　007　いまはただ
142　121　ただこの魂の剛直さだけが
149　013　一体のままでただよいながら
158　011　レトリックがうまいなと思っただけで
162　022　喜んで命と交換しただろうというのだ
165　029　カンフルの注射を三、四度射っただけであった
168　001　川の流れにただよい
180　027　の言葉を私はどんな方法でも消せればよかっただけのことー。
186　042　機会がなかっただけですよ！
188　051　人はただ歳をとるだけだが、時代は、変ったようである。

たたいたり　叩いたり
147　016　嬉しくなって「やあ、やあ」と肩を叩いたりする始末だ

たたいて
009　006　樹をたたいて

たたいて　叩いて
038　030　屋根のみを叩いてはひとり淋しがってゐた
045　013　燻んだ柱の垂直を叩いて
089　029　窓ガラスを叩いてゆきます
124　020　（ジャーナリストがテーブルを叩いて怒っている）
137　013　幾重ものドアを叩いてきた
188　076　ひとしきり烈しくなり、深夜の屋根を叩いている。

たたえ　湛え
061　128　活力と滋味を湛え

たたかい
018　011　あたたかい風は
048　030　白くあたたかい海

064　002　町はあたたかい吐息の下にあった。
064　031　町はあたたかい吐息の下にあった、
067　009　あたたかい街をもつだろう
081　003　あたたかい霧のなかにあった
088　027　あたたかい南国の陽ざしのように融かしてくれるから
112　036　あさましい利害関係のなかでたたかいながら
113　020　あたたかい下着を送ればどうなるか
120　003　あたたかい風に
123　006　こころはあたたかい
148　035　どのようにして戦後の社会をたたかいぬいてきたかを語りあったが、
150　035　敗戦後の苦しい生活のたたかいに敗れて倒れた者もあった。

たたかい　戦い
044　013　戦いは何処よりか
074　014　戦いにやぶれた国の
080　006　戦いによって　両手をうしなったきみは
182　014　戦いに疲れたら

たたかいぬいて
148　035　どのようにして戦後の社会をたたかいぬいてきたかを語りあったが、

たたかっている　闘ってゐる
025　053　不断に闘ってゐるときに

たたき
011　004　空が濡れる雫が肋骨をたたき
065　034　墜ちゆく星の、最後のまたたきが
150　057　彼は特徴のあるうるんだ眼をしばたたきながら聞いていたが、

たたく　叩く
146　061　屋根を叩く雨音がひとしきり強くなって

たたく　叩け
021　027　ドアを叩けば

ただしく　正しく
099　014　それぞれの庭で規則正しくはずんでいる

たたずんで　佇んで
030　026　零囲気のほとりに佇んでいる白いもの
039　100　木と木の間の寒い廊下に佇んで
041　059　やはり濡れて陸橋に佇んでゐることを想ひ

たたずんでいる　佇んでいる
030　026　零囲気のほとりに佇んでいる白いもの

たたずんでいる　佇んでゐる
041　059　やはり濡れて陸橋に佇んでゐることを想ひ

ただちに
106　048　ただちに答えられるだろう　かれの経験の彼方から第四の声で

ただなか
103　026　海の物語のただなか

ただひさって　漂ひ去って
046　025　この橋も海中に漂ひ去って　躍りたつ青い形象となり

ただひとつ
049　014　そして落陽はただひとつ。

たたまれて
031　012　水の中に影だけにたたまれて

たたみ
110　002　帆をたたみ

たたみ　畳
045　002　さっと青い畳のうへに来た
045　010　畳の上に　水平に做って横たはり
045　019　畳よりも青い顎の　若い主はしばし呆ける

ただよい
149　013　一体のままでただよいながら
168　001　川の流れにただよい

ただよう
059　022　夕映えの海にただよう
079　022　海にただよう

ただよって　漂って
039　064　煌めく木片が波に漂ってゐよう
048　006　影の茂みから闇のにおいが漂ってきた

ただよってきた　漂ってきた
048　006　影の茂みから闇のにおいが漂ってきた

ただよふ
043　018　ほどよい黎明がただよふ
045　004　にぶい気配が仄暗い光触にただよふ

たち
008　018　ぼくらにもまたきみたちにも
011　017　ああ　ぼくたちは幸福である
012　019　その中に沢山の兵士たちの顔がゐた
012　021　ガラスの響をたてる楕円形の葉たち
014　001　ガラス窓から白い手たちが
014　006　物ぐさな楽器たちはねころんで
016　003　白いレグホンたちよ
017　002　駝鳥のやうにたちあがると
017　005　丸いアタマの仏陀たちが
017　021　仏陀たちの鼻は赤くなる
020　009　骨のかたちを残して去り
023　004　公園をまがってゆく縞のズボンたちを
025　040　おびただしい鶯たちが眼をつぶる
026　005　動物たちの角がうごく
027　019　体温から去ってゆくひびきたち響たち
028　036　暗闇の市場へと運ばれてゆく武器たち
028　054　わたしたちが所有するすべての宝よ
028　060　都会の屋根の下よ商店街の商人たち
028　065　笑うものたち虫のやうな検微鏡下の虫たち
028　070　花花しい物質たちの流れ乱舞の外から
029　015　やはり変らぬわたしたちの愛よ
030　013　あれは植物たちの翳りの影か
030　014　動いてゐない動物たちが
030　028　すべての記憶の中からたちのぼる
030　032　花の実たちが実る周囲に実る別の花の実たち
031　020　すべての物質たちは堅い殻につつまれて
034　012　すると光たちは
035　003　おまへたちの舌の上へやってくる
036　025　頭髪に巣をかける喧燥な小鳥たち
037　003　物のかたちを壊してゆく
038　005　樹木たちは
039　036　憑かれたかたちで映ってゐる
039　056　慄へることのない獣たちよ
039　065　亡霊たちの影の外に
039　123　眠りを眠っている人たちを
039　146　さかんなる風はたち
041　011　あの人たちはたしかにさうしてゐる

041 014 かつはまた　あの人たちを悲しませる黄昏を創った
041 094 あの人たちと同じやうに股いでゆけるだらうか
042 018 しろがねの枝にかけられたちひさな骸を
044 011 御身は教へる、肉の裔（すゑ）なるものたちに、
045 016 雨の日のたちゐふるまひ
049 012 私たちの間には　ひろい荒涼たる眺めが、
050 017 「それがぼくたちの古い処方箋だった」と呟いて……
054 008 胸に造花の老人たちが
054 009 死地に赴く僕たちに
054 018 死ぬことからとりのこされた僕たちのうえに
054 021 「僕たちは都市をつらぬく濁った河にそって
054 056 Mよ　僕たちに君の高さが必要なのだろうか？
054 059 「君たちはまさか忘れたわけではあるまい
054 062 ペテルスブルグの青年が僕たちに告げたことを……
054 088 君たちは僕に背中をむける
054 096 まるで僕たちに呼びかけるかのような樹木のそよぎ
054 100 亡霊たちに別れを告げよう
054 101 あるいはまた亡霊たちを飲みほして
054 157 憐むべき君たちの影にすぎぬ僕は
055 017 おれたちの夜明けには
055 020 ところがおれたちは
055 033 いつまでもおれたちのひき裂かれた心と
055 036 おれたちはおれたちの神を
055 037 おれたちのベッドのなかで締め殺してしまったのだろうか
058 004 新しい建物がたちかけています
061 135 父母や妹　またあなたの至上の友たちに」
061 212 生ける死者たちが空中を歩きまわる夜がきた。
062 020 わたしたちの交りには
062 054 傷ついたわたしたちの記憶をぬぐってゆくのを
063 029 ぼくたちは汚れを知らぬ微笑をうかべる
063 030 ぼくたちが生れるずっとまえからそこにあった微笑を！
066 018 たちのぼる煙りのなかの女をぼんやり眺めていた、
070 022 ぼくたちを閉じこめている格子は
070 033 一日を一年のように暮しているぼくたちには、
070 035 ぼくたちの地平線は
071 008 どっと家族づれで出かけてゆく人たちをみかける
072 012 競馬場のかたちに作りかえてみたまえ
072 017 青、赤、黄、白の運命の使者たち
074 020 病める兵士たちは
077 011 いくたびか生きかえる兵士たちが
079 018 永久に待ちこがれている水兵たちから
081 004 兵士たちは眠っていた
081 009 兵士たちはうわごとのように

081 013 何千年の闇をつらぬいて真赤な雲の火柱がたち
083 003 さっきまで子供たちが戸口から顔を出していたのに
084 022 いともお上品な天使たちが
084 029 重い任務をになったレデイたちです
084 031 女たちの狂った笑いがたかくなり
085 024 女たちの血のなかから愛の喜びをしぼりだそう
086 004 おそらく鴎たちは
086 008 海岸から男たちの影を洗い去るであろう
088 015 わけへだてのないぼくたちのあいだに
088 018 それから大人たちの仕事
088 022 どのようにぼくたちの大地に暗い影を落すのかも
088 053 ぼくたちの物語を
088 056 気むずかしい人たちに聞かせてあげよう
088 060 どんな恋人たちよりも甘いキスをしよう
088 071 ぼくたちに語りかけてくるよ
088 073 太陽の涙から生れてきたぼくたちの
088 079 大きな声でうたうぼくたちの歌に
088 082 高い梢で一緒に歌っている人たちが
089 006 あおざめた河明りを見おろしている人たちといっしょに
094 013 会ったことのない人たちのことを思いうかべているもの
100 028 たちまち去った警告の時代よ
100 079 ぼくたちが出会う場所は
100 081 ぼくたちが　さらに遠くの世界に眼をやるとき
100 082 大いなる真昼はたちまち翳り
101 007 いまはきみたちの肉と骨がどこまでもすきとおってゆく季節だ
101 010 血の河をわたっていった兵士たちよ
101 036 消えたいのちの水をのんでいる兵士たちよ
101 037 きみたちは　もう頑強な村を焼きはらったり
101 039 死の穫りいれがおわり　きみたちの任務はおわったから
101 040 きみたちは　きみたちの大いなる真昼をかきけせ！
101 042 死霊となってさまよう兵士たちよ
101 043 きみたちのいない暗い空のあちこちから
102 011 うたいながら破壊する若い勇士たちが
103 002 血縁のきずなはたちきれたか
104 003 たくましい狩人たちも　恋をあさる猟場から
105 010 女たちの涙か、夕べの吐息か。
106 021 かれの指の爪貝は　恋人たちがしゃぶりたがるほど美しい
106 028 懲りずに実験してみるべきだったろう　一歩戸外に出ると女たちの笑いで
106 036 不吉な羽ばたきをして　地面を歩く黒い鳥の男たちもいる
108 016 恋人たちがベンチに坐って
112 013 過去でしか会うことのないおれたちだ　何の秘密もあるものか
112 014 命令一下たちまち整列し　黒い銃剣の林をつらね
112 027 おれたちがどんなに大きく敗れ　おまえたちがどんなに小さく勝利したか

112 039 さびしい酒場の女たちを相手に
112 042 胡麻的な頭と頭をくっつけて寝ているなつかしいきょうだいたち
112 044 眠りながら腹をこやす王国を夢みているうれしいはらからたち
112 046 運命は一瞬の光でおまえたちを数える
112 049 おれたちが本当に別れるのはこれがはじめてだが　ユダの接吻はいらない
114 001 きょうだいたちの影が
118 003 そうよ　あたしたち
133 014 ゾンビーたちはいたるところにいたが
134 010 木の葉のように散っていった若者たち
136 006 妹たちを犯し
138 017 滅びようのないかたちがなつかしい
141 016 ぼくたちはお互の影でさえない。
142 005 東側における弾圧や迫害に最も敏感な人たちでさえ
142 045 ぼくたちは世界の片隅でふさぎこみ
142 048 いずれにしても　ぼくたちの多くは　まだW.H.オーデンの
142 052 ぼくたちはこれから何をしようとしているのかね
142 055 ぼくたちに救いはあるだろうか？
142 058 ぼくたちはやがて　比較的おとなしい分裂病者として
142 077 アメリカの一部の戦争捕虜たちは
142 092 ぼくたちはどこまでその小さな幸福を守れるだろうか？
142 099 ぼくたちはこれから何をしたらよいのか？
142 102 ぼくたちのそれは悠長ともいえる　それだけ今なら
142 104 おそらくぼくたちは　はっきり　否！　と合図するだけでよいだろう
142 125 ぼくたちはけっして忘れないだろう
145 008 レスビアンの女たちの痙攣は不信者の地獄の笑いの一型態で　ブリッジして反った肉体の
148 021 斃れた兵士たちは、
148 034 ぼくたちは女気なしの部屋で炬燵を囲み、
148 042 ぼくたちは枕を並べてすやすや寝息を立てていた。
148 045 ぼくたちはひとかたまりになって写真を撮った。
148 049 日曜日の海はおだやかにぼくたちをむかえた。
148 053 スマトラ島を偲んでぼくたちは談笑し、賑かに昼食をとった。
150 017 しかし、友人たちは仲間のだれかれをあてこすっているのだと思いこみ、
150 069 一つの国さえたちまち喪われるような世界に住んでいるので、
155 008 たちまち消える
156 004 女たちに
156 007 女たちから
160 048 賢者たちは言っている
160 067 （私たちが忘れてしまうのも無理はない）
164 007 夜空の星たちが笑う
165 013 ぼくたちの間にはどんな逆転もありえないのだから
165 031 ぼくたちは理解しあっていた
167 036 戦争と革命の犠牲者たちの
167 076 ぼくたちのライフを蝕み

167　077　きみたちの家を破壊にみちびくだろう
168　005　たちのぼる泉の霊気には
172　010　夏はたちまち冬になり
175　009　ぼくたちは別々に死んでしまうのだろう
177　006　父たちが
179　008　きつい香りがたちこめており
181　003　濃いオゾンのいきがたちこめ
183　015　安全に養われているその家族たちだ
184　017　わたしたちの家（アワ・ハウス）というべきところを
185　010　世界中の人たちに嚙みこまれ
186　018　そのときお会いになった人たちとは？

たち　太刀
153　014　黄金の太刀は

たちあう　立会う
050　023　立会う者もなかった

たちあがった　立ちあがった
027　002　グラスが立ちあがった

たちあがる
017　002　駝鳥のやうにたちあがると

たちあがる　立上る
054　110　詩人は欠伸をかみころして立上る

たちかえら　立ちかえら
180　040　何度でも立ちかえらなければならない

たちかけています
058　004　新しい建物がたちかけています

たちこめ
179　008　きつい香りがたちこめており
181　003　濃いオゾンのいきがたちこめ

たちこめて
179　008　きつい香りがたちこめており

たちこめて　立ちこめて
081　008　強い硝煙のにおいが立ちこめているので

たちさって　立ち去って
080　011　立ち去ってゆく航跡には

たちさって　立去って
041　144　春はぢきに立去ってしまふだらうと

たちさら　立去ら
073　017　平和のないところから立去らなければならない

たちさり　立去り
142　053　義に昏（くら）い者　イデオロギーによろめく者が立去り

たちさる　立去る
106　032　正直な諦めを抱いて　立去るべきではないだろう
187　021　この世から立去る

たちどまって　立止まって
115　007　立止まってはならない

たちどまり　立止まり
041　016　音を刻み　立止まり　年を待ってゐるやうに

たちどまる　立止まる
026　017　おびただしい植物のまへで立止まると

たちのぼって　立ちのぼる
078　008　立ちのぼる水けむりのなかに消えうせるのを
098　016　うす青いけむりがゆっくり立ちのぼる
152　016　冷たい水色のけむりが立ちのぼる

たちのぼる
030　028　すべての記憶の中からたちのぼる
066　018　たちのぼる煙りのなかの女をぼんやり眺めていた、
168　005　たちのぼる泉の霊気には

たちのぼる　立のぼる
005　033　アヘンの煙が立のぼる

たちふさがる　立ちふさがる
051　033　扉のひろさで立ちふさがる沈黙……

たちまち
100　028　たちまち去った警告の時代よ

100　082　大いなる真昼はたちまち翳り
112　014　命令一下たちまち整列し　黒い銃剣の林をつらね
150　069　一つの国さえたちまち喪われるような世界に住んでいるので、
155　008　たちまち消える
172　010　夏はたちまち冬になり

だちょう　駝鳥
017　002　駝鳥のやうにたちあがると

たちゐふるまひ
045　016　雨の日のたちゐふるまひ

たつ
039　001　白く聳えたつ
042　017　ひろい頬ゑみをうかべてあなたはたつ
046　025　この橋も海中に漂ひ去って　躍りたつ青い形象となり
054　034　今でも僕は橋の上にたつと
054　165　おどりたつ群集をおしのけ
059　019　秋風がたつ頃になると
064　023　ふたつの亡霊がさまよう、
069　020　とぎれたとみせて　またつづく
092　008　もう二十年たつ
154　003　ふたつとない旅の終りの

たっした　達した
051　011　運命がある顔に達したとでも言うかのように、
193　003　到達したところから

たっしゃ　達者
159　010　「おまえも達者でね」

だっそうし　脱走し
051　037　「脱走したい、ーー海よ　母よ」

たって
013　005　ゐなくったっていいですよと
033　007　寒い廊下をわたってきた
039　115　勾配にたって
057　043　大挙して街中でなつかしい歌をうたっている
100　047　それから五年たってである
101　010　血の河をわたっていった兵士たちよ
106　017　人生を説明するのに　どうしたって何かが足りないようだ
107　005　車輪や道もうたっていた

113 011 なんてったって
140 012 きみがいなくなったって
180 002 何が飛び出したって驚きはしないが
180 024 貴方に「女の子の心理」が判んなくたってあたりまえなんです。貴方は心理学やってんのじやないのでしょうか
181 022 一艘の小舟がたゆたっている
186 052 どうもがいたって、あなたはあなたですよ！
189 021 それがわかるのは十年たってからである

たって 立って
039 018 あなたは何処に立ってゐるのか
039 037 わたしは一体何処に立ってゐるのか
039 066 わたしは何の関りもなく立ってゐる
049 011 高いところに立って影の眼を開いてみたまえ
053 022 いつのまにかわたしはお姉さんのお墓の前に立っています
054 046 ぼんやり立っていたことがあったか
055 063 おれには掘割のそばに立っている人影が
058 028 十字路には警官が立っていて
060 005 そんな街はずれに立っていると
065 047 遠く旅立っていった。
066 006 女の子がひとり涙をおさえて立っていた、
069 002 かれは肩をすくめて立っていた
072 006 高いスタンドに立って
072 067 誰もいなくなったスタンドに立って
078 005 甲板に立って
084 009 じっと立っていさえすればいいのですよ
091 010 劇場やホテルのロビイに立っている寂しい人影からうまれ
134 013 広場に立って眼をこすっていると
146 042 途方に暮れて立っていると
146 046 笑顔で立っていて
150 013 彼の表面は常に波立ってゐるが、彼の底は何時も静かで、
163 005 ぼくらは崖に立っている

たっている 立ってゐる
039 018 あなたは何処に立ってゐるのか
039 037 わたしは一体何処に立ってゐるのか
039 066 わたしは何の関りもなく立ってゐる
150 013 彼の表面は常に波立ってゐるが、彼の底は何時も静かで、

たづな 手綱
072 018 結局のところわれわれの期待も、かれらの手綱さばきで

たて 建て
005 007 風下に建てられてある

062　060　わたしはこの香ばしい微風のなかに家を建て
184　008　新しく家を建てると養子を迎え

たて　縦
125　004　縦横家の仮面のうらとおもてに
180　056　縦にも横にも亡れなくなっている

たてがみ　鬣（たてがみ）
104　001　金色の翼もなければ　風の鬣（たてがみ）もないのに

たてごと　竪琴
025　041　竪琴の下にきて

たてて
002　001　氷が音たててはぜる
048　012　川は音をたてて背中をながれる
089　036　オーバーの襟をたてて

たててはぜる
002　001　氷が音たててはぜる

たてもの　建物
058　004　新しい建物がたちかけています
058　025　灰いろの建物のしたを孤独な靴音が
117　006　太陽は高い建物のうしろにかくれ

たてられて　建てられて
005　007　風下に建てられてある

たてる
012　021　ガラスの響をたてる楕円形の葉たち
025　038　笑声をたてる一本の蝋マッチ
088　033　たえずぼくの心のなかに組みたてる
102　015　憎しみをかきたてる火掻棒で
138　007　早く早くとせきたてる

たてる　建てる
184　008　新しく家を建てると養子を迎え

たとえば
050　001　たとえば霧や
060　020　たとえば小さな捲毛の渦をみつけるような！
071　033　たとえば深い谷底からは

100　048　たとえば霧や

たとへ
039　128　たとへわたしの位置が崩れ
045　015　たとへば自らも垂直なる真空の如くありたい

たとへば
045　015　たとへば自らも垂直なる真空の如くありたい

たなびいて
041　100　あなたの部屋にはシガアの煙がたなびいて

たなびく
128　014　シガーの煙りたなびく

たに　谷
039　110　死の谷間が深いやうに
055　035　空虚なメランコリイの谷間にふりつづいている
065　013　終りがあるのだろうか？　影深い谷が
071　033　たとえば深い谷底からは
071　035　山の頂きから谷をのぞくひとびとは
084　032　どこまでもつづく青い灯の谷間にも
144　014　一散に谷へ急ぐのだ
167　037　死屍累々の谷が見えがくれするので
190　014　清流をさかのぼって幽谷に魚影を追い

たにぞこ　谷底
071　033　たとえば深い谷底からは

たにま　谷間
039　110　死の谷間が深いやうに
055　035　空虚なメランコリイの谷間にふりつづいている
084　032　どこまでもつづく青い灯の谷間にも

たにん　他人
085　027　他人の危い綱渡りを見ながら
102　012　恋をすて故郷をすて他人の国へゆくのだから
121　005　心配事は他人にまかせて
136　022　他人の眠りのなかで
142　089　災厄を招くことはない　他人の災難に
180　035　他人の空似で

たの　他の

010　006　ピカピカ光る自転車は他のピカピカ光る自転車と競走する
106　014　すべて相対的な時のなかを　いかにゆっくり他の時が進行するか
124　025　他の一人は　古典的な社会復帰者として
142　071　他の人々を悲惨なままに放置して逃避するような
188　010　その歯は抜きましたが、他の歯に窩が無数にあるとか、

たのしい　楽しい
052　008　愛と死の隠れんぼはやっぱり楽しいものだろうか

たのしかった　楽しかった
181　015　とても楽しかったよ

たのしみ　楽しみ
188　050　老いの楽しみに数えてよいだろう。

たのみ
189　011　臨終のたのみだった

たばこ　煙草
015　010　舶来煙草のことを知らない
041　073　パイプに煙草をつめる
047　001　深夜　唇が煙草を挟んでいる
056　002　夕暮のなかで煙草をすっている男がいる
056　018　橋にもたれてぼんやり煙草をすっている
058　016　私はゆっくり煙草をふかしながら
060　006　なぜか一服の煙草もひどくうまいのである
061　071　さりげなく煙草をくわえて
066　017　息子は煙草をふかしながら
089　031　まだ煙草をすいながら
093　004　本と煙草とウィスキーの瓶をかかえて
093　008　寝床でウィスキーを飲み煙草をふかす
124　030　六十本の煙草を灰にしたところで
166　010　一本の煙草を思うままに吸えたら
166　013　いまのきみは一日に六十本の煙草を吸い
186　084　かすかにふるえる指先の煙草のけむりのように

たはじるし　旗印
143　008　黒い旗印と化して

たはた　田畑
101　047　森や田畑やうつくしい町の視覚像はいらない

たび

039 136 いくたびか流された血は
077 005 いくたびか死に
077 006 いくたびか生きかえってきた
077 010 いくたびか死に
077 011 いくたびか生きかえる兵士たちが
101 051 頭上で枯れ枝がうごき つめたい空気にふれるたびに
149 006 いくたび禁制を犯したろう？
164 029 触れあうたびに遠くなる
189 022 自己を否定するたびに上昇をつづけて

たび 旅
061 056 あなたは冒険をもとめる旅人だった。
061 063 風に吹かれ、浪にうたれる漂泊の旅から、
065 047 遠く旅立っていった。
096 011 きみもぼくも疲れた さびしい旅だった
145 022 行先をきめないで出発し到着したときに旅は終っていた
148 009 かれとは敗戦直後の闇市の近くの旅館で一度会い、
154 003 ふたつとない旅の終りの
186 013 (距離の旅はしたことがないから
186 021 タイム・マシーンで旅行した感じだった……

タヒチ島
128 056 ぼくはニューギニーからタヒチ島へ行ってくる

たびびと 旅人
061 056 あなたは冒険をもとめる旅人だった。

たぶたぶと
136 030 血の海はたぶたぶと近い

たぶん 多分
147 019 多分ぼくはまちがっているのだろう

たべたり 食べたり
017 006 梨の実を食べたり

たべちらした 食べちらした
108 008 食べちらしたケーキの皿や

たべている 食べてゐる
003 003 竜舌蘭を食べてゐる紳士は

タベてゐる

008　017　レコオド音楽にクチあいて　緑の藻をタベてゐる

たべにくる　食べにくる
005　005　羊が雲を食べにくる

たべのこし
179　002　たべのこしの黒パン少々と

たべもの　たべ物
030　020　銀製の器にたべ物を

だべん　駄弁
125　007　ニュースと駄弁で耳を痛めた

たほう　他方
124　009　他方がそれを買う（ゴムの手袋をはめて）

たまご　卵
011　002　ぞろぞろと卵が散歩してゐる
022　006　やさしい茎と卵は永遠である
025　027　あなたの頭髪の中に鶯が卵を生む
055　044　ひびわれた卵のなかの
073　012　その下におびただしい輸送船が沈んでいた
148　031　同じ輸送船でスマトラ島に送られた転属組の十三人だった。

だまされて　騙されて
150　006　六人の意見が一致してゐる時は、六人とも彼に騙されてゐる時であった。

たましい
078　009　いたましい鴎の眼で見おくっていた
119　012　たましいひとつ－－
150　008　極めて小さな事柄にもいたましいほどの注意と努力を払ってゐた。
182　019　たましいは無限をゆびさしていた

たましい　魂
051　026　「そいつは黄色だ　まるであの穢らわしい魂のように」
052　013　情慾に飢えたわたしの魂をやさしく愛撫する
054　073　みずから魂をすて去った
055　009　可憐な魂のノスタルジアにともして
061　137　夜　昼　わが涙のみ注ぎて魂の糧となり
061　215　生と死の予感におののく魂のように、
061　226　死と生の予感におののく魂のように、
062　003　わたしの魂は病んでいる

062　019　「もし身体にも魂にも属さない掟があるなら
062　021　魂も身体も不用です」
065　014　死せる魂に、大きな裂け目をつくり
065　052　死せる魂をゆり起し、夢に見たレエテの河が
070　029　形のない魂の叫びまでしめあげてしまう。
074　023　若い魂を解放したカミソリの刃を
093　027　かれの魂はエデンの樹の頂きからはてしなく落ちはじめる
100　023　やがて　肉体の要求にさからう魂は
100　041　敗戦がぼくの魂を解放する」
101　032　ひろい曠野にむかう魂が
102　008　魂は死んで二度と生れてこないから
103　008　ひたすら魂の遺伝を信じた
103　010　魂にも七ツ道具が必要だ
142　065　魂を売ることを拒否したという
142　121　ただこの魂の剛直さだけが
142　126　魂に刻み目をつけたこの年を！
145　029　夢の厚着で肥りすぎた詩人には真偽はどちらでもよく　魂はもうとっくに死んでいた
151　036　一体一体に入魂の秘術をつくしてきたのだ
169　013　飢えて痩せた魂は
172　018　魂に厚着をさせて

だます
051　020　神様をだます時が来た。

たまたま
058　055　たまたま可愛いい瞳をしていたからといって
160　011　たまたま手にしたパーチザン・レヴュウ誌の最近号で
188　071　きみの手紙は、たまたま、仕事机の片隅の、

だまった　黙った
041　055　みんなは黙った　眼を閉ぢ眼を開き　膝をみつめて
100　007　みんなは黙った　眼をとじ眼をひらき　膝をみつめて……

たまって
123　002　あらたまって言うことはない
188　006　読みものがたまっていくばかりで、

だまって　黙って
037　019　黙って髪を梳けづってゐる
041　064　あなたは何故黙ってゐる　お坐りなさい
041　066　あなたは何故黙ってゐる
052　007　あなたはむろん黙っているけれど
060　016　しかし黙ってすれちがう一瞬にも

061　149　ぼんやり近づいてきて、黙ってすれ違い、
062　055　あなたは黙ってうなずいているのですね
063　023　ぼくは黙って坐っているだけだ
088　029　ぼくはただ黙って
100　053　そう言って　黙って別れた友よ
112　030　なあ戦友　なぜ黙っている
141　013　黙って向きあったきみとぼくとで、
142　086　黙って背中を向ける者もいる　それにはそれの
146　040　黙ってつづいているだけなのです
147　003　ぼくは黙ってうなずいたであろう
165　027　父は黙ってこの世から去っていった
167　079　黙って風に手を振って

だまっている　黙っている
052　007　あなたはむろん黙っているけれど
112　030　なあ戦友　なぜ黙っている

だまっている　黙ってゐる
041　064　あなたは何故黙ってゐる　お坐りなさい
041　066　あなたは何故黙ってゐる

たまのい　玉の井
150　051　彼は我々の雑誌の創刊号に、玉の井の娼婦と客との交渉を扱った「泥沼」を書き、

だまりこくって　黙りこくって
084　002　唖のように黙りこくっていても

ダメ
174　024　ダメを詰めるような毎日を送りながら

だめ　駄目
087　021　雨傘がいたみ長靴が駄目になる

ためいき　溜息
066　020　かれは溜息のほそいけむりをもらした。
072　058　何百万の人々が、もう一度溜息をつくのだ
096　003　ジンと溜息でくもった灯りで

ためし
128　043　愛や敵意が目標にうまくとどいたためしがあるかい？

ためして　試して
163　021　試してみようではないか

たもって　保って
156　038　完全に処女性を保っている
166　005　危く均衡を保ってきたが

たやすい
077　003　神の復活に出会うよりもたやすい
158　006　たやすいことだときみが言ったとき
174　013　お互いの相違点を数え上げるのはたやすいが

たゆたって
181　022　一艘の小舟がたゆたっている

たゆみ
040　009　たゆみながら一つの扉が支へてゐる

たより
045　018　とおい稲妻の明りをたよりに髭をそった
112　034　妥協の無限の可能性をたよりに
124　007　地名のない地図をたよりにスパイが暗躍
148　003　三十五年ぶりにたよりをよこした。
149　003　舟唄のたよりなさ
192　022　最後の運をたよりに走り出していたのは、是非もなかったが、

たより　便り
068　002　気がかりな便りをうけとった
174　001　きみからの最後の便りを受けとったのは

たよりなさ
149　003　舟唄のたよりなさ

たよりに
045　018　とおい稲妻の明りをたよりに髭をそった
112　034　妥協の無限の可能性をたよりに
124　007　地名のない地図をたよりにスパイが暗躍
192　022　最後の運をたよりに走り出していたのは、是非もなかったが、

だらく　堕落
055　058　急転直下堕落していったあの

だらく　墜落
010　013　ヒバリが墜落してくる
017　043　駈け出すと枝から逆さに墜落し

023　013　巨大な鳥になって夜の空に墜落し

だらくし　墜落し
010　013　ヒバリが墜落してくる
017　043　駈け出すと枝から逆さに墜落し
023　013　巨大な鳥になって夜の空に墜落し

だらくしてくる　墜落してくる
010　013　ヒバリが墜落してくる

たらし　垂らし
012　015　青い舌を垂らした植物の蔭から
018　008　体から糸を垂らして
026　008　食卓は北方に白い布を垂らし
150　014　一匹の魚さへ住んでゐない沼に釣糸を垂らしてゐる影だけが生きてゐる……」

たらした　垂らした
012　015　青い舌を垂らした植物の蔭から

たらして
140　023　水銀のナミダをたらして

たらして　垂らして
018　008　体から糸を垂らして
150　014　一匹の魚さへ住んでゐない沼に釣糸を垂らしてゐる影だけが生きてゐる……」

だらしない
055　040　おれは慢性胃腸病患者のだらしないネクタイをしめ

たらす　垂らす
030　009　夜が垂らす耳はない

たりない　足りない
050　027　「さよなら、太陽も海も信ずるに足りない」
061　199　わたしにはまだ罪が足りないのですか、
106　017　人生を説明するのに　どうしたって何かが足りないようだ
124　004　仲間も涙も校歌も国家も売り足りないが
151　008　貯金は定期普通預金合わせて七百万に足りない

ダリヤ
017　012　ダリヤよりも美しかったので

たりる　足りる

072　072　千万の人々を容れるに足りるものだ

たれ　垂れ
013　009　ながい舌が垂れ下ってきて
023　002　毛髪のやうに血が垂れて
028　011　液體のやうに垂れてきたのは疲れた舌である
031　008　もう花などどんな世界にも垂れはしない
032　009　眠れる半身に垂れさがり
041　128　柱に垂れて
055　025　灰色の壁のように垂れてきて
061　144　あなたの青銅の額には、濡れた藻の髪が垂れ、
064　024　石の屋根の上には重たい雲が垂れこめていた。
103　023　暗雲垂れこめるヨーロッパでもなければ
145　026　雲は低く垂れ　グラナダの暗い夜に稲妻が走っていた」
145　027　街のまぶたは重く垂れ　東京の暗い夜に信号燈が明滅していた
154　020　錦の帯がするすると垂れてくる
159　002　ひとり頭を垂れていると……
176　031　少女はふさふさした垂れ髪で

だれ　誰
015　009　誰も小さな宝石筐と
028　004　浴槽の中で思考したのは誰であったか
030　016　影ならば誰でもよい
031　002　誰かしら呟き声が
035　028　誰かくらい巨大なランプを掲げた
036　023　脅かす影は誰だらう
037　013　誰かが
038　018　誰かかすれた声で囁く
039　109　誰が道に迷ふといふのか
039　114　そして誰が沈黙したといふのか
041　054　あなたは誰かに向ってさう言った
041　119　誰のものでもないと思ってゐた樹木
047　018　朧ろに姿を現わすこの髭だらけの死者は誰だろう
051　031　「誰かが覗いている」
052　025　誰もいない淋しい部屋を夢想する
054　114　誰かが誰かにむかってそう言った
054　120　聴かせてくれ　目撃者は誰なのだ！
054　130　だがあたりには誰もいない
056　004　重たい誰かの靴音が
058　044　もちろん誰にも聞えるきづかいはありません
061　076　誰も見ていない。
061　092　誰も聞いていない。
061　105　誰も知らない。

062 010 誰も見てはいないから
062 025 誰も見てはいないから
064 014 ーーそう、あなたは誰なの？
070 046 誰も知らない寝室の
070 048 誰も知らない寝室の
070 054 誰です？　冷たい空気の手で、
070 060 誰だ！　青白い霧の顔で
072 067 誰もいなくなったスタンドに立って
089 012 もう誰の眼にもとまりません）
093 030 誰もまだ夢のなかで
095 015 誰だって僕のように淋しい夜道を走るだろう
098 013 誰のものでもない淋しさが
100 006 ぼくは誰かにむかってそう言った
101 021 ……誰もぼくを許そうとするな
101 064 おお　だから　誰もぼくを許そうとするな
106 005 誰一人笑っていないが　ユーモアに欠けているためではない
107 018 誰かがきっとそれを見つける
113 052 いったい誰のものか
128 032 誰かが名づけた
130 006 もう一つは誰だろう？
133 016 誰も語ろうとしないし聞こうともしない
134 008 この群集の行方は誰も知らない
137 011 もう誰も知りたがらない二人の秘密
137 016 「あなたは誰？」と
146 044 誰かの跫音がします
151 042 おまえは誰にも似ていない
155 027 誰かに呼びとめられたら
161 003 誰でも赦さなければならない
161 008 誰にでも許された特権で
170 022 こんなふうに誰かが
179 016 見守る者は誰もいない
183 027 誰でもほっと深い息を吐く
185 025 誰にもわからない
186 080 誰かが寄賭してくれたナポレオンの一壜もいずれ劣らぬ時間の傑作だった
188 043 此頃では、人の顔さえ見れば、誰彼となく病気の話で、
189 019 誰とも口をきかずに十年を生きればよい
192 008 わたくし、とは誰だったのだろう？　歩行の方向をきめている海の

だれか 誰か
031 002 誰かしら呟き声が
035 028 誰かくらい巨大なランプを掲げた
037 013 誰かが
038 018 誰かかすれた声で囁く

041　054　あなたは誰かに向ってさう言った
051　031　「誰かが覗いている」
054　114　誰かが誰かにむかってそう言った
056　004　重たい誰かの靴音が
100　006　ぼくは誰かにむかってそう言った
107　018　誰かがきっとそれを見つける
128　032　誰かが名づけた
146　044　誰かの登音がします
155　027　誰かに呼びとめられたら
170　022　こんなふうに誰かが
186　080　誰かが寄賭してくれたナポレオンの一壜もいずれ劣らぬ時間の傑作だった

たれこめる　垂れこめる
103　023　暗雲垂れこめるヨーロッパでもなければ

たれさがり　垂れさがり
032　009　眠れる半身に垂れさがり

たれて　垂れて
023　002　毛髪のやうに血が垂れて
028　011　液體のやうに垂れてきたのは疲れた舌である
041　128　柱に垂れて
055　025　灰色の壁のように垂れてきて
154　020　錦の帯がするすると垂れてくる
159　002　ひとり頭を垂れていると……

たれてきた　垂れてきた
028　011　液體のやうに垂れてきたのは疲れた舌である

だろう
047　018　朧ろに姿を現わすこの髭だらけの死者は誰だろう
051　027　闇に扉はないだろうか
052　008　愛と死の隠れんぼはやっぱり楽しいものだろうか
052　030　明日の夕陽を背にしてどうしたらよいのだろう
054　003　僕らはもう会うこともないだろう
054　056　Mよ　僕たちに君の高さが必要なのだろうか？
054　066　銀行が国民のものになるだろうから
054　105　死はいっそう強い酒にすぎぬだろう」
054　117　不潔な女のベッドの方へ進んでゆくだろう
054　118　そして詩人と大学生は駅でしばらく別れを惜しむだろう
055　037　おれたちのベッドのなかで締め殺してしまったのだろうか
060　017　なんという美しさを見出すことだろう
061　139　あなたは疑うだろうか？

062 031 わたしは昔の少年になってどこまでも追いかけてゆくだろう
064 016 人の運命をどうして占うのだろう。
065 013 終りがあるのだろうか？　影深い谷が
065 051 終りがあるのだろうか？　永遠の眠りが
067 009 あたたかい街をもつだろう
067 011 一匹の魚をもつだろう
070 036 いったいどこにあるのだろう。
070 058 なにひとつ諦めてやしないだろう
072 035 なんと見事なダークホースぶりだろう
072 069 何と惨めなことだろう
075 008 永くとどまることはないだろう
077 034 再び生きかえることはないだろう）
079 019 ぼくらは黙黙と逃れ去るだろう
095 015 誰だって僕のように淋しい夜道を走るだろう
095 021 ぼくは少しずつ忘れてゆくだろう
096 014 ぼくらを昏倒させる原色はなんだろう？
097 003 あなたは生命も飛翔も見ないだろう。
097 005 サン・ペエル街七十一番地に、永遠に雨を降らせるだろう。
097 007 あなたは暗い鉄格子の中に、永遠に繋がれるだろう。
097 014 空しい喝采のなかで、永遠に空中を泳ぎつづけるだろう。
098 024 その光りというものだろう
104 008 太陽に追われた記憶が戻ってくるだろうか
106 022 さらにいっそう素晴しいのは鼻だろう　内なるオルガンの全神経が
106 032 正直な諦めを抱いて　立去るべきではないだろう
106 046 おそらくその果は　「未来」とふかく交っているのだろう
106 048 ただちに答えられるだろう　かれの経験の彼方から第四の声で
112 038 たぶん時代がわるいんだろうと異口同音に歌う
113 037 「すこし休暇をとれば　きみの病気もなおるだろう」と
125 019 祝福はくるが遅すぎるだろう
126 011 もうすぐテレビの画面に吸いよせられるだろう
126 015 奇蹟の冒険に胸をおどらせるだろう
126 018 どうなってしまったのだろう？
130 006 もう一つは誰だろう？
142 027 なんという暗く悲痛なユーモアだろう）
142 055 ぼくたちに救いはあるだろうか？
142 060 精神病棟で比較的おとなしく死ぬだけだろう
142 092 ぼくたちはどこまでその小さな幸福を守れるだろうか？
142 104 おそらくぼくたちは　はっきり　否！　と合図するだけでよいだろう
142 106 一つの　否！　は　明日には無数の　否！　になるだろう
142 125 ぼくたちはけっして忘れないだろう
147 019 多分ぼくはまちがっているのだろう
148 025 ぼくらの骨は錆びていったのだろう。
150 043 この中に隠されていたことはまちがいないだろう。

150 072 喪われたら二度と取り戻せないことを忘れてはいないだろうか。
151 015 なんと魅力のない五十六歳の男だろう
151 021 とことんまで生きる気なんだろうおまえは
158 034 北條や足利の美しい光景をすくってみせたときだろう
160 046 今夜のかれの幸運は明日にはきみのものだろう
160 075 われわれのコーネリアスは　いまどこにいるのだろう？
160 078 われわれのコーネリアスはどこまで歩いていけるだろう？
161 010 あなたも赦されはしないだろう
162 022 喜んで命と交換しただろうというのだ
165 002 わたくしには厭わしかったのだろう
165 015 これ以上、理不尽な感情があるだろうか
165 020 家族的な反映だったのだろう、と
165 022 これ以上、合理的な感情があるだろうか
167 077 きみたちの家を破壊にみちびくだろう
170 024 ずいぶん助かるだろうに）
171 013 それが女の心に焼きついたのだろうと
173 043 まもなく頓死するだろう
173 047 すぐ大波のような睡魔が襲ってくるだろう
174 014 「子供っぽさ」が抜けないという共通点こそ、最大の障碍だったのだろう。
174 025 きみは何を考えていたのだろう？
175 009 ぼくたちは別々に死んでしまうのだろう
180 023 きみはきっと怯えて失神するだろう
180 042 たずねるものが見つからないときもあるだろう
180 045 思慮にあまって立ちつくすこともあるだろう
181 018 考えたのはなぜだろうか
181 019 なぜだろう？
187 017 きみ自身は死ぬだろう
188 002 こんな文面があったのを憶えているだろうか。
188 031 何の挨拶もしなかったのではないだろうか。
188 036 いずれ、順番がくるだろうと思いながら暮しているが、
188 050 老いの楽しみに数えてよいだろう。
192 008 わたくし、とは誰だったのだろう？　歩行の方向をきめている海の

たわむれ

048 035 涛のたわむれから
061 124 ひとつの波のたわむれから
083 007 なにもかも光と影のたわむれにすぎない
121 012 幻影の女とたわむれる

たわむれる

121 012 幻影の女とたわむれる

だんあつ　弾圧

142　005　東側における弾圧や迫害に最も敏感な人たちでさえ

たんか　担架
074　025　担架をのせた小舟は

だんがい　断崖
023　019　あなたの耳はちぎれそうな断崖で

だんがん　弾丸
081　019　いまうなる弾丸を
125　012　弾丸よ　言葉よ　錠剤よ

たんぐつ　短靴
085　020　キッドの短靴のようなもので

だんこん　弾痕
006　001　弾痕からシズクが落ちてるが　カレラは銃器を埋めて

たんじゅん　単純
113　013　単純でなくちゃならない
113　042　なんでも単純だったから

だんじょ　男女
056　010　抱きあった若い男女になって
058　009　踊っている男女の影がアスファルトに落ちてきます
148　051　若い男女でいっぱいのフラワー・センターに立ちよって、
185　013　一対の男女の世界では、甘美な

たんじょう　誕生
021　023　アスファルトで新しく誕生し
100　035　ぼくらの死から誕生にいたる
118　012　約束される誕生
188　080　誕生と、性交と、死に、

たんじょうし　誕生し
021　023　アスファルトで新しく誕生し

だんしょうし　談笑し
148　053　スマトラ島を偲んでぼくたちは談笑し、賑かに昼食をとった。

だんだら
191　009　だんだら雲の衣裳を

だんだん
017　037　樹はだんだん低くなってきた
036　024　おれの影はだんだん樹木の影に似てきた
053　065　あなたのお顔も　だんだん忘れてゆきそうです
083　006　町はだんだん小さくなってゆく
146　054　だんだん奥へ奥へと入っていくようで
147　010　生きていくことがだんだん心地よくなってきて

たんちょうな　単調な
193　017　単調なくり返しのようで

ダンテ
126　016　いったいダンテの至聖天とか

だんていする　断定する
106　037　なにごとも断定するには　むずかしい世界となった

たんなる　単なる
147　011　死は単なる事実になり

たんに　単に
054　061　単により高尚な国民　結社　人間の材料にすぎないと
150　033　それとも単にめぐりあわせか。

だんねん　断念
158　002　きみのいう断念の意味を
158　005　生きるのを断念するのは
158　008　断念とは
158　029　断念の最後の対象だった
158　036　断念の意味は果されたのだ

たんぴょう　短評
124　028　（短評：空間はどの部分も遅れている？）

たんぺん　短篇
160　012　デルモア・シュワルツが一九三八年に書いた短篇を読んだ

だんぺん　断片
041　142　傷つける断片　それは悼ましくも長く生きてゐる

タンポポ
005　003　タンポポの花粉をつけて
127　017　タンポポのように咲いたこともあったか。

127　023　黄ろいタンポポを黄色にしたものが

だんまつま　断末魔
112　010　破壊につぐ破壊のこだま　断末魔の軍港にとどろく火砲のうた
181　024　断末魔の腸がねぢれるように

だんめん　断面
031　010　煤けた家具の断面だけを見せ

だんろ　暖炉
061　174　火のない暖炉に向いあっています。

ダークホース
072　035　なんと見事なダークホースぶりだろう

ダービー・レース
072　059　ダービー・レースのように

ち　血
014　025　貧血がくるとひとつづつ楽器は床に倒れた
020　006　一すじの血が
023　002　毛髪のやうに血が垂れて
024　003　る　血液を噴き上げている白い管は輝やける噴水の愛撫をう
025　001　血液は
025　013　眼もなく耳もなくただ流れる血液は
039　136　いくたびか流された血は
041　092　小さな影のなかで血の気を失ってしまふだらう
051　029　これ以上血を流すからには
061　068　新しい追憶の血が、
061　073　新しい希望の血が、
061　147　あなたの褪せた追憶の頬に、かすかに血のいろが浮ぶ。
062　004　落ちた夕日の赤い血が
063　028　ふと血の気のうせた顔を見あわせて
065　040　わたしはおまえの血を飲みほした」
067　010　血のなかに
068　026　恋をあさる若者の血汐のなかにも
070　003　わたしの血汐の流れを抱きよせる、
070　027　おまえの熱い血の管は
070　061　血の涙をうかべているのは。
072　023　血統を信ずるのもいいし、人気に支配されるのも結構だ
076　016　血の骨よ血の肉よ血の花よ
080　010　夕陽の血が波のうえにしたたりおちて
080　017　あたらしい血汐であらい　この苦しみの胸が

081 021 血と泥と鉄のしぶきをはねあげて
085 007 きみの血を現場へ駆り立てるものは
085 024 女たちの血のなかから愛の喜びをしぼりだそう
091 012 血にぬれた白い翼からうまれてくる
093 020 そのようにかれの赤い血も
093 029 それは血や光りがかえってゆく水平線のない世界だ
098 023 ブランディの血を燃えたたせる火
100 042 たえまなく出血している内部の世界で
101 010 血の河をわたっていった兵士たちよ
101 054 血をはく空洞におちてくる
103 002 血縁のきずなはたちきれたか
104 011 わたしの血汐は　もう歌おうとしない
106 042 血を流してはならない　その肉を引裂かれても
112 008 ジョホールの血の海峡　ブキテマの焦げた丘
112 020 緑いろの歯ミガキにすこし血のまじった唾を吐いた
118 010 血まみれの
121 014 さわいでいる血をしずめるためにーー
125 011 もういちど血のなかをとおってこい
136 030 血の海はたぷたぷと近い
138 001 血まみれの夕日が沈み
142 114 記憶のなかの血はけっして乾くことはない
150 010 自分の血が全部流れ出してしまふのではないかと怖れた。
167 056 苦しみのベッドに血をにじませる
172 025 血に飢えた孤独を増殖させて
173 014 そこでは人間の血がまだ新鮮なのだ
181 038 ぼくの血を少しあたためたい
184 011 アイルランドとスペインの混血の男と
191 010 あられもなく血の色にそめて

ち　地

001 009 地球の悲鳴
004 005 意地悪な眉のながい神が
005 013 白いちぶさの傾斜地をかけ上れ
005 037 遊園地区に火が消えた
006 007 地面からそんな声がした
007 010 喞筒は空に向って泥を吐く　草の無い荒地ではとかく悪い感冒が
008 004 もある　向日葵のごとく旗は燃え　荒地に咲きそめた
008 010 　地平線
008 013 群は　雲に乗って押しよせ　黄色く汚れた地図の上を
010 021 地平線の鎖をのりこえて
016 015 意地悪な園丁の鋏を怖れなさい
018 012 路地を抜ける春のやうに
023 015 軟弱な地を擾げ夢幻の中から

025 019 地平線もなく煙もみえない球を眺め
025 049 不毛の地図には
026 022 しめった土地には
026 033 雲につつまれた地球の
028 002 地域は張りめぐらされた棘で囲まれ
028 028 地図に描かれた曲線の巧みな配置を
028 034 地下に住んでゐる声を踏みしめ
028 037 それは植民地のためではない
028 042 青い森林の地区に
028 046 技師の懐中にある正確な地形図は
028 047 地の脈を水の流れを変えるほど精密だが
028 064 空壜の堆積する地所を揺るがしながら明るく笑う
028 066 ガラス管の吃立する地域の
030 017 水平線はまへに地平線はうしろに
037 004 地下をながれる水の音は
038 006 地上を掠める光と
039 006 あちらこちらの窪地から
039 063 地の果の午後の海には
039 070 ここはわたしの生れた土地だ
039 072 測りしれない地平線のむかふから
039 079 かつて地上に祭があったといふ
041 003 地の果よ　そして濁らない泉がある
041 042 虹のやうに　或いは地の草のやうに
041 122 葉はぬけ落ち　黒い幹が囲繞地の隅に忘れられた
043 010 白く凍った地図のうへを
044 010 新らしい種子が新しい土地に播かれつつあることを。
046 033 濁れる水の地下のうねりこ耳を傾けつつ
048 004 ゆたかな地平線
048 028 すると地球の表面に都市ができる
048 031 それにむかって傾く地平線
048 032 地平線がのせている人間の重たい故郷
048 037 「地平線はどこにある
049 003 いつも逆に傾斜した獲物のない地平線しか見えない。
049 008 落葉に吹きまくられてゆく地平線に
050 028 Mよ、地下に眠るMよ、
052 015 あなたは本当に暗い地下にひとりで住んでいるのですか
053 025 こんなに寒い墓地なのに
053 039 狂おしく地上にかえってゆく
053 046 墓地のしめった黒い土をみつめながら
054 009 死地に赴く僕たちに
054 039 だが僕は最初の路地で心弱くもふりかえる
054 065 いまこそそこに疑いの余地があるから
054 094 だが遠のいてゆく地平線の

058 001 ひとびとが足をとめている空地には
058 019 いつもそんな汚い路地があって
061 007 はるか、地下を潜りぬける運河の流れ、
061 096 氷と霜と蒸気と熱湯の地獄の苛責に
061 129 野に池をつくり　地上に溢れ
070 035 ぼくたちの地平線は
072 007 うす緑の大地、美しいカーヴを描く競走路をみたまえ
073 014 静かに凪いだ墓地のうえを
074 004 東洋の名もない植民地の海にうかび
084 036 いつまでも雨がふってる路地をゆけば
088 013 木々　家々　大地
088 022 どのようにぼくたちの大地に暗い影を落すのかも
090 003 どんな地に根をはったのか
090 006 地を挽いた
090 007 方三尺五寸の天地をつくるために
095 010 ぼくは暗い路地を走り出た
097 005 サン・ペエル街七十一番地に、永遠に雨を降らせるだろう。
100 077 ぼくの空はそのままきみの地上となっている
101 031 どの首都からもへだたった　どんな地図にもないところだ
101 038 奥地や海洋で　抵抗する住民をうちころす必要はない
101 050 この地平から水平線にむけてひっぱってゆこう
102 024 とおくの地球に放してくれ
103 001 どうして地上の掟はやぶれたか
103 022 かれの目的地は
105 002 ぼくらの大地は黒くふくらむ、
106 036 不吉な羽ばたきをして　地面を歩く黒い鳥の男たちもいる
112 017 祖国の栄光と同胞の愛を信じて地平線になだれていった
118 002 母なる大地
120 017 かすかな地ひびきが
124 007 地名のない地図をたよりにスパイが暗躍
125 023 地獄のヴィジョンのうえで安眠できる老人は
126 007 地球の生活を拡張しうるにちがい」
126 010 地上の何億という眼は
127 006 地球の重みを首にかけて、
129 003 地上の物音はきこえない
136 028 地底の川はどちらへ？
137 008 意地汚なく愛撫を重ね
137 009 天地をさかさまにして
140 003 地上には
140 017 地べたを這いずる共生共苦の道も
142 044 いつもかぎりなく透明で　疑問の余地なく真実だから
142 056 異端者や地下の作家や哲学者を根絶やしにする
144 003 目の悪い地蔵が首見参にとうよせ

145 003 何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに
145 006 側に地下へ急降下するその劇場があって
145 008 レスビアンの女たちの痙攣は不信者の地獄の笑いの一型態で　ブリッジして反った肉体の
147 010 生きていくことがだんだん心地よくなってきて
148 007 地方都市で鉄工所を経営していた旧友が、
150 002 私は　囲繞地　というエッセイの中で、こんなことを書いた。
150 077 まさか、「荒地」が今頃になってアメリカから送られてくるとは。
150 080 地震か何かの前兆かもしれません。
154 017 天地をゆるがせて
161 024 負担を軽くする余地が
164 009 足で地面をばたばた踏んで
166 007 矛盾の道を地ならしするのは
169 007 果されぬ約束の地層にあって
173 013 地獄の炎のなかで増大していく
174 027 きみの地合いの計算には
176 012 レース織りのカーテンの布地を
183 028 地震も事故もなくて家へ戻る
184 026 いま地球は恐怖で頭をかかえているのに。
187 027 甘い香りのように地に融けていく
188 062 その反対に、葬儀屋や墓地などを見学しながら、
188 078 もうすぐ、「荒地」の最も残酷な月。
188 079 私には、なんと、四十三回目の地獄めぐりです。
192 003 うつむいて、歩いているところは、一木一草もない、黒い砂地で、
192 010 どこまで行っても、一本の松にも出遭わず、平坦な黒い砂地がつづいているばかりで、

ちいき　地域
028 002 地域は張りめぐらされた棘で囲まれ
028 066 ガラス管の吃立する地域の

ちいさな
059 014 ちいさな赤い唇とは
061 155 此処と彼処、それもちいさな距離にすぎぬことを……
112 024 ちいさな賃金を得なけりゃならない　あすもあさっても

ちいさな　小さな
015 009 誰も小さな宝石筐と
031 023 小さな火を焚くがいい
033 015 小さな宇宙の平面の上に残された
035 005 小さな像をこえて
037 022 また何と小さなことであらう
039 038 小さな場所に
039 039 もっと小さな愛を
039 127 小さな炎が消えてしまふことは望ましい

041 092 小さな影のなかで血の気を失ってしまふだらう
041 093 そしてあなたはその小さな骸を
046 049 あなた自身が小さな一つの部屋であることを
051 008 まるく小さな海と空が見えるばかりだった。
051 039 小さな鍵穴。
053 016 これがわたしの小さな十字架です
054 014 死の滴りは生命の小さな灯をひとつずつ消してゆく
054 044 ひとつづつ小さな灯が点されてゆくとき
054 123 小さな灯りを消してはならない
055 041 おまえは禿鷹風に化粧した小さな顔を
060 020 たとえば小さな捲毛の渦をみつけるような！
061 081 無数の小さな抱沫が噴きだしているのを……
062 043 この小さな丘の斜面に寝そべっていると
066 010 小さな友はいつまでも首をふりつづけた。
075 002 小さな波をうちあげて
078 021 小さな南十字星のまわりを
088 031 おまえは小さな手で
099 013 小さな四つの運命は　四つのボールのように
100 075 きみの小さな記憶の孔のなかに吸いこまれ
141 004 小さな虹をまたぐ大きな虹を見たわ。
142 087 臆病な政治的理由があり　小さな幸福をほんの少し長引かせるための
142 092 ぼくたちはどこまでその小さな幸福を守れるだろうか？
150 008 極めて小さな事柄にもいたましいほどの注意と努力を払ってゐた。
150 009 一寸した小さな失敗の傷口からでも、
160 037 詩人の気前と品位にとっては　小さな犠牲で
169 023 今年の小さな波じゃネ
183 001 郊外の小さな駅をおりると
189 033 カチャリと皿にあたる小さな音が

チイズ
026 010 輝くチイズが供へられたという

ちか　地下
028 034 地下に住んでゐる声を踏みしめ
037 004 地下をながれる水の音は
046 033 濁れる水の地下のうねりこ耳を傾けつつ
050 028 Mよ、地下に眠るMよ、
052 015 あなたは本当に暗い地下にひとりで住んでいるのですか
061 007 はるか、地下を潜りぬける運河の流れ、
142 056 異端者や地下の作家や哲学者を根絶やしにする
145 006 側に地下へ急降下するその劇場があって

ちかい

039　040　あなたの微笑はほとんど残酷にちかい
070　013　とおい星、ちかい星のひとつひとつにみいっている、

ちがい
039　016　哀れなことにちがいないと思ふ
060　014　高貴な冷たい戦慄を感じているにちがいない
126　007　地球の生活を拡張しうるにちがい」
139　005　わたしを呼んでいるにちがいないのだが
150　043　この中に隠されていたことはまちがいないだろう。
156　022　国情のちがい
156　023　心性のちがいはどうしようもない
167　072　とてもとても悲しいものにちがいない
174　029　きっとあったにちがいない、と。
180　009　とっくりと読みおえたにちがいなかった
185　019　最大のニュースにちがいない
192　018　の誘導標識にちがいない。

ちがいない
039　016　哀れなことにちがいないと思ふ
060　014　高貴な冷たい戦慄を感じているにちがいない
139　005　わたしを呼んでいるにちがいないのだが
150　043　この中に隠されていたことはまちがいないだろう。
167　072　とてもとても悲しいものにちがいない
174　029　きっとあったにちがいない、と。
185　019　最大のニュースにちがいない
192　018　の誘導標識にちがいない。

ちがいない　違ひない
039　078　淋しいものに違ひない

ちかく　近く
021　003　Ｋ氏の公園のプウルに近く
022　007　裸の胴は液体に近く
031　025　ドアの近くへ辷り出て
094　011　解読できぬ暗号のように近くて遠くあるもの
094　024　遠く近くハイネズの原に打ちよせるのはアフリカを白くする波だ
095　013　近くの闇を照していた
148　009　かれとは敗戦直後の闇市の近くの旅館で一度会い、
148　030　一の宮海岸の近くの松涛閣に集まったのは、
150　034　半数近くは戦争で死に、

ちかくて　近くて
094　011　解読できぬ暗号のように近くて遠くあるもの

ちかづいてくる　近づいてくる
004　010　太陽の跫音が近づいてくる
146　043　うしろからコツコツと近づいてくる

ちかづいてゆく　近づいてゆく
039　010　緑の泡の方へ近づいてゆく

ちかづく
068　014　ちかづく未来のなかに

ちがった　違った
041　133　曇った空の下を違った扉に向って走ってゆくのを見た

ちがって　違って
035　018　はげしくすれ違っていった
150　005　六人の友達の彼に対する考え方は夫々まるで違ってゐた。
150　027　何かが間違っていると感ぜざるをえなかった。
188　073　四年遅れのこの返信が、四年前のそれと、どう違っているかを、

ちかよってくる　近よつてくる
053　058　不思議な夢がしだいに近よつてくるようです

ちかよってくる　近寄ってくる
017　030　黒い雲が近寄ってくることは

ちから　力
031　021　破壊の力を防がうとするぞ嗤ふがいい
039　022　もはやどんな力も持ってゐないことを知れ
042　011　蛇は力を尺してしろがねの枝をのぼる
047　017　おとろえた視力の闇をとおして
057　019　力が判断と緊張をしっかりと両足にむすびつける
061　128　活力と滋味を湛え
079　015　全速力で飛びさるであろう
099　007　そこで　力いっぱい投げたボールが
100　070　精力的な夏は未来の街の方向にひろがっているようにみえた
101　004　無力な太陽のことばで　ぼくにはわかるのだ
106　024　詩人としてのかれの　おそろしい飛翔力をあらわしている
134　012　ついさっきまで二つの力が争っていた
137　012　ありったけの力をこめて
142　054　あとに残るのが　無気力な教養人ばかりだとしたら
142　105　巨大なものの力が　個人の信念より永続するという証拠はない
142　107　いかに巨大な力であっても

142　116　信念を持つ人間の精神が世界最強の力には通じないとか
142　119　非道な暴力に抵抗して　自らの犠牲と死の覚悟で第一線に立ち
150　008　極めて小さな事柄にもいたましいほどの注意と努力を払ってゐた。
151　015　なんと魅力のない五十六歳の男だろう
155　024　精力的にうしろへ押しやっていく
165　006　そんな瑣細な努力さえ
167　019　風が新鮮な活力を吹きこむので
167　064　脅かすような慰めるような圧力を加えてくる
169　010　求心力は見えなくなり
170　020　このうえなく新鮮で魅力的だ
188　004　どうも、視力が衰え、
189　025　無音無重力のガラスの部屋で

ちからいっぱい　力いっぱい
099　007　そこで　力いっぱい投げたボールが

ぢきに
041　144　春はぢきに立去ってしまふだらうと
041　145　またぢきに　嵐と雪で家々を覆ふ冬が来て

ちきゅう　地球
001　009　地球の悲鳴
026　033　雲につつまれた地球の
048　028　すると地球の表面に都市ができる
102　024　とおくの地球に放してくれ
126　007　地球の生活を拡張しうるにちがい」
127　006　地球の重みを首にかけて、
184　026　いま地球は恐怖で頭をかかえているのに。

ちぎら
152　013　紙マッチの軸を台紙からちぎらずに

ちぎれた
054　151　ちぎれた青空のように飛んだ一枚のハンカチーフ
061　121　ちぎれたボタンの穴にだって

ちく　地区
005　037　遊園地区に火が消えた
028　042　青い森林の地区に

ちくおんき　蓄音器
054　132　無言で蓄音器のレコードが廻転する

ちくのうしょう　蓄膿症
188　014　蓄膿症ではないと思うのですが、とにかく鼻が詰り、

ちけいず　地形図
028　046　技師の懐中にある正確な地形図は

ちこくした　遅刻した
120　020　人生に遅刻したのも気にしないで

ちしき　知識
012　020　知識の樹はアクロポリスを覆ひ
026　015　わたしは愚かしい知識の墓場を
041　149　知識があなたを盲ひにした
151　013　学問もなけれは専門の知識もない
188　063　死滅の予備知識も与えられて然るべきだ、といった方針のもとに。

ちじょう　地上
038　006　地上を掠める光と
039　079　かつて地上に祭があったといふ
053　039　狂おしく地上にかえってゆく
061　129　野に池をつくり　地上に溢れ
100　077　ぼくの空はそのままきみの地上となっている
103　001　どうして地上の掟はやぶれたか
126　010　地上の何億という眼は
129　003　地上の物音はきこえない
140　003　地上には

ちじょく　恥辱
085　022　かれらの恥辱の隠れ家をあばいてしまおう

ちず　地図
008　013　群は　雲に乗って押しよせ　黄色く汚れた地図の上を
025　049　不毛の地図には
028　028　地図に描かれた曲線の巧みな配置を
043　010　白く凍った地図のうへを
101　031　どの首都からもへだたった　どんな地図にもないところだ
124　007　地名のない地図をたよりにスパイが暗躍

ちすい　池水
120　005　池水のやわらかなひかり

ちそう　地層
169　007　果されぬ約束の地層にあって

ちち　乳
048　025　乳と象牙と林檎とが
052　005　ひとりで牛乳を匙ですくって
052　009　あなたの育たなかった乳房や
052　016　あなたの乳房や
062　039　清い空気のなかで乳の瓶をふっているのを
070　010　水死した処女の乳房をさぐりつづける。
099　005　一人の妹は乳母車につかまって歩き
120　011　処女の乳房のように

ちち　父
046　018　父や母　また友の顔もゆらめいてゐる
061　135　父母や妹　またあなたの至上の友たちに」
061　167　父よ、
061　168　悲しい父よ、
061　175　父よ、
061　176　寂しい父よ、
061　183　父よ、
061　184　大いなる父よ、
061　192　父よ、
061　193　大いなる父よ、
061　198　父よ、大いなる父よ、
095　014　こんなふうに父が死ねば
095　019　……苦しみぬいて生きた父よ
112　020　緑いろの歯ミガキにすこし血のまじった唾を吐いた
118　001　父なる「時」と
151　041　悲しい父性よ
165　001　父なる存在そのものが
165　005　健康を気づかう父の
165　009　黙々と机に向って仕事をする父の背中に
165　017　父を憎む
165　018　これは、父にとって
165　023　父とは半生のつきあいだったが
165　025　わたくしは父の書いたものを理解せず
165　026　父はわたくしの詩の一行も理解しなかった
165　027　父は黙ってこの世から去っていった
165　028　わたくしは病み衰えた父の腕に
177　006　父たちが
179　002　たべのこしの黒パン少々と
184　013　九カ国語を話したという冒険家の祖父を
190　004　父がうまれた村は山中にあり
192　019　助かった！　まだ死にたくはない。眼は真珠に、骨は珊瑚になったとかいう、五尋の海底の父になるなんてごめんだ

ちぢこまって
135　001　生活とか歌にちぢこまってしまわぬ

ちぢまっている　縮まっている
049　013　黒い足のように縮まっている　君の黒い足のようにー

ちぢんで
187　026　きみの影がみるみるちぢんで

ちつじょ　秩序
028　026　物質の秩序と形態にそって
112　032　すべての秩序が眼の高さにあればいいといった
183　010　さかりどきの雑踏は無秩序にみえるが

ちって　散って
011　006　落葉が散って　冬が残ってゐる
038　027　散ってきた雨は
084　007　散ってゆく落葉の女を尋ねて
102　010　みんな夜明けの桟橋から散ってくれ
104　004　枯葉のように散っていった
134　010　木の葉のように散っていった若者たち

ちってきた　散ってきた
038　027　散ってきた雨は

ちってくれ　散ってくれ
102　010　みんな夜明けの桟橋から散ってくれ

ちってゆく　散ってゆく
084　007　散ってゆく落葉の女を尋ねて

ちてい　地底
136　028　地底の川はどちらへ？

ちぶさ
005　013　白いちぶさの傾斜地をかけ上れ

ちぶさ　乳房
052　009　あなたの育たなかった乳房や
052　016　あなたの乳房や
070　010　水死した処女の乳房をさぐりつづける。
120　011　処女の乳房のように

ちへい　地平
008　010　　地平線
010　021　地平線の鎖をのりこえて
025　019　地平線もなく煙もみえない球を眺め
030　017　水平線はまへに地平線はうしろに
039　072　測りしれない地平線のむかふから
048　004　ゆたかな地平線
048　031　それにむかって傾く地平線
048　032　地平線がのせている人間の重たい故郷
048　037　「地平線はどこにある
049　003　いつも逆に傾斜した獲物のない地平線しか見えない。
049　008　落葉に吹きまくられてゆく地平線に
054　094　だが遠のいてゆく地平線の
070　035　ぼくたちの地平線は
101　050　この地平から水平線にむけてひっぱってゆこう
112　017　祖国の栄光と同胞の愛を信じて地平線になだれていった

ちへいせん　地平線
008　010　　地平線
010　021　地平線の鎖をのりこえて
025　019　地平線もなく煙もみえない球を眺め
030　017　水平線はまへに地平線はうしろに
039　072　測りしれない地平線のむかふから
048　004　ゆたかな地平線
048　031　それにむかって傾く地平線
048　032　地平線がのせている人間の重たい故郷
048　037　「地平線はどこにある
049　003　いつも逆に傾斜した獲物のない地平線しか見えない。
049　008　落葉に吹きまくられてゆく地平線に
054　094　だが遠のいてゆく地平線の
070　035　ぼくたちの地平線は
112　017　祖国の栄光と同胞の愛を信じて地平線になだれていった

ちほうとし　地方都市
148　007　地方都市で鉄工所を経営していた旧友が、

ちまた
120　014　繁華のちまたの

ちまた　巷
124　036　無人の巷をさまよう

ちめい　地名
124　007　地名のない地図をたよりにスパイが暗躍

ちゅう　宙
025　050　白亜の建築が聳え立ち
033　015　小さな宇宙の平面の上に残された
053　008　黄ろい髪飾だけがふわふわと蝶のように宙にさまよっているのです
059　021　海岸への道が不思議と宙にうかんでくる
061　054　あなたの宙にうかんだ道のすべてだった。
061　083　おまえは薄暗い多孔質の宇宙だ
073　013　ぼくらは白衣の亡霊となって
081　006　宙にうかんだ夢魔の城
094　008　杭につかまり宙にもがく小舟
106　029　むやみに明るい星空があり　意味なく敏感な宇宙があり
126　012　月のうえをふわふわ歩く宇宙の子供を見ようとして
126　017　パスカルを畏怖させた宇宙の無限の沈黙とかは
141　008　愛以外の何かだったわ。抱きあって、苦痛でよじれる縄梯子にすがって、宙ぶらりんで
182　018　沈黙は宇宙にこだまし

ちゅうい　注意
041　150　街の雑音はあなたの耳を不注意にした
150　008　極めて小さな事柄にもいたましいほどの注意と努力を払ってゐた。
152　035　吸いすぎには注意しましょう

ちゅうおう　中央
106　010　第一列の中央に　いやな上眼づかいのかれがいて
174　019　ぼくは黒を持ち確実を三隅を占拠したが、中央の白が厚く、ずるずると敗けてしまい
186　056　それなのに、みんなが整列して中央に一つだけ空いている椅子

ちゅうかん　中間
166　004　失われたものと現在あるものの中間で

ちゅうこくして　忠告して
145　021　膝の上の猫を大事にしてあげなさいと今日の声は忠告していた

ちゅうごくじん　中国人
184　006　タイ生れの中国人の医者と再婚した
184　019　若い中国人の夫は口癖のように

ちゅうじつに　忠実に
150　011　ほんの気まぐれから立てた計画に対して忠実になることは、

ちゅうしゃ　注射

165　029　カンフルの注射を三、四度射っただけであった

ちゅうしょう　抽象
054　148　暗い存在が抽象そのものに凍ろうとする時間のはずれから
072　032　きわめて純粋で、抽象的だ

ちゅうしょうてき　抽象的
072　032　きわめて純粋で、抽象的だ

ちゅうしょく　昼食
148　053　スマトラ島を偲んでぼくたちは談笑し、賑かに昼食をとった。

ちゅうすい　中枢
047　005　耳をすましている中枢に

ちゅうたい　中退
151　004　大学を中退し職歴はほとんどなく

ちゅうねん　中年
146　045　振りむくと小柄な中年の外国人が

ちゅうぶらりん　宙ぶらりん
141　008　愛以外の何かだったわ。抱きあって、苦痛でよじれる縄梯子にすがって、宙ぶらりんで

ちゅうもくし　注目し
072　014　あのスマートで強靱な足に注目しよう

チュー
051　030　人間はチューブのようなものであったらよい
146　049　きっとここから出してあげますよ（アイル　ゲッ　チュー・アウト・オブ・ジス）」

チューブ
051　030　人間はチューブのようなものであったらよい

ちょう　腸
028　032　すべての叫喚が悶える胃腸である
055　040　おれは慢性胃腸病患者のだらしないネクタイをしめ
085　006　未来は蒸されぬ腸詰にすぎない
181　024　断末魔の腸がねぢれるように

ちょう　蝶
005　002　蝶々は光る河を渡る
012　008　白い蝶よ

013　015　白い蝶は逃げたが
020　003　蝶のやうに跳ね返った
053　008　黄ろい髪飾だけがふわふわと蝶のように宙にさまよっているのです
132　004　木から樹へ　魚へ　胡蝶へ

ちょう　超
016　012　陸を超えて飛翔する
077　024　もう超えることのできない境があり
142　039　言語の障碍　人種の差別を超えて
173　004　超スローボールを空振りしたあとのような

ちょうかん　鳥瞰
044　005　鳥瞰すれば山河
046　010　あなたはみづからの心象を鳥瞰するため

ちょうかんする　鳥瞰する
046　010　あなたはみづからの心象を鳥瞰するため

ちょうしづく　調子づく
054　128　僕はせきこみ調子づく

ちょうしゅう　聴衆
160　023　それで時間つなぎに詩を聞かせてくれとせがまれ　聴衆のもとめに応じて
160　026　聴衆の気まずい沈黙
160　029　聴衆が失笑する
160　034　このハプニングに聴衆は喝采する

ちょうじゅう　鳥獣
090　017　鳥獣や花をつくりだすまで

ちょうせんします　挑戦します
169　024　来年の風にまた挑戦します。

ちょうせんする　挑戦する
180　054　魔風に挑戦するのはあきらめよう

ちょうたつ　調達
155　011　金銭の調達

ちょうちょう　蝶々
005　002　蝶々は光る河を渡る

ちょうづめ　腸詰

085　006　未来は蒸されぬ腸詰にすぎない

ちょうどるい　調度類
167　049　塵埃のように書籍を衣類を調度類を

ちょうはつ　長髪
145　001　「至上のトーモロコシの毛がアゴにもある長髪の若者が

ちょうりゅう　潮流
081　029　海の下の潮流は

ちょうるい　鳥類
106　009　悪い空気のなか　鳥類のコンベンションが重んじられる

ちょきん　貯金
151　008　貯金は定期普通預金合わせて七百万に足りない

ちょくせん　直線
068　018　一直線をえがく　はてしない水平線にそって
072　045　直線コース
113　010　一直線に吹いていた

ちょくめんした　直面した
142　101　ブコフスキーやアマルリクが直面した状況にくらべたら

チョコレエト
010　007　やがて純白の雲の中にチョコレエトの肩が見えなくなる

ちょさくちゅう　著作中
142　068　自分の著作中に登場し　そのために投獄されたすべての人々を

ちょしょ　著書
142　062　その著書をフランスで刊行した一九四二年生れのブコフスキーは

ちよだびる　千代田ビル
128　063　千代田ビルの角で消えたが

ちょっかんする　直観する
071　037　われわれは自然によって死の深さを直観する

チョッキ
054　158　きちんとチョッキをつけ上衣を着て

ちょっと
100　036　ちょっとした喜劇を仕組みもしたろう
150　023　ちょっとばかり意外だったのは、
152　014　ちょっと折りまげてこすりつけ
160　032　ちょっとしたいざこざのあとで
173　005　ちょっとさびしいコーヒーブレーク
174　002　一年ちょっと前、

ちょっとした
100　036　ちょっとした喜劇を仕組みもしたろう
160　032　ちょっとしたいざこざのあとで

ちょっぴり
058　027　その孤独のこだまのなかには淋しさの本質がちょっぴりあります
174　011　この三十年間、ぼくはきみに一度も電話などしたことがない、ちょっぴり心が痛み、それはなぜかと考え出すと、疑

ちょめいじん　著名人
142　004　西側の新聞や著名人の多くの声明には

ちらかした　散らかした
014　002　侵入してきて楽譜を散らかした

ちらかしていった　散らしていった
006　016　飛行機がそんなビラを散らしていったが

ちらばった　散らばった
024　004　けてゐる　寝床に散らばった怠惰な骨の中から　陰鬱な眼球

ちらばって
170　002　死んだ言葉がちらばっていて

ちり　塵
028　020　かれら塵挨都市の番兵と呼ぶものから
039　143　塵や灰の底へ沈み
167　049　塵埃のように書籍を衣類を調度類を
189　029　塵一つない白い卓布

ちりぢり
110　008　人はみなちりぢりになる

ちる　散る
001　016　淵に散る
005　022　霞の中にとびこむと葩が散る

005　023　羽が散る
040　001　髪は散る

ちんぎん　賃金
112　024　ちいさな賃金を得なけりゃならない　あすもあさっても

ちんしし　沈思し
188　056　しばらく、沈思し、低く呟く、

ちんぼつする　沈没する
003　012　軍艦はシーツの皺に沈没する

ちんもく　沈黙
007　004　煤けた町は古い習慣で壺の沈黙を　それはいつまでも黄色い河の
014　028　楽器のうす暗い腹の中に沈黙が
023　010　沈黙した化石に傷をつける
039　114　そして誰が沈黙したといふのか
046　045　内部を刻む時計の音に　蒼ざめた河のこの沈黙はつきまとひ
051　033　扉のひろさで立ちふさがる沈黙……
054　089　沈黙の壁
054　145　疲れと沈黙の瀑布が
065　001　どの窓にも、沈黙とおなじ大きさの
065　009　沈黙が占めている空間に反響した。
065　027　時は移った。沈黙の
065　042　高く低く、沈黙の胸をたたいた。
065　056　沈黙があった
066　036　どの家々も沈黙の屋根におしつぶされていた、
082　016　それから沈黙が歌いはじめる――
088　044　沈黙に聴きいる石もなければ
090　025　気味わるい沈黙を深めるために……
100　024　沈黙の奥ふかく追放された
100　083　太陽は　また沈黙する
101　044　沈黙よりも固い無名の木の実がはじけとび
110　003　ヨットは沈黙している
113　046　（まばらな拍手　沈黙）
113　048　（深い沈黙）
113　053　――沈黙が粛清にやってくる
126　017　パスカルを畏怖させた宇宙の無限の沈黙とかは
160　026　聴衆の気まずい沈黙
164　022　沈黙は共通の敵だから
169　002　新鮮な沈黙の夜をむかえて
182　018　沈黙は宇宙にこだまし
185　011　いたるところに沈黙の空白ができた

ちんもくした　沈黙した
023　010　沈黙した化石に傷をつける
039　114　そして誰が沈黙したといふのか

チーズ
040　027　輝くチーズを載せた車がとほる
181　036　ナチュラル・チーズとクラッカーがほしい

ついおく　（「追憶」）
061　205　「時」も「追憶」もなかった、

ついおく　追憶
041　075　追憶の蒼ざめた紙片は
061　068　新しい追憶の血が、
061　147　あなたの褪せた追憶の頬に、かすかに血のいろが浮ぶ。
061　205　「時」も「追憶」もなかった、
100　030　こころよい追憶にもどってゆく歩行者のように
108　011　おおきな追憶が港から出てゆくのに

ついた　衝いた
150　041　今にしておもえば、真実を衝いた薄気味わるい言葉である。

ついたし
160　006　死亡広告をみる癖がついたし

ついていて
179　005　太陽の誘惑のしみがついていて

ついほうされた　追放された
100　024　沈黙の奥ふかく追放された

つうかした　通過した
012　023　スコオルの通過した海の窓から
020　007　名刺を通過したが

つうかして　通過して
095　018　ゴーゴーゴーとぼくの頭上を通過していった

つうかする　通過する
018　004　耳が刷毛のやうに通過する

つうこうにん　通行人

064　003　ーー今日は今日、と通行人が呟いた、
064　029　ーー明日は明日、と通行人が呟いた、
089　037　停車場へいそぐ通行人の影にまぎれ
134　014　通行人が哀れっぽく声をかけてきた

つうれつ　痛烈
142　083　ずっと痛烈かもしれないが

つうろ　通路
061　015　いくつもの通路をぬけ、

つかい　使い
062　013　いちばん美しい使いである姉さん！
182　005　横目使いに横這いの

つかっていた
100　062　たくさんの人がプールにつかっていた

つかぬ
071　009　われわれはとりかえしのつかぬ年月を
071　010　とりかえしのつかぬ過失を
148　028　とり返しのつかぬ時間が過ぎていたのである。
156　025　愛という言葉は身につかぬのである
163　004　夜明けとも日暮ともつかぬ薄明の中で

つかぬ　就かぬ
041　099　むかしの世紀がまだ寝床に就かぬうちは

つかのま
116　008　つかのまの影をおとし

つかまえて
172　016　影ばかりつかまえてきた

つかまえて　掴まえて
146　033　「あの女だ！（ザッツ・シー）　早く掴まえて！（ゲット・ハー）」

つかまえる
070　021　あなたの指は何もつかまえることができない。

つかまった　捕かまった
013　016　ネムの手に捕かまった

つかまって
086　011　岸辺につかまって死んだ魚の
099　005　一人の妹は乳母車につかまって歩き

つかまり
046　034　同じ木の手摺につかまり　同じ迷宮の方向へ降りてゆく
094　008　杭につかまり宙にもがく小舟

つかれ　疲れ
028　011　液體のやうに垂れてきたのは疲れた舌である
029　004　疲れた衣類は脱ぎすてられ
030　033　実ったあとの浅い眠りは疲れである
031　018　疲れた椅子が囁く
035　025　疲れたからだを休めるために
041　106　目覚めてゐることに疲れ
046　013　人工に疲れた鳥を
048　011　昨日も今日も　疲れた裸のままでいると
054　145　疲れと沈黙の瀑布が
055　024　疲れた重たい瞼が
096　011　きみもぼくも疲れた　さびしい旅だった
124　035　（疲れやすいんだ　としよりは）
139　007　さまよい疲れて歩いた道の幾千里
148　016　愛は身をほそらせ、日々の仕事は疲れをつのらせる。
182　014　戦いに疲れたら
193　007　眼鏡の疲れをぬぐい

つかれた
047　006　つかれた椅子の軋る音……

つかれた　疲れた
028　011　液體のやうに垂れてきたのは疲れた舌である
029　004　疲れた衣類は脱ぎすてられ
031　018　疲れた椅子が囁く
035　025　疲れたからだを休めるために
046　013　人工に疲れた鳥を
048　011　昨日も今日も　疲れた裸のままでいると
055　024　疲れた重たい瞼が
096　011　きみもぼくも疲れた　さびしい旅だった
182　014　戦いに疲れたら

つかれた　憑かれた
039　036　憑かれたかたちで映ってゐる
045　008　眼のまぼろしに妖しく憑かれた

103　012　海のまぼろしに憑かれたかれは

つかれて
045　017　思案につかれて
058　032　つかれているのは私ばかりではありません
124　031　日没に追いつかれていた

つかれている
058　032　つかれているのは私ばかりではありません

つかんで
155　014　両手でつかんでうしろにやってしまえば

つき
010　022　　あかつき　がひらけはじめる
036　030　つき落されるかも知れん
041　127　書物にくっつき
046　001　高い欄干に肘をつき
046　045　内部を刻む時計の音に　蒼ざめた河のこの沈黙はつきまとひ
053　018　夕陽の果に燃えつきて
054　137　護衛つきキングと慰めをあたえるクインの価値とが
055　059　イデオロジストの顰め面を窓からつきだしてみる
061　059　いたるところに行きつき、いたるところを過ぎていった。
063　002　夕日が燃えつきてしまった
112　004　そんな遠くを見るような眼つきで
124　023　歌舞伎町でスロット・マシーンにしがみつき
129　007　雲の上までつき出ていった虚栄
148　036　結局、めいめいの職歴と子供を何人作ったかということにつきていた。
150　054　鉛筆で何カ所も印をつけられた頁をつきつけられて、
160　065　　フンボルトの天才　は四十歳で燃えつきてしまい
164　018　嘘つき！　詩人の資格なし！
165　023　父とは半生のつきあいだったが
166　026　砲撃に耳をすますような顔つきで
171　005　女は狂う寸前の眼つきをして
177　009　どこをどうほっつき歩いたか

つき　月
001　013　月の窓を窺ってゐる
003　011　油絵の裏に隠れてゆく黄ろい月
005　029　あ　逃げた小鳥が月にゐた
008　008　罌粟の花が*サカリ*である　真珠の月もかくれてゐやう
017　022　月がオデコに光り始めたら
024　001　ふせた耳の上でふと風が鳴る　くずおれた月光の雫に溺れ

039 111 月は遥かなる湖にかかる
046 042 ほっそりした川のやうに渝らぬ月日を行くことが出来る
053 033 柱時計が六時を告げる
057 024 世界を冷やす月光がぼくの額を照らすのを……
060 007 真昼の月の下を
061 194 十一月の寒空に、わたしはオーバーもなく、
062 049 枯草のあいだの四月の若芽のように萌えています
063 012 窓からさしこむ月光のしたで
065 007 高い絲杉のうえで、月は
065 038 いたずらな月が生んだ魔女は
065 045 何もなかった。絲杉をはなれた赤い月は
065 048 星も月もない夜、毛布にくるまった男は
066 023 あかるい月がたずねていった。
068 026 恋をあさる若者の血汐のなかにも
069 001 十一月の凍った夜空に
069 009 十一月の凍った夜空に
069 021 十一月の凍った夜空に
069 037 十一月の凍った夜空に
070 003 わたしの血汐の流れを抱きよせる、
071 009 われわれはとりかえしのつかぬ年月を
072 066 暮れるにおそい五月の空の下にひろがっている
077 016 一九四四年五月のある夜……
077 029 東支那海の夜を走る病院船の一室で
078 012 ながい月日もまたたくうちに過ぎさる
080 017 あたらしい血汐であらい　この苦しみの胸が
082 001 六月は水色の瞳
082 002 七月は空を泳ぎまわる魚
082 003 八月は海辺にのこる白い墓
101 045 四月の雨をまつ土にふかく射ちこまれている
104 009 無慈悲な月の光が　照し出す
104 011 わたしの血汐は　もう歌おうとしない
105 004 暗くあれ、三月、
105 005 魚釣りには早すぎ、狩猟には遅すぎる三月。
105 007 着るには暖かすぎ、脱ぐにはまだ寒い三月、
105 008 街角を静かに走れ、三月。
105 011 九月ポーランド、十月スエズ、ハンガリー、
105 013 この歳月をよしとしよう、三月。
105 015 九月十月には、まだまだ遠い三月。
124 016 それが　諸君の旧式な
125 005 六月の雨はしきりにふり　音楽はとめどもなく
125 020 恐怖で赤く熟れた月が廂に出ている
126 001 「太陽や月や星は
126 005 「月が刻下の目標だが

126　012　月のうえをふわふわ歩く宇宙の子供を見ようとして
132　007　年月はめぐりめぐって
137　014　空虚なこだまのなかの幾年月
139　001　白い月のえまい淋しく
148　002　去年の一月の終りに、
148　048　それから、少年の日のように月の砂漠へ出発した。
149　010　月の光は雲からも
150　026　年月のきびしさに苦笑するほかはなかったが、
150　079　こちらも七月一日だというのにストーヴをつけたりしました。
151　009　月々の出費は切りつめて約六十万
153　002　すべての歳月を
154　010　すべての年月をかけて
167　048　ながい幽閉の年月に耐えた
167　069　共に暮した年月にも
174　006　早く頑迷固陋にかえりたい。あと三カ月で六十才」と書いてあった。
177　011　月あかりに見上げる
180　044　月明りの下で
182　022　日月の長さは悟りだから
188　075　一雨ごとに暖かくなるという、三月の雨が
188　078　もうすぐ、「荒地」の最も残酷な月。
189　004　月がかわれば
190　006　峰から昇り尾根に沈む日月

つきあかり　月あかり
177　011　月あかりに見上げる

つきあかり　月明り
180　044　月明りの下で

つきさし　突き刺し
055　047　おれは憎悪のフォークを突き刺し

つきだして
055　059　イデオロジストの顰め面を窓からつきだしてみる

つきづき　月々
151　009　月々の出費は切りつめて約六十万

つきつけられて
150　054　鉛筆で何カ所も印をつけられた頁をつきつけられて、

つきまとひ
046　045　内部を刻む時計の音に　蒼ざめた河のこの沈黙はつきまとひ

つき落される
036　030　つき落されるかも知れん

つく
030　019　テエプルと椅子の配置をつくり
041　086　いつもあなたの臓腑をつつくとき
052　003　うつくしかった姉さん！
054　041　君がいるところへ行きつくために
055　043　朝の食卓につく
058　034　うつくしく欠伸をしている女がいます
061　129　野に池をつくり　地上に溢れ
065　014　死せる魂に、大きな裂け目をつくり
072　058　何百万の人々が、もう一度溜息をつくのだ
077　013　幾世紀もの列をつくってつづくのだ
084　005　つくり笑いにほんとうの涙をうかべ
088　003　ぼくの椅子の下に巣をつくったり
088　016　見えない国境をつくっているか
090　007　方三尺五寸の天地をつくるために
090　017　鳥獣や花をつくりだすまで
100　063　高いビルディングは動かぬ影をつくり
101　029　未来や過去がうろつくには
101　047　森や田畑やうつくしい町の視覚像はいらない
102　007　悲しいかな　海のなかに海をつくり
142　006　　左翼　に対する架空の均衡をつくり出すために
142　109　自信はぐらつく　巨大であればあるほど
143　012　岩床につくばうあさましさを思う……
150　032　虚構なるがゆえに傷つくことがすくなかったからか。
151　036　一体一体に入魂の秘術をつくしてきたのだ
154　001　腑ぬけになってたどりつく
160　040　コーネリアスは濃霧の街を歩いて帰路につく
164　020　奇妙な　ぞめき笑いの中に立ちつくす
167　022　肉の悲しみを知りつくした主は
170　028　しばらく其場に立ちつくしていた
180　045　思慮にあまって立ちつくすこともあるだろう

つく　就く
173　049　深海の底の眠りに就くことができる
179　020　死よりも贅沢な眠りに就く

つくえ　机
004　002　机の上は　すでに白い雪である
015　004　傾いた机は風を聴くことがない

031　022　机の下から灰や骨などを集めて
059　009　わたしの机のうえの一枚の写真も
114　006　じっと机の下にかがんで生きのびてきた
152　026　箱型のそれを机のうえに立ててごらん
165　009　黙々と机に向って仕事をする父の背中に
188　071　きみの手紙は、たまたま、仕事机の片隅の、

つくして
151　036　一体一体に入魂の秘術をつくしてきたのだ
170　028　しばらく其場に立ちつくしていた

つくった　作った
029　017　樹樹のいろが肖像を作った
148　036　結局、めいめいの職歴と子供を何人作ったかということにつきていた。

つくった　創った
041　014　かつはまた　あの人たちを悲しませる黄昏を創った

つくって
077　013　幾世紀もの列をつくってつづくのだ
088　016　見えない国境をつくっているか

つぐむ
156　035　私は口をつぐむほかはない

つくられた　作られた
046　004　石で作られた涯しない屋根の町の

つくり
030　019　テエプルと椅子の配置をつくり
061　129　野に池をつくり　地上に溢れ
065　014　死せる魂に、大きな裂け目をつくり
084　005　つくり笑いにほんとうの涙をうかべ
090　017　鳥獣や花をつくりだすまで
100　063　高いビルディングは動かぬ影をつくり
102　007　悲しいかな　海のなかに海をつくり
142　006　　左翼　に対する架空の均衡をつくり出すために

つくりだす
090　017　鳥獣や花をつくりだすまで

つくり笑い
084　005　つくり笑いにほんとうの涙をうかべ

つくる　作る
142　113　歴史を作る者をたえず脅かしつづけてきた基本的なイメージである

つげ　告げ
052　023　あなたはどうして人生にさよならを告げたのか
053　024　いつものようにわたしはお姉さんさようならを告げることが出来ません
053　033　柱時計が六時を告げる
053　038　大好きな　空にさよならを告げて
054　062　ペテルスブルグの青年が僕たちに告げたことを……
054　100　亡霊たちに別れを告げよう
065　021　告げなさい。レエテ河の水を飲まぬうちに
068　033　十九歳に別れを告げた男は
075　003　不幸な兵士に別れを告げる
094　020　きみがぼくに生きよと告げるなら
102　017　おれに訣れを告げたら
109　004　いま、別れを告げようとしている。
109　008　自分自身と世界とに別れを告げるときがきた、
129　020　時を告げない時計と
146　047　大学で英語教師をしていたと告げるのです
160　021　つい「詩人」であると真実を告げる
179　027　たしかに知っていると告げる
187　020　別れを告げる違もなく

つけた
006　009　すると白い翼をつけた一羽の
060　018　黒い喪服をつけた男の
065　018　空虚であった。白い翼をつけた女が
073　011　墓標のように番号をつけた煙突がならび
074　013　三色旗をつけた巨船のうえにあるものは
078　020　救命具をつけた船のへさきは
093　002　電燈をつけたまま
100　014　ぼくは書きつけた
117　007　まがった黒い影をつけたまま
123　007　未来に値段をつけたくない
124　005　やっぱり司直が目をつけた
142　126　魂に刻み目をつけたこの年を！
150　079　こちらも七月一日だというのにストーヴをつけたりしました。
160　014　それがなぜ私の心をしめつけたのか？
175　002　なぜ首輪をつけたりするのかと
188　072　ごみの山をかきまわしていて見つけたものだが、

つげた　告げた

052　023　あなたはどうして人生にさよならを告げたのか
054　062　ペテルスブルグの青年が僕たちに告げたことを……
068　033　十九歳に別れを告げた男は
102　017　おれに訣れを告げたら

つけたす　付け足す
180　025　ら……。貴方に判らなかろうと、もう少し付け足すと、昨年は形相の意味も知らなかったということ。私は「メ

つけて
005　003　タンポポの花粉をつけて
025　034　影にかくれて白いカラをつけて
027　011　そちらの方から寒さが吹きつけてくる
041　120　貧弱な幹に大きな葉をつけてゐた樹木
042　009　すさまじい寒さが吹きつけてくる
047　014　古風な銀の縁をつけて　いつもこの水が動かぬことを……
063　021　ーーあかりをつけて」あなたは言った
112　042　胡麻的な頭と頭をくっつけて寝ているなつかしいきょうだいたち
152　006　かるく水につけて上から吹く

つけね　つけ根
048　003　腕のつけ根からはじまる

つけもの　漬物
150　075　それにしても、きみがガレージで漬物をつける甕をさがしていたら、

つげよう　告げよう
054　100　亡霊たちに別れを告げよう
109　004　いま、別れを告げようとしている。

つける
023　010　沈黙した化石に傷をつける
041　087　愛嬌ある仕科（しぐさ）で柔かい羽に堅い嘴をこすりつける
041　142　傷つける断片　それは悼ましくも長く生きてゐる
057　019　力が判断と緊張をしっかりと両足にむすびつける
060　020　たとえば小さな捲毛の渦をみつけるような！
068　011　辜丸をしめつける海と
090　009　人間が自然に手をつける方法は……
103　031　きみが見た大きな虚無はふかくぼくらをひきつける
107　018　誰かがきっとそれを見つける
150　075　それにしても、きみがガレージで漬物をつける甕をさがしていたら、
152　029　てっぺんに火をつけると
167　007　足もとのストーヴに火をつけると

つける　点ける
008　003　点ける　と焦げたパンの匂がし　空腹をかんじた兵士

つけ狙われ
094　002　見えがくれの執念につけ狙われながら

つた　蔦
167　061　錆びた針金の蔦におおわれて
179　011　蔦におおわれた高窓は

つたえ　伝へ
043　005　伝へよ　かの人に

つたえた　伝えた
185　002　ラジオ・ニュースが伝えたとき

つたえる　伝える
150　056　学校へ行ってその旨を伊藤に伝えると、

つち　土
007　006　古風な鐘は藍をにじませて鳴る　曇る　動かない土絵具のカンヴ
026　022　しめった土地には
028　027　土の起伏と水の流れと
036　003　乾燥した粘土の上に風だけの虚しさが
039　070　ここはわたしの生れた土地だ
044　010　新らしい種子が新しい土地に播かれつつあることを。
053　046　墓地のしめった黒い土をみつめながら
084　019　土人の音楽があります」
101　045　四月の雨をまつ土にふかく射ちこまれている
103　019　風土とか習慣によって去勢されない
120　006　しめった土のにおい
148　022　土にかえる目立たない姿勢をしていたが、
148　041　夢の領土をとり巻いている闇のなかで、

つつ
021　019　夢見つつ死んでしまった
026　033　雲につつまれた地球の
031　020　すべての物質たちは堅い殻につつまれて
041　086　いつもあなたの臓腑をつつくとき
044　010　新らしい種子が新しい土地に播かれつつあることを。
046　033　濁れる水の地下のうねりこ耳を傾けつつ
046　038　日没の空にあなたはわななきつつ身を横たへ
074　006　白布につつまれた屍体が

077 021 青白い記憶の炎につつまれて
083 023 とおくて近いこんな夕陽が沈みつつあったのか
120 023 花のかすみにつつまれて
147 007 世をも人をも厭いつつ生きていて
180 055 ぼくらの日日は過ぎつつあり
190 015 動かない山懐につつまれて
192 015 みるみる漆黒につつまれていく、ここは、もともと海底だったところではないか。冷気に身ぶるいし、

つづいた
059 007 わたしにはながい悪夢の日がつづいた

つづき
061 106 未来の道は過去につづき
098 011 読みさしの小説のつづきは

つつく
041 086 いつもあなたの臓腑をつつくとき

つづく
053 056 降りつづく落葉の雨のなかから
061 051 砂浜につづく足跡のように
069 020 とぎれたとみせて　またつづく
077 013 幾世紀もの列をつくってつづくのだ
084 032 どこまでもつづく青い灯の谷間にも
088 074 どこまでもつづく愛の歌で
091 002 さびれた国道につづく町工場の
125 013 さりながら果しない休日がつづく
127 020 こめかみの痛みはつづく
160 073 ニューヨーク市の屍体置場までつづくのである
167 005 家鳴り震動の交響がつづく

つづけた
065 033 翼のなかにさぐりつづけた。
066 010 小さな友はいつまでも首をふりつづけた。
077 022 母や妹や恋人のためにとめどなく涙を流しつづけた
081 010 呪いの言葉を吐きつづけた

つづけてきた
050 021 黒い鉛の道を歩みつづけてきたのだった。
110 005 走りつづけてきた航跡を
142 113 歴史を作る者をたえず脅かしつづけてきた基本的なイメージである

つっこんで

050　026　きみはただ重たい靴のなかに足をつっこんで静かに横たわったのだ。

つって　釣って
121　010　赤い魚も釣ってみたい

つっている　吊っている
054　070　首を吊っている母親の足をひっぱれ！

つつまれた
026　033　雲につつまれた地球の
074　006　白布につつまれた屍体が

つつまれて　包まれて
143　002　暗黒のあたたかさに包まれて

つな　網
094　010　飛んでいる鳶や網をひく漁夫の唄で
128　083　梢の天の　網目から
142　098　世界中にその網の目をひろげているのである
180　034　測り知れない現実的形態を網にかけて

つながれた
048　021　歴史の鎖につながれた老齢！
100　064　つながれた行列の影は鎖のように工場をとりまいていた

つなわたり　綱渡り
085　027　他人の危い綱渡りを見ながら

つねに
028　018　つねに流通する貨幣の翳から起るといふ

つねに　常に
150　013　彼の表面は常に波立ってゐるが、彼の底は何時も静かで、

つのらせる
148　016　愛は身をほそらせ、日々の仕事は疲れをつのらせる。

つば　唾
017　009　白い唾を吐きかけ
054　116　彼は唾をはく街燈のそばを通りぬけ
055　023　おれは明けがたの街にむかって唾をはいた
112　020　緑いろの歯ミガキにすこし血のまじった唾を吐いた

つばさ　翼
005　021　白い翼が生える
006　009　すると白い翼をつけた一羽の
065　018　空虚であった。白い翼をつけた女が
065　033　翼のなかにさぐりつづけた。
069　039　ふたりの少女は翼の影をよせあった
078　016　白くかろやかな翼になりゆくことか
091　012　血にぬれた白い翼からうまれてくる
104　001　金色の翼もなければ　風の鬣（たてがみ）もないのに
142　006　　左翼　に対する架空の均衡をつくり出すために
163　020　ぼくらの翼で

つばめ　燕
025　014　青い雨のやうに燕のやうに
057　025　マニラ郊外のドライブウェイを疾走しながら
142　095　すでに現実に存在していて　いわゆる階級構造とは全く無縁な
145　021　膝の上の猫を大事にしてあげなさいと今日の声は忠告していた

つぶ
021　026　白い雲の中で眼をつぶり
025　040　おびただしい鶯たちが眼をつぶる
043　002　水のほとりでひくくつぶやく
062　063　あなたはつぶらな瞳を閉じていますね
066　036　どの家々も沈黙の屋根におしつぶされていた、
069　010　きらりと光るひとつぶの星があった
145　004　はいるとつぶやきながら黒い色の真実やめったに売れないエンジェルの絵を売っていた」
158　033　光りのつぶをひろうように

つぶ　粒
035　022　一粒の実りは
114　004　一粒の種子も残らない
130　013　砂利が一粒ずつ光りはじめた
169　018　わずかに涙の粒がしぶいている
170　019　やがては星に昇天していく光の粒は
186　073　一粒の蓮の実を永く隠しておくことだよ

つぶやいた　呟いた
064　003　――今日は今日、と通行人が呟いた、
064　029　――明日は明日、と通行人が呟いた、

つぶやいて　呟いて
050　017　「それがぼくたちの古い処方箋だった」と呟いて……
054　029　Mよ　都会の胃袋をさまよいながら君が呟いていたことを……

063　015　あなたはひそかに呟いている

つぶやき
145　004　はいるとつぶやきながら黒い色の真実やめったに売れないエンジェルの絵を売っていた」

つぶやき　呟き
025　055　呟きのやうに廻ってゐる
031　002　誰かしら呟き声が
155　022　ごめんなさいとかそれじゃとか呟きながら

つぶやく
043　002　水のほとりでひくくつぶやく

つぶやく　呟く
017　015　あの花が欲しいなと呟くと
164　002　黒いミューズが呟く
166　027　かれが冷たく呟く
169　012　戻ってこなくてもいいと呟く
178　010　この世の外で呟くように
188　056　しばらく、沈思し、低く呟く、

つぶらな
062　063　あなたはつぶらな瞳を閉じていますね

つぶり
021　026　白い雲の中で眼をつぶり

つぶる
025　040　おびただしい鶯たちが眼をつぶる

つぼ　壺
007　004　煤けた町は古い習慣で壺の沈黙を　それはいつまでも黄色い河の

つま　妻
045　006　音もなく空を走る稲妻を見あげてゐる
045　018　とおい稲妻の明りをたよりに髭をそった
061　178　妻も子もなく、この広い都会の片隅で、
062　061　ひとりの妻と住み家畜などを飼ってみたくなったのです
145　026　雲は低く垂れ　グラナダの暗い夜に稲妻が走っていた」
148　004　南国で農業に専念し、妻と離別してから、
155　039　とつぜん妻が裏切り
160　016　闇をつらぬく稲妻と烈しい豪雨の中から新しい発見のように甦ってきた
160　055　妻も子もなかったかれは　タイムズ・スクエアに近い安ホテルの一室に住み

184　012　日本人妻の間にできた子供である

つまずいて　躓いて
141　009　躓いていたら、縄が切れて奈落におっこっちちゃったのよ……

つまだち　爪立ち
029　012　だが風から逃げもせず爪立ちをして

つまった
008　011　クビれてむらさき色になると　煙のつまったパイプを
008　016　金魚みたいにじっとして　水のつまったガラス鉢の中
160　018　観客のいっぱいつまった劇場で　司会役の若い男から

つまった　詰まった
112　022　寝床のぬくもりでほてった身体を　詰まった路面電車に積みこんで

つまって
053　007　わたしのからだのなかに黄昏がいっぱいつまって
089　017　人々があつまっている橋や

つまって　詰まって
061　089　生が一ぱい詰まっている
061　091　死が一ぱい詰まっている」

つまらなかった
150　024　自分の書いたものがまるでつまらなかったことである。

つまるところ
167　014　つまるところ神経の問題だが

つまんなそう
014　004　つまんなそうにポツンと鳴ってから

つみ　罪
034　009　罪の匂ひのするドアの背後では
057　004　いちどは犯罪許可証を懐中にして
057　033　罪によってうまれ
061　110　どれだけたくさんの罪が心のなかに閉ざされているかを。
061　199　わたしにはまだ罪が足りないのですか、
065　022　罪の記憶のうせぬうちに」やがて
071　040　風よ吹け　われらの罪の消えぬうちに！
092　012　あの罪は甘かったが
093　017　かれの手足がはなれ罪もまたはなれてゆく

106　039　かれはじぶんを憐んではならない　その罪がいかに深くとも
113　032　罪の負担を軽くしようと
136　018　やさしさなんて罪なのに
158　017　罪びとのやさしさがあって
158　020　自然にたいして有罪でない人間はいない
167　032　いかなる罪悪も存在しないかのようだが
192　024　これが罰か、太陽と海を呪ったことの？　たった一度の空想の罪にしては、酷すぎる報いではないか！

つみ　積み
112　022　寝床のぬくもりでほてった身体を　詰まった路面電車に積みこんで
167　050　至るところに積みながら

つみこんで　積みこんで
112　022　寝床のぬくもりでほてった身体を　詰まった路面電車に積みこんで

つみびと　罪びと
158　017　罪びとのやさしさがあって

つめ
024　002　脳髄は青く透明である　ざわめきの聞こえる孔には栓をつめ
037　020　すべてをみつめる生きものの眼が
039　005　ただ壜のようにつめたい気体がゆれる
041　055　みんなは黙った　眼を閉ぢ眼を開き　膝をみつめて
041　073　パイプに煙草をつめる
041　146　孤りぼっちで火を見つめているだらうと
047　009　頬骨がつめたい空気のなかで尖ってくる
052　019　あなたの未来の指輪が青い光をあつめ
053　046　墓地のしめった黒い土をみつめながら
054　037　Mよ　いまは一心に風に堪え　抵抗をみつめて
054　121　いまは自我をみつめ微かなわらいを憶いだす
055　062　頸輪ずれしたおれの咽喉につめたい剃刀をあてる
061　196　暗くなってゆく運河を見つめています。
066　013　つめたい風が吹いていった。
069　023　つめたい風の薄刀のナイフは
073　020　大いなる積乱雲のさけ目をみつめた
083　015　空を追いつめて　ここまでくると
083　017　高いところへ追いつめられて
086　001　つめたい鏡のうえを吹く
086　002　つめたい海の風
087　006　じっと食器の底をみつめたまま
091　007　秋のつめたい空気をひきさく
093　015　蛇が隠れたエデンの樹を一心に見つめる
098　025　ぼくはまぶしい「無」の下で自分の手をみつめる

100　007　みんなは黙った　眼をとじ眼をひらき　膝をみつめて……
101　051　頭上で枯れ枝がうごき　つめたい空気にふれるたびに
108　018　再び荒れてくる海を見つめている
124　033　つめたくなったコーヒー・カップの岸辺に
151　009　月々の出費は切りつめて約六十万
152　036　なんと無邪気な悪魔のやつめ！
153　011　ひたすら切岸をのぼりつめると

つめ　爪
003　006　震へてゐる爪に霧がかかる
029　012　だが風から逃げもせず爪立ちをして
047　008　頭上で屋根を剥ぐ不気味な爪の音……
094　007　ない蹴爪で砂をけって羽搏いているテント
106　021　かれの指の爪貝は　恋人たちがしゃぶりたがるほど美しい
143　017　いつまで爪を研ぐのか

つめたい
039　005　ただ壜のようにつめたい気体がゆれる
047　009　頬骨がつめたい空気のなかで尖ってくる
055　062　頸輪ずれしたおれの咽喉につめたい剃刀をあてる
066　013　つめたい風が吹いていった。
069　023　つめたい風の薄刃のナイフは
086　001　つめたい鏡のうえを吹く
086　002　つめたい海の風
091　007　秋のつめたい空気をひきさく
101　051　頭上で枯れ枝がうごき　つめたい空気にふれるたびに

つめたい　冷たい
019　005　白い大理石はやはり冷たい
041　049　あなたは冷たい石段を降り
041　091　息はたえ　冷たいアスファルトの上に落ち
053　013　姉さんのかたみの水晶の腕輪がわたしの冷たい手錠で
060　014　高貴な冷たい戦慄を感じているにちがいない
062　024　わたしはこの世ならぬ冷たい喜びに慄えている
064　008　暗い過去と冷たい記憶がふれあった。
065　008　明るく笑っていた。その冷たい、声のない笑いは
070　050　なんという冷たい手をしているの
070　054　誰です？　冷たい空気の手で、
071　020　冷たい死の手が
083　013　また冷たい風が吹いてきて
089　021　すると少年の冷たい呼吸で
108　029　冷たい涙が宿るのだ
112　006　生きてるにしちゃ　冷たい手だね

122　004　最初の冷たい雨がきた
128　017　冷たいねえ　この街は
128　066　冷たい水のようなもの」か
143　006　冷たい汗をかく……
148　020　太陽の冷たい一瞥の下で、
152　016　冷たい水色のけむりが立ちのぼる
153　008　冷たい鋼の風となり
165　036　子のいない冷たい歓喜に
180　052　とびきり冷たい夏の訪れである

つめたく　冷たく
061　165　夜の環が冷たくかぶさってくる、
098　008　「ビールが冷たくて、とてもおいしいよ
114　010　冷たくなった珈琲カップのさざ波に……
166　027　かれが冷たく呟く

つめの　爪の
047　008　頭上で屋根を剥ぐ不気味な爪の音……

つめる
037　020　すべてをみつめる生きものの眼が
041　073　パイプに煙草をつめる
093　015　蛇が隠れたエデンの樹を一心に見つめる
098　025　ぼくはまぶしい「無」の下で自分の手をみつめる
153　011　ひたすら切岸をのぼりつめると

つめる　詰める
174　024　ダメを詰めるような毎日を送りながら

つもり
053　061　わたしの髪に　わたしの肩に　落葉はしずかにつもります
150　016　私自身は、かなり正直な自画像のつもりだった。
164　015　ずるい世渡りをするつもりはないが

つもります
053　061　わたしの髪に　わたしの肩に　落葉はしずかにつもります

つゆ　露
039　026　露が落ちてきて
133　027　野末の朝露
139　003　吹きさらしの露の寝ざめの空耳か
170　014　蓮の葉の上に大きな露の玉が乗っていて
171　017　わずかに雨露をしのぐ庇の下から

179　030　ナイフの刃には一滴の露が宿る、と。

つよい
106　033　鳥の巣型の髪のカットに　度のつよい眼鏡を糸でつるして
167　002　風のつよい日だった

つよく　強く
041　130　あなたの意志はそれほど強く　それほど果敢ない
106　044　すべての生きもののうちで　最も強くてしなやかな骨だ
146　061　屋根を叩く雨音がひとしきり強くなって
181　013　風がめっぽう強く
188　077　風も強くなってきたようだ。

つよくて　強くて
106　044　すべての生きもののうちで　最も強くてしなやかな骨だ

つよさ　強さ
162　002　弦の強さで

つよすぎ　強すぎ
062　059　母なる海と太陽の光りが強すぎます

つらなる
046　024　雷とともに海へ出て　空はつらなる水平線をはしり

つらぬいて
081　013　何千年の闇をつらぬいて真赤な雲の火柱がたち

つらぬき
150　030　これは、私だけが「虚構の個性」をつらぬき、偽善の間道をくぐりぬけて、

つらぬく
054　021　「僕たちは都市をつらぬく濁った河にそって
160　016　闇をつらぬく稲妻と烈しい豪雨の中から新しい発見のように甦ってきた

つられた　吊られた
127　005　吊られたユダヤ人のように

つりあう　均合う
162　023　かれの死が均合うのは一桶の汗か

つりあって　均合って
147　008　死と生が秤のうえでゆれながら均合っていた

つりいと　釣糸
150　014　一匹の魚さへ住んでゐない沼に釣糸を垂らしてゐる影だけが生きてゐる……」

つりかわ　吊皮
124　026　吊皮につかまる両手をポケットに入れたまま

つりざお　釣竿
190　013　時には朝早く釣竿を持ち

つる　鶴
065　032　ひと群れの鶴にまじって、永遠の刑罰を

つるされた　吊された
025　047　樹には吊された肉体がある

つるして
106　033　鳥の巣型の髪のカットに　度のつよい眼鏡を糸でつるして

つれさって　連れさって
059　003　明るい海岸のボートへ連れさっていった

つれて
014　023　花のある音楽につれて
028　016　熱度計の上昇につれて
061　042　子供をつれて一日だけの安息に、
084　035　唖でせむしの影をつれて

つん　積ん
007　008　多孔質の雲の間からトンボの眼のやうに碧く　アスピリンを積ん

ツー　(「ツー」)
128　028　「リーチ」に「ツー」はつかないはずだよ

て　手
010　016　新しい射手よ　一本の樹のみを監視するのは賢明ではない
010　020　手をあげた少年の五指の間から
013　016　ネムの手に捕かまった
014　001　ガラス窓から白い手たちが
014　005　手を当てて耳のネジを検査してゐるのを
018　007　手袋を脱ぎ
020　002　バラ色の手に名刺が
025　011　その手その足は毛のやうに

025 020 わづかにさわぐ葦の触手を見る
025 042 菫色の手袋は
026 018 樹液の触手は
026 031 植物の手の蔭へと移行する
026 034 わたしの手の中にある
027 004 手袋をはめた右手のみが動き
028 043 測量する技師の手の影に従って
030 012 ドアの把手に手がかかる
039 071 手がかげる
041 033 優しい眼鏡や柔かい手袋の明日の方まで湿してゐる
041 044 怪しい手紙には翅が生えてゐたのかも知れぬ
041 108 あなたの巨大な手から降ってきた
045 021 ふりそそぐ雨のみだれも手にとるやうだ
046 034 同じ木の手摺につかまり　同じ迷宮の方向へ降りてゆく
046 046 いくつもの扉のやうに行手をさへぎり
048 017 盲目の手が
050 008 手紙の封筒を裏返すようなことがあった。
051 028 執拗に手が把手（ハンドル）を求めて痙攣する、
051 038 把手のない扉。
053 013 姉さんのかたみの水晶の腕輪がわたしの冷たい手錠で
054 005 僕らの行手は暗いのだ」
054 052 手をあげると　人形のように歩き出し
054 053 手を下すと　人形のように動かなくなる
054 069 君は君自身の汚れた手で
054 135 眉をひそめて手のなかのカードを隠してしまう
054 150 僕の手で捩られて
058 037 サラリーマンや労働者を相手に
059 002 わたしの母の手をひいて
061 077 溺死人の行列が手足を藻でしばられて、
062 029 わたしの手から鉛筆をとりあげるように
063 008 その手の黒さがぼくをぞっとさせる
068 004 安っぽい郵便切手には
068 020 手まねきする白い波を見た
068 035 手紙を書いた
070 044 はてしない壁を手さぐりして、
070 047 窓掛をひっぱるのは空気の手、
070 050 なんという冷たい手をしているの
070 054 誰です？　冷たい空気の手で、
070 055 骨の手風琴を鳴らすのは。
071 020 冷たい死の手が
072 018 結局のところわれわれの期待も、かれらの手綱さばきで
072 027 ーーどよめくスタンド、沸く観衆、拍手、喚声
075 012 悪魔の手におちるかもしれない

076 001 なぜぼくの手か
076 013 きみの肩にかけられたぼくの手の
077 039 やさしい女のひとの手がおかれている
080 006 戦いによって　両手をうしなったきみは
080 009 手ごたえもなく　切れた帆綱から
080 014 求めても手がとどかなかったもののために
080 020 きみはきみの失われた両手を高くあげる……）
084 038 かれにかわって上手にすすり泣くのですよ
088 026 椅子のうえで寒さにふるえているぼくの手足を
088 031 おまえは小さな手で
089 005 橋のうえで　石の手すりにもたれ
089 025 編物をしていた手から毛絲の玉を落しました
090 009 人間が自然に手をつける方法は……
093 017 かれの手足がはなれ罪もまたはなれてゆく
098 017 飲み台のうえのウェイトレスの手は
098 020 その白い手のように明るく清潔にみえる
098 025 ぼくはまぶしい「無」の下で自分の手をみつめる
101 058 ぼくの行手ですべての国境がとざされ
102 022 いちど手をはなしたら
103 025 それは波と風と運命の手にまかされた
106 016 無事に生きのびてきた　この下手な構図は
112 005 おれを見るな　さあ握手
112 006 生きてるにしちゃ　冷たい手だね
112 029 眼や耳や手足をなくした不幸な犠牲者に何をしてやったか
112 039 さびしい酒場の女たちを相手に
113 002 （拍手）
113 004 （嵐のごとき拍手）
113 006 拍手と嵐のごとき拍手しか
113 009 拍手から嵐のごとき拍手へと
113 036 「自殺します」と手紙を書いたら
113 046 （まばらな拍手　沈黙）
113 050 修正に修正をほどこす整形手術で
117 005 ひたいに手をあてて
124 009 他方がそれを買う（ゴムの手袋をはめて）
124 022 指名手配の一人は
124 026 吊皮につかまる両手をポケットに入れたまま
126 002 侵略的な人類の手のとどくところにあったら
128 001 大手町の　矩形の空に
131 005 手と膝をついて歩くこともあった
138 011 手に手をとって逃げたのに
139 002 すすきの穂が遠くからおいでおいでと手招く
145 003 何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに
146 039 同じようなドアが行手に

146 051 おどおどしているわたしの手をとって
148 040 戦死者の手足がぐるりと輪になり、
150 073 きみから送られた昔の雑誌を手にして、なつかしい面影に出会い、
151 044 ずいぶん手間暇のかかる男になっている
155 014 両手でつかんでうしろにやってしまえば
155 018 お焼香は手早くすます
155 030 一日を上手に処理する
158 032 やわらかい手のひらで
160 011 たまたま手にしたパーチザン・レヴュウ誌の最近号で
161 012 たが　おのれの裁き手は
166 015 ますます下手になる詩に頭をひねったりしながら
167 039 ソロフキの囚人の手は
167 042 手の奇蹟を信じたことがあった
167 079 黙って風に手を振って
170 007 蜘蛛の巣を払うような手ぶりをすると
170 017 神慮の手で他界から運ばれ
174 026 いまでも下手な碁打ちであるぼくは考える
176 023 誘惑の手はあくまで白く
177 015 手をにぎりしめて
179 021 美しいグラスを手にして
180 001 手紙のなかから
180 010 「御手紙の内容、何のことやら判りません」なら「女の子の心理」がどうだってことも関係ないじゃないですか？
180 030 どこかで勝手に出あうものである
181 011 十八の小娘を相手に
186 047 理解されないと思うのは傲慢、相手に対する侮辱です！
188 001 いつか、きみから受取った手紙に、
188 018 手術をせねばなるまいと、気にかけています。
188 020 ファン・ゴッホ展があった時の画帳が、手もとにあって、
188 058 ところで、きみは同じ手紙の後半で、
188 071 きみの手紙は、たまたま、仕事机の片隅の、
189 031 皺の手がのろのろ動き
189 037 ゆっくりと身をかがめて手をのばす

であう 出会う
077 003 神の復活に出会うよりもたやすい
100 079 ぼくたちが出会う場所は

てあし 手足
061 077 溺死人の行列が手足を藻でしばられて、
088 026 椅子のうえで寒さにふるえているぼくの手足を
093 017 かれの手足がはなれ罪もまたはなれてゆく
112 029 眼や耳や手足をなくした不幸な犠牲者に何をしてやったか
148 040 戦死者の手足がぐるりと輪になり、

であふ　出遭ふ
031　007　雲の多い日没の空に出遭ふ

であわず　出遭わず
192　010　どこまで行っても、一本の松にも出遭わず、平坦な黒い砂地がつづいているばかりで、

ていえん　庭園
039　004　この森の庭園には

ていきふつうよきん　定期普通預金
151　008　貯金は定期普通預金合わせて七百万に足りない

ていこう　抵抗
054　037　Mよ　いまは一心に風に堪え　抵抗をみつめて
101　038　奥地や海洋で　抵抗する住民をうちころす必要はない
142　119　非道な暴力に抵抗して　自らの犠牲と死の覚悟で第一線に立ち

ていこうして　抵抗して
142　119　非道な暴力に抵抗して　自らの犠牲と死の覚悟で第一線に立ち

ていこうする　抵抗する
101　038　奥地や海洋で　抵抗する住民をうちころす必要はない

ていこく　帝国
101　008　空中の帝国からやってきて

ていしゃば　停車場
071　007　日曜日の停車場に
071　014　日曜日の停車場で
072　062　群集は押しあいへしあい停車場めがけて
089　037　停車場へいそぐ通行人の影にまぎれ

ていせいじだい　帝政時代
142　016　帝政時代よりソビエト体制下で四倍も悪化している

ていてつ　蹄鉄
158　009　馬と蹄鉄の関係だ
158　012　蹄鉄が馬を終るとは

ていねいに　丁寧に
006　017　フンと丁寧に洟をかみました

ていぼう　堤防
125　006　いつか堤防はきれるのだ

ディンドン言語
128　046　バウワウ言語　ディンドン言語　プウプウ言語

テエブル
035　026　乾いたテエブルと

てがかかる　手がかかる
030　012　ドアの把手に手がかかる

でかけ　出かけ
071　008　どっと家族づれで出かけてゆく人たちをみかける
093　014　これから壁のむこうに出かけなければならない
103　014　ヴェニスとかパリーへ出かける
166　020　きみはスーパーマーケットに出かけ

てがみ　手紙
041　044　怪しい手紙には翅が生えてゐたのかも知れぬ
050　008　手紙の封筒を裏返すようなことがあった。
068　035　手紙を書いた
113　036　「自殺します」と手紙を書いたら
180　001　手紙のなかから
180　010　「御手紙の内容、何のことやら判りません」なら「女の子の心理」がどうだってことも関係ないじゃないですか？
188　001　いつか、きみから受取った手紙に、
188　058　ところで、きみは同じ手紙の後半で、
188　071　きみの手紙は、たまたま、仕事机の片隅の、

てき　敵
004　008　素敵なプランを考へはじめた
054　074　詩人は不敵な薄笑いをもらし
085　016　銀メッキの光りをうかべた不敵な男だ
112　015　敵にむかい黙々と出撃し　一夜あければ骨となる
112　028　敵からどんな施しを受け　どんな賠償を支払ったか
128　043　愛や敵意が目標にうまくとどいたためしがあるかい？
156　015　とても敵わない
164　022　沈黙は共通の敵だから
173　051　死を知らないなんて素敵ではないか

てきい　敵意
128　043　愛や敵意が目標にうまくとどいたためしがあるかい？

できごと　出来事
058　048　今日の出来事を

できしにん　溺死人
061　077　溺死人の行列が手足を藻でしばられて、
061　098　溺死人が声もなく天にむかって叫ぶのを……

できだか　出来高
183　019　今日の出来高と終値を前にして

できる　出来る
041　151　だがあなたは僅かに口を利くことが出来る筈だ
046　042　ほっそりした川のやうに渝らぬ月日を行くことが出来る

でぐち　出口
028　030　トンネルの入口はトンネルの出口へと
051　035　出口を求める熱っぽい瞳で
054　153　出口のない部屋から
070　042　ぼくは見えない出口をさがすように、
072　063　ひろい出口から流れだす
146　037　出口がさっぱりわかりません

てごたえ　手ごたえ
080　009　手ごたえもなく　切れた帆綱から

てじょう　手錠
053　013　姉さんのかたみの水晶の腕輪がわたしの冷たい手錠で

デス・マスク
051　024　ぼんやりとデス・マスクが肉眼に見えてくる。

デスク
019　004　デスクの上に植ゑてみたが

てすり　手すり
089　005　橋のうえで　石の手すりにもたれ

てせい　手製
145　003　何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに

てつ　鉄
006　011　泥まみれの鉄兜に水を汲んで
009　003　鉄砲百合が咲いたといふニュウスで

028　051　鉄道信号機の痙攣とともに
041　021　錆びた鉄柵に凭れる小男の悲哀よ
055　018　疾走する鋼鉄の船が
070　023　鉄でもなければ、木でもなく
081　021　血と泥と鉄のしぶきをはねあげて
097　007　あなたは暗い鉄格子の中に、永遠に繋がれるだろう。
099　009　……開くこともなく錆びてしまった鉄の門
128　023　鋼鉄六倍　自動車十五倍
148　007　地方都市で鉄工所を経営していた旧友が、
158　009　馬と蹄鉄の関係だ
158　012　蹄鉄が馬を終るとは

でっかく
128　020　でっかくなっちまったんだ　今では

てつがく　哲学
054　030　「そこにはどんな科学が　哲学が
142　056　異端者や地下の作家や哲学者を根絶やしにする
160　025　哲学的な詩をひどく陰気な声で吟誦する

てつがくしゃ　哲学者
142　056　異端者や地下の作家や哲学者を根絶やしにする

てつがくてきな　哲学的な
160　025　哲学的な詩をひどく陰気な声で吟誦する

てつかぶと　鉄兜
006　011　泥まみれの鉄兜に水を汲んで

てつごうし　鉄格子
097　007　あなたは暗い鉄格子の中に、永遠に繋がれるだろう。

てつごうし　鐵格子
028　009　哀訴の蒸気を吸殻とともに皿の上に拾てる三重の硝子の向ふの鐵格子の中の

てっこうじょ　鉄工所
148　007　地方都市で鉄工所を経営していた旧友が、

てっさく　鉄柵
041　021　錆びた鉄柵に凭れる小男の悲哀よ

てつじんふう　哲人風
185　007　慰めを与えた哲人風の音楽家の

190　011　東洋哲人風の生活が

てつどう　鉄道
028　051　鉄道信号機の痙攣とともに

てっぺん
152　029　てっぺんに火をつけると

てっぽう　鉄砲
009　003　鉄砲百合が咲いたといふニュウスで

てっぽうゆり　鉄砲百合
009　003　鉄砲百合が咲いたといふニュウスで

でて　出て
006　010　少女が碧い眼をした人形を抱へて出てきたが
009　009　だが鶯は出てこない
020　012　ドアを抜け出て
031　025　ドアの近くへ辷り出て
041　029　そしてあなたは広い眺めの外へはみ出てゐる
041　082　廊下へ出て
041　090　ドアから出て一つの街角をまがっただけで
046　024　雷とともに海へ出て　空はつらなる水平線をはしり
054　075　「出てゆこう　とざされた部屋の中から
078　003　あらゆる船が港から出てゆきそうな
078　011　こうして海へ出てみると
108　011　おおきな追憶が港から出てゆくのに
125　020　恐怖で赤く熟れた月が廂に出ている
128　030　腹を立てて出ていく者
128　091　一番電車が出ていった
129　007　雲の上までつき出ていった虚栄
152　002　悪魔が出てくる
155　040　子が叛逆して出ていくのを
160　056　その日は夜どおし起きており　朝の四時にゴミを捨てに廊下へ出て
167　025　荒れた裏庭に出て
183　011　家路をいそぐ人も買物に出てきた人も

でてきた　出てきた
006　010　少女が碧い眼をした人形を抱へて出てきたが
183　011　家路をいそぐ人も買物に出てきた人も

でてこない　出てこない
009　009　だが鶯は出てこない

てのとどく　手のとどく
126　002　侵略的な人類の手のとどくところにあったら

てのひら
128　062　やつはてのひらをひらひらさせて
177　012　てのひらほどの丘に

てのひら　手のひら
158　032　やわらかい手のひらで

てのひら　掌
002　006　ふるえるセルロイドの掌
005　019　掌ほどのサファイヤがある
019　003　掌は紅い薔薇の花を
170　023　ぼくの痩せた掌に詩の玉を乗せてくれたら

ではいりする　出はいりする
023　020　澄んだ褐色の眼を出はいりする憎悪の炎よ

てばやく　手早く
155　018　お焼香は手早くすます

てぶくろ　手袋
018　007　手袋を脱ぎ
025　042　菫色の手袋は
027　004　手袋をはめた右手のみが動き
041　033　優しい眼鏡や柔かい手袋の明日の方まで湿してゐる
124　009　他方がそれを買う（ゴムの手袋をはめて）

てまねきする　手まねきする
068　020　手まねきする白い波を見た

てまねく　手招く
139　002　すすきの穂が遠くからおいでおいでと手招く

てまひま　手間暇
151　044　ずいぶん手間暇のかかる男になっている

てもと　手もと
188　020　ファン・ゴッホ展があった時の画帳が、手もとにあって、

てらされて　照らされて

038　025　壁が照らされてしまひ
146　014　昼夜灯に照らされて

てらした　照らした
065　035　感覚の闇を照らした。樹々が小枝を打ちならし

てらしだし　照らしだし
056　021　ときに河明りが彼の額を照らしだし

てらしだす　照し出す
104　009　無慈悲な月の光が　照し出す

てらしだす　照らしだす
039　082　西方の窓を照らしだす

てらして　照して
095　013　近くの闇を照していた
142　118　過去数世代の経過に照しても

デラシネ
151　023　どうしようもないデラシネの

テラス
005　026　オリーヴのガラスのテラスで

てり　照り
041　004　やっぱり同じ陽が照り

デリケート
085　011　きみは心よりもデリケートなうわべをもち
095　020　死にはデリケートな思いやりがあった

でる
012　025　象牙の足がでる
040　022　壜は壜の中から滑りでる
094　003　とある松林をぬけて海へでる
112　012　鍵穴や本のあいだにしこたま隠しこんでる狐め

デルモア・シュワルツ
160　012　デルモア・シュワルツが一九三八年に書いた短篇を読んだ

テレタイプ
128　077　テレタイプのように

テレビ
126　011　もうすぐテレビの画面に吸いよせられるだろう

テロル
136　012　洞窟の胎内のテロルの夢

てん　天
005　024　おや　天使が泣いてゐる
010　010　不愉快な天候の有機的関連の結果である
010　017　老いぼれた天体は歯がぬけてゐる
017　016　蛞蝓が樹から昇天するのを待つかね
017　018　眼が白くなって天を睨めたが
017　023　ああまるで天国でございますと
017　040　なむ天にましますキリスト様よ
030　004　無造作な天体には樹木が茂る
036　028　ばんやりしていると嘴と天使の槍で
039　142　わたしの天は奈落へ崩れおちよう
049　001　天井の蜘蛛が私の顔にのりうつったようだ、
054　083　見よ　あばかれた社交術の快楽と有頂天とを
058　020　破れた天井の青空が
061　098　溺死人が声もなく天にむかって叫ぶのを……
061　154　あなた自身が見すてられた天上の星であることを……
061　191　いつも天使の悪い呼吸で曇っています。
065　024　天使は、夜の戸口から呼びかけた。
069　007　天国というところがあったんだって
070　049　天井からのぞくのは霧の顔。
072　002　天気予報が気がかりだった日曜日
079　014　呪われたかれらの天を
084　022　いともお上品な天使たちが
084　023　天国の階段からおりてきて
085　004　天の一角にせばめられた都会の空である
090　002　どんな天をいただき
090　005　天を伐り倒し
090　007　方三尺五寸の天地をつくるために
101　017　ぼくはすこしずつやぶれてゆく天幕のかげで
116　013　非時の曇天に
121　004　天気は神さまに　世界は新聞に
123　008　貧しい者の天国にも……
126　008　と楽天的な科学者が言った
126　016　いったいダンテの至聖天とか
127　021　炎天下……
128　052　天候に気をつけなさい

128　083　梢の天の　網目から
133　026　暗天の星にみちびかれて
135　008　最も遠い天の梢へ
137　009　天地をさかさまにして
140　018　やがては喪心の天に至る
141　003　天までも一緒に？
145　002　不信の者の天国に対して
150　078　そちらでは気分的にパッとしない天候がつづいているそうですが、
153　015　ゆっくり昇天する
154　017　天地をゆるがせて
160　065　　フンボルトの天才　は四十歳で燃えつきてしまい
167　055　柱に梁に天井に床に耐性を与え
169　014　天使の声をつまらせていた
169　019　満天の星からの合図に
170　019　やがては星に昇天していく光の粒は
187　001　天気はいいが
189　034　シャンデリアの天井に大きくひびき

てん　展
072　052　すべては予想どおり展開する……）
188　020　ファン・ゴッホ展があった時の画帳が、手もとにあって、

でんか　殿下
128　011　サングラスをかけた殿下に

てんかいする　展開する
072　052　すべては予想どおり展開する……）

てんかすれ　点火すれ
152　015　くだんのタバコに点火すれば

てんき　天気
072　002　天気予報が気がかりだった日曜日
121　004　天気は神さまに　世界は新聞に
187　001　天気はいいが

てんきよほう　天気予報
072　002　天気予報が気がかりだった日曜日

てんこ　点呼
148　047　数を調べる最後の点呼だった。

てんこう　天候

010　010　不愉快な天候の有機的関連の結果である
128　052　天候に気をつけなさい
150　078　そちらでは気分的にパッとしない天候がつづいているそうですが、

てんこうして　転向して
150　046　「誇り得るもの」を失ったとさとったとき、彼はこの世から転向していったのだ。

てんごく　天国
017　023　ああまるで天国でございますと
069　007　天国というところがあったんだって
084　023　天国の階段からおりてきて
123　008　貧しい者の天国にも……
145　002　不信の者の天国に対して

てんさい　天才
160　065　フンボルトの天才　は四十歳で燃えつきてしまい

てんし　天使
005　024　おや　天使が泣いてゐる
036　028　ばんやりしていると嘴と天使の槍で
061　191　いつも天使の悪い呼吸で曇っています。
065　024　天使は、夜の戸口から呼びかけた。
084　022　いともお上品な天使たちが
169　014　天使の声をつまらせていた

でんしゃ　電車
011　008　電車が宝石の角を過ぎるとストップし
041　132　自動車や電車が
053　027　遠くにきこえた電車のひびきや
061　100　電車が走っているね
069　040　終電車のレールのひびきは
089　015　高架線を走る電車や
095　017　明るい無人の電車が
112　022　寝床のぬくもりでほてった身体を　詰まった路面電車に積みこんで
124　027　郊外電車の快よい動揺に耐えている
128　091　一番電車が出ていった

てんじょう　天井
049　001　天井の蜘蛛が私の顔にのりうつったようだ、
058　020　破れた天井の青空が
070　049　天井からのぞくのは霧の顔。
167　055　柱に梁に天井に床に耐性を与え
189　034　シャンデリアの天井に大きくひびき

てんじょう　天上
061　154　あなた自身が見すてられた天上の星であることを……

でんしょばと　伝書鳩
091　011　新聞社の屋上たかく舞っている伝書鳩の

でんせつ　伝説
025　023　それは医術の進歩の伝説のやうに
039　148　炎と心の伝説を歌ひ
173　031　それで近代の伝説は消え　象徴は解体する

てんせん　点線
192　021　あやかしとも気づかず、仄かな白い光の点線に導かれ、

でんせん　電線
055　015　電線のかすかな唸りが
058　024　ふるえる電線の街の
060　004　電線がひうひう鳴っていたりする

てんそくぐみ　転属組
148　031　同じ輸送船でスマトラ島に送られた転属組の十三人だった。

てんたい　天体
010　017　老いぼれた天体は歯がぬけてゐる
030　004　無造作な天体には樹木が茂る

てんち　天地
090　007　方三尺五寸の天地をつくるために
137　009　天地をさかさまにして
154　017　天地をゆるがせて

てんで
147　013　此頃ではてんで死のことなど考えやしない

てんてんと　点々と
192　017　よくよく見れば、そこから一米間隔くらいで、白い明りが点々とつづいているのだ。迷う者のために設けられた救急

テント
094　007　ない蹴爪で砂をけって羽搏いているテント
094　021　ぼくの河口はひといきに岸辺やテントや小舟を吐きだそう

てんとう　店頭

183　003　歳末商戦たけなわの店頭を

でんとう　伝統
072　042　（すくなくとも三百年の伝統に従って
188　047　公害を憂えたり、伝統の喪われていくのを嘆くのと同様、

でんとう　電燈
093　002　電燈をつけたまま
170　006　明るんだ窓に光を失った電燈を消し

てんない　店内
166　022　ごった返す店内を物色して歩きながら
183　017　表の灯を消した株屋の店内では

でんぱ　電波
142　029　また　いかなる非難中傷の壁、妨害の電波がぐるりをとり巻いても

てんまく　天幕
101　017　ぼくはすこしずつやぶれてゆく天幕のかげで

でんりゅうそうち　電流装置
142　038　殺人的な電流装置で閉された国境をやすやす越え

でんわ　電話
095　009　妹のところへ電話をかけようとして
098　002　電話のベルが鳴りはじめた
151　028　電話の数字にもふるさとを感じ
174　008　きみと話したくなって電話をすると、
174　010　最後にきみはさりげなく「声を聞かせてくれてありがとう」と言って、電話を切った。
174　011　この三十年間、ぼくはきみに一度も電話などしたことがない、ちょっぴり心が痛み、それはなぜかと考え出すと、疑

テープ
128　071　白いテープがうず高く

テーブル
003　002　華の咲いてゐるテーブル
054　050　僕は毎晩のように酒場のテーブルを挟んで
054　149　テーブルのうえに
054　159　テーブルに凭れて新しい黄金時代を夢みている
108　007　木蔭のテーブル
124　020　（ジャーナリストがテーブルを叩いて怒っている）

ど　度

023 018 怖るべき悲しむべき速度の中に
028 003 緑の影はいつもガラス管によりそってゐた純粋な頭の鈍い速度について
028 005 白い事務所の内側の時計の速度は
028 016 熱度計の上昇につれて
028 050 ただそこに時代の速度乃至歩調が見えてくるだらう
037 010 けものや鳥よりもすばやい身仕度で
068 003 （二度とお会い致しません）
072 049 高速度カメラが
072 058 何百万の人々が、もう一度溜息をつくのだ
075 015 もう二度とめぐりあうこともない
102 008 魂は死んで二度と生れてこないから
106 033 鳥の巣型の髪のカットに　度のつよい眼鏡を糸でつるして
124 024 国際級の背景的速度に陶酔し
138 004 何度殺しても
138 018 ……そんなことは一度もなかった
142 096 極度に不平等な特殊社会組織の
143 005 何度も同じ夢を見て
148 009 かれとは敗戦直後の闇市の近くの旅館で一度会い、
150 012 自己韜晦の癖を或程度まで満足させてくれる。
150 055 こんな創作を今度載せたら発禁にするぞ、と検閲係から脅かされた。
150 063 娼婦の悲惨さを、かなりの密度で正確に捉えたというだけで、
150 072 喪われたら二度と取り戻せないことを忘れてはいないだろうか。
156 020 言葉の純度は低く
160 039 もう一度一人になるために
160 076 制度の春を病むこともなく　不確定性の時代を生きて
164 027 何度でもくり返さなければならない
165 011 何度、声にならない叫びを上げたろう
165 029 カンフルの注射を三、四度射っただけであった
167 049 塵埃のように書籍を衣類を調度類を
174 011 この三十年間、ぼくはきみに一度も電話などしたことがない、ちょっぴり心が痛み、それはなぜかと考え出すと、疑
180 032 一度も出会ったことがない
180 040 何度でも立ちかえらなければならない
186 020 それで今度の西下の印象は？
188 012 毎週一度通いつづけています。
191 013 もう一度 rise and fall
192 024 これが罰か、太陽と海を呪ったことの？　たった一度の空想の罪にしては、酷すぎる報いではないか！
193 018 同じ風景は二度と現れない

ど 怒

013 012 パイプが怒ったのかね
017 008 怒ってゐる沙漠に
029 002 もう歯ぎしりする怒もなく
036 005 それらの悼ましい怒でおれの日記を汚すな

039 101 わたしははじめて怒りといふものをみた
046 035 怒の鎮まりやすい刹那がえらばれて
072 047 怒涛のなかの歓呼、歓呼のなかの怒涛
124 020 （ジャーナリストがテーブルを叩いて怒っている）
160 020 そんな自分に怒りを感じて
191 014 山は怒りに

ど 涛
048 034 かすかにトルソから涛の音がひびく
048 035 涛のたわむれから
054 129 僕は眼をかがやかし涛のように喋べりかける
072 047 怒涛のなかの歓呼、歓呼のなかの怒涛
145 025 スペイン内乱で知ったオーデンもいなくなった
145 028 オーデンはスペイン内乱に参加しなかったというニュースを聞いた
148 030 一の宮海岸の近くの松涛閣に集まったのは、

ドア
020 012 ドアを抜け出て
021 027 ドアを叩けば
030 012 ドアの把手に手がかかる
031 004 音はドアの中でさへ聞えない
031 025 ドアの近くへ辷り出て
032 001 ドアはなかば開いたまま
033 009 盲目はドアの隙間から入ってくる
033 021 おまへをとりまく五つのドアである
034 009 罪の匂ひのするドアの背後では
035 002 南方のドアを開き
035 020 北方のドアを閉ぢて
037 001 ドアの外では
037 006 そしてドアの内には
037 012 わづかなドアの隙間から
038 011 おびただしいドアがあって
039 089 古びたドアを侵し
041 062 ドアを押して
041 070 嵐の音が聞え　ドアが軋る
041 090 ドアから出て一つの街角をまがっただけで
047 003 左右に拡げる黒い蔭！　二重のドア！
066 005 開かぬドアのそとに
096 010 とあるバーのドアを押して入ったと思いたまえ
125 021 密室のドアはどれほど厚くても充分とはいえない
137 013 幾重ものドアを叩いてきた
146 013 壁にドアをならべた廊下が
146 016 ふと遠くのドアに消えた人の

146 019 そのドアに駈けこみましたが
146 026 びっくりしてドアをパタンと閉めましたが
146 039 同じようなドアが行手に
167 004 あおられたドアの開閉音にあわせて

といき 吐息
064 002 町はあたたかい吐息の下にあった。
064 031 町はあたたかい吐息の下にあった、
105 010 女たちの涙か、夕べの吐息か。

ドイツ
057 009 戦争ぎらいのドイツの作家が
184 002 ドイツ系のアメリカ人で

ドイツ系
184 002 ドイツ系のアメリカ人で

といふ
009 003 鉄砲百合が咲いたといふニュウスで
014 012 つまりその隙にといふわけさ
023 003 音もなく日ぐれがきたといふ
028 018 つねに流通する貨幣の翳から起るといふ
037 016 無限といふものが少しづつ暗くなりかけてゐた
039 079 かつて地上に祭があったといふ
039 095 すべてはもはや過ぎ去ってしまったといふ
039 101 わたしははじめて怒りといふものをみた
039 109 誰が道に迷ふといふのか
039 114 そして誰が沈黙したといふのか
041 025 海からやって来たといふ　空を飛ぶ藻に乗ってきた人よ
041 105 一枚の紙片のなんといふ重さ
045 009 いつか一つの息ながく絶えぬといふ

とう 党
142 094 オーエルの未来小説に描かれた　党　は

とう 塔
003 001 カレンダーに音楽が流れ
005 003 タンポポの花粉をつけて
007 001 ジャンクの帆が蝙蝠のごとく羽博いて　ランプの虹がひろがる
007 006 古風な鐘は藍をにじませて鳴る　曇る　動かない土絵具のカンヴ
007 008 多孔質の雲の間からトンボの眼のやうに碧く　アスピリンを積ん
008 005 ジライ花を観賞するときも　空にはポンポン花火が上
009 001 コンクリイトの屋根の上

016 010 雲の島からエンジンが響き
021 008 木製のベンチ
021 018 ぼくはベンチに凭れて
022 005 黒いトンネルの中で
023 008 トンネルの中で流れださない
025 003 黒いトンネルに海の響をきくところ
025 021 室内には薄明りのランタンが
025 031 ヒヤシンスの首を飾る
025 033 ゼンマイのやうに跳ねてゐる雲
026 025 黄ろいダイヤモンドのやうに光り
028 030 トンネルの入口はトンネルの出口へと
034 015 あやまってランプを落し
035 028 誰かくらい巨大なランプを掲げた
037 021 ランプよりも巨大な思い出の下で
039 107 ランプのやうに
051 028 執拗に手が把手（ハンドル）を求めて痙攣する、
054 064 ウインストンがいなくなったから
054 137 護衛つきキングと慰めをあたえるクインの価値とが
054 142 反コロンブスはアメリカを発見せず
054 151 ちぎれた青空のように飛んだ一枚のハンカチーフ
055 035 空虚なメランコリイの谷間にふりつづいている
057 005 とおいシンガポールの街を歩いたこともある
057 012 ぼくはエトランゼであったし
058 033 指輪や装身具の飾ってあるショーウィンドをのぞいて
064 010 やくざなブラス・バンドが歌っていた。
072 006 高いスタンドに立って
072 027 ーーどよめくスタンド、沸く観衆、拍手、喚声
072 067 誰もいなくなったスタンドに立って
073 026 毛脛を出したフランス人の水先案内は
074 003 夢にみたフランスの街が
074 009 フランスの悩みは
084 013 マリリン・モンロウのせつない性のささやきーー
084 017 アナウンサーの明るい声はこたえる
084 024 「今夜あたし　あのギャングに
085 025 インクや涙や食塩で錆びたりしない
091 015 きみの欲望は夕陽を浴びてビルディングの林に落ちてゆく
094 007 ない蹴爪で砂をけって羽搏いているテント
094 021 ぼくの河口はひといきに岸辺やテントや小舟を吐きだそう
095 012 まがりかどにオレンジの外燈がひとつ
097 010 あのブロンドの若い男は、動物になる夢を持たなかったろう。
097 012 サアカスでブランコをする男は、
098 001 カウンターのうしろで
098 023 ブランディの血を燃えたたせる火

098 027 青空にくっきり聳えて輝いていた五つの尖塔
099 010 ぼくの記憶は思いがけない不幸のシークェンスで翳ってくる
100 021 やくざな渡り鳥のようにレインコートを肩にかけて
100 031 ぼくはハピーエンドを起点にして
100 061 ペイヴメントには水玉模様の少女があふれ
100 063 高いビルディングは動かぬ影をつくり
105 011 九月ポーランド、十月スエズ、ハンガリー、
106 009 悪い空気のなか　鳥類のコンベンションが重んじられる
106 012 永遠プラス五分間を　「早く早く」とせき立てている
107 003 尖塔の鐘の音も若かった
108 002 ロッカーの戸がバタンバタン
108 006 白いしじまのハンモック
108 016 恋人たちがベンチに坐って
108 017 おとなしくサンドイッチを食べながら
114 003 真夏のコンクリートの壁にはりついた
120 002 ベンチにもたれていると
124 003 三人の男は　いまはトンズラ
126 016 いったいダンテの至聖天とか
127 017 タンポポのように咲いたこともあったか。
127 023 黄ろいタンポポを黄色にしたものが
128 002 神経のアンテナを　さか立てて
128 011 サングラスをかけた殿下に
128 013 優雅なフランス語と
128 033 「シンブン・アレー」
128 046 バウワウ言語　デインドン言語　プウプウ言語
128 047 元副大統領ハンフリー氏は
128 087 アンテナにひっかかっている
129 006 コンクリートの林から
129 017 まぶしい食卓のワイングラスの影と
132 013 塔の愁い　草の雲いずこ
133 014 ゾンビーたちはいたるところにいたが
142 013 マルチェンコの証言によれば
142 062 その著書をフランスで刊行した一九四二年生れのブコフスキーは
145 003 何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに
145 004 はいるとつぶやきながら黒い色の真実やめったに売れないエンジェルの絵を売っていた」
145 009 そこにもあったトーモロコシの毛のそよぐ丘陵をエンジェルがうまれるのに充分な広さ
145 010 とエンジェルと同じ肌色の奥まで開拓して見せていた
145 011 「忘れはしないという虹色のラヴ　ソングが聞えていた
146 048 「ご心配なく（ドント・ウォリー）
147 020 口笛を吹きながらするシャドー・ボクシングが死のレッスン。
148 018 極限状況のナンセンスに、
148 051 若い男女でいっぱいのフラワー・センターに立ちよって、
152 001 セブンスターの箱をはじくと

155　035　自己のエクステンション
160　034　このハプニングに聴衆は喝采する
160　041　十四世紀のスコットランドの詩を口誦さみながら
160　065　　フンボルトの天才　は四十歳で燃えつきてしまい
160　066　かれの名は雑誌やアンソロジーでさえめったに見かけなくなる
160　069　エゴセントリックで報復的だったためか同僚にはうとまれていたらしい
164　031　きみの花柄のパンティを脱がせるためだったら
165　029　カンフルの注射を三、四度射っただけであった
170　016　ダイヤモンドのように輝やいていた
171　014　はぐれペンギンの男は思う
173　045　スプリングの毀れたベッドに身を投げて
179　004　竹籠からとり出すリンゴには
179　019　ドリームランドのスイッチを切り
183　002　ジングル・ベルが鳴っていて
184　004　フランス系アメリカ人と横須賀で結婚し
184　011　アイルランドとスペインの混血の男と
185　003　アナウンサーの声は平静で
185　004　何のコメントもなかったが
189　034　シャンデリアの天井に大きくひびき

どう　胴
022　007　裸の胴は液体に近く
153　009　うらわかき女の胴を斬れよ

とう　問う
059　012　卑しい心に問うてはならぬ
089　004　「あなた　どこにいるの？」と問うたら
110　012　くりかえしくりかえし問うてみるーー

どうい　同意
142　025　秘密警察の認知　もしくは同意なくして

とうか　燈火
065　006　ゆれる燈火と死魚の影があるばかりであった。
133　003　人間蛾は街の燈火に誘われる

とうき　陶器
090　014　この支那の陶器のまわりの

とうきょう　東京
057　029　東京の街角では
058　029　これがほんとうの東京の街路ですが
145　027　街のまぶたは重く垂れ　東京の暗い夜に信号燈が明滅していた

どうぐ　道具
103　010　魂にも七ツ道具が必要だ

どうくつ　洞窟
039　145　乾いた洞窟のなかに
136　012　洞窟の胎内のテロルの夢

どうけい　憧憬
168　003　水平への憧憬があった

とうごくされ　投獄され
142　068　自分の著作中に登場し　そのために投獄されたすべての人々を
142　090　知らんふりしたところで投獄されはしない

とうごくされた　投獄された
142　068　自分の著作中に登場し　そのために投獄されたすべての人々を

どうこくする　慟哭する
148　056　慟哭する場所はどこにもなかった。

どうし　同志
113　039　最高に人間的だった同志スターリン

どうじだいじん　同時代人
142　082　彼がおかれている状況は　西側の同時代人のそれより

どうして
017　031　どうしてよいか解らないほど
046　048　どうしていままで忘れてゐたのか
052　018　どうしてわたしが覚えていなければならないのか
052　023　あなたはどうして人生にさよならを告げたのか
061　061　どうしてあなたは帰ってきたのか
061　064　どうしてあなたは戻ってきたのか。
061　153　どうしていままで忘れていたのか、
064　016　人の運命をどうして占うのだろう。
070　026　ぼくはどうしても逃れることができない。
070　030　わからない、どうして此処へ落ちたのか
071　011　どうして一日の休みにとりかえそうとあせるのか
072　021　みんなどうしてこんなに自由にふるまうのか
072　056　どうして、こんな明白なことがわからなかったのか
076　006　どうしてきみの涙をとめることができよう
095　007　どうして人間がすこしも苦しまずに死ねようか？

099　008　どうして過去の方にころがっていったのか？
101　033　……どうして敗北を信ずることができようか
101　063　勝利を信じないぼくは　どうして敗北を信ずることができようか
103　001　どうして地上の掟はやぶれたか
103　004　どこからどうしてやってきたのか
127　008　どうしてかわからない。
139　006　どうしてもその主の姿を尋ねあてることができない
186　041　どうしてきみにわかる？　なぜ今までぼくが新幹線に乗らなかったか？

どうじどうこく　同時同刻
124　021　同時同刻

どうじに　同時に
135　003　多くの国人と語って同時に
142　069　精神病棟監獄から同時に釈放せよ　というものだった
146　031　同時にわたしを認めると
166　006　三つの時代を同時に生き

とうじょう　登場
103　016　シネマスコープに登場するユリシイズのように
128　048　ブリタニカをかついで登場
142　068　　自分の著作中に登場し　そのために投獄されたすべての人々を

とうじょうする　登場する
103　016　シネマスコープに登場するユリシイズのように

とうすいし　陶酔し
124　024　国際級の背景的速度に陶酔し

どうぞう　銅像
028　023　鳩とともにおお救世主の銅像の髭にもついて

とうちほうしき　統治方式
142　024　（それゆえ　この国独得の統治方式の利点とさえいえるもので

とうちゃく　到着
028　052　一台の列車が到着するであらう
145　022　行先をきめないで出発し到着したときに旅は終っていた
160　057　心臓発作で倒れ　救急車が到着する前に息をひきとったという
186　022　音もなく発車し到着しますからね！
186　029　みんな若かったと了解した瞬間、未来に到着していたことがわかった

とうちゃくした　到着した

145　022　行先をきめないで出発し到着したときに旅は終っていた

とうちゃくする　到着する
028　052　一台の列車が到着するであらう
160　057　心臓発作で倒れ　救急車が到着する前に息をひきとったという

とうちょうする　盗聴する
142　032　スパイし　盗聴する者が

とうとい　尊い
039　134　夜にはもっと尊い何かがある
136　002　まず　尊い母を

どうとく　道徳
145　005　芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右
188　046　時には、道徳や、宗教の立派な代理になるうえに、

とうとぶ　尊ぶ
166　017　「礼は往来を尊ぶ」

どうねんへい　同年兵
148　032　同年兵で幹候の試験に合格した組は、

とうはつ　頭髪
014　029　頭髪を伸ばしてゐるのを知らんかね
025　027　あなたの頭髪の中に鶯が卵を生む
036　025　頭髪に巣をかける喧燥な小鳥たち
062　023　思い乱れたわたしの頭髪にさし込まれ
071　021　ぼくの頭髪をひっぱることがある

とうひする　逃避する
142　071　他の人々を悲惨なままに放置して逃避するような

どうぶつ　動物
015　003　花は眼のある動物を見ない
026　005　動物たちの角がうごく
030　014　動いてゐない動物たちが
097　010　あのブロンドの若い男は、動物になる夢を持たなかったろう。
137　006　けちな動物のプライドにかけて

とうほう　東方
040　024　東方からおまへのからだを侵しはじめる

どうほう　同胞
112　017　祖国の栄光と同胞の愛を信じて地平線になだれていった

とうぼうした　逃亡した
004　006　ステッキを忘れて　逃亡した
150　052　続いて第二輯に逃亡した娼婦の心理を描いた「滅落」を発表したところで、

とうめい　透明
015　008　透明なる緑よ
016　011　透明なプロペラがメガネの中に
024　002　脳髄は青く透明である　ざわめきの聞こえる孔には栓をつめ
025　039　透明な樹液の中で
026　011　透明な靴下が
028　015　工場の透明な模様の中に編まれ
034　014　気体のなかの透明な溝へはいる
036　004　透明な耳のあたりを吹く
072　009　すばらしく透明な砂埃の空をみたまえ
142　044　いつもかぎりなく透明で　疑問の余地なく真実だから
152　027　透明にそびえることを望んでいる
160　002　いやに透明に見えてきた　今年の冬

とうめいな　透明な
015　008　透明なる緑よ
016　011　透明なプロペラがメガネの中に
025　039　透明な樹液の中で
026　011　透明な靴下が
028　015　工場の透明な模様の中に編まれ
034　014　気体のなかの透明な溝へはいる
036　004　透明な耳のあたりを吹く
072　009　すばらしく透明な砂埃の空をみたまえ

とうめいに　透明に
152　027　透明にそびえることを望んでいる
160　002　いやに透明に見えてきた　今年の冬

とうよう　東洋
074　004　東洋の名もない植民地の海にうかび
190　011　東洋哲人風の生活が

どうよう　動揺
124　027　郊外電車の快よい動揺に耐えている

とうようてつじんふう　東洋哲人風

190　011　東洋哲人風の生活が

どうらん　動乱
028　017　組織が崩れ動乱の意識が流れかけて

どうりょう　同僚
160　069　エゴセントリックで報復的だったためか同僚にはうとまれていたらしい

どうろ　道路
031　006　いつかのやうに凍りついた道路の上で

とおい
045　018　とおい稲妻の明りをたよりに髭をそった
055　012　とおい航海に出よう
056　012　とおいビルの屋上で
057　005　とおいシンガポールの街を歩いたこともある
059　027　とおい夏の日に
070　013　とおい星、ちかい星のひとつひとつにみいっている、
073　002　とおい沖まで
077　035　どこかとおい国では
080　008　とおい悲しみをたぐりよせている

とおい　遠い
037　014　灰いろの遠い空をながめてゐた
039　046　遠い街へ走り去るがいい
050　005　遠い昨日……
051　002　人間の遠い未知の故郷へ
063　001　どこか遠いところで
081　028　遠い未来の祖国の霧
086　003　青く遠い空
089　041　遠いその声の方へ
101　030　すこしばかり遠いところ　狼の影もないところ
105　015　九月十月には、まだまだ遠い三月。
107　008　遠い異郷の果でみる
135　008　最も遠い天の梢へ
144　010　いさら波打つまぼろしの暗女の里は遠い
154　014　どちらが遠いーいのか
169　015　空が遠いか近いかで
183　024　遠い昔のおもかげを懐しんだり

とおく
048　018　まだとおくから押えている性！
068　030　とおくの沖を眺めても

069 018 とおくの町をゆくように
079 004 とおくの水平線は
083 023 とおくて近いこんな夕陽が沈みつつあったのか
088 070 とおくまで草木や花のやさしい言葉で
100 072 きみはとおくからぼくを見まもっている
102 024 とおくの地球に放してくれ

とおく 遠く
041 001 あなたは遠く行かうとした
041 088 おまへは決して遠くへは飛べぬだらう
053 027 遠くにきこえた電車のひびきや
055 002 おまえはただ遠くへ行こうとしていた
060 010 遠くからこちらへ近づいてきたりする
061 017 いつか遠く橋のうえにやってきた。
064 026 こころとこころは遠くの空へ飛びさった。
065 047 遠く旅立っていった。
069 042 遠くの国をまわっている
094 011 解読できぬ暗号のように近くて遠くあるもの
094 024 遠く近くハイネズの原に打ちよせるのはアフリカを白くする波だ
100 081 ぼくたちが さらに遠くの世界に眼をやるとき
112 004 そんな遠くを見るような眼つきで
115 004 遠く行くひと
126 014 そんなに遠くまで人間の言葉をとどけにいく
128 064 「遠くからのよい消息は
139 002 すすきの穂が遠くからおいでおいでと手招く
146 016 ふと遠くのドアに消えた人の
160 010 春のさきぶれの雷が遠くで鳴っていたが
164 029 触れあうたびに遠くなる
171 006 遠くを見ながら叫ぶ
179 012 街の雑音からはるかに遠く
187 007 春はまだ遠く
192 005 遠くかすかな潮騒のひびきにさそわれ、海にむかってひき寄せられていくが、

とおくへ 遠くへ
041 088 おまへは決して遠くへは飛べぬだらう
055 002 おまえはただ遠くへ行こうとしていた

とおざかり 遠ざかり
032 004 光のざわめきも遠ざかり

とおざかる 遠ざかる
027 024 死から遠ざかるために
071 027 それは遠ざかるにしたがって

193　013　遠ざかる列車のひびきに

とおざかろう　遠ざかろう
055　004　悲しみの街から遠ざかろうとしていた

とおって
101　007　いまはきみたちの肉と骨がどこまでもすきとおってゆく季節だ
125　011　もういちど血のなかをとおってこい

とおのいてゆく　遠のいてゆく
054　094　だが遠のいてゆく地平線の

とおり　通り
005　004　青い帽子の微風が通り
054　116　彼は唾をはく街燈のそばを通りぬけ
061　066　まるで通りがかりの人のように
183　026　駅前通りから暗い小道に曲ったところで

とおりぬけ　通りぬけ
054　116　彼は唾をはく街燈のそばを通りぬけ

とおりぬけて
120　008　とおりぬけていく

とおる
061　078　ぼんやり眼を水面にむけてとおるのをーー
159　004　細くすきとおる声をかけてきた主は

とかい　都会
011　007　そこから大理石の都会が見え
016　007　大理石の林の都会（まち）から
023　021　あのやうに退屈な都会の一日が
028　060　都会の屋根の下よ商店街の商人たち
041　135　都会の時計のために残されてゐるのかしら
054　029　Mよ　都会の胃袋をさまよいながら君が呟いていたことを……
056　007　今日も都会の窓に灯がともり
061　093　この喧噪の大都会の
061　178　妻も子もなく、この広い都会の片隅で、
064　015　こんな孤独な都会にいて、
069　024　都会の荒れた皮膚をひきさいていった
085　004　天の一角にせばめられた都会の空である
100　016　都会の時計のために残されているのかしら？

とかく
007　010　喞筒は空に向って泥を吐く　草の無い荒地ではとかく悪い感冒が

とかした　溶かした
061　131　乾けるもの　固く凝れるものを溶かした」

とかして　融かして
088　027　あたたかい南国の陽ざしのように融かしてくれるから

とかして　溶かして
023　005　青い葉が溶かしてしまふと

とかしている
099　004　太陽が緑の絵具をとかしている芝草のうえを

とがった
026　002　とがった建築のかげで

とがった　尖がった
106　030　尖がった紫の口髭なら　ずっと微妙な震えをもつかもしれない

とがってくる　尖ってくる
047　009　頬骨がつめたい空気のなかで尖ってくる

とがらせる
164　010　黒いミューズは口をとがらせる

とき
008　005　ジライ花を観賞するときも　空にはポンポン花火が上
016　013　より精巧な機械に見とれるときも
017　032　怖かったと仏陀の一人が語ったとき
025　053　不断に闘ってゐるときに
025　056　爽やかな朝に墓場の鍵が配られたとき
026　006　そのとき銃眼の奥から睨む
028　059　葡萄の木の影のごときタイプが無数繁茂する
031　013　静止してゐたものが動き出したとき
036　022　一枚の布をうかべて憩ふとき
041　017　不図　目覚めたときは
041　086　いつもあなたの臓腑をつつくとき
052　002　忘れがたい悲しみの面影がうかぶとき
054　025　涙ぐんで　ときには涙ぐみもしないで
054　044　ひとつづつ小さな灯が点されてゆくとき
054　103　だから僕がとくに眼ざめるとき

054 104 君がとくに眠るとき
055 005 おまえの濡れた肩を抱きしめたとき
056 021 ときに河明りが彼の額を照らしだし
060 009 ときに一人の男が
061 112 一つのものを選ぼうとするとき
067 007 飛びさるときには
074 017 さらに多くの友が死んでゆくとき
076 002 ふときみの肩にかけられたのか
100 081 ぼくたちが　さらに遠くの世界に眼をやるとき
107 001 ぼくが若かったとき
109 008 自分自身と世界とに別れを告げるときがきた、
113 004 （嵐のごとき拍手）
113 006 拍手と嵐のごとき拍手しか
113 009 拍手から嵐のごとき拍手へと
113 031 ひざまずいて自己批判し　たりぬときは刑に服した
127 001 そのとき
127 024 ときに男をさびしくさせる
145 022 行先をきめないで出発し到着したときに旅は終っていた
147 015 ときたま死の匂いを発散させる若者に出会ったりすると
148 023 生き残ったぼくらは、生活の位置がきまったときから、
148 026 そして、ふと顔をあげたとき、
150 046 「誇り得るもの」を失ったとさとったとき、彼はこの世から転向していったのだ。
158 001 あのとき
158 006 たやすいことだときみが言ったとき
158 034 北條や足利の美しい光景をすくってみせたときだろう
160 061 かれが家を出たとき　母親は「棺桶に入って帰ってこい！」と言ったが
163 002 ときには肩をよせあい
165 034 何も映っていないときには
174 017 ぼくはきみとたった一ぺん打った碁のことをときどき思い出していた。
174 018 （きみが美しい奥さんと結婚して、みんなに羨まれながら、西荻窪のアパートに住んでいたときのことだ）
177 007 工場を出たときは
180 042 たずねるものが見つからないときもあるだろう
185 002 ラジオ・ニュースが伝えたとき
186 018 そのときお会いになった人たちとは？
188 042 人生の下り坂にかかったときからである。
193 024 ときわの首都は世界の影を映している

とき （「時」）
061 008 見よ、澱んだ「時」をかきわけ、
061 205 「時」も「追憶」もなかった、
080 024 きみにとって　いかなる「時」も
090 015 静止した「時」は
106 011 外部の世界をうかがい　いまもじっと「時」をこらえ

118　001　父なる「時」と

とき　時
003　004　今晩十二時に出帆します
004　009　時計が霜の花の上で鳴くと
015　016　眠ってゐないのは時計であり
015　017　十二時を打っても
024　005　は　記憶に固執する時計には花々が飾られてゐるのだなと見
025　007　それらが船舶の歴史の中にあった時代には
025　029　軟らかくまがりくねったのは時計
028　005　白い事務所の内側の時計の速度は
028　050　ただそこに時代の速度乃至歩調が見えてくるだらう
029　001　時空の瓶の底に
034　011　午後四時はしぜんに消えてゆく
036　010　いつも懐中時計は
039　054　一定の時刻と
039　061　永遠よりみじかい時間のうちに
041　015　時計が
041　096　そして時間が徒らに過ぎていった
041　135　都会の時計のために残されてゐるのかしら
046　007　澱んだ鈍い時間をかきわけ
046　045　内部を刻む時計の音に　蒼ざめた河のこの沈黙はつきまとひ
047　007　重たい時計の振子の音……
050　013　だがぼくは、何時何処で
050　015　短かかった黄金時代ーー
051　014　午後四時の黄いろい太陽
051　020　神様をだます時が来た。
052　020　あなたの未来の時計の振子がうごくのをまえにして
053　020　時とは一体なんでしょう
053　033　柱時計が六時を告げる
054　072　平然としてまがった道をゆく時だ！」
054　148　暗い存在が抽象そのものに凍ろうとする時間のはずれから
054　159　テーブルに凭れて新しい黄金時代を夢みている
058　008　ビルの四階には午後三時から灯がともり
058　014　無意味な時代がしずかに腐敗しています
061　008　見よ、澱んだ「時」をかきわけ、
061　021　おお時よ、なぜ流れるのか
061　029　ああ時よ、なぜ流れるのか
061　037　おお時よ、なぜ流れるのか
061　062　出発の時よりも貧しくなって、
061　205　「時」も「追憶」もなかった、
065　027　時は移った。沈黙の
067　012　何時

069 025 十二時十分　針の眼が
071 045 あらゆる時は
080 024 きみにとって　いかなる「時」も
084 016 壁にはりついた影と語っている時代－－
090 015 静止した「時」は
095 002 多くの時と多くの場所と
095 005 一時に石の竈で燃やさなければならない
096 002 太陽をえがく　酒場時代の
098 014 自分ひとりのものとなる時刻－－
100 016 都会の時計のために残されているのかしら？
100 028 たちまち去った警告の時代よ
100 039 すばやく過ぎ去った予言の時代よ
104 007 時はながれ　いつの日かまた
106 011 外部の世界をうかがい　いまもじっと「時」をこらえ
106 014 すべて相対的な時のなかを　いかにゆっくり他の時が進行するか
106 034 時代におくれ　人におくれたすべてのものをとり戻すために
112 038 たぶん時代がわるいんだろうと異口同音に歌う
116 013 非時の曇天に
118 001 父なる「時」と
119 005 去りゆく時の
124 021 同時同刻
128 090 われらの時代に目覚めはない？
129 020 時を告げない時計と
135 003 多くの国人と語って同時に
142 016 帝政時代よりソビエト体制下で四倍も悪化している
142 069 精神病棟監獄から同時に釈放せよ　というものだった
142 082 彼がおかれている状況は　西側の同時代人のそれより
145 005 芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右
145 023 「写真店の窓には曝された肖像の記念写真が　夢こそすべてであると知った時　もう肉体
146 031 同時にわたしを認めると
147 001 生きていくことに怖れを感じていた幼年時代だったら
147 005 生きることに困難を覚えていた青年時代だったら
147 009 ところが遅れてやってきた壮年時代に入ると
148 028 とり返しのつかぬ時間が過ぎていたのである。
148 039 十時をすぎると蒲団が敷かれた。
148 054 正午は安全な時刻である、
150 006 六人の意見が一致してゐる時は、六人とも彼に騙されてゐる時であった。
150 013 彼の表面は常に波立ってゐるが、彼の底は何時も静かで、
150 060 時代の風圧を避けるのにせい一ぱいで、
153 013 この瞬間へと高まった時の頂きから
159 001 時を刻む音ばかり高くなっていく屋漏で
160 023 それで時間つなぎに詩を聞かせてくれとせがまれ　聴衆のもとめに応じて
160 056 その日は夜どおし起きており　朝の四時にゴミを捨てに廊下へ出て

160 076 制度の春を病むこともなく　不確定性の時代を生きて
166 006 三つの時代を同時に生き
172 008 どれだけ時間がかかるのか
177 001 きびすを返す時刻を
178 002 欲する時に
180 048 決定的な悔いの時がくるまでは
184 003 UPの記者をしていた当時
185 012 時代への幻滅も
185 023 だが、愛する時間を奪われた
186 032 （時間の正体を見たんだ）
186 033 一種の時間差攻撃ですね？
186 069 空間と空間のあいだに時間が挟まる
186 072 時間は偉大な造物主だからね
186 075 時間のさまざまな変形態にすぎぬ）
186 076 万物は時間の塊りで
186 080 誰かが寄賭してくれたナポレオンの一壜もいずれ劣らぬ時間の傑作だった
186 083 思索も夢も時間の戯れで
186 087 時間を忘れてぼんやりするのだった
188 015 鼻孔に、時々、薬をささないと、
188 020 ファン・ゴッホ展があった時の画帳が、手もとにあって、
188 046 時には、道徳や、宗教の立派な代理になるうえに、
188 051 人はただ歳をとるだけだが、時代は、変ったようである。
188 054 いまはエレクトロニクスと老害の時代なのだ。
190 013 時には朝早く釣竿を持ち
193 020 同じ時は決して戻ってこなかった

ときどき
174 017 ぼくはきみとたった一ぺん打った碁のことをときどき思い出していた。

ときに
025 053 不断に闘ってゐるときに
054 025 涙ぐんで　ときには涙ぐみもしないで
056 021 ときに河明りが彼の額を照らしだし
060 009 ときに一人の男が
067 007 飛びさるときには
127 024 ときに男をさびしくさせる
145 022 行先をきめないで出発し到着したときに旅は終っていた
163 002 ときには肩をよせあい
165 034 何も映っていないときには

ときには
054 025 涙ぐんで　ときには涙ぐみもしないで
067 007 飛びさるときには

163　002　ときには肩をよせあい
165　034　何も映っていないときには

とぎれた
069　020　とぎれたとみせて　またつづく

とぎれて　途切れて
111　006　夕焼空にふと途切れている

とぎれとぎれに
192　009　あの音は、幻聴かも？　とぎれとぎれに聴えてくるが、

とぎれる
061　048　風にとぎれるはかない幻想が

ときわの
193　024　ときわの首都は世界の影を映している

とぐ　研ぐ
143　017　いつまで爪を研ぐのか

どく　毒
022　009　そして毒を含むだ花々は
025　028　脳髄は毒のやうに青くなる
026　024　悼ましい毒の如く洩れ
070　052　どんな蛇よりも猛烈な毒をもっているわ
160　008　どの毒がいいかと話しもした

とくしゅしゃかいそしき　特殊社会組織
142　096　極度に不平等な特殊社会組織の

どくしょほう　読書法
093　010　かかる読書法は良い趣味以外のなにものでもない

どくしんしゃ　独身者
054　086　独身者はふかく自ら頷きながら
054　106　独身者は大学生のリキュールグラスに
054　115　独身者はすばやく扉のそとへ消えうせる

どくだん　独断
072　024　独断批評家の口ぶりもわるくはないし、皮肉な記者のポーズも捨てがたい

とくちょうのある　特徴のある

150　057　彼は特徴のあるうるんだ眼をしばたたきながら聞いていたが、

とくていする　特定する
192　001　もはや、わたくし、と特定する必要はない。わたくしには、わたくし以外の

どくとく　独得
142　024　（それゆえ　この国独得の統治方式の利点とさえいえるもので

どくはく　独白
170　012　さびしい男の朝の独白）

とくやま　徳山
186　005　徳山まで講演に行ったんですってね？

どくりつせんげん　独立宣言
054　143　非ジェファーソンは独立宣言に署名しない

とぐろ
128　072　とぐろを巻く

どくろ
138　003　どくろの目に涙がたまる
138　010　どくろの目に涙がたまる
138　013　どくろの目に涙がたまる
138　020　どくろ目に涙がたまる
149　014　どくろとなるまで

とけ
028　022　そのとけやすい肢體を眠らせる飴色の午後の
100　009　記憶のくらやみにとけるフィルムのように
105　001　氷はとけ、雪は消えて、
129　016　ひとけのない屋上プールと

とけい　時計
004　009　時計が霜の花の上で鳴くと
015　016　眠ってゐないのは時計であり
024　005　は　記憶に固執する時計には花々が飾られてゐるのだなと見
025　029　軟らかくまがりくねったのは時計
028　005　白い事務所の内側の時計の速度は
036　010　いつも懐中時計は
041　015　時計が
041　135　都会の時計のために残されてゐるのかしら
046　045　内部を刻む時計の音に　蒼ざめた河のこの沈黙はつきまとひ

047　007　重たい時計の振子の音……
052　020　あなたの未来の時計の振子がうごくのをまえにして
053　033　柱時計が六時を告げる
100　016　都会の時計のために残されているのかしら？
129　020　時を告げない時計と

とけて　融けて
149　012　内なる人は融けていく
187　027　甘い香りのように地に融けていく

とけていく　融けていく
149　012　内なる人は融けていく
187　027　甘い香りのように地に融けていく

とけている　溶けている
055　029　花瓶の腐った水のなかで溶けている

とげとげしい
041　045　とげとげしい息子よ　御身の

とけぬ　解けぬ
156　036　心の禁制は解けぬまま

とけやすい
028　022　そのとけやすい肢體を眠らせる飴色の午後の

とける　溶ける
006　005　蜂蜜のやうな午後が溶ける

どこ
015　006　海図の脈のどこかに消えてしまった
021　029　溢れてくる影のどこかで
030　006　どこからともない一滴の水一滴の音に
034　016　風はどこからともなく忍びこむ
037　011　夜はおそらくどこからでも忍びよる
037　015　まだ光がどこまでもゆきわたり
041　076　あなたをどこかへ連れてゆかうとする
048　037　「地平線はどこにある
048　038　彼女の位置はどこにある
048　039　難破船はどこにある
048　040　彼女の憂愁はどこにある」
054　098　今なおどこかに隠れているとは信じられぬ
058　030　この街のどこもかしこも

060 003 ひろい眺めのところどころで
061 185 わたしはどこまでも愚かですから、
062 028 一切の望みをすててどこまでも一緒にゆこう
062 031 わたしは昔の少年になってどこまでも追いかけてゆくだろう
063 001 どこか遠いところで
066 007 みんなどこへ行ってしまったの？
066 033 わたしはどこまでも歩いていった。
068 031 どこにも鴎はみえなかった
070 036 いったいどこにあるのだろう。
073 024 どこからともなく
077 035 どこかとおい国では
084 032 どこまでもつづく青い灯の谷間にも
088 074 どこまでもつづく愛の歌で
089 004 「あなた　どこにいるの？」と問うたら
089 020 「あなたどこにいるの？」
089 039 「あなた　どこにいるの？」
101 007 いまはきみたちの肉と骨がどこまでもすきとおってゆく季節だ
101 025 どこかの国境を守るためではない
101 057 ……どこまでもぼくは行こう
101 062 おお　しかし　どこまでもぼくは行こう
102 018 悔恨の波はどこまでもうねってゆけ
103 004 どこからどうしてやってきたのか
111 001 どこまでも　迷って迷って
111 003 どこへも帰りたくない
112 016 あのきびしさはどこへ行ったか
112 018 あの純粋の化身はどこへ失せたか
113 050 修正に修正をほどこす整形手術で
117 004 どこまでもひろがっている
124 011 どこでも似たようなもの
126 006 いずれは太陽系の星のどこへでも
139 004 どこからか砧を打つ音がかすかに聞えてくる
141 001 どこまで行ったの？
142 092 ぼくたちはどこまでその小さな幸福を守れるだろうか？
143 020 どこの荒野の枯木にとまるのか
143 021 どこの浜辺の砂を掘るのか
145 003 何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに
145 017 そんなカップルはどこにでもいて快楽のスプーンで苦痛の目方を計りかねていた
146 004 どこだってかまわない
146 035 どこをどう走ったものか
146 038 「あなたはどこ？」とたずねても
148 056 慟哭する場所はどこにもなかった。
150 045 最後の拠りどころは生理しかなく、
155 041 心のどこかで

158　027　許されるかぎりどこまでも
160　075　われわれのコーネリアスは　いまどこにいるのだろう？
160　078　われわれのコーネリアスはどこまで歩いていけるだろう？
162　005　どこまで豊かでありうるか
168　011　どこをどうめぐってみても
173　008　この世の中　どこまで腐っていくか」
174　021　おっとりしていて、どこが強いのかわからないような碁風だった。
177　009　どこをどうほっつき歩いたか
178　007　どこにもない場所に預けにいく
180　029　どこかでくい違い
180　030　どこかで勝手に出あうものである
180　050　「どこかで会って、さりげなく挨拶を交したような、奇妙な余韻をひいていくところ」それは私にしてもそうでし
184　022　どこまでも理解しあい
186　024　昔の発車ベルの音が体内のどこかに残っていたんですよ！
188　061　出産に関する教育がほどこされるならば、
192　004　夜明け前の微光があたりをくまなく覆っていて、どこへ行こうとしているのか、
192　010　どこまで行っても、一本の松にも出遭わず、平坦な黒い砂地がつづいているばかりで、
192　011　もしかすると、近づくにしたがって、遠ざかっていく海なのかもしれない。こんなところは、日本中のどこにもあり

どこ　何処
039　018　あなたは何処に立ってゐるのか
039　037　わたしは一体何処に立ってゐるのか
041　102　かつて　何処にも起らなかったこと
044　013　戦いは何処よりか
046　044　たとえ何処の果へゆかうとも
050　013　だがぼくは、何時何処で
051　005　だが何処へ？　ヨオロッパでもアジアでもない
053　036　わたしのたずねる人影は何処にもありません
053　041　それから何処へゆくのでしょう
053　042　お姉さん　何処にいるの
055　021　何処へも行きはしなかった
057　013　何処へ行こうと
059　011　あの美しい少年は何処へいったか
067　013　何処でも
075　013　いつか何処かで
093　028　……何処へ？
100　080　何処にもないのだ
110　014　何処にありや、と。
140　002　何処にも
142　021　あなたは何処にいても

とこ　床
014　025　貧血がくるとひとつづつ楽器は床に倒れた

015　011　石の床に新聞が配達されてゐたことも
024　004　けてゐる　寝床に散らばった怠惰な骨の中から　陰鬱な眼球
035　008　白い床のうへに
039　090　床を踏みにじる音によって
041　099　むかしの世紀がまだ寝床に就かぬうちは
077　018　かれは木の吊床に身を横たえて
081　018　木の吊床に横たわる者
093　008　寝床でウィスキーを飲み煙草をふかす
112　022　寝床のぬくもりでほてった身体を　詰まった路面電車に積みこんで
118　008　寝床は一つ
128　070　石の床に
133　004　「夜われ床にありて
143　012　岩床につくばうあさましさを思う……
154　002　雲のはずれの寝床
167　055　柱に梁に天井に床に耐性を与え
175　012　病床のきみの耳にも聞えているに違いない
189　035　銀のフォークが石の床に落ちる

どこかに
015　006　海図の脈のどこかに消えてしまった
054　098　今なおどこかに隠れているとは信じられぬ
186　024　昔の発車ベルの音が体内のどこかに残っていたんですよ！

どこから
030　006　どこからともない一滴の水一滴の音に
034　016　風はどこからともなく忍びこむ
037　011　夜はおそらくどこからでも忍びよる
073　024　どこからともなく
103　004　どこからどうしてやってきたのか
139　004　どこからか砧を打つ音がかすかに聞えてくる

とことんまで
151　021　とことんまで生きる気なんだろうおまえは

どこに　何処に
039　018　あなたは何処に立ってゐるのか
039　037　わたしは一体何処に立ってゐるのか
041　102　かつて　何処にも起らなかったこと
053　036　わたしのたずねる人影は何処にもありません
053　042　お姉さん　何処にいるの
100　080　何処にもないのだ
110　014　何処にありや、と。
140　002　何処にも

142　021　あなたは何処にいても

どこにもいない
145　003　何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに

どこの
143　020　どこの荒野の枯木にとまるのか
143　021　どこの浜辺の砂を掘るのか

どこまでも
037　015　まだ光がどこまでもゆきわたり
061　185　わたしはどこまでも愚かですから、
062　028　一切の望みをすててどこまでも一緒にゆこう
062　031　わたしは昔の少年になってどこまでも追いかけてゆくだろう
066　033　わたしはどこまでも歩いていった。
084　032　どこまでもつづく青い灯の谷間にも
088　074　どこまでもつづく愛の歌で
101　007　いまはきみたちの肉と骨がどこまでもすきとおってゆく季節だ
101　057　……どこまでもぼくは行こう
101　062　おお　しかし　どこまでもぼくは行こう
102　018　悔恨の波はどこまでもうねってゆけ
111　001　どこまでも　迷って迷って
117　004　どこまでもひろがっている
158　027　許されるかぎりどこまでも
184　022　どこまでも理解しあい

どこもかしこも
058　030　この街のどこもかしこも

ところ
025　003　黒いトンネルに海の響をきくところ
025　012　しづかに靡いてゐるところ
028　041　おびただしい自然を覆ふ霧はやがて見えなくなるところ
031　011　ふとなにげなく途絶えたところから
044　004　帰するところ一にして　祈りは慧き習慣（ならわし）の光明なり。
049　011　高いところに立って影の眼を開いてみたまえ
054　040　「僕はここにいる　君がいないところから
054　041　君がいるところへ行きつくために
055　020　ところがおれたちは
060　003　ひろい眺めのところどころで
061　059　いたるところに行きつき、いたるところを過ぎていった。
063　001　どこか遠いところで
066　031　ーー帰ってゆくところもなく

069 006 あるところに
069 007 天国というところがあったんだって
069 008 そこにはまぶしいところがあったんだって
069 012 かれもまた　あるところに
069 015 あるところに
072 018 結局のところわれわれの期待も、かれらの手綱さばきで
072 025 どうふるまったところで
073 017 平和のないところから立去らなければならない
079 009 なお何も浮んでこないところ
083 017 高いところへ追いつめられて
093 011 ……ところで
095 009 妹のところへ電話をかけようとして
101 028 絶望も希望も住む場所をもたぬところ
101 030 すこしばかり遠いところ　狼の影もないところ
101 031 どの首都からもへだたった　どんな地図にもないところだ
103 006 かれにはいいところがある
103 009 イシュメエルにはいいところがある
119 008 のがれるところなき身の
124 030 六十本の煙草を灰にしたところで
125 017 どんなイメジを選んだところで
126 002 侵略的な人類の手のとどくところにあったら
133 014 ゾンビーたちはいたるところにいたが
133 028 数知れぬ花が袖にこぼれるところまで。
140 005 行くところもなければ帰るところもない
142 080 ところが　ブコフスキーは信念のほうが
142 090 知らんふりしたところで投獄されはしない
145 032 「あるところに壁が倚れていた
146 006 ロビーまで戻ったところで
146 023 お祈りを捧げているところでした
147 009 ところが遅れてやってきた壮年時代に入ると
150 052 続いて第二輯に逃亡した娼婦の心理を描いた「滅落」を発表したところで、
160 074 ところで　日本の社会の日蔭を歩む
163 006 道に迷ったところで
165 030 言葉の理解のとどかぬところで
167 014 つまるところ神経の問題だが
167 050 至るところに積みながら
170 010 「何も書けぬ」がほんとうのところだ
170 021 （見えないところで自然は豊かさを失っていない
174 028 ぼくの考慮のおよばぬところが
177 025 かえるところがある
180 050 「どこかで会って、さりげなく挨拶を交したような、奇妙な余韻をひいていくところ」それは私にしてもそうでし
183 026 駅前通りから暗い小道に曲ったところで
184 017 わたしたちの家（アワ・ハウス）というべきところを

185 011 いたるところに沈黙の空白ができた
188 028 歳相応の、厄介な病気が、二つか三つ重なったところで、
188 058 ところで、きみは同じ手紙の後半で、
189 028 これからひとりで食事にかかるところだ
190 001 帰るところはそこしかない
190 017 いつかきみが帰るところは
192 003 うつむいて、歩いているところは、一木一草もない、黒い砂地で、
192 011 もしかすると、近づくにしたがって、遠ざかっていく海なのかもしれない。こんなところは、日本中のどこにもあり
192 015 みるみる漆黒につつまれていく、ここは、もともと海底だったところではないか。冷気に身ぶるいし、
193 003 到達したところから

ところ 所
028 005 白い事務所の内側の時計の速度は
028 054 わたしたちが所有するすべての宝よ
028 064 空壜の堆積する地所を揺るがしながら明るく笑う
028 067 白い事務所の受話器が
029 010 一つの海を風景の中に所有した
032 005 わたしが憩ふ場所といへば
039 038 小さな場所に
041 113 あなたが倒れる場所といへば
042 007 大いなる弧をめぐり遥かに高い所から
080 022 いかなる場所にも
095 002 多くの時と多くの場所と
098 007 「ここは　ほんとに気持のいい場所ね
100 079 ぼくたちが出会う場所は
101 028 絶望も希望も住む場所をもたぬところ
106 041 かれは屠所にひかれる小羊であってはならない　たとえその皮を剥がれても
111 002 家のない場所へ行ってみたい
121 013 プライベートな場所をさがしたい
121 015 台所では大根を刻む音がしている
134 011 一つの場所を占めようとして
140 011 きみがいたすべての場所から
142 042 監獄・収容所システムにほかならぬ　と
142 057 監獄・収容所システムに隠れ場所はない
142 063 各所の精神病棟監獄　普通の監獄・収容所で
142 069 精神病棟監獄から同時に釈放せよ　というものだった
148 007 地方都市で鉄工所を経営していた旧友が、
148 056 慟哭する場所はどこにもなかった。
150 054 鉛筆で何カ所も印をつけられた頁をつきつけられて、
162 015 恍惚の所業であったかもしれない
178 007 どこにもない場所に預けにいく
186 054 ぼくは無意識のうちに隠れ場所をさがしている
186 064 隠れる場所がなくなる

189　024　高い場所に住んでいる

ところどころ
060　003　ひろい眺めのところどころで

とざされ
043　011　愁いの都の門はとざされ
047　002　とざされた部屋に心臓の羽搏きが
054　075　「出てゆこう　とざされた部屋の中から
088　025　雪にとざされたぼくの窓や
101　058　ぼくの行手ですべての国境がとざされ

とざされた
047　002　とざされた部屋に心臓の羽搏きが
054　075　「出てゆこう　とざされた部屋の中から
088　025　雪にとざされたぼくの窓や

とざされている　閉ざされてゐる
040　015　すべての劇場は閉ざされてゐる

とし　歳
068　013　十九歳の男は　海にむかって
068　033　十九歳に別れを告げた男は
072　003　いま評判のサラブレッド四歳馬を見ようとして
105　013　この歳月をよしとしよう、三月。
151　015　なんと魅力のない五十六歳の男だろう
153　002　すべての歳月を
160　054　私が知りうるのは　シュワルツが一九六六年に五十三歳で死んだことだ
160　065　　フンボルトの天才　は四十歳で燃えつきてしまい
183　003　歳末商戦たけなわの店頭を
184　010　四歳になったばかりの養子の名はヒロシ
186　034　ひょっとすると廿六年前の卅四歳のぼくが、いまのぼくを見ていたかも……
188　028　歳相応の、厄介な病気が、二つか三つ重なったところで、
188　051　人はただ歳をとるだけだが、時代は、変ったようである。

とし　都市
028　020　かれら塵挨都市の番兵と呼ぶものから
048　028　すると地球の表面に都市ができる
054　021　「僕たちは都市をつらぬく濁った河にそって
061　004　よごれた幻の都市が聳えている。
061　220　幻の都市に灯がついた、
081　014　ぼくらを生んだ七つの近代都市が
094　012　行ったことのない島や港や都市に

140 020 かれは実体のない都市の雲の中に住む
148 007 地方都市で鉄工所を経営していた旧友が、
150 068 今日、我々は一つの都市、

とし 年
009 004 ポケットを膨らませる少年は
010 001 自転車に乗ってゐる少年は自転車のスピイドをもつ
010 003 有効なスピイドについて考へることを欲する少年は一個の白い帽子をかぶってゐる
010 005 日の匂を発散させる少年は青い麦の芽である
010 014 パイプを握って雲の中から生れてきた少年は
010 020 手をあげた少年の五指の間から
015 013 昨年の唄であらうかもう見えない
021 006 若年の日日に
021 021 若年の記憶は古くなり
021 024 若年のコイルを閉じてしまったが
041 016 音を刻み　立止まり　年を待ってゐるやうに
048 022 うすれゆく年々の冬のきびしい日の下で……
053 049 わたしは一日よりもはかない一年を
053 050 一年よりもむなしい一生を過ごしてきました
054 001 それは一九四ニ年の秋であった
054 049 一九四七年の一情景を描き出そう
054 062 ペテルスブルグの青年が僕たちに告げたことを……
057 002 1886 と書いてあった　その年から
057 007 パスカルの読み方を教えた青年が戦死し
057 011 1850 と書いてあった　その年から
057 031 1948年　これは
058 045 どうやら私は今年も結婚しそこねたようです
059 001 見知らぬ美しい少年が
059 011 あの美しい少年は何処へいったか
059 017 美しい少年を失った母が
059 023 おもいみだれた母と美しい少年のボートが
059 028 波にさらわれた母と美しい少年を許せ！
061 057 一九四〇年の秋から一九五〇年の秋まで、
062 001 ひとつの年が終り
062 002 ひとつの年が始まる神秘な夜にくるまって
062 008 二十年もむかしに死んで
062 031 わたしは昔の少年になってどこまでも追いかけてゆくだろう
066 016 年老いた母親はいきをころして坐り
068 028 （今年の夏もこれっきり）
070 033 一日を一年のように暮しているぼくたちには、
071 009 われわれはとりかえしのつかぬ年月を
072 042 （すくなくとも三百年の伝統に従って
077 016 一九四四年五月のある夜……

078 013 （その年のことはもう忘れた）
081 013 何千年の闇をつらぬいて真赤な雲の火柱がたち
089 009 橋の下には　夏の少年が
089 013 けれど死んだ眼をひらいた少年には
089 021 すると少年の冷たい呼吸で
090 010 そこに年輪をよむかわりに
090 013 巨木の五百年は美しくない
092 008 もう二十年たつ
093 023 孤独な青年の体臭に
096 015 文明色なら　もう古くなった三十年代流行のセダンの
100 011 それは昭和十六年の冬のことだ
100 047 それから五年たってである
100 058 ぼくは今年の夏を知った
112 003 二十年か
115 010 一千年の別離もさびしくはない
123 001 新しい年がくるといっても
127 010 三十年前か
128 041 十年戦えればアラブが勝つがね　え？
130 007 美少年に見おぼえはない
132 007 年月はめぐりめぐって
132 009 年々の秋をとざす一つの秋
137 014 空虚なこだまのなかの幾年月
139 008 五十年の記憶は闇また闇。
142 062 その著書をフランスで刊行した一九四二年生れのブコフスキーは
142 073 十二年の刑期をつとめあげるために監獄に戻っていったのである
142 126 魂に刻み目をつけたこの年を！
143 011 年経た甲羅を陽に反らして
146 045 振りむくと小柄な中年の外国人が
147 001 生きていくことに怖れを感じていた幼年時代だったら
147 005 生きることに困難を覚えていた青年時代だったら
147 009 ところが遅れてやってきた壮年時代に入ると
148 002 去年の一月の終りに、
148 003 三十五年ぶりにたよりをよこした。
148 006 今年の冬には、
148 032 同年兵で幹候の試験に合格した組は、
148 037 みな年相応に老けて、持薬を服用する者もあり、
148 048 それから、少年の日のように月の砂漠へ出発した。
150 001 二十才になった年の秋に
150 026 年月のきびしさに苦笑するほかはなかったが、
150 062 一九三九年の春、
151 005 軍歴は傷痍期間を入れて約二年半ほど
151 006 現在各種年鑑によれば詩人ということになっている
154 010 すべての年月をかけて

160 002 いやに透明に見えてきた　今年の冬
160 009 そんな今年の冬も終りに近い　ある日の真夜中
160 012 デルモア・シュワルツが一九三八年に書いた短篇を読んだ
160 015 二十年も昔に記憶の底に沈んだ詩人が
160 054 私が知りうるのは　シュワルツが一九六六年に五十三歳で死んだことだ
160 063 三十年代末から四十年代にかけて活躍し
166 011 いのちもいらない初年兵の頃には
167 041 少年期の貧しい体験から
167 048 ながい幽閉の年月に耐えた
167 069 共に暮した年月にも
169 023 今年の小さな波じゃネ
169 024 来年の風にまた挑戦します。
173 040 はてさて　七十年代も終りですか
174 002 一年ちょっと前、
174 011 この三十年間、ぼくはきみに一度も電話などしたことがない、ちょっぴり心が痛み、それはなぜかと考え出すと、疑
180 011 「女の子の心理」なんて私だって判んないですよ。私だって「男の子の心理」は判んないですからね。お年寄り
180 017 だからといってお年寄りの心理を甘くみてはいけませんよ
180 020 夢のなかで恐怖に出あわないのが本当の年寄りなんです
180 025 ら……。貴方に判らなかろうと、もう少し付け足すと、昨年は形相の意味も知らなかったということ。私は「メ
180 053 今年の波はどうあれ
182 023 すべてを年のせいにするな
182 025 ありあまる年があり
186 027 廿六年前に広島で撮った写真を、懇親会の席上で相良君から見せられてね
186 034 ひょっとすると廿六年前の卅四歳のぼくが、いまのぼくを見ていたかも……
188 009 五十何年ぶりに歯医者の厄介になるという始末。
188 019 一九五八年に、日本で、
188 033 早いもので、あれから四年、
188 035 毎年一人ずつの勘定だから、
188 073 四年遅れのこの返信が、四年前のそれと、どう違っているかを、
189 019 誰とも口をきかずに十年を生きればよい
189 020 十年の早さ
189 021 それがわかるのは十年たってからである

とじこめて　閉じこめて
055 027 ガラスの花瓶に閉じこめてしまったのだ
070 022 ぼくたちを閉じこめている格子は

としそうおう　歳相応
188 028 歳相応の、厄介な病気が、二つか三つ重なったところで、

としそうおうに　年相応に
148 037 みな年相応に老けて、持薬を服用する者もあり、

とじた
039　044　したいに眼をとじた楕円の石に変ってしまふ

とじて　閉じて
021　024　若年のコイルを閉じてしまったが
062　063　あなたはつぶらな瞳を閉じていますね

どしゃぶり　どしゃ降り
146　060　外はひどいどしゃ降りでした

としより
124　035　（疲れやすいんだ　としよりは）

とじる
164　026　きみがすっかり眼をとじるまで

どじん　土人
084　019　土人の音楽があります」

とだえた　途絶えた
031　011　ふとなにげなく途絶えたところから

とだえて
053　029　ひそひそと話しあっていた声もとだえてしまいました
098　012　それっきりとだえてしまった

とち　土地
026　022　しめった土地には
039　070　ここはわたしの生れた土地だ
044　010　新らしい種子が新しい土地に播かれつつあることを。

とぢて　閉ぢて
035　020　北方のドアを閉ぢて

どちら
076　003　どちらかが死にかけているような
084　018　「いまではどちらのお家庭にも
126　009　どちらにしても
136　028　地底の川はどちらへ？
136　029　どちらにしても
145　029　夢の厚着で肥りすぎた詩人には真偽はどちらでもよく　魂はもうとっくに死んでいた
148　011　どちらの友も、同じ大学で顔をあわせ、
154　014　どちらが遠いーいのか

163　007　どちらを向くかは身体にきめさせた
173　019　どちらに顔を向けようか

どちらにしても
126　009　どちらにしても
136　029　どちらにしても

どちらの
084　018　「いまではどちらのお家庭にも
148　011　どちらの友も、同じ大学で顔をあわせ、

とっくに
041　069　季節はとっくに過ぎ去ってしまった
093　013　かれにとってはとっくに抜け道がわかっている迷路である
126　003　とっくに消滅していたろう」
141　011　与えるものがとっくになくなって、
145　029　夢の厚着で肥りすぎた詩人には真偽はどちらでもよく　魂はもうとっくに死んでいた
156　012　とっくに破滅していた
156　027　とっくに破滅していたろう

とっくり
180　009　とっくりと読みおえたにちがいなかった
181　031　自然の仕料をとっくり見たいが

とつじょ　突如
034　019　突如　豪雨が襲ってくる
054　127　僕は突如白熱する

とっしんし　突進し
182　013　死の境いを恐れず突進し

とつぜん
155　039　とつぜん妻が裏切り
185　008　とつぜんの死は

とつぜん　突然
028　008　受話器から突然噴き溌れたりする

とった
066　027　折れるように飛びおりる姿勢をとった、
068　002　気がかりな便りをうけとった
148　053　スマトラ島を偲んでぼくたちは談笑し、賑かに昼食をとった。
150　046　「誇り得るもの」を失ったとさとったとき、彼はこの世から転向していったのだ。

160　057　心臓発作で倒れ　救急車が到着する前に息をひきとったという
160　068　「蛇の穴」と称して大学にもぐりこみ　教鞭をとったこともあるが
174　001　きみからの最後の便りを受けとったのは

とった　撮った
148　045　ぼくたちはひとかたまりになって写真を撮った。
186　027　廿六年前に広島で撮った写真を、懇親会の席上で相良君から見せられてね

どっと
071　008　どっと家族づれで出かけてゆく人たちをみかける
094　005　さかまく汐をどっとのみこむ河口

トットと
128　060　トットと歩く

とつにゅうして　突入して
147　006　一瞬の激情で死に突入していたかもしれない

とどいた
054　080　衣裳と装身具の内側に　化粧のゆきとどいた顔の下に
128　043　愛や敵意が目標にうまくとどいたためしがあるかい？
148　029　元戦友から招待状がとどいた。

どとう　怒涛
072　047　怒涛のなかの歓呼、歓呼のなかの怒涛

とどかない
039　099　むかしの声もとどかない

とどかなかった
080　014　求めても手がとどかなかったもののために

とどく
042　008　予感のやうに皮膚にとどく
126　002　侵略的な人類の手のとどくところにあったら
190　009　その斫のとどく範囲の明け暮れ

とどこう　届こう
189　038　指先がフォークになかなか届こうとしない

ととのい
187　019　準備はすべてととのいながら

とどまる
075　008　永くとどまることはないだろう
088　047　消えさる喜び　永くとどまる悲しみというものがない

とどめ
054　019　君のなやましい顔の痕跡をとどめて
062　048　悔恨の影をとどめず
119　006　ひとひらの影をとどめ
153　010　悲恋にとどめを刺し

とどめず
062　048　悔恨の影をとどめず

とどめて
054　019　君のなやましい顔の痕跡をとどめて

とどめられ　留められ
015　005　錆びたピンで留められ

とともに
010　004　白い帽子は頭のアリカを教へるとともに日の匂を発散させる
023　022　華麗なあなたの指輪とともに
026　016　蝙蝠傘とともにさ迷ひ
028　009　哀訴の蒸気を吸殻とともに皿の上に拾てる三重の硝子の向ふの鐵格子の中の
028　023　鳩とともにお救世主の銅像の髭にもついて
028　035　おびただしい製品とともに
028　051　鉄道信号機の痙攣とともに
033　008　光沢とともに
033　020　あれは日没とともに
036　018　ああ愛する花とともにゐたいな
043　009　あなたの影とともに駛ってゐる
046　024　雷とともに海へ出て　空はつらなる水平線をはしり
091　004　ロースト・ビーフよりも香ばしいその匂いとともにやってくる
100　040　「何百万の死者の霊とともに
108　023　立つ波の拍子とともに

とどろく
112　010　破壊につぐ破壊のこだま　断末魔の軍港にとどろく火砲のうた

となえた　唱へた
014　016　するとピッコロが不服を唱へた

とにかく

188　014　蓄膿症ではないと思うのですが、とにかく鼻が詰り、

とねりこ
039　011　とねりこの木に凭れ

トバ
057　017　トバ湖は凪いでいた

とばくしゃ　賭博者
054　134　ひとり占いの賭博者のように

とばこ　トバ湖
057　017　トバ湖は凪いでいた

とはして
012　002　葡萄の葉をとはしてしまった

とばり
043　012　日はゆき　うす暗きとばりの中に

とびいろ　とび色
101　034　かわいたとび色の風のなかで

とびおりる　飛びおりる
066　027　折れるように飛びおりる姿勢をとった、

とびきり
180　052　とびきり冷たい夏の訪れである

とびこえ
054　164　宮殿や政府の階段をとびこえ

とびこむ
005　022　霞の中にとびこむと葩が散る

とびこむ　飛びこむ
072　050　ゆっくりとゴールへ飛びこむ馬をキャッチした

とびさる　飛びさる
067　007　飛びさるときには
079　015　全速力で飛びさるであろう

とびちる

016　004　星にとびちる音（ね）をふんで

とびはじめる　飛びはじめる
014　031　室内を飛びはじめる

とびら　扉
003　008　扉の外をマアチが風と共に過ぎる
003　015　雪に埋まる扉
005　031　扉がある　扉が
012　004　その美しい扉の文字は
039　062　柱も扉も腐蝕してゆく
039　086　あなたはあなたの扉のなかに隠れる
040　009　たゆみながら一つの扉が支へてゐる
041　133　曇った空の下を違った扉に向って走ってゆくのを見た
043　013　音もなく　部屋の扉がひらく
046　046　いくつもの扉のやうに行手をさへぎり
051　027　闇に扉はないだろうか
051　033　扉のひろさで立ちふさがる沈黙……
051　038　把手のない扉。
054　115　独身者はすばやく扉のそとへ消えうせる
154　015　さすがにものいわぬ扉のまえで

とぶ　飛ぶ
041　025　海からやって来たといふ　空を飛ぶ藻に乗ってきた人よ
072　015　飛ぶ馬
072　034　飛ぶ馬を追いこした
072　046　飛ぶ馬が跳ねる馬を追いこした
072　053　ーー飛ぶ馬が跳ねる馬を追いこした

どぶがわ　どぶ川
117　002　どぶ川のむこうに草がゆれており

とべ　飛べ
041　088　おまへは決して遠くへは飛べぬだらう

とべる　跳べる
163　019　あそこまでは跳べる

とほうに　途方に
146　042　途方に暮れて立っていると

とほく
021　022　とほく離れて文字を愛して

032　015　とほく海がひろがってゐるかもしれない
046　012　とほく橋の上へやってきた

とほってくる
040　019　秘密はいくつもの廊下をとほってくる
041　043　記憶の中をとほってくる

とほってゆく
040　011　白い雨がとほってゆく

とほりぬけて
041　057　街角をまがり窓をとほりぬけて

とほる
038　028　荒廃したグラスの底をとほるやうに
040　027　輝くチーズを載せた車がとほる

とまどい
113　044　とまどいすることもなかったから

とまら　止まら
061　022　なぜ止まらないのか
061　030　なぜ止まらないのか
061　038　なぜ止まらないのか

とまり
089　012　もう誰の眼にもとまりません）

とまりぎ　止り木
106　008　親しくもないのに止り木で肩をよせあい

とまる
108　021　とまる鴎
143　020　どこの荒野の枯木にとまるのか

とめあげる
142　073　十二年の刑期をつとめあげるために監獄に戻っていったのである

とめている
058　001　ひとびとが足をとめている空地には
081　020　生身で受けとめているのは兵士ではない
101　048　ぼくはぼくの心をつなぎとめている鎖をひきずって

とめどなく
077　022　母や妹や恋人のためにとめどなく涙を流しつづけた

とめどもなく
125　005　六月の雨はしきりにふり　音楽はとめどもなく
188　041　とめどもなく、そいつとお喋べりを始めるのは、

とめられて
145　013　何かを思い止るようにと一人の男が一匹の犬にとめられていた

とめる
061　056　あなたは冒険をもとめる旅人だった。
076　006　どうしてきみの涙をとめることができよう

ども
014　022　口の悪い家畜どもが逃げていったあとで
101　006　死はいそがぬけれども
119　007　行けども行けず
125　005　六月の雨はしきりにふり　音楽はとめどもなく
130　009　（鶏どものくびを
133　006　尋ねたれども得ず」
187　015　けれども昨日まできみを
188　041　とめどもなく、そいつとお喋べりを始めるのは、

とも　友
046　018　父や母　また友の顔もゆらめいてゐる
054　051　賢い三人の友に会うのである
061　135　父母や妹　またあなたの至上の友たちに」
066　010　小さな友はいつまでも首をふりつづけた。
074　016　多くの友が死に
074　017　さらに多くの友が死んでゆくとき
078　006　あたらしい友と肩をくみ
078　010　（その友の名はもう思い出せない）
100　053　そう言って　黙って別れた友よ
100　057　友よ
100　065　友よ
100　071　友よ
100　078　友よ
103　013　（友だちとお別れのパーティをして
112　026　真白な花婿の胸をした戦友よ
112　030　なあ戦友　なぜ黙っている
112　048　さらばだ　戦友
148　001　戦争で死んだとおもっていた友が、

148　007　地方都市で鉄工所を経営していた旧友が、
148　011　どちらの友も、同じ大学で顔をあわせ、
148　029　元戦友から招待状がとどいた。
148　046　もうこれ以上、滅ることのない戦友の、
150　005　六人の友達の彼に対する考え方は夫々まるで違ってゐた。
150　017　しかし、友人たちは仲間のだれかれをあてこすっているのだと思いこみ、
160　044　神をうやまい　友達には親切に
189　010　それが仲のよかった友人の
189　017　最後の友を失い

ともされて　点されて
017　003　赤い蝋燭が点されて
054　044　ひとつづつ小さな灯が点されてゆくとき

ともされてゆく　点されてゆく
054　044　ひとつづつ小さな灯が点されてゆくとき

ともし灯
053　004　街のともし灯も

ともだち　友達
150　005　六人の友達の彼に対する考え方は夫々まるで違ってゐた。
160　044　神をうやまい　友達には親切に

ともに
010　004　白い帽子は頭のアリカを教へるとともに日の匂を発散させる
023　022　華麗なあなたの指輪とともに
026　016　蝙蝠傘とともにさ迷ひ
028　009　哀訴の蒸気を吸殻とともに皿の上に拾てる三重の硝子の向ふの鐵格子の中の
028　023　鳩とともにおお救世主の銅像の髭にもついて
028　035　おびただしい製品とともに
028　051　鉄道信号機の痙攣とともに
033　008　光沢とともに
033　020　あれは日没とともに
036　018　ああ愛する花とともにゐたいな
043　009　あなたの影とともに駛ってゐる
046　024　雷とともに海へ出て　空はつらなる水平線をはしり
091　004　ロースト・ビーフよりも香ばしいその匂いとともにやってくる
100　040　「何百万の死者の霊とともに
108　023　立つ波の拍子とともに
145　030　愛がなくともにんげんは生きられる

ともに　共に

003　008　扉の外をマアチが風と共に過ぎる
029　016　パイプと共に忘れてゐた家族のため
033　012　一個の器物と共にすべてが放擲された
167　069　共に暮した年月にも

ドライブウェイ
057　025　マニラ郊外のドライブウェイを疾走しながら

とらえた　捉えた
150　063　娼婦の悲惨さを、かなりの密度で正確に捉えたというだけで、

とらえた　捕へた
020　004　ポケットに捕へたのち

とり　鳥
002　014　灰色の鳥をまってゐる
005　029　あ　逃げた小鳥が月にゐた
013　004　枝に小鳥はゐない
017　002　駝鳥のやうにたちあがると
023　013　巨大な鳥になって夜の空に墜落し
028　045　そこを通る風の鳥の虫類の笑ひ
028　048　小鳥や草の声とは無関係である
035　006　それは一羽の鳥よりもはやく帰ってくる
036　025　頭髪に巣をかける喧燥な小鳥たち
037　010　けものや鳥よりもすばやい身仕度で
039　053　わたしはいつか鳥になるかもしれない
041　081　あなたはじぶんの鳥を育てた
041　085　あの鳥は嗄れた声で歌ってゐる
044　005　鳥瞰すれば山河
046　010　あなたはみづからの心象を鳥瞰するため
046　013　人工に疲れた鳥を
053　030　みんな仲よく小鳥のように一つの枝でおやすみなさい
053　057　永遠の星　花　鳥　樹　魚などの
054　095　夕焼のなかからあらわれる鳥の囀り
057　020　鳥はいないし　まして人影はない
058　041　小鳥がとまっていることも見のがせません
082　015　すると小鳥がたそがれの窓に墜ちてくる
090　017　鳥獣や花をつくりだすまで
090　022　鳥や花をさがすように
097　001　一つの生命が、あるいは一羽の鳥の飛翔が、
100　021　やくざな渡り鳥のようにレインコートを肩にかけて
104　006　傷ついた鳥や獣の叫びでいっぱいだった
106　009　悪い空気のなか　鳥類のコンベンションが重んじられる

106　033　鳥の巣型の髪のカットに　度のつよい眼鏡を糸でつるして
106　036　不吉な羽ばたきをして　地面を歩く黒い鳥の男たちもいる
107　004　小鳥や空だけでなく
129　002　鳥はこず

とりあげる
062　029　わたしの手から鉛筆をとりあげるように

トリエステ
084　028　それはもうシリアやトリエステの軍隊よりも

とりかえしのつかぬ
071　009　われわれはとりかえしのつかぬ年月を
071　010　とりかえしのつかぬ過失を

とりかえしのつかぬ　とり返しのつかぬ
148　028　とり返しのつかぬ時間が過ぎていたのである。

とりかえそう
071　011　どうして一日の休みにとりかえそうとあせるのか

とりかはされて　取交はされ
028　024　如何なるゼスチュアが会話が取交はされたか

とりさる　とり去る
075　005　あのブイをとり去ることはできない

とりだす　とり出す
179　004　竹籠からとり出すリンゴには

とりちがえて
158　004　ぼくはとりちがえていた
192　014　薄暮と昧爽とをとりちがえていた迂闊さに、狼狽するも間なく、巨大な生きものの胎内にのみこまれるように、

とりちがえようのない
177　023　とりちがえようのない顔を運ぶために

とりついてきた
188　040　何かの縁で、とりついてきた病魔と、昵懇になり、

とりのこされた
054　018　死ぬことからとりのこされた僕たちのうえに

とりまいて
100　064　つながれた行列の影は鎖のように工場をとりまいていた

とりまいて　とり巻いて
142　029　また　いかなる非難中傷の壁、妨害の電波がぐるりをとり巻いても
148　041　夢の領土をとり巻いている闇のなかで、

とりまかれて　とり巻かれて
029　013　美しい喚声にとり巻かれてゐた

とりまく
025　032　高く登ってゆく階段をとりまくのは
033　021　おまへをとりまく五つのドアである

とりまく　とり巻く
048　027　トルソをとり巻く

とりもどす　とり戻す
106　034　時代におくれ　人におくれたすべてのものをとり戻すために

とりもどせない　取り戻せない
150　072　喪われたら二度と取り戻せないことを忘れてはいないだろうか。

どりょく　努力
150　008　極めて小さな事柄にもいたましいほどの注意と努力を払ってゐた。
165　006　そんな瑣細な努力さえ

ドリームランド
179　019　ドリームランドのスイッチを切り

とる
045　021　ふりそそぐ雨のみだれも手にとるやうだ
077　008　永遠に受けとることのない
188　051　人はただ歳をとるだけだが、時代は、変ったようである。

トルコ
142　007　同じことがギリシアやスペインやトルコでも起っている……

トルソ
048　027　トルソをとり巻く
048　034　かすかにトルソから涛の音がひびく

どろ　泥

006　011　泥まみれの鉄兜に水を汲んで
007　010　喞筒は空に向って泥を吐く　草の無い荒地ではとかく悪い感冒が
011　001　河の水は泥のやうに澱んで
046　023　この泥に塗れた水脈もいつかは
081　021　血と泥と鉄のしぶきをはねあげて
150　051　彼は我々の雑誌の創刊号に、玉の井の娼婦と客との交渉を扱った「泥沼」を書き、

どろぬま　（「泥沼」）
150　051　彼は我々の雑誌の創刊号に、玉の井の娼婦と客との交渉を扱った「泥沼」を書き、

どろまみれ　泥まみれ
006　011　泥まみれの鉄兜に水を汲んで

とわれている　問はれてゐる
009　015　いま責任を問はれてゐるのです

ドン・ファン
150　003　「彼は臆病なドン・ファンであった。

どんぐり　どん栗
150　020　どん栗の背くらべをしていたにすぎなかったが、

トンズラ
124　003　三人の男は　いまはトンズラ

とんそうした　遁走した
016　008　体操着のまま遁走した

どんぞこ　どん底
061　031　さんざめく裏街のどん底で、

とんだ　飛んだ
054　151　ちぎれた青空のように飛んだ一枚のハンカチーフ
072　019　飛んだり、跳ねたりするのだから

とんで　飛んで
055　016　海を飛んでゆく耳鳴りのようにおもえた
065　031　暴風の夜を飛んでいった。哀歌をうたいながら
068　005　一羽の鴎が飛んでいた
094　010　飛んでいる鳶や網をひく漁夫の唄で

とんでくる
005　012　新型飛行機がとんでくる

040　008　とんでくる抽斗などを

とんでゆく　飛んでゆく
055　016　海を飛んでゆく耳鳴りのようにおもえた

ドント・ウォリー
146　048　「ご心配なく（ドント・ウォリー）

トンネル
022　005　黒いトンネルの中で
023　008　トンネルの中で流れださない
025　003　黒いトンネルに海の響をきくところ
028　030　トンネルの入口はトンネルの出口へと

トンボ
007　008　多孔質の雲の間からトンボの眼のやうに碧く　アスピリンを積ん

どんよくな
136　023　どんよくな眼が

トーモロコシ
145　001　「至上のトーモロコシの毛がアゴにもある長髪の若者が
145　009　そこにもあったトーモロコシの毛のそよぐ丘陵をエンジェルがうまれるのに充分な広さ

な　名
020　002　バラ色の手に名刺が
020　007　名刺を通過したが
041　048　個人を非難しないわけにはゆかない　神々の名において
054　143　非ジェファーソンは独立宣言に署名しない
074　004　東洋の名もない植民地の海にうかび
078　010　（その友の名はもう思い出せない）
082　008　あらしの名残りがあった
101　044　沈黙よりも固い無名の木の実がはじけとび
106　027　高名な美学派の詩人みたいに　口髭をのばしたり刈りこんだりして
124　007　地名のない地図をたよりにスパイが暗躍
124　022　指名手配の一人は
124　037　名づけられぬ欲望の煽動者に幸あれ！
128　032　誰かが名づけた
141　012　すべてが終っている者には、ほかに呼び名はない。
142　004　西側の新聞や著名人の多くの声明には
142　078　反祖国的ないかなる文書に署名してもいいと思っていた
145　019　*静かに走れ*と命名された群集の河は昨日のように流れていた
160　013　コーネリアスという無名の男の　涙が出るほどおかしな物語

160 059 ニューヨーク・タイムズの記者が屍体置場のリストからかれの名をみつけ出し
160 066 かれの名は雑誌やアンソロジーでさえめったに見かけなくなる
184 010 四歳になったばかりの養子の名はヒロシ
184 015 「ヒロシ」という日本名の

ない
007 002 あたり　見知らぬ老婆が咳をするのはわれらにかかわりのないこ
007 006 古風な鐘は藍をにじませて鳴る　曇る　動かない土絵具のカンヴ
007 014 する《されるのはまあ仕方がないでせう》
007 016 あ見給へ　昏の河の上を歯を剥いた白馬が乱れるではないか
008 006 げられ　叢には懐古的な蛇はゐない
009 009 だが鶯は出てこない
009 014 にがくはないので
010 016 新しい射手よ　一本の樹のみを監視するのは賢明ではない
011 003 葡萄棚には葡萄の木がない
013 004 枝に小鳥はゐない
014 015 けれど燃えないうちに水がはいったよ
015 003 花は眼のある動物を見ない
015 004 傾いた机は風を聴くことがない
015 010 舶来煙草のことを知らない
015 013 昨年の唄であらうかもう見えない
015 016 眠ってゐないのは時計であり
017 031 どうしてよいか解らないほど
017 035 一言も觸れなかったかも知れない
017 038 もう繃帯もまにあはない頃になって
018 002 質量の影も見えない
019 002 夢みることを許されない
021 028 円形の窓のない世界から
022 008 不幸の外に流れ出さない
022 010 眼に見えない
023 006 実体のない窓窓に雨が降り
023 008 トンネルの中で流れださない
023 011 再び実体のない建築の翳は
023 012 きこえない見えない世界で
023 017 風の運んでくるその言葉が見えない
025 019 地平線もなく煙もみえない球を眺め
025 022 動くこともない顔を彫り
025 051 祈のない叫び声と
025 052 歯のない哄笑とが
026 023 芽生えのない種子が
027 017 局囲の跫音をきかない
028 001 一本の花の茎もない空の下に
028 007 二十分も早いことに不思議はない

028 029 彩るものは何であっても何でも構はない
028 037 それは植民地のためではない
028 040 すべてが平和であるようにとか云ふ必要もない
028 049 しかしこれらは何も意味しない意味はない
028 072 すべてが歴史の容器の中にあるとは限らない
029 003 凭れかかる椅子もない
030 005 そこらあたりの壁には花もない
030 006 どこからともない一滴の水一滴の音に
030 009 夜が垂らす耳はない
030 014 動いてゐない動物たちが
031 004 音はドアの中でさへ聞えない
031 008 もう花などどんな世界にも垂れはしない
031 019 けれど今になっても芽をふかない
031 026 もう何も信じたりしないがよい
032 015 とほく海がひろがってゐるかもしれない
033 018 具足は視界の外ではない
036 009 悲しみは額のあたりの翳ではない
036 026 それらは花花ほど愛らしくない
036 027 花花の薫りと肌をもたない
039 003 さんざめく市場の広さもない
039 016 哀れなことにちがいないと思ふ
039 022 もはやどんな力も持ってゐないことを知れ
039 028 それは涙に似てゐたのかもしれない
039 049 あなたの果てしない翳のなかであったのか
039 053 わたしはいつか鳥になるかもしれない
039 056 慄へることのない獣たちよ
039 057 みんなわたしの言ふことを信じないか
039 067 離れることは許されない
039 068 いとしい樹木も逃げはしない
039 072 測りしれない地平線のむかふから
039 078 淋しいものに違ひない
039 099 むかしの声もとどかない
039 116 わたしはいつか虹を見るかもしれない
039 121 だがわたしはあいつらを許さない
039 133 だがわたしは悔まない
039 137 もはやこの身にもどらない
040 006 じぶんの声も聞えない
040 014 すべての車輛は動かない
041 002 海よ　そして人気のない墓場がある
041 003 地の果よ　そして濁らない泉がある
041 010 社交術があなたを涸れさせたり育てたりしないうちに
041 037 青春よ　もう再び戻ってきてはいけない
041 048 個人を非難しないわけにはゆかない　神々の名において

041 078 あなたのではない鏡のなかへ消えてゆく
041 080 純潔な空気が咽喉を塞ぎ　見えない量に苛まれて
041 109 あなたを愛する者はない
041 119 誰のものでもないと思ってゐた樹木
041 123 もはやあなたを導くものはない
041 130 あなたの意志はそれほど強く　それほど果敢ない
041 136 目的のない風が立つ
041 138 あなたの指はまだ感覚を失ってはゐない
041 147 あなたを愛する者はない
046 004 石で作られた涯しない屋根の町の
048 009 固さのない
048 015 まるで滅びることのないもののように
049 003 いつも逆に傾斜した獲物のない地平線しか見えない。
050 009 「実際は、影も、形もない？」
050 027 「さよなら、太陽も海も信ずるに足りない」
051 005 だが何処へ？　ヨオロッパでもアジアでもない
051 012 病んでいるのは日本じゃないか。
051 027 闇に扉はないだろうか
051 032 あの鍵穴はまばたきしない眼……
051 038 把手のない扉。
052 018 どうしてわたしが覚えていなければならないのか
052 025 誰もいない淋しい部屋を夢想する
052 029 死にそこないのわたしは
053 009 わたしはわたしの行方を知っていない
053 043 いのちを惜しんで暮すことに悲しみなんかありゃしない
053 049 わたしは一日よりもはかない一年を
053 064 なんにもわからない　わからない
054 003 僕らはもう会うこともないだろう
054 010 惜しみない賞讃の言葉をおくった
054 025 涙ぐんで　ときには涙ぐみもしないで
054 040 「僕はここにいる　君がいないところから
054 042 ここにいる僕はここにいない」と……
054 045 もしかしたら君の姿が霧の中からぬけだしてこないかと
054 061 単により高尚な国民　結社　人間の材料にすぎないと
054 085 鍵は僕が失敬した　そしてもう決して返しはしない」
054 092 その平たい背中には背骨がないということを……
054 123 小さな灯りを消してはならない
054 130 だがあたりには誰もいない
054 143 非ジェファーソンは独立宣言に署名しない
054 144 われわれのアメリカはまだ発見されていないと
054 153 出口のない部屋から
054 161 なにげない挨拶のうちから生れる未知の国民のことを……
055 026 おれとおまえのはかない希望と夢を

055 030 なんだか眠りたりないものが
055 040 おれは慢性胃腸病患者のだらしないネクタイをしめ
055 055 うまく抱擁することができないのだ
055 065 永遠に吠えることのない狼に見えてくる
056 011 廃墟のなかを踊り狂っているのが見えないわけではない
056 014 かすかに聞えぬわけでもないのである
056 016 じぶんの不幸を悲しんでいるわけではない
056 017 まして夢を見ているわけでもない
056 019 明日もなければ今日もない
057 020 鳥はいないし　まして人影はない
057 028 泣いたこともあったかもしれない
057 032 レッテルでもなければ　絵皿の風景でもない
057 039 はかない幻影よ
058 013 あまり感心しない生活をしています
060 014 高貴な冷たい戦慄を感じているにちがいない
061 022 なぜ止まらないのか
061 030 なぜ止まらないのか
061 036 未来も愛もありやしない。
061 038 なぜ止まらないのか
061 048 風にとぎれるはかない幻想が
061 076 誰も見ていない。
061 092 誰も聞いていない。
061 097 厚くまくれた歯のない唇をひらき
061 105 誰も知らない。
061 117 心を悩ますことはないのだ
061 163 星のきまっている者はふりむこうとしない。
061 174 火のない暖炉に向いあっています。
061 199 わたしにはまだ罪が足りないのですか、
062 010 誰も見てはいないから
062 019 「もし身体にも魂にも属さない掟があるなら
062 025 誰も見てはいないから
062 032 愛していても愛しきれるものではないし
062 033 死んでも死にきれるわけではないのだから
062 036 始めも終りもない夢のなかを駈けめぐる
062 044 あてもないわたしの道は
063 014 ぼくのいない眠りのなかで
063 017 あなたのいない夢のなかで
063 026 ぼくがあなたを信じないように
063 027 あなたはぼくを信じようとしない
064 027 ――星のない夜には希望がない、
064 028 ――愛のない窓には未来がない。
065 008 明るく笑っていた。その冷たい、声のない笑いは
065 048 星も月もない夜、毛布にくるまった男は

066 028 だれも、たすけてくれないの？
066 039 眠れない部屋のあかりがひとつ
067 015 ぼくをすこしも驚ろかさない
068 018 一直線をえがく　はてしない水平線にそって
068 027 やるせない女と海の思出があった
069 013 帰らなければならない
069 029 動かない顔がある
069 032 動かないベッドがある
069 038 見えない幸福におびえて
070 017 抱きとめておくことはできない。
070 021 あなたの指は何もつかまえることができない。
070 026 ぼくはどうしても逃れることができない。
070 029 形のない魂の叫びまでしめあげてしまう。
070 030 わからない、どうして此処へ落ちたのか
070 031 ぼくにはわからない、
070 032 この窓のない部屋で
070 034 昇る陽もなければ、沈む陽もありはしない、
070 041 愛もなければ、憐みもない。
070 042 ぼくは見えない出口をさがすように、
070 044 はてしない壁を手さぐりして、
070 046 誰も知らない寝室の
070 048 誰も知らない寝室の
070 058 なにひとつ諦めてやしないだろう
071 013 わからないひとつの運命である
071 016 昨日も明日もない
071 036 何も見ない
072 022 迷信も愉快だし、科学的検討もまんざらではない
072 024 独断批評家の口ぶりもわるくはないし、皮肉な記者のポーズも捨てがたい
072 041 合理的な法則があるとは信じられない
072 071 このはてしない空虚は
073 017 平和のないところから立去らなければならない
074 004 東洋の名もない植民地の海にうかび
075 005 あのブイをとり去ることはできない
075 008 永くとどまることはないだろう
075 012 悪魔の手におちるかもしれない
075 015 もう二度とめぐりあうこともない
076 005 さりげないぼくの微笑も
076 007 ぼくのものでもきみのものでもない
077 008 永遠に受けとることのない
077 014 （永遠に受けることのない報酬は
077 024 もう超えることのできない境があり
077 034 再び生きかえることはないだろう）
078 010 （その友の名はもう思い出せない）

079 009 なお何も浮んでこないところ
079 023 いわれのない恐怖にあって
079 030 ぼくらは水平線をこえねばならない
080 001 涯しない眺めに
080 019 （見えない水平線にむかって
080 021 もう　きみはこの涯しない眺めの
080 023 きみのかくれた意志をふりおろすことができない
081 020 生身で受けとめているのは兵士ではない
081 023 ぼくらではない
082 013 声のない叫びは
083 007 なにもかも光と影のたわむれにすぎない
083 008 ほそい声で虫がないている
083 016 これはもう丘とはいえない
084 013 マリリン・モンロウのせつない性のささやきーー
084 037 この世のものでない弦と弓は
085 006 未来は蒸されぬ腸詰にすぎない
085 025 インクや涙や食塩で錆びたりしない
085 030 絶望も希望も必要でない
085 031 きみが求めているものは善悪でない何ものか
085 032 光と影で区分できない何ものかであろう
087 008 聞きわけのない耳でかぶりをふって
087 010 いかにして食えない骨を食わせるか？
087 012 いかにして食えない骨を食うべきか？
087 018 聞きわけのない耳でかぶりをふって
087 019 いかにして食えない骨を食うべきか！
088 006 あどけないおまえの声は　いつもぼくに
088 007 ぼくの持っていない愛情を思い出させる
088 012 はてしない空　麦畑　街々
088 015 わけへだてのないぼくたちのあいだに
088 016 見えない国境をつくっているか
088 020 話していいこと　いけないこと
088 032 ぼくのものでない夢を
088 038 ここには犬がつないであるの
088 042 あどけないマリの夢よ
088 046 物言わぬ空というものがない
088 047 消えさる喜び　永くとどまる悲しみというものがない
089 019 雪のなかでしか経験したことのないすべてのものが……）
089 034 さりげない心の素描がありますが……）
090 013 巨木の五百年は美しくない
090 019 けっして明るくならない
091 014 きみの季節は飼主のない猟犬のように飢えている
092 003 もうない
093 010 かかる読書法は良い趣味以外のなにものでもない

093 014 これから壁のむこうに出かけなければならない
093 019 たえまなく打ちよせる多彩な波にすぎないことがわかり
093 021 やがて遠ざかってゆく波にすぎないことがわかる
093 029 それは血や光りがかえってゆく水平線のない世界だ
093 031 輝く太陽を見た者はいない
094 007 ない蹴爪で砂をけって羽搏いているテント
094 012 行ったことのない島や港や都市に
094 013 会ったことのない人たちのことを思いうかべているもの
094 015 ぼくの記憶はまだ生れていない
095 005 一時に石の竈で燃やさなければならない
097 003 あなたは生命も飛翔も見ないだろう。
097 004 しかし雨を描いた動かない斜線は、
098 013 誰のものでもない淋しさが
098 018 さっきからすこしも動かない
099 010 ぼくの記憶は思いがけない不幸のシークェンスで翳ってくる
100 017 目的のない風が立つ
100 080 何処にもないのだ
101 005 こんなふうにおわるのはなにも世界だけではない
101 020 すこしずつ退却してゆく軍隊をもたない
101 025 どこかの国境を守るためではない
101 026 勝利を信じないぼくは……
101 030 すこしばかり遠いところ　狼の影もないところ
101 031 どの首都からもへだたった　どんな地図にもないところだ
101 038 奥地や海洋で　抵抗する住民をうちころす必要はない
101 043 きみたちのいない暗い空のあちこちから
101 047 森や田畑やうつくしい町の視覚像はいらない
101 053 歌う者のいない咽喉と　主権者のいない胸との
101 063 勝利を信じないぼくは　どうして敗北を信ずることができようか
102 006 みんないっせいに銃剣の襖を立ててくれ
102 008 魂は死んで二度と生れてこないから
102 020 若き日はもうかえらない
103 005 一言も語ろうとしない
103 018 粗暴な肉体の礼讃者でもないのだ）
103 019 風土とか習慣によって去勢されない
103 024 陸封されたアジアの辺境でもない
104 001 金色の翼もなければ　風の鬣（たてがみ）もないのに
104 011 わたしの血汐は　もう歌おうとしない
106 003 こちらに向けていても　なにも見ているわけではない
106 005 誰一人笑っていないが　ユーモアに欠けているためではない
106 008 親しくもないのに止り木で肩をよせあい
106 017 人生を説明するのに　どうしたって何かが足りないようだ
106 025 だがいけないのは口である　ぶちこわしである
106 030 尖がった紫の口髭なら　ずっと微妙な震えをもつかもしれない

106 032 正直な諦めを抱いて　立去るべきではないだろう
106 038 詩人はもちろん屈してはならない　その外貌がどうであれ
106 039 かれはじぶんを憐んではならない　その罪がいかに深くとも
106 040 かれは自分を罰してはならない　屠殺者や皮肉屋の包囲のなかで
106 041 かれは屠所にひかれる小羊であってはならない　たとえその皮を剥がれても
106 042 血を流してはならない　その肉を引裂かれても
106 043 詩人の本質は変らない　それは目にみえない奥にあって
106 047 対岸は霧がふかくて見えないが　残る一つの疑問には
106 049 ……重要なことはまだひとつも起ってはいない……と
107 013 在りし日を嘆くでない
109 010 生れかわるためには、死なねばならないと、
110 001 もう風を孕むこともない
110 010 おーい、と呼んでも答えはない
111 002 家のない場所へ行ってみたい
111 003 どこへも帰りたくない
112 013 過去でしか会うことのないおれたちだ　何の秘密もあるものか
112 024 ちいさな賃金を得なけりゃならない　あすもあさっても
112 031 まっすぐこちらを見ながらおまえは何も見ていない
112 040 水が酒に　欲望がもっとたくさんの浪費にならないとこぼしている
112 045 嵐は数えることをしないが
112 049 おれたちが本当に別れるのはこれがはじめてだが　ユダの接吻はいらない
113 013 単純でなくちゃならない
114 004 一粒の種子も残らない
114 011 「ぼくはたたかわないにっぽんじんです
115 005 お別れの言葉はいらない
115 007 立止まってはならない
115 010 一千年の別離もさびしくはない
116 003 きみとぼくにしかわからない
117 010 失うものはもうないから
118 009 ちっともこわくない？
120 016 修羅のくるまもみえない
120 020 人生に遅刻したのも気にしないで
123 002 あらたまって言うことはない
123 007 未来に値段をつけたくない
124 004 仲間も涙も校歌も国家も売り足りないが
124 006 日付のない暦をめくり
124 007 地名のない地図をたよりにスパイが暗躍
124 013 わずかに自己への希望でしかない日……
125 001 髭をそらない日はない
125 013 さりながら果しない休日がつづく
125 018 われらの人生なんてロクなものではない
125 021 密室のドアはどれほど厚くても充分とはいえない
125 024 幸福である　証拠はない

126 020 人間の精神の問題かもしれないから。
127 008 どうしてかわからない。
128 010 われわれは死ぬほかはない」
128 028 「リーチ」に「ツー」はつかないはずだよ
128 061 おれはもう会わない
128 067 いくら飲んでも酔えない
128 074 変りはないよ
128 090 われらの時代に目覚めはない？
129 003 地上の物音はきこえない
129 005 殺された男の丘もみえない
129 009 なさざる悪事はひとつもない
129 016 ひとけのない屋上プールと
129 018 汗をかかない肌と
129 019 匂いのない風と
129 020 時を告げない時計と
130 001 鴉が二声ないて
130 007 美少年に見おぼえはない
131 003 それからは人に会わない
132 006 わたしを見た者はいない
132 012 もうすることはない
133 002 ひとりいることにたえられない
133 008 出あおうとしない心のためか？
133 010 愛する者を欲しないためか？
133 016 誰も語ろうとしないし聞こうともしない
133 024 永遠に帰るべき家をもたない
134 001 悲しくもないのに
134 008 この群集の行方は誰も知らない
136 005 葬列が見えない
136 013 死にたくないと雪が降り
136 014 生きたくないと樹は嘆く
137 011 もう誰も知りたがらない二人の秘密
138 017 滅びようのないかたちがなつかしい
138 019 もう夢には戻れない
139 005 わたしを呼んでいるにちがいないのだが
139 006 どうしてもその主の姿を尋ねあてることができない
140 001 ぼくは行かない
140 005 行くところもなければ帰るところもない
140 006 戦争もなければ故郷もない
140 013 この世のすべてに変りはない
140 020 かれは実体のない都市の雲の中に住む
141 012 すべてが終っている者には、ほかに呼び名はない。
141 014 在りえたかもしれないすべてのものよ。
141 016 ぼくたちはお互の影でさえない。

142 008 と言わなければならないようだ
142 020 考えてみる人はほとんどいない……」とあなたは語った
142 022 あなた自身であることをやめないから
142 026 わたしやわたしの家族の頭から　髪の毛一すじ落ちやしないとは
142 030 あなたを黙らせることはできない
142 057 監獄・収容所システムに隠れ場所はない
142 072 卑劣さを代償とした自由を受け入れようとはしないで
142 078 反祖国的ないかなる文書に署名してもいいと思っていた
142 083 ずっと痛烈かもしれないが
142 085 自ら明らかなことにも　悲しいかな　認めようとしない者があり
142 089 災厄を招くことはない　他人の災難に
142 090 知らんふりしたところで投獄されはしない
142 093 家を夢みているだけでは　古い家も新しい家も守れはしない
142 103 少しの犠牲で将来の破滅を防げるかもしれない)
142 105 巨大なものの力が　個人の信念より永続するという証拠はない
142 108 一個の弱い人間の信念をも挫くことができないとわかれば
142 114 記憶のなかの血はけっして乾くことはない
142 115 「残忍な歴史の流れはくいとめられないとか
142 116 信念を持つ人間の精神が世界最強の力には通じないとか
142 117 そんな考えは受入れることはできない
142 120 　これ以上は一歩も進ませないそ　と宣言する不屈な人間の精神のみが一
142 125 ぼくたちはけっして忘れないだろう
145 003 何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに
145 004 はいるとつぶやきながら黒い色の真実やめったに売れないエンジェルの絵を売っていた」
145 007 売ってはいけないものを売る深夜の
145 011 「忘れはしないという虹色のラヴ　ソングが聞えていた
145 014 有りもしない幸福の歌がいつものように響いていた
145 022 行先をきめないで出発し到着したときに旅は終っていた
145 031 しかし　水がなくては生きられない
145 033 倚れるものもない空間にそれは倚れていた」
145 035 壁のない空間にそれは倚れていた
146 004 どこだってかまわない
146 041 「もうここにはいないのかしら？」と思い
147 006 一瞬の激情で死に突入していたかもしれない
147 012 生きることに怖れも困難も感じない髪の毛の薄い男になっていた
147 013 此頃ではてんで死のことなど考えやしない
148 015 一人分の人生を、生きるのは容易な業ではない。
148 017 気晴らしはあっても、過去への橋渡しではない。
148 019 感傷的にかかわっている暇はないのだ。
148 022 土にかえる目立たない姿勢をしていたが、
148 046 もうこれ以上、滅ることのない戦友の、
149 002 青い蒙古斑が忘れられない
149 004 舵取りはいないのに

150 010 自分の血が全部流れ出してしまふのではないかと怖れた。
150 014 一匹の魚さへ住んでゐない沼に釣糸を垂らしてゐる影だけが生きてゐる……」
150 018 自分のことではないかと猜疑したりする者もあった。
150 022 記憶の中で見逃していたさまざまな事柄に気づかないわけにはいかない。
150 029 文学の世界にとどまっている者は、私しかいない。
150 036 しかし、そのことに、「私」は、全面的に欺かれているわけにはいかない。
150 037 「本質的に我々が誇り得るものは生理以外に在り得ない、
150 040 ずいぶん興醒めなくだらないことをいう奴だと思ったが、
150 043 この中に隠されていたことはまちがいないだろう。
150 048 生理以外に在り得ないとは、ずいぶん淋しい話である。
150 049 文学から離れたことに話をかぎれば、それだけがすべてではない一例として、
150 067 どうしようもない怠惰か、安易な現状肯定である。
150 072 喪われたら二度と取り戻せないことを忘れてはいないだろうか。
150 078 そちらでは気分的にパッとしない天候がつづいているそうですが、
151 002 これは間違いない
151 008 貯金は定期普通預金合わせて七百万に足りない
151 013 学問もなければ専門の知識もない
151 015 なんと魅力のない五十六歳の男だろう
151 020 一向に死ぬ気配を見せないのはどうしたわけか
151 023 どうしようもないデラシネの
151 035 ものの数ではないかもしれないが
151 040 はじめから一人にしておけばよかったのかもしれない
151 042 おまえは誰にも似ていない
152 007 無意味ないたずらにも
152 012 うれしくならないこともないよ
152 017 澄んだほほえみを忘れちゃいけない
152 032 すべてがこんなふうだったらわるくはないぞ
154 003 ふたつとない旅の終りの
154 006 瑠璃玉の道はもう見えない
154 009 想像しえない創造の日からの
155 021 知らない顔をかきわけ
155 034 見倦きないものといったら
156 006 一ぺんも言ったことはない
156 009 聞かされたこともないが
156 015 とても敵わない
156 023 心性のちがいはどうしようもない
156 032 すべてを奪われても文句を言えない
156 033 すべてを与えられても文句を言えない
156 035 私は口をつぐむほかはない
158 020 自然にたいして有罪でない人間はいない
158 028 追いもとめなければならない
158 037 苦しんでまで詩を書こうとは思わない
160 003 気がつかないうちに　私もまた

160 004 死にたくなっていたのかもしれない
160 005 忘れてはいけないことを　さがすような眼で
160 019 「お仕事は？」と訊かれ　ほんとのことを口にしたがらない
160 052 使うもの以外にきみの物はないのだぞ
160 053 それから物語のコーネリアスがどうなったかはわからない
160 067 （私たちが忘れてしまうのも無理はない）
161 003 誰でも赦さなければならない
161 010 あなたも赦されはしないだろう
161 013 おのれではないから
161 014 あなたを赦すことはあなたにはできない
162 015 恍惚の所業であったかもしれない
162 018 かれが何を見たかは予断のかぎりではない
163 021 試してみようではないか
164 005 あるか　あったか知らないけれど
164 015 ずるい世渡りをするつもりはないが
164 021 そこにいるのか　いないのか？
164 023 ぼくは喋べらなければならない
164 027 何度でもくり返さなければならない
165 011 何度、声にならない叫びを上げたろう
165 013 ぼくたちの間にはどんな逆転もありえないのだから
165 032 測り知れない深さで
165 034 何も映っていないときには
165 036 子のいない冷たい歓喜に
166 011 いのちもいらない初年兵の頃には
166 025 きみは死にかけているのかもしれない
166 028 きみは死にかけているのかもしれない
166 032 ぼくはもう死んでいるのかもしれない
167 015 忍べないほどではないと思っているうちに
167 017 いつ崩れ落ちてもおかしくない
167 032 いかなる罪悪も存在しないかのようだが
167 053 家が倒れることはない
167 058 家の崩壊はないものと念じてきたのに
167 060 こらえきれない一雫が光っている
167 072 とてもとても悲しいものにちがいない
167 074 昨日よりよき明日は来ないのだから
167 080 よりよき消滅を迎えようではないか
168 006 やるせない女人への郷愁があった
169 008 化石になるほかはない
169 021 数えきれない失策
170 009 （なんでも書けるなんてとんでもない
170 011 よりそう影もない
170 021 （見えないところで自然は豊かさを失っていない
171 001 他者の犠牲を必要としないしあわせは

171 002 ありえないという理由で、
171 016 人は幸福であり満足だとはいかないものか、
172 004 人気のない街道を
172 019 起つことも寝ることもできないでいる
173 023 世界は進歩しない　が
173 039 なのに　この世はさっぱりよくならない
173 046 汚ない三枚の毛布にくるまれば
173 051 死を知らないなんて素敵ではないか
174 011 この三十年間、ぼくはきみに一度も電話などしたことがない、ちょっぴり心が痛み、それはなぜかと考え出すと、疑
174 014 「子供っぽさ」が抜けないという共通点こそ、最大の障碍だったのだろう。
174 016 再起はおぼつかないという報らせを受けてから、
174 021 おっとりしていて、どこが強いのかわからないような碁風だった。
174 029 きっとあったにちがいない、と。
175 008 一生かけて見つけないうちに
175 012 病床のきみの耳にも聞えているに違いない
176 024 これ以上まぶしい裸にはなれないのだ
176 028 渡るべくもない
177 023 とりちがえようのない顔を運ぶために
177 024 きみ自身の街路を行かなければならない
177 032 バスは朝まで来ない
178 004 こののちは訪うべくもないゆえに
178 007 どこにもない場所に預けにいく
179 016 見守る者は誰もいない
180 002 何が飛び出したって驚きはしないが
180 010 「御手紙の内容、何のことやら判りません」なら「女の子の心理」がどうだってことも関係ないじゃないですか？
180 011 「女の子の心理」なんて私だって判んないですよ。私だって「男の子の心理」は判んないですからね。お年寄り
180 020 夢のなかで恐怖に出あわないのが本当の年寄りなんです
180 021 これから会うことはないが
180 024 貴方に「女の子の心理」が判んなくたってあたりまえなんです。貴方は心理学やってんのじやないのでしょうか
180 032 一度も出会ったことがない
180 034 測り知れない現実的形態を網にかけて
180 040 何度でも立ちかえらなければならない
180 042 たずねるものが見つからないときもあるだろう
180 051 たね。しかしそれはそうそうあるものじゃない。違うものの方が圧倒的に多いー。では、さよならK.I.
180 058 上に行くしかないってことか
181 033 急ぐことはない
182 003 ことのほか躯の工合がよくない
182 010 嘆くことはない
182 020 若さを羨むことはない
183 008 街全体がもひとつぱっとしないのは
183 025 のんびり散歩したりする人はいない
184 020 「なるようにしかならない」と言っているが
184 024 国と国となったらそうはいかないー

184 025 結び目に愛がないからで
185 009 声にならない呻となって
185 019 最大のニュースにちがいない
185 021 何が起っても不思議ではない、と
185 025 誰にもわからない
186 011 なんともいえない？
186 013 （距離の旅はしたことがないから
186 014 比較はできないよ）
186 047 理解されないと思うのは傲慢、相手に対する侮辱です！
186 048 理解されるに足る自分があるとは思っていないよ
186 066 空間が空間であるうちは物の集合にすぎないから
186 067 何も怖くない
188 014 蓄膿症ではないと思うのですが、とにかく鼻が詰り、
188 015 鼻孔に、時々、薬をささないと、
188 031 何の挨拶もしなかったのではないだろうか。
188 038 私の癇疾、であるのかもしれない。
188 044 不定愁訴の繰り言のように、あることないことに、蘊蓄を傾け、
188 049 これはもう、こたえられない、
188 068 そのコピーを読んだ記憶は、全くない。
189 007 「すまないが
189 008 きみの顔を見たくない
189 029 塵一つない白い卓布
189 030 色は青いが新鮮でない野菜
189 032 腐った肉片を歯のない口に運ぶ
189 038 指先がフォークになかなか届こうとしない
189 041 ぼんやりとしか見えてこない
190 001 帰るところはそこしかない
190 015 動かない山懐につつまれて
190 016 残りすくない瞑想の命を楽しむ
190 018 そこにしかない
191 001 耳をすませばきこえない
192 001 もはや、わたくし、と特定する必要はない。わたくしには、わたくし以外の
192 003 うつむいて、歩いているところは、一木一草もない、黒い砂地で、
192 011 もしかすると、近づくにしたがって、遠ざかっていく海なのかもしれない。こんなところは、日本中のどこにもあり
192 012 はしない。
192 013 途方もない迷路に入ってしまったと気づくと、あたりが急に暗くなってきて、
192 015 みるみる漆黒につつまれていく、ここは、もともと海底だったところではないか。冷気に身ぶるいし、
192 018 の誘導標識にちがいない。
192 019 助かった！　*まだ*死にたくはない。眼は真珠に、骨は珊瑚になったとかいう、五尋の海底の父になるなんてごめんだ
192 024 これが罰か、太陽と海を呪ったことの？　たった一度の空想の罪にしては、酷すぎる報いではないか！
192 026 叫ぶ、が、声にならない。ぴったり浪に包囲されて、
193 004 一歩一歩あゆむほかはない
193 018 同じ風景は二度と現れない

ない　無い
007　010　喞筒は空に向って泥を吐く　草の無い荒地ではとかく悪い感冒が

ないた　泣いた
057　028　泣いたこともあったかもしれない

ないて
083　008　ほそい声で虫がないている
130　001　鴉が二声ないて

ないで　凪いで
057　017　トバ湖は凪いでいた

ないている　泣いてゐる
005　024　おや　天使が泣いてゐる

ナイフ
023　009　街灯は光をナイフのやうに操って
069　023　つめたい風の薄刀のナイフは
085　013　きみは真直な刃のナイフ
085　026　きみはよく切れるナイフ
130　010　ナイフで刎ねた
179　003　よく光るナイフ
179　030　ナイフの刃には一滴の露が宿る、と。

ないぶ　内部
018　016　内部から燃え始める
025　018　燃えあがる世界の窓の内部から
046　045　内部を刻む時計の音に　蒼ざめた河のこの沈黙はつきまとひ
048　016　内部からのひかりをひそかに愛撫している
100　042　たえまなく出血している内部の世界で
106　006　「笑うなかれ」　悲しい内部の声である

ないよう　内容
180　010　「御手紙の内容、何のことやら判りません」なら「女の子の心理」がどうだってことも関係ないじゃないですか？

なか
006　008　そういえば長いこと日のメを見なかったね
015　015　鏡のなかで眠ってゐる
017　019　星も花もゐなかった
017　035　一言も觸れなかったかも知れない
017　045　うっかり舌もだせなかった

027　003　空虚な鏡のなかを
030　018　すべては灰の降るなかで
030　029　色彩のなかの緑を
030　030　いま数々のなかから択りわける
032　001　ドアはなかば開いたまま
032　002　風はもう吹いてこなかった
033　003　いまおびただしい影のなかでもがく
034　014　気体のなかの透明な溝へはいる
039　049　あなたの果てしない翳のなかであったのか
039　055　一定の雰囲気のなかでしか
039　086　あなたはあなたの扉のなかに隠れる
039　106　暗黒のなかで
039　145　乾いた洞窟のなかに
041　036　おびただしい暇潰しのなかでうっとりした
041　041　夜どほし歌ってゐるな　寒い眩暈のなかで
041　078　あなたのではない鏡のなかへ消えてゆく
041　084　宿命的な輪のなかで
041　092　小さな影のなかで血の気を失ってしまふだらう
041　102　かつて　何処にも起らなかったこと
041　125　乾燥してゆく空気のなかで
041　131　あなたは街の雑閙のなかをとほり
046　017　眠れる波のしずかな照応のなかに
046　052　方位はなかった　花火も夢もなかった
046　053　風は吹いてもこなかった
047　009　頬骨がつめたい空気のなかで尖ってくる
050　002　あらゆる階段の跫音のなかから、
050　023　立会う者もなかった
050　024　憤激も、悲哀も、不平の柔弱な椅子もなかった。
050　026　きみはただ重たい靴のなかに足をつっこんで静かに横たわったのだ。
051　006　幻影のなかの島嶼……
051　015　海が熱い体温のなかで燃えたぎっている、
052　009　あなたの育たなかった乳房や
053　007　わたしのからだのなかに黄昏がいっぱいつまって
053　028　わたしのこころのお部屋のなかで
053　053　しかし落葉のなかでふりかえっても
053　056　降りつづく落葉の雨のなかから
053　062　お墓のなかでお目覚めになっているお姉さん！
054　033　そして風はなんにも答えてくれなかった
054　047　なかったか？
054　077　僕はなんにも見落しはしなかった
054　081　人々の笑いと踊りと宴会とのなかに
054　095　夕焼のなかからあらわれる鳥の囀り
054　131　空虚な額縁のなかで白い雨が乾いている

054 135 眉をひそめて手のなかのカードを隠してしまう
054 138 頭のなかでごちゃまぜに縺れる
055 001 ひどく降りはじめた雨のなかを
055 019 青い海のなかに二人の運命をうかべているはずであった
055 021 何処へも行きはしなかった
055 029 花瓶の腐った水のなかで溶けている
055 037 おれたちのベッドのなかで締め殺してしまったのだろうか
055 044 ひびわれた卵のなかの
055 045 なかば熟しかけた未来にむかって
055 051 額縁のなかに嵌めこまれている
056 002 夕暮のなかで煙草をすっている男がいる
056 005 彼の病んだ肋骨のなかを
056 011 廃墟のなかを踊り狂っているのが見えないわけではない
057 008 それでもぼくらが生きているとは信じられなかった
057 014 ぼくの知ったことではなかったのだ
058 027 その孤独のこだまのなかには淋しさの本質がちょっぴりあります
059 005 ひとりぼっちの部屋のなかで
059 008 母はついに帰らなかった
061 047 あなたはうしろをふりかえらなかった、
061 052 あなたはうしろをふりかえらなかった、
061 067 あなたは灰色の街のなかに帰ってきた。
061 072 あなたは破壊された風景のなかに帰ってきた。
061 080 悪臭と汚辱のなかから
061 102 犬は犬のなかで眠っているね
061 104 だけどみんな＜生きよ＞と言いはしなかったね」
061 107 過去は涯しなく未来のなかにあることを――
061 110 どれだけたくさんの罪が心のなかに閉ざされているかを。
061 119 淫売婦には浅瀬ほどにも見えなかったりするのだ
061 151 同じ迷宮の白い渦のなかに消えてゆく。
061 156 あなたは愛を持たなかった、
061 157 あなたは真理を持たなかった、
061 203 方位はなかった、
061 204 花火も夢もなかった、
061 205 「時」も「追憶」もなかった、
061 206 泉もなければ、流れゆく雲もなかった、
061 207 悲惨もなければ、栄光もなかった。
062 005 わたしの胸のなかで腐っている
062 036 始めも終りもない夢のなかを駈けめぐる
062 039 清い空気のなかで乳の瓶をふっているのを
062 060 わたしはこの香ばしい微風のなかに家を建て
063 014 ぼくのいない眠りのなかで
063 017 あなたのいない夢のなかで
063 019 しばらく部屋のなかを散歩する

065 016 いつまでも待っているよりしかたがなかった。
065 029 その秘密を夜のなかに穏していた。
065 033 翼のなかにさぐりつづけた。
065 044 乾いた咳を一つした。彼のイメージのなかには
065 045 何もなかった。絲杉をはなれた赤い月は
065 054 彼は待っているよりしかたがなかった。
066 018 たちのぼる煙りのなかの女をぼんやり眺めていた、
067 004 腹のなかには
067 010 血のなかに
068 014 ちかづく未来のなかに
068 026 恋をあさる若者の血汐のなかにも
068 031 どこにも鴎はみえなかった
070 025 この動く格子のなかから
070 037 ああ、ぼくの頭のなかには
071 005 今日のなかの明日
071 017 真黒な人ごみのなかで泣きさけんでいた
071 026 今日のなかの昨日
071 031 自然のなかの罠は本当の罠なのだと
071 044 今日のなかの昨日と明日
072 044 嵐のなかの、狂気のなかの
072 047 怒涛のなかの歓呼、歓呼のなかの怒涛
072 056 どうして、こんな明白なことがわからなかったのか
074 002 ぼくらの船を迎えるものはなかった
074 022 あかるい微風のなかに
075 009 記憶のなかの港には
076 014 不吉なやさしさのなかで
077 002 金の縁とりをした本のなかで
077 020 なかなか死のうとしなかった
077 037 金の縁とりをした本のなかに閉じこめられて
078 008 立ちのぼる水けむりのなかに消えうせるのを
079 005 青空の無のなかに溺れようとしている
080 004 きみはきみの心のなかに
080 014 求めても手がとどかなかったもののために
081 003 あたたかい霧のなかにあった
081 007 眠りのなかには
082 004 この明るい窓枠のなかから
082 012 しずかに無限の空のなかへ消えていった
085 024 女たちの血のなかから愛の喜びをしぼりだそう
088 033 たえずぼくの心のなかに組みたてる
089 008 「あなたの暖い心のなかにいますよ」
089 019 雪のなかでしか経験したことのないすべてのものが……)
089 023 「ぼくは凍ってゆく水のなかにいますよ」
093 030 誰もまだ夢のなかで

095　006　それらの炎のなかで
097　008　不幸であるという意識を持たなかったら、
097　009　毛深いじゅうたんの暗号のなかで、
097　010　あのブロンドの若い男は、動物になる夢を持たなかったろう。
097　014　空しい喝采のなかで、永遠に空中を泳ぎつづけるだろう。
098　022　凍った壜のなかの
100　037　だが　明日はなかった！
100　045　すこしずつ浮びあがってきた街のなかへ
100　049　あらゆる階段の跫音のなかから
100　055　はたせなかった約束を　いつまでも悔む人のように
100　075　きみの小さな記憶の孔のなかに吸いこまれ
101　034　かわいたとび色の風のなかで
101　059　弾倉をからにした心のなかまで
102　003　いまはなつかしい硝煙とその匂いのなかに
102　007　悲しいかな　海のなかに海をつくり
103　026　海の物語のただなか
105　003　だが、みどりはまだ固い幹のなかにある。
106　006　「笑うなかれ」　悲しい内部の声である
106　009　悪い空気のなか　鳥類のコンベンションが重んじられる
106　014　すべて相対的な時のなかを　いかにゆっくり他の時が進行するか
106　040　かれは自分を罰してはならない　屠殺者や皮肉屋の包囲のなかで
110　006　思出のなかにひきずって……
112　036　あさましい利害関係のなかでたたかいながら
112　043　眠りのなかで繁殖し
113　007　なかったから
113　024　答えよりも大きな疑いはなかったから
113　026　ファウストも存在しなかった
113　044　とまどいすることもなかったから
118　011　原始の眠りのなかで
120　007　それらが身体のなかを
122　005　なま牡蛎色に濡れた遠景のなかを
124　017　礼儀作法にかなわなかったら
125　011　もういちど血のなかをとおってこい
125　015　歩哨はいつも広場の明るい日ざしのなかを
128　009　「みなさんが助けてくれなかったら
128　086　ひからびた記憶の　屑籠のなかへ
133　012　背をかがめて小走る群集のなか
136　022　他人の眠りのなかで
137　014　空虚なこだまのなかの幾年月
138　018　……そんなことは一度もなかった
142　049　古い繰り返しのなかにいる
142　091　しかし　利己的で　近視眼的で　無防備な文明のなかにいて
142　114　記憶のなかの血はけっして乾くことはない

145 024 がなかった　と訴えていた
145 028 オーデンはスペイン内乱に参加しなかったというニュースを聞いた
146 003 明るい観光ビルのなかに入っていきました
146 011 ビルのなかは迷路になっていて
147 017 惜しまれる死に方をしなかったことで
147 018 生きていることが心苦しくならなかったことで
148 041 夢の領土をとり巻いている闇のなかで、
148 056 慟哭する場所はどこにもなかった。
150 004 自ら韜晦することなくして、何事もすることが出来なかった。
150 020 どん栗の背くらべをしていたにすぎなかったが、
150 024 自分の書いたものがまるでつまらなかったことである。
150 026 年月のきびしさに苦笑するほかはなかったが、
150 027 何かが間違っていると感ぜざるをえなかった。
150 032 虚構なるがゆえに傷つくことがすくなかったからか。
150 059 しかし、それから彼は、もう小説を書かなかった。
151 037 有難いことにどんな女にもむだがなかったから
152 011 無数の星の悲鳴を耳のなかに残すから
157 004 そよとも吹かぬ風のなかで
158 039 もはや暁紅をかいまみるまでもなかった
159 017 かれの生涯にはついぞなかったのに！
160 036 ほかに自己証明の道がなかったのである
160 042 陽気であれ！　思いわずらうなかれ
160 055 妻も子もなかったかれは　タイムズ・スクエアに近い安ホテルの一室に住み
165 024 どんな言葉の交換もなかった
165 026 父はわたくしの詩の一行も理解しなかった
167 026 強風のなかでクラブを振っているのは
167 031 こんなに澄みきった空気のなかには
168 010 渇くまもなかった
173 013 地獄の炎のなかで増大していく
173 025 女などには目もくれなかった
176 018 家霊の暗闇のなかから
180 001 手紙のなかから
180 009 とっくりと読みおえたにちがいなかった
180 019 夢のなかではずいぶん怖い目にあうものだが
180 020 夢のなかで恐怖に出あわないのが本当の年寄りなんです
180 025 ら……。貴方に判らなかろうと、もう少し付け足すと、昨年は形相の意味も知らなかったということ。私は「メ
181 014 いいゲームにはならなかったが
185 004 何のコメントもなかったが
186 041 どうしてきみにわかる？　なぜ今までぼくが新幹線に乗らなかったか？
186 042 機会がなかっただけですよ！
186 053 どんな空間のなかにあっても、
188 031 何の挨拶もしなかったのではないだろうか。
189 038 指先がフォークになかなか届こうとしない

191　004　心のなかで鳴っているのだ
192　022　最後の運をたよりに走り出していたのは、是非もなかったが、
193　020　同じ時は決して戻ってこなかった

なか　中
004　001　ガラスの中の青い花
004　004　白い蝋燭の中に住まってゐた
005　008　明るいシャボンの中から転がり出た
005　022　霞の中にとびこむと葩が散る
005　034　花の中で
007　013　阿片の軽艇（ボート）は霧の中へ青い泡を残して去るべく一人の少女を誘拐
008　016　金魚みたいにじっとして　水のつまったガラス鉢の中
009　011　夢を見るなら夢の中でと
010　007　やがて純白の雲の中にチョコレエトの肩が見えなくなる
010　014　パイプを握って雲の中から生れてきた少年は
012　012　ぎんの驟雨の中で
012　019　その中に沢山の兵士たちの顔がゐた
013　014　跨いでいった罐の中から
014　028　楽器のうす暗い腹の中に沈黙が
015　019　死んだものは壁の中に
016　011　透明なプロペラがメガネの中に
017　034　雨の中を盗み去られたことには
020　001　明るいガラス管の中で
021　026　白い雲の中で眼をつぶり
022　005　黒いトンネルの中で
023　008　トンネルの中で流れださない
023　015　軟弱な地を擡げ夢幻の中から
023　018　怖るべき悲しむべき速度の中に
024　004　けてゐる　寝床に散らばった怠惰な骨の中から　陰鬱な眼球
025　007　それらが船舶の歴史の中にあった時代には
025　024　金色の器の中に
025　027　あなたの頭髪の中に鶯が卵を生む
025　039　透明な樹液の中で
026　003　光の輪の中に羽ばたきがあって
026　012　黄昏の中に香料を撒き
026　034　わたしの手の中にある
027　023　わづかな煙はグラスの中へ降りてゆく
028　004　浴槽の中で思考したのは誰であったか
028　009　哀訴の蒸気を吸殻とともに皿の上に拾てる三重の硝子の向ふの鐵格子の中の
028　015　工場の透明な模様の中に編まれ
028　046　技師の懐中にある正確な地形図は
028　072　すべてが歴史の容器の中にあるとは限らない
029　005　すべて形骸の匂の中に住み

029　010　一つの海を風景の中に所有した
030　028　すべての記憶の中からたちのぼる
031　004　音はドアの中でさへ聞えない
031　012　水の中に影だけにたたまれて
034　005　鍵穴の中で
035　021　風の五つの渦の中へきえてゆく
036　010　いつも懐中時計は
036　016　黒の中へ消えてゆく街よ
036　029　迂闊にも醜悪な街の溝の中へ
040　022　壜は壜の中から滑りでる
041　043　記憶の中をとほってくる
041　074　あなたは孤独の中からも追ひたてられさうになる
041　110　あなたには人の背中しか見えぬ
041　139　水の中にはもう春がきてゐる
041　148　あなたには人の背中しか見えぬ
043　012　日はゆき　うす暗きとばりの中に
046　025　この橋も海中に漂ひ去って　躍りたつ青い形象となり
046　031　背中を行き来する千の歩みも
047　005　耳をすましている中枢に
048　012　川は音をたてて背中をながれる
049　004　色あせた壁の中には
050　019　「淋しさの中に落葉がふる」
054　045　もしかしたら君の姿が霧の中からぬけだしてこないかと
054　075　「出てゆこう　とざされた部屋の中から
054　088　君たちは僕に背中をむける
054　092　その平たい背中には背骨がないということを……
056　003　そして彼の背中のように淋しい風景がそこにある
057　004　いちどは犯罪許可証を懐中にして
057　043　大挙して街中でなつかしい歌をうたっている
061　212　生ける死者たちが空中を歩きまわる夜がきた。
062　009　いまでも空中をさまよっている姉さん！
065　020　中にあった。「何を考えているのか
068　019　空中に軽い死の飛沫をうちあげ
085　018　奇怪な造語で喋る連中の頭を踏みつけよう
097　007　あなたは暗い鉄格子の中に、永遠に繋がれるだろう。
097　014　空しい喝采のなかで、永遠に空中を泳ぎつづけるだろう。
098　005　こんな真夜中
101　008　空中の帝国からやってきて
106　010　第一列の中央に　いやな上眼づかいのかれがいて
106　023　そこに集中し隆起して　あるフイジカルな高貴さの象徴となり
131　004　背をこごめて街中で生き
140　020　かれは実体のない都市の雲の中に住む
142　029　また　いかなる非難中傷の壁、妨害の電波がぐるりをとり巻いても

142 068 　自分の著作中に登場し　そのために投獄されたすべての人々を
142 086 黙って背中を向ける者もいる　それにはそれの
142 098 世界中にその網の目をひろげているのである
146 034 わたしは無我夢中で逃げ出しましたが
146 045 振りむくと小柄な中年の外国人が
148 027 背中に淋しい影を宿し、
150 002 私は　囲繞地　というエッセイの中で、こんなことを書いた。
150 022 記憶の中で見逃していたさまざまな事柄に気づかないわけにはいかない。
150 043 この中に隠されていたことはまちがいないだろう。
151 004 大学を中退し職歴はほとんどなく
151 012 中身はからっぽ
151 016 背中をこごめて人中を歩く姿といったら
160 009 そんな今年の冬も終りに近い　ある日の真夜中
160 016 闇をつらぬく稲妻と烈しい豪雨の中から新しい発見のように甦ってきた
162 006 背中の瘤が
163 004 夜明けとも日暮ともつかぬ薄明の中で
164 020 奇妙な　ぞめき笑いの中に立ちつくす
165 009 黙々と机に向って仕事をする父の背中に
166 004 失われたものと現在あるものの中間で
167 024 背中をまるめて椅子に凭れている
173 008 この世の中　どこまで腐っていくか」
173 026 今では街中でも綺麗な娘に出あったりすると
174 019 ぼくは黒を持ち確実を三隅を占拠したが、中央の白が厚く、ずるずると敗けてしまい
175 015 きみとぼくは同じ一枚の画面の中にいる
180 022 夢の中でぼくに出会ったら
180 046 その人の背中に向って
184 006 タイ生れの中国人の医者と再婚した
184 019 若い中国人の夫は口癖のように
185 010 世界中の人たちに嚇みこまれ
186 056 それなのに、みんなが整列して中央に一つだけ空いている椅子
188 021 その中に「悲しむ老人」という作品があります。
190 004 父がうまれた村は山中にあり
192 011 もしかすると、近づくにしたがって、遠ざかっていく海なのかもしれない。こんなところは、日本中のどこにもあり

ながい
004 005 意地悪な眉のながい神が
013 009 ながい舌が垂れ下ってきて
053 045 ながい睫毛のしたに
054 022 ながいこと散歩したね
059 007 わたしにはながい悪夢の日がつづいた
071 043 われらはながい生涯をもって測ったりする
078 012 ながい月日もまたたくうちに過ぎさる
100 043 おろかにもぼくはながいことそう信じてきたのだ

101　027　ながいあいだこの曠野を夢みてきた　それは
106　045　それは苦痛と恐怖がからみ合う　ながいながい鎖で
108　030　理髪店からの長いながい戻り道
167　048　ながい幽閉の年月に耐えた

ながい　長い
006　008　そういえば長いこと日のメを見なかったね
025　044　さよならさよなら長い午睡の
108　030　理髪店からの長いながい戻り道
115　006　夜明けの道はまっすぐで長いが
142　001　「もう長いこと　この国のほんとうの歴史は

ながいあいだ　永いあいだ
053　023　永いあいだ眠っていたお姉さん！

ながかった
057　036　ながかった一世紀が終ろうとしているのに
076　009　ながかった航海の短かさについて

なかから　中から
005　008　明るいシャボンの中から転がり出た
010　014　パイプを握って雲の中から生れてきた少年は
013　014　跨いでいった罐の中から
023　015　軟弱な地を撹げ夢幻の中から
024　004　けてゐる　寝床に散らばった怠惰な骨の中から　陰鬱な眼球
030　028　すべての記憶の中からたちのぼる
040　022　壜は壜の中から滑りでる
041　074　あなたは孤独の中からも追ひたてられさうになる
054　045　もしかしたら君の姿が霧の中からぬけだしてこないかと
054　075　「出てゆこう　とざされた部屋の中から
160　016　闇をつらぬく稲妻と烈しい豪雨の中から新しい発見のように甦ってきた

ながく
043　014　ながく夜をまってゐた灯火は
045　009　いつか一つの息ながく絶えぬといふ
084　015　ながく髪を刈ったかるい男が
151　018　ずいぶんながく生きすぎた罰だ
161　017　ましてながく生きているというのなら

ながく　永く
075　008　永くとどまることはないだろう
088　047　消えさる喜び　永くとどまる悲しみというものがない
186　073　一粒の蓮の実を永く隠しておくことだよ

ながく　長く
041　142　傷つける断片　それは悼ましくも長く生きてゐる

ながぐつ　長靴
087　021　雨傘がいたみ長靴が駄目になる

ながされ　流され
039　136　いくたびか流された血は

ながしこんでいる　流しこんでいる
052　006　ほそい咽喉に流しこんでいる姉さん！

ながす
009　007　あなたは汗をながす
065　025　わけもなく涙をながす男の
065　053　しろじろと夜明けの光をながすまで
076　010　涙をながすほかには

なかで
015　015　鏡のなかで眠ってゐる
030　018　すべては灰の降るなかで
033　003　いまおびただしい影のなかでもがく
039　049　あなたの果てしない翳のなかであったのか
039　055　一定の雰囲気のなかでしか
039　106　暗黒のなかで
041　036　おびただしい暇潰しのなかでうっとりした
041　041　夜どほし歌ってゐるな　寒い眩暈のなかで
041　084　宿命的な輪のなかで
041　092　小さな影のなかで血の気を失ってしまふだらう
041　125　乾燥してゆく空気のなかで
047　009　頬骨がつめたい空気のなかで尖ってくる
051　015　海が熱い体温のなかで燃えたぎっている、
053　028　わたしのこころのお部屋のなかで
053　053　しかし落葉のなかでふりかえっても
053　062　お墓のなかでお目覚めになっているお姉さん！
054　131　空虚な額縁のなかで白い雨が乾いている
054　138　頭のなかでごちゃまぜに縺れる
055　029　花瓶の腐った水のなかで溶けている
055　037　おれたちのベッドのなかで締め殺してしまったのだろうか
056　002　夕暮のなかで煙草をすっている男がいる
059　005　ひとりぼっちの部屋のなかで
061　102　犬は犬のなかで眠っているね

062　005　わたしの胸のなかで腐っている
062　039　清い空気のなかで乳の瓶をふっているのを
063　014　ぼくのいない眠りのなかで
063　017　あなたのいない夢のなかで
071　017　真黒な人ごみのなかで泣きさけんでいた
076　014　不吉なやさしさのなかで
077　002　金の縁とりをした本のなかで
089　019　雪のなかでしか経験したことのないすべてのものが……)
093　030　誰もまだ夢のなかで
095　006　それらの炎のなかで
097　009　毛深いじゅうたんの暗号のなかで、
097　014　空しい喝采のなかで、永遠に空中を泳ぎつづけるだろう。
101　034　かわいたとび色の風のなかで
106　040　かれは自分を罰してはならない　屠殺者や皮肉屋の包囲のなかで
112　036　あさましい利害関係のなかでたたかいながら
112　043　眠りのなかで繁殖し
118　011　原始の眠りのなかで
136　022　他人の眠りのなかで
148　041　夢の領土をとり巻いている闇のなかで、
157　004　そよとも吹かぬ風のなかで
167　026　強風のなかでクラブを振っているのは
173　013　地獄の炎のなかで増大していく
180　019　夢のなかではずいぶん怖い目にあうものだが
180　020　夢のなかで恐怖に出あわないのが本当の年寄りなんです
191　004　心のなかで鳴っているのだ

なかで　中で
005　034　花の中で
009　011　夢を見るなら夢の中でと
012　012　ぎんの驟雨の中で
020　001　明るいガラス管の中で
021　026　白い雲の中で眼をつぶり
022　005　黒いトンネルの中で
023　008　トンネルの中で流れださない
025　039　透明な樹液の中で
028　004　浴槽の中で思考したのは誰であったか
031　004　音はドアの中でさへ聞えない
034　005　鍵穴の中で
057　043　大挙して街中でなつかしい歌をうたっている
131　004　背をこごめて街中で生き
146　034　わたしは無我夢中で逃げ出しましたが
150　002　私は　囲繞地　というエッセイの中で、こんなことを書いた。
150　022　記憶の中で見逃していたさまざまな事柄に気づかないわけにはいかない。

163　004　夜明けとも日暮ともつかぬ薄明の中で
173　026　今では街中でも綺麗な娘に出あったりすると
180　022　夢の中でぼくに出会ったら

なかなか
077　020　なかなか死のうとしなかった
189　038　指先がフォークになかなか届こうとしない

なかに　中に
004　004　白い蝋燭の中に住まってゐた
005　022　霞の中にとびこむと葩が散る
010　007　やがて純白の雲の中にチョコレエトの肩が見えなくなる
012　019　その中に沢山の兵士たちの顔がゐた
014　028　楽器のうす暗い腹の中に沈黙が
015　019　死んだものは壁の中に
016　011　透明なプロペラがメガネの中に
023　018　怖るべき悲しむべき速度の中に
025　007　それらが船舶の歴史の中にあった時代には
025　024　金色の器の中に
025　027　あなたの頭髪の中に鴛が卵を生む
026　003　光の輪の中に羽ばたきがあって
026　012　黄昏の中に香料を撒き
026　034　わたしの手の中にある
028　015　工場の透明な模様の中に編まれ
028　046　技師の懐中にある正確な地形図は
028　072　すべてが歴史の容器の中にあるとは限らない
029　005　すべて形骸の匂の中に住み
029　010　一つの海を風景の中に所有した
031　012　水の中に影だけにたたまれて
041　139　水の中にはもう春がきてゐる
043　012　日はゆき　うす暗きとばりの中に
046　025　この橋も海中に漂ひ去って　躍りたつ青い形象となり
049　004　色あせた壁の中には
050　019　「淋しさの中に落葉がふる」
054　092　その平たい背中には背骨がないということを……
057　004　いちどは犯罪許可証を懐中にして
065　020　中にあった。「何を考えているのか
068　019　空中に軽い死の飛沫をうちあげ
097　007　あなたは暗い鉄格子の中に、永遠に繋がれるだろう。
140　020　かれは実体のない都市の雲の中に住む
142　068　　自分の著作中に登場し　そのために投獄されたすべての人々を
142　098　世界中にその網の目をひろげているのである
148　027　背中に淋しい影を宿し、

150　043　この中に隠されていたことはまちがいないだろう。
164　020　奇妙な　ぞめき笑いの中に立ちつくす
165　009　黙々と机に向って仕事をする父の背中に
175　015　きみとぼくは同じ一枚の画面の中にいる
180　046　その人の背中に向って
188　021　その中に「悲しむ老人」という作品があります。
190　004　父がうまれた村は山中にあり

なかの　中の
004　001　ガラスの中の青い花
028　009　哀訴の蒸気を吸殻とともに皿の上に拾てる三重の硝子の向ふの鐵格子の中の
056　003　そして彼の背中のように淋しい風景がそこにある
085　018　奇怪な造語で喋る連中の頭を踏みつけよう
101　008　空中の帝国からやってきて
162　006　背中の瘤が
185　010　世界中の人たちに嚥みこまれ
192　011　もしかすると、近づくにしたがって、遠ざかっていく海なのかもしれない。こんなところは、日本中のどこにもあり

なかば
032　001　ドアはなかば開いたまま
055　045　なかば熟しかけた未来にむかって

ながびかせる　長引かせる
142　087　臆病な政治的理由があり　小さな幸福をほんの少し長引かせるための

なかへ
041　078　あなたのではない鏡のなかへ消えてゆく
082　012　しずかに無限の空のなかへ消えていった
100　045　すこしずつ浮びあがってきた街のなかへ
128　086　ひからびた記憶の　屑籠のなかへ

なかへ　中へ
007　013　阿片の軽艇（ボート）は霧の中へ青い泡を残して去るべく一人の少女を誘拐
027　023　わづかな煙はグラスの中へ降りてゆく
035　021　風の五つの渦の中へきえてゆく
036　016　黒の中へ消えてゆく街よ
036　029　迂闊にも醜悪な街の溝の中へ

なかま　仲間
112　037　口真似のうまいおまえの仲間は
124　004　仲間も涙も校歌も国家も売り足りないが
148　012　新宿の同じ酒場の常連で、同じ雑誌の仲間だったが、
150　017　しかし、友人たちは仲間のだれかれをあてこすっているのだと思いこみ、

150　028　二十人ほどいた仲間のうちで、現在、
188　034　その間、昔の仲間が、三人死んでいる。

なかみ　中身
151　012　中身はからっぽ

ながめ　眺め
014　007　ジロリジロリ眺めてゐるうちに
025　019　地平線もなく煙もみえない球を眺め
027　010　荒廃した街の窓だけが眺められ
041　029　そしてあなたは広い眺めの外へはみ出てゐる
041　071　あなたは壁を眺めて怖れの表情を隠さうとしてゐますね
049　012　私たちの間には　ひろい荒涼たる眺めが、
058　007　私はぼんやりと空を眺めます
059　016　海岸に捨てられたボートを眺めていると
060　003　ひろい眺めのところどころで
061　189　ぼんやり空を眺めます。
066　018　たちのぼる煙りのなかの女をぼんやり眺めていた、
068　024　そっけなく　眺めまわしていた
068　030　とおくの沖を眺めても
072　057　スクリーンを眺めて
080　001　涯しない眺めに
080　021　もう　きみはこの涯しない眺めの
114　008　流れゆく雲を眺めて
173　027　キョロキョロと振返って眺めている始末だ

ながめて　眺めて
014　007　ジロリジロリ眺めてゐるうちに
041　071　あなたは壁を眺めて怖れの表情を隠さうとしてゐますね
059　016　海岸に捨てられたボートを眺めていると
066　018　たちのぼる煙りのなかの女をぼんやり眺めていた、
068　030　とおくの沖を眺めても
072　057　スクリーンを眺めて
114　008　流れゆく雲を眺めて
173　027　キョロキョロと振返って眺めている始末だ

ながめている　眺めている
059　016　海岸に捨てられたボートを眺めていると
173　027　キョロキョロと振返って眺めている始末だ

ながめてゐた
037　014　灰いろの遠い空をながめてゐた

ながめながら
058　042　サーカスのむすめの写真をながめながら
189　027　死人の眼でながめながら

ながめまわして　眺めまわして
068　024　そっけなく　眺めまわしていた

ながめられ　眺められ
027　010　荒廃した街の窓だけが眺められ

なかよく　仲よく
053　030　みんな仲よく小鳥のように一つの枝でおやすみなさい
152　023　まだ綺麗な白い頭とが仲よくならんでいて

ながら
028　064　空壜の堆積する地所を揺るがしながら明るく笑う
030　025　濛朧とした足にゆすられながら
033　006　そして真珠のやうに辷りながら
038　008　午前の霧にぬれながら
040　009　たゆみながら一つの扉が支へてゐる
041　050　人影にまじって　小刻みに人々に倣ひながら
041　060　別のあなたの藻のことを考へながら
046　008　櫂で虚を打ちながら　必死に進む舳の方位を
046　054　群青に支へられ　眼を彼岸へ投げながら
053　046　墓地のしめった黒い土をみつめながら
053　060　夢を見ながら眠る習慣が　こんなに悲しいものとは思いませんでした
054　006　そして銃を担ったおたがいの姿を嘲けりながら
054　029　Mよ　都会の胃袋をさまよいながら君が呟いていたことを……
054　057　リキュールグラスを舐めながら
054　086　独身者はふかく自ら頷きながら
054　163　胸にかがやく太陽の紋章を示しながら
057　025　マニラ郊外のドライブウェイを疾走しながら
058　016　私はゆっくり煙草をふかしながら
058　042　サーカスのむすめの写真をながめながら
059　004　母が戻ってくるのを待ちながら
061　001　彼方の岸をのぞみながら
061　009　櫂で虚空を打ちながら、
061　172　寒さに震えながら、
061　187　あてもなく街をさまよいながら、
061　195　橋の上に佇みながら、
065　011　あった。寒さにふるえながら
065　031　暴風の夜を飛んでいった。哀歌をうたいながら
065　049　烈しい渇きに悶えながら

066　017　息子は煙草をふかしながら
068　029　濡れた髪をかきあげながら
071　018　街を歩きながら
073　027　悠然とパイプを吹かしながら
077　019　高熱に苦しみながら
077　027　戦争を呪いながら
080　002　まっすぐ水平線をのばしながら
081　030　兵士の眠りをゆすりながら
085　027　他人の危い綱渡りを見ながら
089　031　まだ煙草をすいながら
094　002　見えがくれの執念につけ狙われながら
099　006　もう一人の妹は眠りながら小径を歩いている
100　003　かたい心をもち　小刻みにひとびとにならいながら
101　009　重たい刑罰の砲車をおしながら
102　011　うたいながら破壊する若い勇士たちが
108　017　おとなしくサンドイッチを食べながら
110　004　傾きながら
112　031　まっすぐこちらを見ながらおまえは何も見ていない
112　036　あさましい利害関係のなかでたたかいながら
112　044　眠りながら腹をこやす王国を夢みているうれしいはらからたち
125　013　さりながら果しない休日がつづく
136　021　恐怖におののきながら
142　064　ずたずたに責め苛まれながら　若い生命をすり減らしているが
142　097　非合理に機能する官僚的権威主義を全面的こはびこらせながら
145　004　はいるとつぶやきながら黒い色の真実やめったに売れないエンジェルの絵を売っていた」
145　016　固いパンの男がゼリーの女に食べながらストレートに話し合おうと云っていた」
145　018　孤独の壁をすこしずつ溶解しながら
147　008　死と生が秤のうえでゆれながら均合っていた
147　020　口笛を吹きながらするシャドー・ボクシングが死のレッスン。
149　013　一体のままでただよいながら
150　057　彼は特徴のあるうるんだ眼をしばたたきながら聞いていたが、
155　022　ごめんなさいとかそれじゃとか呟きながら
160　041　十四世紀のスコットランドの詩を口誦さみながら
163　001　見えがくれに歩きながら
166　015　ますます下手になる詩に頭をひねったりしながら
166　022　ごった返す店内を物色して歩きながら
167　050　至るところに積みながら
167　068　泣きながらこの世に産れた人の子にとって
168　007　緑野の香にむせながら
171　006　遠くを見ながら叫ぶ
173　050　いびきをかいて死んでいきながら
174　004　「病気がこんなにこたえるとは、思ってもいませんでした。春からノイローゼ状態で我ながら呆れかえっていま
174　018　（きみが美しい奥さんと結婚して、みんなに羨まれながら、西荻窪のアパートに住んでいたときのことだ）

174　024　ダメを詰めるような毎日を送りながら
175　013　同じ雨の音を聞きながら
180　008　さらに首をひねりながら
186　039　（われながらよく言うよ）
186　081　それらを賞味しながら
187　019　準備はすべてととのいながら
188　036　いずれ、順番がくるだろうと思いながら暮しているが、
188　062　その反対に、葬儀屋や墓地などを見学しながら、
189　027　死人の眼でながめながら

ながれ
002　011　落日の朱が氷柱をながれ―
019　008　パイプから水もながれず
025　004　水にながれる貝殻がねぢれて
037　004　地下をながれる水の音は
048　008　なめらかな蝋は寝台をながれる
048　012　川は音をたてて背中をながれる
048　021　歴史の鎖につながれた老齢！
058　011　そこにはジャズがほそぼそとながれ
073　007　あちこちに重油がながれ
085　002　舗道のカーヴにそってながれる
100　064　つながれた行列の影は鎖のように工場をとりまいていた
104　007　時はながれ　いつの日かまた
130　012　さらさらと水がながれ

ながれ　流れ
003　001　カレンダーに音楽が流れ
022　008　不幸の外に流れ出さない
023　008　トンネルの中で流れださない
025　013　眼もなく耳もなくただ流れる血液は
028　017　組織が崩れ動乱の意識が流れかけて
028　027　土の起伏と水の流れと
028　047　地の脈を水の流れを変えるほど精密だが
028　070　花花しい物質たちの流れ乱舞の外から
039　031　ゆるい流れが髪をほぐす
041　020　いつも群集は流れてゆく
041　083　そこにあたる影や光　樹々から流れる緑の匂ひ
041　124　木質は腐り　陽に燬かれ　蝋のやうに流れた
046　005　はるか足下を潜りぬける黒い水の流れ
061　007　はるか、地下を潜りぬける運河の流れ、
061　021　おお時よ、なぜ流れるのか
061　029　ああ時よ、なぜ流れるのか
061　037　おお時よ、なぜ流れるのか

061　206　泉もなければ、流れゆく雲もなかった、
070　003　わたしの血汐の流れを抱きよせる、
070　016　いつまでも、流れゆく川を
072　063　ひろい出口から流れだす
096　008　エブロ河を流れてやってきたにすぎん
114　008　流れゆく雲を眺めて
142　115　「残忍な歴史の流れはくいとめられないとか
145　019　*静かに走れ*と命名された群集の河は昨日のように流れていた
150　010　自分の血が全部流れ出してしまふのではないかと怖れた。
168　001　川の流れにただよい
186　085　過去にも未来にも流れず

ながれださ　流れださ
023　008　トンネルの中で流れださない

ながれださ　流れ出さ
022　008　不幸の外に流れ出さない

ながれてゆく　流れてゆく
041　020　いつも群集は流れてゆく

ながれゆく　流れゆく
061　206　泉もなければ、流れゆく雲もなかった、
070　016　いつまでも、流れゆく川を
114　008　流れゆく雲を眺めて

ながれる
025　004　水にながれる貝殻がねぢれて
037　004　地下をながれる水の音は
048　008　なめらかな蝋は寝台をながれる
048　012　川は音をたてて背中をながれる
085　002　舗道のカーヴにそってながれる

なかを　中を
017　034　雨の中を盗み去られたことには
041　043　記憶の中をとほってくる
046　031　背中を行き来する千の歩みも
048　012　川は音をたてて背中をながれる
054　088　君たちは僕に背中をむける
061　212　生ける死者たちが空中を歩きまわる夜がきた。
062　009　いまでも空中をさまよっている姉さん！
097　014　空しい喝采のなかで、永遠に空中を泳ぎつづけるだろう。
142　086　黙って背中を向ける者もいる　それにはそれの

151　016　背中をこごめて人中を歩く姿といったら
167　024　背中をまるめて椅子に凭れている

なきごえ　なき声
062　053　岩壁へかえる鴎のなき声が

なぎさ　渚
061　130　渚をふちどり　虚無を涵し

なきさけんで　泣きさけんで
071　017　真黒な人ごみのなかで泣きさけんでいた

なきたい　泣きたい
076　018　むしろ泣きたいくらいだ

なきはらした　泣きはらした
134　002　みんな泣きはらした眼をしている

なく
010　007　やがて純白の雲の中にチョコレエトの肩が見えなくなる
012　013　一たまりもなく仮死におち
013　005　ゐなくったっていいですよと
017　029　沙漠の果から灰が見えなくなり
019　006　音もなく音なく
023　003　音もなく日ぐれがきたといふ
025　013　眼もなく耳もなくただ流れる血液は
025　019　地平線もなく煙もみえない球を眺め
028　041　おびただしい自然を覆ふ霧はやがて見えなくなるところ
029　002　もう歯ぎしりする怒もなく
029　014　今はただ表情もなく振返るわたしに
031　011　ふとなにげなく途絶えたところから
034　016　風はどこからともなく忍びこむ
038　014　いふまでもなく
039　066　わたしは何の関りもなく立ってゐる
041　079　坐席があなたを動けなくした
043　013　音もなく　部屋の扉がひらく
042　001　庭は荒れて　影もなく
044　007　食なく衣服もなく、
045　006　音もなく空を走る稲妻を見あげてゐる
050　022　埋葬の日は、言葉もなく
052　011　わたしはかぎりなくうらめしく思う
053　003　暗い空の枯れた林から落葉がすきまなく降ってきます
053　026　わたしもたまらなく眠いのです

053　051　始めがあって終りがあるのではなく
054　053　手を下すと　人形のように動かなくなる
054　064　ウインストンがいなくなったから
054　125　音楽はたえまなく狂気を弾奏しなければならぬ
061　071　さりげなく煙草をくわえて
061　098　溺死人が声もなく天にむかって叫ぶのを……
061　107　過去は涯しなく未来のなかにあることをーー
061　169　貴方がいなくなってから、
061　178　妻も子もなく、この広い都会の片隅で、
061　187　あてもなく街をさまよいながら、
061　194　十一月の寒空に、わたしはオーバーもなく、
065　025　わけもなく涙をながす男の
066　003　黒犬があてもなくさまよっていった。
066　031　ーー帰ってゆくところもなく
066　038　すると不意に、一枚の戸が音もなくひらき
068　024　そっけなく　眺めまわしていた
070　023　鉄でもなければ、木でもなく
072　042　（すくなくとも三百年の伝統に従って
072　067　誰もいなくなったスタンドに立って
073　015　音もなく歩いていった
073　024　どこからともなく
074　001　埠頭に人かげはなく
074　015　かぎりなく澄んだ青空であった
074　021　声なくして新しい死者と語りあった
077　022　母や妹や恋人のためにとめどなく涙を流しつづけた
078　017　ああ　夜昼のさかいなく
080　009　手ごたえもなく　切れた帆綱から
081　012　たえまなく爆音がして
083　002　すっかり見えなくなった
083　004　みんな見えなくなってしまった
093　019　たえまなく打ちよせる多彩な波にすぎないことがわかり
093　027　かれの魂はエデンの樹の頂きからはてしなく落ちはじめる
099　009　……開くこともなく錆びてしまった鉄の門
100　013　なじめなくなった季節のおわりに
100　018　あてもなくこの街で生きねばならぬ……
100　042　たえまなく出血している内部の世界で
104　012　夜空はたえまなく星を降らせている
106　029　むやみに明るい星空があり　意味なく敏感な宇宙があり
107　004　小鳥や空だけでなく
108　004　いなくなった人影が
112　029　眼や耳や手足をなくした不幸な犠牲者に何をしてやったか
113　013　単純でなくちゃならない
113　017　すこしのあやまちも容赦なく

113 049 もう分らなくなった
117 014 泣くすべもなく
125 002 夢はもういらなくなった
125 005 六月の雨はしきりにふり　音楽はとめどもなく
125 009 快楽もまっすぐのぼらなくなった
128 049 「民主主義はイデオロギーではなく
128 080 おれがいなくなったら
137 008 意地汚なく愛撫を重ね
140 004 ぼくを破滅させるものがなくなった
140 012 きみがいなくなったって
140 015 なくてあるがごとく
141 011 与えるものがとっくになくなって、
142 003 おおぴらに話されなくなっている……
142 025 秘密警祭の認知　もしくは同意なくして
142 033 支配に自信なく　人間の良心を
142 044 いつもかぎりなく透明で　疑問の余地なく真実だから
142 110 そのもろさは隠しようもなくなる
145 025 スペイン内乱で知ったオーデンもいなくなった
145 030 愛がなくともにんげんは生きられる
145 031 しかし　水がなくては生きられない
146 009 切符売場に人影はなく
146 048 「ご心配なく（ドント・ウォリー)
148 008 肝硬変であっけなく急死したという報らせを受けた。
150 004 自ら韜晦することなくして、何事もすることが出来なかった。
150 007 彼は自分の虚構の個性を破綻なく演ずるために、
150 025 すこしはましかと思っていたその「すこし」が見当らなくて、
150 040 ずいぶん興醒めなくだらないことをいう奴だと思ったが、
150 042 すくなくとも彼の自殺の真因が、
150 045 最後の拠りどころは生理しかなく、
151 004 大学を中退し職歴はほとんどなく
156 031 どうしたらいいかわからなくなる
158 042 「きみが詩を」ではなく
159 008 目顔でさりげなくうなずく
160 049 喜びなくして何の宝ぞと
160 066 かれの名は雑誌やアンソロジーでさえめったに見かけなくなる
160 076 制度の春を病むこともなく　不確定性の時代を生きて
160 079 口誦さむ一篇の詩がなくて！
169 010 求心力は見えなくなり
169 012 戻ってこなくてもいいと呟く
170 020 このうえなく新鮮で魅力的だ
170 026 物を書く空気になじめなくなっている精神の
171 004 かぎりなくふしあわせになる。
173 028 顔を赭めることなど全くなくなった

173　043　まもなく頓死するだろう
174　010　最後にきみはさりげなく「声を聞かせてくれてありがとう」と言って、電話を切った。
176　032　わけもなく顔をかくしている
177　004　きみでなくても
177　030　きみでもきみでなくてもよかったのだ
178　008　なにげなく交信した
180　024　貴方に「女の子の心理」が判んなくたってあたりまえなんです。貴方は心理学やってんのじやないのでしょうか
180　050　「どこかで会って、さりげなく挨拶を交したような、奇妙な余韻をひいていくところ」それは私にしてもそうでし
180　056　縦にも横にも亡れなくなっている
182　009　しなやかな背骨がなくとも
183　028　地震も事故もなくて家へ戻る
186　022　音もなく発車し到着しますからね！
186　064　隠れる場所がなくなる
187　020　別れを告げる遑もなく
187　023　まもなく死ぬ
188　016　呼吸ができなくなるという、面倒な病気です。
188　041　とめどもなく、そいつとお喋べりを始めるのは、
188　043　此頃では、人の顔さえ見れば、誰彼となく病気の話で、
189　018　知合いもまったくいなくなったから
191　005　にんげんはいなくなった
191　010　あられもなく血の色にそめて
192　002　どんな現象も起りようがなく、わたくしの影は、孤独とはいえなくなっているから、
192　004　夜明け前の微光があたりをくまなく覆っていて、どこへ行こうとしているのか、
192　014　薄暮と昧爽とをとりちがえていた迂闊さに、狼狽するも間なく、巨大な生きものの胎内にのみこまれるように、
193　017　単調なくり返しのようで

なく　鳴く
004　009　時計が霜の花の上で鳴くと
041　022　石が鳴く　まるで蟋蟀のやうに

なぐさめ　（慰め）
054　137　護衛つきキングと慰めをあたえるクインの価値とが
167　064　脅かすような慰めるような圧力を加えてくる
185　007　慰めを与えた哲人風の音楽家の

なぐさめて
039　120　静かに愁ひをなぐさめてくれる

なぐさめる　（慰める）
167　064　脅かすような慰めるような圧力を加えてくる

なげ　投げ
023　016　恐怖の白い歯を投げる

026　029　銀いろの鍵を投げると
046　054　群青に支へられ　眼を彼岸へ投げながら
061　034　空の財布の身を投げに、
099　007　そこで　力いっぱい投げたボールが
173　045　スプリングの毀れたベッドに身を投げて

なげあげられた
048　036　虚空になげあげられた恐ろしき叫喚――

なげいて　嘆いて
185　026　最も深く嘆いている者にとっても。

なげうって
039　014　書籍をなげうって

なげく　嘆く
107　013　在りし日を嘆くでない
136　014　生きたくないと樹は嘆く
182　010　嘆くことはない
188　047　公害を憂えたり、伝統の喪われていくのを嘆くのと同様、

なげくこ　嘆くこ
182　010　嘆くことはない

なげた　投げた
099　007　そこで　力いっぱい投げたボールが

なげだす
013　007　ぼくは靴下をなげだすと

なげて　投げて
173　045　スプリングの毀れたベッドに身を投げて

なげる
043　019　あなたはその深淵に身をなげる

なげる　投げる
023　016　恐怖の白い歯を投げる
026　029　銀いろの鍵を投げると

なごり　名残り
082　008　あらしの名残りがあった

（千葉大学学位申請論文）
日本現代詩運動における「荒地」派の比較文学的研究

資料 II　コンコーダンス－鮎川信夫全詩－

II－3

目次：詩作品番号表 ..... i － vi

コンコーダンス　なさーゐ ..... 716－1071

詩作品番号

番号	詩作品タイトル	
001	黄昏	
002	凍眠	
003	扉の中	
004	蝋燭の中―夜に	
005	遊園地区	
006	花－「亜細亜」の一部	
007	河－「亜細亜」の一部	
008	頌－「亜細亜」の一部	
009	樹	
010	少年のスピイド	
011	春の頌歌	
012	ギリシャの日傘	
013	夏の Souvenir	
014	楽器の世界	
015	室内	（窓は明るい海の水で）
016	田園の祭礼	
017	のどかな樹のある沙漠	
018	夢見る室内	
019	夢の使用時間	
020	名刺	
021	唄	
022	白い像	
023	カタストロフ	
024	睡眠	
025	非望の自転	
026	魅入られた街	
027	椅子	（影をゆらせて）
028	雑音の形態	
029	室内	（時空の瓶の底に）
030	黄昏の椅子	
031	十二月の椅子	
032	椅子	（ドアはなかば開いたまま）

番号	詩作品タイトル	
033	形相	（一本の茎は清浄な水を欲する）
034	雨をまつ椅子	
035	雨の歌	
036	形相	（おそらくは実らぬであらう樹木）
037	形相	（ドアの外では）
038	陰翳	
039	泉の変貌（明日は恋なき者に恋あれ　明日は恋ある者にも恋あれ　詩人）	
040	形相	（髪は散る）
041	囲繞地	
042	神（こころ）	（庭は荒れて　影もなく）
043	神（こころ）	（石で葺かれた屋根をでて）
044	神々	
045	雨に作られし家	
046	橋上の人	（高い欄干に肘をつき）
047	耐えがたい二重	
048	トルソについて	
049	日の暮	
050	死んだ男	
051	病院船室	
052	姉さんごめんよ	
053	落葉	
054	アメリカ	
055	繋船ホテルの朝の歌	
056	風景	
057	１９４８年	
058	白痴	
059	秋のオード	
060	行人	
061	橋上の人	（彼方の岸をのぞみながら）
062	あなたの死を超えて	
063	淋しき二重	
064	裏町にて	
065	夜と沈黙について	
066	あけてください、どうか	

番号	詩作品タイトル
067	「なぜ？」について
068	鴎　または夏の手紙
069	天国の話
070	夜の終り
071	今日のなかの昨日と明日
072	競馬場にて
073	海上の墓
074	サイゴンにて
075	遥かなるブイ
076	なぜぼくの手が
077	神の兵士
078	出港
079	消えゆく水平線
080	水平線について
081	港外
082	波と雲と少女のオード
083	夕陽
084	木枯の町にて
085	ある男の風景
086	夏過ぎて
087	可愛いいペニィ
088	小さいマリの歌
089	冬物語
090	紫壇
091	この街に生れて
092	この涙は苦い
093	深いふかい眠り
094	シンデンの海
095	父の死
096	「バルセロナ」
097	Le Cirque
098	明るいキャフェーの椅子
099	逃げるボールを追って
100	もしも　明日があるなら

番号	詩作品タイトル
101	兵士の歌
102	喪心のうた
103	イシュメエル　「白鯨」より
104	秋思
105	最も暗い月、三月
106	ある記念写真から
107	さざなみは海を渡っても
108	夏を送る即興詩
109	落葉樹の思考
110	もう風を孕むこともない
111	路上のたましい
112	戦友
113	世界は誰のものか
114	ある冬のはじめに
115	別離のうた
116	吐く息の
117	苦しさにたえかねて
118	呪婚歌
119	川岸にて
120	春の感触
121	夏への挨拶
122	冷たい雨
123	新年に
124	異聞
125	生き残った者のためのエピタフ
126	アポロ１１号に贈る詞
127	途上　　（「路上のたましい」改題）
128	新聞横丁
129	顔のない夢
130	首の桶
131	帰心
132	閉ざすうた
133	愛なき者の走法
134	催涙広場

番号	詩作品タイトル
135	詩法
136	My United Red Army
137	生証人
138	どくろの目に
139	宿恋行
140	地平線が消えた
141	同行者
142	Solzhenitsyn
143	醜のヴィジョン
144	女尊の祟り
145	暗い夜への信号
146	寝ていた男
147	死について
148	消息
149	波間の郷愁
150	私信
151	Who I Am
152	こんな夜には
153	撃刀の歌
154	帰館
155	理想の良人
156	愛
157	秋の祈り
158	詩がきみを
159	夢ちがい
160	必敗者
161	いまが苦しいなら
162	僊術
163	跳躍へのレッスン
164	ミューズに
165	父
166	ひょっとすると
167	廃屋にて
168	水のうた

番号	詩作品タイトル	
169	形相	（繃帯にふれたあとの）
170	ある朝の散歩で	
171	幸福論	
172	冬のファントム	
173	独白（一九七九年十二月某夜）	
174	黒田三郎	
175	病床の友へ	
176	風	
177	影	
178	切願	
179	室内楽	
180	青い手紙－「形相異聞」	
181	嵐が来る－Nカントリー・クラブの休憩室で	
182	老年について	
183	駅前通りを抜けて	
184	家族のフロンティア	
185	ジョン・レノンの死に	
186	時間論	
187	殉教	
188	私信－桑原英夫に	
189	000年	
190	山を想う	
191	夕日のつぶやき	
192	海の変化	
193	風景論	

なさざる
129　009　なさざる悪事はひとつもない

なし　梨
017　006　梨の実を食べたり
092　006　盗んだ梨より甘かったと……

なじめなくなった
100　013　なじめなくなった季節のおわりに

なす　茄子
188　083　きみが好きだという、武者小路の、茄子や南瓜の素朴な絵、

なぜ
030　008　歓びにもまた憂ひにもなぜか
054　020　なぜ灰と炎が君を滅ぼす一切であったのか？
060　006　なぜか一服の煙草もひどくうまいのである
061　021　おお時よ、なぜ流れるのか
061　022　なぜ止まらないのか
061　029　ああ時よ、なぜ流れるのか
061　030　なぜ止まらないのか
061　037　おお時よ、なぜ流れるのか
061　038　なぜ止まらないのか
067　014　純粋な「なぜ」は
076　001　なぜぼくの手か
112　030　なあ戦友　なぜ黙っている
160　014　それがなぜ私の心をしめつけたのか？
166　018　あいさつしたのがなぜ悪い？
174　011　この三十年間、ぼくはきみに一度も電話などしたことがない、ちょっぴり心が痛み、それはなぜかと考え出すと、疑
175　002　なぜ首輪をつけたりするのかと
175　005　なぜ睡ってばかりいるのかと
181　018　考えたのはなぜだろうか
181　019　なぜだろう？
186　041　どうしてきみにわかる？　なぜ今までぼくが新幹線に乗らなかったか？

なぜ　（「なぜ」）
067　014　純粋な「なぜ」は

なぜ　何故
041　064　あなたは何故黙ってゐる　お坐りなさい
041　066　あなたは何故黙ってゐる

なぞ　謎

055　046　おまえは愚劣な謎をふくんだ微笑を浮べてみせる
116　004　やさしい謎をひめた詩に

なだれて
041　052　うなだれて　あなたを待ってゐるバスに乗った
100　004　うなだれて　ぼくらを待っているバスに乗った
112　017　祖国の栄光と同胞の愛を信じて地平線になだれていった
154　016　うなだれていると

ナチュラル・チーズ
181　036　ナチュラル・チーズとクラッカーがほしい

なつ　夏
048　020　春　夏　秋はまたたくまに過ぎてゆく
054　156　光はひとつの原子に　強烈な夏の驟雨にかわってゆく
059　027　とおい夏の日に
068　007　夏のうちに　海岸へゆくことにしよう
068　028　（今年の夏もこれっきり）
082　006　忘れがたい夏を連れて！
083　001　夏草のうえの屋根が
083　012　この夏さえすぎれば
089　009　橋の下には　夏の少年が
100　058　ぼくは今年の夏を知った
100　059　それは　ぼくの希望の「おわり」にふさわしい多彩な夏であった
100　060　はじめて心で見　眼で感じた夏だった
100　070　精力的な夏は未来の街の方向にひろがっているようにみえた
104　002　夏は飛び去っていった
109　001　春から夏にかけて
114　003　真夏のコンクリートの壁にはりついた
172　010　夏はたちまち冬になり
180　052　とびきり冷たい夏の訪れである

なつかしい
057　043　大挙して街中でなつかしい歌をうたっている
059　010　今ではなつかしい面影のようにうすれてしまった
102　003　いまはなつかしい硝煙とその匂いのなかに
108　033　なつかしいシジフォスの石が
112　042　胡麻的な頭と頭をくっつけて寝ているなつかしいきょうだいたち
138　017　滅びようのないかたちがなつかしい
150　073　きみから送られた昔の雑誌を手にして、なつかしい面影に出会い、

なつかしそうな
155　026　なつかしそうな声で

なつくさ　夏草
083　001　夏草のうえの屋根が

なった　鳴った
013　011　草むらで笛のやうに鳴ったのは
065　036　一千の喇叭がいちどに鳴った。その響きは

なって　鳴って
012　009　海では雷が鳴ってゐる
014　004　つまんなそうにポツンと鳴ってから
060　004　電線がひうひう鳴っていたりする
160　010　春のさきぶれの雷が遠くで鳴っていたが
183　002　ジングル・ベルが鳴っていて
191　004　心のなかで鳴っているのだ

なっている　鳴ってゐる
012　009　海では雷が鳴ってゐる

なってきた
017　037　樹はだんだん低くなってきた
188　077　風も強くなってきたようだ。

なっとくする　納得する
185　022　いずれ世間は納得する

なでて　撫でて
013　008　撫でてあげませうかとお世辞を云ひ

ななじゅういちばんち　七十一番地
097　005　サン・ペエル街七十一番地に、永遠に雨を降らせるだろう。

ななじゅうねんだい　七十年代
173　040　はてさて　七十年代も終りですか

ななつ　七ツ
103　010　魂にも七ツ道具が必要だ

ななつの　七つの
039　140　七つの壁が呻きはじめ
081　014　ぼくらを生んだ七つの近代都市が

ななひゃくまん　七百万

151　008　貯金は定期普通預金合わせて七百万に足りない

ななめ　斜め
038　009　斜めにのぼる階段と
181　009　からだを斜めにし

ななめに　斜めに
038　009　斜めにのぼる階段と
181　009　からだを斜めにし

なに　何
028　021　幾何学が白い肉のやうな丘に
028　024　如何なるゼスチュアが会話が取交はされたか
028　029　彩るものは何であっても何でも構はない
028　049　しかしこれらは何も意味しない意味はない
028　053　乗ってゐる何が乗ってゐる何が
028　069　何を語るかは考へてみればよい
030　023　あれを何と呼ぶのだらうか
031　026　もう何も信じたりしないがよい
033　019　あのひびきは何か
037　022　また何と小さなことであらう
039　018　あなたは何処に立ってゐるのか
039　037　わたしは一体何処に立ってゐるのか
039　066　わたしは何の関りもなく立ってゐる
039　105　落ちていった星を何と呼ぶのだらう
039　134　夜にはもっと尊い何かがある
041　040　何とはなしに陸橋の上まで打寄せてくる
041　064　あなたは何故黙ってゐる　お坐りなさい
041　066　あなたは何故黙ってゐる
041　102　かつて　何処にも起らなかったこと
044　013　戦いは何処よりか
046　030　あなたは日の暮れ　何を考へる
046　044　たとえ何処の果へゆかうとも
050　013　だがぼくは、何時何処で
051　005　だが何処へ？　ヨオロッパでもアジアでもない
053　034　それに何の意味があったでしょう
053　036　わたしのたずねる人影は何処にもありません
053　041　それから何処へゆくのでしょう
053　042　お姉さん　何処にいるの
055　021　何処へも行きはしなかった
056　013　聾の老人が世界に向って何か叫んでいるのが
057　013　何処へ行こうと
058　005　やがてキャバレー何とか

058 006 洋品店何々になるのでしょう
058 046 これから私は何をしたらよいのでしょうか？
059 011 あの美しい少年は何処へいったか
065 020 中にあった。「何を考えているのか
065 045 何もなかった。絲杉をはなれた赤い月は
067 012 何時
067 013 何処でも
070 021 あなたの指は何もつかまえることができない。
071 001 これから何をしようというのか
071 004 何をしようというのか
071 024 何をしようというのか
071 025 これから何をしようというのか
071 036 何も見ない
071 049 何をしようというのか
071 051 これから何をしようというのか
072 058 何百万の人々が、もう一度溜息をつくのだ
072 069 何と惨めなことだろう
075 013 いつか何処かで
079 009 なお何も浮んでこないところ
079 011 何万という水兵と
080 013 きみはもう何も言わぬがいい
081 013 何千年の闇をつらぬいて真赤な雲の火柱がたち
085 015 おのれについては何も語らぬ
085 031 きみが求めているものは善悪でない何ものか
085 032 光と影で区分できない何ものかであろう
093 009 酩酊は何によらず悪い習慣だが
093 028 ……何処へ？
100 027 ああ　それが何の「はじめ」かわからぬうちに
100 040 「何百万の死者の霊とともに
100 080 何処にもないのだ
106 017 人生を説明するのに　どうしたって何かが足りないようだ
108 032 みはるかす何とか連山は紫の帯
110 014 何処にありや、と。
112 013 過去でしか会うことのないおれたちだ　何の秘密もあるものか
112 029 眼や耳や手足をなくした不幸な犠牲者に何をしてやったか
112 031 まっすぐこちらを見ながらおまえは何も見ていない
126 010 地上の何億という眼は
138 004 何度殺しても
140 002 何処にも
141 008 愛以外の何かだったわ。抱きあって、苦痛でよじれる縄梯子にすがって、宙ぶらりんで
142 021 あなたは何処にいても
142 051 しかし　それが何を意味するのかね
142 052 ぼくたちはこれから何をしようとしているのかね

142 099 ぼくたちはこれから何をしたらよいのか？
143 005 何度も同じ夢を見て
145 003 何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに
145 013 何かを思い止るようにと一人の男が一匹の犬にとめられていた
148 036 結局、めいめいの職歴と子供を何人作ったかということにつきていた。
150 004 自ら韜晦することなくして、何事もすることが出来なかった。
150 013 彼の表面は常に波立ってゐるが、彼の底は何時も静かで、
150 027 何かが間違っていると感ぜざるをえなかった。
150 054 鉛筆で何カ所も印をつけられた頁をつきつけられて、
150 080 地震か何かの前兆かもしれません。
160 049 喜びなくして何の宝ぞと
162 018 かれが何を見たかは予断のかぎりではない
164 027 何度でもくり返さなければならない
165 011 何度、声にならない叫びを上げたろう
165 012 あなたはやがて分ってしまう何かであり
165 034 何も映っていないときには
166 012 自由とは何かは太陽のように明白だったのに
167 051 おまえはうやうやしく何を葬ってきたのか
170 010 「何も書けぬ」がほんとうのところだ
174 022 あの一局の碁が語るものは何だったのか
174 025 きみは何を考えていたのだろう？
180 002 何が飛び出したって驚きはしないが
180 010 「御手紙の内容、何のことやら判りません」なら「女の子の心理」がどうだってことも関係ないじゃないですか？
180 040 何度でも立ちかえらなければならない
183 013 どの店で何を買ったらいいのかを
185 004 何のコメントもなかったが
185 021 何が起っても不思議ではない、と
186 059 いったい何を怖れているんです？
186 067 何も怖くない
187 024 何に対する敬礼か
188 009 五十何年ぶりに歯医者の厄介になるという始末。
188 031 何の挨拶もしなかったのではないだろうか。
188 040 何かの縁で、とりついてきた病魔と、昵懇になり、
189 014 何でも忘れることができる
192 025 必死の思いで、前方の真っ暗闇を凝視するが、もう何も見えぬ。
193 001 何を得
193 002 何を失うとも

なにか 何か
033 019 あのひびきは何か
039 134 夜にはもっと尊い何かがある
056 013 聾の老人が世界に向って何か叫んでいるのが
106 017 人生を説明するのに　どうしたって何かが足りないようだ

141　008　愛以外の何かだったわ。抱きあって、苦痛でよじれる縄梯子にすがって、宙ぶらりんで
145　013　何かを思い止るようにと一人の男が一匹の犬にとめられていた
150　027　何かが間違っていると感ぜざるをえなかった。
150　080　地震か何かの前兆かもしれません。
165　012　あなたはやがて分ってしまう何かであり
166　012　自由とは何かは太陽のように明白だったのに
188　040　何かの縁で、とりついてきた病魔と、昵懇になり、

なにげない
054　161　なにげない挨拶のうちから生れる未知の国民のことを……

なにげなく
031　011　ふとなにげなく途絶えたところから
178　008　なにげなく交信した

なにごと
034　010　なにごとも起らず
106　037　なにごとも断定するには　むずかしい世界となった

なにもない　何もない
145　003　何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに

なぶりかかる
176　014　少女の頬と肩になぶりかかる

ナポレオン
186　080　誰かが寄賭してくれたナポレオンの一壜もいずれ劣らぬ時間の傑作だった

なま　生（なま）
005　021　白い翼が生える
006　006　モグラの生活は嫌だね　と
010　014　パイプを握って雲の中から生れてきた少年は
014　030　楽譜はヒラヒラ羽を生やして
021　023　アスファルトで新しく誕生し
025　017　焔をあげて生ひ繁り
025　027　あなたの頭髪の中に鶯が卵を生む
026　020　羊歯類が生ひ茂り
026　023　芽生えのない種子が
028　058　そこに多数の生活が個人によって支持される
029　007　型も持たぬ生活のうちに
037　020　すべてをみつめる生きものの眼が
039　070　ここはわたしの生れた土地だ
039　094　愛の生誕の日を

041 044 怪しい手紙には翅が生えてゐたのかも知れぬ
041 137 この街で生きようとしてはならぬ
041 142 傷つける断片　それは悼ましくも長く生きてゐる
046 029 あなたの生をめぐる足跡の消えゆくを確め
047 004 孤独な生きもののため
051 025 影　終生よりそって離れぬ影
052 001 生きのびてきたわたしの心に
052 023 あなたはどうして人生にさよならを告げたのか
052 028 生きねばならぬこの賭はわたしの負けだ
053 050 一年よりもむなしい一生を過ごしてきました
054 004 生きているにしても　倒れているしても
054 014 死の滴りは生命の小さな灯をひとつずつ消してゆく
054 058 大学生は低い声と思いやりのある眼ざしで話しはじめる
054 106 独身者は大学生のリキュールグラスに
054 109 大学生のほそい瞳の奥に描かれてしまう
054 118 そして詩人と大学生は駅でしばらく別れを惜しむだろう
054 161 なにげない挨拶のうちから生れる未知の国民のことを……
055 056 西と東の二つの大戦のあいだに生れて
057 008 それでもぼくらが生きているとは信じられなかった
057 034 憎悪と欺瞞と屈辱によって生活し
058 013 あまり感心しない生活をしています
058 018 私の立派な人生には
061 086 ーブラスーが生とすると
061 089 生が一ぱい詰まっている
061 104 だけどみんな＜生きよ＞と言いはしなかったね」
061 138 水仙や蛇や　もろもろの生ける質を潤おした』
061 211 生と死の影が重なり、
061 212 生ける死者たちが空中を歩きまわる夜がきた。
061 215 生と死の予感におののく魂のように、
061 226 死と生の予感におののく魂のように、
062 047 生きものの緑の意志は
062 058 生きることを諦めるには
063 030 ぼくたちが生れるずっとまえからそこにあった微笑を！
064 009 人生に別離なんかあるものかと、
064 018 生（なま）パンでさえ死の匂いがする。
064 019 ーー生きましょうよ、ねえ、
065 038 いたずらな月が生んだ魔女は
071 043 われらはながい生涯をもって測ったりする
072 060 われわれの生存競争もすべてフェア・プレーだったらいいのにと
074 018 生あるものの皮膚の下を
077 001 死んだ兵士を生きかえらせることは
077 006 いくたびか生きかえってきた
077 011 いくたびか生きかえる兵士たちが

077 034 再び生きかえることはないだろう）
079 028 生きるためより
081 014 ぼくらを生んだ七つの近代都市が
081 020 生身で受けとめているのは兵士ではない
086 009 生命は歩む影
088 009 ぼくが知っているのは　おまえが生れる前のことだ
088 010 おまえが生れてからのことは
088 019 きままなぼくの生活
088 073 太陽の涙から生れてきたぼくたちの
090 001 巨木は幾世紀を生きて
090 024 わたしが生れるずっと前からそこにある
091 013 この街に生れてこの街に死ぬ
094 015 ぼくの記憶はまだ生れていない
094 018 きみの人生はきわめてミステリアスに
094 020 きみがぼくに生きよと告げるなら
095 019 ……苦しみぬいて生きた父よ
096 018 あの瞑想の闇のコアには生きている砂漠があるんだ
097 001 一つの生命が、あるいは一羽の鳥の飛翔が、
097 003 あなたは生命も飛翔も見ないだろう。
100 018 あてもなくこの街で生きねばならぬ……
100 035 ぼくらの死から誕生にいたる
102 008 魂は死んで二度と生れてこないから
105 012 戦争は失敗し、ぼくらの国は生きのびてきた、
106 016 無事に生きのびてきた　この下手な構図は
106 017 人生を説明するのに　どうしたって何かが足りないようだ
106 044 すべての生きもののうちで　最も強くてしなやかな骨だ
108 019 これから生れて
109 005 生命の奔流は丘をくだり
109 009 生命の一循環を終えたのだから
109 010 生れかわるためには、死なねばならないと、
110 013 生きねばならぬ生活は
112 006 生きてるにしちゃ　冷たい手だね
113 015 大元帥のスターリンが生きてたから
114 006 じっと机の下にかがんで生きのびてきた
118 012 約束される誕生
120 020 人生に遅刻したのも気にしないで
122 010 あきらめきった人生の
125 018 われらの人生なんてロクなものではない
126 007 地球の生活を拡張しうるにちがい」
127 012 生れる前か
127 019 見たものを否定して生きてきた
131 004 背をこごめて街中で生き
132 001 不在を予約して生きた

132 002 隠れんぼの人生
135 001 生活とか歌にちぢこまってしまわぬ
136 014 生きたくないと樹は嘆く
138 005 すぐに生きかえり
140 016 欄外の人生を生きてきたのだ
140 017 地べたを這いずる共生共苦の道も
142 062 その著書をフランスで刊行した一九四二年生れのブコフスキーは
142 064 ずたずたに責め苛まれながら　若い生命をすり減らしているが
142 070 そして　国外での健康回復と安楽な生活の可能性があるにもかかわらず
142 079 もちろん　信念より自分の生命が大切だと考えたからである
142 081 生命より貴重だと感じていたのである
143 016 醜くなって生きのびて
143 018 みじめであさましい生きた心よ……
145 030 愛がなくともにんげんは生きられる
145 031 しかし　水がなくては生きられない
147 001 生きていくことに怖れを感じていた幼年時代だったら
147 004 生きることより死を受入れるほうがずっとたやすかったろう
147 005 生きることに困難を覚えていた青年時代だったら
147 007 世をも人をも厭いつつ生きていて
147 008 死と生が秤のうえでゆれながら均合っていた
147 010 生きていくことがだんだん心地よくなってきて
147 012 生きることに怖れも困難も感じない髪の毛の薄い男になっていた
147 018 生きていることが心苦しくならなかったことで
148 013 戦後の生活では、
148 015 一人分の人生を、生きるのは容易な業ではない。
148 023 生き残ったぼくらは、生活の位置がきまったときから、
150 014 一匹の魚さへ住んでゐない沼に釣糸を垂らしてゐる影だけが生きてゐる……」
150 031 うまうまと生きのびてきたということか。
150 035 敗戦後の苦しい生活のたたかいに敗れて倒れた者もあった。
150 037 「本質的に我々が誇り得るものは生理以外に在り得ない、
150 039 クラス委員にして落第生の竹内幹郎だった。
150 045 最後の拠りどころは生理しかなく、
150 047 我々が生きのびたことで誇り得るものが、
150 048 生理以外に在り得ないとは、ずいぶん淋しい話である。
151 018 ずいぶんながく生きすぎた罰だ
151 021 とことんまで生きる気なんだろうおまえは
153 001 青い塩水からうまれた生きものの
158 005 生きるのを断念するのは
159 007 今生の別れかと心はさわいだが
159 017 かれの生涯にはついぞなかったのに！
160 070 アルコールと麻薬に蝕まれた生活で
160 076 制度の春を病むこともなく　不確定性の時代を生きて
161 016 生きているというだけで

161　017　ましてながく生きているというのなら
162　003　生活の重みに耐えてきたが
162　009　生きるのをいぶかる眼に
164　016　……ぼくの一生は詩の困難でやや暗い
165　023　父とは半生のつきあいだったが
166　006　三つの時代を同時に生き
166　019　という？先生の発言を今朝の新聞で読んでから
167　013　実際に生きるのは厄介で
168　013　生きることの永続性のあかしか
169　004　自殺の二乗を生きるから
171　020　生きることを学ばなければ。
173　017　「生物はすべて
175　008　一生かけて見つけないうちに
180　014　生意気も芸のうちで
184　006　タイ生れの中国人の医者と再婚した
186　017　（荏原肆夫が生きていてね）
186　019　杉本春生、相良平八郎に会ったよ
186　074　（ぼくらの人生だって
187　016　生かしてきたもののゆえに
188　042　人生の下り坂にかかったときからである。
188　080　誕生と、性交と、死に、
189　019　誰とも口をきかずに十年を生きればよい
190　010　在りのままに生き
190　011　東洋哲人風の生活が
191　008　生きている自然のしるしに
192　014　薄暮と昧爽とをとりちがえていた迂闊さに、狼狽するも間なく、巨大な生きものの胎内にのみこまれるように、
193　019　私一人の人生でも

なまいき　生意気
180　014　生意気も芸のうちで

なまぐさい
051　018　なまぐさい葡萄酒を口から喀き、
055　006　なまぐさい夜風の街が
057　042　文明のなまぐさい鮭は
138　002　なまぐさい風が吹いてくると

なまぐさい　なま臭い
084　026　なま臭いサラダとサージンの匂いを発散する

なまなましき
144　013　浄食の歯ぐきなまなましき落人は

なまの
070　024　なまの筋肉で出来ている、

なまみ　生身
081　020　生身で受けとめているのは兵士ではない

なまめかしい
138　009　なまめかしい幽霊にこがれて
144　004　なまめかしい徽雨に濡れている

なまり　鉛
025　037　鉛のやうに落下してくる
050　021　黒い鉛の道を歩みつづけてきたのだった。
062　029　わたしの手から鉛筆をとりあげるように
150　054　鉛筆で何カ所も印をつけられた頁をつきつけられて、
166　011　いのちもいらない初年兵の頃には

なみ　波
039　064　煌めく木片が波に漂ってゐよう
039　113　波が黒い樹かげに光る
041　038　あの汚れた貝殻　岩に砕ける憎悪の波よ
046　017　眠れる波のしずかな照応のなかに
051　017　内と外と　高鳴る波の響を聴け！
055　010　巨大な黒い影が波止場にうずくまっている
059　006　波の音がひどく怖ろしく
059　028　波にさらわれた母と美しい少年を許せ！
061　124　ひとつの波のたわむれから
067　005　さっき波のうえをすべっていた魚が
068　020　手まねきする白い波を見た
071　046　波のように　こだまのように
072　008　やっと柵にとりついた人波の
072　070　この淋しさの波紋
074　026　みどりの波をわけてゆっくり遠ざかっていった
075　002　小さな波をうちあげて
080　010　夕陽の血が波のうえにしたたりおちて
082　005　波は永遠の沖へ去っていった
086　007　やがて波が襲いかかり
093　019　たえまなく打ちよせる多彩な波にすぎないことがわかり
093　021　やがて遠ざかってゆく波にすぎないことがわかる
094　024　遠く近くハイネズの原に打ちよせるのはアフリカを白くする波だ
102　018　悔恨の波はどこまでもうねってゆけ
103　025　それは波と風と運命の手にまかされた
108　023　立つ波の拍子とともに

114　010　冷たくなった珈琲カップのさざ波に……
119　001　黒い川波に
121　011　波の牙が入江の肌をかむように
142　029　また　いかなる非難中傷の壁、妨害の電波がぐるりをとり巻いても
144　010　いさら波打つまぼろしの暗女の里は遠い
144　015　みだれた山波を隠すのは
148　055　岩や空や、波や砂や、花の香りのする一日、
149　011　波からも打ちよせてくる
150　013　彼の表面は常に波立ってゐるが、彼の底は何時も静かで、
153　004　波の背は立ち
169　023　今年の小さな波じゃネ
173　047　すぐ大波のような睡魔が襲ってくるだろう
180　053　今年の波はどうあれ
193　022　大陸からの寒波はきついが

なみ　浪
061　053　浪にくずれるむなしい幻影が
061　063　風に吹かれ、浪にうたれる漂泊の旅から、
100　022　お別れの短かい放浪がはじまった
112　040　水が酒に　欲望がもっとたくさんの浪費にならないとこぼしている
192　026　叫ぶ、が、声にならない。ぴったり浪に包囲されて、

なみうつ　波打つ
144　010　いさら波打つまぼろしの暗女の里は遠い

なみき　並木
005　018　桜並木の向ふ側で燃えてゐる
128　059　ユリの木の並木にそって

ナミダ
140　023　水銀のナミダをたらして

なみだ　涙
039　028　それは涙に似てゐたのかもしれない
049　006　北風は涙を光らせる。
049　009　（すぐれた笛の音とすぐれた涙を…）
054　025　涙ぐんで　ときには涙ぐみもしないで
061　137　夜　昼　わが涙のみ注ぎて魂の糧となり
065　025　わけもなく涙をながす男の
066　006　女の子がひとり涙をおさえて立っていた、
070　061　血の涙をうかべているのは。
076　006　どうしてきみの涙をとめることができよう
076　008　さらに多くの涙があるのに

076　010　涙をながすほかには
077　022　母や妹や恋人のためにとめどなく涙を流しつづけた
084　005　つくり笑いにほんとうの涙をうかべ
085　025　インクや涙や食塩で錆びたりしない
088　073　太陽の涙から生れてきたぼくたちの
092　013　この涙は苦い
105　010　女たちの涙か、夕べの吐息か。
108　029　冷たい涙が宿るのだ
122　012　あなたの涙をわたしが泣く
124　004　仲間も涙も校歌も国家も売り足りないが
136　004　涙のベールで
138　003　どくろの目に涙がたまる
138　010　どくろの目に涙がたまる
138　013　どくろの目に涙がたまる
138　020　どくろ目に涙がたまる
160　013　コーネリアスという無名の男の　涙が出るほどおかしな物語
162　025　盃一杯の涙だから
164　003　わたしの涙をあなたが泣く
164　028　「あなたの涙をわたしが泣く」と
169　018　わずかに涙の粒がしぶいている
187　004　目尻に涙をにじませ

なみだぐんで　涙ぐんで
054　025　涙ぐんで　ときには涙ぐみもしないで

なみだって　波立って
150　013　彼の表面は常に波立ってゐるが、彼の底は何時も静かで、

なむ
017　040　なむ天にましますキリスト様よ

なめ　舐め
017　007　宝石を舐めたりして
040　012　街は傷口を舐めてゐる獣のやうに
054　057　リキュールグラスを舐めながら

なめくじ　蛞蝓
017　016　蛞蝓が樹から昇天するのを待つかね

なめている　舐めてゐる
040　012　街は傷口を舐めてゐる獣のやうに

なめらかな

039　021　けれどなめらかな旋律は
048　008　なめらかな蝋は寝台をながれる

なもない　名もない
074　004　東洋の名もない植民地の海にうかび

なやましい
054　019　君のなやましい顔の痕跡をとどめて

なやましい　悩ましい
065　041　その不気味な、悩ましい笑いは

なやみ　悩み
057　003　ぼくの悩みは始まっている
074　009　フランスの悩みは
074　010　かれら民衆の悩みだったが
087　009　きみの悩みは　こうだっけ
087　011　さて　ペニィの悩みはこうだ

ならい
100　003　かたい心をもち　小刻みにひとびとにならいながら

ならく　奈落
039　142　わたしの天は奈落へ崩れおちよう
141　009　躓いていたら、縄が切れて奈落におっこっちちゃったのよ……

ならされた　馴らされた
041　116　馴らされた惰性で

ならして
054　099　過去にも未来にもさよならして
167　020　節々をならして身ぶるいしている

ならす
004　003　炎は昆虫のやうに翅をならす

ならす　鳴らす
070　055　骨の手風琴を鳴らすのは。
102　016　もういちどハープの筋をかき鳴らすから

ならせ　鳴らせ
022　003　歯を鳴らせば

ならって　倣って
158　041　ぼくはきみに倣って

ならび
073　011　墓標のように番号をつけた煙突がならび
106　001　ありきたりの記念写真のスタイルで　三列にならび

ならべた
146　013　壁にドアをならべた廊下が

ならわし　習慣（ならわし）
007　004　煤けた町は古い習慣で壺の沈黙を　それはいつまでも黄色い河の
041　077　うす呆けてゐれば　習慣となった苦痛も
044　004　帰するところ一にして　祈りは慧き習慣（ならわし）の光明なり。
053　060　夢を見ながら眠る習慣が　こんなに悲しいものとは思いませんでした
093　009　酩酊は何によらず悪い習慣だが
103　019　風土とか習慣によって去勢されない
152　020　習慣のロボットになるな
156　017　習慣みたいな西洋人は
161　011　それがこの世の習慣である
166　003　「きみ」と呼んだりする習慣があって

ならんで
030　015　陰花植物とならんで写真にはいる
152　023　まだ綺麗な白い頭とが仲よくならんでいて

なり　鳴り
016　006　キウリ畑でサイレンが鳴り
055　016　海を飛んでゆく耳鳴りのようにおもえた
098　002　電話のベルが鳴りはじめた
167　003　東の窓と南の窓が交互に鳴り
167　005　家鳴り震動の交響がつづく
167　030　海鳴りさえ聞えてくる
191　002　山鳴り
191　003　海鳴り

なる
008　011　クビれてむらさき色になると　煙のつまったパイプを
010　007　やがて純白の雲の中にチョコレエトの肩が見えなくなる
013　002　パイプの腹が暑くなる
013　013　鬼になる子が
015　008　透明なる緑よ
017　021　仏陀たちの鼻は赤くなる

025 028 脳髄は毒のやうに青くなる
028 024 如何なるゼスチュアが会話が取交はされたか
028 041 おびただしい自然を覆ふ霧はやがて見えなくなるところ
036 014 あれらの花花はなるべく愛する
039 053 わたしはいつか鳥になるかもしれない
039 081 日没になると
039 111 月は遥かなる湖にかかる
039 146 さかんなる風はたち
041 024 なるほどあなたの剥製の体内から聞える
041 074 あなたは孤独の中からも追ひたてられさうになる
042 004 やさしき姿に彫まれた神となる
042 007 大いなる弧をめぐり遥かに高い所から
044 011 御身は教へる、肉の裔（すゑ）なるものたちに、
044 016 大いなる真昼の泉にいそぐからだ。
045 015 たとへば自らも垂直なる真空の如くありたい
046 024 雷とともに海へ出て　空はつらなる水平線をはしり
053 012 これがわたしの聖なる苦行衣です
054 053 手を下すと　人形のように動かなくなる
054 066 銀行が国民のものになるだろうから
054 108 そしてやがて獣のようになる歯並みの悪い唇の動きが
058 006 洋品店何々になるのでしょう
059 019 秋風がたつ頃になると
061 069 あなたの眼となり、あなたの表情となる「現在」に。
061 140 眼下の大いなる混沌のむかしに
061 184 大いなる父よ、
061 193 大いなる父よ、
061 198 父よ、大いなる父よ、
062 059 母なる海と太陽の光りが強すぎます
073 020 大いなる積乱雲のさけ目をみつめた
075 004 いかなる悪魔も
077 007 （聖なる言葉や
080 022 いかなる場所にも
080 024 きみにとって　いかなる「時」も
081 019 いまうなる弾丸を
087 021 雨傘がいたみ長靴が駄目になる
096 013 ミロ君の夜の太陽を見ていると　吐きたくなるね
096 016 アラビアの砂色ということになるのかな
097 002 ぴたりと静止したらどうなるか？
097 010 あのブロンドの若い男は、動物になる夢を持たなかったろう。
098 014 自分ひとりのものとなる時刻ーー
100 082 大いなる真昼はたちまち翳り
101 040 きみたちは　きみたちの大いなる真昼をかきけせ！
106 022 さらにいっそう素晴しいのは鼻だろう　内なるオルガンの全神経が

108 026 馬上の人も白髪となる
110 007 思うことは呪いになる
110 008 人はみなちりぢりになる
110 009 秋はますます深くなるばかりだ
112 015 敵にむかい黙々と出撃し　一夜あければ骨となる
113 020 あたたかい下着を送ればどうなるか
116 002 詩になるかもしれぬ
118 001 父なる「時」と
118 002 母なる大地
120 019 ぼくは睡くなる
142 029 また　いかなる非難中傷の壁、妨害の電波がぐるりをとり巻いても
142 047 それから　肩をおとして伏目になるか　面をそむけて窓の外を見るか
142 078 反祖国的ないかなる文書に署名してもいいと思っていた
142 106 一つの　否！　は　明日には無数の　否！　になるだろう
142 110 そのもろさは隠しようもなくなる
147 011 死は単なる事実になり
149 012 内なる人は融けていく
149 014 どくろとなるまで
150 011 ほんの気まぐれから立てた計画に対して忠実になることは、
150 032 虚構なるがゆえに傷つくことがすくなかったからか。
150 038 又本質的に個性的なるものも」と言ったのは、
152 020 習慣のロボットになるな
152 031 十数秒で黒い灰になる
156 031 どうしたらいいかわからなくなる
160 039 もう一度一人になるために
160 066 かれの名は雑誌やアンソロジーでさえめったに見かけなくなる
162 010 やっと狂喜の雫が宿るようになる
164 029 触れあうたびに遠くなる
165 001 父なる存在そのものが
165 019 子なるわたくしの存在が心（しん）から厭わしかったことの
166 015 ますます下手になる詩に頭をひねったりしながら
167 008 すぐ熱くなるといった気温で
167 032 いかなる罪悪も存在しないかのようだが
169 008 化石になるほかはない
171 004 かぎりなくふしあわせになる。
172 007 ほんとが嘘になるのに
172 028 もうすぐひとかたまりの無機物になるのだから」
174 012 問の霧は深くなるばかりであった。
180 037 ほんとのようなうそになるが
181 037 「無が一切となる前に」
182 006 いやな老人になるな
184 020 「なるようにしかならない」と言っているが
185 024 その空白がどれだけの負担になるかは

186　064　隠れる場所がなくなる
188　005　白内障の眼を、なるべく休めるようにしていますから、
188　009　五十何年ぶりに歯医者の厄介になるという始末。
188　016　呼吸ができなくなるという、面倒な病気です。
188　018　手術をせねばなるまいと、気にかけています。
188　037　眼よりも、心で計る構えになるのは、
188　046　時には、道徳や、宗教の立派な代理になるうえに、
188　075　一雨ごとに暖かくなるという、三月の雨が
192　019　助かった！　まだ死にたくはない。眼は真珠に、骨は珊瑚になったとかいう、五尋の海底の父になるなんてごめんだ

なる　鳴る
007　006　古風な鐘は藍をにじませて鳴る　曇る　動かない土絵具のカンヴ
024　001　ふせた耳の上でふと風が鳴る　くずおれた月光の雫に溺れ
051　017　内と外と　高鳴る波の響を聴け！
084　003　いい音で鳴る弦と弓が

ナルシス
039　098　ナルシスの末路を

なるべく
036　014　あれらの花花はなるべく愛する
188　005　白内障の眼を、なるべく休めるようにしていますから、

なわ　縄
141　008　愛以外の何かだったわ。抱きあって、苦痛でよじれる縄梯子にすがって、宙ぶらりんで
141　009　躓いていたら、縄が切れて奈落におっこっちちゃったのよ……

なわばしご　縄梯子
141　008　愛以外の何かだったわ。抱きあって、苦痛でよじれる縄梯子にすがって、宙ぶらりんで

なんおく　何億
126　010　地上の何億という眼は

なんかしょ　何カ所
150　054　鉛筆で何カ所も印をつけられた頁をつきつけられて、

なんごく　南国
088　027　あたたかい南国の陽ざしのように融かしてくれるから
148　004　南国で農業に専念し、妻と離別してから、

なんじ　何時
050　013　だがぼくは、何時何処で
067　012　何時

150　013　彼の表面は常に波立ってゐるが、彼の底は何時も静かで、

なんじの
133　018　なんじの心の愛する者を知れりと

なんじも　何時も
150　013　彼の表面は常に波立ってゐるが、彼の底は何時も静かで、

なんじゃくな　軟弱な
023　015　軟弱な地を擡げ夢幻の中から

ナンセンス
148　018　極限状況のナンセンスに、

なんぜんねんの　何千年の
081　013　何千年の闇をつらぬいて真赤な雲の火柱がたち

なんたい　軟体
048　024　軟体の極限をゆく無数の曲線の戯れ

なんぢ
036　008　なんぢら安心しろ

なんど　何度
138　004　何度殺しても
143　005　何度も同じ夢を見て
164　027　何度でもくり返さなければならない
165　011　何度、声にならない叫びを上げたろう
180　040　何度でも立ちかえらなければならない

なんぱする　難破する
169　009　難破する船上の人のように

なんぱせん　難破船
048　039　難破船はどこにある

なんびゃくまん　何百万
072　058　何百万の人々が、もう一度溜息をつくのだ
100　040　「何百万の死者の霊とともに

なんびゃくまんの　何百万の
072　058　何百万の人々が、もう一度溜息をつくのだ
100　040　「何百万の死者の霊とともに

なんぼう　南方
035　002　南方のドアを開き

なんまん　何万
079　011　何万という水兵と

にえたぎって　煮えたぎって
189　026　空の海が真赤に煮えたぎっているのを

におい
041　048　個人を非難しないわけにはゆかない　神々の名において
048　006　影の茂みから闇のにおいが漂ってきた
081　008　強い硝煙のにおいが立ちこめているので
091　003　モーターの焼けるにおい
120　006　しめった土のにおい
122　002　まだ日のにおいが残っていたが
134　003　悪しき社会において
162　007　松脂くさいにおいを発散し
173　021　耻を知るかぎりにおいて
187　012　ひとすじの硝煙のにおいを

におい　匂
006　003　爆発したセロイドの匂が　室内を明るくした　青い
008　003　点ける　と焦げたパンの匂がし　空腹をかんじた兵士
010　004　白い帽子は頭のアリカを教へるとともに日の匂を発散させる
010　005　日の匂を発散させる少年は青い麦の芽である
010　008　青い麦の芽の匂が向日葵のあたりにのこる
015　014　貝殻の匂のする帽子は
022　002　火薬の匂ひがあらう
029　005　すべて形骸の匂の中に住み
034　009　罪の匂ひのするドアの背後では
039　108　あなたの砂漠は油の匂がする
041　083　そこにあたる影や光　樹々から流れる緑の匂ひ
042　006　まだ日没の匂がのこってゐる
054　016　重たい軍靴と薬品の匂いを残し
054　111　古い夜の匂いがする頭に帽子をのせると
054　152　塩の匂いのする僕の体臭
055　031　厭な匂いの薬のように滅んでいるばかりであった
062　018　あなたはかすかにしめった灰の匂いを覆いかける
064　018　生（なま）パンでさえ死の匂いがする。
084　026　なま臭いサラダとサージンの匂いを発散する
091　004　ロースト・ビーフよりも香ばしいその匂いとともにやってくる

093　022　かれの眠りは純潔の匂いがする
093　024　ニコチンとアルコールのまじったいい匂いがする
102　003　いまはなつかしい硝煙とその匂いのなかに
128　015　いい匂いの黄昏に
129　019　匂いのない風と
133　017　死の匂い甘美な横丁で
147　015　ときたま死の匂いを発散させる若者に出会ったりすると

におい　匂い
054　016　重たい軍靴と薬品の匂いを残し
054　111　古い夜の匂いがする頭に帽子をのせると
054　152　塩の匂いのする僕の体臭
055　031　厭な匂いの薬のように澱んでいるばかりであった
062　018　あなたはかすかにしめった灰の匂いを覆いかける
064　018　生（なま）パンでさえ死の匂いがする。
084　026　なま臭いサラダとサージンの匂いを発散する
091　004　ロースト・ビーフよりも香ばしいその匂いとともにやってくる
093　022　かれの眠りは純潔の匂いがする
093　024　ニコチンとアルコールのまじったいい匂いがする
102　003　いまはなつかしい硝煙とその匂いのなかに
128　015　いい匂いの黄昏に
129　019　匂いのない風と
133　017　死の匂い甘美な横丁で
147　015　ときたま死の匂いを発散させる若者に出会ったりすると

におい　匂ひ
022　002　火薬の匂ひがあらう
034　009　罪の匂ひのするドアの背後では
041　083　そこにあたる影や光　樹々から流れる緑の匂ひ

にがい　苦い
079　016　苦い塩を口にふくみ
092　013　この涙は苦い

にかいの　二階の
066　025　二階の窓があいて

にがく
009　014　にがくはないので

にぎって　（握って）
010　014　パイプを握って雲の中から生れてきた少年は

にぎやかに　賑かに
148　053　スマトラ島を偲んでぼくたちは談笑し、賑かに昼食をとった。

にぎり　（握り）
027　021　わたしは黒いパイプを握り

にぎりしめ
136　007　凶器をにぎりしめ
177　015　手をにぎりしめて

にぎりしめて
177　015　手をにぎりしめて

にく　肉
012　022　大理石の肉体は磨かれよう
023　007　不幸に支へられた白い肉体は
025　047　樹には吊された肉体がある
025　057　蒼ざめた肉体は
028　021　幾何学が白い肉のやうな丘に
029　006　それら肉体の輪廓にそって膨まず
030　001　肉のみの肉に
030　010　内のみの肉に
030　034　肉のみの肉に
037　009　肉体よりも柔軟に
044　011　御身は教へる、肉の裔（すゑ）なるものたちに、
046　036　果して肉体だけは癒る用意があるかのやうに
048　001　肉体の襞
051　024　ぼんやりとデス・マスクが肉眼に見えてくる。
054　122　影は一つの世界に　肉体に変ってゆく
055　034　ほてった肉体のあいだの
070　024　なまの筋肉で出来ている、
070　039　喰いちらした獣肉の小骨や
072　024　独断批評家の口ぶりもわるくはないし、皮肉な記者のポーズも捨てがたい
076　016　血の骨よ血の肉よ血の花よ
085　023　毎晩たくましい筋肉をもって
100　023　やがて　肉体の要求にさからう魂は
101　007　いまはきみたちの肉と骨がどこまでもすきとおってゆく季節だ
103　018　粗暴な肉体の礼讃者でもないのだ）
106　040　かれは自分を罰してはならない　屠殺者や皮肉屋の包囲のなかで
106　042　血を流してはならない　その肉を引裂かれても
145　008　レスビアンの女たちの痙攣は不信者の地獄の笑いの一型態で　ブリッジして反った肉体の
145　023　「写真店の窓には曝された肖像の記念写真が　夢こそすべてであると知った時　もう肉体
160　072　かれの肉体に刻まれていき

167　022　肉の悲しみを知りつくした主は
188　039　どのみち、精神にか、肉体にか、
189　032　腐った肉片を歯のない口に運ぶ

にくがん　肉眼
051　024　ぼんやりとデス・マスクが肉眼に見えてくる。

にくしみ　憎しみ
035　009　あらゆる憎しみはふり落される
101　011　むかしの愛も　あたらしい日附の憎しみも
102　015　憎しみをかきたてる火掻棒で
104　010　愛と憎しみに撃たれた裸身のほそさに
138　015　憎しみ燃やして

にくたい　肉体
012　022　大理石の肉体は磨かれよう
023　007　不幸に支へられた白い肉体は
025　047　樹には吊された肉体がある
025　057　蒼ざめた肉体は
029　006　それら肉体の輪廓にそって膨まず
037　009　肉体よりも柔軟に
046　036　果して肉体だけは癒る用意があるかのやうに
048　001　肉体の襞
054　122　影は一つの世界に　肉体に変ってゆく
055　034　ほてった肉体のあいだの
100　023　やがて　肉体の要求にさからう魂は
103　018　粗暴な肉体の礼讃者でもないのだ）
145　008　レスビアンの女たちの痙攣は不信者の地獄の笑いの一型態で　ブリッジして反った肉体の
145　023　「写真店の窓には曝された肖像の記念写真が　夢こそすべてであると知った時　もう肉体
160　072　かれの肉体に刻まれていき
188　039　どのみち、精神にか、肉体にか、

にくへん　肉片
189　032　腐った肉片を歯のない口に運ぶ

にくむ　憎む
165　017　父を憎む

にげ　逃げ
003　014　逃げてゆくのは白い犬だ
005　029　あ　逃げた小鳥が月にゐた
006　002　逃げた
008　012　すてて　砂漠へ逃げてしまった　やがて新らしい靴の

013　015　白い蝶は逃げたが
013　024　僕は太陽のやうに逃げなければならん
014　022　口の悪い家畜どもが逃げていったあとで
021　015　逃げてゆく太陽を追った
029　012　だが風から逃げもせず爪立ちをして
039　068　いとしい樹木も逃げはしない
062　030　あなたは悪戯な瞳と微笑で逃げてゆけばよい
099　002　逃げるボールを追ってゆく
121　006　陸のウニはもうごめんだと逃げだそう
138　011　手に手をとって逃げたのに
146　034　わたしは無我夢中で逃げ出しましたが

にげた　逃げた
005　029　あ　逃げた小鳥が月にゐた
006　002　逃げた
013　015　白い蝶は逃げたが
138　011　手に手をとって逃げたのに

にげだし　逃げ出し
146　034　わたしは無我夢中で逃げ出しましたが

にげて　逃げて
003　014　逃げてゆくのは白い犬だ
008　012　すてて　砂漠へ逃げてしまった　やがて新らしい靴の
014　022　口の悪い家畜どもが逃げていったあとで
021　015　逃げてゆく太陽を追った
062　030　あなたは悪戯な瞳と微笑で逃げてゆけばよい

にげてゆく　逃げてゆく
003　014　逃げてゆくのは白い犬だ
021　015　逃げてゆく太陽を追った

にけんぶん　二軒分
166　021　いつものように車で二軒分の買物をした

ニコチン
093　024　ニコチンとアルコールのまじったいい匂いがする

にごった　濁った
054　021　「僕たちは都市をつらぬく濁った河にそって
056　008　昨日のように空は濁った河のうえにある

にごって　濁って

073　003　メコン河の水で濁っていた

にごらない　濁らない
041　003　地の果よ　そして濁らない泉がある

にごれる　濁れる
046　033　濁れる水の地下のうねりこ耳を傾けつつ

にし　西
017　011　西の空が良いかげんに焦げて
039　082　西方の窓を照らしだす
055　056　西と東の二つの大戦のあいだに生れて
096　007　ようするに　ヨーロッパは西の果へ
106　019　かれの額は　西洋皿の平面のように広く
116　009　西と東に　はげしく
142　004　西側の新聞や著名人の多くの声明には
142　074　「今日の西側の勇気の基準によれば
142　082　彼がおかれている状況は　西側の同時代人のそれより
156　017　習慣みたいな西洋人は
174　018　（きみが美しい奥さんと結婚して、みんなに羨まれながら、西荻窪のアパートに住んでいたときのことだ）
181　025　西の空を走り
186　020　それで今度の西下の印象は？

にじ　虹
005　025　虹のあるウイットな会話は
007　001　ジャンクの帆が蝙蝠のごとく羽博いて　ランプの虹がひろがる
039　116　わたしはいつか虹を見るかもしれない
041　042　虹のやうに　或いは地の草のやうに
051　023　虹彩から光りが消えうせ
136　001　思い出は虹だから
141　004　小さな虹をまたぐ大きな虹を見たわ。
145　011　「忘れはしないという虹色のラヴ　ソングが聞えていた
162　013　虹の橋を渡っていったが
168　009　虹の国を描くこともあったとおもう

にじいろ　虹色
145　011　「忘れはしないという虹色のラヴ　ソングが聞えていた

にしおぎくぼ　西荻窪
174　018　（きみが美しい奥さんと結婚して、みんなに羨まれながら、西荻窪のアパートに住んでいたときのことだ）

にしがわ　西側
142　004　西側の新聞や著名人の多くの声明には

142　074　「今日の西側の勇気の基準によれば
142　082　彼がおかれている状況は　西側の同時代人のそれより

にしき　錦
154　020　錦の帯がするすると垂れてくる

にじませ
007　006　古風な鐘は藍をにじませて鳴る　曇る　動かない土絵具のカンヴ
167　056　苦しみのベッドに血をにじませる
187　004　目尻に涙をにじませ
193　015　窓の灯をにじませる夜には

にじませて
007　006　古風な鐘は藍をにじませて鳴る　曇る　動かない土絵具のカンヴ

にじませる
167　056　苦しみのベッドに血をにじませる
193　015　窓の灯をにじませる夜には

にじむ　滲む
041　031　あなたの街灯の滲む光が

にじゅうこうい　二重行為
143　004　二重行為の詩人は

にじゅうさい　二十才
150　001　二十才になった年の秋に

にじゅうにん　二十人
150　028　二十人ほどいた仲間のうちで、現在、

にじゅうねん　二十年
062　008　二十年もむかしに死んで
092　008　もう二十年たつ
112　003　二十年か
160　015　二十年も昔に記憶の底に沈んだ詩人が

にじゅうの　二重の
047　003　左右に拡げる黒い蔭！　二重のドア！

にじゅうぷん　二十分
028　007　二十分も早いことに不思議はない
174　009　きみは意外に元気な様子で近況を語ってくれ、心暖まる十五分か二十分であった。

にじょう　二乗
169　004　自殺の二乗を生きるから

にせの　偽の
193　009　偽の革命

にせんよんひゃくめーとる　二千四百メートル
072　029　二千四百メートルの興奮

にたものどおし　似た者同士
150　019　ようするに小心な若輩の似た者同士の集りで、

にちげつ　日月
182　022　日月の長さは悟りだから
190　006　峰から昇り尾根に沈む日月

にちぼつ　日没
031　007　雲の多い日没の空に出遭ふ
033　020　あれは日没とともに
039　081　日没になると
040　003　日没には
042　006　まだ日没の匂がのこってゐる
046　038　日没の空にあなたはわななきつつ身を横たへ
061　148　日没の街をゆく人影が、
124　031　日没に追いつかれていた

にちようび　日曜日
071　007　日曜日の停車場に
071　014　日曜日の停車場で
072　002　天気予報が気がかりだった日曜日
148　049　日曜日の海はおだやかにぼくたちをむかえた。

にちようひん　日用品
031　015　雨傘やブラシなど日用品が置いてある

にっか　日課
087　016　ペニィの日課はそれだけだが……
087　020　ペニィの日課はそれだけだが……

にっき　日記
036　005　それらの悼ましい怒でおれの日記を汚すな

にっこう　日光
172　020　常緑樹にしたたる日光の蜜が

にっしょうき　日章旗
188　055　（……今日も打振る日章旗……）

にっぽん
114　011　「ぼくはたたかわないにっぽんじんです

にっぽんじん
114　011　「ぼくはたたかわないにっぽんじんです

にていた　似てゐた
039　028　それは涙に似てゐたのかもしれない

にてきた　似てきた
036　024　おれの影はだんだん樹木の影に似てきた

にてくる　似てくる
101　002　世界はなんと曠野に似てくることか

にどと　二度と
068　003　（二度とお会い致しません）
075　015　もう二度とめぐりあうこともない
102　008　魂は死んで二度と生れてこないから
150　072　喪われたら二度と取り戻せないことを忘れてはいないだろうか。
193　018　同じ風景は二度と現れない

になった　担った
054　006　そして銃を担ったおたがいの姿を嘲けりながら

にぶい
045　004　にぶい気配が仄暗い光触にただよふ

にぶい　鈍い
028　003　緑の影はいつもガラス管によりそってゐた純粋な頭の鈍い速度について
046　007　澱んだ鈍い時間をかきわけ

にふんさんじゅうびょう　二分三十秒
072　028　ゴールまで二分三十秒の興奮

にほん　日本
051　012　病んでいるのは日本じゃないか。

156　001　日本人だから
156　037　わが日本語の「愛」は
160　074　ところで　日本の社会の日蔭を歩む
184　012　日本人妻の間にできた子供である
184　015　「ヒロシ」という日本名の
188　019　一九五八年に、日本で、
188　084　日本の重文とされている民家への憧れが、
192　011　もしかすると、近づくにしたがって、遠ざかっていく海なのかもしれない。こんなところは、日本中のどこにもあり

にほんじゅう　日本中
192　011　もしかすると、近づくにしたがって、遠ざかっていく海なのかもしれない。こんなところは、日本中のどこにもあり

にほんじん　日本人
156　001　日本人だから
184　012　日本人妻の間にできた子供である

にほんじんつま　日本人妻
184　012　日本人妻の間にできた子供である

にほんめい　日本名
184　015　「ヒロシ」という日本名の

にまいじた　二枚舌
156　013　二枚舌に

ニヤニヤ
150　058　あんがい平然としてニヤニヤ笑っていた。

にゅうこん　入魂
151　036　一体一体に入魂の秘術をつくしてきたのだ

ニュウス
009　003　鉄砲百合が咲いたといふニュウスで

ニューギニー
128　056　ぼくはニューギニーからタヒチ島へ行ってくる

ニュース
058　050　そしてニュースが私を読みすてたら
124　014　不確実なニュースのかわりに
125　007　ニュースと駄弁で耳を痛めた
145　028　オーデンはスペイン内乱に参加しなかったというニュースを聞いた
185　002　ラジオ・ニュースが伝えたとき

185　019　最大のニュースにちがいない

ニューズ
072　001　――どんな国際ニューズよりも
072　054　どんな国際ニューズよりも
072　055　これは今週のビッグ・ニューズだ

ニューヨーク・タイムズ
160　059　ニューヨーク・タイムズの記者が屍体置場のリストからかれの名をみつけ出し

ニューヨーク市
160　073　ニューヨーク市の屍体置場までつづくのである

によりそってゐた
028　003　緑の影はいつもガラス管によりそってゐた純粋な頭の鈍い速度について

にらむ　睨む
026　006　そのとき銃眼の奥から睨む
047　012　鏡がひややかに自虐を睨む

にれ　楡
041　141　楡の幹には自由な樹液がのぼりはじめた

にわ　庭
032　003　庭は暗く
039　004　この森の庭園には
042　001　庭は荒れて　影もなく
042　015　庭は荒れて　もの影もなし
045　007　荒れた庭に　花樹はむなしく崩れかかり
084　018　「いまではどちらのお家庭にも
088　037　これはお家　これはお庭　これは樹
099　014　それぞれの庭で規則正しくはずんでいる
148　044　松林にかこまれた枯芝の庭で、
167　025　荒れた裏庭に出て
172　027　箱庭のような故里が

にんぎょう　人形
006　010　少女が碧い眼をした人形を抱へて出てきたが
054　052　手をあげると　人形のように歩き出し
054　053　手を下すと　人形のように動かなくなる

にんぎょひめ　人魚姫
149　001　しぶきをあげる人魚姫の

にんげん
101　055　にんげんの悲しみによごれた夕陽をすてにゆこう
103　030　にんげんの運命をすいこむもの
145　020　どうかするとにんげんは機械よりも機械だから
145　030　愛がなくともにんげんは生きられる
191　005　にんげんはいなくなった

にんげん　人間
011　009　どうかすると沢山人間が動いてゐる
048　032　地平線がのせている人間の重たい故郷
049　005　重たい悲しみに塗りこめられた人間の影がある。
051　002　人間の遠い未知の故郷へ
051　030　人間はチューブのようなものであったらよい
054　054　彼等が剥製の人間であるかどうか
054　061　単により高尚な国民　結社　人間の材料にすぎないと
054　071　おお　いまこそ偉大な人間と大きな河は
077　032　（ああ人間性よ……
090　009　人間が自然に手をつける方法は……
090　018　人間の仕事は
095　007　どうして人間がすこしも苦しまずに死ねようか？
113　039　最高に人間的だった同志スターリン
121　001　人間くさい
126　014　そんなに遠くまで人間の言葉をとどけにいく
126　020　人間の精神の問題かもしれないから。
128　018　人間が住んでねえんだ　昔から
133　003　人間蛾は街の燈火に誘われる
142　033　支配に自信なく　人間の良心を
142　108　一個の弱い人間の信念をも挫くことができないとわかれば
142　116　信念を持つ人間の精神が世界最強の力には通じないとか
142　120　　これ以上は一歩も進ませないそ　と宣言する不屈な人間の精神のみが－
158　020　自然にたいして有罪でない人間はいない
160　001　忘れられていく人間の過程が
160　022　（公衆の面前では　場違いな人間というのと同じだ）
167　054　人間のあぶらが
173　014　そこでは人間の血がまだ新鮮なのだ

にんげんせい　人間性
077　032　（ああ人間性よ……

にんげんてきだった　人間的だった
113　039　最高に人間的だった同志スターリン

にんち　認知
142　025　秘密警察の認知　もしくは同意なくして

にんむ　任務
084　029　重い任務をになったレデイたちです
101　039　死の穫りいれがおわり　きみたちの任務はおわったから

ぬいで　脱いで
025　058　欲望に乾いた皮膚を脱いで
105　006　オーバーを着てゆこうか、脱いでゆこうか、

ヌウメノン
039　058　ヌウメノンよヌウメノン

ぬがせる　脱がせる
164　031　きみの花柄のパンティを脱がせるためだったら

ぬぎ　脱ぎ
018　007　手袋を脱ぎ
029　004　疲れた衣類は脱ぎすてられ
042　013　脱ぎすてた分身が青く光る
062　016　大きすぎる白い屍衣を脱ぎ
176　003　着ているものを脱ぎ

ぬぎすて
121　002　古シャツはぬぎすてよう

ぬぎすてた　脱ぎすてた
042　013　脱ぎすてた分身が青く光る

ぬぎすてられ　脱ぎすてられ
029　004　疲れた衣類は脱ぎすてられ

ぬきまし　抜きまし
188　010　その歯は抜きましたが、他の歯に窩が無数にあるとか、

ぬぐい
052　024　わたしはいまでも眼鏡のつかれをぬぐい
193　007　眼鏡の疲れをぬぐい

ぬぐって
062　054　傷ついたわたしたちの記憶をぬぐってゆくのを

ぬぐはれて　拭はれて
018　001　もう響は拭はれて

ぬくもり
093　026　やすらかな寝息とかすかなぬくもりをのこして
112　022　寝床のぬくもりでほてった身体を　詰まった路面電車に積みこんで

ぬけ
010　017　老いぼれた天体は歯がぬけてゐる
041　057　街角をまがり窓をとほりぬけて
041　122　葉はぬけ落ち　黒い幹が囲繞地の隅に忘れられた
043　004　そのしめった風は吹きぬける
046　005　はるか足下を潜りぬける黒い水の流れ
048　023　壁にかかっている着物からぬけだし
054　045　もしかしたら君の姿が霧の中からぬけだしてこないかと
054　082　見よ　憎悪と虚栄のぬけがらを……
054　116　彼は唾をはく街燈のそばを通りぬけ
061　007　はるか、地下を潜りぬける運河の流れ、
061　015　いくつもの通路をぬけ、
070　020　わたしの感覚はぬけおちて、
094　003　とある松林をぬけて海へでる
101　006　死はいそがぬけれども
120　008　とおりぬけていく
128　026　大事な「モア・ザン」がぬけました
128　029　ひんやり夜風が吹きぬける
134　006　過去は心からぬけ落ち
150　030　これは、私だけが「虚構の個性」をつらぬき、偽善の間道をくぐりぬけて、
154　001　腑ぬけになってたどりつく
183　012　人ごみをどうすりぬけたらいいか

ぬけおち　ぬけ落ち
041　122　葉はぬけ落ち　黒い幹が囲繞地の隅に忘れられた
134　006　過去は心からぬけ落ち

ぬけおちて
070　020　わたしの感覚はぬけおちて、

ぬけがら
054　082　見よ　憎悪と虚栄のぬけがらを……

ぬけだし
048　023　壁にかかっている着物からぬけだし
054　045　もしかしたら君の姿が霧の中からぬけだしてこないかと

ぬけだして
054　045　もしかしたら君の姿が霧の中からぬけだしてこないかと

ぬけて
010　017　老いぼれた天体は歯がぬけてゐる
041　057　街角をまがり窓をとほりぬけて
094　003　とある松林をぬけて海へでる
120　008　とおりぬけていく
150　030　これは、私だけが「虚構の個性」をつらぬき、偽善の間道をくぐりぬけて、

ぬけでて　抜け出て
020　012　ドアを抜け出て

ぬけてゐる
010　017　老いぼれた天体は歯がぬけてゐる

ぬけみち　抜け道
093　013　かれにとってはとっくに抜け道がわかっている迷路である

ぬける　抜ける
018　012　路地を抜ける春のやうに

ぬすみ　盗み
017　034　雨の中を盗み去られたことには

ぬすみみている　ぬすみ見ている
058　035　その横顔をぬすみ見ている紳士がいます

ぬすむ　盗む
164　011　人の心を盗むあなたの言葉は

ぬすんだ
092　005　ぬすんだ本の味は

ぬってゆきます
058　026　もみあうおびただしい影をぬってゆきます

ぬのじ　布地
176　012　レース織りのカーテンの布地を

ぬばたまの
136　026　ぬばたまの未来の闇で

ぬま　沼
150　014　一匹の魚さへ住んでゐない沼に釣糸を垂らしてゐる影だけが生きてゐる……」
150　051　彼は我々の雑誌の創刊号に、玉の井の娼婦と客との交渉を扱った「泥沼」を書き、

ぬらし
025　015　沙漠の舌をぬらし

ぬらす　濡らす
021　025　室内のガラスを濡らす
034　003　一個の石を濡らす

ぬりこまれた　塗りこめられた
049　005　重たい悲しみに塗りこめられた人間の影がある。

ぬりこめられて
053　006　みんな灰色の壁にぬりこめられてしまって

ぬれた　塗れた
046　023　この泥に塗れた水脈もいつかは

ぬれた　濡れた
040　013　濡れた新聞紙の上に蹲まる
041　030　濡れた肩には
055　005　おまえの濡れた肩を抱きしめたとき
061　144　あなたの青銅の額には、濡れた藻の髪が垂れ、
061　164　そして濡れた藻と青銅の額の上に、
068　029　濡れた髪をかきあげながら
122　005　なま牡蛎色に濡れた遠景のなかを

ぬれてくる
039　027　しぜんに頬がぬれてくる

ぬれてゐた
026　036　明朝の新聞紙がぬれてゐた

ぬれながら
038　008　午前の霧にぬれながら

ぬれる　濡れる
011　004　空が濡れる雫が肋骨をたたき

ね　根

005　006　赤い屋根の学校は
009　001　コンクリイトの屋根の上
025　016　太古からの根をひらき花々は
028　060　都会の屋根の下よ商店街の商人たち
037　005　ほんのわずかに震へる根を支へてゐる
038　004　いくつかの街と村の屋根をすぎる
038　030　屋根のみを叩いてはひとり淋しがってゐた
039　008　根の茂みに水が這ひよる
043　001　石で葺かれた屋根をでて
046　004　石で作られた涯しない屋根の町の
047　008　頭上で屋根を剥ぐ不気味な爪の音……
048　003　腕のつけ根からはじまる
061　006　石でかためた屋根の街の
064　017　じめじめした屋根裏では、
064　024　石の屋根の上には重たい雲が垂れこめていた。
065　028　燃える屋根の下に、愛は
066　036　どの家々も沈黙の屋根におしつぶされていた、
083　001　夏草のうえの屋根が
090　003　どんな地に根をはったのか
109　011　根が考え、幹が感じている。
121　015　台所では大根を刻む音がしている
124　010　相場師の根性は
142　056　異端者や地下の作家や哲学者を根絶やしにする
143　001　厚い雪に埋れた根のように
146　061　屋根を叩く雨音がひとしきり強くなって
188　008　歯も、先日、奥歯が一本、根が痛みはじめたので、
188　076　ひとしきり烈しくなり、深夜の屋根を叩いている。
190　006　峰から昇り尾根に沈む日月

ねいき　寝息
093　026　やすらかな寝息とかすかなぬくもりをのこして
148　042　ぼくたちは枕を並べてすやすや寝息を立てていた。

ねいろ　音色
154　007　悲しみの音色にさそわれ

ねがい
158　026　ひたすらなねがいで

ねがった　願った
026　026　わたしは額を象嵌せよと願った

ネクタイ

054　154　ネクタイピンでこじあけられた窓の向うがわ
055　040　おれは慢性胃腸病患者のだらしないネクタイをしめ
112　021　薄いネクタイでうやうやしく喉頸をしめ
128　092　ネクタイしおれる

ネクタイピン
054　154　ネクタイピンでこじあけられた窓の向うがわ

ネクタル
039　147　香ばしいネクタルの泉となって

ねこ　猫
001　011　白い頸の猫は
055　042　猫背のうえに乗せて
145　021　膝の上の猫を大事にしてあげなさいと今日の声は忠告していた
146　010　マスコットの猫が欠伸をしていました
175　003　猫の質問をくりかえした
175　004　ぼくは猫にむかって

ねこぜ　猫背
055　042　猫背のうえに乗せて

ねころんで
014　006　物ぐさな楽器たちはねころんで

ねざめ　寝ざめ
139　003　吹きさらしの露の寝ざめの空耳か

ネジ
014　005　手を当てて耳のネジを検査してゐるのを

ねしずまって　寝しずまって
095　011　どの家も寝しずまっていて

ねた　寝た
151　032　一緒に寝た女の数は

ねだやしにする　根絶やしにする
142　056　異端者や地下の作家や哲学者を根絶やしにする

ねたらくじょうど
173　052　「ねたらくじょうど

ねだん　値段
123　007　未来に値段をつけたくない

ねぢ
025　004　水にながれる貝殻がねぢれて
027　005　ねぢによって組み立てられてゐる空間に
027　012　不図ねぢが軋り
028　033　ねぢれた鎖のやうな数輌の列車の合図が響き
181　024　断末魔の腸がねぢれるように

ねぢれた
028　033　ねぢれた鎖のやうな数輌の列車の合図が響き

ねぢれて
025　004　水にながれる貝殻がねぢれて

ねぢれる
181　024　断末魔の腸がねぢれるように

ねつ　熱
018　015　熱い麦の管は
025　036　重たくなった頸に熱い風が
028　016　熱度計の上昇につれて
044　014　熱い太陽を背負ふ　神々よ
046　027　熱い額の　橋上の人よ
051　015　海が熱い体温のなかで燃えたぎっている、
051　035　出口を求める熱っぽい瞳で
054　127　僕は突如白熱する
054　168　熱烈に夢みている
061　096　氷と霜と蒸気と熱湯の地獄の苛責に
070　027　おまえの熱い血の管は
077　019　高熱に苦しみながら
094　014　背をやく熱い塩のシートに転がされ
136　017　春の熱病をやんでいる
144　001　口に熱を持ち
148　052　グロテスクに繁茂する熱帯植物を観賞した。
167　008　すぐ熱くなるといった気温で

ねったいしょくぶつ　熱帯植物
148　052　グロテスクに繁茂する熱帯植物を観賞した。

ねっとう　熱湯
061　096　氷と霜と蒸気と熱湯の地獄の苛責に

ねつどけい　熱度計
028　016　熱度計の上昇につれて

ねつびょう　熱病
136　017　春の熱病をやんでいる

ねつれつに　熱烈に
054　168　熱烈に夢みている

ねどこ　寝床
024　004　けてゐる　寝床に散らばった怠惰な骨の中から　陰鬱な眼球
041　099　むかしの世紀がまだ寝床に就かぬうちは
093　008　寝床でウィスキーを飲み煙草をふかす
112　022　寝床のぬくもりでほてった身体を　詰まった路面電車に積みこんで
118　008　寝床は一つ
154　002　雲のはずれの寝床

ネム
013　001　ネムの木の下で
013　006　ネムの木は負け惜しみを云ふ
013　016　ネムの手に捕かまった
013　019　悪戯なネムは
013　025　ネムの木は寒いよ諸君

ねむっている　眠っている
039　123　眠りを眠っている人たちを
061　102　犬は犬のなかで眠っているね
191　016　眠っているひとを目覚めさせるため。

ねむっている　眠ってゐる
015　015　鏡のなかで眠ってゐる
018　009　すやすや眠ってゐる球に
031　005　目覚めてゐる石や眠ってゐる樹木は

ねむり　眠り
030　033　実ったあとの浅い眠りは疲れである
034　008　眠りの蔭をあゆむ
039　118　眠りをもたらし
039　123　眠りを眠っている人たちを
055　030　なんだか眠りたりないものが
061　127　眠りからうまれたばかりの水は
063　014　ぼくのいない眠りのなかで

065　051　終りがあるのだろうか？　永遠の眠りが
081　007　眠りのなかには
081　030　兵士の眠りをゆすりながら
093　007　かれにとって眠りもひとつの儀式だから
093　022　かれの眠りは純潔の匂いがする
099　006　もう一人の妹は眠りながら小径を歩いている
112　043　眠りのなかで繁殖し
112　044　眠りながら腹をこやす王国を夢みているうれしいはらからたち
118　011　原始の眠りのなかで
136　022　他人の眠りのなかで
158　040　死はやすらかな眠りであったろう
173　049　深海の底の眠りに就くことができる
179　020　死よりも贅沢な眠りに就く

ねむる　眠る
002　008　魚のやうに眠る日
050　028　Mよ、地下に眠るMよ、
053　060　夢を見ながら眠る習慣が　こんなに悲しいものとは思いませんでした
054　104　君がとくに眠るとき
101　018　膝をだいて眠るような夢をもたず
161　002　眠るためには

ねむれ　眠れ
014　027　眠れよ眠れと声がしてゐる
032　009　眠れる半身に垂れさがり
041　095　眠れる水　眠れる森
041　101　眠れる世界に息を吹きこむ
046　017　眠れる波のしずかな照応のなかに
066　039　眠れない部屋のあかりがひとつ
125　022　むずかゆい両脚をとじて一人のベッドで静かに眠れ
170　003　眠れぬ夜の収穫は

ねむれる
042　012　ねむれる草のうへに

ねむれる　眠れる
032　009　眠れる半身に垂れさがり
041　095　眠れる水　眠れる森
041　101　眠れる世界に息を吹きこむ
046　017　眠れる波のしずかな照応のなかに

ねんげつ　年月
071　009　われわれはとりかえしのつかぬ年月を

132　007　年月はめぐりめぐって
137　014　空虚なこだまのなかの幾年月
150　026　年月のきびしさに苦笑するほかはなかったが、
154　010　すべての年月をかけて
167　048　ながい幽閉の年月に耐えた
167　069　共に暮した年月にも

ねんじて　念じて
167　058　家の崩壊はないものと念じてきたのに

ねんど　粘土
036　003　乾燥した粘土の上に風だけの虚しさが

ねんねん　年々
048　022　うすれゆく年々の冬のきびしい日の下で……
132　009　年々の秋をとざす一つの秋

ねんりん　年輪
090　010　そこに年輪をよむかわりに

の　野
059　020　木や野茨が枯れて
061　129　野に池をつくり　地上に溢れ
088　081　ずっと空に近い野原の
100　067　野原がひとつ消えた
101　002　世界はなんと曠野に似てくることか
101　027　ながいあいだこの曠野を夢みてきた　それは
101　032　ひろい曠野にむかう魂が
101　056　この曠野のはてるまで
133　027　野末の朝露
143　020　どこの荒野の枯木にとまるのか
160　024　歴史というものが　どんなにわれわれの野心や虚栄とくいちがうかという
168　007　緑野の香にむせながら
181　029　野菜の未来に
187　009　曠野がひらけ
189　030　色は青いが新鮮でない野菜

ノイローゼ
174　004　「病気がこんなにこたえるとは、思ってもいませんでした。春からノイローゼ状態で我ながら呆れかえっていま

のうぎょう　農業
148　004　南国で農業に専念し、妻と離別してから、

のうこつどう　納骨堂
135　006　水漬く兵士の納骨堂に

のうずい　脳髄
024　002　脳髄は青く透明である　ざわめきの聞こえる孔には栓をつめ
025　028　脳髄は毒のやうに青くなる

のうむ　濃霧
160　040　コーネリアスは濃霧の街を歩いて帰路につく

のがれさる　逃れ去る
079　019　ぼくらは黙黙と逃れ去るだろう

のがれる
119　008　のがれるところなき身の

のがれる　逃れる
070　026　ぼくはどうしても逃れることができない。

のけぞらせた
070　011　わたしはのけぞらせた顔を

のこされた　残された
026　032　残されたただ一個の帽子は
033　015　小さな宇宙の平面の上に残された
158　023　残された唯一の道だった

のこされる　残される
041　117　あなたの影だけが残される
054　119　僕はひとり残される

のこし　残し
007　013　阿片の軽艇（ボート）は霧の中へ青い泡を残して去るべく一人の少女を誘拐
020　009　骨のかたちを残して去り
054　016　重たい軍靴と薬品の匂いを残し
072　065　十万のひとが残していった大きな寂寥が
159　011　かすかに衣ずれの音と麝香のかおりを残して

のこして　残して
007　013　阿片の軽艇（ボート）は霧の中へ青い泡を残して去るべく一人の少女を誘拐
020　009　骨のかたちを残して去り
072　065　十万のひとが残していった大きな寂寥が
159　011　かすかに衣ずれの音と麝香のかおりを残して

のこっている　残ッテヰル
011　015　　マダ冬ガ残ッテヰル

のこっている　残ってゐる
011　006　落葉が散って　冬が残ってゐる

のこってゐる
042　006　まだ日没の匂がのこってゐる

のこる
010　008　青い麦の芽の匂が向日葵のあたりにのこる
082　003　八月は海辺にのこる白い墓
111　005　暮れのこる灰色の道が

のこる　残る
106　047　対岸は霧がふかくて見えないが　残る一つの疑問には
124　029　残る一人であるぼくは
142　054　あとに残るのが　無気力な教養人ばかりだとしたら

のしかかって
063　010　重たくぼくの胸にのしかかってくる
183　009　不況が心にのしかかっているからだ

のずえ　野末
133　027　野末の朝露

ノスタルジア
055　009　可憐な魂のノスタルジアにともして

のせた
074　025　担架をのせた小舟は
103　021　ゆめをのせた「ピイクオド」号に乗りこんでゆく
179　024　グラスを胸にのせたまま

のせた　載せた
040　027　輝くチーズを載せた車がとほる
150　055　こんな創作を今度載せたら発禁にするぞ、と検閲係から脅かされた。

のせたら　載せたら
150　055　こんな創作を今度載せたら発禁にするぞ、と検閲係から脅かされた。

のせている

048　032　地平線がのせている人間の重たい故郷

のせる
054　111　古い夜の匂いがする頭に帽子をのせると

のぞいた　覗いた
010　011　銀色のパイプで穹を覗いた

のぞいて
058　033　指輪や装身具の飾ってあるショーウィンドをのぞいて

のぞいている　覗いている
051　031　「誰かが覗いている」

のぞき
066　026　わかい女のやせた顔がのぞき
069　026　じっと心の闇をのぞきこむ
089　032　黒い河をのぞきこんでいる人がいます

のぞきかえす　覗きかえす
051　036　こっちを見凝めている鍵穴を必死に覗きかえす

のぞきみして　覗き見して
137　010　入日のさまを覗き見してきたのだ

のぞく
070　049　天井からのぞくのは霧の顔。
071　035　山の頂きから谷をのぞくひとびとは
163　014　雲切れの空にのぞく

のぞましい　望ましい
039　127　小さな炎が消えてしまふことは望ましい

のぞみ
061　001　彼方の岸をのぞみながら

のぞみ　望み
062　028　一切の望みをすててどこまでも一緒にゆこう
179　017　それがかれの望みだった

のぞんで　望んで
152　027　透明にそびえることを望んでいる

のち
020　004　ポケットに捕へたのち
053　040　わたしのいのちは
053　043　いのちを惜しんで暮すことに悲しみなんかありゃしない
101　036　消えたいのちの水をのんでいる兵士たちよ
114　012　いのちだけはおたすけを」
120　014　繁華のちまたの
138　016　いのちを刻む
140　007　いのちを機械に売りとばして
156　022　国情のちがい
156　023　心性のちがいはどうしようもない
166　011　いのちもいらない初年兵の頃には
168　015　この世を経めぐるいのちの物質よ
178　004　こののちは訪うべくもないゆえに
178　006　無縁のいのちを

のった　乗った
041　052　うなだれて　あなたを待ってゐるバスに乗った
100　004　うなだれて　ぼくらを待っているバスに乗った
186　001　新幹線に乗ったのは初めてですって？

のって
031　001　風にのって
039　075　パイプの煙にのって
088　008　膝にのって話をせがむマリよ

のって　乗って
008　013　群は　雲に乗って押しよせ　黄色く汚れた地図の上を
010　001　自転車に乗ってゐる少年は自転車のスピイドをもつ
021　013　ポニィに乗って
027　020　椅子は書籍の上に乗ってゐる
028　053　乗ってゐる何が乗ってゐる何が
041　025　海からやって来たといふ　空を飛ぶ藻に乗ってきた人よ
091　008　虻よりはやいガソリンの微風に乗ってゆく
170　014　蓮の葉の上に大きな露の玉が乗っていて
186　044　（どの車輛にでも乗っている可能性があった）

のっている　乗ってゐる
010　001　自転車に乗ってゐる少年は自転車のスピイドをもつ
027　020　椅子は書籍の上に乗ってゐる
028　053　乗ってゐる何が乗ってゐる何が

のってきた　乗ってきた

041　025　海からやって来たといふ　空を飛ぶ藻に乗ってきた人よ

のどかな
017　001　ひろい沙漠にはのどかな樹が

のばし
080　002　まっすぐ水平線をのばしながら
099　001　紺の半ズボンからほそい脛をのばし
106　027　高名な美学派の詩人みたいに　口髭をのばしたり刈りこんだりして

のばしたり
106　027　高名な美学派の詩人みたいに　口髭をのばしたり刈りこんだりして

のばしている　伸ばしてゐる
014　029　頭髪を伸ばしてゐるのを知らんかね

のはら　野原
088　081　ずっと空に近い野原の
100　067　野原がひとつ消えた

のびた
128　004　活字のわれ目から　ひょろりとのびた
150　047　我々が生きのびたことで誇り得るものが、

のびる　伸びる
018　010　青い芽が伸びる

のぼって　昇って
137　002　ふくらはぎからのどに昇ってくる
141　002　高く、高く、高く昇っていったわ。

のぼってゆく　登ってゆく
025　032　高く登ってゆく階段をとりまくのは

のぼり　登り
013　003　青いけむりの蛇が枝を登り

のぼりつめる
153　011　ひたすら切岸をのぼりつめると

のぼりはじめた
041　141　楡の幹には自由な樹液がのぼりはじめた

のぼる

005　033　アヘンの煙が立のぼる
030　028　すべての記憶の中からたちのぼる
038　009　斜めにのぼる階段と
042　011　蛇は力を尺してしろがねの枝をのぼる
066　018　たちのぼる煙りのなかの女をぼんやり眺めていた、
072　004　十万にのぼる人々が
078　008　立ちのぼる水けむりのなかに消えうせるのを
083　011　さあ丘をのぼるとしよう
098　016　うす青いけむりがゆっくり立ちのぼる
152　016　冷たい水色のけむりが立ちのぼる
168　005　たちのぼる泉の霊気には

のぼる　昇る

070　034　昇る陽もなければ、沈む陽もありはしない、

のぼる　登る

025　059　梯子を登るのである（未完）
145　005　芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右

のみ

010　016　新しい射手よ　一本の樹のみを監視するのは賢明ではない
027　004　手袋をはめた右手のみが動き
030　001　肉のみの肉に
030　010　内のみの肉に
030　034　肉のみの肉に
038　015　木木の下のみ朝がきます
038　030　屋根のみを叩いてはひとり淋しがってゐた
041　103　それのみが古くはならぬ
045　021　ふりそそぐ雨のみだれも手にとるやうだ
056　022　風景はいっそう青ざめてくるのみである
058　051　喫茶店でコーヒーをのみ
060　008　荒れた道がつづいているのみである
061　137　夜　昼　わが涙のみ注ぎて魂の糧となり
084　012　安いレコードのみじかい針の溝から
094　005　さかまく汐をどっとのみこむ河口
120　004　植物のみどり
142　120　　これ以上は一歩も進ませないそ　と宣言する不屈な人間の精神のみがー
167　073　どのみちもう
173　018　破壊されるためにのみ存在する」
173　032　どのみち世界で
180　028　どのみち言葉は
188　039　どのみち、精神にか、肉体にか、

189　011　臨終のたのみだった
192　014　薄暮と昧爽とをとりちがえていた迂闊さに、狼狽するも間なく、巨大な生きものの胎内にのみこまれるように、

のみこまれる
192　014　薄暮と昧爽とをとりちがえていた迂闊さに、狼狽するも間なく、巨大な生きものの胎内にのみこまれるように、

のみこむ
094　005　さかまく汐をどっとのみこむ河口

のみだい　飲み台
098　017　飲み台のうえのウェイトレスの手は

のみほした　飲みほした
065　040　わたしはおまえの血を飲みほした」

のみほして　飲みほして
054　101　あるいはまた亡霊たちを飲みほして

のむ　飲む
128　065　渇いた人の飲む

のやうに
002　008　魚のやうに眠る日
004　003　炎は昆虫のやうに翅をならす
007　008　多孔質の雲の間からトンボの眼のやうに碧く　アスピリンを積ん
011　001　河の水は泥のやうに澱んで
012　006　放心した花弁のやうに
013　011　草むらで笛のやうに鳴ったのは
013　024　僕は太陽のやうに逃げなければならん
017　002　駝鳥のやうにたちあがると
018　004　耳が刷毛のやうに通過する
018　012　路地を抜ける春のやうに
020　003　蝶のやうに跳ね返った
023　002　毛髪のやうに血が垂れて
023　009　街灯は光をナイフのやうに操って
023　014　または黒いオルガンのやうに
023　021　あのやうに退屈な都会の一日が
025　011　その手その足は毛のやうに
025　014　青い雨のやうに燕のやうに
025　023　それは医術の進歩の伝説のやうに
025　028　脳髄は毒のやうに青くなる
025　033　ゼンマイのやうに跳ねてゐる雲
025　037　鉛のやうに落下してくる

025　055　呟きのやうに廻ってゐる
026　014　壊れた船体のやうに
026　019　わたしの体を石のやうに氷らせた
026　025　黄ろいダイヤモンドのやうに光り
028　011　液體のやうに垂れてきたのは疲れた舌である
030　024　光りは堅い金属のやうに寒々として
030　027　気体のやうに
031　006　いつかのやうに凍りついた道路の上で
032　011　しなやかな鞭のやうに
033　006　そして真珠のやうに辷りながら
039　107　ランプのやうに
039　132　ゼラニウムのやうに燃えはてようと
040　012　街は傷口を舐めてゐる獣のやうに
041　022　石が鳴く　まるで蟋蟀のやうに
041　028　プラットフォームが岬のやうに曲がってくる
041　039　考へあるもののやうに　また無意識のごとく
041　042　虹のやうに　或いは地の草のやうに
041　072　よそごとのやうに
041　124　木質は腐り　陽に燬かれ　蝋のやうに流れた
042　008　予感のやうに皮膚にとどく
046　036　果して肉体だけは癒る用意があるかのやうに
046　042　ほっそりした川のやうに渝らぬ月日を行くことが出来る
046　046　いくつもの扉のやうに行手をさへぎり

のようなもの
049　007　鋭い笛のようなものが胸の底でめざめる、
051　030　人間はチューブのようなものであったらよい
085　020　キッドの短靴のようなもので
128　066　冷たい水のようなもの」か

のように
021　014　青いブヌウマチックのように
039　005　ただ壜のようにつめたい気体がゆれる
048　015　まるで滅びることのないもののように
049　013　黒い足のように縮まっている　君の黒い足のようにー
051　011　運命がある顔に達したとでも言うかのように、
051　026　「そいつは黄色だ　まるであの穢らわしい魂のように」
053　008　黄ろい髪飾だけがふわふわと蝶のように宙にさまよっているのです
053　024　いつものようにわたしはお姉さんさようならを告げることが出来ません
053　030　みんな仲よく小鳥のように一つの枝でおやすみなさい
054　050　僕は毎晩のように酒場のテーブルを挟んで
054　052　手をあげると　人形のように歩き出し
054　053　手を下すと　人形のように動かなくなる

054	108	そしてやがて獣のようになる歯並みの悪い唇の動きが
054	129	僕は眼をかがやかし涛のように喋べりかける
054	134	ひとり占いの賭博者のように
054	151	ちぎれた青空のように飛んだ一枚のハンカチーフ
055	007	おれには港のように思えたのだ
055	013	背負い袋のようにおまえをひっかついで
055	016	海を飛んでゆく耳鳴りのようにおもえた
055	025	灰色の壁のように垂れてきて
055	031	厭な匂いの薬のように澱んでいるばかりであった
056	003	そして彼の背中のように淋しい風景がそこにある
056	006	未来の一歩々々のようにこつこつと遠ざかってゆく
056	008	昨日のように空は濁った河のうえにある
057	021	彼岸はいつも死の国のように静かである
058	049	昨日のように読みすてましょうか？
059	010	今ではなつかしい面影のようにうすれてしまった
059	024	木の葉のようにも
059	025	蜻蛉のようにも見えてくる
061	046	街角をまがる跫音のように
061	051	砂浜につづく足跡のように
061	066	まるで通りがかりの人のように
061	142	そのようにまた沐浴もあったことを……
061	146	夕陽の残照のように、
061	215	生と死の予感におののく魂のように、
061	226	死と生の予感におののく魂のように、
062	049	枯草のあいだの四月の若芽のように萌えています
063	004	あなたの身体のように重たく
065	046	異国の女のように、町をみすてて
069	011	この少女のように
070	002	夜の岸辺のように
070	006	わたしのからだを水藻のように
070	033	一日を一年のように暮しているぼくたちには、
071	046	波のように　こだまのように
072	031	数字のように増減し
072	059	ダービー・レースのように
073	011	墓標のように番号をつけた煙突がならび
076	015	虚しい文字のように消えてゆく
081	009	兵士たちはうわごとのように
082	011	恍惚とした顔のように
084	002	唖のように黙りこくっていても
088	002	おまえは仔兎のように
088	004	栗鼠のようにすばしこく
088	022	どのようにぼくたちの大地に暗い影を落すのかも
088	027	あたたかい南国の陽ざしのように融かしてくれるから

091 014 きみの季節は飼主のない猟犬のように飢えている
093 020 そのようにかれの赤い血も
094 011 解読できぬ暗号のように近くて遠くあるもの
095 015 誰だって僕のように淋しい夜道を走るだろう
098 020 その白い手のように明るく清潔にみえる
099 013 小さな四つの運命は　四つのボールのように
100 009 記憶のくらやみにとけるフィルムのように
100 021 やくざな渡り鳥のようにレインコートを肩にかけて
100 030 こころよい追憶にもどってゆく歩行者のように
100 055 はたせなかった約束を　いつまでも悔む人のように
100 064 つながれた行列の影は鎖のように工場をとりまいていた
101 052 榴散弾のようにふりそそぐ淋しさに耐えてゆこう
102 023 高くのぼってついに失われた空のように
103 016 シネマスコープに登場するユリシイズのように
104 004 枯葉のように散っていった
106 019 かれの額は　西洋皿の平面のように広く
106 020 かれの眼は　スプーンの銀のように輝いている
113 028 きれいにふかれた鏡のように
120 011 処女の乳房のように
127 005 吊られたユダヤ人のように
127 017 タンポポのように咲いたこともあったか。
128 035 真昼のように輝かせる
128 077 テレタイプのように
132 005 風のように変身する
134 010 木の葉のように散っていった若者たち
140 019 忘られた種子のように
142 046 悪い夢からさめた人のように首をふるのである
143 001 厚い雪に埋れた根のように
145 014 有りもしない幸福の歌がいつものように響いていた
145 019 *静かに走れ*と命名された群集の河は昨日のように流れていた
148 035 どのようにして戦後の社会をたたかいぬいてきたかを語りあったが、
148 048 それから、少年の日のように月の砂漠へ出発した。
149 007 すずしのように透けた
160 016 闇をつらぬく稲妻と烈しい豪雨の中から新しい発見のように甦ってきた
166 012 自由とは何かは太陽のように明白だったのに
166 021 いつものように車で二軒分の買物をした
167 011 明るい青空が海のようにひろがっている
167 049 塵埃のように書籍を衣類を調度類を
169 009 難破する船上の人のように
170 016 ダイヤモンドのように輝やいていた
172 002 木の葉のように舞い落ち
172 021 くぼんだ眼窩に目やにのようにたまる
175 014 別々の思いにふける子供のように

176　009　膝のくぼみにこたえるかのように
176　013　帆のようになびかせて
177　002　約束のように守る男なら
179　013　優雅な柩のように
181　020　疑問符のように
184　019　若い中国人の夫は口癖のように
186　084　かすかにふるえる指先の煙草のけむりのように
187　027　甘い香りのように地に融けていく
188　044　不定愁訴の繰り言のように、あることないことに、蘊蓄を傾け、
188　082　いまさらのように、頭をかかえています。
189　040　ずっとずっと昔のことのように

のりうつった
049　001　天井の蜘蛛が私の顔にのりうつったようだ、

のりこえて
010　021　地平線の鎖をのりこえて

のりこんで　乗りこんで
103　021　ゆめをのせた「ピイクオド」号に乗りこんでゆく

のろい　呪い
077　027　戦争を呪いながら
081　010　呪いの言葉を吐きつづけた
110　007　思うことは呪いになる

のろう　呪う
092　011　戦争を呪うべきか？

のろのろ
189　031　皺の手がのろのろ動き

のろはれて　呪はれて
034　007　呪はれて
039　102　ああ呪はれてもよい

のろわしい　呪わしい
054　102　この呪わしい夜を祝福しよう

のろわれた　呪われた
079　014　呪われたかれらの天を

のんでいる

101　036　消えたいのちの水をのんでいる兵士たちよ

のんびり
183　025　のんびり散歩したりする人はいない

は　歯
007　016　あ見給へ　昏の河の上を歯を剥いた白馬が乱れるではないか
009　013　白い歯で噛むでも
010　017　老いぼれた天体は歯がぬけてゐる
017　010　歯でゲラゲラ笑ふと
022　003　歯を鳴らせば
023　016　恐怖の白い歯を投げる
025　052　歯のない哄笑とが
026　020　羊歯類が生ひ茂り
028　010　白い歯型から
029　002　もう歯ぎしりする怒もなく
036　007　白く美しい歯をもたぬから
054　108　そしてやがて獣のようになる歯並みの悪い唇の動きが
061　097　厚くまくれた歯のない唇をひらき
112　020　緑いろの歯ミガキにすこし血のまじった唾を吐いた
144　013　浄食の歯ぐきなまなましき落人は
150　050　きみが「歯応えというか、取柄があった」という伊藤茂二の場合を挙げることができよう。
188　008　歯も、先日、奥歯が一本、根が痛みはじめたので、
188　009　五十何年ぶりに歯医者の厄介になるという始末。
188　010　その歯は抜きましたが、他の歯に窩が無数にあるとか、
189　032　腐った肉片を歯のない口に運ぶ

は　刃
050　012　剃刀の刃にいつまでも残っているね。
074　023　若い魂を解放したカミソリの刃を
085　013　きみは真直な刃のナイフ
085　028　いつも刃を上にむけている親切な男だ
153　005　おそろしい刃先にむかい
179　030　ナイフの刃には一滴の露が宿る、と。

は　葉
002　004　（落葉は降りしきる　あゝ淋しい曲を聞いた）
009　008　薔薇色の頬に葉脈が透けてくる
011　006　落葉が散って　冬が残ってゐる
012　002　葡萄の葉をとはしてしまった
012　021　ガラスの響をたてる楕円形の葉たち
014　013　団扇みたいなシュロの葉の下で
017　028　葉っぱの蔭に消えてしまった

023 005 青い葉が溶かしてしまふと
023 017 風の運んでくるその言葉が見えない
026 013 葉脈から雫が落ちてくる
027 018 弾かれた言葉の行方を覚る
028 044 数本の太い樫の木がゆれる樫の葉のざわめき
033 017 青い皿のあたりに葉脈を
038 001 落葉は
039 025 葉脈から
041 120 貧弱な幹に大きな葉をつけてゐた樹木
041 122 葉はぬけ落ち　黒い幹が囲繞地の隅に忘れられた
043 007 いくつもの乾いた言葉にそって
042 014 神よ　御身の言葉のまにまに
049 008 落葉に吹きまくられてゆく地平線に
050 019 「淋しさの中に落葉がふる」
050 022 埋葬の日は、言葉もなく
052 022 片言まじりの甘美な言葉で
053 003 暗い空の枯れた林から落葉がすきまなく降ってきます
053 032 わたしは落葉の精なのです
053 053 しかし落葉のなかでふりかえっても
053 054 淋しいわたしの足跡は落葉に埋って見えません
053 056 降りつづく落葉の雨のなかから
053 061 わたしの髪に　わたしの肩に　落葉はしずかにつもります
053 063 木の葉になったわたしには
054 010 惜しみない賞讃の言葉をおくった
054 162 そして至高の言葉を携えた使者が
059 024 木の葉のようにも
069 036 それっきり言葉は絶えた
077 007 （聖なる言葉や
080 012 消えてしまう泡が唯一の言葉だから
081 010 呪いの言葉を吐きつづけた
084 007 散ってゆく落葉の女を尋ねて
084 033 落葉がふりつもってゆきます
088 070 とおくまで草木や花のやさしい言葉で
090 023 言葉を探すのはしばらくやめよう
104 004 枯葉のように散っていった
107 017 ぼくが言葉を失えば
109 002 芽を出し、枝葉をひろげ
109 013 落葉の雨を降らせている。
115 005 お別れの言葉はいらない
125 012 弾丸よ　言葉よ　錠剤よ
126 014 そんなに遠くまで人間の言葉をとどけにいく
134 010 木の葉のように散っていった若者たち
135 004 言葉なき存在となれ

136 019 草の葉も兎の耳も
138 006 草葉の蔭を恋しがって
142 043 自己の経験をまっすぐ語るあなたの言葉は
150 041 今にしておもえば、真実を衝いた薄気味わるい言葉である。
156 002 愛という言葉は
156 020 言葉の純度は低く
156 025 愛という言葉は身につかぬのである
156 029 愛という言葉は
157 003 枯葉よ
157 010 この枯葉のようでありますように
164 011 人の心を盗むあなたの言葉は
165 024 どんな言葉の交換もなかった
165 030 言葉の理解のとどかぬところで
170 002 死んだ言葉がちらばっていて
170 014 蓮の葉の上に大きな露の玉が乗っていて
170 018 蓮の葉の上をかりの宿として
172 002 木の葉のように舞い落ち
180 027 の言葉を私はどんな方法でも消せればよかっただけのことー。
180 028 どのみち言葉は
180 038 言葉はめぐりあうものかたずねあうものかという
189 015 言葉はすべて最初から

バア
084 010 そこには青い灯のバアがありますから

はい 灰
002 014 灰色の鳥をまってゐる
017 029 沙漠の果から灰が見えなくなり
020 010 白い灰となり
030 018 すべては灰の降るなかで
031 022 机の下から灰や骨などを集めて
037 014 灰いろの遠い空をながめてゐた
039 143 塵や灰の底へ沈み
053 006 みんな灰色の壁にぬりこめられてしまって
054 020 なぜ灰と炎が君を滅ぼす一切であったのか？
055 025 灰色の壁のように垂れてきて
058 025 灰いろの建物のしたを孤独な靴音が
061 067 あなたは灰色の街のなかに帰ってきた。
062 018 あなたはかすかにしめった灰の匂いを覆いかける
081 001 海の灰いろも
081 002 空の灰いろも
081 025 灰いろの海と
081 026 灰いろの空があって

098　015　ぼくの灰皿から
109　006　黄昏の寒い灰色の
111　005　暮れのこる灰色の道が
124　030　六十本の煙草を灰にしたところで
152　031　十数秒で黒い灰になる

ばい　倍
128　023　鋼鉄六倍　自動車十五倍
142　016　帝政時代よりソビエト体制下で四倍も悪化している
142　018　それで監獄は　四倍以上も暗く

はいいろ　灰いろ
037　014　灰いろの遠い空をながめてゐた
058　025　灰いろの建物のしたを孤独な靴音が
081　001　海の灰いろも
081　002　空の灰いろも
081　025　灰いろの海と
081　026　灰いろの空があって

はいいろ　灰色
002　014　灰色の鳥をまってゐる
053　006　みんな灰色の壁にぬりこめられてしまって
055　025　灰色の壁のように垂れてきて
061　067　あなたは灰色の街のなかに帰ってきた。
109　006　黄昏の寒い灰色の
111　005　暮れのこる灰色の道が

はいいろの　灰色の
002　014　灰色の鳥をまってゐる
053　006　みんな灰色の壁にぬりこめられてしまって
055　025　灰色の壁のように垂れてきて
061　067　あなたは灰色の街のなかに帰ってきた。
109　006　黄昏の寒い灰色の
111　005　暮れのこる灰色の道が

はいおく　廃屋
167　065　ああ　丘のうえの廃屋よ
172　022　廃屋の窓辺に坐って

ばいかい　媒介
186　061　ぼくを媒介にして光線が変ること

はいきょ　廃墟

039　091　廃墟の杭は打たれてゆく
056　011　廃墟のなかを踊り狂っているのが見えないわけではない
065　010　部屋は、ひとつの廃墟で

はいけいてきそくど　背景的速度
124　024　国際級の背景的速度に陶酔し

はいご　背後
034　009　罪の匂ひのするドアの背後では
071　028　ぼくの背後の空に
083　005　わたしの背後で
100　066　ぼくの背後で

はいざら　灰皿
098　015　ぼくの灰皿から

はいしゃ　歯医者
188　009　五十何年ぶりに歯医者の厄介になるという始末。

はいしゃ　敗者
189　002　おめでたい敗者に言う

ハイジャック
155　006　ハイジャックも

ばいしょう　賠償
112　028　敵からどんな施しを受け　どんな賠償を支払ったか

はいずって　這いずって
074　019　いかにして黒い蛆虫が這いずってゆくかを

はいずる　這いずる
140　017　地べたを這いずる共生共苦の道も

はいせん　敗戦
100　041　敗戦がぼくの魂を解放する」
148　009　かれとは敗戦直後の闇市の近くの旅館で一度会い、
150　035　敗戦後の苦しい生活のたたかいに敗れて倒れた者もあった。

はいせんご　敗戦後
150　035　敗戦後の苦しい生活のたたかいに敗れて倒れた者もあった。

はいせんちょくご　敗戦直後

148　009　かれとは敗戦直後の闇市の近くの旅館で一度会い、

はいた　吐いた
112　020　緑いろの歯ミガキにすこし血のまじった唾を吐いた

はいた　剥いた
007　016　あ見給へ　昏の河の上を歯を剥いた白馬が乱れるではないか

はいだして　這い出して
176　019　這い出してきたばかりなのだ

はいたつされて　配達されて
015　011　石の床に新聞が配達されてゐたことも

はいち　配置
028　028　地図に描かれた曲線の巧みな配置を
030　019　テエブルと椅子の配置をつくり

はいった
014　015　けれど燃えないうちに水がはいったよ

はいってくる　入ってくる
033　009　盲目はドアの隙間から入ってくる

はいて
053　011　可愛いい格子のスカートをはいています

はいにち　排日
006　013　それから赤い排日ポスターを

ハイネズ
094　024　遠く近くハイネズの原に打ちよせるのはアフリカを白くする波だ

パイプ
008　011　クビれてむらさき色になると　煙のつまったパイプを
010　011　銀色のパイプで穹を覗いた
010　014　パイプを握って雲の中から生れてきた少年は
010　019　パイプは緑の煙を噴き飛翔する
013　002　パイプの腹が暑くなる
013　012　パイプが怒ったのかね
014　017　パイプオルガンも大変不満らしい
019　008　パイプから水もながれず
021　007　木製のパイプ

021　016　たそがれの道に迷へばパイプで
027　021　わたしは黒いパイプを握り
029　016　パイプと共に忘れてゐた家族のため
039　075　パイプの煙にのって
041　073　パイプに煙草をつめる
073　027　悠然とパイプを吹かしながら
114　009　やにくさいパイプの煙を吐きかけている

パイプオルガン
014　017　パイプオルガンも大変不満らしい

はいぼく　敗北
101　033　……どうして敗北を信ずることができようか
101　063　勝利を信じないぼくは　どうして敗北を信ずることができようか

はいよる　這ひよる
039　008　根の茂みに水が這ひよる

はいる
030　015　陰花植物とならんで写真にはいる
034　014　気体のなかの透明な溝へはいる
145　004　はいるとつぶやきながら黒い色の真実やめったに売れないエンジェルの絵を売っていた」

バウワウ言語
128　046　バウワウ言語　デインドン言語　プウプウ言語

はえていた　生えてゐた
041　044　怪しい手紙には翅が生えてゐたのかも知れぬ

はえる　生える
005　021　白い翼が生える

はか　墓
025　056　爽やかな朝に墓場の鍵が配られたとき
026　015　わたしは愚かしい知識の墓場を
039　104　白い墳墓の方へ
041　002　海よ　そして人気のない墓場がある
046　020　たとえ純粋な緑が　墳墓の丘より呼びかけようと
052　004　いまでは墓穴にかくれ
053　022　いつのまにかわたしはお姉さんのお墓の前に立っています
053　025　こんなに寒い墓地なのに
053　046　墓地のしめった黒い土をみつめながら
053　062　お墓のなかでお目覚めになっているお姉さん！

073　011　墓標のように番号をつけた煙突がならび
073　014　静かに凪いだ墓地のうえを
082　003　八月は海辺にのこる白い墓
173　030　林立する墓石の女
188　062　その反対に、葬儀屋や墓地などを見学しながら、

はかあな　墓穴
052　004　いまでは墓穴にかくれ

はかい　破壊
031　021　破壊の力を防がうとするぞ嗤ふがいい
061　072　あなたは破壊された風景のなかに帰ってきた。
102　011　うたいながら破壊する若い勇士たちが
112　010　破壊につぐ破壊のこだま　断末魔の軍港にとどろく火砲のうた
167　077　きみたちの家を破壊にみちびくだろう
173　018　破壊されるためにのみ存在する」
173　033　厳粛な破壊の儀式が始まったら

はかいされた　破壊された
061　072　あなたは破壊された風景のなかに帰ってきた。

はかいし　墓石
173　030　林立する墓石の女

はかいする　破壊する
102　011　うたいながら破壊する若い勇士たちが

はがされた　剥がされた
133　013　剥がされた敷石のした

はがた　歯型
028　010　白い歯型から

はかったり　測ったり
071　043　われらはながい生涯をもって測ったりする

はかない
053　049　わたしは一日よりもはかない一年を
055　026　おれとおまえのはかない希望と夢を
057　039　はかない幻影よ
061　048　風にとぎれるはかない幻想が

はかば　墓場

025　056　爽やかな朝に墓場の鍵が配られたとき
026　015　わたしは愚かしい知識の墓場を
041　002　海よ　そして人気のない墓場がある

ばかり
051　008　まるく小さな海と空が見えるばかりだった。
055　031　厭な匂いの薬のように澱んでいるばかりであった
058　032　つかれているのは私ばかりではありません
058　056　少しばかり恥をかくようなことがなければよいのです
061　127　眠りからうまれたばかりの水は
065　006　ゆれる燈火と死魚の影があるばかりであった。
098　004　聞えてくるのは木枯の声ばかりだというのに
101　030　すこしばかり遠いところ　狼の影もないところ
110　009　秋はますます深くなるばかりだ
142　054　あとに残るのが　無気力な教養人ばかりだとしたら
150　023　ちょっとばかり意外だったのは、
159　001　時を刻む音ばかり高くなっていく屋漏で
167　001　啓蟄をすぎたばかりの
172　012　霜枯れた顔ばかりである
172　016　影ばかりつかまえてきた
173　009　夜があけたばかりだというのに
173　041　あとに残っているのは小者ばかりだから
174　012　問の霧は深くなるばかりであった。
175　005　なぜ睡ってばかりいるのかと
176　019　這い出してきたばかりなのだ
176　022　落日に輝くばかりで
184　010　四歳になったばかりの養子の名はヒロシ
188　006　読みものがたまっていくばかりで、
192　010　どこまで行っても、一本の松にも出遭わず、平坦な黒い砂地がつづいているばかりで、

はかり　秤
041　100　あなたの部屋にはシガアの煙がたなびいて
043　013　音もなく　部屋の扉がひらく
043　014　ながく夜をまってゐた灯火は
045　003　部屋から廊下へ
046　049　あなた自身が小さな一つの部屋であることを
047　002　とざされた部屋に心臓の羽搏きが
049　002　傾斜した部屋からは
052　025　誰もいない淋しい部屋を夢想する
053　028　わたしのこころのお部屋のなかで
054　075　「出てゆこう　とざされた部屋の中から
054　153　出口のない部屋から
059　005　ひとりぼっちの部屋のなかで

061　012　秘密にみちた部屋や
061　170　がらんとした心の部屋で、
063　019　しばらく部屋のなかを散歩する
065　003　部屋住いの男にとって
065　010　部屋は、ひとつの廃墟で
066　039　眠れない部屋のあかりがひとつ
070　032　この窓のない部屋で
089　002　赤々とストーヴが燃えている部屋の
103　020　旧約の秤にかけてもずっしり重い
122　009　暗くなった部屋の
132　003　部屋から部屋へ
141　006　そこも、一つのお部屋だったわ。
146　027　それはまた別のお部屋に
147　008　死と生が秤のうえでゆれながら均合っていた
148　034　ぼくたちは女気なしの部屋で炬燵を囲み、
167　046　それから一つの部屋を守り
167　047　一つの部屋のための家屋が傾くまで
170　008　ホテルの部屋から戸外へとさまよい出た
179　028　この窓もこの部屋も
183　017　表の灯を消した株屋の店内では
189　025　無音無重力のガラスの部屋で

はかりかねて　計りかねて
145　017　そんなカップルはどこにでもいて快楽のスプーンで苦痛の目方を計りかねていた

はかりしれない　測りしれない
039　072　測りしれない地平線のむかふから

はかりしれない　測り知れない
165　032　測り知れない深さで
180　034　測り知れない現実的形態を網にかけて

はかる　計る
188　037　眼よりも、心で計る構えになるのは、

はがれて　剥がれて
106　041　かれは屠所にひかれる小羊であってはならない　たとえその皮を剥がれても

はき　吐き
017　009　白い唾を吐きかけ
058　023　劇場は真黒な人を吐き出します
073　006　真黒な火煙を吐きつづけていた
081　010　呪いの言葉を吐きつづけた

094　004　酸っぱい水を吐きだそうとし
094　021　ぼくの河口はひといきに岸辺やテントや小舟を吐きだそう
096　013　ミロ君の夜の太陽を見ていると　吐きたくなるね
114　009　やにくさいパイプの煙を吐きかけている

はきかけ　吐きかけ
017　009　白い唾を吐きかけ
114　009　やにくさいパイプの煙を吐きかけている

はきかけて　吐きかけて
114　009　やにくさいパイプの煙を吐きかけている

はぎしり　歯ぎしり
029　002　もう歯ぎしりする怒もなく

はきたく　吐きたく
096　013　ミロ君の夜の太陽を見ていると　吐きたくなるね

はきだし　吐き出し
058　023　劇場は真黒な人を吐き出します

はきだしそう　吐きだそう
094　004　酸っぱい水を吐きだそうとし
094　021　ぼくの河口はひといきに岸辺やテントや小舟を吐きだそう

はく　吐く
007　010　喞筒は空に向って泥を吐く　草の無い荒地ではとかく悪い感冒が
101　061　吐く息のひとつひとつが凍りついても
116　001　吐く息のひとつひとつが
183　027　誰でもほっと深い息を吐く

はぐ　剥ぐ
047　008　頭上で屋根を剥ぐ不気味な爪の音……

はくあ　白亜
025　050　白亜の建築が聳え立ち

はくい　白衣
073　013　ぼくらは白衣の亡霊となって

ばくおん　爆音
081　012　たえまなく爆音がして

はくがい　迫害
142　005　東側における弾圧や迫害に最も敏感な人たちでさえ

はぐき　歯ぐき
144　013　浄食の歯ぐきなまなましき落人は

ばくげき　爆撃
073　008　爆撃のあとの

はくし　白紙
129　013　白紙の本をめくる

はくしゅ　拍手
072　027　ーーどよめくスタンド、沸く観衆、拍手、喚声
113　002　（拍手）
113　004　（嵐のごとき拍手）
113　006　拍手と嵐のごとき拍手しか
113　009　拍手から嵐のごとき拍手へと
113　046　（まばらな拍手　沈黙）

はくせい　剥製
041　024　なるほどあなたの剥製の体内から聞える
054　054　彼等が剥製の人間であるかどうか

はくちゅう　白昼
025　009　白昼ともなれば
036　017　噴水と石像のある静かな白昼よ
041　115　白昼は掠められ
046　015　あなたはとほい橋の上で　白昼の花火を仰いでゐる

はくないしょう　白内障
087　007　そらとぼけた白内障の目をむき
188　005　白内障の眼を、なるべく休めるようにしていますから、

はくねつする　白熱する
054　127　僕は突如白熱する

はくば　白馬
007　016　あ見給へ　昏の河の上を歯を剥いた白馬が乱れるではないか

はくはつ　白髪
108　026　馬上の人も白髪となる

ばくはつした　爆発した
006　003　爆発したセロイドの匂が　室内を明るくした　青い

はくふ　白布
074　006　白布につつまれた屍体が

ばくふ　瀑布
054　145　疲れと沈黙の瀑布が

はくぼ　薄暮
192　014　薄暮と昧爽とをとりちがえていた迂闊さに、狼狽するも間なく、巨大な生きものの胎内にのみこまれるように、

はくぼう　白帽
072　036　赤帽が白帽をひきはなした
072　048　白帽が赤帽をひきはなした

はくめい　薄明
025　021　室内には薄明りのランタンが
163　004　夜明けとも日暮ともつかぬ薄明の中で

はくらいたばこ　舶来煙草
015　010　舶来煙草のことを知らない

はぐれ
071　015　家族からはぐれた男の子は
138　012　いつかはぐれて一人になった
144　012　風にみはぐれ恋を忘れ
146　007　あなたにはぐれてしまったのです
171　014　はぐれペンギンの男は思う

はぐれて
138　012　いつかはぐれて一人になった
146　007　あなたにはぐれてしまったのです

はけ　刷毛
018　004　耳が刷毛のやうに通過する
181　023　紅の刷毛は

はげ　禿げ
188　022　頭の禿げかかったひとりの老人が、

はげしい　烈しい
065　049　烈しい渇きに悶えながら

160　016　闇をつらぬく稲妻と烈しい豪雨の中から新しい発見のように甦ってきた

はげしく
035　018　はげしくすれ違っていった
061　145　霧ははげしく運河の下から氾濫してくる。
116　009　西と東に　はげしく
183　004　人影がはげしく往きかっている

はげしく　烈しく
044　002　また烈しく運動するもの
122　008　ひとしきり烈しくなった雨音をきく
167　063　風はひとしきり烈しく吹きつけ
188　076　ひとしきり烈しくなり、深夜の屋根を叩いている。

はげたか　禿鷹
055　041　おまえは禿鷹風に化粧した小さな顔を

はげます　励ます
150　061　我々は彼を励ますことを忘れていたようだ。

ばけん　馬券
072　020　一枚の馬券を買うために

はこ　箱
152　001　セブンスターの箱をはじくと
152　026　箱型のそれを机のうえに立ててごらん
172　027　箱庭のような故里が

はこがた　箱型
152　026　箱型のそれを机のうえに立ててごらん

はごたえ　歯応え
150　050　きみが「歯応えというか、取柄があった」という伊藤茂二の場合を挙げることができよう。

はこばれた　運ばれた
003　007　杳い寒帯から運ばれたミルクに溺れる頃

はこばれて　運ばれて
028　036　暗闇の市場へと運ばれてゆく武器たち
064　006　ーーおれは運ばれてきたんだよ。

はこばれてゆく　運ばれてゆく
028　036　暗闇の市場へと運ばれてゆく武器たち

はこびさる　運び去る
073　022　ぼくらを運び去るものは

はこぶ　運ぶ
177　023　とりちがえようのない顔を運ぶために
189　032　腐った肉片を歯のない口に運ぶ

はこんでくる　運んでくる
023　017　風の運んでくるその言葉が見えない

はさき　刃先
153　005　おそろしい刃先にむかい

はさまれた
012　007　雲のアルバムにはさまれた

はさみ　鋏
016　015　意地悪な園丁の鋏を怖れなさい

はし　橋
038　020　まぼろしのやうな橋がみえ
041　019　あの陸橋の上を
041　026　橋の下には　レールがうねり
041　040　何とはなしに陸橋の上まで打寄せてくる
041　059　やはり濡れて陸橋に佇んでゐることを想ひ
046　002　澄みたる空に影をもつ　橋上の人よ
046　009　花火をみてゐる橋上の人よ
046　012　とほく橋の上へやってきた
046　015　あなたはとほい橋の上で　白昼の花火を仰いでゐる
046　016　渇いたこころの橋上の人よ
046　022　夢みる橋上の人よ
046　025　この橋も海中に漂ひ去って　躍りたつ青い形象となり
046　027　熱い額の　橋上の人よ
046　037　うるんだ瞳の橋上の人よ
046　043　しかし橋上の人よ
046　051　橋上の人よ　美の終局には
046　056　橋上の人よ
054　026　黒い犬が橋の上にうずくまっていたのを」
054　034　今でも僕は橋の上にたつと
056　001　ひとりぼっちで橋にもたれ
056　018　橋にもたれてぼんやり煙草をすっている
061　002　澄みきった空の橋上の人よ、

061 011 橋上の人よ、あなたは
061 017 いつか遠く橋のうえにやってきた。
061 045 橋上の人よ
061 050 橋上の人よ
061 055 橋上の人よ
061 060 橋上の人よ
061 065 橋上の人よ
061 070 橋上の人よ
061 075 橋上の人よ
061 143 蒼ざめた橋上の人よ、
061 152 孤独な橋上の人よ、
061 160 橋上の人よ、
061 195 橋の上に佇みながら、
061 201 橋上の人よ、
061 208 橋上の人よ、
061 218 橋上の人よ、
061 229 橋上の人よ。
067 001 陸橋のうえから
089 005 橋のうえで　石の手すりにもたれ
089 009 橋の下には　夏の少年が
089 017 人々があつまっている橋や
089 030 橋の上には
102 002 みんな日暮の桟橋に集ってくれ
102 010 みんな夜明けの桟橋から散ってくれ
148 017 気晴らしはあっても、過去への橋渡しではない。
162 013 虹の橋を渡っていったが

はじ　恥
058 056 少しばかり恥をかくようなことがなければよいのです
085 022 かれらの恥辱の隠れ家をあばいてしまおう
176 030 うつし身への恥じらいに

はし　箸
028 039 信仰や箸や石鹸や喜ろこびや散策があるやうに

はじかれた　弾かれた
027 018 弾かれた言葉の行方を覚る

はじく
152 001 セブンスターの箱をはじくと

はじけとび
101 044 沈黙よりも固い無名の木の実がはじけとび

はしご　梯子
025　059　梯子を登るのである（未完）
141　008　愛以外の何かだったわ。抱きあって、苦痛でよじれる縄梯子にすがって、宙ぶらりんで

はしって　走って
014　020　楽譜が走ってきて整列する
041　056　あなたは走ってゆくだらう
041　133　曇った空の下を違った扉に向って走ってゆくのを見た
051　003　彼方へと走っていた。
061　100　電車が走っているね
061　222　おびただしい灯の窓が、高架線の上を走ってゆく。
079　002　黒い海のうえを走っている
145　026　雲は低く垂れ　グラナダの暗い夜に稲妻が走っていた」
146　018　大急ぎで走っていき
156　011　愛しているなどと口走っていたら

はしっていた　走っていた
051　003　彼方へと走っていた。
145　026　雲は低く垂れ　グラナダの暗い夜に稲妻が走っていた」
156　011　愛しているなどと口走っていたら

はしってきて　走ってきて
014　020　楽譜が走ってきて整列する

はじま　始ま
050　004　――これがすべての始まりである。
054　078　過去はまさに始まらんとし
057　003　ぼくの悩みは始まっている
062　002　ひとつの年が始まる神秘な夜にくるまって
100　051　これがすべての始まりであった！
173　033　厳粛な破壊の儀式が始まったら

はじまり　始まり
050　004　――これがすべての始まりである。
100　051　これがすべての始まりであった！

はじめ（「はじめ」）
004　008　素敵なプランを考へはじめた
010　022　あかつき　がひらけはじめる
014　031　室内を飛びはじめる
017　044　はじめて沙漠が哄笑したので
039　101　わたしははじめて怒りといふものをみた

039　140　七つの壁が呻きはじめ
040　002　椅子はみづから倒れはじめる
040　021　あたりが軋りはじめ
040　024　東方からおまへのからだを侵しはじめる
041　141　楡の幹には自由な樹液がのぼりはじめた
054　058　大学生は低い声と思いやりのある眼ざしで話しはじめる
055　001　ひどく降りはじめた雨のなかを
061　103　やがて星がきらめきはじめるね
082　016　それから沈黙が歌いはじめるーー
087　001　いつから　きみは飼いはじめたのか
087　003　いつからきみは呼びはじめたのか
088　054　はじめからやり直し
093　027　かれの魂はエデンの樹の頂きからはてしなく落ちはじめる
098　002　電話のベルが鳴りはじめた
100　027　ああ　それが何の「はじめ」かわからぬうちに
100　060　はじめて心で見　眼で感じた夏だった
101　013　ぼくははじめから敗れ去っていた兵士のひとりだ
112　049　おれたちが本当に別れるのはこれがはじめてだが　ユダの接吻はいらない
130　013　砂利が一粒ずつ光りはじめた
133　001　歌のはじめには開かれた理由がある
146　025　こちらを向いて光りはじめたので
146　052　迷路を歩きはじめました
148　033　硫黄島に送られ、全員戦死していたことをはじめて知らされた。
151　040　はじめから一人にしておけばよかったのかもしれない
188　008　歯も、先日、奥歯が一本、根が痛みはじめたので、

はじめ　始め
014　014　二つの楽器が揃って火を呼び始めてね
017　004　樹の上では祭典が始められ
017　022　月がオデコに光り始めたら
018　016　内部から燃え始める
053　051　始めがあって終りがあるのではなく
062　036　始めも終りもない夢のなかを駈けめぐる
068　017　淡い希望もまた　始めは
083　009　なんだって始めからやり直したりするのか
088　066　始めからやり直せばいいのだよ
169　022　ならば零から始めよ
188　041　とめどもなく、そいつとお喋べりを始めるのは、
190　002　自然の風景の始めであり終りである

はじめから
088　054　はじめからやり直し
101　013　ぼくははじめから敗れ去っていた兵士のひとりだ

151　040　はじめから一人にしておけばよかったのかもしれない

はじめから　始めから
083　009　なんだって始めからやり直したりするのか
088　066　始めからやり直せばいいのだよ

はじめて
017　044　はじめて沙漠が哄笑したので
039　101　わたしははじめて怒りといふものをみた
100　060　はじめて心で見　眼で感じた夏だった
112　049　おれたちが本当に別れるのはこれがはじめてだが　ユダの接吻はいらない
148　033　硫黄島に送られ、全員戦死していたことをはじめて知らされた。

はじめられ　始められ
017　004　樹の上では祭典が始められ

はじめる
010　022　　あかつき　がひらけはじめる
014　031　室内を飛びはじめる
040　002　椅子はみづから倒れはじめる
040　024　東方からおまへのからだを侵しはじめる
054　058　大学生は低い声と思いやりのある眼ざしで話しはじめる
061　103　やがて星がきらめきはじめるね
082　016　それから沈黙が歌いはじめるーー
093　027　かれの魂はエデンの樹の頂きからはてしなく落ちはじめる

ばしょ　場所
032　005　わたしが憩ふ場所といへば
039　038　小さな場所に
041　113　あなたが倒れる場所といへば
080　022　いかなる場所にも
095　002　多くの時と多くの場所と
098　007　「ここは　ほんとに気持のいい場所ね
100　079　ぼくたちが出会う場所は
101　028　絶望も希望も住む場所をもたぬところ
111　002　家のない場所へ行ってみたい
121　013　プライベートな場所をさがしたい
134　011　一つの場所を占めようとして
140　011　きみがいたすべての場所から
142　057　監獄・収容所システムに隠れ場所はない
148　056　慟哭する場所はどこにもなかった。
178　007　どこにもない場所に預けにいく
186　054　ぼくは無意識のうちに隠れ場所をさがしている

186　064　隠れる場所がなくなる
189　024　高い場所に住んでいる

ばじょう　馬上
108　026　馬上の人も白髪となる

はしら　柱
002　011　落日の朱が氷柱をながれ―
023　001　磨かれてゐる白い骨の柱に
039　062　柱も扉も腐蝕してゆく
039　130　樹木も濡れてゐる柱廊も
041　128　柱に垂れて
045　013　燻んだ柱の垂直を叩いて
053　033　柱時計が六時を告げる
080　018　いつまでも折れた帆柱を抱いているかぎりは
081　013　何千年の闇をつらぬいて真赤な雲の火柱がたち
103　011　帆柱や舵や海図や羅針や救命ブイや銛や……
167　055　柱に梁に天井に床に耐性を与え
182　008　欲望の柱をまっすぐ立てる

はしらどけい　柱時計
053　033　柱時計が六時を告げる

はしり
046　024　雷とともに海へ出て　空はつらなる水平線をはしり

はしりさる　走り去る
039　046　遠い街へ走り去るがいい

はしる　走る
045　006　音もなく空を走る稲妻を見あげてゐる
061　094　背すじを走る黒い運河の呻きをーー
077　029　東支那海の夜を走る病院船の一室で
089　015　高架線を走る電車や
094　001　身をくねらして走るカワヘビの
095　015　誰だって僕のように淋しい夜道を走るだろう
133　012　背をかがめて小走る群集のなか

はしわたし　橋渡し
148　017　気晴らしはあっても、過去への橋渡しではない。

バス
041　052　うなだれて　あなたを待ってゐるバスに乗った

041　061　あなたはバスに揺られ　やがて街から去ってしまふだらう
100　004　うなだれて　ぼくらを待っているバスに乗った
134　015　「もう来ませんかね、バスは？」
177　032　バスは朝まで来ない

バスカル
057　007　バスカルの読み方を教えた青年が戦死し
126　017　バスカルを畏怖させた宇宙の無限の沈黙とかは

はずした
101　024　安全装置をはずした引金は　ぼくひとりのものであり

はずして　外して
026　028　黒い眼帯を外して

はずせ　外せ
011　014　先づ首に巻いた蛇を外せ

はずれ
054　148　暗い存在が抽象そのものに凍ろうとする時間のはずれから
060　005　そんな街はずれに立っていると
154　002　雲のはずれの寝床

はずれた　外れた
160　033　印刷の不備でくじに外れた老楽師に　大当りの賞金を全部やってしまう

はずんでいる
099　014　それぞれの庭で規則正しくはずんでいる

はた　旗
008　004　もある　向日葵のごとく旗は燃え　荒地に咲きそめた
074　013　三色旗をつけた巨船のうえにあるものは
128　031　旗を立てて去る者
143　008　黒い旗印と化して
188　055　（……今日も打振る日章旗……）

はだ　肌
036　027　花花の薫りと肌をもたない
041　005　意志は荒い山肌の斜面からむけてくるのか
048　013　その肌の秘密には
070　019　肌のふれあう水ぎわから
090　012　この紫檀の肌にくらべたら
121　011　波の牙が入江の肌をかむように

129　018　汗をかかない肌と
145　010　とエンジェルと同じ肌色の奥まで開拓して見せていた
168　004　荒い山肌にかこまれて

はだいろ　肌色
145　010　とエンジェルと同じ肌色の奥まで開拓して見せていた

はだか　裸
022　007　裸の胴は液体に近く
048　011　昨日も今日も　疲れた裸のままでいると
072　030　この裸の興奮は
102　019　太陽はさっさと素裸で海へかえる
104　010　愛と憎しみに撃たれた裸身のほそさに
117　008　こころの樹もすっかり裸になった
128　005　やせっぽちの裸の木
151　029　おまえをおとうさんと呼んでいる娘を裸にし
176　024　これ以上まぶしい裸にはなれないのだ

はたけ　畑
008　007　畑には
016　006　キウリ畑でサイレンが鳴り
088　012　はてしない空　麦畑　街々
101　047　森や田畑やうつくしい町の視覚像はいらない

はたされた　果された
158　036　断念の意味は果されたのだ

はたされぬ　果されぬ
169　007　果されぬ約束の地層にあって

はたせなかった
100　055　はたせなかった約束を　いつまでも悔む人のように

はたち　葉たち
012　021　ガラスの響をたてる楕円形の葉たち

ばたばた
164　009　足で地面をばたばた踏んで

はためかし
176　026　カーテンをはためかし

はたらか　働か

128　076　働かなけりゃ

はたらきにん　働き人
183　014　きちんと心得ている働き人と

バタンと
146　026　びっくりしてドアをバタンと閉めましたが

はたんなく　破綻なく
150　007　彼は自分の虚構の個性を破綻なく演ずるために、

バタンバタン
108　002　ロッカーの戸がバタンバタン

はち　鉢
008　016　金魚みたいにじっとして　水のつまったガラス鉢の中

ばちがいな　場違いな
160　022　（公衆の面前では　場違いな人間というのと同じだ）

はちがつ　八月
082　003　八月は海辺にのこる白い墓

はちぎれ
023　019　あなたの耳はちぎれそうな断崖で

はちみつ　蜂蜜
006　005　蜂蜜のやうな午後が溶ける

ばつ　罰
065　032　ひと群れの鶴にまじって、永遠の刑罰を
101　009　重たい刑罰の砲車をおしながら
106　040　かれは自分を罰してはならない　屠殺者や皮肉屋の包囲のなかで
125　003　聖者をうらぎった罰があらわれている
151　018　ずいぶんながく生きすぎた罰だ
151　022　罰を受けつづけることに満足を覚えるマゾヒストなんだおまえは
154　019　いましも刑罰の足台が置かれ
192　024　これが罰か、太陽と海を呪ったことの？　たった一度の空想の罪にしては、酷すぎる報いではないか！

ハッカ
021　001　ハッカを咥へて澄んだ煙をふかしてゐた

はっきりした

085　009　はっきりした愛情もあれば
085　010　はっきりした冷酷さもある

はっきん　発禁
150　055　こんな創作を今度載せたら発禁にするぞ、と検閲係から脅かされた。

はっけん　発見
005　027　発見される
054　142　反コロンブスはアメリカを発見せず
054　144　われわれのアメリカはまだ発見されていないと
160　016　闇をつらぬく稲妻と烈しい豪雨の中から新しい発見のように甦ってきた

はつげん　発言
166　019　という？先生の発言を今朝の新聞で読んでから

はっけんされる　発見される
005　027　発見される

はっさんさせる　発散させる
010　004　白い帽子は頭のアリカを教へるとともに日の匂を発散させる
010　005　日の匂を発散させる少年は青い麦の芽である
147　015　ときたま死の匂いを発散させる若者に出会ったりすると

はっさんし　発散し
162　007　松脂くさいにおいを発散し

はっさんする　発散する
084　026　なま臭いサラダとサージンの匂いを発散する

はっして　発して
034　004　音を発してそれらは

ばっして　罰して
106　040　かれは自分を罰してはならない　屠殺者や皮肉屋の包囲のなかで

はっしゃ　発車
186　022　音もなく発車し到着しますからね！
186　024　昔の発車ベルの音が体内のどこかに残っていたんですよ！

はっしゃされる　発射される
010　012　黄ろい煙は発射される

はっしゃべる　発車ベル

186　024　昔の発車ベルの音が体内のどこかに残っていたんですよ！

はった　貼った
006　014　阿片の広告の下にベタベタ貼った

ハッチ
074　007　ゆらゆらとハッチから担ぎ出されてゆく

ぱっと
183　008　街全体がもひとつぱっとしないのは

バッとしない
150　078　そちらでは気分的にバッとしない天候がつづいているそうですが、

はっぱ　葉っぱ
017　028　葉っぱの蔭に消えてしまった

はっぴょうした　発表した
150　052　続いて第二輯に逃亡した娼婦の心理を描いた「滅落」を発表したところで、

はっぽうやぶれ　八方破れ
132　014　八方破れの　吉凶よさらば

はて
039　132　ゼラニウムのやうに燃えはてようと
068　018　一直線をえがく　はてしない水平線にそって
070　044　はてしない壁を手さぐりして、
072　071　このはてしない空虚は
079　026　記憶のはてにあらわれる
088　012　はてしない空　麦畑　街々
093　027　かれの魂はエデンの樹の頂きからはてしなく落ちはじめる
101　056　この曠野のはてるまで
128　062　やつはてのひらをひらひらさせて
147　013　此頃ではてんで死のことなど考えやしない
173　040　はてさて　七十年代も終りですか

はて　果て
039　049　あなたの果てしない翳のなかであったのか
151　027　近代人のなれの果て
162　014　いつかは訪れる忘我の果ての

はてしない
068　018　一直線をえがく　はてしない水平線にそって

070　044　はてしない壁を手さぐりして、
072　071　このはてしない空虚は
088　012　はてしない空　麦畑　街々

はてしない　果しない
125　013　さりながら果しない休日がつづく

はてしない　果てしない
039　049　あなたの果てしない翳のなかであったのか

はてしない　涯しない
046　004　石で作られた涯しない屋根の町の
080　001　涯しない眺めに
080　021　もう　きみはこの涯しない眺めの

はてしなく
093　027　かれの魂はエデンの樹の頂きからはてしなく落ちはじめる

はてる
101　056　この曠野のはてるまで

はと　鳩
028　023　鳩とともにおお救世主の銅像の髭にもついて
091　011　新聞社の屋上たかく舞っている伝書鳩の

はとば　波止場
055　010　巨大な黒い影が波止場にうずくまっている

はな　花
001　015　黒い花
004　001　ガラスの中の青い花
004　009　時計が霜の花の上で鳴くと
005　003　タンポポの花粉をつけて
005　010　古い楽器は花樹の下で
005　017　リボンの花火をあげて
005　034　花の中で
006　012　花を沈めた　花を
007　012　空いちめん赤い花が咲く
008　005　*ジライ*花を観賞するときも　空にはボンボン花火が上
008　008　罌粟の花が*サカリ*である　真珠の月もかくれてゐやう
011　012　青い花とまちがへたりする
012　006　放心した花弁のやうに
014　023　花のある音楽につれて

015　003　花は眼のある動物を見ない
017　015　あの花が欲しいなと呟くと
017　019　星も花もゐなかった
018　006　花を孵化して
019　003　掌は紅い薔薇の花を
019　010　花と大理石の間で
021　011　花が浮かんで噴水をかむった
022　009　そして毒を含むだ花々は
024　005　は　記憶に固執する時計には花々が飾られてゐるのだなと見
025　016　太古からの根をひらき花々は
025　030　花瓶に挿さったみどりの茎は
028　001　一本の花の茎もない空の下に
028　061　花花しく
028　062　花花しく棲息する物質の群れが
028　070　花花しい物質たちの流れ乱舞の外から
029　011　花花も昔のままに白く
030　005　そこらあたりの壁には花もない
030　015　陰花植物とならんで写真にはいる
030　032　花の実たちが実る周囲に実る別の花の実たち
031　008　もう花などどんな世界にも垂れはしない
032　014　百合の花が見えて
033　016　花のほとりに水を
035　004　花を踏み
036　002　おそらくは咲かぬであらう花花
036　011　みずみずしい樹木と花花の間で
036　014　あれらの花花はなるべく愛する
036　018　ああ愛する花とともにゐたいな
036　019　おそらくは咲かぬであらう花花と
036　026　それらは花花ほど愛らしくない
036　027　花花の薫りと肌をもたない
045　007　荒れた庭に　花樹はむなしく崩れかかり
046　009　花火をみてゐる橋上の人よ
046　015　あなたはとほい橋の上で　白昼の花火を仰いでゐる
046　052　方位はなかった　花火も夢もなかった
053　057　永遠の星　花　鳥　樹　魚などの
054　008　胸に造花の老人たちが
055　027　ガラスの花瓶に閉じこめてしまったのだ
055　029　花瓶の腐った水のなかで溶けている
061　019　水晶　花　貝殻が、世界の空に
061　020　炸裂する真昼の花火を夢みている。
061　204　花火も夢もなかった、
065　026　荒涼とした心に、蒼ざめた花嫁をあたえ
069　017　とてもきれいなお花畠があったんだって

076　016　血の骨よ血の肉よ血の花よ
088　070　とおくまで草木や花のやさしい言葉で
090　017　鳥獣や花をつくりだすまで
090　022　鳥や花をさがすように
109　003　花を咲かせた樹木が
112　026　真白な花婿の胸をした戦友よ
120　023　花のかすみにつつまれて
133　028　数知れぬ花が袖にこぼれるところまで。
146　001　花曇りの日に
148　055　岩や空や、波や砂や、花の香りのする一日、
155　016　花輪や弔辞は
164　031　きみの花柄のパンティを脱がせるためだったら

はな　華
003　002　華の咲いてゐるテーブル
023　022　華麗なあなたの指輪とともに
120　014　繁華のちまたの

はな　鼻
017　021　仏陀たちの鼻は赤くなる
028　031　すべての阿鼻が犇く武器であり
100　033　かろやかな鼻唄のリズムで歩きもしたろう
106　022　さらにいっそう素晴しいのは鼻だろう　内なるオルガンの全神経が
106　031　詩人なら孤狼な口髭とか　大切な象徴の鼻について
188　013　鼻は鼻で、これまた、字引をみると、癤症とかで、
188　014　蓄膿症ではないと思うのですが、とにかく鼻が詰り、
188　015　鼻孔に、時々、薬をささないと、

はなうた　鼻唄
100　033　かろやかな鼻唄のリズムで歩きもしたろう

はながら　花柄
164　031　きみの花柄のパンティを脱がせるためだったら

はなぐもり　花曇り
146　001　花曇りの日に

はなし
041　040　何とはなしに陸橋の上まで打寄せてくる
044　012　「美しき実を結ぶ悪しき樹はなし。」
072　036　赤帽が白帽をひきはなした
072　048　白帽が赤帽をひきはなした
102　022　いちど手をはなしたら

はなしあおう　話し合おう
145　016　固いパンの男がゼリーの女に食べながらストレートに話し合おうと云っていた」

はなしあって　話しあって
053　029　ひそひそと話しあっていた声もとだえてしまいました

はなして　放して
102　024　とおくの地球に放してくれ

はなしはじめる　話しはじめる
054　058　大学生は低い声と思いやりのある眼ざしで話しはじめる

はなばな　花花
028　061　花花しく
028　062　花花しく棲息する物質の群れが
028　070　花花しい物質たちの流れ乱舞の外から
029　011　花花も昔のままに白く
036　002　おそらくは咲かぬであらう花花
036　011　みずみずしい樹木と花花の間で
036　014　あれらの花花はなるべく愛する
036　019　おそらくは咲かぬであらう花花と
036　026　それらは花花ほど愛らしくない
036　027　花花の薫りと肌をもたない

はなばな　花々
022　009　そして毒を含むだ花々は
024　005　は　記憶に固執する時計には花々が飾られてゐるのだなと見
025　016　太古からの根をひらき花々は

はなばなしく　花花しく
028　061　花花しく
028　062　花花しく棲息する物質の群れが

はなび　花火
005　017　リボンの花火をあげて
008　005　*ジライ*花を観賞するときも　空にはポンポン花火が上
046　009　花火をみてゐる橋上の人よ
046　015　あなたはとほい橋の上で　白昼の花火を仰いでゐる
046　052　方位はなかった　花火も夢もなかった
061　020　炸裂する真昼の花火を夢みている。
061　204　花火も夢もなかった、

はなむこ　花婿
112　026　真白な花婿の胸をした戦友よ

はなよめ　花嫁
065　026　荒涼とした心に、蒼ざめた花嫁をあたえ

はなれ
053　031　わたしは枝からはなれてゆきます
062　038　ただひとり群れをはなれた小羊が
065　045　何もなかった。絲杉をはなれた赤い月は
093　017　かれの手足がはなれ罪もまたはなれてゆく
176　024　これ以上まぶしい裸にはなれないのだ

はなれ　離れ
021　022　とほく離れて文字を愛して
039　067　離れることは許されない
046　041　模糊とした深淵のほとりから離れ
051　025　影　終生よりそって離れぬ影
053　037　わたしはわたし自身の影からも離れてゆきます
059　015　この世のそとでも離れがたいことを信じよう
108　014　人はあわただしく自分の影から離れる
150　049　文学から離れたことに話をかぎれば、それだけがすべてではない一例として、
163　016　離れまいとして

はなれて
053　031　わたしは枝からはなれてゆきます
093　017　かれの手足がはなれ罪もまたはなれてゆく

はなれて　離れて
021　022　とほく離れて文字を愛して
053　037　わたしはわたし自身の影からも離れてゆきます

はなれてゆきます
053　031　わたしは枝からはなれてゆきます

はなれる　離れる
039　067　離れることは許されない
108　014　人はあわただしく自分の影から離れる

はなわ　花輪
155　016　花輪や弔辞は

ハニヤ

171　009　……五番目がハニヤさん

はねあげて
081　021　血と泥と鉄のしぶきをはねあげて

はねかえった　跳ね返った
020　003　蝶のやうに跳ね返った

はねて　跳ねて
025　033　ゼンマイのやうに跳ねてゐる雲

はねる　跳ねる
072　016　跳ねる馬
072　033　跳ねる馬が
072　046　飛ぶ馬が跳ねる馬を追いこした
072　053　ーー飛ぶ馬が跳ねる馬を追いこした

はのない　歯のない
025　052　歯のない哄笑とが
061　097　厚くまくれた歯のない唇をひらき
189　032　腐った肉片を歯のない口に運ぶ

はは　母
041　047　母の胸をどんなに不安にしてしまったか
046　018　父や母　また友の顔もゆらめいてゐる
051　037　「脱走したい、ーー海よ　母よ」
054　070　首を吊っている母親の足をひっぱれ！
059　002　わたしの母の手をひいて
059　004　母が戻ってくるのを待ちながら
059　008　母はついに帰らなかった
059　017　美しい少年を失った母が
059　023　おもいみだれた母と美しい少年のボートが
059　028　波にさらわれた母と美しい少年を許せ！
061　135　父母や妹　またあなたの至上の友たちに」
062　059　母なる海と太陽の光りが強すぎます
066　016　年老いた母親はいきをころして坐り
077　022　母や妹や恋人のためにとめどなく涙を流しつづけた
099　005　一人の妹は乳母車につかまって歩き
099　012　もう一人の妹は一人の子供の母になった
111　004　憧れにも恐怖にも　母にも恋人にも
118　002　母なる大地
136　002　まず　尊い母を
147　002　若くて死に憧れていた母が一緒に死のうと言えば

159　012　まだまだ幼い母のうしろ姿は襖の蔭に
160　060　最後は叔母のクララが遺体をもらいさげていった
160　061　かれが家を出たとき　母親は「棺桶に入って帰ってこい！」と言ったが
176　020　あらゆる母がそうであったように
183　021　大きな買物袋をさげた母親のあとから
190　005　母がうまれた町は山にかこまれていて

はばたき　羽ばたき
026　003　光の輪の中に羽ばたきがあって
106　036　不吉な羽ばたきをして　地面を歩く黒い鳥の男たちもいる

ハピーエンド
100　031　ぼくはハピーエンドを起点にして

ハプニング
160　034　このハプニングに聴衆は喝采する

はへん　破片
006　004　ガラスの破片

はまべ　浜辺
143　021　どこの浜辺の砂を掘るのか

はみがき　歯ミガキ
112　020　緑いろの歯ミガキにすこし血のまじった唾を吐いた

はみゃく　葉脈
009　008　薔薇色の頬に葉脈が透けてくる
026　013　葉脈から雫が落ちてくる
033　017　青い皿のあたりに葉脈を
039　025　葉脈から

はみ出てゐる
041　029　そしてあなたは広い眺めの外へはみ出てゐる

ハムレット
113　025　ハムレットも

はめた
027　004　手袋をはめた右手のみが動き

はめつ　破滅
140　004　ぼくを破滅させるものがなくなった

142　103　少しの犠牲で将来の破滅を防げるかもしれない）
156　012　とっくに破滅していた
156　027　とっくに破滅していたろう

はめつさせる　破滅させる
140　004　ぼくを破滅させるものがなくなった

はめつして　破滅して
156　012　とっくに破滅していた
156　027　とっくに破滅していたろう

はめて
026　001　たくさんの硝子がはめてある
124　009　他方がそれを買う（ゴムの手袋をはめて）

はもん　波紋
072　070　この淋しさの波紋

はやい　早い
028　007　二十分も早いことに不思議はない
188　033　早いもので、あれから四年、

はやく
035　006　それは一羽の鳥よりもはやく帰ってくる

はやく　早く
106　012　永遠プラス五分間を　「早く早く」とせき立てている
138　007　早く早くとせきたてる
144　009　昨日の淵から出た今日の瀬は早く
146　033　「あの女だ！（ザッツ・シー）　早く掴まえて！（ゲット・ハー）」
155　018　お焼香は手早くすます
158　044　こんなにも早く終えたことを悲しむ
165　014　あなたは早く死ねばよい
173　003　一日が早く過ぎる
174　006　早く頑迷固陋にかえりたい。あと三カ月で六十才」と書いてあった。
190　013　時には朝早く釣竿を持ち

はやくはやくと　早く早くと
138　007　早く早くとせきたてる

はやさ　速さ
100　069　おそろしい速さで

はやし　林
016　007　大理石の林の都会（まち）から
025　043　林檎の核を拾てた
028　042　青い森林の地区に
048　025　乳と象牙と林檎とが
053　003　暗い空の枯れた林から落葉がすきまなく降ってきます
078　007　緑泡立つ椰子林が
091　015　きみの欲望は夕陽を浴びてビルディングの林に落ちてゆく
094　003　とある松林をぬけて海へでる
107　002　くぬぎ林の夕陽も
112　014　命令一下たちまち整列し　黒い銃剣の林をつらね
129　006　コンクリートの林から
144　002　赤い林道に入っていく
148　044　松林にかこまれた枯芝の庭で、
173　030　林立する墓石の女

はやして　生やして
014　030　楽譜はヒラヒラ羽を生やして

はやすぎ　早すぎ
105　005　魚釣りには早すぎ、狩猟には遅すぎる三月。

はやめ　早め
089　038　吹きつのる北風に足を早めます

はら　腹
008　003　点ける　と焦げたパンの匂がし　空腹をかんじた兵士
013　002　パイプの腹が暑くなる
014　028　楽器のうす暗い腹の中に沈黙が
067　004　腹のなかには
112　044　眠りながら腹をこやす王国を夢みているうれしいはらからたち
128　030　腹を立てて出ていく者
165　004　腹式呼吸のいきの音

ばら　薔薇
009　008　薔薇色の頬に葉脈が透けてくる
011　016　純な一輪の白薔薇について
019　003　掌は紅い薔薇の花を

ばらいろ　薔薇色
009　008　薔薇色の頬に葉脈が透けてくる

はらから

112　044　眠りながら腹をこやす王国を夢みているうれしいはらからたち

はらって　払って
142　076　はるかに高い代償を払ってもよいことになっている
150　008　極めて小さな事柄にもいたましいほどの注意と努力を払ってゐた。

パラノイアック・スキゾフレニック症
151　026　パラノイアック・スキゾフレニック症

バラ色
020　002　バラ色の手に名刺が
020　008　バラ色のそれは
106　015　バラ色の頬はあせても　不幸な五十七人がそろって

はり　針
051　004　「この病院船の磁針がきみらを導いてくれる」と船長は言う、
069　025　十二時十分　針の眼が
084　012　安いレコードのみじかい針の溝から
103　011　帆柱や舵や海図や羅針や救命ブイや銛や……
145　003　何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに
167　061　錆びた針金の蔦におおわれて
188　063　死滅の予備知識も与えられて然るべきだ、といった方針のもとに。

はりがね　針金
145　003　何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに
167　061　錆びた針金の蔦におおわれて

はりがねざいく　針金細工
145　003　何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに

はりついた
084　016　壁にはりついた影と語っている時代――
114　003　真夏のコンクリートの壁にはりついた

はりめぐらされ　張りめぐらされ
028　002　地域は張りめぐらされた棘で囲まれ

バリー
103　014　ヴェニスとかバリーへ出かける

はる　春
011　005　春の風が吹くと
018　012　路地を抜ける春のやうに

041　037　青春よ　もう再び戻ってきてはいけない
041　139　水の中にはもう春がきてゐる
041　144　春はちきに立去ってしまふだらうと
048　020　春　夏　秋はまたたくまに過ぎてゆく
058　036　春のころ代議士侯補が
109　001　春から夏にかけて
115　013　春は来らず
120　009　やさしい春の息づかいに
136　017　春の熱病をやんでいる
150　062　一九三九年の春、
160　010　春のさきぶれの雷が遠くで鳴っていたが
160　076　制度の春を病むこともなく　不確定性の時代を生きて
167　006　春というにはまだ寒いが
174　004　「病気がこんなにこたえるとは、思ってもいませんでした。春からノイローゼ状態で我ながら呆れかえっていま
186　019　杉本春生、相良平八郎に会ったよ
187　007　春はまだ遠く

はるかなる　遥かなる
039　111　月は遥かなる湖にかかる

はるかに　遥かに
042　007　大いなる弧をめぐり遥かに高い所から

バルセロナ
096　004　ぼくはバルセロナの夜をえがく
096　009　太陽の町は夜の町　バルセロナの裏町の

バルテノン
012　017　バルテノンは丘にある

はるの　春の
011　005　春の風が吹くと
018　012　路地を抜ける春のやうに
058　036　春のころ代議士侯補が
120　009　やさしい春の息づかいに
136　017　春の熱病をやんでいる
160　010　春のさきぶれの雷が遠くで鳴っていたが

バルプ
028　025　新らしい印刷術とバルプにより

はれた　晴れた
039　051　グラスの底が晴れたら

058　015　ある冬の晴れた日に
073　009　よく晴れた五色の空を映していた

ハロペリドール
142　059　恐ろしいクロールプロマジンやハロペリドールを免除され

パン
008　003　点ける　と焦げたパンの匂がし　空腹をかんじた兵士
025　025　かつて居睡するセルパンであった
061　179　固いパンを噛っています。
064　018　生（なま）パンでさえ死の匂いがする。
088　049　大きいフライパンをあやつる小さいマリは
106　013　パンという閃光で　映像がうまれまた消える
145　016　固いパンの男がゼリーの女に食べながらストレートに話し合おうと云っていた」
164　031　きみの花柄のパンティを脱がせるためだったら
179　002　たべのこしの黒パン少々と

はん　反
019　012　反芻する
041　140　窓ガラスに反射する日の光で
054　142　反コロンブスはアメリカを発見せず
065　009　沈黙が占めている空間に反響した。
100　025　離反につづいて孤立がはじまった
113　029　人民の世界を反映した
142　061　　ソビエトにおける新しい精神病　反対！　を叫んで
142　078　反祖国的ないかなる文書に署名してもいいと思っていた
143　011　年経た甲羅を陽に反らして
145　008　レスビアンの女たちの痙攣は不信者の地獄の笑いの一型態で　ブリッジして反った肉体の
165　020　家族的な反映だったのだろう、と
170　015　朝日に反射し
188　062　その反対に、葬儀屋や墓地などを見学しながら、

はんい　範囲
190　009　その窃のとどく範囲の明け暮れ

はんえい　反映
113　029　人民の世界を反映した
165　020　家族的な反映だったのだろう、と

はんえいした　反映した
113　029　人民の世界を反映した

はんか　繁華

120　014　繁華のちまたの

ハンカチーフ
054　151　ちぎれた青空のように飛んだ一枚のハンカチーフ

ハンガリー
105　011　九月ポーランド、十月スエズ、ハンガリー、

ばんかん　万巻
167　075　万巻の書は不治の病いとなり

ばんごう　番号
073　011　墓標のように番号をつけた煙突がならび

はんざいきょかしょ　犯罪許可証
057　004　いちどは犯罪許可証を懐中にして

はんしゃし　反射し
170　015　朝日に反射し

はんしゃする　反射する
041　140　窓ガラスに反射する日の光で

ばんしゅう　晩秋
116　007　よりそって　晩秋の路上に

はんしょくし　繁殖し
112　043　眠りのなかで繁殖し

はんしん　半身
032　009　眠れる半身に垂れさがり
032　017　わたしの半身はすでに掠められてゐる

はんすう　半数
150　034　半数近くは戦争で死に、

はんすうする　反芻する
019　012　反芻する

はんずぼん　半ズボン
099　001　紺の半ズボンからほそい脛をのばし

はんせい　半生

165　023　父とは半生のつきあいだったが

はんせいき　半世紀
193　012　半世紀は車窓の景色であった

はんそこくてきな　反祖国的な
142　078　反祖国的ないかなる文書に署名してもいいと思っていた

はんたい　反対
142　061　ソビエトにおける新しい精神病　反対！　を叫んで
188　062　その反対に、葬儀屋や墓地などを見学しながら、

はんだん　判断
054　055　それを垂直に判断するには
057　019　力が判断と緊張をしっかりと両足にむすびつける

パンティ
164　031　きみの花柄のパンティを脱がせるためだったら

ばんぶつ　万物
186　076　万物は時間の塊りで
191　012　回帰する万物よ

ハンフリー氏
128　047　元副大統領ハンフリー氏は

ばんぺい　番兵
028　020　かれら塵挨都市の番兵と呼ぶものから

はんもする　繁茂する
028　059　葡萄の木の影のごときタイプが無数繁茂する
148　052　グロテスクに繁茂する熱帯植物を観賞した。

ハンモック
108　006　白いしじまのハンモック

ばんやり
036　028　ばんやりしていると嘴と天使の槍で

はんらんして　氾濫して
061　145　霧ははげしく運河の下から氾濫してくる。

はんらんする　氾濫する

028　012　古靴の氾濫する世界に

はんりょ　伴侶
061　134　浄らかな水に映る理想の伴侶に

バーチザン・レヴュウ誌
160　011　たまたま手にしたバーチザン・レヴュウ誌の最近号で

パーティ
103　013　（友だちとお別れのパーティをして

ハープ
102　016　もういちどハープの筋をかき鳴らすから

ひ　火
005　017　リボンの花火をあげて
005　037　遊園地区に火が消えた
008　002　機関銃はマッチを擦って　乾草みたいな白い雲に火を
008　005　ジライ花を観賞するときも　空にはポンポン花火が上
014　014　二つの楽器が揃って火を呼び始めてね
022　002　火薬の匂ひがあらう
026　030　おそるべき噴火口は
031　023　小さな火を焚くがいい
039　083　美しい火災の意味を知るだらう
041　067　いつまでもじっと火を見凝めてゐるのは
041　129　やがて嫉妬の火で燃え尽さうとする
041　146　孤りぼっちで火を見つめているだらうと
043　014　ながく夜をまってゐた灯火は
046　009　花火をみてゐる橋上の人よ
046　015　あなたはとほい橋の上で　白昼の花火を仰いでゐる
046　052　方位はなかった　花火も夢もなかった
061　020　炸裂する真昼の花火を夢みている。
061　174　火のない暖炉に向いあっています。
061　204　花火も夢もなかった、
065　006　ゆれる燈火と死魚の影があるばかりであった。
073　006　真黒な火煙を吐きつづけていた
081　013　何千年の闇をつらぬいて真赤な雲の火柱がたち
096　017　ごらん　対岸にアラビアの火が見えるよ
098　023　ブランディの血を燃えたたせる火
102　015　憎しみをかきたてる火掻棒で
112　010　破壊につぐ破壊のこだま　断末魔の軍港にとどろく火砲のうた
133　003　人間蛾は街の燈火に誘われる
133　020　ものさびしき火を借り

151 010 これではいつも火の車だ
152 015 くだんのタバコに点火すれば
152 029 てっぺんに火をつけると
167 007 足もとのストーヴに火をつけると

ひ 日

002 008 魚のやうに眠る日
002 010 （それは忘れられた日のロマン）
002 011 落日の朱が氷柱をながれ―
006 008 そういえば長いこと日のメを見なかったね
006 013 それから赤い排日ポスターを
008 004 もある　向日葵のごとく旗は燃え　荒地に咲きそめた
010 004 白い帽子は頭のアリカを教へるとともに日の匂を発散させる
010 005 日の匂を発散させる少年は青い麦の芽である
010 008 青い麦の芽の匂が向日葵のあたりにのこる
012 003 若いアポロは日傘にかくれ
012 014 日傘は貝殻をまねてゐる
013 023 まごまごしてゐると日が暮れる
021 005 金いろの羽毛を日に光らせた
021 006 若年の日日に
023 003 音もなく日ぐれがきたといふ
023 021 あのやうに退屈な都会の一日が
025 010 日暦をめぐり欲望を追ってゆくものよ
026 021 快い日影もある
031 007 雲の多い日没の空に出遭ふ
031 015 雨傘やブラシなど日用品が置いてある
033 020 あれは日没とともに
035 023 おそらく明日訪れてくるだらう
036 005 それらの悼ましい怒でおれの日記を汚すな
039 059 さうだ雨の降る日に
039 081 日没になると
039 094 愛の生誕の日を
039 103 明日はすでに暮れてゐるだらう
040 003 日没には
041 008 新聞を読む　虚しい日暦の傍で
041 033 優しい眼鏡や柔かい手袋の明日の方まで湿してゐる
041 053 また明日　お会いしませう　もしも明日があるのなら
041 140 窓ガラスに反射する日の光で
043 012 日はゆき　うす暗きとばりの中に
042 006 まだ日没の匂がのこってゐる
045 016 雨の日のたちゐふるまひ
046 026 自然の声をあげる日がくるだらうか
046 030 あなたは日の暮れ　何を考へる

046 038 日没の空にあなたはわななきつつ身を横たへ
046 042 ほっそりした川のやうに渝らぬ月日を行くことが出来る
048 011 昨日も今日も　疲れた裸のままでいると
048 022 うすれゆく年々の冬のきびしい日の下で……
050 005 遠い昨日……
050 011 Mよ、昨日のひややかな青空が
050 018 いつも季節は秋だった、昨日も今日も、
050 022 埋葬の日は、言葉もなく
051 012 病んでいるのは日本じゃないか。
052 030 明日の夕陽を背にしてどうしたらよいのだろう
053 049 わたしは一日よりもはかない一年を
054 097 人を苦しめる過ぎ去った日々が
054 113 「また明日会いましょう　もしも明日があるのなら」
054 160 いつの日か　僕らの交す眼ざしや
054 167 ああ　いつの日からか
055 032 だが昨日の雨は
056 007 今日も都会の窓に灯がともり
056 008 昨日のように空は濁った河のうえにある
056 019 明日もなければ今日もない
057 015 ある日　ボートを水にうかべ
057 023 夕日があかあかと上衣の肩をそめ
057 040 今日も
058 015 ある冬の晴れた日に
058 022 日が暮れかかると
058 048 今日の出来事を
058 049 昨日のように読みすてましょうか？
059 007 わたしにはながい悪夢の日がつづいた
059 027 とおい夏の日に
061 042 子供をつれて一日だけの安息に、
061 099 「今日も太陽が輝いているね
061 148 日没の街をゆく人影が、
062 004 落ちた夕日の赤い血が
063 002 夕日が燃えつきてしまった
064 003 ーー今日は今日、と通行人が呟いた、
064 004 ーー明日は明日、と街灯が答えた。
064 029 ーー明日は明日、と通行人が呟いた、
064 030 ーー今日は今日、と街灯が答えた。
070 033 一日を一年のように暮しているぼくたちには、
071 005 今日のなかの明日
071 007 日曜日の停車場に
071 011 どうして一日の休みにとりかえそうとあせるのか
071 014 日曜日の停車場で
071 016 昨日も明日もない

071 026 今日のなかの昨日
071 039 明日から昨日へ
071 044 今日のなかの昨日と明日
072 002 天気予報が気がかりだった日曜日
078 012 ながい月日もまたたくうちに過ぎさる
079 021 日の暮れ
080 015 おお　明日をあたえよ
080 016 今日は希望　この痛みの傷口を
087 016 ペニィの日課はそれだけだが……
087 020 ペニィの日課はそれだけだが……
087 022 昨日も　そんなふうだった
087 023 明日は　おそらく北風が吹く
088 072 どんなに暗い日がやってきても
089 011 （……それは過ぎた日のことですから
098 026 それは昨日の正午
100 005 また明日　お会いしましょう　もしも明日があるなら
100 029 もしも　明日があったら
100 037 だが　明日はなかった！
100 052 また明日　お会いしましょう
100 056 もしも　明日があるなら……
100 074 ぼくの明日は
100 076 昨日の道となっている
101 011 むかしの愛も　あたらしい日附の憎しみも
102 002 みんな日暮の桟橋に集ってくれ
102 020 若き日はもうかえらない
104 007 時はながれ　いつの日かまた
107 013 在りし日を嘆くでない
116 010 引き裂かれていった日から
122 002 まだ日のにおいが残っていたが
123 003 昨日欲しがったものを
123 004 明日も欲しがるだけ
123 005 今日は北風が吹いているが
124 006 日付のない暦をめくり
124 013 わずかに自己への希望でしかない日……
124 031 日没に追いつかれていた
125 001 髭をそらない日はない
125 013 さりながら果しない休日がつづく
125 015 歩哨はいつも広場の明るい日ざしのなかを
128 055 明日の見出しができた
137 001 入日の色がほんのりと
137 007 くる日もくる日も
137 010 入日のさまを覗き見してきたのだ
137 015 ある日　女は狂った目をして言った

138 001 血まみれの夕日が沈み
142 074 「今日の西側の勇気の基準によれば
142 106 一つの　否！　は　明日には無数の　否！　になるだろう
144 009 昨日の淵から出た今日の瀬は早く
145 019 *静かに走れ*と命名された群集の河は昨日のように流れていた
145 021 膝の上の猫を大事にしてあげなさいと今日の声は忠告していた
146 001 花曇りの日に
148 016 愛は身をほそらせ、日々の仕事は疲れをつのらせる。
148 048 それから、少年の日のように月の砂漠へ出発した。
148 049 日曜日の海はおだやかにぼくたちをむかえた。
148 055 岩や空や、波や砂や、花の香りのする一日、
150 068 今日、我々は一つの都市、
150 079 こちらも七月一日だというのにストーヴをつけたりしました。
153 003 原初の日より数えるように
154 009 想像しえない創造の日からの
155 004 昨日の風景である
155 019 それで一日
155 025 それも一日
155 030 一日を上手に処理する
155 038 ある日
156 001 日本人だから
156 037 わが日本語の「愛」は
160 009 そんな今年の冬も終りに近い　ある日の真夜中
160 046 今夜のかれの幸運は明日にはきみのものだろう
160 056 その日は夜どおし起きており　朝の四時にゴミを捨てに廊下へ出て
160 058 遺体は屍体置場に二日間放置されたままであった
160 074 ところで　日本の社会の日蔭を歩む
161 001 一日の業を終えて
163 004 夜明けとも日暮ともつかぬ薄明の中で
163 008 その日その日の
166 013 いまのきみは一日に六十本の煙草を吸い
167 002 風のつよい日だった
167 074 昨日よりよき明日は来ないのだから
170 015 朝日に反射し
172 020 常緑樹にしたたる日光の蜜が
173 003 一日が早く過ぎる
174 024 ダメを詰めるような毎日を送りながら
176 022 落日に輝くばかりで
179 014 その日暮しの一日を
179 029 明日には深い霧の底に沈み
180 055 ぼくらの日日は過ぎつつあり
182 002 機嫌のわるい日は
182 022 日月の長さは悟りだから

183 019 今日の出来高と終値を前にして
183 020 明日の強気節をどう謳いあげたらいいか？
183 029 平穏無事の今日一日の。
184 012 日本人妻の間にできた子供である
184 015 「ヒロシ」という日本名の
185 018 それが、今日の真実だとすれば
187 015 けれども昨日まできみを
188 008 歯も、先日、奥歯が一本、根が痛みはじめたので、
188 019 一九五八年に、日本で、
188 055 (……今日も打振る日章旗……)
188 084 日本の重文とされている民家への憧れが、
190 006 峰から昇り尾根に沈む日月
192 011 もしかすると、近づくにしたがって、遠ざかっていく海なのかもしれない。こんなところは、日本中のどこにもあり

ひ 非
041 048 個人を非難しないわけにはゆかない 神々の名において
054 143 非ジェファーソンは独立宣言に署名しない
090 016 どんな非人の作品なのか？
116 013 非時の曇天に
142 029 また いかなる非難中傷の壁、妨害の電波がぐるりをとり巻いても
142 097 非合理に機能する官僚的権威主義を全面的こはびこらせながら
142 119 非道な暴力に抵抗して 自らの犠牲と死の覚悟で第一線に立ち
192 022 最後の運をたよりに走り出していたのは、是非もなかったが、

び 美
012 004 その美しい扉の文字は
017 012 ダリヤよりも美しかったので
029 013 美しい喚声にとり巻かれてゐた
035 014 だれもかれも美しくなって
036 007 白く美しい歯をもたぬから
039 083 美しい火災の意味を知るだらう
040 026 美しいあなたの皮膚や
044 012 「美しき実を結ぶ悪しき樹はなし。」
046 051 橋上の人よ 美の終局には
052 022 片言まじりの甘美な言葉で
053 059 美しく繊細で やさしかったお姉さん！
059 001 見知らぬ美しい少年が
059 011 あの美しい少年は何処へいったか
059 017 美しい少年を失った母が
059 023 おもいみだれた母と美しい少年のボートが
059 028 波にさらわれた母と美しい少年を許せ！
060 017 なんという美しさを見出すことだろう
061 202 美の終りには、

062　013　いちばん美しい使いである姉さん！
068　006　海の光りは　美しい
072　007　うす緑の大地、美しいカーヴを描く競走路をみたまえ
077　033　この美しい兵士は
078　004　美しい朝であった
090　013　巨木の五百年は美しくない
106　021　かれの指の爪貝は　恋人たちがしゃぶりたがるほど美しい
106　027　高名な美学派の詩人みたいに　口髭をのばしたり刈りこんだりして
115　014　喜びなき代の美しきひと
130　007　美少年に見おぼえはない
133　017　死の匂い甘美な横丁で
152　030　美しい炎をあげて燃えあがり
158　025　美しい風景になりたいという
158　034　北條や足利の美しい光景をすくってみせたときだろう
174　018　（きみが美しい奥さんと結婚して、みんなに羨まれながら、西荻窪のアパートに住んでいたときのことだ）
177　026　その美しさに
179　021　美しいグラスを手にして
180　015　美しきものが逞しく育つ
184　001　すごい金髪美人である彼女は
185　013　一対の男女の世界では、甘美な

ひ　陽
004　010　太陽の跫音が近づいてくる
008　009　ゆえに　陽気な太陽よ
012　024　おおきらめく太陽よと
013　024　僕は太陽のやうに逃げなければならん
014　011　うすい陽の光が胃の腑へさしこんでくる
016　002　太陽は水晶に分解される
021　015　逃げてゆく太陽を追った
039　093　太陽と
041　004　やっぱり同じ陽が照り
041　124　木質は腐り　陽に燬かれ　蝋のやうに流れた
044　014　熱い太陽を背負ふ　神々よ
048　005　太陽が沈んでしまうと
049　014　そして落陽はただひとつ。
050　027　「さよなら、太陽も海も信ずるに足りない」
051　014　午後四時の黄いろい太陽
052　030　明日の夕陽を背にしてどうしたらよいのだろう
053　018　夕陽の果に燃えつきて
054　163　胸にかがやく太陽の紋章を示しながら
061　099　「今日も太陽が輝いているね
061　146　夕陽の残照のように、
062　046　太陽の光りをあびている

062　059　母なる海と太陽の光りが強すぎます
068　023　太陽の下で　空壜をころがすように
070　034　昇る陽もなければ、沈む陽もありはしない、
079　003　太陽はかたむき
080　003　海は太陽や雲をうかべていた
080　010　夕陽の血が波のうえにしたたりおちて
083　023　とおくて近いこんな夕陽が沈みつつあったのか
088　021　太陽に背をむけたそれらのものが
088　027　あたたかい南国の陽ざしのように融かしてくれるから
088　073　太陽の涙から生れてきたぼくたちの
091　015　きみの欲望は夕陽を浴びてビルディングの林に落ちてゆく
093　031　輝く太陽を見た者はいない
094　022　ああ　太陽は全身にものうく
096　002　太陽をえがく　酒場時代の
096　009　太陽の町は夜の町　バルセロナの裏町の
096　013　ミロ君の夜の太陽を見ていると　吐きたくなるね
099　004　太陽が緑の絵具をとかしている芝草のうえを
100　083　太陽は　また沈黙する
101　004　無力な太陽のことばで　ぼくにはわかるのだ
101　055　にんげんの悲しみによごれた夕陽をすてにゆこう
102　019　太陽はさっさと素裸で海へかえる
104　008　太陽に追われた記憶が戻ってくるだろうか
107　002　くぬぎ林の夕陽も
108　013　うすれた陽のしたで
117　006　太陽は高い建物のうしろにかくれ
120　021　太陽は昼寝だ
121　009　おもいきり　太陽をからかってみたい
126　001　「太陽や月や星は
126　006　いずれは太陽系の星のどこへでも
129　015　ものうい太陽と
143　011　年経た甲羅を陽に反らして
148　020　太陽の冷たい一瞥の下で、
160　042　陽気であれ！　思いわずらうなかれ
166　012　自由とは何かは太陽のように明白だったのに
171　018　太陽をかくす一片の雲をあおぐ
179　005　太陽の誘惑のしみがついていて
180　007　障子に映る薄陽をむけて
192　024　これが罰か、太陽と海を呪ったことの？　たった一度の空想の罪にしては、酷すぎる報いではないか！

ビアフラ
128　039　ビアフラはだめ

ピイクオド　（「ピイクオド」）

103　021　ゆめをのせた「ピイクオド」号に乗りこんでゆく

ピイクオド　(「ピイクオド」号)
103　021　ゆめをのせた「ピイクオド」号に乗りこんでゆく

ひいた
066　029　さっと影のカーテンをひいたのは

ひいて
059　002　わたしの母の手をひいて
177　029　きみの影は跛をひいている
180　050　「どこかで会って、さりげなく挨拶を交したような、奇妙な余韻をひいていくところ」それは私にしてもそうでし

ひうひう
060　004　電線がひうひう鳴っていたりする

ひかきぼう　火掻棒
102　015　憎しみをかきたてる火掻棒で

ひかく　比較
142　058　ぼくたちはやがて　比較的おとなしい分裂病者として
142　060　精神病棟で比較的おとなしく死ぬだけだろう
186　014　比較はできないよ)

ひかくてき　比較的
142　058　ぼくたちはやがて　比較的おとなしい分裂病者として
142　060　精神病棟で比較的おとなしく死ぬだけだろう

びがくは　美学派
106　027　高名な美学派の詩人みたいに　口髭をのばしたり刈りこんだりして

ひかげ　日影
026　021　快い日影もある

ひがさ　日傘
012　003　若いアポロは日傘にかくれ
012　014　日傘は貝殻をまねてゐる

ひがし　東
040　024　東方からおまへのからだを侵しはじめる
055　056　西と東の二つの大戦のあいだに生れて
057　029　東京の街角では
058　029　これがほんとうの東京の街路ですが

074　004　東洋の名もない植民地の海にうかび
077　029　東支那海の夜を走る病院船の一室で
116　009　西と東に　はげしく
122　005　なま牡蛎色に濡れた遠景のなかを
128　046　バウワウ言語　デインドン言語　プウプウ言語
142　005　東側における弾圧や迫害に最も敏感な人たちでさえ
145　027　街のまぶたは重く垂れ　東京の暗い夜に信号燈が明滅していた
167　003　東の窓と南の窓が交互に鳴り
171　008　一にアザラシ、二にムイシキン公爵
173　038　毛沢東も死んだ
190　011　東洋哲人風の生活が
193　021　いまし朝雲を東によせて

ひがしがわ　東側
142　005　東側における弾圧や迫害に最も敏感な人たちでさえ

ひがししなかい　東支那海
077　029　東支那海の夜を走る病院船の一室で

ひかった　光った
027　013　グラスの底に夜が光った

ひかっている　光ってゐる
034　006　光ってゐるのだ
035　012　あとには傷口だけが光ってゐる

ピカピカ
010　006　ピカピカ光る自転車は他のピカピカ光る自転車と競走する
010　015　ピカピカ光る自転車に倚りかかってゐる
016　014　フラスコのうしろでピカピカする

ひからせた　光らせた
021　005　金いろの羽毛を日に光らせた

ひからびた
128　086　ひからびた記憶の　屑籠のなかへ

ひかり
048　016　内部からのひかりをひそかに愛撫している
119　003　ひかりは乱れ
120　005　池水のやわらかなひかり

ひかり　光

005 002 蝶々は光る河を渡る
010 006 ピカピカ光る自転車は他のピカピカ光る自転車と競走する
010 015 ピカピカ光る自転車に倚りかかってゐる
014 011 うすい陽の光が胃の腑へさしこんでくる
017 022 月がオデコに光り始めたら
021 005 金いろの羽毛を日に光らせた
023 009 街灯は光をナイフのやうに操って
024 001 ふせた耳の上でふと風が鳴る　くずおれた月光の雫に溺れ
025 002 星の光をめざして噴き上り
025 035 縞になった明るい光線を歩む
026 003 光の輪の中に羽ばたきがあって
026 025 黄ろいダイヤモンドのやうに光り
027 013 グラスの底に夜が光った
030 024 光りは堅い金属のやうに寒々として
032 004 光のざわめきも遠ざかり
033 008 光沢とともに
034 006 光ってゐるのだ
034 012 すると光たちは
035 012 あとには傷口だけが光ってゐる
037 015 まだ光がどこまでもゆきわたり
038 006 地上を掠める光と
039 113 波が黒い樹かげに光る
040 023 光りは
041 031 あなたの街灯の滲む光が
041 083 そこにあたる影や光　樹々から流れる緑の匂ひ
041 140 窓ガラスに反射する日の光で
043 015 弱い光でうなだれた神をむかへる
042 013 脱ぎすてた分身が青く光る
044 004 帰するところ一にして　祈りは慧き習慣（ならわし）の光明なり。
045 004 にぶい気配が仄暗い光触にただよふ
049 006 北風は涙を光らせる。
051 023 虹彩から光りが消えうせ
052 019 あなたの未来の指輪が青い光をあつめ
054 156 光はひとつの原子に　強烈な夏の驟雨にかわってゆく
057 024 世界を冷やす月光がぼくの額を照らすのを……
058 031 光りの痕跡が小さくなってゆくようです
061 136 『われ溷濁の世の光なり
061 166 星のきまっている者の、空にまたたく光のために。
061 200 わたしの悲惨は貴方の栄光なのですか。
061 207 悲惨もなければ、栄光もなかった。
062 046 太陽の光りをあびている
062 059 母なる海と太陽の光りが強すぎます
063 012 窓からさしこむ月光のしたで

065　053　しろじろと夜明けの光をながすまで
068　006　海の光りは　美しい
069　010　きらりと光るひとつぶの星があった
077　025　ゆれる昼夜燈の暗い光りのかげに
083　007　なにもかも光と影のたわむれにすぎない
085　016　銀メッキの光りをうかべた不敵な男だ
085　032　光と影で区分できない何ものかであろう
090　021　紫檀の光沢は深まってきた
092　017　人々」に光りあれ！
093　018　……どのような光りも
093　029　それは血や光りがかえってゆく水平線のない世界だ
098　024　その光りというものだろう
104　009　無慈悲な月の光が　照し出す
106　013　バンという閃光で　映像がうまれまた消える
112　017　祖国の栄光と同胞の愛を信じて地平線になだれていった
112　046　運命は一瞬の光でおまえたちを数える
113　003　スターリンに栄光あれ！
113　047　スターリンに栄光あれ！
128　089　どうした最後のひと光り
130　013　砂利が一粒ずつ光りはじめた
142　015　光という点についてだけでも
146　003　明るい観光ビルのなかに入っていきました
146　025　こちらを向いて光りはじめたので
148　043　朝の光りがまぶしい、
149　010　月の光は雲からも
157　008　もう栄光の差なんてありません
158　033　光りのつぶをひろうように
158　034　北條や足利の美しい光景をすくってみせたときだろう
167　045　光りのむきを変えると思ったこともあった
167　060　こらえきれない一雫が光っている
170　006　明るんだ窓に光を失った電燈を消し
170　019　やがては星に昇天していく光の粒は
172　020　常緑樹にしたたる日光の蜜が
179　003　よく光るナイフ
186　061　ぼくを媒介にして光線が変ること
188　024　両のこぶしで、眼をおさえている光景、
192　004　夜明け前の微光があたりをくまなく覆っていて、どこへ行こうとしているのか、
192　021　あやかしとも気づかず、仄かな白い光の点線に導かれ、

ひかり　光り
017　022　月がオデコに光り始めたら
026　025　黄ろいダイヤモンドのやうに光り
030　024　光りは堅い金属のやうに寒々として

040　023　光りは
051　023　虹彩から光りが消えうせ
058　031　光りの痕跡が小さくなってゆくようです
062　046　太陽の光りをあびている
062　059　母なる海と太陽の光りが強すぎます
068　006　海の光りは　美しい
077　025　ゆれる昼夜燈の暗い光りのかげに
085　016　銀メッキの光りをうかべた不敵な男だ
092　017　人々」に光りあれ！
093　018　……どのような光りも
093　029　それは血や光りがかえってゆく水平線のない世界だ
098　024　その光りというものだろう
128　089　どうした最後のひと光り
130　013　砂利が一粒ずつ光りはじめた
146　025　こちらを向いて光りはじめたので
148　043　朝の光りがまぶしい、
158　033　光りのつぶをひろうように
167　045　光りのむきを変えると思ったこともあった

ひかりはじめ　光り始め
017　022　月がオデコに光り始めたら

ひかる　光る
005　002　蝶々は光る河を渡る
010　006　ピカピカ光る自転車は他のピカピカ光る自転車と競走する
010　015　ピカピカ光る自転車に倚りかかってゐる
039　113　波が黒い樹かげに光る
042　013　脱ぎすてた分身が青く光る
069　010　きらりと光るひとつぶの星があった
179　003　よく光るナイフ

ひがん　彼岸
046　054　群青に支へられ　眼を彼岸へ投げながら
057　021　彼岸はいつも死の国のように静かである

ひかんてきな　悲観的な
126　004　と悲観的な賢者が言った

ひきかえし　引返し
146　008　すぐ引返しましたが

ひきかえす　引返す
180　043　引返すか迷路にむかうか

ひきがね　引金
101　024　安全装置をはずした引金は　ぼくひとりのものであり

ひきさいて
069　024　都会の荒れた皮膚をひきさいていった

ひきさかれ　引き裂かれ
116　010　引き裂かれていった日から

ひきさかれて　引裂かれて
106　042　血を流してはならない　その肉を引裂かれても
185　016　愛する者から引裂かれて……

ひきさく
091　007　秋のつめたい空気をひきさく

ひきずって
101　048　ぼくはぼくの心をつなぎとめている鎖をひきずって
110　006　思出のなかにひきずって……
177　022　みずからの影をひきずって

ひきずり下せ
054　067　おお　いまこそ君の虚栄をひきずり下せ！
054　068　ひきずり下せ！

ひきだし　抽斗
037　007　秘密の抽斗がある
039　084　秘密の抽斗をしめ
040　008　とんでくる抽斗などを

ひきつける
103　031　きみが見た大きな虚無はふかくぼくらをひきつける

ひきはなした
072　036　赤帽が白帽をひきはなした
072　048　白帽が赤帽をひきはなした

ひきょうな　卑怯な
154　004　卑怯な足跡

ひき寄せられ
192　005　遠くかすかな潮騒のひびきにさそわれ、海にむかってひき寄せられていくが、

ひき裂かれた
055　033　いつまでもおれたちのひき裂かれた心と

ひき裂く
070　007　みもだえさせ、ずたずたにひき裂く。

ひく
043　002　水のほとりでひくくつぶやく
094　010　飛んでいる蔦や網をひく漁夫の唄で

ひくい　低い
046　019　この滑らかな洞よりも　さらに低い営みがあるだらうか
054　058　大学生は低い声と思いやりのある眼ざしで話しはじめる
077　038　そのうえに低い祈りの声と

ひくく
043　002　水のほとりでひくくつぶやく

ひくく　低く
017　037　樹はだんだん低くなってきた
065　042　高く低く、沈黙の胸をたたいた。
145　026　雲は低く垂れ　グラナダの暗い夜に稲妻が走っていた」
156　020　言葉の純度は低く
188　056　しばらく、沈思し、低く呟く、

ひくめて　低めて
142　036　どれほど声を低めて語っても

ひぐれ　日ぐれ
023　003　音もなく日ぐれがきたといふ

ひぐれ　日暮
102　002　みんな日暮の桟橋に集ってくれ
163　004　夜明けとも日暮ともつかぬ薄明の中で
179　014　その日暮しの一日を

ひげ　髭
028　023　鳩とともにおお救世主の銅像の髭にもついて
045　018　とおい稲妻の明りをたよりに髭をそった
047　018　朧ろに姿を現わすこの髭だらけの死者は誰だろう
088　061　まあお髭がいたいわと
106　026　その貧しさを隠すために　せめて口髭をたくわえておくべきだった

106　027　高名な美学派の詩人みたいに　口髭をのばしたり刈りこんだりして
106　030　尖がった紫の口髭なら　ずっと微妙な震えをもつかもしれない
106　031　詩人なら孤狼な口髭とか　大切な象徴の鼻について
125　001　髭をそらない日はない

ひげきてきな　悲劇的な
185　017　空しく悲劇的な

ひこう　飛行
005　012　新型飛行機がとんでくる
006　016　飛行機がそんなビラを散らしていったが
007　009　た飛行機のプロペラが現れた
062　007　淋しい飛行の夢だけだ

びこう　微光
192　004　夜明け前の微光があたりをくまなく覆っていて、どこへ行こうとしているのか、

びこう　鼻孔
188　015　鼻孔に、時々、薬をささないと、

ひこうき　飛行機
005　012　新型飛行機がとんでくる
006　016　飛行機がそんなビラを散らしていったが
007　009　た飛行機のプロペラが現れた

びこうされて　尾行されて
142　023　たえず監視され　尾行されている

ひごうり　非合理
142　097　非合理に機能する官僚的権威主義を全面的こはびこらせながら

ひざ　膝
039　030　泉のまへに膝まづく
041　055　みんなは黙った　眼を閉ぢ眼を開き　膝をみつめて
088　008　膝にのって話をせがむマリよ
100　007　みんなは黙った　眼をとじ眼をひらき　膝をみつめて……
101　018　膝をだいて眠るような夢をもたず
131　005　手と膝をついて歩くこともあった
145　021　膝の上の猫を大事にしてあげなさいと今日の声は忠告していた
176　008　そっと片膝をおとす
176　009　膝のくぼみにこたえるかのように

ひざし　日ざし

125　015　歩哨はいつも広場の明るい日ざしのなかを

ひざし　陽ざし
088　027　あたたかい南国の陽ざしのように融かしてくれるから

ひざまずいて
113　031　ひざまずいて自己批判し　たりぬときは刑に服した

ひざまづく　膝まづく
039　030　泉のまへに膝まづく

ひさんさ　悲惨さ
150　063　娼婦の悲惨さを、かなりの密度で正確に捉えたというだけで、

ひさんな　悲惨な
057　037　悲惨なぼくの黒い帽子と
142　071　他の人々を悲惨なままに放置して逃避するような

ひじ　肘
046　001　高い欄干に肘をつき

びしゃりと
180　004　いきなりびしゃりと頬を打たれた

ひじゅつ　秘術
151　036　一体一体に入魂の秘術をつくしてきたのだ

ひしょう　飛翔
010　019　パイプは緑の煙を噴き飛翔する
016　012　陸を超えて飛翔する
097　001　一つの生命が、あるいは一羽の鳥の飛翔が、
097　003　あなたは生命も飛翔も見ないだろう。
106　024　詩人としてのかれの　おそろしい飛翔力をあらわしている

びしょう　微笑
039　040　あなたの微笑はほとんど残酷にちかい
046　040　行方の知れぬ風のことばにいつまでも微笑を浮べてゐようとは
052　012　影になったあなたの子供らしい微笑が
055　046　おまえは愚劣な謎をふくんだ微笑を浮べてみせる
062　030　あなたは悪戯な瞳と微笑で逃げてゆけばよい
063　029　ぼくたちは汚れを知らぬ微笑をうかべる
063　030　ぼくたちが生れるずっとまえからそこにあった微笑を！
076　005　さりげないぼくの微笑も

088　024　おまえの微笑は

ひしょうする　飛翔する
010　019　パイプは緑の煙を噴き飛翔する
016　012　陸を超えて飛翔する

びしょうねん　美少年
130　007　美少年に見おぼえはない

ひしょうりょく　飛翔力
106　024　詩人としてのかれの　おそろしい飛翔力をあらわしている

びじん　美人
184　001　すごい金髪美人である彼女は

ひずみ　歪み
033　013　歪みや

ひずんだ　歪んだ
165　037　すこし歪んだわたくしの顔が。

ひそかに
031　014　闇の一滴がひそかに舌から辷り落ちた
039　052　高い木の頂まで攀ぢてみたいとひそかに思ふ
042　002　夜はひそかに　窓のあたりの気配にまぎれ
045　014　主（あるじ）は　ひそかに想ふ
048　016　内部からのひかりをひそかに愛撫している
063　015　あなたはひそかに呟いている
089　007　ぼくはひそかに答えよう
142　034　ひそかに怖れていることを！
187　005　ひそかに欠伸をかみころし
189　016　ひそかに用意されていたのだ

ひそひそと
053　029　ひそひそと話しあっていた声もとだえてしまいました

ひそめて
054　135　眉をひそめて手のなかのカードを隠してしまう

ひたい
117　005　ひたいに手をあてて
119　004　ひたいにかかる空は

ひたい　額
026　026　わたしは額を象嵌せよと願った
036　009　悲しみは額のあたりの翳ではない
046　027　熱い額の　橋上の人よ
054　131　空虚な額縁のなかで白い雨が乾いている
055　051　額縁のなかに嵌めこまれている
056　021　ときに河明りが彼の額を照らしだし
057　024　世界を冷やす月光がぼくの額を照らすのを……
060　019　悲しみにあおざめた額のうえに
061　144　あなたの青銅の額には、濡れた藻の髪が垂れ、
061　164　そして濡れた藻と青銅の額の上に、
106　019　かれの額は　西洋皿の平面のように広く

ひたすら
103　008　ひたすら魂の遺伝を信じた
115　011　ひたすら求め　たずねて行き
153　011　ひたすら切岸をのぼりつめると
158　026　ひたすらなねがいで

ひたすらな
158　026　ひたすらなねがいで

ひたむきな
172　003　ひたむきなものは消滅した

ひだり　左
047　003　左右に拡げる黒い蔭！　二重のドア！
142　006　　左翼　に対する架空の均衡をつくり出すために
145　005　芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右
173　020　右か左か　南か北か

ぴたりと
097　002　ぴたりと静止したらどうなるか？
186　031　過去と現在の空間がぴたりと重なり、その輪郭がずれてぼやけていく

ひつうな　悲痛な
142　027　なんという暗く悲痛なユーモアだろう）

ひっかかって
128　087　アンテナにひっかかっている

ひっかついで
055　013　背負い袋のようにおまえをひっかついで

ひつぎ　柩
179　013　優雅な柩のように

ビッグ・ニューズ
072　055　これは今週のビッグ・ニューズだ

びっくりして
146　026　びっくりしてドアをバタンと閉めましたが

びっくりするほど
159　006　びっくりするほど若くあでやかである

ひづけ　日付
124　006　日付のない暦をめくり

ひづけ　日附
101　011　むかしの愛も　あたらしい日附の憎しみも

ピッコロ
014　016　するとピッコロが不服を唱へた

ひつじ　羊
005　005　羊が雲を食べにくる
026　020　羊歯類が生ひ茂り
062　038　ただひとり群れをはなれた小羊が
106　041　かれは屠所にひかれる小羊であってはならない　たとえその皮を剥がれても
121　007　羊のような雲

ひっしに　必死に
046　008　櫂で虚を打ちながら　必死に進む舳の方位を
051　036　こっちを見凝めている鍵穴を必死に覗きかえす
163　017　必死に輝きをましている

ひっしの　必死の
192　025　必死の思いで、前方の真っ暗闇を凝視するが、もう何も見えぬ。

ひっそりと
146　015　ひっそりとつづいています
177　014　ひっそりと

びったり
064　025　夜と窓とがびったり重なっても、

192　026　叫ぶ、が、声にならない。びったり浪に包囲されて、

ヒットラー
173　035　だがみよ　ヒットラーは死んだんだ

ひっぱって
073　029　三千噸の病める資材をひっぱっていった
101　050　この地平から水平線にむけてひっぱってゆこう

ひっぱる
070　047　窓掛をひっぱるのは空気の手、
071　021　ぼくの頭髪をひっぱることがある

ひっぱれ
054　070　首を吊っている母親の足をひっぱれ！

ひつよう　必要
028　040　すべてが平和であるようにとか云ふ必要もない
054　056　Mよ　僕たちに君の高さが必要なのだろうか？
085　030　絶望も希望も必要でない
101　038　奥地や海洋で　抵抗する住民をうちころす必要はない
103　010　魂にも七ツ道具が必要だ
171　001　他者の犠牲を必要としないしあわせは
192　001　もはや、わたくし、と特定する必要はない。わたくしには、わたくし以外の

ひてい　否定
057　030　ぼくはぼくである一切のものを否定するのだ
073　021　否定の彼方へ
127　019　見たものを否定して生きてきた
189　022　自己を否定するたびに上昇をつづけて

ひていして　否定して
127　019　見たものを否定して生きてきた

ひていする　否定する
057　030　ぼくはぼくである一切のものを否定するのだ
189　022　自己を否定するたびに上昇をつづけて

ひと　人
005　032　人々は仮死の状態であった
006　010　少女が碧い眼をした人形を抱へて出てきたが
007　013　阿片の軽艇（ボート）は霧の中へ青い泡を残して去るべく一人の少女を誘拐
011　009　どうかすると沢山人間が動いてゐる

017 032 怖かったと仏陀の一人が語ったとき
028 013 昔からの葦の巣があり個人が住んでゐるが
028 058 そこに多数の生活が個人によって支持される
028 060 都会の屋根の下よ商店街の商人たち
039 123 眠りを眠っている人たちを
041 002 海よ　そして人気のない墓場がある
041 011 あの人たちはたしかにさうしてゐる
041 013 充分に人目を惹き
041 014 かつはまた　あの人たちを悲しませる黄昏を創った
041 025 海からやって来たといふ　空を飛ぶ藻に乗ってきた人よ
041 048 個人を非難しないわけにはゆかない　神々の名において
041 050 人影にまじって　小刻みに人々に倣ひながら
041 094 あの人たちと同じやうに股いでゆけるだらうか
041 110 あなたには人の背中しか見えぬ
041 126 人々の衣類に附着し
041 148 あなたには人の背中しか見えぬ
043 005 伝へよ　かの人に
043 006 ゆく人よ
046 002 澄みたる空に影をもつ　橋上の人よ
046 009 花火をみてゐる橋上の人よ
046 013 人工に疲れた鳥を
046 016 渇いたこころの橋上の人よ
046 022 夢みる橋上の人よ
046 027 熱い額の　橋上の人よ
046 037 うるんだ瞳の橋上の人よ
046 043 しかし橋上の人よ
046 051 橋上の人よ　美の終局には
046 056 橋上の人よ
048 032 地平線がのせている人間の重たい故郷
049 005 重たい悲しみに塗りこめられた人間の影がある。
050 003 遺言執行人が、ぼんやりと姿を現す。
050 020 その声は人影へ、そして街へ、
051 002 人間の遠い未知の故郷へ
051 030 人間はチューブのようなものであったらよい
052 023 あなたはどうして人生にさよならを告げたのか
053 014 昔の恋人からおくられた銀のロケットを
053 036 わたしのたずねる人影は何処にもありません
054 008 胸に造花の老人たちが
054 051 賢い三人の友に会うのである
054 052 手をあげると　人形のように歩き出し
054 053 手を下すと　人形のように動かなくなる
054 054 彼等が剥製の人間であるかどうか
054 060 第二流の民族　集団　人物は

054	061	単により高尚な国民　結社　人間の材料にすぎないと
054	071	おお　いまこそ偉大な人間と大きな河は
054	074	詩人は不敵な薄笑いをもらし
054	081	人々の笑いと踊りと宴会とのなかに
054	084	すべて記憶に鍵をあずけている人々よ
054	097	人を苦しめる過ぎ去った日々が
054	110	詩人は欠伸をかみころして立上る
054	118	そして詩人と大学生は駅でしばらく別れを惜しむだろう
054	140	もっと荘重に　もっと全人類のために
054	141	すべての人々の面前で語りたかった
055	019	青い海のなかに二人の運命をうかべているはずであった
055	063	おれには掘割のそばに立っている人影が
056	013	聾の老人が世界に向って何か叫んでいるのが
057	020	鳥はいないし　まして人影はない
058	018	私の立派な人生には
058	023	劇場は真黒な人を吐き出します
058	054	一人の若いウェイトレスが
059	026	大人になった幻影の子よ
060	009	ときに一人の男が
061	002	澄みきった空の橋上の人よ、
061	011	橋上の人よ、あなたは
061	045	橋上の人よ
061	050	橋上の人よ
061	055	橋上の人よ
061	056	あなたは冒険をもとめる旅人だった。
061	060	橋上の人よ
061	065	橋上の人よ
061	066	まるで通りがかりの人のように
061	070	橋上の人よ
061	075	橋上の人よ
061	077	溺死人の行列が手足を藻でしばられて、
061	098	溺死人が声もなく天にむかって叫ぶのを……
061	114	いつも個人的なわけがあるのだ
061	122	いつも個人的なわけがあるのだ」
061	143	蒼ざめた橋上の人よ、
061	148	日没の街をゆく人影が、
061	152	孤独な橋上の人よ、
061	160	橋上の人よ、
061	171	空いた椅子がいつまでも帰らぬ人を待っています。
061	201	橋上の人よ、
061	208	橋上の人よ、
061	218	橋上の人よ、
061	229	橋上の人よ。

064 003 ーー今日は今日、と通行人が呟いた、
064 009 人生に別離なんかあるものかと、
064 016 人の運命をどうして占うのだろう。
064 029 ーー明日は明日、と通行人が呟いた、
068 009 今世紀最大の詩人が
069 003 人影まばらなプラットフォームで
071 008 どっと家族づれで出かけてゆく人たちをみかける
071 017 真黒な人ごみのなかで泣きさけんでいた
072 004 十万にのぼる人々が
072 008 やっと柵にとりついた人波の
072 023 血統を信ずるのもいいし、人気に支配されるのも結構だ
072 058 何百万の人々が、もう一度溜息をつくのだ
072 072 千万の人々を容れるに足りるものだ
073 026 毛脛を出したフランス人の水先案内は
074 001 埠頭に人かげはなく
077 022 母や妹や恋人のためにとめどなく涙を流しつづけた
077 032 （ああ人間性よ……
084 019 土人の音楽があります」
085 027 他人の危い綱渡りを見ながら
088 018 それから大人たちの仕事
088 056 気むずかしい人たちに聞かせてあげよう
088 060 どんな恋人たちよりも甘いキスをしよう
088 082 高い梢で一緒に歌っている人たちが
089 001 やさしい人が
089 006 あおざめた河明りを見おろしている人たちといっしょに
089 017 人々があつまっている橋や
089 024 やさしい人は　ふと顔をあげて
089 032 黒い河をのぞきこんでいる人がいます
089 037 停車場へいそぐ通行人の影にまぎれ
090 009 人間が自然に手をつける方法は……
090 016 どんな非人の作品なのか？
090 018 人間の仕事は
091 010 劇場やホテルのロビイに立っている寂しい人影からうまれ
092 017 人々」に光りあれ！
094 013 会ったことのない人たちのことを思いうかべているもの
094 018 きみの人生はきわめてミステリアスに
095 007 どうして人間がすこしも苦しまずに死ねようか？
095 017 明るい無人の電車が
099 005 一人の妹は乳母車につかまって歩き
099 006 もう一人の妹は眠りながら小径を歩いている
099 011 今ではーーー人の妹は三人の子供の
099 012 もう一人の妹は一人の子供の母になった
100 002 人影にまじって　新聞紙のうえをあるいてゆく

100 050 ぼんやりと姿を現すひとりの遺言執行人として……
100 055 はたせなかった約束を　いつまでも悔む人のように
100 062 たくさんの人がプールにつかっていた
102 012 恋をすて故郷をすて他人の国へゆくのだから
103 015 金づかいの荒いアメリカ人とはわけがちがう
104 003 たくましい狩人たちも　恋をあさる猟場から
106 004 これがみんな詩人だといったら　たいてい驚く
106 005 誰一人笑っていないが　ユーモアに欠けているためではない
106 015 バラ色の頬はあせても　不幸な五十七人がそろって
106 017 人生を説明するのに　どうしたって何かが足りないようだ
106 021 かれの指の爪貝は　恋人たちがしゃぶりたがるほど美しい
106 024 詩人としてのかれの　おそろしい飛翔力をあらわしている
106 027 高名な美学派の詩人みたいに　口髭をのばしたり刈りこんだりして
106 031 詩人なら孤狼な口髭とか　大切な象徴の鼻について
106 034 時代におくれ　人におくれたすべてのものをとり戻すために
106 038 詩人はもちろん屈してはならない　その外貌がどうであれ
106 043 詩人の本質は変らない　それは目にみえない奥にあって
107 012 一人の勇士を死なせてから……
108 004 いなくなった人影が
108 014 人はあわただしく自分の影から離れる
108 016 恋人たちがベンチに坐って
108 026 馬上の人も白髪となる
110 008 人はみなちりぢりになる
111 004 憧れにも恐怖にも　母にも恋人にも
113 001 人民万才！
113 019 シベリアの囚人に
113 029 人民の世界を反映した
113 034 行きづまった一人の作家が
113 039 最高に人間的だった同志スターリン
113 045 人民万才！
120 020 人生に遅刻したのも気にしないで
121 001 人間くさい
121 005 心配事は他人にまかせて
122 010 あきらめきった人生の
124 003 三人の男は　いまはトンズラ
124 022 指名手配の一人は
124 025 他の一人は　古典的な社会復帰者として
124 029 残る一人であるぼくは
124 036 無人の巷をさまよう
125 018 われらの人生なんてロクなものではない
125 022 むずかゆい両脚をとじて一人のベッドで静かに眠れ
125 023 地獄のヴィジョンのうえで安眠できる老人は
126 002 侵略的な人類の手のとどくところにあったら

126 014 そんなに遠くまで人間の言葉をとどけにいく
126 020 人間の精神の問題かもしれないから。
127 005 吊られたユダヤ人のように
128 018 人間が住んでねえんだ　昔から
128 065 渇いた人の飲む
128 078 無人の編集室で
129 004 隣人を愛して
129 012 人工の島で
131 003 それからは人に会わない
132 002 隠れんぼの人生
133 003 人間蛾は街の燈火に誘われる
134 014 通行人が哀れっぽく声をかけてきた
135 003 多くの国人と語って同時に
136 022 他人の眠りのなかで
137 011 もう誰も知りたがらない二人の秘密
138 012 いつかはぐれて一人になった
140 016 欄外の人生を生きてきたのだ
142 004 西側の新聞や著名人の多くの声明には
142 005 東側における弾圧や迫害に最も敏感な人たちでさえ
142 020 考えてみる人はほとんどいない……」とあなたは語った
142 033 支配に自信なく　人間の良心を
142 038 殺人的な電流装置で閉された国境をやすやす越え
142 039 言語の障碍　人種の差別を超えて
142 046 悪い夢からさめた人のように首をふるのである
142 054 あとに残るのが　無気力な教養人ばかりだとしたら
142 068 　自分の著作中に登場し　そのために投獄されたすべての人々を
142 071 他の人々を悲惨なままに放置して逃避するような
142 082 彼がおかれている状況は　西側の同時代人のそれより
142 089 災厄を招くことはない　他人の災難に
142 105 巨大なものの力が　個人の信念より永続するという証拠はない
142 108 一個の弱い人間の信念をも挫くことができないとわかれば
142 111 そして　一人の無辜を殺すことが
142 116 信念を持つ人間の精神が世界最強の力には通じないとか
142 120 　これ以上は一歩も進ませないそ　と宣言する不屈な人間の精神のみがー
142 122 個人の平和と　世界の平和と　人類そのものの　真の守護者たりうるのだ」と
143 004 二重行為の詩人は
144 013 浄食の歯ぐきなまなましき落人は
145 013 何かを思い止るようにと一人の男が一匹の犬にとめられていた
145 029 夢の厚着で肥りすぎた詩人には真偽はどちらでもよく　魂はもうとっくに死んでいた
145 034 人もまた倚れていた
146 002 二人でよりそうようにして
146 009 切符売場に人影はなく
146 016 ふと遠くのドアに消えた人の

146 022 金色の聖像におおぜいの人が
146 029 そこでは醜い顔の二人の女が
146 045 振りむくと小柄な中年の外国人が
146 050 と言ってその人はやさしく
146 055 その人の背丈も
147 007 世をも人をも厭いつつ生きていて
148 005 二人の娘を育ててきたと書かれていた。
148 015 一人分の人生を、生きるのは容易な業ではない。
148 031 同じ輸送船でスマトラ島に送られた転属組の十三人だった。
148 036 結局、めいめいの職歴と子供を何人作ったかということにつきていた。
149 001 しぶきをあげる人魚姫の
149 012 内なる人は融けていく
150 005 六人の友達の彼に対する考え方は夫々まるで違ってゐた。
150 006 六人の意見が一致してゐる時は、六人とも彼に騙されてゐる時であった。
150 015 三人称で戯画的に書いているが、
150 017 しかし、友人たちは仲間のだれかれをあてこすっているのだと思いこみ、
150 028 二十人ほどいた仲間のうちで、現在、
150 071 個人にとって、自由は、
151 003 貧乏人の息子で
151 006 現在各種年鑑によれば詩人ということになっている
151 016 背中をこごめて人中を歩く姿といったら
151 019 自分でもそう思い人にもそう思われているのに
151 027 近代人のなれの果て
151 033 記憶にあるものだけで百六十人
151 034 千人斬りとか五千人枕とかにくらべたら
151 040 はじめから一人にしておけばよかったのかもしれない
152 003 一人でタバコをすっていると
152 018 あくまで一人の殺し屋の
155 007 人の死も
155 017 閑人にまかせて
155 031 理想の良人は
156 001 日本人だから
156 017 習慣みたいな西洋人は
158 020 自然にたいして有罪でない人間はいない
160 001 忘れられていく人間の過程が
160 007 恋人と会っては　窓外のすがれた景色に視線をそらして
160 015 二十年も昔に記憶の底に沈んだ詩人が
160 021 つい「詩人」であると真実を告げる
160 022 （公衆の面前では　場違いな人間というのと同じだ）
160 030 「現代最高の詩人T.S.エリオットの作です」
160 037 詩人の気前と品位にとっては　小さな犠牲で
160 039 もう一度一人になるために
160 045 隣人とは愉快に貸し借りせよ

164 011 人の心を盗むあなたの言葉は
164 018 嘘つき！　詩人の資格なし！
166 029 一人の女も知らずに
167 023 袋を着せられたソロフキの囚人みたいに
167 027 もう一人の彼である
167 039 ソロフキの囚人の手は
167 043 一語のための一行が人の心を変え
167 052 人が住んでいるかぎり
167 054 人間のあぶらが
167 057 人くさい息が充満しているうちは
167 059 うなだれた囚人の目尻には
167 066 ソロフキの囚われ人よ
167 068 泣きながらこの世に産れた人の子にとって
168 006 やるせない女人への郷愁があった
169 009 難破する船上の人のように
171 016 人は幸福であり満足だとはいかないものか、
172 004 人気のない街道を
172 024 「人であることをやめ
173 011 外国の人質を殺すか殺さぬかで
173 014 そこでは人間の血がまだ新鮮なのだ
173 029 頭蓋骨を射ちぬかれて死ぬ一人の男
179 009 感じのいい人の
180 033 忘れ難い人のために書いた
180 035 他人の空似で
180 046 その人の背中に向って
181 032 雨合羽の人よ
182 006 いやな老人になるな
183 004 人影がはげしく往きかっている
183 011 家路をいそぐ人も買物に出てきた人も
183 012 人ごみをどうすりぬけたらいいか
183 014 きちんと心得ている働き人と
183 018 若い証券マンが一人で物思いに耽っている
183 023 すこし足の不自由な老人がほほえみかける
183 025 のんびり散歩したりする人はいない
184 001 すごい金髪美人である彼女は
184 002 ドイツ系のアメリカ人で
184 004 フランス系アメリカ人と横須賀で結婚し
184 006 タイ生れの中国人の医者と再婚した
184 007 そして十四人の大工を自ら指揮して
184 012 日本人妻の間にできた子供である
184 019 若い中国人の夫は口癖のように
184 021 人と人は人権や国境を越えて
185 006 あまりにも多くの人に

185　007　慰めを与えた哲人風の音楽家の
185　010　世界中の人たちに嚇みこまれ
185　014　幻想と化することを証した一人の男が
186　018　そのときお会いになった人たちとは？
186　038　ええ　ぼくは詩人ですから
186　045　へんな人ですね、あなたは？
186　055　可哀想な人！
186　060　人の運命
186　062　人のですか？
186　074　（ぼくらの人生だって
188　021　その中に「悲しむ老人」という作品があります。
188　022　頭の禿げかかったひとりの老人が、
188　034　その間、昔の仲間が、三人死んでいる。
188　035　毎年一人ずつの勘定だから、
188　042　人生の下り坂にかかったときからである。
188　043　此頃では、人の顔さえ見れば、誰彼となく病気の話で、
188　051　人はただ歳をとるだけだが、時代は、変ったようである。
189　010　それが仲のよかった友人の
189　027　死人の眼でながめながら
190　011　東洋哲人風の生活が
192　006　それにしても、と影をもたぬ寂寥が、くびをかしげる。人に会わぬ。風はそよとも吹かず、自分の足音さえきこえな
193　019　私一人の人生でも

ひどい
146　060　外はひどいどしゃ降りでした
151　014　かなりひどい近視で乱視の

ひといき
094　021　ぼくの河口はひといきに岸辺やテントや小舟を吐きだそう

ひどうな　非道な
142　119　非道な暴力に抵抗して　自らの犠牲と死の覚悟で第一線に立ち

ひとかげ　人影
041　050　人影にまじって　小刻みに人々に做ひながら
050　020　その声は人影へ、そして街へ、
053　036　わたしのたずねる人影は何処にもありません
055　063　おれには掘割のそばに立っている人影が
057　020　鳥はいないし　まして人影はない
061　148　日没の街をゆく人影が、
069　003　人影まばらなプラットフォームで
091　010　劇場やホテルのロビイに立っている寂しい人影からうまれ
100　002　人影にまじって　新聞紙のうえをあるいてゆく

108　004　いなくなった人影が
146　009　切符売場に人影はなく
183　004　人影がはげしく往きかっている

ひとかたまり
148　045　ぼくたちはひとかたまりになって写真を撮った。
172　028　もうすぐひとかたまりの無機物になるのだから」

ひどく
055　001　ひどく降りはじめた雨のなかを
059　006　波の音がひどく怖ろしく
060　006　なぜか一服の煙草もひどくうまいのである
106　007　いくら厳粛な集まりでも　これはひどく殺風景だ
160　025　哲学的な詩をひどく陰気な声で吟誦する
174　020　会心の笑みをもらすきみを前にして、ひどく口惜しい思いをした。

ひとけ　（にんき）人気
041　002　海よ　そして人気のない墓場がある
072　023　血統を信ずるのもいいし、人気に支配されるのも結構だ
172　004　人気のない街道を

ひとけのない
129　016　ひとけのない屋上プールと

ひとけのない　人気のない
041　002　海よ　そして人気のない墓場がある
172　004　人気のない街道を

ひとこと
180　047　ひとことも喋べらぬことだ

ひとこと　一言
017　035　一言も觸れなかったかも知れない
054　087　「もういい　一言も語るな
103　005　一言も語ろうとしない

ひとごみ　人ごみ
071　017　真黒な人ごみのなかで泣きさけんでいた
183　012　人ごみをどうすりぬけたらいいか

ひとさら　一皿
055　049　あぶらぎった一皿を平げたような顔をする

ひとしきり
122　008　ひとしきり烈しくなった雨音をきく
146　061　屋根を叩く雨音がひとしきり強くなって
167　063　風はひとしきり烈しく吹きつけ
188　076　ひとしきり烈しくなり、深夜の屋根を叩いている。

ひとじち　人質
173　011　外国の人質を殺すか殺さぬかで

ひとすじ　一すじ
020　006　一すじの血が
142　026　わたしやわたしの家族の頭から　髪の毛一すじ落ちやしないとは

ひとすじの
187　012　ひとすじの硝煙のにおいを

ひとたまり　一たまり
012　013　一たまりもなく仮死におち

ひとたるの　一樽の
162　021　そこで一樽のワインとなら

ひとつ　一つ
029　010　一つの海を風景の中に所有した
040　009　たゆみながら一つの扉が支へてゐる
041　090　ドアから出て一つの街角をまがっただけで
045　009　いつか一つの息ながく絶えぬといふ
046　049　あなた自身が小さな一つの部屋であることを
046　050　此処と彼処　それも一つの幻影に過ぎぬことを
053　030　みんな仲よく小鳥のように一つの枝でおやすみなさい
054　122　影は一つの世界に　肉体に変ってゆく
061　112　一つのものを選ぼうとするとき
065　044　乾いた咳を一つした。彼のイメージのなかには
097　001　一つの生命が、あるいは一羽の鳥の飛翔が、
106　047　対岸は霧がふかくて見えないが　残る一つの疑問には
118　008　寝床は一つ
123　011　もう一つの首都を夢みて
128　088　一つ星の大将
130　005　一つはおれだが
130　006　もう一つは誰だろう？
132　009　年々の秋をとざす一つの秋
134　011　一つの場所を占めようとして
141　006　そこも、一つのお部屋だったわ。

142 106 一つの　否！　は　明日には無数の　否！　になるだろう
150 068 今日、我々は一つの都市、
150 069 一つの国さえたちまち喪われるような世界に住んでいるので、
167 046 それから一つの部屋を守り
167 047 一つの部屋のための家屋が傾くまで
170 004 なま欠伸一つ
172 009 まばたき一つで風景が変って
186 056 それなのに、みんなが整列して中央に一つだけ空いている椅子
189 029 塵一つない白い卓布
191 015 海は一つの叫びに変れ

ひとつづつ
014 025 貧血がくるとひとつづつ楽器は床に倒れた
054 044 ひとつづつ小さな灯が点されてゆくとき

ひとつの　一つの
029 010 一つの海を風景の中に所有した
040 009 たゆみながら一つの扉が支へてゐる
041 090 ドアから出て一つの街角をまがっただけで
045 009 いつか一つの息ながく絶えぬといふ
046 049 あなた自身が小さな一つの部屋であることを
046 050 此処と彼処　それも一つの幻影に過ぎぬことを
053 030 みんな仲よく小鳥のように一つの枝でおやすみなさい
054 122 影は一つの世界に　肉体に変ってゆく
061 112 一つのものを選ぼうとするとき
097 001 一つの生命が、あるいは一羽の鳥の飛翔が、
106 047 対岸は霧がふかくて見えないが　残る一つの疑問には
123 011 もう一つの首都を夢みて
132 009 年々の秋をとざす一つの秋
134 011 一つの場所を占めようとして
141 006 そこも、一つのお部屋だったわ。
142 106 一つの　否！　は　明日には無数の　否！　になるだろう
150 068 今日、我々は一つの都市、
150 069 一つの国さえたちまち喪われるような世界に住んでいるので、
167 046 それから一つの部屋を守り
167 047 一つの部屋のための家屋が傾くまで
191 015 海は一つの叫びに変れ

ひとつひとつ
055 008 船室の灯のひとつひとつを
061 216 そのひとつひとつが瞬いて、
061 224 そのひとつひとつが瞬いて、
061 227 そのひとつひとつが瞬いて、

061　228　そのひとつひとつが消えかかる、
070　013　とおい星、ちかい星のひとつひとつにみいっている、
101　061　吐く息のひとつひとつが凍りついても
116　001　吐く息のひとつひとつが

ひとつぶずつ　一粒ずつ
130　013　砂利が一粒ずつ光りはじめた

ひとつぶの
069　010　きらりと光るひとつぶの星があった

ひとつぶの　一粒の
035　022　一粒の実りは
114　004　一粒の種子も残らない
186　073　一粒の蓮の実を永く隠しておくことだよ

ひとつぼし　一つ星
128　088　一つ星の大将

ひとびと
053　005　明るいひとびとの笑顔も
058　001　ひとびとが足をとめている空地には
058　047　ひとびとのうしろに行列をして夕刊を買い
071　032　ひとびとは言う
071　035　山の頂きから谷をのぞくひとびとは
100　003　かたい心をもち　小刻みにひとびとにならいながら

ひとびと　人々
005　032　人々は仮死の状態であった
041　050　人影にまじって　小刻みに人々に倣ひながら
041　126　人々の衣類に附着し
054　081　人々の笑いと踊りと宴会とのなかに
054　084　すべて記憶に鍵をあずけている人々よ
054　141　すべての人々の面前で語りたかった
072　004　十万にのぼる人々が
072　058　何百万の人々が、もう一度溜息をつくのだ
072　072　千万の人々を容れるに足りるものだ
089　017　人々があつまっている橋や
092　017　人々」に光りあれ！
142　068　　自分の著作中に登場し　そのために投獄されたすべての人々を
142　071　他の人々を悲惨なままに放置して逃避するような

ひとひらの

119　006　ひとひらの影をとどめ

ひとびん　一壜
186　080　誰かが寄賭してくれたナポレオンの一壜もいずれ劣らぬ時間の傑作だった

ひとみ　瞳
046　037　うるんだ瞳の橋上の人よ
051　035　出口を求める熱っぽい瞳で
053　001　わたしの大きな瞳には
054　109　大学生のほそい瞳の奥に描かれてしまう
058　055　たまたま可愛いい瞳をしていたからといって
062　030　あなたは悪戯な瞳と微笑で逃げてゆけばよい
062　063　あなたはつぶらな瞳を閉じていますね
082　001　六月は水色の瞳

ひとめ　人目
041　013　充分に人目を惹き

ひとり
038　030　屋根のみを叩いてはひとり淋しがってゐた
040　016　夜ふけてただひとり
052　005　ひとりで牛乳を匙ですくって
052　015　あなたは本当に暗い地下にひとりで住んでいるのですか
054　007　ひとりずつ夜の街から消えていった
054　119　僕はひとり残される
054　134　ひとり占いの賭博者のように
056　001　ひとりぼっちで橋にもたれ
059　005　ひとりぼっちの部屋のなかで
061　177　わたしはひとりです。
062　038　ただひとり群れをはなれた小羊が
062　061　ひとりの妻と住み家畜などを飼ってみたくなったのです
063　016　　（わたしはひとり、わたしはひとり……）
066　006　女の子がひとり涙をおさえて立っていた、
069　005　もうひとりの少女に話していた
072　068　自分ひとりにかえるのは
077　017　ぼくはひとりの兵士の死に立会った
078　002　あらゆる鎖がひとりでにきれ
089　003　たったひとりの椅子にいて
098　014　自分ひとりのものとなる時刻ーー
100　050　ぼんやりと姿を現すひとりの遺言執行人として……
101　013　ぼくははじめから敗れ去っていた兵士のひとりだ
101　015　たいせつにしてきたひとりの兵士だ
101　024　安全装置をはずした引金は　ぼくひとりのものであり

122　007　ひとり椅子にのこされて
133　002　ひとりいることにたえられない
159　002　ひとり頭を垂れていると……
188　022　頭の禿げかかったひとりの老人が、
189　028　これからひとりで食事にかかるところだ

ひとり　一人
007　013　阿片の軽艇（ボート）は霧の中へ青い泡を残して去るべく一人の少女を誘拐
017　032　怖かったと仏陀の一人が語ったとき
058　054　一人の若いウェイトレスが
060　009　ときに一人の男が
099　005　一人の妹は乳母車につかまって歩き
099　006　もう一人の妹は眠りながら小径を歩いている
099　011　今ではーーー人の妹は三人の子供の
099　012　もう一人の妹は一人の子供の母になった
106　005　誰一人笑っていないが　ユーモアに欠けているためではない
107　012　一人の勇士を死なせてから……
113　034　行きづまった一人の作家が
124　022　指名手配の一人は
124　025　他の一人は　古典的な社会復帰者として
124　029　残る一人であるぼくは
125　022　むずかゆい両脚をとじて一人のベッドで静かに眠れ
138　012　いつかはぐれて一人になった
142　111　そして　一人の無辜を殺すことが
145　013　何かを思い止るようにと一人の男が一匹の犬にとめられていた
148　015　一人分の人生を、生きるのは容易な業ではない。
151　040　はじめから一人にしておけばよかったのかもしれない
152　003　一人でタバコをすっていると
152　018　あくまで一人の殺し屋の
160　039　もう一度一人になるために
166　029　一人の女も知らずに
167　027　もう一人の彼である
173　029　頭蓋骨を射ちぬかれて死ぬ一人の男
183　018　若い証券マンが一人で物思いに耽っている
185　014　幻想と化することを証した一人の男が
188　035　毎年一人ずつの勘定だから、
193　019　私一人の人生でも

ひとり　独り
041　098　あなたは独り目覚めてゐた

ひとりずつ
054　007　ひとりずつ夜の街から消えていった

ひとりずつ　一人ずつ
188　035　毎年一人ずつの勘定だから、

ひとりでに
078　002　あらゆる鎖がひとりでにきれ

ひとりの　一人の
007　013　阿片の軽艇（ボート）は霧の中へ青い泡を残して去るべく一人の少女を誘拐
058　054　一人の若いウェイトレスが
060　009　ときに一人の男が
099　005　一人の妹は乳母車につかまって歩き
099　006　もう一人の妹は眠りながら小径を歩いている
099　011　今ではーーー人の妹は三人の子供の
099　012　もう一人の妹は一人の子供の母になった
107　012　一人の勇士を死なせてから……
113　034　行きづまった一人の作家が
125　022　むずかゆい両脚をとじて一人のベッドで静かに眠れ
142　111　そして　一人の無辜を殺すことが
145　013　何かを思い止るようにと一人の男が一匹の犬にとめられていた
152　018　あくまで一人の殺し屋の
166　029　一人の女も知らずに
167　027　もう一人の彼である
173　029　頭蓋骨を射ちぬかれて死ぬ一人の男
185　014　幻想と化することを証した一人の男が
193　019　私一人の人生でも

ひとりぶんの　一人分の
148　015　一人分の人生を、生きるのは容易な業ではない。

ひとりぼっち
056　001　ひとりぼっちで橋にもたれ
059　005　ひとりぼっちの部屋のなかで

ひとりぼっち　孤りぼっち
041　146　孤りぼっちで火を見つめているだらうと

ひと群れ
065　032　ひと群れの鶴にまじって、永遠の刑罰を

ひなんしない　非難しない
041　048　個人を非難しないわけにはゆかない　神々の名において

ひなんちゅうしょう　非難中傷
142　029　また　いかなる非難中傷の壁、妨害の電波がぐるりをとり巻いても

ひにくな　皮肉な
072　024　独断批評家の口ぶりもわるくはないし、皮肉な記者のポーズも捨てがたい

ひにくや　皮肉屋
106　040　かれは自分を罰してはならない　屠殺者や皮肉屋の包囲のなかで

ひねくれる
182　007　世話をする植木までひねくれる

ひねったり
166　015　ますます下手になる詩に頭をひねったりしながら

ひねり
180　008　さらに首をひねりながら

ひのくるま　火の車
151　010　これではいつも火の車だ

ひばしら　火柱
081　013　何千年の闇をつらぬいて真赤な雲の火柱がたち

ヒバリ
010　013　ヒバリが墜落してくる

ひび　日日
021　006　若年の日日に
180　055　ぼくらの日日は過ぎつつあり

ひび　日々
054　097　人を苦しめる過ぎ去った日々が
148　016　愛は身をほそらせ、日々の仕事は疲れをつのらせる。

ひびいて　響いて
021　030　ぼくの耳は響いてゐる
145　014　有りもしない幸福の歌がいつものように響いていた

ひびかせて
091　006　軽いプロペラの翅音をひびかせて

ひびかせる

038　023　この管はなんだが眠いやうな音をひびかせる

ひびき
020　011　皿に落せば貝のひびき
027　019　体温から去ってゆくひびきたち響たち
033　019　あのひびきは何か
053　027　遠くにきこえた電車のひびきや
069　040　終電車のレールのひびきは
120　017　かすかな地ひびきが
189　034　シャンデリアの天井に大きくひびき
192　005　遠くかすかな潮騒のひびきにさそわれ、海にむかってひき寄せられていくが、
193　013　遠ざかる列車のひびきに

ひびき　響
001　008　高い梢の向うの響は
012　021　ガラスの響をたてる楕円形の葉たち
016　010　雲の島からエンジンが響き
018　001　もう響は拭はれて
021　030　ぼくの耳は響いてゐる
022　004　響がきこえる
025　003　黒いトンネルに海の響をきくところ
027　019　体温から去ってゆくひびきたち響たち
028　033　ねぢれた鎖のやうな数輌の列車の合図が響き
051　017　内と外と　高鳴る波の響を聴け！
065　009　沈黙が占めている空間に反響した。
065　036　一千の喇叭がいちどに鳴った。その響きは
145　014　有りもしない幸福の歌がいつものように響いていた
167　005　家鳴り震動の交響がつづく

ひびき　響き
016　010　雲の島からエンジンが響き
028　033　ねぢれた鎖のやうな数輌の列車の合図が響き
065　036　一千の喇叭がいちどに鳴った。その響きは

ひびの　日々の
148　016　愛は身をほそらせ、日々の仕事は疲れをつのらせる。

ひひょうか　批評家
072　024　独断批評家の口ぶりもわるくはないし、皮肉な記者のポーズも捨てがたい

ひびわれた
055　044　ひびわれた卵のなかの
130　002　夜の底がひびわれたとおもったら

ひびわれて
040　004　器物の底もひびわれて

ひふ　皮膚
009　010　褐色の皮膚の下に樹液は涸れてゐる
025　058　欲望に乾いた皮膚を脱いで
026　009　かわらぬ皮膚と
040　026　美しいあなたの皮膚や
042　008　予感のやうに皮膚にとどく
048　007　皮膚だけが燃え
054　090　黄ろい皮膚
067　008　皮膚のしたに
069　024　都会の荒れた皮膚をひきさいていった
074　018　生あるものの皮膚の下を

びふう　微風
005　004　青い帽子の微風が通り
039　017　微風はわたしの肩に触れる
062　060　わたしはこの香ばしい微風のなかに家を建て
074　022　あかるい微風のなかに
091　008　虻よりはやいガソリンの微風に乗ってゆく

ひまつ　飛沫
068　019　空中に軽い死の飛沫をうちあげ

ひまつぶし　暇潰し
041　036　おびただしい暇潰しのなかでうっとりした

ひまわり　向日葵
008　004　もある　向日葵のごとく旗は燃え　荒地に咲きそめた
010　008　青い麦の芽の匂が向日葵のあたりにのこる

ひみつけいさつ　秘密警祭
142　025　秘密警祭の認知　もしくは同意なくして

びみょな　微妙な
106　030　尖がった紫の口髭なら　ずっと微妙な震えをもつかもしれない

ひめい　悲鳴
001　009　地球の悲鳴
146　032　けたたましく悲鳴をあげて叫びました
152　011　無数の星の悲鳴を耳のなかに残すから

ヒヤ
025　031　ヒヤシンスの首を飾る
128　054　ヒヤ　ヒヤ

ひゃくろくじゅうにん　百六十人
151　033　記憶にあるものだけで百六十人

ヒヤシンス
025　031　ヒヤシンスの首を飾る

ひややかな
039　129　ひややかな青い噴水も
050　011　Mよ、昨日のひややかな青空が

ひややかに
047　012　鏡がひややかに自虐を睨む

ヒューマニズム
173　034　押潰されたヒューマニズムの声など役に立たぬ

びょう　錨
025　005　松が老いてゆく錨のうしろに
108　012　錨を沈めている船

びょういん　病院
051　001　病院船はとても重かったり、軽かったりして、
051　004　「この病院船の磁針がきみらを導いてくれる」と船長は言う、
077　029　東支那海の夜を走る病院船の一室で
127　018　死よりも暗い「病院」で

びょうき　病気
113　037　「すこし休暇をとれば　きみの病気もなおるだろう」と
174　004　「病気がこんなにこたえるとは、思ってもいませんでした。春からノイローゼ状態で我ながら呆れかえっていま
182　012　病気も退屈も知らず
188　016　呼吸ができなくなるという、面倒な病気です。
188　028　歳相応の、厄介な病気が、二つか三つ重なったところで、
188　043　此頃では、人の顔さえ見れば、誰彼となく病気の話で、

ひょうしき　標識
192　016　震えている足許に眼をおとすと、白い四角の標識に、明りが仄かにともっていて、
192　018　の誘導標識にちがいない。
192　023　七十米と行かぬうちに、白い明りの標識は消え、そこから先は真っ暗である。

ひょうじょう　表情
029　014　今はただ表情もなく振返るわたしに
041　071　あなたは壁を眺めて怖れの表情を隠さうとしてゐますね
046　021　水の表情は動かうともすまい
061　069　あなたの眼となり、あなたの表情となる「現在」に。

びょうしょう　病床
175　012　病床のきみの耳にも聞えているに違いない

ひょうはく　漂泊
061　063　風に吹かれ、浪にうたれる漂泊の旅から、

ひょうばんの　評判の
072　003　いま評判のサラブレッド四歳馬を見ようとして

びょうま　病魔
188　040　何かの縁で、とりついてきた病魔と、昵懇になり、

ひょうめん　表面
048　028　すると地球の表面に都市ができる
150　013　彼の表面は常に波立ってゐるが、彼の底は何時も静かで、

ひょっとすると
166　031　ひょっとすると
186　034　ひょっとすると廿六年前の卅四歳のぼくが、いまのぼくを見ていたかも……

ひょろりと
128　004　活字のわれ目から　ひょろりとのびた

ビラ
006　016　飛行機がそんなビラを散らしていったが
028　071　宣伝ビラの形式を案出するのであらうか
145　015　古い広告ビラの汚れた壁の傍で

ひらかれて　開かれて
029　009　窓は開かれて北方に青く
176　005　開かれている窓辺の

ひらかれる　開かれる
005　001　岸辺では演奏会が開かれる

ひらき

025　016　太古からの根をひらき花々は
061　097　厚くまくれた歯のない唇をひらき
066　038　すると不意に、一枚の戸が音もなくひらき
100　007　みんなは黙った　眼をとじ眼をひらき　膝をみつめて……

ひらけ
010　022　　あかつき　がひらけはじめる
048　019　しずかに窓をひらけば
187　009　曠野がひらけ

ひらける　開ける
003　013　窓を開けると雪が踊ってゐる

ひらたい　平たい
054　092　その平たい背中には背骨がないということを……

ヒラヒラ
014　030　楽譜はヒラヒラ羽を生やして

ひらひら
128　062　やつはてのひらをひらひらさせて

ビル
056　012　とおいビルの屋上で
058　008　ビルの四階には午後三時から灯がともり
089　016　暮れてゆくビルの窓や
091　015　きみの欲望は夕陽を浴びてビルディングの林に落ちてゆく
100　063　高いビルディングは動かぬ影をつくり
128　034　ビル街の闇を
128　063　千代田ビルの角で消えたが
146　003　明るい観光ビルのなかに入っていきました
146　011　ビルのなかは迷路になっていて

ビルディング
091　015　きみの欲望は夕陽を浴びてビルディングの林に落ちてゆく
100　063　高いビルディングは動かぬ影をつくり

ヒルネ
009　012　アスパラガスはヒルネをするが

ひるね　昼寝
120　021　太陽は昼寝だ

ビル街
128　034　ビル街の闇を

ひれつさ　卑劣さ
142　072　卑劣さを代償とした自由を受け入れようとはしないで

ひれん　悲恋
153　010　悲恋にとどめを刺し

ひろい
017　001　ひろい沙漠にはのどかな樹が
042　017　ひろい頬ゑみをうかべてあなたはたつ
049　012　私たちの間には　ひろい荒涼たる眺めが、
060　003　ひろい眺めのところどころで
072　063　ひろい出口から流れだす
101　032　ひろい曠野にむかう魂が

ひろい　広い
005　015　ヴェニュスの胸は穹より広いヴェニュスの胸は穹より広い
041　029　そしてあなたは広い眺めの外へはみ出てゐる
061　178　妻も子もなく、この広い都会の片隅で、

ひろう
158　033　光りのつぶをひろうように

ひろがっている
072　066　暮れるにおそい五月の空の下にひろがっている
100　070　精力的な夏は未来の街の方向にひろがっているようにみえた
117　004　どこまでもひろがっている
167　011　明るい青空が海のようにひろがっている

ひろがってゐる
032　015　とほく海がひろがってゐるかもしれない

ひろがり
030　003　そこにある闇のひろがり
063　022　広大な淋しさのひろがりに

ひろがる
007　001　ジャンクの帆が蝙蝠のごとく羽博いて　ランプの虹がひろがる

ひろく　広く
106　019　かれの額は　西洋皿の平面のように広く

ひろげる　拡げる
047　003　左右に拡げる黒い蔭！　二重のドア！

ひろさ　広さ
039　003　さんざめく市場の広さもない
145　009　そこにもあったトーモロコシの毛のそよぐ丘陵をエンジェルがうまれるのに充分な広さ

ヒロシ
184　010　四歳になったばかりの養子の名はヒロシ
184　015　「ヒロシ」という日本名の

ひろしま　広島
186　015　以前に広島に行ったことがあるとか？
186　027　廿六年前に広島で撮った写真を、懇親会の席上で相良君から見せられてね

ひろば　広場
058　038　よく政府の悪口を言っていた広場には
085　014　広場の群集を二つに切断しても
125　015　歩哨はいつも広場の明るい日ざしのなかを
134　013　広場に立って眼をこすっていると
177　010　きみはさびしい広場にいた

ピン
015　005　錆びたピンで留められ
054　154　ネクタイピンでこじあけられた窓の向うがわ

ひんい　品位
160　037　詩人の気前と品位にとっては　小さな犠牲で

びんかん　敏感
106　029　むやみに明るい星空があり　意味なく敏感な宇宙があり
142　005　東側における弾圧や迫害に最も敏感な人たちでさえ

びんかんな　敏感な
106　029　むやみに明るい星空があり　意味なく敏感な宇宙があり
142　005　東側における弾圧や迫害に最も敏感な人たちでさえ

ひんけつ　貧血
014　025　貧血がくるとひとつづつ楽器は床に倒れた

ひんしする　頓死する
173　043　まもなく頓死するだろう

ひんじゃくな　貧弱な
041　120　貧弱な幹に大きな葉をつけてゐた樹木

びんぼうにん　貧乏人
151　003　貧乏人の息子で

ひんやり
128　029　ひんやり夜風が吹きぬける

ビール
098　008　「ビールが冷たくて、とてもおいしいよ

ふ　腑
014　011　うすい陽の光が胃の腑へさしこんでくる
041　086　いつもあなたの臓腑をつつくとき
154　001　腑ぬけになってたどりつく

ファウスト
113　026　ファウストも存在しなかった

ふあん　不安
041　047　母の胸をどんなに不安にしてしまったか
061　005　重たい不安と倦怠と
100　012　不安は胸にたかまり
186　050　自分が自分であることの不安

ファン・ゴッホ
188　020　ファン・ゴッホ展があった時の画帳が、手もとにあって、

ブイ
075　001　淋しいブイは
075　005　あのブイをとり去ることはできない
075　010　いつまでもブイが浮んでいるけれど
075　016　淋しいブイよ
103　011　帆柱や舵や海図や羅針や救命ブイや銛や……

フイジカルな
106　023　そこに集中し隆起して　あるフイジカルな高貴さの象徴となり

ふいて　吹いて
032　002　風はもう吹いてこなかった
046　053　風は吹いてもこなかった

066　013　つめたい風が吹いていった。
083　013　また冷たい風が吹いてきて
113　010　一直線に吹いていた
123　005　今日は北風が吹いているが
138　002　なまぐさい風が吹いてくると

ふいていた　噴いてゐた
026　007　水晶体はいつでも煙を噴いてゐた

ふいに　不意に
066　038　すると不意に、一枚の戸が音もなくひらき
176　011　不意に起ちあがる
185　015　不意に世界から消えた

フィルム
100　009　記憶のくらやみにとけるフィルムのように
100　044　切れたフィルムの記憶のそこから

ふうあつ　風圧
150　060　時代の風圧を避けるのにせい一ぱいで、

ふうけい　風景
029　010　一つの海を風景の中に所有した
055　050　窓の風景は
056　003　そして彼の背中のように淋しい風景がそこにある
056　022　風景はいっそう青ざめてくるのみである
057　032　レッテルでもなければ　絵皿の風景でもない
061　072　あなたは破壊された風景のなかに帰ってきた。
089　033　（そこには　みなれた風景と
106　007　いくら厳粛な集まりでも　これはひどく殺風景だ
120　010　風景はふくらむ
155　003　いま見ている風景は
155　004　昨日の風景である
158　025　美しい風景になりたいという
172　009　まばたき一つで風景が変って
187　006　そこまでは静止した風景だった
190　002　自然の風景の始めであり終りである
193　018　同じ風景は二度と現れない

ふうど　風土
103　019　風土とか習慣によって去勢されない

ふうとう　封筒

050　008　手紙の封筒を裏返すようなことがあった。

プウプウ言語
128　046　バウワウ言語　デインドン言語　プウプウ言語

プウル
021　003　K氏の公園のプウルに近く
021　012　麦藁帽子ほどのプウルをまはり

ふえ　笛
005　014　木笛を吹けよ
010　002　それは口笛のためのスピイドであった
013　011　草むらで笛のやうに鳴ったのは
039　119　また笛の音を喚び
049　007　鋭い笛のようなものが胸の底でめざめる、
049　009　（すぐれた笛の音とすぐれた涙を…）
147　020　口笛を吹きながらするシャドー・ボクシングが死のレッスン。

フェア・プレー
072　060　われわれの生存競争もすべてフェア・プレーだったらいいのにと

フォーク
055　047　おれは憎悪のフォークを突き刺し
189　035　銀のフォークが石の床に落ちる
189　038　指先がフォークになかなか届こうとしない
189　039　たしかに見覚えのあるフォークが

ふかい　深い
021　017　海より深い空を燃やし
039　110　死の谷間が深いやうに
061　162　迷いはいかに深いとしても、
061　186　貴方の深い慈悲と知慧とを理解できません。
062　011　そして闇はあくまで深いから
062　026　そして闇はあくまで深いから
065　013　終りがあるのだろうか？　影深い谷が
071　033　たとえば深い谷底からは
079　007　もっとも深い海
083　021　いちばん深い青空よ
097　009　毛深いじゅうたんの暗号のなかで、
102　014　毛深い夢の絨毯に戻ってきてくれ
113　048　（深い沈黙）
144　005　うらみの色は深い
164　024　……共通の穴である深い井戸にむかって

177　008　いずれにせよ深い霧だった
179　029　明日には深い霧の底に沈み
183　027　誰でもほっと深い息を吐く

ふかく
048　033　揺れて海へ傾く　深くふかく
054　086　独身者はふかく自ら頷きながら
100　024　沈黙の奥ふかく追放された
101　045　四月の雨をまつ土にふかく射ちこまれている
103　031　きみが見た大きな虚無はふかくぼくらをひきつける
106　046　おそらくその果は　「未来」とふかく交っているのだろう
106　047　対岸は霧がふかくて見えないが　残る一つの疑問には

ふかくじつな　不確実な
124　014　不確実なニュースのかわりに
162　020　きわめて不確実なことだけである

ふかくて
106　047　対岸は霧がふかくて見えないが　残る一つの疑問には

ふかくていせい　不確定性
160　076　制度の春を病むこともなく　不確定性の時代を生きて

ふかし
021　001　ハッカを咥へて澄んだ煙をふかしてゐた
058　016　私はゆっくり煙草をふかしながら
066　017　息子は煙草をふかしながら

ふかし　吹かし
073　027　悠然とパイプを吹かしながら

ふかして
021　001　ハッカを咥へて澄んだ煙をふかしてゐた

ふかして　孵化して
018　006　花を孵化して

ふかす
093　008　寝床でウィスキーを飲み煙草をふかす

ふかない
031　019　けれど今になっても芽をふかない

ふかのう　不可能
054　032　そこにはどんな可能が　不可能が」

ふかぶかと
187　025　ふかぶかと頭をさげた

ふかみ　深み
038　026　深みはそのために呻くまで
083　019　より高い青空の深みへ落ちてゆく

ふかめる　深める
090　025　気味わるい沈黙を深めるために……

ふかれ　吹かれ
005　016　吹かれてゐる赤い煙突は
058　039　サーカスの看板がこがらしに吹かれています
061　063　風に吹かれ、浪にうたれる漂泊の旅から、
108　025　風に吹かれて
143　009　寒風に吹かれるみじめさを思い

ふかれた
113　028　きれいにふかれた鏡のように

ふかれた　葺かれた
043　001　石で葺かれた屋根をでて

ふかれて　吹かれて
005　016　吹かれてゐる赤い煙突は
058　039　サーカスの看板がこがらしに吹かれています
108　025　風に吹かれて

ふかれている　吹かれてゐる
005　016　吹かれてゐる赤い煙突は

ふかんしょう　不感症
150　070　いささか不感症気味であるが、

ふき　吹き
027　011　そちらの方から寒さが吹きつけてくる
039　126　風が吹き
041　101　眠れる世界に息を吹きこむ
043　004　そのしめった風は吹きぬける
042　009　すさまじい寒さが吹きつけてくる

049　008　落葉に吹きまくられてゆく地平線に
089　038　吹きつのる北風に足を早めます
119　010　寒風に吹きさらされる
128　029　ひんやり夜風が吹きぬける
139　003　吹きさらしの露の寝ざめの空耳か
147　020　口笛を吹きながらするシャドー・ボクシングが死のレッスン。
167　019　風が新鮮な活力を吹きこむので
167　063　風はひとしきり烈しく吹きつけ

ぶき　武器
028　031　すべての阿鼻が犇く武器であり
028　036　暗闇の市場へと運ばれてゆく武器たち

ふき　噴き
010　019　パイプは緑の煙を噴き飛翔する
012　016　いきなり水が噴き出した
024　003　る　血液を噴き上げている白い管は輝やける噴水の愛撫をう
025　002　星の光をめざして噴き上り
028　008　受話器から突然噴き溌れたりする
039　007　噴きこぼれては
061　081　無数の小さな抱沫が噴きだしているのを……

ふきあがり　噴き上り
025　002　星の光をめざして噴き上り

ふきあげている　噴き上げている
024　003　る　血液を噴き上げている白い管は輝やける噴水の愛撫をう

ふきげんな　不機嫌な
041　006　夢を見なさい　不機嫌な一瞬には

ふきこぼれて　噴きこぼれて
039　007　噴きこぼれては

ふきこむ　吹きこむ
041　101　眠れる世界に息を吹きこむ
167　019　風が新鮮な活力を吹きこむので

ふきさらしの　吹きさらしの
139　003　吹きさらしの露の寝ざめの空耳か

ふきだした　噴き出した
012　016　いきなり水が噴き出した

ふきだして　噴きだして
061　081　無数の小さな抱沫が噴きだしているのを……

ふきつけ　吹きつけ
027　011　そちらの方から寒さが吹きつけてくる
042　009　すさまじい寒さが吹きつけてくる
167　063　風はひとしきり烈しく吹きつけ

ふきつけて　吹きつけて
027　011　そちらの方から寒さが吹きつけてくる
042　009　すさまじい寒さが吹きつけてくる

ふきつけてくる　吹きつけてくる
027　011　そちらの方から寒さが吹きつけてくる
042　009　すさまじい寒さが吹きつけてくる

ふきつな　不吉な
051　016　下降　そして不吉な上昇カーブ
076　004　不吉なやさしさをこめて
076　014　不吉なやさしさのなかで
106　036　不吉な羽ばたきをして　地面を歩く黒い鳥の男たちもいる

ふきつのる　吹きつのる
089　038　吹きつのる北風に足を早めます

ブキテマ
112　008　ジョホールの血の海峡　ブキテマの焦げた丘

ふきぬける　吹きぬける
043　004　そのしめった風は吹きぬける
128　029　ひんやり夜風が吹きぬける

ふきまくられてゆく　吹きまくられてゆく
049　008　落葉に吹きまくられてゆく地平線に

ぶきみな　不気味な
047　008　頭上で屋根を剥ぐ不気味な爪の音……
065　041　その不気味な、悩ましい笑いは

ふきょう　不況
183　009　不況が心にのしかかっているからだ

ふきよせる
101　041　白くさらした骨をふきよせる夕べに

ふく
027　007　一本の毛髪もふくめて
054　012　あらしは冷気をふくんでいた
055　046　おまえは愚劣な謎をふくんだ微笑を浮べてみせる
079　016　苦い塩を口にふくみ
084　030　木枯のふく町に
105　002　ぼくらの大地は黒くふくらむ、
120　010　風景はふくらむ
137　002　ふくらはぎからのどに昇ってくる

ふく　吹く
011　005　春の風が吹くと
036　004　透明な耳のあたりを吹く
046　039　黒い水のうへを吹く
086　001　つめたい鏡のうえを吹く
087　023　明日は　おそらく北風が吹く
143　024　吹く泡や
152　006　かるく水につけて上から吹く

ふくした　服した
113　031　ひざまずいて自己批判し　たりぬときは刑に服した

ふくそう　服装
011　013　立派なきみらの服装であるが

ふくつな　不屈な
142　120　これ以上は一歩も進ませないそ　と宣言する不屈な人間の精神のみがー

ふくむ　含む
022　009　そして毒を含むだ花々は
186　082　死を含む共同体であるみんなの声に耳を傾けていると

ふくめて
027　007　一本の毛髪もふくめて

ふくようする　服用する
148　037　みな年相応に老けて、持薬を服用する者もあり、

ふくらはぎ
137　002　ふくらはぎからのどに昇ってくる

ふくらまず　膨まず
029　006　それら肉体の輪廓にそって膨まず

ふくらませる　膨らませる
009　004　ポケットを膨らませる少年は

ふくらむ
105　002　ぼくらの大地は黒くふくらむ、
120　010　風景はふくらむ

ふくろ　袋
018　007　手袋を脱ぎ
025　042　菫色の手袋は
027　004　手袋をはめた右手のみが動き
041　033　優しい眼鏡や柔かい手袋の明日の方まで湿してゐる
054　029　Mよ　都会の胃袋をさまよいながら君が呟いていたことを……
055　013　背負い袋のようにおまえをひっかついで
124　009　他方がそれを買う（ゴムの手袋をはめて）
167　023　袋を着せられたソロフキの囚人みたいに
183　021　大きな買物袋をさげた母親のあとから

ふくんだ
055　046　おまえは愚劣な謎をふくんだ微笑を浮べてみせる

ふくんでいた
054　012　あらしは冷気をふくんでいた

ふけ　吹け
005　014　木笛を吹けよ
071　040　風よ吹け　われらの罪の消えぬうちに！

ふけこんだ　老けこんだ
186　028　いっぺんに老けこんだ気分でしょう？

ふけっている　耽っている
183　018　若い証券マンが一人で物思いに耽っている

ふけつな　不潔な
054　117　不潔な女のベッドの方へ進んでゆくだろう

ふけて
040　016　夜ふけてただひとり

ふけて　老けて
148　037　みな年相応に老けて、持薬を服用する者もあり、

ふこう　不幸
022　008　不幸の外に流れ出さない
023　007　不幸に支へられた白い肉体は
056　016　じぶんの不幸を悲しんでいるわけではない
073　018　不幸な兵士は空をあおぎ
075　003　不幸な兵士に別れを告げる
075　011　この不幸な兵士は
097　008　不幸であるという意識を持たなかったら、
099　010　ぼくの記憶は思いがけない不幸のシークェンスで翳ってくる
106　015　バラ色の頬はあせても　不幸な五十七人がそろって
112　029　眼や耳や手足をなくした不幸な犠牲者に何をしてやったか
171　019　いつまでも不幸のままで

ふこうな　不幸な
073　018　不幸な兵士は空をあおぎ
075　003　不幸な兵士に別れを告げる
075　011　この不幸な兵士は
106　015　バラ色の頬はあせても　不幸な五十七人がそろって
112　029　眼や耳や手足をなくした不幸な犠牲者に何をしてやったか

ブコフスキー
142　062　その著書をフランスで刊行した一九四二年生れのブコフスキーは
142　067　ブコフスキーが出した回答は
142　080　ところが　ブコフスキーは信念のほうが
142　101　ブコフスキーやアマルリクが直面した状況にくらべたら

ふざい　不在
132　001　不在を予約して生きた

ふさぎこみ
142　045　ぼくたちは世界の片隅でふさぎこみ

ふさふさした
176　031　少女はふさふさした垂れ髪で

ふさわしい
100　059　それは　ぼくの希望の「おわり」にふさわしい多彩な夏であった

ふしぎ　不思議

025　　054　　不思議な糸車は
028　　007　　二十分も早いことに不思議はない
053　　058　　不思議な夢がしだいに近よつてくるようです
059　　021　　海岸への道が不思議と宙にうかんでくる
077　　009　　不思議な報酬があるかぎりはーー)
185　　021　　何が起っても不思議ではない、と

ふしぎな　不思議な
025　　054　　不思議な糸車は
053　　058　　不思議な夢がしだいに近よつてくるようです
077　　009　　不思議な報酬があるかぎりはーー)

ふじさん　富士山
079　　008　　富士山を三ツ沈めても

ぶじに　無事に
106　　016　　無事に生きのびてきた　この下手な構図は

ふじのやまい　不治の病い
167　　075　　万巻の書は不治の病いとなり

ふしぶし　節々
167　　020　　節々をならして身ぶるいしている

ふしまわし　節廻し
088　　078　　よく舌のまわらぬおまえの節廻しにあわせて

ふしめ　伏目
142　　047　　それから　肩をおとして伏目になるか　面をそむけて窓の外を見るか

ふじゆうな　不自由な
183　　023　　すこし足の不自由な老人がほほえみかける

ぶじょく　侮辱
186　　047　　理解されないと思うのは傲慢、相手に対する侮辱です！

ふしょくしてゆく　腐蝕してゆく
039　　062　　柱も扉も腐蝕してゆく

ふしん　不信
145　　002　　不信の者の天国に対して
145　　008　　レスビアンの女たちの痙攣は不信者の地獄の笑いの一型態で　ブリッジして反った肉体の

ふしんしゃ　不信者
145　008　レスビアンの女たちの痙攣は不信者の地獄の笑いの一型態で　ブリッジして反った肉体の

ふせいだ　防いだ
041　111　物質で身を固め　破れたシャツで冷気を防いだ

ふせぐ　防ぐ
061　217　死者の侵入を防ぐのだ。

ふせげる　防げる
142　103　少しの犠牲で将来の破滅を防げるかもしれない）

ふせごう　防がう
031　021　破壊の力を防がうとするぞ噛ふがいい

ふせた
024　001　ふせた耳の上でふと風が鳴る　くずおれた月光の雫に溺れ

ぶたいうら　舞台裏
054　076　幕がおりた舞台裏から……
140　010　舞台裏で物思いに沈むあわれな役者

ふたたび　再び
023　011　再び実体のない建築の翳は
041　037　青春よ　もう再び戻ってきてはいけない
077　034　再び生きかえることはないだろう）
108　018　再び荒れてくる海を見つめている

ふたつ　二つ
014　014　二つの楽器が揃って火を呼び始めてね
055　056　西と東の二つの大戦のあいだに生れて
062　037　二つの亡霊になってしまおう
085　014　広場の群集を二つに切断しても
130　004　男の首が二つ
134　012　ついさっきまで二つの力が争っていた
188　028　歳相応の、厄介な病気が、二つか三つ重なったところで、

ふたつとない
154　003　ふたつとない旅の終りの

ふたつの　二つの
014　014　二つの楽器が揃って火を呼び始めてね
055　056　西と東の二つの大戦のあいだに生れて

062　037　二つの亡霊になってしまおう
134　012　ついさっきまで二つの力が争っていた

ふたりの
069　039　ふたりの少女は翼の影をよせあった
088　065　ふたりの運命を

ふたりの　二人の
055　019　青い海のなかに二人の運命をうかべているはずであった
137　011　もう誰も知りたがらない二人の秘密
146　029　そこでは醜い顔の二人の女が
148　005　二人の娘を育ててきたと書かれていた。

ふたん　負担
113　032　罪の負担を軽くしようと
161　024　負担を軽くする余地が
185　024　その空白がどれだけの負担になるかは

ふだんに　不断に
025　053　不断に闘ってゐるときに

ぶちこわし
106　025　だがいけないのは口である　ぶちこわしである

ふちどり
061　130　渚をふちどり　虚無を涵し

ふちとり　縁とり
077　002　金の縁とりをした本のなかで
077　037　金の縁とりをした本のなかに閉じこめられて

ふちゅういに　不注意に
041　150　街の雑音はあなたの耳を不注意にした

ふつうの　普通の
142　063　各所の精神病棟監獄　普通の監獄・収容所で

ふっかつ　復活
077　003　神の復活に出会うよりもたやすい

ふつかぶん　二日間
160　058　遺体は屍体置場に二日間放置されたままであった

ぶっしつ　物質
028　026　物質の秩序と形態にそって
028　062　花花しく棲息する物質の群れが
028　070　花花しい物質たちの流れ乱舞の外から
031　020　すべての物質たちは堅い殻につつまれて
041　111　物質で身を固め　破れたシャツで冷気を防いだ
168　015　この世を経めぐるいのちの物質よ

ぶっしょう　物象
164　019　ぼくらは闇の物象の

ぶっしょくして　物色して
166　022　ごった返す店内を物色して歩きながら

ふった　降った
014　024　樹の海に青いぎんの雨が降ったよ

ぶっだ　仏陀
017　005　丸いアタマの仏陀たちが
017　021　仏陀たちの鼻は赤くなる
017　032　怖かったと仏陀の一人が語ったとき
017　042　アタマのすべっこい仏陀が叫び

ふって
003　005　海に向って帽子をふって
062　039　清い空気のなかで乳の瓶をふっているのを
084　008　雨がふってる窓のそとに
084　036　いつまでも雨がふってる路地をゆけば
087　008　聞きわけのない耳でかぶりをふって
087　018　聞きわけのない耳でかぶりをふって

ふって　振って
167　026　強風のなかでクラブを振っているのは
167　079　黙って風に手を振って

ふっている
062　039　清い空気のなかで乳の瓶をふっているのを

ふってきます　降ってきます
053　003　暗い空の枯れた林から落葉がすきまなく降ってきます

ふってる
084　008　雨がふってる窓のそとに

084　036　いつまでも雨がふってる路地をゆけば

ふつりあい　不均合い
185　020　どうせ、不均合いで混乱した世界だから

ふてきな　不敵な
054　074　詩人は不敵な薄笑いをもらし
085　016　銀メッキの光りをうかべた不敵な男だ

ふと
017　010　歯でゲラゲラ笑ふと
023　005　青い葉が溶かしてしまふと
024　001　ふせた耳の上でふと風が鳴る　くずおれた月光の雫に溺れ
031　011　ふとなにげなく途絶えたところから
036　022　一枚の布をうかべて憩ふとき
039　109　誰が道に迷ふといふのか
045　005　主（あるじ）は　ふと雨の顔になり
063　028　ふと血の気のうせた顔を見あわせて
071　019　きみはふと立ちどまることがある
076　002　ふときみの肩にかけられたのか
089　024　やさしい人は　ふと顔をあげて
111　006　夕焼空にふと途切れている
127　002　ふと歩みを止め
146　016　ふと遠くのドアに消えた人の
148　026　そして、ふと顔をあげたとき、
181　017　ふと「もうゴルフはやめよう」と

ふとい　太い
028　044　数本の太い樫の木がゆれる樫の葉のざわめき

ふとう　埠頭
055　028　折れた埠頭のさきは
074　001　埠頭に人かげはなく

ぶどう　葡萄
011　003　葡萄棚には葡萄の木がない
012　002　葡萄の葉をとはしてしまった
028　014　あらゆるタイプという葡萄の木の影は
028　059　葡萄の木の影のごときタイプが無数繁茂する
039　117　葡萄の汁は
039　124　かれらの葡萄色の頬を打て
051　018　なまぐさい葡萄酒を口から喀き、

ぶどういろ　葡萄色
039　124　かれらの葡萄色の頬を打て

ふどうさん　不動産
151　007　不動産なし

ぶどうしゅ　葡萄酒
051　018　なまぐさい葡萄酒を口から喀き、

ぶどうだな　葡萄棚
011　003　葡萄棚には葡萄の木がない

ふとりすぎた　肥りすぎた
145　029　夢の厚着で肥りすぎた詩人には真偽はどちらでもよく　魂はもうとっくに死んでいた

ふとん　蒲団
148　039　十時をすぎると蒲団が敷かれた。

ふなつきば　船着場
061　027　さあゆこう、船着場へ－－
061　035　さあゆきましょう、船着場へ……
061　043　行ってみようか、船着場へ－－

ブヌウマチック
021　014　青いブヌウマチックのように

ふぬけ　腑ぬけ
154　001　腑ぬけになってたどりつく

ふね　船
004　007　僕は新らしい贅沢な船の設計について
025　007　それらが船舶の歴史の中にあった時代には
026　014　壊れた船体のやうに
048　039　難破船はどこにある
051　001　病院船はとても重かったり、軽かったりして、
051　004　「この病院船の磁針がきみらを導いてくれる」と船長は言う、
054　023　艀船がじっと水のうえで考えごとをしていたっけ
055　008　船室の灯のひとつひとつを
055　018　疾走する鋼鉄の船が
061　027　さあゆこう、船着場へ－－
061　035　さあゆきましょう、船着場へ……
061　043　行ってみようか、船着場へ－－
073　004　一隻の油槽船が

073　012　その下におびただしい輸送船が沈んでいた
073　023　遅い希望の船脚であろうか
074　002　ぼくらの船を迎えるものはなかった
074　013　三色旗をつけた巨船のうえにあるものは
077　029　東支那海の夜を走る病院船の一室で
078　003　あらゆる船が港から出てゆきそうな
078　020　救命具をつけた船のへさきは
079　001　船はいつか
079　013　ぼくらの船は
081　005　ぼくらの船は
081　017　夜あけのくる船窓の下の
108　012　錨を沈めている船
122　006　船が静かにとおざかっていく
148　031　同じ輸送船でスマトラ島に送られた転属組の十三人だった。
169　009　難破する船上の人のように

ふはいして　腐敗して
058　014　無意味な時代がしずかに腐敗しています

ふび　不備
160　033　印刷の不備でくじに外れた老楽師に　大当りの賞金を全部やってしまう

ふびょうどうな　不平等な
142　096　極度に不平等な特殊社会組織の

ふふく　不服
014　016　するとピッコロが不服を唱へた

ぶぶん　部分
124　028　（短評：空間はどの部分も遅れている？）

ふへい　不平
050　024　憤激も、悲哀も、不平の柔弱な椅子もなかった。
142　096　極度に不平等な特殊社会組織の

ふまん　不満
014　017　パイプオルガンも大変不満らしい

ふみ　踏み
028　034　地下に住んでゐる声を踏みしめ
035　004　花を踏み
039　090　床を踏みにじる音によって
085　018　奇怪な造語で喋る連中の頭を踏みつけよう

ふみこんで
142　088　いじけた打算がある　わざわざ危険な対立に足をふみこんで

ふみしめ
080　007　くずれる砂の甲板をふみしめ

ふみしめ　踏みしめ
028　034　地下に住んでゐる声を踏みしめ

ふみつけ　踏みつけ
085　018　奇怪な造語で喋る連中の頭を踏みつけよう

ふみにじる　踏みにじる
039　090　床を踏みにじる音によって

ふもう　不毛
025　049　不毛の地図には

ふゆ　冬
011　006　落葉が散って　冬が残ってゐる
011　015　　マダ冬ガ残ッテヰル
041　145　またぢきに　嵐と雪で家々を覆ふ冬が来て
048　022　うすれゆく年々の冬のきびしい日の下で……
058　015　ある冬の晴れた日に
100　011　それは昭和十六年の冬のことだ
148　006　今年の冬には、
160　002　いやに透明に見えてきた　今年の冬
160　009　そんな今年の冬も終りに近い　ある日の真夜中
172　010　夏はたちまち冬になり
175　011　冬にしては暖い雨の音が

ふゆうし　浮遊し
169　011　今夜は別々に浮遊し

ふゆかいな　不愉快な
010　010　不愉快な天候の有機的関連の結果である

ふよう　不用
062　021　魂も身体も不用です」

プライド
137　006　けちな動物のプライドにかけて

フライパン
088　049　大きいフライパンをあやつる小さいマリは

プライベートな
121　013　プライベートな場所をさがしたい

ブラシ
031　015　雨傘やブラシなど日用品が置いてある

ふらす
102　004　あたらしい屍体の雨をふらすから

プラス
061　084　おまえは一プラスーに
061　086　一プラスーが生とすると
106　012　永遠プラス五分間を　「早く早く」とせき立てている

ブラス・バンド
064　010　やくざなブラス・バンドが歌っていた。

フラスコ
016　014　フラスコのうしろでピカピカする

ふらせて　降らせて
104　012　夜空はたえまなく星を降らせている
109　013　落葉の雨を降らせている。

プラタナス
089　028　北風がプラタナスのほそい枝を鳴らして

プラットフォーム
041　028　プラットフォームが岬のやうに曲がってくる
067　003　プラットフォームの岸辺をながめた
069　003　人影まばらなプラットフォームで

フラワー・センター
148　051　若い男女でいっぱいのフラワー・センターに立ちよって、

プラン
004　008　素敵なプランを考へはじめた

ブランコ

097　012　サアカスでブランコをする男は、

フランス
073　026　毛脛を出したフランス人の水先案内は
074　003　夢にみたフランスの街が
074　009　フランスの悩みは
128　013　優雅なフランス語と
142　062　その著書をフランスで刊行した一九四二年生れのブコフスキーは
184　004　フランス系アメリカ人と横須賀で結婚し

フランス系
184　004　フランス系アメリカ人と横須賀で結婚し

フランス語
128　013　優雅なフランス語と

フランス人
073　026　毛脛を出したフランス人の水先案内は

ブランディ
098　023　ブランディの血を燃えたたせる火

ふり
035　009　あらゆる憎しみはふり落される
037　017　眠ったふりをしてゐると
045　021　ふりそそぐ雨のみだれも手にとるやうだ
053　053　しかし落葉のなかでふりかえっても
054　036　「星のきまっている者はふりむかぬ」
054　039　だが僕は最初の路地で心弱くもふりかえる
055　035　空虚なメランコリイの谷間にふりつづいている
061　047　あなたはうしろをふりかえらなかった、
061　052　あなたはうしろをふりかえらなかった、
061　163　星のきまっている者はふりむこうとしない。
062　064　そして永遠に死んだふりをしているのですね
063　013　あなたは固く睫毛をとじて死んだふりをしている
066　010　小さな友はいつまでも首をふりつづけた。
080　023　きみのかくれた意志をふりおろすことができない
084　033　落葉がふりつもってゆきます
101　052　榴散弾のようにふりそそぐ淋しさに耐えてゆこう
112　011　小首をかしげ　そしらぬふりをするな
125　005　六月の雨はしきりにふり　音楽はとめどもなく
142　090　知らんふりしたところで投獄されはしない
146　030　髪をふり乱していがみ合っていたのです

ぶり
021　026　白い雲の中で眼をつぶり
072　024　独断批評家の口ぶりもわるくはないし、皮肉な記者のポーズも捨てがたい
072　035　なんと見事なダークホースぶりだろう
087　008　聞きわけのない耳でかぶりをふって
087　018　聞きわけのない耳でかぶりをふって
106　021　かれの指の爪貝は　恋人たちがしゃぶりたがるほど美しい
148　003　三十五年ぶりにたよりをよこした。
170　007　蜘蛛の巣を払うような手ぶりをすると
173　002　身ぶりの練習をしたかったとかで
176　014　少女の頬と肩になぶりかかる
177　021　きちんと帽子をかぶり
188　009　五十何年ぶりに歯医者の厄介になるという始末。

ふり　降り
002　004　（落葉は降りしきる　あゝ淋しい曲を聞いた）
023　006　実体のない窓窓に雨が降り
027　023　わづかな煙はグラスの中へ降りてゆく
041　049　あなたは冷たい石段を降り
046　034　同じ木の手摺につかまり　同じ迷宮の方向へ降りてゆく
053　056　降りつづく落葉の雨のなかから
055　001　ひどく降りはじめた雨のなかを
136　013　死にたくないと雪が降り
146　060　外はひどいどしゃ降りでした

ふりおろす
080　023　きみのかくれた意志をふりおろすことができない

ふりかえって
053　053　しかし落葉のなかでふりかえっても

ふりかえって　振返って
173　027　キョロキョロと振返って眺めている始末だ

ふりかえら
061　047　あなたはうしろをふりかえらなかった、
061　052　あなたはうしろをふりかえらなかった、

ふりかえる
054　039　だが僕は最初の路地で心弱くもふりかえる

ふりかえる　振返る

029　014　今はただ表情もなく振返るわたしに

ふりしきる　降りしきる
002　004　（落葉は降りしきる　あゝ淋しい曲を聞いた）

ふりそそぐ
045　021　ふりそそぐ雨のみだれも手にとるやうだ
101　052　榴散弾のようにふりそそぐ淋しさに耐えてゆこう

ブリタニカ
128　048　ブリタニカをかついで登場

ブリッジ
145　008　レスビアンの女たちの痙攣は不信者の地獄の笑いの一型態で　ブリッジして反った肉体の

ふりつづいて
055　035　空虚なメランコリイの谷間にふりつづいている

ふりつもって
084　033　落葉がふりつもってゆきます

ふりむ
054　036　「星のきまっている者はふりむかぬ」
061　163　星のきまっている者はふりむこうとしない。

ふりむく　振りむく
146　045　振りむくと小柄な中年の外国人が

ふり落される
035　009　あらゆる憎しみはふり落される

ふり乱して
146　030　髪をふり乱していがみ合っていたのです

ふる　振る
005　009　鈴を振るかすかな音よ
188　055　（……今日も打振る日章旗……）

ふるい　古い
005　010　古い楽器は花樹の下で
007　004　煤けた町は古い習慣で壺の沈黙を　それはいつまでも黄色い河の
042　020　また古い家風を弔ふ
045　020　古い鏡には

050　017　「それがぼくたちの古い処方箋だった」と呟いて……
054　111　古い夜の匂いがする頭に帽子をのせると
102　001　おれが古いいくさの歌をうたったら
102　005　おれが古いいくさの歌をうたったら
102　009　おれが古いいくさの歌をうたったら
142　049　古い繰り返しのなかにいる
142　093　家を夢みているだけでは　古い家も新しい家も守れはしない
145　015　古い広告ビラの汚れた壁の傍で
186　026　やっぱり古いなあ！

ふるえ
002　006　ふるえるセルロイドの掌
058　024　ふるえる電線の街の
065　011　あった。寒さにふるえながら
088　026　椅子のうえで寒さにふるえているぼくの手足を
186　084　かすかにふるえる指先の煙草のけむりのように

ふるえ　震え
041　032　かすかに震えてゐる　神経的な
061　172　寒さに震えながら、
106　030　尖がった紫の口髭なら　ずっと微妙な震えをもつかもしれない
192　016　震えている足許に眼をおとすと、白い四角の標識に、明りが仄かにともっていて、

ふるえている　震えてゐる
041　032　かすかに震えてゐる　神経的な

ふるえている　震へてゐる
003　006　震へてゐる爪に霧がかかる

ふるえる
002　006　ふるえるセルロイドの掌
058　024　ふるえる電線の街の
186　084　かすかにふるえる指先の煙草のけむりのように

ふるえる　震へる
037　005　ほんのわずかに震へる根を支へてゐる

ふるく　古く
021　021　若年の記憶は古くなり
041　103　それのみが古くはならぬ
096　015　文明色なら　もう古くなった三十年代流行のセダンの

ふるさと

151　028　電話の数字にもふるさとを感じ
190　003　ふるさとの山

ブルジョア
055　048　ブルジョア的な姦通事件の

ブルジョア的
055　048　ブルジョア的な姦通事件の

ふるびた　古びた
039　089　古びたドアを侵し

ふるびて　古びて
167　016　住居は確実に古びてしまった

ふるまう
072　021　みんなどうしてこんなに自由にふるまうのか

ふるわせた　震わせた
065　037　彼の五体を震わせた。

ふれあう
070　019　肌のふれあう水ぎわから

ふれあう　触れあう
164　029　触れあうたびに遠くなる

ふれあった
064　008　暗い過去と冷たい記憶がふれあった。

ふれた
169　001　繃帯にふれたあとの

ふれて
031　017　そっとあふれてゐるものだけがやさしかったと
090　011　艶やかなきめにふれてみる
171　012　無邪気な目には悲しみがあふれていたから
182　027　滾滾とあふれている
183　005　くだもの屋にあふれている蜜柑が

ふれている　触れている
048　014　彼女だけが触れている

ふれなかった　觸れなかった
017　035　一言も觸れなかったかも知れない

ふれる　触れる
039　017　微風はわたしの肩に触れる

プロフイル
003　009　盛んに蝋を焚く女のプロフイル

プロペラ
007　009　た飛行機のプロペラが現れた
016　011　透明なプロペラがメガネの中に
091　006　軽いプロペラの翅音をひびかせて

ブロンド
097　010　あのブロンドの若い男は、動物になる夢を持たなかったろう。

ふわふわ
053　008　黄ろい髪飾だけがふわふわと蝶のように宙にさまよっているのです
126　012　月のうえをふわふわ歩く宇宙の子供を見ようとして

ふわふわと
053　008　黄ろい髪飾だけがふわふわと蝶のように宙にさまよっているのです

ふんいき　雰囲気
029　008　憩ひといひ懶惰と呼ばれる雰囲気にかこまれ
039　055　一定の雰囲気のなかでしか

ぶんかいされる　分解される
016　002　太陽は水晶に分解される

ふんがいして　憤慨して
014　009　セロが憤慨して足をあげた

ぶんがく　文学
150　029　文学の世界にとどまっている者は、私しかいない。
150　049　文学から離れたことに話をかぎれば、それだけがすべてではない一例として、

ふんかこう　噴火口
026　030　おそるべき噴火口は

ふんげき　憤激
050　024　憤激も、悲哀も、不平の柔弱な椅子もなかった。

ぶんしん　分身
042　013　脱ぎすてた分身が青く光る

ふんすい　噴水
020　013　噴水へ
021　011　花が浮かんで噴水をかむった
024　003　る　血液を噴き上げている白い管は輝やける噴水の愛撫をう
030　022　そこに憩ひがあり噴水がある
036　017　噴水と石像のある静かな白昼よ
039　129　ひややかな青い噴水も

ふんで
016　004　星にとびちる音（ね）をふんで

ふんで　踏んで
164　009　足で地面をばたばた踏んで

フンと
006　017　フンと丁寧に洟をかみました

ぶんぶんと
001　005　ぶんぶんと翅虫は

ふんぼ　墳墓
039　104　白い墳墓の方へ
046　020　たとえ純粋な緑が　墳墓の丘より呼びかけようと

フンボルト
160　065　フンボルトの天才　は四十歳で燃えつきてしまい

ぶんめい　文明
028　019　文明的なもろもろの雑音の性格により
028　055　そこに一個の文明が
057　042　文明のなまぐさい鮭は
085　029　文明批評はもうたくさん
096　015　文明色なら　もう古くなった三十年代流行のセダンの
142　091　しかし　利己的で　近視眼的で　無防備な文明のなかにいて
166　024　文明の貪慾に吐気を催した

ぶんめいしょく　文明色
096　015　文明色なら　もう古くなった三十年代流行のセダンの

ぶんめいひひょう　文明批評
085　029　文明批評はもうたくさん

ぶんめん　文面
180　006　そそくさと読みおえたその文面を
188　002　こんな文面があったのを憶えているだろうか。

ぶんれつびょうしゃ　分裂病者
142　058　ぼくたちはやがて　比較的おとなしい分裂病者として

プーマ首相
128　007　プーマ首相の

ヘーゲル
108　024　老ヘーゲルは来り去り

ペーペルコルン
057　016　自殺したペーペルコルンのことを考えていた

ベール
136　004　涙のベールで

ペイヴメント
100　061　ペイヴメントには水玉模様の少女があふれ

へいおんぶじ　平穏無事
183　029　平穏無事の今日一日の。

へいし　兵士
008　003　点ける　と焦げたパンの匂がし　空腹をかんじた兵士
012　019　その中に沢山の兵士たちの顔がゐた
073　018　不幸な兵士は空をあおぎ
074　011　ぼくら兵士の苦しみは
074　020　病める兵士たちは
075　003　不幸な兵士に別れを告げる
075　011　この不幸な兵士は
077　001　死んだ兵士を生きかえらせることは
077　004　多くの兵士は
077　011　いくたびか生きかえる兵士たちが
077　017　ぼくはひとりの兵士の死に立会った
077　033　この美しい兵士は
081　004　兵士たちは眠っていた
081　009　兵士たちはうわごとのように

081　020　生身で受けとめているのは兵士ではない
081　030　兵士の眠りをゆすりながら
101　010　血の河をわたっていった兵士たちよ
101　013　ぼくははじめから敗れ去っていた兵士のひとりだ
101　015　たいせつにしてきたひとりの兵士だ
101　036　消えたいのちの水をのんでいる兵士たちよ
101　042　死霊となってさまよう兵士たちよ
135　006　水漬く兵士の納骨堂に
148　021　斃れた兵士たちは、

ぺいじ　頁
150　054　鉛筆で何カ所も印をつけられた頁をつきつけられて、

へいせいで　平静で
185　003　アナウンサーの声は平静で

へいぜんとして　平然として
054　072　平然としてまがった道をゆく時だ！」
150　058　あんがい平然としてニヤニヤ笑っていた。

へいたんな　平坦な
192　010　どこまで行っても、一本の松にも出遭わず、平坦な黒い砂地がつづいているばかりで、

へいめん　平面
033　015　小さな宇宙の平面の上に残された
106　019　かれの額は　西洋皿の平面のように広く

へいわ　平和
028　040　すべてが平和であるようにとか云ふ必要もない
073　016　平和の国にいたるためには
073　017　平和のないところから立去らなければならない
142　122　個人の平和と　世界の平和と　人類そのものの　真の守護者たりうるのだ」と

へきめん　壁面
167　062　ぼろぼろになった壁面にまた心理面に
187　003　壁面の王は

べく
007　013　阿片の軽艇（ボート）は霧の中へ青い泡を残して去るべく一人の少女を誘拐
036　014　あれらの花花はなるべく愛する
150　066　喪わるべくして喪われたと言うのは、
176　028　渡るべくもない
178　004　こののちは訪うべくもないゆえに

188　005　白内障の眼を、なるべく休めるようにしていますから、

へたな　下手な
106　016　無事に生きのびてきた　この下手な構図は
174　026　いまでも下手な碁打ちであるぼくは考える

ベタベタ
006　014　阿片の広告の下にベタベタ貼った

ベッド
054　117　不潔な女のベッドの方へ進んでゆくだろう
055　037　おれたちのベッドのなかで締め殺してしまったのだろうか
069　032　動かないベッドがある
093　003　かれはベッドにもぐりこむ
125　022　むずかゆい両脚をとじて一人のベッドで静かに眠れ
167　056　苦しみのベッドに血をにじませる
173　045　スプリングの毀れたベッドに身を投げて
176　006　ベッドに近づき

べつの　別の
030　032　花の実たちが実る周囲に実る別の花の実たち
041　058　別のあなたが
041　060　別のあなたの藻のことを考へながら
065　023　ひとつの声をかけ、つづいて別の声で
146　027　それはまた別のお部屋に

べつり　別離
064　009　人生に別離なんかあるものかと、
115　010　一千年の別離もさびしくはない

ペテルスブルグ
054　062　ペテルスブルグの青年が僕たちに告げたことを……

ベトコン
128　040　じきベトコンもおだぶつ

ペニィ
087　004　「ペニィやペニィ　可愛いいペニィ」
087　005　けれど　きみの愛犬ペニィは
087　011　さて　ペニィの悩みはこうだ
087　016　ペニィの日課はそれだけだが……
087　017　「ペニィやペニィ　可愛いいペニィ」
087　020　ペニィの日課はそれだけだが……

087　024　きみにとっても　ペニィにとっても

へび　蛇
008　006　げられ　叢には懐古的な蛇はゐない
011　014　先づ首に巻いた蛇を外せ
013　003　青いけむりの蛇が枝を登り
042　011　蛇は力を尺してしろがねの枝をのぼる
061　138　水仙や蛇や　もろもろの生ける質を潤おした』
070　052　どんな蛇よりも猛烈な毒をもっているわ
093　015　蛇が隠れたエデンの樹を一心に見つめる
112　019　おまえは今朝も蛇口のまえで
144　007　鱗の落ちた蛇神は無性闇に輾転し
160　068　「蛇の穴」と称して大学にもぐりこみ　教鞭をとったこともあるが
187　011　賢い蛇の尾のような

へびのあな　（「蛇の穴」）
160　068　「蛇の穴」と称して大学にもぐりこみ　教鞭をとったこともあるが

へや　部屋
041　100　あなたの部屋にはシガアの煙がたなびいて
043　013　音もなく　部屋の扉がひらく
045　003　部屋から廊下へ
046　049　あなた自身が小さな一つの部屋であることを
047　002　とざされた部屋に心臓の羽搏きが
049　002　傾斜した部屋からは
052　025　誰もいない淋しい部屋を夢想する
053　028　わたしのこころのお部屋のなかで
054　075　「出てゆこう　とざされた部屋の中から
054　153　出口のない部屋から
059　005　ひとりぼっちの部屋のなかで
061　012　秘密にみちた部屋や
061　170　がらんとした心の部屋で、
063　019　しばらく部屋のなかを散歩する
065　003　部屋住いの男にとって
065　010　部屋は、ひとつの廃墟で
066　039　眠れない部屋のあかりがひとつ
070　032　この窓のない部屋で
089　002　赤々とストーヴが燃えている部屋の
122　009　暗くなった部屋の
132　003　部屋から部屋へ
141　006　そこも、一つのお部屋だったわ。
146　027　それはまた別のお部屋に
148　034　ぼくたちは女気なしの部屋で炬燵を囲み、

167　046　それから一つの部屋を守り
167　047　一つの部屋のための家屋が傾くまで
170　008　ホテルの部屋から戸外へとさまよい出た
179　028　この窓もこの部屋も
189　025　無音無重力のガラスの部屋で

へやずまい　部屋住い
065　003　部屋住いの男にとって

ベル
001　001　青柄のシャベルで
098　002　電話のベルが鳴りはじめた
183　002　ジングル・ベルが鳴っていて
186　024　昔の発車ベルの音が体内のどこかに残っていたんですよ！

へる　滅る
148　046　もうこれ以上、滅ることのない戦友の、

ペロペロ
013　010　肩の上でペロペロする

へん
027　016　わたしの鼓膜はへんである
184　014　たいへん誇りにしている彼女は
186　045　へんな人ですね、あなたは？

ペン
061　014　書籍や窓やペンをすてて、
171　014　はぐれペンギンの男は思う

へんか　変化
134　007　変化はすでに起っているが

へんきょう　辺境
103　024　陸封されたアジアの辺境でもない

べんきょう　勉強する
108　020　勉強するのは大変だなあ

ペンギン
171　014　はぐれペンギンの男は思う

へんげんする　変幻する

168　012　変幻するおまえの姿に出あったから

へんしゅうしつ　編集室
128　078　無人の編集室で

へんしゅうしゃ　編集者
150　053　編集者である私が警視庁から呼び出しを受けた。

へんしん　返信
188　026　そういうきみに対して、どんな返信を送ったか、
188　073　四年遅れのこの返信が、四年前のそれと、どう違っているかを、

へんしんする　変身する
132　005　風のように変身する

へんせい　編制
014　019　自然にオルケストラが編制されたね

ベンチ
021　008　木製のベンチ
021　018　ぼくはベンチに凭れて
108　016　恋人たちがベンチに坐って
120　002　ベンチにもたれていると

へんぼう　変貌
044　009　御身は知ってゐる、世の輝かしい変貌を、

ほ　帆
003　004　今晩十二時に出帆します
007　001　ジャンクの帆が蝙蝠のごとく羽博いて　ランプの虹がひろがる
080　009　手ごたえもなく　切れた帆綱から
080　018　いつまでも折れた帆柱を抱いているかぎりは
103　011　帆柱や舵や海図や羅針や救命ブイや銛や……
110　002　帆をたたみ
169　020　孤独の帆をたらしたまま
176　013　帆のようになびかせて

ほ　穂
107　006　風に熟れた稲穂も……
139　002　すすきの穂が遠くからおいでおいでと手招く

ホイ
128　022　ホイ　ホイ

ほう　方

007　014　する《されるのはまあ仕方がないでせう》
026　008　食卓は北方に白い布を垂らし
027　011　そちらの方から寒さが吹きつけてくる
027　018　弾かれた言葉の行方を覚る
029　009　窓は開かれて北方に青く
035　002　南方のドアを開き
035　020　北方のドアを閉ぢて
039　010　緑の泡の方へ近づいてゆく
039　082　西方の窓を照らしだす
039　104　白い墳墓の方へ
040　024　東方からおまへのからだを侵しはじめる
041　033　優しい眼鏡や柔かい手袋の明日の方まで湿してゐる
046　008　櫂で虚を打ちながら　必死に進む舳の方位を
046　034　同じ木の手摺につかまり　同じ迷宮の方向へ降りてゆく
046　040　行方の知れぬ風のことばにいつまでも微笑を浮べてゐようとは
046　052　方位はなかった　花火も夢もなかった
050　017　「それがぼくたちの古い処方箋だった」と呟いて……
051　003　彼方へと走っていた。
053　009　わたしはわたしの行方を知っていない
054　035　行方の知れぬ風の寒さに身ぶるいするのだ
054　117　不潔な女のベッドの方へ進んでゆくだろう
054　155　海の彼方！
057　007　パスカルの読み方を教えた青年が戦死し
061　001　彼方の岸をのぞみながら
061　010　下へ、下へと漕ぎさってゆく舳の方位を。
061　169　貴方がいなくなってから、
061　173　貴方に叛いたわたしは、
061　182　貴方がわたしに下さったものはこれだけですか。
061　186　貴方の深い慈悲と知慧とを理解できません。
061　190　貴方がいらっしゃるあたりは、
061　200　わたしの悲惨は貴方の栄光なのですか。
061　203　方位はなかった、
061　219　彼方の岸に灯がついた、
073　021　否定の彼方へ
080　025　まっすぐ海の彼方を指しているからーー
088　011　なんでもおまえの方がよく知っている
089　041　遠いその声の方へ
090　007　方三尺五寸の天地をつくるために
090　009　人間が自然に手をつける方法は……
099　008　どうして過去の方にころがっていったのか？
100　070　精力的な夏は未来の街の方向にひろがっているようにみえた

101　023　どの方向にでもまげられる関節をもち
106　048　ただちに答えられるだろう　かれの経験の彼方から第四の声で
113　043　風の方向に
124　008　一方が売れば
124　009　他方がそれを買う（ゴムの手袋をはめて）
132　014　八方破れの　吉凶よさらば
134　008　この群集の行方は誰も知らない
142　024　（それゆえ　この国独得の統治方式の利点とさえいえるもので
145　017　そんなカップルはどこにでもいて快楽のスプーンで苦痛の目方を計りかねていた
146　042　途方に暮れて立っていると
147　017　惜しまれる死に方をしなかったことで
148　007　地方都市で鉄工所を経営していた旧友が、
150　005　六人の友達の彼に対する考え方は夫々まるで違ってゐた。
167　028　どんな遠方も
176　027　みはるかす彼方には
180　024　貴方に「女の子の心理」が判んなくたってあたりまえなんです。貴方は心理学やってんのじやないのでしょうか
180　025　ら……。貴方に判らなかろうと、もう少し付け足すと、昨年は形相の意味も知らなかったということ。私は「メ
180　026　ッセージとよみました」と書いた筈、それは私だからそうよめてしまう、というのがどうでもいいことで、貴方
180　027　の言葉を私はどんな方法でも消せればよかっただけのことー。
180　051　たね。しかしそれはそうそうあるものじゃない。違うものの方が圧倒的に多いー。では、さよならK.I.
188　063　死滅の予備知識も与えられて然るべきだ、といった方針のもとに。
192　008　わたくし、とは誰だったのだろう？　歩行の方向をきめている海の
192　013　途方もない迷路に入ってしまったと気づくと、あたりが急に暗くなってきて、
192　025　必死の思いで、前方の真っ暗闇を凝視するが、もう何も見えぬ。

ほうい　包囲
106　040　かれは自分を罰してはならない　屠殺者や皮肉屋の包囲のなかで
192　026　叫ぶ、が、声にならない。ぴったり浪に包囲されて、

ほうい　方位
046　008　櫂で虚を打ちながら　必死に進む舳の方位を
046　052　方位はなかった　花火も夢もなかった
061　010　下へ、下へと漕ぎさってゆく舳の方位を。
061　203　方位はなかった、

ほういされて　包囲されて
192　026　叫ぶ、が、声にならない。ぴったり浪に包囲されて、

ぼうえいして　防衛して
081　022　黒い神を防衛しているのは

ぼうえんきょう　望遠鏡
012　010　山では望遠鏡が廻転する

017　014　望遠鏡をぐるぐる廻した

ほうかい　崩壊
167　058　家の崩壊はないものと念じてきたのに

ぼうがい　妨害
142　029　また　いかなる非難中傷の壁、妨害の電波がぐるりをとり巻いても

ぼうきゃく　忘却
046　032　忘却の階段に足をかけ

ほうげき　砲撃
166　026　砲撃に耳をすますような顔つきで

ぼうけん　冒険
061　056　あなたは冒険をもとめる旅人だった。
103　017　まがいものの甲冑に身をかためた冒険家でもなければ
126　015　奇蹟の冒険に胸をおどらせるだろう
160　047　心を開け　冒険に
184　013　九カ国語を話したという冒険家の祖父を

ぼうけんか　冒険家
103　017　まがいものの甲冑に身をかためた冒険家でもなければ
184　013　九カ国語を話したという冒険家の祖父を

ぼうし　帽子
003　005　海に向って帽子をふって
005　004　青い帽子の微風が通り
010　003　有効なスピイドについて考へることを欲する少年は一個の白い帽子をかぶってゐる
010　004　白い帽子は頭のアリカを教へるとともに日の匂を発散させる
010　009　その新しい設計こそ白い帽子と赤いジャケットの
013　018　上衣と帽子を失敬する
015　014　貝殻の匂のする帽子は
017　033　帽子と巴旦杏が
018　013　帽子掛の下で遮断され
021　012　麦藁帽子ほどのプウルをまはり
026　032　残されたただ一個の帽子は
054　111　古い夜の匂いがする頭に帽子をのせると
057　037　悲惨なぼくの黒い帽子と
177　021　きちんと帽子をかぶり

ぼうしかけ　帽子掛
018　013　帽子掛の下で遮断され

ほうしする　奉仕する
172　026　こっそり悪魔に奉仕することだ

ほうしゃ　砲車
101　009　重たい刑罰の砲車をおしながら

ほうしゅう　報酬
077　009　不思議な報酬があるかぎりはーー）
077　014　（永遠に受けることのない報酬は
077　030　あらゆる神の報酬を拒み

ほうじゅんな　芳醇な
035　001　芳醇な薫りは

ほうじょう　北條
158　034　北條や足利の美しい光景をすくってみせたときだろう

ほうしん　放心
012　006　放心した花弁のやうに

ほうしん　方針
188　063　死滅の予備知識も与えられて然るべきだ、といった方針のもとに。

ほうしんした　放心した
012　006　放心した花弁のやうに

ほうせき　宝石
011　008　電車が宝石の角を過ぎるとストップし
015　009　誰も小さな宝石筐と
017　007　宝石を舐めたりして

ほうそく　法則
072　041　合理的な法則があるとは信じられない

ほうちされた　放置された
160　058　遺体は屍体置場に二日間放置されたままであった

ほうちし　放置し
142　071　他の人々を悲惨なままに放置して逃避するような
145　005　芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右

ほうちして　放置して

142　071　他の人々を悲惨なままに放置して逃避するような

ぼうふう　暴風
065　031　暴風の夜を飛んでいった。哀歌をうたいながら

ほうふくてき　報復的
160　069　エゴセントリックで報復的だったためか同僚にはうとまれていたらしい

ほうほう　方法
090　009　人間が自然に手をつける方法は……
180　027　の言葉を私はどんな方法でも消せればよかっただけのことー。

ぼうぼうと
002　009　ぼうぼうと潮騒は杳く
007　015　まだ阿片でぼうぼうと煙った眼よ
176　029　寂寥の海がぼうぼうとひろがっていて
181　005　ぼうぼうとかすみ

ほうまつ　抱沫
061　081　無数の小さな抱沫が噴きだしているのを……

ほうむって　葬って
167　051　おまえはうやうやしく何を葬ってきたのか

ほうむら　葬ら
039　060　死者をして死者を葬らしめよ

ぼうりょく　暴力
142　119　非道な暴力に抵抗して　自らの犠牲と死の覚悟で第一線に立ち

ぼうれい　亡霊
039　065　亡霊たちの影の外に
040　018　アヘロンの岸にさまよう亡霊のごとく
054　100　亡霊たちに別れを告げよう
054　101　あるいはまた亡霊たちを飲みほして
062　037　二つの亡霊になってしまおう
064　023　ふたつの亡霊がさまよう、
073　013　ぼくらは白衣の亡霊となって

ほうろう　放浪
100　022　お別れの短かい放浪がはじまった

ほえたて　吠えたて

087　014　なんでもかんでも吠えたてたり

ほえる　吠える
055　065　永遠に吠えることのない狼に見えてくる

ほおぼね　頬骨
047　009　頬骨がつめたい空気のなかで尖ってくる

ほか
076　010　涙をながすほかには
117　009　失ったものへの愛のほかに
128　010　われわれは死ぬほかはない」
141　012　すべてが終っている者には、ほかに呼び名はない。
142　042　監獄・収容所システムにほかならぬ　と
148　038　夜はことのほか短かい。
150　026　年月のきびしさに苦笑するほかはなかったが、
156　035　私は口をつぐむほかはない
160　036　ほかに自己証明の道がなかったのである
169　008　化石になるほかはない
180　013　恐れ入りましたとでもいうほかはなさそうである
181　007　ことのほかしんみり
182　003　ことのほか躯の工合がよくない
183　006　ことのほか色鮮やかで明るく
193　004　一歩一歩あゆむほかはない

ポカンと
014　010　みんなポカンと口をあいてゐると

ぼきぼき
094　006　ぼきぼき葦は折れて水垢のうく岸辺

ぼく
008　018　ぼくらにもまたきみたちにも
011　017　ああ　ぼくたちは幸福である
013　007　ぼくは靴下をなげだすと
021　018　ぼくはベンチに凭れて
021　030　ぼくの耳は響いてゐる
050　006　ぼくらは暗い酒場の椅子のうえで、
050　013　だがぼくは、何時何処で
050　017　「それがぼくたちの古い処方箋だった」と呟いて……
057　003　ぼくの悩みは始まっている
057　008　それでもぼくらが生きているとは信じられなかった
057　010　ぼくらに一枚の絵皿を見せたことがある

057　012　ぼくはエトランゼであったし
057　014　ぼくの知ったことではなかったのだ
057　018　櫂はぼくに全身をあたえ
057　022　ぼくは知っていた
057　024　世界を冷やす月光がぼくの額を照らすのを……
057　026　ぼくは笑ったことがあった
057　030　ぼくはぼくである一切のものを否定するのだ
057　037　悲惨なぼくの黒い帽子と
063　005　ぼくの腕に倒れかかる
063　007　ぼくはあなたの口を押えようとする
063　008　その手の黒さがぼくをぞっとさせる
063　010　重たくぼくの胸にのしかかってくる
063　014　ぼくのいない眠りのなかで
063　018　ぼくは片足にスリッパをひっかけて
063　020　　（ぼくは憐みのこころをもっているか？）
063　023　ぼくは黙って坐っているだけだ
063　024　ぼくが暁の星だとしたら
063　025　ぼくが殉難者の澄んだ眸をしているとしたら……
063　026　ぼくがあなたを信じないように
063　027　あなたはぼくを信じようとしない
063　029　ぼくたちは汚れを知らぬ微笑をうかべる
063　030　ぼくたちが生れるずっとまえからそこにあった微笑を！
067　015　ぼくをすこしも驚ろかさない
070　022　ぼくたちを閉じこめている格子は
070　026　ぼくはどうしても逃れることができない。
070　028　ぼくのほそい頸にまきついて、
070　031　ぼくにはわからない、
070　033　一日を一年のように暮しているぼくたちには、
070　035　ぼくたちの地平線は
070　037　ああ、ぼくの頭のなかには
070　042　ぼくは見えない出口をさがすように、
070　059　ぼくが死んだらどうしようというのか。
071　021　ぼくの頭髪をひっぱることがある
071　023　ぼくは
071　028　ぼくの背後の空に
072　043　負け馬に賭けてきたぼくのような男には）
073　013　ぼくらは白衣の亡霊となって
073　022　ぼくらを運び去るものは
074　002　ぼくらの船を迎えるものはなかった
074　008　これがぼくらのサイゴンだった
074　011　ぼくら兵士の苦しみは
074　012　ぼくら祖国の苦しみだったろうか
074　024　ぼくらの細い咽喉にあてたまま

075 006 ぼくの苦しみも
075 007 ぼくの悲しみも
076 001 なぜぼくの手か
076 005 さりげないぼくの微笑も
076 007 ぼくのものでもきみのものでもない
076 013 きみの肩にかけられたぼくの手の
076 017 こうして耐えているぼくのほうが
077 017 ぼくはひとりの兵士の死に立会った
077 023 かれとぼくの間には
078 015 ぼくらはいかにして
078 018 ぼくらはむなしく大空に
079 013 ぼくらの船は
079 019 ぼくらは黙黙と逃れ去るだろう
079 024 ぼくらが望むのは
079 030 ぼくらは水平線をこえねばならない
081 005 ぼくらの船は
081 014 ぼくらを生んだ七つの近代都市が
081 016 ぼくらはすでにこの歴史の内では死んだ者
081 023 ぼくらではない
081 027 ぼくらをしっかり抱きしめているのは
088 003 ぼくの椅子の下に巣をつくったり
088 005 ぼくの頭の木のうえに駈けのぼったりする
088 006 あどけないおまえの声は　いつもぼくに
088 007 ぼくの持っていない愛情を思い出させる
088 009 ぼくが知っているのは　おまえが生れる前のことだ
088 015 わけへだてのないぼくたちのあいだに
088 019 きままなぼくの生活
088 022 どのようにぼくたちの大地に暗い影を落すのかも
088 025 雪にとざされたぼくの窓や
088 026 椅子のうえで寒さにふるえているぼくの手足を
088 029 ぼくはただ黙って
088 032 ぼくのものでない夢を
088 033 たえずぼくの心のなかに組みたてる
088 041 ぼくと一緒に住もうというのだ
088 050 ぼくと一緒に暮そうという
088 053 ぼくたちの物語を
088 064 ぼくが言って
088 071 ぼくたちに語りかけてくるよ
088 073 太陽の涙から生れてきたぼくたちの
088 079 大きな声でうたうぼくたちの歌に
089 007 ぼくはひそかに答えよう
089 023 「ぼくは凍ってゆく水のなかにいますよ」
089 035 ぼくは急がなければなりません

092　004　ぼくは言おう
094　015　ぼくの記憶はまだ生れていない
094　016　かれと言いきみと呼びぼくに返る心の遠近法にしたがって
094　020　きみがぼくに生きよと告げるなら
094　021　ぼくの河口はひといきに岸辺やテントや小舟を吐きだそう
095　010　ぼくは暗い路地を走り出た
095　018　ゴーゴーゴーとぼくの頭上を通過していった
095　021　ぼくは少しずつ忘れてゆくだろう
096　004　ぼくはバルセロナの夜をえがく
096　011　きみもぼくも疲れた　さびしい旅だった
096　014　ぼくらを昏倒させる原色はなんだろう？
098　015　ぼくの灰皿から
098　025　ぼくはまぶしい「無」の下で自分の手をみつめる
099　010　ぼくの記憶は思いがけない不幸のシークェンスで翳ってくる
100　001　ぼくは冷えた石段をおり
100　004　うなだれて　ぼくらを待っているバスに乗った
100　006　ぼくは誰かにむかってそう言った
100　014　ぼくは書きつけた
100　019　それから　ぼくの絶望は
100　020　ぼくらの共同社会からきりはなされていった
100　031　ぼくはハピーエンドを起点にして
100　035　ぼくらの死から誕生にいたる
100　041　敗戦がぼくの魂を解放する」
100　043　おろかにもぼくはながいことそう信じてきたのだ
100　046　ぼくが戻ってくるのは
100　054　ぼくはいまでも　その声をきく
100　058　ぼくは今年の夏を知った
100　059　それは　ぼくの希望の「おわり」にふさわしい多彩な夏であった
100　066　ぼくの背後で
100　072　きみはとおくからぼくを見まもっている
100　073　そして　ぼくと逆のイメジを抱いている
100　074　ぼくの明日は
100　077　ぼくの空はそのままきみの地上となっている
100　079　ぼくたちが出会う場所は
100　081　ぼくたちが　さらに遠くの世界に眼をやるとき
101　004　無力な太陽のことばで　ぼくにはわかるのだ
101　013　ぼくははじめから敗れ去っていた兵士のひとりだ
101　017　ぼくはすこしずつやぶれてゆく天幕のかげで
101　021　……誰もぼくを許そうとするな
101　022　ぼくのほそい指は
101　024　安全装置をはずした引金は　ぼくひとりのものであり
101　026　勝利を信じないぼくは……
101　048　ぼくはぼくの心をつなぎとめている鎖をひきずって

101 057 ……どこまでもぼくは行こう
101 058 ぼくの行手ですべての国境がとざされ
101 062 おお　しかし　どこまでもぼくは行こう
101 063 勝利を信じないぼくは　どうして敗北を信ずることができようか
101 064 おお　だから　誰もぼくを許そうとするな
103 031 きみが見た大きな虚無はふかくぼくらをひきつける
105 002 ぼくらの大地は黒くふくらむ、
105 009 ぼくらのゆくてを曇らせるものは、
105 012 戦争は失敗し、ぼくらの国は生きのびてきた、
107 001 ぼくが若かったとき
107 011 ぼくの思想はぼくに戻る
107 017 ぼくが言葉を失えば
114 011 「ぼくはたたかわないにっぽんじんです
115 008 ぼくらのこころに
116 003 きみとぼくにしかわからない
116 006 未来を失ったぼくの苦しみが
120 019 ぼくは睡くなる
124 029 残る一人であるぼくは
128 056 ぼくはニューギニーからタヒチ島へ行ってくる
140 001 ぼくは行かない
140 004 ぼくを破滅させるものがなくなった
141 010 そして、きみはここにいる、ぼくはここにいる、
141 013 黙って向きあったきみとぼくとで、
141 016 ぼくたちはお互の影でさえない。
142 045 ぼくたちは世界の片隅でふさぎこみ
142 048 いずれにしても　ぼくたちの多くは　まだW.H.オーデンの
142 050 　ぼくはここにいる　きみはここにいる
142 052 ぼくたちはこれから何をしようとしているのかね
142 055 ぼくたちに救いはあるだろうか？
142 058 ぼくたちはやがて　比較的おとなしい分裂病者として
142 092 ぼくたちはどこまでその小さな幸福を守れるだろうか？
142 099 ぼくたちはこれから何をしたらよいのか？
142 102 ぼくたちのそれは悠長ともいえる　それだけ今なら
142 104 おそらくぼくたちは　はっきり　否！　と合図するだけでよいだろう
142 125 ぼくたちはけっして忘れないだろう
147 003 ぼくは黙ってうなずいたであろう
147 019 多分ぼくはまちがっているのだろう
148 023 生き残ったぼくらは、生活の位置がきまったときから、
148 025 ぼくらの骨は錆びていったのだろう。
148 034 ぼくたちは女気なしの部屋で炬燵を囲み、
148 042 ぼくたちは枕を並べてすやすや寝息を立てていた。
148 045 ぼくたちはひとかたまりになって写真を撮った。
148 049 日曜日の海はおだやかにぼくたちをむかえた。

148　053　スマトラ島を偲んでぼくたちは談笑し、賑かに昼食をとった。
155　028　いいえ、ぼくはもう……と口ごもって
158　004　ぼくはとりちがえていた
158　007　ぼくはぼんやりしていた
158　019　ぼくははうっとりと
158　041　ぼくはきみに倣って
163　005　ぼくらは崖に立っている
163　020　ぼくらの翼で
164　014　ぼくらの関係があいまいだからだ
164　016　……ぼくの一生は詩の困難でやや暗い
164　019　ぼくらは闇の物象の
164　023　ぼくは喋べらなければならない
164　030　ぼくらはみだらな存在だ
165　013　ぼくたちの間にはどんな逆転もありえないのだから
165　031　ぼくたちは理解しあっていた
166　032　ぼくはもう死んでいるのかもしれない
167　076　ぼくたちのライフを蝕み
170　023　ぼくの痩せた掌に詩の玉を乗せてくれたら
174　011　この三十年間、ぼくはきみに一度も電話などしたことがない、ちょっぴり心が痛み、それはなぜかと考え出すと、疑
174　017　ぼくはきみとたった一ぺん打った碁のことをときどき思い出していた。
174　019　ぼくは黒を持ち確実を三隅を占拠したが、中央の白が厚く、ずるずると敗けてしまい
174　026　いまでも下手な碁打ちであるぼくは考える
174　028　ぼくの考慮のおよばぬところが
175　004　ぼくは猫にむかって
175　009　ぼくたちは別々に死んでしまうのだろう
175　015　きみとぼくは同じ一枚の画面の中にいる
180　022　夢の中でぼくに出会ったら
180　031　ぼくは「形相」を
180　055　ぼくらの日日は過ぎつつあり
181　038　ぼくの血を少しあたためたい
186　034　ひょっとすると廿六年前の卅四歳のぼくが、いまのぼくを見ていたかも……
186　038　ええ　ぼくは詩人ですから
186　041　どうしてきみにわかる？　なぜ今までぼくが新幹線に乗らなかったか？
186　046　ぼくを理解しようなんて、あきらめたほうがいいよ
186　054　ぼくは無意識のうちに隠れ場所をさがしている
186　057　それがぼくの席なのだ
186　061　ぼくを媒介にして光線が変ること
186　074　（ぼくらの人生だって

ぼく　僕
004　007　僕は新らしい贅沢な船の設計について
013　024　僕は太陽のやうに逃げなければならん
054　003　僕らはもう会うこともないだろう

054　005　僕らの行手は暗いのだ」
054　009　死地に赴く僕たちに
054　018　死ぬことからとりのこされた僕たちのうえに
054　021　「僕たちは都市をつらぬく濁った河にそって
054　028　僕ははっきり憶えている
054　034　今でも僕は橋の上にたつと
054　039　だが僕は最初の路地で心弱くもふりかえる
054　040　「僕はここにいる　君がいないところから
054　042　ここにいる僕はここにいない」と……
054　050　僕は毎晩のように酒場のテーブルを挟んで
054　056　Mよ　僕たちに君の高さが必要なのだろうか？
054　062　ペテルスブルグの青年が僕たちに告げたことを……
054　077　僕はなんにも見落しはしなかった
054　085　鍵は僕が失敬した　そしてもう決して返しはしない」
054　088　君たちは僕に背中をむける
054　091　僕は知っている
054　093　そうだ　これで僕の孤独も充分というものだ
054　096　まるで僕たちに呼びかけるかのような樹木のそよぎ
054　103　だから僕がとくに眼ざめるとき
054　119　僕はひとり残される
054　127　僕は突如白熱する
054　128　僕はせきこみ調子づく
054　129　僕は眼をかがやかし涛のように喋べりかける
054　150　僕の手で捩られて
054　152　塩の匂いのする僕の体臭
054　157　憐むべき君たちの影にすぎぬ僕は
054　160　いつの日か　僕らの交す眼ざしや
054　166　僕らの家の戸口を大きな拳で敲く朝のことを……
095　015　誰だって僕のように淋しい夜道を走るだろう

ボクサー
147　014　オーバーウェイトで引退したボクサーみたいに

ぼくじょう　牧場
103　003　緑の牧場は消えうせたか

ほぐす
039　031　ゆるい流れが髪をほぐす

ぼくたち
011　017　ああ　ぼくたちは幸福である
050　017　「それがぼくたちの古い処方箋だった」と呟いて……
063　029　ぼくたちは汚れを知らぬ微笑をうかべる

063　030　ぼくたちが生れるずっとまえからそこにあった微笑を！
070　022　ぼくたちを閉じこめている格子は
070　033　一日を一年のように暮しているぼくたちには、
070　035　ぼくたちの地平線は
088　015　わけへだてのないぼくたちのあいだに
088　022　どのようにぼくたちの大地に暗い影を落すのかも
088　053　ぼくたちの物語を
088　071　ぼくたちに語りかけてくるよ
088　073　太陽の涙から生れてきたぼくたちの
088　079　大きな声でうたうぼくたちの歌に
100　079　ぼくたちが出会う場所は
100　081　ぼくたちが　さらに遠くの世界に眼をやるとき
141　016　ぼくたちはお互の影でさえない。
142　045　ぼくたちは世界の片隅でふさぎこみ
142　048　いずれにしても　ぼくたちの多くは　まだW.H.オーデンの
142　052　ぼくたちはこれから何をしようとしているのかね
142　055　ぼくたちに救いはあるだろうか？
142　058　ぼくたちはやがて　比較的おとなしい分裂病者として
142　092　ぼくたちはどこまでその小さな幸福を守れるだろうか？
142　099　ぼくたちはこれから何をしたらよいのか？
142　102　ぼくたちのそれは悠長ともいえる　それだけ今なら
142　104　おそらくぼくたちは　はっきり　否！　と合図するだけでよいだろう
142　125　ぼくたちはけっして忘れないだろう
148　034　ぼくたちは女気なしの部屋で炬燵を囲み、
148　042　ぼくたちは枕を並べてすやすや寝息を立てていた。
148　045　ぼくたちはひとかたまりになって写真を撮った。
148　049　日曜日の海はおだやかにぼくたちをむかえた。
148　053　スマトラ島を偲んでぼくたちは談笑し、賑かに昼食をとった。
165　013　ぼくたちの間にはどんな逆転もありえないのだから
165　031　ぼくたちは理解しあっていた
167　076　ぼくたちのライフを蝕み
175　009　ぼくたちは別々に死んでしまうのだろう

ぼくたち　僕たち
054　009　死地に赴く僕たちに
054　018　死ぬことからとりのこされた僕たちのうえに
054　021　「僕たちは都市をつらぬく濁った河にそって
054　056　Mよ　僕たちに君の高さが必要なのだろうか？
054　062　ペテルスブルグの青年が僕たちに告げたことを……
054　096　まるで僕たちに呼びかけるかのような樹木のそよぎ

ぼくら
008　018　ぼくらにもまたきみたちにも

050　006　ぼくらは暗い酒場の椅子のうえで、
057　008　それでもぼくらが生きているとは信じられなかった
057　010　ぼくらに一枚の絵皿を見せたことがある
073　013　ぼくらは白衣の亡霊となって
073　022　ぼくらを運び去るものは
074　002　ぼくらの船を迎えるものはなかった
074　008　これがぼくらのサイゴンだった
074　011　ぼくら兵士の苦しみは
074　012　ぼくら祖国の苦しみだったろうか
074　024　ぼくらの細い咽喉にあてたまま
078　015　ぼくらはいかにして
078　018　ぼくらはむなしく大空に
079　013　ぼくらの船は
079　019　ぼくらは黙黙と逃れ去るだろう
079　024　ぼくらが望むのは
079　030　ぼくらは水平線をこえねばならない
081　005　ぼくらの船は
081　014　ぼくらを生んだ七つの近代都市が
081　016　ぼくらはすでにこの歴史の内では死んだ者
081　023　ぼくらではない
081　027　ぼくらをしっかり抱きしめているのは
096　014　ぼくらを昏倒させる原色はなんだろう？
100　004　うなだれて　ぼくらを待っているバスに乗った
100　020　ぼくらの共同社会からきりはなされていった
100　035　ぼくらの死から誕生にいたる
103　031　きみが見た大きな虚無はふかくぼくらをひきつける
105　002　ぼくらの大地は黒くふくらむ、
105　009　ぼくらのゆくてを曇らせるものは、
105　012　戦争は失敗し、ぼくらの国は生きのびてきた、
115　008　ぼくらのこころに
148　023　生き残ったぼくらは、生活の位置がきまったときから、
148　025　ぼくらの骨は錆びていったのだろう。
163　005　ぼくらは崖に立っている
163　020　ぼくらの翼で
164　014　ぼくらの関係があいまいだからだ
164　019　ぼくらは闇の物象の
164　030　ぼくらはみだらな存在だ
180　055　ぼくらの日日は過ぎつつあり
186　074　（ぼくらの人生だって

ぼくら　僕ら
054　003　僕らはもう会うこともないだろう
054　005　僕らの行手は暗いのだ」

054　160　いつの日か　僕らの交す眼ざしや
054　166　僕らの家の戸口を大きな拳で敲く朝のことを……

ポケット
009　004　ポケットを膨らませる少年は
020　004　ポケットに捕へたのち
061　120　ポケットのマッチひとつにだって
124　026　吊皮につかまる両手をポケットに入れたまま

ほけん　保険
155　037　幾重にも保険をかけているが

ほこう　歩行
100　030　こころよい追憶にもどってゆく歩行者のように
192　008　わたくし、とは誰だったのだろう？　歩行の方向をきめている海の

ほこうしゃ　歩行者
100　030　こころよい追憶にもどってゆく歩行者のように

ほこり　誇り
150　037　「本質的に我々が誇り得るものは生理以外に在り得ない、
150　046　「誇り得るもの」を失ったとさとったとき、彼はこの世から転向していったのだ。
150　047　我々が生きのびたことで誇り得るものが、
184　014　たいへん誇りにしている彼女は

ほし　星
001　012　星達のさざめきの蔭から
016　004　星にとびちる音（ね）をふんで
017　019　星も花もゐなかった
025　002　星の光をめざして噴き上り
039　105　落ちていった星を何と呼ぶのだらう
044　006　仰げば星辰の静かな明け暮れ
053　057　永遠の星　花　鳥　樹　魚などの
054　036　「星のきまっている者はふりむかぬ」
061　103　やがて星がきらめきはじめるね
061　154　あなた自身が見すてられた天上の星であることを……
061　163　星のきまっている者はふりむこうとしない。
061　166　星のきまっている者の、空にまたたく光のために。
063　024　ぼくが暁の星だとしたら
064　027　ーー星のない夜には希望がない、
065　034　墜ちゆく星の、最後のまたたきが
065　048　星も月もない夜、毛布にくるまった男は
069　010　きらりと光るひとつぶの星があった

070　013　とおい星、ちかい星のひとつひとつにみいっている、
078　021　小さな南十字星のまわりを
104　012　夜空はたえまなく星を降らせている
106　029　むやみに明るい星空があり　意味なく敏感な宇宙があり
115　009　まだ燃えている彗星の
126　001　「太陽や月や星は
126　006　いずれは太陽系の星のどこへでも
128　084　あっちの星
128　085　こっちの星が落ちていく
128　088　一つ星の大将
133　026　暗天の星にみちびかれて
152　011　無数の星の悲鳴を耳のなかに残すから
157　007　星と星とのあいだには
163　015　まがまがしい双つ星は
164　007　夜空の星たちが笑う
169　019　満天の星からの合図に
170　019　やがては星に昇天していく光の粒は
182　017　星座の歌に耳を傾けていると

ほしい
038　017　でも音楽だけはいつでもやってゐてほしい　と
055　052　ああ　おれは雨と街路と夜がほしい
125　010　悔恨をいやす運動がほしい
155　033　ほしいもの
181　036　ナチュラル・チーズとクラッカーがほしい
188　074　調べられたら、調べてほしい。

ほしい　欲しい
017　015　あの花が欲しいなと呟くと

ほじくり
001　002　雲の涯をほじくり

ほしぞら　星空
106　029　むやみに明るい星空があり　意味なく敏感な宇宙があり

ほしたち　星達
001　012　星達のさざめきの蔭から

ほしょう　歩哨
125　015　歩哨はいつも広場の明るい日ざしのなかを

ポスター

006　013　それから赤い排日ポスターを

ほそい
052　006　ほそい咽喉に流しこんでいる姉さん！
054　109　大学生のほそい瞳の奥に描かれてしまう
062　022　あなたのほそい指が
066　020　かれは溜息のほそいけむりをもらした。
070　028　ぼくのほそい頸にまきついて、
083　008　ほそい声で虫がないている
089　028　北風がプラタナスのほそい枝を鳴らして
099　001　紺の半ズボンからほそい脛をのばし
101　022　ぼくのほそい指は
116　012　ほそい梅の小枝は
177　018　梢のほそい技をうち鳴して

ほそさ
104　010　愛と憎しみに撃たれた裸身のほそさに

ほそぼそと
058　011　そこにはジャズがほそぼそとながれ

ほそらせ
148　016　愛は身をほそらせ、日々の仕事は疲れをつのらせる。

ボタン
061　121　ちぎれたボタンの穴にだって

ぼち　墓地
053　025　こんなに寒い墓地なのに
053　046　墓地のしめった黒い土をみつめながら
073　014　静かに凪いだ墓地のうえを
188　062　その反対に、葬儀屋や墓地などを見学しながら、

ほちょう　歩調
028　050　ただそこに時代の速度乃至歩調が見えてくるだらう

ぼっかり
002　002　―ぼっかり

ほっする　欲する
010　003　有効なスピイドについて考へることを欲する少年は一個の白い帽子をかぶってゐる
033　001　一本の茎は清浄な水を欲する
178　001　欲する処にしたがい

178　002　欲する時に
178　003　欲するように死ぬ

ほっそりした
046　042　ほっそりした川のやうに渝らぬ月日を行くことが出来る

ほったん　発端
053　052　なんでも終末があって発端があるのでしょう

ほっつき
177　009　どこをどうほっつき歩いたか

ほっと
183　027　誰でもほっと深い息を吐く

ほづな　帆綱
080　009　手ごたえもなく、切れた帆綱から

ほっぽう　北方
026　008　食卓は北方に白い布を垂らし
029　009　窓は開かれて北方に青く
035　020　北方のドアを閉ぢて

ポツンと
014　004　つまんなそうにポツンと鳴ってから

ほてった
055　034　ほてった肉体のあいだの
112　022　寝床のぬくもりでほてった身体を　詰まった路面電車に積みこんで

ホテル
055　022　安ホテルの窓から
091　010　劇場やホテルのロビイに立っている寂しい人影からうまれ
160　055　妻も子もなかったかれは　タイムズ・スクエアに近い安ホテルの一室に住み
170　008　ホテルの部屋から戸外へとさまよい出た

ほどう　舗道
085　002　舗道のカーヴにそってながれる
128　003　割りつけられた舗道の

ほどく
176　002　繃帯をほどくように

ほどこし　施し
112　028　敵からどんな施しを受け　どんな賠償を支払ったか

ほとばしる
154　011　命の水がほとばしる

ほとり
030　026　零囲気のほとりに佇んでいる白いもの
033　016　花のほとりに水を
038　021　その下の澄んだ水のほとり
043　002　水のほとりでひくくつぶやく
046　041　模糊とした深淵のほとりから離れ

ポニィ
021　009　木製のポニィの
021　013　ポニィに乗って

ほね　骨
011　004　空が濡れる雫が肋骨をたたき
020　009　骨のかたちを残して去り
023　001　磨かれてゐる白い骨の柱に
024　004　けてゐる　寝床に散らばった怠惰な骨の中から　陰鬱な眼球
031　022　机の下から灰や骨などを集めて
039　043　わたしの骨は涸れてゆき
047　009　頬骨がつめたい空気のなかで尖ってくる
054　092　その平たい背中には背骨がないということを……
056　005　彼の病んだ肋骨のなかを
056　009　アーク灯のかげで多くの骸骨が
070　039　喰いちらした獣肉の小骨や
070　055　骨の手風琴を鳴らすのは。
076　016　血の骨よ血の肉よ血の花よ
086　012　白い骨
087　010　いかにして食えない骨を食わせるか？
087　012　いかにして食えない骨を食うべきか？
087　019　いかにして食えない骨を食うべきか！
101　007　いまはきみたちの肉と骨がどこまでもすきとおってゆく季節だ
101　041　白くさらした骨をふきよせる夕べに
106　044　すべての生きもののうちで　最も強くてしなやかな骨だ
112　015　敵にむかい黙々と出撃し　一夜あければ骨となる
119　009　孤独の骨は
135　006　水漬く兵士の納骨堂に
140　024　四十七階の痛む背骨がゆれている
148　025　ぼくらの骨は錆びていったのだろう。

167　018　老化した脆弱な骨組に
173　029　頭蓋骨を射ちぬかれて死ぬ一人の男
182　009　しなやかな背骨がなくとも
188　057　昭和の御代に死ぬなんて、愚の骨頂。
192　019　助かった！　まだ死にたくはない。眼は真珠に、骨は珊瑚になったとかいう、五尋の海底の父になるなんてごめんだ

ほねぐみ　骨組
167　018　老化した脆弱な骨組に

ほのお　炎
004　003　炎は昆虫のやうに翅をならす
023　020　澄んだ褐色の眼を出はいりする憎悪の炎よ
037　002　しづかな炎のむれが
039　127　小さな炎が消えてしまふことは望ましい
039　148　炎と心の伝説を歌ひ
054　020　なぜ灰と炎が君を滅ぼす一切であったのか？
077　021　青白い記憶の炎につつまれて
081　015　炎上していた
089　022　一瞬　ストーヴの炎が暗くなり
095　006　それらの炎のなかで
096　001　ミロはローソクの黄ろい炎で
127　021　炎天下……
152　030　美しい炎をあげて燃えあがり
173　013　地獄の炎のなかで増大していく

ほのかな
179　010　ほのかな温みが残っていた

ほのかな　仄かな
192　021　あやかしとも気づかず、仄かな白い光の点線に導かれ、

ほのかに　仄かに
192　016　震えている足許に眼をおとすと、白い四角の標識に、明りが仄かにともっていて、

ほの白く
130　003　河原にほの白く浮んでいる

ほばしら　帆柱
080　018　いつまでも折れた帆柱を抱いているかぎりは
103　011　帆柱や舵や海図や羅針や救命ブイや銛や……

ほはば　歩幅
177　028　どう歩幅をあわせても

ぼひょう　墓標
073　011　墓標のように番号をつけた煙突がならび

ほほ　頬
009　008　薔薇色の頬に葉脈が透けてくる
039　027　しぜんに頬がぬれてくる
039　124　かれらの葡萄色の頬を打て
042　017　ひろい頬ゑみをうかべてあなたはたつ
047　009　頬骨がつめたい空気のなかで尖ってくる
052　010　あなたが男を誘惑するはずだった可愛いい頬の黒子のことを
052　017　あなたの可愛いい頬の黒子のことを
061　147　あなたの褪せた追憶の頬に、かすかに血のいろが浮ぶ。
106　015　バラ色の頬はあせても　不幸な五十七人がそろって
176　014　少女の頬と肩になぶりかかる
180　004　いきなりぴしゃりと頬を打たれた

ほほえみ
152　017　澄んだほほえみを忘れちゃいけない
183　023　すこし足の不自由な老人がほほえみかける

ほほえみ　頬ゑみ
042　017　ひろい頬ゑみをうかべてあなたはたつ

ほほえみかける
183　023　すこし足の不自由な老人がほほえみかける

ぼやけて
186　031　過去と現在の空間がぴたりと重なり、その輪郭がずれてぼやけていく

ほり　彫り
025　022　動くこともない顔を彫り

ほりわり　掘割
055　063　おれには掘割のそばに立っている人影が

ほる　掘る
143　021　どこの浜辺の砂を掘るのか

ほろび　滅び
039　097　滅びに至る門と
048　015　まるで滅びることのないもののように
138　017　滅びようのないかたちがなつかしい

ほろぼす　滅ぼす
054　020　なぜ灰と炎が君を滅ぼす一切であったのか？

ぼろぼろ
167　062　ぼろぼろになった壁面にまた心理面に

ほん　本
010　016　新しい射手よ　一本の樹のみを監視するのは賢明ではない
025　038　笑声をたてる一本の蝋マッチ
027　007　一本の毛髪もふくめて
028　001　一本の花の茎もない空の下に
028　044　数本の太い樫の木がゆれる樫の葉のざわめき
033　001　一本の茎は清浄な水を欲する
051　012　病んでいるのは日本じゃないか。
052　015　あなたは本当に暗い地下にひとりで住んでいるのですか
058　027　その孤独のこだまのなかには淋しさの本質がちょっぴりあります
070　051　あなたの五本の指はどんな兇器よりも残忍で、
071　031　自然のなかの罠は本当の罠なのだと
077　002　金の縁とりをした本のなかで
077　037　金の縁とりをした本のなかに閉じこめられて
092　002　本屋は
092　005　ぬすんだ本の味は
092　009　あの本屋は洋裁店になった
093　004　本と煙草とウィスキーの瓶をかかえて
106　043　詩人の本質は変らない　それは目にみえない奥にあって
112　012　鍵穴や本のあいだにしこたま隠しこんでる狐め
112　049　おれたちが本当に別れるのはこれがはじめてだが　ユダの接吻はいらない
124　030　六十本の煙草を灰にしたところで
128　019　資本の下水の養分を吸って
129　013　白紙の本をめくる
142　113　歴史を作る者をたえず脅かしつづけてきた基本的なイメージである
150　037　「本質的に我々が誇り得るものは生理以外に在り得ない、
150　038　又本質的に個性的なるものも」と言ったのは、
156　001　日本人だから
156　037　わが日本語の「愛」は
160　074　ところで　日本の社会の日蔭を歩む
166　010　一本の煙草を思うままに吸えたら
166　013　いまのきみは一日に六十本の煙草を吸い
180　020　夢のなかで恐怖に出あわないのが本当の年寄りなんです
184　012　日本人妻の間にできた子供である
184　015　「ヒロシ」という日本名の
186　019　杉本春生、相良平八郎に会ったよ

188　008　歯も、先日、奥歯が一本、根が痛みはじめたので、
188　019　一九五八年に、日本で、
188　084　日本の重文とされている民家への憧れが、
192　010　どこまで行っても、一本の松にも出遭わず、平坦な黒い砂地がつづいているばかりで、
192　011　もしかすると、近づくにしたがって、遠ざかっていく海なのかもしれない。こんなところは、日本中のどこにもあり

ほんしつ　本質
058　027　その孤独のこだまのなかには淋しさの本質がちょっぴりあります
106　043　詩人の本質は変らない　それは目にみえない奥にあって
150　037　「本質的に我々が誇り得るものは生理以外に在り得ない、
150　038　又本質的に個性的なるものも」と言ったのは、

ほんしつてき　本質的
150　037　「本質的に我々が誇り得るものは生理以外に在り得ない、
150　038　又本質的に個性的なるものも」と言ったのは、

ほんと
058　029　これがほんとうの東京の街路ですが
084　005　つくり笑いにほんとうの涙をうかべ
098　007　「ここは　ほんとに気持のいい場所ね
142　001　「もう長いこと　この国のほんとうの歴史は
160　019　「お仕事は？」と訊かれ　ほんとのことを口にしたがらない
170　010　「何も書けぬ」がほんとうのところだ
172　007　ほんとが嘘になるのに
180　037　ほんとのようなうそになるが
186　037　ほんとに「見ていた」なんて？
186　040　ほんと？　まさか！
188　032　（ほんとうに、失礼しました）

ほんとう
058　029　これがほんとうの東京の街路ですが
084　005　つくり笑いにほんとうの涙をうかべ
142　001　「もう長いこと　この国のほんとうの歴史は
170　010　「何も書けぬ」がほんとうのところだ
188　032　（ほんとうに、失礼しました）

ほんとうの　本当の
071　031　自然のなかの罠は本当の罠なのだと
180　020　夢のなかで恐怖に出あわないのが本当の年寄りなんです

ほんのりと
137　001　入日の色がほんのりと

ほんのわずかに
037　005　ほんのわずかに震へる根を支へてゐる

ポンポン
008　005　ジライ花を観賞するときも　空にはポンポン花火が上

ほんや　本屋
092　002　本屋は
092　009　あの本屋は洋裁店になった

ぼんやり
050　003　遺言執行人が、ぼんやりと姿を現す。
051　024　ぼんやりとデス・マスクが肉眼に見えてくる。
054　046　ぼんやり立っていたことがあったか
056　018　橋にもたれてぼんやり煙草をすっている
058　007　私はぼんやりと空を眺めます
061　078　ぼんやり眼を水面にむけてとおるのを－－
061　149　ぼんやり近づいてきて、黙ってすれ違い、
061　189　ぼんやり空を眺めます。
066　018　たちのぼる煙りのなかの女をぼんやり眺めていた、
100　050　ぼんやりと姿を現すひとりの遺言執行人として……
158　007　ぼくはぼんやりしていた
186　087　時間を忘れてぼんやりするのだった
189　041　ぼんやりとしか見えてこない

ぼんやりして
158　007　ぼくはぼんやりしていた

ぼんやりと
050　003　遺言執行人が、ぼんやりと姿を現す。
051　024　ぼんやりとデス・マスクが肉眼に見えてくる。
058　007　私はぼんやりと空を眺めます
100　050　ぼんやりと姿を現すひとりの遺言執行人として……
189　041　ぼんやりとしか見えてこない

ほんりゅう　奔流
109　005　生命の奔流は丘をくだり

ポーズ
072　024　独断批評家の口ぶりもわるくはないし、皮肉な記者のポーズも捨てがたい
106　002　みんな同じポーズで　いっせいに眼を

ボート

007　013　阿片の軽艇（ボート）は霧の中へ青い泡を残して去るべく一人の少女を誘拐
057　015　ある日　ボートを水にうかべ
059　003　明るい海岸のボートへ連れさっていった
059　016　海岸に捨てられたボートを眺めていると
059　023　おもいみだれた母と美しい少年のボートが
073　025　見張りのボートが現れ

ポーランド
105　011　九月ポーランド、十月スエズ、ハンガリー、

ボール
099　002　逃げるボールを追ってゆく
099　007　そこで　力いっぱい投げたボールが
099　013　小さな四つの運命は　四つのボールのように
173　004　超スローボールを空振りしたあとのような

まあ
007　014　する《されるのはまあ仕方がないでせう》
088　061　まあお髭がいたいわと
151　011　身長百七十四糎体重七十粁はまあまあだが

マアチ
003　008　扇の外をマアチが風と共に過ぎる

マイ・ハウス
184　018　わたしの家（マイ・ハウス）といったりしている

まいおち　舞い落ち
172　002　木の葉のように舞い落ち

まいしゅう　毎週
188　012　毎週一度通いつづけています。

まいそう　埋葬
050　022　埋葬の日は、言葉もなく

まいた　巻いた
011　014　先づ首に巻いた蛇を外せ

まいって
137　003　悲しい体にぞっこんまいって

まいとし　毎年
188　035　毎年一人ずつの勘定だから、

マイナス
061　085　マイナス二を加えた存在だ
061　087　マイナス二は死でなければならぬ

まいにち　毎日
174　024　ダメを詰めるような毎日を送りながら

まいばん　毎晩
054　050　僕は毎晩のように酒場のテーブルを挟んで
085　023　毎晩たくましい筋肉をもって

まえ
049　011　高いところに立って影の眼を開いてみたまえ
052　020　あなたの未来の時計の振子がうごくのをまえにして

055 002 おまえはただ遠くへ行こうとしていた
055 005 おまえの濡れた肩を抱きしめたとき
055 013 背負い袋のようにおまえをひっかついで
055 026 おれとおまえのはかない希望と夢を
055 038 おまえはおれの責任について
055 039 おれはおまえの責任について考えている
055 041 おまえは禿鷹風に化粧した小さな顔を
055 046 おまえは愚劣な謎をふくんだ微笑を浮べてみせる
058 053 一杯のコーヒーをまえにして考えようと思うのです
061 082 「おまえはからっぽの個だ
061 083 おまえは薄暗い多孔質の宇宙だ
061 084 おまえは一プラスーに
061 088 おまえの多孔質の体には
061 090 おまえのからっぽの頭には
062 042 輝く海をまえにして
063 030 ぼくたちが生れるずっとまえからそこにあった微笑を！
064 020 ーーおれはおまえをいれる立棺だよ。
065 040 わたしはおまえの血を飲みほした」
069 027 そこには　さめたスープをまえにして
070 021 あなたの指は何もつかまえることができない。
070 027 おまえの熱い血の管は
070 045 おまえの胸をおしひらく。
070 057 おまえはなにもかも諦めたようにみせかけて、
072 007 うす緑の大地、美しいカーヴを描く競走路をみたまえ
072 009 すばらしく透明な砂埃の空をみたまえ
072 012 競馬場のかたちに作りかえてみたまえ
075 014 死のうと思うまえに
078 014 みたまえ　風のまにまに
088 002 おまえは仔兎のように
088 006 あどけないおまえの声は　いつもぼくに
088 009 ぼくが知っているのは　おまえが生れる前のことだ
088 010 おまえが生れてからのことは
088 011 なんでもおまえの方がよく知っている
088 024 おまえの微笑は
088 030 いつまでもおまえに向きあっていたいのだよ
088 031 おまえは小さな手で
088 039 そうしておまえは自分のまわりに
088 043 おまえの世界には
088 059 おまえを高く抱きあげて
088 062 おまえが言い
088 069 おまえと歩むこの道は
088 078 よく舌のまわらぬおまえの節廻しにあわせて
096 010 とあるバーのドアを押して入ったと思いたまえ

098　009　「寝るまえにもう一杯いかが？
112　019　おまえは今朝も蛇口のまえで
112　027　おれたちがどんなに大きく敗れ　おまえたちがどんなに小さく勝利したか
112　031　まっすぐこちらを見ながらおまえは何も見ていない
112　035　それがおまえの獲得した一切なのか
112　037　口真似のうまいおまえの仲間は
112　046　運命は一瞬の光でおまえたちを数える
146　033　「あの女だ！（ザッツ・シー）　早く掴まえて！（ゲット・ハー）」
151　021　とことんまで生きる気なんだろうおまえは
151　022　罰を受けつづけることに満足を覚えるマゾヒストなんだおまえは
151　029　おまえをおとうさんと呼んでいる娘を裸にし
151　042　おまえは誰にも似ていない
154　015　さすがにものいわぬ扉のまえで
155　014　両手でつかんでうしろにやってしまえば
157　005　おまえは　そのまま詩だ
159　010　「おまえも達者でね」
167　051　おまえはうやうやしく何を葬ってきたのか
168　012　変幻するおまえの姿に出あったから
172　016　影ばかりつかまえてきた
180　024　貴方に「女の子の心理」が判んなくたってあたりまえなんです。貴方は心理学やってんのじやないのでしょうか
193　011　過ぎてしまえば幻の

まえ　前
038　008　午前の霧にぬれながら
053　022　いつのまにかわたしはお姉さんのお墓の前に立っています
054　141　すべての人々の面前で語りたかった
088　009　ぼくが知っているのは　おまえが生れる前のことだ
090　024　わたしが生れるずっと前からそこにある
123　012　群集は前進する
127　010　三十年前か
127　012　生れる前か
145　012　孤独な高い壁の前で
148　024　すこしずつ前かがみになっていき、
150　080　地震か何かの前兆かもしれません。
155　001　前にあるものは
155　013　前にあるからで
155　023　前にあるものを
155　032　いつまでも前にあって
156　034　理不尽な契約を前にして
160　022　（公衆の面前では　場違いな人間というのと同じだ）
160　037　詩人の気前と品位にとっては　小さな犠牲で
160　057　心臓発作で倒れ　救急車が到着する前に息をひきとったという
171　005　女は狂う寸前の眼つきをして

174　002　一年ちょっと前、
174　020　会心の笑みをもらすきみを前にして、ひどく口惜しい思いをした。
179　018　悪魔の夜がくる前に
181　037　「無が一切となる前に」
183　019　今日の出来高と終値を前にして
183　026　駅前通りから暗い小道に曲ったところで
186　015　以前に広島に行ったことがあるとか？
186　027　廿六年前に広島で撮った写真を、懇親会の席上で相良君から見せられてね
186　034　ひょっとすると廿六年前の卅四歳のぼくが、いまのぼくを見ていたかも……
188　023　椅子に腰かけて、前こごみに、
188　073　四年遅れのこの返信が、四年前のそれと、どう違っているかを、
192　004　夜明け前の微光があたりをくまなく覆っていて、どこへ行こうとしているのか、
192　025　必死の思いで、前方の真っ暗闇を凝視するが、もう何も見えぬ。

まえかがみ　前かがみ
148　024　すこしずつ前かがみになっていき、

まえこごみに　前こごみに
188　023　椅子に腰かけて、前こごみに、

まえにして
052　020　あなたの未来の時計の振子がうごくのをまえにして
058　053　一杯のコーヒーをまえにして考えようと思うのです
062　042　輝く海をまえにして
069　027　そこには　さめたスープをまえにして

まがいもの
103　017　まがいものの甲冑に身をかためた冒険家でもなければ

まかせて
121　005　心配事は他人にまかせて
155　017　閑人にまかせて

まがった
041　090　ドアから出て一つの街角をまがっただけで
054　072　平然としてまがった道をゆく時だ！」
117　007　まがった黒い影をつけたまま
152　022　折れまがった用済みの黒い頭と

まがった　曲った
183　026　駅前通りから暗い小道に曲ったところで

まがって

023　004　公園をまがってゆく縞のズボンたちを

まがって　曲って
146　012　どの角を曲ってみても

まがってくる　曲がってくる
041　028　プラットフォームが岬のやうに曲がってくる

まがまがしい
163　015　まがまがしい双つ星は

まがり
025　029　軟らかくまがりくねったのは時計
028　068　そこにある雑音はまがりくねって
041　057　街角をまがり窓をとほりぬけて
095　012　まがりかどにオレンジの外燈がひとつ

まがりかど
095　012　まがりかどにオレンジの外燈がひとつ

まがりくねった
025　029　軟らかくまがりくねったのは時計

まがりくねって
028　068　そこにある雑音はまがりくねって

まがる
061　046　街角をまがる跫音のように

まかれつつ　播かれつつ
044　010　新らしい種子が新しい土地に播かれつつあることを。

まき　撒き
001　003　珊瑚を撒き散らし
026　012　黄昏の中に香料を撒き

まきちらし　撒き散らし
001　003　珊瑚を撒き散らし

まきついて
070　028　ぼくのほそい頸にまきついて、

まぎれ

042　002　夜はひそかに　窓のあたりの気配にまぎれ
089　037　停車場へいそぐ通行人の影にまぎれ

まく　巻く
048　027　トルソをとり巻く
128　072　とぐろを巻く

まく　幕
054　076　幕がおりた舞台裏から……
101　017　ぼくはすこしずつやぶれてゆく天幕のかげで
150　041　今にしておもえば、真実を衝いた薄気味わるい言葉である。

まくら　枕
148　042　ぼくたちは枕を並べてすやすや寝息を立てていた。
151　034　千人斬りとか五千人枕とかにくらべたら

まくれた
061　097　厚くまくれた歯のない唇をひらき

まけ　負け
013　006　ネムの木は負け惜しみを云ふ
052　028　生きねばならぬこの賭はわたしの負けだ
072　043　負け馬に賭けてきたぼくのような男には）

まけうま　負け馬
072　043　負け馬に賭けてきたぼくのような男には）

まけおしみ　負け惜しみ
013　006　ネムの木は負け惜しみを云ふ

まけて　敗けて
174　019　ぼくは黒を持ち確実を三隅を占拠したが、中央の白が厚く、ずるずると敗けてしまい

まげられる
101　023　どの方向にでもまげられる関節をもち

まごころ
136　011　めくらのまごころ

まことに
046　006　あなたはまことに感じてゐるのか

まごまごしてゐる

013　023　まごまごしてゐると日が暮れる

ましか
150　025　すこしはましかと思っていたその「すこし」が見当らなくて、

まじった
093　024　ニコチンとアルコールのまじったいい匂いがする
112　020　緑いろの歯ミガキにすこし血のまじった唾を吐いた

まじって
041　050　人影にまじって　小刻みに人々に做ひながら
065　032　ひと群れの鶴にまじって、永遠の刑罰を
100　002　人影にまじって　新聞紙のうえをあるいてゆく

まして
047　005　耳をすましている中枢に
053　044　まして喜びなんか
056　017　まして夢を見ているわけでもない
057　020　鳥はいないし　まして人影はない
062　051　あなたはじっと耳を澄ましていますね
065　043　どの窓も、耳をすましていた。男は
088　080　みんなじっと耳をすましているのだから
161　017　ましてながく生きているというのなら
163　017　必死に輝きをましている
166　016　自由の意味をもてあましている

まじょ　魔女
065　038　いたずらな月が生んだ魔女は

マスコット
146　010　マスコットの猫が欠伸をしていました

まずしい　貧しい
061　180　わたしは貧しい、
123　008　貧しい者の天国にも……
167　041　少年期の貧しい体験から

まずしく　貧しく
061　062　出発の時よりも貧しくなって、

まずしさ　貧しさ
106　026　その貧しさを隠すために　せめて口髭をたくわえておくべきだった
162　008　貧しさの樹齢そのものと化してから

ますます
110　009　秋はますます深くなるばかりだ
128　069　ますます渇いてきた
166　015　ますます下手になる詩に頭をひねったりしながら

マゾヒスト
151　022　罰を受けつづけることに満足を覚えるマゾヒストなんだおまえは

またいで　股いで
041　094　あの人たちと同じやうに股いでゆけるだらうか

またう　待たう
035　015　一滴の余剰を待たうとおもった

またたき
065　034　墜ちゆく星の、最後のまたたきが

またたく
046　011　いまはしい壁や　むなしい紙きれにまたたく嘆息をすて
048　020　春　夏　秋はまたたくまに過ぎてゆく
061　166　星のきまっている者の、空にまたたく光のために。
078　012　ながい月日もまたたくうちに過ぎさる

またたくうちに
078　012　ながい月日もまたたくうちに過ぎさる

またたくまに
048　020　春　夏　秋はまたたくまに過ぎてゆく

まだまだ
105　015　九月十月には、まだまだ遠い三月。
159　012　まだまだ幼い母のうしろ姿は襖の蔭に

まち　街
023　009　街灯は光をナイフのやうに操って
027　010　荒廃した街の窓だけが眺められ
028　060　都会の屋根の下よ商店街の商人たち
031　009　退屈な街は
036　016　黒の中へ消えてゆく街よ
036　029　迂闊にも醜悪な街の溝の中へ
038　004　いくつかの街と村の屋根をすぎる
038　010　街を見降ろす廊下には

038　029　わづかに街と村の
039　046　遠い街へ走り去るがいい
039　144　化石の街の
040　012　街は傷口を舐めてゐる獣のやうに
041　031　あなたの街灯の滲む光が
041　057　街角をまがり窓をとほりぬけて
041　061　あなたはバスに揺られ　やがて街から去ってしまふだらう
041　090　ドアから出て一つの街角をまがっただけで
041　131　あなたは街の雑閙のなかをとほり
041　137　この街で生きようとしてはならぬ
041　150　街の雑音はあなたの耳を不注意にした
050　020　その声は人影へ、そして街へ、
053　004　街のともし灯も
054　007　ひとりずつ夜の街から消えていった
054　027　そうだ　君がこの街から消えうせても
054　116　彼は唾をはく街燈のそばを通りぬけ
055　004　悲しみの街から遠ざかろうとしていた
055　006　なまぐさい夜風の街が
055　023　おれは明けがたの街にむかって唾をはいた
055　052　ああ　おれは雨と街路と夜がほしい
055　054　この倦怠の街の全景を
055　060　街は死んでいる
057　005　とおいシンガポールの街を歩いたこともある
057　029　東京の街角では
057　043　大挙して街中でなつかしい歌をうたっている
058　010　私は裏街を好みます
058　024　ふるえる電線の街の
058　029　これがほんとうの東京の街路ですが
058　030　この街のどこもかしこも
058　040　街路樹の枯枝に
060　005　そんな街はずれに立っていると
061　006　石でかためた屋根の街の
061　031　さんざめく裏街のどん底で、
061　046　街角をまがる跫音のように
061　067　あなたは灰色の街のなかに帰ってきた。
061　148　日没の街をゆく人影が、
061　187　あてもなく街をさまよいながら、
064　004　ーー明日は明日、と街灯が答えた。
064　030　ーー今日は今日、と街灯が答えた。
067　009　あたたかい街をもつだろう
071　018　街を歩きながら
074　003　夢にみたフランスの街が
088　012　はてしない空　麦畑　街々

089　040　うしろ姿の街角から
091　013　この街に生れてこの街に死ぬ
097　005　サン・ペエル街七十一番地に、永遠に雨を降らせるだろう。
100　008　そして夕ぐれの街は
100　018　あてもなくこの街で生きねばならぬ……
100　045　すこしずつ浮びあがってきた街のなかへ
100　070　精力的な夏は未来の街の方向にひろがっているようにみえた
105　008　街角を静かに走れ、三月。
128　017　冷たいねえ　この街は
128　034　ビル街の闇を
131　004　背をこごめて街中で生き
133　003　人間蜥は街の燈火に誘われる
133　021　いくつもの街衢と大路を過ぎる
145　027　街のまぶたは重く垂れ　東京の暗い夜に信号燈が明滅していた
160　040　コーネリアスは濃霧の街を歩いて帰路につく
172　004　人気のない街道を
173　026　今では街中でも綺麗な娘に出あったりすると
177　024　きみ自身の街路を行かなければならない
179　012　街の雑音からはるかに遠く
183　008　街全体がもひとつぱっとしないのは

まち　町
007　004　煤けた町は古い習慣で壺の沈黙を　それはいつまでも黄色い河の
046　004　石で作られた涯しない屋根の町の
061　016　いくつもの町をすぎ、
064　002　町はあたたかい吐息の下にあった。
064　031　町はあたたかい吐息の下にあった、
065　002　町があった。孤独な
065　046　異国の女のように、町をみすてて
065　055　どの窓にも、町とおなじ大きさの
069　018　とおくの町をゆくように
083　006　町はだんだん小さくなってゆく
084　030　木枯のふく町に
091　002　さびれた国道につづく町工場の
096　009　太陽の町は夜の町　バルセロナの裏町の
101　047　森や田畑やうつくしい町の視覚像はいらない
124　023　歌舞伎町でスロット・マシーンにしがみつき
127　004　アラブの町の
128　001　大手町の　矩形の空に
190　005　母がうまれた町は山にかこまれていて

まちうけている　待ちうけている
071　012　われわれを待ちうけているものは

まちがって
147　019　多分ぼくはまちがっているのだろう

まちかど　街角
041　057　街角をまがり窓をとほりぬけて
041　090　ドアから出て一つの街角をまがっただけで
057　029　東京の街角では
061　046　街角をまがる跫音のように
089　040　うしろ姿の街角から
105　008　街角を静かに走れ、三月。

まちがへたり
011　012　青い花とまちがへたりする

まちこうば　町工場
091　002　さびれた国道につづく町工場の

まちこがれて　待ちこがれて
079　018　永久に待ちこがれている水兵たちから

まちなか　街中
057　043　大挙して街中でなつかしい歌をうたっている
131　004　背をこごめて街中で生き
173　026　今では街中でも綺麗な娘に出あったりすると

まちはずれ　街はずれ
060　005　そんな街はずれに立っていると

まちぶせする　待ち伏せする
177　016　待ち伏せするけはいがある

まちまち　街々
088　012　はてしない空　麦畑　街々

まつ　松
025　005　松が老いてゆく錨のうしろに
094　003　とある松林をぬけて海へでる
148　030　一の宮海岸の近くの松涛閣に集まったのは、
148　044　松林にかこまれた枯芝の庭で、
162　007　松脂くさいにおいを発散し
192　010　どこまで行っても、一本の松にも出遭わず、平坦な黒い砂地がつづいているばかりで、

まづ　先づ
011　014　先づ首に巻いた蛇を外せ

まつ　待つ
017　016　蛞蝓が樹から昇天するのを待つかね
061　074　あなたの足を停め、あなたに待つことを命ずる「現在」に。
065　012　男は待っていた、一体待つことに
065　050　待っていた。一体、待つことに

まっかな　真赤な
081　013　何千年の闇をつらぬいて真赤な雲の火柱がたち

まっかに　真赤に
153　012　真赤にそまった海が見え
189　026　空の海が真赤に煮えたぎっているのを

まっくら
118　007　空はまっくら

まっくら　真っ暗
192　023　七十米と行かぬうちに、白い明りの標識は消え、そこから先は真っ暗である。
192　025　必死の思いで、前方の真っ暗闇を凝視するが、もう何も見えぬ。

まっくろな　真黒な
058　023　劇場は真黒な人を吐き出します
071　017　真黒な人ごみのなかで泣きさけんでいた
073　006　真黒な火煙を吐きつづけていた

まっしぐら
117　011　季節はまっしぐらに

まっしろな　真白な
112　026　真白な花婿の胸をした戦友よ

まっすぐ
080　002　まっすぐ水平線をのばしながら
080　025　まっすぐ海の彼方を指しているから――
112　031　まっすぐこちらを見ながらおまえは何も見ていない
115　006　夜明けの道はまっすぐで長いが
125　009　快楽もまっすぐのぼらなくなった
142　043　自己の経験をまっすぐ語るあなたの言葉は
182　008　欲望の柱をまっすぐ立てる

マッチ
008　002　機関銃はマッチを擦って　乾草みたいな白い雲に火を
025　038　笑声をたてる一本の蝋マッチ
040　017　壁の下でマッチをする男のために
061　120　ポケットのマッチひとつにだって
152　013　紙マッチの軸を台紙からちぎらずに
152　021　紙マッチの台紙には

まっている　待っている
065　016　いつまでも待っているよりしかたがなかった。
065　054　彼は待っているよりしかたがなかった。
100　004　うなだれて　ぼくらを待っているバスに乗った
154　013　待っているのと迷うのと

まっている　待ってゐる
041　016　音を刻み　立止まり　年を待ってゐるやうに
041　052　うなだれて　あなたを待ってゐるバスに乗った

まっている　舞っている
091　011　新聞社の屋上たかく舞っている伝書鳩の

まってゐる
002　014　灰色の鳥をまってゐる

まつばやし　松林
094　003　とある松林をぬけて海へでる
148　044　松林にかこまれた枯芝の庭で、

まつやに　松脂
162　007　松脂くさいにおいを発散し

まつり　祭
017　004　樹の上では祭典が始められ
039　079　かつて地上に祭があったといふ
142　025　秘密警祭の認知　もしくは同意なくして

まつろ　末路
039　098　ナルシスの末路を

まと　窓
001　013　月の窓を窺ってゐる
003　013　窓を開けると雪が踊ってゐる
012　023　スコオルの通過した海の窓から

014 001 ガラス窓から白い手たちが
015 001 窓は明るい海の水で
021 028 円形の窓のない世界から
023 006 実体のない窓窓に雨が降り
025 018 燃えあがる世界の窓の内部から
027 010 荒廃した街の窓だけが眺められ
029 009 窓は開かれて北方に青く
038 019 窓からは
039 082 西方の窓を照らしだす
040 010 窓のそとを
041 057 街角をまがり窓をとほりぬけて
041 140 窓ガラスに反射する日の光で
042 002 夜はひそかに　窓のあたりの気配にまぎれ
048 019 しずかに窓をひらけば
051 007 厚いガラスの窓からは
053 035 風にふかれて開いたり閉じたりする窓があっても
054 154 ネクタイピンでこじあけられた窓の向うがわ
055 022 安ホテルの窓から
055 050 窓の風景は
055 059 イデオロジストの顰め面を窓からつきだしてみる
056 007 今日も都会の窓に灯がともり
061 014 書籍や窓やペンをすてて、
061 222 おびただしい灯の窓が、高架線の上を走ってゆく。
061 223 おびただしい灯の窓が、高く夜空をのぼってゆく。
063 012 窓からさしこむ月光のしたで
064 025 夜と窓とがぴったり重なっても、
064 028 ーー愛のない窓には未来がない。
065 001 どの窓にも、沈黙とおなじ大きさの
065 017 どの窓も、暗く淋しく
065 043 どの窓も、耳をすましていた。男は
065 055 どの窓にも、町とおなじ大きさの
066 025 二階の窓があいて
070 032 この窓のない部屋で
070 047 窓掛をひっぱるのは空気の手、
081 017 夜あけのくる船窓の下の
082 004 この明るい窓枠のなかから
082 015 すると小鳥がたそがれの窓に墜ちてくる
084 008 雨がふってる窓のそとに
088 016 見えない国境をつくっているか
088 025 雪にとざされたぼくの窓や
089 016 暮れてゆくビルの窓や
089 029 窓ガラスを叩いてゆきます
101 025 どこかの国境を守るためではない

101　058　ぼくの行手ですべての国境がとざされ
133　011　おびえた窓枠のかげシャッターのうしろ
142　017　（四つの窓のうち三つが閉じられたままである）
142　038　殺人的な電流装置で閉された国境をやすやす越え
142　047　それから　肩をおとして伏目になるか　面をそむけて窓の外を見るか
145　023　「写真店の窓には曝された肖像の記念写真が　夢こそすべてであると知った時　もう肉体
160　007　恋人と会っては　窓外のすがれた景色に視線をそらして
167　003　東の窓と南の窓が交互に鳴り
167　009　窓ガラスのむこうには
170　006　明るんだ窓に光を失った電燈を消し
172　022　廃屋の窓辺に坐って
176　005　開かれている窓辺の
179　011　蔦におおわれた高窓は
179　028　この窓もこの部屋も
184　021　人と人は人権や国境を越えて
193　012　半世紀は車窓の景色であった
193　015　窓の灯をにじませる夜には

まどがらす　窓ガラス
041　140　窓ガラスに反射する日の光で
089　029　窓ガラスを叩いてゆきます
167　009　窓ガラスのむこうには

まどべ　窓辺
172　022　廃屋の窓辺に坐って
176　005　開かれている窓辺の

まどろんだり
039　048　まどろんだりしたのは

まどわく　窓枠
082　004　この明るい窓枠のなかから
133　011　おびえた窓枠のかげシャッターのうしろ

まなざし　眼ざし
041　046　毅然たる恰好は　悲しげな眼ざしは
054　058　大学生は低い声と思いやりのある眼ざしで話しはじめる
054　160　いつの日か　僕らの交す眼ざしや

まなつ　真夏
114　003　真夏のコンクリートの壁にはりついた

まなば　学ば

171　020　生きることを学ばなければ。

まにあはない
017　038　もう繃帯もまにあはない頃になって

まにまに
042　014　神よ　御身の言葉のまにまに
078　014　みたまえ　風のまにまに

マニラ
057　025　マニラ郊外のドライブウェイを疾走しながら

まね　真似
051　019　寝台のうえに倒れ、死んだ真似をして
112　037　口真似のうまいおまえの仲間は
181　012　サムライの真似をした

まねく　招く
139　002　すすきの穂が遠くからおいでおいでと手招く
142　089　災厄を招くことはない　他人の災難に

まねてゐる
012　014　日傘は貝殻をまねてゐる

まねをして　真似をして
051　019　寝台のうえに倒れ、死んだ真似をして

まばたき
051　032　あの鍵穴はまばたきしない眼……
136　024　計算器のまばたきをする
167　035　まばたきとまばたきのあいだにも
172　009　まばたき一つで風景が変って

まばたき　眼ばたき
098　006　まだ眼ばたきしているやつがいる

まばたきしない
051　032　あの鍵穴はまばたきしない眼……

まはり
021　012　麦藁帽子ほどのプウルをまはり
030　007　グラスのまはりを

まひる　真昼
044　016　大いなる真昼の泉にいそぐからだ。
060　007　真昼の月の下を
061　020　炸裂する真昼の花火を夢みている。
071　041　真昼を暗くする一瞬
084　020　「あんたの夜はあたしの真昼
100　082　大いなる真昼はたちまち翳り
101　040　きみたちは　きみたちの大いなる真昼をかきけせ！
128　035　真昼のように輝かせる

まふう　魔風
180　054　魔風に挑戦するのはあきらめよう

まぶしい
069　008　そこにはまぶしいところがあったんだって
098　025　ぼくはまぶしい「無」の下で自分の手をみつめる
129　017　まぶしい食卓のワイングラスの影と
148　043　朝の光りがまぶしい、
176　024　これ以上まぶしい裸にはなれないのだ

まぶた
145　027　街のまぶたは重く垂れ　東京の暗い夜に信号燈が明滅していた

まぶた　瞼
035　027　瞑目した瞼のうへ
048　010　うすく瞼をとじている憂欝
055　024　疲れた重たい瞼が

まへ
026　017　おびただしい植物のまへで立止まると
028　038　当りまへに動いてゐる摂理の
030　017　水平線はまへに地平線はうしろに
033　021　おまへをとりまく五つのドアである
035　003　おまへたちの舌の上へやってくる
039　030　泉のまへに膝まづく
040　024　東方からおまへのからだを侵しはじめる
041　088　おまへは決して遠くへは飛べぬだらう
041　089　おまへの羽は

まぼろし
038　020　まぼろしのやうな橋がみえ
045　008　眼のまぼろしに妖しく憑かれた
103　012　海のまぼろしに憑かれたかれは

144　010　いさら波打つまぼろしの暗女の里は遠い

まぼろし　幻
023　015　軟弱な地を攅げ夢幻の中から
039　135　ああ幻か
046　050　此処と彼処　それも一つの幻影に過ぎぬことを
051　006　幻影のなかの島嶼……
057　039　はかない幻影よ
059　026　大人になった幻影の子よ
061　004　よごれた幻の都市が聳えている。
061　048　風にとぎれるはかない幻想が
061　053　浪にくずれるむなしい幻影が
061　220　幻の都市に灯がついた、
082　010　消えてはあらわれる幻影の
103　027　おそろしい幻想とレビアタンの住む世界だ
121　012　幻影の女とたわむれる
128　036　幻の顔を
151　039　幻の女からはどんどん遠ざかってしまった
168　012　変幻するおまえの姿に出あったから
185　012　時代への幻滅も
185　014　幻想と化することを証した一人の男が
192　009　あの音は、幻聴かも？　とぎれとぎれに聴えてくるが、
193　011　過ぎてしまえば幻の

まぼろしの　幻の
023　015　軟弱な地を攅げ夢幻の中から
061　004　よごれた幻の都市が聳えている。
061　220　幻の都市に灯がついた、
128　036　幻の顔を
151　039　幻の女からはどんどん遠ざかってしまった
193　011　過ぎてしまえば幻の

まま
015　018　椅子は空虚なままに
016　008　体操着のまま遁走した
029　011　花花も昔のままに白く
032　001　ドアはなかば開いたまま
046　048　どうしていままで忘れてゐたのか
048　011　昨日も今日も　疲れた裸のままでいると
061　153　どうしていままで忘れていたのか、
074　024　ぼくらの細い咽喉にあてたまま
087　006　じっと食器の底をみつめたまま
088　019　きままなぼくの生活

093　002　電燈をつけたまま
100　077　ぼくの空はそのままきみの地上となっている
117　007　まがった黒い影をつけたまま
124　026　吊皮につかまる両手をポケットに入れたまま
134　009　気ままな行動で夢みて
142　017　（四つの窓のうち三つが閉じられたままである）
142　071　他の人々を悲惨なままに放置して逃避するような
142　123　あなたは見たままを語り　予言者として
149　013　一体のままでただよいながら
156　036　心の禁制は解けぬまま
157　005　おまえは　そのまま詩だ
160　058　遺体は屍体置場に二日間放置されたままであった
163　012　身は現つのままで
166　010　一本の煙草を思うままに吸えたら
169　020　孤独の帆をたらしたまま
171　019　いつまでも不幸のままで
173　053　どうか　このまま眼が覚めませぬように」
179　024　グラスを胸にのせたまま
189　036　かれは椅子に坐ったまま
190　010　在りのままに生き
191　011　このまま沈んでよいものか

ままに
015　018　椅子は空虚なままに
029　011　花花も昔のままに白く
142　071　他の人々を悲惨なままに放置して逃避するような
166　010　一本の煙草を思うままに吸えたら
190　010　在りのままに生き

まもなく
173　043　まもなく頓死するだろう
187　023　まもなく死ぬ

まもり　守り
167　046　それから一つの部屋を守り

まもる　守る
101　025　どこかの国境を守るためではない
177　002　約束のように守る男なら
179　016　見守る者は誰もいない

まもれる　守れる
142　092　ぼくたちはどこまでその小さな幸福を守れるだろうか？

まやく　麻薬
160　070　アルコールと麻薬に蝕まれた生活で

まゆ　眉
004　005　意地悪な眉のながい神が
054　135　眉をひそめて手のなかのカードを隠してしまう

まよい　迷い
061　162　迷いはいかに深いとしても、

まよう　迷う
107　016　迷うのはやめよう
154　013　待っているのと迷うのと
192　017　よくよく見れば、そこから一米間隔くらいで、白い明りが点々とつづいているのだ。迷う者のために設けられた救急

まよう　迷ふ
039　109　誰が道に迷ふといふのか

まよって　迷って
059　018　なんだか迷っていそうにも思えてくる
111　001　どこまでも　迷って迷って

まよなか　真夜中
098　005　こんな真夜中
160　009　そんな今年の冬も終りに近い　ある日の真夜中

まよへ　迷へ
021　016　たそがれの道に迷へばパイプで

マリ
084　013　マリリン・モンロウのせつない性のささやきーー
088　001　小さいマリよ
088　008　膝にのって話をせがむマリよ
088　028　小さいマリよ
088　042　あどけないマリの夢よ
088　049　大きいフライパンをあやつる小さいマリは
088　051　小さいマリよ
088　057　小さいマリよ
088　068　小さいマリよ
088　076　小さいマリよ
088　085　小さいマリよ

マリリン・モンロウ
084　013　マリリン・モンロウのせつない性のささやきーー

まるい
193　023　議事堂のまるい空はきれいに澄み

まるい　丸い
017　005　丸いアタマの仏陀たちが

まるく
051　008　まるく小さな海と空が見えるばかりだった。

マルチェンコ
142　013　マルチェンコの証言によれば

まるで
017　023　ああまるで天国でございますと
017　025　まるで極楽でございますと云はねば
041　022　石が鳴く　まるで蜉蝣のやうに
048　015　まるで滅びることのないもののように
051　026　「そいつは黄色だ　まるであの穢らわしい魂のように」
054　096　まるで僕たちに呼びかけるかのような樹木のそよぎ
061　066　まるで通りがかりの人のように
150　005　六人の友達の彼に対する考え方は夫々まるで違ってゐた。
150　024　自分の書いたものがまるでつまらなかったことである。
151　017　まるで大きなおけらである

まるめて
167　024　背中をまるめて椅子に凭れている

まわらぬ
088　078　よく舌のまわらぬおまえの節廻しにあわせて

まわり
078　021　小さな南十字星のまわりを
088　039　そうしておまえは自分のまわりに
090　014　この支那の陶器のまわりの

まんざら
072　022　迷信も愉快だし、科学的検討もまんざらではない

まんせいいちょうびょうかんじゃ　慢性胃腸病患者
055　040　おれは慢性胃腸病患者のだらしないネクタイをしめ

まんぞくさせて　満足させて
150　012　自己韜晦の癖を或程度まで満足させてくれる。

まんてん　満天
169　019　満天の星からの合図に

み　身
032　009　眠れる半身に垂れさがり
032　017　わたしの半身はすでに掠められてゐる
037　010　けものや鳥よりもすばやい身仕度で
039　137　もはやこの身にもどらない
041　045　とげとげしい息子よ　御身の
041　111　物質で身を固め　破れたシャツで冷気を防いだ
043　019　あなたはその深淵に身をなげる
042　013　脱ぎすてた分身が青く光る
042　014　神よ　御身の言葉のまにまに
044　009　御身は知ってゐる、世の輝かしい変貌を、
044　011　御身は教へる、肉の裔（すゑ）なるものたちに、
046　038　日没の空にあなたはわななきつつ身を横たへ
046　049　あなた自身が小さな一つの部屋であることを
053　037　わたしはわたし自身の影からも離れてゆきます
054　035　行方の知れぬ風の寒さに身ぶるいするのだ
054　069　君は君自身の汚れた手で
054　080　衣裳と装身具の内側に　化粧のゆきとどいた顔の下に
054　086　独身者はふかく自ら頷きながら
054　106　独身者は大学生のリキュールグラスに
054　115　独身者はすばやく扉のそとへ消えうせる
057　018　櫂はぼくに全身をあたえ
058　033　指輪や装身具の飾ってあるショーウィンドをのぞいて
061　034　空の財布の身を投げに、
061　109　あなたがあなた自身であるためには
061　154　あなた自身が見すてられた天上の星であることを……
062　006　落ちてゆくわたしの身体を支えてくれるのは
062　019　「もし身体にも魂にも属さない掟があるなら
062　021　魂も身体も不用です」
063　004　あなたの身体のように重たく
063　009　かかえきれぬあなたの身体が
076　019　きみの青白い身体はみるみるうちに
077　018　かれは木の吊床に身を横たえて
081　020　生身で受けとめているのは兵士ではない
094　001　身をくねらして走るカワヘビの
094　022　ああ　太陽は全身にものうく

101　014　なにものよりも　おのれ自身に擬する銃口を
103　017　まがいものの甲冑に身をかためた冒険家でもなければ
104　010　愛と憎しみに撃たれた裸身のほそさに
109　008　自分自身と世界とに別れを告げるときがきた、
109　012　そうして、秋風に身ぶるいして
112　018　あの純粋の化身はどこへ失せたか
112　022　寝床のぬくもりでほてった身体を　詰まった路面電車に積みこんで
119　008　のがれるところなき身の
120　007　それらが身体のなかを
132　005　風のように変身する
142　022　あなた自身であることをやめないから
148　016　愛は身をほそらせ、日々の仕事は疲れをつのらせる。
150　016　私自身は、かなり正直な自画像のつもりだった。
151　011　身長百七十四糎体重七十粁はまあまあだが
151　012　中身はからっぽ
156　025　愛という言葉は身につかぬのである
156　026　身についていたら
162　017　かれ自身の最後の王国であるから
163　007　どちらを向くかは身体にきめさせた
163　012　身は現つのままで
167　020　節々をならして身ぶるいしている
173　002　身ぶりの練習をしたかったとかで
173　016　神と悪魔は一身同体
173　045　スプリングの毀れたベッドに身を投げて
176　030　うつし身への恥じらいに
177　024　きみ自身の街路を行かなければならない
186　079　宴席の大きな皿に盛られた海の幸、鯛や鮑の刺身も
187　013　信念よりは自身が大事だから
187　017　きみ自身は死ぬだろう
188　070　身体の故障よりも、よほど、このほうがつらい。
189　037　ゆっくりと身をかがめて手をのばす
192　015　みるみる漆黒につつまれていく、ここは、もともと海底だったところではないか。冷気に身ぶるいし、

みあきない　見倦きない
155　034　見倦きないものといったら

みあげている　見あげてゐる
045　006　音もなく空を走る稲妻を見あげてゐる

みあわせて　見あわせて
063　028　ふと血の気のうせた顔を見あわせて

みいだし　見出し

128　055　明日の見出しができた

みいだす　見出す
060　017　なんという美しさを見出すことだろう

みいっている
070　013　とおい星、ちかい星のひとつひとつにみいっている、

みうしなった　見失った
050　014　きみを見失ったのか忘れてしまったよ。

みえ　見え
010　007　やがて純白の雲の中にチョコレエトの肩が見えなくなる
011　007　そこから大理石の都会が見え
015　013　昨年の唄であらうかもう見えない
017　029　沙漠の果から灰が見えなくなり
018　002　質量の影も見えない
022　010　眼に見えない
023　012　きこえない見えない世界で
023　017　風の運んでくるその言葉が見えない
028　041　おびただしい自然を覆ふ霧はやがて見えなくなるところ
028　050　ただそこに時代の速度乃至歩調が見えてくるだらう
032　014　百合の花が見えて
041　080　純潔な空気が咽喉を塞ぎ　見えない量に苛まれて
041　110　あなたには人の背中しか見えぬ
041　148　あなたには人の背中しか見えぬ
049　003　いつも逆に傾斜した獲物のない地平線しか見えない。
051　008　まるく小さな海と空が見えるばかりだった。
051　024　ぼんやりとデス・マスクが肉眼に見えてくる。
053　054　淋しいわたしの足跡は落葉に埋って見えません
055　065　永遠に吠えることのない狼に見えてくる
056　011　廃墟のなかを踊り狂っているのが見えないわけではない
059　025　蜻蛉のようにも見えてくる
061　119　淫売婦には浅瀬ほどにも見えなかったりするのだ
069　038　見えない幸福におびえて
070　042　ぼくは見えない出口をさがすように、
071　034　山の頂きがはっきりと見える
077　026　死がやってきてじっと蹲っているのが見えた
079　025　見える神
080　019　（見えない水平線にむかって
083　002　すっかり見えなくなった
083　004　みんな見えなくなってしまった
088　016　見えない国境をつくっているか

089　014　空を背景にしたすべてのものが見えるのです
094　002　見えがくれの執念につけ狙われながら
094　009　ここからオリーヴの海が見える
096　017　ごらん　対岸にアラビアの火が見えるよ
106　047　対岸は霧がふかくて見えないが　残る一つの疑問には
136　005　葬列が見えない
153　012　真赤にそまった海が見え
154　006　瑠璃玉の道はもう見えない
160　002　いやに透明に見えてきた　今年の冬
163　001　見えがくれに歩きながら
167　037　死屍累々の谷が見えがくれするので
169　010　求心力は見えなくなり
170　021　（見えないところで自然は豊かさを失っていない
181　004　沖は見えず
189　041　ぼんやりとしか見えてこない
192　025　必死の思いで、前方の真っ暗闇を凝視するが、もう何も見えぬ。

みえがくれ　見えがくれ
094　002　見えがくれの執念につけ狙われながら
163　001　見えがくれに歩きながら
167　037　死屍累々の谷が見えがくれするので

みえて　見えて
028　050　ただそこに時代の速度乃至歩調が見えてくるだらう
032　014　百合の花が見えて
051　024　ぼんやりとデス・マスクが肉眼に見えてくる。
055　065　永遠に吠えることのない狼に見えてくる
059　025　蜻蛉のようにも見えてくる
160　002　いやに透明に見えてきた　今年の冬
189　041　ぼんやりとしか見えてこない

みえてくる　見えてくる
028　050　ただそこに時代の速度乃至歩調が見えてくるだらう
051　024　ぼんやりとデス・マスクが肉眼に見えてくる。
055　065　永遠に吠えることのない狼に見えてくる
059　025　蜻蛉のようにも見えてくる

みえない　見えない
015　013　昨年の唄であらうかもう見えない
018　002　質量の影も見えない
022　010　眼に見えない
023　012　きこえない見えない世界で
023　017　風の運んでくるその言葉が見えない

041　080　純潔な空気が咽喉を塞ぎ　見えない量に苛まれて
049　003　いつも逆に傾斜した獲物のない地平線しか見えない。
056　011　廃墟のなかを踊り狂っているのが見えないわけではない
069　038　見えない幸福におびえて
070　042　ぼくは見えない出口をさがすように、
080　019　（見えない水平線にむかって
088　016　見えない国境をつくっているか
106　047　対岸は霧がふかくて見えないが　残る一つの疑問には
136　005　葬列が見えない
154　006　瑠璃玉の道はもう見えない
170　021　（見えないところで自然は豊かさを失っていない

みえなくなる　見えなくなる
010　007　やがて純白の雲の中にチョコレエトの肩が見えなくなる
028　041　おびただしい自然を覆ふ霧はやがて見えなくなるところ

みおくって　見おくって
078　009　いたましい鴎の眼で見おくっていた

みおとし　見落し
054　077　僕はなんにも見落しはしなかった

みおぼえ　見おぼえ
130　007　美少年に見おぼえはない

みおろす　見降ろす
038　010　街を見降ろす廊下には

みがかれ　磨かれ
012　022　大理石の肉体は磨かれよう
023　001　磨かれてゐる白い骨の柱に

みがかれている　磨かれてゐる
023　001　磨かれてゐる白い骨の柱に

みかけ
071　008　どっと家族づれで出かけてゆく人たちをみかける
085　012　みかけより真実を飾らぬ男だ
183　023　すこし足の不自由な老人がほほえみかける

みかん　未完
025　059　梯子を登るのである（未完）

みぎ　右
027　004　手袋をはめた右手のみが動き
047　003　左右に拡げる黒い蔭！　二重のドア！
145　005　芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右
173　020　右か左か　南か北か

みき　幹
041　120　貧弱な幹に大きな葉をつけてゐた樹木
041　122　葉はぬけ落ち　黒い幹が囲繞地の隅に忘れられた
041　141　楡の幹には自由な樹液がのぼりはじめた
105　003　だが、みどりはまだ固い幹のなかにある。
109　011　根が考え、幹が感じている。
112　041　大木の幹にかくれて
148　032　同年兵で幹候の試験に合格した組は、
150　039　クラス委員にして落第生の竹内幹郎だった。
186　001　新幹線に乗ったのは初めてですって？
186　041　どうしてきみにわかる？　なぜ今までぼくが新幹線に乗らなかったか？
186　043　新幹線が開通して以来、機会はいくらでもあったよ

みぎて　右手
027　004　手袋をはめた右手のみが動き

みくだす　見下す
189　023　いまのかれは雲を見下すような

みごとな　見事な
072　035　なんと見事なダークホースぶりだろう

みさき　岬
041　028　プラットフォームが岬のやうに曲がってくる

みざまれて　刻まれて
160　072　かれの肉体に刻まれていき

みじかい
039　061　永遠よりみじかい時間のうちに
084　012　安いレコードのみじかい針の溝から

みじかい　短かい
100　022　お別れの短かい放浪がはじまった
148　038　夜はことのほか短かい。

みじかかった　短かかった

050　015　短かかった黄金時代ーー

みじかさ　短かさ
076　009　ながかった航海の短かさについて

みじたく　身仕度
037　010　けものや鳥よりもすばやい身仕度で

みじめさ
143　009　寒風に吹かれるみじめさを思い

みじめで
143　018　みじめであさましい生きた心よ……

みじめな　惨めな
072　069　何と惨めなことだろう

みしらぬ　見知らぬ
007　002　あたり　見知らぬ老婆が咳をするのはわれらにかかわりのないこ
059　001　見知らぬ美しい少年が
068　034　見知らぬ海辺の女に

みず　水
006　011　泥まみれの鉄兜に水を汲んで
008　016　金魚みたいにじっとして　水のつまったガラス鉢の中
011　001　河の水は泥のやうに澱んで
012　016　いきなり水が噴き出した
014　015　けれど燃えないうちに水がはいったよ
015　001　窓は明るい海の水で
016　002　太陽は水晶に分解される
019　008　パイプから水もながれず
020　013　噴水へ
021　011　花が浮かんで噴水をかむった
023　023　暗い水底に沈んだ
024　003　る　血液を噴き上げている白い管は輝やける噴水の愛撫をう
025　004　水にながれる貝殻がねぢれて
026　007　水晶体はいつでも煙を噴いてゐた
027　014　ただ一滴の水は
028　027　土の起伏と水の流れと
028　047　地の脈を水の流れを変えるほど精密だが
030　006　どこからともない一滴の水一滴の音に
030　017　水平線はまへに地平線はうしろに
030　022　そこに憩ひがあり噴水がある

031 012 水の中に影だけにたたまれて
033 001 一本の茎は清浄な水を欲する
033 016 花のほとりに水を
034 017 水平の皿のうへ
036 017 噴水と石像のある静かな白昼よ
036 021 これらの樹木の下の水べりに
037 004 地下をながれる水の音は
038 021 その下の澄んだ水のほとり
039 008 根の茂みに水が這ひよる
039 032 水の底にはいつも鏡のやうな階段があって
039 129 ひややかな青い噴水も
039 141 あなたのからだから迸る水で
040 005 水の音も
041 023 水の音が
041 095 眠れる水　眠れる森
041 139 水の中にはもう春がきてゐる
043 002 水のほとりでひくくつぶやく
045 010 畳の上に　水平に做って横たはり
046 005 はるか足下を潜りぬける黒い水の流れ
046 021 水の表情は動かうともすまい
046 023 この泥に塗れた水脈もいつかは
046 024 雷とともに海へ出て　空はつらなる水平線をはしり
046 033 濁れる水の地下のうねりこ耳を傾けつつ
046 039 黒い水のうへを吹く
047 011 うなだれた水仙の賢しげな影を卓布に落す
047 014 古風な銀の縁をつけて　いつもこの水が動かぬことを……
053 013 姉さんのかたみの水晶の腕輪がわたしの冷たい手錠で
054 023 艀船がじっと水のうえで考えごとをしていたっけ
055 029 花瓶の腐った水のなかで溶けている
057 015 ある日　ボートを水にうかべ
061 019 水晶　花　貝殻が、世界の空に
061 024 酔いどれ水夫が歌っていた。
061 078 ぼんやり眼を水面にむけてとおるのをーー
061 127 眠りからうまれたばかりの水は
061 134 浄らかな水に映る理想の伴侶に
061 138 水仙や蛇や　もろもろの生ける質を潤おした』
065 021 告げなさい。レエテ河の水を飲まぬうちに
068 018 一直線をえがく　はてしない水平線にそって
068 021 それから水着の女達が
070 006 わたしのからだを水藻のように
070 010 水死した処女の乳房をさぐりつづける。
070 012 悲しみの水面にうかべて、
070 019 肌のふれあう水ぎわから

073　003　メコン河の水で濁っていた
073　005　さびれた海水浴場の岸壁にぶつかって
073　026　毛脛を出したフランス人の水先案内は
078　008　立ちのぼる水けむりのなかに消えうせるのを
079　004　とおくの水平線は
079　011　何万という水兵と
079　018　永久に待ちこがれている水兵たちから
079　030　ぼくらは水平線をこえねばならない
080　002　まっすぐ水平線をのばしながら
080　005　いつまでもこのような水平線をもっているか
080　019　（見えない水平線にむかって
082　001　六月は水色の瞳
089　010　凍ってゆく水に影をうかべていました
089　023　「ぼくは凍ってゆく水のなかにいますよ」
093　029　それは血や光りがかえってゆく水平線のない世界だ
094　004　酸っぱい水を吐きだそうとし
094　006　ぼきぼき葦は折れて水垢のうく岸辺
100　061　ペイヴメントには水玉模様の少女があふれ
101　035　からっぽの水筒に口をあてて
101　036　消えたいのちの水をのんでいる兵士たちよ
101　050　この地平から水平線にむけてひっぱってゆこう
108　001　海水浴場の
110　011　あとずさりする水平線にむかって
112　040　水が酒に　欲望がもっとたくさんの浪費にならないとこぼしている
120　005　池水のやわらかなひかり
128　019　資本の下水の養分を吸って
128　066　冷たい水のようなもの」か
130　012　さらさらと水がながれ
135　006　水漬く兵士の納骨堂に
140　023　水銀のナミダをたらして
145　031　しかし　水がなくては生きられない
152　006　かるく水につけて上から吹く
152　016　冷たい水色のけむりが立ちのぼる
153　001　青い塩水からうまれた生きものの
154　011　命の水がほとばしる
168　003　水平への憧憬があった
182　026　老いのうちにも新しい命の水が

みずあか　水垢

094　006　ぼきぼき葦は折れて水垢のうく岸辺

みずいろ　水色

082　001　六月は水色の瞳

152　016　冷たい水色のけむりが立ちのぼる

みずうみ　湖
039　111　月は遥かなる湖にかかる
057　017　トバ湖は凪いでいた

みずから
054　073　みずから魂をすて去った
158　024　いつかみずからも
177　022　みずからの影をひきずって

みずから　自ら
045　015　たとへば自らも垂直なる真空の如くありたい
054　086　独身者はふかく自ら頷きながら
142　084　彼の与える教訓は自ら明らかであろう」
142　085　自ら明らかなことにも　悲しいかな　認めようとしない者があり
142　119　非道な暴力に抵抗して　自らの犠牲と死の覚悟で第一線に立ち
150　004　自ら韜晦することなくして、何事もすることが出来なかった。
184　007　そして十四人の大工を自ら指揮して

みずからの
177　022　みずからの影をひきずって

みずからの　自らの
142　119　非道な暴力に抵抗して　自らの犠牲と死の覚悟で第一線に立ち

みずぎ　水着
068　021　それから水着の女達が

みずぎわ　水ぎわ
070　019　肌のふれあう水ぎわから

みずけむり　水けむり
078　008　立ちのぼる水けむりのなかに消えうせるのを

みずさきあんない　水先案内
073　026　毛脛を出したフランス人の水先案内は

みずたまもよう　水玉模様
100　061　ペイヴメントには水玉模様の少女があふれ

みすてて
065　046　異国の女のように、町をみすてて

みすてられた　見すてられた
061　154　あなた自身が見すてられた天上の星であることを……

ミステリアス
094　018　きみの人生はきわめてミステリアスに

みずべり　水べり
036　021　これらの樹木の下の水べりに

みずみずしい
036　011　みずみずしい樹木と花花の間で

みせ　見せ
031　010　煤けた家具の断面だけを見せ
054　142　反コロンブスはアメリカを発見せず
057　010　ぼくらに一枚の絵皿を見せたことがある
145　010　とエンジェルと同じ肌色の奥まで開拓して見せていた
151　020　一向に死ぬ気配を見せないのはどうしたわけか
169　005　隠されたすべてを見せても
186　027　廿六年前に広島で撮った写真を、懇親会の席上で相良君から見せられてね

みぞ　溝
034　014　気体のなかの透明な溝へはいる
036　029　迂闊にも醜悪な街の溝の中へ
061　003　汗と油の溝渠のうえに、
084　012　安いレコードのみじかい針の溝から

みたい
008　002　機関銃はマッチを擦って　乾草みたいな白い雲に火を
008　016　金魚みたいにじっとして　水のつまったガラス鉢の中
014　013　団扇みたいなシュロの葉の下で
039　052　高い木の頂まで攀ぢてみたいとひそかに思ふ
106　027　高名な美学派の詩人みたいに　口髭をのばしたり刈りこんだりして
111　002　家のない場所へ行ってみたい
121　009　おもいきり　太陽をからかってみたい
121　010　赤い魚も釣ってみたい
146　056　暗がりで筍みたいにずんずん伸びていくので
147　014　オーバーウェイトで引退したボクサーみたいに
156　017　習慣みたいな西洋人は
167　023　袋を着せられたソロフキの囚人みたいに

みたいな

008　002　機関銃はマッチを擦って　乾草みたいな白い雲に火を
014　013　団扇みたいなシュロの葉の下で
156　017　習慣みたいな西洋人は

みたいに
008　016　金魚みたいにじっとして　水のつまったガラス鉢の中
106　027　高名な美学派の詩人みたいに　口髭をのばしたり刈りこんだりして
146　056　暗がりで筍みたいにずんずん伸びていくので
147　014　オーバーウェイトで引退したボクサーみたいに
167　023　袋を着せられたソロフキの囚人みたいに

みたまえ　見給へ
007　016　あ見給へ　昏の河の上を歯を剥いた白馬が乱れるではないか

みだらな
164　030　ぼくらはみだらな存在だ

みたり
039　047　夢をみたり

みだれ
045　021　ふりそそぐ雨のみだれも手にとるやうだ
059　023　おもいみだれた母と美しい少年のボートが
144　015　みだれた山波を隠すのは

みだれ　乱れ
007　016　あ見給へ　昏の河の上を歯を剥いた白馬が乱れるではないか
062　023　思い乱れたわたしの頭髪にさし込まれ
093　025　乱れたシーツのうえに
119　003　ひかりは乱れ
186　086　思いは千々に乱れて消えていき

みだれた
059　023　おもいみだれた母と美しい少年のボートが
144　015　みだれた山波を隠すのは

みだれた　乱れた
062　023　思い乱れたわたしの頭髪にさし込まれ
093　025　乱れたシーツのうえに

みだれて　乱れて
186　086　思いは千々に乱れて消えていき

みだれる　乱れる
007　016　あ見給へ　昏の河の上を歯を剥いた白馬が乱れるではないか

みち　道
016　005　貝殻の道をかけなさい
021　016　たそがれの道に迷へばパイプで
028　051　鉄道信号機の痙攣とともに
031　006　いつかのやうに凍りついた道路の上で
039　109　誰が道に迷ふといふのか
050　021　黒い鉛の道を歩みつづけてきたのだった。
053　017　わたしの歩いてきた道は
054　072　平然としてまがった道をゆく時だ！」
059　021　海岸への道が不思議と宙にうかんでくる
060　008　荒れた道がつづいているのみである
060　013　孤独な道を歩いてくる男だけが
061　049　あなたの心にうかんだ道のすべてだった。
061　054　あなたの宙にうかんだ道のすべてだった。
061　106　未来の道は過去につづき
062　044　あてもないわたしの道は
085　002　舗道のカーヴにそってながれる
088　069　おまえと歩むこの道は
088　075　この道を歩いてゆこう
091　002　さびれた国道につづく町工場の
093　013　かれにとってはとっくに抜け道がわかっている迷路である
095　015　誰だって僕のように淋しい夜道を走るだろう
095　016　崖下の道で息がきれた
100　076　昨日の道となっている
103　010　魂にも七ツ道具が必要だ
107　005　車輪や道もうたっていた
108　030　理髪店からの長いながい戻り道
111　005　暮れのこる灰色の道が
115　006　夜明けの道はまっすぐで長いが
117　012　記憶の坂道をくだっていく
128　003　割りつけられた舗道の
139　007　さまよい疲れて歩いた道の幾千里
140　017　地べたを這いずる共生共苦の道も
142　119　非道な暴力に抵抗して　自らの犠牲と死の覚悟で第一線に立ち
144　002　赤い林道に入っていく
145　005　芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右
150　030　これは、私だけが「虚構の個性」をつらぬき、偽善の間道をくぐりぬけて、
154　006　瑠璃玉の道はもう見えない
158　023　残された唯一の道だった
160　036　ほかに自己証明の道がなかったのである

163　006　道に迷ったところで
166　007　矛盾の道を地ならしするのは
172　004　人気のない街道を
183　026　駅前通りから暗い小道に曲ったところで
188　046　時には、道徳や、宗教の立派な代理になるうえに、

みち　未知
051　002　人間の遠い未知の故郷へ
054　161　なにげない挨拶のうちから生れる未知の国民のことを……

みちた
061　012　秘密にみちた部屋や
094　019　この苦渋にみちた河口の渦に閉じることになろう

みちびいて　導いて
051　004　「この病院船の磁針がきみらを導いてくれる」と船長は言う、

みちびかれ　導かれ
192　021　あやかしとも気づかず、仄かな白い光の点線に導かれ、

みちびかれて
133　026　暗天の星にみちびかれて

みちびく
167　077　きみたちの家を破壊にみちびくだろう

みちびく　導く
041　123　もはやあなたを導くものはない

みつ　蜜
006　005　蜂蜜のやうな午後が溶ける
172　020　常緑樹にしたたる日光の蜜が
183　005　くだもの屋にあふれている蜜柑が

みづから
040　002　椅子はみづから倒れはじめる
046　010　あなたはみづからの心象を鳥瞰するため

みづからの
046　010　あなたはみづからの心象を鳥瞰するため

みつぎ　密議
136　009　密議にむかう

みつける
060　020　たとえば小さな捲毛の渦をみつけるような！

みっしつ　密室
125　021　密室のドアはどれほど厚くても充分とはいえない

みっつ　三ツ
079　008　富士山を三ツ沈めても

みっつ　三つ
142　017　（四つの窓のうち三つが閉じられたままである）
166　006　三つの時代を同時に生き
188　028　歳相応の、厄介な病気が、二つか三つ重なったところで、

みっつのじだい　三つの時代
166　006　三つの時代を同時に生き

みつど　密度
150　063　娼婦の悲惨さを、かなりの密度で正確に捉えたというだけで、

みつめ
037　020　すべてをみつめる生きものの眼が
041　055　みんなは黙った　眼を閉ぢ眼を開き　膝をみつめて
053　046　墓地のしめった黒い土をみつめながら
054　037　Mよ　いまは一心に風に堪え　抵抗をみつめて
054　121　いまは自我をみつめ微かなわらいを憶いだす
073　020　大いなる積乱雲のさけ目をみつめた
087　006　じっと食器の底をみつめたまま
098　025　ぼくはまぶしい「無」の下で自分の手をみつめる
100　007　みんなは黙った　眼をとじ眼をひらき　膝をみつめて……

みつめて
041　055　みんなは黙った　眼を閉ぢ眼を開き　膝をみつめて
054　037　Mよ　いまは一心に風に堪え　抵抗をみつめて
100　007　みんなは黙った　眼をとじ眼をひらき　膝をみつめて……

みつめている　見凝めている
051　036　こっちを見凝めている鍵穴を必死に覗きかえす

みつめている　見凝めてゐる
041　067　いつまでもじっと火を見凝めてゐるのは

みつめる
037　020　すべてをみつめる生きものの眼が
098　025　ぼくはまぶしい「無」の下で自分の手をみつめる

みつめる　見つめる
093　015　蛇が隠れたエデンの樹を一心に見つめる

みてきた　見てきた
096　006　ギリシア　ローマの政治を見てきたが

みてゐる
025　026　夢をみてゐる
046　009　花火をみてゐる橋上の人よ

みとめよう　認めよう
142　085　自ら明らかなことにも　悲しいかな　認めようとしない者があり

みとめる　認める
146　031　同時にわたしを認めると

みどり
025　030　花瓶に挿さったみどりの茎は
030　031　だからみどり色の白さと言ってもよい
074　026　みどりの波をわけてゆっくり遠ざかっていった
079　027　みどりの島
105　003　だが、みどりはまだ固い幹のなかにある。
120　004　植物のみどり

みどり　緑
008　017　レコオド音楽にクチあいて　緑の藻を夕べてゐる
010　019　パイプは緑の煙を噴き飛翔する
015　008　透明なる緑よ
028　003　緑の影はいつもガラス管によりそってゐた純粋な頭の鈍い速度について
030　029　色彩のなかの緑を
039　010　緑の泡の方へ近づいてゆく
041　083　そこにあたる影や光　樹々から流れる緑の匂ひ
046　020　たとえ純粋な緑が　墳墓の丘より呼びかけようと
062　047　生きものの緑の意志は
072　007　うす緑の大地、美しいカーヴを描く競走路をみたまえ
078　007　緑泡立つ椰子林が
099　004　太陽が緑の絵具をとかしている芝草のうえを
103　003　緑の牧場は消えうせたか
112　020　緑いろの歯ミガキにすこし血のまじった唾を吐いた

168　007　緑野の香にむせながら
172　020　常緑樹にしたたる日光の蜜が

みどりいろ　緑いろ
112　020　緑いろの歯ミガキにすこし血のまじった唾を吐いた

みどりの　緑の
008　017　レコオド音楽にクチあいて　緑の藻をタベてゐる
010　019　パイプは緑の煙を噴き飛翔する
028　003　緑の影はいつもガラス管によりそってゐた純粋な頭の鈍い速度について
039　010　緑の泡の方へ近づいてゆく
041　083　そこにあたる影や光　樹々から流れる緑の匂ひ
062　047　生きものの緑の意志は
072　007　うす緑の大地、美しいカーヴを描く競走路をみたまえ
099　004　太陽が緑の絵具をとかしている芝草のうえを
103　003　緑の牧場は消えうせたか

みどり色
030　031　だからみどり色の白さと言ってもよい

みとれる　見とれる
016　013　より精巧な機械に見とれるときも

みない　見ない
015　003　花は眼のある動物を見ない
071　036　何も見ない
097　003　あなたは生命も飛翔も見ないだろう。

みなかった　見なかった
006　008　そういえば長いこと日のメを見なかったね

みなさい　見なさい
041　006　夢を見なさい　不機嫌な一瞬には

みなと　港
055　007　おれには港のように思えたのだ
057　027　雨のキールン港では
075　009　記憶のなかの港には
078　003　あらゆる船が港から出てゆきそうな
094　012　行ったことのない島や港や都市に
108　011　おおきな追憶が港から出てゆくのに
112　010　破壊につぐ破壊のこだま　断末魔の軍港にとどろく火砲のうた

みなみ　南
035　002　南方のドアを開き
078　021　小さな南十字星のまわりを
088　027　あたたかい南国の陽ざしのように融かしてくれるから
148　004　南国で農業に専念し、妻と離別してから、
167　003　東の窓と南の窓が交互に鳴り
173　020　右か左か　南か北か
188　083　きみが好きだという、武者小路の、茄子や南瓜の素朴な絵、

みなみじゅうじせい　南十字星
078　021　小さな南十字星のまわりを

みなも　水面
061　078　ぼんやり眼を水面にむけてとおるのをーー
070　012　悲しみの水面にうかべて、

みなれた
089　033　（そこには　みなれた風景と

みにくい　醜い
146　029　そこでは醜い顔の二人の女が
152　024　醜い現実の姿をさらしている

みにくく　醜く
143　016　醜くなって生きのびて

みにくさ　醜さ
072　011　われわれの醜さを

みにつかぬ　身につかぬ
156　025　愛という言葉は身につかぬのである

みにょくてき　魅力的
170　020　このうえなく新鮮で魅力的だ

みね　峰
190　006　峰から昇り尾根に沈む日月

みのがして　見逃して
150　022　記憶の中で見逃していたさまざまな事柄に気づかないわけにはいかない。

みのがせません　見のがせません
058　041　小鳥がとまっていることも見のがせません

みのった　実った
030　033　実ったあとの浅い眠りは疲れである

みのらぬ　実らぬ
036　001　おそらくは実らぬであらう樹木
036　020　おそらくは実らぬであらう樹木

みのり　実り
035　022　一粒の実りは

みのる　実る
030　032　花の実たちが実る周囲に実る別の花の実たち

みはり　見張り
073　025　見張りのボートが現れ

みはるかす
108　032　みはるかす何とか連山は紫の帯
176　027　みはるかす彼方には
181　001　みはるかす相模の海に

みひらいた　見ひらいた
047　016　大きく見ひらいたうつろな眼の

みぶり　身ぶり
173　002　身ぶりの練習をしたかったとかで

みぶるい　身ぶるい
054　035　行方の知れぬ風の寒さに身ぶるいするのだ
109　012　そうして、秋風に身ぶるいして
167　020　節々をならして身ぶるいしている
192　015　みるみる漆黒につつまれていく、ここは、もともと海底だったところではないか。冷気に身ぶるいし、

みまずい　気まずい
160　026　聴衆の気まずい沈黙

みまもっている　見まもっている
100　072　きみはとおくからぼくを見まもっている

みまもる　見守る
179　016　見守る者は誰もいない

みみ　耳
014　005　手を当てて耳のネジを検査してゐるのを
017　017　と悪い唇が耳の傍で薄くなったので
018　004　耳が刷毛のやうに通過する
021　030　ぼくの耳は響いてゐる
023　019　あなたの耳はちぎれそうな断崖で
024　001　ふせた耳の上でふと風が鳴る　くずおれた月光の雫に溺れ
025　013　眼もなく耳もなくただ流れる血液は
027　015　耳の螺旋を辷りおちた
030　009　夜が垂らす耳はない
033　004　上品な耳のうしろで
036　004　透明な耳のあたりを吹く
039　013　じぶんの耳で聞いてゐる
041　009　お互に耳を澄ませ
041　150　街の雑音はあなたの耳を不注意にした
046　033　濁れる水の地下のうねりこ耳を傾けつつ
047　005　耳をすましている中枢に
055　016　海を飛んでゆく耳鳴りのようにおもえた
062　051　あなたはじっと耳を澄ましていますね
065　043　どの窓も、耳をすましていた。男は
087　008　聞きわけのない耳でかぶりをふって
087　018　聞きわけのない耳でかぶりをふって
088　080　みんなじっと耳をすましているのだから
112　029　眼や耳や手足をなくした不幸な犠牲者に何をしてやったか
125　007　ニュースと駄弁で耳を痛めた
133　019　耳うちするあやしき男から
136　019　草の葉も兎の耳も
139　003　吹きさらしの露の寝ざめの空耳か
152　011　無数の星の悲鳴を耳のなかに残すから
166　026　砲撃に耳をすますような顔つきで
172　023　雲のささやきに耳をすます
175　012　病床のきみの耳にも聞えているに違いない
182　017　星座の歌に耳を傾けていると
186　082　死を含む共同体であるみんなの声に耳を傾けていると
191　001　耳をすませばきこえない

みみうちする　耳うちする
133　019　耳うちするあやしき男から

みみなり　耳鳴り
055　016　海を飛んでゆく耳鳴りのようにおもえた

みもだえ

070　007　みもだえさせ、ずたずたにひき裂く。

みゃく　脈
009　008　薔薇色の頬に葉脈が透けてくる
015　006　海図の脈のどこかに消えてしまった
026　013　葉脈から雫が落ちてくる
028　047　地の脈を水の流れを変えるほど精密だが
033　017　青い皿のあたりに葉脈を
039　025　葉脈から
046　023　この泥に塗れた水脈もいつかは

みやこ　都
011　007　そこから大理石の都会が見え
016　007　大理石の林の都会（まち）から
023　021　あのやうに退屈な都会の一日が
028　020　かれら塵挨都市の番兵と呼ぶものから
028　060　都会の屋根の下よ商店街の商人たち
041　135　都会の時計のために残されてゐるのかしら
043　011　愁いの都の門はとざされ
048　028　すると地球の表面に都市ができる
054　021　「僕たちは都市をつらぬく濁った河にそって
054　029　Mよ　都会の胃袋をさまよいながら君が呟いていたことを……
056　007　今日も都会の窓に灯がともり
061　004　よごれた幻の都市が聳えている。
061　093　この喧噪の大都会の
061　178　妻も子もなく、この広い都会の片隅で、
061　220　幻の都市に灯がついた、
064　015　こんな孤独な都会にいて、
069　024　都会の荒れた皮膚をひきさいていった
081　014　ぼくらを生んだ七つの近代都市が
085　004　天の一角にせばめられた都会の空である
094　012　行ったことのない島や港や都市に
100　016　都会の時計のために残されているのかしら？
101　031　どの首都からもへだたった　どんな地図にもないところだ
123　011　もう一つの首都を夢みて
140　020　かれは実体のない都市の雲の中に住む
148　007　地方都市で鉄工所を経営していた旧友が、
150　068　今日、我々は一つの都市、
193　024　ときわの首都は世界の影を映している

ミューズ
164　002　黒いミューズが呟く
164　010　黒いミューズは口をとがらせる

164　017　黒いミューズは猛り狂って叫ぶ
164　025　黒いミューズよ

みょうちょう　明朝
026　036　明朝の新聞紙がぬれてゐた

みらい　未来
052　019　あなたの未来の指輪が青い光をあつめ
052　020　あなたの未来の時計の振子がうごくのをまえにして
054　079　未来はとおの昔に済んでしまっている
054　099　過去にも未来にもさよならして
055　045　なかば熟しかけた未来にむかって
056　006　未来の一歩々々のようにこつこつと遠ざかってゆく
061　028　未来と希望があるだけさ。
061　036　未来も愛もありやしない。
061　044　未来と信仰はちがうもの。
061　106　未来の道は過去につづき
061　107　過去は涯しなく未来のなかにあることをーー
064　028　ーー愛のない窓には未来がない。
068　014　ちかづく未来のなかに
081　028　遠い未来の祖国の霧
085　006　未来は蒸されぬ腸詰にすぎない
100　070　精力的な夏は未来の街の方向にひろがっているようにみえた
101　029　未来や過去がうろつくには
106　046　おそらくその果は　「未来」とふかく交っているのだろう
116　006　未来を失ったぼくの苦しみが
123　007　未来に値段をつけたくない
132　010　いさぎよく未来をすて
136　026　ぬばたまの未来の闇で
137　004　あっさり未来を売りわたした
142　094　オーエルの未来小説に描かれた　党　は
181　029　野菜の未来に
186　025　未来に辷りこむ感じが、あんなだとはね
186　029　みんな若かったと了解した瞬間、未来に到着していたことがわかった
186　085　過去にも未来にも流れず

みらいしょうせつ　未来小説
142　094　オーエルの未来小説に描かれた　党　は

みりょくのない　魅力のない
151　015　なんと魅力のない五十六歳の男だろう

みる　見る

009　011　夢を見るなら夢の中でと
025　020　わづかにさわぐ葦の触手を見る
039　116　わたしはいつか虹を見るかもしれない
112　004　そんな遠くを見るような眼つきで
112　005　おれを見るな　さあ握手
142　047　それから　肩をおとして伏目になるか　面をそむけて窓の外を見るか

ミルク
003　007　杳い寒帯から運ばれたミルクに溺れる頃
012　018　ミルクの雲をかきまぜると

みるみる
076　019　きみの青白い身体はみるみるうちに
181　026　みるみるうちにあたりが暗くなって
187　026　きみの影がみるみるちぢんで
192　015　みるみる漆黒につつまれていく、ここは、もともと海底だったところではないか。冷気に身ぶるいし、

みるみるうちに
076　019　きみの青白い身体はみるみるうちに
181　026　みるみるうちにあたりが暗くなって

ミロ
096　001　ミロはローソクの黄ろい炎で
096　013　ミロ君の夜の太陽を見ていると　吐きたくなるね

ミロ君
096　013　ミロ君の夜の太陽を見ていると　吐きたくなるね

みをかためた　身をかためた
103　017　まがいものの甲冑に身をかためた冒険家でもなければ

みんか　民家
188　084　日本の重文とされている民家への憧れが、

みんしゅう　民衆
074　010　かれら民衆の悩みだったが

みんしゅしゅぎ　民主主義
128　049　「民主主義はイデオロギーではなく

みんぞく　民族
054　060　第二流の民族　集団　人物は

みんな

014　010　みんなポカンと口をあいてゐると
039　035　みんなそこに
039　057　みんなわたしの言ふことを信じないか
041　055　みんなは黙った　眼を閉ぢ眼を開き　膝をみつめて
053　006　みんな灰色の壁にぬりこめられてしまって
053　030　みんな仲よく小鳥のように一つの枝でおやすみなさい
061　104　だけどみんな＜生きよ＞と言いはしなかったね」
062　015　みんな捨ててしまうのですか
066　007　みんなどこへ行ってしまったの？
072　021　みんなどうしてこんなに自由にふるまうのか
072　040　みんな数字に関係があり
083　004　みんな見えなくなってしまった
088　017　みんな知っているとおりだ
088　023　みんな知っているとおりなんだ
088　080　みんなじっと耳をすましているのだから
100　007　みんなは黙った　眼をとじ眼をひらき　膝をみつめて……
101　012　みんな忘れる祈りのむなしさで
102　002　みんな日暮の桟橋に集ってくれ
102　006　みんないっせいに銃剣の襖を立ててくれ
102　010　みんな夜明けの桟橋から散ってくれ
106　002　みんな同じポーズで　いっせいに眼を
106　004　これがみんな詩人だといったら　たいてい驚く
134　002　みんな泣きはらした眼をしている
146　024　みんなの眼がいっせいに
174　003　「みんな、しぶといなあ、そう思っています」とあって、
174　018　（きみが美しい奥さんと結婚して、みんなに羨まれながら、西荻窪のアパートに住んでいたときのことだ）
186　029　みんな若かったと了解した瞬間、未来に到着していたことがわかった
186　056　それなのに、みんなが整列して中央に一つだけ空いている椅子
186　082　死を含む共同体であるみんなの声に耳を傾けていると

む　無

007　010　喞筒は空に向って泥を吐く　草の無い荒地ではとかく悪い感冒が
028　048　小鳥や草の声とは無関係である
028　059　葡萄の木の影のごときタイプが無数繁茂する
030　004　無造作な天体には樹木が茂る
037　016　無限といふものが少しづつ暗くなりかけてゐた
041　039　考へあるもののやうに　また無意識のごとく
045　012　夜半のけむり無常の風に耐へてきた
048　024　軟体の極限をゆく無数の曲線の戯れ
054　132　無言で蓄音器のレコードが廻転する
058　014　無意味な時代がしずかに腐敗しています
061　081　無数の小さな抱沫が噴きだしているのを……

061 130 渚をふちどり　虚無を涵し
077 015 無限の質だ！）
079 005 青空の無のなかに溺れようとしている
082 012 しずかに無限の空のなかへ消えていった
095 017 明るい無人の電車が
097 006 もし無慈悲な画家が牢獄を描くとしたら、
097 013 空気を蹴り厚い無の壁をこえて、
098 021 「無」の指をひらくのは
098 025 ぼくはまぶしい「無」の下で自分の手をみつめる
101 004 無力な太陽のことばで　ぼくにはわかるのだ
101 044 沈黙よりも固い無名の木の実がはじけとび
103 031 きみが見た大きな虚無はふかくぼくらをひきつける
104 009 無慈悲な月の光が　照し出す
106 016 無事に生きのびてきた　この下手な構図は
112 034 妥協の無限の可能性をたよりに
124 036 無人の巷をさまよう
126 013 それが荒涼とした虚無の世界だとしても
126 017 パスカルを畏怖させた宇宙の無限の沈黙とかは
128 021 無機物の　洗煉の極
128 078 無人の編集室で
129 008 無為にして
136 010 正義と無智の
142 054 あとに残るのが　無気力な教養人ばかりだとしたら
142 091 しかし　利己的で　近視眼的で　無防備な文明のなかにいて
142 095 すでに現実に存在していて　いわゆる階級構造とは全く無縁な
142 106 一つの　否！　は　明日には無数の　否！　になるだろう
142 111 そして　一人の無辜を殺すことが
144 007 鱗の落ちた蛇神は無性闇に輾転し
144 018 気象は覚存にして無漏
146 034 わたしは無我夢中で逃げ出しましたが
148 014 おたがいに無縁の暮らしをしてきたのである。
152 007 無意味ないたずらにも
152 011 無数の星の悲鳴を耳のなかに残すから
152 036 なんと無邪気な悪魔のやつめ！
156 028 無償を意味する
160 013 コーネリアスという無名の男の　涙が出るほどおかしな物語
160 067 （私たちが忘れてしまうのも無理はない）
161 019 ほとんど無尽蔵である
171 012 無邪気な目には悲しみがあふれていたから
172 028 もうすぐひとかたまりの無機物になるのだから」
178 006 無縁のいのちを
181 037 「無が一切となる前に」
182 019 たましいは無限をゆびさしていた

183　010　さかりどきの雑踏は無秩序にみえるが
183　029　平穏無事の今日一日の。
186　054　ぼくは無意識のうちに隠れ場所をさがしている
188　003　「また、ご無沙汰しました。
188　010　その歯は抜きましたが、他の歯に窩が無数にあるとか、
189　025　無音無重力のガラスの部屋で

むい　無為
129　008　無為にして

むいしき　無意識
041　039　考へあるもののやうに　また無意識のごとく
186　054　ぼくは無意識のうちに隠れ場所をさがしている

ムイシキン公爵
171　008　一にアザラシ、二にムイシキン公爵

むいみな　無意味な
058　014　無意味な時代がしずかに腐敗しています
152　007　無意味ないたずらにも

むえん　無縁
142　095　すでに現実に存在していて　いわゆる階級構造とは全く無縁な
148　014　おたがいに無縁の暮らしをしてきたのである。
178　006　無縁のいのちを

むえんな　無縁な
142　095　すでに現実に存在していて　いわゆる階級構造とは全く無縁な

むえんの　無縁の
148　014　おたがいに無縁の暮らしをしてきたのである。
178　006　無縁のいのちを

むかいあって　向いあって
061　174　火のない暖炉に向いあっています。

むかう
101　032　ひろい曠野にむかう魂が
136　009　密議にむかう
180　043　引返すか迷路にむかうか

むかえ　迎え
074　002　ぼくらの船を迎えるものはなかった

167　080　よりよき消滅を迎えようではないか
184　008　新しく家を建てると養子を迎え

むかえよう　迎えよう
167　080　よりよき消滅を迎えようではないか

むかえる　迎える
074　002　ぼくらの船を迎えるものはなかった

むかし
032　012　わたしを愛撫するのはむかしの夢であらう
039　099　むかしの声もとどかない
041　099　むかしの世紀がまだ寝床に就かぬうちは
058　012　むかし酒場で知りあった女が
061　140　眼下の大いなる混沌のむかしに
062　008　二十年もむかしに死んで
101　011　むかしの愛も　あたらしい日附の憎しみも

むかし　昔
028　013　昔からの葦の巣があり個人が住んでゐるが
029　011　花花も昔のままに白く
039　076　焼けてしまった昔のあたりを散歩する
053　014　昔の恋人からおくられた銀のロケットを
054　079　未来はとおの昔に済んでしまっている
062　031　わたしは昔の少年になってどこまでも追いかけてゆくだろう
127　011　もっとずっと昔、
127　013　もっとずっと昔の、
128　018　人間が住んでねえんだ　昔から
150　073　きみから送られた昔の雑誌を手にして、なつかしい面影に出会い、
150　076　昔の雑誌が見つかったというのは、私にとって幸運でした。
160　015　二十年も昔に記憶の底に沈んだ詩人が
183　024　遠い昔のおもかげを懐しんだり
186　016　ずっと昔の話さ
186　024　昔の発車ベルの音が体内のどこかに残っていたんですよ！
188　034　その間、昔の仲間が、三人死んでいる。
189　040　ずっとずっと昔のことのように

むかって　向って
003　005　海に向って帽子をふって
007　010　喞筒は空に向って泥を吐く　草の無い荒地ではとかく悪い感冒が
026　004　風の音に向って
041　054　あなたは誰かに向ってさう言った
041　133　曇った空の下を違った扉に向って走ってゆくのを見た

056　013　聾の老人が世界に向って何か叫んでいるのが
108　015　存在はすべてある終りに向って動く
165　009　黙々と机に向って仕事をする父の背中に
180　046　その人の背中に向って

むかふ
039　072　測りしれない地平線のむかふから

むかふ　向ふ
005　018　桜並木の向ふ側で燃えてゐる
028　009　哀訴の蒸気を吸殻とともに皿の上に拾てる三重の硝子の向ふの鐵格子の中の

むかへる
043　015　弱い光でうなだれた神をむかへる

むがむちゅう　無我夢中
146　034　わたしは無我夢中で逃げ出しましたが

むかんけい　無関係
028　048　小鳥や草の声とは無関係である

むき
079　003　太陽はかたむき
087　007　そらとぼけた白内障の目をむき
167　045　光りのむきを変えると思ったこともあった
172　003　ひたむきなものは消滅した
177　013　きみの家族が住むきみの家があり

むぎ　麦
010　005　日の匂を発散させる少年は青い麦の芽である
010　008　青い麦の芽の匂が向日葵のあたりにのこる
018　015　熱い麦の管は
021　012　麦藁帽子ほどのプウルをまはり
088　012　はてしない空　麦畑　街々

むぎばたけ　麦畑
088　012　はてしない空　麦畑　街々

むきぶつ　無機物
128　021　無機物の　洗煉の極
172　028　もうすぐひとかたまりの無機物になるのだから」

むきりょくな　無気力な

142　054　あとに残るのが　無気力な教養人ばかりだとしたら

むぎわらぼうし　麦藁帽子
021　012　麦藁帽子ほどのプウルをまはり

むくい　報い
130　011　報いがこれだ！）
142　112　どんなにおそろしい報いを受けるかは
192　024　これが罰か、太陽と海を呪ったことの？　たった一度の空想の罪にしては、酷すぎる報いではないか！

むく犬
099　003　黄金の毛のむく犬と一緒に

むけて
041　005　意志は荒い山肌の斜面からむけてくるのか
061　078　ぼんやり眼を水面にむけてとおるのをーー
085　028　いつも刃を上にむけている親切な男だ
101　050　この地平から水平線にむけてひっぱってゆこう
142　047　それから　肩をおとして伏目になるか　面をそむけて窓の外を見るか
180　007　障子に映る薄陽をむけて
189　013　かれはくるりと背をむけて

むけてくる
041　005　意志は荒い山肌の斜面からむけてくるのか

むげん　夢幻
023　015　軟弱な地を攪げ夢幻の中から

むげん　無限
037　016　無限といふものが少しづつ暗くなりかけてゐた
077　015　無限の質だ！）
082　012　しずかに無限の空のなかへ消えていった
112　034　妥協の無限の可能性をたよりに
126　017　パスカルを畏怖させた宇宙の無限の沈黙とかは
182　019　たましいは無限をゆびさしていた

むこう
061　163　星のきまっている者はふりむこうとしない。
081　011　霧のむこうでは
093　014　これから壁のむこうに出かけなければならない
101　003　あちらから昇り　むこうに沈む
108　009　空壜のむこうで
117　002　どぶ川のむこうに草がゆれており

167　009　窓ガラスのむこうには

むこう　向う
001　008　高い梢の向うの響は
054　154　ネクタイピンでこじあけられた窓の向うがわ

むこうがわ　向うがわ
054　154　ネクタイピンでこじあけられた窓の向うがわ

むごたらしい
081　024　むごたらしい歴史のそとに

むごん　無言
054　132　無言で蓄音器のレコードが廻転する

むし　虫
001　005　ぶんぶんと翅虫は
004　003　炎は昆虫のやうに翅をならす
005　035　昆虫は死んだ
028　045　そこを通る風の鳥の虫類の笑ひ
028　065　笑うものたち虫のやうな検微鏡下の虫たち
074　019　いかにして黒い蛆虫が這いずってゆくかを
083　008　ほそい声で虫がないている
128　053　相場も騒動も測量も相続も掃除も葬式も
129　013　白紙の本をめくる
145　005　芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右
191　007　虫獣の喘ぎ

むしばまれた　蝕まれた
160　070　アルコールと麻薬に蝕まれた生活で

むしばみ　蝕み
167　076　ぼくたちのライフを蝕み

むじひな　無慈悲な
097　006　もし無慈悲な画家が牢獄を描くとしたら、
104　009　無慈悲な月の光が　照し出す

むじゃきな　無邪気な
152　036　なんと無邪気な悪魔のやつめ！
171　012　無邪気な目には悲しみがあふれていたから

むじゅん　矛盾

166　007　矛盾の道を地ならしするのは

むしょう　無償
156　028　無償を意味する

むじょう　無常
045　012　夜半のけむり無常の風に耐へてきた

むしょう　無性
144　007　鱗の落ちた蛇神は無性闇に輾転し

むしょうに
152　004　むしょうにやつと話したくなった

むじん　無人
095　017　明るい無人の電車が
124　036　無人の巷をさまよう
128　078　無人の編集室で

むじんぞう　無尽蔵
161　019　ほとんど無尽蔵である

むすう　無数
028　059　葡萄の木の影のごときタイプが無数繁茂する
048　024　軟体の極限をゆく無数の曲線の戯れ
061　081　無数の小さな抱沫が噴きだしているのを……
142　106　一つの　否！　は　明日には無数の　否！　になるだろう
152　011　無数の星の悲鳴を耳のなかに残すから
188　010　その歯は抜きましたが、他の歯に窩が無数にあるとか、

むすうの　無数の
048　024　軟体の極限をゆく無数の曲線の戯れ
061　081　無数の小さな抱沫が噴きだしているのを……
142　106　一つの　否！　は　明日には無数の　否！　になるだろう
152　011　無数の星の悲鳴を耳のなかに残すから

むずかしい
088　056　気むずかしい人たちに聞かせてあげよう
106　037　なにごとも断定するには　むずかしい世界となった

むずかゆい
125　022　むずかゆい両脚をとじて一人のベッドで静かに眠れ

むすこ　息子
041　045　とげとげしい息子よ　御身の
066　017　息子は煙草をふかしながら
113　014　なんでも知ってる　靴屋の息子で
151　003　貧乏人の息子で

むすびつける
057　019　力が判断と緊張をしっかりと両足にむすびつける

むすびめ　結び目
184　025　結び目に愛がないからで

むすめ
058　042　サーカスのむすめの写真をながめながら

むすめ　娘
148　005　二人の娘を育ててきたと書かれていた。
151　029　おまえをおとうさんと呼んでいる娘を裸にし
173　026　今では街中でも綺麗な娘に出あったりすると
181　011　十八の小娘を相手に

むせ
168　007　緑野の香にむせながら

むぞうさな　無造作な
030　004　無造作な天体には樹木が茂る

むそうする　夢想する
052　025　誰もいない淋しい部屋を夢想する

むだ
022　009　そして毒を含むだ花々は
054　118　そして詩人と大学生は駅でしばらく別れを惜しむだろう
151　037　有難いことにどんな女にもむだがなかったから

むち　鞭
032　011　しなやかな鞭のやうに
160　068　「蛇の穴」と称して大学にもぐりこみ　教鞭をとったこともあるが

むち　無智
136　010　正義と無智の

むちつじょ　無秩序

183　010　さかりどきの雑踏は無秩序にみえるが

ムッソリーニ
173　036　ムッソリーニも死んだ

むなしい
046　011　いまはしい壁や　むなしい紙きれにまたたく嘆息をすて
053　050　一年よりもむなしい一生を過ごしてきました
061　053　浪にくずれるむなしい幻影が

むなしく
045　007　荒れた庭に　花樹はむなしく崩れかかり
078　018　ぼくらはむなしく大空に

むなしさ
101　012　みんな忘れる祈りのむなしさで

むね　胸
005　015　ヴェニュスの胸は穹より広いヴェニュスの胸は穹より広い
041　047　母の胸をどんなに不安にしてしまったか
049　007　鋭い笛のようなものが胸の底でめざめる、
050　029　きみの胸の傷口は今でもまだ痛むか。
051　034　そしてじりじりと胸の上に倒れかかってくる。
053　015　わたしは大切に胸のうえにさげています
054　008　胸に造花の老人たちが
054　163　胸にかがやく太陽の紋章を示しながら
055　064　胸をえぐられ
062　005　わたしの胸のなかで腐っている
063　010　重たくぼくの胸にのしかかってくる
065　042　高く低く、沈黙の胸をたたいた。
070　045　おまえの胸をおしひらく。
080　017　あたらしい血汐であらい　この苦しみの胸が
100　012　不安は胸にたかまり
101　053　歌う者のいない咽喉と　主権者のいない胸との
112　026　真白な花婿の胸をした戦友よ
126　015　奇蹟の冒険に胸をおどらせるだろう
179　024　グラスを胸にのせたまま

むぼうびな　無防備な
142　091　しかし　利己的で　近視眼的で　無防備な文明のなかにいて

むま　夢魔
081　006　宙にうかんだ夢魔の城

むめい　無名
101　044　沈黙よりも固い無名の木の実がはじけとび
160　013　コーネリアスという無名の男の　涙が出るほどおかしな物語

むやみに
106　029　むやみに明るい星空があり　意味なく敏感な宇宙があり

むら　村
038　004　いくつかの街と村の屋根をすぎる
038　029　わづかに街と村の
101　037　きみたちは　もう頑強な村を焼きはらったり
123　010　巨大な村
127　015　村の思想の種子がこぼれて、
190　004　父がうまれた村は山中にあり

むらさき　紫
090　012　この紫檀の肌にくらべたら
090　021　紫檀の光沢は深まってきた
106　030　尖がった紫の口髭なら　ずっと微妙な震えをもつかもしれない
108　032　みはるかす何とか連山は紫の帯

むらさき色
008　011　クビれてむらさき色になると　煙のつまったパイプを

むり　無理
160　067　（私たちが忘れてしまうのも無理はない）

むりょくな　無力な
101　004　無力な太陽のことばで　ぼくにはわかるのだ

むれ
037　002　しづかな炎のむれが
042　012　ねむれる草のうへに
046　028　あなたはけむれる一個の霧となり
048　035　涛のたわむれから
061　124　ひとつの波のたわむれから
083　007　なにもかも光と影のたわむれにすぎない
121　012　幻影の女とたわむれる

むれ　群れ
028　062　花花しく棲息する物質の群れが
062　038　ただひとり群れをはなれた小羊が

065　032　ひと群れの鶴にまじって、永遠の刑罰を

メ

006　008　そういえば長いこと日のメを見なかったね
016　011　透明なプロペラがメガネの中に
039　058　ヌウメノンよヌウメノン
054　126　「アメリカ……」
054　133　「アメリカ……」と壁がこたえている
054　139　「アメリカ……」
054　142　反コロンブスはアメリカを発見せず
054　144　われわれのアメリカはまだ発見されていないと
055　035　空虚なメランコリイの谷間にふりつづいている
065　019　さっきから彼のイメージの
065　044　乾いた咳を一つした。彼のイメージのなかには
072　010　簡潔なイメジによって
072　029　二千四百メートルの興奮
072　049　高速度カメラが
073　003　メコン河の水で濁っていた
073　028　メコン河の上流へと
085　016　銀メッキの光りをうかべた不敵な男だ
091　009　きみのイメジは
091　016　きみのイメジはいつも眼に砂をいっぱい溜めている
100　061　ペイヴメントには水玉模様の少女があふれ
100　073　そして　ぼくと逆のイメジを抱いている
103　009　イシュメエルにはいいところがある
103　015　金づかいの荒いアメリカ人とはわけがちがう
103　028　イシュメエルよ
123　009　世界のメトロポリス
124　020　（ジャーナリストがテーブルを叩いて怒っている）
125　017　どんなイメジを選んだところで
128　073　おれのイメージに
142　037　あなたのメッセージは
142　077　アメリカの一部の戦争捕虜たちは
142　113　歴史を作る者をたえず脅かしつづけてきた基本的なイメージである
150　077　まさか、「荒地」が今頃になってアメリカから送られてくるとは。
152　019　おいらのメッセージ
160　064　アメリカのオーデンといわれたが
160　071　アメリカ社会における成功の蔭にある失敗のさまざまな痕跡が
174　024　ダメを詰めるような毎日を送りながら
180　025　ら……。貴方に判らなかろうと、もう少し付け足すと、昨年は形相の意味も知らなかったということ。私は「メ
184　002　ドイツ系のアメリカ人で
184　004　フランス系アメリカ人と横須賀で結婚し
185　004　何のコメントもなかったが

188　066　子供の自殺は、アメリカでも、

め　芽
010　005　日の匂を発散させる少年は青い麦の芽である
010　008　青い麦の芽の匂が向日葵のあたりにのこる
018　010　青い芽が伸びる
026　023　芽生えのない種子が
031　019　けれど今になっても芽をふかない
062　049　枯草のあいだの四月の若芽のように萌えています
109　002　芽を出し、枝葉をひろげ
144　011　木の芽峠を越え

め　眼
002　012　凍りついた眼を
006　010　少女が碧い眼をした人形を抱へて出てきたが
007　008　多孔質の雲の間からトンボの眼のやうに碧く　アスピリンを積ん
007　015　まだ阿片でぼうぼうと煙った眼よ
015　003　花は眼のある動物を見ない
017　018　眼が白くなって天を睨めたが
019　009　あの憂欝な眼は
020　005　眼が覚めた
021　026　白い雲の中で眼をつぶり
022　010　眼に見えない
023　020　澄んだ褐色の眼を出はいりする憎悪の炎よ
024　004　けてゐる　寝床に散らばった怠惰な骨の中から　陰鬱な眼球
025　013　眼もなく耳もなくただ流れる血液は
025　040　おびただしい鶯たちが眼をつぶる
026　006　そのとき銃眼の奥から睨む
026　028　黒い眼帯を外して
033　010　眼はくらみ
037　020　すべてをみつめる生きものの眼が
039　044　しだいに眼をとじた楕円の石に変ってしまふ
041　033　優しい眼鏡や柔かい手袋の明日の方まで湿してゐる
041　046　毅然たる恰好は　悲しげな眼ざしは
041　055　みんなは黙った　眼を閉ぢ眼を開き　膝をみつめて
041　134　どんな物蔭の暗い眼が
045　008　眼のまぼろしに妖しく憑かれた
046　054　群青に支へられ　眼を彼岸へ投げながら
047　016　大きく見ひらいたうつろな眼の
049　011　高いところに立って影の眼を開いてみたまえ
050　025　空にむかって眼をあげ
051　022　あとでこっそり眼を覚ますことだ、
051　024　ぼんやりとデス・マスクが肉眼に見えてくる。

051 032 あの鍵穴はまばたきしない眼……
052 024 わたしはいまでも眼鏡のつかれをぬぐい
054 058 大学生は低い声と思いやりのある眼ざしで話しはじめる
054 103 だから僕がとくに眼ざめるとき
054 129 僕は眼をかがやかし涛のように喋べりかける
054 160 いつの日か　僕らの交す眼ざしや
061 069 あなたの眼となり、あなたの表情となる「現在」に。
061 078 ぼんやり眼を水面にむけてとおるのをーー
061 140 眼下の大いなる混沌のむかしに
067 002 鳶の眼で
069 025 十二時十分　針の眼が
078 009 いたましい鴎の眼で見おくっていた
089 012 もう誰の眼にもとまりません)
089 013 けれど死んだ眼をひらいた少年には
091 016 きみのイメジはいつも眼に砂をいっぱい溜めている
096 005 きみは賢者の砂色の眼で
098 006 まだ眼ばたきしているやつがいる
100 007 みんなは黙った　眼をとじ眼をひらき　膝をみつめて……
100 015 どんな物かげの暗い眼が
100 060 はじめて心で見　眼で感じた夏だった
100 081 ぼくたちが　さらに遠くの世界に眼をやるとき
106 002 みんな同じポーズで　いっせいに眼を
106 010 第一列の中央に　いやな上眼づかいのかれがいて
106 020 かれの眼は　スプーンの銀のように輝いている
106 033 鳥の巣型の髪のカットに　度のつよい眼鏡を糸でつるして
112 004 そんな遠くを見るような眼つきで
112 029 眼や耳や手足をなくした不幸な犠牲者に何をしてやったか
112 032 すべての秩序が眼の高さにあればいいといった
126 010 地上の何億という眼は
133 025 いさぎよかった者の眼のような
134 002 みんな泣きはらした眼をしている
134 013 広場に立って眼をこすっていると
136 023 どんよくな眼が
142 091 しかし　利己的で　近視眼的で　無防備な文明のなかにいて
146 024 みんなの眼がいっせいに
146 058 眼がさめてみると
150 057 彼は特徴のあるうるんだ眼をしばたたきながら聞いていたが、
160 005 忘れてはいけないことを　さがすような眼で
162 009 生きるのをいぶかる眼に
164 001 おおきな眼を空洞にして
164 026 きみがすっかり眼をとじるまで
171 005 女は狂う寸前の眼つきをして
172 021 くぼんだ眼窩に目やにのようにたまる

173　053　どうか　このまま眼が覚めませぬように」
188　005　白内障の眼を、なるべく休めるようにしていますから、
188　017　眼は、そのうちに、片眼ずつ、
188　024　両のこぶしで、眼をおさえている光景、
188　037　眼よりも、心で計る構えになるのは、
189　027　死人の眼でながめながら
192　016　震えている足許に眼をおとすと、白い四角の標識に、明りが仄かにともっていて、
192　019　助かった！　*まだ*死にたくはない。眼は真珠に、骨は珊瑚になったとかいう、五尋の海底の父になるなんてごめんだ
193　007　眼鏡の疲れをぬぐい

めいきゅう　迷宮
046　034　同じ木の手摺につかまり　同じ迷宮の方向へ降りてゆく
061　151　同じ迷宮の白い渦のなかに消えてゆく。

めいし　名刺
020　002　バラ色の手に名刺が
020　007　名刺を通過したが

めいしん　迷信
072　022　迷信も愉快だし、科学的検討もまんざらではない

めいずる　命ずる
061　074　あなたの足を停め、あなたに待つことを命ずる「現在」に。

めいそう　瞑想
096　018　あの瞑想の闇のコアには生きている砂漠があるんだ
190　016　残りすくない瞑想の命を楽しむ

めいてい　酩酊
093　009　酩酊は何によらず悪い習慣だが

めいはく　明白
072　056　どうして、こんな明白なことがわからなかったのか
166　012　自由とは何かは太陽のように明白だったのに

めいはくな　明白な
072　056　どうして、こんな明白なことがわからなかったのか

めいめいされた　命名された
145　019　*静かに走れ*と命名された群集の河は昨日のように流れていた

めいめいの
148　036　結局、めいめいの職歴と子供を何人作ったかということにつきていた。

めいめつして　明滅して
145　027　街のまぶたは重く垂れ　東京の暗い夜に信号燈が明滅していた

めいもくした　瞑目した
035　027　瞑目した瞼のうへ

めいれい　命令
112　014　命令一下たちまち整列し　黒い銃剣の林をつらね

めいろ　迷路
093　012　神学は迷路である
093　013　かれにとってはとっくに抜け道がわかっている迷路である
146　011　ビルのなかは迷路になっていて
146　036　またまた迷路の廊下にまよいこみ
146　052　迷路を歩きはじめました
146　053　迷路は深くて
163　003　迷路をさまよったあげくに
180　043　引返すか迷路にむかうか
192　013　途方もない迷路に入ってしまったと気づくと、あたりが急に暗くなってきて、

めかくしされた　目かくしされた
136　008　目かくしされた森の

めがけて
072　062　群集は押しあいへしあい停車場めがけて

めかた　目方
145　017　そんなカップルはどこにでもいて快楽のスプーンで苦痛の目方を計りかねていた

メガネ
016　011　透明なプロペラがメガネの中に

めぐって
054　043　夕暮の環をめぐって
132　007　年月はめぐりめぐって
168　011　どこをどうめぐってみても

めくら
136　011　めくらのまごころ

めくり
124　006　日付のない暦をめくり

めぐり
025　010　日暦をめぐり欲望を追ってゆくものよ
042　007　大いなる弧をめぐり遥かに高い所から
075　015　もう二度とめぐりあうこともない
078　022　いつまでもめぐりつづけているだけなのにーー
115　012　またいつか　めぐりあおう
132　007　年月はめぐりめぐって
150　033　それとも単にめぐりあわせか。
180　038　言葉はめぐりあうものかたずねあうものかという
180　041　めぐりあうことに失敗し
188　079　私には、なんと、四十三回目の地獄めぐりです。

めぐりあう
075　015　もう二度とめぐりあうこともない
180　038　言葉はめぐりあうものかたずねあうものかという
180　041　めぐりあうことに失敗し

めぐりあおう
115　012　またいつか　めぐりあおう

めぐりあわせ
150　033　それとも単にめぐりあわせか。

めぐりめぐって
132　007　年月はめぐりめぐって

メコン河
073　003　メコン河の水で濁っていた
073　028　メコン河の上流へと

めざして
025　002　星の光をめざして噴き上り

めざめた　目覚めた
014　003　頭の大きな楽器が目覚めたらしい
041　017　不図　目覚めたときは

めざめていた　目覚めてゐた
041　098　あなたは独り目覚めてゐた

めざめている　目覚めてゐる
031　005　目覚めてゐる石や眠ってゐる樹木は

041　106　目覚めてゐることに疲れ

めざめる
049　007　鋭い笛のようなものが胸の底でめざめる、

めじり　目尻
167　059　うなだれた囚人の目尻には
187　004　目尻に涙をにじませ

めだたない　目立たない
148　022　土にかえる目立たない姿勢をしていたが、

メッセージ
142　037　あなたのメッセージは
152　019　おいらのメッセージ

めったに
145　004　はいるとつぶやきながら黒い色の真実やめったに売れないエンジェルの絵を売っていた」
160　066　かれの名は雑誌やアンソロジーでさえめったに見かけなくなる

めっぽう
181　013　風がめっぽう強く

めつらく　滅落
150　052　続いて第二輯に逃亡した娼婦の心理を描いた「滅落」を発表したところで、

メトロポリス
123　009　世界のメトロポリス

めにみえない　目にみえない
106　043　詩人の本質は変らない　それは目にみえない奥にあって

めばえない　芽生えのない
026　023　芽生えのない種子が

めまい　眩暈
002　005　眩暈がする
041　041　夜どほし歌ってゐるな　寒い眩暈のなかで

めやに　目やに
172　021　くぼんだ眼窩に目やにのようにたまる

メランコリイ

055　035　空虚なメランコリイの谷間にふりつづいている

めん　面
006　007　地面からそんな声がした
031　010　煤けた家具の断面だけを見せ
033　015　小さな宇宙の平面の上に残された
041　005　意志は荒い山肌の斜面からむけてくるのか
048　028　すると地球の表面に都市ができる
052　002　忘れがたい悲しみの面影がうかぶとき
054　141　すべての人々の面前で語りたかった
055　059　イデオロジストの顰め面を窓からつきだしてみる
059　010　今ではなつかしい面影のようにうすれてしまった
060　002　斜面に枯草がそよいでいたりする
061　078　ぼんやり眼を水面にむけてとおるのをーー
062　043　この小さな丘の斜面に寝そべっていると
070　012　悲しみの水面にうかべて、
106　019　かれの額は　西洋皿の平面のように広く
106　036　不吉な羽ばたきをして　地面を歩く黒い鳥の男たちもいる
112　022　寝床のぬくもりでほてった身体を　詰まった路面電車に積みこんで
125　004　縦横家の仮面のうらとおもてに
126　011　もうすぐテレビの画面に吸いよせられるだろう
142　047　それから　肩をおとして伏目になるか　面をそむけて窓の外を見るか
142　097　非合理に機能する官僚的権威主義を全面的こはびこらせながら
142　101　ブコフスキーやアマルリクが直面した状況にくらべたら
145　003　何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに
150　013　彼の表面は常に波立ってゐるが、彼の底は何時も静かで、
150　036　しかし、そのことに、「私」は、全面的に欺かれているわけにはいかない。
150　073　きみから送られた昔の雑誌を手にして、なつかしい面影に出会い、
159　016　そんな場面は
160　022　（公衆の面前では　場違いな人間というのと同じだ）
164　009　足で地面をばたばた踏んで
165　008　面をそむけさせたのである
167　062　ぼろぼろになった壁面にまた心理面に
175　015　きみとぼくは同じ一枚の画面の中にいる
180　006　そそくさと読みおえたその文面を
187　003　壁面の王は
188　002　こんな文面があったのを憶えているだろうか。
188　016　呼吸ができなくなるという、面倒な病気です。

めんじょされ　免除され
142　059　恐ろしいクロールブロマジンやハロペリドールを免除され

めんぜん　面前

054　141　すべての人々の面前で語りたかった
160　022　（公衆の面前では　場違いな人間というのと同じだ）

めんどうで
155　012　それらがめんどうで厄介なのは

めんどうな　面倒な
188　016　呼吸ができなくなるという、面倒な病気です。

も　藻
008　017　レコオド音楽にクチあいて　緑の藻を夕べてゐる
041　025　海からやって来たといふ　空を飛ぶ藻に乗ってきた人よ
041　034　いとしい藻　あの愛着の汐よ
041　060　別のあなたの藻のことを考へながら
061　077　溺死人の行列が手足を藻でしばられて、
061　144　あなたの青銅の額には、濡れた藻の髪が垂れ、
061　164　そして濡れた藻と青銅の額の上に、
070　006　わたしのからだを水藻のように
091　011　新聞社の屋上たかく舞っている伝書鳩の
142　065　魂を売ることを拒否したという

モア・ザン
128　026　大事な「モア・ザン」がぬけました

もう
015　013　昨年の唄であらうかもう見えない
017　038　もう繃帯もまにあはない頃になって
018　001　もう響は拭はれて
029　002　もう歯ぎしりする怒もなく
031　008　もう花などどんな世界にも垂れはしない
031　026　もう何も信じたりしないがよい
032　002　風はもう吹いてこなかった
041　037　青春よ　もう再び戻ってきてはいけない
041　139　水の中にはもう春がきてゐる
054　003　僕らはもう会うこともないだろう
054　063　おお　いまこそイギリスに住もう
054　085　鍵は僕が失敬した　そしてもう決して返しはしない」
054　087　「もういい　一言も語るな
062　045　ここでもうお終いだという気がします
069　005　もうひとりの少女に話していた
072　058　何百万の人々が、もう一度溜息をつくのだ
075　015　もう二度とめぐりあうこともない
077　024　もう超えることのできない境があり

078 010 （その友の名はもう思い出せない）
078 013 （その年のことはもう忘れた）
080 013 きみはもう何も言わぬがいい
080 021 もう　きみはこの涯しない眺めの
083 016 これはもう丘とはいえない
084 028 それはもうシリアやトリエステの軍隊よりも
085 029 文明批評はもうたくさん
088 041 ぼくと一緒に住もうというのだ
089 012 もう誰の眼にもとまりません）
090 008 これはもうはっきりしている
092 003 もうない
092 008 もう二十年たつ
093 016 もうろうとしたストイックな頭から
096 015 文明色なら　もう古くなった三十年代流行のセダンの
098 009 「寝るまえにもう一杯いかが？
099 006 もう一人の妹は眠りながら小径を歩いている
099 012 もう一人の妹は一人の子供の母になった
101 037 きみたちは　もう頑強な村を焼きはらったり
102 016 もういちどハープの筋をかき鳴らすから
102 018 悔恨の波はどこまでもうねってゆけ
102 020 若き日はもうかえらない
104 011 わたしの血汐は　もう歌おうとしない
107 005 車輪や道もうたっていた
108 031 海はもうイヤ！
110 001 もう風を孕むこともない
112 002 もう忘れたと思っていたよ
113 049 もう分らなくなった
117 010 失うものはもうないから
118 006 おれはもう　うんざり
121 006 陸のウニはもうごめんだと逃げだそう
123 011 もう一つの首都を夢みて
125 002 夢はもういらなくなった
125 011 もういちど血のなかをとおってこい
126 011 もうすぐテレビの画面に吸いよせられるだろう
128 061 おれはもう会わない
130 006 もう一つは誰だろう？
130 017 もう一つが可哀そうだ
132 012 もうすることはない
134 015 「もう来ませんかね、バスは？」
137 011 もう誰も知りたがらない二人の秘密
138 019 もう夢には戻れない
142 001 「もう長いこと　この国のほんとうの歴史は
145 023 「写真店の窓には曝された肖像の記念写真が　夢こそすべてであると知った時　もう肉体

145　029　夢の厚着で肥りすぎた詩人には真偽はどちらでもよく　魂はもうとっくに死んでいた
146　041　「もうここにはいないのかしら？」と思い
148　046　もうこれ以上、滅ることのない戦友の、
150　059　しかし、それから彼は、もう小説を書かなかった。
154　006　瑠璃玉の道はもう見えない
155　028　いいえ、ぼくはもう……と口ごもって
157　008　もう栄光の差なんてありません
160　039　もう一度一人になるために
166　032　ぼくはもう死んでいるのかもしれない
167　027　もう一人の彼である
167　073　どのみちもう
168　009　虹の国を描くこともあったとおもう
172　028　もうすぐひとかたまりの無機物になるのだから」
173　010　もう終ろうとしている世界がある
177　031　酒場はもうしまっており
180　025　ら……。貴方に判らなかろうと、もう少し付け足すと、昨年は形相の意味も知らなかったということ。私は「メ
181　017　ふと「もうゴルフはやめよう」と
188　049　これはもう、こたえられない、
188　078　もうすぐ、「荒地」の最も残酷な月。
191　013　もう一度 rise and fall
192　025　必死の思いで、前方の真っ暗闇を凝視するが、もう何も見えぬ。

もうしわたし　申し渡し
142　066　国外追放を条件とした釈放の申し渡しに対して

もうそう　妄想
172　017　妄想によわい躰を病み

もうたくとう　毛沢東
173　038　毛沢東も死んだ

もうはつ　毛髪
023　002　毛髪のやうに血が垂れて
027　007　一本の毛髪もふくめて

もうふ　毛布
065　048　星も月もない夜、毛布にくるまった男は
173　046　汚ない三枚の毛布にくるまれば

もうもく　盲目
033　009　盲目はドアの隙間から入ってくる
048　017　盲目の手が

もうもくと　黙黙と
079　019　ぼくらは黙黙と逃れ去るだろう

もうれつな　猛烈な
070　052　どんな蛇よりも猛烈な毒をもっているわ

もうろう　濛朧
030　025　濛朧とした足にゆすられながら

もうろうとした
093　016　もうろうとしたストイックな頭から

もう一つの
123　011　もう一つの首都を夢みて

もう一度
072　058　何百万の人々が、もう一度溜息をつくのだ
160　039　もう一度一人になるために
191　013　もう一度 rise and fall

もえ　燃え
005　018　桜並木の向ふ側で燃えてゐる
008　004　もある　向日葵のごとく旗は燃え　荒地に咲きそめた
014　015　けれど燃えないうちに水がはいったよ
018　016　内部から燃え始める
025　018　燃えあがる世界の窓の内部から
039　132　ゼラニウムのやうに燃えはてようと
041　129　やがて嫉妬の火で燃え尽さうとする
048　007　皮膚だけが燃え
051　015　海が熱い体温のなかで燃えたぎっている、
053　018　夕陽の果に燃えつきて
054　124　絵画は燃えるような赤でなければならぬ
063　002　夕日が燃えつきてしまった
065　028　燃える屋根の下に、愛は
089　002　赤々とストーヴが燃えている部屋の
098　023　ブランディの血を燃えたたせる火
115　009　まだ燃えている彗星の
152　030　美しい炎をあげて燃えあがり
160　065　　フンボルトの天才　は四十歳で燃えつきてしまい
172　001　紅に黄に燃えさかって

もえあがる　燃えあがる
025　018　燃えあがる世界の窓の内部から

もえさかって　燃えさかって
172　001　紅に黄に燃えさかって

もえたぎって　燃えたぎって
051　015　海が熱い体温のなかで燃えたぎっている、

もえたたせる　燃えたたせる
098　023　ブランディの血を燃えたたせる火

もえつきて　燃えつきて
053　018　夕陽の果に燃えつきて
063　002　夕日が燃えつきてしまった
160　065　フンボルトの天才　は四十歳で燃えつきてしまい

もえて　萌えて
062　049　枯草のあいだの四月の若芽のように萌えています

もえている　燃えてゐる
005　018　桜並木の向ふ側で燃えてゐる

もえない　燃えない
014　015　けれど燃えないうちに水がはいったよ

もえはじめる　燃え始める
018　016　内部から燃え始める

もえはて　燃えはて
039　132　ゼラニウムのやうに燃えはてようと

もえるような　燃えるような
054　124　絵画は燃えるような赤でなければならぬ

もがいたって
186　052　どうもがいたって、あなたはあなたですよ！

もがく
033　003　いまおびただしい影のなかでもがく
094　008　杭につかまり宙にもがく小舟

もくげきしゃ　目撃者
054　120　聴かせてくれ　目撃者は誰なのだ！

もくしつ　木質
041　124　木質は腐り　陽に燬かれ　蝋のやうに流れた

もくせい　木製
021　007　木製のパイプ
021　008　木製のベンチ
021　009　木製のポニィの

もくてき　目的
041　136　目的のない風が立つ
100　017　目的のない風が立つ
103　022　かれの目的地は

もくてきち　目的地
103　022　かれの目的地は

もくとう　黙祷
135　005　くるしい黙祷を

もくひょう　目標
126　005　「月が刻下の目標だが
128　043　愛や敵意が目標にうまくとどいたためしがあるかい？

もくへん　木片
039　064　煌めく木片が波に漂ってゐよう

もくもく　黙々
112　015　敵にむかい黙々と出撃し　一夜あければ骨となる
165　009　黙々と机に向って仕事をする父の背中に

もくもくと　黙々と
112　015　敵にむかい黙々と出撃し　一夜あければ骨となる
165　009　黙々と机に向って仕事をする父の背中に

モグラ
006　006　モグラの生活は嫌だね　と

もぐりこみ
160　068　「蛇の穴」と称して大学にもぐりこみ　教鞭をとったこともあるが

もぐりぬける　潜りぬける
046　005　はるか足下を潜りぬける黒い水の流れ
061　007　はるか、地下を潜りぬける運河の流れ、

もこ　模糊

046　041　模糊とした深淵のほとりから離れ

もし

032　015　とほく海がひろがってゐるかもしれない
039　028　それは涙に似てゐたのかもしれない
039　053　わたしはいつか鳥になるかもしれない
039　116　わたしはいつか虹を見るかもしれない
041　053　また明日　お会いしませう　もしも明日があるのなら
053　004　街のともし灯も
054　025　涙ぐんで　ときには涙ぐみもしないで
054　045　もしかしたら君の姿が霧の中からぬけだしてこないかと
054　113　「また明日会いましょう　もしも明日があるのなら」
055　009　可憐な魂のノスタルジアにともして
057　028　泣いたこともあったかもしれない
062　019　「もし身体にも魂にも属さない掟があるなら
064　001　大きな夕暮の環に灯をともして、
064　032　大きな夕暮の環に灯をともして。
075　012　悪魔の手におちるかもしれない
097　006　もし無慈悲な画家が牢獄を描くとしたら、
097　011　もしあなたが、それを見たいと思ったら、
098　003　「もし、もし……もし、もし……
100　005　また明日　お会いしましよう　もしも明日があるなら
100　029　もしも　明日があったら
100　033　かろやかな鼻唄のリズムで歩きもしたろう
100　036　ちょっとした喜劇を仕組みもしたろう
100　056　もしも　明日があるなら……
106　030　尖がった紫の口髭なら　ずっと微妙な震えをもつかもしれない
116　002　詩になるかもしれぬ
126　020　人間の精神の問題かもしれないから。
133　016　誰も語ろうとしないし聞こうともしない
141　014　在りえたかもしれないすべてのものよ。
142　025　秘密警祭の認知　もしくは同意なくして
142　083　ずっと痛烈かもしれないが
142　103　少しの犠牲で将来の破滅を防げるかもしれない）
145　014　有りもしない幸福の歌がいつものように響いていた
147　006　一瞬の激情で死に突入していたかもしれない
150　080　地震か何かの前兆かもしれません。
151　035　ものの数ではないかもしれないが
151　040　はじめから一人にしておけばよかったのかもしれない
160　004　死にたくなっていたのかもしれない
160　008　どの毒がいいかと話しもした

162 015 恍惚の所業であったかもしれない
166 025 きみは死にかけているのかもしれない
166 028 きみは死にかけているのかもしれない
166 032 ぼくはもう死んでいるのかもしれない
177 005 よかったかもしれぬ
177 017 灯をともし
188 031 何の挨拶もしなかったのではないだろうか。
188 038 私の痼疾、であるのかもしれない。
192 011 もしかすると、近づくにしたがって、遠ざかっていく海なのかもしれない。こんなところは、日本中のどこにもあり

もじ 文字
012 004 その美しい扉の文字は
021 022 とほく離れて文字を愛して
076 015 虚しい文字のように消えてゆく

もだえ 悶え
028 032 すべての叫喚が悶える胃腸である
065 049 烈しい渇きに悶えながら
169 016 悶え苦しむのかも

もだえる 悶える
028 032 すべての叫喚が悶える胃腸である

もたざる 持たざる
061 158 あなたは持たざる一切のものを求めて、

もたない
036 027 花花の薫りと肌をもたない
101 020 すこしずつ退却してゆく軍隊をもたない
133 024 永遠に帰るべき家をもたない

もたらし
039 118 眠りをもたらし

もたれ
056 001 ひとりぼっちで橋にもたれ
056 018 橋にもたれてぼんやり煙草をすっている
089 005 橋のうえで 石の手すりにもたれ
120 002 ベンチにもたれていると

もたれ 凭れ
021 018 ぼくはベンチに凭れて
029 003 凭れかかる椅子もない

035　024　影に凭れて揺れてゐる
039　011　とねりこの木に凭れ
041　021　錆びた鉄柵に凭れる小男の悲哀よ
041　097　椅子に凭れて
054　159　テーブルに凭れて新しい黄金時代を夢みている
167　024　背中をまるめて椅子に凭れている

もたれかかる　凭れかかる
029　003　凭れかかる椅子もない

もたれて　凭れて
021　018　ぼくはベンチに凭れて
035　024　影に凭れて揺れてゐる
041　097　椅子に凭れて
054　159　テーブルに凭れて新しい黄金時代を夢みている
167　024　背中をまるめて椅子に凭れている

もたれる　凭れる
041　021　錆びた鉄柵に凭れる小男の悲哀よ

もち
041　051　新聞紙の上を歩いてゆく　固い心をもち
058　044　もちろん誰にも聞えるきづかいはありません
061　155　此処と彼処、それもちいさな距離にすぎぬことを……
085　011　きみは心よりもデリケートなうわべをもち
100　003　かたい心をもち　小刻みにひとびとにならいながら
101　023　どの方向にでもまげられる関節をもち
103　007　さまよう素足をもち
106　038　詩人はもちろん屈してはならない　その外貌がどうであれ
142　079　もちろん　信念より自分の生命が大切だと考えたからである
151　030　おもちゃにすることもできるのである

もつ
010　001　自転車に乗ってゐる少年は自転車のスピイドをもつ
028　023　鳩とともにおお救世主の銅像の髭にもついて
046　002　澄みたる空に影をもつ　橋上の人よ
067　009　あたたかい街をもつだろう
067　011　一匹の魚をもつだろう
070　021　あなたの指は何もつかまえることができない。
084　032　どこまでもつづく青い灯の谷間にも
088　074　どこまでもつづく愛の歌で
106　030　尖がった紫の口髭なら　ずっと微妙な震えをもつかもしれない
163　004　夜明けとも日暮ともつかぬ薄明の中で

173　007　「見当もつかんな
188　045　愚痴とも、自慢ともつかず、

もっていない　持ってゐない
039　022　もはやどんな力も持ってゐないことを知れ

もってゐる
041　018　あなたはたしかに夜をもってゐる

もっとも　最も
106　044　すべての生きもののうちで　最も強くてしなやかな骨だ
135　008　最も遠い天の梢へ
142　005　東側における弾圧や迫害に最も敏感な人たちでさえ
185　026　最も深く嘆いている者にとっても。
188　078　もうすぐ、「荒地」の最も残酷な月。

もてあましたり
050　007　ゆがんだ顔をもてあましたり

もとせんゆう　元戦友
148　029　元戦友から招待状がとどいた。

もどって　戻って
041　037　青春よ　もう再び戻ってきてはいけない
059　004　母が戻ってくるのを待ちながら
061　064　どうしてあなたは戻ってきたのか。
100　046　ぼくが戻ってくるのは
102　014　毛深い夢の絨毯に戻ってきてくれ
104　008　太陽に追われた記憶が戻ってくるだろうか
142　073　十二年の刑期をつとめあげるために監獄に戻っていったのである
169　012　戻ってこなくてもいいと呟く
193　020　同じ時は決して戻ってこなかった

もどってきて　戻ってきて
041　037　青春よ　もう再び戻ってきてはいけない
102　014　毛深い夢の絨毯に戻ってきてくれ

もどってくる　戻ってくる
059　004　母が戻ってくるのを待ちながら
100　046　ぼくが戻ってくるのは
104　008　太陽に追われた記憶が戻ってくるだろうか

もどってゆく

100　030　こころよい追憶にもどってゆく歩行者のように

もとふくだいとうりょう　元副大統領
128　047　元副大統領ハンフリー氏は

もとめて
055　003　死のガードをもとめて
073　019　翳りゆく運命の暗示をもとめて
078　019　ひとつの島をさがしもとめていたのだ

もとめて　求めて
051　028　執拗に手が把手（ハンドル）を求めて痙攣する、
061　158　あなたは持たざる一切のものを求めて、
080　014　求めても手がとどかなかったもののために
085　031　きみが求めているものは善悪でない何ものか
151　038　愛を求めてさまよい

もとめる
061　056　あなたは冒険をもとめる旅人だった。

もどらない
039　137　もはやこの身にもどらない

もどりみち　戻り道
108　030　理髪店からの長いながい戻り道

もどる　戻る
107　011　ぼくの思想はぼくに戻る
183　028　地震も事故もなくて家へ戻る

もの
015　019　死んだものは壁の中に
025　010　日暦をめぐり欲望を追ってゆくものよ
028　020　かれら塵挨都市の番兵と呼ぶものから
028　029　彩るものは何であっても何でも構はない
028　065　笑うものたち虫のやうな検微鏡下の虫たち
030　026　零囲気のほとりに佇んでいる白いもの
031　013　静止してゐたものが動き出したとき
031　017　そっとあふれてゐるものだけがやさしかったと
031　024　象どられたものから
033　002　だが白いものは
035　016　来るものと去ってゆくものが
037　010　けものや鳥よりもすばやい身仕度で

037 016 無限といふものが少しづつ暗くなりかけてゐた
037 020 すべてをみつめる生きものの眼が
039 012 譫言のやうなものを
039 041 奪ふものを
039 078 淋しいものに違ひない
039 101 わたしははじめて怒りといふものをみた
040 019 秘密はいくつもの廊下をとほってくる
040 025 盲ひたもののために
041 039 考へあるもののやうに　また無意識のごとく
041 119 誰のものでもないと思ってゐた樹木
041 123 もはやあなたを導くものはない
043 007 いくつもの乾いた言葉にそって
042 015 庭は荒れて　もの影もなし
044 001 匍ふもの　考へるもの
044 002 また烈しく運動するもの
044 011 御身は教へる、肉の裔（すゑ）なるものたちに、
046 046 いくつもの扉のやうに行手をさへぎり
047 004 孤独な生きもののため
048 015 まるで滅びることのないもののように
049 007 鋭い笛のようなものが胸の底でめざめる、
051 030 人間はチューブのようなものであったらよい
052 008 愛と死の隠れんぼはやっぱり楽しいものだろうか
053 024 いつものようにわたしはお姉さんさようならを告げることが出来ません
053 060 夢を見ながら眠る習慣が　こんなに悲しいものとは思いませんでした
054 066 銀行が国民のものになるだろうから
054 093 そうだ　これで僕の孤独も充分というものだ
054 148 暗い存在が抽象そのものに凍ろうとする時間のはずれから
055 030 なんだか眠りたりないものが
057 030 ぼくはぼくである一切のものを否定するのだ
061 015 いくつもの通路をぬけ、
061 016 いくつもの町をすぎ、
061 044 未来と信仰はちがうもの。
061 112 一つのものを選ぼうとするとき
061 113 最悪のものを選んでしまうことには
061 131 乾けるもの　固く凝れるものを溶かした」
061 158 あなたは持たざる一切のものを求めて、
061 159 持てる一切のものを失った。
061 182 貴方がわたしに下さったものはこれだけですか。
062 032 愛していても愛しきれるものではないし
062 047 生きものの緑の意志は
064 009 人生に別離なんかあるものかと、
071 012 われわれを待ちうけているものは
072 013 なにものよりも

072 072 千万の人々を容れるに足りるものだ
073 022 ぼくらを運び去るものは
074 002 ぼくらの船を迎えるものはなかった
074 013 三色旗をつけた巨船のうえにあるものは
074 018 生あるものの皮膚の下を
076 007 ぼくのものでもきみのものでもない
077 013 幾世紀もの列をつくってつづくのだ
080 014 求めても手がとどかなかったもののために
084 037 この世のものでない弦と弓は
085 007 きみの血を現場へ駆り立てるものは
085 020 キッドの短靴のようなもので
085 031 きみが求めているものは善悪でない何ものか
085 032 光と影で区分できない何ものかであろう
088 021 太陽に背をむけたそれらのものが
088 032 ぼくのものでない夢を
088 046 物言わぬ空というものがない
088 047 消えさる喜び　永くとどまる悲しみというものがない
089 014 空を背景にしたすべてのものが見えるのです
089 019 雪のなかでしか経験したことのないすべてのものが……)
093 010 かかる読書法は良い趣味以外のなにものでもない
094 011 解読できぬ暗号のように近くて遠くあるもの
094 013 会ったことのない人たちのことを思いうかべているもの
094 022 ああ　太陽は全身にものうく
095 003 さらに多くのものがかかっている
098 013 誰のものでもない淋しさが
098 014 自分ひとりのものとなる時刻ーー
098 024 その光りというものだろう
098 028 その影というものだ
101 014 なにものよりも　おのれ自身に擬する銃口を
101 024 安全装置をはずした引金は　ぼくひとりのものであり
103 017 まがいものの甲冑に身をかためた冒険家でもなければ
103 030 にんげんの運命をすいこむもの
105 009 ぼくらのゆくてを曇らせるものは、
106 034 時代におくれ　人におくれたすべてのものをとり戻すために
106 044 すべての生きもののうちで　最も強くてしなやかな骨だ
112 013 過去でしか会うことのないおれたちだ　何の秘密もあるものか
112 023 いやいや働きにいった　ちいさきもののために
112 025 答えられるものなら答えてくれ
113 052 いったい誰のものか
117 009 失ったものへの愛のほかに
117 010 失うものはもうないから
123 003 昨日欲しがったものを
124 011 どこでも似たようなもの

125 018 われらの人生なんてロクなものではない
126 019 よく見ておこう　科学の問題とおもったものが
127 019 見たものを否定して生きてきた
127 023 黄ろいタンポポを黄色にしたものが
128 066 冷たい水のようなもの」か
129 015 ものうい太陽と
130 009 （鶏どものくびを
133 015 うまれるはずのものがうまれず
133 020 ものさびしき火を借り
133 021 いくつもの街衢と大路を過ぎる
137 013 幾重ものドアを叩いてきた
140 004 ぼくを破滅させるものがなくなった
141 011 与えるものがとっくになくなって、
141 014 在りえたかもしれないすべてのものよ。
142 024 （それゆえ　この国独得の統治方式の利点とさえいえるもので
142 069 精神病棟監獄から同時に釈放せよ　というものだった
142 105 巨大なものの力が　個人の信念より永続するという証拠はない
142 122 個人の平和と　世界の平和と　人類そのものの　真の守護者たりうるのだ」と
145 007 売ってはいけないものを売る深夜の
145 014 有りもしない幸福の歌がいつものように響いていた
145 033 倚れるものもない空間にそれは倚れていた」
146 035 どこをどう走ったものか
150 024 自分の書いたものがまるでつまらなかったことである。
150 037 「本質的に我々が誇り得るものは生理以外に在り得ない、
150 038 又本質的に個性的なるものも」と言ったのは、
150 046 「誇り得るもの」を失ったとさとったとき、彼はこの世から転向していったのだ。
150 047 我々が生きのびたことで誇り得るものが、
150 065 喪われたものを、
150 074 つい、書かでものことまで書いてしまった。
151 033 記憶にあるものだけで百六十人
151 035 ものの数ではないかもしれないが
153 001 青い塩水からうまれた生きものの
154 015 さすがにものいわぬ扉のまえで
155 001 前にあるものは
155 023 前にあるものを
155 033 ほしいもの
155 034 見倦きないものといったら
158 021 というきみの議論にききほれたものだ
160 024 歴史というものが　どんなにわれわれの野心や虚栄とくいちがうかという
160 046 今夜のかれの幸運は明日にはきみのものだろう
160 052 使うもの以外にきみの物はないのだぞ
161 005 あなたを殺すものでも
161 021 あなたを殺しにくるものがあれば

162 008 貧しさの樹齢そのものと化してから
165 001 父なる存在そのものが
165 025 わたくしは父の書いたものを理解せず
166 004 失われたものと現在あるものの中間で
166 021 いつものように車で二軒分の買物をした
167 058 家の崩壊はないものと念じてきたのに
167 067 愛しきものよ　さらば
167 072 とてもとても悲しいものにちがいない
171 016 人は幸福であり満足だとはいかないものか、
172 003 ひたむきなものは消滅した
173 022 かつてきみの横顔には自伝らしきものがあった
174 022 あの一局の碁が語るものは何だったのか
176 003 着ているものを脱ぎ
177 019 寒さに耐えているものよ
180 015 美しきものが逞しく育つ
180 019 夢のなかではずいぶん怖い目にあうものだが
180 030 どこかで勝手に出あうものである
180 038 言葉はめぐりあうものかたずねあうものかという
180 042 たずねるものが見つからないときもあるだろう
180 049 それがせめてもの礼儀である
180 051 たね。しかしそれはそうそうあるものじゃない。違うものの方が圧倒的に多いー。では、さよならK.I.
183 005 くだもの屋にあふれている蜜柑が
187 016 生かしてきたもののゆえに
188 006 読みものがたまっていくばかりで、
188 033 早いもので、あれから四年、
188 072 ごみの山をかきまわしていて見つけたものだが、
191 011 このまま沈んでよいものか
192 014 薄暮と昧爽とをとりちがえていた迂闊さに、狼狽するも間なく、巨大な生きものの胎内にのみこまれるように、

もの　者

039 060 死者をして死者を葬らしめよ
041 109 あなたを愛する者はない
041 147 あなたを愛する者はない
047 018 朧ろに姿を現わすこの髭だらけの死者は誰だろう
050 023 立会う者もなかった
054 036 「星のきまっている者はふりむかぬ」
054 086 独身者はふかく自ら頷きながら
054 106 独身者は大学生のリキュールグラスに
054 112 決然たる拒絶者の愁い顔があらわれる
054 115 独身者はすばやく扉のそとへ消えうせる
054 120 聴かせてくれ　目撃者は誰なのだ！
054 134 ひとり占いの賭博者のように
054 162 そして至高の言葉を携えた使者が

055 040 おれは慢性胃腸病患者のだらしないネクタイをしめ
058 037 サラリーマンや労働者を相手に
061 013 親しい者のまなざしや
061 163 星のきまっている者はふりむこうとしない。
061 166 星のきまっている者の、空にまたたく光のために。
061 212 生ける死者たちが空中を歩きまわる夜がきた。
061 217 死者の侵入を防ぐのだ。
062 012 死者の国の
063 025 ぼくが殉難者の澄んだ眸をしているとしたら……
068 026 恋をあさる若者の血汐のなかにも
072 017 青、赤、黄、白の運命の使者たち
072 024 独断批評家の口ぶりもわるくはないし、皮肉な記者のポーズも捨てがたい
074 021 声なくして新しい死者と語りあった
081 016 ぼくらはすでにこの歴史の内では死んだ者
081 018 木の吊床に横たわる者
085 021 理想主義者や清貧家を蹴とばし
093 031 輝く太陽を見た者はいない
096 005 きみは賢者の砂色の眼で
100 030 こころよい追憶にもどってゆく歩行者のように
100 040 「何百万の死者の霊とともに
101 053 歌う者のいない咽喉と　主権者のいない胸との
103 018 粗暴な肉体の礼讃者でもないのだ）
106 040 かれは自分を罰してはならない　屠殺者や皮肉屋の包囲のなかで
112 029 眼や耳や手足をなくした不幸な犠牲者に何をしてやったか
113 030 不運にもあやまちをおかした者は
113 033 喜んで処刑される者もたくさんあった
123 008 貧しい者の天国にも……
124 012 他者への絶望が
124 025 他の一人は　古典的な社会復帰者として
124 037 名づけられぬ欲望の煽動者に幸あれ！
125 003 聖者をうらぎった罰があらわれている
126 004 と悲観的な賢者が言った
126 008 と楽天的な科学者が言った
128 030 腹を立てて出ていく者
128 031 旗を立てて去る者
129 010 高層居住者
132 006 わたしを見た者はいない
133 005 わが心の愛する者をたずねしが
133 010 愛する者を欲しないためか？
133 018 なんじの心の愛する者を知れりと
133 023 われを産みし者の室をすてて
133 025 いさぎよかった者の眼のような
134 010 木の葉のように散っていった若者たち

140 010 舞台裏で物思いに沈むあわれな役者
141 012 すべてが終っている者には、ほかに呼び名はない。
142 032 スパイし　盗聴する者が
142 053 義に昏（くら）い者　イデオロギーによろめく者が立去り
142 056 異端者や地下の作家や哲学者を根絶やしにする
142 058 ぼくたちはやがて　比較的おとなしい分裂病者として
142 085 自ら明らかなことにも　悲しいかな　認めようとしない者があり
142 086 黙って背中を向ける者もいる　それにはそれの
142 113 歴史を作る者をたえず脅かしつづけてきた基本的なイメージである
142 122 個人の平和と　世界の平和と　人類そのものの　真の守護者たりうるのだ」と
142 123 あなたは見たままを語り　予言者として
145 001 「至上のトーモロコシの毛がアゴにもある長髪の若者が
145 002 不信の者の天国に対して
145 008 レスビアンの女たちの痙攣は不信者の地獄の笑いの一型態で　ブリッジして反った肉体の
147 015 ときたま死の匂いを発散させる若者に出会ったりすると
148 037 みな年相応に老けて、持薬を服用する者もあり、
148 040 戦死者の手足がぐるりと輪になり、
150 018 自分のことではないかと猜疑したりする者もあった。
150 019 ようするに小心な若輩の似た者同士の集りで、
150 029 文学の世界にとどまっている者は、私しかいない。
150 035 敗戦後の苦しい生活のたたかいに敗れて倒れた者もあった。
150 053 編集者である私が警視庁から呼び出しを受けた。
151 024 故郷喪失者か
151 025 近親相姦者か
159 010 「おまえも達者でね」
160 048 賢者たちは言っている
160 059 ニューヨーク・タイムズの記者が屍体置場のリストからかれの名をみつけ出し
167 036 戦争と革命の犠牲者たちの
171 001 他者の犠牲を必要としないしあわせは
173 041 あとに残っているのは小者ばかりだから
179 016 見守る者は誰もいない
180 018 どんなに気強い若者でも
182 011 かつての勇者はいまなお勇者だ
182 021 老いたる者には智慧があり
184 003 UPの記者をしていた当時
184 006 タイ生れの中国人の医者と再婚した
185 016 愛する者から引裂かれて……
185 026 最も深く嘆いている者にとっても。
188 009 五十何年ぶりに歯医者の厄介になるという始末。
188 083 きみが好きだという、武者小路の、茄子や南瓜の素朴な絵、
189 001 陰険な勝者は
189 002 おめでたい敗者に言う
192 017 よくよく見れば、そこから一米間隔くらいで、白い明りが点々とつづいているのだ。迷う者のために設けられた救急

ものいわぬ
154　015　さすがにものいわぬ扉のまえで

ものいわぬ　物いわぬ
124　032　物いわぬ唇

ものいわぬ　物言わぬ
088　046　物言わぬ空というものがない

ものうい
129　015　ものうい太陽と

ものうく
094　022　ああ　太陽は全身にものうく

ものおと　物音
129　003　地上の物音はきこえない

ものおもい　物思い
108　005　物思いにふける
140　010　舞台裏で物思いに沈むあわれな役者
183　018　若い証券マンが一人で物思いに耽っている

ものかげ　物かげ
100　015　どんな物かげの暗い眼が

ものかげ　物蔭
041　134　どんな物蔭の暗い眼が

ものがたり　物語
088　053　ぼくたちの物語を
103　026　海の物語のただなか
160　013　コーネリアスという無名の男の　涙が出るほどおかしな物語
160　053　それから物語のコーネリアスがどうなったかはわからない

ものぐさな　物ぐさな
014　006　物ぐさな楽器たちはねころんで

ものさびしき
133　020　ものさびしき火を借り

ものだ

031　017　そっとあふれてゐるものだけがやさしかったと
052　008　愛と死の隠れんぼはやっぱり楽しいものだろうか
054　093　そうだ　これで僕の孤独も充分というものだ
072　072　千万の人々を容れるに足りるものだ
098　024　その光りというものだろう
098　028　その影というものだ
142　069　精神病棟監獄から同時に釈放せよ　というものだった
151　033　記憶にあるものだけで百六十人
158　021　というきみの議論にききほれたものだ
160　046　今夜のかれの幸運は明日にはきみのものだろう
180　019　夢のなかではずいぶん怖い目にあうものだが
188　072　ごみの山をかきまわしていて見つけたものだが、

もの影
042　015　庭は荒れて　もの影もなし

もはや
035　006　それは一羽の鳥よりもはやく帰ってくる
039　022　もはやどんな力も持ってゐないことを知れ
039　095　すべてはもはや過ぎ去ってしまったといふ
039　137　もはやこの身にもどらない
041　123　もはやあなたを導くものはない
158　039　もはや暁紅をかいまみるまでもなかった
192　001　もはや、わたくし、と特定する必要はない。わたくしには、わたくし以外の

もふく　喪服
060　018　黒い喪服をつけた男の

もよう　模様
028　015　工場の透明な模様の中に編まれ
100　061　ペイヴメントには水玉模様の少女があふれ

もらいさげて
160　060　最後は叔母のクララが遺体をもらいさげていった

もらし
054　074　詩人は不敵な薄笑いをもらし
066　020　かれは溜息のほそいけむりをもらした。

もらす
174　020　会心の笑みをもらすきみを前にして、ひどく口惜しい思いをした。

もられた　盛られた

186　079　宴席の大きな皿に盛られた海の幸、鯛や鮑の刺身も

もり　森
028　042　青い森林の地区に
039　004　この森の庭園には
041　095　眠れる水　眠れる森
062　040　黒い森のうしろから
062　050　黒い森のうしろにいて
062　062　黒い森のうしろにいて
101　047　森や田畑やうつくしい町の視覚像はいらない
104　005　わたしの丘や森や海岸は　すでに
136　008　目かくしされた森の
187　028　森は動いて

もりあがって
120　012　あたりがもりあがってくる

もろとも
100　068　青空もろとも

もろもろの
028　019　文明的なもろもろの雑音の性格により
061　138　水仙や蛇や　もろもろの生ける質を潤おした』

もん　門
039　097　滅びに至る門と
043　011　愁いの都の門はとざされ
099　009　……開くこともなく錆びてしまった鉄の門
151　013　学問もなければ専門の知識もない

もんく　文句
156　032　すべてを奪われても文句を言えない
156　033　すべてを与えられても文句を言えない

もんしょう　紋章
054　163　胸にかがやく太陽の紋章を示しながら

もんだい　問題
126　019　よく見ておこう　科学の問題とおもったものが
126　020　人間の精神の問題かもしれないから。
128　044　神なければ　すべては趣味の問題だ！
167　014　つまるところ神経の問題だが

モーター
091　003　モーターの焼けるにおい

や　矢
012　011　キュウピットの矢よりも疾い
120　015　ゼノンの矢も

やうな
006　005　蜂蜜のやうな午後が溶ける
019　011　ガラス絵のやうな夢を
028　021　幾何学が白い肉のやうな丘に
028　033　ねぢれた鎖のやうな数輌の列車の合図が響き
028　065　笑うものたち虫のやうな検微鏡下の虫たち
038　020　まぼろしのやうな橋がみえ
038　023　この管はなんだが眠いやうな音をひびかせる
039　012　譫言のやうなものを
039　032　水の底にはいつも鏡のやうな階段があって

やうに
002　008　魚のやうに眠る日
004　003　炎は昆虫のやうに翅をならす
007　008　多孔質の雲の間からトンボの眼のやうに碧く　アスピリンを積ん
011　001　河の水は泥のやうに澱んで
012　006　放心した花弁のやうに
013　011　草むらで笛のやうに鳴ったのは
013　024　僕は太陽のやうに逃げなければならん
017　002　駝鳥のやうにたちあがると
018　004　耳が刷毛のやうに通過する
018　012　路地を抜ける春のやうに
020　003　蝶のやうに跳ね返った
023　002　毛髪のやうに血が垂れて
023　009　街灯は光をナイフのやうに操って
023　014　または黒いオルガンのやうに
023　021　あのやうに退屈な都会の一日が
025　011　その手その足は毛のやうに
025　014　青い雨のやうに燕のやうに
025　023　それは医術の進歩の伝説のやうに
025　028　脳髄は毒のやうに青くなる
025　033　ゼンマイのやうに跳ねてゐる雲
025　037　鉛のやうに落下してくる
025　055　呟きのやうに廻ってゐる
026　014　壊れた船体のやうに
026　019　わたしの体を石のやうに氷らせた

026 025 黄ろいダイヤモンドのやうに光り
028 011 液體のやうに垂れてきたのは疲れた舌である
028 039 信仰や箸や石鹸や喜ろこびや散策があるやうに
030 024 光りは堅い金属のやうに寒々として
030 027 気体のやうに
031 006 いつかのやうに凍りついた道路の上で
032 011 しなやかな鞭のやうに
033 006 そして真珠のやうに匕りながら
038 028 荒廃したグラスの底をとほるやうに
039 107 ランプのやうに
039 110 死の谷間が深いやうに
039 132 ゼラニウムのやうに燃えはてようと
040 012 街は傷口を舐めてゐる獣のやうに
041 016 音を刻み　立止まり　年を待ってゐるやうに
041 022 石が鳴く　まるで蟋蟀のやうに
041 028 プラットフォームが岬のやうに曲がってくる
041 039 考へあるもののやうに　また無意識のごとく
041 042 虹のやうに　或いは地の草のやうに
041 072 よそごとのやうに
041 094 あの人たちと同じやうに股いでゆけるだらうか
041 124 木質は腐り　陽に燬かれ　蝋のやうに流れた
042 008 予感のやうに皮膚にとどく
046 036 果して肉体だけは癒る用意があるかのやうに
046 042 ほっそりした川のやうに渝らぬ月日を行くことが出来る
046 046 いくつもの扉のやうに行手をさへぎり

やがて
008 012 すてて　砂漠へ逃げてしまった　やがて新らしい靴の
010 007 やがて純白の雲の中にチョコレエトの肩が見えなくなる
010 018 やがて最後の　たそがれ　がくる
028 041 おびただしい自然を覆ふ霧はやがて見えなくなるところ
039 087 やがて
041 061 あなたはバスに揺られ　やがて街から去ってしまふだらう
041 107 やがて　おびだしい吸殻が
041 129 やがて嫉妬の火で燃え尽さうとする
054 108 そしてやがて獣のようになる歯並みの悪い唇の動きが
058 005 やがてキャバレー何とか
061 103 やがて星がきらめきはじめるね
065 022 罪の記憶のうせぬうちに」やがて
081 031 やがて陸にむかってゆるやかに動いていった
086 007 やがて波が襲いかかり
093 021 やがて遠ざかってゆく波にすぎないことがわかる
100 023 やがて　肉体の要求にさからう魂は

140　018　やがては喪心の天に至る
142　058　ぼくたちはやがて　比較的おとなしい分裂病者として
165　012　あなたはやがて分ってしまう何かであり
167　071　やがておそってくる運命は
170　019　やがては星に昇天していく光の粒は
173　042　世界はやがて筋萎縮性の痙攣を起し

やきついた　焼きついた
171　013　それが女の心に焼きついたのだろうと

やきはらったり　焼きはらったり
101　037　きみたちは　もう頑強な村を焼きはらったり

やく
035　006　それは一羽の鳥よりもはやく帰ってくる
043　002　水のほとりでひくくつぶやく
054　115　独身者はすばやく扉のそとへ消えうせる
054　163　胸にかがやく太陽の紋章を示しながら
064　010　やくざなブラス・バンドが歌っていた。
094　014　背をやく熱い塩のシートに転がされ
100　021　やくざな渡り鳥のようにレインコートを肩にかけて
100　039　すばやく過ぎ去った予言の時代よ

やく　約
054　015　Mよ　君は暗い約束に従い
062　014　わたしとあなたを距てるこの世のどんな約束も
100　055　はたせなかった約束を　いつまでも悔む人のように
103　020　旧約の秤にかけてもずっしり重い
118　012　約束される誕生
132　001　不在を予約して生きた
148　010　また会おうと約束して別れたきりであった。
151　005　軍歴は傷痍期間を入れて約二年半ほど
151　009　月々の出費は切りつめて約六十万
155　009　約束
155　029　感情を節約し
156　034　理不尽な契約を前にして
169　007　果されぬ約束の地層にあって
177　002　約束のように守る男なら
179　023　そして最後の契約にサインするように

やくざ
064　010　やくざなブラス・バンドが歌っていた。
100　021　やくざな渡り鳥のようにレインコートを肩にかけて

やくざな
064　010　やくざなブラス・バンドが歌っていた。
100　021　やくざな渡り鳥のようにレインコートを肩にかけて

やくしゃ　役者
140　010　舞台裏で物思いに沈むあわれな役者

やくそく　約束
054　015　Mよ　君は暗い約束に従い
062　014　わたしとあなたを距てるこの世のどんな約束も
100　055　はたせなかった約束を　いつまでも悔む人のように
118　012　約束される誕生
148　010　また会おうと約束して別れたきりであった。
155　009　約束
169　007　果されぬ約束の地層にあって
177　002　約束のように守る男なら

やくそくして　約束して
148　010　また会おうと約束して別れたきりであった。

やくにたたぬ　役に立たぬ
173　034　押潰されたヒューマニズムの声など役に立たぬ

やくにねんはん　約二年半
151　005　軍歴は傷痍期間を入れて約二年半ほど

やくひん　薬品
054　016　重たい軍靴と薬品の匂いを残し

やけて　焼けて
039　076　焼けてしまった昔のあたりを散歩する

やける　焼ける
091　003　モーターの焼けるにおい

やさい　野菜
181　029　野菜の未来に
189　030　色は青いが新鮮でない野菜

やさしい
015　007　やさしい茎よ
022　006　やさしい茎と卵は永遠である

048　026　やさしいうねりをもって
061　125　滑らかなやさしい囁きがきこえてくる
070　015　やさしいひと、あなたは
077　039　やさしい女のひとの手がおかれている
088　070　とおくまで草木や花のやさしい言葉で
089　001　やさしい人が
089　024　やさしい人は　ふと顔をあげて
116　004　やさしい謎をひめた詩に
120　009　やさしい春の息づかいに

やさしい　優しい
041　033　優しい眼鏡や柔かい手袋の明日の方まで湿してゐる

やさしかった
031　017　そっとあふれてゐるものだけがやさしかったと
053　059　美しく繊細で　やさしかったお姉さん！

やさしき
042　004　やさしき姿に彫まれた神となる

やさしさ
076　004　不吉なやさしさをこめて
076　014　不吉なやさしさのなかで
136　018　やさしさなんて罪なのに
158　017　罪びとのやさしさがあって

やしなわれて　養われて
183　015　安全に養われているその家族たちだ

やしばやし　椰子林
078　007　緑泡立つ椰子林が

やしん　野心
160　024　歴史というものが　どんなにわれわれの野心や虚栄とくいちがうかという

やすっぽい　安っぽい
068　004　安っぽい郵便切手には

やすほてる　安ホテル
055　022　安ホテルの窓から
160　055　妻も子もなかったかれは　タイムズ・スクエアに近い安ホテルの一室に住み

やすみ　休み

071　011　どうして一日の休みにとりかえそうとあせるのか

やすむ
093　005　ぐっすりやすむには

やすめる　休める
035　025　疲れたからだを休めるために
188　005　白内障の眼を、なるべく休めるようにしていますから、

やすやす
142　038　殺人的な電流装置で閉された国境をやすやす越え

やすらかな
093　026　やすらかな寝息とかすかなぬくもりをのこして
158　040　死はやすらかな眠りであったろう

やすらかに　安らかに
143　003　安らかに眠っていたかったのに

やせた
066　026　わかい女のやせた顔がのぞき

やせた　痩せた
169　013　飢えて痩せた魂は
170　023　ぼくの痩せた掌に詩の玉を乗せてくれたら

やせっぽちの
128　005　やせっぽちの裸の木

やつ
088　049　大きいフライパンをあやつる小さいマリは
098　006　まだ眼ばたきしているやつがいる
128　062　やつはてのひらをひらひらさせて
152　004　むしょうにやつと話したくなった
152　036　なんと無邪気な悪魔のやつめ！

やつ　奴
150　040　ずいぶん興醒めなくだらないことをいう奴だと思ったが、

やっかい　厄介
155　012　それらがめんどうで厄介なのは
167　013　実際に生きるのは厄介で
188　009　五十何年ぶりに歯医者の厄介になるという始末。

188　028　歳相応の、厄介な病気が、二つか三つ重なったところで、

やっかいな　厄介な
155　012　それらがめんどうで厄介なのは
188　028　歳相応の、厄介な病気が、二つか三つ重なったところで、

やってきた
046　012　とほく橋の上へやってきた
061　017　いつか遠く橋のうえにやってきた。
096　008　エブロ河を流れてやってきたにすぎん
103　004　どこからどうしてやってきたのか
147　009　ところが遅れてやってきた壮年時代に入ると

やってきて
037　018　風だけがやってきて
077　026　死がやってきてじっと蹲っているのが見えた
088　072　どんなに暗い日がやってきても
101　008　空中の帝国からやってきて

やってくる
005　030　外套がやってくる
035　003　おまへたちの舌の上へやってくる
091　004　ロースト・ビーフよりも香ばしいその匂いとともにやってくる
109　007　死の季節がやってくるから
113　053　ーー沈黙が粛清にやってくる

やってしまう
160　033　印刷の不備でくじに外れた老楽師に　大当りの賞金を全部やってしまう

やっと
072　008　やっと柵にとりついた人波の
146　062　やっと安心しましたわ。
162　010　やっと狂喜の雫が宿るようになる
173　044　これでやっと安眠できる

やっぱり
041　004　やっぱり同じ陽が照り
052　008　愛と死の隠れんぼはやっぱり楽しいものだろうか
124　005　やっぱり司直が目をつけた
186　026　やっぱり古いなあ！

やどし　宿し
148　027　背中に淋しい影を宿し、

やどる　宿る
108　029　冷たい涙が宿るのだ
162　010　やっと狂喜の雫が宿るようになる
179　030　ナイフの刃には一滴の露が宿る、と。

やにくさい
114　009　やにくさいパイプの煙を吐きかけている

やね　屋根
005　006　赤い屋根の学校は
009　001　コンクリイトの屋根の上
028　060　都会の屋根の下よ商店街の商人たち
038　004　いくつかの街と村の屋根をすぎる
038　030　屋根のみを叩いてはひとり淋しがってゐた
043　001　石で葺かれた屋根をでて
046　004　石で作られた涯しない屋根の町の
047　008　頭上で屋根を剥ぐ不気味な爪の音……
061　006　石でかためた屋根の街の
064　017　じめじめした屋根裏では、
064　024　石の屋根の上には重たい雲が垂れこめていた。
065　028　燃える屋根の下に、愛は
066　036　どの家々も沈黙の屋根におしつぶされていた、
083　001　夏草のうえの屋根が
146　061　屋根を叩く雨音がひとしきり強くなって
188　076　ひとしきり烈しくなり、深夜の屋根を叩いている。

やねうら　屋根裏
064　017　じめじめした屋根裏では、

やはらかく
011　010　おんなの腕はやはらかく

やはり
019　005　白い大理石はやはり冷たい
029　015　やはり変らぬわたしたちの愛よ
039　077　やはり草の色は
041　059　やはり濡れて陸橋に佇んでゐることを想ひ
046　055　あなたはやはり寒いのか

やはん　夜半
045　012　夜半のけむり無常の風に耐へてきた

やぶれ　敗れ
101　013　ぼくははじめから敗れ去っていた兵士のひとりだ
112　027　おれたちがどんなに大きく敗れ　おまえたちがどんなに小さく勝利したか
150　035　敗戦後の苦しい生活のたたかいに敗れて倒れた者もあった。

やぶれさって　敗れ去って
101　013　ぼくははじめから敗れ去っていた兵士のひとりだ

やぶれた
074　014　戦いにやぶれた国の
103　001　どうして地上の掟はやぶれたか

やぶれた　破れた
041　111　物質で身を固め　破れたシャツで冷気を防いだ
058　020　破れた天井の青空が

やぶれてゆく
101　017　ぼくはすこしずつやぶれてゆく天幕のかげで

やま　山
011　009　どうかすると沢山人間が動いてゐる
012　010　山では望遠鏡が廻転する
012　019　その中に沢山の兵士たちの顔がゐた
041　005　意志は荒い山肌の斜面からむけてくるのか
044　005　鳥瞰すれば山河
048　029　山や川　またなによりも海ができる
057　041　河は山をのりこえ
065　015　そこに、あたらしい岩山が出現するまで
071　029　くっきりと影をあらわす山である
071　034　山の頂きがはっきりと見える
071　035　山の頂きから谷をのぞくひとびとは
071　038　海から山へ
079　008　富士山を三ツ沈めても
088　034　これはお山　これは川
108　032　みはるかす何とか連山は紫の帯
144　015　みだれた山波を隠すのは
168　004　荒い山肌にかこまれて
170　005　吸殻の山を片づけ
181　010　こんな高い山の頂きまで登って
186　005　徳山まで講演に行ったんですってね？
188　072　ごみの山をかきまわしていて見つけたものだが、
190　003　ふるさとの山
190　004　父がうまれた村は山中にあり

190　005　母がうまれた町は山にかこまれていて
190　015　動かない山懐につつまれて
191　002　山鳴り
191　014　山は怒りに

やまなみ　山波
144　015　みだれた山波を隠すのは

やまなり　山鳴り
191　002　山鳴り

やまはだ　山肌
041　005　意志は荒い山肌の斜面からむけてくるのか
168　004　荒い山肌にかこまれて

やみ　闇
028　036　暗闇の市場へと運ばれてゆく武器たち
030　003　そこにある闇のひろがり
031　014　闇の一滴がひそかに舌から辷り落ちた
047　017　おとろえた視力の闇をとおして
048　006　影の茂みから闇のにおいが漂ってきた
051　027　闇に扉はないだろうか
062　011　そして闇はあくまで深いから
062　026　そして闇はあくまで深いから
065　035　感覚の闇を照らした。樹々が小枝を打ちならし
069　026　じっと心の闇をのぞきこむ
081　013　何千年の闇をつらぬいて真赤な雲の火柱がたち
095　013　近くの闇を照していた
096　018　あの瞑想の闇のコアには生きている砂漠があるんだ
128　034　ビル街の闇を
136　026　ぬばたまの未来の闇で
139　008　五十年の記憶は闇また闇。
144　007　鱗の落ちた蛇神は無性闇に輾転し
148　009　かれとは敗戦直後の闇市の近くの旅館で一度会い、
148　041　夢の領土をとり巻いている闇のなかで、
160　016　闇をつらぬく稲妻と烈しい豪雨の中から新しい発見のように甦ってきた
164　019　ぼくらは闇の物象の
169　017　去りゆく艫の闇では
176　018　家霊の暗闇のなかから
192　025　必死の思いで、前方の真っ暗闇を凝視するが、もう何も見えぬ。

やみいち　闇市
148　009　かれとは敗戦直後の闇市の近くの旅館で一度会い、

やむ　病む
160　076　制度の春を病むこともなく　不確定性の時代を生きて

やめよう
090　023　言葉を探すのはしばらくやめよう
107　016　迷うのはやめよう
181　017　ふと「もうゴルフはやめよう」と

やめる　病める
073　029　三千噸の病める資材をひっぱっていった
074　020　病める兵士たちは

やや
039　129　ひややかな青い噴水も
047　012　鏡がひややかに自虐を睨む
050　011　Mよ、昨日のひややかな青空が
164　016　……ぼくの一生は詩の困難でやや暗い

やり　槍
036　028　ばんやりしていると嘴と天使の槍で

やり直し
083　009　なんだって始めからやり直したりするのか
088　054　はじめからやり直し
088　055　なんべんもなんべんもやり直して

やるせない
068　027　やるせない女と海の思出があった
168　006　やるせない女人への郷愁があった

やわらかい　柔かい
012　001　柔かいシルクの風に
041　033　優しい眼鏡や柔かい手袋の明日の方まで湿してゐる
041　087　愛嬌ある仕科（しぐさ）で柔かい羽に堅い嘴をこすりつける

やわらかく　軟らかく
025　029　軟らかくまがりくねったのは時計

やわらかな
048　002　家や樹木のやわらかな影をおとして
065　030　やわらかな髪を腕にまき、彼は
120　005　池水のやわらかなひかり

やわらかに　柔らかに
039　020　楽器よりももっと柔らかにくねる

やんで　病んで
051　012　病んでいるのは日本じゃないか。
061　181　わたしは病んでいる、
062　003　わたしの魂は病んでいる

やんでいる
136　017　春の熱病をやんでいる

やんでいる　病んでいる
051　012　病んでいるのは日本じゃないか。
061　181　わたしは病んでいる、
062　003　わたしの魂は病んでいる

ゆいいつ　唯一
080　012　消えてしまう泡が唯一の言葉だから
158　023　残された唯一の道だった

ゆいいつの　唯一の
080　012　消えてしまう泡が唯一の言葉だから
158　023　残された唯一の道だった

ゆいごんしっこうにん　遺言執行人
050　003　遺言執行人が、ぼんやりと姿を現す。
100　050　ぼんやりと姿を現すひとりの遺言執行人として……

ゆううつ　憂欝
019　009　あの憂欝な眼は
048　010　うすく瞼をとじている憂欝

ゆううつな　憂欝な
019　009　あの憂欝な眼は

ゆうえんち　遊園地
005　037　遊園地区に火が消えた

ゆうえんちく　遊園地区
005　037　遊園地区に火が消えた

ゆうかい　誘拐

007　013　阿片の軽艇（ボート）は霧の中へ青い泡を残して去るべく一人の少女を誘拐

ゆうがな　優雅な
128　013　優雅なフランス語と
179　013　優雅な枢のように

ゆうかん　夕刊
058　047　ひとびとのうしろに行列をして夕刊を買い

ゆうき　勇気
142　074　「今日の西側の勇気の基準によれば

ゆうきてきな　有機的
010　010　不愉快な天候の有機的関連の結果である

ゆうぐれ　夕ぐれ
100　008　そして夕ぐれの街は

ゆうぐれ　夕暮
054　043　夕暮の環をめぐって
056　002　夕暮のなかで煙草をすっている男がいる
064　001　大きな夕暮の環に灯をともして、
064　032　大きな夕暮の環に灯をともして。
128　093　朝の夕暮れ
176　010　夕暮の風は

ゆうぐれ　夕暮れ
128　093　朝の夕暮れ

ゆうこうな　有効な
010　003　有効なスピイドについて考へることを欲する少年は一個の白い帽子をかぶってゐる

ゆうざい　有罪
158　020　自然にたいして有罪でない人間はいない

ゆうし　勇士
102　011　うたいながら破壊する若い勇士たちが
107　012　一人の勇士を死なせてから……

ゆうじゃ　勇者
182　011　かつての勇者はいまなお勇者だ

ゆうぜんと　悠然と

073　027　悠然とパイプを吹かしながら

ゆうちょう　悠長
142　102　ぼくたちのそれは悠長ともいえる　それだけ今なら

ゆうどうひょうしき　誘導標識
192　018　の誘導標識にちがいない。

ゆうばえ　夕映え
059　022　夕映えの海にただよう

ゆうひ　夕日
057　023　夕日があかあかと上衣の肩をそめ
062　004　落ちた夕日の赤い血が
063　002　夕日が燃えつきてしまった
138　001　血まみれの夕日が沈み

ゆうひ　夕陽
052　030　明日の夕陽を背にしてどうしたらよいのだろう
053　018　夕陽の果に燃えつきて
061　146　夕陽の残照のように、
080　010　夕陽の血が波のうえにしたたりおちて
083　023　とおくて近いこんな夕陽が沈みつつあったのか
091　015　きみの欲望は夕陽を浴びてビルディングの林に落ちてゆく
101　055　にんげんの悲しみによごれた夕陽をすてにゆこう
107　002　くぬぎ林の夕陽も

ゆうびんきって　郵便切手
068　004　安っぽい郵便切手には

ゆうべ　夕べ
101　041　白くさらした骨をふきよせる夕べに

ゆうへい　幽閉
100　026　くらい幽閉がはじまった
167　048　ながい幽閉の年月に耐えた

ゆうやけ　夕焼
054　095　夕焼のなかからあらわれる鳥の囀り
111　006　夕焼空にふと途切れている

ゆうやけぞら　夕焼空
111　006　夕焼空にふと途切れている

ゆうれい　幽霊
138　009　なまめかしい幽霊にこがれて

ゆうわく　誘惑
052　010　あなたが男を誘惑するはずだった可愛いい頬の黒子のことを
176　023　誘惑の手はあくまで白く
179　005　太陽の誘惑のしみがついていて

ゆうわくする　誘惑する
052　010　あなたが男を誘惑するはずだった可愛いい頬の黒子のことを

ゆえに
008　009　ゆえに　陽気な太陽よ
150　032　虚構なるがゆえに傷つくことがすくなかったからか。
178　004　こののちは訪うべくもないゆえに
187　016　生かしてきたもののゆえに

ゆかい　愉快
010　010　不愉快な天候の有機的関連の結果である
072　022　迷信も愉快だし、科学的検討もまんざらではない
160　045　隣人とは愉快に貸し借りせよ

ゆかいに　愉快に
160　045　隣人とは愉快に貸し借りせよ

ゆがんだ
050　007　ゆがんだ顔をもてあましたり

ゆき
027　008　すべての家具が老いてゆき
035　011　影は消えてゆき
037　015　まだ光がどこまでもゆきわたり
039　043　わたしの骨は涸れてゆき
043　012　日はゆき　うす暗きとばりの中に
053　031　わたしは枝からはなれてゆきます
053　037　わたしはわたし自身の影からも離れてゆきます
053　055　ああ世界が暗くなってゆきます
053　065　あなたのお顔も　だんだん忘れてゆきそうです
054　080　衣裳と装身具の内側に　化粧のゆきとどいた顔の下に
058　017　そこを通ってゆきました
058　026　もみあうおびただしい影をぬってゆきます
061　035　さあゆきましょう、船着場へ……

078　003　あらゆる船が港から出てゆきそうな
084　033　落葉がふりつもってゆきます
089　029　窓ガラスを叩いてゆきます

ゆき　雪
003　013　窓を開けると雪が踊ってゐる
003　015　雪に埋まる扉
004　002　机の上は　すでに白い雪である
041　145　またぢきに　嵐と雪で家々を覆ふ冬が来て
088　025　雪にとざされたぼくの窓や
089　019　雪のなかでしか経験したことのないすべてのものが……)
105　001　氷はとけ、雪は消えて、
136　013　死にたくないと雪が降り
143　001　厚い雪に埋れた根のように

ゆきとどいた
054　080　衣裳と装身具の内側に　化粧のゆきとどいた顔の下に

ゆきわたり
037　015　まだ光がどこまでもゆきわたり

ゆく
001　004　駈けてゆく風である
001　014　影が凍りついてゆく
003　011　油絵の裏に隠れてゆく黄ろい月
003　014　逃げてゆくのは白い犬だ
021　015　逃げてゆく太陽を追った
023　004　公園をまがってゆく縞のズボンたちを
025　005　松が老いてゆく錨のうしろに
025　010　日暦をめぐり欲望を追ってゆくものよ
025　032　高く登ってゆく階段をとりまくのは
027　019　体温から去ってゆくひびきたち響たち
027　023　わづかな煙はグラスの中へ降りてゆく
028　036　暗闇の市場へと運ばれてゆく武器たち
034　011　午後四時はしぜんに消えてゆく
035　016　来るものと去ってゆくものが
035　021　風の五つの渦の中へきえてゆく
036　016　黒の中へ消えてゆく街よ
037　003　物のかたちを壊してゆく
038　013　大理石のうへを辷ってゆく
039　010　緑の泡の方へ近づいてゆく
039　062　柱も扉も腐蝕してゆく
039　091　廃墟の杭は打たれてゆく

039 149 どんな樹木を育ててゆくのだらう
040 011 白い雨がとほってゆく
041 020 いつも群集は流れてゆく
041 051 新聞紙の上を歩いてゆく　固い心をもち
041 056 あなたは走ってゆくだらう
041 078 あなたのではない鏡のなかへ消えてゆく
041 125 乾燥してゆく空気のなかで
041 133 曇った空の下を違った扉に向って走ってゆくのを見た
043 006 ゆく人よ
046 029 あなたの生をめぐる足跡の消えゆくを確め
046 034 同じ木の手摺につかまり　同じ迷宮の方向へ降りてゆく
048 020 春　夏　秋はまたたくまに過ぎてゆく
048 022 うすれゆく年々の冬のきびしい日の下で……
048 024 軟体の極限をゆく無数の曲線の戯れ
049 008 落葉に吹きまくられてゆく地平線に
053 039 狂おしく地上にかえってゆく
053 041 それから何処へゆくのでしょう
054 014 死の滴りは生命の小さな灯をひとつずつ消してゆく
054 044 ひとつづつ小さな灯が点されてゆくとき
054 072 平然としてまがった道をゆく時だ！」
054 094 だが遠のいてゆく地平線の
054 117 不潔な女のベッドの方へ進んでゆくだろう
054 122 影は一つの世界に　肉体に変ってゆく
054 156 光はひとつの原子に　強烈な夏の驟雨にかわってゆく
055 016 海を飛んでゆく耳鳴りのようにおもえた
056 006 未来の一歩々々のようにこつこつと遠ざかってゆく
058 031 光りの痕跡が小さくなってゆくようです
060 012 世界の秋は深くなってゆくように思われる
061 010 下へ、下へと漕ぎさってゆく舳の方位を。
061 148 日没の街をゆく人影が、
061 151 同じ迷宮の白い渦のなかに消えてゆく。
061 196 暗くなってゆく運河を見つめています。
061 206 泉もなければ、流れゆく雲もなかった、
061 222 おびただしい灯の窓が、高架線の上を走ってゆく。
061 223 おびただしい灯の窓が、高く夜空をのぼってゆく。
062 006 落ちてゆくわたしの身体を支えてくれるのは
062 031 わたしは昔の少年になってどこまでも追いかけてゆくだろう
062 054 傷ついたわたしたちの記憶をぬぐってゆくのを
065 034 墜ちゆく星の、最後のまたたきが
066 031 ーー帰ってゆくところもなく
068 007 夏のうちに　海岸へゆくことにしよう
069 018 とおくの町をゆくように
070 016 いつまでも、流れゆく川を

071 008 どっと家族づれで出かけてゆく人たちをみかける
073 019 翳りゆく運命の暗示をもとめて
074 007 ゆらゆらとハッチから担ぎ出されてゆく
074 017 さらに多くの友が死んでゆくとき
074 019 いかにして黒い蛆虫が這いずってゆくかを
076 015 虚しい文字のように消えてゆく
078 016 白くかろやかな翼になりゆくことか
080 011 立ち去ってゆく航跡には
083 006 町はだんだん小さくなってゆく
083 019 より高い青空の深みへ落ちてゆく
084 007 散ってゆく落葉の女を尋ねて
086 010 崩れゆく砂の足跡
089 010 凍ってゆく水に影をうかべていました
089 016 暮れてゆくビルの窓や
089 023 「ぼくは凍ってゆく水のなかにいますよ」
091 008 虻よりはやいガソリンの微風に乗ってゆく
091 015 きみの欲望は夕陽を浴びてビルディングの林に落ちてゆく
093 017 かれの手足がはなれ罪もまたはなれてゆく
093 021 やがて遠ざかってゆく波にすぎないことがわかる
093 029 それは血や光りがかえってゆく水平線のない世界だ
095 021 ぼくは少しずつ忘れてゆくだろう
099 002 逃げるボールを追ってゆく
100 002 人影にまじって　新聞紙のうえをあるいてゆく
100 010 消えてゆくのである
100 030 こころよい追憶にもどってゆく歩行者のように
101 007 いまはきみたちの肉と骨がどこまでもすきとおってゆく季節だ
101 017 ぼくはすこしずつやぶれてゆく天幕のかげで
101 020 すこしずつ退却してゆく軍隊をもたない
102 012 恋をすて故郷をすて他人の国へゆくのだから
103 021 ゆめをのせた「ピイクオド」号に乗りこんでゆく
105 009 ぼくらのゆくてを曇らせるものは、
108 011 おおきな追憶が港から出てゆくのに
114 008 流れゆく雲を眺めて
119 005 去りゆく時の
169 017 去りゆく艫の闇では
182 016 暮れゆく空をあおぎ

ゆくえ　行方

027 018 弾かれた言葉の行方を覚る
046 040 行方の知れぬ風のことばにいつまでも微笑を浮べてゐようとは
053 009 わたしはわたしの行方を知っていない
054 035 行方の知れぬ風の寒さに身ぶるいするのだ
134 008 この群集の行方は誰も知らない

ゆくて
105　009　ぼくらのゆくてを曇らせるものは、

ゆく人
043　006　ゆく人よ
061　148　日没の街をゆく人影が、
071　008　どっと家族づれで出かけてゆく人たちをみかける

ゆける
041　094　あの人たちと同じやうに股いでゆけるだらうか

ゆすられ
030　025　濛朧とした足にゆすられながら

ゆすり
081　030　兵士の眠りをゆすりながら

ゆそうせん　輸送船
073　012　その下におびただしい輸送船が沈んでいた

ユダ
112　049　おれたちが本当に別れるのはこれがはじめてだが　ユダの接吻はいらない
127　005　吊られたユダヤ人のように

ゆたか　豊か
162　005　どこまで豊かでありうるか
170　021　（見えないところで自然は豊かさを失っていない

ゆたかさ　豊かさ
170　021　（見えないところで自然は豊かさを失っていない

ゆたかな
048　004　ゆたかな地平線

ゆだねて
042　019　夜にゆだねて

ユダヤ人
127　005　吊られたユダヤ人のように

ゆっくりと
054　146　ゆっくりと存在を閉ざす

072　050　ゆっくりとゴールへ飛びこむ馬をキャッチした
179　022　ゆっくりと世界を見まわせ
189　037　ゆっくりと身をかがめて手をのばす

ゆび　指
010　020　手をあげた少年の五指の間から
023　022　華麗なあなたの指輪とともに
041　138　あなたの指はまだ感覚を失ってはゐない
052　019　あなたの未来の指輪が青い光をあつめ
057　038　黄ろい指先のシガレットの煙よ
058　033　指輪や装身具の飾ってあるショーウィンドをのぞいて
062　022　あなたのほそい指が
070　021　あなたの指は何もつかまえることができない。
070　051　あなたの五本の指はどんな兇器よりも残忍で、
080　025　まっすぐ海の彼方を指しているからーー
088　035　それから指で大きな輪をえがいて
098　021　「無」の指をひらくのは
101　022　ぼくのほそい指は
106　021　かれの指の爪貝は　恋人たちがしゃぶりたがるほど美しい
124　022　指名手配の一人は
145　003　何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに
184　007　そして十四人の大工を自ら指揮して
186　084　かすかにふるえる指先の煙草のけむりのように
189　038　指先がフォークになかなか届こうとしない

ゆびさき　指先
057　038　黄ろい指先のシガレットの煙よ
186　084　かすかにふるえる指先の煙草のけむりのように
189　038　指先がフォークになかなか届こうとしない

ゆびさして
182　019　たましいは無限をゆびさしていた

ゆびわ　指輪
023　022　華麗なあなたの指輪とともに
052　019　あなたの未来の指輪が青い光をあつめ
058　033　指輪や装身具の飾ってあるショーウィンドをのぞいて
145　003　何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに

ゆみ　弓
084　003　いい音で鳴る弦と弓が
084　037　この世のものでない弦と弓は

ゆめ
103　021　ゆめをのせた「ピイクオド」号に乗りこんでゆく

ゆめ　夢
002　007　（夢であったらうか）
009　011　夢を見るなら夢の中でと
019　002　夢みることを許されない
019　011　ガラス絵のやうな夢を
021　019　夢見つつ死んでしまった
023　015　軟弱な地を攪げ夢幻の中から
025　026　夢をみてゐる
032　012　わたしを愛撫するのはむかしの夢であらう
039　047　夢をみたり
041　006　夢を見なさい　不機嫌な一瞬には
041　007　あなたは悪く夢を見た
046　022　夢みる橋上の人よ
046　052　方位はなかった　花火も夢もなかった
052　025　誰もいない淋しい部屋を夢想する
053　058　不思議な夢がしだいに近よつてくるようです
053　060　夢を見ながら眠る習慣が　こんなに悲しいものとは思いませんでした
054　159　テーブルに凭れて新しい黄金時代を夢みている
054　168　熱烈に夢みている
055　026　おれとおまえのはかない希望と夢を
056　017　まして夢を見ているわけでもない
059　007　わたしにはながい悪夢の日がつづいた
061　020　炸裂する真昼の花火を夢みている。
061　204　花火も夢もなかった、
062　007　淋しい飛行の夢だけだ
062　036　始めも終りもない夢のなかを駈けめぐる
063　017　あなたのいない夢のなかで
065　052　死せる魂をゆり起し、夢に見たレエテの河が
074　003　夢にみたフランスの街が
081　006　宙にうかんだ夢魔の城
086　013　すべての夢を海にすてよう！
088　032　ぼくのものでない夢を
088　042　あどけないマリの夢よ
093　030　誰もまだ夢のなかで
096　012　この夢の果で一夜を明かそう
097　010　あのブロンドの若い男は、動物になる夢を持たなかったろう。
101　018　膝をだいて眠るような夢をもたず
101　027　ながいあいだこの曠野を夢みてきた　それは
102　014　毛深い夢の絨毯に戻ってきてくれ
112　044　眠りながら腹をこやす王国を夢みているうれしいはらからたち

123　011　もう一つの首都を夢みて
125　002　夢はもういらなくなった
134　009　気ままな行動で夢みて
136　012　洞窟の胎内のテロルの夢
138　019　もう夢には戻れない
142　046　悪い夢からさめた人のように首をふるのである
142　093　家を夢みているだけでは　古い家も新しい家も守れはしない
143　005　何度も同じ夢を見て
145　023　「写真店の窓には曝された肖像の記念写真が　夢こそすべてであると知った時　もう肉体
145　029　夢の厚着で肥りすぎた詩人には真偽はどちらでもよく　魂はもうとっくに死んでいた
146　034　わたしは無我夢中で逃げ出しましたが
148　041　夢の領土をとり巻いている闇のなかで、
163　010　一期は夢だから
180　019　夢のなかではずいぶん怖い目にあうものだが
180　020　夢のなかで恐怖に出あわないのが本当の年寄りなんです
180　022　夢の中でぼくに出会ったら
186　083　思索も夢も時間の戯れで

ゆめみ　夢見
021　019　夢見つつ死んでしまった

ゆめみる　夢みる
019　002　夢みることを許されない
046　022　夢みる橋上の人よ

ゆらぐ
187　029　王城はゆらぐかとみえ

ゆらせて
027　001　影をゆらせて

ゆらめいて
046　018　父や母　また友の顔もゆらめいてゐる

ゆらゆら
017　020　樹はゆらゆら揺れてゐた
074　007　ゆらゆらとハッチから担ぎ出されてゆく

ゆらゆらと
074　007　ゆらゆらとハッチから担ぎ出されてゆく

ゆられ　揺られ
041　061　あなたはバスに揺られ　やがて街から去ってしまふだらう

ユリ
103　016　シネマスコープに登場するユリシイズのように
128　006　ユリの木
128　059　ユリの木の並木にそって
128　082　ユリの木の

ユリシイズ
103　016　シネマスコープに登場するユリシイズのように

ゆり起し
065　052　死せる魂をゆり起し、夢に見たレエテの河が

ゆるい
039　031　ゆるい流れが髪をほぐす

ゆるがし　揺るがし
028　064　空壜の堆積する地所を揺るがしながら明るく笑う

ゆるがせて
154　017　天地をゆるがせて

ゆるさない　許さない
039　121　だがわたしはあいつらを許さない

ゆるされ　許され
019　002　夢みることを許されない
039　067　離れることは許されない
158　027　許されるかぎりどこまでも
161　008　誰にでも許された特権で

ゆるされない　許されない
019　002　夢みることを許されない
039　067　離れることは許されない

ゆるして
137　005　ゆるしてくださいまし

ゆるせ　許せ
059　028　波にさらわれた母と美しい少年を許せ！

ゆるやかに
081　031　やがて陸にむかってゆるやかに動いていった

ゆれ
028　044　数本の太い樫の木がゆれる樫の葉のざわめき
035　007　樫の木はゆれ
039　005　ただ壜のようにつめたい気体がゆれる
039　019　ゆれている椅子の影は
065　006　ゆれる燈火と死魚の影があるばかりであった。
077　025　ゆれる昼夜燈の暗い光りのかげに
116　014　ゆれつづけている。
117　002　どぶ川のむこうに草がゆれており
140　024　四十七階の痛む背骨がゆれている
147　008　死と生が秤のうえでゆれながら均合っていた

ゆれて　揺れて
017　020　樹はゆらゆら揺れてゐた
035　024　影に凭れて揺れてゐる
048　033　揺れて海へ傾く　深くふかく
108　003　揺れている

ゆれている
039　019　ゆれている椅子の影は
140　024　四十七階の痛む背骨がゆれている

ゆれる
028　044　数本の太い樫の木がゆれる樫の葉のざわめき
039　005　ただ壜のようにつめたい気体がゆれる
065　006　ゆれる燈火と死魚の影があるばかりであった。
077　025　ゆれる昼夜燈の暗い光りのかげに

ゆわえた
116　011　きみの髪をゆわえた

ゆんじゅうさんかいめ　四十三回目
188　079　私には、なんと、四十三回目の地獄めぐりです。

ユーモア
106　005　誰一人笑っていないが　ユーモアに欠けているためではない
142　027　なんという暗く悲痛なユーモアだろう）

よ　世
012　005　秘密の世界に鍵をかける
013　008　撫でてあげませうかとお世辞を云ひ
021　028　円形の窓のない世界から

023 012 きこえない見えない世界で
025 018 燃えあがる世界の窓の内部から
028 006 意識の外部と呼ぶ空壜の堆積した世界よりも
028 012 古靴の氾濫する世界に
028 023 鳩とともにおお救世主の銅像の髭にもついて
028 063 古靴の世界を支配し
031 008 もう花などどんな世界にも垂れはしない
039 009 わたしは象どられた世界から辷りでて
041 099 むかしの世紀がまだ寝床に就かぬうちは
041 101 眠れる世界に息を吹きこむ
044 009 御身は知ってゐる、世の輝かしい変貌を、
053 055 ああ世界が暗くなってゆきます
054 017 この世から姿を消してしまったのだ
054 038 歩いてゆこう　荒涼とした世界の果へ……
054 122 影は一つの世界に　肉体に変ってゆく
056 013 聾の老人が世界に向って何か叫んでいるのが
057 024 世界を冷やす月光がぼくの額を照らすのを……
057 036 ながかった一世紀が終ろうとしているのに
059 015 この世のそとでも離れがたいことを信じよう
060 012 世界の秋は深くなってゆくように思われる
061 019 水晶　花　貝殻が、世界の空に
061 136 『われ溷濁の世の光なり
062 014 わたしとあなたを距てるこの世のどんな約束も
062 024 わたしはこの世ならぬ冷たい喜びに慄えている
063 011 世界の深夜――
068 009 今世紀最大の詩人が
077 013 幾世紀もの列をつくってつづくのだ
079 006 ここは世界で
084 037 この世のものでない弦と弓は
088 043 おまえの世界には
090 001 巨木は幾世紀を生きて
093 029 それは血や光りがかえってゆく水平線のない世界だ
100 042 たえまなく出血している内部の世界で
100 081 ぼくたちが　さらに遠くの世界に眼をやるとき
101 002 世界はなんと曠野に似てくることか
101 005 こんなふうにおわるのはなにも世界だけではない
103 027 おそろしい幻想とレビアタンの住む世界だ
106 011 外部の世界をうかがい　いまもじっと「時」をこらえ
106 037 なにごとも断定するには　むずかしい世界となった
109 008 自分自身と世界とに別れを告げるときがきた、
112 047 待ちどおしいぞ　世界の終りが
113 012 世界は　こう
113 029 人民の世界を反映した

113 051 いびつになった世界の顔　そいつは
115 003 あたらしい世界をたずね
121 004 天気は神さまに　世界は新聞に
123 009 世界のメトロポリス
126 013 それが荒涼とした虚無の世界だとしても
127 003 世界の明るさに耐えた。
140 008 男の世界は終った
140 013 この世のすべてに変りはない
142 040 世界のすみずみにまでとどけられるのである
142 045 ぼくたちは世界の片隅でふさぎこみ
142 098 世界中にその網の目をひろげているのである
142 116 信念を持つ人間の精神が世界最強の力には通じないとか
142 118 過去数世代の経過に照しても
142 122 個人の平和と　世界の平和と　人類そのものの　真の守護者たりうるのだ」と
142 124 全世界に警告を発したのである
147 007 世をも人をも厭いつつ生きていて
150 029 文学の世界にとどまっている者は、私しかいない。
150 046 「誇り得るもの」を失ったとさとったとき、彼はこの世から転向していったのだ。
150 069 一つの国さえたちまち喪われるような世界に住んでいるので、
151 031 世上がたりに打明ければ
160 041 十四世紀のスコットランドの詩を口誦さみながら
160 043 みじめな浮世の悲しみを！
161 011 それがこの世の習慣である
164 015 ずるい世渡りをするつもりはないが
165 016 自分をこの世に存在させていることで
165 027 父は黙ってこの世から去っていった
165 033 世界を映す鏡に
167 068 泣きながらこの世に産れた人の子にとって
168 015 この世を経めぐるいのちの物質よ
173 008 この世の中　どこまで腐っていくか」
173 010 もう終ろうとしている世界がある
173 023 世界は進歩しない　が
173 032 どのみち世界で
173 039 なのに　この世はさっぱりよくならない
173 042 世界はやがて筋萎縮性の痙攣を起し
174 007 その後、「死後の世界」を読み
174 023 「死後の世界」の明るさを先取りして
178 010 この世の外で呟くように
179 022 ゆっくりと世界を見まわせ
182 007 世話をする植木までひねくれる
185 010 世界中の人たちに嚇みこまれ
185 013 一対の男女の世界では、甘美な
185 015 不意に世界から消えた

185　020　どうせ、不均合いで混乱した世界だから
185　022　いずれ世間は納得する
187　021　この世から立去る
193　012　半世紀は車窓の景色であった
193　024　ときわの首都は世界の影を映している

よあけ　夜あけ
081　017　夜あけのくる船窓の下の
112　015　敵にむかい黙々と出撃し　一夜あければ骨となる

よあけ　夜明け
055　017　おれたちの夜明けには
057　035　暗い夜明けのうちに倒れなければならぬ
065　053　しろじろと夜明けの光をながすまで
102　010　みんな夜明けの桟橋から散ってくれ
115　006　夜明けの道はまっすぐで長いが
118　014　夜明けの枢
130　014　夜明けは近い
163　004　夜明けとも日暮ともつかぬ薄明の中で
192　004　夜明け前の微光があたりをくまなく覆っていて、どこへ行こうとしているのか、

よあけまえ　夜明け前
192　004　夜明け前の微光があたりをくまなく覆っていて、どこへ行こうとしているのか、

よい
017　031　どうしてよいか解らないほど
026　035　悲しむでもよい暗い甃石の上には
028　069　何を語るかは考へてみればよい
030　016　影ならば誰でもよい
030　031　だからみどり色の白さと言ってもよい
031　026　もう何も信じたりしないがよい
039　102　ああ呪はれてもよい
043　017　ほどよい暗黒と
043　018　ほどよい黎明がただよふ
051　030　人間はチューブのようなものであったらよい
052　030　明日の夕陽を背にしてどうしたらよいのだろう
054　029　Mよ　都会の胃袋をさまよいながら君が呟いていたことを……
058　046　これから私は何をしたらよいのでしょうか？
058　056　少しばかり恥をかくようなことがなければよいのです
060　002　斜面に枯草がそよいでいたりする
061　187　あてもなく街をさまよいながら、
062　030　あなたは悪戯な瞳と微笑で逃げてゆけばよい
083　010　思出の片隅でじっとしていればよいのに

100　030　こころよい追憶にもどってゆく歩行者のように
106　033　鳥の巣型の髪のカットに　度のつよい眼鏡を糸でつるして
113　018　してよいことわるいこと　規律は明らかだった
124　027　郊外電車の快よい動揺に耐えている
128　064　「遠くからのよい消息は
139　007　さまよい疲れて歩いた道の幾千里
142　076　はるかに高い代償を払ってもよいことになっている
142　099　ぼくたちはこれから何をしたらよいのか？
142　104　おそらくぼくたちは　はっきり　否！　と合図するだけでよいだろう
146　036　またまた迷路の廊下にまよいこみ
149　013　一体のままでただよいながら
149　015　そのさまでよい
151　038　愛を求めてさまよい
165　014　あなたは早く死ねばよい
167　002　風のつよい日だった
168　001　川の流れにただよい
170　008　ホテルの部屋から戸外へとさまよい出た
188　050　老いの楽しみに数えてよいだろう。
189　019　誰とも口をきかずに十年を生きればよい
191　011　このまま沈んでよいものか

よい　良い
017　011　西の空が良いかげんに焦げて
093　010　かかる読書法は良い趣味以外のなにものでもない

よいかげん　良いかげん
017　011　西の空が良いかげんに焦げて

よいどれ　酔いどれ
061　024　酔いどれ水夫が歌っていた。

よいん　余韻
180　050　「どこかで会って、さりげなく挨拶を交したような、奇妙な余韻をひいていくところ」それは私にしてもそうでし

よう
012　022　大理石の肉体は磨かれよう
021　014　青いブヌウマチックのように
028　040　すべてが平和であるようにとか云ふ必要もない
039　005　ただ壜のようにつめたい気体がゆれる
039　064　煌めく木片が波に漂ってゐよう
039　132　ゼラニウムのやうに燃えはてようと
039　142　わたしの天は奈落へ崩れおちよう
040　018　アヘロンの岸にさまよう亡霊のごとく

041 137 この街で生きようとしてはならぬ
046 020 たとえ純粋な緑が　墳墓の丘より呼びかけようと
046 040 行方の知れぬ風のことばにいつまでも微笑を浮べてゐようとは
048 015 まるで滅びることのないもののように
049 001 天井の蜘蛛が私の顔にのりうつったようだ、
049 007 鋭い笛のようなものが胸の底でめざめる、
049 013 黒い足のように縮まっている　君の黒い足のようにー
050 008 手紙の封筒を裏返すようなことがあった。
051 011 運命がある顔に達したとでも言うかのように、
051 026 「そいつは黄色だ　まるであの穢らわしい魂のように」
051 030 人間はチューブのようなものであったらよい
053 008 黄ろい髪飾だけがふわふわと蝶のように宙にさまよっているのです
053 024 いつものようにわたしはお姉さんさようならを告げることが出来ません
053 030 みんな仲よく小鳥のように一つの枝でおやすみなさい
053 048 あなたにはよくおわかりでしよう
053 058 不思議な夢がしだいに近よつてくるようです
054 002 「御機嫌よう！
054 050 僕は毎晩のように酒場のテーブルを挟んで
054 052 手をあげると　人形のように歩き出し
054 053 手を下すと　人形のように動かなくなる
054 096 まるで僕たちに呼びかけるかのような樹木のそよぎ
054 100 亡霊たちに別れを告げよう
054 102 この呪わしい夜を祝福しよう
054 108 そしてやがて獣のようになる歯並みの悪い唇の動きが
054 124 絵画は燃えるような赤でなければならぬ
054 129 僕は眼をかがやかし涛のように喋べりかける
054 134 ひとり占いの賭博者のように
054 151 ちぎれた青空のように飛んだ一枚のハンカチーフ
055 007 おれには港のように思えたのだ
055 012 とおい航海に出よう
055 013 背負い袋のようにおまえをひっかついで
055 014 航海に出ようとおもった
055 016 海を飛んでゆく耳鳴りのようにおもえた
055 025 灰色の壁のように垂れてきて
055 031 厭な匂いの薬のように澱んでいるばかりであった
055 049 あぶらぎった一皿を平げたような顔をする
056 003 そして彼の背中のように淋しい風景がそこにある
056 006 未来の一歩々々のようにこつこつと遠ざかってゆく
056 008 昨日のように空は濁った河のうえにある
057 021 彼岸はいつも死の国のように静かである
058 021 いつもいくらか明るいようです
058 031 光りの痕跡が小さくなってゆくようです
058 045 どうやら私は今年も結婚しそこねたようです

058 049 昨日のように読みすてましょうか？
058 053 一杯のコーヒーをまえにして考えようと思うのです
058 056 少しばかり恥をかくようなことがなければよいのです
059 010 今ではなつかしい面影のようにうすれてしまった
059 015 この世のそとでも離れがたいことを信じよう
059 022 夕映えの海にただよう
059 024 木の葉のようにも
059 025 蜻蛉のようにも見えてくる
060 012 世界の秋は深くなってゆくように思われる
060 020 たとえば小さな捲毛の渦をみつけるような！
061 025 おお、これからどうしよう……
061 033 ああ、これからどうしよう……
061 041 おお、これからどうしよう……
061 043 行ってみようか、船着場へーー
061 046 街角をまがる跫音のように
061 051 砂浜につづく足跡のように
061 066 まるで通りがかりの人のように
061 142 そのようにまた沐浴もあったことを……
061 146 夕陽の残照のように、
061 215 生と死の予感におののく魂のように、
061 226 死と生の予感におののく魂のように、
062 029 わたしの手から鉛筆をとりあげるように
062 049 枯草のあいだの四月の若芽のように萌えています
063 004 あなたの身体のように重たく
063 007 ぼくはあなたの口を押えようとする
063 026 ぼくがあなたを信じないように
063 027 あなたはぼくを信じようとしない
064 023 ふたつの亡霊がさまよう、
065 046 異国の女のように、町をみすてて
066 027 折れるように飛びおりる姿勢をとった、
068 007 夏のうちに　海岸へゆくことにしよう
068 016 （これからしようとすることによって……）
068 023 太陽の下で　空壜をころがすように
069 011 この少女のように
069 018 とおくの町をゆくように
070 002 夜の岸辺のように
070 006 わたしのからだを水藻のように
070 033 一日を一年のように暮しているぼくたちには、
070 042 ぼくは見えない出口をさがすように、
070 053 わたしを殺してどうしようというの。
070 057 おまえはなにもかも諦めたようにみせかけて、
070 059 ぼくが死んだらどうしようというのか。
071 001 これから何をしようというのか

071 004 何をしようというのか
071 006 きみは海を見ようとして
071 024 何をしようというのか
071 025 これから何をしようというのか
071 046 波のように　こだまのように
071 049 何をしようというのか
071 051 これから何をしようというのか
072 003 いま評判のサラブレッド四歳馬を見ようとして
072 014 あのスマートで強靱な足に注目しよう
072 031 数字のように増減し
072 043 負け馬に賭けてきたぼくのような男には）
072 059 ダービー・レースのように
073 011 墓標のように番号をつけた煙突がならび
076 003 どちらかが死にかけているような
076 006 どうしてきみの涙をとめることができよう
076 015 虚しい文字のように消えてゆく
079 005 青空の無のなかに溺れようとしている
079 022 海にただよう
080 005 いつまでもこのような水平線をもっているか
081 009 兵士たちはうわごとのように
082 011 恍惚とした顔のように
083 011 さあ丘をのぼるとしよう
084 002 唖のように黙りこくっていても
085 018 奇怪な造語で喋る連中の頭を踏みつけよう
085 020 キッドの短靴のようなもので
086 013 すべての夢を海にすてよう！
088 002 おまえは仔兎のように
088 004 栗鼠のようにすばしこく
088 022 どのようにぼくたちの大地に暗い影を落すのかも
088 027 あたたかい南国の陽ざしのように融かしてくれるから
088 056 気むずかしい人たちに聞かせてあげよう
088 058 さあキスしよう
088 060 どんな恋人たちよりも甘いキスをしよう
089 007 ぼくはひそかに答えよう
089 027 わたしのそばをとおったようだわ」
090 022 鳥や花をさがすように
090 023 言葉を探すのはしばらくやめよう
091 014 きみの季節は飼主のない猟犬のように飢えている
093 018 ……どのような光りも
093 020 そのようにかれの赤い血も
094 011 解読できぬ暗号のように近くて遠くあるもの
095 007 どうして人間がすこしも苦しまずに死ねようか？
095 009 妹のところへ電話をかけようとして

095 015 誰だって僕のように淋しい夜道を走るだろう
096 007 ようするに　ヨーロッパは西の果へ
098 020 その白い手のように明るく清潔にみえる
099 013 小さな四つの運命は　四つのボールのように
100 005 また明日　お会いしましよう　もしも明日があるなら
100 009 記憶のくらやみにとけるフィルムのように
100 021 やくざな渡り鳥のようにレインコートを肩にかけて
100 030 こころよい追憶にもどってゆく歩行者のように
100 055 はたせなかった約束を　いつまでも悔む人のように
100 064 つながれた行列の影は鎖のように工場をとりまいていた
100 070 精力的な夏は未来の街の方向にひろがっているようにみえた
101 018 膝をだいて眠るような夢をもたず
101 033 ……どうして敗北を信ずることができようか
101 042 死霊となってさまよう兵士たちよ
101 052 榴散弾のようにふりそそぐ淋しさに耐えてゆこう
101 063 勝利を信じないぼくは　どうして敗北を信ずることができようか
102 023 高くのぼってついに失われた空のように
103 007 さまよう素足をもち
103 016 シネマスコープに登場するユリシイズのように
104 004 枯葉のように散っていった
105 013 この歳月をよしとしよう、三月。
106 017 人生を説明するのに　どうしたって何かが足りないようだ
106 019 かれの額は　西洋皿の平面のように広く
106 020 かれの眼は　スプーンの銀のように輝いている
107 016 迷うのはやめよう
109 004 いま、別れを告げようとしている。
112 004 そんな遠くを見るような眼つきで
113 028 きれいにふかれた鏡のように
113 032 罪の負担を軽くしようと
120 011 処女の乳房のように
120 018 子守唄のよう
121 002 古シャツはぬぎすてよう
121 007 羊のような雲
121 011 波の牙が入江の肌をかむように
124 011 どこでも似たようなもの
124 036 無人の巷をさまよう
126 012 月のうえをふわふわ歩く宇宙の子供を見ようとして
127 005 吊られたユダヤ人のように
127 017 タンポポのように咲いたこともあったか。
128 012 紅バラを捧げよう
128 035 真昼のように輝かせる
128 066 冷たい水のようなもの」か
128 077 テレタイプのように

129 014 シーツのような空と
130 008 唇は笑っているようでもある
132 005 風のように変身する
133 025 いさぎよかった者の眼のような
134 010 木の葉のように散っていった若者たち
134 011 一つの場所を占めようとして
138 017 滅びようのないかたちがなつかしい
140 019 忘られた種子のように
142 008 と言わなければならないようだ
142 046 悪い夢からさめた人のように首をふるのである
142 052 ぼくたちはこれから何をしようとしているのかね
142 071 他の人々を悲惨なままに放置して逃避するような
142 072 卑劣さを代償とした自由を受け入れようとはしないで
142 085 自ら明らかなことにも　悲しいかな　認めようとしない者があり
142 110 そのもろさは隠しようもなくなる
143 001 厚い雪に埋れた根のように
145 013 何かを思い止るようにと一人の男が一匹の犬にとめられていた
145 014 有りもしない幸福の歌がいつものように響いていた
145 019 *静かに走れ*と命名された群集の河は昨日のように流れていた
146 002 二人でよりそうようにして
146 039 同じようなドアが行手に
146 054 だんだん奥へ奥へと入っていくようで
148 035 どのようにして戦後の社会をたたかいぬいてきたかを語りあったが、
148 048 それから、少年の日のように月の砂漠へ出発した。
149 007 すずしのように透けた
150 019 ようするに小心な若輩の似た者同士の集りで、
150 050 きみが「歯応えというか、取柄があった」という伊藤茂二の場合を挙げることができよう。
150 061 我々は彼を励ますことを忘れていたようだ。
150 067 どうしようもない怠惰か、安易な現状肯定である。
150 069 一つの国さえたちまち喪われるような世界に住んでいるので、
151 023 どうしようもないデラシネの
153 003 原初の日より数えるように
154 005 思い思いにさまよう
156 018 「おはよう」のかわりに
156 023 心性のちがいはどうしようもない
157 010 この枯葉のようでありますように
158 033 光りのつぶをひろうように
158 035 ぞっとするような詩を書き終えることで
160 005 忘れてはいけないことを　さがすような眼で
160 016 闇をつらぬく稲妻と烈しい豪雨の中から新しい発見のように甦ってきた
162 010 やっと狂喜の雫が宿るようになる
163 021 試してみようではないか
165 010 刺すような視線をあびせて

166 012 自由とは何かは太陽のように明白だったのに
166 021 いつものように車で二軒分の買物をした
166 026 砲撃に耳をすますような顔つきで
167 011 明るい青空が海のようにひろがっている
167 032 いかなる罪悪も存在しないかのようだが
167 049 塵埃のように書籍を衣類を調度類を
167 064 脅かすような慰めるような圧力を加えてくる
167 070 いつか終りがくるように
167 080 よりよき消滅を迎えようではないか
169 009 難破する船上の人のように
170 007 蜘蛛の巣を払うような手ぶりをすると
170 016 ダイヤモンドのように輝やいていた
172 002 木の葉のように舞い落ち
172 021 くぼんだ眼窩に目やにのようにたまる
172 027 箱庭のような故里が
173 004 超スローボールを空振りしたあとのような
173 019 どちらに顔を向けようか
173 047 すぐ大波のような睡魔が襲ってくるだろう
173 053 どうか　このまま眼が覚めませぬように」
174 021 おっとりしていて、どこが強いのかわからないような碁風だった。
174 024 ダメを詰めるような毎日を送りながら
175 014 別々の思いにふける子供のように
176 002 繃帯をほどくように
176 009 膝のくぼみにこたえるかのように
176 013 帆のようになびかせて
176 020 あらゆる母がそうであったように
177 002 約束のように守る男なら
177 023 とりちがえようのない顔を運ぶために
178 003 欲するように死ぬ
178 010 この世の外で呟くように
179 013 優雅な枢のように
179 023 そして最後の契約にサインするように
180 005 信じられぬとでもいうように
180 037 ほんとのようなうそになるが
180 050 「どこかで会って、さりげなく挨拶を交したような、奇妙な余韻をひいていくところ」それは私にしてもそうでし
180 054 魔風に挑戦するのはあきらめよう
181 017 ふと「もうゴルフはやめよう」と
181 020 疑問符のように
181 024 断末魔の腸がねぢれるように
184 019 若い中国人の夫は口癖のように
184 020 「なるようにしかならない」と言っているが
186 046 ぼくを理解しようなんて、あきらめたほうがいいよ
186 084 かすかにふるえる指先の煙草のけむりのように

187　011　賢い蛇の尾のような
187　027　甘い香りのように地に融けていく
188　005　白内障の眼を、なるべく休めるようにしていますから、
188　007　思うようにいっていません。
188　044　不定愁訴の繰り言のように、あることないことに、蘊蓄を傾け、
188　051　人はただ歳をとるだけだが、時代は、変ったようである。
188　060　高校によっては、死についての教育もなされているようです。
188　069　記憶の装置が、氷りついてしまったようで、
188　077　風も強くなってきたようだ。
188　082　いまさらのように、頭をかかえています。
188　085　いつまでも、きみの心に残っていますように。
189　023　いまのかれは雲を見下すような
189　040　ずっとずっと昔のことのように
192　002　どんな現象も起りようがなく、わたくしの影は、孤独とはいえなくなっているから、
192　014　薄暮と昧爽とをとりちがえていた迂闊さに、狼狽するも間なく、巨大な生きものの胎内にのみこまれるように、
193　016　いつもかわらぬ休息がありますように
193　017　単調なくり返しのようで

ようい　用意
046　036　果して肉体だけは癒る用意があるかのやうに
189　016　ひそかに用意されていたのだ

よういな　容易な
148　015　一人分の人生を、生きるのは容易な業ではない。

ようかいしながら　溶解しながら
145　018　孤独の壁をすこしずつ溶解しながら

ようき　容器
028　072　すべてが歴史の容器の中にあるとは限らない

ようき　陽気
008　009　ゆえに　陽気な太陽よ
160　042　陽気であれ！　思いわずらうなかれ

ようきな　陽気な
008　009　ゆえに　陽気な太陽よ

ようきゅう　要求
100　023　やがて　肉体の要求にさからう魂は

ようさいてん　洋裁店
092　009　あの本屋は洋裁店になった

ようし　養子
184　008　新しく家を建てると養子を迎え
184　010　四歳になったばかりの養子の名はヒロシ

ようしゃ　容赦
113　017　すこしのあやまちも容赦なく

ようずみ　用済み
152　022　折れまがった用済みの黒い頭と

ようだ
049　001　天井の蜘蛛が私の顔にのりうつったようだ、
089　027　わたしのそばをとおったようだわ」
106　017　人生を説明するのに　どうしたって何かが足りないようだ
142　008　と言わなければならないようだ
150　061　我々は彼を励ますことを忘れていたようだ。
167　032　いかなる罪悪も存在しないかのようだが
188　077　風も強くなってきたようだ。

ような
049　007　鋭い笛のようなものが胸の底でめざめる、
050　008　手紙の封筒を裏返すようなことがあった。
051　030　人間はチューブのようなものであったらよい
053　024　いつものようにわたしはお姉さんさようならを告げることが出来ません
054　096　まるで僕たちに呼びかけるかのような樹木のそよぎ
054　124　絵画は燃えるような赤でなければならぬ
055　049　あぶらぎった一皿を平げたような顔をする
058　056　少しばかり恥をかくようなことがなければよいのです
060　020　たとえば小さな捲毛の渦をみつけるような！
072　043　負け馬に賭けてきたぼくのような男には）
076　003　どちらかが死にかけているような
080　005　いつまでもこのような水平線をもっているか
085　020　キッドの短靴のようなもので
093　018　……どのような光りも
101　018　膝をだいて眠るような夢をもたず
112　004　そんな遠くを見るような眼つきで
121　007　羊のような雲
124　011　どこでも似たようなもの
128　066　冷たい水のようなもの」か
129　014　シーツのような空と
133　025　いさぎよかった者の眼のような
142　071　他の人々を悲惨なままに放置して逃避するような

146 039 同じようなドアが行手に
150 069 一つの国さえたちまち喪われるような世界に住んでいるので、
158 035 ぞっとするような詩を書き終えることで
160 005 忘れてはいけないことを　さがすような眼で
165 010 刺すような視線をあびせて
166 026 砲撃に耳をすますような顔つきで
167 064 脅かすような慰めるような圧力を加えてくる
170 007 蜘蛛の巣を払うような手ぶりをすると
172 027 箱庭のような故里が
173 004 超スローボールを空振りしたあとのような
173 047 すぐ大波のような睡魔が襲ってくるだろう
174 021 おっとりしていて、どこが強いのかわからないような碁風だった。
174 024 ダメを詰めるような毎日を送りながら
180 037 ほんとのようなうそになるが
180 050 「どこかで会って、さりげなく挨拶を交したような、奇妙な余韻をひいていくところ」それは私にしてもそうでし
186 046 ぼくを理解しようなんて、あきらめたほうがいいよ
187 011 賢い蛇の尾のような
189 023 いまのかれは雲を見下すような

ように
021 014 青いブヌウマチックのように
028 040 すべてが平和であるようにとか云ふ必要もない
039 005 ただ壜のようにつめたい気体がゆれる
048 015 まるで滅びることのないもののように
049 013 黒い足のように縮まっている　君の黒い足のようにー
051 011 運命がある顔に達したとでも言うかのように、
051 026 「そいつは黄色だ　まるであの穢らわしい魂のように」
053 008 黄ろい髪飾だけがふわふわと蝶のように宙にさまよっているのです
053 024 いつものようにわたしはお姉さんさようならを告げることが出来ません
053 030 みんな仲よく小鳥のように一つの枝でおやすみなさい
054 050 僕は毎晩のように酒場のテーブルを挟んで
054 052 手をあげると　人形のように歩き出し
054 053 手を下すと　人形のように動かなくなる
054 108 そしてやがて獣のようになる歯並みの悪い唇の動きが
054 129 僕は眼をかがやかし涛のように喋べりかける
054 134 ひとり占いの賭博者のように
054 151 ちぎれた青空のように飛んだ一枚のハンカチーフ
055 007 おれには港のように思えたのだ
055 013 背負い袋のようにおまえをひっかついで
055 016 海を飛んでゆく耳鳴りのようにおもえた
055 025 灰色の壁のように垂れてきて
055 031 厭な匂いの薬のように澱んでいるばかりであった
056 003 そして彼の背中のように淋しい風景がそこにある

056 006 未来の一歩々々のようにこつこつと遠ざかってゆく
056 008 昨日のように空は濁った河のうえにある
057 021 彼岸はいつも死の国のように静かである
058 049 昨日のように読みすてましょうか？
059 010 今ではなつかしい面影のようにうすれてしまった
059 024 木の葉のようにも
059 025 蜻蛉のようにも見えてくる
060 012 世界の秋は深くなってゆくように思われる
061 046 街角をまがる跫音のように
061 051 砂浜につづく足跡のように
061 066 まるで通りがかりの人のように
061 142 そのようにまた沐浴もあったことを……
061 146 夕陽の残照のように、
061 215 生と死の予感におののく魂のように、
061 226 死と生の予感におののく魂のように、
062 029 わたしの手から鉛筆をとりあげるように
062 049 枯草のあいだの四月の若芽のように萌えています
063 004 あなたの身体のように重たく
063 026 ぼくがあなたを信じないように
065 046 異国の女のように、町をみすてて
066 027 折れるように飛びおりる姿勢をとった、
068 023 太陽の下で　空壜をころがすように
069 011 この少女のように
069 018 とおくの町をゆくように
070 002 夜の岸辺のように
070 006 わたしのからだを水藻のように
070 033 一日を一年のように暮しているぼくたちには、
070 042 ぼくは見えない出口をさがすように、
070 057 おまえはなにもかも諦めたようにみせかけて、
071 046 波のように　こだまのように
072 031 数字のように増減し
072 059 ダービー・レースのように
073 011 墓標のように番号をつけた煙突がならび
076 015 虚しい文字のように消えてゆく
081 009 兵士たちはうわごとのように
082 011 恍惚とした顔のように
084 002 唖のように黙りこくっていても
088 002 おまえは仔兎のように
088 004 栗鼠のようにすばしこく
088 022 どのようにぼくたちの大地に暗い影を落すのかも
088 027 あたたかい南国の陽ざしのように融かしてくれるから
090 022 鳥や花をさがすように
091 014 きみの季節は飼主のない猟犬のように飢えている

093 020 そのようにかれの赤い血も
094 011 解読できぬ暗号のように近くて遠くあるもの
095 015 誰だって僕のように淋しい夜道を走るだろう
098 020 その白い手のように明るく清潔にみえる
099 013 小さな四つの運命は　四つのボールのように
100 009 記憶のくらやみにとけるフィルムのように
100 021 やくざな渡り鳥のようにレインコートを肩にかけて
100 030 こころよい追憶にもどってゆく歩行者のように
100 055 はたせなかった約束を　いつまでも悔む人のように
100 064 つながれた行列の影は鎖のように工場をとりまいていた
100 070 精力的な夏は未来の街の方向にひろがっているようにみえた
101 052 榴散弾のようにふりそそぐ淋しさに耐えてゆこう
102 023 高くのぼってついに失われた空のように
103 016 シネマスコープに登場するユリシイズのように
104 004 枯葉のように散っていった
106 019 かれの額は　西洋皿の平面のように広く
106 020 かれの眼は　スプーンの銀のように輝いている
113 028 きれいにふかれた鏡のように
120 011 処女の乳房のように
121 011 波の牙が入江の肌をかむように
127 005 吊られたユダヤ人のように
127 017 タンポポのように咲いたこともあったか。
128 035 真昼のように輝かせる
128 077 テレタイプのように
132 005 風のように変身する
134 010 木の葉のように散っていった若者たち
140 019 忘られた種子のように
142 046 悪い夢からさめた人のように首をふるのである
143 001 厚い雪に埋れた根のように
145 013 何かを思い止るようにと一人の男が一匹の犬にとめられていた
145 014 有りもしない幸福の歌がいつものように響いていた
145 019 *静かに走れ*と命名された群集の河は昨日のように流れていた
146 002 二人でよりそうようにして
148 035 どのようにして戦後の社会をたたかいぬいてきたかを語りあったが、
148 048 それから、少年の日のように月の砂漠へ出発した。
149 007 すずしのように透けた
153 003 原初の日より数えるように
157 010 この枯葉のようでありますように
158 033 光りのつぶをひろうように
160 016 闇をつらぬく稲妻と烈しい豪雨の中から新しい発見のように甦ってきた
162 010 やっと狂喜の雫が宿るようになる
166 012 自由とは何かは太陽のように明白だったのに
166 021 いつものように車で二軒分の買物をした

167　011　明るい青空が海のようにひろがっている
167　049　塵埃のように書籍を衣類を調度類を
167　070　いつか終りがくるように
169　009　難破する船上の人のように
170　016　ダイヤモンドのように輝やいていた
172　002　木の葉のように舞い落ち
172　021　くぼんだ眼窩に目やにのようにたまる
173　053　どうか　このまま眼が覚めませぬように」
175　014　別々の思いにふける子供のように
176　002　繃帯をほどくように
176　009　膝のくぼみにこたえるかのように
176　013　帆のようになびかせて
176　020　あらゆる母がそうであったように
177　002　約束のように守る男なら
178　003　欲するように死ぬ
178　010　この世の外で呟くように
179　013　優雅な柩のように
179　023　そして最後の契約にサインするように
180　005　信じられぬとでもいうように
181　020　疑問符のように
181　024　断末魔の腸がねぢれるように
184　019　若い中国人の夫は口癖のように
184　020　「なるようにしかならない」と言っているが
186　084　かすかにふるえる指先の煙草のけむりのように
187　027　甘い香りのように地に融けていく
188　005　白内障の眼を、なるべく休めるようにしていますから、
188　007　思うようにいっていません。
188　044　不定愁訴の繰り言のように、あることないことに、蘊蓄を傾け、
188　082　いまさらのように、頭をかかえています。
188　085　いつまでも、きみの心に残っていますように。
189　040　ずっとずっと昔のことのように
192　014　薄暮と昧爽とをとりちがえていた迂闊さに、狼狽するも間なく、巨大な生きものの胎内にのみこまれるように、
193　016　いつもかわらぬ休息がありますように

ようにして
146　002　二人でよりそうようにして
148　035　どのようにして戦後の社会をたたかいぬいてきたかを語りあったが、
188　005　白内障の眼を、なるべく休めるようにしていますから、

ようになる
054　108　そしてやがて獣のようになる歯並みの悪い唇の動きが
162　010　やっと狂喜の雫が宿るようになる

ようねんじだい　幼年時代
147　001　生きていくことに怖れを感じていた幼年時代だったら

ようひんてん　洋品店
058　006　洋品店何々になるのでしょう

ようぶん　養分
128　019　資本の下水の養分を吸って

よえない　酔えない
128　067　いくら飲んでも酔えない

ヨオロッパ
051　005　だが何処へ？　ヨオロッパでもアジアでもない

よかぜ　夜風
055　006　なまぐさい夜風の街が
128　029　ひんやり夜風が吹きぬける

よかん　予感
042　008　予感のやうに皮膚にとどく
054　011　予感はあらしをおびていた
061　215　生と死の予感におののく魂のように、
061　226　死と生の予感におののく魂のように、

よくそう　浴槽
028　004　浴槽の中で思考したのは誰であったか

よくぼう　欲望
025　010　日暦をめぐり欲望を追ってゆくものよ
025　058　欲望に乾いた皮膚を脱いで
091　005　きみの欲望は
091　015　きみの欲望は夕陽を浴びてビルディングの林に落ちてゆく
112　040　水が酒に　欲望がもっとたくさんの浪費にならないとこぼしている
124　037　名づけられぬ欲望の煽動者に幸あれ！
149　005　欲望のしぶとさで
182　008　欲望の柱をまっすぐ立てる

よげんしゃ　予言者
142　123　あなたは見たままを語り　予言者として

よこ　横
045　010　畳の上に　水平に做って横たはり

046　038　日没の空にあなたはわななきつつ身を横たへ
050　026　きみはただ重たい靴のなかに足をつっこんで静かに横たわったのだ。
056　015　孤独な彼の横顔は
058　035　その横顔をぬすみ見ている紳士がいます
077　018　かれは木の吊床に身を横たえて
081　018　木の吊床に横たわる者
125　004　縦横家の仮面のうらとおもてに
133　017　死の匂い甘美な横丁で
146　017　横顔があなたにそっくりでしたので
173　022　かつてきみの横顔には自伝らしきものがあった
179　025　静かに横たわって息をとめよ
180　056　縦にも横にも辷れなくなっている
182　005　横目使いに横這いの
182　015　ごろりと草の上に横になればよかった
184　004　フランス系アメリカ人と横須賀で結婚し

よこがお　横顔
056　015　孤独な彼の横顔は
058　035　その横顔をぬすみ見ている紳士がいます
146　017　横顔があなたにそっくりでしたので
173　022　かつてきみの横顔には自伝らしきものがあった

よごす　汚す
036　005　それらの悼ましい怒でおれの日記を汚すな
061　115　だから純潔を汚すことだって

よこすか　横須賀
184　004　フランス系アメリカ人と横須賀で結婚し

よこたえて　横たえて
077　018　かれは木の吊床に身を横たえて

よこたへ　横たへ
046　038　日没の空にあなたはわななきつつ身を横たへ

よこたわった　横たわった
050　026　きみはただ重たい靴のなかに足をつっこんで静かに横たわったのだ。

よこたわって
067　006　あおむけによこたわっていた

よこたわり　横たはり
045　010　畳の上に　水平に做って横たはり

よこたわる　横たわる
081　018　木の吊床に横たわる者

よこちょう　横丁
133　017　死の匂い甘美な横丁で

よこばい　横這い
182　005　横目使いに横這いの

よこめずかい　横目使い
182　005　横目使いに横這いの

よごれ　汚れ
008　013　群は　雲に乗って押しよせ　黄色く汚れた地図の上を
041　038　あの汚れた貝殻　岩に砕ける憎悪の波よ
054　069　君は君自身の汚れた手で
063　029　ぼくたちは汚れを知らぬ微笑をうかべる
066　008　汚れたエプロンで
070　040　汚れた皿拭き布があるだけなのだ、
145　015　古い広告ビラの汚れた壁の傍で

よごれた
061　004　よごれた幻の都市が聳えている。
101　055　にんげんの悲しみによごれた夕陽をすてにゆこう

よごれた　汚れた
008　013　群は　雲に乗って押しよせ　黄色く汚れた地図の上を
041　038　あの汚れた貝殻　岩に砕ける憎悪の波よ
054　069　君は君自身の汚れた手で
066　008　汚れたエプロンで
070　040　汚れた皿拭き布があるだけなのだ、
145　015　古い広告ビラの汚れた壁の傍で

よじ　四時
034　011　午後四時はしぜんに消えてゆく
051　014　午後四時の黄いろい太陽
160　056　その日は夜どおし起きており　朝の四時にゴミを捨てに廊下へ出て

よじょう　余剰
035　015　一滴の余剰を待たうとおもった

よせあい

106　008　親しくもないのに止り木で肩をよせあい
163　002　ときには肩をよせあい

よそう　予想
072　037　（……すべて予想どおり……）
072　051　（……予想屋にとって
072　052　すべては予想どおり展開する……）

よそうや　予想屋
072　051　（……予想屋にとって

よそごと
041　072　よそごとのやうに

よぞら　夜空
061　223　おびただしい灯の窓が、高く夜空をのぼってゆく。
069　001　十一月の凍った夜空に
069　009　十一月の凍った夜空に
069　021　十一月の凍った夜空に
069　037　十一月の凍った夜空に
104　012　夜空はたえまなく星を降らせている
164　007　夜空の星たちが笑う

よだん　予断
162　018　かれが何を見たかは予断のかぎりではない

よち　余地
054　065　いまこそそこに疑いの余地があるから
142　044　いつもかぎりなく透明で　疑問の余地なく真実だから
161　024　負担を軽くする余地が

よちよち
183　022　よちよち歩きする可愛いい女の子に

よっつの　四つの
099　013　小さな四つの運命は　四つのボールのように
142　017　（四つの窓のうち三つが閉じられたままである）

ヨット
110　003　ヨットは沈黙している

よどおし　夜どほし
041　041　夜どほし歌ってゐるな　寒い眩暈のなかで

よどんだ　澱んだ
046　007　澱んだ鈍い時間をかきわけ
061　008　見よ、澱んだ「時」をかきわけ、

よどんで　澱んで
011　001　河の水は泥のやうに澱んで
055　031　厭な匂いの薬のように澱んでいるばかりであった

よどんでいる　澱んでいる
055　031　厭な匂いの薬のように澱んでいるばかりであった

よねん　四年
077　016　一九四四年五月のある夜……
188　033　早いもので、あれから四年、
188　073　四年遅れのこの返信が、四年前のそれと、どう違っているかを、

よねんおくれ　四年遅れ
188　073　四年遅れのこの返信が、四年前のそれと、どう違っているかを、

よばれる　呼ばれる
029　008　憩ひといひ懶惰と呼ばれる雰囲気にかこまれ

よびかけ　呼びかけ
046　020　たとえ純粋な緑が　墳墓の丘より呼びかけようと
054　096　まるで僕たちに呼びかけるかのような樹木のそよぎ
065　024　天使は、夜の戸口から呼びかけた。

よびさます　呼び覚ます
036　012　おれの睡眠を呼び覚ます

よびだす　呼び出し
150　053　編集者である私が警視庁から呼び出しを受けた。

よびちしき　予備知識
188　063　死滅の予備知識も与えられて然るべきだ、といった方針のもとに。

よびはじめて　呼び始めて
014　014　二つの楽器が揃って火を呼び始めてね

よびよせて　呼びよせて
088　040　ひとつずつ自然を呼びよせて

よぶ　呼ぶ
028　006　意識の外部と呼ぶ空壜の堆積した世界よりも
028　020　かれら塵挨都市の番兵と呼ぶものから
030　023　あれを何と呼ぶのだらうか
039　105　落ちていった星を何と呼ぶのだらう

よみ　読み
057　007　パスカルの読み方を教えた青年が戦死し
058　049　昨日のように読みすてましょうか？
058　050　そしてニュースが私を読みすてたら
098　011　読みさしの小説のつづきは
167　021　古今の書を読み
174　007　その後、「死後の世界」を読み
180　006　そそくさと読みおえたその文面を
180　009　とっくりと読みおえたにちがいなかった
188　006　読みものがたまっていくばかりで、

よみがえって　甦って
160　016　闇をつらぬく稲妻と烈しい豪雨の中から新しい発見のように甦ってきた

よみかた　読み方
057　007　パスカルの読み方を教えた青年が戦死し

よみさし　読みさし
098　011　読みさしの小説のつづきは

よみすて　読みすて
058　049　昨日のように読みすてましょうか？
058　050　そしてニュースが私を読みすてたら

よみち　夜道
095　015　誰だって僕のように淋しい夜道を走るだろう

よむ
090　010　そこに年輪をよむかわりに

よやくして　予約して
132　001　不在を予約して生きた

より
005　015　ヴェニュスの胸は穹より広いヴェニュスの胸は穹より広い
012　011　キュウピットの矢よりも疾い
016　013　より精巧な機械に見とれるときも

017　012　ダリヤよりも美しかったので
021　017　海より深い空を燃やし
028　003　緑の影はいつもガラス管によりそってゐた純粋な頭の鈍い速度について
028　006　意識の外部と呼ぶ空壜の堆積した世界よりも
028　019　文明的なもろもろの雑音の性格により
028　025　新らしい印刷術とパルプにより
035　006　それは一羽の鳥よりもはやく帰ってくる
037　009　肉体よりも柔軟に
037　010　けものや鳥よりもすばやい身仕度で
037　021　ランプよりも巨大な思い出の下で
038　003　風などよりも静かに
039　020　楽器よりももっと柔らかにくねる
039　061　永遠よりみじかい時間のうちに
042　010　かしこより辷りでて
042　016　樹によりかかり
044　013　戦いは何処よりか
045　018　とおい稲妻の明りをたよりに髭をそった
045　019　畳よりも青い顎の　若い主はしばし呆ける
046　019　この滑らかな洞よりも　さらに低い営みがあるだらうか
046　020　たとえ純粋な緑が　墳墓の丘より呼びかけようと
048　029　山や川　またなによりも海ができる
051　025　影　終生よりそって離れぬ影
053　049　わたしは一日よりもはかない一年を
053　050　一年よりもむなしい一生を過ごしてきました
054　061　単により高尚な国民　結社　人間の材料にすぎないと
061　062　出発の時よりも貧しくなって、
062　017　そっとわたしの寝室に近より
065　016　いつまでも待っているよりしかたがなかった。
065　054　彼は待っているよりしかたがなかった。
070　051　あなたの五本の指はどんな兇器よりも残忍で、
070　052　どんな蛇よりも猛烈な毒をもっているわ
072　001　ーーどんな国際ニューズよりも
072　013　なにものよりも
072　054　どんな国際ニューズよりも
076　020　どんな後悔よりも細くなってしまったから
077　003　神の復活に出会うよりもたやすい
079　028　生きるためより
083　019　より高い青空の深みへ落ちてゆく
084　028　それはもうシリアやトリエステの軍隊よりも
085　011　きみは心よりもデリケートなうわべをもち
085　012　みかけより真実を飾らぬ男だ
088　060　どんな恋人たちよりも甘いキスをしよう
091　004　ロースト・ビーフよりも香ばしいその匂いとともにやってくる

091　008　虻よりはやいガソリンの微風に乗ってゆく
092　006　盗んだ梨より甘かったと……
101　014　なにものよりも　おのれ自身に擬する銃口を
101　044　沈黙よりも固い無名の木の実がはじけとび
112　034　妥協の無限の可能性をたよりに
113　024　答えよりも大きな疑いはなかったから
116　007　よりそって　晩秋の路上に
124　007　地名のない地図をたよりにスパイが暗躍
124　035　（疲れやすいんだ　としよりは）
127　018　死よりも暗い「病院」で
128　024　「円の切上げより自由化が先」
142　016　帝政時代よりソビエト体制下で四倍も悪化している
142　079　もちろん　信念より自分の生命が大切だと考えたからである
142　081　生命より貴重だと感じていたのである
142　082　彼がおかれている状況は　西側の同時代人のそれより
142　105　巨大なものの力が　個人の信念より永続するという証拠はない
143　015　詩を書くより死んだほうがましだ
145　020　どうかするとにんげんは機械よりも機械だから
146　002　二人でよりそうようにして
147　004　生きることより死を受入れるほうがずっとたやすかったろう
148　003　三十五年ぶりにたよりをよこした。
149　003　舟唄のたよりなさ
153　003　原初の日より数えるように
167　074　昨日よりよき明日は来ないのだから
167　080　よりよき消滅を迎えようではないか
170　011　よりそう影もない
179　020　死よりも贅沢な眠りに就く
182　004　退屈が死ぬより怖いからといって
187　013　信念よりは自身が大事だから
188　037　眼よりも、心で計る構えになるのは、
188　070　身体の故障よりも、よほど、このほうがつらい。
192　022　最後の逕をたよりに走り出していたのは、是非もなかったが、

よりかかり
042　016　樹によりかかり

よりそう
146　002　二人でよりそうようにして
170　011　よりそう影もない

よりそって
028　003　緑の影はいつもガラス管によりそってゐた純粋な頭の鈍い速度について
051　025　影　終生よりそって離れぬ影

116　007　よりそって　晩秋の路上に

よりどころ　拠りどころ
150　045　最後の拠りどころは生理しかなく、

よる　夜
023　013　巨大な鳥になって夜の空に墜落し
027　013　グラスの底に夜が光った
030　009　夜が垂らす耳はない
037　011　夜はおそらくどこからでも忍びよる
038　024　夜がきて
039　088　すべてが凍える夜がくる
039　134　夜にはもっと尊い何かがある
040　016　夜ふけてただひとり
041　018　あなたはたしかに夜をもってゐる
041　041　夜どほし歌ってゐるな　寒い眩暈のなかで
043　014　ながく夜をまってゐた灯火は
042　002　夜はひそかに　窓のあたりの気配にまぎれ
042　019　夜にゆだねて
045　012　夜半のけむり無常の風に耐へてきた
047　001　深夜　唇が煙草を挟んでいる
054　007　ひとりずつ夜の街から消えていった
054　102　この呪わしい夜を祝福しよう
054　111　古い夜の匂いがする頭に帽子をのせると
055　006　なまぐさい夜風の街が
055　017　おれたちの夜明けには
055　052　ああ　おれは雨と街路と夜がほしい
055　053　夜にならなければ
057　035　暗い夜明けのうちに倒れなければならぬ
061　137　夜　昼　わが涙のみ注ぎて魂の糧となり
061　165　夜の環が冷たくかぶさってくる、
061　210　あなたの外にも夜がきた。
061　212　生ける死者たちが空中を歩きまわる夜がきた。
061　223　おびただしい灯の窓が、高く夜空をのぼってゆく。
062　002　ひとつの年が始まる神秘な夜にくるまって
063　011　世界の深夜――
064　025　夜と窓とがぴったり重なっても、
064　027　――星のない夜には希望がない、
065　024　天使は、夜の戸口から呼びかけた。
065　029　その秘密を夜のなかに穏していた。
065　031　暴風の夜を飛んでいった。哀歌をうたいながら
065　048　星も月もない夜、毛布にくるまった男は
065　053　しろじろと夜明けの光をながすまで

066 021 ーー夜があまり静かだから
068 032 ーーその夜
069 001 十一月の凍った夜空に
069 009 十一月の凍った夜空に
069 021 十一月の凍った夜空に
069 037 十一月の凍った夜空に
070 002 夜の岸辺のように
077 016 一九四四年五月のある夜……
077 025 ゆれる昼夜燈の暗い光りのかげに
077 029 東支那海の夜を走る病院船の一室で
078 017 ああ　夜昼のさかいなく
081 017 夜あけのくる船窓の下の
084 020 「あんたの夜はあたしの真昼
084 021 夜と昼とが恋をする……」
084 024 「今夜あたし　あのギャングに
095 008 その夜ーー
095 015 誰だって僕のように淋しい夜道を走るだろう
096 004 ぼくはバルセロナの夜をえがく
096 009 太陽の町は夜の町　バルセロナの裏町の
096 012 この夢の果で一夜を明かそう
096 013 ミロ君の夜の太陽を見ていると　吐きたくなるね
098 005 こんな真夜中
102 010 みんな夜明けの桟橋から散ってくれ
104 012 夜空はたえまなく星を降らせている
112 015 敵にむかい黙々と出撃し　一夜あければ骨となる
115 006 夜明けの道はまっすぐで長いが
118 014 夜明けの枢
128 029 ひんやり夜風が吹きぬける
130 002 夜の底がひびわれたとおもったら
130 014 夜明けは近い
133 004 「夜われ床にありて
145 007 売ってはいけないものを売る深夜の
145 026 雲は低く垂れ　グラナダの暗い夜に稲妻が走っていた」
145 027 街のまぶたは重く垂れ　東京の暗い夜に信号燈が明滅していた
146 014 昼夜灯に照らされて
148 038 夜はことのほか短かい。
160 009 そんな今年の冬も終りに近い　ある日の真夜中
160 046 今夜のかれの幸運は明日にはきみのものだろう
160 056 その日は夜どおし起きており　朝の四時にゴミを捨てに廊下へ出て
163 004 夜明けとも日暮ともつかぬ薄明の中で
164 007 夜空の星たちが笑う
169 002 新鮮な沈黙の夜をむかえて
169 011 今夜は別々に浮遊し

170　003　眠れぬ夜の収穫は
173　009　夜があけたばかりだというのに
179　018　悪魔の夜がくる前に
188　076　ひとしきり烈しくなり、深夜の屋根を叩いている。
192　004　夜明け前の微光があたりをくまなく覆っていて、どこへ行こうとしているのか、
193　015　窓の灯をにじませる夜には

よろい戸
066　015　おもたいよろい戸をおろして

よろこび　歓び
030　008　歓びにもまた憂ひにもなぜか

よろこび　喜び
053　044　まして喜びなんか
062　024　わたしはこの世ならぬ冷たい喜びに慄えている
085　024　女たちの血のなかから愛の喜びをしぼりだそう
088　047　消えさる喜び　永くとどまる悲しみというものがない
089　018　（その喜びと悲しみを
115　014　喜びなき代の美しきひと
116　005　過去をすてたきみの喜びと
160　038　たいせつなのは感情の純粋な喜び！
160　049　喜びなくして何の宝ぞと

よろこび　喜ろこび
028　039　信仰や箸や石鹸や喜ろこびや散策があるやうに

よろこんで　喜んで
088　083　心から喜んでくれるから
113　033　喜んで処刑される者もたくさんあった
161　022　喜んでむかえなさい
162　022　喜んで命と交換しただろうというのだ

よろめく
142　053　義に昏（くら）い者　イデオロギーによろめく者が立去り

よわい
172　017　妄想によわい躰を病み

よわい　弱い
043　015　弱い光でうなだれた神をむかへる
106　018　アイディアもなければ　構成も弱い
142　108　一個の弱い人間の信念をも挫くことができないとわかれば

よわい　齢
044　018　あなたの齢にとってただの一瞬を。
048　021　歴史の鎖につながれた老齢！
144　008　齢を空しく重ねてきた
162　008　貧しさの樹齢そのものと化してから

よわたり　世渡り
164　015　ずるい世渡りをするつもりはないが

よんかい　四階
058　008　ビルの四階には午後三時から灯がともり

よんさい　四歳
072　003　いま評判のサラブレッド四歳馬を見ようとして
184　010　四歳になったばかりの養子の名はヒロシ
186　034　ひょっとすると廿六年前の卅四歳のぼくが、いまのぼくを見ていたかも……

よんさいばを　四歳馬を
072　003　いま評判のサラブレッド四歳馬を見ようとして

よんじゅうさい　四十歳
160　065　フンボルトの天才　は四十歳で燃えつきてしまい

よんじゅうななかい　四十七階
140　024　四十七階の痛む背骨がゆれている

よんじゅうねんだい　四十年代
160　063　三十年代末から四十年代にかけて活躍し

よんだ　呼んだ
041　112　それは又新しく湿気を呼んだ
166　003　「きみ」と呼んだりする習慣があって

よんばい　四倍
142　016　帝政時代よりソビエト体制下で四倍も悪化している
142　018　それで監獄は　四倍以上も暗く

ヨーロッパ
006　015　ヨーロッパは　黄昏　である
096　007　ようするに　ヨーロッパは西の果へ
103　023　暗雲垂れこめるヨーロッパでもなければ

らいさんしゃ　礼讃者
103　018　粗暴な肉体の礼讃者でもないのだ）

らいねん　来年
169　024　来年の風にまた挑戦します。

らいはいどう　礼拝堂
146　021　そこは秘密の礼拝堂になっていて

ライフ
167　012　話したり書いたりすれば素晴らしいライフも
167　076　ぼくたちのライフを蝕み

ラヴ
145　011　「忘れはしないという虹色のラヴ　ソングが聞えていた

らくじつ　落日
002　011　落日の朱が氷柱をながれ―
176　022　落日に輝くばかりで

らくだいせい　落第生
150　039　クラス委員にして落第生の竹内幹郎だった。

らくてんてきな　楽天的な
126　008　と楽天的な科学者が言った

らくよう　落陽
049　014　そして落陽はただひとつ。

らしい
004　007　僕は新らしい贅沢な船の設計について
008　012　すてて　砂漠へ逃げてしまった　やがて新らしい靴の
014　003　頭の大きな楽器が目覚めたらしい
014　017　パイプオルガンも大変不満らしい
028　025　新らしい印刷術とバルプにより
044　010　新らしい種子が新しい土地に播かれつつあることを。
052　012　影になったあなたの子供らしい微笑が
065　015　そこに、あたらしい岩山が出現するまで
078　006　あたらしい友と肩をくみ
080　017　あたらしい血汐であらい　この苦しみの胸が
081　024　むごたらしい歴史のそとに
101　011　むかしの愛も　あたらしい日附の憎しみも
102　004　あたらしい屍体の雨をふらすから

115　003　あたらしい世界をたずね
160　069　エゴセントリックで報復的だったためか同僚にはうとまれていたらしい
167　012　話したり書いたりすれば素晴らしいライフも
188　067　ずいぶん起っているらしいです」と書いていたが、

ラジオ・ニュース
185　002　ラジオ・ニュースが伝えたとき

らしき
173　022　かつてきみの横顔には自伝らしきものがあった

らしん　羅針
103　011　帆柱や舵や海図や羅針や救命ブイや銛や……

らしん　裸身
104　010　愛と憎しみに撃たれた裸身のほそさに

らせん　螺旋
021　004　螺旋の風は
027　015　耳の螺旋を辷りおちた

らっかし　落下し
025　037　鉛のやうに落下してくる
152　010　コップに落下しすぐに消え

らっかして　落下して
025　037　鉛のやうに落下してくる

らんがい　欄外
140　016　欄外の人生を生きてきたのだ

らんかん　欄干
046　001　高い欄干に肘をつき

らんし　乱視
151　014　かなりひどい近視で乱視の

ランタン
025　021　室内には薄明りのランタンが

ランプ
007　001　ジャンクの帆が蝙蝠のごとく羽博いて　ランプの虹がひろがる
034　015　あやまってランプを落し

035　028　誰かくらい巨大なランプを掲げた
037　021　ランプよりも巨大な思い出の下で
039　107　ランプのやうに

らんぶ　乱舞
028　070　花花しい物質たちの流れ乱舞の外から

りえき　利益
041　065　あなたの利益は　あなたのどの釦に隠してありますか

りがいかんけい　利害関係
112　036　あさましい利害関係のなかでたたかいながら

りかいでき　理解でき
061　186　貴方の深い慈悲と知慧とを理解できません。

リキュールグラス
054　057　リキュールグラスを舐めながら
054　106　独身者は大学生のリキュールグラスに

りく　陸
016　012　陸を超えて飛翔する
041　019　あの陸橋の上を
041　040　何とはなしに陸橋の上まで打寄せてくる
041　059　やはり濡れて陸橋に佇んでゐることを想ひ
067　001　陸橋のうえから
077　012　これからも大陸に　海に
081　031　やがて陸にむかってゆるやかに動いていった
103　024　陸封されたアジアの辺境でもない
121　006　陸のウニはもうごめんだと逃げだそう
173　048　意識の大陸はずんずん後退し
193　022　大陸からの寒波はきついが

りこてき　利己的
142　091　しかし　利己的で　近視眼的で　無防備な文明のなかにいて

りこんした　離婚した
184　005　すぐ離婚したが夫の姓は変えずに帰国して

リスト
017　040　なむ天にましますキリスト様よ
124　020　（ジャーナリストがテーブルを叩いて怒っている）
160　059　ニューヨーク・タイムズの記者が屍体置場のリストからかれの名をみつけ出し

リズム
054　031　そこにはどんなリズムが　色彩が
100　033　かろやかな鼻唄のリズムで歩きもしたろう

りそう　理想
061　134　浄らかな水に映る理想の伴侶に
085　021　理想主義者や清貧家を蹴とばし
155　031　理想の良人は

りそうしゅぎしゃ　理想主義者
085　021　理想主義者や清貧家を蹴とばし

りっきょう　陸橋
041　019　あの陸橋の上を
041　040　何とはなしに陸橋の上まで打寄せてくる
041　059　やはり濡れて陸橋に佇んでゐることを想ひ
067　001　陸橋のうえから

りっぱな　立派な
011　013　立派なきみらの服装であるが
058　018　私の立派な人生には
188　046　時には、道徳や、宗教の立派な代理になるうえに、

りてん　利点
142　024　（それゆえ　この国独得の統治方式の利点とさえいえるもので

りはつてん　理髪店
108　030　理髪店からの長いながい戻り道

りはん　離反
100　025　離反につづいて孤立がはじまった

りふじんな　理不尽な
156　034　理不尽な契約を前にして
165　015　これ以上、理不尽な感情があるだろうか

りべつして　離別して
148　004　南国で農業に専念し、妻と離別してから、

リボン
005　017　リボンの花火をあげて

りゆう　理由
133　001　歌のはじめには開かれた理由がある
142　087　臆病な政治的理由があり　小さな幸福をほんの少し長引かせるための
161　018　おのれを赦せぬ理由は
171　002　ありえないという理由で、

りゅうきして　隆起して
106　023　そこに集中し隆起して　あるフイジカルな高貴さの象徴となり

りゅうこう　流行
007　011　流行るのだ
017　036　沙漠の唄が樹の上でも流行し
096　015　文明色なら　もう古くなった三十年代流行のセダンの

りゅうこうし　流行し
017　036　沙漠の唄が樹の上でも流行し

りゅうつうする　流通する
028　018　つねに流通する貨幣の翳から起るといふ

りゅうほ　留保
142　009　こうした　同じことだ　という作為的な留保がなされるかぎり

りょう　両
057　019　力が判断と緊張をしっかりと両足にむすびつける
080　006　戦いによって　両手をうしなったきみは
080　020　きみはきみの失われた両手を高くあげる……)
124　026　吊皮につかまる両手をポケットに入れたまま
125　022　むずかゆい両脚をとじて一人のベッドで静かに眠れ
155　014　両手でつかんでうしろにやってしまえば
188　024　両のこぶしで、眼をおさえている光景、

りょう　量
018　002　質量の影も見えない
028　043　測量する技師の手の影に従って
041　080　純潔な空気が咽喉を塞ぎ　見えない量に苛まれて
128　053　相場も騒動も測量も相続も掃除も葬式も

りょうあし　両脚
125　022　むずかゆい両脚をとじて一人のベッドで静かに眠れ

りょうあし　両足
057　019　力が判断と緊張をしっかりと両足にむすびつける

りょうかいした　了解した
186　029　みんな若かったと了解した瞬間、未来に到着していたことがわかった

りょうけん　猟犬
091　014　きみの季節は飼主のない猟犬のように飢えている

りょうしん　良心
142　033　支配に自信なく　人間の良心を

りょうて　両手
080　006　戦いによって　両手をうしなったきみは
080　020　きみはきみの失われた両手を高くあげる……)
124　026　吊皮につかまる両手をポケットに入れたまま
155　014　両手でつかんでうしろにやってしまえば

りょうど　領土
148　041　夢の領土をとり巻いている闇のなかで、

りょかん　旅館
148　009　かれとは敗戦直後の闇市の近くの旅館で一度会い、

りろん　理論
172　014　理論　なし

りんかく　輪郭
186　031　過去と現在の空間がぴたりと重なり、その輪郭がずれてぼやけていく

リンゴ
179　004　竹籠からとり出すリンゴには

りんご　林檎
025　043　林檎の核を拾てた
048　025　乳と象牙と林檎とが

りんじゅう　臨終
189　011　臨終のたのみだった

りんじん　隣人
129　004　隣人を愛して
160　045　隣人とは愉快に貸し借りせよ

りんどう　林道

144　002　赤い林道に入っていく

りんりつする　林立する
173　030　林立する墓石の女

リーチ
128　028　「リーチ」に「ツー」はつかないはずだよ

れい　礼
103　018　粗暴な肉体の礼讃者でもないのだ）
124　017　礼儀作法にかなわなかったら
146　021　そこは秘密の礼拝堂になっていて
166　017　「礼は往来を尊ぶ」
180　049　それがせめてもの礼儀である
187　024　何に対する敬礼か
188　032　（ほんとうに、失礼しました）

れい　零
030　026　零囲気のほとりに佇んでいる白いもの
169　022　ならば零から始めよ

れいき　冷気
041　111　物質で身を固め　破れたシャツで冷気を防いだ
054　012　あらしは冷気をふくんでいた
054　013　冷気は死の滴り……
192　015　みるみる漆黒につつまれていく、ここは、もともと海底だったところではないか。冷気に身ぶるいし、

れいぎ　礼儀
124　017　礼儀作法にかなわなかったら
180　049　それがせめてもの礼儀である

れいき　霊気
168　005　たちのぼる泉の霊気には

れいぎさほう　礼儀作法
124　017　礼儀作法にかなわなかったら

れいこくさ　冷酷さ
085　010　はっきりした冷酷さもある

れいめい　黎明
043　018　ほどよい黎明がただよふ

レインコート
100　021　やくざな渡り鳥のようにレインコートを肩にかけて

レエテ河
065　021　告げなさい。レエテ河の水を飲まぬうちに

れき　暦
025　010　日暦をめぐり欲望を追ってゆくものよ
041　008　新聞を読む　虚しい日暦の傍で
124　006　日付のない暦をめくり

れきし　歴史
025　007　それらが船舶の歴史の中にあった時代には
028　072　すべてが歴史の容器の中にあるとは限らない
048　021　歴史の鎖につながれた老齢！
079　017　歴史の終りを
081　016　ぼくらはすでにこの歴史の内では死んだ者
081　024　むごたらしい歴史のそとに
101　019　いつわりの歴史をさかのぼって
136　025　わいせつな歴史の棺桶の
142　001　「もう長いこと　この国のほんとうの歴史は
142　113　歴史を作る者をたえず脅かしつづけてきた基本的なイメージである
142　115　「残忍な歴史の流れはくいとめられないとか
153　007　どんな歴史も受けつけぬ
160　024　歴史というものが　どんなにわれわれの野心や虚栄とくいちがうかという
188　048　正義の社会学であったり、深遠な歴史学であったりもするのだから、

れきしがく　歴史学
188　048　正義の社会学であったり、深遠な歴史学であったりもするのだから、

レグホン
016　003　白いレグホンたちよ

レコオド
008　017　レコオド音楽に*クチ*あいて　緑の藻を*タベ*てゐる

レコード
054　132　無言で蓄音器のレコードが廻転する
084　012　安いレコードのみじかい針の溝から

レスビアン
145　008　レスビアンの女たちの痙攣は不信者の地獄の笑いの一型態で　ブリッジして反った肉体の

れつ　列
014　020　楽譜が走ってきて整列する
028　033　ねぢれた鎖のやうな数輌の列車の合図が響き
028　052　一台の列車が到着するであらう
058　047　ひとびとのうしろに行列をして夕刊を買い
061　077　溺死人の行列が手足を藻でしばられて、
077　013　幾世紀もの列をつくってつづくのだ
100　064　つながれた行列の影は鎖のように工場をとりまいていた
106　001　ありきたりの記念写真のスタイルで　三列にならび
106　010　第一列の中央に　いやな上眼づかいのかれがいて
112　014　命令一下たちまち整列し　黒い銃剣の林をつらね
136　005　葬列が見えない
186　056　それなのに、みんなが整列して中央に一つだけ空いている椅子
193　013　遠ざかる列車のひびきに

れっしゃ　列車
028　033　ねぢれた鎖のやうな数輌の列車の合図が響き
028　052　一台の列車が到着するであらう
193　013　遠ざかる列車のひびきに

レッテル
057　001　ウィスキーのレッテルには
057　032　レッテルでもなければ　絵皿の風景でもない

レディ
084　029　重い任務をになったレディたちです

れてゆかう
041　076　あなたをどこかへ連れてゆかうとする

レトリック
158　011　レトリックがうまいなと思っただけで

レビアタン
103　027　おそろしい幻想とレビアタンの住む世界だ

レモン色
016　001　レモン色の朝焼だ

れん　蓮
170　014　蓮の葉の上に大きな露の玉が乗っていて
170　018　蓮の葉の上をかりの宿として
186　073　一粒の蓮の実を永く隠しておくことだよ

れんごうかんたい　連合艦隊
079　012　ゆうに一連合艦隊が沈んでいる

れんざん　連山
108　032　みはるかす何とか連山は紫の帯

れんしゅう　練習
125　008　悪魔のオーケストラの練習がうるさい
173　002　身ぶりの練習をしたかったとかで

れんちゅう　連中
085　018　奇怪な造語で喋る連中の頭を踏みつけよう

レース織り
176　012　レース織りのカーテンの布地を

レール
041　026　橋の下には　レールがうねり
069　040　終電車のレールのひびきは

ろう　老
007　002　あたり　見知らぬ老婆が咳をするのはわれらにかかわりのないこ
010　017　老いぼれた天体は歯がぬけてゐる
025　005　松が老いてゆく錨のうしろに
027　008　すべての家具が老いてゆき
048　021　歴史の鎖につながれた老齢！
054　008　胸に造花の老人たちが
056　013　聾の老人が世界に向って何か叫んでいるのが
066　016　年老いた母親はいきをころして坐り
108　024　老ヘーゲルは来り去り
125　023　地獄のヴィジョンのうえで安眠できる老人は
148　037　みな年相応に老けて、持薬を服用する者もあり、
160　033　印刷の不備でくじに外れた老楽師に　大当りの賞金を全部やってしまう
167　018　老化した脆弱な骨組に
182　006　いやな老人になるな
182　021　老いたる者には智慧があり
182　026　老いのうちにも新しい命の水が
183　023　すこし足の不自由な老人がほほえみかける
186　028　いっぺんに老けこんだ気分でしょう？
188　021　その中に「悲しむ老人」という作品があります。
188　022　頭の禿げかかったひとりの老人が、
188　050　老いの楽しみに数えてよいだろう。

188　054　いまはエレクトロニクスと老害の時代なのだ。

ろう　蝋
003　009　盛んに蝋を焚く女のプロフイル
004　004　白い蝋燭の中に住まってゐた
017　003　赤い蝋燭が点されて
025　038　笑声をたてる一本の蝋マッチ
041　124　木質は腐り　陽に燬かれ　蝋のやうに流れた
048　008　なめらかな蝋は寝台をながれる

ろうか　廊下
019　001　靴の溢れる廊下では
033　007　寒い廊下をわたってきた
035　017　同じ廊下で
038　010　街を見降ろす廊下には
039　100　木と木の間の寒い廊下に佇んで
040　019　秘密はいくつもの廊下をとほってくる
041　082　廊下へ出て
045　003　部屋から廊下へ
046　047　また午後の廊下の如くあなたの躰を影にするだらう
146　013　壁にドアをならべた廊下が
146　036　またまた迷路の廊下にまよいこみ
160　056　その日は夜どおし起きており　朝の四時にゴミを捨てに廊下へ出て

ろうがくし　老楽師
160　033　印刷の不備でくじに外れた老楽師に　大当りの賞金を全部やってしまう

ろうかした　老化した
167　018　老化した脆弱な骨組に

ろうごく　牢獄
097　006　もし無慈悲な画家が牢獄を描くとしたら、

ろうじん　老人
054　008　胸に造花の老人たちが
056　013　聾の老人が世界に向って何か叫んでいるのが
125　023　地獄のヴィジョンのうえで安眠できる老人は
182　006　いやな老人になるな
183　023　すこし足の不自由な老人がほほえみかける
188　021　その中に「悲しむ老人」という作品があります。
188　022　頭の禿げかかったひとりの老人が、

ろうじんたち　老人たち

054　008　胸に造花の老人たちが

ろうそく　蝋燭
004　004　白い蝋燭の中に住まってゐた
017　003　赤い蝋燭が点されて

ろうどうしゃ　労働者
058　037　サラリーマンや労働者を相手に

ろうば　老婆
007　002　あたり　見知らぬ老婆が咳をするのはわれらにかかわりのないこ

ろうばいする　狼狽する
192　014　薄暮と昧爽とをとりちがえていた迂闊さに、狼狽するも間なく、巨大な生きものの胎内にのみこまれるように、

ろうひ　浪費
112　040　水が酒に　欲望がもっとたくさんの浪費にならないとこぼしている

ろうれい　老齢
048　021　歴史の鎖につながれた老齢！

ろくがつ　六月
082　001　六月は水色の瞳
125　005　六月の雨はしきりにふり　音楽はとめどもなく

ろくさつ　六冊
150　021　きみから送られてきたその頃の六冊の雑誌を見ていると、

ろくじ　六時
053　033　柱時計が六時を告げる

ろくじゅうさい　六十才
174　006　早く頑迷固陋にかえりたい。あと三カ月で六十才」と書いてあった。

ろくじゅうぼん　六十本
124　030　六十本の煙草を灰にしたところで
166　013　いまのきみは一日に六十本の煙草を吸い

ろくじゅうぼんの　六十本の
124　030　六十本の煙草を灰にしたところで
166　013　いまのきみは一日に六十本の煙草を吸い

ろくじゅうまん　六十万

151　009　月々の出費は切りつめて約六十万

ロクなもの
125　018　われらの人生なんてロクなものではない

ろくにんの　六人の
150　005　六人の友達の彼に対する考え方は夫々まるで違ってゐた。
150　006　六人の意見が一致してゐる時は、六人とも彼に騙されてゐる時であった。

ろくばい　六倍
128　023　鋼鉄六倍　自動車十五倍

ロケット
053　014　昔の恋人からおくられた銀のロケットを

ろじ　路地
018　012　路地を抜ける春のやうに
054　039　だが僕は最初の路地で心弱くもふりかえる
058　019　いつもそんな汚い路地があって
084　036　いつまでも雨がふってる路地をゆけば
095　010　ぼくは暗い路地を走り出た

ろじょう　路上
116　007　よりそって　晩秋の路上に
145　005　芋虫色の車を時間外駐車で路上に放置し　道徳の坂を下り左折してまた坂を登るとすぐ右

ロッカー
108　002　ロッカーの戸がバタンバタン

ろっこつ　肋骨
011　004　空が濡れる雫が肋骨をたたき
056　005　彼の病んだ肋骨のなかを

ろば　驢馬
005　020　驢馬は駈ける

ロビイ
091　010　劇場やホテルのロビイに立っている寂しい人影からうまれ

ロビー
146　006　ロビーまで戻ったところで

ロボット

152　020　習慣のロボットになるな

ロマン
002　010　（それは忘れられた日のロマン）

ろめんでんしゃ　路面電車
112　022　寝床のぬくもりでほてった身体を　詰まった路面電車に積みこんで

ロースト・ビーフ
091　004　ロースト・ビーフよりも香ばしいその匂いとともにやってくる

ローソク
096　001　ミロはローソクの黄ろい炎で

ローマ
096　006　ギリシァ　ローマの政治を見てきたが

わ　環
054　043　夕暮の環をめぐって
061　165　夜の環が冷たくかぶさってくる、
064　001　大きな夕暮の環に灯をともして、
064　032　大きな夕暮の環に灯をともして。
109　009　生命の一循環を終えたのだから

わ　輪
011　016　純な一輪の白薔薇について
023　022　華麗なあなたの指輪とともに
026　003　光の輪の中に羽ばたきがあって
029　006　それら肉体の輪廓にそって膨まず
041　084　宿命的な輪のなかで
052　019　あなたの未来の指輪が青い光をあつめ
053　013　姉さんのかたみの水晶の腕輪がわたしの冷たい手錠で
055　062　頸輪ずれしたおれの咽喉につめたい剃刀をあてる
058　033　指輪や装身具の飾ってあるショーウィンドをのぞいて
088　035　それから指で大きな輪をえがいて
090　010　そこに年輪をよむかわりに
107　005　車輪や道もうたっていた
145　003　何もない地面の片隅に針金細工や手製の指輪を並べ　どこにもいないエンジェルがここに
148　031　同じ輪送船でスマトラ島に送られた転属組の十三人だった。
148　040　戦死者の手足がぐるりと輪になり、
155　016　花輪や弔辞は
175　002　なぜ首輪をつけたりするのかと

ワイシャツ
066　030　ワイシャツの袖をまくった腕であった。

わいせつな
136　025　わいせつな歴史の棺桶の

ワイン
129　017　まぶしい食卓のワイングラスの影と
162　021　そこで一樽のワインとなら

ワイングラス
129　017　まぶしい食卓のワイングラスの影と

わかい　若い
012　003　若いアポロは日傘にかくれ
021　010　賢明な若い主君は
045　019　畳よりも青い顎の　若い主はしばし呆ける
056　010　抱きあった若い男女になって
058　054　一人の若いウェイトレスが
074　005　カミソリ自殺をとげた若い軍属の
074　023　若い魂を解放したカミソリの刃を
097　010　あのブロンドの若い男は、動物になる夢を持たなかったろう。
102　011　うたいながら破壊する若い勇士たちが
142　064　ずたずたに責め苛まれながら　若い生命をすり減らしているが
148　051　若い男女でいっぱいのフラワー・センターに立ちよって、
160　018　観客のいっぱいつまった劇場で　司会役の若い男から
183　018　若い証券マンが一人で物思いに耽っている
184　019　若い中国人の夫は口癖のように

わかかった　若かった
107　001　ぼくが若かったとき
107　003　尖塔の鐘の音も若かった
186　029　みんな若かったと了解した瞬間、未来に到着していたことがわかった

わから　解ら
017　031　どうしてよいか解らないほど

わからない
053　064　なんにもわからない　わからない
070　030　わからない、どうして此処へ落ちたのか
070　031　ぼくにはわからない、
071　013　わからないひとつの運命である
116　003　きみとぼくにしかわからない

127　008　どうしてかわからない。
160　053　それから物語のコーネリアスがどうなったかはわからない
174　021　おっとりしていて、どこが強いのかわからないような碁風だった。
185　025　誰にもわからない

わかれ　別れ
054　100　亡霊たちに別れを告げよう
054　118　そして詩人と大学生は駅でしばらく別れを惜しむだろう
068　033　十九歳に別れを告げた男は
075　003　不幸な兵士に別れを告げる
100　022　お別れの短かい放浪がはじまった
100　053　そう言って　黙って別れた友よ
103　013　（友だちとお別れのパーティをして
109　004　いま、別れを告げようとしている。
109　008　自分自身と世界とに別れを告げるときがきた、
112　049　おれたちが本当に別れるのはこれがはじめてだが　ユダの接吻はいらない
115　005　お別れの言葉はいらない
128　008　別れの挨拶は簡単だった
148　010　また会おうと約束して別れたきりであった。
159　007　今生の別れかと心はさわいだが
187　020　別れを告げる遑もなく

わかれた　別れた
100　053　そう言って　黙って別れた友よ
148　010　また会おうと約束して別れたきりであった。

わかんない　判んない
180　011　「女の子の心理」なんて私だって判んないですよ。私だって「男の子の心理」は判んないですからね。お年寄り

わく　沸く
072　027　――どよめくスタンド、沸く観衆、拍手、喚声

わけ
014　012　つまりその隙にといふわけさ
030　030　いま数々のなかから択りわける
041　048　個人を非難しないわけにはゆかない　神々の名において
046　007　澱んだ鈍い時間をかきわけ
054　059　「君たちはまさか忘れたわけではあるまい
056　011　廃墟のなかを踊り狂っているのが見えないわけではない
056　014　かすかに聞えぬわけでもないのである
056　016　じぶんの不幸を悲しんでいるわけではない
056　017　まして夢を見ているわけでもない
061　008　見よ、澱んだ「時」をかきわけ、

061　114　いつも個人的なわけがあるのだ
061　122　いつも個人的なわけがあるのだ」
062　033　死んでも死にきれるわけではないのだから
065　025　わけもなく涙をながす男の
074　026　みどりの波をわけてゆっくり遠ざかっていった
087　008　聞きわけのない耳でかぶりをふって
087　018　聞きわけのない耳でかぶりをふって
088　015　わけへだてのないぼくたちのあいだに
103　015　金づかいの荒いアメリカ人とはわけがちがう
106　003　こちらに向けていても　なにも見ているわけではない
144　017　わけよしの性術に明け暮れて
150　022　記憶の中で見逃していたさまざまな事柄に気づかないわけにはいかない。
150　036　しかし、そのことに、「私」は、全面的に欺かれているわけにはいかない。
151　020　一向に死ぬ気配を見せないのはどうしたわけか
155　021　知らない顔をかきわけ
176　032　わけもなく顔をかくしている

わけもなく
065　025　わけもなく涙をながす男の
176　032　わけもなく顔をかくしている

わざわざ
142　088　いじけた打算がある　わざわざ危険な対立に足をふみこんで

わずかに
037　005　ほんのわずかに震へる根を支へてゐる
124　013　わずかに自己への希望でしかない日……
161　023　わずかに赦すおのれを許すことで
169　018　わずかに涙の粒がしぶいている
170　025　わずかに男は苦笑し
171　017　わずかに雨露をしのぐ庇の下から

わすられた　忘れられた
002　010　（それは忘れられた日のロマン）
041　122　葉はぬけ落ち　黒い幹が囲繞地の隅に忘れられた

わすれかけた　忘れかけた
068　001　忘れかけた女から

わすれがたい　忘れがたい
052　002　忘れがたい悲しみの面影がうかぶとき
082　006　忘れがたい夏を連れて！

わすれがたい　忘れ難い
180　033　忘れ難い人のために書いた

わすれて　忘れて
004　006　ステッキを忘れて　逃亡した
029　016　パイプと共に忘れてゐた家族のため
036　015　永遠を忘れてゐる臍の下で
046　048　どうしていままで忘れてゐたのか
050　014　きみを見失ったのか忘れてしまったよ。
053　065　あなたのお顔も　だんだん忘れてゆきそうです
061　153　どうしていままで忘れていたのか、
095　021　ぼくは少しずつ忘れてゆくだろう
102　021　おれのことは忘れてくれ
150　061　我々は彼を励ますことを忘れていたようだ。
150　072　喪われたら二度と取り戻せないことを忘れてはいないだろうか。
154　008　苔むす岩間に白い滝を忘れてきた
160　005　忘れてはいけないことを　さがすような眼で
160　067　（私たちが忘れてしまうのも無理はない）
186　087　時間を忘れてぼんやりするのだった
188　027　今では、すっかり忘れてしまった。

わすれていた　忘れてゐた
029　016　パイプと共に忘れてゐた家族のため
046　048　どうしていままで忘れてゐたのか

わすれている　忘れてゐる
036　015　永遠を忘れてゐる臍の下で

わすれる　忘れる
101　012　みんな忘れる祈りのむなしさで
189　014　何でも忘れることができる

わたくし
157　009　どうか　わたくしも
165　002　わたくしには厭わしかったのだろう
165　007　わたくしにはあさましく映っていて
165　019　子なるわたくしの存在が心（しん）から厭わしかったことの
165　025　わたくしは父の書いたものを理解せず
165　026　父はわたくしの詩の一行も理解しなかった
165　028　わたくしは病み衰えた父の腕に
165　035　わたくしの顔が映るのである
165　037　すこし歪んだわたくしの顔が。
192　001　もはや、わたくし、と特定する必要はない。わたくしには、わたくし以外の

192　002　どんな現象も起りようがなく、わたくしの影は、孤独とはいえなくなっているから、
192　008　わたくし、とは誰だったのだろう？　歩行の方向をきめている海の

わたげ　綿毛
120　022　スモッグの綿毛と

わたし
026　015　わたしは愚かしい知識の墓場を
026　019　わたしの体を石のやうに氷らせた
026　026　わたしは額を象嵌せよと願った
026　034　わたしの手の中にある
027　016　わたしの鼓膜はへんである
027　021　わたしは黒いパイプを握り
028　054　わたしたちが所有するすべての宝よ
029　014　今はただ表情もなく振返るわたしに
029　015　やはり変らぬわたしたちの愛よ
032　005　わたしが憩ふ場所といへば
032　010　それは確かにわたしを支へている
032　012　わたしを愛撫するのはむかしの夢であらう
032　017　わたしの半身はすでに掠められてゐる
039　009　わたしは象どられた世界から辷りでて
039　017　微風はわたしの肩に触れる
039　023　わたしを蔽ふ
039　037　わたしは一体何処に立ってゐるのか
039　043　わたしの骨は涸れてゆき
039　053　わたしはいつか鳥になるかもしれない
039　057　みんなわたしの言ふことを信じないか
039　066　わたしは何の関りもなく立ってゐる
039　070　ここはわたしの生れた土地だ
039　101　わたしははじめて怒りといふものをみた
039　116　わたしはいつか虹を見るかもしれない
039　121　だがわたしはあいつらを許さない
039　128　たとへわたしの位置が崩れ
039　133　だがわたしは悔まない
039　142　わたしの天は奈落へ崩れおちよう
052　001　生きのびてきたわたしの心に
052　011　わたしはかぎりなくうらめしく思う
052　013　情慾に飢えたわたしの魂をやさしく愛撫する
052　018　どうしてわたしが覚えていなければならないのか
052　024　わたしはいまでも眼鏡のつかれをぬぐい
052　028　生きねばならぬこの賭はわたしの負けだ
052　029　死にそこないのわたしは
053　001　わたしの大きな瞳には

053 007 わたしのからだのなかに黄昏がいっぱいつまって
053 009 わたしはわたしの行方を知っていない
053 010 わたしは赤いセーターを着て
053 012 これがわたしの聖なる苦行衣です
053 013 姉さんのかたみの水晶の腕輪がわたしの冷たい手錠で
053 015 わたしは大切に胸のうえにさげています
053 016 これがわたしの小さな十字架です
053 017 わたしの歩いてきた道は
053 019 わたしはわたしの影を背負います
053 021 それはわたしのこころの神秘です
053 022 いつのまにかわたしはお姉さんのお墓の前に立っています
053 024 いつものようにわたしはお姉さんさようならを告げることが出来ません
053 026 わたしもたまらなく眠いのです
053 028 わたしのこころのお部屋のなかで
053 031 わたしは枝からはなれてゆきます
053 032 わたしは落葉の精なのです
053 036 わたしのたずねる人影は何処にもありません
053 037 わたしはわたし自身の影からも離れてゆきます
053 040 わたしのいのちは
053 049 わたしは一日よりもはかない一年を
053 054 淋しいわたしの足跡は落葉に埋って見えません
053 061 わたしの髪に　わたしの肩に　落葉はしずかにつもります
053 063 木の葉になったわたしには
059 002 わたしの母の手をひいて
059 007 わたしにはながい悪夢の日がつづいた
059 009 わたしの机のうえの一枚の写真も
061 173 貴方に叛いたわたしは、
061 177 わたしはひとりです。
061 180 わたしは貧しい、
061 181 わたしは病んでいる、
061 182 貴方がわたしに下さったものはこれだけですか。
061 185 わたしはどこまでも愚かですから、
061 188 わたしは今にも倒れそうになって、
061 194 十一月の寒空に、わたしはオーバーもなく、
061 199 わたしにはまだ罪が足りないのですか、
061 200 わたしの悲惨は貴方の栄光なのですか。
062 003 わたしの魂は病んでいる
062 005 わたしの胸のなかで腐っている
062 006 落ちてゆくわたしの身体を支えてくれるのは
062 014 わたしとあなたを距てるこの世のどんな約束も
062 017 そっとわたしの寝室に近より
062 020 わたしたちの交りには
062 023 思い乱れたわたしの頭髪にさし込まれ

062　024　わたしはこの世ならぬ冷たい喜びに慄えている
062　029　わたしの手から鉛筆をとりあげるように
062　031　わたしは昔の少年になってどこまでも追いかけてゆくだろう
062　035　あなたとわたしは
062　044　あてもないわたしの道は
062　054　傷ついたわたしたちの記憶をぬぐってゆくのを
062　060　わたしはこの香ばしい微風のなかに家を建て
063　016　　（わたしはひとり、わたしはひとり……）
065　040　わたしはおまえの血を飲みほした」
066　033　わたしはどこまでも歩いていった。
066　040　わたしの帰りを待っていた。
070　003　わたしの血汐の流れを抱きよせる、
070　006　わたしのからだを水藻のように
070　011　わたしはのけぞらせた顔を
070　020　わたしの感覚はぬけおちて、
070　053　わたしを殺してどうしようというの。
083　005　わたしの背後で
083　014　わたしの心をいたわってくれるけれど
083　022　これは爽快だ　わたしにも
089　027　わたしのそばをとおったようだわ」
090　024　わたしが生れるずっと前からそこにある
104　005　わたしの丘や森や海岸は　すでに
104　011　わたしの血汐は　もう歌おうとしない
119　014　わたしの歌のおわるまで
122　011　カーテンの蔭でわたしは泣く
122　012　あなたの涙をわたしが泣く
132　006　わたしを見た者はいない
137　004　あっさり未来を売りわたした
139　005　わたしを呼んでいるにちがいないのだが
142　026　わたしやわたしの家族の頭から　髪の毛一すじ落ちやしないとは
146　031　同時にわたしを認めると
146　034　わたしは無我夢中で逃げ出しましたが
146　051　おどおどしているわたしの手をとって
164　003　わたしの涙をあなたが泣く
164　028　「あなたの涙をわたしが泣く」と
171　007　「わたしが好きなのは
179　026　だからわたしは
184　017　わたしたちの家（アワ・ハウス）というべきところを
184　018　わたしの家（マイ・ハウス）といったりしている

わたし　「私」
150　036　しかし、そのことに、「私」は、全面的に欺かれているわけにはいかない。

わたし　私
041　063　お入りなさい　私が許可を与へたから
047　013　私は怖れる
049　001　天井の蜘蛛が私の顔にのりうつったようだ、
049　012　私たちの間には　ひろい荒涼たる眺めが、
058　007　私はぼんやりと空を眺めます
058　010　私は裏街を好みます
058　016　私はゆっくり煙草をふかしながら
058　018　私の立派な人生には
058　032　つかれているのは私ばかりではありません
058　043　私はかるい舌うちをしました
058　045　どうやら私は今年も結婚しそこねたようです
058　046　これから私は何をしたらよいのでしょうか？
058　050　そしてニュースが私を読みすてたら
150　002　私は　囲繞地　というエッセイの中で、こんなことを書いた。
150　016　私自身は、かなり正直な自画像のつもりだった。
150　029　文学の世界にとどまっている者は、私しかいない。
150　030　これは、私だけが「虚構の個性」をつらぬき、偽善の間道をくぐりぬけて、
150　036　しかし、そのことに、「私」は、全面的に欺かれているわけにはいかない。
150　053　編集者である私が警視庁から呼び出しを受けた。
150　076　昔の雑誌が見つかったというのは、私にとって幸運でした。
156　024　いかに私が外国かぶれでも
156　030　いまでも私を動顛させ
156　035　私は口をつぐむほかはない
160　003　気がつかないうちに　私もまた
160　014　それがなぜ私の心をしめつけたのか？
160　054　私が知りうるのは　シュワルツが一九六六年に五十三歳で死んだことだ
160　067　（私たちが忘れてしまうのも無理はない）
180　011　「女の子の心理」なんて私だって判んないですよ。私だって「男の子の心理」は判んないですからね。お年寄り
180　025　ら……。貴方に判らなかろうと、もう少し付け足すと、昨年は形相の意味も知らなかったということ。私は「メ
180　026　ッセージとよみました」と書いた筈、それは私だからそうよめてしまう、というのがどうでもいいことで、貴方
180　027　の言葉を私はどんな方法でも消せればよかっただけのことー。
180　050　「どこかで会って、さりげなく挨拶を交したような、奇妙な余韻をひいていくところ」それは私にしてもそうでし
188　025　私の最近の心境をよく伝えているといえましょう」
188　038　私の痼疾、であるのかもしれない。
188　079　私には、なんと、四十三回目の地獄めぐりです。
193　019　私一人の人生でも

わたしじしん　私自身
150　016　私自身は、かなり正直な自画像のつもりだった。

わたしたち
028　054　わたしたちが所有するすべての宝よ

029　015　やはり変らぬわたしたちの愛よ
062　020　わたしたちの交りには
062　054　傷ついたわたしたちの記憶をぬぐってゆくのを
184　017　わたしたちの家（アワ・ハウス）というべきところを

わたって
033　007　寒い廊下をわたってきた
101　010　血の河をわたっていった兵士たちよ

わたって　渡って
107　010　さざなみは海を渡っても
162　013　虹の橋を渡っていったが

わたってきた
033　007　寒い廊下をわたってきた

わたりどり　渡り鳥
100　021　やくざな渡り鳥のようにレインコートを肩にかけて

わたる　渡る
005　002　蝶々は光る河を渡る
176　016　海を渡ることだと言いたげに
176　028　渡るべくもない

わづかな
027　023　わづかな煙はグラスの中へ降りてゆく
037　012　わづかなドアの隙間から

わづかに
025　020　わづかにさわぐ葦の触手を見る
038　029　わづかに街と村の

わな　罠
071　031　自然のなかの罠は本当の罠なのだと

わななき
046　038　日没の空にあなたはわななきつつ身を横たへ

わふく　和服
159　005　黒っぽい小紋の和服がよく似合い

わらい
054　121　いまは自我をみつめ微かなわらいを憶いだす

わらう　笑う
028　064　空壜の堆積する地所を揺るがしながら明るく笑う
028　065　笑うものたち虫のやうな検微鏡下の虫たち
106　006　「笑うなかれ」　悲しい内部の声である
164　006　樫の木が笑う　金木犀が笑う
164　007　夜空の星たちが笑う

わらうなかれ　笑うなかれ
106　006　「笑うなかれ」　悲しい内部の声である

わらうもの　笑うもの
028　065　笑うものたち虫のやうな検微鏡下の虫たち

わらひ　笑ひ
013　020　ゲラゲラ笑ひ
028　045　そこを通る風の鳥の虫類の笑ひ

わらふ　笑ふ
017　010　歯でゲラゲラ笑ふと
036　006　だがおれは声高く笑ふために

わりつけられた　割りつけられた
128　003　割りつけられた舗道の

わるい　悪い
007　010　喞筒は空に向って泥を吐く　草の無い荒地ではとかく悪い感冒が
014　022　口の悪い家畜どもが逃げていったあとで
017　017　と悪い唇が耳の傍で薄くなったので
025　045　悪い想出よ
054　108　そしてやがて獣のようになる歯並みの悪い唇の動きが
061　039　空気の悪いアパートの一室で、
061　191　いつも天使の悪い呼吸で曇っています。
093　009　酩酊は何によらず悪い習慣だが
106　009　悪い空気のなか　鳥類のコンベンションが重んじられる
142　046　悪い夢からさめた人のように首をふるのである
144　003　目の悪い地蔵が首見参にとうよせ
166　018　あいさつしたのがなぜ悪い？

わるぐち　悪口
058　038　よく政府の悪口を言っていた広場には

われ

007 002 あたり　見知らぬ老婆が咳をするのはわれらにかかわりのないこ
040 004 器物の底もひびわれて
054 095 夕焼のなかからあらわれる鳥の囀り
054 112 決然たる拒絶者の愁い顔があらわれる
054 144 われわれのアメリカはまだ発見されていないと
055 044 ひびわれた卵のなかの
059 028 波にさらわれた母と美しい少年を許せ！
060 012 世界の秋は深くなってゆくように思われる
061 136 『われ溷濁の世の光なり
071 009 われわれはとりかえしのつかぬ年月を
071 012 われわれを待ちうけているものは
071 037 われわれは自然によって死の深さを直観する
071 040 風よ吹け　われらの罪の消えぬうちに！
071 043 われらはながい生涯をもって測ったりする
071 048 われわれは
072 011 われわれの醜さを
072 018 結局のところわれわれの期待も、かれらの手綱さばきで
072 060 われわれの生存競争もすべてフェア・プレーだったらいいのにと
079 014 呪われたかれらの天を
079 023 いわれのない恐怖にあって
079 026 記憶のはてにあらわれる
080 020 きみはきみの失われた両手を高くあげる……）
082 009 破風のうえに雲があらわれてまた消えた
082 010 消えてはあらわれる幻影の
094 002 見えがくれの執念につけ狙われながら
102 023 高くのぼってついに失われた空のように
104 008 太陽に追われた記憶が戻ってくるだろうか
125 003 聖者をうらぎった罰があらわれている
125 018 われらの人生なんてロクなものではない
128 004 活字のわれ目から　ひょろりとのびた
128 010 われわれは死ぬほかはない」
128 090 われらの時代に目覚めはない？
130 002 夜の底がひびわれたとおもったら
133 003 人間蛾は街の燈火に誘われる
133 004 「夜われ床にありて
133 023 われを産みし者の室をすてて
140 010 舞台裏で物思いに沈むあわれな役者
142 010 われわれに対する思いやりは
142 012 われわれを傷つけさえするのだ……
150 065 喪われたものを、
150 066 喪わるべくして喪われたと言うのは、
150 069 一つの国さえたちまち喪われるような世界に住んでいるので、
150 072 喪われたら二度と取り戻せないことを忘れてはいないだろうか。

151　019　自分でもそう思い人にもそう思われているのに
154　007　悲しみの音色にさそわれ
156　032　すべてを奪われても文句を言えない
160　024　歴史というものが　どんなにわれわれの野心や虚栄とくいちがうかという
160　064　アメリカのオーデンといわれたが
160　075　われわれのコーネリアスは　いまどこにいるのだろう？
160　078　われわれのコーネリアスはどこまで歩いていけるだろう？
166　004　失われたものと現在あるものの中間で
167　061　錆びた針金の蔦におおわれて
167　066　ソロフキの囚われ人よ
168　008　はるかな雲に誘われ
170　027　失われた均衡を悼んで
171　015　われら此処に在りとかんがえるだけで
179　011　蔦におおわれた高窓は
183　015　安全に養われているその家族たちだ
185　023　だが、愛する時間を奪われた
186　039　（われながらよく言うよ）
187　014　われわれは死なぬ
188　047　公害を憂えたり、伝統の喪われていくのを嘆くのと同様、
189　004　月がかわれば
192　005　遠くかすかな潮騒のひびきにさそわれ、海にむかってひき寄せられていくが、

われ　我
017　041　我々の樹を救へ諸君よと
054　121　いまは自我をみつめ微かなわらいを憶いだす
146　034　わたしは無我夢中で逃げ出しましたが
150　037　「本質的に我々が誇り得るものは生理以外に在り得ない、
150　047　我々が生きのびたことで誇り得るものが、
150　051　彼は我々の雑誌の創刊号に、玉の井の娼婦と客との交渉を扱った「泥沼」を書き、
150　061　我々は彼を励ますことを忘れていたようだ。
150　068　今日、我々は一つの都市、
162　014　いつかは訪れる忘我の果ての
174　004　「病気がこんなにこたえるとは、思ってもいませんでした。春からノイローゼ状態で我ながら呆れかえっていま

われら
007　002　あたり　見知らぬ老婆が咳をするのはわれらにかかわりのないこ
071　040　風よ吹け　われらの罪の消えぬうちに！
071　043　われらはながい生涯をもって測ったりする
125　018　われらの人生なんてロクなものではない
128　090　われらの時代に目覚めはない？
171　015　われら此処に在りとかんがえるだけで

われわれ

054 144 われわれのアメリカはまだ発見されていないと
071 009 われわれはとりかえしのつかぬ年月を
071 012 われわれを待ちうけているものは
071 037 われわれは自然によって死の深さを直観する
071 048 われわれは
072 011 われわれの醜さを
072 018 結局のところわれわれの期待も、かれらの手綱さばきで
072 060 われわれの生存競争もすべてフェア・プレーだったらいいのにと
128 010 われわれは死ぬほかはない」
142 010 われわれに対する思いやりは
142 012 われわれを傷つけさえするのだ……
160 024 歴史というものが　どんなにわれわれの野心や虚栄とくいちがうかという
160 075 われわれのコーネリアスは　いまどこにいるのだろう？
160 078 われわれのコーネリアスはどこまで歩いていけるだろう？
187 014 われわれは死なぬ

われわれ　我々
017 041 我々の樹を救へ諸君よと
150 037 「本質的に我々が誇り得るものは生理以外に在り得ない、
150 047 我々が生きのびたことで誇り得るものが、
150 051 彼は我々の雑誌の創刊号に、玉の井の娼婦と客との交渉を扱った「泥沼」を書き、
150 061 我々は彼を励ますことを忘れていたようだ。
150 068 今日、我々は一つの都市、

われ目
128 004 活字のわれ目から　ひょろりとのびた

ゐた
004 004 白い蝋燭の中に住まってゐた
005 029 あ　逃げた小鳥が月にゐた
012 019 その中に沢山の兵士たちの顔がゐた
015 011 石の床に新聞が配達されてゐたことも
017 020 樹はゆらゆら揺れてゐた
021 001 ハッカを咥へて澄んだ煙をふかしてゐた
026 007 水晶体はいつでも煙を噴いてゐた
026 036 明朝の新聞紙がぬれてゐた
028 003 緑の影はいつもガラス管によりそってゐた純粋な頭の鈍い速度について
029 013 美しい喚声にとり巻かれてゐた
029 016 パイプと共に忘れてゐた家族のため
031 013 静止してゐたものが動き出したとき
036 018 ああ愛する花とともにゐたいな
037 014 灰いろの遠い空をながめてゐた
037 016 無限といふものが少しづつ暗くなりかけてゐた

038　030　屋根のみを叩いてはひとり淋しがってゐた
039　028　それは涙に似てゐたのかもしれない
041　044　怪しい手紙には翅が生えてゐたのかも知れぬ
041　098　あなたは独り目覚めてゐた
041　118　いつのまにか樹木は枯れてゐた
041　119　誰のものでもないと思ってゐた樹木
041　120　貧弱な幹に大きな葉をつけてゐた樹木
043　014　ながく夜をまってゐた灯火は
046　048　どうしていままで忘れてゐたのか
150　005　六人の友達の彼に対する考え方は夫々まるで違ってゐた。
150　008　極めて小さな事柄にもいたましいほどの注意と努力を払ってゐた。

ゐたい
036　018　ああ愛する花とともにゐたいな

ゐない
008　006　げられ　叢には懐古的な蛇はゐない
013　004　枝に小鳥はゐない
015　016　眠ってゐないのは時計であり
030　014　動いてゐない動物たちが
039　022　もはやどんな力も持ってゐないことを知れ
041　138　あなたの指はまだ感覚を失ってはゐない
150　014　一匹の魚さへ住んでゐない沼に釣糸を垂らしてゐる影だけが生きてゐる……」